

対魔忍RPG 苦勞人爆裂記

HK416

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはふうまの若様が異なる歴史を歩んだIFの物語。

邪眼もねえ！ 時子もいねえ！ おまけに蛇子も鹿之介もいねえ！
！ そんな彼の運命や如何に……！

2019.01.20 R-18に『対魔忍RPGX 苦勞人爆裂記 回想モード♡』投降。不知火その1の回想モード追加。

目次

苦労人は自分は何一つ悪くないのに苦労するから苦労人なんだよ	1
なあ	1
此処の苦労人は敵の話なんて聞かない	28
苦労人は銃よりも爆発物の方が好み	53
独立遊撃部隊爆誕！ その名も『苦労人をお助けし隊』！	76
苦労人の周りには覚悟がガンギマリしてる女しか存在しない	99
忍び寄る苦労の足音を敏感に感じ取ってこそその苦労人。但し、苦労を回避できる訳ではない	128
対魔忍シラヌイ ヨミハラ動乱編	
さあ、苦労が押し寄せてくる時間だぞう	149
どおでもいい悪役はちやつちやつサツクリ殺しちやおうねえ	172
ヨミハラ到着。そしてやっぱり居るあの御方	202
苦労人は猫より犬派。だって猫の奔放さは羨ましいんだもん	217
油断慢心してる奴とか鴨も鴨。さくつと罨にかけちやおうねえ	235
苦労人の運は強運と凶運を常に行ったり来たり	261
苦労人だって本気で謝る事くらいある	276
爆弾はいいね。人類が生み出した文化の極みだよ。苦労人はそれをよくよく理解している	294
苦労人が思っているほど、彼女達は弱くはない	319

苦労人を追い詰めるのが、対魔忍や魔族や米連だけだと思った？

そんな事はありませんよ……

地獄から逃げられると思った？ 残念、大地獄でした♪

苦労人を苦労させるためだけに生まれてきたとしか思えない人間

だっている

地獄への道は善意で舗装されている……魔界の踊り子は善意の

……あツ（察し）

若い紫の頭の中にはヤベーもんが埋め込まれている。でも桐生に
知らせたらエライ事になる。苦労人ならどうする？ こうする！

409

苦労人に罪悪感とかねーのかよ。ねーみたいだよ……

ヨミハラに住人に人権などない。ならば何人殺しても問題ないよ

ね、とか気軽に言った上に実行しちゃうのが苦労人

苦労人にだって読みきれない心理もある。それが特に弩級の馬鹿

だと尚の事。

大人数に包囲されてる状況に比べりゃ、どんなに強くても相手が少

ない方がまだマシ。

案の定、やらかしてくれるモンスターペアレント。だが苦労人は狼

狽えない！

闇落ち？ そんな事している暇はないぞ、紅マン！ 出撃だ！ と

苦労人の弁

やられたらやりかえす、倍返しだ！ なお、苦労人は特に何もしな

い模様

幕間

平和が次の戦争の準備期間であるように、苦労人の休暇は次の苦労

507

492

475

460

442

431

420

390

371

349

328

苦労人は一人ではない、一人ではないのだ。故に爆裂記なのです

547

紅のアフターケアは必要なかった、これには苦労人もニツコリ。そして股間はモツコリ

572

魔女と鬼と神と対魔忍

まだ行けるは危険信号。でも、そこでアクセルを踏まされてこそ

苦労人

581

なに？ 前途多難？ 苦労人の平常運転ですが何か？

599

嫌われていることだけが暴走フラグだと思ってるのかい？ その

逆でも起こりうるんだよなあ……

609

重ねれば重ねるほどフラグは折れやすくなるって？ 甘いんだよ

なあ

622

早速やらかしてくれる鬼娘！ しかし苦労人には為すすべがない

！

630

どんだけ頑張っても爆弾の解除はされていないのが苦労人クオリ

ティ

645

爆弾レイプ！ 起爆剤と化した先達！

653

おら、苦労人が大怪我すつぞ。パイセン、はよチョロ堕ちせいや。

667

戦いとはそれまで何を積み重ねてきたかの結果に過ぎない。つまりは、備えに備えてきた苦労人の本領発揮ってことですよ

677

狂犬は負け犬となり、槍に至る

691

剣士の信念、その極み

702

人質を取られたとしても反逆者の交渉には応じない。じゃけん、爆

発物で有耶無耶にしましょうね〜

718

最早苦労人に残されているのは隊長としての責任だけ

733

作戦はなくとも戦いの下準備は入念に。隊員の気構えも準備に含
まれます。

748

素直になる鬼娘。なお苦労人は不安を拭いきれない模様

762

伝説の魔女もやっぱり魔界の住人。口を割らせるにも力尽くが必
要な模様

771

おいしいところを持つてくのは〇〇キャラの特権

780

「死にたくねえから死ぬほど備えるとか皆やってることじゃない」
とか平気で言うのが苦労人

794

決着ウウ——ツツ!!

808

かつこよく決められると思った？ 残念、ギャグ退場でした♪

829

伝説の魔女と苦労人の相性は最悪——そんなふうを考えてい
た時期が俺にもありました

843

「地獄へ届ける輸送機だから、そう呼ばれても仕方がないよね……」

862

若様と愉快的仲間達

苦労しないよう努力する。だからこうして苦労を燃料にする！

873

苦労人曰く『学校の勉強？ 応用のさせ方なんて腐るほどあるわ』
とのこと。なお、当人の方向性は決まっている模様

890

907

苦労人の仲間は粒揃い！ なおそれでも苦労は減らない模様

苦労人の部下をやれば色々と恩恵がある。だが、その前に地獄を越

えなければならぬ

928

やさしいせかい

942

苦労人と執事の馴れ初め

967

チヨロインが多いのは事実だけど、実際一番ちよろいの苦労人

985

苦労人の部下はまだいるぞ！ なお色物もいる模様！

1000

男と女って何事に対しても結構温度差あるよね

1018

苦労人が苦労すると必然と部下も部隊も苦労する羽目になる

1029

小動物の悲劇、或いは苦労人の喜劇、もしくは真面目夢魔の慟哭！

ついに会ってしまった苦労人と小動物

1049

苦労人曰く、小動物？ は？ そんな可愛いもんかよ、ただの害獣

の間違いだろ？ との事

1065

ホラー映画の演出をリアルで体験したらどうなると思う？

運命の出会い！ 苦労人は苦労人に惹かれ合う！

1097

苦労人が増えるよ！ やったねたえちゃん！

1113

ぶつちやけ契約するなら利益しか見てない馬鹿よりも騙そうとし

てくる天才の方が遥かに有益

1128

“花の静流”も戦慄する猜疑心。でも苦労からは逃げられない

……！

1145

苦手なものは苦手だからね、しょうがないね（激甘判定）とのこと

1158

やっぱりこうなる苦労人

1166

苦労人と見えざる刃

1182

やはり害獣……！ 害獣は全ての問題の引き金となる……！

1197

“花の静流”と“真面目夢魔”のその後

新たな仲間！そして新たな苦勞の気配……！

12271211

幕間

にしゃにんぐんのゆううつ

12641241

苦勞人の下には好きこのんで苦勞しにくる奴がいる

12641241

鶴の恩返し編

蛙の子は蛙。鳶が鷹を生む。正しいのはどっちなんだろうね？

1296

着々と積み重なるフラグの山！でも苦勞人は狼狽えない！

1316

殺人鬼が捕まらなかった理由？ 殺人鬼が頭が良かったわけではない。捕まえられる奴がその気になつていなかっただけ

1339

どうんどうん追い詰められる殺人鬼。なお殺人鬼はその事実には付いていない模様

1361

苦労人は自分は何一つ悪くないのに苦労するから苦
労人なんだよなあ

闇の存在・魑魅魍魎が跋扈する近未来・日本。

人魔の間で太古より守られてきた「互いに不干渉」という暗黙の
ルールは、人が外道に堕してからには綻びを見せはじめ、人魔結託した
犯罪組織や企業が暗躍、時代は混沌へと凋落していった。

しかし正道を歩まんとする人々も無力ではない。時の政府は人の
身で『魔』に対抗できる『忍のもの』たちからなる集団を組織し、人
魔外道の悪に対抗したのだ。

人は彼らを「対魔忍」と呼んだ――

今から十年程前、対魔忍の世界では大きな内紛があった。

当時、政府から正式に対魔忍の頭領として認められた井河家、政府
の決定に様々な不平不満と渋々ながらも賛同を見せた甲河家による
補佐によって、対魔忍という勢力は成り立っていた。

これを不服として反旗を翻したのは、井川・甲河にも劣らぬ名家に
して最大勢力であったふうま一族だった。

ふうま宗家とそれに付き従う「ふうま八将」による謀反であった
が、これは政府、井河・甲河両家の予想に反した結果となった。

謀反を計画した当主ふうま 弾正の海外への逃亡こそ許したものの、長期化の予想と危惧に反し、被害少なく短期間で集結。

その背景には、ふうま一族の足並みの揃わなさがあった。

かねてより、ふうま内部における弾正の支持率は低かったのだ。

民間人に対する配慮の薄さ。己のためだけに仲間すら犠牲にする傲岸さ。他家の妻や娘にまで手を出す節操の無さ。

弾正に心からの忠誠を誓っていた者など、殆ど居なかった。弾正は傲岸さ故に、当然と言えば当然の事実気付かなかった。

宗家の当主という理由で不満を押し殺して従っていた者の不満は、最悪のタイミングで吹き出した。

多くの者が内紛と共に離反。大半は井河・甲河に下り、数は少ないが自身の実力を信じて別の道を歩む者も居た。

井河・甲河に下った者は咎の重さと内紛における成果に応じて、ある家は名家として残り、ある家は解体される事となった。

そして、此処にもそういった者の一人が居る。

「……………ふああ」

呑気に欠伸をしながら対魔忍の総本山である五車町に行く青年。

彼の名はふうま 小太郎。

ふうま 弾正の数いる息子の一人であり、長兄に当たる。今年で十六になる。

見た目は中の中。身長が高くも低くもなく、体重は重くも軽くもない。これと言って、何か特徴があるわけでもない、取り立てて見るべき所のない青年だ。

彼もまた父である弾正に見切りを付け、いち早く井河へと下り、命を繋いでいた。

今の彼は多くの対魔忍を育てる育成機関、五車学園の学生として日々を過ごしている。

もつとも、彼は真面目に授業など受けずに、サボって本を読んでいるか昼寝をしているか。それでもなければ、また別の事をやっている

不良学生である。

「ちよつと小太郎っ。毎日毎日、置いて行かないでっ」

「別にオレと一緒に学校へ行く必要なんざないだろ？」

「それは、そうだけど……」

「大体、オレとお前がこうやって接しているのがヤバいつての、理解してるか？ オレは余計な誤解はゴメンだぞ」

「それこそ今更でしょ。ごちやごちや言ってくるのは隠居してる老いぼれだけ。アサギ校長は、私達の身柄について保証してくれている」「脳ミソお花畑かよ。その隠居してる老骨どもが実権を完全に手放してないのが問題だっつーの」

田畑に囲まれた道を進んでいた小太郎の後ろから追いかけてきたのは金髪の美少女だった。

濃緑のセーラー服で肉付きのいい身体を包み、無自覚に健康的な色香を振りまいているのは心願寺 紅。

ふうま八将が一人心願寺 幻庵の孫娘であり、小太郎と似た境遇の幼馴染でもある。

名門であった心願寺家は、今や紅を含めて数人しか残っていないほどに落ちぶれていた。

というのも、内乱時に幻庵は最後の最後まで弾正の側につく事を選んだからだ。弾正への忠誠からではなく、長年宗家に仕え続けた心願寺家の役割とでも言うように。

本来、野に下り身を隠すしか生き残る術がない彼女が、こうして井河家の頭領であるアサギが元締めとなる五車町で生活出来ているのには理由があった。

「大体、お前だけじゃない。ゆきかぜや凜子にしたって、オレに付き纏うのは止めたらどうだ。周りからも同じような事を言われてるだろ」「あの二人は兎も角、私にはそんな人いない。厄介者なのは小太郎と変わらないんだから。それに、こういう境遇になったのは小太郎のせ

いでもあるんだけど？」

「あー、はいはい。ソーデシタネー、ゴメンナサイネー」

誰がどう聞いても反省の感じられない棒読みに、彼女の気の強さがそのまま現れたキツイ視線に晒されるが気にした様子もない。

彼女の言う通り、今現在の境遇を決めたのは他ならぬ小太郎であり、ふうま一門が敗れ去る最大の理由もまた彼にあった。

十年前の内乱時、彼はまだ五つになったばかりの幼子であったが、当時の時点ですら卓越した精神性と智慧を身に着けていた。

というのも、今は亡き実の母が彼の境遇を哀れみ、苛烈な英才教育を施したからである。

ふうま一門は代々同系統の異能に目覚める。視線そのものに魔が宿る能力を、人々は邪眼と呼んだ。

邪眼の能力は千差万別。透視、遠見などの千里眼にも似たものもあれば、石化、魅了などの古の怪物が使ったとされるものまである。

しかし、ふうま本流の血を色濃く継ぎながらも、小太郎は邪眼の力に覚醒せず、当主失格の目抜けと侮蔑された。

父からは疎まれ、同門であつても生まれてくるべきではなかったと揶揄される始末。前途多難な最愛の息子のために、邪眼に変わる力を与えんと母は尽力し、されどもそれは正しかったのか。

内乱の始まる数日前に母は病で亡くなった。

何の籬もなくなった小太郎は、英才教育で育まれた明晰な頭脳で父親とは異なる一つの結論に達する。

このままではふうまは負ける。ご当主殿も頭が茹だつていて引く気はなく、諫める者は誰もいない。ああ、なら最大限利用させて貰おう、と。

何の感情も抱かず、どうせこのままでは皆死ぬのだから、オレにとって有益に死んで貰おうと決めたのだ。

憎悪があつた訳ではない。その代わりに母以外への愛情がなかっただけ。ふうま一門など彼にとっては他人も同然。

当主失格の目抜けという評価が腹立たしかった訳ではない。単純

に戦力比を分析して負けが見えていただけだ。それに気付かないのか、はたまたフリをしている彼等に付き合う道理はない。

そうして、彼は誰よりも早く、そして単身で井河・甲河へと下った。ふうまの内部事情や拠点の要所など重要な情報を手土産に持って。

だが、それだけで終わる彼ではなかった。

投降は認められたものの、幼子同然の彼が持ち出した情報は、井河・甲河にとっては信じて良いものか判断に迷っていた。

なので、情報は間違いなく本物であると証明するために、手紙をバラまいた。

己が知る限りにおいて弾正から冷遇されていた者、弾正に反発していた家に裏切りを促す書状を。

『ふうまを元手にして自分達の家を残せ。裏切りと呼ぶのに抵抗があると言うのなら引越したと考えればいい。仕える主が変わるだけの話なんだから。その気があるなら早い内に井河のアサギか、甲河の隴に投降しろ』

これに、ふうま一門は大きく揺れた。元より弾正に対する忠誠心など無きに等しかったのだから当然だろう。

井河・甲河に下れば家と命が保証される。弾正は勝つと意気軒昂だが、勝てるかどうか分からない戦に挑むよりは得られる報酬と判断するのも無理はない。

数々の家が離脱を決心し、離脱に腹を立てた弾正による粛清によって加速する悪循環。

見る間にふうま一門が弱体化していく中、アサギでも隴でもなく、小太郎に書状を返すものが居た。それが心願寺 幻庵だ。

老境に差し掛かり、実力が衰えながらも八将に名を連ねていた幻庵であったが、紅の幼馴染である小太郎の賢さを認めていた。

『心願寺家当主として、私はふうまと運命を共にする。しかし、若き命を道連れにするのは忍びない。若様の御命令と御厚意に応じず、更に

は孫娘達の助命嘆願など恥じ入るばかりであるが、どうかこの老骨の願いを聞き入れて貰いたい』

そのような旨の書状を紅に持たせ、他数名と共にふうまの里を脱出。小太郎の下へと向寄せたのである。

はつきり言えば、小太郎にしてみれば幻庵が裏切りに呼応しなかったのは意外であり、予想外であった。常日頃から誰よりも弾正のやりように苦言を呈し、冷遇されてもなお己の意見を貫いていた男だったからだ。

己の予想を裏切った男への敬意か、それとも物珍しさからか。ともあれ、小太郎は彼女達を生き残らせる事に成功した。

その後、ふうまの里が滅んでいく様を鼻をホジリながら何の感慨もなく眺めていた幼い少年の姿は、アサギや朧は元より紅達からすらもドン引きされたのは言うまでもなく、当主の座を譲りながらも権力にしがみ付く老人達には或る意味で弾正以上に危険な存在であると認識されるには十分過ぎた。

家に縛られない。血に縛られない。使えない者は身内であろうが、父親であろうが、当主であろうが簡単に売り払う。

当主を頂点とするコミュニティを形成する忍にとつて彼の存在は異端であり、この体制を崩壊させかねない存在として内乱の早期鎮圧の立役者ではなく、逃亡した弾正から宗家当主の座を引き継いだ内乱の責任者として彼の処断を求めた。

待ったを掛けたのがアサギであった。

幼い彼の境遇を慮り、ただの優しさのみで引き取る事を決めたのである。

甲河の次期当主候補として全てを任せられていた朧はこれに賛同した。彼女の思惑は兎も角として、当時対魔忍を纏め上げていた二家の決定であれば、他家も口出しは出来ない。

彼を危険視する老人達に出来たせめてもの抵抗は、彼を名ばかりの宗家当主にする事のみ。

ふうま一門への命令権の剥奪及びアサギへの委任、ふうま一門の者

とは極一部を除いて接触を禁止であった。

これに対し彼は当然の対応と自らの境遇を受け入れた。

紅も似たような境遇であった。

しかし、ふうま一門であった頃より他家から諸事情によって嫌われていた彼女にとつてさしたる変化はなく、むしろ清々としたと言つてもいい。

加えて言えば、彼女は小太郎との接触を禁じられていない。心願寺家の総数は僅か数人であり、既に家としての体を保てていなかったからだ。

万が一、小太郎と紅が手を組んだとしても、紅という爆弾が爆発したとしても、どうとでもなると判断されていた。

「小太郎に紅先輩、おつはよー!」

「おぐうっ………あの、ゆきかぜさん。出合い頭に抱きついてくるのは止めて頂けませんか。酷く迷惑です」

「何でさん付けに敬語っ!? そ、そんなに嫌だった!」

「嫌です」

「お、おはよう、ゆきかぜ。ちょ、ちよつと、小太郎も困ってるから、離れて……」

「えーっ、これくらい普通のスキンシップだよ。ねー、小太郎いー?」

「止めて下さい、ゆきかぜさん。例え、スキンシップだとしても相手が不快に感じれば、それはハラスメントです」

「社会問題に繋がってきたっ! こんな可愛い乙女を捕まえておいてそれはないぞおーっ!」

「捕まえているのはゆきかぜ様です。あーっ、困りますゆきかぜ様、困ります。あつ、あつ、あーっ、困ります。あーっ、其処で電撃は困りますゆきかぜ様。ゆきかぜ様死んでしまいます」

「しないよっ!? ……んもう、小太郎つたらつれないんだからっ」

姿を見るなり首に飛び付いてきた少女に対し、小太郎は何処か事務的な態度で対応しながら首から引き剥がす。

彼女は小太郎の同級生であり、二人の幼馴染でもある水城家の一人娘、水城 ゆきかぜ。

水城家は代々優秀な雷遁使いを輩出してきた名家である。人数という点から見れば小さい家系ながら歴史と実力に関してはピカ一。歴代当主は人格的にも優れ、誰もが一目置く存在だ。

数年前の任務において父が死亡する不幸に見舞われたものの、今は母と娘二人で慎ましくも穏やかな生活と苛烈な任務に挑んでいる。

「ははは。相変わらずだな、お前達は。おはよう、小太郎、紅」

「凜子もおはよう。居たならゆきかぜの事を止めてよ、もう」

「そう言うな、紅。微笑ましいではないか、ああいうのも」

「それはそうかもしれないけど……羨ましくないか？」

「ううむ………気持ちは分からないでもないが、止める気もないな」

ゆきかぜの後をゆったりとした歩調で髪を揺らしながら追ってきた少女は、コントのようなやり取りをしていた小太郎とゆきかぜに笑みを浮かべる。

彼女もまた二人の幼馴染であり、紅の同級生に当たる秋山家の一人娘である秋山 凜子。

秋山家是对魔忍に伝わる剣術・逸刀流の開祖の家系。彼女自身も逸刀流を修めており、学生の身でありながら既に免許皆伝の腕前である。

ゆきかぜからは実の姉のように慕われるほど仲が良く、また紅も数少ない友人と認めている少女であった。

自分の気持ちに素直になって好意を表現するゆきかぜに妬みと嫉みと羨ましさを混ぜた複雑な表情を試みせる紅に、凜子は苦笑を漏らす。

彼女達の言動や素振りから見ても分かるように、三人は小太郎を奪い合う恋のライバルである。

理由はそれぞれあるものの、他の者から見れば不思議でならないだろう。

素行不良・成績不振、忍法すら使えず対魔忍としての未来は明るくない。性格も何処か他人行儀で愛想も可愛気もない。

反し、三人は既にそれぞれの家系に受け継がれる忍法を扱い、実戦経験もある次世代のエース。

どう考えたところで釣り合いが取れていない。

四人と同じく対魔忍の養成機関である五車学園へ向かう学生対魔忍は、男ならば小太郎に対して嫉妬と侮蔑の視線を向け、女ならば三人に対して嘲りの笑みか或いは失望の表情を浮かべている。

しかし、四人の誰もが他人の視線なぞ気にしていなかった。

小太郎にとってはこの程度の視線なぞ涼しい限り。目障りなふうまの当主、アサギに媚を売って生き延びた賢しいだけの孺子こぞうと、事ある毎に命を狙われた経験のある彼にとつては反応に値しない。

少女達にとつては寧ろ逆に笑いたくなる。恋の何たるかも知らず、彼に惚れた理由も知らずに嘲笑い、勝手に失望するような者になど相手にする必要性を感じていなかった。

「……って、うわあ、もうこんな時間っ！ 凜子先輩、紅先輩、遅刻しちゃいますよおっ!!」

「何と。ええい、ゆきかぜっ！ お前は身支度に時間を掛け過ぎだっ！」

「まずいつ！ 紫先生にどやされるっ！ 小太郎も——早あっ！
一声くらい掛けるおー！」

「そういうところだぞ、小太郎っ！ 全く、相も変わらず足が速いなあ、お前はっ!!」

「うわわあ、待ってよ小太兄いつ!!」

五車学園の授業開始のチャイムは、五分前の予鈴と開始時間の本鈴の二種類がある。

学園のスピーカーから流れてきた予鈴にゆきかぜは背後の紅と凜子に声を掛け、駆け出そうとした彼女達は遠ざかっていく小太郎の背中に愕然と叫び声を上げる。

一声も掛けずに自分だけ怒られなければいいとばかりに校門を超えて玄関へと駆けてる姿は、正に自分勝手の見本である。これの何処が良いのやら。学生達の視線も納得だ。

しかし、慣れている彼女達にとっては日常であり、惚れた異性に振り回される心地良さを感じてしまっている以上は、誰の言葉も届きはしないだろう。

「——ふう、お疲れ様」

「つたく、勘弁してくれよ」

「そう言わないで、こういう訓練も必要だろう?」

「まあ、対魔忍全体に言える事だが、もっと銃火器について知った方がいいのは確かだな」

放課後。

五車学園は地方大学のキャンパス並に広く、複数の校舎とグラウンド、通常の学校にはあり得ない施設も存在する。

小太郎と紅が居たのは、敷地内の外れに位置し、更には地下十数メートルに位置する訓練施設。

広大な室内に訓練終了のブザーが鳴り響き、ホログラムが消えて現れたのは柱や窪みのある真っ白で無機質な部屋。柱は徐々に下がっていき、窪みは逆に迫り上がって平坦な床へと戻った。

訓練施設は高度なホログラム、温調設備、障害物を再現する可変式の床を備え、あらゆる状況を再現する事が可能となっている。

主に実戦訓練がない場合には補講や自主練に使用でき、ラウンジでは座学や読書に勤しむ者も少なくはない。

小太郎は紅に誘われ嫌々ながらも実戦形式の自主訓練に付き合っていた。

二人の実力差は五車学園の成績からも明らか。小太郎の側が吹けば飛ぶようなもの。話を聞いた者がいれば、どちらに対しても何を無駄な事をと嘲弄するに違いない。

しかし、小太郎は最後まで倒れる事なく、始めから予定していた終了時間一杯まで粘り抜いた。

紅も本気でこそなかったが、こうした経験は一度や二度ではなく、決して幸運のみに助けられた訳ではない。忍法を使えずとも、小太郎には確かな実力があるのだ。無論、ゆきかぜや凜子相手にも同じであり、二人もそれを認めている。

「それにしても、回転式拳銃^{リボルバー}、か。もつと性能の良い銃があるんじゃない？」

「勿論あるよ。だけど、オレはこれが好きなんだよ」

紅は小太郎の手の中に収まっている銃に目を向け、呆れとも関心ともつかない口調で尤もな意見を口にした。

当の本人は放っておけると言わんばかりの口調で、聞く耳も持たずにお気に入りの一丁を腰のホルスターへと仕舞い込んだ。

Colt Single Action Army.

150年以上も前に生産が開始され、今もなお好んで使用する者もいる回転式拳銃の傑作である。

西部劇の代名詞とも言える銃であり、必ずと言っていい程に登場する。銃史のブレイクスルーとも言える金属薬莖に雷管、火薬、弾丸を一纏めにした所謂「弾薬筒」の発明された時代に登場したのがColt SAA。

長く広く多くの人間に愛されただけあって、様々な用途に対応して実に三十六種ものバリエーションが存在している。

小太郎の使用するモノは、厳密に言えばどのバリエーションにも相
当しないが、敢えて言うならば、民間向け・45口径モデルの「ピー
スメーカー」か。

と言うのも、彼のピースメーカーは原型を留めないほど改造が施さ
れているからだ。

まず引き金を引けば撃鉄が起きて落ちるD ダブルアクション A化のみならず、引
き金を引いた状態であれば撃鉄を起こすだけで発射できるS シングルアクション Aの
利点も残した発射機構。こうすることで、連射性能を引き上げつつも
手ぶれを抑制した精密射撃を可能とする。

装填は固定式から振出式化し、更には回転輪胴ごと交換も可能に
なっており、装填速度を向上。リッドフレム スイングアウツ シリンダー

咄嗟の近接格闘に備え、銃身をフレームで厚く覆って肉厚化。万が
一、銃身で攻撃を受けたとしても変形を防げる。

———これだけやっても用途を差別化して生き残った回転式拳
銃と同等。自動拳銃にはあらゆる点で劣っていると云ってもいい。オートマチック

回転式拳銃は自動拳銃に比べて動作不良を起こし難く、信頼性が高
いとされていた。

しかし、近年の銃の高性能化は凄まじく、自動拳銃であっても動作
不良など早々起こさない。その神話も崩壊してしまっている。

回転式拳銃を実戦で使う者など、それこそ一部の物好きか、完全に
製造された過程と用途を把握している者のみ。

何にせよ、余程の馬鹿か。プロであっても、使用される事の珍しい
武器である。

（—————それでも、私は白星を上げられなかった）

小太郎の影響で少なからず銃器の知識を持っていた紅は、事実息
を呑むと同時に誇らしかった。

忍法を使えない彼が、忍法を使える自分に勝てないまでも引き分け
に持ち込める。この学園に、それだけの強者が何人居る事か。

それだけで、彼がどれだけの血反吐を吐いて己を鍛え上げたのが

分かろうというもの。凄まじい技量は天性の才能ではなく、純然たる努力のみで積み上げられている。

だからこそ、紅は小太郎を軽視されてしまう現実が歯痒かった。対魔忍に銃は通用しない。

人間離れた身体能力と五感の前には、動作の起りや視線の置き方、銃口の位置に殺気から、何処を狙っているのかを察知されてしまう。

見てから避けるは出来ないまでも、先を読んで避けるも受けるも自由自在——の域には誰もが達している。

敵対組織である米連は銃弾を使用する故に対抗策を当然のように敷いている。魔族は頑強な肉体の前に拳銃弾では効果が薄い。

そうであるのならば軽視されても当然だろうが、ならば何故紅相手に引き分けにまで持ち込めるのか。

それは彼の技術に秘密がある。実際に対峙して戦い始めなければ、彼の厄介さは誰にも分からないからだ。

「それよか早く帰——っておいおい」

「警報っ、それも襲撃の……!」

自主訓練なんて切り上げて帰ろうと口にしたその時、耳を劈くようなアラートと共に、真っ白だった部屋が真紅のライトに染め上げられる。

小太郎と紅の付近に最新式のホロウインドウが展開され、EMERGENCYの文字が流れては消えていく。

五車学園には幾つかの警報があり、段階に応じて警報音とライトの色が変わる。

この音と赤は、五車学園の内部にまで侵入者に襲撃を仕掛けられている証だ。

「一体、何処の勢力が……!」

「何処も何も反乱だろ。冷静になれよ」

「ど、どういうこと……?」

「外部からの襲撃だったならまずは警戒している連中が発令する会敵注意、侵入の可能性有の『黄色』だろ。いきなり『赤』って事は二つに一つ。空間転移か何かでいきなり跳んできたか、身内が裏切ったかだろ?」

「前者の可能性は……?」

「ないだろ。空間を操作する異能はレア中のレア。現在確認されている上位魔族で使える奴はいない。米連の最新技術もそのレベルじゃない。他に考えられそうなのは、知られていない魔界技術だが、その線も薄い」

「何でだ……?」

「お前、質問ばつかだなあ。ちったあ自分で考えろよ。魔族つてのは力を誇示したがるだろ? だったら、『とっておき』とか『切り札』とか『隠し玉』って考えがあると思うか? 空間転移の魔界技術なんて使えたら、もっとアホみたいに使いまくるし、後先考えずにあちこちに売るわ」

「な、成程。確かに」

小太郎は至極冷静に、自らの持っている情報と知識から結論を述べる。

実戦経験のある筈の紅が、実戦経験のない筈の小太郎に諭される奇妙な光景であった。

今一度ホルスターからSAAを引き抜き、回転輪胴ごと紅相手に使用していたゴム弾から、45 LロングコルトC弾へと交換しながら小太郎は歩き出し、紅は慌てて後を追う。

訓練室からラウンジへと出た二人を待ち受けていたのは、たまたま居合わせた教師から指示を受ける生徒達の姿だ。

見れば、殆ど実戦経験のない生徒ばかりで、教師の側も現役対魔忍ではあるものの普段は後方支援を担当しているらしく必死に冷静たらんと取り繕っていた。

この調子じゃ、防護壁が降りても安心できないな、とまで考えた瞬

間、稲妻に打たれたかのように小太郎は身体をビクンと震わせた。

赤いライトが警告を示す中、彼の顔は見る間に蒼褪めていくどころか死人のように真つ白となり、唯でさえ死んだ魚のような目は更に濁り曇っていく。

「でも、一体何処の家が……」

「いやあく、参っちやうなあく。オレ、そういう家、一個だけ心当たりがあるんだよなあく」

「え？ それは何処の………あつ」

「——ははっ」

今の今まで小太郎の変化に気付かなかった紅であるが、その変化に気づいた瞬間に全てを察した。

小太郎は穏やかな春の日差しの如き優しい笑みを浮かべ、紅は顔を引き攣らせる。

長い付き合いだ。彼がこうした笑みを浮かべる時は、どうしようもないストレスに曝され、限界を越えようとする瞬間だと知っていた。そして今回の襲撃は、確実に小太郎と己の身にまで累が及ぶのは間違いないと確信したのである。

現行の対魔忍という組織に不満を抱き、対魔忍に危機感を抱かせる人員を抱えた家。

少なくとも小太郎が真つ先に思い至り、紅も納得してしまう心当たりがあった。

小太郎と紅は無言のまま目を合わせると同時に駆け出した。目指すは地上へと繋がる階段である。

目敏くそれを見つけた生徒や教師が二人を止めようとするが——

「あ————っ!! ガスの元栓締め忘れてたんで家に帰りま——

——す!!」

「そ、外に友達を待たせているので、御免っ!」

——小太郎は誰がどう考えても嘘だと思うその場凌ぎを、紅も冷静に彼女の友達が少ない事を考えれば嘘だと分かる建前の下に制止を振り切った。

誰もが呆気に取られて動けなかったと言うのもあるが、小太郎と紅が厄介者扱いをされているから本気で止めなかったというのが哀愁を誘う。

しかし、二人の頭にはそんなどうでもいい事柄は存在しなかった。頭にあるのは反乱を引き起こした咎人の確認だ。小太郎は現実を否定するために、紅は現実を正しく認識するために。

階段を上がり、防護壁が次々に降りてくる外へと続く長い廊下を駆け抜ける。

最後の防護壁を二人揃ってスライディングで抜けた先には靴箱の置かれた玄関がある。

靴を履き替える間さえも惜しみ、二人はそのままグラウンドへと躍り出た。

待っていたのは阿鼻叫喚。

幾人もの対魔忍が倒れ、敵味方すらも曖昧な戦場が其処にはあった。

濛々とした土埃で覆われて様々な器物が飛び交い、無数の剣戟の音が響き、斬光が煌めいている。

「我等は『ふうま正義派』だっ！ 墮落し、政府の犬と成り下がった現体制を討伐すべく立ち上がった！ 我等に従うならば共に戦え！

さもなくば抹殺するっ!!」

「うわああああああああああああああげぼろしやーーーーー!!!」

「小太郎おおおおおおおおおおおお——!!!」

その中で、同じ対魔忍を斬り伏せながら声高に語る対魔忍の台詞に、小太郎は絶叫と共に嘔吐し、紅はそんな彼の姿に絶叫した。

そう、小太郎が否定したかった現実はこれだ。

今現在、アサギを頂点とする体制に表立って反乱を起こそうとする力と恨みを持った家など、例えば自業自得とは言え、多くの仲間を失ったふうま一門を置いて他にはいない。

最早、名前だけの当主となった小太郎であるが、関係ないと言つても誰も耳を貸さない。

特に彼から一門への命令権を奪い去り、過度の接触を断たせた張本人である老人共は、間違いなくこれ幸いとばかりに彼を処断しようとする。

常に接触をしていないか監視役を付けており、彼の身の潔白を知りながら自分の都合と恐怖心から断行するのは想像に易い。

今日この時まで、のらりくらりと責任追及から逃れ、下らない権力闘争を避けて通ってきた小太郎の努力が全て無に帰した瞬間である。そりゃあ、誰だつてゲロくらい吐く。

シャー！ と酸っぱい匂いのする吐瀉物を絶え間なく吐き続ける小太郎の背中を摩り、介護する紅であったが止まる気配がない。まあ、気持ちは分からないでもないだろう。

これでも彼は、今まで当主としての責任は果たしてきたのだ。

表立って動く事はなかったが、老人共の目の届かぬ範囲で現当主と顔を合わせ、弾正の所業と裏切った一門の努力を語って心証を回復させていた。

アサギとも何度となく話し合い、それぞれの家の得意とする分野によつて配属先を決め、有能な人材には地位と報酬を与えるように掛合っている。

極一部の者以外は知らない彼の努力は接触を断たれたが故に末端の者は知り得ず、出来損ないの当主と認識していても不思議ではない。

まさに擦れ違いコントのような悲劇で面白いが、当事者にとっては笑い事ではなかった。

当主として失格の目抜けでも、直接会話をする機会を奪われようと、名ばかりの当主であろうが、当主には当主の責任があり、部下に

保証しなければならぬものがある。

やる気がなかりうと、馬鹿にされようと、母から学んだ教えに忠実に、そして自ら責任を定めて果たそうとする彼を紅は知っていた。そればかりが理由ではなかったが、彼女が彼に惚れた理由の一つでもある。慟哭のゲロを吐く小太郎の姿に、紅は泣きそうだった。

「ん？ ……………居たぞ、腰抜け当主様だっ！」

「だ、大丈夫か、小太郎っ！ 小太郎うっ!？」

「ああ、ちよつと楽にやつぱダメだ、ぐえろろろろろろろ——！」

「小太郎おっ！ こたろおおおおお——!!」

「む、無視するなあっ……………」

身を隠しもせずに玄関の真正面でゲロを吐いている小太郎と付き添う紅の姿を発見した下忍は仲間にも声を掛け合い、取り囲む。

仕方のない事とは言え彼等の態度は当主へと向けるそれではなく、向けるべきではない忍者刀とクナイを手にしている。

それどころではない小太郎はゲロを吐き続け、紅は介抱を続ける。馬鹿にしている相手に馬鹿にされる屈辱にわなわなと下忍達は身体を震わせたが、小太郎に余裕はなく、紅は興味がない。

しかし、それも其処までだ。残った胃液すらも吐き終えた小太郎は、何事もなかったかのようにすくつと立ち上がる。

その切り替えの早さと来たら、殺気立っていた下忍達が怯む程であつた。

「大丈夫だな、小太郎？」

「何処見て言つてんだ。どう見ても大丈夫じゃねえよ。オレの頑張りもこの状況もよおっ!!」

「わ、私に八つ当たりされても、その、困る……………」

「貴様等、いい加減にしろ！ さあ、どちらか選ぶがいい！」

「ああ？ 選ぶのはお前等だろうが。投降するか、死ぬかだボケっ」

脳天氣に反乱の企て加担にした挙げ句、状況を何一つ理解できていない下忍達に対して、沸々と湧き上がる怒りを抑えながら静かな口調で小太郎は語る。怒りを抑えきれずに口調が荒くなっているのはご愛嬌か。

紅は既に自らの得物——心願寺 幻庵が彼女を送り出す際に渡した二刀の小太刀「白神」と「紅魔」を抜き放っていた。

一瞬、下忍達の間空白が生じる。その後、一斉に笑い出した。成程、名ばかりとは言え当主として意地を張るのは素晴らしい。しかし、誰もが当主と認めていないのであつては滑稽だ。

成程、実力者である紅を味方につけて強気になる気持ちは分からないでもない。

しかし、この人数相手に戦つて勝てると思ふ姿はみつともないにも程がある。

これが笑わずにいられるものか、と言わんばかりに隙だらけな姿に、小太郎の右腕は動いていた。

「——は？」

「紅、これは肅清だ。容赦はするな。加減もするな。こいつ等の素っ首、オレに献上しろ」

「——承知っ！」

乾いた発砲音が鳴り響くと同時に、最初に二人の姿を発見した下忍の頭が弾け飛んだ。

熟れた西瓜が弾けるように、頭蓋骨の一部と脳漿をブチ撒けて、糸の切れた人形のようにどうと倒れる。

獲物を前にして舌舐めずりを出来る程度に実戦経験だけを積んだ三流では、反応すら出来ない早撃ちクイックドロウ。

彼等が何が起きたのかを理解出来たのは、片手を大きく伸ばした状態で硝煙の立ち上る銃を握った小太郎の姿を視認してからだった。

怒りか驚愕か。唯でさえ籬の外れた獣同然の彼等は雄叫びを上げ

て全員が投降の勧告すら忘れて襲い掛かる。

そんな中、小太郎の静かな、だが絶対的な響きを有した当主としての命令に、紅は待ち侘びていたとばかりに下忍けだものを迎え撃つ。

命令権を剥奪されていようが、そんなものは建前だ。部下がなおも当主と考えているのならば、従うのは自然である。

「この、化物おん——がぶっ！」

「おつと言わせねえよ。そういうのも含めて幻庵の爺さんから任されてたんでな」

口汚く紅を罵ろうとした一人に涼やかに告げながら、鮮やかな脳天ヘッドショットへの一撃を見舞う。

紅のみを相手取ればいい。もし負けそうになっても腰抜け当主を人質にすれば紅は抵抗を止める。

あとは化物ながらも極上の肉体を持つ紅を好き放題。殺すのは何時でも出来る。その前のお楽しみが待ち遠しい。

軽んじていた獣達は、混乱の極みにあった。

紅ならばまだしも、腰抜け当主が此処までの実力を秘めていたなどとは思わなかった。

ある武術家の伝説に銃弾を回避したエピソードがある。

彼の語り口はこうだ。相手の撃つ弾よりも先に赤い光が飛んでくる。それを避けると後から銃弾が飛んでくるのだ、という。

実際に彼が銃弾を避けられたかは別として、対魔忍であれば誰もが聞いた事のある話であり、共感にも近い感想を抱く。

イメージはそれぞれの対魔忍によって様々であるものの、光か音か、或いは空気や振動か、銃弾の当たる部位を何となく予測が出来る。

唯でさえ優れている五感を、集中によって研ぎ澄ますことで得られる着弾予測。対魔忍の基本であり、彼等が現代の兵士を見下す要因の一つである。

しかし、その武道家のエピソードには続きがある。

噂を聞きつけた銃の達人であるマタギが彼の下を訪れた。そして、

彼の見せた早業は銃をよく知らぬ二人にとってすら驚愕の境地。手首のスナップで回転輪胴を振り出した小太郎は、回転させながら空薬莖を地面へと落とし、銃口を地面へと向ける。

そして、事もあろうに回転する輪胴に向けて、左手の中に握り込んだ弾を親指で弾きながら一発ずつ落とすのである。

まるでそうなる事が決められていたように、すると弾が収まって行く。回転の速度と弾を落とす速度を一致させ、ただの一度もミスする事なく再装填を完了させた。

速いと感じる間さえない。明らかに自動拳銃の再装填よりも上。神業染みた曲芸と見るべきか。はたまた曲芸染みた神業と言うべきか。

ともあれ、この程度を熟せなければ紅と真正面から渡り合うなど不可能であった。

「げ、っぼぼ——」

刀を振り上げた一人の喉に情け容赦なく弾丸を叩き込む。

破れた喉に熱血が溢れ出し、なおも止まらぬ弾丸は頸椎に喰い込ん で破壊する。

死ぬよりも速く首から下の機能を完全に失った獣は振り上げた刀を振り下ろせもせず地面へと倒れ伏した。

「ちいいい……っ！」

仲間を失ったもう一人は仇を取るため、袈裟斬りに刀を振り下ろす。

これ以上ないという程の。完璧と読んでも差し支えない速度と軌跡。

撫斬りにされた小太郎の身体は、敢え無く肩口から背骨と内臓を両断されて脇腹に抜け、泣き別れする——筈であった。

何処までも冷静に、小太郎は銃を指を軸に回転させながら刀の軌跡

へと差し込むと簡単に軌道を逸らす。

自身の渾身を受け流された獣の思考は白痴に染まる。

まるで質の悪い夢が現実に現れたようなものだ。腰抜けと侮っていた当主が、此処までの技量を持つなど夢にも思わなかった。

そして、そんな彼が座して動かずに居たのは何か理由があったのではと思いついた彼は、白から黒へと全てが染まる。

小太郎が眉間に銃口を向けて引き金を絞っていた。如何な対魔忍と言えども、45LC弾の運動エネルギーを無防備な状態で受ければ為す術はない。

「しかしまあ、こっちが八人殺ってる間にそっちは二十人以上を問題なく、か。大したもんだ」

「……何？ 小太郎も私が化け物だとも？」

「まさか、穿ち過ぎだ。お前は紅だろ、ガキの頃から知ってるよ。これほど頼もしいもんはない」

紅の周囲に倒れ伏した獣の死体を目にし、呆れ顔で漏らした呟きを彼女は聞き逃さなかった。

何処か優しさと憂いを帯びた視線は、今や怒りと悲しみで染まっている。小太郎でもそれ以上口にすれば許さないと言わんばかりだ。

だが、小太郎は当人が気にしている事柄を気にした素振りすら見せない。事実としてどうでもいいのだろう。化け物であろうが何だろうが紅は紅と割り切っている。

その様子に、何処か安堵したように紅は静かにホツと息を吐く。好きな小太郎にだけは、そう思われるのは耐えられない。

彼女が己を化け物と蔑み、周囲が化け物と罵る理由。

理由は単純明快。彼女の身体には人間以外の血が、それも吸血鬼の血が流れているヴァンパイアハーフだからだ。

彼女の亡き母、心願寺 楓は異種族の仔を孕む特異体質であり、それに目を付けた吸血鬼が存在した———それこそが不死の王にして悪名高き吸血鬼の始祖。

連れ去られた楓を取り戻そうと単身で立ち向った幻庵であったが、結果は楓を取り戻す事も叶わず、既に生まれ落ちていた紅を連れ去るだけで精一杯であった。

幻庵にも多くの葛藤があつたが最終的には紅の境遇を憐れみ自らの孫として受け入れ、次期当主として養育する事を決めた。

余りにも勝手な、当主としてあるまじき行為に誰もが反発を見せ、心願寺家を離れる者が続出した。

幻庵の目の届かぬ所では紅を化け物、忌み子と恐れ嫌い、彼女は孤獨な幼少時代を過ごす筈であつたが、時を同じくして不具の仔がふうま宗家に生まれる。それが小太郎だ。

小太郎の母は紅の境遇を知り、幻庵は小太郎の境遇を知ると、二人を引き合わせた。

思惑は言うまでもない。互いに忌み嫌われる外れ者。ならばせめて、どのような形でも構わないから無二の信頼を築いて欲しいと願つて。

結果はご覧の通り。

小太郎の母と幻庵の行動は功を奏した。

人は他者と触れ合い、語り合う事で成長する。少なくとも紅が歪まらずに育たなかつたのは、幻庵の愛情と小太郎との幼少期があつたからだ。尤も、小太郎の方がどうであつたか分からないが。

「——ふん。やっぱり、か。見ろよ」

「コイツ等、何処かで……」

「二車の末端も末端。骸佐の取り巻きだ。ヒヤツハーするしか能がない、理性も知能もないから使い捨てにされたな。いや、奴の性格からありえんな。権左の入れ知恵とも思えんが……」

「そんな……確かに口も態度も悪い奴だが、アイツがそんな真似をするわけが……」

「オレもそう思う。だから確かめに行くぞ」

「確かめについて、こんな何処も彼処も混乱している状況でか？ どうやって探すつもり？」

「行く場所なんぞ決まってる。アサギの所だ」

二車 骸佐。

小太郎と紅にとって、ふうま時代からの幼馴染。

心願寺 幻庵と同じく骸佐の父親はふうまの頭目衆であったふうま八将の一員であった。

先の内乱で父と兄弟を失った骸佐は若くして二車の当主となった。対魔忍への憎しみを胸の内でも押し殺して。

紅とはよく会話をしていたようであるが、五車町へと移り住んでからというもの、小太郎と骸佐は顔を合わせはしたが会話はなかった。

二車家は実力者こそ敗死したものの、同じくアサギへと下った紫藤家に並ぶ程の人員を擁する。これを利用しては堪らない、と特に厳しく接触を禁じられていたからだ。

しかし、どうにも小太郎と紅の骸佐に対する印象は、反乱に結びつかない。

確かに骸佐は、誰よりも現行の対魔忍に対して深い憎しみとふうま一門復興を望んでいるのは確かだ。しかし、だからと言って反乱を起こす気質でもない。

荒々しく、誰かが止めねば何処までも走り続ける性格であるが、かつての敗北が彼の心に影を落としていた。二車家の人間を失う事を、ふうまの仲間を失う事を誰よりも、何よりも恐れている。

今し方、小太郎と紅に襲いかかってきた骸佐の取り巻きは実力もそこそこにも拘わらず、自信だけは一人前の三流だ。性格にも難があり、紅を犯そうとしていた事からも伺えよう。二車家の中でもどうしようもないクズで通っていた。

だからこそ、骸佐は己の取り巻きとした。取り巻き共が問題を起こさぬように、自ら手綱を握り、これ以上ふうまの立場を悪くはさせまいとしたのだ。そして、クズとは言えども二車家の一員と真剣に彼等の明日を憂いていた。

そんな骸佐が、仲間を使い捨てにするとは考え難く、何処かの誰かが入れ知恵をしたとしか思えない。

死体から仮面を剥ぎ取り、何処の誰かを確認した小太郎は立ち上がったが、紅は頭にハテナマークを浮かべるばかりで分かっている。このタイミングでアサギの所に向わねばならないのか、と。

「あのなあ、ちったあ自分の頭で考えろって言ったろ？ これは陽動だ。こいつらみたいなの連中を五車町のあちこちで暴れさせて目を引いてるんだよ」

「そ、それは分かるっ！ 馬鹿にするなっ！」

「馬鹿にするなっってしようがないだろ、お前馬鹿なんだから。二車家の数は多いが対魔忍の総数と比べれば戦いになんかならない。だったら陽動で手薄になった本丸を落とすしか取れる戦術がねえよ」

「それでアサギ校長のところかっ！ いや、分かっていたがなっ！ よしっ、急ごう！」

（勢いで誤魔化そうとしても誤魔化せてないんだよなあ……………まあ、メンタルは回復したから良しとするか）

馬鹿とハッキリ言われて紅は顔を真っ赤にしながら自分一人ですんずんと進んでいく。

顔の赤さは、怒りと言うよりも恥ずかしさ故だろう。可愛気と言えば可愛気だが、普段の凛々しい姿は何処へやら。色々と台無しだ。

そんな彼女の姿に嘆息しながらも、その後を追う。

紅のメンタルの弱さは百も承知。周囲から化け物化け物と蔑まれれば、卑屈にもなろう。彼女にとって化け物というワードは完全な地雷だ。

だからからかったり、敢えて怒らせる事で、気を逸して持ち直させるのは昔からの役割だった。

こうして、ふうま 小太郎は戦いへと身を投じ、彼の物語が幕を開ける。

彼の物語は対魔忍の物語でもない。況してや外道の物語でもない。

この物語は、メンタルお化けの彼がただひたすらに苦勞に喘ぎ、絶叫し、七転八倒し、時々ヌキヌキ褒ポン美（隠喩）する、苦勞人の物語で

ある
↓
.

此処の苦勞人は敵の話なんて聞かない

訓練施設とアサギの座す校長室のある校舎までは、それなりに距離があつた。

木漏れ日で照らされる林道を小太郎と紅が足早に進む。

一刻も早くアサギの下へと辿り着かなければならないにも拘わらず駆けなかつたのは、遮蔽物の多い林で突然の襲撃を警戒してのと。

紅の実力であれば有象無象の雑兵などもの数ではなく、其処に小太郎の銃撃が加われれば恐れなど抱かずとも不足はない。

しかし、既にこの反乱騒ぎにキナ臭さを感じ取っていた小太郎は、必要以上の警戒を払う必要があると判断したのだ。

襲い掛かるには絶好の箇所であるにも拘わらず、人が気配を殺している気配すらない。

これでは何処か間の抜けた、成功の見込みのない反乱だ。お笑い草も甚だしい。決死の覚悟というものが抜け落ちている。

「……………」

「小太郎、どうした？」

「死臭がする。それに……………この音と振動、誰かが戦っているな。いや、いま片方が死んだ」

空気に漂う血臭に、何者かの死を感じ取った小太郎は、足を止めて地面に片耳を押し当てて。

耳と頭蓋を通して伝わってくる音と振動は明らかに戦闘時の足運びであり二人分あつたが、直ぐに止むと一人のものだけが残る。以降、音と振動は消えてなくなった。

生き残った側はその場から一步も動く気配を感じない。

もし仮に生き残ったのが五車学園側であるのならばおかしすぎる。一步も動けぬほどの負傷ならば、その場に倒れ込む音が聞こえなければならぬ。

それがなかったのならば動けないのではなく、動かないと考えるべき。

とどの詰まり、この先の何者かは既に小太郎と紅の存在を察し、待ち構えている。

(歩幅からして身長180オーバー、体重は80キロ超。踏み込みの特徴からして槍の使い手。忍法も使わずに、形式上とは言え仲間だった奴を躊躇なく殺す。そんな奴、一人しかいないわなあ)

小太郎もまた僅かな情報と状況から待ち構えた相手を察していた。校長室のある校舎まで行くのであれば山道を迂回する手もない事はないが、悪手と判断する。

林の木々は遮蔽物として働き、射撃武器を主とする小太郎と長物である槍の使い手にとっては戦い難く、小太刀二刀を扱う紅にとっては有利に働くが、相手が相手だ。

槍の腕という一点にのみ絞れば、待ち構えている相手は神槍と呼ぶに相応しい使い手。林の中という前提が、悪条件として全く機能しないのは目に見えている。

ならば少しでも周囲が開けた山道の周辺で戦った方が、自身の戦力も生きて合理的。

僅かな時間で結論を出した小太郎は紅に目配せをして先に進み、紅もまた頷いて周囲を警戒しながら後に続く。

「これはこれは、宗家のお坊ちゃん。それに心願寺のお嬢ちゃんも同伴で。揃っていらっしやるとはタイミングが良いのか、悪いのか」

専用の対魔忍装束に身を包んだ男は笑みを浮かべ、逃げずに向かってきた二人を歓迎した。

しかし、歓迎された場所はどうか。

男の周囲には地面から無数の槍が生えており、逆に突き立てられてもいる。その全てに、かつて人だったものがおまけのようにくつついている。

首に胸部、頭に腹。貫かれている場所はそれぞれであったが、皆全てが急所。いずれの死体も、必殺の意思の下に作り上げられたと嫌でも分かる。

加えて言えば男の笑みは人間味に溢れたものではなく、狂犬染みた寧猛さが形になったかのようで、会話が成立している事自体、不思議に思う者もいるだろう。

「——土橋どはし 権左ごんざ」

「分かつちやいたが、お前がいる以上、首謀者は決まったも同然だな。ちったあ隠せよ、馬鹿か」

「いやあ、耳が痛い。しかし、隠す理由もない。勝てば官軍負ければ賊軍。そういうもんだろう、反乱なんてもんは」

「否定はしないが、こっちの迷惑も考えて欲しいもんだ」

紅が険しい表情のまま、男の名を呼んだ。

彼の名は土橋 権左。

二車家の執事にして、骸佐の槍にして右腕。

執事の職は、ふうま一門においては特別な役職だ。家中や家来衆を纏め上げ、主の方針に従って最善の手段を用意する。

当主が人体の頭であるのなら、執事は心臓。当主とはまた違った意味で家の要であり、実質的な運営者とも言える。

その宿命として執事に求められるのは戦闘能力以上に、多岐に渡る職務を処理できるだけの知能を求められる——のだが、権左だけは別だ。

彼は鋼の忠誠心と絶大な戦闘能力のみを理由に執事となった。

主に命ぜられれば例え親兄弟であろうとも躊躇なく殺す。その様は狂戦士と言うよりかは、正に槍。

紅の表情が険しかったのは彼の強さを知っているからであり、幻庵の存命時には短い期間だが同じ屋根の下で過ごした事があったから。若かりし頃は狂犬そのものであった権左を見兼ね、武の何たるかを学べと彼の父が幻庵の下へと送り出したのがそもその発端。

接触自体はそれほど多かつた訳ではないが、彼もまた狂犬らしい見境の無さ故に、いずれは刺し貫いてみたい相手と蔑みも嘲りもなく紅に接していた。

「それで、どうする？ オレは誰にも此処を通すなと命ぜられている。それでも通るってのかい？」

「無論、そのつもりだ。だからこうして来たんだろうが」

「……………いやはや、全く。奥方様も恐ろしい。どういう教育をすれば、こんなに肝の据わった育ち方をするんだか」

「何だったら、オレがお前に教育してやろうか。真人間になれるぞ、多分な」

「遠慮させて貰おう。オレは、ただ一振りの槍であれば十分だ」

表情から笑みを消しながらも煌々と殺意の灯る瞳は、不退転の決意を示している。

隠すつもりのない鬨気に、木々の中で羽を休めていた鳥達が飛び立ち、虫の羽音すらも無くなっていく。

ただ構えただけで、ただその気になっただけで、他者に実力を分からせる様は、正に達人だ。

ふうま一門において、執事という役職が特別視される上にあらゆる意味で別格なのは先にも語った通り。単純な戦闘能力においても当主を上回る者も少なくはない。

況してや権左は戦闘特化の異端児だ。名と実力によつてともにふうまを支えてきた八将に並ぶ——いや、今では八将すらも超えているだろう。

小太郎がそうであったように、骸佐もまたその性格と内に秘めた憎悪を見抜かれて、何度となく命を狙われていた。

老醜から送り込まれる刺客を、骸佐の身を害する策略を打ち砕いてきたのは何も骸佐自身だけではない。彼の槍として権左もまた同じように、いや、それ以上に槍で刺し貫いてきたのだ。

実戦経験だけで言えば、最強たるアサギ、次ぐ実力を有する紫、アサギの実妹であるさくら、対魔忍のTOP3に勝るとも劣らない。戦い方次第では、十分に彼の槍は届き得る。

「——小太郎、先に行つて」

「そのつもりだが、お前、多分死ぬぞ。つか、もつと最悪の事態になりかねないが」

「権左にはよくして貰った。それに心願寺家の当主として、ふうま宗家に槍を向けた奴を見過ごす事は出来ない。始末なら私が付ける」

「あー、はいはい。任せますよ。尻拭いは全部オレがやればいい訳ね」
「……………ごめん」

「いいよ、別に。そういうのも含めて、幻庵の爺から頼まれた事だからな」

これは梃子でも動かないな、と呆れとも関心ともつかない吐息を吐きながら、小太郎はずんずんと山道を進む。

あくまでも宗家当主として幻庵の遺志を尊重する姿に、紅は女として一抹の寂しさを抱きながらも、宗家に仕える八将の生き残りとして全幅の信頼から闘気を漲らせる。

実戦経験少なくとも、闘気の過多だけで言えば権左に並ぶ。権左が骸佐の槍であるならば、己は小太郎の刃であると示すが如く。

権左は、武器も持たずに無防備極まる姿で近づいてくる小太郎を一瞥しただけで動かなかつた。

肩が触れ合いそうな距離で擦れ違つたにも拘わらず、視線を紅に固定している。

紅もまたそれほどの相手という事だ。ヴァンパイアハーフとしての凄まじい身体能力に加え、ふうま一門特有の邪眼も決して馬鹿に出来たものではない。

しかし、権左が最も警戒しているのは人外の血からなる能力ではない。彼の槍は人と人外の区別なく、主の敵を穿通するのみ。

警戒の最大の理由は、己を狂った犬から主の槍へと引き上げた幻庵から引き継いだもの。

もし仮に、権左が尊敬する人物を上げるならば、間違いなく幻庵を
実親よりも早く上げる。それほどまでの感謝と敬意を抱いているの
だ。

(しかし、あつさり通したな。らしくもない——ということは、骸
佐の命令や思惑以前に、権左には権左の思惑があると見るべきか)
(バレたか……?) 何をどう教育したら、あんな風になるのやら。立
派に育つておいでですよ、奥方様。我々にとって、都合が悪くなるほ
どにね)

遠ざかっていく小太郎に冷静な思考と作為の匂いを感じ取り、表に
出さぬまでも内心では溜息を吐く。

そもそも骸佐が反乱などを企てた理由は、小太郎にこそある。それ
は決して、彼を腰抜けの当主だからと侮ったからではない。寧ろ、逆
に——

(いかな。オレは槍。主の身を守り、敵を貫くのみ)

戦いから離れていく思考に、権左は苦笑いを漏らした。

小太郎にしてもそうだが、紅も紅で己の心を掻き乱す。

心願寺家に代々伝わる二振りの小太刀を構えた姿は、年も性別も違
えども幻庵の姿が重なってしまう。

ただ戦いのみを求める性分として生まれ落ちた己に決定的な敗北
を味わわせながらも、武の何たるかを説き、決して見捨てなかった老
翁。

そんな彼が苦しみ抜いた末に憎き相手の血を引く赤子を孫娘と認
めたのならば、他の誰が嘲笑しようと愚弄しようと己もまた認めるの

み。

何よりもあの幻庵が紅の才気を認め、技を受け継がせた。指導する時間が少なからうと、彼女の中で彼の技は確かに息をしている。当主として申し分ない。

「二車家執事、土橋 権左。故あつての事だが、我が主に捧げるため、その首、貰い受ける」

「ふうま八将が一人、心願寺 紅。ふうま宗家に刃を向けた反逆者を処断する」

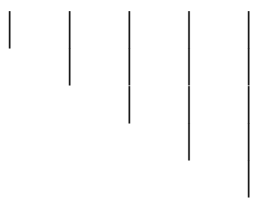
かつて共に過ごした日々は遠く、この戦いには何ら影響を与えない。

今や反逆者となつた主とは言え、忠義を尽くす事に躊躇いはないと槍の穂先は鋭くも軽やかで。

今や名ばかりとなりて誰もが認めぬとは言え、幻庵から引き継いだ役割と技を以て、宗家そのものたる小太郎を守るために二刀の小太刀に重さはない。

戦いの火蓋は突然に。されど、示し合わせたかのように両者は踏み出す。

槍と小太刀が交差し、互いの信念を示し、互いの首を落とす戦いが始まった。



「三階の制圧はまだか！」

「教師連中が生徒を率いて教室に立て籠もつて機会を伺っている。そのまま教室から出さずにおけば時間を稼げる。こちらの思う壺だ」

アサギの座す校長室のある校舎は、既に骸佐に賛同したふうま一門の忍が占拠していた。

校庭や校舎の内部では、多くの対魔忍が抵抗を繰り広げているものの、やはり学園だけあって教師と生徒が大半だ。

生徒は優秀な者がいるものの実戦経験に乏しく、戦いにおける機微というものに疎い。教師は実戦経験は豊富であるが、生徒を守るために後手に回らざるを得ない。

数で劣る『ふうま正義派』或いは『新生ふうま忍軍』が有利に立ち回っていたのは、そういった理由だ。

彼の目的は時間稼ぎであった。時間を掛ければ掛けるほどに、己達が不利になっていく事は百も承知。

時間を掛けるほど対魔忍は十全に人員の集結と隊の編成を済ませて向かってくる。しかし、それはそれで構わなかった。

彼等の——いや、骸佐の思惑はアサギを討つ事なのだ。

現体制の象徴とも言うべきアサギの首を落とし、晒す事で対魔忍の心を押し折って、ふうま忍軍こそが頭領として相応しいと示す。

無論、反発は生まれるだろう。だが、それ以上に混乱が生まれる。現状の体制を甘んじて受け入れている対魔忍は多く、不満を抱いている一族、一門は少なくない。中には、極秘裏に動いてアサギを追いつ落とそうと虎視眈々、などという輩も居る。

これは偏に、アサギという最強がほぼ単身で組織の旗を振っているからに他ならない。

最強の力を振り翳し、時に強引に、時に優しく諭す。これを繰り返して、アサギと政府の仲介役たる山本長官の智慧と権力もあって、何とか組織の体を保っているのだ。

もし仮に、アサギが討たれるような事態が発生すれば、対魔忍は間違いなく割れる。

我こそは対魔忍を率いるに相応しいと今までの結束も協調も忘れ

た恥知らずな行動に出る輩は間違ひなく現れる。所詮忍など裏切りと見切りを繰り返してきた存在。真実の忠義など持ち得ていない恥知らずの方が多い。

対魔忍の世界における群雄割拠の到来。それこそが骸佐の狙いであつた。

彼等はその意思に賛同し、骸佐こそが対魔忍を率いるに相応しいと認めただからこそ、例え己が死んだとしても構わなかつた。そのために、これが死に値する反逆であつたとしても、躊躇ひはない。

まずは校舎の内部に存在する対魔忍の位置を把握し、アサギの右腕である紫かさくらが率いてくるであろう本隊に備える。

一階の端に存在する教室の中で、一隊を率いる上忍が下忍に指示を出しつつも、次なる手はどうすべきかを思考したその瞬間――

「なん――」

「……………っ!! 退がって下さいっっ!」

思考の間隙を突くように、窓ガラスを突き破つて何かが教室の中へと投げ込まれた。

くすんだ黒鉄の物体はコロコロと転がって教室の中心へと至る。

思考に沈んでいた上忍が、それを何か理解するよりも早く、ただ命令を遂行する事にのみ終止していたからこそ思考に余裕のあつた下忍の一人に突き飛ばされる。

瞬間、教室の中を凄まじい爆発が襲つた。

ガラスと電灯は一瞬で砕け散り、熱波と衝撃が教室の中にいた六人の身体を叩く。

ただ一人を除いて全員が壁や床、或いは教室の椅子や机に叩きつけられながらも生きていた。

「な、何が……………起こつた……………」

壁に叩きつけられた上忍は、爆発の影響で喪失した視覚と聴覚を押

して顔を上げる。

見れば、教室は一瞬で様変わりしていた。

整然と並んでいた机と椅子は今や乱雑に倒れており、爆発の影響で天井の板が電灯の一部と共に落ちており、黒板も傾いている。まるで戦火に曝されたかのようだ。

そして、教室の中央には己を突き飛ばした下忍が息絶えていた。

見るも無惨なその姿。対魔忍装束を纏っていたにも拘わらず、全身が火傷に覆われ、内臓が外へと零れ出ている。しかし、悍ましさとは無縁の勇敢な死に姿だった。

誰よりも早く教室の中に飛び込んできた物体の正体を察した彼は、それに覆い被さった。

上忍は未だに現状を把握できていなかったが、彼の我が身さえ顧みぬ行為が己達の命を救ったのだと察する。

しかし、その全てを台無しにする——いや、彼がそんな行為をせざるを得ない状況を作り出した元凶が、壊れた窓から悠悠と教室へと足を踏み入れる。

「貴様、九郎隊の——」

何とか立ち上がった上忍に言葉を最後まで発せさせず、九郎隊と呼ばれた男は手にした銃の引き金を引いた。

手にしていたのはフルオート、セミオートの切替可能な散弾銃・オート・アサルト

A A — 1 2。ドラム型弾倉の装填数は32発。使用弾薬は特殊弾薬FRAG—12。

A A — 1 2の最大の特徴はコントロールが容易な連射速度と低反動にある。銃内部に長大な反動抑制機構を備えており、散弾銃でありながら片手でも射撃が可能なほどだ。

無論、それらは銃の扱いに慣れた者が前提の話ではあるものの、不慣れな者であっても低反動と散弾という特性のお陰で、撃って当てることも不可能ではない。

男は上忍の頭部が爆ぜ割れて倒れるのを確認すると、まだ生きてい

ながらも爆発の影響で立ち上がれない反逆者に等しく散弾を叩き込む。

明らかに銃器と近代兵器を扱い慣れ、対魔忍装束と米連の兵士が纏うボディアーマーを一体にしたかのような衣装を身に着ける者、彼らは九郎隊と呼ばれる。

その名の元となったのは八津 九郎。

アサギから全幅の信頼を寄せられ、かつては日本を守る自衛軍のレンジャー隊に所属していた異色の経歴を持つ対魔忍である。

彼はレンジャー隊の所属時に両眼を負傷して除隊となったものの、対魔忍としての力に目覚めた。

九郎隊はそんな彼が自らの経歴を活かし、自衛軍から彼直々に引き抜いた者達で構成された部隊である。

無論、みな自覚こそなかったものの、対魔忍としての素養——対魔の力とも、対魔粒子とも呼ばれる力だ——を秘めていた。

九郎とアサギ、及び山本長官の思惑は近代戦の知識を存分に取り入れ、対魔忍全体へと伝えるためであったのだが、敢え無く失敗に終わっている。

九郎隊が優秀過ぎて現場を離れられなくなったのだ。

九郎もそうなのだが、近代戦の知識に加え、隠密行動や密偵としての役割も熟せた彼等は、今や現場に無くてはならない存在である。

裏方としては情報収集、スパイ活動。戦闘になれば集団行動と銃撃による魔族や米連の封殺と味方の援護、彼等の活躍と武勇伝は枚挙暇がなく、重要な暗闘の影には必ず彼等の姿があった。

つまり、忙しすぎて本来の目的を果たせないのだ。笑ってしまう話なのだが、優秀すぎるとこういう事態がまま発生するのが人間社会である。今日も今日とて九郎と彼等は世界中を飛び回っている。

但し、彼等の現状から分かるように、この男は九郎隊の一員などではなく、九郎隊の装束を纏っただけの小太郎であった。

「————つたく、手間掛けさせやがる」

さて、此処で一つの疑問に答えよう。

ふうま 小太郎は何ゆえ回転式拳銃などに拘るのか。

当人は単純に興味嗜好、好悪の問題だと言い切り、他者に踏み込ませずにいるものの、彼に親しい人物ならば殊更に疑問を覚えるだろう。

彼は本来、合理を優先し、論理を良しとする人間である。他者の感情を理解して言葉巧みに操るが、当人は感情などに引き摺られない。

そんな人物が銃の進化から取り残され、非効率的にすらなった回転式拳銃を扱う理由。

少なくとも好悪ではない。今もこうしてAA-12というショットガンを平気な面をして、使っているではないか。

「てえやつ！ 皆、無事っ!? ……つて、九郎隊の人!?!」

「これは、火遁……いや、爆弾か。と言う事は、貴方が……?」

「ああ、そうだ。お前等は新人の水城と秋山か。他に仲間は?」

「いません。可能な限り助けてきましたけど、混乱してて」

「——成程、たまの休暇に帰ってみればこの始末。ついてないな」

扉を蹴り抜いて教室へと入ってきたゆきかぜと凜子。顔が隠れている、声もボイスチェンジャーで変えてもいるが、親しい筈の小太郎であると全く気付いていない。

そう、最大の理由はこれだ。

近年では対魔忍の中にも近代火器を扱う者は増え始めている。

九郎を筆頭とした九郎隊は言わずもがな。紅の従者である女性も使い、若い世代でも近接武器に比べて才能に左右されず訓練の時間も短くて済む利点に目を付け始めている。

その中でも小太郎は異端。

回転式拳銃などを使っているのは、訓練時間の短縮と常に一定の成果を出す安定性が失われてしまう。

誰もが彼を嘲笑っている。誰もが彼を侮っている。

逆に言えば、それはある種の注目だ。誰もが、彼は回転式拳銃に拘

る物好きだ、という認識に繋がっている。銃をよく知らなくとも回転式拳銃の外観は特徴的で印象に残る。

だからこうして素性を隠し、回転式拳銃以外のものを使ってしまうと、彼とは全く結びつかなくなる。全ては己の正体を隠し、その上で全く別の誰かを演じるための前準備であり、彼は何度となく実践経験を積みながらも、未だに実践を経験していない未熟者で通っているのだ。

彼の本音は『銃などどれでも構わない。兎にも角にも使えれば、それだけでいい』だ。

安定性だの信頼性だの下らない。弾詰まりも暴発も不発弾も、現代の銃の性能を鑑みればほぼ発生はありえず、使う側の腕と見極め、日頃の整備に全てが掛かっていると断ずる。

微差でしかない性能差を吟味する必要性など感じない。銃——
——いや、武器など使い捨てで構わない。

そもそも武器とは消耗品。ただ一つの武器に拘るなど愚劣極まる。もしそれを失くしたのならば、何も出来ない役立たずにでもなるつもりか。

もし必要性があるとするなら、安価かつ大量に手に入るかの一点のみ。後は智慧と工夫でどうとでもなる。不測の事態などという言葉い訳がそもそも愚かしく、己の想定の甘さを露呈させただけ。それが彼の銃や武器に対する持論であり結論だ。

「——それで、お前達二人は今まで何処に居た」

「校舎裏の森の中でゆきかぜと二人で自主訓練を。その際に、ふうま一門の者が突然、ですが……」

「どういうつもりですか……?」

「そもそも、こうした緊急事態に際してはまずは敵味方を識別するための合い言葉があった筈だ。無論、生徒用のそれもな。一度だけチャンスやる、^{かのえ}“庚”」

「待って下さい、私達が偽物だって——」

「^{かのと}“辛”。これでよろしいですか」

「ああ、構わない。この手の代物は徹底しろ。そして自分で利用できない事も忘れるなよ、新人^{ルーキー}」

（ちよつと凜子先輩っ！ あの人、私達のことを疑ってたんですよ。それにその合言葉、今の敵も当然知ってます。意味なんてないじゃないですかっ！）

（お前の言い分も分かるが、合言葉はまず一番最初に行うように言われていただろう。悪かったのは此方の方だよ）

己に纏わりついてくるよく知っている二人に対しても、気を緩めない。

敵味方識別を目的とした合言葉をいの一に口にしなかった。ただそれだけの理由で引き金に指を掛けたまま銃口を二人へと向けた。

自分達を疑う行為自体が気に食わないのか、ゆきかぜはムっと表情を曇らせて反発を見せた。

しかし、相棒にしてお守り役でもある凜子が割って入り、事なきを得る。

言い分は理解できるが、やっぱり疑われるのは腹立たしいし、いい気分ではないとゆきかぜはそっぽを向いたが、小太郎は気にした様子もなかった。

「魔族にしろ、対魔忍にしろ、姿形を変えられる奴はいる。目で見たものだけを信じるのは油断だ。気をつけろ」

「うぐっ………す、すみません。考えが至りませんでした」
「分かればいいんだ。次は実践だな」

無論、小太郎は二人が本物であるとは見抜いてはいた。

ほんの僅かな仕草や息遣いの違いなど、見た目以外に本人を示す記号は数多に存在し、これまでにドツペルゲンガーやシェイプシフターといった姿を自由に変える魔族相手にすら、初手から正体を見抜く事に成功している。

それでもなお断固とした姿勢を貫くのは、己の能力であったとしても彼にとつては疑いの対象であるからだ。彼にとつて信ずるに値するものはこの世に存在しない。例え、己自身であつてすらも。

そもそも合言葉も簡易過ぎるのだ。

十干の内の五行陽干ようかんを問いかけた側が口にし、答える側は対応する五行陰干いんかんを口にする決まり事。十干に疎い者は口に出来ないが、それなりの知識があれば簡単に答えられてしまう。

だから小太郎は、この合言葉の前にも彼なりの本人確認を行つていた。この時間帯、ゆきかぜと凜子が誰にも明かさずに自主訓練に励んでいる事を知つていたのだ。

呆れた疑り深さであるが、だからこそ対魔粒子と呼ばれるものは持ち合わせていても異能を行使できない彼が今まで生き残れてきた理由でもあつた。

そして、ゆきかぜに対するフォローも忘れない。

これから共闘しなければならぬ相手に悪印象を持たれては最悪の場面で噴き出しかねない。

ゆきかぜが直情的で頑固であるのは先刻承知。だが、理論的に論じてやれば思ひの外素直になるのは長年の付き合いで知つていたし、人を率いる者として当然の配慮であつた。

「奴等の目的はアサギ隊長だ。このまま校長室に向かう。二人共手を貸せ」

「嘘っ!? アイツ等、アサギ校長が目的だつたの……?」

「と言うか、これはマズいぞ。これでは小太郎が疑われかねない……!」

(コイツ等すげーな。あいつらの目的に気付いてなかったのに、今まで生き残つてたのかよ。実力だけで敵を潰して回してたつてアサギかよ)

反旗を翻したふうま一門の目的を知らぬまま、襲い掛かってくる敵をひたすらに倒し続けてきた二人に、小太郎は戦慄と呆れの入り混

じつた表情を仮面の下で創り出す。

二人の実力は嫌という程に知っている。並の魔族ならば直ぐにでも黒焦げかナマス切りの憂き目に合うだろうし、二人が手を組めば紫やさくらも手を焼くほど。

実戦経験の少なさ故に、敵の目的を察する事の出来ないのはまだ分らないでもないが、生徒の中でも凶抜けた才能と実力には舌を巻く他なく、またどうせなら実力と一緒に頭の回転も身に着けて欲しかったと嘆息する。

しかし、嘆かずともいいだろう。対魔忍としての強さは十二分。頭の役割は己が熟して、二人には手足として働いて貰えばいいだけだ。

幸い、九郎隊の実力と成果は知れ渡っている。初対面と思い込んでいる二人であっても素直に言う事は聞くだろう。

「オレが先行するから、二人は後を付いてこい。敵味方の判別もオレがする。オレが撃ったら二人も前に出て、攻撃しろ」

「——了解！」

二人の言葉を確認すると、小太郎は姿勢を低くしながら廊下へと出た。決して焦らずに周囲の気配を探り、物陰を目視で確実に確信しながら慎重に進む。

一階の廊下を進んでも、敵とは出会わない。

恐らくは二階以降の抵抗が新生ふうま忍軍の想像以上に激しいのか、それとも対魔忍側が寡兵で粘っているのか。

ともあれ、小太郎にとっては好都合。時間が過ぎれば過ぎるほどに対魔忍にとつては有利になる。

唯一の懸念点はアサギの生死であるが、骸佐がどれだけ身を削ろうとも実力差は覆らない。両者の間に横たわる実力差はそれほどまでに隔絶している。

彼の経験した実戦の中には、アサギの補佐や援護もあった。

目にした彼女の強さは正に怪物。単身で魔族の組織を潰してのけ

る常識外れ。失敗はすれども、必ず敵を殺して帰ってくる強運も持ち合わせている。

過去、アサギが政府の内通者や魔族に嵌められ、凄惨な陵辱と恥辱を味わったのは知っているが、逆に言えばそうまでしても、未だに彼女を倒せていない。

その点に関しては認めるところ。圧倒的な実力故に安易な罠に嵌ってしまう欠点であるが、彼女の恐ろしさは、誰がどう考えてもどうにもならない境遇と罠に嵌ってなお、強運と実力と精神力だけで全てを粉碎して生還するところ。少なくとも、小太郎は絶対に敵に回したくない手合いである。

(気配が一つ。敵意はないが、この気配は……)

「おや、あなた方は……?」

(……誰?)

「室井先生、無事だったんですね!」

(……誰?)

「……ん? ああ、学園に殆どいない貴方はご存知ではないかもしれないが、此方は校医の室井氏だ。最近、陸上自衛軍から派遣されていらしてな」

(オレ、聞いてないんですけどねえ……まあ、オレの治療は桐生のクソに任せてるから当然と言えば当然だが)

奇妙な気配を感じて、そちらに銃口を向ければ、現れたのは白衣姿に狐を連想させる細めが印象的な中年の男だった。

名は室井 光彦。最近、政府の肝煎りで対魔忍の医療チームに派遣された軍医である。

対魔忍は任務と訓練の性質上、怪我をする者が絶えず医療担当は常に火の車。前線近くにも引っぱり出され、学園内部の保健医はこれまで存在していなかった。

これは流石のアサギも困り果て、ついには山本長官に相談し、派遣されたのが彼である。すったもんだの経緯があったものの、紳士的と

いうことで学生からの評判もすこぶる良い。

小太郎がこれまで出会わなかったのは、自主的な訓練はしてはいても、学園の訓練など殆どサボっていたからだ。

万が一怪我をしても、学園の地下で怪しげな研究に耽るマッドサイエンティストを使っており、医療担当とは殆ど顔を合わせない。

「みずのえ 壬」

「みずのと 癸、これで構わないかね？」

「これは失礼を。自分も陸上自衛軍出身です。元の師団は何処です……？」

「……第一師団だよ」

「成程。ならば、何処かでお会いしているかもしれませんね」

「ほう、君もあそこに所属していたのかね」

「ええ、まあ。自分の居たところは横内連隊長殿の指導が厳しかったです、人柄も良く……」

「ああ、彼か。私も随分と気にかけて貰ったよ」

「それは重畳——死に腐れ、クソ野郎」

合い言葉を済ませ、何処かにこやかで今が非常時である事を忘れて去ったような会話だったが、小太郎は突然の悪態と共に銃の引き金を引いた。

至近距離で世界最小のグレネード弾であるFRAG—12をフルオートで放たれ、室井の身体は人体から挽肉へと変化を遂げた。返り血を浴びながらも、吹き飛んだ室井の身体に追撃の弾がなおも撃ち込まれる。

「や、止めろっ！ 何を考えている!?!」

「あ？ 敵を殺す事だが？ 横内なんて連隊長、今オレがこの場で思いついただけで存在しねえよ」

「——っ!?!」

余りに唐突で突然の出来事に、ゆきかぜと凜子は対応すらも出来ずに呆然としていた。

驚愕の縄から抜け出した凜子は、弾丸を吐き出す銃口を素手で跳ね上げたが、帰ってきたのは更に驚愕を呼び起こす一言だった。

先程の会話は凜子とゆきかぜにやった事と同様に、二重の確認であった。

但し、今回は嘘で塗り固められたでっち上げだ。合い言葉の確認と自ら偽りの素性を語る事で警戒のハードルを下げたように見せかける事で、相手の警戒心をも解きほぐす。

嘘自体は稚拙だったが、彼が作り上げた雰囲気は見事だった。あの雰囲気は、確かに同じ部隊に所属していた戦友へと向けるそれだった。これでは、稚拙ではあっても欺かれても無理はない。

「やってくれますねえ、下賤な人間如きが……」

「コイツ、確か……!」

「ノマドの大幹部、フルストだ……!」

(これはまた、ノマドの大幹部とはね。トップの王様もそうなんだが、コイツら揃いも揃ってフットワーク軽過ぎ!)

倒れ伏し、肉塊と化した室井の身体はボコボコと盛り上がり、全く別の形となる。

細身だった身体は立派な肥満体に、清潔だった白衣までもが何処か道化師を連想させる服装へと変化する。

現れたのは頭頂の禿げ上がった見た目だけは中年の男だ。

古くから紅の仇でもある不死の王に仕えてきた古参の大幹部であり、魔界の医療技術を極めた参謀でもある。

ノマドの戦力において語られるのは魔界騎士たるイングリッド、対魔忍を裏切った朧であるが、彼も直接的な戦闘力は低くとも、魔界技術から作り出される怪物や改造の施された彼の身体は侮れるものではない。

「しかし、褒めて上げましょう。まさか、私の変化を見破るとは」

「そういうの良いから。気配で分かるし、匂いも臭い。ホモ野郎特有の匂いだ。ブラックに御執心なのに相手にされてないのはイングリッドと一緒だな」

「……………っ!!」

「まあ、おおよそお前の狙いは分かった。欲しい情報もないし、兎に角死んでくれ。あらよつと」

「ふん、人間如きが私を害せると——はい？」

「……………こ、これは」

「ちよつと待って、九郎隊の人ってこんなの学園に仕込んでるの!？」

魔族特有の上から目線を全く相手にせず、逆に小馬鹿にし返すとフルストの顔は真っ赤に染まる。

彼の主に対する感情は尊敬を超えて愛情へと至る。その点はイングリッドと同じだ。但し、フルストは決して認めようとはしない。下らない感情で我が忠節を汚すなど言わんばかりに。

だが、誰の目から見てもフルストの抱く感情は男同士の忠誠を超えていた。完全に性欲の対象としてブラックを見ている。だからこそイングリッドとは相容れずに衝突を繰り返し、臍からは侮られていた。

それをただの一目で見抜かれた上に、開示されてしまった。

彼としては憤懣やる方ないが、小太郎は胸の内を明かしてやった爽快感すらない。あるのはただ黒々とした怒りのみである。

互いに怒りを抱きながらも、取った行動は全くの別方向であった。自分は優位だ、自分は優れていると示したいばかりにマウントを取ろうと余裕の態度を崩さないフルストに対して、小太郎の行動は容赦がなかった。

ゆきかぜと凜子が何が起ころうとも対応できるように構えを取る中で、学園の廊下を握り拳で叩くと、床がぐるんと回転した。

忍者の屋敷には様々な絡繰り仕掛けが施されている場合がある。

代表的なものは見られたくない秘奥を隠す部屋や万が一に備えた

脱出路に通じる回転扉であるが、小太郎が作動させたのも仕掛け自体は変わらず目的も隠蔽という点では合致するが、最終的に至る結果は異なる。

現れたものにフルストは目を丸くし、凜子は口元を引き攣らせ、ゆきかぜは絶叫した。

デーリーデーリーーン!! という効果音が聞こえてきそうな現れ方をしたのは三脚で固定されて弾薬盒から給弾されるようにベルトで繋がれたM134。

7.62mm×51mm NATO弾を使用するガトリングガンであり、M61A1バルカンを小銃弾サイズにスケールダウンさせた開発経緯からMini-gunとも通称させる。

最大の特徴はその連射速度だ。最高で100発/秒ほどの連射速度を誇り、開発時には余りにも速すぎて動作不良が多発したために速度が落とされた経緯すらある。

主な用途は軍用ヘリコプターからの制圧射撃であったが、米連で開発された新たな兵器の登場によって携行装備の一つとなった。

それが着る戦車とも称される強化外骨格。年々勢いを増していく魔族の暴虐と、高い身体能力を持つ対魔忍への対抗手段及び市街地制圧を目的として開発された最新鋭兵器である。

強固な外骨格と戦車並のパワーを行使できるアシスト機能を搭載した故に火器の類は内蔵できなかったものの、元より米連の使用する武器は質は高く、何の問題もない。

このミニガンは、小太郎が強化外骨格との戦闘で鹵獲した兵器の一つであった。

流石に生身のままで持ち運びできる重さではなかったため、学園内にまで侵攻された際の対抗手段の一つとしてアサギにも黙って仕込んでおいた。

余談であるが、学園内には小太郎が仕込んだ火器はまだまだある。学園と言えども安全圏と信じていないが故の行動であったが、真夜中に学園に忍び込み、一人でせつせと壁や床を壊して仕込んでいたのかと思うと笑える話だろう。

もかと牙を敵へと食い込ませ、引き千切る。

僅か十秒の間にフルストの肉体は、誰かも判別出来ない肉の塊と化して床へと投げ出されたが、その肉塊に向けてなおも銃弾は叩き込まれていく。

だが、この程度で殺意と矛を収める男ではない。

「水城、お前の最大火力で放て！ 雷遁のそれなら殺しきれる！」

「い、いやいやいや！ 私の最大火力じゃ、仲間も何も巻き込んで射線上のものを全部吹き飛ばしちゃいますから！」

「知るかー！ 正義と平和のための尊い犠牲だ！ コラテラルダメージだ！ 安寧と暮らしている無辜の人々を殺すわけじゃないんだ！」

対魔忍は死ぬのも仕事！ 他は殺していい敵！ ほら、何の問題もない！！」

「そういう問題じゃないです！」

「オーケー、分かった！ お前の罪悪感の問題だな!? なら命令したのはオレ！ 責任は命令した者に全て帰属する！ オレが何もかんも悪い！ お前は何も悪くない!! これでいいか!? やれえいつ!!」

「ははは。何だか、小太郎みたいな方だなあ。ははは」

「凜子先輩、私を正気のまま置いて現実逃避しないで!？」

「うおおおおおつ!! 早くしろっ！ こいつは弾の消費が激しくてすぐ弾切れ起こすんだ！ どうなっても知らんぞおおおおお——
——っ!!!」

「絶対やだっ!! 嫌ですううううう——!!」

敵を殺すために味方が死のうが知ったことではない、いまオレが苦勞している元凶を殺すためならば、そんなものはどうでもいいと言わんばかりの態度。

もう正体がバレないからってやりたい放題である。

このままゆきかぜが言われるがままに最大火力を放ったとしても、存在しない筈の九郎隊の人員が問題となつて、ゆきかぜへの追求は免れるだろう。小太郎本人は知らぬ存ぜぬを通すつもりだ。

万が一、正体がバレたとしても、突如として本拠地に現れたノマドの大幹部を討つために、己とゆきかぜは苦渋の決断を下したと言い切って責任逃れをする方向を検討している。酷いにも程がある。

現実逃避を始めた凜子の肩を掴んで涙目になりながら自分を一人にしないでと揺さぶるゆきかぜは、精一杯の抵抗で絶叫する。

だが、なおも無言かつ迫真の勢いで見つめる。仮面の下から見える瞳はもうひたすらに虚無だ。誰であれ、底のない暗黒を見ているかのような気分になってしまう。

ゆきかぜも強い。強いは強いが涙目である。親に怒られる子供のように震え、唇を噛み締めて涙を堪えながら、蒼い表情でふるふると首を振るばかり。

其処でようやく、M134の弾が切れた。

およそ一分間、弾数にしておよそ4000発に及ぶ制圧射撃。

学園の廊下は酷いものだ。壁にも床にも天井にも区別なく無数の弾痕が穿たれており、酷い所など大穴が空いている。天井の電灯は拉げて原型を留めておらず、辛うじて繋がったコードが千切れて音を立てて落ち、床の穴へと消えていく。

「チツ、肉片になって逃げたな。仕留めきれなかったか。ダメじゃないか、水城。ちゃんと最大火力を撃たないと」

「いや、あの、それは……その、えっと……ご、ごめんなさい」

「まあ、実戦経験が少ないから仕方ないな。こういう場合に応じて、別の火力を用意してなかったオレも悪いし。今度からはお互いに気をつけるということ、どうだ？」

「は、はい、それで……！（絶対やだ）」

「ハッ!? 今まで私は何を……!?!」

「よし、秋山も戻ってきたな。アサギ隊長の元へ向かうぞっ!! ふんっ!!」

「……………ええ」

ようやく正気を取り戻した凜子を尻目に、近場の壁へと拳を叩き込

んで穴を開けると現れたるは様々なアタッチメントの取り付けられたM4カービンだった。

M4はM16A2アサルトライフルの銃身長を14.5インチに短縮して銃床を伸縮式に変更したM16A2の直系の派生型であり、室内での戦闘でも扱い易い。

銃身の下部にはM203グレネードランチャーが、側面にはフラッシュライトが取り付けられている。照準器の類が一切取り付けられていないのは、そのままでも十分という事なのだろう。

銃器に詳しくない二人であったが、最早ドン引きである。

有事に備えると言えば聞こえはいいが、自分達の学び舎が知らず知らずの内に武器庫と化していると知ればむべなるかな。当然の反応だ。

(まったく、骸佐の阿呆め。下らん相手に唆されやがって。まあいい、事情くらいは聞いてやるか)

二人の様子を分かっているながらも全力で無視を決め込み、内心で悪態を吐く。

しかし、フルストが登場した事で骸佐の行動が奴の後ろ盾あつてこそと悟る。思惑や真意は何であれ、それを知らねばならぬ理由が出来てしまった。

嘆息は尽きず、面倒事は増すばかりだが、やらねばならぬ事をやらぬ無責任な男ではない。新たな銃の感触を確かめながら水の如く冷静に、そして毒蜘蛛の如く悪辣に。彼は次なる行動を模索し始めた。

苦勞人は銃よりも爆発物の方が好み

「……………」

『はあ……流石に……はあ……強いな……最強の名は伊達じゃないってことかよ、クソが……！』

『君の力では私には届かない。まだ続けるつもりか……？』
『無論っ！ 此処まで来て退けるかよ、クソババアがつ!!』

(アイツ、すげえな。これだけ劣勢でアサギ相手にこの啖呵かよ)
「どうするんですか？」
「突入して一気に片を付けるぞ」

人に化けたフルストの正体を見破り、一方的で執拗な制圧射撃によつて撃退した後、小太郎、ゆきかぜ、凜子の三名は校長室——ではなく、その隣の空き部屋に移動していた。

幸い、骸佐を信頼し、余所からの救援を排除しているのか、フルスト以降は反乱者と出会わずに移動が出来た。

頭部をスッポリと覆い隠す九郎隊特注のヘルメット越しに耳を壁に押し当て、内部の様子を伺っていた小太郎は機であると覚悟を決める。

骸佐の持つ異能系忍法はよくよく理解している。二車家の当主が代々受け継ぐ魔性の忍法。その名も、邪眼・夜叉鬪髑。

戦いで敗れ去った者——殺した敵も、殺された味方も区別なく見境もなく——の怨念を身に纏い、鎧と共に身体を強化する忍法だ。

これを纏った骸佐は、米連の最新式強化外骨格を真正面から相手取り、斬り伏せられる。斬り伏せられずとも、装甲の上からの殴打のみで中の人間を圧殺せしめるだろう。

なお恐ろしいのは、敵味方が絶えず命を散らしていく戦場という舞台に身を置けば、天井知らずに性能が上がっていく点だ。

しかし、それでもなおアサギと一時的にでも拮抗している現実は無常だった。

アサギの強さは圧倒的。真正面からの戦闘で遅れを取るなどあり得ない。最強の名に恥じぬ対魔忍である。

現状、対魔忍、新生ふうま忍軍両陣営ともに死傷者の数はそれほどではない。

対魔忍側は反乱した相手とは元仲間、嫌でも手は鈍ろう。新生ふうま忍軍側も数の少なさ故に一人でも多くの対魔忍を仲間に引き入れたい。

多くても死人の数は数十名。己や紅、権左がやり過ぎてしまった感があるものの、その程度の数でしかない。如何に夜叉髑髏が優れた異能であったとしても、元々の素養に差がありすぎて、最強たるアサギに指をかける段階にすら至らない。

もう幾つか、絡繰りがある。忍法か、或いはそれ以外の外的要因か。それが小太郎の予測であった。

フルストが一枚噛んでいる時点で彼の持つ魔界技術が最も可能性が高く、次点でふうま宗家すら知らぬ二車の最秘奥でもあったのか。

いずれにせよ、骸佐がアサギに押され、戦いを仕切り直そうとしている今が好機。

如何なる存在も一方的に叩き伏せるには、最高のタイミングで横合いから殴り付ける事だ。

「突入と同時にオレと水城の雷遁で牽制射撃。二車の動きが止まったら、空遁で空間ごと叩き斬れ」

「ですが、それでは反乱の理由が……」

「だからなんだ？ 戦場じゃ、たまたま急所を外れて、たまたま生きていればそれで十分過ぎる手加減だ。同じ学校の生徒だからと言って手心を加えれば死ぬのはお前だ。それでもよければお好きにどうぞ？」

「……………」

壁に何かを仕掛けながら、反乱者とはいえ後輩を斬り殺せと言われた凜子は理由をつけて反論したが、冷たく突き放されて黙らざるを得ない。

彼の言葉は冷たくはあったが、それ以上に正論だった。全ては命あつての物種。敵と己、味方の命を天秤にかけて、どちらが重くなるかなど解答を待たず、凜子とて死にたくはない。

元味方ではあるが、今や骸佐は敵の首魁。彼なりの正義、信念、思惑、目的はあろうとも、それで手を緩める理由になりはしないと断じる。

彼の言い分に間違いはないと認めてしまったからこそ、凜子も黙らざるを得なかった。

「二人とも壁に背中をつける。征くぞ——！」

小太郎が壁に仕掛けていたのは、突入用の指向性プラスチック爆薬。

立て籠もった凶悪犯の意表を突く形で特殊部隊が突入するために用いられる装備である。

米連ではこれに加えて部屋の内部を探るサーマルスコープ、センサー類、無音化装置マイクロチャージャーを併用して突入作戦の成功率を飛躍的に高めた。

小太郎が声に合わせて、手に持った起爆装置を起動させる。

「——何っ!？」

アサギと骸佐に予告もなく壁が発破され、愕然と視線を向ける。

何が起こったのかという両者の思考の硬直に合わせるように、校長室へと突入した小太郎はM4 カービンの引き金を引いた。

発砲炎と共に吐き出される5.56 x 4.5 mm NATO弾は、一発も外れることなく骸佐へと吸い込まれていくが、悲しいほどに意味

を為さない。

見よ、骸佐の纏う禍々しい怨念の鎧を。

名の通り髑髏の如き意匠は死した者達の無念を表しているのか。はたまた死者の怨念すら利用する異能の悍ましさを示しているのか。強固な鎧の前に、ただ大量生産されただけの鉛玉は火花を散らして弾かれるばかりで効果を上げられていない。

「九郎隊っ……学園に戻ってきている奴が居たかつ！　だが、豆鉄砲で何が、ああああああああ——！！」

驚愕から立ち上がった骸佐は5. 56 x 45 mm NATO弾の射撃に晒されてなおも不動。

驚異足り得ぬ攻撃に呆れよりも苛立ちを募らせたが、次の瞬間に苦悶の絶叫を上げて、全身を痙攣させる。

「飛べよ、雷撃——！」

小太郎の射撃に僅かに遅れ、ゆきかぜもまた己の弾丸を撃ち放つ。フリントロック式銃を思わせる外観のゆきかぜ専用制御装置ライトニング・シューターから放たれる眩い雷光の弾丸は、豆鉄砲と揶揄した弾丸に気を取られていた骸佐に防御も回避もさせずに突き刺さる。

特有の放電音と共に瞬間的にでも5000Vボルトを超える雷球を受ければ、如何な対魔忍、如何な魔族とでも穴開きにされ、哀れな黒焦げ死体が出来上がる。

「舐め、るなあ、水城イ——！！」

それでもなお骸佐は立っており、冷静だった。

先程まで相対し殺し合いを演じていたアサギに比べれば、この程度の驚異にするものぞ。

夜叉髑髏の鎧は物理的な衝撃や斬撃のみならず、電撃や炎といった現象であつても問答無用で削減する。確かに雷撃によるダメージはゼロにはならない。ならないが、十分に耐えられるレベルにまで威力は落ちる。

（水城がいるのならば秋山 凜子も居る……！ これ以上邪魔をされたら堪らねえ！ まずは奴等の頭を潰す！）

ゆきかぜは雷撃の対魔忍と恐れられる新時代の対魔忍である。

彼女の活躍には必ず相棒である凜子——斬鬼の対魔忍の姿があり、対魔忍魔族米連問わずに知られる新進気鋭のコンビだ。

ゆきかぜの雷遁ならばまだしも、凜子の空遁は空間を操り、あらゆる物理特性を超え、異能ですらも斬り裂ける。つまり、己の夜叉髑髏の防御性能すらも意味を成さなくなる。

これではアサギ討伐の目的を果たせなくなるのは必定。ただでさえ共にアサギへと立ち向つた部下を既に倒されているというのに、アサギ以外の戦力が増えるのは堪らない。

即座に判断を下した骸佐が襲い掛かったのは、鬱陶しく豆鉄砲を撃ち続ける九郎隊——の仮面を被つた小太郎であつた。

ゆきかぜと凜子は強いが頭がない。言われるがまま、己の正義の赴くままに戦う事しか出来ない強いだけの雑兵。

実に当主らしい、二人に対する結論は決して馬鹿にしたものではなく正当な評価だ。二人は実戦経験こそあれども部隊をまともに率いた事はなく、敵の策を看破するよりも真正面から叩き潰す方法を好む。

とてもではないが、己の思惑を見破つてアサギの救援に来たとは思えない。ならば、二人を率いている頭を叩き潰す事が最優先。そうすれば、強者である二人にも付け入る隙が生まれる。

骸佐の判断は間違いではなかった。

小太郎は英才教育によって人を率いる能力を引き上げられていたが、直接的な戦闘能力という点においてはアサギは元より、同年代の

紅、ゆきかぜ、凜子にすら一枚も二枚も劣る。

頭の役割を果たし、なおかつ最も弱い者を狙う。その判断に間違いなどあろう筈もない。

もし仮に骸佐に間違いがあるとするのなら、二点。

己の能力を使い熟せてはいても、十全に把握していなかった点。

そして、相手が己の能力を己以上に正しく把握し、分析していた小太郎だと気付かなかった点。

「――間抜け」

低く、冷徹な声が地を蹴って天井近くにまで飛び上がった骸佐の耳に届く。

二車家に代々伝わる斬馬刀「猪助」を肩に担ぎ、落下の勢いを含めて袈裟掛けに振り下ろそうとした瞬間、ポンと小気味の良い音と共にM4の下部に取り付けられたM203 グレネードランチャーから榴弾が顔を出した。

銃弾に比べれば遥かに遅い40×46mmグレネード弾は骸佐の目には随分とゆっくりと写ったが、既に斬馬刀を振り上げているが故に防御は間に合わない。

まるで初めから定められたように榴弾は骸佐の胸元に吸い込まれ、爆発を引き起こした。

40×46mmグレネード弾の殺傷半径は5〜10m。射手の安全を守るために信管の安全装置が自動的解除されるには15〜20mの距離を必要とするが、小太郎のそれは改造が施されており、距離を問わずに接触によって爆発するようになっていた。

ましてや室内での使用だ。自殺行為を通り越して、周囲への被害すらも鑑みないテロ行為に等しい。

ゆきかぜはアサギに手を引かれて家具の物陰へと引き込まれ、小太郎は恐るべき反射神経で僅かでも熱波と破片から身体を守ろうとM4で顔を庇う。

「がっ——はあっ……！」

夜叉髑髏——と言うよりも、身体強化系の能力には共通した弱点が存在する。いや、弱点ではなく特性ではあるのだが。

この能力の共通点は、ただでさえ常人離れた対魔忍の身体能力が更に爆発的なブーストが掛かり、皮膚、骨格、筋力も強化によって生み出される出力に耐え得るように等しく強化される点。言わば能力による強化外骨格のようなものだ。

だが、強化外骨格との違いはある——それが質量の差だ。

どれだけ強化されようとも超常の力で出力と強度が増しているだけで、決して筋肉の量が増しているわけではない。即ち、生み出される出力に対して体重が軽すぎるのだ。

元々の馬鹿げた巨体と筋肉量を誇るオーガ、金属と機械を纏った強化外骨格にはない身軽な動きが可能である。だが、その分だけ出力に見合わない軽さが仇となり、何かを殴れば相手を吹き飛ばせても、同じ分だけ自分も吹き飛ぶのは自明の理。

この理を覆すために、身体強化系の異能持ちは宿命として力の流れと身体操作に修行を費やすのである。

だから、爆風によって身体は簡単に吹き飛ぶ。

死にはしないが衝撃に寄って息は詰まるし、脳も揺さぶられ——
—致命的な隙を生む。

「逸刀流——胡蝶獄門！」

爆発によって壁へと叩きつけられた骸佐はそれでもなおも立ち上がった。

意のままにならぬ疲弊し痛む身体、霞む視界と意識を意志の力だけを巡らせて。

しかし、待ち構えていたのは防御の叶わぬ必殺の一撃。

様子を伺っていた凜子は、またとない好機に一瞬の内に距離を詰め、己の奥義を放つ。

彼女の周囲を蝶の如く舞う光の泡は、彼女の生まれ持った空遁そようの具現。空間を操る能力の真髓を、愛刀である「石切兼光」に纏わせて真一文字に振り抜いた。

胡蝶獄門は、凜子の空遁の術と逸刀流の剣技を組み合わせた彼女だけの秘奥義オリジナル。

刃に触れた先から強制的に物体を転移させ、物理特性や防御性能の一切を無視して対象を一刀両断する。

この奥義を繰り出されては、ただ回避に専念する事ではか生還は不可能であり、骸佐にその余裕はない。

此処に勝負は決した。刹那の後には、上半身と下半身で泣き別れた骸佐の死体が残るのみ——

「舐めるな、と言ったはずだぞおっ……!」

「……っ、馬鹿な」

——その現実を、骸佐は執念で捻じ曲げた。

杖代わりに地面へと突き立てた猪助に黒い炎のような怨念を纏わせ、防御が不可能なはずの一撃を防いでみせたのだ。

あり得ない現実には、凜子は愕然と髑髏の下で爛々と輝く瞳と目を合わせた。

超常の力には同じく超常の力で対抗するしかなく、より強力で異常な方が勝利する。

凜子の超常は空間を操る力であるが、骸佐の超常は死者の怨念を操る力。

空間操作に関する研究は、米連でも進められている。詰まる所、いずれは科学的に解明され、機械でも代用可能な現象に成り下がる可能性が存在している。

しかし、骸佐のそれはどうだ。どれだけ科学が進歩しようとも、死者の怨念など操れる筈もなく、解明も代用も不可能だ。故に、異能としてより外れているのは、骸佐の方。

無論、対魔粒子の過多、策によって容易に覆るものの、今この時に

限って言えば、骸佐の執念が凜子の全てを上回っていた。

「これは、瘴気かつ!? ……貴様、何に手を出した!」

「さあな。教えてやる義理なんぞ、ねえよ……!」

「——か、はあつ!」

全身から魔族特有の瘴気、彼の異能によつて縛り上げられる怨念が噴きだした。そのまま骸佐は凜子の首を片手で掴んで、釣り上げる。

頸動脈を巡る血を止められ、脳に供給される酸素を断られた凜子は瞬く間に視界が黒く染まっていく。

途切れそうになる意識を必死に思考することで繋ぎ止めていた凜子だが、疑念が尽きない。

確かに骸佐は優秀な後輩だとゆきかぜから伝え聞いていた。

口も悪く、態度も悪いが、その実慮深く思いやりも秘めている。このような行動に至った経緯も謎であるが、何よりもこの強さは何なのか。

夜叉髑髏という異能を差し引いても、異常だ。今この時点でさえアサギに迫る勢いだという、こうしている今でさえ更に力を増している。

己の喉が潰され、頸骨が軋みを上げる音を聞きながら、到れる筈のない答えを探り、いままさに首が握り潰されようとした瞬間——

「やらせるか、阿呆——!」

「——ぶあつ?!」

——骸佐の横から飛び蹴りが放たれた。

視界の隅で何かが動いたとは悟れても、対応の敵わない速度。

自らの体重全てに速度を乗せた一撃は、一度限り故に神速。

無防備に顔へと蹴りを喰らった骸佐は、またしても体重の問題で蹴り飛ばされ、部屋の隅へと身体を投げ出した。

「げっほお……がつ……げほ……っ！」

「無事みたいだな」

「あ、ああ、貴方の方は、そうでもなさそうだが……」

「問題ない。この程度なら掠り傷だ」

崩れかけた凜子の身体を抱きとめ、倒れている骸佐に対して視線を切らずに返答する。

凜子の言葉は的を射ていた。至近距離での爆発を受けた身体は襦袢の中そのものだ。

頭部のヘルメットは割れてこそいないが罅が無数に走り、ボディアーマーは熱で溶け、破れた服の隙間から見える素肌は深い傷が奔っていた。

立ってているだけでも不思議。況してや戦闘など出来よう筈もない。これが九郎隊の実力なのか、と凜子は啞然としている。仮面の下の素顔が想い人など考え至らないようだ。

「よくやったわ、ゆきかぜ、凜子、こ——」

「九郎隊の山本です、アサギ隊長おおっ!!」

「そ、そうだったわね。今休暇しているのは貴方だけだった。悪かったわ」

(そんなに名前を間違われるのが嫌だったの……?)

(ゆきかぜと凜子にも黙っているつもりなのね……)

(このクソアマああああああつ!! オレの努力を無意識に台無しにしようとしやがってっ!!)

折角、正体を隠しているというのに、名前を呼びかけたアサギに怒号を飛ばし、その様にゆきかぜと凜子は啞然としてやり取りを見守っている。

このやり取りからも分かるように、アサギは小太郎の真の実力も姿も正確に把握している。

ふうまの内乱が終わった当初、身寄りもなく老人達から危険視され

ていた彼を守ったのは、他ならぬ彼女だ。

理由は単純だった。余りにも幼い子供が、哀れだっただけ。純粹に彼の身と将来を案じていたからこそ、自身の手元において養育を決めたのだ。

小太郎に続いて離脱した弾正の秘書ふうま 災禍、同じく執事候補であつたふうま 天音は共に接触を制限されていたが故に、彼女達に変わって彼を育てたのだが——彼の頭目としての適正はアサギを軽く超えていた。

そもそも彼女も認めていることではあるが、アサギ自身の組織の長としての適正は低い。

力で纏め上げてはいるものの、理由のない反発を見せる者もあり、失脚を狙う者は更に多い。

忍らしい暗躍と裏切り、頭が沸いているとしか思えない浅はかな欲望を、どうにかこうにか躲して収めていたのだが、能力の限界というものはどうしようもなく存在し、彼の成長に合わせて頼らざるを得なくなつた。

アサギにとつては苦渋の決断であつたのだが、小太郎はあつさりを受け入れた。いや、苦勞したくないとか叫んでいたが、あつさりを受け入れたのだ。アサギ視点では！

そうして彼は対魔忍の中で暗躍した。しまくつた。西に裏切りの気配を悟れば鼻をホジリながら爆殺し、東に政府内部に喰い込んだ売国奴の存在を察知すれば、相手を小馬鹿にしつつ逆に嵌める。

そんなこんなでアサギと小太郎は最早、切つても切れない仲。親姉弟のように親密で、共に死線を潜りぬけた戦友のような間柄なのであつた。

「……がつ……まだだ……まだ、終わつてねえぞ……！」

「まだ立てるのかよ」

「二車 骸佐。貴様、魔薬に手を出したな」

「魔薬つて……？」

「あー、魔界のヤバイ薬だとも思つとけ」

夜叉髑髏の鎧が意に反して解けていくものの、骸佐はなおも立ち上がった。

全ての異能系忍法は対魔粒子が元である。この粒子はまだまだ謎が多いものの、体力や精神力と密接な関係にある、というのが通説だ。忍法を維持できぬほど消耗しているにも拘わらず、立ち上がったのは人並み外れた目的意識か、はたまた憎悪の賜物か。

あのアサギですら、驚いていた。

彼女の知る魔薬は安易に手を出すべき代物ではないからだ。

製法も効果も様々であるが、唯一共通するのは使用者が支払う代償が高すぎるという点。

元が人であったことが分からなくなるほどの肉体の変異と変調。唯でさえ短い人の寿命が、花火の如く咲いて散ってしまうほどの短命化。

人界のドラッグでも到底及ばないその代償を支払ってもなお立てる骸佐は驚嘆に値するだろう。

「そこまで。それ以上は本当に死にますよ。退くべきでしょう」

「……………チツ」

「お前は、フウルスト……!?!」

「言う余裕がなかったのていま言いますが、先程、奴と交戦しました。五車のセキュリティ、何とかありません…………?」

骸佐の背後——床に落ちた影の中から、一人の男が現れた。

さきほど小太郎達と交戦して一方的にボコられたばかりのフウルストだったのだが、肉塊になるほどのダメージが何処へやら、今や肉体は完璧に復元されている。

アサギの驚きようは見事なもので、室井と奴が同一人物であると全く気付いていないだろう。

それほど見事な変化技術であったが、一目で奴の正体を見抜いた小太郎にしてみれば、ガバガバすぎるセキュリティに苦言の一つも呈し

たくなるだろう。

フルストがパチンと指を鳴らすと、放つ瘴気が色を帯びて闇となり、形を為して空間に穴を開ける。

高位魔族が用いる瘴気を使った移動手段だ。但し扱いは難しく、精々が決められた拠点への帰還にのみで用いられる。

敵を取り逃がすまいと踏み出そうとしたアサギであったが、小太郎に肩を掴まれて止められてしまう。

これだけ堂々と姿を表したのだ。何か策の一つでも隠しているのだろうか。

アサギは兎も角、負傷した自分や実戦経験の少ないゆきかぜと凜子に対応できるとは思えない。此処は静観が吉と判断したのだ。

その姿にフルストは忌々しげに舌打ちをしたが、小太郎は何処吹く風で取り合わない。

二人の間に何かあったと察した骸佐は、あれだけ高圧的だったフルストが顔を真っ赤に染めている様子を鼻で笑い、暗黒の穴を潜ろうと踵を返した。

これは骸佐がフルスト、引いてはノマドと手を組んでいた事が確定した瞬間である。

「しかしまあ、こんな天気の良い日にこれとはな」

「——っ!!」

去る背中へと投げかけられた言葉に、心底からの驚愕と共に骸佐は振り向いた。

それは小太郎と骸佐、後は紅にしか通じない合い言葉だ。ふうまの里で遊び回っていた時に考えた、子供同士の拙いごっこ遊び。

なるべく日常会話の中であっても違和感がないように。互いの顔が見えない状態であっても、声と言葉だけで相手が分かる。

そして、骸佐は全てを悟った。仮面の下の正体も、アサギとの関係性も——そして、小太郎が己の目的を察し始めている事すらも。

「オレは必ずふうま一門を復興させる……！　誰が何と言おうと、誰がどう思おうとだっ！」

強い強い憎しみと怒りを、小太郎ではなくアサギを筆頭とした全ての対魔忍と己へと向ける。

その宣言は不退転の決意。歩み寄りも妥協点もあり得ない、骸佐の覚悟そのものであった。

最後に一度だけ小太郎を見た骸佐であったが、一瞬だけ目を伏せるとそのままポツカリと空いた暗闇へと消えていく。

その姿に、小太郎はもう掛ける言葉はなかった。

自らの正体を晒したのは敢えてだ。骸佐の目的を図るために、フルストに素顔を知られる危険を認めた上で敢えて正体を伝えた。

幸いにも、フルストは人間同士のやり取りになど頓着はないようだが、骸佐の懊悩自体は楽しいのか、口元を歪めていた。

ふうま一門の再興。小太郎の正体を知りながらもフルストにはそれと伝えない態度。権左との会話。

まだまだ穴だらけだが、薄っすらとはあるが、骸佐が引いた絵図面が見えてきている。後は確証を得られればいいが、証拠が残っているかどうか。

そして、己の至った骸佐の考えに浮かんだ感想は、馬鹿め、という呆れ返ったものだけだった。

「では、今回は引くとしましょう——ですが、その前に……」

「うえ、アサギ隊長、助けて。アイツ、オレのケツ穴狙ってるホモ野郎なんですよ」

「貴方ね、何をやったのよ」

「下賤な人間風情が、何処までも人を馬鹿にしくさって……！　貴様、名前はい！」

「オツスオラ、西郷 伊三郎！　よろしくな！」

「覚えたぞ！　貴様はブラック様の名に誓って、究極の苦痛と極限の絶望の中で殺してやる！」

(なあーんで、オレが本当の名前言ってると思ってるんだコイツウ？
自分の都合でしか物事見れないのお？)

(さっき、山本って言ってたよね……)

(しかも坂本 龍馬の偽名の一つなんだが……魔族では絶対に分らないだろうなあ……)

(これでフルストは居もしない対魔忍を探すのに血眼になるわね。凄く頑張ってるのは知ってるんだけど、敵に対するこういう態度、止めてくれないかしら……)

魔族に対して憎しみなぞ抱かない。それが骸佐を唆して己に苦労という重荷を背負わせた相手であろうとも変わらない。

彼の魔族に対する結論は、力を持っただけの馬鹿なガキ、である。確かに人間以上の能力と叡智を持つてはいるものの、十全に扱えていない。そもそも、アレだけ並外れた技術と能力を持つていながら、人間を滅ぼせていない時点で小太郎にしてみればお笑い草だ。

人間は生半可なことでは滅びないとは思っているものの、本気で侵攻を開始すれば制圧は難しくないだろう。少なくとも、己であれば不可能ではないと考える。

それを下等種族に本気を出すのは恥とでも考えているのか、全く本気を出さずにいて手痛い反撃を何度となく喰らって、本気を出す前に死んでいるのだから馬鹿の極みと感ずるのも無理はない。

彼の持論では、本当に頭の良い奴は法を踏み越えない。限られた自由の中で最大限の利益と成果を生み出す者こそが真に賢い者だと信じている。

結局、対魔忍にせよ、魔族にせよ、米連にせよ、己も含めて、今ある現実を受け入れられず、暴力に頼って法と禁忌を侵す愚者。真実、賢いのであれば、強いのであれば法も禁忌も侵す必要など何処にもないと確信しているし、一生涯かけても己は其処には至れないことも認めていた。

だから彼はまともに相手などしてやらない。真摯さなど必要ない。ただ、虫でも踏み潰すような無関心さで殺すだけだ。

相対した者にとって、無関心さと人を喰ったような態度は酷く神経を逆撫でる。

何せ、自尊心の塊のような連中だ。相手にされないと分かれば、相手にして貰えるように必死になる。その様は、まるで構って貰えずに泣き喚く子供のようで。

先程の制圧射撃がトラウマにでもなったのか、フルストは強い憎悪の視線を向けながらも捨て台詞もなく穴を踏み越えた。すると、穴は徐々に縮小していく。

ノマドの大幹部を前にして見逃さなければならぬ歯痒さを堪えながら、せめてもの土産とばかりにアサギとゆきかぜ、凜子はフルストを睨みつける。

その様に多少は溜飲が下がったのか、フルストは歪な笑みを浮かべる。まるで来たければ来いと言わんばかりの態度は、近づけば手酷い目に合うと確信させるものだ。

「折角、五車学園にまで来たんだ。お土産やるよお？」

なら近付なければいいじゃない、とばかりに小太郎はアンダースローで優しく何かを放うる。

一切の敵意のない、それこそ本当に土産でも渡すような仕草に優秀な脳回路を働かせずにフルストは受け取る。受け取ってしまう。

放られたのは、何かの入ったバックパックだ。ずっしりと重さのあるそれが何なのかを理解できず、困惑から小太郎とバックパックに対して何度も視線を彷徨わせる。

本来であれば馬鹿げた距離で隔てられているであろう空間は、穴の消滅と共に本来の距離へと戻る。

そして、穴が消滅する瞬間に、小太郎は手の中に納めていたスイッチを押した。

「きゃああああっ!! なになになになにつ!?!」

「危なっ!? 何だ、何か飛んできたぞ!？」

「山本、貴方何を渡したのよ……」

「え? 瓶入りガソリンと鉄屑とプラスチック爆弾ですけど?」

「……………ひえっ!」

「貴方ねえ……」

「いや、三人があんまりにも悔しそうな顔してるもんで、つい……………まあ、そんなの関係なしにやりましたけど」

「これ、二車が死んだんじゃ……」

「死んでないだろ、夜叉髑髏あるし。フルストも死んでないだろうな。残念残念、火力が足りなかった」

「……………」

「二人共、気持ちは分かるわよ? よく分かるけど、その顔は止めなさい……」

もう向こう側が見えなくなるほど小さくなった穴から、爆炎と鉄屑が弾丸じみた勢いで吐き出される。

その先にいたゆきかぜと凜子は咄嗟にその場にしゃがみ込んで回避したものの、驚愕の至りであった。

種を明かされれば何の事はなかったが、いくら敵だからってやって良い事と悪い事があると思う、とドン引きする二人。

きっと、あの穴の向こうではフルストが酷い事になっている。もしかしたら、骸佐も巻き込まれた恐れもある。

しかし、そんな二人の様子も、慣れているアサギの困った表情にも何処吹く風。残念ながら、これが彼の平常運転である。

「——破あつ！」

「う、ぐう……っ！」

突き出された槍を既すんでのところでは、紅は大きく交代して呼吸を整える。

二人の実力差は然程でもない。

紅はアサギに次ぐ紫、さくらに伍するだけの實力は有しており、真正面から互角以上に戦える。

最終的には経験の差によって押し切られるだろうが、決して一方的な展開にはならない。紫にせよ、さくらにせよ、紅を倒すまでいくつもの死線を潜らねばならないだろう。

だがこの戦いは、余りにも一方的な展開だった。

権左が攻勢の手を緩めず、紅は反撃に転ずる暇もなく防戦一方。

(強い——とは知っていたけど、それ以上に……！)

「どうした。それでは心願寺の名が泣くぜ。幻庵殿も草葉の陰で嘆いておられるだろうよ」

「……ぐっ！」

姿を見せず、落胆の響きを有する言葉が周囲に木霊する。

敬愛と感謝を抱く祖父の名を出されながら、紅は怒りよりも不甲斐なさを抱き、何も言い返せずに齒噛みしか出来ない。権左の言葉は正しいと他ならぬ紅自身が感じているからだ。

幻庵は未熟であったとは言え権左を徹底的に打ち負かしている。

その場を目撃したわけではないが、かつての生活の中で幻庵も権左自身も笑い話として語っていたのを覚えていた。

なれば、幻庵の技と異能を継いだ己でも、十分過ぎる可能性があるかと信じながらも打開策が一向に見つからない。

「そら、考えてるばかりじゃ、動きが鈍るぞ——！」
「つ……このお……！」

権左の姿無きまま、再び土中から突き出された槍を、間一髪で捌く。反撃に転じようとしたが、態勢が整う前に槍は再び土中へと消えていった。

このままでは手も足もでない。

そう判断した紅は地を蹴って移動する。土中から付かず離れず気配が追ってくるが、正確な位置は把握できない。

舌打ちをしながら紅が足を止めて踵を返したのは、巨大な木の前。せめて背後からの奇襲だけでも防ごうとした結果だ。

紅と権左の相性は最悪だった。

権左の生まれ持った忍法は土遁の術。名を捲土往来けんどおうらいと呼ぶ。

数ある土遁の中ではポピュラーな土中に潜り、土塊を操る忍法である。唯一の差は土中に穴を開けて移動するのではなく、泳ぐように移動すること。

移動速度は地表を走る速度と何ら変化はなく、欠点らしい欠点といえば、他人を巻き込んだ使い方が出来ないくらいか。

対し、紅の持つ忍法は風遁に位置する。

心願寺一門に伝わる邪眼——「神眼」によって空気中の風の歪みを目視し、高速の小太刀で斬り込むことで真空の刃を生み出す。

小太刀の間合いを離れた者を鎌鼬で斬り裂き、最大最速で放てば小規模な竜巻をも発生させる。

しかし、如何な鎌鼬、如何な竜巻と言えども土中の相手には効果を発揮しない。

地表に存在する全てのものを粉碎する暴威であったとしても、大地の堅牢さの前には無意味だ。

加えて、得物にも差がある。

槍と小太刀。状況によって有利不利は生まれてくるが、近接武器としてより優れているのはどちらであるかは語るまでもない。無論、戦国時代に戦場の主兵装であった槍の方が優れている。

槍の長さ、槍の広い間合いはそれだけで圧倒的な優位性だ。かつては農兵が三間槍を持てば兵法者を殺してきたほどに。卓越した術技も術理も、己の間合いに入らねば意味がない。

そもそも人の戦の歴史も、相手よりも長く広い間合いを得るかに終始してきている。現代では長距離ミサイルや航空兵器を多く保有する国ほど強く、原始の時代では投槍や投石で力や早さや重さに及ばない獣に打ち勝ってきたのだから。

既に紅は傷だらけだった。

致命傷を浴びてはいないが、身体の様々な部位を槍の穂先で斬り裂かれて血が流れている。生死に関わる量ではないが、体力の消耗は避けられない。一刻も早く打開策を見出さねば、まず間違ひなく紅の命脈は権左の槍によつて断たれるだろう。

「失望だ。ガツカリさせてくれるぜ。それともオレを侮つてか？」

「……何の、話だ」

「言うまでもないだろうが。お前、全力じゃないだろう？」

未だ姿を見せぬ権左であったが、常に飄々としていた声色に得物同様の怜悯を帯びていた。

権左の言葉に紅が覚えたのは怒気だ。

巫山戯ているにも程がある。権左は御爺様が或る意味で自分以上に手塩を掛けた愛弟子にして兄弟子。そんな相手に理由もなく手を抜くほど耄碌してもいないし、舐め腐つてもいない。

何よりも、この戦いは小太郎のための戦いであり、己は全てを任せられている。その信頼を無碍にするなど、裏切りも同然だ。

キリと奥歯を噛み締めた紅であったが、次に発せられた権左の言葉は、彼の槍同様に紅の心を穿つ威力を秘めていた。

「ならば、何故その身に流れる血の力を使わない？」

「……………そ、それはっ」

「それを侮りと言う。それを全力ではないと人は言うんだよっ……」

！」

怒りか、苛立ちか。語気を荒げて権左は叫び、土中から姿を表した。木々の隙間を塗って差し込む陽光を背に飛び上がり、裂帛の気合と共に槍の一撃を振り下ろす。

紅にとって間違いなく好機であった。

今の今まで居場所すら正確に掴めず、土中からの攻撃に徹していた権左が大気中に身を出した。風遁の攻撃が通る。この一撃を捌きさえすれば、土中に潜るまでの間に必殺を叩き込める――！

(なっ、軽い……………しまった、変わり身っ!?)

迫る刃に、奇妙に曲がった短い刀身を持つ小太刀「紅魔」を添え、横に押し出す事で心臓を穿つコースから外す。しかし、剛槍で知られる権左の一撃にしては余りにも軽すぎた。

目を眩ませる陽光を権左の身体が完全に遮り、正常な視界を取り戻した紅が見たものは、槍も姿も全てが土塊で出来た変わり身。

ならば、本物の権左は何処に。

疑問の解答よりも早く、視界の端で捉えた空気の乱れに、紅は前方へと身を投げていた。

「――^{かあ}喝あっ!!!」

瞬間、紅が背中を預けていた樹齢百余年、高さにして十数メートル。幹など大人三人でようやく腕が回りそうな樹木が爆裂する。

千々ちぢに砕けた幹は、木片となつて周囲に飛び散り、紅の背中を何度となく叩いた。

武人としての技も教えも投げ捨て、態勢の立て直しすらも考えない全力の回避行動。

勢いを殺しきれずに何度となく地面を転がり、ようやく立ち上がった紅の見たものは、今まさに地面へと倒れようとしている巨木の姿

だった。

恐るべき、鬼神の如き力と技。

権左の腕力、速度、技。全てが合一を果たした一撃は、単純な腕力ならば対魔忍の頂点に立つ紫の全力それに勝るとも劣らない。

紅が木を背後に立った時点で、権左の方針は決まっていた。

未だに真の意味で全力ではない小娘の小賢しい考えなど、見え透いている。木を背にすることで背後からの攻撃を喪失させ、正面左右上下——視界の中からの攻撃に集中する。

間違っではないが、実に浅はか。故に、権左は紅が望む通りに真正面から囷をくれてやり、自身は巨木ごと紅を刺し貫こうとした。

(躲したのは見事だが、蒼褪めているな。死を意識したのは始めてか、はたまた越えたくない一線を越えかけたからか。何にせよ、青い青い)

ずずん、と重苦しい音と共に巨木が倒れ、大地を揺らす。

これにてようやく仕切り直し。しかし、位付けは済んでしまったよ
うなもの。

紅の顔は蒼褪めていた。

明確な死を予感させる一撃に——ではなく、紅にとっては死よりも恐ろしく悍ましい結末を確かに思い描いてしまったが故に。

まだ身体は戦えるが、心が付いてきてくれない。呼吸は乱れ、胃が
迫り上がり、手足が震える。

未熟、実戦不足と言えばそれまでだが、紅の意志が萎えてしまうほ
どに権左の一撃が苛烈だったと見るべきだろう。

「……チツ、お楽しみはこれからだったのに。あの道化染みたホモ爺、
思ったよりも使えんな」

「何の、つもりだ……」

「時間切れってだけの話だ。今回は、オレ達の負けだな」

何らかの気配を感じ取った権左は、やっていられんとばかりに槍を振り回し、コンと柄で地面を叩いた。

今の今まで向けられていた穂先と殺気を収められ、紅は安堵と困惑に襲われる。その姿に彼は苦笑を漏らしながら、負け惜しみならぬ勝ち惜しみのような台詞を吐いた。

「今回は退くが、その前に一つだけ」

「ま、待て……！」

「お前の姿勢は敵や幻庵殿、そして何より若様への侮辱であり裏切りだ。お前の主人は何と言った？ 確かに尻を拭ってやるとオレは聞いたが。だのにお前と来たら裏切られるのが怖いのか、己の生み出す結果が怖いのか、怯え竦むばかり」

「……………」

「次に合う時までには人魔合一、成し遂げておけよ。じゃなきや、こっちの楽しみがなくなるってもんだからな」

最後の見せた権左の笑みは、実兄のような優しさの溢れたものであった。

それを最後に権左は土遁の術を使って土中へと消え、彼の気配は急速に遠ざかってやがては消えた。

あらゆる緊張から解き放たれ、紅は受け継いだ小太刀すらも手放してその場にへたり込む。

権左の真意は兎も角として、彼の言葉は紅に成長を望み、促すものであり、気を遣われたも同然。敵に気を遣われた。その事実が、紅の全身に重く押し掛かる。

権左のいなくなった林に残されたものは俯いて座り込む紅と、彼女の胸に去来する決定的な敗北感だけであった。

独立遊撃部隊爆誕！ その名も『苦労人をお助けし隊』！

「入れっ！ 早くしろっ！」

「あー、はいはい。痛ってえなあっ！ 蹴るなよっ！」

「黙ってろっ！ 貴様の立場を忘れるなっ！」

「はんっ。捕虜の扱いの悪さは、そのまま法も規律も守れない質の悪さの現れだっつて分かってんのかねえ？」

五車学園の地下には様々な設備が存在する。

小太郎と紅が利用していたあらゆる状況を想定した訓練施設。

対魔忍個々の身体と能力に合わせた武器、武装、装束の研究開発を繰り返す装備課。

頼まれてもいないのに意図不明、意味不明な実験を繰り返し、紫に一方的な愛の言葉を叫んでは壁の染みになるマッドサイエンティストの研究施設。

そして、喧嘩、窃盗、組織の物品破壊、その他目に余る犯罪や命令違反を犯した学生、対魔忍に反省を促す懲罰房。

とは言っても、此処に入れられるのはあくまでも政府機関に引き渡す必要がない対魔忍内での軽犯罪者だけ。民間人に対する殺人等の重犯罪を犯した場合は、如何なる身分であつても即刻身柄を引き渡される。

身内に対して甘いアサギであつても組織の長として、内外に示しを付けるために厳しく線引きを行っている。

自分の背中を蹴り飛ばして階上へと消えていく下忍に鉄扉越しに悪態を吐き、小太郎は懲罰房の中を振り返る。

狭苦しく圧迫感のあるコンクリートの壁と床、電灯は一つだけで薄暗い。居るだけで気が滅入る造りだが、元より反省を促す懲罰房など

何処もこんなものだろう。

他との唯一の違いは、本来であれば一人で入れられる筈の懲罰房に先客がいたことだろう。

「酷え格好だ。まるで囚人だぞ。いや、こんなに雑な割に嚴重な封印処理のされた囚人なんてそういないが」

「そんなに睨むな、いま外してやるよ」

「……………ぶあつ！ も、もつと優しく外せつ！」

先客の正体は他ならぬ紅だった。

革の拘束具を着せられて椅子に座らされた状態で、なおも安心できぬと言わんばかりに無数の縄で全身を締め付けられ、更には魔を封ずる札が何十枚と貼り付けられている。

如何に紅の血に強大な魔が宿っていたとしても、仲間に対する仕打ちでもなければ、対魔忍にも人にもするべきものではない。

異様なまでの拘束は、翻って拘束した者の恐怖の現れでもあった。それほどまでに、この拘束を命じた者は紅を恐れている。

二人がこうして懲罰房に入れているのは、言わずもがな骸佐の反乱へ加担を疑われてだ。

明確な証拠はないが、反乱者に対する戦闘行動も打ち合わせでもしておけば単なる演技に成り下がる。

無論、組織として当然の行為だ。二度も三度も同じ事が起こっては堪ったものではない。身の潔白が証明できるまで、疑うべきもの全てを疑い続ける必要があるだろう。

だが、これは行き過ぎている。仮にも二人は当主。関与が確定するまでは、監視も束縛も必要であるが丁重な対応が求められるはずだ。全ては小太郎と紅の存在を疎ましく思う老人達の意向だ。

今すぐにも二人に消えて欲しい者にとって今回の反乱はまたとない機会。何かと理由を付けて放逐、投獄、処刑を目論んでいる事だろう。

その割には扱いが雑だったのは、老人達の気質だ。

彼等はこれまで生まれる前に決められた道を歩んできた。一族、一門の当主となるべく生を受け、後継者争いに勝利し、自ら次の当主を選定した。

長くても後十年前後で終わる人生を、望まれた通りに駆け抜けた。それは、それだけで素晴らしい。他者の期待に応えるのは並大抵の努力ではない。

しかし、そんな人生が捻じ曲がったのは何時だったか。死に物狂いで当主の座に付いた時の情熱を、報酬とは努力の果てに成果として得られるもの、だという事をすっかりと忘れている。

これまで常人には理解できない情熱で血反吐を吐くような努力をしてきたというのに、数多の成功が危機感を奪い去っていた。

自らの行いに失敗などあり得ないという愚にもつかない思考回路。これでは耄碌の謗りは免れまい。

もし、彼等に少しでも危機感が残っているのなら、小太郎と紅を別の場所に移して監禁した筈だ。

二人が口裏を合わせる機会をわざわざ与える必要もなく、また二人になれば逃亡の可能性も成功率も跳ね上がる。そんな誰でも思い至る可能性に見向きもせず、己の目的にのみ終始し、失敗を考慮に入れない。

最低限放逐に近い形ではある故に、逃走されても構わないのかもしれないが。

「頭目会議は……？」

「案の定、老人共が噛み付いてきた。まあ、自滅してたがな」

紅の問いかけに会議の様子を思い出したのか、最早失笑すら見せず拘束の縄を解いていく。

頭目会議は各一族の当主もしくは代行が出席し、対魔忍の方針、重要案件を決定する場だ。

最終的な決定を下すのは政府から対魔忍全体の頭目を任されたア

サギだが、各当主の意見を一切無視するという訳にも行かない。

当主である以上は周囲に対する影響力を持つ。彼等の意見を取り入れた上で、或いは意見を却下した理由を明確にせねば、当主とその下に居る対魔忍が納得しない。

また各一族の意見を出す事により、己の意見が多数派であるか少数派であるか見定める場でもある。こうする事で不満を可能な限り少なく留め、裏切りや離反の可能性を極限まで縮減する。

会議の焦点は骸佐反乱の責任追及と関係者の関与であった。的外れも甚だしい小太郎への集中砲火に始まり、紅に対する恐怖という名の不信感、果てや十年もの時間を掛けて信頼を勝ち取った元ふうま一門である紫藤家への邪推。

老人達にとつて都合のいい処断を求めた、見ている者、聞いている者の気分が悪くなるような光景であったが、会議の時間は長引かなかった。

彼等の言いたいことを言わせたいただけ言わせてやった各当主は、一転攻勢に出た。

そもそもこの場は当主の意見交換の場であつて、既に現役を退いている先代はあくまでも代行であり、情報を持ち帰るのみに留めるのが道理。

会議に出席するのは構わないが、任務で家を離れているわけでもない当主が出席せずに、あなた方が出席するのは如何なものか。

ふうま 小太郎、心願寺 紅、紫藤家に反乱関与の疑いを持っているのであれば、明確な証拠を提示しなければ誰も納得はしない、等々。理論もない証拠もない、大きい声と勇み足しか用意していなかった老人達は、何故誰も賛同しないのかと押し黙るばかり。

当然である。アサギにしる、小太郎にしる、紫藤家当主紫藤 甚内にせよ、この展開は予測済み。会議の前に各当主に対して根回しは済ませていた。会議とは意思決定の場ではなく、既に決まった意思を表明する場なのだから。

老人共の行動や行為は普段から目に余っていた。

素直に隠居を決め込めばいいものを、当主を押し退けて己の意見を

押し通そうとする。他家の内情であったとしても、決して歓迎される事態ではない。

現役当主の年は比較的若く、米連、魔族との戦いが激化し始めた世代の生き残りに対し、老人達は第二次世界大戦後の焼け野原となった日本を立て直し、まだ対魔忍が一つの組織ではなく一つの一族が各々の意思の下に戦ってきた世代である。

世代の差はそのまま米連、魔族に対する意識の差でもある。老人は一族の頂点として意思決定を行ってきたが故に、己の意見は通って当然と思ひ込んでいる。

だが、現役当主は対魔忍という組織が出来上がった後に座を受け継いだ者が多く、あくまでアサギを頂点とした日本を守る組織の一員という意識が強い。また、魔族から齎された魔界技術の横行、魔界技術を手に入れようと躍起になる各国の暗躍に強い危機感を覚えている。

この意識の差は激しく、いい加減に老人達には表舞台から消えて貰いたいというのが現役当主の共通意見だ。

無論、己が家の先代も口五月蠅く抑え込むのに手一杯という者も居るには居る。忍らしくアサギを追い落とそうとする輩も居るには居る。しかし、日本が無くなれば自分達の存在意義も消失するのは理解しているし、何よりも日本が無くなる以前に自分達の家と命の方が早く消える。

最低限、対魔忍内部での意思統一は行っておかなければならない時は眼の前に迫っている。足の引っ張り合いは、何時でも出来るのだ。

「処遇の決定権はアサギに委ねられた。今は沙汰待ち。反乱の実行に加担した事実がある奴以外に累は及ぶまいよ」

「そうか、良かった」

「……しかし、傷だらけだな、お前。治療してやれっつんだ、全く」
「いい。放っておいても治る………ごめん。あれだけ啖呵を切っておいて、権左には手も足も出なかった」

「まあ、いいんじゃない。勝てはしなかったが、負けもしなかった。生きてるだけで丸儲け丸儲け」

「……………私の負けだ。何も言い返せずに言われたい放題で、おまけに最後は怯えて動けなかった。あんなの負けだよ」

拘束から開放されると、紅は壁際に移動して膝を抱えて蹲る。

死んでいないし、権左を殺してもいない。決着は次に持ち越されている。しかし、紅の基準では敗北だった。

小太郎の命令も果たせず、殺せてもいない。何よりも権左の言葉が胸に突き刺さっていた。

（私は小太郎の刃や臣であるよりも、小太郎に裏切られるかどうかの方が重要で、一人になるのが怖いんだ）

本物の忠臣、本物の刃であるのなら、主に裏切られる事など恐れない。

少なくとも骸佐を主と仰ぎ、骸佐の槍と豪語する権左であれば、裏切られたとしても全ての責任は己にあり、疑問もなしに笑うに違いない。

骸佐様、申し訳ございません。オレは貴方に裏切りなどさせてしまった。主に至らぬ槍は己の不甲斐なさを笑いながら、この場にて果てましょう、と。

実際、権左がどのような行動に出るかなど彼にしか分からないし、彼自身もその時が訪れねば断言など出来まい。

だが、紅はその高潔さと潔癖さ故に、権左を骸佐の忠臣と信じているからこそ、そう思わずにはいられず、自身を孤独を嫌で堪らない子供だからこそ小太郎だけに縋っているだけと結論付ける。

「何でもいい。兎に角、治療だ。消毒だけでもするぞ。お前の頑丈さと治療能力は知ってるが、傷口が化膿すれば当然治りも遅くなるからな」

「いいって、言っている……………あだあつ!？」

「いいから早く出せつつつてんだろ、ぐだぐだ抜かすな」

「……………い、いたひっ」

意固地になった姿は、拗ねた子供のようだ。

伸ばした手を払い除けられ、苛立ちが頂点に達した小太郎は紅の額に頭突きを喰らわせた。

紅の視界で一瞬白い火花が散り、衝撃が過ぎ去った後に残る痛みに涙目で額を両手で抑える。

小太郎は、何時だって土足で彼女の心に踏み込んでいく。腕や強さには自信がある癖に、自分の事となると途端に卑屈で後向きになる彼女にはこれくらい強引な方がいいのは知っており、彼女も嫌いではなかった。

権左と交戦すれば、紅が無事に済まぬのは分かっていたのか、隠し持っていた小箱——簡易医療キットを床の上へと広げる。

紅の傷の状態を見て、縫合の必要はなく懸念は化膿だけと判断すると、ピンセットで綿糸を掴み、消毒液を浸透させて、傷へと優しく塗り拡げていく。

「うう……………くうう……………」

「なんだあ？ 痛そうな声しやがって、ガキかよ」

「う、五月蠅いな。戦闘中じやなきや、誰だってこんなものだっ」

「ソウダナー、コンナモンダナー」

命が失われる覚悟を決め、高揚から脳内麻薬が分泌されている戦闘中ならまだしも、平時では痛みの感じ方が変わってくるのは当然だ。

紅は引き続き涙目のままされるがまま。痛がりすぎだ、と呆れ顔の小太郎であったが、痛みに耐えられる限度は人によって違うと分かっている故に口には出さない。

治療を行っている本人も服の下は真新しい傷に塗れているが、これまでの過酷な人生故に痛苦が行動や思考の邪魔にならないように切り離されてしまっており、紅ですら全く気付いていなかった。

「一つの失敗に落ち込んで、一つの成功に酔い痴れて、己の悪さや良さを省みないのは只の愚か者だ。生きてさえいれば次がある。改善の機会があるって事だろ」

「……………」

「権左に何を言われたかは知らんが、良い事じゃないか。お前が其処まで気にするって事は、真を突いてたってことだろ？ 悪いところが分かったら、後は矯正するだけだ」

「簡単に言ってくれるな……」

「簡単だろ。何が悪いのか分からんまま右往左往するよりもマシだ。時間を無駄にせずに済むからな。完璧さよりもまずは進歩。オレ達は一歩ずつ前に進むしかない」

「……一歩ずつ、か」

紅よりも遥かに多い失敗を繰り返し、少しずつ進歩してきた彼らしい言葉であり、そして良い機会でもあった。

彼女がこうまで落ち込むのであれば、自らの身体に流れる血に端を発する何かがあったとしか考えられない。無論、紅が己が魔を引き出すを恐れるのは理解できる。何せ、現時点で対魔忍全体にとって最大の宿敵にして怨敵から分かれたものなのだから。

だが、何時までも恐れて向かい合わずにいれば、最後に待っているのは自滅でしかない。それは彼女のみならず、小太郎を含めた周囲を巻き込んだのものとなるだろう。

彼女の身を預かる小太郎自身の身を守るために、紅には成長を促さねばならない。彼女が彼女のまま魔の力を御す人魔合一の境地。幻庵が夢想した理想は、超えねばならない最低限のラインなのである。でなければ紅は対魔忍として存在できず、対魔忍もまた紅の存在を許すまい。

彼の言葉を紅はゆっくりと咀嚼していく。

幻庵が認めた上で全てを託し、長い付き合いの中でも決して責任を放棄しなかった小太郎の言葉だからこそ、暗澹たる気持ちを超えて紅の心に届いた。

再起は容易く、元より悩む必要など何処にもなかった。今回の敗北は己の未熟と受け止め、また歩き出せばいいだけの話。結果は自ずと付いてくる。

其処まで考えて小太郎を見れば、何時もの無表情に戻っている。全て彼の思惑通りなのだろう。紅は我ながら自分の単純さに呆れてしまうが、無理に反発しようとも思わず怒る気にもならない。

他者を掌の上で転がすには、相手を理解していなければ不可能な芸当だ。其処まで理解してくれていると思えば、悪い気もしなかった。

——それから、どれだけの時間が経っただろう。

「やつほー。ふうま君、紅ちゃん、大人しく待ってたー?」

「さくら先生」

「遅えよ、何やってんだか」

「ごめんごめん、ちよーつち立て込んだじゃってね」

「……………?」

紅は床の上で正座のまま精神統一を、小太郎は気怠げに横になって時間を潰していると、鉄扉の監視穴からくりくりとした大きな瞳が中を覗き込んでいた。

陽気な声と共に鉄扉の鍵を外して中に入ってきたのは、人の明るさをそのまま形にしたかのような笑みを浮かべた井河 さくらだ。

アサギの実妹であり、自身も凄腕の対魔忍である。潜り抜けた死線は数知れず、アサギ同様に凄惨な陵辱も受けてなおも対魔忍を続けている辺り、陽気でお気楽な性格にも拘わらず精神力は人並み以上のようだ。

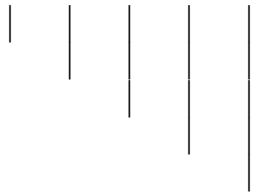
彼女もまた対魔忍の任務と五車学園の教師として後進の育成と二足の草鞋で、国の明日に貢献していた。

「じゃあお姉ちゃんの所に行こうか。二人には正式な通達があるから」

「……通達、ですか」

「……………」

にこにここと笑うさくらの姿に、紅はきよとんとした顔で聞き返したが、小太郎だけは猛烈に嫌な予感をひしひしと感ずるのであった。



さくらに先導されて向かったのは校長室。

反乱から明けて一日。戦いの中心であった校長室の有様は酷いものだ。

小太郎の使用した爆発物によって壁や天井、床には穴が空き、壁紙は爆炎によって生じた黒の斑模様で煤けている。

調度品は交換できるものは交換されていたが、開きっぱなしの穴はブルーシートで覆われただけで、完全な形に戻るのは大分先だろう。

「二人共、悪かったわね。碌な治療も受けさせず、懲罰房入りなんて」

「いえ、そのようなことは……」

「……それよか、オレとしては何でこの二人が此処に居るのか聞きたいところだな」

紅は困惑しながらもアサギからの謝罪を素直に受け取ったが、小太郎は謝罪などどうでもいいとアサギを睨み付ける。そもそも二人を懲罰房になど入れたのは老人共のゴリ押しがあったからであり、アサギの謝罪自体が見当違いも甚だしく、己の不甲斐なさを和らげたいの

なら他の方法にしてくれと言わんばかりだ。

校長室には四人以外にも人が居た。他でもない制服姿のゆきかぜと凜子であり、小太郎の苛立ちの原因であった。

この二人の姿もあって小太郎の嫌な予感確信に変わり、今後の展開が読め始めているからこそ苛立っているのだ。

対し、ゆきかぜと凜子の表情は穏やかでさえあったが、その瞳には何らかの光が煌めいている。

「小太兄、アサギ先生に全部聞いたよ」

「見事な擬態だった。情けない話だが、我々でさえ欺き、気付けないとは。お前の偏執ぶりには呆れてものも言えん」

「……………アゝサゝギゝイイイイイイイ」

「そんな蟲の鳴き声みたいなおかしな声を出さないでくれないかしら……………これが一番なのよ。紅、貴方にも話しておくわ」

「ど、どういふことだ……………」

ゆきかぜと凜子の瞳に宿っていたのは他ならぬ覚悟の光であった。

アサギが二人に、そして紅に語ったのは、小太郎のこれまでだ。

己の身を守るために幼馴染にさえ事実を明かさず、老人共に己の有用性を証明する事で己の命とふうま一門を守る日々を。

全てが嫌々ではあったが、何一つ手抜かりはなかった。

誰もが嫌がる汚れ仕事であろうと情報の真贋を見抜き、己を嵌めようとする罠を搔い潜って誰一人文句の上げられない成果を叩き出す。

九郎隊ですらが二の足を踏む無謀としか思えない任務を投げ渡されようと、持ち前の猜疑心と慎重さから、確実に遂行する。

これまでアサギ達しか知らなかった事実を明かされ、紅は愕然と小太郎を見るが、視線に晒されても悪びれるどころか誇りもしない。彼にしてみれば当然だったのだろう。

自身の正体や実力を隠したのは、ひょんなところで自身の情報を流したくはなかったからだ。

もし仮に対魔忍が敵に捕まって情報を漏らしたとしても、誰も自身の正体を知らなければ、精々が役立たずと呼ばれる目抜け当主の存在が知られる程度。

舐められるのは構わない。その分だけ相對した時に仕事が楽になるだけの事。寧ろ、忍法のない小太郎にとっては歓迎すべきだろう。

また、対魔忍とて彼にとつては背中を預けられる味方ではない。老人共の意向に従った何者かが刺客として放たれる可能性もある。そうした刺客は正しい情報を得ているだろうが、これまで見てきた己の姿に間違いなく油断する。情報は情報でしかなく、体験と実感こそを優先するのが人間である。

何にせよ、己は有能ですと喧伝するよりも、己は無能だと思われていた方が何かと都合がいいのは事実。

元々、他者からの悪意も嘲りも気になる質^{たち}ではない。ならば存分に、正体を知られぬメリツトを徹底して優先したままで。

紅も、ゆきかぜも、凜子も、何かを言いたげであった。

理由があつたのは分かるが、何故一言も言ってくれなかつたのか。しかし、その一言が言葉にならない。

言つたところどころでどうにかなつたとは思えない上に、知つた所で小太郎が体験してきた過酷な日常で力になれたかどうか。自分の不甲斐なさが酷く苦しく、腹立たしかつた。

「でも、どうして今になって……」

「良い意味でも、悪い意味でも、今回の反乱があつたから、よ……」

「あー、あーあーあー！ 聞きたくない聞きたくない！」

「まずは、頭領たる井河 アサギとして、ふうま 小太郎に命じる。二車 骸佐を捕縛し、必ず連れ戻せ」

「それは……」

「そーくるか、そーくるよなあー！」

反乱の首謀者に対しては余りにも軽い沙汰に、紅は目を丸くする。

どう考えたところで甘過ぎる。下手をすれば今現在の対魔忍が瓦解しかねない出来事であった。

確かに、反乱の影にフルストが存在した事を考えれば、責任の所在は骸佐ではなくフルストにある可能性も否定はできないが、骸佐が甘言に乗ったのは事実。どのような理由があれ、殺害するのが道理だろう。

無論、紅としては嬉しくはあった。

何せ、骸佐もまた幼馴染であり、化物の血が流れている理由で自身を嫌わなかった者の一人。だが、嬉しいからこそ困惑せずにはいられない。

アサギとしては、未だに骸佐を学園の生徒と見ている節がある。

この甘さが数々の危機と陵辱を彼女に招いたのだが、一向に改める気はないらしい。尤も、だからこそ多くの対魔忍に最強と恐れられながらも慕われてもいる理由である。

そして、頭領としての判断もまた同様だ。

骸佐と共に離反した人数は未だ全てを把握しきれてはいないが、二車家全体及び他のふうま一門の一部、更にはふうまに關係がないながらも現体制に不満を抱く者も含まれている。数にして凡そ二百前後だ。

これだけの数が離反されても対魔忍の組織自体はまだギリギリのところまで踏み止まれるが、厄介なのは骸佐を討ってしまった場合。二百もの上忍下忍を問わない対魔忍が、骸佐という頭目、道標を失っては暴走は目に見えている。

ただ暴れ回るだけでも政府から危険視されている対魔忍の立場が一気に悪化しかねず、もつと悪ければ魔族や米連に加担しかねない。微妙なパワーバランスで成り立っている均衡が急速に崩れる恐れもある。

骸佐を生きたまま捕縛できれば暴走する者は少なく、憎しみも被害も対魔忍にのみ向けられる。民間人に手を出されるよりかは遙かにマシである上に、巧くすれば投降する者もいるだろう。

また、五車に残ったふうま一門も居る。

紫藤家は元ふうま八将として仕えながらも、かつて弾正を裏切り、戦いの趨勢を決した功績を認められ、名家として権力も独立性も保たれているが、仕えていた家を解体された下忍、上忍は他家へ奉公している者も居る。

今後、彼等への冷遇は加速していく事となるのは明白。このまま看過すれば、ふうま一門の更なる離脱を生みかねない。それだけは何とか避けたい。

「そのために独立遊撃部隊を率いて、ふうま一門を再興なさい。勿論、私達も協力は惜しまないわ」

「はー！ー！ー！ー！っつ！！→→ ナルホドね！ 嫌↓でえ→す←っ！！」

アサギの考えはこうだ。

これ以上のふうま一門の冷遇と離脱を防ぐため、骸佐の『新生ふうま忍軍』に対抗し、小太郎を頂点とする正当なふうま一門を再興させる。

宗家である小太郎であれば正当性は十二分であり、再興させてしまえば現時点で他家に仕えている者達も彼の指揮下と保護下へと入れられる。

しかし、此処で問題となるのは老人達や当主達の存在だ。

如何に必要性は理解しても、他者の成功を妬み、権力への執着が強い者も少なくはない。必ず何かにつけて小太郎の力を削ぎようと躍起になる。

そのために小太郎には独立遊撃部隊を率いさせる。誰の目から見ても明らか、誰も口が挟めぬほどの功績を積ませる事で、彼の有用性を示す。

今は日和見を決め込み、口を噤んで耐えている者も、彼を目抜けと侮っている者も、分かりやすい成果の前には従わざるを得ないだろう。

「嬉しいわ。一も二もなく頷いてくれるなんて」

「嫌だっつってんだろ!? 耳にクソが詰まり過ぎなんじゃないですかねえっ!!」

これから自身に降り注ぐであろう苦労を予想し、蒼い顔で喚く小太郎であるが、アサギは一切聞く耳を持たない。

彼女も十年の付き合いで学んだのだ。人の話には耳を傾ける必要はあるが、時には一切話を聞かない事もまた必要だ、と。全ては小太郎が好き放題にやりたい放題やった結果から学んだ事である。つまり、彼の自業自得だ。ざまあない。

「ふふ。あら、来たようね。どうぞ」

「人の話聞けよ!!」

アサギは何だか優しい笑みを浮かべながらも、内心では自分一人だけ楽をしようなんて許さないわ、と腹黒い事を考えている。

まあ、アサギはアサギで生き地獄の真っ只中に居る。政府と対魔忍の間に立ち、自分を追い落とそうとする連中を時に諫め、時に凄み、時に宥める。更には現場での任務に加えて、報告書類の作成や金の決算、政府高官との会議と言う名の吊し上げ。彼女の過労死も日に日に現実味を帯びてきている。

そして何よりも、己の現状を鑑みて心配なのは世代の交代だ。

身体能力のピークに達し、後は衰えていくだけ。最強の座にも後何年座っていられる事か。来るべき日までに自身の後継を育てておかねば、待っているのは対魔忍の崩壊でしかない。

実力に関しては期待を持てる者が複数人居るが、問題は現状の対魔忍の組織構造と老人達のような保身と権力欲しか頭のない連中。それらを全てリセットしたい。

苦々しく思いながらも力を借りざるを得ないそうした者達を皆殺しにするのは容易いが、それでは首がすげ替わるだけで変革は起きない。

そもそも、そんなやり方では誰もついて来ないだろう。だから彼女は教育という道を選んだ。強く聡い仲間を育て、家や権力に執着せず、手と手を合わせて強大な敵へと立ち向かう。それこそが彼女の理想である。

「失礼します。アサギ様、ふうま 災禍、ふうま 天音の両名を連れて参りました」

「若、ついに……ついにその気になられたのですね。この天音、全力でご助力致します。執事として。執事として」

「あああああああつ!! 面倒臭え奴がまた増えたあつ!!!」

アサギの声に校長室へと足を踏み入れたのは、アサギの右腕にして九郎の妹でもある八津 紫。

元々井河家に仕える下忍の出であるが、さくらを差し置いてポストアサギ、次代の対魔忍隊長として将来を嘱望されている。

そして、小太郎が悲鳴を上げたのは、執事服を身に纏い、鋼鉄の左手が印象に残る少女だ。

年の頃は二十前半。薄蒼の瞳を輝かせながら長いポニーテールを揺らして小太郎に近づき、彼の右手を両手で包み込みながら感慨深げに呟く。

彼女の名はふうま 天音。元は弾正に見出され、幼い頃から戦場に立たされながらも生き残った猛者である。

「天音、落ち着け。若様が困っておいでだ」

詰め寄る天音を止めたのは、最後に部屋に入ってきた妙齡の女性。

アサギと同年代であり、冷たい雰囲気を纏い、鋼鉄の両脚が更に冷徹さを加速させる彼女はふうま 災禍。

彼女は元々弾正の秘書であったが、弾正のやり方にはついていけず、今では小太郎個人の秘書となっている。

切欠は別々であるが、小太郎同様に弾正を裏切ったふうまの身内。

両者ともにその能力から、小太郎との接触は月に数度とされてはいるものの、忠誠心は紅に勝るとも劣らない。

またふうまの血を引いているだけあって、両名ともに強力な邪眼持ちであった。

「何を言う。身の程知らずな二車の若造を討ち、ふうま再興を果たす時が来た。その暁にはアサギを失脚させ、若こそが対魔忍の頂点へと

——」

「はああああああつ!! コイツ、ほんとコイツこの女あ!! 災禍あ、このポンコツ黙らせてえつ!!」

「御意」

「——あつ♡ わ、若、いけません。こんな、このような場所で、皆見ております。いえ、嫌などと恐れ多い。私は寧ろバツチコイな心持ちであああああああんんっ♪」

「ほんと、ほんと何なのっ! 何なのコイツウツ!」

アサギの前で堂々と彼女を追い落とす策謀を語る天音に、小太郎は絶叫しながら災禍に助けを求める。

災禍は溜息と共に頷くと、彼女の左目が輝き、邪眼を発動させた。その瞬間、天音は訳の分からない独り言を呟きながら、その場に崩れ落ちて嬌声を上げた。

これぞ災禍の邪眼の能力だ。

彼女の邪眼は目が合った相手の意識と視界を乗っ取り、相手は自分の意思で動いているかのよう錯覚する。

これを脱するには強靱な精神力と、災禍の見せる幻惑から違和感を感じ取り、現実ではないと看破するしかない。

天音は床の上でくねくねと身体を振り、頬を紅潮させて悦びを表現している。

その様に何を見せられているのかと未通娘達は顔を赤くし、アサギ達三女傑は呆れ返り、災禍と小太郎は身内の恥に頭を抱える。

「そして、紅。貴女もゆきかぜ、凜子、災禍、天音同様に小太郎の独立遊撃部隊に配属とするわ。異論はあるかしら？」

「い、いえ、ありませんが……よろしいのですか？」

「いいのよ。ゆきかぜ達はこの話を聞いて頷いたし、元々貴女はふうま一門ですもの。それに対魔忍の中には貴女を快く思わない者も居る。小太郎と共に有用性を示すには良い機会でしょう」

「んあー！ んあああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああつつつつつ！！！！」

自分が止める間もなく積み重なっていく苦勞のフラグに、いよいよ小太郎は発狂した。

耳を劈く怪鳥音を口から迸らせると同時に消えた。正確には消えたようにしか見えなかった。

全員が逃げたのか、と目を丸くして肩を震わせたが、唯一アサギだけが小太郎の動きを目で追っていた。

アサギが視線を天井に向け、気を失ってピクピクとしている天音以外の視線が続く。其処に居たのは妖怪だった。

蒼い顔で白目を剥いて涎を垂らしながら唸り、天井に四肢を突いている。その名も苦勞妖怪・天井逆さ張り付き。避けようのない苦勞の匂いを察知し、発狂した者が変化する妖怪である。

正確には天井に張り付いているのではなく、指を天井にめり込ませてしがみついているだけのだが、鬼気迫る表情にばかり目が行って、誰もが啞然として気付かない。

「いやだあああああああああああああああああああああああああ
あああああつつつ！！」

「嫌じゃないわよ。いい加減諦めなさい。ほら、降りてきて」

「いやだあああああああああ、やだあああああああああああああ
あああああつつつ！！」

天井にしがみついたまま、泣きながら駄々を捏ねる姿は紛うことな

き妖怪であったが、アサギに動揺は見られない。見慣れているのだ。無言のままさくらと紫に目配せをして、二人を動かす。さくらは苦笑を、紫は頭痛でも覚えているのか溜息を吐き、アサギの命のまま動き出した。

「ほら、ふうまくん。まずは降りよう、ね？」

「ああ、ああ、ふうあああああつっ!!」

「悍ましい奇声を上げるなっ！ 全く、アサギ様直々の命令だぞ、光栄に思えっ！ やれ、さくらっ！」

「あーもうめちやくちや。しょうがないなあ」

説得に耳を貸さない小太郎に、さくらと紫は実力行使に出た。

さくらは自らの忍法・影遁の術を発動させ、自らの足元にあった影を伸ばす。

影遁の術は文字通りに影を操る忍法。

影の中へと自ら潜行して移動するも、得物を隠すも可能。二次元でしか存在していない影を三次元の世界へと引きずりだし、刃として実体化させたりと応用力が極めて高い。

今は伸ばした影を縄のように小太郎の身体へと巻き付けたが、必死にしがみついている彼を引き剥がすには至らない。

「この、貴様と来たら毎度毎度、手間を掛けさせるなっ！ はあああああああつ!!」

「ぐへひやあつ……！」

（小太兄、毎回こうやって抵抗してるんだ……）

（面倒事が嫌いなのは知っていたが、此処までとはなあ……）

（小太郎エ……）

（若様、流石にこれは擁護できません）

影の縄を掴んだ紫は、自慢の怪力で小太郎を引きずり落とししたが、小太郎の握力も大したもので天井の一部と一緒に床へと叩き付けら

れた。

紫の忍法は不死覚醒。文字通りに不死身の肉体を得る常時発動型の忍法であるが、それに付随して身体能力も引き上げられる。

彼女の力は対魔忍一。力自慢の魔族——トロールやオーガ、果ては鬼族でも単純な腕力勝負で勝るほど。力だけでトラックの走行を真正面から受け止め、乗用車を蹴り飛ばす。

これには小太郎も諦めざるを得ないかに思われたが、抵抗はまだ続く。

「お前、おかしいだろうが！ いや、まあふうま再興だの、独立遊撃部隊だのはまだいいよ！ 何時かはやんなきゃだったし、間違っではないからね！ お前の無茶振り案件丸投げ事案すぐやる課くさいけど千歩、いや万歩譲ってまだいいよ!!」

「あら、頼もしい。私も貴方の事を誇りに思うわ」

「寝ぼけてんのかよ！ 分かった！ 分かった分かった！ 今から何がおかしいか、部隊のメンバー紹介で説明してやるから、よく聞けよ！」

何がどうなれば、そうなるのか。

小太郎の物言いに、全員の頭にハテナマークが浮かんだが、本人はお構いなしに続けていく。

「イカれたメンバーを紹介するぜ！ まずは水城 ゆきかぜ！ 対魔忍期待の新人だ！ 忍法は雷遁の術！ 空気抵抗の関係で普段の射程は10メートルくらい！ 実質前衛だ！」

「…………お、おう」

「次に秋山 凜子！ こっちはゆきかぜの相棒で腕もピカ一！ 忍法は空遁の術は応用力抜群、頼りになるう〜！ 得物を見て分かる通りにバリツバリの前衛だ！」

「…………う、うむ」

「次は心願寺 紅！ 凜子のライバルの一人であり、二刀の小太刀は

敵を斬り裂くぜ！ 風遁の術と剣術を組み合わせた旋風陣は敵をバラバラにして返り血でビツチャビツチャの前衛だ！」

「……そ、そこまでじゃ」

「次はふうま 天音！ ふうまの執事だけあつて半端じゃねえ！ 邪眼・動転輪は相手の攻撃を無効化して、相手にそのまま返しちゃう！

敵の攻撃を受けなきゃならんから前衛だ！」

「うーん、若あ……♡」

「最後はふうま 災禍。こいつあ、有能だ！ 裏方は勿論の事、邪眼で敵を思うがままさ！ でも、昔に過労死しかけた事もあるんだぜ！

得意なのはサイボーグレッグでの蹴り！ つまり前衛！ 以上だ！」

「若様、その事は内密にして下さい！」

「おかしいだろうがあああああああ！ 全員前衛つてどういうことだよ！ もっとバランス考えてえ!! オレしか後衛いないやんけ！ そ

の上、戦闘以上に重要な情報収集とか潜入できんの実質オレと災禍だけじゃねえかあああああああ!!」

「………小太郎、考え方を変えるのよ。対魔忍全体が私を含めてそんなもの。情報収集も、潜入任務も出来るのは一部だけ。しかも、確実に成功させるのは九郎と貴方と九郎隊だけよ。逆に考えなさい。これが対魔忍のデフォと考えるのよ！」

「声震えてるじゃねえかお前エ！ 途中で悲しくなつてんじゃねえよ！ 非情な現実に諦めんなよお！ どうして其処で諦めるんだよお!!」

小太郎、魂の絶叫である。

余りにもバランスを考えていない部隊に、泣きながら勘弁してくれと咽び泣く。

しかし、アサギにしては頑張った方だ。

元々面識もあり、小太郎を信頼している彼女達を部隊に入れた判断は間違っていない。如何に戦闘特化とは言え、野心も邪心もなく、ただ献身から小太郎の命令に従う彼女達は、十分に小太郎の力となるだろう。

問題は、情報収集や部隊運用といった裏方の仕事である。

情報収集は災禍、部隊運用は天音が行えるものの、スペシャリストには程遠い。二人もどちらかと言えば戦闘畑の忍であり、可能ではあるが得意ではない。

つまり、そういった仕事はスペシャリストである小太郎に回されるということだ。また部隊指揮のために彼も前線に出なければならぬ。

この戦闘特化の風潮は、対魔忍全体の気質である。

一昔前までは忍らしい仕事ぶりもあつたのだが、アサギ世代の登場によって対魔忍全体の風潮が一変した。これもまたアサギが強すぎた事に端を発する問題だ。

アサギの余りの強さ故に恐れられ、その名前と存在だけで闇の者の横行に対して抑止力になった。

またアサギが対魔忍の頭領として選ばれた事により、アサギ以上の強者を生み出す事に各一族が躍起になってしまったのである。

故に、対魔忍はまずは強さ、その他の能力は二の次という、魔族から恐れられる象徴と示威行為を優先する気質が生み出されたのだ。

潜入・諜報を得意とする忍は軽視される。故に、この道を志す者が少なくなる悪循環。

アサギとしても予想外の現実は何度頭を抱えた事か。その日々を思い出し、彼女もまた涙目で声を震わせて必死に自分を奮い立たせていた。

「はぁぁー、分かった分かった。天音返品するから九郎隊の誰か寄越せ。そうすれば何とかかなっからー！」

「若ぁ……っ!?!」

「ダメよ。誰も貴方と組みたくないそうよ。普段よりも仕事はスムーズに進むけど、どういうわけか普段の三倍は苦勞するから拒否されたわ。それに彼等が抜けた穴を埋められる人材がいないわ」

「ああああああ、九郎、オレを助けてくれえ——!!」

小太郎のいらぬ子宣言に、今の今まで夢心地であつた天音は涙目で跳び上がったが、小太郎は案の定の無視。

アサギの無慈悲な一言に、海外を飛び回っている九郎に思わず助けを求めたが、窓の外の蒼い空にはリポビタン○の空き瓶の山を背景に立つ九郎と彼の補佐をしているあやめが疲れ切つた死にそうな笑みで浮かべ、無理☆ と首を振るばかりであつた。

苦勞人の周りには覚悟がガンギマリしてる女しか存在しない

魔都・東京。

闇の存在が影に潜み、今こうしている間にも罪のない人々を汚泥の中へと引きずり込もうと暗躍する日本の首都。

夜を照らす綺羅びやかなネオンの数々は、まるで誘蛾灯のよう。闇の存在が齎す快樂は、日常に飽いた人間にとっては途方もない誘惑となつて襲い掛かる。

誘惑の声はそこかしこ。しかし、無力であるが故に真面目な彼等は手を出さずに帰路に付き、闇の存在を認知するには至らない。

「三日も寝てたのか。あのホモ野郎、もつとまともなもんを寄越しやがれってんだ」

「まあ、仕方ありませんな。所詮、当面の目的が一致しているだけの間柄。互いの尾を喰む蛇として腹の探り合いと出し抜き合いと行きましよう」

「だな。アサギの排除というこっちの第一目標は失敗に終わった。尤も、あのホモ野郎にとってはブラックに褒めて貰う事が最終目標。そのためにオレを利用した。なら、のらりくらり要求を躲しながら、こっちの最終目標を達成するまで物資も支援も引き出せるだけ引き出して利用してやるまでだ」

日常と非日常が危ういバランスで交差する街の中。

日常から切り離され、非日常そのものと言える闇の歓楽街にもノマド傘下のクラブがある。

ノマドは表向きには様々な分野を手掛ける多国籍複合企業である

が、裏の顔は魑魅魍魎の跋扈する闇の世界の大部分を担い、統括する組織。

エドウィン・ブラックを頂点とし、アサギの宿敵・隴などが脇を固める対魔忍が最も危険視する存在でもある。こうした歓楽街にある大小様々な組織は大抵ノマドに上納金を支払っており、建物などの権利も明け渡している。

無論、このクラブも真つ当なものではない。裏では魔界技術で改造・調教を行った奴隷娼婦が性サービスを提供し、上客であれば魔薬をも売り捌く反吐が出るようなクスと餌の溜まり場だ。

その地下を骸佐と権左は現状を再確認しながら、歩を進めていた。フルストに対する悪意満点のプレゼントに巻き込まれた骸佐であつたが、爆発の瞬間に己の忍法を発動させて咄嗟に身を守った。

そこまでやるかという驚きと、あいつならやるという奇妙な信頼を抱きながら、骸佐はフルストに提供された魔薬の副作用、アサギとの戦闘によつて生まれた消耗から意識を失い、現在に至る。

「それで、こつちには何人付いてきた」

「二車の者はほぼ全て。他家のふうま一門が一部。全く関係がないながらも賛同をした連中も少々。総勢で二百五十一名、骸佐様をお待ちです」

「ふん。予想よりも数が少ないな。それほどアサギが恐ろしいという訳だ。それに、オレを本当の意味で待っているのは、お前みたい今回の反乱の目的を全て知った上で納得した連中だけだろうが。残りの連中は頭の湯だった阿呆どもだ」

「ですなあ。特に、ふうま一門と関係のない連中は酷い。反乱に乗つたのも、全ては自分が好き放題にできるから。倫理もなければ我慢もできない。真正正銘の社会不適合者どもです」

「ああ？ お前みたいにか？」

「元ですよ元。その辺り、幻庵殿にしこたま叩き込まれたもので。性根は変わりませんが、倫理を理解して添える上、我慢も十分に出来ますとも」

今、現状の立ち位置と戦力を簡易的に確認しながらも、骸佐は冗談を飛ばし、権左は肩を竦めて笑う。

二人の関係性は、紅と権左のそれと似る。主従という関係性は崩さないが、精神的には兄弟の近い。

対魔忍の極一部から差し向けられる刺客、二車家の失脚を狙う策謀を、共に手を取り合い潜り抜けてきた。骸佐は権左に全幅の信頼を寄せ、権左は骸佐を自らの主に相応しいと認めていた。

そして、二人の会話から察するに、反乱自体は本来の目的に至る手段の一つに過ぎないようだ。

アサギの排除に関してもまた同様。しかも、成功しようが失敗しようが大局的には影響を与えない事が伺える。

「それで？ ふうま一門なら使えそうな奴は目を付けちゃいるが、それ以外の連中で使えそうな奴は居るか？」

「まあ、何人か。元々対魔忍内部で問題視されていましたが、能力に関しては使いようがある女が一人。条件を飲めば遮二無二働きそうな女が一人、此方はまだ事情も理解できますし、使えそうです」

「よし。それだけでも御の字だ。前者はクズ共と一緒にフルストからの要求で使い潰せ。我欲に塗れた馬鹿どもは要らん。後者はオレが直接話を聞く」

何にせよ、骸佐にとって今回の反乱に本気で乗った者も、自身の利益追求から乗った者も等しく現状が見えていない愚か者に過ぎないようだ。

事情がある故に乗ったのであれば、まず話を聞く。嘘か真かは目を見れば分かる。納得できたのであれば、恩を売る。そうして、今まで当主として家を守り、部下から信頼を勝ち取ってきた。状況が変わった今もやる事にもやれる事にも変化などはなく、直向きに続けていくしかないと彼は知っていた。

「——しかし、まさかアイツがあんな事をしているとはな」

「すっかりと騙されたものです。当主として根回しをしていたのは知っていました。自身の手を汚す仕事まで熟しているとは、頭が下がる思いですよ」

「……………オレは、それどころじゃないがな」

決定的な決別。別れの最後の瞬間に自身の正体を明かした小太郎を思い、骸佐はギリと憎しみから齒噛みした。

それは小太郎に対する憎しみではなく、彼の背後に居る者に対する憎しみであり、己に対するものでもあった。

しかし、次第に彼の表情は、あらゆる邪悪を見逃さぬ不動明王のように険しくも決意に溢れた男の顔へと変化していく。憎悪も悔恨も、思考にさえ介さねば強い原動力だ。

今、この場に立っている理由。

次代の当主を選定するまでの間、対魔忍への憎しみと怒りさえ押さえていれば、それなりの生活と立場を保証されていただろう。

紅との間には会話がなかった。かつてのように無邪気には行かなかったが、自らの立場というものを忘れさせるものであった。…………巧くすれば、いずれは小太郎とも。

その全てを捨て去ってでも、達成しなければならぬ目的がある。ただ一人残された二車家の正統後継者として、成し遂げなければならぬ事柄が、確かにあった。

正しいふうま一門の再興。それこそが、嘘偽りのない彼の願いであり、本心である。

「権左、地獄の底まで共にしろ」

「言われるまでもなく。この身は槍なれば主人の身を守り、敵を穿つが務め。錆付き折れ果てるまで、共にありましょう。それから、御母堂ですが…………」

「……………言った筈だ、捨て置け。どの道、連れてきたところで足手纏い以外の何者でもないし、鬱陶しいだけだからな」

「……よろしいので？ アサギは兎も角、己の感情も御せない者共に襲われかねませんが」

「ハッ！ 正義と誇りしかない対魔忍の脳無しどもより、アイツの方がずっと早く動くさ」

—
—
—
—
—

「……………はあ」

五車学園の屋上で水城 ゆきかぜは給水タンクの上で座りながら溜息を吐いていた。

普段の勝ち気さと負けず嫌いは失われ、傍目から見ても気落ちしているのが分かるほどだ。

ゆきかぜという少女はよく怒り、よく笑う。正の感情を隠さず、負の感情を押し殺す。

周囲からは明るい少女と思われているし、ゆきかぜ自身もそう感じていたのだが、今は違う。

授業を休んだ事のないゆきかぜは、今日はやる気も起きずにサボりを決め込んでいた。

自分の感情に正直で、自分の実力を信じている彼女は周囲を見下している節があるものの、それは強者が弱者を守らねばならないという真つ当な考えと高い自尊心から来るもので、魔族のそれとは少しばかり形が違う。

そして、より多くを守るためには実力を身に着けるのが最短距離と信じており、授業に対する取り組み姿勢はうぬぼれとは結びつかない

ほどに真面目。

そんなゆきかぜが授業をサボるなど、今頃教室では同級生達がザワついている事だろう。

「……私、小太兄の事、何にも知らなかったんだ」

両手で抱えていた膝に顔を埋め、ポツリと漏らした言葉が、ゆきかぜが気落ちしている何よりの原因であった。

小太郎との出会いは何時だったか。

少なくともゆきかぜが覚えているのは、幼い時分に母である不知火に連れられ、アサギの家へと挨拶に伺った時だ。

いずれは水城家を受け継ぐ立場となる故に、早い段階で顔合わせをしておくのが、対魔忍の通例であったからだ。

相手はあのアサギ。ゆきかぜが生まれる以前から闇の者と戦い続け、常に勝利してきた真正正銘の最強。

何時も外で遊び回り、人見知りなどしない幼いゆきかぜであっても緊張する相手であり、硬い表情と足取りに手を引いていた不知火も苦笑を漏らすほどだった。

扉を開けて現れたアサギに抱いた印象は、自分とは全く別の生き物というもの。

柔和な笑みで打ち消されていたが、醸し出される雰囲気と隠しきれない死の臭いに一層緊張したが、ゆきかぜの胸の内に沸いたのは素直な尊敬と喜びだ。

未熟な自分でさえ一目で分かるほど鍛え抜いた身体と技。死の臭いがこびり着いてはなれないほど潜り抜いた死線の多さ。自他共の厳しくも、正義と誇りを胸に無辜の人々の生活を守ってきた姿に、アサギの下でいざれ戦う幸運に身を震わせた。

正直な所、その場で興奮して何を言ったのかは覚えていない。

大人二人は笑っており、酷く恥ずかしい思いをしたのだから、きつと身の程を弁えない発言でもしたのだろう。

その後、何度か言葉を交わすとアサギは家の中に向かって誰かの名

を呼んでいた。

『小太郎……小太郎っ！』

『——何？』

『貴方も挨拶なさい。同い年だけど、貴方の方が少しだけお兄さんよ』
『……………』

呼ばれて現れた自分と同い年の少年に抱いた印象は、アサギと同じく自分とは全く別の生き物というもの。

但し、アサギに抱いた強さ故の畏敬であったが、少年に対して抱いたのは異質さ故の恐怖からであった。

アサギに言われるがまま、隣に立ってペコリと会釈をするだけで挨拶も何もなかったが、会釈をしている事自体、ゆきかぜには驚きだった。

まるで現実に穿たれた穴のような少年だった。

人の形をしている癖に、人間と相對している気がしない。これなら人形の方がまだ人に近い。

能面のような無表情に、深い黒瞳に宿っているのは虚無。まるで底のない深淵を覗き込むような気分させる異常性。

ゆきかぜは悲鳴を押し殺すのに必死だった。

見た目が人そのものであった故に、不気味さが増している。これで見ても怪物然としていたのなら、其処まで恐怖を生み出さなかつただろう。

何も知らないゆきかぜが異常性を理解できてしまうほど——
いや、何も知らないゆきかぜだからこそ、小太郎の精神性^{なかみ}が人のそれとは全く異なっていることを見抜いた。

無意識の内に、自身を守ってくれる母の影に隠れていたゆきかぜに、小太郎は相変わらずの無表情で品定めでもするかのような視線を送るばかり。

そんな彼の様子に呆れ返るアサギと憐憫の表情を浮かべる不知火に、ゆきかぜは素直に脱帽した。怪物を人と同様に扱うなど、怪物を

恐れていない証明に他ならない。

不躰な態度のままの小太郎に、アサギは頭にゲンコツを振り下ろす。

かなり良い音がした。少なくとも自分がやられれば泣いてしまう
と幼心に感じたが、小太郎はアサギを横目で眺めるばかり。

次に反応らしい反応を見せたのは、暫く経ってから。彼は大きく溜
息を吐くと一歩踏み出して片手を差し出した。

『よろこぶ』

差し伸ばされた手と言葉に、自分は何をされているのか分からな
かった。

脚にしがみついたまま硬直してしまったゆきかぜは、不知火に促さ
れてようやく前に出た。

人の形をしているだけの怪物が、人の真似事をしている事実に驚い
たものの、分かったのは一つだけ。己の異質さを理解して、彼なりに
歩み寄ろうとしていた事だ。

恐る恐る差し出された手を取れば、無機質な冷たさは皆無で、血の
通った暖かさがあつた。

それが、小太郎との出会いだ。

以後、アサギと不知火の提案もあり、顔を合わせる機会がよくあつ
た。

その度に、ゆきかぜは異常さの中に確かに存在する人間性を垣間見
て、次第に惹かれていった。

彼の品定めするような猜疑の視線は人をよく見ている裏返し。隠
し事はバレてしまうが気遣いに助けられた事は一度や二度ではない。

第一印象が最悪だったからこそ同じ人間なんだと知る過程は、ゆき
かぜを恋する乙女に変えてゆくには十分過ぎた。

彼の動作一つに目を引かれ、彼の言葉一つに一喜一憂する。

次第に自分と同じ顔をしている紅や凜子にも気付き、今の関係と相
成った。

自分よりも長い時を過ごしたアサギや災禍、天音、同じ人を好きになつた紅や凜子に思ひの強さで負けるつもりはなく、誰よりも小太郎を見てきたと自負していたゆきかぜであつたが——結局の所、それも一部分に過ぎなかつたのだ。

独立遊撃部隊に配属されるに当たつてアサギから聞かされた小太郎の事実を聞き、ゆきかぜが覚えたのは自身に対する落胆であつた。身を焦がすほどに、歯痛のように片時も忘れずに小太郎を思つていた筈なのに、真実には程遠い。真実を隠していた小太郎に対する怒りよりも見たい所だけを見ていただけの自分に何よりも失望した。

「——ううん、落ち込んでいる暇なんかない」

考え方を変えよう、と落ち込んだ気持ちを中心に転押し上げる。

恋した相手を見誤つていた愚かな過去は変えられない。ならばせめて、これから歩む未来は別のものにしようと誓う。

見たいところだけを見て納得などしない。知らないところをそのままにせずに問い続ける。疑われていると邪推されようが関係はない。小太郎のあるがままを見せて貰おう。あるがままの彼がどのようなものであつたとしても、嫌いになることだけはなないと自信があるから。

給水タンクの上で立ち上がり、パンと両頬を打つ。それだけで気持ちちは切り替わり、己の情けなさなどどうでもよくなった。

単純だと笑いたければ笑えばいい。それでもなお、これは覚悟だと胸を張るだけ。その意地を最後まで張り続ける。

「此処に居たか、ゆきかぜ」

乙女らしい覚悟を決めたゆきかぜに声を掛けたのは屋上へとやってきた凜子であり、その瞳にはゆきかぜに勝るとも劣らない覚悟の光を宿していた。

五車学園の廊下を秋山 凜子は眉間に皺を寄せながら歩いていた。普段の冷静沈着さと優しさは失われ、傍目から見ても腹を立てている。

凜子という少女は生来の人当たりの良さ故に気づき難いが、極力感情を表に出さない。

周囲からは厳しくも優しい少女と思われているし、凜子自身は無我を一つの境地としている逸刀流の教えに忠実であったが、今は違う。授業中に廊下を移動しているにも拘わらず、後輩同窓先輩教師に至るまで誰も彼女に声を掛けないのは、誰の目から見ても明らかかなほど彼女が憤っていたからだ。

今の彼女は般若のような威圧感を発しており、事実として朝から誰にも声を掛けられていない。新世代の対魔忍として注目を集める彼女が怒り心頭であれば、恐ろしさは誰でも抱こう。

授業をサボりながらも止められないのはそういう理由であり、関係のない第三者はきつと任務だと己を納得させて目を逸らし、好き放題に憶測の言葉を交わしていた。

そうした身勝手な憶測を重ねる視線と言葉に凜子は一切気にかげず、更に憤りを募らせる。

（小太郎の薄情者。馬鹿め……馬鹿馬鹿馬鹿ッ！）

自身でも理不尽で見当違いだと理解できているのに納得できない現実に、凜子が憤る何よりの原因があった。

小太郎との出会いは何時だったか。

少なくとも凜子が覚えているのは、自宅の道場で門下生の中に混じりながら稽古に一切参加しない彼を見つけた時だった。

今は亡き両親も当時は健在であり、夫婦二人三脚で対魔忍に伝わる剣術の主流、逸刀流の元締めとして門下の指導に当たっており、いずれ秋山家を受け継ぐ立場となる故に、幼い頃から稽古に参加していた。

アサギもまた逸刀流を修めており、凜子の両親とも面識があった。

凜子には何も聞かされていなかったものの、現役の当主に対する顔合わせ、多くの対魔忍に対する顔見せ、更には一族から離されて環境の変わった小太郎の気晴らしを含めてアサギが道場へと送り込み、凜子の両親は快諾した。

正直な所、彼の境遇に対する両親の同情や憐憫に反比例して、小太郎への門下生の心証は決していいものではなかった。

自分達が必死に鍛錬を積んでいる中、道場の隅で正座のまま鍛錬を眺めているだけ。鍛錬の辛さから不満も募れば、同年代が必死になっ
ていれば怠惰に見えよう。

そして、凜子自身の心証も、最悪に近いものだった。

飛び抜けた剣の才能を生まれ持った凜子が抱いた印象は、兎に角不気味さしか感じなかった。

日がな一日、微動だにせず道場の中で鍛錬の様子を眺めている彼の行為は、凜子にしてみれば観察に他ならなかった。

ただ見ているのではない、確かに観ている。ただ聞いているのではない、確かに聴いている。

道場の中に居る人間全ての一挙一投足に注意を払い、神経を擦り減らし、他でもない敵として入念な観察をしていたのだ。

凜子の目には、それは見取り稽古であり、敵の情報を入手する視察にしか映らず、ただひたすらに不気味であった。

まるで昆虫のような機能の権化。

ただそれだけの機能しか持たないかのような、人間として余りに欠落しているものが多過ぎる姿は奇異を通り越して異常だ。

そもそも、何故そんな真似をする必要があるのか理解できない。門下生でないにせよ、将来は共に戦う仲間になる筈なのに。

それから一週間後。

門下生は不満を募らせ、凜子が小太郎の視線に気味と居心地の悪さに耐えられなくなる直前に、小太郎は立ち上がり、皆の前でこう告げた。

『帰ります。この技術はボクの才能じゃあ習得できそうもない——
—それに、こんな方法じゃ、ボクには手緩てぬるすぎるから』

その一言に、門下生の不満は爆発した。

今の今まで見ているばかりで何もしてこなかった小僧がどの口で。

自身の腕にも、逸刀流に対しても誇りを持つ門下生達が、努力を嘲笑われるような一言を見逃せる筈もなく。

怒号が飛び交い、ある者などは木刀を片手に襲い掛かろうとしたほどであった。

父はそんな中、襲い掛かった門下生を一喝して止め、この有様に逆に精神面に対する教育の甘さを認めた上で自らの不徳と詫びた。

そして、問うた。年端も行かぬ小太郎を対等の存在として、何が足りなかったのかと教えを請うように。

『だって、誰も死んでない。稽古が終わった後はへらへら笑っている。呼吸が出来なくなるまで、心臓が止まるまでやらなくちゃ意味がない。死んだとしても許しを与えずに鍛えるべきだ』

『いや、それは——』

『何も違わない。敵を殺す技術を覚えているのに、誰も殺される覚悟をしていない。誰も殺されるなんて夢にも思っっちゃいない。才能のないオレでは、そんなやり方を続けても死ぬまでの間に大成できない

し、殺される方が早いので』

父が続けようとした言葉を遮り、極当たり前のように余りにも苛烈な答えを返す。

彼の言い分は間違っていた。およそ武術と呼ばれるものは弱者が身を護るために築き、発達した技術であり、根底にあるのはより長く生きるためという生き物として当然の願いだ。

敵を殺す技術であるのは認めるが、それはあくまで過程であって目的は護身。苛烈過ぎる鍛錬は逆に肉体を破壊して寿命をすり減らし、護身の目的から外れてしまう。

逸刀流の開祖から連綿と続いてきた教えを説こうとした父であったが、結局は何も言わずに小太郎を道場の外へと送っていった。

あらゆる歯痒さを押し殺しながらも、或る意味においては正しいと認めた故だろう。結局、その出来事を堺に小太郎は道場を訪れる事はなくなった。

凜子は素直に安堵した。

父や逸刀流の教えに反した彼は間違っている。従えないのなら出ていくべきだ。彼が訪れてから道場の雰囲気は悪くなる一方だった。

神聖な道場が彼の存在に侵される事もない。もう二度と会う事もない。会ったとしても会釈するだけの関係でいい。

嫌いではないが、好きでもない。ただひたすらに不気味な彼とその程度の関係で居られると分かれば安堵の一つもしよう。しかし、凜子の心に一つの棘を残したのは確かであった。

それから一切接触のなかった二人であったが、数カ月後に再会した。

凜子は日増しに厳しくなっていく両親の指導に加え、自主訓練として始めた走り込みの最中に脚を挫いた。

道の端で道着姿のまま蹲って痛みを堪えていたが、痛みは一向に引かずに途方に暮れていたのだが、其処に通りがかったのが小太郎だ。

両手に包帯を巻き、薄汚れた格好は浮浪者のようだった。

当時、既に対魔忍の隊長であったアサギの家で生活をしている筈の

彼が、どうしてそのようなという気持ちはあつたものの、それ以上に、こんな奴にこんなところを見られるなんて、という羞恥と屈辱の方が強く、とてもではないが助けを求める気分にはならない。

何よりも、自主訓練を始めたのは元を正せば小太郎が凧子の心に残した棘にこそあつた。道場での訓練が手緩いなどと言われて、次代の当主として引くに引けない。無理のない範囲で訓練を増やすのも無理はない。

当時の凧子は小太郎に対して負の感情しか持つていない故に助けを求めるはずもなく、小太郎も凧子に対して無関心であつた故にその場ですれ違うだけに終わるかと思われた。

しかし、意外な事に小太郎は足を止めると凧子に声を掛けてきた。印象の違いから驚きこそしたが、子供らしい意固地さから差し出された手を払い除けた。

彼にとて感情はある。此処まですれば捨て置いて去っていく。そう踏んでいた凧子の考えは淡くも打ち砕かれる事となる。

小太郎は助けもせず、かと言って去りもせず、黙つてその場に立つて眺めて続けているばかり。

彼が何をしたいのか全く理解できない凧子はさっさと行けと言うばかりであつたが、日が暮れても微動だにしない小太郎に遂には折れ、盛大な溜息と共に助けを求める運びとなる。

肩を借りても歩けない様子に、小太郎は黙つて凧子を背負い、平然と歩き出した。

彼の背中では助けられておいて何だが耐え難かつた。ただでさえ嫌つている相手だというのに、薄汚れた彼の背中は獣の臭いがした。明らかに風呂にも入っていないければ、着替えもしていない。汗もそのまま、もしかしたら排泄物すら垂れ流していたかもしれない。

不潔で不快な相手から逃げられず、それでもなお助けられている気まずさから、気がつけば凧子は口を開いて何処で何をやっていたのか問うていた。

『鍛錬だ』

返ってきたのは、短い一言のみ。

唾然とする他なかった。この姿、この状態を見れば分かる。最低でも一週間、人間らしい生活の一切を遮り、鍛錬にのみ打ち込んでいたのだと分かる。

あの時、道場で放った一言は揶揄や嘲りではなく、小太郎にとっては何事もない事実であり、本心だった。

食事でも睡眠も排泄すらも頓着せず、下手を打てば死にかねないレベルに身体を虐め抜いてきたのだ。その証拠に、肩に置いた手から伝わる感触は、同年代の誰よりも、凜子以上に鍛え上げられていた。

『それから、お前は右脚を前に出すときに重心の移動が甘くなるから、早目に矯正しておいた方がいいんじゃない？ だからこういうことになる』

凜子自身も、師範代である父親ですらも見過ごしていた癖を指摘した。

恐らくは、道場での稽古を眺めていた時に気付いていたのだろう。他者に対して不気味なほどの無関心さを維持しながらも、意外なほどよく見ている彼に驚愕と感心と呆然とが混ざりあつた妙な気持ちになったのをよく覚えている。

それが、小太郎との出会いだ。

以後、凜子は向上心から小太郎の観察眼を頼るようになった。

その度に、小太郎は珍しく嫌そうな顔をしていたものの、凜子の熱意に押し切られる形で助言を与えた。

助言の効果は凄まじく、自己が強くなっていく過程の中で、信頼を抱くようになり、やがて信頼は恋心へと変わっていく。

第一印象が最悪だったからこそ頼りになる存在なんだと知る過程は、凜子を恋する乙女に変えてゆくには十分過ぎた。

彼の動作一つに目を引かれ、彼の言葉一つに一喜一憂する。

次第に自分と同じ顔をしている紅やゆきかぜにも気付き、今の関係

と相成った。

自分よりも長い時を過ごしたアサギや災禍、天音、同じ人を好きになった紅やゆきかぜに思いの強さで負けるつもりはなく、誰よりも小太郎を見てきたと自負していた凜子であったが——結局の所、それも一部分に過ぎなかったのだ。

独立遊撃部隊に配属されるに当たってアサギから聞かされた小太郎の事実を聞き、凜子が覚えたのは自身に対する怒りであった。

身を焦がすほどに、歯痛のように片時も忘れずに小太郎を思っていた筈なのに、真実には程遠い。真実を隠していた小太郎に対する怒りよりも見たい所だけを見ていただけの自分に何よりも腹を立てた。

「——今度は、見落とさないからな」

考え方を変え、怒りの感情が高ぶっていくのを抑える。

恋した相手を見誤っていた愚かな過去は変えられない。ならばせめて、次こそは見落とすまいと誓う。

見たいところだけを見て納得などしない。知らないところをそのままにせずに問い続ける。疑われていると邪推されようが関係はない。小太郎のあるがままを見せて貰おう。あるがままの彼がどのようなものであったとしても、嫌いになることだけはないと自信があるから。

屋上へと続く階段を登りきり、続いて扉を開ける。雲一つない青空を目にした時には、己に対する怒りなどどうでもよくなった。

単純だと笑いたければ笑えばいい。それでもなお、これは覚悟だと胸を張るだけ。その意地を最後まで張り続ける。

「此処に居たか、ゆきかぜ」

乙女らしい覚悟を決めた凜子が声を掛けたのは給水タンクの上に立ったゆきかぜであり、その瞳には凜子に勝るとも劣らない覚悟の光を宿していた。

「よつ、と。凜子先輩、紅先輩は……?」

「声を掛けておいた。もう直ぐ来るさ」

「そっかあ、紅先輩も腹を括ってくれたんですね」

「いや、アレはどちらかと言えば、私達がそう口にしたから流されるままに、と言ったところではないか?」

給水タンクから一息で飛び降りたゆきかぜは、猫のような身軽さで音もなく凜子の目の前に着地すると、待ちきれないとばかりに紅の名を口にして到着を今か今かと待ち侘びている。

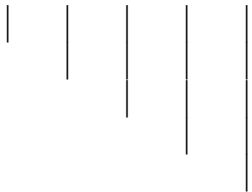
凜子はそんなゆきかぜを宥めながら、当人も隠しきれない期待と不安から右手で逆の二の腕を掴んでいた。

紅を加え、二人は一体何をするつもりなのか。

三人の共通点を考えれば、小太郎に関することだけは間違いはない。

「二人とも、待たせたな」

そして、最後に現れた紅の瞳にも、二人と同様同質の光が宿っているのだった。



『若様、二車家の奥方と侍女の身柄を確保しました』

「ご苦労さん。天音は馬鹿やらかさなかつただろうな」

『天音が馬鹿をやるのは若様の前だけですよ。予定通り、二人はアサギに……』』

「ああ。骸佐の事だ、二人には何も伝えちゃいまい。頭の湯だった連中が手を出す前に安全を確保したかっただけ、手元に置いておく意味もない。アサギには二人を匿うように伝えてある。そのまま受け渡ししてくれ」

『承知致しました』

五車町の外れに小太郎が住まう一軒家がある。

秘書である災禍、執事である天音から引き離されていた彼には、ふうまの資産管理、運用も己の手で行わなければならぬものであり、其処から出した金銭を使って購入した。

とても学生の身分で購入できる規模の家ではないが、弾正が持ち出せずに残した資産は莫大であり、十年前の裏切り工作に乗った家に分割して渡しても十分過ぎる額が残っている。

己の手元に残った資産を元手に、アサギの名を勝手に借りて株に手を出し、既に人生を三回は遊んで暮らせる金を手にしていた。尤も、そうして得た金は使用する銃と弾丸、爆薬の購入によって消えていってしまうが。

家の居間は大きく、床のフローリングはワックス掛けがされて壁や天井にはシミ一つない。

数ヶ月に一度接触が許されている災禍と天音が家の手入れをしているのだが、調度品は極端に少ない。

居間の中央にはローテーブルが一つ、周囲三方囲むようにソファセットが、空いた一方の先にテレビがあるだけで、当人の趣味が反映される小物や嗜好品の類は一切ない。

他の部屋も同様で、家の大きさに反して生活感が欠如して寒々しさすらあったが、何時でも引き払える事を前提としている故だろう。

災禍の報告が終わると同時に小型の通信機をテーブルの上に投げ捨てた。

本来であれば現状二車家当主の役割を背負うべきは骸佐の母親で

あるが、十年前の内乱で夫と骸佐以外の子を失くし、正気を失って久しい。

今回の反乱においても足手纏いになると判断され、置いていかれるのは目に見えていた。

そうなれば、厄介なのは一部の対魔忍による正義感と誇りの暴走だ。尤も、小太郎にしてみれば単なる八つ当たりであるが。

反乱の首謀者の母親が、反乱を起こされた側の本拠地に残っている。であれば、首謀者に対する悪感情はそのまま母親に向けられるであろうし、先走った者が肅清に走りかねない。

肅清も当然と言えば当然であるが、現代倫理とアサギが旨とする理想からは外れている。

何より母親にせよ、侍女にせよ、何の役にも立ちはしない。殺したところで意味のない者を殺すのは合理性に欠いており、生かしておいた方がまだ使い途がある。

言わば、骸佐に対する釘であり軛だ。誰かの保護がなければ生きていけない母親ならば、骸佐の性格から保護しておいた方が得だろう。

(あの覚悟の決まりっぷりを考えれば方に一つに過ぎないが、ゼロになるよか幾分マシだな)

母親が生きていれば骸佐が止まる可能性も多少は残るが、死んでしまえば骸佐にブレーキは消えてなくなり、止まる理由はなくなる。

情による判断ではなく、あくまでも合理と理論の上での判断だ。其処に正気を失った母親に対する同情は欠片もなかった。

取り敢えずは一段落ちついた小太郎は、机の上に広げられた古い書物や巻物に手を伸ばす。

元々は弾正が溜め込んでいた書物であり、現在は災禍が管理を行っている。

独立遊撃部隊の立ち上げに辺り、アサギは小太郎と災禍、天音の接触禁止を解除させていたため、昼間の内に持ってこさせたものだ。

（独立遊撃部隊立ち上げに当たって最大のネックは紅、ゆきかぜ、凜子の実戦不足と忍法の扱いの甘さ。災禍と天音はまだ使う気も起きるが、あの三人に関しちや使う気にもならん）

才能のある三人の事、今後の伸び代に関しては学生の中でも最大の期待値を誇る。

問題は現状だ。とてもではないが手足としてすら使えない、扱う気にならない。これまで自分が熟してきた任務ですら不可能だろうし、独立遊撃部隊というアサギの面倒案件丸投げ課では携わる任務の難易度は跳ね上がる。

其処で三人に求めるのは、柔軟な思考と限界の把握、忍法の応用範囲向上だ。

才能だけならば三人はアサギを超えている。

ヴァンパイアハーフの身体能力と邪眼、風遁。更には幻庵仕込みの心願寺流を修めた紅。

既に固有の武器を与えられ、高位魔族ですらも焼き払える火力を持つゆきかぜ。

空遁の術と逸刀流の免許皆伝の腕前に加え、現状でも忍法の応用力が最も高い凜子。

これ以上ない三人ではあるが、問題は戦いの何たるかを知らない事だ。

魔族、米連との暗闘において、あらゆる行為は許容される。卑怯卑劣などという思考がそもそも愚かしく、単純な勝ち負けではなく任務達成こそが勝利条件。

自身に何が出来て何が出来ないのか、自身の限界は何処なのか、限界を超えてしまった場合の判断は如何にすべきかを学んで貰わねば、とてもではないが実戦には連れていけない。才能や実力云々の話ではなく、扱われる者として最低限必要な思考なのだ。

そして、戦いに特化し過ぎた能力を、他の方向にも伸ばす。

幸い、才能だけならばピカ一の三人だ。キャパシティも他の者達とは比べ物にならず、使い方さえ提示してやれば必ず実現するだろう。

(そのために、まずはオレが三人の忍法の使い方を学ばないとな。弾正もちったあ役に立つ。本人じゃなくて、本人が蒐集していたものだな)

持つてこさせた書物は風遁、雷遁、空遁に関して記述された書物。幸い、風遁、雷遁は使い手も多く、使用方法は多岐に渡る。空遁は使い手が少ないものの、空間を操る特性上、他の術に比べて応報範囲は極めて高い。

戦闘のみならず、補助型の使い方——潜入や情報収集は勿論の事、破壊工作にも撤退の手段としても使用できる。

(紅は風遁で情報収集、ゆきかぜは破壊工作、凜子は何でもござれ。凜子の負担はデカくなるが、能力のレアリティ上仕方ない——
こんな時間に何だよ)

独立遊撃部隊の運用を考えていた小太郎であったが、家のチャイムが鳴るよりも早く近づいてきた人間の気配を察した。

小太郎宅周辺には他の邸宅はなく、近づいてくる人間は皆、小太郎に用があると見て間違いない。小太郎の命を狙ってか、身を案じてかは別として。

コルトSAAに手を掛けたが、直ぐに書物へと視線を落とした。

気配を殺していない以上は暗殺者ではない。ならば、誰か物好きが近づいてきているのだろうか、約束もしていない相手に応対する必要性もない。

早々に居留守を決めた小太郎であるが、次の瞬間、目が丸くなった。

——は？ いや、ガチャンて)

明らかに玄関の鍵を外す音がした。
あり得ない。この家の鍵は特別性だ。

家と周辺には魔族の魔界技術、米連の最新技術による防衛機構。更には対魔忍の昔ながらな罫がふんだんに仕掛けてある。

特に前者二つに関しては鍵自体に敵味方識別を行う信号装置が取り付けられているため、アサギに災禍、天音にしか渡していない。

しかし、アサギにせよ、災禍にせよ、天音にせよ、この家に来る際は監視を警戒して、小太郎に連絡を入れる手筈になっていた。

（あの三人、鍵を落とした——わけねえか。いや、この気配は、マズいいっ！）

小太郎にしてみれば気の緩みきった三人であるが、鍵の重要性を理解していない訳でも、鍵を落として気が付かないほど間抜けでもない。

何よりも、よく知っている気配に何があったのかを察し、慌ててテレビのリモコンに偽装した防衛機構のスイッチを押した。

アサギにすら明かしていない事だが、この家の防衛機構には二種類ある。敵味方識別可能なものと相手が誰であれ、有無を言わずに起動するものだ。だからこそ、先の三人には必ず連絡を入れておくようにしてあるのだ。

間一髪のところでもOFFになったが侵入者は知る由もなく、勝手に知ったる我が家のように居間に向かってきている。

最早、言葉を掛ける気にもならない。よく知った気配であったが、まさか此処までするものとは思わなかった。

「小太郎は居るなっ！」

「ああ、こんばんは御三方。お帰りは今来た道だ。おやすみなさい」

居間の襖を吹き飛ばさんばかりの勢いで開け放ったのは幼馴染の紅であり、その後ろにはゆきかぜと凜子の姿もある。

天音は鍵自体を小太郎からの信頼の証として絶対に渡さないだろうが、アサギか、災禍ならば事情を話し、信頼に足ると判断すれば渡

すに違いない。

ひしひしと押し寄せる嫌な予感を受け流し、平静な態度でお帰りを願う。

だが、三人は素っ気ない態度すらも気にせず、何か意を決したように動かない。

「じゃあ、三人は好きなようにしてくれ。オレは寝る」

「待って。逃げないでよ、小太郎」

頑として動かない三人に業を煮やし、小太郎はソファから立ち上がって寝室へと向かおうとしたが、ゆきかぜに遮られる。

彼女の意思は強く固く、肩を掴んで退かそうとした小太郎ですらもたじろいだほどだ。

暫くの間、睨み合いにも似た膠着が続いたものの、折れたのは小太郎の方だった。

下手を打った。機を逸した。良くも悪くも女としての三人を舐めていたと認め、観念してソファへと戻って腰を下ろす。

好きにしてくれ、と言わんばかりの態度に三人は目を見合わせて頷くと、テーブルを挟んで真正面に立つ。

「小太郎、私はお前が好きだった！ 私をお前のものにしてくれっ！」

余りにも唐突な告白の台詞に、小太郎は啞然とした。

いや、紅の好意には気付いていた。無論、ゆきかぜと凜子のそれだ。世間一般で言うところの恋心に等しいものであることも分かっている。

だからこそ、日常の中では素っ気ない態度を取り続けてきた。下手に距離を詰められても面倒だった。

彼女達の恋心を利用し、自分に利益を齎す手もあっただろう。

だが、対魔忍の倫理観は兎も角として、価値観や恋愛観と言ったものは一般のそれと変化はない。

恋心を利用する下衆な人間なぞ、何処の世界でも敬遠されがちで返って自分の首を閉めかねない。一般的な価値観と恋愛観を想定した上で、不利益の方が大きいと判断しただけのこと。

紅には幻庵からの頼みがあった。ゆきかぜと凜子は顔見知りだっただけ。

別段、特別な感情など抱いていない。単なる幼馴染、それが小太郎の三人に対する結論だ。

困っていたら助ける、誰かと同時に困っていたら優先する程度で、いないのならないで構わない。彼女達の恋心には釣り合わない軽いものだった。

しかし、だからと言って、過程から何からすつとぼしていきなり告白されては、啞然とするだろう。

どうだ、やってやったぞ、と言わんばかりの表情で背後の二人を振り返ってみた紅であったが、ゆきかぜは頭を抱え、凜子は片手で顔を覆っていた。二人にとってもこれは予想外であったようだ。

「そっかあ、紅先輩って、テンパっててもあんまり表情に出ないんだ」「お前にしては妙に冷静だと思っていたんだが、そういう事か」

よくよく見れば、紅の目はぐるぐると回っていて、明らかに冷静さから掛け離れていた。

紅の思わぬポンコツぶりに、出鼻を挫かれたゆきかぜと凜子は何とも言えない表情だった。

「……………うう」

「まあ、取り敢えずは仕切り直しだ」

「小太兄、ちゃんと話を聞いてね」

「お前らね、そういうところだぞ。打ち合わせくらいしてこいよ。どうすんだこの空気」

その後、テンパって真っ赤になった紅を落ち着かせ、それぞれ空い

たソファに腰を下ろした。

紅は耳まで真っ赤にして俯き、涙目になっている。これ以上の説明は無理と判断されても仕方がない。

「オレとしては、このまま牽制し合ってくれているのが理想だったんだがな」

「それは分かっているが、我々としてはそうもいかなかった」

「独立遊撃部隊として戦う以上、任務も戦いもこれまでよりも難しいものになっちゃうもん。そうだったら……」

対魔忍は魔族や米連に対抗すべく戦うために死亡率は高い。

また敵の手に落ちた場合、悲惨な事態に陥る可能性もまた高い。

アサギが良い例だ。

闇の者がアサギに抱く恐怖心は並のものではなく、噂を耳にしただけでその日の裏取引を中止にするほどであり、正に抑止力と呼ぶには十分なレベル。

だからこそカオスアリーナ、東京キングダムにおける罫で敵の手に落ち、無力化された際に、彼女の身に何が起きたのか。

人としての尊厳を奪い尽くし、これまでの鬱憤を晴らす如く襲い掛かる陵辱と恥辱の数々。

並の対魔忍ならば三日と持たずに廃人となるだろう地獄を、アサギはそれでも潜り抜けて未だに現役を貫いている。

女性対魔忍の宿命として、心無く、欲望の抑え方も知らない下衆共に身体を穢される可能性は常に存在している。

それだけならばまだマシな方だ。闇に飲み込まれ、そのまま行方知れずとなった者が何人いるか。己の精神を守るため、墮落の果てにこれまでの自分を捨てて魔族側に寝返る者も何人いるか。

任務の難易度が上がれば上がるほどに、そういった側に陥る可能性も増していく。

「ならせめて、初めては小太兄がいい」

「……………だったら、告白する必要はないだろうが」

「ふふふ、笑わせないでよ。小太兄だって私達の事を見ているけど、私達だって小太兄の事を見ているんだから」

「お前は、やり始めると本気になるからな。告白されると浮気に走るよりも本気になるタイプだ」

「知ったような口を聞くじゃないか」

「あれ？ 違ってた？」

「……………合つて、ます」

ゆきかぜと凜子の言葉は正鵠を射ていた。

小太郎自身そう感じていたからこそ、三人とは距離を取って置きたかったのだ。

今も紅の告白は嬉しくはある。他人の好意は素直に嬉しい。だが、煩わしく鬱陶しい。

他者からの愛を、恋を受け取る事で、これまで迷わずに選んでいた選択肢が選べなくなる。合理と理論を優先して選択できなくなるのは苦痛以外の何者でもない。

「それに、小太兄にとっても悪くないでしょ？ 男とか女とかの話じゃなく、これから再興するふうまの当主として」

「まあ、一番手っ取り早い手じゃあるがな」

ふうま一門の再興は、単にかつて弾正が率いていた頃に戻すだけではダメだ。

老人達や現当主達の嫉妬を考えれば、組織の最大閥にまで成長し、人脈も人材も他とは一線を画したものにしておかないと、どのような妨害や介入を招くことか。

ふうま一門の規模を大きくする手っ取り早い手段としては、他家の当主候補との婚姻だろう。対魔忍は能力主義、何も男ばかりが当主になるわけではない。

そうして一門の一員として迎えた上で当主を取り込み、家も一族も

まるごと取り込んでしまえばいい。

無論、下からの反発はあるだろうが、其処で重要となってくるのが、対魔忍全体の一般に即していながらも何処かズレた価値観にある。

家に決められた許嫁という者は対魔忍の世界にも存在する。するにはするのだが、現代の自由恋愛を是とする風潮は流れ込んできており、子の気持ちを優先して親の思惑が御破算となる展開は尙あるのだ。

その上で一夫多妻も認められている奇妙な風潮であるが、かつての忍の価値観とこれからの日本人としての価値観が半端に混ざった結果であろう。

当主が自由恋愛の末に、余所の家の嫁になると言ってしまうえば、前述の風潮や価値観から強く反発に出られない。

況してやふうま一門に名を連ねるだけで、実質的な家の運営にまで首を突っ込まねば、多くの離反を招く事もない。

詭弁欺瞞も甚だしいが、最悪嫁に取ってしまうえば、両家には関係が生じる。後は小太郎の口八丁手八丁。彼の得意とする分野での暗躍があればどうとでもなってしまう。

自分達の次期当主という立場さえ、小太郎との恋を成就させるための手札として利用する女としての業の深さに、小太郎でさえ舌を巻いた。

目を見れば分かる。本当に、心の底から何でも利用する腹積りだ。三人の覚悟の決め方に引くほどである。

「勿論、男と女だから繋がって一つになっちゃえばいいってのもあるよ？　けど、私達はそれくらい小太兄の事が好きだから。何を犠牲にしても、売女だとかアバズレだとかビッチだとか罵られたって気にならない」

「この場合、罵られるのはオレの方なんじゃないですかねえ。家のために女を唆した下衆野郎ってよお」

「なら安心だな。お前は罵詈雑言など気にもしない。私達については、どれだけ仲睦まじいかを見せつけなければいいだけだ」

してやったりと笑うゆきかぜと凜子に、小太郎は久方振りに本気で頭を抱えた。

控え目な女よりも、強引で我を通す女の方が恐ろしい。自身の母親を筆頭に、アサギや災禍、天音といって自身の周囲にいる女は皆そうで嫌でも痛感する。

しかし、小太郎も腹を括らざるを得なかった。

ゆきかぜ達が本気ならば、小太郎もまた本気で答えねば嘘だ。彼女達を感じていたように、ふうま 小太郎という人間は元よりそのような形である。

「分かった、オレの負けだ。お前達が良いというなら、オレは素直に利用させて貰うさ。だが、一つだけ約束してくれ」

「……………何だ？」

「もし、オレよりも好きな奴が出来たら、迷わずそっちに行く事。オレと居るよりも幸せに慣れる奴は他にも沢山いる筈だからな」

ようやく羞恥から戻ってきた紅の問いに、小太郎は笑いながら答える。

こうまで一途に己を好きだと嘯く女が不幸になるのは忍びない。とてもではないが、己では真つ当な男女の幸せというものが築けるとは思えない。ならば、己以上の男が居るのであれば、そちらを選んで欲しい。

最早、約束というよりも懇願に近かった。

己に出来る事は少なく、やらねばならない事は多い。その際に、犠牲となるのは三人との日常だろう。

全うな恋人同士が行う逢瀬などまともに出来るかどうか。女としての役割を求めればかりで、女としての幸せを満たせてやれるとは思えないからこそ口にした言葉だった。

「ない。それはないぞ、小太郎」

「そうだな。私達はお前とならどんなに不幸でも構わないのだからな」

「んー、まあ、いいじゃないですか。小太兄がそういうなら約束してあげましょうよ。だから、小太兄も一つだけ約束して」

「……何だ？」

「小太兄も、何時までも私達がメロメロになっちゃう、私達が好きになつた小太兄でいるって」

につこりと何の憂いもなく笑うゆきかぜに、紅と凜子はそれはいいと続いて笑つた。

小太郎は完全に両手を上げた。

此処まで言われては仕方がない。腹を括るには十分過ぎる。今ので、彼自身も本気になつた。

「負けたよ。オレの完敗だな、これは。でも、勘違いはするなよ」

「何が……？」

「オレがお前等を抱くのは一門の再興だの、利用するためって小難しい話だからじゃない。こんな良い女、手を出さなきゃ損って単純な理由だ。惚れた女に手を出さない理由もないからな」

忍び寄る苦勞の足音を敏感に感じ取ってこそその苦勞人。但し、苦勞を回避できる訳ではない

部隊の結成から二週間。

徐々にはあるものの、ふうま当主を中心とした独立遊撃部隊の存在は、対魔忍内部において噂になる程度にはなっていた。

部隊が関わった案件は今のところ二件。

闇の市場に流通し始めた麻薬の流通ルート及び売買組織の壊滅。

日本が押収し、秘匿していた魔界技術を中華連合に流出させようとした政治家集団の暗殺。

数にすれば僅か二つであるが、分類としては大仕事だろう。

彼等以外の者に任せれば、どれだけの人数が必要になったか。少なくとも手練れの上忍数名が、中忍・下忍からなる部隊を率いる形になっていたのは、疑う余地はない。

それを僅か六名の部隊で成功させた。噂にならぬ方がどうかしているだろう。

尤も、噂の中心となっているのは紅、ゆきかぜ、凜子、災禍、天音の五名ばかり。

元より才能は周囲に知れ渡っており、災禍と天音を除く三名は新人として期待と恐怖の視線を向けられていた。

災禍にせよ天音にせよ、かつてふうま当主であった弾正が見出し、弾正を強力に補佐していた。二人が寝返らねば、ふうまの内乱はもつと長引いていたと言われる程だ。

戦闘特化の風潮が強い対魔忍では、目を向けられるのは当然、彼女達だ。

実際は、小太郎が情報を収集し、小太郎が情報を精査し、小太郎が作戦を立案し、小太郎が彼女達に指示を下し、災禍がサポートに徹し、四人はその通りに動いただけ。後始末も小太郎と災禍である。

では、その一部（音声のみ）をご覧こう。

『くつ、敵が多いな……』

『小太兄い、だから言ったのに』

『紅、ゆきかぜ、泣き言を抜かすなっ！ 若の命令だぞっ！』

『いや、これはどう考えても私達が困だろう……』

『まあ、そうだな。これだけ敵が一カ所に密集している上に、此方には空遁使いがいる。となれば——』

『おい、お前ら、まだ生きてるか？ 今、助けに行くからな。地対地ミサイルと一緒に！』

『流石です、若あつ!!』

『『……は?』』

『………凜子、空間跳躍の準備をしろ。お前が失敗すれば我々は全員死ぬ』

『『……え?』』

『ぶーん、どーん!!』↑タンクローリーで倉庫の壁をぶち破り、敵を轢殺しながら。

『『えー!』』

『お、全員無事じゃーん！ 外見てきたけど、この倉庫に敵はほぼほぼ集まってる』

『流石は若っ！ 結構なお手前でっ！』

『オレは何もしてねーよ。囧にほいほい釣られる相手がバカ過ぎるだけだ。ほら、凜子、空間跳躍だ。何、緊張しなくていい。失敗しても、ガソリンと爆弾で爆死するだけだから（ニッコリ）』

『は、はわわー!』

こんな感じで、非常に雑であった。

任務自体がそれほどの難易度ではなく、また任務の内容も戦闘と暗

殺のみ、という事もあるが、これは小太郎自身の思想と心持ちが多分に含まれた結果だ。

小太郎は作戦自体を複雑にする事を好まず、対魔忍は人員の少なさ故に各人が短い期間で任務に挑まなければならず、時間的な猶予が非常に少ない場合が大半である。

作戦を緻密かつ複雑にすればするほどに、たった一つのミス、たった一つの予定外が全体に致命的な亀裂を奔らせ、そもそも時間が少なすぎて一々そんな真似をしていられない。

ならば、作戦内容は目標と大筋の流れだけを決めておき、後は状況に応じてその場で判断していく他ない。

その分、情報収集や必要な道具の準備は入念に、作戦決行の決断は慎重に、尋常ならざる心血を注ぐ。

結局のところ、小太郎にとって作戦の成否は単なる結果。作戦に至るまでの準備こそ、彼が最も重要視している事柄故に、作戦自体は雑でも構わないのだ。

そして、彼が標的に向ける心持ちは虫に向けるそれに似る。

無論、油断はしない。侮りもしない。恐れ、疑り、正当な評価を下して、適切な対応をする。

しかし、其処までは心持ちや心境というよりは、これまで彼が学び、魂に刻んできた条件反射のようなもの。彼が今まで生きてこれた最大の理由であり、最大の武器でもあるが———実際のところ、標的に対して興味はないのだ。

対魔忍も、魔族も、米連も、彼にとって結局は同じ穴の貉。暴力を生業とし、暴力でしか意見を押し通せない間抜けども。自分も同じ貉である故に、声高には叫べないものの、結論としてはそんなもので、相手をしていたら馬鹿を見る。

だから虫の如く無造作に殺す。

蚊や蛾、蠅にゴキブリ、蜘蛛に。大半の人間は彼等に興味なんてものは持たず、さしたる憎しみも怒りも持たない。けれど不思議な事に、大半の人間は一度でも目に映ると実害なぞ殆どない彼等を遮二無二なって殺そうとする。何となく気味が悪い。何となく鬱陶しい。

そんな理由で、だ。

小太郎も似たようなものだ。興味関心はなく、憎くもなければ怒りもないが、仕事だから調べて確実に、でも無造作に殺すだけ。

標的を理解はしても共感はしない。相手を嘲ってはいいても、本質的には独り言に近く、会話を成立させるつもりすらない。

これは、彼の標的となる者にしてみれば溜まらない。

根本的に何かのために戦い、闇の世界で成り上がった己を誇る者達。

そんな自尊心と自己愛に満ちた連中では、興味関心がないからこそ殺される、など耐えられない。

平和のためだ、正義のためだ、と殺された方がまだマシだ。それならばまだ世界に自分が存在していた証になるのだから。

とまあ、そんなこんなで標的をきっちりかつちり皆殺しにしつつ、独立遊撃部隊の始動の滑り出しは何のかんの順調であった。

そして、紅達とは言えば――

「……………ぐう……………すう……………」

「心願寺さん、心願寺さん、ちよつと……………」

「……………」

(凜子ちゃん、これ目を開けて寝ているんじゃないや……………)

授業中に居眠りをぶっこいていた。上の二人がこの有様だ。ゆきかぜも同様だろう。

紅の後ろの席に座る喜瀬 蛭は、目を閉じて船を漕いでいる背中を突いて起そうと試みるが効果は上がらない。

凜子の左隣の席に座る紫藤 凜花は、目を開いてこそいたがペンを握ったまま微動だにしない幼馴染に疑いの目を向けていた。

「全く……………心願寺っ!」

「あぐぐっ! ひゃ、ひゃいっ!」

「この問題、解いてみせろ」

本日の授業は数学。講師は紫だ。

苛立ちの混じった声に、紅はバネ仕掛けの人形のように椅子から立ち上がる。

蛍は、あちやあと紅の居眠りと自分の甘さに片手で顔を抑え、クラスの何人ががくすくすと嘲笑を浮かべていた。

こんこん、と方程式の書かれた黒板を叩き、紫はにっこりと笑う。笑顔を見た瞬間、紅の顔は蒼褪めた。紫がこうした笑みを浮かべている時は、怒っている証拠である。

無理もない。対魔忍を養成する五車学園であるが、通常の高等学校普通科の教育も行っている。

少なくとも必要単位を取得すれば、高校卒業資格を得られる。無論、履歴書に五車学園などと書ける筈もない故、政府の用意した高校を卒業した体となるが。

対魔忍としての教育、実技、実戦訓練のみに収まらないのは、落伍者のその後を案じてであった。

対魔忍の訓練は過酷であり、実際の任務・実戦など語るまでもない。肉体の一部損失、一生涯に渡る後遺症、精神的苦痛によるトラウマ。生きてはいても戦えなくなる者は当然存在し、また学生の内に自分自身に見切りを付ける者もいる。

その場合は本人の希望、アサギや各家の取り計らいによって裏方へと回されるのであるが、やはりそうした者の扱いは悪い。

戦いから逃げた臆病者、敵に遅れを取った軟弱者と、常に後ろ指を指される羽目になる。

そうした事態に憂いたアサギは、落伍者が新たな未来を掴めるよう高校卒業資格を与える方法を選んだ。

最低限、高校卒業資格があれば、高飛車に選ばねば職はある。対魔忍として何時までも苦しむのではなく、一般人として生を謳歌する道を示したのだ。

アサギ自身も一度は対魔忍を辞そうとした身。

落伍者の身を案じるのは当然であり、また引退にも寛容で肯定的だ。

これには忍としてしか生きてこなかった老人達は難色を示したものの、比較的若い世代は対魔忍の情報を秘するという条件付きで賛成が多く集まった。

なお、小太郎は何度となく落伍をしようと自傷を繰り返して障害者手帳を持ってきたり、精神科医を演技で騙くらかして統合失調症の診断書を持ってきたりしていたが、その度にアサギに命じられた桐生の手で傷を癒やされ、診断書を目の前で破り捨てられている。

アサギも彼だけは何が何でも逃がすつもりがないようである。ざまあない。

「……………あれ？」

「……………ん？ ……んん？」

「これで、あつてますか？」

「む、ぐう……………せ、正解だ」

授業中の睡眠を咎めようと、敢えて今説明したばかりの方程式を用いねば解けない問題を出題した紫であったが、首を傾げながらも正答に至った紅に出鼻を挫かれてしまう。

数学の問題は、答えの導き出し方である方程式が必ず必要となる。マークシート方式でもなければ当てずっぽうは通用しない。

となれば、紅はきちんと授業を聞いていた事になるが、背後で感じていた気配も指された際の反応も眠っていた者のそれ。紫がたじろぐのも無理はない。

暫く、呆然と黒板に書いた自らの答えを眺めていた紅であったが、突然天井に視線を向けると、つーつと涙を流した。

「……………ど、どうした心願寺っ」

「いえ、嬉しくて……………ようやく、ようやく……………」

「ど、どういうことだ……………？」

「素晴らしい。素晴らしいぞ、紅。ようやく身についたのだな」

「ああ、やったつ。私はやったんだつ……!」

「な、なんだお前達は、突然……」

突然、泣き出した紅に動揺する紫に追い打ちを掛けるように、寝ていたのか起きていたのか判然としなかった凜子が涙を流し、拍手をしながら椅子から立ち上がっていた。

紅の涙は歓喜を意味し、凜子の涙は祝福を意味している。

何も知らない紫やクラスメイトにしてみれば、二人の姿は奇異どころか完全にキチ○イの領域である。正直、かなり怖い。

凜子の幼馴染にしてライバルである凜花ですら、顔を引き攣らせてドン引きの表情である。

「睡眠学習が身についたんだあつ……!」

((())) —— なんて?))) ((()))

何処からともなくロツキー勝利のテーマが流れ、紅は両手を上げて今すぐにでもエイドリアア~~~~ンと叫びだしそうだった。

何も知らない人間には意味が分からないが、二人の涙も無理はない。全ては小太郎のせいだ。

才能はピカ一、実戦経験も学生対魔忍にしては十二分な紅、ゆきかぜ、凜子の三名であるが、その才気と強さ故に彼女達の戦い方は常に真正面から敵を叩き潰す方法に限定される。

何も間違つてはいない。敵よりも強い以上は、それが最も王道にして正道。下手な搦手など使う必要性など何処にもない。

しかし、それは逆境や不測の事態に対応できない裏返しである、と小太郎は断じた。

これまで三名が経験してきたのは戦いと呼べるものではなく蹂躪であり、言わば既定路線だ。

そんな経験ばかりを積んでいれば思考は固定されて停止状態となり、敵の策や思惑を見抜こうとする考え自体が浮かんでこなくなる。

それでは先がない。

もし、自身よりも強い敵が現れれば。

もし、単純な強さなど意味を為さない敵が現れれば。

もし、敵が不意をつき、裏をかいてきたのならば。

もし、自ら赴いた作戦自体が、敵の罠であったのならば。

立場は簡単に逆転する。次に蹂躪されるのは三人だ。

情報収集や任務達成の下準備が出来ないのはまだいい。誰もそんな事を彼女達に教えてこなかった上に、誰も重要視していない。知らないものは知らないで構わない。分らないものは分らないで構わない。これから学んでいけばいいだけの事だ。

だが、彼女達が得意とする分野ですら使い物にならないのは頂けない。これまで彼女達が血反吐を吐く思いで丹念に積み上げてきた全てが無駄になる。

故に、小太郎は対魔忍が携わった任務の中でも暗澹たる結果となったものの報告書を、彼女達に穴が空くほど読むように指示をした。

失敗から学ぶべき所は多い。それが己のものであればなお良いが、対魔忍の任務は常に命懸け。そう易々と失敗などさせられる筈もない。但し、彼女達に出された指示は別の意味で命懸けであった。

『じゃあ、これを読んでおけよ。後で何が悪かったのか、お前達の意見を聞くからな』

『——え？　なに……この、なに……え？』

『あの、小太兄……この書類の束、凄いぶ厚いんだけど』

『………期間は一週間だな？』

『なに寝ぼけたこと言ってるの？　一日分に決まってるだろ』

読み終わるまで寝る事は許さん、と小太郎は教科書一冊分にも及びような書類を三人に手渡した。

対魔忍の歴史は長い。近年だけではなく、確認できる過去全てを遡れば、失敗の数など成功の数を上回り、それこそ星の数にも達する。

それを一日に数十件分。内一件を読み終わり、自分なりの考察を下

すまで一時間でも早い方だ。どう考えても一日中読み続けても終わらない。

日常生活もある上に、更には小太郎からの訓練がまた辛い。限界を把握しろ、と兎にも角にも走らされる事もあれば、自身の忍法を行使させられ続ける時もある。大抵、訓練が終わる頃には反吐を吐いて、指一本動かせない状態になっている。

どう考えてもオーバーワークなのだが、小太郎はにこやかに笑い――

『何、心配するな。もし万が一死んだとしても、学園には桐生ちゃんが居るから生き返らせてやる。オレは今までそうやってきた。才能のないオレでも出来たんだ。才能のあるお前達なら簡単に出来るだろうよ』

――死んだとしても許しなど与えない。徹底して鍛え続けると宣った。

事実として彼の母親は幼い小太郎に対してもそのようなように鍛えたいし、彼自身もそのような鍛え方の効果を認めており、現在も続けている。

当主として必要な技能。射手として神業染み込射撃と装填。暗躍する者としての技術に智慧。それら全ては死んだとしても許しを与えず、出来るようになるまで徹底して虐め抜いた故に身についたものだ。

そうでもなければ僅か五つで一族を売り払うような精神も発想も生まれない。そうでなければ僅か十六でアサギから絶大な信頼を寄せられる人物には育たない。

常識の範囲では常識的な結果しか得られない。常識から外れた魔族を相手に渡り合うのに、最先端の科学技術と桁違いの人員を有する米連を相手に渡り合うのに必要なのは、非常識な鍛錬と理解しかねる狂気しかない。

三人が文句も言わずに従ったのは、小太郎という前例を身近に感じていたからだ。

忍法も使えず、突出した才能がないにも拘わらず、純然たる鍛錬の積み重ねだけで身に付けた銃の腕前と体術で己と渡り合う戦闘能力。悪辣とさえ言っても過言ではない策謀を捻り出せるだけの智慧、それを実現可能とする指揮。

あらゆる手段を許容し、何をされたとしても、何をしたとしても、偽善的にも偽悪的にも振る舞わずに、自然体のまま動じず揺るがない精神性。

少なくとも、三人の目に彼は万能選手に写っている。

無論、そんなものは錯覚であるが、何処を切り取っても必要最低限の技能を身に着けており、どんな任務にもどんな環境にも適応して最低限の結果は出せるのは事実。

成功例を見ている以上は、黙って従う他はなかった。

何よりも、そうしなければこの独立遊撃部隊に身を置く刺客も、彼の隣に立つ資格も得られないのだ。三人には、それが何よりも重要な事柄であった。

『……………あー、頭痛い』

『ダメだ。真っ直ぐ歩けない。フラフラする。気持ち悪い』

『私なんて、今日は幻覚を見たのだが…………』

『あー、疲労と睡眠不足による症状ですねー。うーん、良い傾向良い傾向。命が危険に晒されると人間凄い事になるからね！ 身体と心がぶっ壊れてからが本番だ！ なあに、座学の時に眠りながら勉強すればいいんだよ。そうすれば、取り敢えず死なない』

『……………小太兄、簡単に言うよね』

『は？ 睡眠学習くらいで泣き言いってんじゃねーよ。オレなんて、身体の方が仕事と鍛錬しすぎてこのままじゃ死ぬからって、もう眠らなくても生きていけるようになったんですが。桐生ちゃんがドン引きしながら半球睡眠してるって言ってたぞ。イルカかよ、オレは』

『……………うっ』

『喜べ！ オレが将来のお前等の姿だ！』

死んだ魚の眼のまま錯乱して笑う小太郎に、三人は同情の涙を禁じ得なかった。

そして、凜子、ゆきかぜに続き、紅も睡眠学習を僅か二週間で身に付けたのであった。

愛の力って凄い。

命のかかった人間の力って凄い。

誰も自分でやろうとは思わないだろうが、驚嘆に値する。

「座学の時は眠り放題だ」

「ああ、そうだな」

「二人とも、廊下に立っているろおっ!!」

「何故っ!?!」

これで死ぬことはなくなったと安堵の笑みを零す紅と凜子に、紫の怒号が飛ぶ。

当然だろう。授業に出席はしている。聞いてもいる。だが、いくら睡眠学習を身に付けているからと言って、眠りながら授業を受けるのは如何なものか。

授業態度として評価のポイントとなる。

まして教えている側にしてみれば失礼にも程がある行為だ。

「……………まあ、仕方ないか」

「やったぞ、凜子っ。これで立ったまま眠る事が出来る」

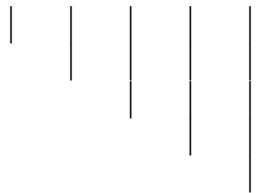
「ああ、壁に背中を預ければ休息の効果は倍。完全に頭を休められる。願ってもない」

(こ・い・つ・ら・は~~~~~つっ!!)

二人は紫の怒号をさして気にした様子もなく、すたすたと廊下へと出ていってしまう。

反省など全くしていない様子だが、二人にしてみれば睡眠時間の確保は死活問題である。気にしてもらえない。

すっかり小太郎に染まってしまった優等生二人に、紫は握り拳を作り出し、この場にはいない小太郎に対しても怒りを向けるのだった。



一方その頃――

「ぶえつくしよおんっ!!」

「若様、風邪ですか？」

「いや、特にそんなことはない。誰か噂でもしてるのかねえ」

小太郎は授業をサボり、災禍は予定通りに独立遊撃部隊の仮本部で書類仕事に勤しんでいた。

仮本部、と言っても本部らしきなど何処にもない。五車学園の空き教室から生徒用の学校机と椅子を出し、代わりに業務用の机を入れており、壁際には小太郎の持ち込んだ近代兵装がしまま入った米連の武器ボックスが並んでいた。

本格的な本部は小太郎の意向を取り入れつつ急ピッチで建設中。尤も、彼の要求した機材やシステム周りが最新式故に、完成は当分先になるだろう。

くしゃみをして鼻を吸る小太郎に、災禍は普段の伶俐さからは考えられない柔らかな表情で気遣いを見せる。彼女がこうした顔を見せるのは、小太郎の前でだけだろう。

「噂、ですか……」

「まあ、出だしが良かったからな。その顔、何か不都合でもあったか？」

「若様にとっては何も。寧ろ好都合でしょう。噂になっているのは手足である我々だけです」

「重畳重畳。理想的だな、これは」

くつくつと笑う小太郎に、災禍は納得がいかないのか懽然としていた。

災禍が小太郎に向ける忠誠心は、天音に劣らない。独立遊撃部隊がまともに機能し、結果を出せている最大の理由が小太郎であると誰も認めていない現状は面白くない。

不満を抱いてはいても漏らさなかったのは、小太郎の考えと思惑を尊重しているからだろう。

別段、小太郎は己自身の評判が伸びる必要性を感じていない。独立遊撃部隊の評判さえ伸びればいいのだ。

指揮官は失敗の責任を全て負う見返りとして、成功の旨味を受け取る。例え、隊員の評価が鰻登りになろうと、実利も名声も根本的なところでは隊長である小太郎のものだ。

そもそも隊員が評価をされれば、独立遊撃部隊の評価も上がり、最後には有益な人材を効率的に使う人物として小太郎を周囲も評価せざるを得ない。

隊員に助けられている無能な隊長という評価であっても構わない。最終的な目的がふうま一門の再興である以上、当主の評価は低くとも、脇を固める側近の評価が高ければ組織は周り、下の者は付いてくるのだ。

「しかし、それではふうま一門の再興は当分先の話になってしまえますよ。殊更、二車の反乱に賛同しなかった者達は日和見主義のようなもの。若様が分り易い結果を出さねば賛同しないでしょう」

「今はそれでいいだろう。今、オレに必要なのはふうまに忠誠を誓った奴ではなく、あくまでもオレ個人に忠誠や特別な感情を抱いた奴

だ。そちらの方が扱いやすい」
「まあ、当然ですね」

今やふうまなど何の力もない。隆盛を誇っていたものの今は名前だけの家に過ぎず、数を増やしたところで下についた者に恩恵は与えられない。

そのような状態で、“ふうま宗家”に忠誠を誓い、かつて夢見て集まった者は扱いにくくなるのは目に見えている。

少なくとも、小太郎はかつてのふうまに戻すつもりは毛頭ない。必要な部分は残すが、不要な部分は切り落として新生させる腹積もりであった。

そんな勃興期、黎明期に必要なのは家に忠誠を誓う者ではなく、小太郎個人に忠誠を誓う者だ。

紅やゆきかぜ、凜子は言うまでもなく、天音や災禍も口ではふうま一門の再興などと嘯いてはいるが、全ては小太郎を守るためにはそれが一番確実であると認めているだけに過ぎない。

かつての一門との違いを認めつつも、全てを納得して付いて来る者だけの方が小太郎も動き易い。やれ伝統だ、やれ習慣だと口を挟んで脚を引つ張られ、遅きに失する愚鈍だけは避けたいのだ。

「厄介になりそうなのは、紫藤家ですが……」

「まあ、アレはほぼ一つの家として独立したも同然だからな。口を挟んでは来まいよ。邪魔をする旨味が少ないからな。寧ろ、此方が成果を示せば向こうから擦り寄ってくる」

「紫藤 甚内は強かな男ですよ、決断も早い」

「ああ、だからもう動いている。オレも甚内もな」

秘書として忠告したつもりの災禍であったが、小太郎の想定外の返答に目を丸くした。

独立遊撃部隊が設立された次の日には、小太郎は甚内へと連絡を入れていたのだ。

各家の監視を警戒し、対面をせずに極秘回線を使つての口約束に過ぎないものであったが、十分であった。

甚内は小太郎を正しく評価しており、同時に恐れている。少なくとも当主としての能力は認めている上に、暗躍されれば、とてもではないが己の能力では対応しきれないと考えているだろう。

直接的な支援はしないものの、明確に敵対をせずに一定の距離を保っているのが良い証拠だ。

甚内は今現在の対魔忍体制下を気に入っている。

寝返り直後から一貫してアサギ閥に属しているのは、力がある故に従っているというよりも、甚内自身の持つ正義がアサギの持つ正義と共感する部分が多いからだ。

そもそも、弾正に賛同した母と殺し合いを演じたのは小太郎の裏工作が切欠ではあったものの、己の正義と弾正や母の正義に齟齬が、溜まりに溜まった鬱憤として噴出した結果に過ぎない。

今現在の体制を維持しつつも紫藤家が残れる事が甚内としては望ましい。

かつてのふうま一門だからと周囲からのやつかみもある上に、小太郎が弾正のように我を通し、一から十まで縛り付けるタイプではなく、それぞれの意見を尊重しつつ妥協点を探るタイプの当主であると重々承知していた。

ならば、アサギと繋がりが強い小太郎が力を付けるのを待ち、機を見て手を取るのが得策と考えるのは当然の帰結だったかもしれない。

「表立っては動かないが、票取りゲームには必ずこつちに賛同するとさ。それに、娘の凜花も本人が納得さえすれば好きにしてくれて構わんらしい」

「成程、人質兼嫁候補にしろ、と……」

「嫁候補かは知らんが、甚内自身が動くよりも、娘が勝手にした体にしたいんだろう。強かな奴だよ。嫌いじゃない」

娘を人質に出そうとはしているが、それは小太郎が凜花を納得させ

られるかどうかには掛かっている。

実質、甚内は何も支払ってはいないも同然であるが、どう転んだところで甚内にとっては美味しい話だ。

大事な一人娘だが、早い段階で小太郎の側近として擁立すれば、後々になつて恩恵に預かれる。

子供でも孕めば、嫁の一人としてふうま内部における地位は安泰、宗家と紫藤家の繋がりはより強くなる。

万が一、凜花が死ぬような事態になれば全ては小太郎の責任。大事な跡取りを失わせた以上、当主として甚内に何らかの代価を支払わなければならなくなる。

甚内は清濁併せ呑む性格。一人娘に親としての情を抱きつつも、道具の如く扱う事に躊躇はない。

尤も、甚内にとつてもこれは苦渋の末の決意であり、血を吐く思いでの決断だ。故に、凜花には何も話してはいまい。全ては小太郎が如何にして凜花を口説き落とすかに掛かっている。

「何にせよ、今は待ちの一手だ。紅達の実力を底上げし、足元を固めるのが最優先さ」

「それが最も有効でしょうね。事を急いで今の内から内患を抱える必要はありません。勢力を拡大するのは、後からでも十分過ぎる」

「そういうことだ。残った元ふうまは日和見ばかり、今この段階で寄ってくる奴なんざいない。もし、こっちに近づいてくる奴が居るとするならば——」

「——紅達の成長と成果を目にし、若様の下で戦う恩恵を理解した若い世代に限られる、ですか」

あれだけいやだいやだと喚いておきながらも、一度始めれば何もかも計算尽くの行動に、呆れとも感嘆とも付かぬ表情で災禍は呟く。

元ふうま一門は、まだ様子を伺っている最中だ。

小太郎が弾正のような傲慢で無能な当主なのか、それとも真逆に仕えるに値するだけの義や利益を生む存在であるのかを。

しかし、彼にしてみればそんな連中は必要はない。少なくとも、自分の周囲には居ても邪魔なだけ。

せめて甚内のように口だけであつても先手先手を打つ決断の早いタイプならば、まだ有能と言え、使う気にもなるが。

それよりも、求めているのは若い世代だ。

血や家に縛られず、自らの成長のために必要と判断すれば躊躇なく頭を下げる者。最低限、それがなければ人は成長を見込めない。

今は、そういつた者を周囲に置きたいのだ。いづれふうま一門に加わるにせよ加わらないにせよ、此処で様々な技能を教え込めば、恩を売れる。繋がりが生まれる。成果が期待できる。

ふうま一門が再興した頃には、若い世代によつて周囲の家系も一新されている。今のようになアサギが力尽くで纏め上げるしかない対魔忍は劇的に変わる。己の意思で手を取り合い、驚異に立ち向かう強き群れとなるだろう。

尤も、そうなるまでの間、小太郎に掛かる負担は凄まじいものになるのではあるが。

浮気をせずに本気になるタイプは、言い方を変えれば一度でもやり始めれば手抜きが出来ない性格でもある。そうした自己への負担は一切度外視しているのは、良いことであるのか悪いことであるのか。

「若あつ！ ご命令通り、装備課と約束を取り付けて参りましたっ！」

「流石に早いな。一応、聞いてくけど、無理やりじゃないよね？」

「無論でございます。交渉において人質や暴力を用いるのは二流の証左。若の執事である私が、若の名を汚すような不様を晒すと思われているとは心外です」

(……………普段を考えれば心配して当然なんだよなあ)

スパーン、と仮本部の扉をとんでもない勢いで開けた天音は開口一番にそう告げた。

これ以上ないドヤ顔を見せる天音の言に、普段から暴走気味の姿ばかりを見ている小太郎と災禍は微妙な表情をする他ない。

とは言え、小太郎が仕事を任せている以上は、出来ると判断した上で
の事。天音に失敗はあり得ない。

そもそも、天音が暴走するのは小太郎の前でだけだ。

小太郎の前以外では、他の者など相手にすらしていない。例外はライバルに等しい災禍、桁外れの実力を誇るアサギ、小太郎に見初められた紅、ゆきかぜ、凜子くらいのもの。

彼が前にさえ居なければ、小太郎の悪口ですら聞き流す。お前達は何も分かっていないと冷笑するばかりだ。なお、小太郎が前に居た場合は忠犬から狂犬にチエエエエエエエエンジンゲツターアアア、^{ワン}犬！して相手がボコボコになります。

「最新鋭の装備を優先的に配備。見返りとして実戦データを提供する形に落ち着きました」

「あの業突張りのクソ爺にしては、まともな形じゃないか」

「当然でしょう。若様、以前に内源に何をしたのかお忘れですか？」
「オレは悪くないだろう。どう考えてもよお」

内源 賀平。

対魔忍の使用する装備の開発、調達を一手に引き受ける装備課の課長にして怪人物である。

ゆきかぜが使用する制御装置「ライトニングシューター」も彼渾身の武装であり、それぞれが身に付けている対魔忍装束も彼がデザインしたものだ。

その人物像を語るのならば一言で済む。エロ爺である。もう60を超えるというのに盛んな事だ。

但し、同じくエロ博士である桐生とは違い、実際に手を出す事はなく、紳士的だ。あくまでも彼と比較して、であるが。

あの肌ピッタリと張り付き、身体のラインが浮き出る対魔忍装束を身に着けた女を視姦するのが大好きなのだ。

よくやつ——もとい、男として気持ちは分からないでもないが、明け透けなのは頂けない。だって、対魔忍装束に身に着けた女性

を見る彼の視線はヤバイ。女性対魔忍からも非難轟々である。

さて、この内源が小太郎に何をしたのか。非常に単純な話である。災禍と天音に手を出したのだ。

いや、直接的に陵辱をするような人物ではない。そもそも、彼はインポテンツだ。

ただ、己の性癖を満たすために、二人の対魔忍装束に新装備と称して色々仕込んだのである。所謂、いわゆる触手服、電気快樂攻め、羞恥を煽るポーズで固定機能など。

当主としての直感か、同じ男としての共感故であったのか。

兎も角、小太郎は内源に感じた違和感から装束に仕込まれた機能を察し、それはもう酷い目に合わせてやった。

『んほおおおおおつっつ!! イグウツ、イギ死ぬやべでえええええ、え、え、えええっつ!!』

『女みてえな声で鳴いてんじやねえぞ、このクソ爺があっ!! どおだあ! テメエで作ったものの機能を味わう気分はよあ! 久方振りにエクレチオンしてんだろお! オラあ、感謝の言葉どうしたあ!!』

(……絶望的に汚い絵面だ)

詳しい描写は当作品の美観を絶望的に損ねるため、敢えて避けさせて頂きます。

と、そんなことがあった故に、内源はほぼ小太郎に絶対服従状態である。男に対してすらこの快樂攻めの手練手管。流石は性技の味方といったところか(汚い絵面から目を逸らして)

しかし、小太郎の怒りも尤もであった。

ふうま時代からの付き合いですであり、こうしてアサギ主導の対魔忍体制下に入りながらも、一貫して忠節を尽くす二人を汚されようものならば、当主として断罪せねばならない。

幸いにも未遂で終わったから、この程度で済んでいたものの、実際に手を出されればどうなっていたことか。

信頼には相応しい報酬を、裏切りには相応しい報復を。それが小太郎に叩き込まれた当主としての基本理念。母の教えだ。

理念に沿うのであれば、災禍と天音に支払う報酬は未だ支払えていない状態なのだ。或る意味で、紅達よりも重要視しなければならぬ。そこがまた、災禍が顔を綻ばせ、天音が熱を上げる一因となっているのであるが。

そう、災禍と天音は小太郎のためであれば命すら投げ捨てる。

弾正が引き起こした内乱において、単身で井河・甲河に下った小太郎であるが、その道程は決して簡単なものではなかった。

病の母を失い、冷徹な計算をしつつふうまを売り払う事を決定した小太郎であったが、内心は人間性の全てを喪失してしまうほどに落胆の淵にいた。

なおも必要な決定を下せたのは、他ならぬ母の苛烈な教育があつてこそ。更にそんな小太郎の決定を肯定し、逃走を助力したのは他ならぬ災禍と天音。

当初は二人とも弾正付きの秘書と執事であつたが、当時の時点で小太郎の母の働きかけにより小太郎付きの秘書と執事へと立場は変わっていた。無論、二人の納得を得た上で。

小太郎の逃亡を知った弾正は即座に追撃部隊を編成し、これを追わせた。

弾正は抜け忍を許容するほど寛容ではなく、また目抜けであつた小太郎に対して父としての愛情を持ち合わせても居なかつた。余計な事を井河・甲河に漏らす前に始末してしまおうとするのは当然だ。

この追撃部隊の足止めを、災禍と天音は小太郎に頼まれるまでもなく行つた。

持てる力の全てを用い、邪眼を限界まで以上に行使してもなお戦い続けた鬼神の如き奮闘の果て、災禍は両脚の機能を、天音は左腕を失つた。

二人はふうまの隠れ里で命を失う寸前に、小太郎から情報を得た内乱鎮圧部隊の手によって救出される。大怪我を負つたものの、鬼気迫る二人の姿は恐れられ、不要な陵辱を受けなかつた事だけは幸いで

あつた。

その後、数年の間、災禍と天音は障碍者としての生活を余儀なくされたものの、小太郎が何処からか手に入れてきた義足と義手によって秘書と執事として返り咲いた。

二人の忠誠は正に鉄。紅達が外部に対して喧伝可能な分かりやすく強大な戦力であるとするならば、二人は懐刀。この二振りの刃がなければ小太郎に過去はなく、未来はない。

「これで暫くの間は安泰でしょう」

「天音、気は抜けんぞ。書類仕事も、三人の教育もある。それに、独立遊撃部隊の内情を探ろうと他家が差し向ける者も居るだろう」

「む。それくらい分かっているぞ、災禍。私は若の執事、お前以上に働いてみせる」

「——はいはい」

何処か姉妹のようなやり取りを見せる二人の姿は、対魔忍が関わる闇の世界とは似つかわしくない平和なものだ。

姉に食って掛かる妹と妹を諫める姉そのものである。思わず、誰もが顔を綻ばせてしまいそうだ。

しかし、そんな中で小太郎は相変わらずの無表情で全く別の事柄を考えていた。

(なんか、フラグが立った気がする。順調は順調なんだけど、順調過ぎると後の揺り戻しがなあ……何も起きなきゃいいけど。起きないわけねえんだろうなあ、オレだから)

対魔忍シラヌイ ヨミハラ動乱編

さあ、苦勞が押し寄せてくる時間だぞう

「……………んん……………すやあ……………」

「もう、水城さんったら今日は一日中居眠りだなんて」

「仕方ないですよ。ほら、例の部隊の話もありますし……………」

「全く……………ふうま君、部隊長なら責任を以って水城さんを送り届けてね」

「へいへい、了解しましたよ」

「じゃあ、お願いしますね」

「ちよ、ちよっと、前園さんっ」

茜色の夕日が差し込み、優しく教室を照らしていた。

机に突っ伏して眠るゆきかぜのだらしなさに、クラス委員長である氷室 花蓮は憤りの視線を向けている。その間に割って入り、ゆきかぜを庇ったのは副委員長の前園 桃子。

花蓮は頑固な程に真面目で、桃子は適度に気の抜けた少女故に、二人は相性の良いコンビであった。

部下の失態は隊長の責任と花蓮は言外にゆきかぜへと釘を刺すよう声色で語っていたが、小太郎は何処吹く風であった。

もう一言口にしなければ気が済まない、と花蓮は口を開こうとしたが、桃子に背中を押されて教室の外へと連れ出していつてしまう。

桃子は対魔忍として戦う事に恐怖はあっても逃げ出しはしない。しかし、仲間同士での争いは嫌う。彼女なりに気を遣つての行為であり、花蓮の説教は長くなるのを知っていた故でもあった。

本日の日直当番は花蓮、そのまま職員室に日誌を提出するのだから。遠ざかっていく二人の足音と気配を確認しながら、小太郎はちよう

どいといとばかりに眠り扱けたゆきかぜに視線を向けた。

「……………」

「……………」

何を思ったのか、少なくとも「ふうま 小太郎」として振舞っている際には肌身離さず武装しているColt Single Action Armyへと手を伸ばす。

座った状態から椅子を跳ね飛ばして立ち上がり、ゆきかぜの丸くなった背中へ殺気すら伴って持てる最高速で銃口を向ける。

対するゆきかぜもまた唐突だった。

小太郎が膝に力を込めた瞬間——いや、殺意を抱いた瞬間、真横に跳ねていた。まるで獲物に狙いを定めた獣の如き、恐るべき瞬発力。虚空に身体を投げ出す勢いで地を蹴ったゆきかぜは、空中で姿勢を制御して廊下側の壁へに着地するや、跳ぶ直前に鞆の中から取り出したライトニングシューターを小太郎に向けて構えてのけた。

「いいね、感度良好。問題無しだ」

「ふぎゆつ——ちよつとお、小太兄い！」

両者の射線と視線が交差し、僅かコンマ数秒にも満たない睨み合いの末、小太郎は納得したように構えを解く。

すると壁に着地していたゆきかぜは重力に引かれて教室の床へと落ち、不機嫌に抗議の声を上げた。

完全に眠った状態からでも自身を脅かす気配と殺気を感じ取る五感。

今、超反応を見せたゆきかぜは元より、他の二人にしても生まれながらに優れた感覚器官を有していた。しかし、十全には扱えておらず、開花していなかった。

これを強制的に開かせるため、小太郎は日常の中で彼女達を常に脅かした。

初めは周囲には悟られないように焦点を絞った殺意を彼女達だけに向ける。

それを感じ取れるようになれば、周囲の視線が外れた一瞬に、命に危険が伴う攻撃に及んだ。

すれ違いざまに鳩尾へ向けての拳打。訓練中に背後から後頭部に向けるの飛び膝。一人になったところで気配を殺して忍び寄っての首締め。離れた距離からの投石。

どれもこれも暗殺と呼べる手段であり、小太郎が手加減を誤れば、彼女達が対応を誤れば、死に至りかねない暴挙だ。

しかし、暴挙も数を重ねれば日常となり、苦痛を伴う訓練は、伴わない訓練に比べて遥かに効果が高い。

日常的に命を危険に晒される事によって花開いた彼女達の五感は、既にあらゆる殺意や悪意を鋭敏に感じ取る。下手な不意打ちや搦手など容易に対処し、遠距離からの射撃にも対応して見せるだろう。

その領域に至るまで、小太郎が何年掛かったことか。

過去に踏破した地獄の道程を容易かつ短期間で駆け抜けた彼女達には、さしもの彼も惜しめない賞賛を送る他ない。

「これでようやくスタートラインだ。これから伸びるぜ、お前等全員」
「これでえ……？　今まで受けてきたどんな訓練よりも厳しかったんだけど」

「それだけ甘つちよろい訓練だったってこと。対魔忍の訓練なんぞその程度さ」

「そういうこと言うから嫌われるんだからね、もう」

二人は自分の跳ね飛ばした椅子や机を元の位置に戻し、中から溢れた教科書を仕舞い直す。

小太郎の言動は普段から歯に布着せぬ苛烈なものばかりだ。

勿論、ゆきかぜはそれが彼なりに言葉を選んだ上での言葉だと知っているが、自分の好きな相手が皆に嫌われるのは胸が締め付けられる。

少なくとも、彼は仲間の最も大切にしている部分を笑う事はなく、安易に全てを否定はしない。

あくまでも問題点を提示し、指摘しているだけなのだ。ただ、対魔忍は我が強く、頭が固い。言葉がより苛烈になるのも無理はないが。自分を気遣うゆきかぜに、百年早いと言いたげであったが、小太郎は力なく笑って頭を撫でた。

彼としても気遣われて悪い気はしない。そんな気持ちを伝えなかったのだろう。

言葉にしなかったのは、言の葉の力が絶大である事を理解しているからであり、また言葉にした時点で元の感情から乖離したものとなるからだ。

感情を言葉にするのは容易い。歓喜、憤怒、悲哀、悦楽。当て嵌めようとすればいくらでも当て嵌められる。しかし、感情がそのまま言葉になるかと言われれば、それはまた違う。

小太郎の口にした歓喜とゆきかぜの口にした歓喜では、意味合いも抱いた感情も微妙な差がある。言葉にした時点で削ぎ落とされた部分もある筈だ。

自分を愛していると口にした女に、それはどうにも不誠実に感じ、行為によって胸の内を伝える事にした。

ゆきかぜはそんな胸の内を感じ取ったのか、嬉しくて堪らないと言わんばかりにふるふると震え、目尻を垂れ下げてふわりと微笑んだ。

「今日は早めに切り上げる。帰ろうか」

「訓練は？ いいの？」

「これからもっときつくなるからな」

「うっへえ……はい、今日はゆっくり休みます」

普段は決して見せない爽やかな笑みを浮かべた小太郎に、ゆきかぜはげんなりとした表情で頷いた。

彼がこうした笑みを浮かべる時は、大抵敵に対してロクでもないことをしてかす前か、味方に対してとんでもない訓練メニューを課す前

である。人はこれを暗黒微笑と呼びます。

ゆきかぜも、独立遊撃部隊に入ってから訓練で嫌というほど学んでいる。そして、どれだけ抗議しようが泣き喚こうが一切耳を貸さない。此処で無駄な労力を使うよりも、明日以降の日々に備えて休息を取る方が賢い、という事だ。

それでもゆきかぜが現状、逃げ出す事も投げ出す事もしていないのは、小太郎の側に少しでも長く居たいという乙女らしい理由以上に、確かな成長の実感があったからだ。

体力の向上。雷遁の術の出力、使用幅、持続時間の向上。何よりも、周囲の殺意や敵意、悪意への反応速度。以前までの己と比較しても文句なしに強くなったと胸を張れる。

加えて、単独、集団を問わない模擬戦における戦績も上がっていた。以前は才能と実力に任せられた戦い方しかしてこなかった上に、それ以外の必要性すら感じなかったが、小太郎の指導の下、思考に瞬発力が、戦闘における考察力が加わる結果をまざまざと感じている。

単独であれば、彼我の実力差を正確でないにせよ、正当に近い形で看破し、自身にとって理想的な戦い方を組み上げる。

集団であれば、部隊内部における立ち位置と役割を認識し、自身の性能を最大限維持した上で、相手の出方を探る。

言葉にすればたったそれだけ。当たり前と言えば当たり前すぎる行為であるが、結果は劇的に変わっていた。

それもこれも、小太郎から渡された過去の失敗集を読み解いてきたからだろう。

過去の報告書や事例に目を通し、当時の状況を理解した上で何が悪かったのかを探る。更には自身を当事者に見立て、最良の選択肢は何かのかを考える。

繰り返し繰り返し。飽きようが、嫌になろうが、その思考が常態となるまで徹底して続ける。

その結果が、今のゆきかぜであり、また彼女の生み出す成果でもある。

今のゆきかぜならば、多少の実力差ならば覆し得る。敵の下手な搦

め手に嵌りもしまい。

過去の事例が元になっている故にやや型に嵌った思考しかできないが、続けていけば、より柔軟に、より最良の選択を出来るようになるだろう。

(次は忍法の応用範囲を更に広げる。いささか以上に性急だが、そうも言っていられねえ)

小太郎は今現状の訓練・鍛錬を続けつつ、新たなる訓練メニューの追加を検討していた。

紅の風遁、ゆきかぜの雷遁、凜子の空遁それぞれの特性を伸ばし、欠点を克服する。そのためには、個々で訓練の内容が変わってくる。

効率的な訓練内容を考えるのも一苦勞であるが、嘆いても面倒がつても始まらない。此処を超えてしまえば、部隊運用は比較的楽になり、使用できる選択肢が飛躍的に増すのだから。

「んー………ねえ、小太兄。今日、そっちに泊まってもいい？」

「はー………元気いいねえ、お前。いや、オレは嬉しいけど」

「ちーがーいーまーすー！ いや、違わないけど、そういうのも嬉しいけど。今回は、ちよつと助けて欲しくて」

我が家に泊めて欲しいと頼まれた小太郎はからかうように笑っていたが、ゆきかぜの反応に首を傾げた。

何でも母親の不知火が任務で家にいないらしい。
ゆきかぜも最低限の家事は出来るものの、決して褒められたものではなく、失敗も多い。

それを見越して、不知火は出立前に水城の分家に世話を頼んでいたらしいのではあるが――

「別に相手だって納得してやってるんだ、問題ないと思うが」

「流石に毎回毎回頼るのもねえ。女の子として不甲斐ないし、申し訳

ないし。相手の生活だつてある上に、お給金払つてゐるわけでもないから」

「ま、成長しようつて心意気は認めてやる。今日はちようど災禍も来てる筈だ。色々と教えて貰えよ」

——流石に気が引けるようだ。

近代に入った水城の宗家と分家は、形式的に中世以前からの風習を守っているものの、実態は殆ど親戚付き合ひのそれに近い。

元々、優秀な雷遁使いを排出してきた水城家であるが、家としての規模は大きくない。これまでの当主に野心少なく、家の拡大を重視してこなかった故だろう。

宗家と分家の力関係は代々の傾向でほぼ均衡した状態であり、関係も良好。水城家の方針は、当主による決定ではなく、分家の意見を十二分に加味し、摺り合わせを行った上で決定されるほどだ。

これまで対魔忍内部の権力争いにも一切参加しておらず、当主不在という理由もあるが、それ以前から興味を見せた様子もない。

対魔忍の生まれた意味。闇から現れた魔を討つ、闇に魅入られた外道を討つ使命を第一とし、片時も忘れてこなかった家系故に。

「そーいや不知火さんは最近見てないな。何時からなんだ?」

「二車の反乱がある少し前だから、一月くらい前かな?」

「……………へえ。ちなみに、期間はどれくらい?」

「分からない。殆ど何も聞けずに行つちやつたから。でも、難しい任務かも。結構、難しい顔してたし」

「……………へえ……………」

ゆきかぜの母親、水城 不知火はアサギに並び称されるほど勇名を馳せた対魔忍である。

単純な強さは勿論の事、彼女の水遁の術は敵を惑わせる幻惑の極地。更には知略戦略に精通し、アサギの側近として数々の任務を成功に導いてきた。

人呼んで“幻影の対魔忍”。対魔忍内部での立ち位置は各任務の作戦に対する最適な人員の選定や作戦内容の提示。世界中を駆けずり回って情報収集や各国の動向を探る九郎とはまた別の意味で重要な裏方である。

「悪い、ゆきかぜ。先にオレの家に行ってくれ。ちよつと用を思い出した」

「えー？ 一緒に下校するのも楽しみにしてたんだけどなあ。稲毛屋で買ったソフトクリームを食べながら、ゆつくりイチャイチャしながら帰ってたんだけどなあ」

「許せ、ゆきかぜ。また今度だ」

「ま、しょうがないよね。私達の隊長さんだもん。やること一杯あるだろうし。じゃあ先に行ってるから、早く帰ってきてね」

わざとらしく不満げな表情を作るゆきかぜであったが、小太郎から投げ寄越された鍵を問題なく受け取るとにつこり笑うと教室を後にする。

小太郎に与えられた任務の重さ、ふうま再興という道程が決して楽な道ではないと理解しているからこそ、邪魔は自分の我儘と断じ、ごねることなく受け入れていた。

何より、この埋め合わせを怠るほど気の利かない男ではなく、寧ろそういった事柄には殊更気を遣うタイプだ。小太郎を知っているからこそ、ゆきかぜは素直に従うのだ。

一人教室に残された小太郎は、暫く経ってから校庭を一望できる窓の前へと移動する。

眩いばかりの夕日に目を細め、校舎と校門を繋ぐ道に目を向ける。其処には、小太郎宅へと駆けていくゆきかぜの背中があつた。

あの様子では夕食を作る災禍の手伝いをしながら、料理の一つでも教えて貰うつもりなのだろう。少女にとって手料理を振る舞う事は特別な意味を持ち、またとない楽しみでもある。

ゆきかぜの姿が完全に消えてなくなり、自分の用に一切気がついて

いない事を確認すると、小太郎はほうと息を吐くと同時に、さーっと音が聞こえそうなほど血の気を引かせて顔面蒼白となった。

「ああああアアアああああああああアアアあああああああつ!!!」

次の瞬間に、彼は地を蹴った。

凄まじい速さであった。教室にあった机と椅子を吹き飛ばし、中の教科書やその他諸々が撒き散らされる。

そのままに肩から扉に飛び込んでブチ破り廊下に躍り出たが、勢いを殺しきれず側頭部が廊下の窓をブチ破ったが一切気にした様子はなく、暴走機関車の勢いで走り始めた。

「さああああアアアああああああああアアアああああアアアあつ!!!」

放課後、教室に残って自主勉強をしていた生徒は、余りの速さに彼の姿を捕らえられず、目を白黒とさせるばかり。

廊下を擦れ違った生徒や教師は、小太郎を高速で動く影としか認識できず、悲鳴を上げて避けるばかり。

その様は、紛うことなき妖怪。

名付けるならばそう、妖怪・重力破り。極大過ぎる嫌な予感から高速移動の果てに重力の縛りから解き放たれた妖怪だ。

何せ、高速過ぎて廊下を螺旋状に走っているのだ。床、右壁、天井、左壁とぐるぐるぐるぐる回りながら走っている。万有引力の法則の敗北、アイザック・ニュートン涙目であった。

「ぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいっ!!!」

終着は、言うまでもなく名前を叫んでいたアサギの執務場所。即ち校長室である。

廊下をぐるぐるぐるぐるしていた小太郎は、勢い余って校舎の隅から隅まで無駄に走り回ると、校長室の前で直角に曲がり、ライダー

キックと共にダイナミックエントリー。

粉々に砕け散った扉の叫び声に続き、着地に失敗した小太郎は来客用のソファとテーブルに頭から突っ込んで粉々に粉碎した。

「あのねえ。何をやってるのよ、貴方は」

アサギに驚いた様子はなく、呆れ顔で執務机に座ったままだ。

あれだけ大声で名前を叫ばれていたのだ、当然だろう。もつとも高音域すぎて、他の者にはアサギの名前を呼んでいるのではなく、チンパンジーの鳴き声にしか聞こえなかっただろうが。

日常茶飯事と言わないまでも、こうした小太郎の奇行は何度か経験していると同える。

はあ、溜息を付くとアサギは目を通していた始末書を机の上に置き、何事かと校長室を覗き込みに来た教師や生徒を片手で制して追い返す。

しかし、その態度も其処まで。小太郎がこうした奇行を取るのは、厄介事を嗅ぎ取った時だ。アサギのところに飛び込んできたと言う事は、間違いなくアサギにも類が及び、関わっているからだろう。

人払いが済むと彼女の表情もさーつと蒼褪めていき、顔面蒼白の状態で涙目になってカタカタしている。いくら最強の対魔忍でも、過労死が間近に迫っている段階で小太郎の持ち込む厄介事はリアルに死ねる。この反応もやむを得ない。

「アサギ、お前アサギい！ 不知火さん、どの任務についてるのっ?」「不知火？ 不知火は纏の任務中だけど……………え？ 何？ 嘘でしょう?」

「うーそじゃないよ、事実だよっ♪ いやな予感がひっしひっし♪ 終わりの時が見えてくるぅ♪」

「……………あはははははははははははははははっ!!」

アサギは一瞬、怪訝な表情をしたが、次第に目を見開きながら震え

声で問い返すも、小太郎はほぼほぼ錯乱状態で歌いながら踊り出す。もう小太郎にしても歌って踊るしかないくらいの状況の可能性があるのだ。

一瞬、二人の間で沈黙が降り、死んだ魚の眼で見つめ合うと笑い出した。

互いに状況を完全に把握していた訳ではなかったのだが、小太郎の嫌な予感が外れた事はない。

ましてや、任務の人員選定と作戦案提示を担う不知火に火の粉が降り掛かっているかもしれないのだ。もう笑うしかない。

一頻り笑い終わるとアサギは何やらパソコンを操作し始め、小太郎は校長室の本棚を押して扉が壊れて開きっぱなしになった入り口を塞ぐ。

「不知火が潜入しているのはヨミハラ。現状、定期連絡が入っているわ。連絡役は別件で捉えた奴隷商人のゾクトよ」

「うわっ、うわわあああああつ!! 終わったあああああああ
あああつ!!」

「お、おとおお、落ち着きなさい小太郎っ! 諦めたら其処で任務終了よっ! そして私達の過労死も確定よっ!」

纏の任務とは、対魔忍の間でのみ伝わる俗語、或いは隠喩。身分を偽り、情報を探る潜入任務の事だ。

短くとも一ヶ月。長ければ十年単位で任務に当たり続けなければならず、本来の身分がバレたのならば即座に殺されるか捕らえられる、非常に過酷で危険度が高い任務だ。

そして、不知火の潜入先がまた厄介極まる場所だった。

地下都市ヨミハラ。

この日本にはいくつかの魔界都市が存在する。その内の一つであり、位置がまた特殊だ。

ヨミハラは東京の地下300mに位置した地下都市であり、政府の力も対魔忍の目も届かない闇の勢力圏。

闇の勢力以外は規模、全容を把握できておらず、存在は認識されてこそのもの、確認はされていない。

曰く、ヨミハラの女は奴隷か娼婦しかいない。

曰く、ヨミハラの最下層には魔界へ通ずる穴が空いている。

そんな噂が枚挙暇がない都市。

そして、対魔忍の最大の敵、アサギ個人の宿敵であるエドウィン・ブラックが率いる組織、闇の勢力の最大閥であるノマドもまたヨミハラを拠点としている。

錯乱状態の小太郎とアサギであったが、今やれることはやっていった。

アサギは任務の内容や政府から齎された情報をプリントアウトすると震える手でバサバサと音を鳴らしながら差し出し、小太郎ははわ、はわわと漏らしながらも書類に目を通す。

「よし、よしよし、よおし。不知火さんの任務内容は把握した」

「それで、どうなの？」

「……………オワタ／＼（〇）／＼」

バサア、と短時間で読み終わった書類を放り投げ、校長室で紙吹雪が舞い散った。

「根拠は？」

「あー、それな。お前、覚えてるか？ 4年前、ゆきかぜの親父さんが任務で死亡する少し前に、不知火さんが当たる筈だった任務が中止になったの」

「覚えてるわよ。中止になったも何も、貴方が中止させたんじゃない」

4年前、不知火は潜入任務へと赴く筈であった。

ヨミハラのような危険な場所ではなく、魔界技術を使用している恐れのある風俗店に潜入して証拠を入手、更には顧客の可能性のある政府関係者を検挙するための情報を手に入れる任務。

不知火ほどの腕前であれば、何の問題もなく達成できるであろう任務であったが、これに待ったを掛けたのが小太郎であった。

当時の時点でアサギの懐刀として暗躍していた小太郎は、たまたま耳に入った任務の内容と情報から中止すべきと判断した。

理由は単純。風俗店のある一帯はノマドが支配しているにも拘わらず、疑惑の向けられている風俗店だけではどの組織が経営しているのかだけは判然としなかったからだ。

使用している魔界技術、利用している顧客の存在は政府の調査で明らかになっていたのに、経営側の情報だけが欠落している奇妙さ不自然さ。

通常であれば、まず真っ先に誰が経営しているかを調べるだろう。でもなければ、蜥蜴の尻尾切りをされて大本を断てないのだから。

これは政府内部に存在している親魔族派の売国奴共の罠と断じ、アサギもまた小太郎の言ならばと中止を宣言したのである。

その後、風俗店は時間を置かずに閉店し、真相は闇へと葬られた。

「それ自体は良い。そんな罠みたいな任務、対魔忍こっつにしてみりや日常茶飯事だ。だが、妙に気になってな。後から色々調べていたら、別の任務と共通点が見えた」

「別の任務……？」

「ゆきかぜの親父さん——稲火いなびさんが亡くなった任務とだよ」

「……………」

ゆきかぜの父親——水城 稲火は、ゆきかぜ同様に優れた雷遁使いであった。

任務の内容は、ある組織が輸送する魔界技術を奪取ないし破壊というありふれたものであったが、組織の規模から対魔忍側も百名前後の部隊を編成。それを率いたのがゆきかぜの父親であった。

任務開始当初は順調であったが、抵抗の激しさと政府から齎された情報以上の兵器と人数に苦戦を強いられ、更には魔界技術を狙った米連の部隊によって背後から強襲を受け、部隊は四分五裂。

稲火は最後まで奮戦し、可能な限りの味方を逃した上で自身は逃げ時を失ったと悟るや、複数人の雷遁使いと協力して命を犠牲にするほどの大火力を発揮し、魔界技術を敵諸共に焼き払った。

払った犠牲は大きかったが、彼の判断は正しかった。輸送されようとしていた魔界技術はエネルギー関係の技術であり、生み出されるエネルギーの量、更には危険性に関しても原子力に勝るもの。これが米連、中華連邦、ロシアに流れれば、世界のパワーバランスは一変していただろう。

日本は東京の片隅に存在する風俗店への潜入調査と三つ巴にまで発展した世界を揺るがしかねない魔界技術争奪戦。

一件、繋がりなどなさそうに見える二つの任務。其処に、一体どんな共通点があると言うのか。

小太郎が発見したのは、情報の共通点。

「対魔忍が自ら情報を掴んで決定する任務もあるが、この二つに関してはどっちも政府が情報入手して対魔忍を動かした任務だ」

「でも、そんな事は珍しくもないわ。これは正式に調査第三部セクション・スリーを通った命令よ」

「ああ。ただ、この二つの任務の情報は、調査第三部が直接掴んだ情報じゃなかった。まあ、そういう任務ばかりじゃない。あそこはこっちと政府の橋渡し。色んな所から色んな情報が流れ込んでくる」

「それで、共通点は？」

「情報の資料内容を見てて思ったんだが、これな、同一人物が書いたみたいなんだよ。その上、同じルートを通じて調査第三部に持ち込まれてる」

内務省公共安全庁・調査第三部はアサギを対魔忍のトップとして擁立した山本 信繁が部長を務める組織。

日本中の様々な政府組織から齎される情報が事実であるか調査・精査し、対魔忍へと受け渡し、必要に応じて支援を行う。

その際、元の情報を改竄・訂正を行わず、調査第三部が直々に情報

を洗い、作成した報告書を添付する。

理由は単純。元の情報と報告書に齟齬があった場合、情報源が売国奴である可能性が高いからだ。

以後、その情報源は調査第三部、対魔忍の両組織から疑惑の目を向けられる事となり、偽の情報を掴まされたと確定するまで監視対象となる。

とは言え、元の情報に関してもパソコンを使って作成された資料であり、筆跡鑑定などは通用しない。が、人の癖というものはどうしようもなく現れる。

漢字、ひらがな、カタカナの使用率とどの文字にどれを使うのか。多用する文法の種類。文の書き出し、区切り、締め括り。数字も英数字を使うのか、漢数字を使うのか。英数字であれば半角、全角のどちらか、或いは頓着しないのか。

直筆でなくとも読み取れる事柄などいくらでもある。小太郎であれば、文章から人間性すらも読み取ってしまいかねない。疑う余地はないだろう。

更に風俗店への潜入調査と魔界技術争奪戦という毛色が全く異なる情報が、全く同一のルートを通じて調査第三部に入るとは考えづらい。

「それに、稲火さんや一緒に死んだ連中の死体を見たか？ あの時、稲火さんを含めて五名の雷遁使いが術を発動、互いに共鳴させて自爆した。皆して黒焦げになって帰ってきたよな？」

「ええ、五人とも一目見ただけでは誰かも分からないほどだった」

「でもな、それでもおかしいところはあった。他の四人は全身傷だらけだったのに、稲火さんだけは雷遁による自傷以外の傷がなかった。一つもだぞ。あれだけの乱戦でそんな事ってありえねえだろ」

「なら、稲火はあの最中で捕らえられようとしていたってことね。この二つの任務は……」

「ああ。毛色も違う、内容も違うが、確実に裏で仕組んだ奴がいる。そいつの目的は水城夫妻の確保だった可能性が高い」

小太郎が重苦しい溜息と共に告げた内容に、アサギは息を呑んだ。敵の目的は分からない。分からないにせよ、驚嘆に値すると同時に腹立たしくも悍ましい。

小太郎に気取られたものの、調査第三部にすら自身の正体を悟らせぬ手練手管は厄介と言わざるを得ない。

しかも、目論見は稲火の奮闘によって無に帰したとは言え、敵は健在なのだ。

「どうして、私にも不知火にも話さなかったの」

「これを聞けばお前が独自に動くのは目に見えてたからだよ。山本長官に打ち上げて動いてもらうか、別の誰かを使うかは分からんがな。そうなりや、不知火さんの目も耳も欺けねえよ。あの人はお前よりも二枚、三枚は上手だ」

「だからと言って、黙っているのは……」

「オレだつてただ黙つてた訳じゃない。この4年、不知火さんやゆきかぜだけじゃなく、水城の人間が関わろうとした任務は決行前に全て目を通してた」

その全てに、同様の作為や悪意は感じられなかった。

諦めたか、とも考えたが、周到に水城夫妻を捕らえようとした相手。一度の失敗程度で諦めるとは考え難い。

事実、今回のヨミハラ潜入に関する資料には、風俗店潜入調査、魔界技術争奪戦と同様の存在を小太郎は感じ取っていた。

しかし、此処で一つの疑問が残る。

4年もの間、誰にも告げずに一人黙々と水城家の関わる任務全てを監視してきた小太郎が、よりにもよって敵の本命とも言える今回のヨミハラ潜入を見過ごしてしまったのか。

「あー……今回の潜入任務、不知火さんが自分から志願したのか？」

「ええ、そうよ。実力的にも能力的にも最適だったというのもあるけ

れど、不知火からの強い志願があつたのよ」

「なら、不知火さんも敵の存在に気付いてる。復讐——いや、違うな。そんな性分の人じゃない。単純に真実を知りたかつたのかねえ」

小太郎が見過ごしたのは、不知火がヨミハラ潜入の任務を握り潰したからだろう。

不知火もまた4年前の出来事に些細な違和感を覚えていたに違いない。そして、真実を探る過程で小太郎もまた探りを入れている事を悟つたのだろう。

彼女にしてみれば、4年越しに降つて湧いたチャンス。もしかしたら一生、何一つ分らないかもしれないかもしれなかつたのだ、これを逃す訳にはいかない。

どれだけ同じ敵の影や匂いを感じ取ろうとも、小太郎にせよ、自身にせよ、確信は得ていても確証はない。

復讐に捕らわれる性分ではないが、せめて夫の死の真相を知りたい。知らずにいればそれまでであつたかもしれないが、知つた以上は止められまい。

「アサギ、許可を。不知火さんは、まだ必要な人材だ」

「当然ね。こんな勝手をされたら、こつちも堪らないわ。不知火も、貴方と一緒に逃がすつもりなんてないわよ、私は。必ず連れ戻しなさい。私とゆきかぜが一緒にお説教して上げなくちゃね」

「水城 不知火救出の任、確かに拝命した」

「それで、いつ動くの？」

「——すぐにさ」

「以上が水城 不知火の置かれた状況であり、これを救出するのが今回の任務だ」

「……………」

任務拝命から一時間。

独立遊撃部隊のメンバーは全員が小太郎宅に集い、今回の任務の説明を受けていた。

ゆきかぜは蒼褪めた表情で唇を噛み締めて、叫びだしたくなる衝動に耐えていた。

当然だ。何者かの目論見は破綻したものの、結果として父親は死んでしまった。母親は何一つ告げる事なく、一人で全てを背負い込んで渦中へと飛び込んでいった。自分は一人で残された上に安穩と日々を過ごすばかり。

腹立たしい。反吐が出るような何者かも、父の死は当に乗り越えたという思い込みも、自分を頼らなかつた母も、何一つ知りもしなかつた自分自身も。

耐えるゆきかぜに掛ける言葉が見当たらず、凜子と紅は俯くばかり。

対照的に、災禍と天音に変化は見られず、普段通りの自然体だ。他人事でしかないという冷徹さ故、と言うよりも、こうした事態は何度となく経験してきたからこそだろう。

「それから、これは隊長としてだが、今回の任務に際して紅、ゆきかぜ、凜子の三名は待機を検討している」

「ふ、ふぎけないでっ！ そんなの納得できないよっ!!」

「ふぎけてなんかない。お前の納得も関係ない。任務の性質上、お前達の能力に向けた任務じゃないってだけだ。何よりも、感情的に過ぎる。暴走されたら敵わん」

小太郎の言葉に、ゆきかぜは食って掛かろうとしたが返ってきたのは、ガラス玉のように無機質な光を宿した瞳と無感情で抑揚の少ない冷徹な言葉だった。

実際の所、小太郎としても余裕がない。

ヨミハラの情報はいくつか手にしてはいるが、それが事実なのかを確認できていない。

これから潜る場所は、文字通りの暗黒なのだ。何もかもが手探りの状態の中で、新米同然の隊員を気にしながら達成できる任務ではないだろう。

それでもなおヨミハラに向かわねばならないのは、不知火がそれほどの人材だからだ。

対魔忍が単純な強さに傾倒し、結果にしか目を向けない思考であるのはこれまでに語った内容から疑う余地はない。

しかし、逆に言えば、適切な人材を適切な任務に振り分け、実行可能な作戦を示してやれば、十分過ぎる成果を上げられると言う事でもある。

今まで、それを熟してきたのが不知火であり、彼女ほどの勇名を馳せた女傑であれば如何なる任務や作戦であれ、誰も不満は上げられない。

彼女がいなくなれば、どれだけアサギや山本長官が努力しようとも、現状はゆっくりと、だが確実に瓦解していく。

結果は言うまでもない。対魔忍は衰退し、魔族と米連が横行する。これだけは避けねばならない。

「これはオレの優しさだと思え。オレ達三人でさえ、返って来れる保証はないんだからな」

「そ、そんな………そんなの、そんなの嫌だよっ！ お父さんやお母さんだけじゃないっ！ 小太郎も、災禍さんも、天音さんだっていなくなっちゃうの!? 私はそれを待ってるだけっ?!」

「……ゆきかぜ」

「やだ、やだよ……やだやだやだっ！　お願い、小太郎っ！　私も連れて行って、ちゃんと命令も聞くから……お願い、お願いしますっ」

小太郎の決定に納得できず、ゆきかぜは幼子が駄々を捏ねるかのようだ。

勝ち気な彼女が見る影もなく打ち拉がれ、それでもなお小太郎に縋る様は、直視に耐えないほど痛々しい。

小太郎を絶対視している天音でさえ、叱責で遮ろうとしない。それは、ゆきかぜの気持ちが届きにくいほどよく分かるからだろう。

もし、これが不知火ではなく小太郎であれば、天音もただ待つだけの選択など決してしない。例え、実現できるだけの能力がなかりうとも、力及ばないと分かっているとしても、必ず動く。

「若様、よろしいでしょうか？」

「何だ、災禍。何かあるのか？」

小太郎は既に全員に対して背を向けていた。

居間の壁の一部を押し込むと壁自体が上下にスライドし、隠された武器や装備が顕になり、必要な道具の選定を行っている。

そんな状況を変えたのは、災禍の凜とした声だった。

「私は三人を連れて行くべきかと。戦闘特化ではありませんが、最近の成長ぶりは目覚ましい。今回の任務、戦闘自体が下策ではありませんが、水城　不知火救出後、撤退時には激しい戦闘も予測されます。手足はあって損はないでしょう」

「——天音は？」

「私も災禍と同意見です。紅の風遁、ゆきかぜの雷遁、凜子の空遁。いずれも戦闘以外での応用も可能と判断します」

背を向けたままであったが、二人の意見に思案をするように腕を止めた。

その隙を伺い、災禍は三人に目配らせを行い、天音は三人に手を降って、早く言えとジェスチャーをしていた。

一瞬、何を言えいいのか分からなかった三人であったが、二人の意図を理解すると間髪入れずに口を開く。

「わ、私の雷遁、攻撃ばかりじゃなくなったからっ！ 磁力を帯びさせたり、電磁波を出せたり、出来るようになってるからっ！」

「私は、そうだな。撤退時には空遁があれば便利だろう。もしかしたら、余計な戦闘は避けられるかもしれない。他にも、遠見も出来るからな。損は無い筈だ」

「私も最近は細かい操作が出来るようになってきた。離れた場所の音を風で運ぶ事も不可能じゃない」

要は、二人とも見本を見せたのだ。

小太郎に対して感情論は通用しない。感情に流された末に待っているのは、大抵が無残な末路だと知っているから。

故に、嘘も誇張もない自らの有用性、自らが生み出せる利益を語る方が余程効果的。その方が、作戦の内容や人員の選定を見直す切欠となる。

「いいだろう。お前達の言葉を前提にして作戦を組み直した。だがな、ゆきかぜ。お前はオレの優しさを無下にした。覚悟しておけ」

「……な、何を？」

「あらゆる残酷を、だ。はっきり言うが、闇の連中はお前の想像を絶する。不知火さんがヨミハラに潜って既に一ヶ月。もう、元の不知火さんであるとは限らない。精神的な意味は勿論のこと、肉体的な意味でもだ。人の形をしているかさえ保証はない」

「……………っ」

「場合によっては、オレはお前に不知火さんを殺せと命じる」

振り返ってゆきかぜに向けた視線は、ぞっとするほど冷え切ってい

た。

開かない右目はそのままに、開いた左目は虚のようだ。あらゆる深淵を覗き込んできたようで、とても人のしていない目ではない。

短い人生であるが、小太郎はこうした任務を一度や二度ではなく経験している。

敵に捕らえられた対魔忍が、魔界技術による改造と洗脳の果てに、かつての人格が見る影もないほどに変質してしまったのを目にした事もある。

苦痛から逃れるために、或いは快樂に魅入られて敵に寝返る者。耐え続けた結果として廃人となった者。それらはまだ可愛い方だ。もっと酷い現実なぞ、それこそごまんと存在する。

貴重な能力を持つが故に、肉体を解体され、脳髄だけの状態で生かされた例も目にした。

肉体の頑強さに目を付けられ、元が人間だったとは信じられないほどの改造を施された例も目にした。

腐臭を放つプールいっぱいの内蔵の匂いを嗅いだ。千もの眼球が涙を流す巨大な肉の塊を目にした。常人が見れば発狂してしまいそうな異形に、殺してくれと懇願された。

何よりも悍ましいのは、そういった例に特に理由がない事か。

やってみたかったから。面白そうだったから。そんな程度の理由で、まるで子供が虫の羽や手足をもぐのように、闇の住人は手を下すのだ。

「それでも。それでも、行くから」

「いいだろう。お前の覚悟は見させてもらった、十分だ。今回の任務、全員で当たる」

ゆきかぜの静かな返答に、小太郎は頷いた。

彼女の姿は、泣き腫らす幼女のそれではなく、小太郎も納得するほどの覚悟を秘めた対魔忍のそれだったからだ。

「ヨミハラ潜入前に、まずは部隊を二つに分ける。天音、お前は三人を率いて奴隸商人ゾクトを確保。但し、誰にも見られるな。今回の敵が何者かは不明だ。対魔忍、魔族、米連全てを警戒しろ」

「承知致しました。次の定期連絡は明日。幸い、人気のない場所の上に屋内での接触です。そこで確実に捕らえます」

「災禍はオレと来い。今回の件に関わりのありそうな政治家が浮かび上がってる。こっちはそいつを確保して、情報を吐かせる」

「はっ、お任せ下さい」

「現刻をもって状況を開始する。これは独立遊撃部隊の試金石となる任務だ。油断はするな、慢心もするな。各員、各々の役割を確実に遂行しろ」

『——了解っ！』

こうして、水城 不知火救出作戦が始まった。

ヨミハラの状況も分からず、敵の正体すら見えていない。不知火の状態も不明であり、余りにも過酷で危険な任務である事は間違いない。

しかし、言える事が一つだけ。

（オレの前では神様だろうが全席指定だ。真正面から正々堂々、不意を打ってやろうじゃないか）

どおでもいい悪役はちやつちやつサツクリ殺しちや
おうねえ

矢崎 宗一。

日本の政権を握る民新党幹事長。上院議員を8期も務める党の重鎮。

中華連合親善議員連盟会長でもあり、中華連合と手を組んで人魔の取引を牛耳るフィクサーとも言われている。

其処までの情報を手にして対魔忍が動かずにいたのは、政界に対する影響力が強すぎたからだ。

矢崎が倒れば日本の政治は間違いなく混乱し、大なり小なり国民の生活に影響が及ぶ。

また政界内部の繋がり故に、対魔忍が動いたと悟られれば、余計な恐怖を他の政治家に抱かせかねず、只でさえ危うい位置に立っている対魔忍の足場が崩壊しかねない。

彼の黒い噂は、対魔忍や調査第三部のみならず、マスコミにまで嗅ぎ付けられるレベル。

女性関係のトラブル、闇の組織との繋がり、政党の活動資金の私的利用など、上げていけばキリがない。

それでもなお政治家としての地位を保てたのは、矢崎個人の政治家としての能力が優れていたというよりも、何処からか泉の如く沸いてくる金の力であった。

多額の金銭による買収行為、闇の組織を使ったライバル、或いはマスコミ関係者の口封じ。金の力があれば何でも出来る訳ではないが、この世に置いて最も強い力の一つでもある。

そして、今日もまた金の力を使い、矢崎は欲望のままに振る舞っていた。

「わあ〜、凄いわ、先生。本当に、豪邸って感じ！」
「ふふふ。まあ、そう易々とは帰って来れないが、この程度でなければ帰ってくる気にもならん」

東京は田園調布。

東京都の世帯平均年収調査では、田園調布に住む人々の平均年収は一千万円を超え、納税金額、坪当たりの価格など、様々な面を考慮しても間違いなく高級住宅地と定義できる土地。

矢崎はそんな土地に400坪ものを手に入れ、目も眩むような大豪邸を建て、政敵に対して自身の圧倒的な資金力を誇示していた。

使いもしない十数台もの高級車。使いもしない数々の部屋。

調度品は国内国外を問わない高級ブランドを選んでおり、物の真の価値を知り得ない者であつても何となく高級感は察せる。

趣味と称して集めた様々な嗜好品には一貫性というものが無い。好きだから集めたのではなく、見栄のために集めたのがよく分かり、部屋を飾るばかりで使われている気配が一切ない。

でっぷりとした肥満体を揺らしながら笑う矢崎の性質を表したかのような、無駄の塊とも言える贅の極み。しかし、この誰が見ても一目で分かる贅の凝らしぶりが頭が空っぽの女を騙すには都合がいい。

本日、矢崎はとある立食パーティーに参加してきた。

何の事はない。大企業が計画した商業施設の完成披露記念のパーティーであつたが、商業施設を建てる土地の購入に関して矢崎も一枚噛んでいた故に、出席する事となつていた。

企業側としてみれば、下げたくもない頭を下げて媚びへつらわなければならぬ相手を招きたくもなかったが、矢崎の持つ力には従わざるを得ない。

矢崎は企業側の内心を察した上で、そうした様を見るのが堪らなく好きだった。何せ、自分が如何に強大な存在かを再認識できる。つまらない立食パーティーも、愉快痛快の極みだ。そしてもう一つ、別の目的もあつた。

挨拶や接待もそこそこに、会場内を練り歩いた矢崎は一人の女性に

目を付けた。

見た目は美しいが、笑い方や仕草に品がなく、たまたま家族の誰かが一山当てただけの如何にも馬鹿そうな成金女。

こうした女は一夜を共にする上で申し分がない。

無論、矢崎ほどの人物であれば、もつと生まれも育ちも良い女は選びたい放題。それだけではなく、闇の組織で調教の施された高級娼婦と数十人買うことも可能だ。

だが、素人女もそれはそれで面白い。

騙されたと分かった瞬間に見せる絶望の表情を見なると股ぐらが勃り立つ。

女にとつて未知の薬物である魔界製の媚薬で乱れに乱れさせてた挙げ句、壊してしまうのも堪らなく興奮する。

矢崎の選ぶ女は大抵、金と快楽の事しか頭がない女である。

豊富な資金力を持つ矢崎にとつて、これほど墮としやすい存在は他にいまい。自宅に招き、見せただけで股ぐらを開く手軽さが何よりもいい。

「……………何だ、貴様」

お持ち帰りした女と腕を組んでリビングの明かりを灯した矢崎は発見した奇妙な存在に、頓狂な声を漏らした。

イタリアから取り寄せた200万は下らない最高級ソファの上に、我が家も同然とばかりに座っている奇妙な男がいれば、おかしな声の一つも漏れよう。

矢崎がその気になれば、屋敷の外に常に常駐している護衛兼SPが駆けつけたであろうが、男の奇妙な格好に警戒心すら浮かんでこなかった。

爪先から首下までを覆う幾枚ものプレートの取り付けられたライダースーツ。ブーツも手袋までもが一体化している。此処まではまだいい。普通でないにせよ、奇妙ではない。

何よりも目を引いたのは、馬のマスクか。そこいらの雑貨屋によく

ある安物のパーティーグッズだ。

顔を隠すにしたところで、もつとマシなものがあるだろうに、それだ。矢崎に浮かんだのは警戒ではなく怒り。男が何者であれ、その格好は矢崎を馬鹿にしたものでしかない。

「何だ、貴様。何処の——」

「馬子にも衣装だな。如何にも馬鹿な男が好きそうな馬鹿女そのものだ」

「図に乗るなよ、この——いいいっ!!」

「言ってくれますね。……おい、動くなよ。声も上げるな。貴様のような馬鹿な男を誘うために、馬鹿女を演じねばならず、私は不愉快の絶頂だ」

意外な程若い声に、馬鹿な若者が暴走したのかと嘲りが浮かんできた矢崎であったが、右腕に走った痛み悲鳴を上げる。

後ろを振り返れば、一晩のお楽しみのためだけに連れ込んだ馬鹿女が右の人差し指を掴んでいた。

陽気さと無知さと品の無さを煮詰めたかのような表情は今やなくなり、理知と冷徹さを帯びた美貌が月光のように冴えている。

とても同一人物とは思えない変化であったが、変装の真髄とは化粧や髪型、衣装の変更ではなく、表情の変化にこそある。人の認識は意外なほど穴だらけで、些細な変化であっても同一人物と認識できなくなってしまうのだから。

矢崎が預かりしらぬ事だが、馬鹿女を演じていたのは他ならぬ災禍であり、馬のマスク男は小太郎である。

「さて、オレはアンタの無駄な負け惜しみを聞くつもりもお喋りをするつもりはない。深夜のドライブと洒落込もうか」

「何を、言っている。お前達、対魔忍かつ！ くがあつ！ 外に何人の護衛がいると思っっているっ！ 此処から逃げられるとも思っっているのかっ！」

「思つてますけど？ さて、車庫に行く前に外の連中に話しを付けて貰おうか。協力してくれよ、先生」

小太郎の言葉通り、事は速やかに終わった。

またしても馬鹿女を演じ始めた災禍に右腕へと絡み付かれた状態で、矢崎は冷や汗を掻きながらもそのまま外の護衛へと、外出する旨を伝えに言った。

護衛を前にするまでは、矢崎に心の余裕があつた。何らかの手段を使つて自分の置かれた状況を護衛に伝えれば、状況は一転し自分の有利になると信じていたからだ。

しかし、護衛は矢崎の言葉を素直に受け入れ、真面目くさつた顔で頷くばかり。

明らかに慌てだした矢崎に対して多少の違和感を覚えたであろうが、異常事態に気付く事はなかつた。

不思議なぞ何もない。ましてや災禍が邪眼の力を使った訳でもない。

護衛達は金で雇われただけで、矢崎に対して忠誠心は一切ない。あつたところで精々が金払いの良い上客程度の認識。

普段から矢崎の身勝手な行動は目に余るものがあり、欲望のままに動く矢崎の護衛は困難を極めた。

今夜、女を連れ込んだ事に関しても、身辺警護の観点から見ても、心極まりなく、その上で家には入るなどまで言われている。

護衛にしてみれば馬鹿馬鹿しいにもほどがある。いくら金払いが良からうが、雇い主の馬鹿さ加減の前には、真面目に仕事をする気すら失せていた。

「なあ？ 言った通りだつたらう？」

「クソ、クソクソっ！ 何を、何を考えている、あの馬鹿どもはっ！ 何のために高い金を払つてっ！」

「誰だつて馬鹿には付き合いたくはないさ。それこそ馬鹿を見るからな」

「こ、この小僧がつ！ 貴様のような若造がつ！」

「ほらほら、前見てないと壁にぶつかっちゃうぞー」

「うおおおっ!!」

愛車である真紅のフェラーリ・カリフォルニアを矢崎に運転させ、深夜の首都高を走っていた。

助手席では災禍がドレス姿のまま日常用の義足から戦闘用の義足へと換装しており、後部座席では小太郎が馬のマスクを外して素顔で寛いでいる。

バックミラー越しに小太郎を睨み付ける矢崎であったが、カーブに差し掛かり、迫ってくる壁に悲鳴を上げながらハンドルを切る。

既のところ激突を免れた矢崎であったが、心休まる余裕などはない。敵である災禍に睨みつけられ、小太郎にはドライビングテクニクもないままにスーパーカーなど保有している見栄の張りようを笑われれば当然だろう。

「では、私はこれにて」

「あいよ。んじゃ、合流地点で落ち合おう」

「なあっ——!?!」

既に役割を果たしていた災禍は日常用の義足を鞆に詰めると、ドアを開け放って車外へと飛び出した。

時速100kmを超える速度で首都高へと身を投げるなど自殺行為であったが、サイドミラーには鋼鉄の義足がアスファルトの地面を確かに捕らえた火花が映し出され、彼女の無事を告げている。

驚異的な身体能力と体捌きに啞然とする矢崎を余所に、小太郎は後部座席から荷物を片手に助手席へと移動する。

「な、何だ、それは……」

「ああ、気にするな。アンタには関係のない代物で、単なるオレの仕事道具だよ」

助手席に持ち出した荷物はやたら大きいナイロン製の袋。

縦は190cm、横は60cm。中に何かが入っているらしいのだが、何かまでは判然としない。

随分と狭くなつた助手席に、身を縮めて袋と一緒に並んで座る様は滑稽ですらあつた。

これまで幾度となく己と闇の組織の取引を邪魔してきた目障りな対魔忍——その若造が隣に座つた状態で、密室空間に二人きり。

まして、首都高での運転中という助けの期待できない状況にあつたが、矢崎にはまだ余裕があつた。

これまで矢崎が殺されてこなかった理由は未だに揺らいでおらず、地位も権力も健在なのだ。殺される筈がない、精々が尋問程度と高を括っている。

彼の考えは間違いではない。間違いではないが——それは小太郎以外の対魔忍であつた場合だけだ。

「まあ、こっちは勝手に喋るから、アンタは聞いていてくれればいい」
(……それだけ？ それだけのためにこんな真似を?)

矢崎は呆気に取られ、未だに小太郎の目的が見えてこずに不安を覚えたが、それ以上の大きな怒りを抱きつつあつた。

拉致にも等しい行為に手を染めながら、尋問ですらなく、ただの独り言を聞けと言うのだ。

対魔忍のクズと己とでは時間の価値が違う。そんな下らない事の為に、時間を無駄にさせられた。

自身が多くの人々の時間をどれだけ無駄にさせ、人生を滅茶苦茶にしてきたかすら棚に上げ、尊大で自尊心の強い矢崎はそう考えて疑わない。怒りの一つも覚えよう。

「——水城 稲火、水城 不知火、水城 ゆきかぜ。政界の重鎮が知っているわけがないと思うけど、この三人は対魔忍の連中なんだわ」

小太郎は首都高を囲む壁の上から覗ける夜空と高層ビルの明かりを眺めながら、世間話でもするような気軽さで言葉を紡ぐ。

三名の名を聞いた瞬間、矢崎は自身の心臓が跳ね上がるのを感じた。

生まれてくる思考は、何処から漏れた、誰の垂れ込みだ、何処まで知っているという疑心暗鬼ばかり。ただの一言で自身を拉致した若者に対する怒りは消え失せ、言い知れぬ不安が増大していく。

しかし、其処は政治家。感情なぞ面には出さない。

政敵へと弱味など見せられない。見せた瞬間に、相手は嬉々として攻め立ててくる。矢崎にしてみれば毅然とした、他者から見れば開き直ったようにしか見えない強気の仮面を被る。

「ふん、貴様等のような狗共の名前など知る筈がないだろうが！」

「いや、わざわざ答えてくれなくていいって。しかしまあ——嘘が下手!!」

「な、何を——」

「だったら、なんでさっきから心拍数が上がってる。おや、体臭も変わったね。なんでかなあ……?」

ぶはっ、と吹き出した少年に、矢崎はますます心拍数が増していく。

人は精神状態が変われば、兆候が現れる。

心拍数の上昇、内分泌の変化に伴った体臭の変化、筋肉の強張り、表情の歪み。上げていけばキリがない。

矢崎は自身の感情を覆い隠し、全く別の感情を表情へと表せるポーカーフェイスを気取っていたようであるが、小太郎に言わせれば一人で素人に過ぎなかったようだ。

「4年前の水城 稲火、水城 不知火へ任務を流すように仕向けたのはアンタだろう?」

「……………だ、だから知らんと」

「おや、会話の前に沈黙を挟んだね。何か必死に考えてんのかい？だから答えなくていいってば。分かりやす過ぎて馬鹿馬鹿しくなってくるからさあ！」

ケタケタと腹を抱えながら笑う青年の姿は陽気そのものであったが、矢崎にしてみれば既に怪物と大差なく映っている。

実際のところ、小太郎は面白くも何ともない。ただ、これが彼のやり口なのだ。

限られた情報から推察し、確証のない推察をまるで見てきたかのようには語る。表情から仕草にまで気を使い、既に全てを知っていると錯覚させ、いま行っているのは尋問ではなく、単なる確認作業に過ぎないのだと思込ませる。

高圧的に尋問するよりも、よほど効果的だ。精神状態が常から変化するほどの、人はボロを出すのだから。

矢崎が絡んでいると踏んだのは、4年前の任務の情報が民新党内部を通じて齎されていたからであり、また情報を流してから調査第三部に持ち込まれるまでの期間が異様に短かったから。

今現在、日本のあらゆる業界、機関は闇の勢力に汚染されきつてこないが、かなりの数が喰い込んできている。政界も例外ではない。

現状況下で闇の勢力にとって不利益となる情報を対魔忍へと流せば、当然目を付けられ、政治家生命のみならず命までも狙われかねない。ただでさえ魔窟と呼んでも差し支えない政界の中で、それは致命的だ。

つまり、そこいらの政治家が情報を流すのならば、もっと慎重な手段を用いるはず。そして慎重な手段を用いれば用いるほど、当然のように時間も掛かってしまう。

この摂理を一切気にしない政治家など二つに一つ。

己の保身を考えず、この国の明日を純粹に憂う理想と正義に燃える本物か。

強大な権力を持っているが故に自らの安全が保障され、既に闇とも

繋がりのある似非か。

本物であれば半端に己の存在を隠すような真似せず、堂々と名を明かした上で情報を流す。

その方が、敵を増やしてしまうが同時に味方も増える。調査第三部にせよ、対魔忍にせよ、政界内における目と耳は欲しいのだから。

今回の件に関して言えば、偽情報という前提からして似非の仕業だと分かるというもの。

更に言えば、民新党の有象無象を黙らせ、闇の勢力からの報復を心配しなくてもいい権力と金を有した人物など、幹事長である矢崎 宗一をおいて他にはいない。

「不思議と言えば不思議だよ。アンタはその三人に直接的な恨みはない筈なんだ。三人が関わった任務にアンタが不利益になるような任務はなかったからね」

「……………」

「とすれば、こつちを動かすように仕向けたのはアンタだが、アンタにそう動くように命令した誰かが居ると考えた方が自然だ」

「……………」

「こつから先は情報がないんで推測に推測を重ねるばかりで恥ずかしいが、アンタに命令できそうな奴となると、アンタの叔父さんかな？ ほら、妖怪とか呼ばれてる鷲巣グループの会長。パトロンみたいだしね」

「ふ、ふん、貴様如きに分かる筈もなければ、言う必要すらない！」
「おやおや、強気になったね。外れている事が当たりつてどこかなあ。ダメだよ、先生。こういう時は何を言ったって墓穴になる。追い詰められた奴は、沈黙が正解。そっちの方が格好も付くからさあ」

最早へらへらと笑う事すらせず、毒蛇か毒蜘蛛を連想させる薄気味の悪い光を宿した瞳を向けられ、矢崎は齒を食い縛って怒りと恐怖に耐えた。

年若い小僧に良い様に見透かさされ、弄ばれ、簡単に情報を引き抜か

れる。彼にしてみれば、かつてない屈辱の経験である。

今すぐにも雄叫びを上げて、目の前のクソガキを殴り倒したい気分であったが、相手は対魔忍であり、首都高での運転中。出来よう筈もない。

此処を過ぎればどうともなる、と溜飲を無理矢理下げて己を納得させていた。

この屈辱は忘れない。民新党の全ての力を以って対魔忍に圧力を掛ける。

それだけではない、この小僧の素性のみならず家族も知人も調べ上げ、男は汚泥に塗れさせ、女は目の前で犯してやると暗い欲望を滾らせる。

本当に、呆れ果てた男だ。

今、自分の置かれている状況というものが、如何に後戻りできない段階にまで進んでいるのかに気付いていない。

これまで彼の安全が保障されてきたのは、彼が手にした金と権力、更には未だに正体の見えない後ろ盾があったからこそ。

この首都高の密室という場所では、金、権力、後ろ盾の力も届きはしないというのに。

更に、小太郎が素顔を晒している意味にも気付いていない。

これは仕方がないか。今現在、対魔忍の大半は顔を隠さない。闇の勢力に対する抑止力として、名前と顔を売る方が効果的であるとアサギが実証してしまったが故に。

だが、小太郎は抑止力ではなく、抑止力としての効果など必要とは思っていない。

対魔忍はあくまでも暴力装置。事が起きれば速やかに排除を実行し、安寧を守ればいい。名前も顔も売る必要性は皆無。暴力装置は事態に対して有効に機能を発揮するだけで十分と断じている。

そんな彼が素顔を晒している。ならば、矢崎の結末はもう約束されているも同然で――

「なっ?! 何だ、何をするっ! 何を考えている、離せっ!!」

「いやあ、最近は飲酒運転への風当たりがきつくなつたよなあ。捕まりや一発免停、事故でも起こそうもんなら関係の無い奴にまで叩かれる。ダメじゃないか、今時ドライブレコーダーの一つも付けとかないなんて。だからこういう目に合う」

「き、貴様、まさか……」

小太郎は助手席から車のハンドルを握り、固定した。

今は直線だからまだ良いが、緩やかなカーブに差し掛かっただけでも事故は免れない速度が出ている。

更に言えば、パーティーに出席している以上は酒も飲んでいる。今ですら吐息からアルコール反応は検出されるだろうし、死後でも司法解剖の結果、表沙汰となる。

狙いが何であるのかを察した矢崎は蒼褪めた表情で小太郎を見るが、彼は既に明後日の方向を向いて興味はなさげであった。

「ああ、因みにオレの仕事道具の中身なんだけどね、雪ちゃんつて言うんだ」

矢崎の与り知らぬところではあるが、ナイロン製の袋の中身は昨夜発見されたさる小金持ちの子女の遺体だ。

年の頃は災禍に近く、性格の悪さから結婚が出来ずにいた上、両親の教育の甲斐なく定職にも付かずに遊び歩いていた。

更には単なる遊びでは飽き足りなくなった彼女は、より大きな快楽を求めて魔界の薬物に手を出した。結果は、薬物の過剰摂取によるオーバードーズ中毒死。

「センサーシヨナルだよなあ。飲酒運転して事故つた政治家の助手席には、薬物中毒で死んだ女の遺体。マスコミはほっとかないだろうね」

「け、警察がこんな事件を見逃すはずがあるかつ！」

「ああ、アンタも警察上層部にお友達が多いんだっけ？ 奇遇だね、オ

レもだよ。但し、こっちは現場の人間の方が多いがね」

矢崎がそうであるように、小太郎にも個人的な伝手がある。

但し、矢崎のように金と権力による繋がりではなく、義と肯定に満ちた繋がりである。

先程語った通り、行政機関である警察の内部にも闇は手を伸ばしている。

犯罪行為の看過、身内の起こした行為の隠蔽工作。端金を受け取る汚職。

決して犯罪者に膝を屈してはならない彼等であつたが、闇からの誘惑により彼等自身が犯罪者となる本末転倒ぶり。

だが、終わりではない。

この墮落に対して抗おうとする者は居る。己が職務を全うしようとする者も居る。自身が踏み止まる事で、少しでも世界を良くしようとする者は決していなくならない。

小太郎が選んだ協力者は、そういった者達だ。誰に笑われようとも、得にも利益にもならなくとも、精一杯の勇氣と誇りだけを胸に前を向く者。彼等は決して裏切らない。裏切るにしても理由は明白、大事な誰かが人質に取られた時だけ。

法の内で足掻く彼等に情報を提供し、彼等の誇りを満たした上で正当な評価と結果を与える。

法の外で蠢く外道に手の届かない彼等に代わって、これを討つ。

ギブアンドテイクは成り立っている以上、矢崎の力任せな関係よりも遙かに健全だ。

「良、識の、良識のある者が、こんな馬鹿げた話を信じるものかっ！」

「良識？ あー、そうかもね。でもさ、良識のある人間って何人だ？」

アンタが普段からバカにしてる国民に良識はあるか？ そもそも、アンタやアンタの周りにいる政治家に良識なんかあつたか？ 頭に金と女と権力しかない奴を、良識あるって言えるかなあ？」

「……………はっ……………はあっ……………はっ」

「少なくともオレにはないかな。アンタと同じく政治家だったら思うのは、バカが散々周りを振り回した挙句に、最後に爆弾を残して死にやがった。一国民だったら、何やらかしてくれてんだこのバカは、だ」
「違う、違う違う違ううっ!!」

「普段のアンタのやり方を思い出せ。金と権力を使つてのゴリ押し。これの何処に良識がある？ 誰もアンタの事を認めちやいない。おべっか使つて、下げたくもない頭を下げてただけさ。内心じゃ、誰もがアンタの事を馬鹿にした。護衛の反応をみりや分かんذار。アンタに良識があり、尊敬を集めていたのなら護衛どもは必ず止めたさ」

矢崎を支えていた心の柱を、懇切丁寧に、念入りに押し折っていく。興味のない相手に此処までしたのは、小太郎自身に意識を向けさせ、己の内面へと意識を向けさせ、眼前の道から意識を逸らさせるためだ。

元より、矢崎には事故死して貰う予定であった。

対魔忍が殺したとなれば民新党は、矢崎の仇を取れと結束し、形振り構わずあらゆる手段を尽くす。

しかし、飲酒運転の末に事故死。助手席には金持ちの不良娘を乗せ、更には事故の前に薬物中毒死していたのならば、彼等はどんな眼を矢崎に向けるのか。

誰も矢崎の擁護などしましいし、矢崎の起こした事故が何者かの手によつて仕組まれたものなどと疑いもしない。皆こう言う———
ああ、やつぱり”。

それほどまでに矢崎は傲慢だったのだ。これが別の政治家であれば、誰かが事故に疑いの一つも向けたであろう。

矢崎の豪邸を出る前に護衛が見せた反応こそ、世間や周囲からの彼に対する答えであり、評価だったのだ。

「ほんじゃま、お互い来世は巧くやろうぜ。真面目に真つ当に。それが一番賢くて、誰からも認められる生き方だからさ」

「た、助け……」

「オレ？ オレに言ってるの？ 助けを求める相手が間違ってる。ア
ンタが頼りにしてるのは金と権力だろ？ そっちに頼むべきだ。オ
レ個人としても嫌だね。ただでさえ面倒な話をこれ以上面倒にする
のは。安心しなよ、このスピードだ。痛いと感じる暇もない即死だか
らさ」

「あ、ああ、あああああああああああ——あっ」

その言葉を最後に、小太郎は車外へと跳び出した。

車内に残った矢崎は狂ったように絶叫し、ブレーキを何度も何度も
踏み締めるが、小太郎が細工していないわけもなく。

矢崎が最期に見たのは、首都高の分岐点の壁だ。

如何な鋼鉄のボディと言えども、時速150kmの速度であつては
分が悪い。

凄まじい轟音と共にフロント部分は壁を砕きつつもひしゃげて潰
れ、衝撃のエネルギーは余すことなく車体を駆け巡る。

変形した車体は矢崎と娘の遺体をも原型を留めぬほどに押し潰し、
漏れ出したガソリンは引火して爆発、炎上する。

轟々と燃え盛る炎と黒煙を眺め、矢崎が一か八かで車外に飛び出し
ていない事を確認すると、小太郎は壁を飛び越える。

この時間帯、この場所に人気がない事は確認済。警察内部の協力者
にも連絡済。

これにて恙無く矢崎 宗一の死は事故死として処理され、明日の朝
には醜聞が日本中を駆け巡る。

「——さてと」

さしたる感慨も見せず、感じずに一仕事終えたと息を吐く小太郎で
あったが、まだまだ本番には程遠い。こんなもの、まだ序の口だ。任
務は暫く続く。

せめて一息と近くにあった自販機でペットボトルの緑茶を買おうと、

目の前にハイエースが止まる。窓越しに運転席から視線を向けていたのは他ならぬ災禍であった。

災禍が車から身を投げた付近に予め止めておいた車両に乗り込み、仕事を終えた小太郎をピックアップする手筈だったのだ。

「天音からゾクト確保の連絡がありました」

「そいつは重畳。合流地点は？」

「首都圏外郭放水路です。水城 不知火がゾクトに指定されて向かったのは其処ですので、入り口も同じかと」

「あの中途半端に作って廃棄されたアレか。まあ、予測の範疇じゃあるがな」

「それから、お気づきになられましたか？」

助手席に小太郎が乗り込むと、災禍は合流地点へと車を走らせ始める。

必要な情報を伝えたが、締め括りの言葉は主語が抜けていて何を指しているのか判然としないが、小太郎には理解できたようだ。

「ああ、勿論。矢崎の護衛の中に人間じゃないのが一人混じってた。他の連中と一緒にやる気がなかったが、ありや淫魔族だな」

「私には其処までは分かりませんでした……」

「すまん。こればかりはオレの感覚の話になるからな。上手く言語化できない」

「いえ、そのような。この手の観察において、若様が外した事はありません。信頼しております」

魔界には様々な種族が存在しており、淫魔族もその内の一つ。

見た目は人間と大差はなく、戦闘に特化した種族でもないが、危険度と脅威度に関しては猛獣を遙かに上回る。

彼等は知的生命体を魅了し、その精を啜る。直接的な性交を行うものは下位も下位。上位の淫魔ともなれば、相手を夢の世界へと引きず

り込んで弄ぶだけで精気を吸収できる。

謀略や策謀に秀で、魔界では数々の戦争を引き起こして漁夫の利を得てきた種族である。

小太郎の感覚は正しく、矢崎の護衛の中には淫魔族が紛れ込んでいたのは確かに事実であった。

しかし、それはそれでおかしな話だ。

矢崎が知っていたのなら、護衛は人間など使わずに魔界の住人で固めてしまえばいい。金は掃いて捨てるほどある男だ。人間よりも強靱で優秀な護衛を雇うことも可能であったはず。

逆に淫魔側が身分を偽って紛れ込んだ可能性もあるが、淫魔としても素性を明かしてしまった方が報酬額を釣り上げられるはず。

どうにも話が噛み合わない。今現状の情報で最も可能性が高いのは――

「矢崎の背後にいた何者か。今回、水城 不知火を陥れようとした仕掛け人の配下、と見るのが自然でしょうね」

「矢崎も手駒の一つに過ぎん訳だ。淫魔族自体が関与しているのかも知れんが、今は断定できんな。アレはアレで種族内で派閥がある上に個人主義みたいだし。今は、可能性の一つとして考えるに留めるべきだろうよ」

「おっ、いたいた」

東京には、建設途中で破棄された様々な施設がある。

元は第二の都心となるべく造設され、今や人種どころか種族の垣塙となり、大小様々な犯罪組織が入り乱れる東京キングダムこそ、その最たるものだろう。

そして、首都圏外郭放水路もそういった建造が中止され、破棄されたものの一つ。

東京地下100mの場所に位置する治水を目的とした施設であったが、未完成のまま放置されて久しい。

破棄された施設は、浮浪者や密入国者のみならず、魔界の住人の溜まり場となりやすい。東京キングダムもそうして政府ですら手のつけられない闇の歓楽街へと変化していったのだ。

独立遊撃部隊が合流地点に選んだのは施設の調圧水槽。

長さ117m、幅78mのコンクリートの柱が59本も床と天井を繋いでいた。

天井に備え付けられた照明は光を放っており、かろうじて闇を退けている。破棄されたにも拘わらず、電灯が生きていたのは何処かの電線から違法に盗み引かれたものだろう。

「来たか、小太郎」

「名前で呼ぶんじゃないやねえよ。今は隊長だ」

気配を殺して接近した小太郎と災禍を最初に気付いたのは紅だった。

安堵と喜びからとは言え、いきなり名前を呼ばれた小太郎はジロリと睨み付ける。紅はわたわたと慌てて両手で口を塞ぎ、やってしまったとばかりにしゅんと項垂れた。

知っていたとは言え、幼馴染のポンコツぶりには彼も呆れるばかり。場数を踏んでいけば成長も期待できるが、今はこれが限界だろう。

「で、コイツが奴隷商人のゾクトか」

「な、何なんだよ、テメエらはっ！ オレは契約通りに定期連絡してただろうがっ！ 話が違うじゃねえか！」

「ああ、そりゃ悪かったな。だが、こつちも状況が変わったんだ。水城不知火が独断専行した可能性がある。その上、この任務は罫の可能性が高いんでな」

「お、オレが嘘を付いてるとでも言っていてえのか……」

「いや、嘘だろうが事実だろうがどっちでもいい。オレ達にはお前の言葉がどっちなのか判断する術がない。自分で直接確かめるだけさ」

奴隷商人ゾクトは、地面に両膝を付いた状態で両手を後頭部で組んでおり、その状態で天音の義手で肩を掴まれていた。

拘束されてこそいないが、逃げられもしない体勢だ。ゾクトのような肥満体では、とてもではないが彼女達からは逃げられず、少しでもおかしな動きを見せれば、ふうまに伝わる体術の達人である天音に即座に首を押し折られるだろう。

自分の置かれた状況が、命懸けの綱渡り染みたものであることを悟っているのか、ゾクトは情けない表情で喚き散らしていたが、小太郎は気にした風もなく淡々と事実だけを告げる。

元々は別件で捕縛された小悪党だ。

元より魔界の住人であり、魔族と呼ばれる有力種族の下層貧民であつた。

表向きは人間に扮して輸入業を営んでいるが、実態は人間や魔族の区別なく需要のある知的種族を狩り出し、売り捌く事を生業としている。

本来であれば、対魔忍の誅戮対象であるが、ヨミハラに関する知識と商売の人脈を買われ、不知火の任務を協力する見返りとして無罪放免が約束されている。言わば、司法取引のようなものだ。

跪いたゾクトに視線を合せ、内心を探るように覗き込む。

奴隷商人など他者を道具としか思わず、強者には媚び諂い、弱者には尊大な態度を取る。

今、ゾクトの表情にあつたのは恐怖だ。但し、対魔忍からの命令を

守っていたのに何故、という困惑混じりのものではない。まさか、もしや、という疑心暗鬼に取り憑かれている。まるで悪戯をした子供が説教を恐れているかのような稚拙さだ。

他の五人にはただ怯えているようにしか見えないが、人と殆ど見分けが付かない淫魔族を遠目で見ただけで見抜くほどの観察眼には、その怯えの理由は明確に読み取れた。

これは自身の裏切りがバレたのか、と判断に迷っているからこそその恐怖であり不安なのだ。

案の定の結果に、小太郎は思わず溜め息を漏らしそうになったが、ぐっと堪えて視線を天音に向け、肩に乗っていた手を外させる。

(とは言え、奴隷商人なんぞ御覧の通り旗色が悪くなればすぐに鞍替えする連中。コイツは仕掛け人と直接の繋がりはないだろう。精々、駒の一つと繋がっている程度か。使えねー)

手駒を動かすだけで、慎重かつ用意周到に自身の存在を隠蔽している仕掛け人が、我が身可愛さから何でも売ると分かっているゾクトに、自身に繋がりがかねない情報を渡している筈がない。

元より期待などしていなかったが、こんな奴隷商人を連絡役に選んでしまったアサギに溜め息しか出てこなかった。

とは言え、アサギはアサギで慎重に検討は重ねていたし、ゾクトの裏切りの可能性を考えなかったわけではない。

ゾクトとの取引に際して、他者の心を覗く読心術を使える東雲 音亜を同席させて、心の内を覗かせた。その結果として、任務に利用できると決めたのだ。

ただ、アサギと音亜が見誤ったのは、ゾクトの無計画さと尻の軽さだ。取引時は我が身可愛さに心から協力したを約束したものの、その後になって身勝手な被害者意識と利益追求から、任務開始直前になって裏切りを決意した。

その時点で、ゾクトの頭からは自分の命が脅かされる可能性など欠片も残っていなかったであろうし、どういうわけだか裏切りは完璧に

成功するものと思ひ込んで、失敗の可能性を考えてすらいない。

此処まで無計画で、すぐにでもバレルような思い付き染みた裏切りをするなど誰も思わない。今回はアサギが馬鹿だったと言うよりは、ゾクトがアサギの予想を上回る馬鹿だったから巧く行かなかつたのである。やはり馬鹿は様々な意味で怖い。

「お前がこれからやるのはヨミハラへの道案内だ。こっちとしちゃ、他に手段もないもんでね」

「へ、へっ、冗談じゃねえ。元の契約と違うじゃねえか。それとも何か、アンタはオレに見返りをくれるってのか？」

「流石は馬鹿だ。見境がない」

「ハッ！ 口の聞き方には気をつける！ 誰がテメエみたいなクソガキのためにタダ働きするもんかよっ！」

小太郎が自分を必要としている。自分にはまだ値打ちがあると踏んだゾクトは、弱気な表情から一転して下卑た笑みを浮かべる。

こうした利益になるものへの嗅ぎ分けは見事であったが、付き合う側にしてみれば鬱陶しい事この上ない。

殺される心配はないと分かった瞬間から増長を見せ、既に自分が裏切っていた事など頭のない様子だ。

余りの変化に紅は唾然とし、凜子は呆れ返り、ゆきかぜは苛立ちを募らせる。

小太郎は思わず引き攣った笑みを浮かべたが、その後ろでは災禍が頭痛でも感じているのか眉間に皺を寄せて、呻き声を漏らしていた。

「貴様、何だその口の聞き方は。貴様の前に居る方をどなたと心得る」

「知った事かよ！ 何処にでもいるようなクソガキじゃねえかつ！」

何だったら、男好きの変態でも紹介してやろうか!? ああ?!

「……オレは黄門様じゃねえよ？ ちよつと落ち着け。頼むから落ち着いてくれ」

「誰がテメエの言う事なんぞ聞くもんかよっ！ オレア十分落ち着い

てるぜっ！」

「お前に言っつてんじやねえんだよなあ……」

全員から注目を浴び、いい気になっていたが、皆の視線が自分ではなく背後に向けられている事に気が付く。

ゾクトが背後に視線を向けてみれば、肩を掴んでいた時と同じ位置で天音が笑みを浮かべていた。但し、額には青筋が浮かび上がっている。

本来笑うという行為は攻撃的なものであり、獣が牙を剥く行為が原点であるという。

((……アカン))

「貴様如き下衆が凶に乗るな。もう許さん。貴様は絶対に許さん」

「な、何なんだよ！ この女、突然っ?!」

言葉を紡ぐ毎にボルテージが上がり、天音の表情からは笑みが消え失せ、忠犬から狂犬にクラスチェンジ。

小太郎が無言で頭を抱える中、残りの四人はスンツと擬音が聞こえる無表情で全てを諦めた。

小太郎が居る前で、小太郎を罵ればこうなる。

その敬愛ぶりと来たら、向けられている彼自身ですらドン引きするレベルだ。

「オレが聞きてえよ。おい、顔は止めろよなあ、顔は」

「はっ！ 承知致しました死ねええっ!!」

「げぼおおおおおっ!!」

【速報】 狂犬天音、返事をしながらゾクト氏の鳩尾に向けてサツカーボールキック。

100キロを超えるであろう肥満体が宙を舞い、10mは離れた位置に落下する。

失神さえ許されなかったゾクトは腹を押さえて蹲り、盛大な勢いで吐瀉物を撒き散らした。

見るも無残な状況であるが、天音はまだ足りぬと怒気を膨れ上がらせて歩み寄っていく。

「よくも隊長を罵倒したな、よくも、よくもオオ！ 貴様如きが罵倒するなどという料簡だ貴様アア！！ 万死に値する……万死に値するウ！！」

「わー！ タンマ、ちよつとタンマ！ 殺しちゃうのはマズいからっ！」

「天音殿オツ！ 落ち着いて下さい何歳ですかっ！」

「名前を呼ぶな、馬鹿者オツ！ 今年で25だっ！」

「その歳でこの落ち着きの無さはマズいぞ、執事としてもマズいからっ！」

「ほらっ！ 隊長も止めてよお！！」

「やだよ、怖い」

「……………はあ」

ゲロゲロやっているゾクトに、万死万死言っている天音。

紅は羽交い絞めに、ゆきかぜは胴に跳び付き、凜子は真正面から、三人掛かりで止めようとするが止まらない。

ゆきかぜから助けを求められた小太郎であったが、本気で顔を蒼褪めさせながら首を振って拒絶する。まさにカオスな事態に、災禍は盛大に溜息を吐くのであった。

それから五分後——

「ほら、どうどう。ステイ、ステイステイ」

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

「あ、があっ……何なんだよ、その狂犬はあっ！」

「あー、まあなんだ。悪かったな、手荒に扱って。それで？ 協力する気になったか？」

「だ、誰が、協力なんざ……」
「あつそお。なら仕方ないな」

三人掛かりで抑えられた天音は、小太郎が前に立った事でようやく落ち着きを取り戻しつつあったが、まだ興奮しているらしく息が荒い。

天音の狂暴さに恐怖を覚えるゾクトであったが、小太郎へは隊長と呼ばれてはいるが、所詮は単なる若造という認識しかないらしく、まだ強気に出ている。

無理もない。隊長でありながら天音を御し切れていないのは一目瞭然で、年齢相応に部隊の長としても日が浅いと考えるのは当然だろう。

彼の考えに訂正を入れるのならば、小太郎は御し切れていないのではなく、必要のない部分まで御さないだけという点か。

人を扱う上では肝心な所だけ押さえておけば、後は好きにさせていい、というのが彼の考えだ。それ以上をやろうとなると、余計な反発も生みかねず、掛ける手間に対して効果が期待薄なのだ。

事実、天音はゾクトを殺してもいないし、小太郎の名も自身の名前も明かさなかった。小太郎の基準に沿えば、十分に制御の範疇である。

更に容姿というものは人を判断する上で重要な要素であり、醸す雰囲気よりも分かりやすく、誰の眼にも似たように映る。

その点、小太郎は失格だろう。少なくとも、何処にでもいる青年の一人にしか見えない。

あからさまに己を侮るゾクトに、当然だなと納得し、小太郎は災禍に視線を飛ばし手を伸ばした。

すると、災禍は小太郎が変わって背負っていた彼の装備品から一丁の拳銃を投げ渡す。

F N X | 45。

F a b r i q u e N a t i o n a l e 社製の F o r t y | N i
n e を祖とする拳銃であり、米連軍の次期サイドアームトライアルに

参加した過程で得たノウハウを基に作られたポリマーフレームの自動式拳銃。

同社のFNXシリーズの・45ACP弾使用であり、銃口先端のカーブを外せば消音機サブレッサ取り付け、遊底上部にはダットサイト用のネジ穴とスペース、銃身下部にはライトやレーザーサイト装着用のピカニティールールが設けられ、様々なオプション装着が可能と特殊部隊向けに開発された銃と言ってもいい。尤も、彼の銃には何のオプションも装着されていないが。

FNX―45を選んだのは、・45ACP弾仕様である事と装填できる弾数が15発＋1発と45口径の中では最も多いからであった。

・45ACP弾はストッピングパワーが自慢とされる弾丸であるが、実際の所は9mmパラベラム弾と威力は大差がなく反動が大きい。過分に盲信されているのは否めない。

だが、消音機との相性が良く、亜音速弾としてみれば非常に優秀だ。9mmパラベラム弾を始めとした拳銃弾は弾頭が音速を超えてしまうために衝撃波と音が発生してしまい、減音効果を得るためには火薬の量を減らした弱装弾を使用せねばならず、ストッピングパワーの低下は免れない。

対し、45ACP弾は元々弾頭の速度は亜音速であるために弱装弾を使用する必要がない。消音機の使用が前提であれば、こちらの方が優秀だ。

今回の任務は派手な戦闘は下策も下策。

最後の撤退時までには、殺しは避けられずとも戦闘は避けた方が自身の存在を悟られずに事を進められる以上、消音機と・45ACP弾の使用は当然の選択である。

安全装置を解除し、冷めた目と共に銃口をゾクトの眉間に向ける。向けられた彼からニヤついた笑みは消えない。殺されるわけがない、と高を括っていた。

「くだらねえ脅しなんぞ、やめ——ひいつ?！」

そんなゾクトの甘い考えを撃ち抜くように、小太郎は至極あつさり
と引き金を引いてのけた。

撃鉄の落ちる音にゾクトは反射的に両手で顔を覆い、情けない声を
上げる。意識もあり、痛みすらない状態を確認すると、信じられない
ものを見る表情で小太郎を見た。

「おいおい、勘弁してくれ。弾入ってねえのかよ。弾くれ弾あ」

「申し訳御座いません。銃など使ったこともないので」

弾丸は発射されなかった。元より銃に弾が入っていなかったのだ。

不手際を咎めるように小太郎は災禍を見たが、張本人は気にした様
子もなく弾の入った弾倉を投げ渡す。

全く、とでも言いたげなうんざりした表情ながらも手際は見事だっ
た。

素人目に見てもぎこちなさを感じさせない自然体のまま、手元に視
線すら落とさずに、一切の滞りなくスムーズに再装填を完了させる。

「な、何考えてんだテメエっ……!」

「ちよ、ちよつと、隊長……!」

「別にいいだろ、殺してもさ。協力する気がねえんだ、生かしておく理
由も価値ないね。手段は他にもある。不知火さんが向かったのは此
処だろ? 二、三日かかるかもしれないが他に此処を利用しての奴を待
ち構えてもいいし、虱潰しに探す手もある」

慌てふためくゾクトと信じられないものを見るゆきかぜを筆頭と
する三人を尻目に、小太郎は冷めた無表情のままだ。

ゾクトが指定し、不知火が向かった場所であり、ゾクトが定期連絡
に關しても近場を選んでいる以上、ヨミハラへの入り口は此処と見て
いいだろう。

かなりの広さはあるが、人や魔族が通れば気配は分かる。小太郎が
言う通りに虱潰しに探す手もある。

入り口さえ分かってしまえば、後はどうとでもなる。

例え迷路のように入り組んでいようと、道中に無数の罠や恐ろしい怪物が居ようとも踏破する術は無数に存在する。何もゾクトを利用する必要はない。

救出任務に置いて時間は重要なファクターであるが、無理に時間を短縮しようとするのは悪手だ。

より堅実かつ確実な方法を取らねば、ミイラ取りがミイラになってしまう。それだけは何としても避けねばならない。

「わ、わ、分かったっ！ きよ、協力する！ 協力するから命だけは助けてくれっ！」

「えー？ 別にいいよ、無理しなくても。こっちが頑張ればいいだけの話だし」

「わ、悪かった！ 今までの事は全部謝る、この通りだっ！ お、オレだって自分が可愛い！ い、命だけは、命だけは勘弁してくれっ！」

小太郎の怒りも苛立ちも感じさせない静か過ぎる態度に、ゾクトは蒼褪めた顔で土下座をしてみつともなく命乞いをする。

先程とは180度違う態度に、三人娘はホッと一息を吐くと同時に溜飲の下がる思いであったが、天音は未だに怒り心頭で災禍に諫められていた。

小太郎は銃口を向けたまま、暫くゾクトの様子を眺めていたが、やがて撃鉄と共に銃口を下ろして肩を竦める。

「まあ、其処まで言うなら、使つてやるか」

「か、感謝するぜ、旦那アっ！」

「薄気味悪いから媚びるな。おい、天音」

（クク、案の定油断してやがる。アレだけ名前を呼ぶなって言つてのによお。バカ対魔忍がっ！）

脚に縋り付くような勢いで擦り寄ってくるゾクトを、一瞥すらせず

に小太郎は指で天音を呼ぶ。

ゾクト以外の全員が小太郎の言動に気を取られていて気づかなかったが、ゾクトは顔を地面に向けたままほくそ笑んでいた。

何の事はない。不知火の身柄を売った時と同様に、彼等も同じ罠に嵌めるつもりなのだ。

彼女を売ったのはヨミハラにある娼館。元々娼館の主とは取引があり、以前から対魔忍の奴隷を欲しがっていた事を思い出して、ほぼほぼ思いつきに近い形で決行した。

今回もそうすればいい。もつとも、娼館は娼婦を専門に扱っており、男娼は専門外。これから自分を軽んじた男が、どんな地獄に堕ちるのかを想像するだけで笑いが止まらなかった。

「若、よろしいのですか？」

「構うな。それからお前には別行動を取って貰う」

「えっ!? し、しかし、ヨミハラは危険ですし、若の執事たる私が離れる訳には……」

執事たる自分が、その上自分だけが小太郎の傍を離れるように命じられ、天音は難色を示した。

災禍は兎も角、後からやってきた三人を連れて行くというのに、自分分は置いていかれる。置き去りにされてしまったかのように納得が行かない。

「お前にしか頼めん事だ、聞き分けてくれ」

「承知しましたっ！ お任せ下さい！」

しかし、小太郎のお前にしかの部分~~を~~強調した台詞に、天音は手の平~~を~~スクリュー状態に陥る。

食い気味に返事をした表情は、0.2秒前までは落ち沈んでいたというのに、今や喜びに輝いて頬が紅潮していた。

凄く扱い難いようにでいて凄く扱い易く、いや、やっぱりちよつと扱

い難い天音に小太郎も微妙な表情であった。

彼が命じたのは、五車学園内における偽装工作であった。

今回、彼は隊長として作戦の指揮を取るだけでなく、災禍と共に諜報員や工作員としての役目も熟さねばならない。

それはまだいい。配属された人員が諜報・工作関係に使える人材ではなかったし、元々対魔忍はそちらの方面が弱い。忍なのに。

問題なのは、隊長としての己と前線で戦う己を切り離し、周囲や敵から別人だと認識され続ける事だ。

彼は己がこれまでアサギの無茶振りや仲間の尻拭いを投げて寄越され、成否如何は兎も角生き残れてきたのは相手が己の情報を知り得なかつたと断じている。

顔を覆い、名前を偽り、存在を消す。だからこそ、敵は正体不明の敵を侮り、或いは恐れ、本来の実力を発揮できなかつた。堂々と存在を明かすよりも、ひたすらに隠蔽した方が何かとメリットが多い。

ふうま再興のため、独立遊撃部隊を隊長として任された以上、任務を成功させるほど敵味方問わずに存在を知られてしまう。

それは仕方がない。そうでもしなければ、ふうま再興など夢のまた夢だ。名と実、この二つがなければ誰も納得などしない。

故に、小太郎の方針はこうだ。

隊長としての己は、学園内に留まり通信装置を使って指揮を行っていると周囲にそう思い込ませる。そして現場では、全くの別人に成りますし、現在の独立遊撃部隊に足りない部分を補う、である。

隊長としての自分と隊員としての自分を作り出し、他者には別人として認識されるだけでもメリットはある。

隊長としては五車学園を動かない安楽椅子探偵ならぬ安楽椅子隊長でいればいい。

周囲にはそう認識されていれば、万が一、対魔忍の内部に裏切り者が居たとしても、出たとしても、寝返りを打った側に正確な情報を渡せない。

隊員としては敵に部隊の要であると発覚せず、紅達のように名も顔も売れた者の裏に隠れて好き放題に出来る。

そもそも作戦指揮官が最前線に出るなど愚行も愚行。小太郎は分かっているながらも人材不足故に出なければならぬが、これで自身への注目を薄くし、リスクを極限でできる。

「では、私は五車学園に戻りますっ！ ご武運を！」

「よおし。そんじやま、ヨミハラに行ってみますか。鬼が出るか蛇が出るか。はたまたもつと恐ろしいものが出てくるか。行ってみてからのお楽しみ、ってな」

これから赴く都市も任務にも適さない、やる気もなく緊張感もない脱力しきった緩い声。

既に任務の成功を確信していたからか、はたまた更なる苦勞を感じ取ったの諦念からであったのか。それを知る者は、小太郎以外には誰もいなかった。

ヨミハラ到着。そしてやっぱり居るあの御方

首都圏外郭放水路を後にして数時間。

ゾクトを含めた独立遊撃部隊一行は、調圧水槽の一角に偽装されていた入り口からヨミハラへの道を進んでいた。

広大な放水路から一転し、狭い坑道は息が詰まる。

剥き出しの岩盤が木材によって補強されている様は、まるで明治に栄えた炭鉱のよう。

十数mおきに天井へと設置された粗末な照明が唯一の光源であり、辛うじて足元を照らすばかり。

薄暗い通路にはじつとりと湿った空気に満ちていて、無数の横道が伸びている。

闇はそこかしこに存在しており、坑道に満ちる土や埃の匂いに混じり、獣を連想させる生臭さが漂う。

異様な空気は不安を誘い、ふとした瞬間に横道から得体の知れない何かが飛びかかってきそうであった。

(後北条氏の隠し鉱山が東京の地下にあると聞いた事はあるが……それを元にして作ったのか、はたまた一から掘り進んだのか。どちらにせよ、暇なもんだな)

坑道の様子を見るに、機械の類は使っていないだろう。岩盤の様子から手彫りらしき癖が伺える。

無言のまま坑道の様子を探っていた小太郎は、魔族や魔族に与した人間の涙ぐましい努力に呆れ返っていた。

裏でこそそこそとこんな事に労力を費やすくらいなら、表で真つ当な職について労力を費やした方がマシだ。

確かに世界の裏側、闇の領域では短時間で膨大な金が入るであろうし、欲望に正直に生きられるが、その分だけ命の危険に曝され、生

活自体が長く続かない。

そんな事なら、実社会の中でこつこつと努力を積み重ねた方が建設的だ。窮屈で柵だらけの人生だろうが、命の危険もなく生活も長く続く。真つ当であればあるほどに周囲には信頼に値する人間で満ち、不安のない一生を送れる可能性が高い。

どちらをより良い選択かは個人の感性に委ねられるが、少なくとも小太郎には後者が最良であるようだ。

「だ、旦那あ。此処から先は……」

「猫撫で声で話しかけるな、気持ち悪い。どうした、さっさと行け」

「旦那はご存知ないかもしれやせんが、此処から先は完全な闇の領域でさあ」

ヨミハラへの道程を先導させられていたゾクトは足を止め、揉み手しながら媚び諂った笑みを貼り付けて振り返る。

調圧水槽で見せたものとは180度違った態度であつたが、小太郎はおべっかを求めていないと無表情なままだ。

しかし、ゾクトも引かなかつた。彼としても引くに引けまい。此処から先の行動が、彼の目論見の成否を決めるのだから。

「この坑道にやあ、奴隷商人どもが扱いきれなくなったオーガやトロールが野生化して住み着いてやす。それだけじゃねえ、武装難民やらも出るって噂だ」

「ふん。つまり何か？ 何処に誰の目があるか分からない。オレやコイツ等を拘束もせずに連れ立っていたら怪しまれると？」

「流石、旦那っ！ 分かつてらっしやる！」

へへえ、と平身低頭して己を持ち上げるゾクトに、小太郎は冷めた表情のままだ。

考えれば当然の帰結。そんな程度の事を持ち上げられた所で逆に馬鹿にされているようなものだ。

小太郎達が油断していると思ひ込んでいたゾクトには、そんな考えすら浮かんでいないらしい。持ち上げれば持ち上げるほど、いい気になると思っている。

これ以上、ゾクトの下手くそな演技に付き合うのも気が滅入るばかりで先に進まない。

そう判断した小太郎は、ゾクトの前置きから察した核心を付く。にやにやと笑いながらゾクトが取り出したのは、首輪に手枷と足枷が鎖で連結された代物に、アイマスクとギャグボールの拘束具だった。

思惑が透けて見える露骨なラインナップに、小太郎は呆れ返りながら首を降る。もう馬鹿馬鹿しくて演技すらしていなかった。

「枷だけで十分だ。残りはいらない。してもアイマスクまでだ。このギャグボール、薬も入ってるじゃねえか」

「い、いや、しかしですね旦那」

「何か文句でも？ 拘束はしているだろう。お前の実力じゃ、対魔忍を拘束するには毒に頼る外はない。散布型の毒ガスを使った体でいい。上手く誤魔化せ。それがお前の仕事だ」

「だ、だけどよお、さつきも言ったが何処に目があるのか……」

「それをオレ考えていないわけないだろう。さつきからずっと周囲を警戒してるよ。直線の少ない薄暗い坑道だ。精々、半径50m圏内を警戒してりや十分だ。オレの感覚で十分に補足できる」

ゾクトから拘束具一式を奪い取り、ぐうの音も出ない正論で黙らせる。

振り返って四人を見れば、ゾクトに対して冷たい視線を、相手をしなければならぬ小太郎には同情の視線を送っていた。

同情の視線に、泣きたくなるねと本気で呟きながら、拘束具を首と手足に嵌めていく。

後ろ手ではなく前で両手を合わさせて拘束し、続いて首と足首に輪を嵌める。但し、錠は掛けない。不測の事態に際しては、即座に行動

を起こせるようにするためだ。

「ちよ、ちよつと待つてくたせえ、旦那は……？」

「オレは必要ないだろ。ヨミハラに男の奴隷なんて売れるかどうかも分からないものを連れてくる時点で違和感があるだろうが。オレはお前の新しい付き人か相棒で通せ。何のために着替えたと思つてい
る」

拘束具から伸びた鎖を片手に、動揺するゾクトの言葉を鼻で笑う。

男への性技も使えるが、見た目からはそんな事は分からず男娼と
いつた趣ではない。男である自分が奴隷という設定は無理がある。

故に、小太郎は坑道に入る前に真っ黒なライダースーツから、薄汚
れたシャツとジーンズ、その上からはまたも襤褸布のようなフード付
きのロングコートに着替え、頭には右目と頭部を覆うバンダナを巻い
ていた。

浮浪者のような見窄らしさは確かにカタギのそれではなく、闇の性
質を表している。これならば見たことのない新顔を警戒はしても、不
審には思うまい。

「お前の役割は道案内だけだ。道中をどうするかはオレが決める事、
違うか？」

「い、いや………そ、その通りです、はい」

「分かったならさっさと行け」

己の務めを果たせと尻を蹴り上げる。

先を進むゾクトは見えない位置で忌々しげに表情を歪めたが、次第
に焦りが募る。

少なくとも不知火に関しては今の手法で罠に嵌めた。尤も、それは
ゾクトの主観に過ぎず、不知火が自ら罠に飛び込んだ事を考えれば、
それも疑問であるが。

ともあれ、既に事態はゾクトの思惑から外れ始めている。

なおも腹に一物抱えた奴隷商人に余裕があったのは、ヨミハラが完全に闇の領域であったからだろう。

対魔忍が何人居ようがヨミハラほどの魔界都市をどうする事もできない。到着さえすればどうともなると信じて疑わない。

確かに、ゾクトの考えは正しい。

ヨミハラ的全貌が知れていない状態では、如何に小太郎が率いる独立遊撃部隊と言えども分が悪い。

しかし、それはあくまでもヨミハラという都市であって、ゾクトの命には関わりのない話だ。彼自身とヨミハラは決してイコールでは結ばれない。そもそも、ヨミハラは彼が作り上げたものでもなければ、所有物でもないのだ。

愉快なほど滑稽で哀れな思考の間違いに気付かず、当初の予定通り奴隷商人は利用されるだけ利用される。後に待っているものは言うまでもない。

——そうしてヨミハラの入り口に到着したのは、翌日の夜。

拘束によって歩く事すら気を遣う四人の体力の消耗を考えながら、小休止を挟んだ事もあって、かなりの時間を要する道中。

ゾクトも我が身が可愛いらしく、危険な存在が潜む坑道を慎重に進み、逃げる事なく入り口への案内を果たした。

坑道を抜けると突如として天井も壁も開けた場所に出る。数十m先には派手なネオンの輝きが見えた。

今いる場所は言わば玄関口だ。その証拠に、街の手前に首が二つある異形の犬を連れた警備兵らしき男が二人立っている。

その直ぐ隣には守衛所なのか、はたまた詰所らしき小屋が立っており、ヨミハラへの異物の侵入を拒んでいるかのようだ。

「よお、ゾクトの旦那ー！」

先頭に行くゾクトの姿を見つけると、警備兵の一人が声を掛けてき

た。

ヨミハラへの道案内を見込まれるほどの男だ。警備兵と顔馴染みでも不思議ではない。

ゾクトは直ぐにでも警備兵に助けを求めるべきかを悩んでいたが、小太郎達は冷静に周囲を観察していた。

(オレと災禍は後詰めでもいいか)

(監視カメラは二つ。この距離なら、ライティングシューターが無くてもアレがある)

(私と紅は警備兵と犬か)

(素手でも十分に仕留められる)

(さて、お手並み拝見させて貰おうか)

異形の犬が鼻をヒクつかせて匂いを嗅ぐと、地獄の其処から響くような低い唸り声を上げる。

対魔忍用の特殊警備犬は対魔粒子を嗅ぎ分ける。ヨミハラへの潜入を困難としている要因の一つだ。

小太郎もこれの鼻を騙せるとは思っていない。今、この場に居る者達に対魔忍とバレたところで構いはしないのだ。

「ゾクトの旦那、まさかこいつら……」

犬の変化を目にした警備兵はゾクトに確認を取ろうとし、ゾクトはどの言葉を口にすべきか悩んだ瞬間――

「――！――」

――紅と凜子が自ら拘束具を解いて、地を蹴った。

事前に打ち合わせなどしていない。そんなことをしてはゾクトが何をしてくすか分かったものではない。

二人が今回の作戦について必要な部分は何かを考えた上で、行動し

た結果である。犬の鼻を騙せぬ以上は仕方がない。まずはこの門を一時的に制圧する、と。

反応したのは人間よりも遥かに高い身体能力を有する二頭の警備犬。

凶暴な爪と牙を有する魔獣を相手に、一見すれば徒手空拳の乙女二人では分が悪く見えるが——仮にも逸刀流と心願寺流を修めた身。両流派の歴史は長く、無手のまま敵を屠り去る技も少なくない。

凜子は飛び掛かってくる犬の首に向けて弧を描く軌跡で爪先を減り込ませ、紅は大きく振り上げた肘を喉笛を噛み切られる寸前に頭目掛けて振り落ろす。

斬撃じみた蹴撃は二つの首を同時に粉碎し、鉄槌じみた肘打は頭骨を粉々にした後、残ったもう一方の首を両手で掴んで捻り折った。

一瞬の出来事に、警備兵どころかゾクトですら驚きの余りに声すら上げられずにいる内に、ゆきかぜは雷遁の術を発動させた。

但し、発したのは得意の雷撃ではなく、電磁波だ。

電気エネルギーは、磁力や電磁波と密接な関係にある。小太郎は、その理屈と理論をゆきかぜに徹底して学ばせた。己の出来る事を自覚させ、其処から更に何処を伸ばすべきなのかを自覚させ、そのため何が必要なのかを自覚させる最短距離はそれだ。

知識はゆきかぜの力となり、想像力を伸ばし、遂には新たな領域へと脚を踏み入れさせる。彼女が自身の力と知識を信じれば信じるほどに、踏み込める領域は深く広くなる。

事実として、ゆきかぜはそれを現実とした。

知識はゆきかぜの力となり、想像力を伸ばし、遂には新たな領域へと脚を踏み入れる。彼女が自身の力と知識を信じれば信じるほどに、踏み込める領域は深く広くなっていく。

彼女の足を踏み入れた領域、新たな忍法を八色稻妻・黒雷と名付けた。

効果は単純。雷撃を電磁パルスに変換し、周囲へと放射する。射程はまだ半径5mほどであるが、目標である監視カメラとその記録装置は圏内に存在している。

EMPによる攻撃はケーブルやアンテナに高エネルギーのサージ電流を生じさせ、半導体や電子回路に甚大なダメージを与える。一部の軍事兵器のようにEMP攻撃を想定した防護措置が取られていない機器は一瞬で破壊される。

煙と火花を伴って破壊された監視装置に気づきもせず、ゆきかぜが何をしたのか理解できぬまま警備兵は肩に掛けたアサルトライフルに手を掛けるが、余りにも遅すぎた。

凜子は一人の背後に回り込むや頭頂と顎に手を掛けて、頸椎を捻り壊す。

紅は引き金を引かれるよりも早く間合いを詰め、胸部目掛けて掌打を放ち、心臓を破裂させる。

断末魔の悲鳴すらなく倒れた警備兵に、上手くいったと安堵の吐息を吐いた三人であったが――

「――」

――突如として開いた守衛所の中から一部始終を目撃していた最後の警備兵が現れる。

警備兵は未だ何一つ理解していない混乱状態であったが、何をすべきなのかは身体が覚えていた。即ち、異物の排除。

アサルトライフルの安全装置は外れている。銃口を向け、引き金を引くだけの簡単な仕事だ。

凜子と紅、更にはゆきかぜまで。

三人が三人とも一度は息を吐いてしまい、次の一手が間に合わない。それでもなお動こうとする。

「あ、がつ?!」

銃を乱射しようとした警備兵から皆を救ったのは、他ならぬ災禍であった。

警備兵の死角である開け放たれた扉の裏に移動していた彼女は、高

性能の義足で扉を蹴り飛ばす。

勢いよく閉じようとした扉は警備兵の横合いからぶつかり、銃の照準どころか彼の身体を転ばせた。

余裕すら感じるゆつたりとした足取りで倒れた警備兵へと近づくと、首に踵を掛けて体重を掛ける。

反射的に銃から手を離し、喉を潰す脚へと手を伸ばした警備兵であったが、悪手も悪手。彼は手にした銃で弾丸を放つべきだった。

災禍は半端な訓練しか受けていない事を見越しており、己の役割よりも己の命を優先すると分かっていた。

ゾツとするほど冷たい目線のまま、喜びも哀しみも嫌悪すらなく、首の骨を踏み砕いた。警備兵の唯一の幸運は、彼女の凍てついた美貌に見惚れながら逝った事か。

「二つ一つの想定が甘い。目に見えている敵にだけ気を取られるのは悪い癖だ」

警備兵の目から光が消えるのを見届けて踵を離し、三人に向けて言い放つ。

ぐうの音も出ないとはこの事だ。三人には悔しさすら浮かんでいない。あるのは、次の機会に失敗を活かす事だけであった。

「な、な、な、何のつもりだっ！ こんな真似してただで済むと思ってるのか、この馬鹿どもっ！ オレは今日からの面下げて、ヨミハラを歩けきやあいなんだっ!!」

「元より我々はこのつもりだ。お前の役割は道案内。もう用済みだ」

「な、何を——っ?!」

「あー、よっこいしょ、と」

警備兵を殺せば、異常を察知したヨミハラの治安維持部隊が動き出す。

そうならば、いずれは対魔忍の存在に気付くだろうし、対魔忍を招

き入れた者を探し始めるだろう。いずれは己へと行き当たるかもしれない。

ゾクトの顧客は東京にも東京キングダムにも存在しているが、ヨミハラとて貴重な売り場だ。此処を利用してきなくなれば売上の低下は免れず、ノマドを介してゾクトの裏切りが闇の世界に知れ渡る。

奴隷商人を続けるつもりである以上、対魔忍が彼の商売に目を瞑る事はあっても、先行きを心配する理由もない。

彼が人界の中でひっそりと慎ましく、人の世の法に従って生きるつもりであるのならば、その限りではなかったが、自ら奴隷商人を続けると宣言してしまっていた。

彼は、昔も奴隷商人という越えてはならない一線を自ら踏み越えた。そして今、最後の改心の機会を蹴った。

何の感情も浮かんでいない怜悯な瞳と声で災禍が宣告した瞬間、ゾクトの首に革のベルトが巻き付けられる。

小太郎が腰に巻いていたベルトを外し、背後に回り込んで背中合わせの状態で首へと掛けたのである。

彼がそのまま前のめりになると、ゾクトの両足が地面から離れ、彼の体重全てが首への負担となって締め付けた。

「あつ……かつ……な……げえ……ん……で……つ」

急速に気管と動脈を締め上げられたゾクトは舌を突き出して絶息に喘ぎ、顔から出る全ての液体を吹き出させる。

自らの陥った状況から足掻こうとも、ベルトは完全に首へと埋没しており、外す事は不可能。暴れ藻掻こうとも小太郎は器用に重心を移動させて背中から落とさない。

何故と嘯く恥知らずさは、彼に売られた奴隷にしてみれば業腹だろう。

全ては彼自身の自業自得、因果応報が招いた結末だ。単に手を下したのが対魔忍であり、小太郎であったというだけ。

ゾクトの脳裏には走馬灯が駆け巡り、せめて最後に自ら働いた悪事

の数々を懺悔する機会を与えられながらも何一つ理解することはなく、何故という疑問と共に事切れた。

彼等、闇の者に懺悔など存在しない。

そもそも、彼等の理屈は弱い方が、騙された方が悪いという弱肉強食に沿ったものである。弱者を食い物にしたところで罪悪感など抱くはずもない。

だからこうして不様に死んだ。彼が喰い物とした者達同様に、騙された弱者として処分された。これはそれだけの話だ。

「——さてと」

「警備兵の方はどうする?」

「そのまま捨て置いて構わないぞ」

「いいの? 私達が侵入したのがバレちゃうけど……」

「死体を片付けても警備兵が失踪すれば誰かが侵入したのはバレるさ。なら、労力は最小限でいい。持っていくのはこいつの死体だけで十分だ」

「こいつは、まだ利用価値がありそうだったが……?」

「裏切る気満々だったじゃないか。最低限使ってやったんだ、殺したところで問題ないね」

絞首によってドス黒く変色し、苦悶の表情を浮かべたまま死亡したゾクトの頭を爪先で小突きながら、小太郎は簡潔に告げ、背負っていた袋の中からそれぞれの得物を投げ渡した。

この手法ではヨミハラに侵入した何者かが居るかは発覚してしまいが、それほど問題ではない。

殺害方法は素手によるものであり、ゆきかぜの黒雷に関しても忍法によるものか最新兵器によるものか判然としない。

これでは侵入者が対魔忍であるのか、米連であるのか、魔界から来た荒くれ者であるのかも、どんな特徴があるかも分からない以上は探しようがなく、これから身を潜める小太郎達に辿り着く可能性は限りなく低い。

ゾクトの死体を背負い、守衛所を抜けると更に天井が高くなっていた。

ヨミハラの広さは縦横5km四方ほど、高さは高層ビルがすっぽりと収まってしまいそうな地下空間であった。

地面はコンクリートで舗装されており、天井を見上げれば遠くに無数の換気口や電線、水道管、ガス管が無秩序にぶら下がっており、これらも地上のライフラインから盗まれているのだろう。

門を抜けて直ぐには光の付いていない住宅街と思しき建物と街灯が並んでおり、中心部には地下の闇を退ける毒々しいネオンの光が煌めき、喧噪が響き渡っている。

「誰の気配もないな」

「と言う事は、小太郎の読みは当たっていたか」

「まあ、利便性や安全性、街の規模を考えれば当然そうなるだろうよ」

一足先に守衛所から続く階段を降り、ヨミハラの地を踏んだ凜子と紅は周囲を警戒しながら告げる。

ゾクトの案内してきた道程は険しく、危険な存在の巣窟であった。地上で得られる快樂に飽き、莫大な金と権力を持つ者こそヨミハラの客となれる。如何なるルートでその権利を入手するのかは分からないが、断言できることは一つ。そんな者達が一日以上もの時間を掛けて、小太郎達を通ったルートを通るとは思えない。

直通のエレベーターか何かがあるのだろう。此方のルートはあくまでも従業員や関係者のためのものと考えるのが妥当だ。

また、前もって得ていたヨミハラの情報から、街の規模はおおよそ推測可能だった。

そして、ヨミハラほどの規模ともなれば、地上と同じような環境を作るには、地上と変わらない仕事と人員が必要となる。

街の清掃を担当する者。食品の供給を担当する者。機械の修繕を担当する者。上げていけばキリがないが、環境とは刻一刻と変わるもの、そうでもしなければとてもではないが環境を維持できない。

ヨミハラの運営側に雇われている日雇いか、雑用係のような人種は大抵が脛に傷を持ち、地上では生活できない人間か、人界に来てしまった弱小魔族が大半だろう。

ヨミハラを訪れる者ではなく、ヨミハラで生活を送る者は全体の五割を有に超えると推測でき、それだけの数がいれば、当然のように居住区も必要となる。

居住区となるのは利便性を考えれば外周部が中心だろう。

様々なサービスの店を分散させては客の移動に時間がかかってしまう。時間が掛かった分だけ売上が落ちる。ならば、街の中心からいくつかの大通りを引いて、その周辺に集中して配置した方が合理的。自然、住民の居住区は隅に追いやられると考えるべきだろう。

「このまま壁沿いを進んで更に人の少ない区画を探す」

「其処を拠点にするわけね。押し入り強盗紛いの真似をするんだあ……」

「不満か？」

「そりやもう。でも、非常事態には非常手段。背に腹は代えられないよ」

とても正義と誇りを重んじる対魔忍のすべきことではないとゆきかぜは嘆息したが、救出の対象が母親とあつてはそうも言っではいけない。

もともと覚悟していたはず、と己を奮い立たせ、次に吐き出した呼気は決意の証だった。

そもそも、小太郎事態があらゆる手段を許容し、実行してきた男なのだ。そんな男を愛し、力になると決めた時点で既に済ませておくべき覚悟。今更、迷いなど生まれようはずもない。

ブレも迷いもないゆきかぜの表情に納得した小太郎は、凜子と紅を先行させて後に続く。

前方の索敵は凜子と紅が、ゆきかぜと彼自身は周辺を、災禍が後方からの追跡を警戒する布陣のまま壁沿いを駆け抜ける。

(しかし……この感じ、やっぱり居やがるか。まだ気付いていないだろうが、こつちには爆弾兼発振器^{マーカ}も居るからなあ。気付かれるのも時間の問題ですかねえ、これは)

小太郎は凜子と紅の背中を追いながら、ちらりと街の中心部へと視線を向けた後に、幼馴染の背中へと視線を飛ばす。

当の本人は全く気にしておらず、気付いてもいない。小太郎の視線にも、そして、ヨミハラに座す王の気配にも。

紅だけではなく災禍すらも気付いていないだろうが、小太郎だけは本来は五感で感じ取れないはずの魔力を感知していた。黒々とした、魂そのものを押し潰すような重圧を放つ魔力を。

このヨミハラはノマドが拵え、様々な組織が犇めき合う魔界に最も近い街。

人界を侵食しようとするノマドのトップが、人界において魔界の代名詞とも呼べる王が待ち構えていたとしても何ら不思議ではない。

(問題なのは水城夫妻を狙ったのが奴かってことだが……可能性は低いだろうな。アイツ、アサギにしか興味ねーし。紅に関しても面白半分でやったんだろうし。ほんとめんどくせー奴、魔界に引き籠もつてくんねーかなあ)

誰もが恐れる王を肌で感じながら、小太郎には面倒という感情しか浮かんでこないようだ。

彼にしてみれば不死の王も、力が強いだけの我儘なガキに過ぎないのだろう。無論、その力は恐れるべきであるが、思想も思考も分かり易すぎて相手にする気にならない。

まとも相手をするだけ馬鹿を見る相手と斬って捨て、まともに相手をせずに目的だけ果たしてさっさとトンズラが正解、と無理やり己を納得させる。

(じゃけん、お仕事はさっさと済ませちやいましょうねえ)

苦労人は猫より犬派。だって猫の奔放さは羨ましいんだもん

ヨミハラの壁沿いを進む。

プレハブ建築の建物が立ち並び、一見すれば地上の住宅街と変わらないように見える。

しかし、その実態は違法建築によって安全基準を満たさないハリボテだ。大きな地震でも発生すれば、一瞬で倒壊する程度の代物に過ぎない。

時折、住宅街に不釣り合いな洋館らしき建物もちらほらと見かけられたが、恐らくはヨミハラが生まれたばかりの頃、区画整理が行われる以前に建てられた娼館の名残りだ。

居住区の設定、商業施設の一極化の煽りを受けて、場所を買えたのか、商売が立ち行かなくなったらしい。

（広さは一般家屋よりも娼館くらの大きさの方が、包囲しようにも数があるから逃げやすくていいんだが、ああいうところは既に誰かが根城にしてる可能性が高いんだよなあ）

ヨミハラは無法者の街。

ノマドの目から逃れたいマフィアが根城にしている可能性もあり、組織に属さない無法者の寄り合い所になっている可能性も高い。

無論、制圧という観点だけでみれば独立遊撃部隊のメンバーならば簡単すぎる仕事だが、人が生きている以上は相応の繋がりがあり、それは一般であれ闇の世界であれ変化はない。

仲間、友人、同業者、敵対者。上げていけばキリがなく、誰かがいなくなればその空白に誰かが目を向ける。其処から独立遊撃部隊の

存在に気付くものもいるだろう。折角、築いた拠点を無駄になる。

(…………この辺りにするか)

一際気配が疎らな地区に差し掛かり、小太郎は舌打ちとハンドサインで指示を出した。

四人も同意見であるらしく、頷いて賛成の意を示して進んでいく。外周部を駆けていた時とは打って変わって慎重な足取りで住宅街を進む。

先程までは壁際という一方向から視線にだけ気を揉めば良かったものの、ここから先はあらゆる方向からの気配と視線に気をつけねばならない。当然の備えであった。

人の気配が少ないのは、住宅そのものが古かったからだろう。ヨミハラに点在する数ある住宅街の中でも最初期に造られたのだろうか。

家屋の窓は破られ、扉もまともに閉まらないのか半開きのまま。壁が崩れて穴が開いているものもある。

「……………」

「——隊長」

「分かっている。いきなり戦闘に発展か。前途多難だな」

先を進む紅と凜子が愛刀に手を駆けて立ち止まる。

僅かに遅れてゆきかぜが立ち止まった理由に気付き、小太郎と災禍は既に戦闘態勢を整えていた。

この区域に人が少ない理由。

単純に住まう不便だった、家屋に倒壊の危険性があったというのも理由の一つであろうが、それが事実であるかと問われれば疑問が残る。

何せ、この街に住まう者は闇の住人。後先を考えず、目先の快楽や欲望を優先したが故に、墮ちるところまで墮ちた者達である。その程

度の危険性で近寄らないとは思えない。

ならば事実は単純。

この区域は、己の欲望が最優先の者ですら避けて通るほどの危険が潜んでいるのだろう。

他の魔界都市にも似たような空白とも言える区域、地区は存在する。

そういった区域の共通点は、排除したくとも排除できない非常に危険な存在が縄張りとしている事だ。

魔界の住人ですらが恐れる何者か。生き物であるかも疑わしい正体不明。言葉を持たず、交渉も命乞いも通用しない弱肉強食の体現者。そういったモノがこの区域を縄張りとしているのだろう。

これがヨミハラの中心部であれば、ノマドや他の組織が結託して排除に動いたであろうが、半ば打ち捨てられた区域を取り戻す旨味は薄く、冒さねばならない危険を鑑みれば、放置が最善策である。

「——速い。建物の中を移動しているのなら、人型かそれに近い形をしているのだろうか……」

紅は建物の内部や影を移動する気配を感じ取りながら、視覚で捉える事が出来ずにいた。

相手が何者であるかは依然として不明——ではあるが、明らかに戦闘の意思が伝わってくる。人間のような悪意や怒りに根差したものではなく、生き物の本能に根差しているのか感情が薄く、先が読み辛い。

此処は敵の縄張りだ。地の利は相手にある。

何時、何処から襲い掛かってくるか分からない不安感は、近代的な造りの街並みにも拘らず一寸先も見えない闇に閉ざされた森の中にあるかのよう。

「——ニヤニヤ」

「……おっ……?!」

何もかもが突然だった。

小太郎の隣に立つゆきかぜの視線が、周囲の建物の二階に向けられた瞬間、家と家の間にある路地から真っ黒な影が飛び出した。

影は小太郎達の立つ通りを一直線に、一跳びで横断する。跳躍の距離にしておよそ8m。距離も速度も人間のそれではない。

鋭敏に殺意を感じ取った小太郎は身体を仰け反らせたが、無傷とはいかない。擦れ違い様に振り抜かれた爪は彼の胸板を斬り裂いていた。数瞬遅ければ、胸骨ごと持っていかれていただろう。

「隊長……！」

「掠り傷だ。今の、見た奴はいるか？」

「見た。獣人だ。種類は猫か、それに類するものだと思うが、厄介な……！」

互いの武器が干渉し合わない位置にまで近寄り合い、周囲を警戒しつつ僅かな情報を共有する。

凜子が視界で捉えたのは、獣人であった。

半獣半人の彼等は他の種族に比べて身体能力が高いのが特徴であり、動物の特徴をそのまま有している場合が多い。

種類は様々で犬や狼の特徴を残した人狼や牛頭のみノタウロスなど神話で語られる怪物のモデルとなった種族もいれば、馬頭の馬漢に對して、下半身が馬になっているケンタウロスなど同じ動物の特徴が別の部位に現れているなど多岐に渡る。

凜子が漏らした通り、厄介な状況であった。

ネコ科は全ての種が捕食者であり、狩りに適した生粋の狩人だ。

ライオンやチーターのように平野に適応した種も存在するが、虎やジャガーのように密林に適応した種の方が圧倒的に多く、建物が立ち並び、遮蔽物の多いこの区域は正に狩場。

イヌ科のように長距離を追い回す狩りは行わず、物陰に隠れ潜み、獲物に気付かれる事なく近づき、持ち前の瞬発力を生かして一瞬で勝

負を決めてくる。

小太郎を狙ったのは、一番狙いやすかったからだろう。

集団の頭目の上にゾクトの死体を抱え、なおかつ実力的にも一番劣っているように見えたのか。真っ先に狙うならば彼しかない。

「紅、どうだ？」

「ああ、問題ない。見えている」

一旦背負っていた死体を地面に降ろした小太郎は、FNX―45にオスプレイサプレッサーを取り付けながら問う。

問いかけに応えた紅の碧眼は瞳孔だけが真紅に染まり、既に持ち前の邪眼で見える筈のない風の歪みを捉えていた。

歪みは何処いずこにでも生まれ、常人には捉える事が出来ないだけで何処にでも存在している。極端な話、人の些細な動きでも発生しうる。

この特性を早い段階で掴んでいた心眼寺家は剣術の歩法に組み込み、踏み込みによって望んだ場所に歪みを発生させ、自在に風遁の術を発動させる。

小太郎は歪みの特性とそれを捉える邪眼に着目し、感知性能を伸ばした。

これまでは攻撃に転用できるほどの大きな歪みのみを目視していた所を、攻撃に転用できない小さな歪みまでを意識させたのだ。

どれだけ気配を殺す事に長けようとも、物質界に存在している以上は動きによって大気を震わせ、歪みは生まれる。紅の邪眼は今や攻撃に用いられるのみならず、高精度な動体センサーカメラでもある。

紅の邪眼は歪みを空間に走った亀裂のように捉えており、姿が見えず音も聞こえずとも、進行方向の先に生じる事を学んでいた。つまり、敵の動きを先読みできる。

「——上だっ！」

「ニヤっ……?!」

紅の声に全員が視線を上げ、建物の二階から音もなく飛びかかった影は愛らしい声を上げた。

今まで縄張りに踏み込んだ者は、自身の動きを捉える事も、ましてや先読みする事も出来なかつた故の驚きだろう。

ヨミハラという環境故にか、これまで狩りが失敗してこなかつた故にか。ともあれ、影に油断慢心が生まれていたのは疑う余地はない。

如何に優れた獣であれ、襲い掛かるコースを特定されれば狩りの失敗率は跳ね上がる。

ましてや、迎え撃つ側が対魔忍であるのなら――

「そこよっ!!」

「ニ、ヤっ?!」

――この結末は、初めから約束されたものだった。

またしても小太郎に襲い掛かろうとした影であったが、間に割つて入った災禍に阻まれる。

普段は制限されている最大出力を解き放ち、鋼鉄の義足に速度と威力をそのまま乗せた一撃。

空中から襲い掛かる影に避ける術はなく、弧を描いた爪先が脇腹に突き刺さった。

強烈な衝撃と痛みに影は息を吐き尽くすのみに留まらず、凄まじい勢いで家屋の壁へと激突する。

「ニヤア~~~~~」

家屋そのものを揺らすような激突にも関わらず、影は目を回しながらも上体を起こそうとした。

大した頑丈さだ。身体能力に優れた獣人の面目躍如と言ったところか。

「まだやるかい？」

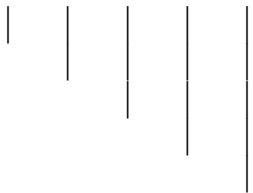
「……ニヤ」

しかし、影の奮闘も其処までだ。

地面から起き上がろうとした影の首に凜子と紅の刃が交差して添えられ、小太郎とゆきかぜの銃口が眉間に向けられている。

どう足掻いだところで逃げられない。知恵を絞ろうとも抜け出せない。

そう悟った影は潔く掌を上に向け、項垂れて脱力する。無抵抗を示す精一杯の姿勢であった。



「僕の名前はクラクル。よろしくニヤ」

「おう。暫くの間、間借りするぜ」

「ニヤニヤ。仕方ないニヤ」

「全く、襲い掛かってきたのはそっちなのに……」

「そう言うな、ゆきかぜ。不用意にコイツのテリトリーに踏み込んだのはこっち。非があるのもこっちになる」

「そうニヤそうニヤっ！」

クラクルと名乗った獣人は凜子の目にした通りに猫型であった。

真っ白な髪と頭頂部で揺れる二つの猫耳に、肢体は人のそれと変わらないにも拘らず、手足は黒い毛皮で覆われて肉球と鋭い爪を備え、尻尾まで生えている。

初めの内は敵として処理をしようとしたが、話してみれば警戒心こそあれ奔放で素直な性格をしており、小太郎は考えを改めた。

この実力であれば周囲から一目置かれ、この性格であれば可愛がられる。縦の繋がりはなくとも、横の繋がりは確実に存在している。此処で殺せば、噂が広まり、自分達の存在を嗅ぎ付けられかねない。

ならばいつその事、手を組んだ方がまだマシだった。

クラクルは縄張りの一部を暫くの間提供し、小太郎は何らかの見返りを与える。

その提案に、彼女は思いの外あっさりと言き、求めた見返りは魚やネコ缶といった食料であった。

獣人達の生活は原始の頃から変わっておらず、魔界の中でも自然に寄り添ったもの。

正義や忠義といった文明が発展していく過程で得た余分など持ちえず、弱肉強食の理に、より従順。敗者である以上は勝者に従うことを当然とし、逆らうという思考すら持ち合わせていないようだった。

独立遊撃部隊にしてみれば不幸中の幸いであつた。彼女の性格であれば、裏切りや策謀を警戒する必要性はないと断言できる。

唯一の懸念点はクラクルが任務の重要性や独立遊撃部隊が身を隠す理由を一切理解していない点か。

ちよつとした会話から情報が漏れる恐れもあるが、重要な情報を明かさずにおけば、任務に支障はない。ヨミハラにおける安全な拠点を得られる事を鑑みれば、この程度の危険は覚悟しておくべきだ。

またクラクルは野生動物に近く、縄張りに足を踏み入れたのは小太郎達の方。

野生動物の起こす被害は、無知な人間が彼等の領域なわばりに足を踏み入れてしまう事が端を発する場合が大半だ。

そもそも野生動物に人間の理や法を押し付ける方が間違っているだろう。

彼等には彼等の理があり、人には人の理がある。この二つは決して交わらず、互いに譲り合う理由も無い。互いの領域を犯さぬように生きていくしかないのだ。

「しかし、思いの外広いな。他に誰か居るのか……?」

「だあれもいないニヤ。電気も通ってるし、ボクは色んな部屋を好きに使ってるから、そっちも好きにしていいいにや」

「災禍、此処の見回りついでに部屋の明かり、いくつか点けてきてくれ」

「――御意」

小太郎の指示を全て理解した上で、災禍は静かに頷くと部屋を後にする。

クラクルが自身の住まいとしていたのは、打ち捨てられた娼館の一つだった。

正面玄関のある中央ホールを基点として左右へと伸びる構造の三階建て。

娼婦一人に部屋を一つ割り振っていたとするなら、かつてヨミハラにおいては中堅クラスの規模であっただろうが、今や主人は一匹の獣人と物悲しい。

一体、過去に何があって廃墟と化したのかは兎も角、部屋を選べば調度品は揃っており、窓やカーテンもある。掃除さえしてしまえば生活を送るには問題あるまい。

災禍に部屋の明かりをランダムに灯させようとしたのは、攪乱目的。

全てが消えていても灯ついても、それはそれで不自然であるが、クラクルの気まぐれさが周知の事実であるならば、誰も不信に思わず、尚且つクラクル以外の存在が潜んでいるとも思うまい。

万が一、潜伏していた事がバレたとしても、襲撃側は心理的にまずは明かりの灯った部屋に目を付ける。逃げるにも囷に使うにも有効だ。

「早速だが、これ食べる?」

「ニヤ。くんくん……ふあ〜〜〜」

「な、何なんだ、その顔は……」

「くっさあつ!! 嫌ニヤツ!!」

「ですよー」

(小太兄、死体の処理するの面倒だからってこの娘に押し付けるのはどうかと思う)

口をポカンと開けたフレイメン反応を見せたクラクルであったが、即座に鼻を押さえてゾクトの死体を蹴り飛ばす。

ほぼ一日坑道を歩き続けた肥満体。身嗜みや体臭に気を遣うタイプでもない。臭った所で不思議はなかった。

「どうせ食べるならもっと小さい娘がいいニヤ。お肉も柔らかいニヤ」

「……………」

「オレを見るなオレを。人間じゃないんだ、人間だろうが子供だろうが喰うだろうよ」

「ニヤニヤ。でもボクはお魚やネコ缶の方が好きだニヤ」

クラクルの発言に、三人は薄っすらと嫌悪の色を滲ませた表情で小太郎を見た。まるで、此処で処分しておくべきじゃ、とでも言いたげだ。

しかし、小太郎に変化は見られない。クラクルが何を喰おうが興味がないといった様子だ。好んで食べる訳でもなければ、食べたという明確な証拠があるわけでもない。

人間とて他の種族を食べているのだ。人間が喰われようが、相手が野生動物であるのなら酷く自然である。言葉が通じるだけの、話が出るだけの関係ない。それは人間の築いてきた価値観や倫理観の話であって、クラクルには何の関係もない。其処にあるのは捕食者と被捕食者の関係だけ。小太郎としては目の前で無辜の人間が喰われでもしなければ、動くつもりは全くなかった。

もし仮にクラクルが捕食されたとしても、彼女は抵抗こそするが、

文句や不満は一切ないだろう。それが純粹な野生というもの。生死が常に隣合せであり、死の覚悟があらゆる行動の前提となっている。その無駄の無さ、その潔さは小太郎も好むところであった。

「さて、じゃあちやっちやとやっちまうか。死体の処理、お前らに任せろぞ」

「「え、っ」」

「驚いてんじゃねえよ。オレの下に居る以上はこういった仕事もある」

露骨に嫌な顔をする三人に、小太郎は呆れ顔で告げた。

基本的に、対魔忍の起こした戦闘や潜入の後始末は内部の専門部隊が請け負う。後始末部隊だけでは手に負えない場合は調査第三課に政府側の部隊に出動を要請する形だ。

だが、ヨミハラでは組織からの後押しなど期待できない以上は、自分達で後始末をする他ない。今だけの話ではなく、今後こんな展開になるの可能性は高い。こういう場合の手法は早目に覚えて貰った方が良い。

彼女達とてゾクトに同情なぞしていかないし、自分達の任務を遂行するに当たって必要な行いであると理解してはいるが、嫌なものは嫌だろう。

死体の弄びなど忌避して然るべき。闇の住人や外道を憎み殺そうとも、その時点で罪の精算は終わっている。それ以上憎む真似はまだまだ真つ当な彼女達には難しい。

しかし、不承不承ながらも領いた。

このまま拒否したところで災禍が代わりに行うだけであり、ヨミハラにおける任務で小太郎への負担が増大しかねない。

放置するにしても、数日で腐り始めて悪臭を放つようになる。それで自分達の存在がバレてしまつては元も子もない。

「若様。異常ありませんでした。周囲も見てみましたが、誰かが住ん

でいる様子は見られません」

「よし。広めの部屋はあつたか？」

「待合室と思われる部屋が。此方です」

「凜子、出番だ」

小太郎達の行動に興味がないクラクルは既にホールのソファで丸くなって眠っている。

戻った災禍に先導され、小太郎は死体の片足を掴んで引きずりながら後を追う。

ホールから左に折れた一階の部屋は確かに待合室のようだ。外部からの目を気にしてか、窓はない。

放置されたが故に埃を被り、劣化の酷い調度品の数々であつたが、かつてはどれもこれも相応に値が張った事が伺える。

部屋の造り自体も、中世の欧州を意識しているらしく、此方も金が掛かっているに違いない。それなり的高级娼館だったのだろう。

ゾクトの死体を放り、小太郎がソファの一つに腰掛けるとボフッと埃が舞い、四人は口と鼻を覆って顔を顰めたが、当人は気にせず、荷物の中からノート型パソコンによく似た通信機を取り出して起動させる。

『若あつ、ご無事ですかあ?!』

「ああ、こっちは拠点まで確保した」

『流石は若。安心致しました。他の者も私の代わりをよく務めてくれたな』

通信機に映し出されたのは五車学園で待機していた天音。

本当に小太郎の身を案じて不安で一杯だったのだろう。いの一番に写った彼女は涙目だった。

しかし、小太郎と無事を確認するとキリリとした表情へと切り替わる。当人としては感情を表に出していないつもりなのだろうが、感情ダダ漏れである。

「頼んでおいたリストのもの、用意できたか？」

『既に準備は整っております。無論、カメラもです』

「流石に手際が良い。ほらよ、凜子。やれ」

「了解。上手くいくといいが」

小太郎は天音に確認を取ると、凜子に眼鏡を投げ渡す。

ただの眼鏡ではない。米連で開発されたヘッドマウントディスプレイである。

圧倒的に軽量化、小型化されており、従来のそれと同様の機能を有している。これまでのHMDに比べて装着が簡単になっており、サイボーグ化されていない兵士には好評であった。

もつとも、これも既に旧型だ。最新型はコンタクトレンズのように眼球に直接貼り付けるレベルにまで小型化されている。

『映像を送る。どうだ？』

「天音殿、確かに。いくぞ」

天音は手元のパソコンを操作し、凜子のHMDに設置したカメラの映像を送る。

カメラが映し出した映像は、天音が用意した物資を映し出していた。

これは小太郎の提案した方法だった。

凜子の忍法は使い勝手が良い。監視、警戒、強襲、撤退と部隊を運用する上で利便性の高い使い方が一通り揃っている。

ならば、新しい使い方を模索させるよりも、今現在の使い方を安定かつ柔軟に使用させる方が良いと判断した。

ただ問題であったのは、凜子自身ですら自身の忍術の使用方法やコツというものを明確に説明できなかった事か。

凜子が戦闘以外で使用する空遁の術は大きく分けて二つ。視覚跳躍と空間跳躍である。

視覚跳躍は、文字通りに視覚を遠方や遮蔽物を超えて跳ばす千里眼。今自分の立っている場所から離れば離れるほどに、力を消耗していく。

空間跳躍は、文字通りに空間を超えて自らや集団、物体を跳ばす瞬間移動。但し、通常の視界以外の場所へ跳躍する際には危険が伴い、現在地から離れば離れるほどに失敗の可能性も増していく。

共通する欠点としては、どちらも凧子自身の体力を著しく浪費する点か。比較的燃費の良い「視覚跳躍」であっても範囲と時間は限られ、「空間跳躍」に至っては日に数度が限界だ。

限られた時間と回数で、小太郎と凧子は検証と実験を繰り返した。使用者ですら分からないという問題点を明らかにし、改善を行うために。

殊更、検証に力を入れたのは空間跳躍だ。任務の失敗、成功の如何に関わらず、この術さえあればほぼ確実に撤退が可能となる。

空間跳躍の距離を伸ばし、より安定した運用こそが、部隊の今後を左右する、というのが二人の共通の見解であったからだ。

検証の中で分かったのは、凧子の下から別の場所に跳躍させるよりも、別の場所から自分の下へ跳躍させる方が遥かに難易度が低い事。それが尤も顕著に現れたのは、凧子の愛刀である石切兼光であった。

石切兼光を手元に呼ぶ際には消耗も少なく、何よりも失敗する事は一度もなかった。この事実から、小太郎は空間跳躍に絡むのは、何よりも凧子自身が対象の明確なイメージを形作れるか否かと結論付けた。

凧子にとって石切兼光は幼少時から触れてきた愛刀であり、手入れを繰り返してきた秋山家伝来の大業物。

例え手元になく、瞳を閉じていたとしても、刀身の形状から波紋の形、握った感触に至るまで克明にイメージできる。このイメージの差がそのまま空間跳躍の成否に繋がる。

ならば、安定させるのは単純だ。

手元に跳躍させるならば、モノの明確な映像を。別の場所の跳躍させるのならば、跳躍する地点の明確な映像があればいいだけの話。

視覚跳躍と併用する事も考えたが、これでは安定性に掛けた。恐らくは、併用することによつて意識が逸れ、イメージに綻びが生まれてしまうのだろう。

凜子は靱やかに腕を踊らせ、不可思議な印を結んで目の前の映像に集中する。

『……おお、これは』

通信機に写つた天音は目を見開いて、眩きを漏らす。彼女の視点の先には用意した物資に何らかの変化が訪れているのだろう。

そして、小太郎達のいる待合室にも変化が訪れた。

凜子の前の空間には小さな稲妻が無数に奔り、次第に数を増やしていく。

稲妻はやがて光の球体へと姿を変え、窓がない部屋の中に強風を巻き起こして埃を吹き飛ばす。

目も眩むような閃光が部屋を包み込み、誰もが目を細める中で光が炸裂する。

やがて光が止むと、今し方まで部屋に存在していなかったものが、凜子の目の前に現れていた。

『此方の用意した物資は消失しました』

「こつちには物資が出現した。中身は……リスト通りだな」

「ふう……どうやら、成功したようだ」

「上出来だ、凜子。天音も引き続き頼むぞ。通信は以上とする」

『はっ。ご武運を。無事を願っております』

安堵の吐息を吐く凜子を尻目に、小太郎は通信機を停止させた。

これで誰にも悟られる事なく安定して物資が供給される上、撤退が可能であると実証されたも同然だ。

ヨミハラに侵入という第一段階、ヨミハラ内部の拠点確保という第二段階、物資の補給路確保と撤退路確保という第三段階まではクリア

した。

残る段階は水城不知火の発見、身柄の確保、速やかな撤退の三つ。此処からは更に慎重な行動が求められ、敵の介入も予測される。予断は許されない。

「物資は小太郎の武器と弾に、これは、なんだ？」

「米連から鹵獲した偵察用のドローンだ。これを飛ばしてヨミハラ全体の地図を作る。わざわざオレ達の目で見回るリスクを犯す必要はないからな」

「で、これは……寸胴鍋とおつきいコンロに、ガスマスク……パイプ用の洗剤にトイレ用の洗剤？ 凄くいっぱいあるけど、何に使うの？」
「死体の処理に使うんだよ。本音を言えば粉碎機でミンチにして海とか畑に巻くのが速いんだけど、今回はこれでいく」

え、と表情を凍りつかせた三人は小太郎の顔を見たが肩を竦めるばかり。

続いて災禍を見たが、過去にやった事があるのか唇をへの字に曲げていた。どうやら、彼女としてもあまり思い出さたくない方法のようだ。

とは言え、寸動鍋こそ業務用の巨大なものであったが、排水管クリーナーは市販のもので、地上であれば何処でも買える類のものであり、彼女達にはピンと来ていない。

これは水酸化ナトリウムを含んでいる——つまり、強いアルカリ性の水溶液であり、その特性として細胞などのタンパク質に浸透して分解する。排水管の髪を分解して、詰まりを予防する効果はそうしたメカニズムの下に発揮させるのだ。

そして、人体の大部分はタンパク質で構成されており、特殊な肉体を持つ魔族でもなければ同様。つまり、これを使えば肉、内蔵、皮膚、髪は溶けてしまう。

骨はリン酸マグネシウム故に残るが、トイレ用の洗剤は塩酸を含んでおり、此方も溶ける。完全に溶けきることはないが、処理のしやす

い柔らかさとなつてしまふ。

あとはトイレなり、風呂場から流してしまえばいい。電気が使用できる以上は、水道も同様に使用できるだろう。後に残るものは何もない。

「そういうの、私達にやらせるか、普通……」

「そうは言ってもな。オレも災禍も別にやることはある。手が空いているのは戦闘要員のお前等だけしかない。誰でも出来る方法だ。難しくはないだろう?」

「だが、気持ちのいい方法ではないな、これは」

「当然だ。死体を気持ちよく処理できる方法なんて、火葬くらいのもんだ。何、この程度は慣れだよ慣れ。殺しと同じさ。暫くの間、夢に見るかもしれないがな。割り切れよ。割り算も出来なくて生きていくつもりなのか?」

「綺麗事ばかりじゃないなあ、もう! やればいいんでしょ、やれば!」

「その意気だ。オレも腹が括れるつてもんだ。お前達に手を汚させる以上、この任務は確実に成功させる。必ず、不知火さんを連れて帰ろう」

余りにも悍ましい手法に、三人は顔を顰めたが、小太郎はあっけらかんとしたものだ。

彼に対して恐怖や嫌悪を覚えながらも拒否だけはしなかったのは、独立遊撃部隊に入った時点であらゆる覚悟を決めていたからであり、不知火救出という明確な目的があったからだろう。

ゆきかぜにとつては実の母親を、紅と凜子にとつては後輩の母親を、ヨミハラという魔都から救出する任務。どんな手段であれ、どんな方法であれ、許容しなければ不可能は可能となりはしないと理解している。

嫌悪を抱く行為へと共に手を染め、三人の結束はより強いものとなる。

さながら、災禍と天音が命懸けで小太郎を逃し、二人の絆が強固かつ不変のものへと変わったように。

それはそのまま独立遊撃部隊の強みとなり、より洗練された群れとなるのだろうが、小太郎がそれを狙って命じたか否かは、語るべきではないだろう。

油断慢心してる奴とか鴨も鴨。さくつと罨にか
ちやおうねえ

「イングリッド様、どうなさったのですか？　このような場所にお越しになられずとも……」

「いや、少し気になってな」

独立遊撃部隊がヨミハラに足を踏み入れてから数時間後。

ヨミハラの玄関口である岩肌の壁に開いた巨大な穴の前に、複数人の女性達が集まっていた。

腰に剣を携え、手甲や具足を身に纏った姿は女騎士といった趣であり、事実として彼女達は魔界における騎士階級に位置する存在だ。

その中心人物が、生唾を飲み込みたくなる豊満な褐色の肉体に濃い桜色の長髪を持つ女。名をイングリッドと言う。

大胆に腹部を露出させた黒い戦装束に、臙脂色の外套は魔界騎士のそれである。

今現在、魔界には「魔界騎士」と呼ばれる存在は複数名存在するが、如何なる基準で選定され、如何なる存在から認められて名乗る事が許されるのかは分かっていない。共通しているのは特別な装束と特殊な魔剣を装備し、尋常ならざる魔力と力量を有している事だけ。そして、人界において魔界騎士の代名詞となるのが彼女。

魔界の貴族階級、支配階級の子弟出身であり、あのエドウィン・ブラックの護衛と秘書を務める存在だ。

ノマドの運営になど興味がないブラックに変わって経営を行っており、フルストと並ぶ古株かつ幹部であった。

「それで、門番達の死体は？」

「此方です」

問いかげに女騎士の一人が先行し、イングリッドが後に続く。

ヨミハラの治安維持を担うのは、イングリッドの部下になる女の実力者だけで構築された騎士団である。

尤も、治安維持など名ばかりなのが実情だ。元よりヨミハラに法らしい法はなく、住人達が勝手に作り上げた暗黙の了解があるばかり。魔界の理は弱肉強食の一言に尽きる。

支配する者の性分によつては支配地に法が敷かれるものの、基本的に魔族は法よりも弱肉強食の理を優先する気質が根底にあつて、上手く機能していない。

ましてやブラックも支配する事に執心などしておらず、己の好きにやり、他者にも好きにやらせている。イングリッドはブラックが絶対的な存在であるが故の余裕と信じているが、事実はどうであるか。

ともあれ、そのメリットとデメリットは明確に存在している。メリットは誰もが好きにやっているが故に、爆発的な勢いで成長していくことだ。

徹底した弱肉強食は、徹底的な競争社会を生み出す。法もないが故に、人の競争社会と異なり、誰かが罰を恐れて二の足を踏む事態に至らない。

誰もが欲望のままに奔り続け、際限なく膨張を続けていく。破れた者は誰かの糧となり、より賢くより強き者のみが生き残って、より強固な弱肉強食の体制を生み出す。

デメリットは支配する側が、誰が何をしているのかが把握できない事か。

事実として、イングリットどころかブラック自身も、作り上げたヨミハラや立ち上げたノマドが何処で何をやっているのかを正確に把握できてはいない。

要所所で支配や采配を任せられた者が信用できればいいが、誰も彼もが欲望に塗れ過ぎていて、ブラックにすら黙って自身の私欲を満たしているのは明らかである。

そもそも、ブラックの側近とされているイングリッド、フルスト、臆であつてすら反目しあつており、それぞれが独自に動き、派閥まで形成してすらいふのだ。

その中であつてイングリッドの閥は比較的まともである。

信頼できる部下を選定し、下部組織や部署、集団を任せ、上へと報告するシステムが構築されている。

だが、まともであればあるほどに貧乏籤は引かされるもの。ヨミハラの治安維持などという破綻した役割を与えられている時点でお察しである。そういった所は人間社会と変わらないのは笑えばいいのか泣けばいいのか。

しかし、イングリットやその部下に悲観はない。

全てはブラックからの信頼の証と受け取っている。その実態がどうかなど考えてもいないだろう。彼女達にとって、不信は不敬そのものなのだから。

(全員、一息で絶命させている。相当な手練と見るべきだな。カメラの映像も残っていない以上は、後追いは難しいか)

玄関口の隅に横たえられた門番の死体を一瞥しただけで状態を判断したイングリッドは嘆息した。

ここ最近、ヨミハラでは殺人が増加傾向にある。

大半はヨミハラに住人同士の諍いや組織同士の抗争によるものではあるが、こうして何者が何の目的で起こしたものが判然としない事件は目に付く。

恐らくは、ヨミハラの情報入手しようと潜入した対魔忍や米連、ノマド傘下ではない魔族の手によるものであろうが、問題なのは後を追うのが非常に難しい点か。

曲りなりにもプロと呼ばれる連中の犯行だけあつて、証拠は殆ど残していない。

ヨミハラに住人も殺人になど慣れきつてしまつており、目撃者が居たとしても証言は要領を得ないものばかり。

更に言えば、騎士団は治安維持を目的としていて、目の前で狼藉を働く荒くれ者を捕縛・制圧する事には慣れていても、捜査や調査には慣れていない。

「状況から察するに、主犯はヨミハラへと侵入した可能性が高い。巡回の回数を増やして怪しい奴等は片端から捕らえろ。門番の方は人員も犬どもの数を三倍にしておけ」

「はっ。承知致しました」

部下へと手短かに指示を出し、外套を翻してヨミハラへの中心にあるノマドの居城へと戻っていく。

彼女の胸中にあつたのは一抹の不安だ。

ヨミハラは、下衆な欲望で膨れ上がった風船も同然だ。誰にも制御など出来ず、些細な切欠で破裂する。

破裂した所でヨミハラが消滅する事はない。人も魔族も欲望に限りはなく、抑圧された状態からの開放を望んでいる以上は、空いた空白にまた汚濁が流れ込むだけだ。

イングリッドが憂慮しているのはそんな事ではなく、今現在ヨミハラを支配しているノマドの体制が崩れる事だ。

ヨミハラ of 混沌の坩堝。何者が潜み、何者が舌舐めずりをしているか分かったものではない。空白が生まれれば、虎視眈々と利権を狙っていた者や新興の組織にはまたとないチャンス。これを呆然と眺めているだけで終わる筈もない。

ヨミハラで握っている利権を多少奪われたところで、ノマドにとって痛手になりはしないが、問題なのはブラックの顔に泥を塗られることだ。

イングリッドにとってブラックは絶対の存在である。彼は常に頂点に君臨し、他者に侮られる事などあってならない。

しかし、ヨミハラ of 利権を奪われる事態になれば、必ずブラックを嘲笑う者が出てくる。組織の不手際はトップの不手際でもあるからだ。

——目先の欲望の事しか考えられぬ下賤な輩が、あの御方を嘲弄するなど愚昧にも程がある。

その一心が、イングリッドの胸中に昏い炎となって揺らめいている。

(それに、最近のブラック様は様子がおかしい。よもや………いや、考え過ぎか)

まさか、そんな筈は。

何度消し去っても燻って残る感情を、イングリッドは首を振って再び掻き消した。

彼女の予感も尤もであった。

確かに、此処最近のブラックの様子は異常だ。

普段から何処で何をしているのか。幹部である隴、フルスト、イングリッドにすら何も告げずに消える事が多い。戻ってきたかと思えば、玉座に座って茫と虚空を眺めるばかりで何も黙さず語らない。確かにブラックは昔から誰にも告げずに行動に出る事は多々あった。口数も多い方ではなく、何を考えているのか察する事すら一苦労である。

しかし、異常であったのはゾツとするほど静謐で、何の感情も現していない顔と瞳だ。

魔界において不死と呼ばれる存在は、何もブラックだけではない。それぞれが別の理由、別の能力で、それぞれの不死を体現した存在だ。

ある者は魔術・魔法の深淵へと至り、窮めた事によって不死となった。ある者は他者の肉体へと乗り移り、次々に乗り換える事で不死となった。

ある者は生まれながらに命がなく、ただ不死であった。

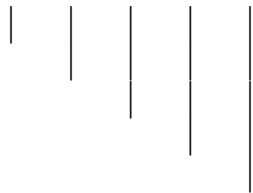
だが、不死であるからと言って決して永遠ではない。

不死の存在が最終的に至る境地がある。長過ぎる歳月を経て、歩き

続けた先に待ち受ける虚無。退屈が齎す生への飽きが。

「……………ブラック、様」

主に対する敬愛と憐憫の籠もった魔界騎士の声は、誰の耳に入る事もなく、喧噪の中へと消えていった。



潜入から開けて翌日。

ゾクトの死体処理に悲鳴を上げて四苦八苦している紅達を他所に、小太郎と災禍は別々にヨミハラの雑踏へ身を投じていた。

(……………さて、地図も完成したから繰り出してみたいが、人はそれなりに多いな。これなら、尾行されても捲くのに苦労はしない)

カメラの搭載されたドローンを飛ばし、上空から俯瞰する形でヨミハラの地図は呆気なく完成した。

凡そ小太郎の予測通りであったが、外周部に集中していると思われる住宅エリアはゾクトが案内した玄関口——街の東南から南西部に掛けて集中していた。

対し、北西から北東部、更に中心部に掛けては性サービスを中心とした歓楽街が広がっており、娼館ばかりではなく、宿泊施設や酒場、レストランもある。この様子であれば、地上のそれと遜色ない生活が送れる。

また歓楽街も住宅地に近づくに連れて寂れていることから、小太郎達がぐくつた門はヨミハラの運営側、従業員用の玄関口であり、対極に位置する辺りに利用客用の玄関口と地上との直通エレベーターでもあるのだろう。

（歓楽街の中も想定内の変化だな。基本となる大通りが賽の目上に広がって、それを中心に人気の娼館が並んでいるわけか）

雑踏の中を注意深く、慎重に擬態しながら進む。

小太郎はヨミハラに足を踏み入れた時と同様の服装であり、見るからに奴隷商人といった趣で、誰も目を向けようとはしていない。

大通りは縦横に三本ずつ歓楽街を貫くように広がっており、客と娼婦と客引き、商人という職業が人と魔族の境なく溢れている。唯一共通しているのは、皆、瞳に欲望の炎を灯している事か。

ごった返しているわけではないが、気を付けなければ肩がぶつかりそう歩き辛い雑踏に行く。

大通りは娼館の毒々しいネオンの輝きで満ちており、目が痛くなってきたそう。気紛れに通りを一本入ってみれば、様相は一変した。

人は疎らとなり、直線だった大通りとは比較にならぬほど極端にうねり出す。大通りからは分からなかったが、歓楽街も違法建築の塊で、増改築を繰り返した結果だろう。

道の端には怪しげな露天商が立ち並び、魔界産の薬や道具が売られている。上から来た客が持ち帰る土産物屋だ。売られている薬や道具は粗悪も粗悪。使用法を誤れば、間違いなく人死に出る。

更に路地裏を覗き込めば、男と女が交わっていた。

此処で商売する娼婦は、ヨミハラの中でも最下層に位置する。過酷なプレイと薬物投与によって娼館では使い物にならなくなって捨てられた壊れかけの女だ。

最早、彼女達の末路は決っている。此処から更に男の欲望に曝され、酷使され、この路地裏でその生涯を閉じ、死体は街の清掃屋に回収されて処理されるだけ。

それを一瞥しただけで小太郎は何の感慨も見せずにヨミハラを進む。興味もなければ関心もない。彼女達は単に運が悪かっただけであり、小太郎にはそれを救うだけの力も知恵もないと認めているから。

助けでも求められれば考えない事もないが、この街の娼婦は助けなど求めない。全てを諦めて、現状を楽しむ方向に思考を切り替えてしまっている。そうでもしなければ精神を保てないのだろうか、その切り替え方は言わばゆるやかな自殺と大差はない。

地上に戻ったとしても真つ当な生活など送れない。ヨミハラで知った快楽を、生活を一度でも自覚的に楽しんでしまえば、常に後ろ髪を引かれるのは目に見えている。

麻薬の中毒患者が何度も再犯を繰り返すように、汚泥の中へと戻っていくだろう。誘惑とは常に、心の何処かでそれを待っている者の下にしか訪れないのだ。

故に救ってやるのは助けを求めた者だけ。闇の住人から与えられる快楽と生活を嫌悪を以て拒絶できる者だけだ。

「災禍、そっちの方はどうだ？」

『我々の予想通りです。娼婦の方も、ライフラインの方も』

「よし。こっちはこれからアンダーエデンに向かう。そっちは当初の予定通りに頼む」

口腔内にセットした通信機越しに、娼婦として街に潜入した災禍と会話を交わす。無論、奴隷商人に扮した小太郎が、娼館に売り払う体で潜入させたのではない。

災禍が扮しているのは道端で客に声を掛け、交渉を行ってそのまま娼館か、ホテルか、その場で始める所謂「たちんぼ」であった。

たちんぼは性サービスの盛んな地域が一定以上の規模に膨れ上がれば必ず生まれてくる。ヨミハラのみならず、アミダハラ、アマハラ、東京キングダムは言うまでもなく、世界中の都市部では影に隠れて存在しているだろう。

最下級の娼婦もこれに該当するのだろうが、災禍が扮しているのは中級以上の娼婦だ。

たちんぼはその性質上、初心者では不可能だ。娼館は大事な商品である娼婦を守るシステムが構築されているが、外に出れば守り手など存在しない。

その為、危険な客の性質を見極め、己と娼館にとって有利な交渉を行え、己の限界というものをよくよく理解した上で、必要であれば客を遇える商売としての娼婦に慣れた者しか娼館側も任せられない。

娼婦側としてもやる価値はある。普段は娼館に縛り付けられているが、この時ばかりは多少の自由は得られる。また、普段は娼館側に取られる中抜きを自分の裁量でちよろまかす事も可能だ。

そのような様々な理由で、ヨミハラのあちこちにはたちんぼが溢れかえっており、小太郎と災禍にとつては望んだ環境でもある。

たちんぼは一括で管理されおらず、それぞれの属する娼館が管理している。

つまりたちんぼを行っている娼婦にせよ、見回りにきた娼館側の用心棒にせよ、顔を知っているのは自身の属する娼館まで。

無論、個々人の繋がりはあるであろうが、顔を知らない娼婦が一人紛れ込んでも誰も不思議には思わない。災禍に客を取らせるまでもなく扮させ、ヨミハラの情報を探らせるには絶好の隠れ蓑であった。

「で、此処がアンダーエデン、ね」

ゾクトから聞き出した不知火の売却先——アンダーエデン地下の楽園と名付けられた娼館を遠目で観察しながら小太郎は呟いた。

大通り沿いという最高の立地条件から外れているにも関わらず、外観はヨミハラの娼館を見てきたものの中では最上級。

店の玄関には魔族が複数人おり、用心棒だろう。人数もそれだけではないと見るべきだ。これだけ金を掛けられるのなら、武器も防衛設備も最新鋭と見ておいた方がよい。

暫く、小太郎は離れた位置で人を待つ振りをしながら、アンダーエ

デンの客層を探っていた。

地上からやってきたと思われる身なりのいい客とヨミハラの住人と思しき身なりの悪い客が入っていったが、割合は前者が八に対して後者は二。

明らかに金に飽かした成金共を主要客とした高級娼館。金にガメついゾクトの取引先としては納得の至りであった。

(街の噂ではアンダーエデンに対魔忍を入荷したらしいし、ビンゴかな。さて、行きますか)

娼館の規模と予測されうる金の保有量から持ちうる魔界技術——もつと詳しく言えば、魔界の高級娼婦である奴隷娼婦への改造技術も相当のものだろう。

ゾクトからの情報が我が身可愛さに出したデタラメではなく、我が身可愛さに出した事実か、虚実入り交じるものであると確信し、小太郎は動き出した。

「あー、此処がアンダーエデン?」

「そうですが、何か?」

「いやね、奴隷商人のゾクトからヨミハラで商売するなら此処の主人に挨拶しておいて言われてさ。オレは、まあ何だ、ゾクトの旦那の相棒みたいなもんかな」

「ゾクトの……?」

「ああ。オレとリアルルの旦那との仲だからつつつて、アポもないのは悪いけどね」

一瞬、怪訝な表情をする用心棒であったが、こうした出来事に慣れているのか、胸元のマイクに小声で何事かを呟くと、視線と表情で其処で待てと伝えてきた。

小太郎はにこやかに微笑むと、万札数枚を用心棒の胸ポケットに押し込んでやる。それで全てが上手くいくわけではないが、店の運営側

と顔馴染みになってしまえば、以降は事がスムーズに進む場合が多い。こうした要領の良さは、当主として振る舞う過程で身につけたものだ。

用心棒は警戒こそ解かなかつたものの、多少なりとも懐が潤う分には不満はないようで、まんざらでもない表情だ。

扱い易い敵に、小太郎は内心で呆れ返りながらも表情には出さない。

まだ確定もしていない、何処の誰かも分からない男から金を受け取るなど、用心棒としての質はそれほど良くないと語っているようなもの。

アンダーエデンの主は賄賂で動く部下を把握していないのか、把握した上で自分でも御せると樂觀視しているのか。どちらにせよ、小太郎には理解できないお気楽さであった。

「——付いてっけ」

暫くすると用心棒が店の扉を開け、中へ入るように促された。

先を進む用心棒の後に続くと、玄関先で他の用心棒によるボディチェックが始まる。

手の触覚と金属探知機による武器の所持確認。先にFNX―45を提出していた小太郎は、何の問題もなく通された。

他の娼館であれば、動画を撮影する機器も漏れなく提出を求められるものだが、このアンダーエデンは違うらしい。サービスの幅の広さも店の売りの一つなのだ。

玄関を超えると直ぐにある客の待合室へと通される。

待合室には、自分の番はまだかまだかと待ち侘びている、好色な表情を浮かべた客で満たされていた。

見るからに高級そうなソファに身を預け、逸る気持ちを少しでも抑えようと、煙草に火をつけようとしている者もいれば、酒と食事に舌鼓を打っている者も居た。

この規模の娼館であれば、専用の書齋か応接室がある筈だ。

其処に通されず、待合室に通されたという事は、そのまま警戒されている証左に他ならない——とは言え、当然の措置だろう。何せ、相手は何処の誰かも分からないのだ。何も自分の懐に飛び込ませる必要はない。

寧ろ、逆に其処まで通されてしまった方が危険だ。書齋や応接室には客の目がない以上は何をされるか分からない。通される段階は、もう少し信頼でも得てからの方が逆に安心である。

「——随分と若いな」

(はい、ビンゴお。遺伝の出やすい部分が似通っている。矢崎の兄弟か親戚でかくてーい)

「……………」

(後ろの侍女はどう見ても淫魔です。うーん、これはますます淫魔との繋がりが疑われますねえ)

ソファに腰掛け、用心棒を背後に待っていると一人の男と一人の女がやってきた。

白髪頭に肥満体。地下での生活が長いのか、男にしては異様に白い肌をした男。名をリアルと言い、この娼館の主である。

一見すれば矢崎と似通っているのは肥満体くらいのものであったが、小太郎の目が捉えた特徴は矢崎との血縁関係を確信させた。

顔の長さ、両目の間隔、鼻の形、歯の形、唇の大きさと厚みなど、遺伝要因の強い部分は全て矢崎と似通っている。それだけでなく、薄く覗く歯並びや顎の形など、環境的な要因で変化する部分にも共通点があった。

そして、矢崎の後ろに控えた侍女は淫魔であった。

メイド服を身に纏っており、身体的な特徴は人のそれと大差はない。

だが、滲み出る淫気と言えいいのか魔力と言えいいのか。兎も角、雰囲気は矢崎の護衛に混じっていた淫魔のそれと似通っている。

「どうも。お忙しいところ申し訳ないっすね。オレの名前はまあ、何でもいいや。ジョン・スミスでも、山田 太郎でも、名無しの権兵衛でも好きに呼んで下さいよ」

「ふん、名無しか。まあいい。ところでゾクトはどうした。随分と礼儀知らずな真似をする」

「ゾクトの旦那にはオレもアンタが顔を出して紹介するのが筋だと言っただけどねえ。大した仕事なんてない癖に、オレは忙しいって。笑わせてくれるよ」

誰かの紹介であれば、紹介する側が共に顔を出すのが筋だ。

しかし、ゾクトは今や地獄に落ちて、その死体はこうしている間にも溶かされて下水へと流されている。顔を出せる訳もない。

それをいい事に、小太郎は小馬鹿にした笑みを浮かべながら、オレは違うとでも言いたげな表情を作り出した。

今の所警戒こそされ、リアルには値踏みされるような、淫魔には探るような目を向けられているが、不審には思われていない。

ゾクトはフリーの奴隷商人だ。何処の組織とも正規の契約を結んでおらず、気の向くまま、依頼のままに取引を行う。しかし、フリーであり、個人である以上はどうしようもなく限界があり、より金を得るために誰かと組んでも不思議ではない。

また奴隷商人という職は大半が魔族であるが、人間も就いている。更に人間の奴隷商人は、魔界都市の生まれで戸籍もない場合もあったりと名前がなくとも珍しくもない。

些細な違和感を覚えるだろうが、不信感には至らない。そもそも小太郎は元より対魔忍であり、今まで正体を隠して活動してきた。各魔界都市でいくら探られようが、その正体が明らかになる事はない。

「減らず口を叩く。手土産の一つも持たずにやってきた貴様が言えた事か」

「そりゃ失敬。そっちの方が、今後の取引先としては目を掛けて貰えると思っただけ。ほら、今は手ブラだが、明日に手土産を持ってこれれ

ば、腕の良さが分かるだろう？」

「——ほう」

リアルという言葉には棘があり、眉間には皺が寄っている。明らかに虫の居所が悪い。

それもそうだろう。兄弟であり、商売の上でも繋がりがあった矢崎が死亡したという情報は、既に彼の耳にも入っているはずだ。

兄弟としての情が残っているかは別として、矢崎ほど権力を持った相手とのコネを失うのは、アンダーエデンの経営上あまりにも痛い。

更によれば、ゾクトから買い取った不知火の調教が上手く行ってもいないようだ。

街を進む過程で耳に入ってきた噂では、アンダーエデンに対魔忍の娼婦が入荷されたというものはあっても、対魔忍の容姿や様子に関する噂は一切なかった。

つまり、未だに客を取ってはいないという事であり、同時に不知火の調教自体が上手く進まずにいる証明でもある。

完全に無事、とはまだ言えないが、救出に関して全く芽がない訳ではない状況を確認し、小太郎も表情には出さず、内心で息を吐く。

「随分な自信だな」

「自信と云うか、効率の問題。こつちと上を行ったり来たりは時間の無駄でしょ。だったら、ヨミハラで商品を手に入れた方が金も時間も掛からなくていい。これを可能と証明すれば、取引先としても認めて貰えるしね」

「と言うならば、既に考えはあるという事か——いいだろう。だが、ウチは高級品の取り揃えが売りだ。粗悪品は買い取らんぞ」

「分かってますよ。ま、納得して頂けないようだったらオレの腕と頭が悪い上に、旦那とは縁がなかったと言う事で」

礼儀を弁えてはいないが頭の回転は早いと判断したのか、リアルは悪かった機嫌を直し、薄っすらと笑みを浮かべる。

正直な所、リアルはゾクトに対して良い印象を抱いていなかった。

売りに来る奴隷の質はイマイチにも関わらず、売値は高い。水城不知火を売りに来たのは驚きであったが、全てはリアルの背後にいる「あのお方」の手腕によって仕組まれた事であり、ゾクトの評価に変化はない。

対して、新たに現れた小僧は小生意気で年若くあったが、既に効率よく稼ぐ方法を見つけている様子。また思う存分、値踏みをしてくれていいとまで言っている。

期待するには早い、それも明日に見せる結果次第。良い結果であればゾクト以上の取引相手に成りえ、悪い結果であればゾクトごと切り捨ててしまえばいい。何にせよ、リアルにとっては美味しい話である。

「じゃあま、今日はこのくらいで。一働きが待ってるもんで」

「いいだろう。念を押すが、粗悪品はいらん。貴様の基準ではなく、この街の基準である事を忘れるな」

「肝に銘じておきますよ」

再度、釘を差してくるリアルに対して、小太郎は笑みを浮かべて素直に首を縦に振った。

誰とて自分の意見が通り、思い通りに事が運べば気持ちが良い。今はリアルの意見にも指摘にも唯々諾々と従ってやるだけだ。

相手に扱いやすい奴と思いつまませれば儲けたもの。

そのためならば彼は余計な誇りなど捨て去って、頭を地面に擦り付け、靴を舐め、尻の穴すら捧げてみせる。それに嫌悪や屈辱など一切感じない。単に必要なだからと割り切っているのだ。

小太郎はソファから立ち上がって軽くリアルに会釈をすると、用心棒に引き連れられて待合室を後にする。

その直前、リアルが淫魔に対して何やら耳打ちをしているのを誰にも悟られる事なく確認し、ほくそ笑んだ。

「——さて」

アンダーエデンから出た小太郎は、大きく伸びをして一度、気を緩め、張り直す。

常に緊張状態を保ち続けることも必要な場合もあるが、緩急やメリハリをつける事もまた肝要だ。この程度であれば、ボロは出ない。

気を取り直すとアンダーエデンの前の通りを進み、右に曲がり左に折れて、徐々に細く人通りの道へと入り込む。

(やっぱり、尾けてきてるな。尾行されている以上は警戒こそされているが、こつちの正体が分かっていないと言っているようなもんですよ)

背後を付かず離れず、一定の距離を保って付いてくる気配。間違はなく、リアルな秘書を務めていた淫魔のものだ。先程の耳打ちは、尾行を指示していたのだ。

未だ矢崎を操っていたであろう黒幕の正体は判然としないが、薄っすらと正体が見え始めた。

矢崎の護衛に淫魔が一人だけ混ざり、兄弟と思しきリアルな秘書も淫魔だった。まだ確定はしていないが、淫魔の一派が関わっている可能性は高いだろう。

また不知火が正気に近い状態である以上、彼女がヨミハラを離脱するに納得するだけの真実を入手せねばなるまい。

娘であるゆきかぜを説得に使う手もあるが、あのゆきかぜの母親だ。一度決めれば、納得するまでは頑として譲らないだろう。

黒幕の目的は判然とせず、それを中心とした勢力が何処に位置しているかも不明。これだけの暗躍を許している以上は対魔忍側としても警戒と調査の必要性がある。黒幕の正体と此処で逃したとしても後を追えるだけの情報が不可欠だ。

(この街に居る以上は必ずぶち当たる。どうにもノマドやブラックとは別口の匂いもする。しっかし、下っ手くそな尾行だなあ。対魔忍でももうちよつと巧いぞ)

排泄物や吐瀉物、アルコールや行為後の性臭がブレンドされた悪臭を放つ路地裏を進みながら、闇の住人にも劣らない邪智を巡らせる。

ふと、彼が足元を見れば、中途半端に齧られて捨てられた半ば腐り掛けの果実が目映る。人界には存在しない、魔界の果物だ。名称は分からない。

名称の分からない腐り掛けの果実には、同じく名称も分からない奇怪な虫が一匹だけ腐汁を啜っていた。

こうした魔界都市の路地には、魔界からやってきた虫だけではなく、魔界から漏れ出す瘴気の影響で突然変異を起こした虫が人目を隠れて存在している。

名の知れた昆虫学者であつてすら目を剥くような生態を有する彼等だが、魔界都市の住人は目を向けないほどにありふれている。それこそ、小太郎が相手にしている悪鬼外道共と同様に。

果実と虫を踏み潰し、腐汁と体液の混合液を作り出してしまった彼の表情に変化はなく、その瞳は任務上の障害に向けるものと同じく酷く冷めきっていた。

「報告は以上です」

アンダーエデンの一室。

主人であるリーアルの書斎で、冷氣すら感じられる無感情な声が通った。

報告を行ったのはリーアルの秘書を務める侍女服姿の淫魔であり、彼女の目の前にある黒壇の机にはリーアルが座っている。

リーアルの書斎は彼の蔵書で溢れかえっていた。

壁の全てに本棚が並んでおり、一部の隙間もなく本が詰められている。

この知識こそが彼をアンダーエデンの主にまで押し上げ、自信の源となっている事は明らかであった。

蔵書の内容は多岐に渡るが、中でも多いのは魔界技術を用いた改造と訓練、そして魔術による契約に関するものだ。

アンダーエデンの娼婦は全てが人界の高級娼婦を凌駕するテクニクと淫らさが売りの奴隷娼婦である。

この奴隷娼婦であるが、単に奴隷を娼婦にしたわけではない。魔界技術によつて、より淫らに、より性に対して貪欲に身体のみならず、意識や認識までも改造された娼婦を呼び習わす。

アンダーエデンの地下には奴隷娼婦へと改造するための設備が整っているが、完全に奴隷娼婦として仕立てるにはリーアルの知識と手腕が不可欠。

魔術による契約に関しては、奴隷娼婦の身柄を確保しておくためのものだ。

奴隷娼婦は高級娼婦だけあって、権力者の情婦となる場合も多い。それはそれで店のメリットにはなるものの、権力者を唆して自らの自由を得るために動かれては堪ったものではない。逆に権力者が暴走し、お気に入り奴隷娼婦を力尽くで我が物とする場合もあるだろう。

そうした店が被る不利益を未然に防ぐために、契約書を用いた契約を選んだ。リーアルのように魔術師ではない人間でも、魔力の込められた筆と羊皮紙を使い、魔術知識の下に作られた契約書は魂を拘束し、強制力を発揮する。

リアルは此処から更に、キメラ微生物という機械と魔物の細胞で作られた擬似ナノマシーンを契約書と連動させた。これは奴隷娼婦の身体に潜み、アンダーエデンから許可なく離れれば、爆発する機構となつている。

これらを用い、彼は奴隷娼婦の確保を盤石のものとしている。万が一、奴隷娼婦がこの楽園とは名ばかりの地獄を後にするのは、契約書の履行を果たした時か、誰かから金で買い取られた時のみである。

「不審な点はなし、か」

淫魔が行った報告の内容は、あの名無しの尾行であった。

彼の行動は実に単純。

アンダーエデンを出た後は場末の娼館に入り、二時間ほど時間を費やした後、また別の娼館に足を運んでの繰り返し。

その後は食料品を買々と、元々取っていたのであろう宿泊施設に戻り、部屋から出て来なかった。

アレだけ豪語したにも関わらず、娼館を渡り歩くとはやる気がないにも程があつたが、不審ではない。奴隷娼婦ではあるが女好きであれば説明がつく。

しかし、アレだけの自信を見せたのだ。ゾクトの顔に泥を塗るわけもない。遊んでいたのは引き渡す商品を既に確保しているか、確保するルートがあるのだろうか。

現時点において、尾行を行った淫魔の目にも、リアルの目にも、彼は敵とも不利益を齎す存在とも写っていない。

見積もりが甘いにも程があるが、小太郎の擬態が功を奏した結果だ。そもそも、小太郎の正体を知っているゾクトは既にこの世を去っており、彼に関する情報を得られない以上は正体を見破りようがない。

「まだ完全には信用は出来ん。奴が来た後は必ず尾行しろ」

「承知致しました」

恭しく一礼と共に去つていく後ろ姿に、リアルは苦虫を噛み潰したような表情で見送った。

彼は、あの淫魔が嫌いだった。非礼のない態度を取つてこそいるものの、瞳や視線には尊敬の念がなく、軽んじてすらいるだろう。

それもその筈、表向きには部下、秘書という形であるが、実態は上位組織からの出向であり、目的はリアルの監視と護衛なのだ。

リアルほど野心と自尊心が肥大化した輩であれば、立場を分らせると称して苛烈な調教を開始して、傷ついた自分のプライドを癒やすであろうが、相手が実質的には上位に存在しているが故に手出しができない。

何せ、リアルに多くの知識を与えた「あの御方」が直々に送り込んできた者。手出しをしようものなら、リアルの未来は闇に閉ざされる。

(だが、好機は来た。兄者が馬鹿をやってくれたお蔭で上の席が空いた。水城 不知火を墮とせば私の評価も上がる。今後は私が……！)

矢崎死亡の報を聞いた時、リアルは本気で怒り狂った。ただ死ぬだけならまだしも、不祥事まで起こした上でこの世を去った。

兄である矢崎が目も当てられない死に方をすれば、実の弟であるリアルもまた同じような目で見られかねないのだ。

だが逆に好機である事も事実。これまでの経歴から矢崎のように表舞台に上がる事は叶わないが、組織内の席は空いている。任された水城 不知火の調教を完璧に熟せば、「あの御方」に認められるだろう。組織内の地位をもう一段上げられる可能性は高い。

リアルは其処まで考え、先程までの苛立った表情から一転し、低い笑い声だけを響かせる。

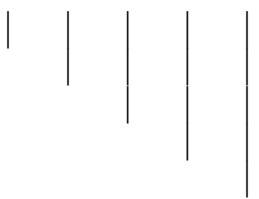
一つ、彼の考えを訂正するのであれば、水城 不知火の調教が成功しようがしまいが、彼の地位に変化はない。

彼の後ろに隠れている黒幕は、根本的に人を家畜程度にしか見てい

ない。側近は同族で固め、己が地位を盤石のものとしている。

ほくそ笑むリーアルの姿は全てを知っているものには滑稽であったが、闇の住人など皆そのようなもの。

弱肉強食と自由を謳っておきながら、彼等は根本的に自身よりも強い相手に支配され、蹂躪される不自由を見ていない。弱肉強食とは名ばかりの、誇大妄想に過ぎないのだ。



「驚いたな。これほどの上玉を用意できるルートがあるのなら、初めから持ってくればいいものを」

「まさか、ルートなんかかないよ。こっちはヨミハラ初めてだし。それに彼女達は奴隷じゃない」

「なに……っ？」

開けて翌日。小太郎とリーアルはアンダーエデンの待合室で顔を合わせていた。

宣言通り、小太郎は三人の商品^女を連れてきた。

見た目に関しても上玉であり、リーアルの基準を満たしている。少なくとも、整形手術を行わずにアンダーエデンの商品として扱うには文句はないレベルであった。

女達は淫魔の秘書に地下の施設へ連れて行かれ、身体検査を受けている。性病や持病など、目では確認できない粗悪品であるか否かを確認する為である。

「場末の娼館で人気かつ契約満了していた娼婦だよ。上で上玉を捕まえるよりもリスクが少なく、他の奴隷商人から買い取るよりも先行投資が少なくていい」

小太郎が行ったのは、言わば仲介であった。

経営が上手く行っていない場末の娼館でも、人気の娼婦というものは一人くらいはいる。

大抵の場合、そうした娼婦は様々な契約を満了しており、何時でも娼館を離れられる立場にある。

だが、娼館側としても数少ない収入源を手放す筈もなく、買い取ろうとする客の申し出を断り、娼婦を部屋に縛り付けて他への流出を防ぐ。

娼婦側も客の申し出を知らされておらず、自由の身となっても進む先を決められず、客の指名の多さに考える暇もなくなり、不満は募れども現状に甘んじる。

その不満に浸け込み、小太郎は薄ら笑いを浮かべながら唆した。

このまま娼婦を続けるつもりなら、今よりもずっと良い環境、今よりもずっと良い収入を期待できる場所を提供しよう、と。

これまで娼婦が稼ぎながらも、使う暇もなく溜め込んでいた金で自分自身の見受け金として支払わせ、残った金は娼婦の手元に残させておき、アンダーエージェンとの契約をどの程度のものとするか交渉の際に使わせればいい。

実質的に元手はゼロ。小太郎が消費したのは、時間と話術だけ。真面目に奴隷商人をやるよりも、ずっと時間的、金額的に効率の良い方法であった。

対魔忍として許容されうるギリギリのラインだ。

通常の奴隷商人であれば地上で誘拐、拉致、脅迫によって商品を入荷するが、流石の小太郎もこれは断念せざるを得ない。

倫理や正義感によるものではなく、対魔忍の立ち位置の問題である。対魔忍は日本の暴力装置であるが、根本的に国民の生活を守るもの。これを侵すわけにはいかず、民間人を餌にする事は許されない。

そうでもしなければ、「戦闘」「戦争」という行為に忌避感すら抱く日本の政府が黙っていない。その内心が憲法の条文によるものではなく、自己の利益によるものであったとしても、対魔忍は反論ができないのである。

だが、娼婦の仲介であればその限りではない。

初めはどうであれ、今や彼女達は自らの意思で娼婦としての道を選んでいるのだ。職業選択と就職先の自由は、日本国民の誰にでも約束された正統な権利。誰が文句を言えようか——という建前の下に詭弁が成り立つ。

これを否定するには、日本から性サービスのを全てを排除する動きが不可欠である。有史以来、産婆と傭兵、娼婦は何時の時代にも消えない職業として豪語されている。もし仮に政治家や正義感で凝り固まった対魔忍の耳に入ろうが眉を潜めこそすれ、口出しはできまい。

「よく娼婦達が納得したものだな」

「皆、喜んでたぜ？ 今のまんまじゃぶつ壊れるのが分かってたからね。リアルの旦那は収入源が増える。オレは金を貰える。娼婦達は仕事の時間効率がずっとよくなる。皆、ハッピー。何か問題あるかい？」

「二枚舌め。此処の実態を何も語っていないだろうに」

「そりゃねえ。そんなの聞いてないし、知らないし。少なくとも、オレは嘘を言っではないよ」

何よりも酷いのは、アンダーエデンでの改造や調教の実態を娼婦側に知らせていない事か。

もつとも小太郎には予想は出来ても、実態を知らない以上は知らせようにもない。彼はあくまでも、もつと効率の良い職場を案内しただけである。

改造や調教の過程で、脳が壊れる恐れがあるが、それは性に対する忌避感が強い場合だ。曲りなりにも契約を満了し、娼婦としての己を受け入れている者には心配の必要はない。

「しかし、こんな事を長く続けるつもりか？ 娼館側に恨みを買いかねないぞ」

「だから、場末の娼館を選んだのさ。一人の娼婦に頼らなきゃならぬいくらい経営が火の車のところだぜ？ オレをどうにかする前に、自分の事で手一杯。娼館が潰れりや、元締めや運営資金の提供先から殺されるだろうしねえ。目を付けられても、ほとぼりが冷めるのを待つてれば勝手にいなくなる」

「この悪党め。随分と腕の良い詐欺師ぶりだ」

「酷い事言うね。限られた時間の中で最大限の効率を選んだけだよ」

愉快で堪らないとばかりに笑うリーアルに、小太郎はすつとぼけた表情で肩を竦める。

ゾクトの紹介だからと警戒していたが、とんだ拾い物だ。ゾクトよりも腕も悪くなく、ずつと賢い。取引の相手としては賢すぎるが、それ以上に得られる利潤の方が大きいと確信できた。

この調子で商品を補填してくれば、上客の情婦として売ることも躊躇せずに済む。支出と収入の天秤は、より収入側に偏っていくと見て間違いない。

それ以上に、上客の下に商品を送り込めるメリットは大きい。あくまでも娼館は仮初めの姿なのだ。このアンダーエデンの目的は、上客——より大きい権力と金を持つ者を籠絡する事。

奴隷娼婦という極上の快樂によつて、この国の中枢に存在する者達を骨抜き of 傀儡とする事こそが、“あの御方”の目的であった。これでリーアルの組織に於ける貢献度は跳ね上がったも同然だ。

「しかし、随分と娼婦どもと仲が良かった」

「まあねえ。こんな商売じゃ腕つぶしが強いよりも、口先三寸に長けてたり、籠絡する方法を知っていた方がいいでしょ。ほら、商品に傷つけなくて済むし」

「ほう？ ならば、女どもの調教にも自信がある、と？」
「どうかな。少なくとも、今まで一度も失敗した事はないね」

リアルルの目には、連れてきた三人との関係は良好そのものに写った。

一人など、去り際にソファへと座った小太郎の後ろから抱きつき、頬にキスマスまでしていた。

女心を理解しているのか、それとも女を操る術を知っているのか。少なくとも、名うての調教師であるリアルルであっても、短期間でここまで女に心を開かせる真似は不可能だ。

その手腕を、難航している水域 不知火の調教に利用できるので、とリアルルが繋げるのは無理はない。

リアルルの保有する魔界技術とは全く異なる心理操作と人心掌握の術。快楽に耐性があったとしても、心を抉じ開けてしまえば或いは、と考えたのだ。

「じゃあ、今日はこの辺で」

「あ、ああ。それから、ヨミハラにはどの程度、滞在する予定だ？」

「あー、どうかな。ゾクトの旦那のケツを蹴り飛ばさになんねーし。長くても後二週間くらいかな。短ければ一週間つてとこ。その間は鼻真に頼むよ」

「いいだろう。ゾクトよりも貴様の方が優秀だからな」

最後に、リアルルからリップサービスを貰った小太郎は、仕掛けた毒が回り始めた事を確信する。

リアルル自身認めているかは分からないが、不知火の精神力を鑑みれば、奴如きの調教で堕ちる事はない。

かと言って、不知火の籠絡はリアルルにとっては重要だ。店としては一番の売れっ子になるであろうし、黒幕と繋がっていた場合には自分の存在を売り込む事に一役買う。

どちらにせよ、リアルルが己自身だけではなく、いずれは屈辱を押し

し殺して外部へと助けを求めるか、黒幕に助けを求めるかは目に見えるている。

其処に女を墮とす事に長けていながら、リアルに莫大な代償を求めず、黒幕も把握していない都合の良い存在が現れればどうなるか。飛びついてくるのは目に見える。

もう二度、三度、奴隷商人としての手腕を見せつけ、有能さを売り込み、リアルからの一方的な信頼をも買えば、予定通りに事が進む。

(二回でも不知火さんに接触しまえばこつちのもの。その後は、尾行の淫魔ちゃんを利用させて貰おうねえ)

苦勞人の運は強運と凶運を常に行ったり来たり

「——ふう。こればかりは慣れねえ」

凜子の空間跳躍でクラクルの巢へと転移した小太郎は、首を振ってほつと息を吐く。

空間跳躍中の感覚は凄まじいの一言だ。光に包まれたかと思えば、上下左右の観念と重力の一切が消え去り、音速を生身で体感するような浮遊感と加速感を覚える。常人ならば一瞬で三半規管が麻痺し、空間跳躍が終わる頃には激しく嘔吐している。

こんな感覚を味わいながら敵陣のど真ん中に跳躍し、開放された瞬間から戦い始める凜子とゆきかぜの二人には畏敬の念を抱かずにはいられない。

「良かった。無事に成功したな」

凜子は問題なく空間跳躍の術を成功させた事に安堵し、掛けていた眼鏡型のHMDを額に移動させながら笑みを浮かべた。

物資であれば失敗しても代わりを用意すればいいだけの話だが、人となれば洒落にならない。転移場所を間違えるだけならまだしも、周囲の物体に融合してしまう場合や壁や地面の中に埋まる危険性もある。

ましてや相手が部隊の長であり、愛する小太郎であれば、彼女ほどの手練れでも緊張の一つもして当然だ。

必要以上に緊張するということは、まだまだ使い熟せていない証。

凜子は小太郎とは別の意味で部隊の要だ。彼女が如何に空遁の術を使い熟すかによって、任務の成功率と作戦の難易度が激変するのだ。

小言の一つでも言ってやろうと口を開きかけたが、凜子の顔を見ると、言いたかった全ての言葉を飲み込んで近づいていく。

小太郎は、いきなり近づいてきてきよとんとした凜子の顎を掴み、くいと持ち上げた。

「ど、どうしたんだ、急に？」

「……少し寝れたな。その様子じゃ、他の二人も同じか」

「う、分かっちゃいますか……」

以前はふつくらとしていた頬は今や痩け、荒れた肌は食事を取れていないと伺い知れる。

小太郎と災禍に比べて、与えられた役割と仕事が少ない以上、食べる余裕がないのではなく精神的な要因によって食欲が減退していると考えるべきだ。

そして、小太郎が思い当たる節など一つ——ゾクトの死体処理しかないだろう。

凜子にせよ、ゆきかぜにせよ、紅にせよ、学生の身でありながら対魔忍として任務を熟してきた。

敵を殺す事に躊躇も憐憫もない。今まで果たされてこなかった因果を応報してやっただけの話。覚悟はあれども罪悪感は無塵もなく、後悔もない。

されども、凜子はこれまで一度も殺しを楽しんだ事はなく、楽しいと感じた事すらない。それは他の二人も同じだ。あくまでも彼女達の心にあるのは使命感と正義感だけだ。

故に、既に応報の果たされた死体に対して、更に鞭を打つ仕打ちを忌避感や嫌悪感を覚えたところで不思議ではない。

「い、いや、気分の良いものでなかったのは確かだが、これも任務だ。泣き言を言うつもりはない。それよりも、その……」

「……………」

「不安、なんだ……」

素直に己の心情を吐露しながら、凜子は目を逸らす。

任務である以上、こうした処理も必要な行為。其処に嫌悪はあれども、不満はない。ただ、粛々と役割を熟すのみ。

ただ問題であつたのが、それを命ずるのが小太郎であつた事。

凜子の不安は次は一体何をやらされるのか、というものではなく、嫌悪を覚えるような役割を与えられ、小太郎を好きのまままでいられるのか、というもの。

それが堪らなく嫌だ。小太郎に捨てられるのならば、まだ己が悪かつたのだと受け入れられる。だが、自分から小太郎を捨ててしまうような想像をする事自体が、今抱いている恋心を裏切っているようにやるせない。

初心と言えいいのか。無知と言えいいのか。

恋であろうが愛であろうが、永劫不滅などありえない。人間同士の恋愛など砂上の楼閣のように儂く頼りないものだ。恋ははずれ忘れられ、愛は容易く憎しみに変わる。

その事実を受け入れてしまえばいいものを、抱いた感情自体を軽いものとしたくない凜子には、絶対に受け入れられない事実であつた。

「凜子、以前も言ったけどな。オレに愛想が尽きたら——」

「それ以上言うな、怒るぞ。……………馬鹿」

「悪かつた。今のはなかつたな」

怒りというよりも拗ねた様子でそっぽを向く凜子に、小太郎は苦笑を漏らしながら肩を竦める。

自分のような人間を好きになつて貰つたのだから、せめて自分が悪者になるべき。と口にした言葉であつたが、機嫌を損ねてしまった。

普段の凜子ならば、呆れ顔のまま耳を引っ張るくらいの軽い制裁に乗り出すものの、今はちらちらと様子を伺うばかりで何もしてこない。

さて、どうしたものか、と思案する小太郎であつたが、先に動いた

のは以外にも機嫌を損ねていた筈の凜子の方。

「……………ん」

「あー、凜子さんや。それはー……………」

「……………んっ」

「はいはい。了解しやした」

緑に言葉を発さず、両手を広げて待ちの姿勢を見せる凜子に、小太郎は再び苦笑を刻む。但し、今回に関しては己の負けだと認めるように。

言うまでもなく、抱き締めろという意味だろう。

口にしなかったのは、小太郎自身が言葉の力を理解した上で、感情を言葉に変えるのを嫌っていたからだ。

言の葉は容易く人を破滅へと誘う。何気ない一言が人の心を深く傷つけ、意識していなかった言葉が解釈の違いによって憎しみに変わる。

ましてや、小太郎は言葉で人を操る側だ。言葉となった時点で生のままの感情から掛け離れて装飾の施されたものとなっている、とよく理解している。他人がどう思おうとも、彼自身が自分の言葉に嘘を感じてしまう。

赤の他人ならばどうでもいいが、自分を好きだと嘯く女に対してだけは、不誠実に接したくはない。

そんな彼の心情を理解した上で、凜子は何も言わずに行動で示すように願ったのだ。

「……………ん、うっ」

「苦しいか……………」

「いや、ちょうどいい。今の気持ちにはピッタリだ」

十分に男らしい腕で、肺から空気を吐き出すほどに身体を締め上げられてなお、凜子は目尻を下げてうっとり微笑む。普段から口調も

固く、落ち着いた表情しか知らない者には信じられない女の顔だ。

無理もない。小太郎はそれだけの思いを両腕に込めたつもりだ。今ばかりは打算も悪辣も必要ではなく、ただ凜子に抱く感謝と歓び、欲望は言わずもがな、自分のような相手に惚れた哀れみや敵対者への甘さに対する叱責すらも。

言葉にせずとも伝わるものがある。凜子としては言葉にしてくれた方が喜ばしいが、裏表のない感情は返って胸を満たしていく。

幸福そのものを形にした表情のまま、凜子は小太郎の肩に顔を埋めて自らも彼の身体に腕を回して抱きしめ返す。

大きな山脈を連想させる胸は、厚い胸板に押し当てられてひしゃげて潰れる事すら気にせず、少しでも多く相手の体温と匂いを交換し合う。

一瞬一秒毎に満ちていく胸の内を感じ、凜子は満足すると少しだけ顔を離して、はにかんだ笑みを浮かべた。

「馬鹿みたいだ。こんな程度で満たされてしまう安い女ではないつもりだったのだが、そうではないらしい」

「いいじゃないか、単純で。オレも似たようなもんさ」

「そうか。ふふ、そうかそうか。……だが、今度は思いが溢れてしまいうさだよ。どうすれば——ん、むっ」

珍しく悪戯っぽい笑みを浮かべた凜子であったが、全ての言葉を言い終えるよりも早く、小太郎は動いていた。

有無を言わず唇を奪う。凜子は驚きから目を見開いたが、すぐさま目を細め、やがては瞼を閉じて唇の感触に集中する。

男特有の乾燥した唇が、何度となく己の唇に軽く吸い付き、お礼とばかりに凜子もまた小太郎の唇へ僅かな音を立てて吸い付き。

優しく穏やかで、互いを思う合う事を何らかの形として残しておきたい。二人の口付けはそのようなものだった。

自身の女と胸の内が満ちていく感覚に、凜子は陶然とした気持ちになってしまう。

本当に安い女だと凜子は思っていた。こんな程度の触れ合いで、アレだけ抱いていたはずの不安が跡形もなく消え去ってしまう。

だが、決して悪い気分でもない。それこそが、何よりも小太郎を愛している証明に他ならないからだ。

「ん、ふうっ……こおら、それ以上は駄目だぞ」

「いてて、抓るなよ。ちえっ」

「全く、こんなに固くして」

「凜子は自分の魅力を自覚した方がいいぞ。こんな身体で、こんな格好をしていたらそりやあねえ？」

「あら、ありがとう。でも、お預けだ。ゆきかぜにも不知火殿にも申し訳が立たないからな。任務が無事終われば、いくらでも、な？」

凜子の大きく滑らかに広がった女性らしい魅力的な臀部を撫で始めた小太郎であったが、ジト目で手を抓り上げられる。

小太郎の狼藉はそれだけではなく、臍辺りに服を超えて押し当てられる固い物体に、さしても凜子も呆れ顔だ。

彼はあくまでも生理現象、お前が魅力的に過ぎるのが悪いと主張するが、軽くあしらいながら凜子は身体を離れた。

最後に人差し指を小太郎の唇に押し当て、色っぽく笑ってみせる。まるで淫婦のような妖艶さ。小太郎でさえが、生唾を飲み込みそうになるほどだ。

秘められた才能が開花した結果なのか、はたまた小太郎の手によるものか、女としての魅力が増していた。男を誘う艶やかさや仕草は勿論の事、男を戒める態度や口調まで。

(参るねえ。オレの周りの女、こんなんばかりか。惚れる相手は馬鹿なのに、いい女ばかりでさ)

ゴトン、と重苦しい音と共に巨大な扉が閉じる。
ヨミハラの中心部。その地下には、巨大な闘技場コロシナムがある。名をデモンズ・アリーナと呼ぶ。

その用途は、東京に存在し、エドウィン・ブラックの盟友たるスネークレディことカリヤが女主人を務めるカオス・アリーナと同一。

勝者は生と金を得られるが、敗者には凄惨な陵辱と恥辱が待ち構える女戦士達を戦わせる。それを見世物として客に提供し、勝敗の結果に金を賭けさせるノマドの資金源の一つだ。

デモンズ・アリーナはこのショービジネスの総本山であり、カリヤの趣味が反映されたカオス・アリーナよりも遥かに凄惨な陵辱と死が売りの闘技場だ。

その凄惨さときたら、カリヤですらが悪趣味と漏らすほど。もつとも、そう漏らした彼女は笑っていたようだが。

そのデモンズ・アリーナの更に地下。ヨミハラの煩わしい喧噪、アリーナの下衆な熱狂ですら届かぬ位置に、ブラックの玉座があった。魔界にある居城のそれと寸分違わずに作られた門は、邪悪でありながら荘厳ですらある。

その扉の前には、今し方ブラックへの謁見を終えたイングリッドともう一人が立っていた。

真っ白なキャミソールワンピース。膝まである桜色の長い髪。幼さの残る顔立ちと華奢な身体付き。何よりも目を引くのは、血のように赤い瞳の少女。

忌まわしい魔族の居城、人界を侵すノマドの本拠地には似つかわしくない少女の隣に立ち、イングリッドは不愉快の絶頂という表情である。

彼女の名はフェリシア。エドウィン・ブラックの娘であり、つまり紅とは姉妹の関係にある。

本来であれば、主人であるブラックの嫡子ともなれば、イングリッドも頭を垂れざるを得ず、不敬は許されまいだろう。

だが、彼女の存在を知るのはい部の幹部のみであり、誰もフェリシアをブラックの後継者どころか嫡子とも認めていない。

それもその筈、彼女はブラックが気紛れに生み出した実験体の一人に過ぎない。

異種族の仔を孕む特異体質を有した心願寺 楓を母体として初められた魔導実験の末に、紅とフェリシアが生まれた。

そのような過程で生まれた者をブラックの跡継ぎとして認める筈もない。精々、ブラックが気紛れに生み出した玩具程度の認識に過ぎない。

だが、ブラックの寵愛を受けているのは確かであった。

誰かの下に付けられる事もなく、唯一ブラックのみが彼女に命令を出せる立場にある。

それをいい事に彼女は魔界と人界を行き来するばかりか、引き継いだ能力で誰彼構わず殺戮と暴力を楽しむ始末。

幹部連中に見れば面白くない上に、扱いに困る厄介な存在だ。ブラックもフェリシアの行動を御するつもりも縛るつもりもない

ようで、如何なる事態を引き起こしても黙して語らない。そもそもブラックがフェリシアの存在をどのように扱うのか、明確

にしていない。厄介払いをしたいのか、本当に後継者にしたいのか分からず、自由にさせる意図も分からずに幹部達も動くに動けない。

そんな幹部の中にあつて、イングリッドはフェリシアに明確な嫌悪を向けていた。

ブラックが人間との間に汚らわしい仔を為した事実ですら受け入れがたいと言うのに、その仔は遊び呆ける始末。起こす問題は、ブラックにとって不利益になる事ばかりだ。

人間とは比べ物にならない長い生の中でブラックをひたすらに支え続けてきたイングリッドには耐えられまい。尤も、理由はそれだけ

ではないのだろうか。

「~~~~~♪」

「おい。貴様、何処へ行く」

「……？ 何処って、パパの言う通りにするだけだよ？」

鼻歌混じりに歩き出したフェリシアに耐え兼ねて、苛立ち混じりの声を掛けたイングリッドであったが、自分の失敗を悟る。

無邪気ですらある不思議そうな表情で振り返るフェリシアに、更に苛立ちが加速する。まるで、そんな事も分からないの、と馬鹿にされていたからだ。

今日、彼女がブラツクの下に訪れたのは、ヨミハラの間番が殺害され、狼藉者がヨミハラに侵入した恐れがある事実を報告に来たからだ。

折り悪くフェリシアも同時に訪れており、玉座に座ったブラツクの膝を枕に一人で喋り続ける姿を見た時点で、イングリッドの機嫌は最悪であった。

更にはブラツクはイングリッドの報告に一切反応を見せず、言葉すらなかったにも拘わらず、フェリシアには一言だけ――

『フェリシア、遊んでおいで。お前の待ち望んだ相手が来たようだ』

――とだけ告げた。

フェリシアはその言葉にキョトンとしたが、すぐさま狂気だけを形にして逆に無邪気となった笑みを浮かべて、大きく頷いた。

イングリッドには分かる筈もない。いや、恐らくはブラツクとフェリシアの間でしか、何が何やら分かるまい。

不機嫌のままイングリッドがあからさまに探るような目を向けている事実、フェリシアは次第にくすくすと笑みを深めていく。その笑みは誰の目から見ても嘲りそのものであり、またそれがイングリッドの心をささくれ立たせる。

「へえ、そんな事も分からないんだ。フェリよりも長くパパと一緒に居るのに、みっじめ〜」

「——何？」

「うふふ、あはははっ！ だってそうでしょ？ 一生懸命頑張ってるのに、パパから何も教えて貰ってない。何も信用して貰えてないってことじゃない♪」

その言葉に、空気が凍りついた。余りの殺意と怒気に、壁が音を立てて罅を奔らせる。

感情を発露させただけでこの有様。並の魔族であれば、その時点で泡を吹いて気を失っているだろう。

だが、フェリシアは真っ向からそれだけの殺気を受け止めてながら、腹を抱えて笑うばかり。何も分かっている子供そのものの態度が逆に不気味ですらある。

イングリッドの怒りも無理はない。

フェリシアの言葉は正論であった。そんな事は、誰よりも彼女自身が知っている。その悔しさを、その無念を、見透かされたばかりか、小馬鹿にされては怒りもしよう。

「ほんっと、馬鹿みたい。パパの事、男の人として好きなのに言い訳ばかり。そんな事だから、見向きもされないって気付かないの？」
「貴様、我が忠義を愚弄するか！」

「うふふ。一生頭を下げて、這い蹲って、部下として一番を目指しててね。その間に、フェリがパパの一番になってあげるから。そうなたら、あなたの頭を思い切り踏み付けちゃおうとお♪」

「世迷い言を！ 実験体如きが——」

「じゃあねえ〜！ 自分の事が何一つ分かってない、素直にもなれない魔界騎士のお・ば・さ・ん♪ あっははははははははははははっ！」

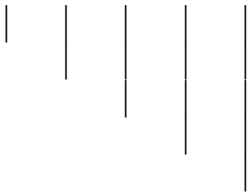
腰の魔剣に手を掛けたイングリッドであったが、フェリシアは哄笑と共に闇の中へと消えていく。

父親譲りの強大な魔力も存在も消え失せてしまい。一体何処へ向かったのか知る手段は、彼女には存在しない。

真つ黒な炎となつて燃え盛る感情を必死に抑え、呼気とした吐き出したイングリッドはようやく柄から手を離れた。

ギリと血が滴るほど拳を握り締めながらも、カツンと踵を鳴らし、踵を返して歩み出す。

(あんな実験体の言葉に揺れるな。私は今まで通りにお仕えするまでだ！)



(アンダーエデンに足を踏み入れて今日で四日目。そろそろアクションを起こしてきそうかなあー)

小太郎は大通りの人混みをすいすいと進む。

リアルへの売り込みは順調であった。アンダーエデンへと移籍させた娼婦は既に10人を超えており、動くのならば今日だ。

理由は何の事はない。売り過ぎたのだ。この程度の数であれば、アンダーエデン内の娼婦として抱えられるであろうが、奴隷娼婦への改造手術はそうは行かない。

性に関する技を仕込むのは勿論の事、肉体や意識まで改造しなければならぬ。それだけ改造するのであれば最低でも一ヶ月の時間を

要する。肉体にも意識にも負荷がかかり過ぎて壊れかねないため、時間を掛けて馴染ませていく必要がある。

流石のアンダーエデンも同時に十人以上を改造できるだけの魔科医と施設を抱えているとは思えなかった。

昨日、その場で金を渡さずに、明日支払うと言ってきたのも予測に拍車を掛けていた。

表向きには金を用意し忘れていたとの事だったが、ヨミハラでもトップクラスの娼館が支払いに難儀するような金額ではない。何か、別の狙いがあるのは明らかだった。

「きやつ……い！」

「おつと失礼、お、嬢さ……ん……」

その時、小太郎の肩に誰かがぶつかって尻から倒れ込む。

外套を頭から被って表情を伺い知れなかったが、外套の起伏と裾から覗く脚の形から女だと分かる。事を起こすの面倒と紳士的に手を差し出した瞬間、小太郎は固まった。

(びゃあああああああああああああああああッ!!! 上手く隠してるけど、上位魔族だこれー！ おつまつ、嘘だろおい！ これ確実に支配階級レベルの魔力じゃねえーかあああああああ!!)

表情には一切出さず、小太郎は内心でムンクの叫び同然の悲鳴を上げた。

ブラックを筆頭とした魔界の支配階級は、膨大な量の魔力を持って生まれてくる。事実として、ヨミハラの地に満ちる魔力は全てブラックのものだ。

だが、その魔力を隠す技術も当然のように存在する。傾向として、長く生きて強大な力を有する者ほど、隠蔽は巧い。

油断———と言うよりも、タイミングが悪かったと言わざるを得ない。

ヨミハラにはブラックの魔力が満ちており、そればかりが感覚に引つかかって、他の魔力を感じ取り難い。

そして何より、この距離になるまで小太郎にさえ悟らせなかった彼女の技術が凄まじかったのだ。

（お、落ち着け！ 見た所、比較的温厚な性格の御様子！ 此処は目を付けられないようにスタコラサッサが最適解！）

「悪いね、前を見てなかった」

「いえ、私の方こそ不注意だったわ……………あら？ 貴方……………」

（は……………！ 何か察した察しちやったよう！ 顔見られたー！ こんな交通事故どうにもできんっつーの！）

「じゃあ、オレはこの辺で。急いでるんでね」

「……………あ、ちよつと」

手を取って外套の女性を立ち上がらせると、小太郎は足早に人混みの中へと身体を滑り込ませる。

最後まで焦りを表に出さないのは流石であったが、今すぐにでも頭を抱えてその場に蹲って泣いてしまいたいのは確かであった。

対魔忍と見抜かれた恐れがある以上は、任務終了まで監禁か、極秘裏に始末してしまうのが常套手段であるが、小太郎の選択は逃走。

理由は二つ。

一つは、此処で事を構えたとしても、勝ち目が薄すぎる点だ。

上位魔族は神話や御伽噺の中で語られる怪物や悪魔のモデルとなつている場合が多々あり、持つ力も神話に恥じぬものである。

最低でも相手の正体と能力を明らかにした上で、討伐に足るだけの戦力を揃えねば、とてもではないが戦いにならない。ましてや潜入中に相手をすべき対象ではない。

一つは、魔力を隠して行動している点。

普通の上位魔族であれば、魔力を隠蔽する術を持っていても、殆ど行使はしない。

彼等に見れば、自らの力を偽る、隠すという行為自体が、彼等

の美学に反するのだろう。元より、己の力を誇示したがる者達だ、不思議はない。

その上で隠しているのであれば、正体が明らかにしては拙い目的を持っているか、正体が明らかにする行為自体に問題があると見るべきだ。

(多分、ブラックと敵対関係にある上位魔族。それも穏健派って言えば、一人くらいしかいねえ！ あれが“魔界の踊り子”ナディアか?!)

(何だってこのタイミングでっ！ 魔界に領地があるだろうに、どうしてこうほっぽり出して人界漫遊旅行に来るかねえ！ こつちくん なっ！)

人混みを抜け、すぐさま路地へと入って息を潜める。

“魔界の踊り子”と言えば、エドウィン・ブラックに並ぶ魔界のビッグネーム。

生まれ持った魔力と能力を駆使すれば、魔界を牛耳れるほどの力を持っている、と噂されるほどの存在だ。

当人の気質は魔族としてはありえないほど温厚かつ穏やかであるため、人界では名前ばかりが知られるばかりであるが、本気になればブラックですら退けるとか。

ナディアの持つ力の事実はどうあれ、明確にブラックとは敵対関係にあり、必然的にブラックと友好関係を築いているスネークレディ、魅龍、アスタロトなどの上位魔族とも敵対関係にある。互いに本気になっていないとは言え、膠着状態に持ち込んでいるのは事実だ。

ナディア、と思しき上位魔族が大通りで此方を見失い、困惑しながらも逆方向へと去っていくのを確認し、小太郎はようやく息を吐いた。

彼女の目的や力の如何はどうにせよ、少なくとも探知探索に向いてはいないようだ。いきなり本拠を探り当てられる事はない。首の皮一枚で何とか繋がった。

(ブラックと確執がある以上、ゼロじゃないのが痛すぎるが、こっちの情報がすぐにでも流れる事はねえ)

(あの人柄だ、根本的に他人を道具のように扱ったり、陥れたりする連中とは相性が悪い。つまり、不知火さんを狙ってる黒幕とも繋がっている線は薄い。こっちもゼロじゃねえけどな！)

(目的は何だ？ 今まで人界に興味を示してこなかった奴が何故………くそ、情報が少なすぎる。最悪、任務を中断して逃げ帰る方も視野に入れにやならんとは。オレの運はどうなってるんですかねえ！)

苦勞人だつて本気で謝る事くらいある

「これが今回分の報酬だ……どうした？ 疲れているようだが」

「確かにキツチリ。いや、そろそろ太陽が恋しくなってきただけさ」

思いもよらぬ高位魔族との接触の後、予定通りに小太郎はアンダーエデンへと到着した。

但し、今回通されたのは、待合室ではなくリアルルの書齋。そして普段は後ろに控えている筈の淫魔も見当たらない。

如何にも大事な、或いは秘密裏に進めたい話がある、と言った風情である。

小太郎は受け取った金を懐に入れつつ、自分の精神的な疲労すらも利用し、ヨミハラの滞在時間もあと僅か、と匂わせる。そうすれば、リアルルも腹を括らざるを得ないと踏んでの事だ。

リアルルが苦い表情を作り出したのも一瞬の事、これまでの商売とは別の話を持ち出してきた。

「そうか。だが、地上に戻る前にもう一稼ぎしていかんか？」

「まだ奴隷が欲しいって？」

「いや、そちらに関しては間に合っている。お前の女に心を開かせる腕を見込んでだ」

「そうは言ってもねえ……まあ、折角の儲け話ってんなら、受けるかどうかは別として、聞くだけ聞こうか」

「決まりだな」

リアルルの持ち出してきたのは、案の定、不知火の件であった。

既に肉体、精神共に改造された状態であるにも拘わらず、陥落させていない現実を偽る事なく明かしてきた。

この時点でリアルが相当に焦っている事が伺えたが、矢崎と繋がりがあり、同じ黒幕の下で悪事に手を染めていた、と仮定すれば、それも当然であったかもしれない。

地下で一調教師として活動するリアルと地上において政治家として活動する矢崎。どちらの立場が上であり、どちらがより黒幕に重宝されていたかは語るまでもないだろう。

ましてや黒幕が不知火を手に入れる腹積もりであれば、矢崎が不在となった事によって、この一件の成否はリアルの進退を決定付ける。焦るのは無理もない。

黒幕と淫魔、矢崎とリアルの関係性は、未だ薄ぼんやりとした想像の域を出てこなかったが、これで現実味が一気に増したと言える。

「対魔忍ねえ。ゾクトの旦那は毎回毎回自慢してきてウザかったが、本当だったんだ。どうやって捕まえたんだか」

「少なくとも真つ当な手段で無い事は確かだが、それはいいだろう。問題なのは、この女に対して奴隷娼婦の教育が進んでいない事だ」

「それをオレがやれって？ 無茶言うね」

「いや、一から十まで全てをやれ、などとは言っていない。私が欲しいのはあくまでも切欠だ」

これまで多くの女を墮落させてきた調教師の経験を加味して、リアルは告げた。

「どれだけ崇高な精神を持つ女であろうとも、たった一つの切欠さえあればいい。」

リアルは女を墮とすのに重要なのは、肉体的な快楽の強さではなく、精神的に快楽を受け入れる切欠が必要であると考える。

快楽に流される理由。現在の境遇を受け入れる理由。自分が女でしかないと自覚する理由。どんな些細な理由でも構わない。一度でも心に滑り込ませ、開かせてしまえば後は坂を転がり落ちるが如く、である。

この数日間、小太郎と娼婦達の関係性を見てきたリアルは、この男はそうした切欠を作る事が非常に巧いと認めていた。それ故の提案である。

「うくん。しかし、対魔忍ねえ。関わりたくないなあ」

「どの道、ゾクトが関わっているんだ。問題ないだろう。金はいくらでも積もう。これを奴隷娼婦として売り出せば安いものだ」

「いや、ゾクトの旦那が目を付けられてるなら、オレの方から手を切ればいいだけの話だが……その報酬は魅力的だね。まあいいか。その女の資料ある？」

余り乗り気ではないように見せかけつつ、不知火の状況が如何なるものかを確認するために、資料の提示を願う。

リアルとしても、調教に際して相手方の情報は不可欠であると知っているため、不思議にも思わない巧い手であった。

差し出された資料には不知火の家族構成、経歴は勿論の事、これまで携わってきた一部の任務まで多岐に渡る内容が記されていた。

矢崎が関わっていた時点で分かっていた事だが、黒幕の手勢が政府内部にまで喰い込んでいるのは、この情報量からも明らかだ。

もう二人か三人、或いはもつと。ともあれ、黒幕に繋がる道は地上にも残されている。不知火を納得させるための材料にもなるだろう。

暫くの間、資料の内容を眺めて考え込む素振りを見せつつ、元から決めていた方策を口にする。

「そうだね。オレなら、娘と同年のガキを使う。男だろうが、女だろうが構わんよ」

「どういふことだ？」

「世話をさせて情を持たせる。男なら男娼としてのいろはを学ばせろと命じる。女なら娼婦になるまでの過程を世話させる。一度でも情が生まれれば、それが快樂を受け入れる免罪符となる」

「いや、だが、それは……」

「でも、それをやるなら魔界都市で生まれたようなガキじゃ駄目だ。それこそ、闇の領域を何も知らない純粹無垢なガキが良い」

その提案は小太郎自身が本気で不知火を墮とすのなら、という過程を考えた上での結論だった。

不知火は手練の対魔忍。戦闘は勿論の事、あらゆる分野に秀でた真の万能選手である。

無論、闇の技にも秀でており、結婚以前はその肉体と房術を用いて多くの男を籠絡し、情報を入手していた経験もある。

つまり、不知火の精神が持つ快樂への耐性は非常に強い。いくら魔界技術を用いて肉体的な快樂で翻弄しようとも、精神を墮とすまでには一朝一夕でどうにかなるものではない。

但し、それは本人が望まぬ快樂であつた場合であり、快樂を受け入れられるだけの土壌が整っていない場合だ。

故に、他人を使う。娘と同一年であれば感情移入はしやすく、そんな存在が汚泥の中へ落ちていく過程を、子の親である不知火は見過ごせない。見捨てるという選択肢を選べない。

女子であれば、この子を娼婦にさせるくらいならばと身代わりを申し出て、逃がす機会を探るのは目に見えている。

男子であつたとしても、男娼として大成しなければ殺されるのは目に見えている。男娼として学ばせつつも、同様に逃がす機会を伺うだろう。

何にせよ、不知火の頑なな心に「誰かのためならば仕方ない」という隙が生まれる。その隙は、調教する側には狙い目であり、される側には致命的だ。

「む、う。それは、難しいな。ヨミハラにそのような者はいない。奴隷商人の品揃えとしても、年頃まで指定されては簡単には……」

「だろうね。因みに、オレも無理をするつもりはないぜ？ そういったガキは売値はいいが、こっちが背負うリスクも高いからね」

「……………」

「他に行けそうなラインは、金持ちの御曹司が親の命令で、とかかな。娘と同一年ぐらいであれば親の悪事に関わってる事もないだろうし、当人に罪はない。必然的に心のハードルも下がる。そういう客はいないの?」

「心当たりは、ないな……………いや、お前の年はいくつだ?」
「はあん? 正確には分からないけど十代なのは間違いないね…………つて、おいおい」

小太郎が敢えて口にした方法以外にも、手段はいくつもある。

例えば娘ではなく、夫を利用する手だ。

資料の中には夫である稲火の顔写真もあった。亡き夫の面影を見ても、悪意ある性格では話にならないという前提も必要だ。面影があつたとしても、此方も闇の住人ではないという前提も必要だ。面影があつたとしても、悪意ある性格では話にならない。寧ろ、警戒心を強めてしまっただけだ。

また稲火ほどの年齢ともなれば、奴隷として売られるにしても必ず理由が生じる。大抵は借金で首が回らなくなり、タコ部屋行きとなつたクズばかり。真実、善人であつた稲火の性格には程遠い。

しかし、そこは調教する側の口次第。少なくとも不知火に真実を知る手段はなく、また善意故に多額の借金を抱えてしまった者も居るだろう。

このように手段は一つではない。考えれば考えるほど新たな着想というものは生まれてくるものである。

ただ、提示した手段はリアルの思考を限定し、最後には小太郎が思い描いた結末へと辿り着かせるべく誘導させるために敢えて選択した。

リアルな置かれた状況、抱いている焦りまで利用して、他にある道から目を逸らさせ、一つの道へを選ばせる悪魔の誘惑そのものだ。

「——お前がやる、のはどうだ?」

「オレが? 人の話聞いてたのかい?」

「出来ないとしても抜かすのか？ お前は今まで巧く世渡りをしてきた筈だ。少なくとも、お前が商品を手に入れる手段は力尽くではなく、甘言で人を騙す方法を取っているからな。立場を偽る程度、造作もあるまい」

「……そりやまあ、ねえ」

「よくよく見れば、夫の方とも面構えは似ているではないか」

「そうかい？ そうかもしれないが、オレの背負うリスクが大きすぎるだろ。報酬云々以前に、バレたら即死なだけどね、こっちは」

「安心しろ。こちらのスタッフにも客にも手は出せんように契約書で縛っている」

「失敗したら？」

「無論、無理を承知の上での此方から持ち掛けた話だ。失敗しても責任は問わん。だが、成功すれば報酬は必ず支払う」

もしリアルが目がなければ、小太郎は邪悪極まる笑みを浮かべていたに違いない。それほどまで見事に彼は墓穴を掘っていた。

事実として、リアルは己の思考を誘導されたなど夢にも思っていない。全ては小太郎の提案から己の意思で導き出した答えだと思っ込んでいる。

小太郎にしてみれば、当然の帰結。

リアルに時間的な猶予がない、もしくは焦りを抱いていたのは、彼を諷めるべき淫魔の秘書がいない時点で分かりきっていた。

其処でわざと実行までに時間も手間も掛かる手法を提示して更に焦りを増大させ、短絡的に時間も手間も掛からない手法に目を向けさせたのである。

多くの人々は自分の見たいものしか見ない。神の視点を持たぬ以上、それは仕方のない事だ。

故にそれを理解し、見たいものを見せてやれば、人は其処しか見なくなる。金と魔界技術を持ち、強引に振じ伏せるリアルと人の弱さを理解した上で刃を振じ込む小太郎。より悪辣なのはどちらであつただろうか。

「まあ、其処まで言うなら。でも、期待はしないでくれよ」

「よし、決まりだな。今すぐに準備をさせる。それまでに腹を括っておけ」

「随分と気の早いことで。ま、やる以上はしつかり仕事させて貰いますけどね」

其処からの展開は早かった。

店の用心棒の一人を、奴隷娼婦のドレスやリアルルの服を用意するアンダーエデン御用達の仕立て屋に走らせた。

この当たりの決定から行動までの速さは娼館の主に上り詰めただけの事はある。兵は拙速を尊ぶ、ではないが、行動力というものは周囲に認められる上で分りやすい指針の一つである。いつまでもまごついている人間を誰も重用しない。

それから数時間後。

小太郎が書斎で寛いでいると、帰ってきた用心棒は、見る者が見れば一目で相応の値段であると分かる高級スーツと装身具を受け渡した。

スーツは勿論の事、カフスとネクタイピンには小降りな宝石があしらわれ、ネクタイも靴も一流ブランド。全て仕立て屋が選んだであろうが、センスも間違いなく一流だ。

それら一式を着込んだ小太郎は、奴隷商人風は無造作を装っていた髪型を整え直し、姿身の前で一通り確認し終わると、後ろで様子を見守っていたリアルルに向き直る。

「どう？ 面の皮が厚い自負は、結構あるんだけどね」

「これは……馬子にも衣装、と言いたい所だったが、期待するななどどの口で抜かすつもりだ、貴様は」

「ポイントは表情かなー。育ちも性格も顔に出るからね。あとはお坊ちゃんの立ち居振る舞いを学べば、大抵の連中は騙せるよ」

「くくく、この詐欺師め」

振り返った小太郎を見たリアルは目を丸くした。

着替える前までは小狡さと抜け目のない印象を受けた表情は、今や一変している。

何処かおどついて眦が下がり、視線は所在なさげにあちこちへと彷徨っている。言葉にすればたったそれだけの変化であったが、雰囲気から何から劇的に変化しすぎて、とても同一人物とは思えない。

まるで矢崎を釣り上げた際の災禍の如き変化であるが、そもそも二人の変装術は必要に迫られて共に学んだもの。小太郎も使えて当然であった。

「それから此処までやっておいて何だけど、一つだけ条件がある」

「何だ、報酬の話か？」

「いや、こっから先は、オレの商売道具も使わにやならないからさ。道具や薬の話じゃない、話術や何やの諸々の技術をね。とどのつまり、企業秘密なワケ」

「成程な。貴様にしてみれば生命線だろう。だが、安心しろ。監視カメラや盗聴器の類は設置していない」

「オレが言うのも何だけどき、不用心過ぎない？」

「何、心配するな。そのための魔術契約だ」

リアルの宣言は絶対の自信に裏打ちされており、監視カメラと盗聴器が仕掛けられていないのは事実だろう。

これまでの経験と実績による自信であろうが、これからを想定すれば自信とは呼べない過信に過ぎなかったが、小太郎にとっては好都合。尤も、それでもなお調べるのが潜入任務には当然の慎重さである。その辺りで手を抜く男ではない。

それでもなお確認を取ったのは、不知火に仕掛けられた魔術契約の度合いを確かめたからだ。

少なくとも監視が必要であれば、魔術契約の質は低く、強制力も程度が知れている。逆に監視の必要がないのであれば、魔術契約の質が

高く、強制力も命の関わるものだとは推察できる。

今回は後者であり、リアルと不知火との間に結ばれた契約内容と契約書を探り、見つけ出して魔術的なプロセスに従って破棄する必要がある。また一つ仕事が増えたと小太郎は嘆いたが、手間を考えれば無理もなかった。

小太郎の胸中など知りようもないリアルは満足げな表情で頷くと、後に続くよう顎をしゃくる。

今一度、御曹司の仮面を被り直した小太郎が後に続いて向かったのは、一階の角部屋であった。

「此処が、奴の部屋だ」

「ああ、いや、此処から先はオレだけで行かしてくれ。旦那が顔を出すと警戒心が強くなっちまう」

「いいだろう。任せるぞ」

小太郎の申し出に至極あっさりとは頷いたリアルは、部屋の鍵を渡す上機嫌で去っていく。

取らぬ狸の皮算用をしているであろう背中を見送り、鍵を開けて部屋の中へと足を踏み入れた。

部屋の広さはワンルームマンションの一室と大差はなかった。

家具はフルサイズのダブルベッド、デスクにクローゼット、化粧台。奥のキッチンが見え、その直ぐ隣には小部屋があり、そこが浴室とトイレになっているのであろう。

ただ、部屋全体の証明は薄暗く、剥き出しの内蔵を連想させる薄ピンクの壁紙も相俟って、ラブホテルの一室をそのまま生活空間にしたかのような悪趣味さであった。まともな神経をしているのなら、絶対に住みたがらない。

部屋の主は、扉に背を向けてベッドの端に腰掛けていた。

誰かがやってきたのは扉を開ける前から気配で察していたのだらう。振り向いた美貌はぞっとするほど凍て付いている。

しかし、予想していたリアルではなかった事に一瞬だけ怪訝な表

情をしたものの、小太郎の顔を見ると誰なのか分からなかったらしく不思議そうな表情に代わり、十分な観察の後に驚きから目を見開いた。

彼女はベッドから反射的に立ち上がり、向き直って何事かを口にしようとしたが、小太郎はそれを片手で制する。

一瞬の出来事であったが小太郎の観察眼は反射的に見せた立ち居振る舞い、呼吸、反応全てから、罨に嵌めるために用意された水城不知火に成り代わった誰かではなく、水城 不知火その人であると確信した。

不知火は扇情的な対魔忍装束のままであり、今し方、五車学園を出発したばかりのようで、以前から変化は見られない。

しかし、彼女の無事を確認しつつも、気を緩めずに懐からスマートフォンに偽装された米連製の多機能ツールを取り出し、機能の一つを起動させる。

起動させたのは探知機であり、微弱な電波を発信、受信を繰り返し、周囲にある監視装置の有無を確認するためのもの。魔界製の生体力メラであつても捉えられる。

「久しぶりだね、不知火さん」

「……小、太郎君」

探知機の画面にALL CLEARの文字が浮かぶと同時に、小太郎は口を開いた。

帰ってきた返事は歯切れが悪く、未だに目の前の現実を受け入れ難くありながら、予想はしていたようであった。

当然だろう。不知火もまた4年前の一件に違和感を覚え、誰にも明かす事なく秘密裏に探り、その過程で小太郎が自分よりも一步先を行きながら、口を閉ざしていた事実に気付いていた。

だが、半信半疑ではあつた。前当主の無謀に廃れ、辛うじて残った家の当主として血を吐くような努力と綱渡りじみた駆け引きを行っていたのは知っていたが、実働任務にまで携わっているなど、己の目

で見るまでは信じられなかったのである。

「早速だけど、こっちの状況と最大限の譲歩を伝える」

いきなりと言えばいきなりな物言いであったが、不知火もまた稲火の死の真相を探るという目的をアサギにさえ告げずに今回の任務についた身。小太郎がこの場に現れた以上、自身の目的も全て分かっている。

だからこそその譲歩と口にした。でもなければ、彼が真つ先に告げるのは、不知火の身に掛けられた呪いじみた魔術契約と逃走の予定のみの筈だ。

不知火は、訳はあれども身勝手な理由で仲間までも巻き込んでしまった事実を目を伏せたが、意を決して面を上げる。彼女とて、相応の覚悟を以て地の底ヨミハラにまでやってきたのだから。

其処から手短に、小太郎はまず己と対魔忍の状況を伝えた。

二車 骸佐による反乱と離脱。それによる対魔忍内部に残ったふうま一門の立場の悪化。更なる冷遇と離脱を防ぐため、小太郎を当主としたふうま一門の再建。そのために必要な実績を積み、仲間を集めるための独立遊撃部隊の設立。

要点のみを押さえた説明であったが、元々水城家の当主代行としても、ゆきかぜの母親としても小太郎には助けの手を差し伸べてきた不知火は、状況を適切に把握していった。

「そして、今回の黒幕の件ではあるが、正直な所、目星をつけてはいるが確証がある訳じゃない。政府内部にも相当深く喰い込んでいるし、それなりに巧く立ち回っている」

「でしようね。私も此処に来て分かったのは、リアルもまた黒幕の操り人形に過ぎないという事だけ。自身に繋がる証拠は、そうそう残さない手合いのようね」

「オレも同じ所感だ。其処で、今回は諦めて撤退をして貰いたい」

「それは……」

「分かっている。ただ諦めろと言っているわけじゃない。次に繋がる証拠を手に入れ次第の撤退を提案する」

奴隷娼婦として潜入した不知火には時間的な猶予はいくらでもあるが、闇の住人達に身も心も喰い散らかされながらの過酷な任務。不知火自身、いつまで今の自分を保てるのか保証はなく、これまでの経験上、この世に絶対など存在しないと弁えている。

対し、独立遊撃部隊に時間的な猶予は少ない。如何せん、ヨミハラのほぼ全てが敵であり、明確な身分がない状態で正体を偽って活動している以上、どれだけ慎重になろうとも、いつ、どのタイミングで嗅ぎ付けられたとしても不思議ではない。

其処で、折衷案だ。

黒幕の正体を突き止め、稲火の死の真相を追いたい不知火と今直ぐにでも不知火の身柄を確保して撤退を開始したい独立遊撃部隊。

二つの意思を尊重した上で、互いの納得しうる妥協点の提示がそれであった。

「勿論、それだけじゃない。不知火さんを連れ戻した後は、独立遊撃部隊に所属してもらう」

「……私か？」

「ああ。基本は名前だけだがね。仕事の内容はこれまで通り。必要があれば手を貸して貰うかもしれないが」

「それにどんなメリットが……？」

「独立遊撃部隊はこれからも独自に4年前と今回、一連の黒幕を追う。調査内容は逐一アサギと不知火さんに報告する。それから——」
「いざ動く際には、私も優先的に動員できる、という事ね」

小太郎の考えが見えた不知火は、先んじて彼の考えを口にした。
不知火にとっては悪くない提案だ。

元々、今回の任務と己の目的が無理無謀の類であった事は承知の上でアサギにすら何も告げなかった。飛び込んでいく虎穴自体が罠で

ある事も分かっていた。

それでも飛び込まなければなかったのは二度とないかもしれないチャンスであり、ゆきかぜのためでもあった。

夫婦を狙った罠である以上、娘であるゆきかぜも狙われる可能性は高い。母親として禍根を断つておきたかったのもまた事実である。

ただ、不知火自身も認めるところであるが、考えが甘かった。

黒幕が他の組織や事件の情報を流す形で利用しているのは、正体を頭にしないためという思惑もある以上に、黒幕自体が自由にできる力も人員も少ないと思っていたのだ。

だが、蓋を開けてみれば、既にヨミハラの娼館にまで自らの操り人形を配置しており、総員という点でこそノマドに劣るであろうが、政府内部へは相当に深く広く喰い込んでいる可能性すら見えている。

どう考えたところで単身で事に当たるべき内容ではない。それが分かっているからこそ、不知火は余計な口を挟まず、反発も見せなかった。

「でも、この案は私に有利過ぎるわね。どういう事？」

「二つは不知火さんを今失うわけにはいかない。今、不知火さんに抜けられるとアサギの補佐できる奴がいねえ」

「ま、まあ、そうね。さくらや紫もいるけれど、どちらかと言えば戦闘畑の人間だし……そもそもアサギも戦闘畑の人間だけ」

「もう一つは、オレのケジメだ。個人としても、ふうま宗家の当主としてもな」

今回の不知火が無謀に挑んだ責任は、小太郎にもある。

最終的な判断は不知火によるものではあるが、そのように追い込んだのは小太郎の動きに問題があったからだ。

誰よりも早く黒幕の存在を察していたのであれば、黙って握り潰して監視するのではなく、アサギと不知火に開示した上で特別チームでも編成すべきだったのだ。

故に謝意も兼ねて最大限の譲歩であった。

ふうま一門の立場が危うい中、水城家との関係までも悪化させては目も当てられない。これ以上、対魔忍内部で敵を作っては立ち行かなくなる。

「それから、ゆきかぜもヨミハラに来ている。あくまでもアイツ自身の意思だが、オレが行けると判断した」

「……そう。なら、あの子も全て知っているのね」

「ああ。アイツも何時まで経っても子供な訳じゃない。対魔忍としても、娘としても、十分に不知火さんの力になれる。それはオレが保証しよう」

「そう……そうね。此処は、流石は私とあの人の娘、と胸を張るべきかしら？」

不知火は何処か空元氣に見える、だが小太郎が顔を見せてから初めて笑みを刻んだ。

彼女の胸中としては複雑だろう。本音を言えばゆきかぜを巻き込みたくはなかった筈だ。にも関わらず、当の娘は自らの意思で危険に足を踏み入れた事を決意していた。

誇らしさと不安が同居した心中には、不知火も笑みを浮かべる以外の手段を持ち合わせていないようだ。

「何なら、ゆきかぜと話すかい？」

「いえ、必要ないわ。あの子も望んでいないでしょう？ 事が終われば、きちんと話し合います」

「そうかい。なら、仕事の話が続けたいが……」

「その前に、これを見てちょうだい」

これからの予定を話し合おうとした小太郎の言葉を遮り、不知火は自身の胸元へと手を差し込んだ。

其処から取り出されたのは、一つのカプセルと一つの小瓶であった。

カプセルの方は、一見すれば一般的な薬剤のそれと大差はない。そして、小瓶の方には中に無色透明の水溶液で満たされており、その中央には何らかのチップらしきものが浮かんでいた。

「これは……？」

「カプセルは私とリアルが契約を結ぶ際に渡されたカメラ微生物。そして、こちらのチップは改造中に私の頭の中に埋め込まれようとしていたもの。リアルは『イブ』と呼んでいた」

「んー？ て、こーとーは！……やるねえ、不知火さん」

「お褒めに預かり光栄だわ、と言いたい所だけれど、伊達に『幻影の対魔忍』なんて呼ばれていないわよ」

不知火の言葉から、全てを察した小太郎は呆れとも感嘆ともつかない響きの言葉を漏らした。

幻影の対魔忍の二つ名は、彼女の水遁の術を用いた目眩ましと幻惑から名付けられたもの。それを存分に使ったのである。

そう、不知火はリアルと魔術契約など交わしていないし、肉体に施された改造も最低限でしかないのだ。

長年、対魔忍として戦ってきた不知火は魔界技術の危うさは十分に理解している。唯々諾々と相手側の提案を受け入れるほど、間抜けでもない。

リアルとの魔術契約に関しては、契約書にサインをしたかのように見せかけた。

肉体改造と洗脳に関しても、リアルとその配下が直接身体に触れるようなもの以外は全て幻影を以てやり過ごしたのだ。

基本的に魔界の医療、改造技術は、機械に接続された生体部品——触手などを使って行われる。人間にせよ、魔族にせよ、集中力には限りがある以上、機械に任せてしまった方が失敗は少なくなるからだ。何らかの異常を触手が感じ取ったとしても、その異常は機械を通して作業員へと伝えられる。つまり、幻惑の術で機械の画面を異常の無いように見せかけ、水で作りに出した変わり身を配置し、己自身は身を

隠してしまえばいいだけの話。

しかし、並大抵の使い手では不可能だ。一度に用途の異なる複数の術を発動させた上で、破綻なく行使し続けるには、相当の習熟度が必要となる。

まして、幻惑の術は相手側に僅かな違和感でも与えようものならば、全て破綻してしまう。自身の腕に対する自信もなければ成り立たない離れ業。正に、幻影の対魔忍の面目躍如である。

「キメラ微生物の方は他にもサンプルがあつたけれど、チップの方は見当たらなかつた。私の様子を見に来たリアルとゾクトの会話を盗み聞いたけれど、黒幕から齎されたものである可能性が高いわ」

「見た所、生体パーツも組み込まれてるみたいだが、頭に埋め込むために小型化されてるから発信機なんかの心配もなさそうだな。桐生なら製造元まで探れそうだが、サンプルが一つじゃ心許ないか」

「ええ。もう一つか二つ、予備があつた方が確実でしょうね。でも、私一人では此処までが限界だつた」

「十分だ。目星はつけてあるつて言つたらろう？ サンプルとまでは言わないが、何らかの情報は手に入れられるさ」

「呆れた。貴方も人のこと言えないわよ、小太郎君」

黒幕への重要な手がかりである小瓶を眺めながら告げる小太郎に、今度は不知火が呆れを見せる番だつた。

ヨミハラへの潜入だけでも並の対魔忍には不可能だと言うのに、リアルと接触して不知火と接触し、逃走の計画も立てた上で、黒幕の情報収集までも並列して行う。少なくとも、不知火の記憶にある対魔忍に、これを可能とする者は一人としていない。呆れもしよう。

其処からは撤退の作戦を詰めていった。

地の底という条件、ヨミハラで得た情報を下に組み上げられた作戦に、不知火も口を挟む余地はなく、納得の至りであつた。

「成程、盲点だつたわね。それなら目を引きつけられる」

「ライフラインから握れる利権を考えれば、当然だけどね。お蔭で、こつちには有利に動く。全てが全て思い通りになるとは思えないが、全員揃って撤退となればこれしかない」

「ええ、そうね。私も賛同します。尤も、全てそちら任せになってしまいうのが心苦しいけれどね」

「元々、こつちの任務は不知火さんの救出と撤退支援だから、気にする必要はないよ」

其処で小太郎はようやく息を吐いた。

凡そ、想定していた通りの展開であったが、不安がなかったかと言われれば嘘になる。

不知火の説得が、今回の任務における山場の一つであった。彼女が単身でヨミハラの任務を受けたのは自信からではなく、感情に寄る所が大きい。

どれだけ不知火に有利な条件を提示しようとも、彼女が感情から拒絶する可能性は否定しきれなかったのだ。

ともあれ、何とか山場を超えた。そして、超えなければならぬ一線はもう一つ――

「あー、それから……」

「言わなくても分かっているわ。リアルとどんな話をしたのかは分からないけど、男として娼館に来たんなんですもの、するべき事は一つよね」

「……嫌じゃない？」

「勿論、嫌よ。娘と同じ年の、それも小さい頃から知っている男の子ですもの。でも、必要であるのなら仕方がないわ」

「……………」

「それに、これは私の覚悟と思って。一度きりだったとしても、母親が娘の想い人とこんな真似をするんですもの」

「……だよね」

「二つだけ、約束して。私ももう一人で全てを決断して無茶も無謀も

しない。小太郎君も、部隊も信用する。だから君も、分かっているのに口を閉ざす事だけは止めてちょうだい」

「分かったよ、約束する。………それから、黙ってて悪かった。あれじゃあ、稲火さんの死を軽んじているのも同然だった」

「もう、遅いわ。それは一番最初に言うべきよ」

静かに頭を下げる小太郎に、不知火は困ったように微笑んだ。小太郎の謝意が本物であると感じ取ったのであろう。

哀しみや怒りの振り下ろしどころを見失いながらも、全てを受け入れて前に進む覚悟を決めた、そんな笑みだった。

爆弾はいいね。人類が生み出した文化の極みだよ。
苦労人はそれをよくよく理解している

「ほらよ、これでどうかな？」

「ふ、は、ははははっ！ デカしたぞ！」

不知火との接触を終えて元の奴隷商人風の衣装に着替えた小太郎は、再び書齋にてリアルと顔を突き合わせていた。

小太郎がリアルに突き出したのは、スマートフォン型の多機能ツールであったが、通常のスマートフォンと同様の使い方も可能だ。画面に映し出されているのは、蕩けきった表情を浮かべる不知火の画像であり、多くの女を墮落させてきたリアルであっても疑う余地がない程の女の表情をしていた。

その様に、不知火への侮蔑と嘲笑を浮かべながらも、リアルは小太郎を褒め称える。

リアルにしてみれば思惑通りの展開であり、同時に小太郎の思惑通りの反応であった。

「それで、報酬の話だが」

「奴隷一人分で構わないよ。実際、こっちが払った労力はそれと同じぐらいだから」

「ほう。何だ、存外に欲がないな」

「強欲さ。此処でゴネて印象を下げるよりも、今後とも最良にして貰った方が最終的には金になる。人生は長いしねえ」

この手の仕事に相場などないが、もっと高額を要求してくると思っていたリアルは目を丸くしたが、受けた印象は良かったようだ。

無論、小太郎がそのように印象を操作するための発言であったが、傍目から見れば、信頼は金になると理解している商売上手であり、違和感を覚えさせない。

更に気を良くしたリアルは書齋の壁際にあつた或る本棚の前に立つと、中にあつた本の一つを傾ける。

すると本棚の一部がスライドし、中から金庫が現れた。明らかに店の売上を保管しておく場所ではない。となれば、リアル個人の資産と見るべきだろう。

そこから金を出したのは、信頼の証である。単純に金を払うだけでは信頼の証とはいえない。故に、自らの血肉とも言える金の中からわざわざ支払いを行うのだ。そうするのも、惜しくはない取引相手と示すために。

「過不足なくきっちりだね。じゃあ、今後ともご鼻眞に」

「ああ。またヨミハラに来たのなら顔を出せ。また仕事を回してやろう」

帯で封のされた札束を懐の中へと仕舞うと、背後から掛けられたリアルという言葉に手を振りながら、書齋を後にし、そのままアンダーエデンからヨミハラへと繰り出した。

（不知火さんはそのまま来ちまったが、撤退の手順は伝えてある。問題ないだろう。では、次の段階に移るとしようかねえ）

「……………」

アンダーエデンを出た小太郎の後を追う一つの影があった。

付かず離れずの距離を保ち、慎重に尾行をしていたのは、リアル
の秘書役であったメイド服を身に纏った女淫魔である。

淫魔族は魔界では有力貴族の執事や侍女を務めるものが多く、中
には爵位を持つ者も存在する。彼女の場合は、前者だ。

リアルは小太郎を信頼しきっており、既に尾行の命令など出して
はいない。この尾行は彼女自身の意思であり、決定でもある。個人の
意思で命令されてもいない仕事を熟すのには訳があった。

東京キングダムやアマダハラでは娼婦の身籠った赤子は今こうし
ている間にも発生しており、大半は生まれてくる前に墮胎させられ、
もう半分は生まれたとしても親と同じく娼婦や奴隷となる。

だが、罷り間違つてそういった境遇から脱す者も少なからず存在す
る。娼婦の親としての情か、或いは関わりを持った何者かの哀れみに
よつて、生き地獄から開放される。

最も、地獄から生還したからと言って、待っているのは別の地獄。
戸籍もなければ金もない、そんな子供が生きていけるほど人間社会は
寛容でも広大でもない。名前もない子供達は、生きるためにまた闇へ
と身を投げねばならない。

ならば名無しの子供が生まれ持った知恵と運で生き延び、奴隷商人
として身を立てる事は奇跡的な確率でこそあるが不可能ではないだ
ろう——しかし、彼女は納得していなかった。

彼女はリアルの秘書ではあるが、主人として仕える相手は別に居
る。リアルの秘書などをやっているのは、あくまでも主人の命令に
よつて、リアルの仕事を円滑に進めるために過ぎない。

正直な所、リアルがどうなった所で構わないのだ。不知火を墮落
させて引き込む、という主人の意向も、何もわざわざリアルなどに
やらせる必要はなく、身内の淫魔にやらせた方が確実であると信じて
いた。

今までの結果を見れば、近い内にリアルの下から不知火が移送されるのは明らか。そうなれば、主人の意向を実現させるのは、淫魔族である、と高を括っていた。

しかし、それもご破産。

ぽつと出の奴隷商人がリアルと接触したことにより、全ては取らぬ狸の皮算用となった。

結局の所、彼女は何か疑いがあつた訳ではなく、ましてや直感によるものではなく、単に屈辱を晴らすために小太郎の後を追っているのだ。

やるべき事とやりたい事と出来る事が何一つ一致していない感情にのみよつた行動ではあるが、誰よりも小太郎の正体へと迫っている事は皮肉と言う他ない。

そもそも、論理的に小太郎の正体を見破る事は不可能だ。闇の世界で小太郎の存在は認知されておらず、顔を知る者はいない。

奴隷商人などと言つてはいるが、奴隷商人でも何でもない故に何処を探ろうが情報など出てこない。情報が出てこなかったとしても、此処はヨミハラ、他の魔界都市を拠点としているのならば何ら不思議ではない。彼が対魔忍である、という前提の情報があれば、どうやっても辿り着けはしない。

何はともあれ、彼女の行動は正しかった。

正体は分からずとも、後を追う行為は無駄ではない。小太郎が対魔忍であり、不知火の救出を目的としている以上は当然である。

「――つ」

人混みの中、先を進んでいた小太郎が足を止め、背後を振り返る。突然の行動に、彼女は物陰へと身を潜め、注意深く様子を伺つた。始めの内は尾行がバレたのかと焦つたものの、対象は首を傾げるばかりですぐに歩き始めた。

（あの年で奴隷商人になれるだけの事はある。警戒心は強いようだが

……)

此処で、彼女に与えられた選択肢は二つ。

即ち、彼の警戒心の強さを理由に尾行を中断するか、彼の警戒心を掻い潜って尾行を続行するか。

(いや、これまでにアレだけの金を受け取っているんだ。持ち歩く筈はない。一度は宿泊先のホテルに必ず立ち寄ってから地上に戻るはず。進むルートは分かっている。多少距離を離れたとしても見失う事はない……!)

彼女の考えは正しく、間違っていない。

ここ数日の尾行で彼の行動パターンは把握しており、前回前々回のようにヨミハラの場合の娼館には行かず、そのままホテルへと戻る筈。

相手が尾行に気付き始めていたとしても、移動するルートが分かっている以上、一度距離を離してしまえばいい。見失ったとしても、追いつく事も先回りも可能である。

再び尾行を再開した淫魔は、小太郎の後を追う。

先程よりも距離を離してこそいたが、対象の様子に変化は見られず、気付かれた様子はない。

対象は大通りの人混みを抜けると、するりと路地裏へと身を滑り込ませた。

彼は毎回同じルートを通って、別の通りへと抜けていく。それ以降の足取りは日によって違ったが、商品を手に入れるために場末の娼館へ向かったのが当然だ。

このまま宿泊先のホテルへ戻るつもりだと確信した淫魔は、同じ路地裏に足を踏み入れる。

既に小太郎の背中は見えなくなっていたが、彼女に焦りはない。対象の歩幅から移動速度を測り、距離を詰めすぎないように足早に路地を進む。

その道は狭い上に薄暗く、同時に違法建築の煽りを受けて複雑に曲りくねっており、人通りは皆無。

其処を半ばまで進んだ瞬間――

「――が、はっ?!」

――彼女は、苦悶の声を上げた。

背後から何かで首を締め上げられたのである。

突然の出来事故に、考える暇すら与えられず、反射的に首へと両手を伸ばす。しかし、首に巻き付けられた何かは完全に埋没しており、とてもではないが外せない。

何とかしようと足掻く内に、酸素の供給を絶たれた脳髄はまともな機能を失う。

思考さえも奪われた彼女は意識すらも手放して、呆気なく路地裏へと身体を投げ出してしまう。

「はい、お仕舞い」

路地裏に響く声は、言うまでもなく小太郎のものだ。

この展開を引き寄せるために、わざわざ同じルートを通って印象づけた。背後を振り返ったのは、彼女に警戒心を抱かせながらも、距離を離させて身を隠す時間を稼ぐため。

地面に倒れ伏し、ピクリとも動かなくなった淫魔は生きているのか死んでいるのかさえ判然としない。

小太郎はそれを見下ろしながらも、冷めた視線を送るのみであった。

――彼女の行動は概ね正しく、間違っていたのは一つだけ。

相手が人間だからと舐め腐り、尾行がとうの昔に気付かれていると思えば至らない慢心ぶりだけだった。

(さて、一仕事済ませたな。このまま戻るとしますかねえ)

路地裏から現れた小太郎は、とても魔族を襲ったとは思えない早くもなければ遅くもない足取りで通りを進んでいく。

このまま奴隷商人として借りているホテルの部屋へと帰り、凜子に指示を出して空間跳躍の術でクラクルの住処へと戻る予定であった。

——だが、何者も予想や想定通りには事が進まないのが、世の常である。

(……? 紅の気配……だよな? いや、だが……)

ふと、背後から感じた気配に小太郎は足を止めそうになった。

彼自身の感性によるものであるが、紅の気配は独特だ。言葉として表現できず、肌で感じるしかない存在そのものの差異と違和感。

人でもなく、吸血鬼でもなく、その境に身を置き、本来であれば産まれる事すら許されない異端。幼少時から共に在った彼女の気配を、小太郎が間違える筈もない。

それはそれで妙な話だ。

言い方は悪いが、紅は小太郎に絶対服従である。仕えるべき主君として忠誠を誓い、女として真実の愛情もって寄り添っている事に疑う余地はない。

元々、紅は高潔で潔癖な自分の意見をなかなか曲げないが、それはそれとして性格は控えめで、考えや信念を口にする事は少ない。

他者と自分が異なっている。皆から疎まれる異端の仔。そんな境

遇で育ったからこそ身についた、当然の処世術であった。

だからこそ小太郎に何も告げず、待機命令すらも無視してヨミハラの街へと繰り出している事実が有り得ない。

本心で納得していなければ任務の失敗や放棄すらも辞さないであろうが、不知火救出の任務は紅も納得して参加していた。

小太郎の、潜入や情報収集はお前達にはまだ早い、今回の任務でお前達の役目は純粹な戦闘要員、という言葉にも、嘘偽りなく納得していた。

ならば、なぜ自身の後を紅の気配が追ってきているのか。

（――来やがったか。幻庵が娘である楓の救出に失敗した時点で、紅を連れ帰った時点で、紅がもう何人が存在する可能性は常に考えていた）

それはずっと考えてきた不安材料の一つ。

ブラックの手許に楓が残され、なおかつ紅という実例がある以上、考慮してしかるべき現実。

――紅の兄弟や姉妹の存在である。

ブラックが楓を手ずから攫った以上、彼女が生きているのなら、幻庵が紅を救出した一件以後も孕み袋として活用されている可能性は非常に高い。

余りにも残酷な現実を幻庵や紅の前で口にした事はなかったが、小太郎の頭には常にその危険性と可能性はあった。幻庵も言葉にせずとも分かっていたであろうし、紅も察しているはずだ。

だからこそ、幻庵は紅を小太郎に託した。少なくとも、幻庵の知る幼少期の紅は、その現実には耐えるだけの精神的な強さがなかったから。

（このタイミングで来たって事は、ブラックの野郎は紅の存在に気付いている）

もう一人の紅、という規格外が近寄ってきてもお、小太郎は冷静さを保っていた。

逃亡の鉄則は、走るな歩け。人混みの中で走る人間なぞ悪目立ちする。相手に不用意な情報を与えず、群衆に紛れたまま撒くのが基本。今すぐにも振り返って相手の姿を確認したかったが、それこそ墓穴を掘る行為だ。相手が何者であれ、このタイミングで目が合えば、それこそ目を付けられる。

(しかし、足取りがふらついている。こっちに一直線って感じでもない。てことは、ブラックにせよ、後を付けている奴にせよ。オレにも紅にも明確に居場所が分かっているわけじゃないみたいだな)

(そもそもオレは紅じゃねえし。てことは、オレに付いている紅の匂いを嗅ぎ取って追跡している、と考えるべきか。全く、吸血鬼の鼻も厄介なもんだな。犬かよ)

相手が自身を追ってこられる理由を分析しながら、小太郎は怒りとも呆れとも取れる溜め息を吐く。

先程の淫魔とは打って変わって、今回は追跡や尾行と呼べる上等なものではなかった。

明確に対象を追っているわけではなく、右へふらふら左へふらふら。まるで行き先を決めていない子供のような足取りだ。これが紅とよく似た気配さえ発していなければ、気にする必要すらない程だ。

そもそも、小太郎は紅と面識はあっても、紅と似たような存在ともブラックとも面識はない。後を追われる心配などない。

ならば、小太郎の身体に染み付いた紅の匂いを追っていると考えるしかるべき。吸血鬼の嗅覚ならば十分に追跡可能であり、追ってきている者も確信はなくとも、自身と似た匂いを嗅げば、ある程度の疑問や疑念を抱く、と辻褄は合う。

(しかしまあ舐められてるぞお、紅。ブラックは肝心な所では必ず自分の手を汚すタイプだ。アサギへの執着ぶりを見るにお気に入りに

は必ずそうする)

(それを他人にやらせるなんざ、ブラックにとって紅は、興味は引かれるが期待はしていない玩具ってことだ。いやはや全く、どつかの弾正を思わせる無責任ぶりだ。親としての自覚を持って欲しいもんだね)

——だが、コイツは許せんよなあ。未だにお前を自分の玩具だと思ってるって事だ。冗談だろ、もうとつくの昔にオレのだ)

表情にこそ出してはいなかったが、珍しく小太郎は腸が煮えくり返るような怒りを抱いていた。その怒りは、男の醜い独占欲に起因するものであり、ブラックを今直ぐにでも殺しに行きかねないほどのものだった。

自分の女が自らの意思で己の下を離れていくのは許容できても、自分の女を勝手に横から搔つ攫われるのも、勝手に弄ばれるのも我慢がならない。

数多の女を侍らせて、女の側には嫉妬や切なさを募らせるというのに、随分と身勝手な理屈である。だが、こと自分の女に関して小太郎に理屈も理論もない。唯一、彼が自分の本能と感情に赴くまま訴える人間だ。

多くの人間は、そんな彼に侮蔑と嫌悪の視線を向けるのであろうが、彼の手に居る女には、存外に好評だ。自分が愛している間は、小太郎も全力を以て守り、愛する事を知っているからだろう。

(と、言う訳で！ 後を付けてきてる奴もブラックも放って置いて逃げます。だって、まだその時じゃないし、殺されちゃうし、ああいう構ってちゃんは無視されるのが一番屈辱だからね。一生ひとり相撲やってどうぞ)

今直ぐにでもブラックを殺しに向かいかねないほどの怒りであったというのに、これである。

それも当然の事。感情によって目的を見失うような男ではない。ヨミハラくんだりまで足を向けたのは、あくまでも不知火救出が目的

であつて、ブラックなぞ関係ない。

奴が邪魔をしてこようが、最低限の対策を立て、最低限の対処はしても、積極的には関わらないのが得策だからだ。

一瞬で気持ち切り替えた小太郎はお詠え向きの場を見つけ、気軽な足取りで足を踏み入れる。

彼が入ったのは、酒場だった。

ヨミハラには大別して2種類の酒場がある。

地上の大金持ちに向けた店。大半が会員制であり、地上では味わえない魔界の酒や料理が提供され、ホステスが接待を行うクラブ。

ヨミハラの労働者に向けた店。誰もが簡単に足を踏み入れられる代わりに、何が起こつても不思議ではない不穏さの漂うパブ。

今回は後者だ。

まるで西部劇に登場する酒飲み場——ウエスタン・サルーンに酷似していた。

如何なる客でも迎え入れられるように扉は開け放たれており、中では樽をテーブル代わりに飲み比べに勤しむ者、カウンターに腰掛けて店の従業員と話している奴隷商人、仕事なのか仕事を終えたと思しき娼婦達が浴びるように酒を飲んでいた。

五月蠅すぎるほどの喧噪。下品な笑い声に下世話な話が飛び交い、中では殴り合いの喧嘩に発展している者も居たが、この場に留める者は誰一人としていない。

既に酔い潰れた者の口に漏斗を差し込み、更に酒を流し込む者。それを眺めながら、酔い潰れた者の懐から金を抜き取っている者まで居る。この喧噪が、この光景こそがヨミハラの酒場における日常であり、ヨミハラという街の倫理や観念を物語っているかのようだ。

「注文は……?」

「ビールをジョッキで。それからウォッカをボトルでくれ」

「ビア・バスターでもやんのか? タバスコはあるっちゃあるが……」

「どーでもいいだろ。そっちは酒を売る。こっちは酒を買う。オレ等の関係はそれだけだ。黙って寄越せ」

「違えねえ。だが、この店は先払いでな。ご覧の通り、飲んだくれどもの巢窟なんぞでね。貰うもんを先に貰つとかねえと、回収が見込めねえ」

「道理だな。ほらよ」

「――毎度」

店主と客の話に割り込んだ小太郎は、金を払ってビールとウオツカを注文した。

値段は地上の五倍であったが、先程リアルから受け取った金はたんまりとある。何の問題もない。

ヨミハラに生きる住人達の収入も高い。地上と変わらない仕事に就いたとしても、収入は地上の数倍だ。地上からの客が、それだけの金を落としていくのである。

だが、ヨミハラの物価は兎に角高い。地上からの搬入している故に輸送費が掛かり、物資の搬入口を管理しているノマドから金をせびられる。必然的に物価も跳ね上がる。

これでは地上で真つ当な職に付き、生活を送るのと変わらない。支出と収入が増えたとしても、生活の苦しさに変化はない。

安全と保証の下に生活を送るか、自由と危険の中で生活を送るかの違いしかない。どちらがより快適であるかは、個人の判断に委ねられる。

「トイレは奥だ。誰か入ってるようなら、少し奥に裏口がある。吐くなら其処で吐け」

「ご忠告どうも」

店主は金を受け取るとすぐさまビールをジョッキで、ウオツカを瓶ごとカウンターのの上に置き、忠告を口にした。

誰かの吐瀉物を片付けるなど日常茶飯事なのだろうが、それでも樂をできるに越したことはないと期待はしていない口ぶりだ。

小太郎は肩を竦めてビールとウオツカを受け取り、店の奥へと向

かつていく。

酒を一口も煽らずに進む姿に店主は怪訝な表情をしたものの、誰かと待ち合わせがあるのだろうと一人納得して、彼から視線を外した。その瞬間、小太郎は喧噪の中で誰からも見られていない事を確認し、ビールの中身をぶち撒けた。

但し、床ではなく、カウンターに座って娼婦と談笑していた屈強な身体つきの傭兵らしき男の頭に向けてである。

「何しやがるんだ、このクソ野郎！」

「——は？ 何言ってる、ぐへあつ?!」

「んだ、コラあつ!! よくもヤリやがったなあ!!」

小太郎がそそくさと店の奥へと向かっていくと、傭兵は何を勘違いしたのか、後ろで飲んでいた全く無関係の別の誰かを殴り倒す。

誰かの仲間は、突然の出来事と酔いから瞬間湯沸かし器と化し、床に倒れた仲間が変わって傭兵へと殴り掛かる。

小太郎が意図して引き起こした諍いは、瞬く間に店の全体へと伝播して乱闘騒ぎとなった。

これですらも店では日常なのだろう。飛び交う怒号と笑い声が、全てを物語っている。

この乱闘を引き起こした張本人は、店の喧噪など知ったことではないとばかりに店の奥へと向かっていく。

ウオツカの口を開け、今度は自らの頭に被りながら、薄暗い通路を通って裏口の扉に手を掛けた。

「ひっ、ぎゃあああああああ——!」

(思ったよりも早いな。しかし見境なしとは恐れ入るよ、全くう!)

店の喧噪が悲鳴へと変化した瞬間、小太郎は裏口から脱出した。

外は細い路地となっており、大人二人が並べて通れる程度の広さしかない。

敢えて大通りへと向かわずに、逆方向へと向かうがすぐに袋小路となっていたが、小太郎にとっては好都合であった。

壁に向かって手を付き、俯き加減で蹲って、全てが終わるのを待った。

店からはあらゆる者の悲鳴が響いていたが、暫くするとそれも止み、裏口のドアが開く。

「あくあ、無駄な時間使っちゃった。それに、あの女とパパの混じったみたいな匂いもなくなっちゃったし。折角、見つけたと思ったのになあ。ほんと、私とパパの邪魔をするクズばっかり」

現れたのは、年端も行かない少女であった。

薄桜色の長い髪を二つに束ね、真つ白なワンピースを来た、ヨミハラには似つかわしくない純粹無垢な少女。

けれど、その身から発せられる魔力は尋常ではなく、魂そのものを押し潰すかのように重く濃い。狂気の光を宿した赤い瞳は少女のそれではなく、人の理を一切介さない獯猛な獣のようだ。

「……………？」

「おつ、ぼ、うええげえええ……」

「……………きつたない、人間ってホント生きてる価値もないんだね、パパ」

(お前等も同じぐらいに生きてる価値はねえけどな)

背中に少女の視線を感じた小太郎は、人間ポンプのように胃を蠕動させて、内容物を吐き出す。

この程度の身体操作、彼にとってはお手の物。その気になれば、自らの意思で心臓すらも一時的に止める事すら可能だ。

すると少女は露骨に嫌悪と侮蔑の表情を浮かべると、すぐさま大通りへと向かっていく。

小太郎の情けない姿は今し方まで酒場で飲み明かし、限界を迎えた

酔っ払いにしか映らなかつたのだろう。

匂いもアルコールで上書きされ、顔も分からない以上は後を少女であつても後を追いやうがないものの、それ以上に恐ろしいのは思い込みであつた。

少女の気配が消え去るのを確認し、小太郎は何食わぬ表情で立ち上がる。

名前は分からないが、顔までは確認できた。そして――

「ありや、腐つてんのか。これじゃあ、どんな武器を使つたか分からないが、まあ能力に関しては凡そ分かつた。油断はできませんけどね」

――その能力と性格までも、垣間見る事が出来た。

裏口から覗き込んだ酒場は、死の静寂に包まれていた。

飲んだくれや店主の死体は一つ残らず原型を保たぬほど、肉も骨も腐つて果てており、数分前の喧噪が夢のようだ。

わざわざ酒場に入ったのは追跡を撒く為でもあつたが、同時に相手の能力や性格を測るためでもあつた。

見えてくるのは、ブラツクと同様の性格だ。強大な力を持つが故に我慢を知らず、虫の羽を筆るように残酷な気紛れを見せる強大な力を持っただけの子供。そして、何らかの手段によって、対象を腐らせる能力を有している。

人も魔族も区別のない殺戮を目にしても、自分が意図した結果故に眉一つ動かす事はなく小太郎は扉を締める。冥福の祈りも謝罪や感謝の念すらない。

ヨミハラに住まう者など、道具とすら思っていないのだろう。質こそ違えども、殺戮を引き起こした少女に勝るとも劣らぬ残忍さである。

（邪魔だから殺したって感じだな。我慢を知らない癩癪持ちの子供か。良くも悪くも、ブラツクのデッドコピーって感じかね。さて、どう利用して動かすべきか。まあ、一番の問題は――紅にどう説明

するかって事だよなあ)

「——小太兄!」

「何だ、待ってたのか」

「お母さん、お母さんは——って、お酒くさあ?!」

「うっ、本当に凄い匂いだな。何があった」

「……あー、ちよいとトラブルに巻き込まれたが、まあ問題ないよ。想定範囲内だ」

宿泊していたホテルに戻った後、再び凜子の空間跳躍の術によって拠点へと戻った小太郎を迎えたのは、ゆきかぜと凜子だった。

歪んでいた空間から現れた小太郎の姿に、ゆきかぜは詰め寄るように近寄ったが、強烈なアルコール臭に鼻を摘んで顔を逸らした。

「ところで、紅は?」

「紅か? 今は災禍殿と一緒にクラクルを風呂に入れている最中だが……」

「そうか、ならいい。先にお前等には不知火さんの現状を伝えておく」

真っ先に紅に伝えるべき事があったが、その様子では言葉を交わせるのは少し先になりそうだ。

クラクルは風呂嫌い、というか風呂に入るまでは極端に拒否反応を示す。一度でも入ってしまったえば極楽気分を味わうと言うのに、入るま

では正に風呂嫌いの猫そのもの。

強烈な獣臭さを発するクラクルに入浴の習慣を付けさせようとしている。同じ女として見過ごせないのだろうか、些か緊張感が足りないように映る。

だが、緊張感を常に保ち続けるのは難しい。人間が集中を保てる時間が極端に短いように、いつまでも張り詰めていては心も体も持ちはしない。敵地であったとしても、ある程度の安全さえ保証されているのなら、休息や弛緩を小太郎も推奨している故に、否定はしなかった。一時的に己の悩みを棚上げ出来ると分かった小太郎は、ゆきかぜと凜子に先んじて不知火の現状を伝えた。

不知火は完全に無事でこそないものの、正気を保っており、撤退に賛同している旨。

しかし、撤退の前に、今回の黒幕に関する情報を入手しなければならぬ必要がある事。

ようやく見え始めた光明にゆきかぜは安堵の吐息を漏らし、一抹の不安を抱えた凜子は神妙な面持ちで何かを考えている様子だ。

「よ、よかったあ。お母さん、無事だったんだね」

「ああ、流石は幻影の対魔忍。あそこまでとはオレも予想しちやいなかった」

「しかし、どうするつもりだ？ 黒幕の情報を入手する当てなどないだろう。アンダーエデンに潜入でもするのか？」

「まさか。リアルは黒幕にしてみりや、何時でも蜥蜴の尻尾切りの出来る程度の駒だ。アンダーエデンをいくら探っても、有用な情報なんぞコレ以上出てこねーよ」

「それでは手詰まりだ。そのチップの解析用の予備を入手するどころか、製造元も分からないでは、話にならないではないか」

「何、今から分かるさ」

凜子の指摘も最もであった。

不知火と共に撤退を開始するのは、黒幕へと繋がる情報を入手した

後。その最有力候補が、不知火に埋め込まれようとしたチップとその製造元であるが、予備や情報を入力しようにも繋がっていない道がない。

アンダーエデンには予備は保管されていないのは不知火が確認済み。一体、どのような経路でリアルが手に入れたか分からない以上は、後を追いようがない。

しかし、小太郎は先刻承知の上であるし、不知火に語ったように目星はつけてある。

その目星が淫魔族。矢崎とリアルの下には淫魔族の姿があった。矢崎と淫魔の護衛がどのような関係性にあったかは今となっては分からないが、リアルと淫魔の秘書の関係性ならば目の当たりになっている。

リアルにとって、淫魔の秘書は目の上のたんこぶに近い存在であつたようだ。

有能な秘書であつたのは認めるが、極力己から遠ざけたいかのような、力を借りるのも癪だと言つた雰囲気を感じていた。小太郎に対して不知火の調教を依頼してきた場に、秘書が居なかつた事からもそれが伺える。

確かにリアルと秘書は味方同士であつたようだが、決して同じ派閥ではないし、手と手を取り合つて困難に立ち向かうような間柄ではないのだろう。

其処から察せるのは、あの秘書は黒幕がリアルの役割を円滑に進ませるための直属の部下に近いこと。だからこそ――

「何、今の……?」

「遠いが、爆発のようだな。何回か連続して響いたが……何処その組織の抗争か?」

「いや、オレが仕掛けてきた爆弾だよ」

「は? 小太兄、なんでそんな事したの? そんなことしたら……」

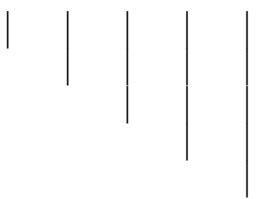
「これがオレの作戦よ。名付けて『オレの自動追尾弾だぜ……』作戦(キリッ)」

(……………絶対に碌でもない作戦だ)

「ほら、ボーつとするな。さつさとドローンとりモコン持ってこい。敵の拠点が割れて、敵に被害を与える一挙両得の作戦だろう」

巫山戯ているとしか思えない作戦名であったが、二人はよく知っている。小太郎が巫山戯ながら実行する作戦の恐ろしさとエゲつなさを。

微妙な表情を見せて固まったゆきかぜと凜子は、嫌な予感をひしひしと感じながらも、小太郎の命令に従うのであった。



「うつ、ぐっ……………げほ、げほ……………一体、何が……………奴、だったのか……………」

気を失ってから数時間後、淫魔の秘書は路地裏で目を覚ました。

地面に倒れていた影響なのか、清潔だったメイド服は泥で汚れ、乱れている。

痛む首を擦りながら咳き込んだ淫魔は、自分の身に何が起きたのかを思い出す。

一瞬かつ突然の出来事に、相手が誰であったのかは確認できなかったが、首を締め上げられた挙げ句に、意識を奪われた事だけ確かだ。窒息の影響なのか、思考が巧く回らなかった。

首絞め強盗などヨミハラでは日常茶飯事であるが、自分が狙われるとは考え難い。何よりも、身包みを剥がされてもいないし、何処かに

売られている訳ではない以上、考え難い。

やはり、真つ先に思い立ったのは尾行していた対象の顔だ。証拠がない以上は暴論もいい所な推測であるが、事実は正しい。

鈍い思考でくらくらと頭が回らず、身体の反応も頗る鈍い。まるで全身に鉛でも流し込まれたかのようなだった。

「……………ん？　これは……………」

路地の壁に寄りかかり、何度も頭を振りながら立ち上がった彼女は、ふと足元を見て驚愕した。

足元に転がっていたのは一つのカプセルであり、彼女自身もよく見知ったもの。

アンダーエデンにおいて、リアルと娼婦が契約をした際に飲み込むキメラ微生物が入ったカプセルである。

それをやつとの思いで拾い上げた彼女はまじまじと長め、本物である事を確信する。

こんな所に転がっている事は有り得ないものだ。

奴隷娼婦を逃さないためにリアルが独自に開発された技術であり、これを独占するために技術の公開や提供は一切行っていない。

淫魔の目から見ても管理は嚴重の一言。もし、一つでもカプセルが行方不明になれば、アンダーエデンは上から下への大騒ぎになった挙げ句、お抱えの技術者が何人も首が切られ、持ち出した者が見つかるまで犯人探しが始まる筈だ。

その時、彼女の頭に電流が走った。

（水城 不知火か！　奴の幻術ならば、飲み込んだように見せかけるのは容易い。これまでリーアルの調教に眉一つ動かさなかつた事は頷ける……………！）

（ならば……………ならば、奴も対魔忍か！　救出か、潜入の手助けか。兎も角、奴は水城 不知火と繋がっている。これを持ち出している事が何よりの証明だ！）

（私を殺さなかったのは、誰かが通りがかったか、何か予想外のトラブルが起きたのか。何にせよ、私にとっては幸運だった）

彼女の思考は概ね正しい。

だが、本来ならば考えるべき一つの疑問が抜け落ちている。

今の今まで慎重かつ巧妙に正体を隠してきた男が、不知火から受け取ったキメラ微生物を落とすような失敗を犯すのか、という疑問を。

（リアルに伝えるか……いや、駄目だ。自己保身と上昇志向の強いリアルルの事、伝えたところで男を消してこの一件を闇に葬り、再び不知火に契約と改造を迫るだけ。その過程で、全てを知る私も消そうとする……！）

（幸い、あの御方も近日中にいらつしやると耳にしている。何としても、伝えねば……！）

重い身体を引き摺るように動かしながら、淫魔はアンダーエデンとは別の方向へと向かった。

彼女の主の拠点は、ヨミハラには複数存在している。

主の目的は強大であり、今はノマドを隠れ蓑としているが、いずれはその支配関係も入れ替わる。その目的を達成する為には、リアル以外にも娼館を経営する必要があった。

無論、それはヨミハラだけではない。東京、アミダハラ、アマハラ、トミハラ。誰にも悟られぬまま進行して手遅れとなる病のように、各地の魔界都市には主の傘下となる娼館が無数に存在し、更に計画の遂行するために必要な本拠地も。

彼女が向かうのはそうした拠点の一つであり、彼女が仲間と認めている同じ淫魔族が経営する娼館である。

しかし、其処へ向かう道程は、彼女にとって屈辱の極みであった。道行く人間どもには薄汚れた鼠のような有様を好奇の視線で見られ、道で立つ娼婦どもにすら嘲笑される始末。

それでも彼女が耐えたのは、ひとえに使命感故だ。自らが仕える主

の大望を叶えるために、同じ思いで仕える仲間には危機の到来を伝えるために、思い通りにならぬ身体を懸命に動かし続ける。

「誰か、誰かいないか——！」

そして、ようやく辿り着いた娼館の前で、声を張り上げる。

彼女の声と姿を認めたらしき仲間は彼女へと駆け寄り、安堵からか彼女は両膝を追ってその場に蹲る。

意識は朦朧としていたが、失うほどではない。身を案じる仲間の声すら遠かったものの、最後の力を振り絞って、伝えなければならぬ言葉を口にしようとした瞬間——

——彼女の身体は、何の比喩もなく爆発四散した。

駆け寄った幾人かの仲間どころか、娼館の玄関すらも巻き込む大きな爆発。

通行人も爆発の影響をまろに受け、何人かが死亡し、数十人が爆風によって重傷を被る。まるで水面に波紋が広がるように悲鳴と怒号が迸り、混乱は一気に波及していく。

それに共鳴するかのようには、街のアチコチで同じように爆発が連続する。

数日後、この爆発事件はヨミハラ自体を狙った無差別テロ行為として、ノマドから正式に発表されるものの、後に引き起こされる最悪の事件の呼び水の一つに過ぎない事を知る者は、未だ誰もいない。

『知的生命体の思考能力は優秀です。動物の帰巢本能よりも遥かにね。何せ勝手に道を覚えて勝手に家に帰るんだから。後は身体に爆弾を仕掛けた上で思考を操ってやれば——はい、自動追尾弾の完成です。いや、この場合は自動追尾ミサイルか？ まあ、どつちでもいいか』

そう、小太郎が淫魔を殺さずに置いたのは、こういう思惑があったから。

敵の情報を得るためには拠点を探るのが一番早い。しかし、それが分からないのであれば、それを知る者に案内させればいいだけの話。

小太郎が尋問や拷問を行っては時間がかかる。ならば、相手を拠点に戻らざるを得ない状況に叩き落として、後を追うなり目印を仕掛けておいた方が余程効率的だ。

彼女の身体の中には、桐生から学んだ簡易手術によって、米連製の小型爆弾と盗聴器が仕掛けてあった。思考が鈍く、身体が重かったのは、麻酔の効果が残っていたから。

後は、盗聴器から伝えられる状況から頃合いを見計らって、爆弾を作動させれば、目印の出来上がりだ。

全ては釈迦の掌ならぬ小太郎の掌の上。

相手の性格や心理を一目見ただけ見抜き、先を読む事に長け、あらゆる手段の行使に躊躇がない彼ならではの外道畜生にすら劣る所業である。

巻き込まれた彼女は溜まったものではないが、全ては自業自得。人を喰い物にする魔族になど同情の余地はなく、既に血に染まって殺されて当然の存在。

唯一、彼女に救いがあるとすれば、全てを達成しようとした安堵と共に、自らの死にも気付かずに死んだ事だけだろう。

「ね？ 簡単でしょう？」

「……………うわあ……………うわあ！」

「こ、こんなのやっては駄目なヤツではないかあ！」

「は？ 何でや。糞みたいな街の糞みたいな敵と糞みたいな住人どもを爆死させただけやぞ。おかげさんでこっちは手も汚れて糞塗れじゃ」

「いやあ、あのう、でも……その、こういうの対魔忍的に駄目だと思うよ？」

「対魔忍がやったってバレなきやええんじやバレなきやのう。やったのオレだしね。お前らは思う存分、正義の味方面しててええんやで？

それに最後に勝てば言えない事も全て闇に葬れるから。歴史とはそうやって紡がれてきたんだよ」

「そ、そういう問題では……いや、それに、こんな事をしては拠点の警備が厳しくなるだろう！ やっぱり駄目だ駄目だ駄目だあ！」

「大丈夫じゃ。そのためにあちこちに爆弾仕掛けて、目的を分からなくしてんじやん。相手側は敵を想定しきれてないから、警備が厳しくなっても付け入る隙なんていくらでもあるんだよなあ」

「何もかも計算尽くか、お前は！ この街の悪党どもが可愛く見えるぞ、私は！」

「悪を滅ぼすのはより強大な悪！ オレは悪でも対魔忍は正義だから問題ないっ！（キリッ）」

「……………私、小太兄だけは敵に回さない。好きだからってのもあるけど、それ以上に怖い（震え声）」

「何処かで聞いた事があるぞ、確かノマドの臍だったか。こういう戦法を使っていただろう」

「はあん？ あの糞女がやってんのは味方で、だろ？ オレのは敵を使つてやつてる。やったぜ、オレのがまだ幾分かマシじやん！（確信）」
「このドライモンスター!!」

これが、ドローンで敵の拠点を眺めながら行われた小太郎、ゆきかぜ、凜子の会話の一部始終である。

最早、二人は怒ればいいのか震えればいいのか分からない、といった風情であったが、小太郎は涼しい顔をして罪悪感など一切持っていない様子である。

この後、やってきた紅は小太郎の行いに絶叫し、災禍は、やると思った、どうして止められなかったんだ私へと頭を抱えるハメになる。

しかし、最終的には小太郎の手法を認められないながらも、受け入れてしまった辺り、どうしようもなく彼に染まり始めている何よりの証明であった。

苦勞人が思っているほど、彼女達は弱くはない

小太郎による「オレの自動追尾弾だぜ……」作戦の後。

ゆきかぜと凜子からは重苦しい溜め息と罵倒、災禍からは苦言を呈され、紅とクラクルは余りの所業にドン引き状態の中、淫魔達の本拠、或いは拠点の一つと思しき娼館を確認した。

兼ねてより災禍が収集していたヨミハラの情報から、想定していた潜入手段が有効であると判断した小太郎は、面々に自らの考えを明かした。

どれだけ言葉を重ねても聞く耳を持たない彼の姿勢に全員が諦め、不承不承ながらも言葉に耳を傾けた。

潜入に赴くのは、やはり小太郎と災禍である。

身につけた技能的に潜入が可能なのは、この二人しかいないので当然であろう。

凜子は潜居中、万が一に備え、いつでも空間跳躍の術を行使できる状態で待機。ゆきかぜと紅は、此方の拠点が襲撃された際の備えに当たる。

何にせよ、これまで通りの布陣だ。三人は歯痒い限りであろうが、能力にも性格にも適材適所というものがある。経験的にも未熟である以上、当然の采配であった。

小太郎は次の作戦行動を伝えると、解散を宣言し、今へと至る。

気ままなクラクルは屋敷の何処かへ消え、災禍、凜子、ゆきかぜはそれぞれの選んだ部屋へと戻り、紅もまた同様であった。

部屋に戻った紅は、小太郎の力に慣れていない現実に歯痒さと悔しさを感じながらも、ベッドの上に正座し、精神統一を行っていた。

『精神の乱れは剣の乱れ。負の感情は容易く剣先を鈍らせ、自らの身を危険に晒す。もし、心に乱れを感じたのなら、これが一番よい』

もう遠い記憶になりつつある幻庵の教えを紅は愚直に実践する。

瞼を閉じ、呼吸を整え、自らの内に埋没していくかのような感覚。刃の如く研ぎ澄まされていくかのようなようだ。

徐々に、対魔忍として、小太郎の刃として相応しい精神が構築されていく過程を遮ったのは、ドアを叩くノックの音であった。

「紅、いるか?」

「ああ、どうぞ」

ノックと共に問い掛けてきたのは聞き違える筈のない小太郎の声。

彼の方から訪れるのは珍しく、精神統一の邪魔をされはしたものの紅に不機嫌な様子はなく、寧ろ嬉しげですらあった。

喜びから僅かばかりに上擦った声で、部屋へ入るように促す。男と女としての一線を越えてから少しは慣れたかと思ったが、どうにも気恥ずかしさが先行してしまう。

しかし、喜びを覚えていた彼女の表情に比べ、入ってきた彼の表情は余りに険しい。

珍しく悩んでいるかのような仕草に、決して甘い時間を過ごしに来た訳ではないらしい。

紅にしてみれば残念極まる事態であったが、先程までの精神統一の影響か、切り替えは早かった。正座を解いて、小太郎に向き合うようにベッドの端へと腰掛ける。

「どうかしたのか……?」

「……オレの視点や意見は極力排除して、事実だけ伝える。今日、ヨミハラでお前によく似たガキに遭遇した」

「……? どういう事だ?」

「ただの他人の空似じゃない。遺伝的な特徴が出やすい部分にお前だけじゃなく幻庵や心願寺 楓との共通点も見受けられた——お前の血縁である可能性が極めて高い」

「……………え?」

余りにも唐突で予想だにできなかった言葉に、紅は硬直した。

自身の血縁と言えば、祖父である幻庵と会った事のない母・楓、そして認める事すら忌々しい不死の王の三人だけ。

しかし、小太郎はガキと口にした。自らの血縁は皆大人。そもそも、その三人ならば、小太郎は出会った相手を名前で呼ぶ筈である。

そこから導き出されるのは――

小太郎にとっては口にするまでもない結論であり、紅にとっては口にしたくもない結論である。

彼の語る言葉を咀嚼し始めた紅の表情は蒼褪めていき、身体の内側では心臓が早鐘のように打って、呼吸も儘ならない。

「――それ、は」

「女だったから、お前にとっては妹に当たるんだと思う」

「……………」

「……幻庵がブラツクの魔の手からお前を救出した後も、心願寺 楓を使った異種交配実験は続けられていた、という事だ」

今は亡き幻庵にとっても無惨極まる現実を、静かに語られながら紅は努めて冷静であろうとした。

彼女自身、目を逸し続けてはいたものの、常に頭の隅にあった可能性だ。我を忘れて激昂はしない。

それでも、腹の底から湧き上がる怒りを消し去る事は出来なかった。

人を何だと思っているのか。幻庵の背負った無念と悔恨を思えば、楓が見たであろう地獄を思えば、そう考えられずにはいられない。

だが、紅は大きく呼吸を吐き出し、強い意志の光を宿した瞳を小太郎に向けた。

もつと取り乱すとても思っていたのだろうか、普段冷静な彼が珍しく目を丸くしながらもたじろいだ。

「小太郎に、聞きたい事がある。その子供について」

「——それは、オレは口にしたくない。オレの目から見たものを語ったところで、それはオレの意見であつて、オレの意志でしかない。ガキについては自分で見て確かめるべきだ」

「良い、分かっている。私は、それを聞きたいんだ」

小太郎にしてみれば、紅の妹と思しき少女に関して、必要以上に語りたくはなかった。

他者の口を挟んだ時点でそれは事実ではなく情報であり、紅の決定や意志に自身の色が加わるも同然だ。

この一件に関しては、一切合切を紅の意志で決定するべき問題である。如何に幻庵から紅の身を頼まれたとは言え、結局は何処まで行つても他人事でしかないのだ。

幻庵と紅の痛みや苦しみを真の意味で理解してやる事など出来ない。だからこそ、当事者に全てを任せるべき。結果として袂を分かつとしてもだ。

それが彼なりの誠実さだったのだろうが、紅は小太郎の見てきた全てを口から語られるのを待った。全幅の信頼とはそういうものだ、と言わんばかりに。

紅は小太郎に全てを捧げた身。彼の女であり、彼の敵を殺す剣と認めている。任務上の標的に対する容赦の無さと悪辣さには辟易とするものの、味方に対する優しさと誠実さを失う相手ではないと知っているから。

結局、折れたのは小太郎だった。

紅が望んでいる以上は、此処で口を噤んでも意味がないと判断したのだろう。

可能な限り己の意見を廃し、客観的な事実のみを伝える。小太郎が意図していたとは言え、あの酒場で起きた惨状を——

「……………そうか。なら、その娘は私の敵だ」

「良いのか、紅。あのガキはお前にとって、この世で唯一——」

「分かっている。分かっているよ。でも、今の私は対魔忍で、独立遊撃部隊の隊員だから」

この世において、唯一の同種であり、同じ苦しみを共有できる筈の存在を、紅は敵と断言した。

例え、小太郎が見聞き体験した事柄であったとしても、少女の行動は紅の許容できるラインを大きく越えていた。

きつと少女は、この街だから虐殺を引き起こしたのではなく、全てが嫌いだから塵殺したのだと確信していた。

人も魔族も他人は弱く醜く、そして恐ろしい。

自分とは違うからという理由だけで、同じ精神性を有し言葉の通じる相手であつても、殴られれば痛い理解しているのに痛いと分かっているからこそ嬉々として拳を振り上げる。それが、十数年で紅が実感した事実である。

少女が何を感じ、何を思っていたのか痛いほど理解できた。少女は幻庵と小太郎、二人が引き合わせてくれたあやめ、龍、骸佐、ゆきかぜ、凜子に出会わなかった紅そのものだったからだ。

紅は彼等と共に生活する事で学んできた。他者の目から己を見れば、人や魔族と同じく、弱く醜く、そして恐ろしい生き物に映るだろうと思う。

誰もがそうした他者への恐怖や不安と戦いながら、一人では寂しくてとてもではないが生きてはいけなから手を取り合う。

種族を隔てる壁は確かに高い。だが、其処で拒絶して自分の内に籠もってしまうべきではない。紅はそう結論する。

「それに、今はゆきかぜと不知火さんのためにヨミハラに来たから。今は、その娘の事は忘れるよ」

「そうか。悪いな、色々とお前を見縊っていた」

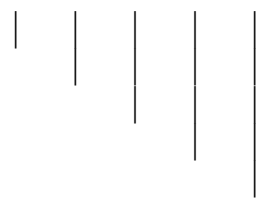
「ふふん。小太郎の見ていない所でだって、成長しているからな」

小太郎は破顔し、紅は悪戯っぽく表情を崩す。まるで互いの不安を

和らげるかのようだ。

二人の不安は正しい。

邪悪というものは確実に忍び寄り、感情というものは易々と制御でき
るものではないのだから。



「随分と、派手にやられたものだな」

「申し訳御座いません。返す言葉もなく……」

「まあいい。現状はどうなっている」

小太郎に散々利用された挙げ句、爆殺された淫魔が向かった娼館の一室に、二つの人影が在った。

一人は男の淫魔であり、この娼館を任されていた者。見るからに冷徹を形にしたかのような美丈夫であったが、その額には冷や汗が伝っている。

もう一人は、声からして男であったが、薄暗い部屋の中では表情を伺い知れず、何者であるか分からない。少なくとも娼館の主の態度を見れば、上位の存在である事は間違いない。

「ハッ。娼館の玄関は一部爆発で吹き飛びましたが、明日には修繕が終わります」

「そうか。対応が早いな、よくやった」

「勿体なき御言葉、恐悦の至りです」

急ピッチで娼館の修繕を進めていると知り、顔も名前も分からない男は、素直に称賛し、娼館の主は深々と頭を下げる。

闇の住人は顔を泥を擦られるのを極端に嫌う。プライドを傷つけられる、という理由もあるが、それ以上に裏社会において他者から侮られるのは致命的。

侮られれば侮られた分だけ付け入れられ、筆り取られる。例えそれを取り繕いであつたとしても、示威や誇示とは身を守り、利益を確保するには必要な行為なのだ。

何より、この娼館はリーアルのアンダーエデンとは違い、娼婦を本物の淫魔が務める。

政府の要人、財界の重鎮、大企業の役員などを籠絡し、彼等の側に引き込む役割をになっている。

彼等はブラックのノマドとは異なり、表立って行動していない。寧ろ、そういった行為事態がナンセンスだと鼻で笑っている。

人間を効率よく支配するには、力尽くではなく、頭を抑えてしまえばいい。国の支配階級を都合の良い傀儡としてしまえば、国民は知らず知らずの内に家畜へと成り下がるのだから。

「下手人についてだが……」

「申し訳御座いません。そちらについては何も。ただ、ヨミハラの各地で爆発事件が同時多発的に発生していたようです」

「他の組織が我々を狙ったようには思えませんが……そう見せかけるのが狙い、という線もあるか」

「仰る通りで。しかし、それでは我々の存在や計画、目的も露見している可能性が高い。であれば、我々の中に裏切り者がいる可能性も……」

「違いない。だが、今回の件に関しては外部の情報収集を中心に行え。裏切り者探しなど疑心暗鬼を生み出すだけだ。余の同胞にそのような不和は要らぬ。店の警備を増やし、爆発物には十分に注意させろ」
「畏まりました。主の意のままに」

結局の所、彼等もまた相手の目的が何であるか、まだ分かっていない。

それも当然だ。小太郎によって爆殺された淫魔どころか、彼女を助けに向かった仲間すら死体も残らなかつた。

娼館にいた仲間の証言により、彼女であつた事は間違いないが、彼女が爆発物を持たされたのか、仕掛けられた爆発物に巻き込まれたかすらも判然としない。

彼等に出来る事は、精々が娼館の警備を増やして、見えぬ敵に備える事のみである。

「明日、奴が此処に来る」

「成程。では、これを機に……」

「暫く先の話になるが、な。奴の目的が分かっている以上、籠絡は容易い」

「後は、今まで通りに、ですね」

娼館の主が薄つすらと浮かべた笑みは、悍ましいにも程があるほど淫らに歪んでいた。正に淫魔に相応しい笑みである。

尤も、率直に性的興奮を覚えているのではなく、人間が不様に墮落していく様が好きで好きで堪らないというようだ。

姿が見えない男は笑い声を漏らす事なく、表情も伺い知れないが、溢れる瘴気が胎動しており、明らかに腹の底から笑っていた。

「それから、捕らえた対魔忍はどうなっている?」

「水城 不知火ですか?」

「いや、そちらではない。もう一人の方だ」

「そちらについては地下で恙なく調教が進んでおります。もう暫しお時間を頂ければ、我らの肉壁としてみせましょう。しかし——」

「口にせずとも分かる。お前達の不安と疑問も当然だ。だが、その件に関して、奴が情報を持つてくる予定だ。我等にとつても有益になりうる値千金の情報をな」

——やはり、誰の思い通りにも事は進まない。

向かい合う二人だけではなく、この場にはいない小太郎にとっても同様に。

今現在、小太郎達が把握している捕らえられた対魔忍は、水城 不知火ただ一人。それとは別に対魔忍が捕らえられているなど、正に寝耳に水、驚天動地の事実である。

しかし、一つの疑問を抱く。

娼館の主は、その対魔忍を問題なく墮としてみせると豪語した。姿の分からぬ男も、それを否定せずに首肯する素振りすら見せた。

ならば何故、彼等が不安や疑問を抱かねばならぬのか。

自分達にとって都合の良い傀儡とする以前の問題があるのだ、と言わんばかりであった。

苦労人を追い詰めるのが、対魔忍や魔族や米連だけだ
と思つた？ そんな事はありえないんだよなあ……

「もう玄関が直つてやがる。魔界の建造技術はどうなつてんですかねえ」

「ドワーフなど工芸や建築技術に優れた種族もいますからね。専属か、業者として存在しているのでは？」

「だろうねえ。警備が厳しくなっちゃいるが、単純に厳しくなっただけ。誰かに狙いを定めている訳ではなく、誰もを警戒している」

「網は張つて入るものの、網目が粗い。想定通り、狙い目です」

ヨミハラが無差別の同時多発爆破事件が起きてから二日後。

小太郎と災禍は、リアルな秘書が逃げ帰った4階建ての娼館『ドリーム』から100mは離れた建物の屋根から警備の様子を観察していた。

地下と言う薄暗がりの中で、二人揃つて双眼鏡すら用いずに様子を探る辺り、視力も高く夜目も効く辺りは実に対魔忍らしい。

正面玄関では淫魔にしては珍しく戦闘に特化と思しき個体が立つており、客に機械と手感で身体検査を行い、不審者の立ち入りと不審物の持ち込みを徹底的に排除していた。

「じゃあ着替えていくか。手筈通り、中に潜入するのはオレ一人」

「私は外で待機し、回収と撤退の支援ですね。本来なら、私が行くべきでしょうが」

「二人の方が何かと身軽だし。災禍は両脚が義足だから機械の目に引っ掛かりかねない。生身の身体で対魔粒子も少ないオレの方が潜入には向いてる。適材適所だ。使える者は親でも使えつてな。自身だってそうだろうよ」

「当主や部隊長なのですから、本来なら命令だけ下して、結果は座して待つのが普通なのですが……」

「しよーがねーやな。人手が足りねーつて。人手が足りてても能力が足りてないから、結局オレが動く方が確実になるしなあ……」

「……………はあ」

ひとしきり娼館の様子を探り終わった小太郎と災禍は、自分達の現状に嘆きながら服の上から更に薄汚れたグレーのつなぎを着込み、同色の帽子を目深に被る。

そして、屋上から裏路地へと飛び降りた二人は、用意してあった大人が一人優に入れる台車をそれぞれ押しながら大通りへと出た。

一見、目を引きそうな格好と荷物であるが、擦れ違うヨミハラの仕事人は気に留める様子はない。

それもその筈、二人の格好はヨミハラに於けるリネンサービス業者のそれであつたのだから。

ヨミハラのお店は大半が娼館。客が一人の娼婦を買えば、寝具は体液で汚れ、清潔な寝具と入れ替える必要がある。

一日に消費される寝具の量は凄まじい数に登る。とてもではないが、それぞれの娼館で洗濯をして再使用するなど人件費の無駄であり、工数として不可能だ。

故に、リネンサービスで金を稼ごうとする輩も組織も存在している。地上と変わらないレベルの生活が送れるということは、地上と変わらないレベルのインフラや各業者が揃っているということでもあるのだから。

ヨミハラの実態を見る以前から、こうした現実を予期していた小太郎は、災禍を娼婦として街に立たせてインフラや各業者について調べさせた。

命を受けた災禍は自分達が隠れ蓑にしやすく、なおかつ潜入に向いた業者をピックアップし、その仕事内容と事業所を明確にするべく探った。

思惑通り、誰にも正体を悟られる事なく、二人はドリームの側面へ

と回った。

ドリームは正面玄関以外を建物で囲まれており、左右裏手は他と同じく路地となっている。道幅は比較的広く、台車を押していても苦にならない。清掃も行き届いているらしく、鼠や魔界生物の姿も見受けられなかった。

裏口に至るまでの間に、ドリームの窓から淫魔らしき娼婦と客らしき中年男性と目が合ったが不審にさえ思われない。日常的に目にしている光景故に不審感へと至らないのだろう。この場合、相手の間抜けさを責めるよりも、災禍の選んだ業者が最適であったと称賛されるべきだ。

「使用済みの寝具の回収と新しい寝具の配達に来ました」

裏口へと辿り着いた小太郎は設置された監視カメラに自らの顔が映ず、なおかつ不自然にならない位置からチャイムを鳴らし、インターホンに向けて語り出すと、暫くして返事があった。

待つこと数分。鍵の外される音が響き、扉を開いて現れたのは、執事服を身に纏った男の淫魔であったが、小太郎と災禍の姿を確認すると訝しげな表情を浮かべる。

「いつもの奴はどうした」

「ああ、アイツなら死んだよ。この前の爆発にでも巻き込まれたのかねえ。少なくとも、オレは聞いていない。オレは臨時で此処に回されて、後ろの奴は最近入った新人だ」

「……………」

あからさまに疑いの視線を向けてくる淫魔に、小太郎は肩を竦めながら虚言を弄する。

前日の内に災禍が事業所へと忍び込んでおり、配達員のリスト、配達のルートや時間までも入手していた。

本来、ドリームへと配達に来る男は前日の内に始末しており、代理

を務める者も後数時間は訪れない。万が一、事業所に連絡を入れられても何の問題もなくやり過ごせるだろう。

仲間を吹き飛ばされて殺されていたからだろうか、淫魔は殊の外あつさりと言を受け入れ、そうかとだけ告げて顎をしゃくる。

その先は、裏口の隣にある大きな扉があつた。大量の酒や食品を一度に店に入れ、各階へと家具を運ぶ物資搬入用のエレベーターだ。其処に入れという意味だろう。

「じゃあ、オレは中に届けてくる。外に使用済みの寝具を入れるシューターがあるから、空の台車と入れ替えとけ」

「……………」

「——いや、待て。お前、女か？」

先輩役の小太郎の言葉に、後輩役の災禍は従順に無言で頷いたが、淫魔の目が鋭く尖る。

ヨミハラに居る女は娼婦と奴隷だけ——であるが、このような肉体労働に位置する仕事に、女を使う場合は酷く珍しい。

災禍が女である事が悟られた場合、疑われるのは分かっていた故に女らしい体型を誤魔化せるように胸をサラシで潰し、つなぎの中に布を詰めていた。

だが、それでもなお淫魔が気付いたのは、異性を虜にして精気を啜る種族が持つ嗅覚や感覚故であつたのだろうか。

「帽子を外せ」

「あー、それは止めといた方が……………」

「黙れ。いいから早くしろ」

「つたく、だつてよ。ほら、見せてやれ」

「……………はい」

「——うっ」

淫魔の指示通り、災禍が帽子を外し、隠されていた顔が明らかにな

る。

裏口から溢れる光に晒された顔は、酷く歪み崩れていた。

顔の左半分は何らかの事故の影響であろうか、肌色の皮膚がなく、筋肉や眼球、歯茎や白い歯が剥き出しに。

顔の右半分は生まれ持った先天的なものであろうか、眼球は白く濁り、鼻は欠け、アトピー性皮膚炎によつて点状紅斑、小水泡、紅斑紅疹で覆われている。

誰もが顔を顰めるほどの醜女ぶり——少なくとも、淫魔の目にはそう写っていた。

顔を見せろと言われる程度は小太郎達には想定内の範囲内。そして、そのような時こそ災禍の邪眼が本領を発揮する。

意識と視界を奪い取り、実際とは異なる光景を見せる邪眼は非常に強力である反面、扱いが非常に難しい。

相手が垣間見る光景は災禍が決定するため、対象が違和感を覚えぬように現実的かつ整合性の取れたものでなければならず、膨大な集中力を要する故に災禍はその場から一步も動けなくなってしまう。

長時間の発動は相手に違和感を覚える暇いとまと疑問を生み出してしまふ。如何に小太郎が優秀と認める災禍と言えども記憶や想像力には限界があり、整合性を保ち続けるのは無理がある。

故にこそ、最大の効果を発揮するのは、今回のような一瞬の使用だ。相手に違和感を与えず、自分の視界と意識が支配されているなど夢にも思わせない。

後から違和感を覚えても確かめる術はなく、見たものを見たままに受け入れる他なく、そもそも何らかの能力を使用していたなど思い至らない。

災禍がそれに気付いたのは、そうした幻術の類を小太郎が見破るため、彼の母が考案した訓練故にであった。

日常の中、小太郎と目を合つた一瞬に邪眼を発動させ、視界と意識を支配する。小太郎が見破ればその時点で終了、見破れなければどちらかが死ぬまで続行、という無茶苦茶も良い所の訓練であった。

始めの内は体力と対魔粒子の限界まで騙し続ける事が出来たが、回

を重ねる毎に小太郎は目を養っていき、ついには災禍の方が苦勞する羽目になった。

『ふふふ。それはそうでしょうね。こういう能力は発動の条件が分かっていたら、見破るのは案外簡単ですから。来ると分かっているタ イミングで限界以上に集中して、周囲を注意深く観察すればよいので す』

『で、ですが、それでは若様の訓練に……』

『これは、貴女の訓練でもあるのですよ。災禍は相手の見ている光景 をきちんと理解しているのかしら？』

『それは、どういう……』

『そうね。例えば——私と貴女の見ている世界は同じだと思う ？』

『いえ、それは……』

負けが込み始め、訓練が訓練にならぬ状態に陥った災禍は、ふうま 宗家の離れで療養を取っていた小太郎の母に相談した。

今でも、その時の事はよく覚えていて。彼女は離れの縁側に腰掛 け、見るも痛々しく窶れながらも酷く優しい笑みを浮かべて、気付き を与えるようにゆったりとした口調でそう告げた。

彼女が生まれ持った邪眼は“心法識しんぽうしき”と呼ばれる他者の感情を色 として把握するだけのもの。

邪眼の殆どは外界の情報を受け入れるだけの受動器官ではなく、 外界に働きかける能動器官だ。そういった意味では数ある邪眼の中 でも最下層に位置するものであるが——彼女はそれでも最強 だった。

その言葉に、災禍ははたと気付いた。彼女の世界が如何なるもの か。全く想像が出来ない自分に。

喜怒哀楽と言った感情は何色なのか。人の感情に塗り潰される世 界とは、どのように見えるのか。

母の容赦のない言葉に涙目になった小太郎は、その隙を天音に突かれた瞬間、宙を舞った。ポーン、と擬音が聞こえてきそうな見事な投げ出され方であったそうな。

その様に、小太郎の母はあらあらと笑い、災禍は小太郎の危機的状況におろおろとしながらも、奥方の命令では、と止めるに止められない。

『ま、私だったらムカつく奴をボコる時に使うわね！ 殴る直前に意識逸してやれば、殴り放題でしょ！』

『……………奥方様奥方様、素が出ておられます。それに、そんな事ができるのは奥方様だけです』

『あら、いけない。私としたことが。おほほほ』

此処まで気付きを与えておきながら、最後の最後で台無しにしてくれた彼女に、災禍はどのような顔で返答をしたのか記憶にない。

ともあれ、その訓練は、小太郎が災禍の対魔粒子の動きを肌で感じる、という斜め上の一言と感覚を手に入れるまで続けられ、災禍は自らの能力に対する理解を深め、工夫を凝らす術を学んだ。

そして現在――

「ご覧の通り、娼婦としても使えないってんで、ウチのボスが格安で買ったんですよ。ま、顔を隠せば締りはいいから。オレ達も助かりますがね」

「――チツ、さっさとしろ」
「どーも」

人を騙し、籠絡して精気を啜る淫魔を、事もなげに騙してのけた。自らの忍法を過信、酷使するだけではなく、使用の前後にまで気を使う徹底ぶりは、十全に自身の能力を理解している証である。

帽子を被り直した災禍が歩き出すのを見送り、小太郎は真っ白な

シーツの入った台車を押して、搬入エレベーターに乗り込むと胃の浮く感覚と共に動き出した。

(うーわ、まーた居るよ。こりや、必要なもんだけ手に入れて、さっさとトンヅラした方が良さそうだ)

ドリームに足を踏み入れた瞬間に、小太郎の対魔粒子の動きすら感じ取る五感に濃密な魔力を捉えていた。

ヨミハラの地に満ちるブラツクのものとも、以前にたまさか遭遇したナディアのものとも違う。

吐き気を覚えるほどの淫気に満ちたそれは明らかに淫魔のものであったが、確実に魔界の支配階級クラスのものだ。それが今回の黒幕とは限らないが、警戒に値する相手に違いはなかった。

何はともあれ、気づかれないに越した事はない。気付かれたとしても、最低限自らの正体と目的を察せられなければいいと彼に恐れはなかった。

ブラツクのように強大な力を持つ魔族であったとしても、決して全知全能ではない。上位魔族が如何に人間を遥かに上回る生命体だとしても、全てを把握し、全てを支配するなど夢のまた夢。付け入る隙などいくらでもあるものだ。

エレベーターの上昇が止まり、扉が上下に開くと、其処は薄暗い倉庫であった。

食料品や日用雑貨が棚に小奇麗かつ整然と並べられており、何処に何があるのか一目で把握できるようになっている。この娼館の主の性格を現しているようだ。

エレベーターを下りた小太郎は、その場で淫魔のボディチェックを受ける。

手の触覚によるものばかりではなく、金属探知機によるものまで、身に纏う衣服の中までのみならず、台車の中身まで確認された。

結果は淫魔も納得する白。事実として、小太郎はドリーム内部に武器の持ち込んでいない。

仲間を爆殺された淫魔達が警戒を高めているのは承知の上。当然、ボディチェックなども強化されており、これを欺くのは手間になりすぎる。

「着いて来い」

「分かりましたよ、つとお」

ボディチェックが終わると、淫魔は目線も合わせずに歩み出した。劣等種である人間とは会話すらも最低限にしておきたいのだろう。

嫌悪から相手を深く知ろうとしない態度は好都合と、小太郎は文句も言わずに台車を押して後を追う。

倉庫を出ると左右に廊下が伸びており、壁には無数の扉と窓が取り付けられていた。

一階部分は客と娼婦役の淫魔が使用する区画と従業員役の淫魔が使用する区画が明確に区別されており、二階部分は娼館としての機能しか有していない。

小太郎は外観から予測されうる間取りと実際に目にした間取りに差異が殆どない事を確信した。古来、砦の普請も忍の役割の一つであった。この程度は驚嘆に値しないだろう。

淫魔に導かれるままに廊下を進んだ先の一室は、ホテルや病院にあるリネン室であった。

ドリームで使用される数日分の寝具が備えられたリネン室は、娼館の薄暗い印象から一転して明るく清潔感に溢れている。

壁に設けられた柵もまた白一色であり、寝具も同様にシミ一つない。清掃は行き届いていて埃一つなく、白が反射する電灯の光で目眩すら覚えてしまいそうだ。

小太郎は台車を押して中に入ると、扉を開けていた淫魔は続いて部屋の中へと足を踏み入れる。

ボディチェック上は白であったが、人間に何かさかれては溜まったものではない。監視を行うのは彼にしてみれば当然の行為であったのだろう。

だが、精神的な油断がなかったか、と問われれば、首を縦には振れない。

彼が警戒したのはあくまでも悪戯や嫌がらせの類であって、今の小太郎と仲間を殺した正体不明の敵が全くと言っていいほどに繋がっていない。

嚴重なボディチェックと相手はただの人間という認識が、凶らずも警戒のハードルを下げてしまったのである。

そも警備や警戒とは、対象を絞って行うものだ。訪れる全てを警戒せよ、と言われても、何を警戒していいのやら判然とせず、個々人によつて警戒すべき対象が代わり、張った網の目は大きくなってしまふ。

淫魔が背を向け、扉を締めた刹那、小太郎は動いていた。

「——っ、かつ……は、あ……っ?!」

淫魔には何が起こったのかすら分かるまい。

小太郎の鍛え上げた両腕が彼の首に巻き付いていた。柔道における裸絞の形。

即座に淫魔の身体を引き摺って扉から引き離す。壁や扉を蹴り上げて、仲間へと異常を知らせないためだ。

極まるまでの最中に、腕を差し込み、顎を引く事は可能であるが、完璧に極まった裸絞に返し技は存在しない。

災禍を筆頭とした自らの能力を意識的に行使しなければならぬ相手には非常に有効な技であり、逆にゆきかぜを筆頭とした能力を発動させさせてしまえば無差別に周囲へと被害を生み出せる相手には相性が悪い。

人型の魔族の大半は肉体が存在しており、出力の桁は違えども、肉体の構造は人間と大差はない。肺も心臓も脳も存在している以上、人間の技も十分に効果を発揮する。尤も、技を掛けさせて貰えれば、という前提は存在するが。

何とか首を締める腕から逃れようとする淫魔であったが、脳への酸

素供給を立たれた状態ではまともに思考も出来ず、元々戦闘に特化した種族でもない。

瞬く間に顔は蒼白となって泡を吹き、身体中から抵抗の力が抜け、痙攣だけを残して失神する。

完全に意識を失った事を確認し、ようやく両腕の拘束を解いた小太郎はリネン室の扉の壁へと背中を付け、そのまま壁に耳を当てる。

折角、淫魔の監視から逃れられたと言うのに、別の仲間に異常を悟られては意味がない。周囲を警戒して然るべき。

五感を研ぎ澄ませて周囲を探るが、他に淫魔の気配はなく、異常を悟られてもいない。

次に扉を開け、首だけで廊下を覗き込んで他の人影がない事を確認して、ようやく息をつく。

淫魔達にとつてよほど重要な拠点なのだろう。廊下には無数の監視カメラが設置されていたが、幸いな事にリネン室の周辺にはなかった。

廊下に出た小太郎は一番近くあった窓を開ける。其処には、待機していた災禍が居た。

「若様、お気をつけて」

「分かってるさ」

災禍は台車の中に収められていたFNX45と短機関銃と何かの収められた小箱と袋を手渡した。

短機関銃はUMP。MP5などと同じく複数の拳銃弾を使用する短機関銃であり、今回選んだのはFNX45と同じく、45ACP弾を使用するUMP45である。こうした潜入任務には弾丸の管理は重要になってくる。同一の弾を使用した方が数の管理が楽なのだ。

最大の特徴は材質にポリマーを用いた軽量化にあり、同クラスの短機関銃に比較してずば抜けて軽い。加えて、ポリマー故に錆を気にする必要がなく、潜水後も即座に射撃が可能。また使用弾が、45ACP弾であるためにサプレッサーとの相性も良く、何かと特殊部隊向け

の一丁と言えよう。

御多望に漏れず小太郎の受け取ったUMP45にもサブプレッサーとフラッシュライトが取り付けられていたが、相変わらず射撃を補助するフォアグリップや光学照準器の類は取り付けられていない。

こうして一度はボディチェックを受けながらも武器を持ち込んだ小太郎は、監視カメラを避けながら悠々と娼館の調査を始めるのであった。

それから10分後、小太郎はドリームの地下へと潜っていた。

従業員の区画にあった一室には地下への隠し階段があり、中世風の館から一変して、金属製の床と壁を持つ近代的な研究施設へと変貌を遂げていた。

如何に小太郎と言えども、外観よりこのような施設があるとは予測できない。

しかし、アンダーエデンにも似たような施設が存在していたのはリアルの話から聞いており、同系列の組織と思われるドリームも同様の施設があっても不思議ではない。

これだけの短時間でこの地下施設への入り口を発見できたのは、小太郎をドリーム内へと招き入れた淫魔の協力があったからである。

気絶させた彼に災禍から受け取った小箱———その中に入っていた特製の自白剤を使用したのだ。

尤も、自白剤など名ばかりの小太郎が自作した劇薬だ。ヨミハラの露天商で売られていた粗悪な媚薬を調合し、現地調達していた。

単なる媚薬では自白剤として機能などしないが、小太郎は自ら発見した方法でこれを補った。

それは眼窩から眼底を突き破って脳内に直接媚薬を注入する方法である。

媚薬に寄って鋭敏になった脳は、女ならば絶頂を、男ならば射精を無限に繰り返させる。その恍惚の中では、如何なる存在であつても嘘を吐く思考そのものが抜け落ちてしまう。

反面、ただでさえ経口摂取や血管、皮下注射によつて体内へと注入する強力な媚薬を直接脳に投与されれば、ただの一度で確実に死人か廃人となつてしまう。だからこそ、誰にでも使えない方法であり、いくら死んでくれても構わない相手にしか使用できない方法でもあるのだ。

娼館の警備や監視カメラの位置、地下の存在とセキリティコードを全て聞き出した小太郎は、呻き声と共にズボンの中で射精を繰り返す廃人の首をきつちりと押し折つてからリネン室のシーツの下へと隠し、こうしてやつてきていた。

周囲の建物やライフライン、下水道の関係からして、地下の広さは地上の娼館と変わらない大きさと予想できる。

何よりも幸運だったのは、地下は入り口こそ魔界技術と先端技術の複合した嚴重なセキリティが敷かれていたものの、内部に関しては監視カメラや警備の者すらない有様。

入り口のセキリティと身内に裏切り者などいないという自信が現れた結果であつたのだろうが、こうして侵入されてしまえばザル以外の何物でもない。

UMP45を構えながら、地下の施設を進んでいく。

階段を下りきつた先には一本の通路が続いており、壁には強化ガラスの嵌め込まれり、その向こうには無数の小部屋が広がっていた。

(何だ、これは……)

それぞれの小部屋には、小太郎でも見たことのない肉塊が蠢いてい

た。

肉塊は目も存在していないというのに小太郎を察知し、触手を伸ばす。

ガラスへと叩きつけられた触手であったが、そもそも肉塊の生み出せる力を想定して作られたであろう強化ガラスは音すら立てずビクともしない。

それでもなお小太郎を求めるように触手の先端を貼り付けさせている。ガラス越しに見える触手の内部はヤツメウナギのような角質の歯が連なり、細長い舌が蠢いていた。

（人と淫魔の混じったような気配……コイツは、人を淫魔に仕立て上げようとしてんのか？）

肉塊から発せられる気配。そして、施設の奥へと進むに連れて、連なった小部屋の中の肉塊が人型に近くなっていく様に小太郎は確信していた。

この肉塊は研究の過程で生まれた失敗作、或いは経過観察の必要な実験対象と言ったところか。

魔界技術には人を全く別の生き物へと変貌させる技術も確かにある。

しかし、それは特定の魔族になれるような都合の良いものではなく、人でも魔族でもない怪物（ひんまじりもの）を生み出す程度のものでしかない。

（それを、淫魔にさせちゃう、か。政府内部にもかなり喰い込んでいるようだし、この施設を見るに研究資金も潤沢。ほぼ確立した技術になっていると見て間違いない。なら、淫魔になった人間は何処に行った？）

其処まで考え、小太郎は鼻で笑う。考えるまでもなかったからだ。人間から淫魔となった連中は、間違いなく人間社会の中へと戻っている。この研究施設を作り上げた者の傀儡となつて。

でもなければ、わざわざ人間を淫魔にする必要などない。淫魔族が、この世界を支配するための尖兵、工作員としてこうしている間も社会に潜み、暗躍しているのだ。

(厄介さならノマドよりも上かもな。だが、何もかも手遅れって訳でもない)

単純な脅威度、という点に言え、ノマドの方が厄介だ。

イングリッド、臚、フルスト、その他の魔族の有力者を抱え、ブラックをトップとしたノマドと全面戦争などという事態になれば、対魔忍も日本政府も米連もただでは済まない。

だが、ブラックが肥大化する組織を制御できず、するつもりもない以上は、そのような事態には発展しない。少なくとも、小太郎が生きている間にノマド全体の足並みが揃う事態には至らないであろう。

対し、この淫魔の組織は潜在的な脅威度に関しては圧倒的に上。身内の裏切りを警戒している様子がない以上、ノマドよりも組織全体の足並みが揃っており、トップの意向を理解して同じ目的に邁進している。

ましてや人間を淫魔と化して潜伏させているのだ。気付いた時には人界の支配権は淫魔の側に移っている、などという事態になりかねない。

小太郎は要警戒対象が一つ増えたと嘆きながら、アサギへの進言と今後の動きを考えつつ施設の奥へと進む。

(中には、二人か。問題ない、行くか)

施設の突き当りにあった扉へと辿り着いた小太郎は、厚い壁に隔てられた部屋の中の気配を探り、突入を覚悟する。

プシュ、と空気圧の音共に、鋼鉄製の扉が左右へと開く。

明るい廊下に反して、内部は薄暗かったが、無数の機械画面から発せられる光によって排除対象を捉えるのは容易かった。

中に居たのは何らかの作業に勤しむ男女の淫魔であり、小太郎の姿を確認すると呆気にとられたように手を止める。侵入者など、想定していなかったのだ。

その間抜け極まる顔と胴体に二発ずつ。計八発の弾丸を、一発の無駄もなく叩き込み即死させる。

相手の完全な死亡を確認し、ようやく銃口を下ろした小太郎は、部屋の内部へと脚を踏み入れた。

(やつぱり、此処がこの施設の要だな。あの生体チップ——イブとやらは何処にある?)

今し方まで女の淫魔が操作していたコンピューターを覗き込み、キーボードを叩いて必要な情報を探っていく。

残念な事に、不知火に埋め込まれようとしたイブの製造元を特定できる情報は得られなかったが、代わりにイブの保管場所ははっきりとした。

廃人にした淫魔から聞いていたパスワードを入力すると、壁に埋め込まれた保管庫の扉が開く。

低温下で保存されているらしく、冷気が白い靄となって吐き出される保管庫の奥には、不知火から受け取ったものと同様の小瓶が並べられていた。無論、中身も同様である。

(もう二人も殺しちまったし、此処をメチャクチャにして逃げるか)

そうする事で、先日の生きた爆弾の件も淫魔達は自らの属する組織を狙ったものと思ひ込む。

始まるのは犯人探しであるが、同時に施設の存在を知り、正規の手段で侵入を果たしている以上は、身内までも疑わねばならず、一時的に組織の足並みは乱れる。

ましてや、この部屋そのものを破壊してしまえば、淫魔達もイブを手に入れるための侵入であったとは気づくまい。

後はアンダーエデンを襲撃して不知火の身柄を確保して、五車へと帰るだけだ。

（……………ん？）

保管庫へと手を伸ばし、イブの入った小瓶を二つ手に取った小太郎であったが、ある事柄に気付き、手を止めた。

保管庫の内部は狭く、イブの保管のみを目的としていたのだろうが、二十は小瓶を並べられる専用の台にはイブの収められた小瓶は一つ足りない。

一つはリアルルの手に渡り、小太郎が二つ手に取った以上、残るイブの数は単純に十七のはず。なのに、小瓶は十七あっても、イブ自体は十六しかなく、一つだけ空の小瓶があった。

（リアルルの手に渡ったのは不知火さんの身柄を確保して以降のはずだ。なら、最近になって誰かに使ったのか？）

最早、そのような事柄は小太郎には関係なく、目的を果たした以上は直ぐにでも立ち去るべき。

それでもなお直感が囁いている。まだ、調べるべきだ、と。

小太郎は舌打ちし、危険を十分に理解した上で気掛かりを解消すべく、部屋を調べ始めた。

（……………は？（呆然）

その時、男が取りこぼしたらしい資料が目にとまり、小太郎の動きが止まる。

一度は確かに見たのだが、資料に写っていたある人物の写真の存在を脳が認識を拒み、もう一度見る羽目となった。綺麗な二度見であった。

は？（威圧）

震える手で淫魔の血に染まった資料を手に取り、その写真を目にする。

もうこの時点で、彼の額には青筋が立っており、凄まじい怒りを抱いているのは誰の目からも明らかである。

彼はそれでもなお取り乱す事なく、再びコンピューターの前に立ち、キーボードを操作すると、壁の一部分が上下に開いていく。

どうやら、普段はシャッターに遮られているようだが、表の小部屋とは別に、対象を調教する部屋があったようだ。

調教部屋の中は、硝子の窓以外は一面が肉の壁に覆われており、部屋の中央には床と天井を繋ぐ肉の柱があった。

“肉壺”と呼ばれる触手生命体と一体化した調教装置だ。この“肉壺”に納められた女は、休むことなく延々と絶頂を繰り返し、肉体的にも精神的にも強制的に屈服させられるのである。

小太郎は“肉壺”の動きを止めるべきコンピューターを操作すると、意図通りに肉壺は機能を停止させ、肉の扉が開く。

開くと同時に精液のような粘液がぼとぼと吐き出され、今し方まで責められていた女の顔と姿が明らかになる。

（はあああああああああああああああああああああ
?!?!?!?!
（困惑）

白い粘液で塗れながらも、引き締まった肉体を包む白い対魔忍装束がなお眩しい。

快樂と絶望に包まれた蕩けた表情ながらも、意識を取り戻せば気の強い性格が現れた凛々しい表情になるのは間違いあるまい。

何せ、小太郎がよく知った人物だ。

毎度毎度、小五月蠅く口を挟んでくる堅物であり、アサギと話していれば露骨に嫌な顔をするあの女。

(何でだ、紫っ！ テツメ、何でとっ捕まってるんだよ、テメエはよお!!!)
そう、肉壺の中から現れたのは、アサギの右腕と称される八津 紫であった。

斜め上に行く想定外の事態に小太郎は怒りの余り手にしていたUMP45をブツパしてこの事実を闇へと葬ろうとしたものの、ピタリと腕を止める。

(いや、ありえないよな？ オレ達がヨミハラに出発する前には紫は確かに学園に居た。そんな超スピードで捕縛&調教開始とかないだろ。何より、コイツ、何か若い、若くない？ わ、か……………あっ(察し)

その時、小太郎に電流走る……………!

想定外どころか、根本的にありえない現実の辻褄を合わせてしまうウルトラCに!

(やりやがった、やりやがったなあ、あの頭足類がああ
あつっつ!!!)

小太郎が相対した相手は、何も魔族だけではない。

身内である筈の対魔忍も、闇の住人と繋がりがあれば粛清した。日本に魔界技術を確保しようとしてやってきた米連も塵殺した。

そういった相手の中でも、特に特異な存在は居た。

それが、米連では次元侵略者と称されるイカやタコに似た生命体である。

彼等は次元を渡る技術を確立しており、その目的は自身の住まう次元とは異なる次元を侵略する事にある。

如何なる背景があるかは小太郎自身にも分かっていないが、直接的な戦闘力は然程でもないものの、空間を操り、次元を渡る能力は厄介

の一言であつたのは間違いない。

一体、何の因果か。

小太郎は、以前に次元侵略者との戦闘に発展していた。

その際は言葉巧みに奴等を騙し、後ろから刺して元の世界へと送り返してやったのだが、魔族と同じく「懲りる」という思考を持ち合わせていないようだ。いやそもそも次元侵略者の次元移動は標準の能力らしく、小太郎が戦った者と同一個体であるとは限らないが。

(は？ いや、え？ どうすんの？ どういう感じになつてんの？
え？ 嘘？ マジ？)

困惑の中、新たに現れた苦労に小太郎は目眩と吐き気を覚えながらも必死に思考する。

次元侵略者が再びこの次元の更には日本へとやってきている以上、何としても情報を得なければならぬが、奴等は能力の関係上、神出鬼没であり、情報を得ようには難しい。

また、別の次元から連れてこられたであろう紫を見捨てようにも、淫魔がどのような過程で彼女を捉えたか定かではないが、調教を行っている以上は不知火と同じように自らの側に引き入れようとしているのは目に見えている。

つまり、この紫は次元侵略者の情報を持っているかもしれないが、今後淫魔の手先になる可能性が非常に高い。

見捨てる、という選択が根本的に取れないのである。

(――望みが絶たれた！)

こうして、彼は袋小路に追い詰められた。

ふうま 小太郎、更なる苦労確定――！

地獄から逃げられると思った？ 残念、大地獄でした
♪

「…………ぐっ、げほっ…………ぎ、あっ…………！」

「おい、大丈夫か？」

何も見えない暗闇の中、無数の触手によって全身を撫で続けられ、
絶えず絶頂の波に晒され続けていた紫は一つの衝撃に正気を取り戻
した。

彼女からは時間の感覚が失われていたが、実に一週間振りの光が目
に染みる。

朦朧とする意識の中、彼女に残っていたのは反骨心だ。

凄まじい。並の対魔忍ならば、疾うの昔に心が折れているどころか
正気を失っているだろうに、まだ闘志と呼べるものを保っているの
だ。

「ぐ…………があ…………っ!!」

「すんげーメンタルしてんな。だが、媚薬と筋弛緩剤でゆるゆるの状
態でそりゃ悪手だろ」

「……………くっ！」

部屋の中に踏み込み、自身の顔を覗き込んできた男を敵だと断定
し、なおも燃える闘争心で拳を振り抜いた。

しかし、男が言うように媚薬と筋弛緩剤によって、自慢の怪力も効
果を発揮しない。常人と変わらないほどに緩んだ拳をあつさりと掌
で受け止められてしまう。

呆れ返った表情に反撃を予想した紫はなおも睨みつけたが、男は
あつさりと掴んでいた拳を離す。その行為に困惑したのは他ならぬ

紫だ。

こんな所にまで入り込んでくる以上は、自身を捕らえた者の仲間と考えるべきだろう。

捕らえた調教対象が攻撃してきたのなら、心根を押し折るために痛めつけるのは当然であったが、男は呆れるばかりで興味がないようである。

「……………貴様、何も、の、だ？」

「少なくとも、此処の淫魔どもの味方じゃねえよ。お前の味方とも言えるか疑問だが、取り敢えずオレはこのまま奴等にお前を渡す訳にはいかねえ立場なのは事実だ。黙って助けられろ」

手短に自身の立場を伝え、手を差し出してきた男であったが、まともではない思考では敵であるか味方であるか判然としない。

それでもなお紫は男の手を取った。溺れる者は藁をも掴む、と言うが、彼女にとって見れば正にそんな心境だろう。

男が嘘を言っているようには感じられなかった。

紫の様子を確認し、また攻撃されないように警戒してこそいたが、神経の大部分は他へと向けられていた。恐らく、自身を捕らえた魔族——淫魔の襲撃を警戒しているのだろう。

少なくとも男と淫魔どもが敵対関係にあるのは間違いない。かと言って、男が味方とも言い切れないが、どの道、彼女には選択肢などない。

このままでは淫魔に何をされるか分かったものではない。

男が敵だった場合も同様だが、猶予があるだけマシだ。少しでも体力を回復させ、媚薬が抜ける時間があれば、逃げる事も可能となるだろう。

紫が伸ばした手を取った男は、見た目よりもずっと強い力で肩を貸す。

「……………私は、八津 紫、だ……………貴様、は？」

「知ってる。オレはふうま 小太郎だ」

「存外、素直に、名乗るんだな……少しは、信用で、きそう、だ……」
「その様子じゃ、そっちじゃオレは存在してねえのか」

「……………何、だど？」

「後で説明してやる。兎に角、今は脱出が先決だ。外でこっちの仲間が待機してる。お前はそいつと一緒に逃がす」

男が神妙な面持ちで何事かを呟いた。

決して聞き逃してはならない一言であった気がしたが、男は必要な事項だけを伝えるとそれきり黙って歩き出す。

引き摺られる身体をなけなしの体力で必死に動かして歩こうとした紫であったが、瞬く間に限界を迎え、彼女の意識は闇に飲まれてしまったのだった。

—
—
—
—
—

「——若様っ?!」

「何も言うな。オレも殆ど把握できちゃいねえ。計画変更だ。オレが奴等を引き付ける。お前らは予定のポイントまで離脱して、凜子に回収して貰え」

「承知、(武運を!)」

地下から無事に舞い戻った小太郎は意識を失った紫を抱えて、路地で待機していた災禍と合流した。

当初の計画になかった流れに災禍は驚き、更には小太郎が台車の中

へと投げ入れた彼女の知るよりも幾分若い紫の姿に愕然としたが、小太郎の命令に全ての疑問を飲み込んで彼女は台車を押して駆けていった。

こういう時、自身の命を絶対とする災禍や天音の迷いの無さはあるがたい。想定外の事態であったとしても、次の行動に移るまでが尋常でなく速い。

災禍の姿が闇に消えるのを確認し、小太郎は髑髏の意匠が施されたバラクラバを被り、サングラスを掛けて素顔を隠す。

このまま災禍と共に逃げる手もあつたが、追つ手を差し向けられても堪らない。

監視カメラには顔こそ写つてはいないが、作業着を来た自身と災禍の姿は写っている。組織の規模を完全に把握できていない以上、人海戦術で同じ作業着姿の者を片っ端から捕らえるように動く可能性も考慮しておくべきだ。そうなれば、災禍と言えども紫を抱えた状態で逃げ切れるとも思えない。

淫魔どもが其処まで迅速な動きが出来るとは思っていないが、万が一を考えれば、此処で騒ぎを起こして敵の目を引き付けた方がいい。そう判断した。

「……貴様、何を——があつ!？」

素顔を完全に隠した瞬間、廊下の曲がり角から姿を現した淫魔の一人に見咎められ、小太郎は即座にUMP45の引き金を引いた。

UMP45は単発、2点バースト、フルオートに切り替えが可能であったが、小太郎はセレクターをフルオートに入れた状態で確実に二発のみを発射する。

対魔忍の任務の関係上、急な近接戦闘に曝される可能性が存在している以上、単発や2点バーストの状態では不安が残り、どうしてもフルオートの状態にしておきたい。故にどんな銃であっても自身が望んだ弾数だけを発射するテクニクが身についた。

簡単だと思ふなかれ。地味ではあるが、如何なる手練の軍人であつ

ても難しい技術である。銃はそれぞれ発射レートが異なり、秒間数十発の弾丸を吐き出すものも珍しくはない。

ましてや戦闘中に、引き金をコンマ何秒を引けば何発の弾を撃てるか冷静に把握できる者など殆どいない。そのために、多くの銃にはバースト機構が採用されているのだから。

それだけではない。

二発の弾丸は、寸分変わらず淫魔の心臓を撃ち抜いた。

UMP45はフレーム全体がポリマーによって軽量化されており、使用する弾丸も、45ACP弾故に反動が大きくなくなってしまった。短機関銃の傑作とされるMP5に比べると射撃精度でどうしても劣るとされている。

だというのに、この命中率。まるで、命中精度などという言葉はプロになりきれない使用者の甘え、と断じているかのようだ。

反動の制御など出来て当然。どのような銃であっても扱えてこそ射手としてようやく二流、一流にはさらに先があるとでも言いたげな腕前である。

銃把を右手で握り、左手でマガジンハウジングを押さえるように握る。

今回、そのような構えを取ったのは、UMP45のコッキングレバーが銃の左側面に存在していたからだ。逆側ならば、左手で銃把を握り、右手で銃の固定を高めるハンドガードやマガジンハウジングに手を添える。その方が、僅かだが再装填がスムーズに行える。

腰を僅かに落とし、姿勢を低くして廊下を進む。

サプレッサーによって、発射音は20dB——時計が秒針を刻む音、木の葉が擦れ合う音——にまで落ち込んでいるが、それでも聞く者が聞けば一瞬で悟られるだろう。

(……………何だ)

慎重に廊下を進んで今射ったばかりの淫魔に近づき、確実に死んでいる事を確認すると折れ曲がった廊下を奥へと進む。

踏み出す一歩一歩にすら気を配り、完全に足音と気配を殺し、一つ目の扉に差し掛かった瞬間――

――横合いから突如として襲いかかってきた衝撃に、身体を壁へと叩きつけられた。

頭の芯まで至る衝撃と痛みを押しして衝撃の訪れた方向へと視線を飛ばせば、扉を粉碎して片脚を突き出している別の淫魔の姿があった。

仲間が殺される瞬間を目撃し、咄嗟に身を隠して待ち構えたのか。はたまた音や気配から襲撃を察知したのか。どうあれ、扉を砕いて蹴りを小太郎の脇腹へと命中させたようだ。

淫魔は未だ衝撃から立ち直れない小太郎に、容赦なく迫る。

それなりに鍛え上げられた身体、拳の握り方、重心をブレさせない踏み込み。人界のそれとは異なる格闘術を修めているのは明らか。

とても達人と呼べる腕前ではないが、ただでさえ身体能力の高い魔族が身体を鍛え、技術を学べば、それだけで驚異となり得る。

UMP45を右片手で握り、腰だめのまま淫魔へと向けて引き金を引いたが、淫魔に左の裏拳で銃口そのものを逸らされ、敵を喰い破る筈の弾丸は虚しく廊下の壁を穿つばかり。

勝ちを確信した淫魔は小太郎と目を合わせてから口の端を釣り上げて笑い、引いた右の拳を突き出そうとした。

しかし、何も両腕があるのは淫魔だけではない。小太郎の左手も空いたままの状態だ。

踏み込んできた淫魔の視界の外で彼の左手は冷静にFNX45を掴み、壁へと叩きつけられた瞬間から対処に動いていた。

淫魔がこめかみにゴリとした硬い感触を感じた際の驚きを表現した表情のまま、頭部で紅い花が咲く。

・45ACP弾は頭部を貫通しながら運動エネルギーによって脳内をメチャクチャに掻き回し、脳漿と頭蓋の欠片を体外へと弾き出す。

踏み込みの途中であらゆる力を喪失した淫魔の身体は、小太郎の身体から逸れながら壁へとぶつかり、血と脳漿の後を残しながらどうと

倒れた。

(……何だ、この違和感は)

念の為、倒れた死体にFNX45で、45ACP弾を再度プレゼン
トし、小太郎はUMP45を構え直して進む。

事はスムーズに進んでいく。このまま徐々に騒ぎを大きくしてい
き、それに乗じて逃走すればいいだけだ。

だが、この時点で小太郎は凄まじいまでの違和感を覚えていた。

言葉にするには彼自身も酷く難しい。

視覚、聴覚、嗅覚、触覚が伝えてくる情報は、全てが本物だと断言
している。

だと言うのに、同時に全てがあやふやな——まるで夢の中を彷徨
っているようだと言いつつも、

己を発見次第襲いかかってくる淫魔どもを射殺し、或いは徒手に
よって首をへし折り、心臓を破裂させる冷徹で的確な殺戮技巧を發揮
しつつも、頭の片隅で違和感の正体を探り続ける。

並列して処理される戦闘と思考。しかし、今や彼は夢に囚われた迷
い人も同然。常人では決して脱出できない夢幻の迷宮へと誘い込ま
れた餌に過ぎなかった。

「——一体、何者だ……？」

娼館の廊下で、すやすやと寝息を立てる侵入者を見下ろし、色黒の青年は呟いた。

浅黒い肌に、半端に伸ばした銀髪。切れ長の目は蛇のように生理的な嫌悪感を抱かせ、引き結ばれた口元は寡黙な性質を現している。第一印象として一般人には警戒心を抱かせる危険な印象しか与えない風貌だ。

顔立ちは兎も角として、身なりは娼館に似つかわしくない事この上ない。何せ、とある学園の制服を身に纏っているのだから。

しかし、それは見た目だけの話。彼は誰よりもこの場に相応しい人物だ。

彼こそは王。水城 夫妻の拉致と籠絡を計画し、今こうしている間にも人界を支配せんと多くの部下を動かしている淫魔どもの王なのだ。

互いに互いを知らぬまま出会った淫魔王と小太郎であったが、その接触は一瞬の内に終わってしまった。

災禍を先に離脱させた後、誰にも見つかる事なく娼館内を移動していたが、小太郎は先んじて相手の気配を察知した。

上位魔族特有の濃厚な魔力に足を止めたまでは良かったが、逃げ場がない。前後に長い廊下が続くばかりで、身を隠す場所もやり過ぎす場所もなかったのである。

込み上げてくる舌打ちと冷や汗を押し殺し、小太郎が取った選択は射撃による牽制と同時に照明を破壊し、周囲を暗闇にしての逃亡であったが、全ては虚しい算段に過ぎなかった。

廊下に現れた淫魔王の姿に、小太郎は一瞬だけ、本当に僅かな動揺が生じた。

この場は淫魔どもの拠点にして巢窟。娼館に足を踏み入れた時点で存在を察知していた上位魔族が、本来の姿ではなく人間に化けたまままだとは考えられなかった。

人間の変装にせよ、魔族の？化にせよ、本来以外の姿を取るのとはストレスが溜まるものだ。必然、安全の確保された拠点では本来の姿で居るもの、と誰でも考える。

だが、運の悪い事に、淫魔王の本来の姿はこの娼館には適しておらず、仕方なしに人間の姿を取らざるを得なかったのである。

その上、淫魔王は制服まで身に纏っていた。

対魔忍として一般人は決して巻き込めない。本能や魂にまで刻み込んだ観念が、トリガーを引く邪魔をしたのだった。その結果。

『——『眠れ』』

『うつ……ぐ、う……つ……』

淫魔王は小太郎と目が合った瞬間に、能力を発動させながら一言を呟き、何もかも都合が良く、甘美な夢の世界へと誘い、小太郎は一発の弾丸も放つ事なく意識を刈り取られ、現在に至る。

本当に、本当に運が悪かったと言わざるを得ない。

淫魔王は、何も小太郎の存在に気付いていた訳ではなく、捕らえた紫の調教具合を確認しようと地下へと向かっただけ。あくまでも偶発的な接触到過ぎなかった。

更に淫魔王の情報は出回っておらず、彼らの暗躍に気付けたのは小太郎と不知火のみ。強さも能力も正体も分からない相手に対策などしようがない。

生物的には貧弱ですらある人間が地球上において最も繁栄した種族となるまで押し上げた機能、即ち『恐れ、備える』が出来ない相手であった。

精々出来た備えは淫魔が夢へと干渉するのを防ぐアマダハラ魔術師特製の護符であったが、淫魔王の魔力に晒された瞬間に焼き切れる始末。

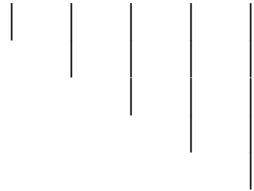
始めから全てを知っている存在でなければ対処のしようがない、人と魔族の差が浮き彫りとなる当然の帰結。だが——

(この臭い。我が同胞を殺めたか。それに、肉壺の臭いも混じっている。八津 紫を逃したか——まあいい。これに直接聞くとしよう)

侮るなよ、淫魔の王。例え種族の差に押されようとも、それを覆してこそ人間だ。

まずは正体不明の侵入者の顔を確認しようと、淫魔王は小太郎の顔を覆うサングラスとバラクラバへと手を伸ばす——その刹那、昏々と眠りこけていた小太郎の片目が見開かれた。

「何っ?!」



「成程」

都合十人もの淫魔を射殺した小太郎は、ポツリと呟いて脚を止めた——これが、夢の中であると悟ったのである。

淫魔達の見せる夢は、下位の者では対象が元々見ていた夢に入り込んで筋書きを変える程度であるが、上位の存在であればあるほど現実と区別が付かなくなるほどに鮮明で明確な夢を見せられる。

ただ、何者にも変えられぬ原則というものが存在する。

夢とは根本的に知的生命体の記憶の整理によって生まれる現象なのだ。とどのつまり、対象の知らない情報、記憶は如何に上位の淫魔であつても夢としては使用できない。

夢を操る存在は対象の持つ記憶を再構築し、より深い眠りへと誘い、無防備となった精神と身体から精気を吸い上げる。そのため、如何に対象が不安や疑問を抱かない都合の良い夢を見せるかに腐心す

る。

その点、淫魔王の手腕は確かに見事の一言。

小太郎ですら、今し方まで夢の中へと誘われていたなど違和感程度しかなく、一体何時から夢の中にいたのか見当もつかなかった。

それでもなお彼が夢であると看破できたのは、小太郎にとっての幸運と淫魔王の不手際と不運が存在したからだ。

小太郎にはこうした能力の持ち主は誰よりも身近に存在しており、よく知っている。そう、災禍の邪眼だ。これが小太郎にとっての幸運である。

片や夢、片や視覚と意識の支配であるが——対象にとって都合の良いものを見せる、という点では同一の能力と言えよう。

故に、看破の方法は近いものとなり、弱点も同じ。能力者の想像の限界を決して越えられず、対象者の見えている世界を正しく認識しなければ意味を成さない事。

淫魔王の夢は災禍の邪眼よりも看破しづらい。それは対象の記憶を元に行っているからこそ、見破られにくいのだが、彼は一つの失敗を犯した。

銃というものが如何なるものかを、よく知らないまま夢に再現してしまった事だ。

元より銃なぞ使う必要のない存在だから、仕方ないと言えば仕方がない。彼の持つ銃がどのような感触で、どのような動きをするのか、よく知らぬからこそ夢の再現を怠った。これが淫魔王の不手際。

淫魔王の無知と小太郎の経験値によって夢と現実に齟齬が生まれ、違和感を覚えさせるに至ったのである。

そして、淫魔王にとっての不運は、小太郎が目の前で見えている現実すらも疑い続けながらも迷いを抱かない異常者であった事。

災禍との訓練だけではなく、小太郎は人間の認識など曖昧で穴だらけな事実を認めている。

捜し物が目の前にあるにも関わらず、思い込みから延々と周囲を探して回り、目に写っているのに脳が認識できない、という経験は誰しも一度は体験した事がある筈だ。

そのように都合よく現実を解釈するのが人間であるが、無能である小太郎にとってそのような陥穽はリカバリーが不可能になるほど致命的。

故に、疑い続ける。どれほど己に都合が良く、幸運であったとしても、それが事実であると納得できるまで一切気を緩めない。

「あー、アホらし」

そして、小太郎は夢と自覚してもなお醒めぬ強固な夢の檻を脱出できらるであろう手段に迷いなく実行した。

これも誰もが経験した事があるだろう。どのような人間であれ、一瞬で夢から醒め、飛び起きるものがある。

彼はホルスターからFNX45を抜き放つと顎に銃口を押し当て、躊躇なく引き金を絞る。

手から伝わる確かな反動と顎から入り、脳の内部を揺さぶって後頭部へと抜ける衝撃に、彼の意識はブツリと途切れた。

夢から抜け出す方法は、夢の中の死でしかあるまい。例え擬似的なものであっても、人間とは死を恐れるもの。夢を破るには十分過ぎる破壊力だ。

ただ、一つ疑問を提示するのなら——現実と大差のない夢の中で、これほど簡単に死の恐怖を押し殺し、迷いなく選べるような者が他に居るだろうか。

「——何っ?!」

己に手を伸ばしながら、愕然とした表情で見下ろしている青年の姿を認識した瞬間、小太郎は跳ね上がる。

彼にあつた記憶は直前の夢までであり、眼の前の学生が淫魔の首魁だとは認識しておらず、また自分を眠らせたとも考えていなかったが、身体は同じ失敗を二度と繰り返すまいと自然かつ滑らかに動いていた。

両足で床を蹴り、そのまま身体を丸めて頭頂部と両手を床に付ける体勢。

呆気にとられた青年を尻目に、全身の筋肉を余すことなく可動させ、解き放たれた撥条仕掛けの如く全身を伸ばす。

真下からの放たれた蹴撃は、青年の顎をもの見事に撃ち抜いた。

「——チッ」

まともに喰らえば魔族でも昏倒させうる見事な不意打ち、まともに喰らわずとも顎への攻撃は脳を揺さぶり、一時的に思考と身体機能を奪い去る一撃。

しかし、両の踵から伝わってきた感触に小太郎は舌打ちをしながら、床に投げ出されていたUMP45を手にとって距離を取った。

此処で、紫を助けた事が幸いした。周囲に彼女の姿がないながらも、身体についた肉壺から吐き出された粘液の匂いで、災禍に紫を任せたところまでは確実に現実であると即座に現状を認識できたからだ。

踏鞴を踏んで蹠跟めいた青年——淫魔王であつたが、ダメージは見受けられない。

これ以上ない渾身の一撃であつたが、分厚い何かに阻まれていた。真綿のように柔らかでありながら、同時に金属のような硬さを秘めた何か。

(なんかの防御か。銃じゃどうにもならねえ……！)

強制的に夢へと誘う能力に加え、不可視の障壁を張る強大な魔力。分かつてはいたが、戦力差は鼠と獅子のそれに等しい。まさに見窄らしい弱者と圧倒的な強者が相対した構図であつた。

全てを理解しながら、小太郎はなおも引き金を引いた。距離は五メートルほど。目を瞑っていても全弾命中させられる距離。

「下らん」

獅子に挑む鼠の抵抗に、驚愕から回復した淫魔王は鼻で笑う。

避ける素振りすら見せず、600発／分のUMP45の射撃へと悠然と向かう。

弾丸は淫魔王の身体に当たる直前、見えない何かに阻まれるように音もなくあらぬ方向へと軌道を変えいった。

「『眠れ』」

「二度も三度も同じ手が通用すると思ってるのか、間抜け」
「成程、確かに。尤も、間抜けは貴様の方だがな」

再び、魔力を帯びた言葉が小太郎にへと襲いかかる。

本来ならば魔力は囁きと共に脳内へと浸透し、脳を強制的に睡眠状態へと移行させて夢の牢獄へと叩き落とすが、小太郎は平然とした顔で弾丸を放ち続けた。

これも災禍の邪眼と同じだ。来ると分かっていたら、限界を越えた集中力で脳を覚醒と興奮状態に保てばいい。分泌される脳内麻薬によつて、夢への誘いを一蹴してのけた。

それでもなお淫魔王は嘲笑を浮かべる。

極限の集中は確かに一つの事柄を成さしめるには必要であるが、同時にそれ以外の行為が疎かになるのは自明の理。

ただ銃の射撃に集中していた小太郎は、突如として姿を消した淫魔王が目の前に現れ、何の抵抗も成せずに首を掴まれる。

「か——はあ……！」

「大したものだ。その状態でも撃ち続けるとはな。だが——」

小太郎は片手で身体を釣り上げられ、絶息の苦しみへと放り投げられながらも、UMP45を淫魔王の顔面に向けて放つが、全ては無駄。結局、残る弾丸も全て障壁によって阻まれ、ただの一発も当てられぬままに、弾切れと相成った。

絶息の痙攣を見せる身体を眺めながらも淫魔王は少なからずの称賛を向ける。但し、それは心からのものではなく、上から下を見下ろす嘲弄に満ちたものだ。

それを示すかの如く、淫魔王は片手のまま小太郎の身体を後方へと放り投げる。

その時、小太郎の脳裏に浮かんだのは驚異の馬力を誇る重機の数々。

無造作でありながら、人間の肉体を片手で放り投げる凄まじい膂力。人の形をしているが、本来の姿はもつと巨大で、醜悪な形かもしれない。

まるでボールの如く、小太郎の身体が廊下を舞った。

余りの勢いに体勢を立て直す努力を捨て去り、空中でUMP45の再装填を完了させた瞬間、凄まじい音が響く。

「ぎ……い……っー」

響いたのは背中と体内から。小太郎は見なかったが、叩きつけられた壁は大きくへこみ、罫が走っている。

背骨と内臓へのダメージは明らかだ。軋む背骨に、迫り上がる横隔膜が肺の空気を全て押し出し、食道から上る熱い液体は明らかに血であつた。

だが、小太郎は床へと着地するよりも、舌が苦い鉄の味を認識するよりも早く、引き金を絞っていた。

痛みを自覚してから全くノータイムの射撃。その上、狙いも正確だ。

涙ぐましいまでの必死の抵抗。ただ、虚しいかな、やはり弾丸は淫魔王の身体へは届かない。

「ククク、無駄な抵抗を何時まで続けるつもりだ？」

「無駄な抵抗？ 時間稼ぎの間違いだろ？」

「——何っ!？」

哀れな抵抗を嘲笑う淫魔王の一言に、血の泡を吹きながら同じく嘲笑を以て返す。

その一言を正しく理解するよりも早く、淫魔王の視界が真白に染まった。

一瞬、淫魔王は何が起きたのか理解できずにいたが、立ち込める白い煙に苛立ちを顕にする。

淫魔王が首を掴んで投げる直前、自分一人で戦っても勝てる相手ではないと悟った小太郎は、煙幕をその場に落としていたのである。

壁に叩きつけられた直後、果敢に攻撃に出たのは自分に目を引きつけるために過ぎない。所詮、上位魔族と言えども、自分達と同じくその認識は穴だらけと小馬鹿にするように。

「——っ、人間如きがっ！」

腕の一振りによって発生した風圧で煙幕は霧散したが、先程まで小太郎が立っていた場所に残っているのは、空葉莢と捨てられたUMP45とFNX45だけ。

鼠の如く逃げ出した人間に、再び嘲りで口元を歪めた淫魔王であったが、即座に凄まじい怒りの表情へと変化する。

それもその筈、凄まじい衝撃が娼館全体を襲ったからである。それ

だけで彼は何が起こったのかを察した。

男からは肉壺の臭いがした。ならば、八津 紫や地下の実験施設にも侵入していたという事。そして、衝撃は地下からやってきていた。ならば、導き出される答えは一つ。

(地下を吹き飛ばしたか……！)

ギリ、と歯噛みしながら、淫魔王は小太郎の後を追う。

実験施設を吹き飛ばされたのはまだ良い。研究成果は既に形となっており、保管されていたイブも量産体制が整っている。問題はな
いと言えばない。

だが、あの男が何を探っていたのか、何を目的として侵入してきたのかさえ不明のまま、一方的に取り逃がすなど彼の肥大したプライドでは到底、許せるものではない。

足早ではあるが、決して走らずに臭いを頼りに後を追う。

先日の爆破事件もあって、娼館の中は今や阿鼻叫喚と化していた。客は口々に悲鳴や罵声を上げて我先にと逃げ出し、淫魔王の部下は客を
落ち着かせ、衝撃の原因が何なのかと走り回っている。

(これも吹き飛ばした目的の一つか。だが、悔るなよ……！)

明らかにこの混乱に乗じて逃げるつもりであろうが、逃がすつもり
など毛頭ない。

目的も正体も不明のままでは、顔にクソを擦り付けられたままでは
いられない。

男の身体に僅かに付着した肉壺の匂いを頼りに、複雑に入り組んだ
娼館の中を進んだ彼の見たものは――

(これは……何だ――いや、そうか、そういう事か！)

匂いを辿った先で待ち受けいたものは、淫魔王を更に馬鹿にするか

の如きものであった。

再び、怒気と共に歯を鳴らした淫魔王であったが、一時的に怒りを鎮めた。今のままの状態で居る訳にはいかない。

（もう暫くで奴が来る。それまでにこの混乱を修めなければならん。しかし、一体何者だ。あの「もう一人の八津 紫」を救出するなどで、何処の勢力だ）

少なくとも対魔忍とは思えない。もう一人の紫など救出しない筈だ。まず、米連や魔族によるクローニング実験を疑い、救出よりも抹殺か報告を優先する。

それならば、他の魔族勢力や米連組織が実験成果の回収に来た、と考えた方が現実的だ。しかし、確証も何もあつたものではない。

結局の所、今回の襲撃騒ぎは闇の中へと葬られる。

これがヨミハラに喧伝されれば、淫魔族の面子は丸潰れ。あくまで表向きにはガス爆発による事故で片付けられ、淫魔族も侵入者の正体を探ろうにも恥を覆うために動きづらくなる——つまり、独立遊撃部隊だけが利益を得る上々の結果であった。

「とまあ、こんなもんですよ。しかし……あー、いってえ」

まんまと逃げ果せた小太郎は、ヨミハラの街を一人進んでいた。

あのような敵だらけの状況から脱出したにしては、余裕綽々の表情

である。

それもその筈、先程から追手の気配もなく、正体など悟られようはずもないからだ。

淫魔王の視界から消えた小太郎は、地下施設に仕掛けた爆弾を起動させた上で、作業着を脱いだ。

その下には、高級スーツに身を包んでいたのである。此処まで言えば、淫魔王が何を見たのか、彼が何をしたのか分かるというもの。

その後、小太郎は作業着と覆面を燃やし、自分は騒ぎを大きくするように爆弾だー、火事だーと喚き散らしながら、逃げようとする客に混じって娼館ドリームの正面玄関から堂々と帰ってきたのであった。

侵入した時と別の姿で脱出すれば、誰も不思議にも同一人物にも思わない。ましてや、淫魔王も小太郎の表情まで確認できていないのだ。後を追うようがない。何処までもやりたい放題な男である。

(で・も・ねー！ 今日はどうしちゃったのかなー！ 頭足類が連れてきた厄介事にも行き当たるし、淫魔に後は付けられてないけど、覚えのある気配が付いてきてるぞー！ これはナディアちゃんですかー?!)

彼の受難と苦労はまだまだ終わらない。

数日前に偶然出くわした上位魔族——魔界の踊り子ナディアの気配が背後に生じていた。

運なのか。運が悪いのか。たまたまヨミハラを進む小太郎の姿を見つけ、あの時の彼だと気付いているようで、ド素人丸出しの尾行をしてきている。これならば、まだ自動追尾弾にしてやった淫魔の方がマシである。

(慣れてーねーなあ、おい。もういいわ、厄介事に、なる前に、撒いて——)

彼女の目的は未だ不明であるが、自身が目を付けられているのは確

診のつもりなの？ 忍としての自覚があるのかしらー？

——は？ どうでもいいから殴らせなさいよ、アンタ。

小太郎の脳内では、亡き筈の母が地獄から舞い戻り、ビキビキと青筋を立てて弾正に嫌味と罵声を浴びせていた。当の本人は昇天寸前である。

（——ハッ!? はあっ? いや、何で、居るんですかねえ弾正テメエはよお!!）

本当に間が悪い事この上ない。

弾正だけならばいくらでも逃げ果せられた。もしかしたら、弾正は小太郎の顔を覚えていない可能性すらあった。

だが、問題はその周囲を固める存在だ。彼の背後にはサイボーグ軍団が続いており、まるで自身の存在を見せつけているかのようだ。そして、彼の隣には弾正と共に米連へと逃げ延びた小太郎とは腹違いの兄妹となるふうま銀零の姿もある。

これが石○軍団かた○し軍団だったらどれほど良かったか。いや、どっちの軍団がヨミハラに居てもスキヤンダル必死なわけだが。

（銀零がいるんじや流石に素通りは無理だー！ つーか後ろのサイボーグに見知った顔も混じってるんですぎゃー！ ま、まだだだだ、まだあわ、わわあわわわわてるようなじじじかんじやじゃやないいいいい）

正に前門の弾正軍団、後門のナディア様と言った状況に、これには流石の小太郎もバグり始める。

先程、露天商が立ち並ぶエリアと言ったのだが、弾正が前方からやってきたことで最悪の状況と化している。そう、露天商が並んでいる事から分かる通り、このエリアは細い路地裏がないのである。

これでは鉢合わせないようには建物の壁を上るか、建物の壁を突き破るか、建物の窓に身を投げるかしかない。そんな目立つ真似

をしてみつからないとでも？ そんな訳ないでしょうが。後ろに引き返そうにも、待ち構えるは魔界の踊り子。はい、どう考えても状況ツンドル。逃げるに逃げられない。

天国から地獄へ。いや、地獄から大地獄くらいへと叩き落とされた彼は、この状況をどう乗り切るのだろうか。乗り切れるのか、これ？

苦勞人を苦勞させるためだけに生まれてきたとしか
思えない人間だっている

（——さて、取り乱していてもどうにもならない。生き残る道を
探すとしよう）

これまで内面では凄まじい取り乱し振りを見せた小太郎であった
が、深呼吸とも言えない短い呼吸で冷静さを取り戻していた。

想定外など珍しくもないのだろう。彼にとつては街中でアンケー
トを取られる程度のハプニングなのかもしれない。

況してや、彼は対魔粒子を有してこそいるが、固有の忍法には覚醒
していない。こうして精神も完全に操れなければ、とてもではないが
生き残れてこなかっただろう。驚嘆には値しない。

人混みに紛れながら、まだ遠いものの前方からゆっくりと向かって
くる弾正率いるサイボーグ集団を観察する。

集団は手足などの一部分のみを機械化した者と全身を機械化した
者に二分されていた。

（前者は弾正に付いていった連中と分かるが、後者は見覚えのない連
中もチラホラと——ひでえもんだ）

全身機械化されている者の中には、小太郎と交友のあった異母兄弟
の顔もあった。だが、彼らの表情にも歩き方にも感情らしき色は見受
けられない。

恐らく、米連に逃げ延びた後、弾正に反発を見せたのだろう。その
結果見限られ、肉体を機械化の実験材料に、意志は奪われて文字通り
の人形と化したのだ。

しかし、小太郎にも感情の発露は見られなかった。

いくら母が違うとは言え、同じ血を引き、同じ過去を持つ兄弟に、この無関心さ。余りにも無情であった。

弾正は支配欲も強く、傲慢な性格だ。政府主導で近代化していく対魔忍の流れに逆らい、ふうまという栄光にしがみついた挙げ句が十数年前の反乱である。自身が生き残るためならば、平気で我が子すら売るのであろうし、抵抗を見せれば自身に都合の良い人形に変える事も厭わない。

小太郎の記憶にある彼等彼女等は、至極まっとうな性格をしていた。それではいずれ弾正と反りが合わなくなるのは目に見えていた。当然の結果に過ぎないのだ。

もし、彼等彼女等が現在の境遇を回避する機会があつたとするのなら、それは反乱時、幼いながらも弾正に抵抗を見せ、離脱を選択する他なかった。

幼かつたから。他に頼れる者が居なかつたから。母や兄弟がついていったから。

そんなものは悉く言い訳に過ぎないと小太郎は断言する。一足早い親からの独立、ただ一人でも生きていくだけの覚悟がなかつた者の落ち度と斬つて捨てる。

（確か、弾正が亡命に利用したのは米連の特務機関 “G” だったか。そんなところに転がり込んで自分がやりたいようにやるには、言うことを聞かないガキは良い土産だったろうよ）

小太郎は弾正に対してさしたる興味もなかつたが、風の噂で弾正達の亡命に手を貸した米連内部の組織を耳にしていた。

それが特務機関 “G”。主に戦闘・暗殺能力に特化したサイボーグソルジャーを中心とした研究機関、或いは非公式の組織・部隊である。

使用されている技術も米連内部においても最新鋭。また魔界技術も流用されているとされ、詳しい活動内容については判然としないの

だが——何にせよ、弾正にとっては良き交渉相手だ。

常人よりも優れた肉体を持つ対魔忍は、機械化実験には何とも相性がいい。

拒絶反応も少なく、薬効耐性も強いため、常人では死亡してしまうような無茶無謀も罷り通り、人体実験によつて得られるデータの総量、希少価値は計り知れない。

それを自身に反発した可愛くもない子供や使えない部下で賄えるのだ。弾正でなくとも、同じ道を選択する者は少なくあるまい。

(しかし、組織を完全に掌握しているわけでもなさそうだな)

チラホラと見知った顔に混じつて、明らかに弾正に付いていった者とは異なる人種も存在している。

不敵な表情を浮かべ、白い上着を肩に羽織り、金属バットにしか見えない棍棒を担ぐ女性。

真っ赤な装甲で覆われ、両腕の先には手が変わつて三門の機関砲が取り付けられた、辛うじて女性型と判断出来る全身義体。パレフェクトサイボーグ

どちらも歩調や周囲への警戒の仕方が忍のそれではなく、どちらかと言えば軍人のそれであつた。

推測に過ぎないが、今回の弾正の来日は独断でこそないものの、G内部では意見が割れているのだろう。

弾正の目的は、己を頂点とした対魔忍の再構築と復権と見て間違いないが、Gにしても米連にしても相当ハイリスクハイリターンである。

確かに、自らと繋がりのある弾正が対魔忍として返り咲けば、現状、日本にしか存在しない魔界の穴から齎される技術は好きだけ得られるであろうが、どのような手段を用いても弾正が復権するのは難しい。

現状、対魔忍の上役にして、政府との繋がりのある調査第三部のトップ山本 信繁は、弾正を決して認めない。

彼はこの世界における歴史上のターニングポイント、台湾危機——

台湾に侵攻した中華連合と米連の軍事衝突事件である——の頃より、己を滅し、国に仕える真の愛国者。そんな山本長官が、欲望に塗れた弾正が対魔忍の頭領になると噂しても、首を縦に振るに筈もない。

であれば、考えられるのは力業だが、山本長官の脇に控えるのは最強と名高く、弾正も一度は敗北を喫した井河 アサギである。もし、弾正がもう一度敗北するような事態になれば、米連側がどれほどの痛手を受ける事か分かったものではない。

それ故のお目付け役が、彼女達なのだろう。

（凡そ、弾正の置かれている現状はそんな所か——しかし、あの三人は誰だ……？）

弾正の隣を寄り添うように進む銀零の後ろに続く、自分と同じ程度の年頃と思しき三人の少年少女に小太郎は眉を顰めた。

三人が三人とも、対魔忍特有の身体のラインが頭になる装束を身に纏い、頭部をすっぽりと覆うヘルメットを被っている。

但し、ヘルメットは合金にカメラアイ付きの特殊性であった。よくよく見ると、それぞれに合わせているのか装束もヘルメットの意匠は細部で異なっている。

一人は身長も体格も小太郎より大きく、身の丈ほどもある斬馬刀を背負った少年。

一人は体格的には小太郎と同等、腰にはそれぞれ長さが異なる小太刀を携えている少年。

一人は小太郎よりもゆきかぜに近い体格で、他の二人とは異なり徒手空拳の少女。

少なくとも小太郎の記憶には、三人のような体格と武器を携えた対魔忍や兄弟達が弾正に付いていった記憶はない。

弾正の亡命以後に成長、頭角を現した可能性もあるが、その三人だけは歩き方からも機械化されている様子は一切ない。

（あつちで作ったガキにしちゃ大きすぎるし、体格からして日本人で

ある事は間違いない。オレが知らない兄弟という可能性はあるが………参ったね。あの三人、こっちの紅達よりも強い)

多分に直感を含む評価であったが、小太郎が脅威を覚えるほどだ。自然体でいるようで決して途切れない警戒心。不測の事態に対応すべく全身に現れる筋肉の起り。体幹のブレない歩法。

距離が遠い故にその程度の情報しか得られないが、その程度の情報でも三人の実力が達人に匹敵する強さだと嫌でも理解させられる。

彼我の実力差、戦力差を瞬時に見抜き、理解するのは指揮官として当然の技能であり、部隊を預かる小太郎も身に着けているが———三人の強さは、理性とは別のもっと深い部分、本能が警鐘を鳴らすレベルだった。

(いま分かるのはこの程度か、後ろからは素人さんが尾けてきているし、そろそろ動くか)

次第に縮まっていく距離の中で、一度も脚を止めずに進んでいた小太郎は状況判断と情報収集を止め、行動に移った。

小太郎は素早く手首のカフスを外し、親指に折り曲げた人差し指を掛けると徐々に力を込め、遂には炸裂させる。

所謂、指弾と呼ばれる技術。指で弾ける大きさの物体であれば、何であれ投擲武器と化す上、モーションが少ないため暗殺にも使用される。

この技術を極めた者は弾丸と遜色のない指弾を放てるが、小太郎はその域には到達していなかったが、小太郎の目的を果たすには十分である。

「———いったあ?!」

カフスが放たれた先に居たのは、小太郎の立つ位置から通りの反対側に立つ男であった。

側頭部に走った痛みにも男は目を血走らせ、見た目に現れた血気盛んさをそのままに、たまたま隣に立っていた通行人を犯人と決めつけ殴りかかる。

水面に波紋が広がる如く、露天商通りは瞬く間にこれまでとは別種の喧騒に包まれていく。男を中心に怒号と悲鳴が飛び交い、喧騒を察知した周囲の人間や弾正を筆頭とした集団全ての視線が集まってくる。

「何だ……え、ぐつ!?」

その間、騒ぎの起爆剤となった小太郎は、音もなく一番近くの露天商人の顔面に蹴りを食らわせると同時に昏倒させる。

そればかりか、商人の全身を覆い隠していた外套を奪い取り、自身の頭から被ると、商品の持ち運びに利用したであろうカートとダンボールの影にピクリとも動かない彼を隠し、自らは露天商に成り済ます。

弾正と率いられている者達を観察しつつも、自身の正体を隠すべく、そういう対象を探していたのだ。

周囲の者達は喧騒にばかり目が行って、誰も商人と小太郎が入れ替わったなど気付いていない。

見ている者の視線を巧みに誘導し、本当に見られたくない部分から目を逸らさせる手品師がよく使うテクニクである。

「おいおい、どおすんだ？ 弾正さんよお？」

「こんなん一々相手にしてられんわ。ちゆうか、ウチ等、こないに堂々歩き回ってええんかいな？」

「メイジャー、放っておけ。ヘスティアの言い分も尤もだが、この街の連中に我々の存在を喧伝できればそれでいい」

小太郎の成り代わった露天の前に差し掛かった「G」の面々であったが、彼等は露天になど興味はないのだろう。視線すら向けてい

ない。

弾正のお目付け役と思しき二人は、生身の人間に見える方がメイジャー、真赤な全身義体の方をヘスティアと呼ぶようだ。

言動から察するに、今回の弾正を主体とした日本への侵攻には懐疑的であるのか、はたまた弾正自体を嫌っているのか、推測されるお目付け役という役割が気に入らないのか、乗り気は見られない。

弾正は懐かしい空気を楽しんでいるらしく、小太郎の存在に気付いてもいない。

いい空気を吸っているおっさんに、これから自身に降りかかるであろう苦勞と七面倒臭い展開を予測して早くもビキビキし始めた小太郎であったが、すぐさま戦慄する羽目になる。

「……………」

(おい……おいおいおい、どういうことだ……!)

小太郎が最も危険だと判断した三人の内の一入——無手の少女が脚を止め、外套で全身を覆って座り込んでいる小太郎に視線を向けたのである。

他の者達が脚を止めずに進んでいる以上、小太郎の変装に問題はなかった。少女の側も小太郎と直接対面した事がなく、気配や雰囲気で察するのは不可能。

無名の小太郎の情報は米連にまで流れてはいない。探知探索に特化した何らかの忍法を保有していたとしても、ありえない事態だ。

不審と疑問の視線を向けられ、小太郎の全身に冷や汗が浮かび、心臓が跳ね上がる。言い訳のしようもなく、彼は追い詰められていた。

今から凜子に連絡を取り、視覚跳躍と空間跳躍の術を駆使すれば、逃げるだけならば何とかなるだろう。だが、そうなった時点で弾正側に自身がヨミハラに潜伏している事実がバレてしまう。

ブラックやその娘にバレているだけの状態ならば、他人を信用していない二人の事、ノマドという組織を動かさず、必ず自分の手で見つけ出そうとする分、まだマシであるが、弾正はそれを選択しない。今

ある部隊をヨミハラの全域に展開し、傭兵すらも雇って小太郎を追うだろう。

そうなれば、最悪の事態だ。

不知火の救出まであと一歩だと言うのに、これまで静かに進行する病のように進めてきた全てが台無しになる。

小太郎は余計な事しかない弾正と正体不明の娘に怒りを向けつつも、最悪を想定する。

この場で戦闘を開始するのは論外。とてもではないが、これだけの集団に囲まれては勝つどころか逃げることも不可能だ。

最善は凜子の忍法による離脱だ。これで弾正側に対魔忍の存在――ひいては己の存在も発覚してしまうが、ヨミハラに部隊を展開するよりも早く、アンダーエデンに突入して不知火の身柄を確保するしかない。

現状、弾正との戦闘は避けざるを得ない。

彼の持つ邪眼は「傲眼^{ごうがん}」。目を合わせた邪眼使いの肉体を縛り、意のままに操る。まさにふうまを支配すべく生まれてきたような男だ。ただ、残念なのは、ふうまを支配する事と対魔忍や闇の勢力を支配する事を同一視している点か。その二つは決してイコールで結ばれず、ふうまという闇の一勢力を支配したところで頂点に立てるわけではないのだ。

ともあれ、彼と対峙すれば災禍と紅は強制的に戦闘不能の状態へと陥る。残る小太郎、ゆきかぜ、凜子、救出した不知火の四人だけで、災禍、紅、別次元の紫を抱えていては戦闘も撤退も不可能に近い。

――しかし、小太郎の考えは杞憂に終わる。

「ごめんなさい。これ、いくらかしら……?」

(……………そう来るか。仕方ない、今は乗るしかねえか)

その時、少女の視線を遮るように、一つの人影が二人の間に割って入ってくる。

小太郎と同じく自身の正体を隠すように外套を纏った美貌の女性

——言うまでもない、魔界の踊り子ナディアであった。

元より小太郎の後をつけていた彼女は視線誘導には引つかからなかったのか、或いは能力によって看破したのか。いずれにせよ、ナディアにとって彼の置かれた状況は都合が悪く、同時に良くもあったのだろう。

ナディアの目的が何であれ、尾行までしていた以上は彼の生存は必須事項である事は疑いようがなく、小太郎と弾正の関係性が如何なるものであるか知る由もない彼女であるが、彼が身を隠す選択を取った以上は決して良好な関係でないと察するのは難しくなかった。

もし仮に、戦闘に発展した場合、戦力差は明らか。小太郎の側に味方したとしても、これだけの数を相手に自分の身を守りながら、彼を守りきれると断言するほど、彼女は自信過剰ではなかった。

もし仮に、逃走を選択した場合、一度は撒かれてはいる身。此処で逃してしまえば、次に発見できるのとは断言できない。

戦闘に発展させず、逃走も選択させず、なおかつ恩を売りつつも小太郎を庇うという行為は、彼女にとって千載一遇の機会なのである。

小太郎と視線を交わし、ナディアは緊張した面持ちながらも演技を続けるように訴えてきていた。

上位存在特有の純粹でありながら傲慢な善意でも、他者を思い通りに動かそうとする悪意でもなく、打算が入り混じりながらも事を穩便に済ませる思慮深さを感じさせる選択。

小太郎は他の上級魔族では決してありえない選択に、捕まるのならば弾正よりも遥かにマシな相手だと認めた上で、彼女の訴えを受け入れた。

「何をしているの？早く来なさい」

「……………」

仮面の少女が足を止めていた事に気がついた銀零もまた足を止め、声を掛ける。一瞬、少女が見ていた小太郎とナディアに視線を向けたが、よくある露天の光景と気にも留めなかった。

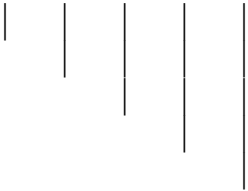
銀零に促され、少女は首を傾げながら再び歩み出した。どうやら、元々違和感や気になる点があつたという程度で、明確に小太郎の存在に気付いてはいなかったようだ。

——弾正と小太郎の邂逅は、小太郎のみが相手の存在に気づき、ナディアに助けられるという形で回避された。

弾正達が去っていき、ヨミハラの人混みへと消えると小太郎とナディアは同時に大きく息を吐いた。

「それで？ そつちの目的は何だ、魔界の踊り子」

「……そう、気付いていたのね。折り入って、貴方に頼みがあるの」



「よし、全員揃ってるな。簡単な状況整理を始める」

クラクルの巣——ヨミハラの拠点へと戻ってきた小太郎は、独立遊撃部隊の面々を娼館で最も広い待合室に集めていた。

紅を筆頭とした三人娘はヨミハラに潜入した当初に比べ、複雑化していく状況に目を回している。此処らで状況を纏めて置かなければ、彼女達も動き辛くなるだろう。

「まず、不知火さんが囚われているアンダーエデンと主人であるリーアルだが、今回の潜入で淫魔族との繋がりは確定した」

「その繋がりを示すのが生体チップの『イブ』ってわけね。でも、これってどういうものなの？」

「分からん。詳細な効果や製造元は、桐生ちゃんに渡して結果待ちになるだろうよ」

ゆきかぜは一人掛けのソファに腰掛け、小太郎が持ち出したイブの入った小瓶を睨みつけながら口にした。

彼女としては面白くもない憎しみさえ抱く物だろう。何せ、実の母親に植え付けようとされたもの、それがどのような効果があるにせよ、決して碌なものではないのだから。

「そして、ノマドも薄々ではあるが、オレ達の存在に気付いている。但し、極一部だがな」

「ブラックと……その、」

「凜子、私に気を使わなくてもいい。大丈夫だ」

小太郎の遠回しな言い方に、凜子は気を使うように慎重に言葉を選んでいたが、氣遣いの対象である紅は落ち着いた様子を崩さない。既に小太郎から紅に、そして紅から他の皆に伝えられた事実。

ブラックは紅の存在に気付いており、その目的は分からないが、自身とは親子、紅とは姉妹関係に当たる娘を動かしている。

その反面、ノマドという組織事態は動かしていない辺り、娘——フェリシアと紅をぶつける事自体が目的のようにはか考えられない。それでブラックが如何なる利益を得られるのかまでは、三人には分からなかった。

「それから、今回救出した別次元から来たと思しき紫は先程説明した通り、次元侵略者プレインフレイヤーによって此方側に連れてこられたものと思われる」
「ある意味、コイツが一番厄介だな。目的も分からず、動向も掴めない上に、後を追う事も出来ないとは……」

「奴等の能力を考えれば当然だな。オレも遭遇して戦ったのは本気で偶然だった。これは紫から得られる情報に期待だが——何にせよ、今回はコイツまでは追っている余裕はない。捨て置くぞ」

小太郎は経年劣化で剥がれていない待合室の壁に、それぞれの勢力を書き込んでいく。

彼としても、この混沌極まるヨミハラの情勢を整理したいのだろう。こうした時には、何かに書き出してしまるのが一番いい。

次元侵略者に関しては、情報はほぼないに等しい。

唯一期待できるのは紫の記憶であるが、それも何処まで価値があるか。

この世界に紫を連れてくるまでは一緒であったのだろうが、淫魔の手中に落ちていたところを見れば、紫が一矢報いたのか、それとも手に負えないと捨てたかのいずれかであるのは間違いない。まともな情報など期待できなかった。故に今回は紫の救出のみに留め、改めて別口で地道に調査していくしかないだろう。

「——そして、現状一番厄介なのは弾正軍団だ、コンチクシヨウがあ!!」

「……んニヤ? ニヤニヤツ!」

「……………チツ!」

(災禍さんが見たことない顔してる)

(気持ちには分かるが、その顔は止めた方が良いと思う)

(災禍殿エ……まあ、当然の反応なのだろうがなあ……)

小太郎はブチ切れながら壁に弾正 & “G” と書き殴って丸で囲むと、役目を終えたマジックを地面に叩きつけた。

これまで我関せずの態度であり、と実際に関係のなかったクラクルはコロコロと転がるマジックを追い掛け始め、災禍は弾正の名を聞いた瞬間に虫酸が走ると言わんばかりの表情で舌打ちをする。

クラクルは兎も角として、災禍の般若の如き表情には、三人もドン引きであった。

と言うのも、災禍は任務の最中は非情に伶俐で口調も固くなるが、日常生活の中では嘘のように表情も口調も柔和で皆の優しいお姉さ

んと言った感じ。

実際、三人も災禍を助けられた事は一度や二度ではなく、あの天音でさえも災禍の言葉には耳を傾けるほどに頼りにしている。

そんな彼女にこんな表情をさせるなど、災禍と弾正の間に何があったのか。

尤も彼女だけでなく天音も同じような表情をするであろうし、他の日本に残ったふうま一門も同様の表情を見せるに違いない。

如何せん、ふうま一門の衰退と現状は、弾正が引き起こした反乱が原因である。自分の都合で勝てない戦いを挑んだ挙句、自分と自分に従順な者だけを連れて米連に逃げ延びた元凶が戻ってきたとしたら、そらそうなる。

“ふうま正義派”などと称して対魔忍側から離反した骸佐一派でさえ、同じような表情をするであろう。所詮、建前に謳っただけで、弾正の行為を容認している訳ではない。

「いやあ、スゲエ自信だなあ！ 普段、冷静な災禍ですらこんな顔するくらい嫌ってるのに、どうやって元ふうま一門を取り込むつもりかね！ アサギを倒せたとしても納得する奴なんて一人もいねーぞ、おい。どんなウルトラCを隠し持っているんだ！（すつとぼけ）」

「何時もの考えなしでしょう。そんなウルトラCを持ってから行動する男ではありません。そうでなければ戦力差を考慮せずに反乱など起こしませんから（断定）」

「そうだね（便乗）」

「ですので、此処で殺しておくのが一番かと（強要）」

「い、いや、まだその時じゃないから（動揺）」

「——殺しましょう（殺意）」

「やめろお、災禍あ！ 天音はともかくお前にまで暴走されたらオレどうにもなんねー！ 対弾正の対策は考えてるから！ いま動いたら、オレ弾正と一緒になっちゃうから！（必死）」

「……………チッ!!（激憤）」

災禍としても憤懣やる方ない。この場にはいない天音も同じ反応に違いない。

ようやく独立遊撃部隊がともに機能し始め、小太郎を頂点とした新たなふうま一門が一步を踏み出そうとした時に、やらかした拳句にふうまを衰退させた先代^{張本人}が出しやばつてきたのである。

小太郎の事を目抜けと嘲笑い、当主と認めていない連中であつても、弾正が戻つてきたからと言って、はいそうですかと認めるわけもない。

災禍の心情は兎も角、方針としては仕方がない。

まず間違ひなく対魔忍側は弾正の排除に動く。米連に亡命されて手出し出来ずにおり、事実上の隠居状態だったから見逃していたが、最強の面の皮で日本に戻つてきた。異分子かつ反乱者を殺さない理由がない。

となればアサギは兎も角、老人共は対弾正に小太郎を担ぎ出す。やらかした先代の尻を拭うのは当代の当主の努め、などと抜かして、小太郎の力を削りつつ、あわよくば共倒れして貰う姑息な考えを抱くのは目に見えている。

小太郎としても、老人共の提案と意見に乗らざるを得ない。弾正に出しやばられては、何時まで経つても代替わりが終わらず、血の繋がりのある小太郎に対しても悪印象が結びつきかねない。どの道、弾正には死んで貰わねばならないのである。

しかし、正しいのは其処までで、現状弾正との戦闘、暗殺は悪手だ。先にも言った通り、弾正の「傲眼」によって、天音を呼び寄せたとしても戦闘可能なのは小太郎を含めても三人しかいないのだ。これだけの戦力である戦力に挑むのは、それこそ弾正と同じになってしまう。

今回は怒りや罵倒や呆れを押し殺し、不知火救出の任務に集中するのが最適解。

これまでアサギに並ぶ腕前の不知火を救出したという事実、判然としなかったヨミハラへの潜入ルートと内情を持ち帰ったとあれば、独立遊撃部隊の評価は跳ね上がる。

そうならば、我こそは独立遊撃部隊に相応しいと腕を上げる対魔忍も出てくるだろう。油断と慢心がセットで付いてくる対魔忍故に、そのままでは使い物にならないのは目に見えているが、邪眼を持たない戦力はそのまま対弾正への戦力となりうる。

また紅、ゆきかぜ、凜子への教育は成功しており、小太郎の課した訓練は三名から油断慢心を消し去った上で、急成長を促している。

つまり、気合と根性と正義と「アサギ」という無茶苦茶な前例を基にした教育ばかりを各人がしていたから悲惨な事になるのであって、対魔忍だつてまともに教育してやれば戦力と呼べるんだよ！ 国営デリヘルとは誰にも呼ばせねえ！ が出来ると証明している。

なお、小太郎に降りかかる苦労は度外視である。

弾正が出てきた事で、自身の潔白を証明しつつ各家とのやり取りを行い、独立遊撃部隊に入れても問題のないメンバーを選定し、それぞれにあった訓練メニューを考えて急速な成長を促し、アサギや山本長官からの無茶振りを片付け、魔族や米連の動向を探り、対弾正への対策を練って、学校にまで通う。うん、これ過労死待ったなしだね。

小太郎よりも先に生まれてきたというのに、小太郎を苦しめるために神が送り込んできたとしか思えない男。それがふうま 弾正である！

「実際、奴の邪眼は強力だよ。目を合わせるって前提は必要だが、逆に言えばたったそれだけで災禍も天音も紅も無力化されちまう。奴の足元だけ見て戦うって努力と青春まつしぐらな戦い方できない？」

「どの辺りが努力と青春まつしぐらなのか理解しかねますが、やってできないことはありません。正直自信はありませんが、やれというのならやってみせましょう。私も、奴の顔面に蹴りを叩き込めるのなら本望です」

「いやいやいや、対弾正において災禍殿は後方支援に徹して貰うのが無難です。最先方は私とゆきかぜが当たるべきでしょう」

「ていうか、そういう忍法だったんだ……………あれ？」

小太郎の無茶振りも快く引き受けたように見えて、まだ弾正にビキビキしている災禍を凜子は必死になつて諫めた。

実際、邪眼持ちの三人には弾正の目の届かない位置でサイボーグ軍団の相手をして貰った方がいい。戦線で戦闘不能になつた仲間を救助するのは余計な人手を割り裂かねばならず、どれだけ優秀でもそのリスクを孕んでいる以上は悪手以外の何物でもないのだ。

弾正の邪眼の効果を耳にしたゆきかぜは、ある疑問が浮かんで首を傾げる。いや、彼女でなくとも抱く当然の疑問であつた。

「え？ あれえ？ ねえ、小太兄、私は反乱の時の事よく知らないんだけど、当時のふうまってどれくらいの戦力が揃つてたの？」

「実質、対魔忍の半分くらいはふうまだつた。但し、井河・甲河の方は家の数が圧倒的に上。ふうまの方は八将を中心にした分家だけ」

「はい？ それつて下忍とか中忍の人を率いる指揮官が少ないつてことだよ？ てことは、動員できる人にも限界があるわけだから、実質的に戦力比で負けてるんじゃない？」

「そうだよ（無表情）」

「……だ、だよ。じゃあ、アサギ先生とかお母さんとか、甲河の強い人に対抗できた人も当然居たんだよ！」

「オレの母上が生きていればワンチャンあつた。母上が不知火さんと甲河の臍を蹴散らして総大将であるアサギを討つのが速いか、対魔忍側が弾正を討つのが早いかつてチキンレースになつてただろうな（絵に描いたような無表情）」

「わ、私が聞いているのは、そういうもしもの話じゃなくて、実際の話で……」

「……ゆ、ゆきかぜ、その辺りで（震え声）」

「実際ー？ ブラックとの戦闘で怪我して実質引退状態の幻庵、まだまだ現役とか抜かして弾正に色目使つてたのか使われたのか知らねーけど最終的に息子にブッコロされる羽目になつた紫藤家の頭湧いたババアである頼母、ふうまの悲しみ全てを背負つて矢面に立つた当時の二車家の当主と息子達である骸佐の父ちゃん兄ちゃんズ、その

他弾正に乗せられた或いは乗らざるを得なかつた凡將軍團。アサギと不知火さんと臙に勝てる奴なんて一人もいねーよ（能面のような無表情）」

「……………な、何で反乱なんかしたの？」

「オレに聞くんじゃねえ、弾正に聞け（人とは思えない無表情）」

「アツハイ」

ジャンジャジャ〜ン!! 今明かされる衝撃の真実ウ！

弾正の余りのやらかし振りに、そういつた戦力比とかまだよく分からないゆきかぜですら疑問符だらけの顔となり、既に知っている紅は震え声で頭を抱える。

最早、小太郎は完全を通り越した無表情であり、地獄に堕ちたであろう小太郎の母親は、後を追って地獄に堕ちた幻庵と骸佐の父ちゃん兄ちゃんズを、あんなの馬鹿に付き合うとか同じぐらい馬鹿よー、と腹を抱えて爆笑しつつも労っている事だろう。

なお、頼母とその他凡將軍團に關しては、小太郎が目抜けと判明した瞬間に弾正と一緒にになって彼女を罵倒したのでボコボコにされている。地獄に堕ちてもボコボコにされている事だろう。

当時から目抜けと侮られていた小太郎の裏切りを促す書状にすら、一も二もなく呼応するふうま一門が後を絶たなかつたのである。

「——お待たせしてしてしまつたかしら」

「……………」

「いや、別に。アレの容態はどうなつた？」

「今は落ち着いているわ。色々な薬で弱っているけれど、明日には意識を取り戻せるんじゃないかしら？ 凄い生命力。あんな娘、魔族でも珍しいもの」

微妙な雰囲気になつた待合室へと入つてきたのは、小太郎と共に拠点へと帰つてきたナディアであつた。

今は正体を隠す必要はないと外套を取り払い、魔界の踊り子に相応

しい露出度の高い衣装に包まれた豊かな肉体を惜しげもなく晒し、そしてどんな敵意でも消失してしまいそんな柔和な笑みを浮かべていた。

彼女が現れた瞬間、ピリツと部屋の空気が一変した。

小太郎と未だにマジックを転がして遊んでいるクラクルを除き、全員が武器に手を掛けるほどの警戒を露わにしたからだ。

正に一触即発であったが、小太郎は片手でそれを制し、ナディアは当然の警戒と理解しながらも困ったような笑みを浮かべた。

今の今まで彼女が何をしていたのか、と言えば、過酷な調教でボロボロとなった紫の身体を癒やしていた。

彼女は踊り、或いは相手の肉体に接触する事で魔力を対象へと送り込み、生命力や魂というものを活性化させる。謂わば、命そのものを操る能力と言っても過言ではない。

肉体的にも精神的にも追い詰められていた紫には不死覚醒による回復しか期待できなかったが、彼女を連れ帰った事でそれも杞憂に終わった。

「もしかして、私の目的を彼女達に伝えていないのかしら……?」

「まさか。報連相は部下から上司に向けてだけじゃなく、その逆も然りだ。やれやれ言ってるオレがやらねー訳ねえよ」

「ハウレンソウ? が、何かは分からないけど、他者にやらせるならまずは自分が、ね。うん、そういうのは素敵よね。私の目的はそういうものを知るためだもの」

「……小太兄が言った事、本当なんだ」

「勿論、嘘は吐かないわ。信頼を得るには、まずは此方が信頼と誠実を示すべき、よね?」

とても上位魔族とは思えない傲慢さとは掛け離れた物静かな態度に、ゆきかぜ達は信じられないものを見るような目で呆気に取られていた。

唯一、災禍だけはいざとなれば小太郎の盾となるべく警戒を解いて

いなかったが、毒気を抜かれてしまったのは事実。

それほどまでに、ナディアの言葉は誠実さで満ちている。

まるで世間を知らないまま育った田舎の箱入り娘のようだ。これで魔界においてはブラック以上に危険視されているというのだから、他人というものは分からない。

「でも念の為、もう一度私の目的を言っておくわね——私の目的は、人間を知る事。その為に、人界と魔界の間に交わされた古の約定を破ってでも、この地の土を踏ませて貰ったわ」

地獄への道は善意で舗装されている……魔界の踊り子は善意の……あッ（察し）

「人間を知りたい、とは随分と抽象的な物言いだな。具体性がない」「ええ、そうね。ごめんなさい。まずは経緯から説明させて欲しいわ」

待合室の三人がけのソファに一人腰掛けたナディアの前に、それぞれ一人がけのソファに腰掛けた状態で話を聞く。

唯一、小太郎の背後に立つて控えていた災禍は、ナディアを責めるように冷たく棘のある言葉を返していた。警戒心がそのまま言葉にまで現れているのだ。

しかし、ナディアは不快にすら感じていないのか、寧ろ自分の落ち度であったと受け入れ、静かに語りだす。

「もうご存知とは思いますが、私は魔界の支配階級に当たるわ。成りたくてなったわけではないけれど、前任者——私の両親から地位と領地を引き継いでいるの」

「へえ、珍しいな。魔界じゃ領地の取り合いを常にしてて、下剋上や没落なんて珍しくないんだろう?」

「そうね。そういう意味では私は変わり者……いえ、争いを好まず、領地を広げようとせずにいる時点で、魔族においては変人よ」

魔界は人界以上に厳しいヒエラルキーが築かれており、支配階級に位置する魔族は常に激しい勢力争いを繰り広げていて、棍棒を振り上げては誰か目掛けて振り下ろしている。

というのも弱肉強食を旨とする魔界である事に加え、支配階級は支配欲から何から欲望の大きさは人一倍。常に領土を広げ、其処に住まう者から吸い上げられるものを吸い上げねば、欲望を満たす事は不可

能だ。

そういう点から言えば、自身の両親から地位と領地を奪い取ったのではなく、穏当かつ正統に地位と領地を受け継いだナディアは相当に珍しい事例なのだろう。

「元々、私の領地は勢力争いを繰り返している土地からは離れていて、領民もエルフやドワーフ、ホビットにノームと言った戦闘に向いていない種族が多くて、誰もが私を慕っていてくれるわ」

「成程、立地条件も良けりゃ、領民も魔界にしちゃ穏当な部類な訳ね。その上、アンタの魔力と評判もある。実に結構な、実にまっとうな支配階級じゃないか」

ナディアの立たされた立場、与えられた境遇に小太郎は皮肉でも何でもなく、素直に良い事だと告げる。

実際、ナディアの領地は戦闘に向かない種族、戦闘を好かない者には楽園のようだろう。

領地を支配するナディアは穏当かつ争いを嫌い、そもそも支配という行為自体に懐疑的で搾取や腐敗とは無縁の人物。

大きな幸福がない代わりに、大きな不幸もない。日々を懸命に生きる事だけを望む者達には、他所の争いばかりの土地とは比較にならないほど住みやすいに違いない。

しかし、小太郎の言葉に彼女は困ったような顔をして笑っていた。本題はまだ先なのだろう。

「けれど、困った事もあって。長く続いて、何時までも終わらない戦いに嫌気が差して、私の領地に流れてくる民も増えてきてね」

「つまり、流民の数が増え過ぎて、領地の経営が回らなくなったと……」

「いえ、それはまだまだ先よ。エルフとドワーフが中心となって自警をしてきている。それにエルフは森の智慧を、ドワーフは優れた工芸品と武器を、ホビットとノームは土地を豊かにする術を知ってい

る。今の所は問題はないけれど……」

「ならば……そうか。他の支配階級から狙われているのか。大量の流民が流れてきても受け入れられるほど豊かな土地だ。そして、戦闘に向かない種族しかいないのなら、他所の連中にしれみれば垂涎ものだろう」

「ええ、それも理由の一つ」

「うーん、分からないなあ。えーっと、ナディアさん、それなら人間に助けを求めるなら分かるけど、人間を知りたいっていうのはおかしいでしょ。それに、貴女は知らないかもしれないけど、私達は私達の世界の事だけで手一杯だから、助けなんて期待しないでよ?」

「勿論、貴方達が苦しい立場だとは風の噂で聞いているから。私達とは似たような立場ですもの、無理な助力を要請するつもりはないわ」

紅、凜子、ゆきかぜの順で口々に推測と疑問をナディアに投げかけるも、中々確信を突けないでいた。

だが、ナディアの語る身の上話と魔界の実情に検討が付いている小太郎だけは、薄っすらとではあるが彼女の目的を察しつつあった。もうこの時点で彼はゲロを吐きそうである。

話を聞く限り、ナディアの置かれた立場は非常に厳しい。

様々な上位魔族の支配階級に遊び半分の侵略を受けている日本、そしてそれを守るために日々戦っている対魔忍からすれば彼女の苦しみは痛いほどよく分かる。

しかし、侵略する側からみればナディアの領地は狙い目だ。領地を守る者は兵とも呼べぬ弱卒、更には労働力と豊かな土地がある。自らの欲望を満たすために侵略しない理由がない。

今はナディア個人の強大な力を前にして二の足を踏んでいるであろうが、例え大多数の軍勢を殺せるだけの能力を持つていようと、所詮は個人に過ぎない。圧倒的な強者を封じた上で蹂躪する術などいくらでも存在する。

「それで、少し話は変わるけれど、魔界の文明や文化について、どう思

うかしら？」

「どう、と言われてもな……我々よりも随分と進んだ技術を持っているのは確かだとは思うが……」

「……………ああ？ オレかよ？」

「そうは言っても、そういうの、小太兄の方が詳しいでしょ……？」

ナディアの質問の意図を察しかねて、助けを求めするように三人は小太郎に視線を向けた。

嫌な予感をヒシヒシと感じている小太郎は、ナディアの目的と結論を聞きたくもないが、話が進まないのではそれはそれでストレスが溜まる。

そもそも、ナディアを連れてきてしまった時点で、状況的に逃げられないのだ。素直に話を進展させるしかない。

うんざりとした表情で、クソデカ溜め息を吐いた小太郎は、これまで関わってきた魔族の生態と思考回路、そして数々の魔界都市を渡り歩いてきた経験則から、一つの結論を口にする。

「……………あー、発展の速度は人界とは比較にならないほど早いけど、衰退や滅亡はそれ以上の速度で進行するだろうな。その過程で失われる技術や文化も半端じゃなく多くなる。にも拘わらず、支配階級の顔ぶれは基本的に変わらずに学ばない。何故なら、奴等の個としての力と寿命が図抜けているから、違うか？」

「ええ、その通りよ。対魔忍は恐ろしいけれど優秀と風の噂で聞いていたけれど、この街に居るのなら只者ではないと思っていたの。助けを求めて正解だったわ！」

「い、いや、ナディア殿、そのう……ウチの隊長は対魔忍の中でも非常に優秀で、特別と言うか……そういうことを考えられるのは、多分、隊長だけだ……！」

「……………せ、正解なのは間違いないって事ね！ よかったわ！」

小太郎が求めていた答えを告げた事に、パツと顔を輝かせるナディ

アであつたが、凜子の震え声で告げた事実には、一瞬言葉に詰まった。だが、其処は魔界で皆に慕われるナディアさんだ、ちよつとやそつとでへこたれない。善良かつ前向きで全肯定である。

実際、正解で当たりを引いているのだ。お助けキャラガチャで、小太郎は間違いなく当たりの部類である。なお、選ばれた側である小太郎には嬉しくもなく、敵対ガチャで引いた場合はしつちやかめつちやかに引つ掻き回された挙句、絶望のズンドコに突き落とされるのが確定する訳だが。

「まあ、兎に角、だ。魔界の文明レベルは常に上に行ったり来たりしていて発展と衰退の無限ループ状態。そういうのはやってると育てた人材も発見した新技術なんかも衰退の過程で失われちゃうから、比較的穏当に発展しつつ領地を守りたいとそういうことだな？」

「ええ、そうよ。そのためには人間——いえ、正確には人間の歴史やノウハウを学びたいの。貴方達は私達よりも長い時間を掛けているけれど、確実に一歩一歩前に進み、今の文明を築いた。こと維持と管理について魔族とは比較にならないほど優れているから」

魔界と魔族の歴史は常に飛躍的な発展と破滅的な衰退を繰り返している。せつかく百歩も進んだのに、一気に一万歩下がるなどという事態はザラである。

どれだけ人間よりも優れた種が住むとは言え、資源にも人材にも限りがある。にも拘わらず、年がら年中殴り在っているのだ。発展と衰退を凄まじい勢いで繰り返すに決っている。

しかも、魔界医術の非常識さからも分かる通り、技術力も凄まじい。ということとは、人間の保有する核を上回る超兵器を保有しているもおかしくはない。そんなものを、自分さえ良ければいい支配階級が握っているのだ。悪夢以外の何物でもない。

加えて言えば、そのような技術を開発する側も桐生やフルストレルのナルシスト&倫理観皆無である。成功もデカいが失敗もデカい。魔界が人界よりも遥かに広大だからまだいいものの、人界と同程

度であればとうの昔に焦土と化していたかもしれない。

対し、数千年続く人間の歴史は、常に緩やかな発展と共にあった。短い期間で見れば一歩進んで二歩下がる、などという事態は日常茶飯事であるが、長い期間で見れば着実に前へと進んでいる。

魔族と同じく、自分さえ良ければいいという人間は居るだろうが、それでも衰退しなかったのは、魔族より遥かに弱い種だったからだ。支配階級の魔族とは違い、弱いからこそ一人では生きていけないと認めている。他人の利益が巡り巡って自らの利益になる場合があると知っているからこそ、手前勝手な生き方をするのは一部でしかなく、先達が今まで築いてきたものを全てを手と手を取り合って維持・管理し、時折生まれてくる天才が発展を引き起こす。

それが功を奏し、あくまでも人間から見た視点に過ぎないが、今の所は損得の天秤は得の側に傾いている。

これからナディアの領地に流れ込んでくる流民・難民は更に増える見込みだが、それではいづれ領地で生み出されるあらゆる資源が、民の数に追いつかなくなる。

かと言って、ナディアの気質としても能力としても、他の支配階級同様に領地拡大のために戦争を吹っ掛ける真似など出来ないし、そもそも兵力もない。

流民・難民の受け入れを拒めばいいだけの話だが、ナディアとしても領民としても、極力したくはない。疲れ果てた彼等を見捨てる事などナディアには出来ず、領民にとってはかつての自身の姿なのだから。

よって彼女が選んだのは人界の歴史とノウハウから学び、発展の道を模索しながら維持・管理を徹底する方針だ。

悪くはないだろう。ある意味、魔界の支配階級から学ぶよりも、ずっと彼女の気質に在つていけると言える。言えるのだが――

「ふう〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜……因みにさ、ア
ンタのところの文明レベルってどんなもんなんだ。貨幣とか、税の徴
収方法とかさあ」

「えーつと、お金はないわね。基本、物々交換かしら。仕事の報酬も自分の生活が破綻しない範囲で、よ。税も基本はないわね。いえ、皆が作ってくれた作物とか調度品をくれるから、それが税と言えれば税かしら？」

「成程お、成程成程く………はあく………」

「あの、小太郎。溜め息ばかり吐いてないで、何とか言ってみたらどうなんだ」

「五月蠅い、黙れ紅。オレは今、心を無にしているんだ。そつとしといて……ふあく………」

——余りにも、樂觀視しすぎだ。

今にも爆裂してしまいそうな頭の中と胸の内を押さえるため、必死で心を無に保とうとフレーメン反応を見せる猫のような表情で深呼吸を繰り返す。

なお、本物の猫——型の獣人は、紅の膝の上で丸くなっている。紅は猫が好きだ。どれぐらい好きかと言えば、猫の刺繍が入ったパーカーを普段着にするぐらい好きだ。その年で、そのセンスはどうなのだろう。クラクルは猫可愛い。

素晴らしいと言えいいのか、凄まじいと言えいいのか。

ナディアの領地は政治や支配体制は人界での古代とそう大差ないようだ。但し、技術レベルに関してはエルフの持つ魔法技術、ドワーフの鍛冶、建築技術、ホビットやノームの整地、農耕技術、とそれぞれの種族が得意とする分野だけに相当なものと考えるべきだろう。

緑に支配体制も確立していないにも拘わらず、これまでナディアがやってこれたのは、本当に彼女と彼女の領民の善意と良心、そして彼女達の幸運によって全てが成り立ってきたからだろう。

誰かが悪意を以て領地を引っ掻き回そうとすればいくらでも出来ただろう。何せ彼女の領地には法律も、税も、治安を維持する警察も軍隊もないのだから。一度でも火が突けば、凄まじい勢いで燃え上

がった筈だ。現代日本で法律も税も警察も軍隊もなければ、こうはいかない。どう考えても国としての体すら保てない。

魔界や魔族らしからぬ、とは誰の言葉であったか。善意と良心だけで成り立っている土地は秩序だっているとはとても言えない。混沌そのものだ。

そして、彼女が求めているのは統治のノウハウを学び、混沌とした現状に秩序を与えて先に進む方法。

より穏当に、より確実に、より管理しやすく、より長く維持できる、そんな統治。

成程、これは人界からノウハウを学ぶのが現実と言えよう。

つまり、何が言いたいのかと言うと——ふうま 小太郎のドキドキワクワク魔界内政無双がはっじつまるっよー♪

「ふあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ……うっ！ げえ、ぼろ

しゃー—————!!!」

「小太郎が吐いた—————!!!」

「きゃああああああっ?!?!? だ、大丈夫、大丈夫なの!?!」

小太郎は心を無に保てずに、無表情のまま虹色の吐瀉物を噴射する。絶望的に汚い絵面である。内政無双は始まらなかった。それらうだ。

統治や内政は戦争に比べてクソほど難しい。正確には統治や内政、戦争にはそれぞれ別の難しさがある。

戦いに勝利し、一度は英雄と呼ばれた連中であっても、戦争後の統治や内政に失敗し、失脚、或いは謀反・反乱された挙句に死亡、などという事態は歴史の上ではそれほど珍しいことでもない。

歴史上には戦争をやらせてよし、内政をやらせてよし、というチートの権化のような怪物もいるがそこはそれ。そんなもの、生まれてくる方が稀だ。

統治と言うのは、根本的に統治する対象が生きていくために存在する。決して統治者のためにあるわけではない。

古代では村の長が、中世では王や貴族が、現代では政治システムが、全体の生活水準と一定に保ち、民が最大多数の幸福を享受できるよう、最高^{ベスト}でないにせよ最善^{ベター}の選択肢が考え抜かれてきた。

無論、統治者は様々な権利や特典を得るのだが、それは統治という非常に難しい仕事を成立させた正統な報酬だ。

法も習慣も暗黙の了解もない、纏め上げる者もない——という状況に叩き落とされた人間は獣と大差はない。ブレーキを踏む理由がなく、欲望を押さえる必要性がないからだ。誰もが好き勝手に生きていくとしたのなら、利益を得るのは極々一部の者だけで、大多数は甚大な不利益を背負う事になる。

リアル北斗の拳の世界観を思い浮かべればいい。と言っても、あの世界観ですら圧倒的な強者が集団を纏め、統治を行っていた。そうでもしなければ、知的生命体は間違いなく滅ぶ運命にあるのだ。

そして、統治というものは時代と場所と人と価値観によって変えていかねばならない。

例えば、日本において神君・徳川 家康から始まり、250年以上も続いた江戸幕府の統治をそっくりそのまま中世ヨーロッパで展開したとして、上手くいくだろうか。

間違いなく上手くいかない。日本と欧州とでは、民の価値観が違い過ぎるし、これまで築かれてきた税収のシステム、法体制が一変してしまえば、誰もついていけないだろう。かなり早い段階で統治体制に破綻が生まれて回らなくなる。

戦争勝利後に敗戦国を支配した英雄が、自国と同じ統治方法でいんじゃないか？ とか頭ぱーぷりんな事をやって失敗する必敗パターンである。

このように、統治とはその時代がどのような積み重ねを経て至ったのかを学び、その場所で何が在ったのかを理解し、人の気質を調べ、価値観に沿ったものを提示してやらねば成り立たない。

ナディアの領地に現代日本の民主主義やら政治システム、憲法をぶち込んだとしても、誰も理解出来ないし、着いても来れない。待っているのは、離反か反乱か瓦解でしかない。

そのためには、まずエルフとドワーフとホビットとノームだけではない、ナディアの領地に流れ込んでくるであろう他の種族を予測して、それぞれの歴史や価値観、何を重んじ何を軽んじるのか、何に長け何に劣るのか、果ては知能レベルを調べ、学ばねばならない。取っ掛かりの段階だと言うのに、数年がかりの作業である。

その後は、それぞれの妥協できるラインを探りつつ、なおかつ理解可能な統治体制を考えるために、法の制定、領地を回す業務組織の立ち上げ、徴収とその使い途、e t c、e t c。

ノウハウや知識だけで無双が出来れば苦労はしない。それに合わせてチューンナップ、或いはデチューンできるだけの地頭と血反吐を吐くような努力が必要なのである。異世界に転生して現代知識で無双？ バカを言うな、英雄すら越えているチートの化身なのか、そいつは。

無理だ。どう考えても不可能だ。いくら小太郎でも無理過ぎる。

そりゃあ、彼も支配する側の人間。国を回すような人間ではないが、家を回す人間ではある。

各国の統治体制を学び、何が良く、何が悪かったのかを考察し、ノウハウと知識で自らの支配に組み込んでいける。だが、今回は規模が違う上に、相手は人間ではない魔界の住人。

十年で結果が出れば凄まじいの一言だろうが、その前に小太郎が学ぶ事と考える事とやる事が多すぎて、一ヶ月でリアルに死ぬる。

「……………」

「な、何、どうしたの？ そんな無表情で私を見てっ！ こ、怖いわ！
それどういう気持ちの顔?! と言うか大丈夫なの?!」

「うっ、ぐ ぶっ、 え お ろ ろ ろ
しゃーーーーーっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっ
!!!!!」

「若様、お気を確かに!!」

「また吐いたニャー!! ボクの巢なのにつっ!!」

「わ、私のせいなのーーーーっっ?!」

此処で朗報です。

今、小太郎が顔を見ただけで吐いたナディアちゃんですが、生命を操る能力を持っています。命を活性化させるも、命を奪うも思うがまま。

懸命な読者諸君ならばもうお気づきだろう！ そう、彼女が居るだけで何とかなるのだ！ 少なくとも過労死する事はないっ！ ナディアがダンスダンスレボリューションするだけで、もう周りの者はヤク極めたレベルでガンギマリ状態になるのだからっっ！！

72時間働けますかー！ なんてレベルではない。十年だろうが二十年だろうが不眠不休で働き続けられる。エンドレスエイトならぬエンドレス労働&苦勞である。そりゃあ、反射的にゲロも吐こう。ふふふ、怖い。怖過ぎる。

しかし、疑問は思い浮かべる者も居るであろう。

何もナディアの願いを聞いてやる必要性は小太郎はない。無論、弾正の目から逃れるためにナディアが一芝居付き合っただのは事実であるが、余りにも内容が重すぎる。

悪いが、これでは割に合わない。ただ、その一言を告げればいいだけである。人が良く、敏い彼女の事、残念、でも仕方ないわね、と癪も起こさずに受け入れる筈だ。

でも出来ない。出来ないのである。何故か？

簡単は話だ。このままナディアが魔界へと帰る筈がない。何せ、自分の領地に一大事が迫っている。領地から得られるものになど興味はないが、其処に住まう領民は彼女の大事な仲間であり、愛しい者達なのだから。

となれば、彼女は小太郎以外に願いを叶えてくれる人間を探し、人界を渡り歩くだろう。人が良く、他者を疑う事を知らない彼女がどうなるか。

『うーん、困ったわ。どうしましょう』

『ハハハ、其処の美人なお嬢さん、お困りなようですね。何かお手伝い致しましょうか？』

『えつ、本当に？ 実はカクカクシカジカで』

『成程——私にいい考えがある！ 着いてきて下さい!!』

『本当、素敵っ!』

(ぐっへっへ、ちよれえちよれえ。性奴隷にしてっやつかんなあゝ。あゝ、夢が広がるんじやゝ)

うーん、この想像のし易さ。まさにフライングサマーインセクトファイアである。

何せ、この人界の住人はヤバい。大多数は真つ当かつ真面目に生きている方々であるが、一部は目を剥くクズっぷりを発揮する。

小太郎の知っている事例では、年端もいかない子供が魔界製の催眠スプレーを入手して、女性の連続行方不明事件を引き起こしていた事もある。もう滅んだ方がいいんじゃないのかな、この世界。

なお、裏では魔族の奴隷商人が関わっていたようだが、その子供達は今はどうなっているか。まあ、小太郎が関わった時点で、最低でも子供達が犯した女性と同じ目にあっているか、最悪の場合は殺処分である。

こんななんばつか見せられて人は信じろとか無理な話だよ！ 誰か、死んだ魚のような目で人を守る仕事してる彼の気持ち考えたことあるのかよお！

尤も、彼の気持ちを理解できたところで何の救いにもならないのが一番酷い話だ。見ろよ、ボロ雑巾になった彼の無惨な姿をよおっ！

だが、これくらいなら可愛いもんである。痛い目を見るのはナディアか、返り討ちにされる彼女を陥れようとした阿呆だけだから。

ヤバいのは、ナディアを陥れようとする者が賢い場合だ。彼女を言葉巧みに誘導し、領地の経営やら何やらを握ってみろ。一瞬で領地は崩壊する。まあまあまあ、其処までいい。苦しい思いをするのはナディアと領民だけだから。

問題は、ナディアの領地に出現した門がヨミハラと繋がっている事だ。彼女はこれを通して人界にやってきたらしい。

魔界と人界を繋ぐ門の出現の条件は判然としておらず、人界側には

ヨミハラ以外にも複数の門があると見られているものの、魔族の側が人界への道を閉ざされる事を警戒してか、巧妙に隠されている。

ただ、魔界側の住人の証言により、いくつかの特性は確認されている。

曰く、人界側の門は数が少ないが、魔界側にはそれなりの数の門がある。

曰く、門はそれぞれ繋がっており、一つの入り口が一つの出口に繋がっているとは限らない。と言うよりも、魔界側に複数の入り口があり、人界側の一つの出口に繋がっているようだ。

恐らく、ブラックや淫魔王は自身の領地に出現した門を通ってヨミハラにやってきたと思われる。下手をすると、まだ息を潜めている上位魔族すらいるかもしれない。

そんな状態で、対魔忍やら自衛軍はほうぼう駆けずり回って日本の平和をギリギリのところまで守っている。本当にギリギリの状態なのだ。

もう一度言う、ほんとのほんとマジにマジでギリギリの状態だ。そんな状態で？ ナディアの領地が崩壊して？ 別の上位魔族の領地になって？ ソイツが人界に目を付けたとしたら？

ブラックや淫魔王と殺し合ってくれるならばまだしも、手を組まれたとしたら。或いは、自ら新たな脅威として立ち上がったとしたら。日本終了のお知らせ、どころか人界終了のお知らせである。

小太郎がナディアの願いを突っぱねれば、こうなる可能性が十分に存在している以上は無理だ。

彼が楽観的な性格であれば違ったかもしれないが、自身の両腕と認める災禍と天音に対してすら、いつ殺しに来られても対処できるように最悪を想定している警戒心と猜疑心の塊のような男には不可能な話。

——運命が小太郎にもつと苦勞して輝けと囁いている。

(お、落ち着け、オレ！ まだだ、まだ終わりじゃない！ どうやら長命種の魔族みたいだし、人間とは時間の感覚が全く違う。流民で一杯

になるのも戦争ふっ掛けられるのも今直ぐにとって話じゃない筈だ)
(それに、こんな脳みそお花畑のお嬢さんが一人で領地を経営できたとは思えねえ。ブラツクどっかのバカ殿じゃねえんだ、自分の領地を放つて置いて人界漫遊しにきてる筈もねえ！ 必ず、コイツを支えている側近が居る！ そいつを利用してオレの負担を減らすしかねえ！)
(ナディアだって地頭は悪くない！ こっち側のノウハウと知識を学ばせつつ、オレが都度確認してアドバイスすれば何とか、何とかあ……！)

もう胃の内容物がなくなつて胃液も出てこないのに、まだげーげーやっている状態で、小太郎は冷静に思考を巡らせていた。

希望的観測に基づくものではあつたが、彼の考えは概ね的を射ている。みつともない状態なのに大したものであつた。

尤も、ナディアに教える以上は彼も頭を働かせなければならぬ。負担は減つてもなくなる訳ではないのだ。

小太郎のやる事リスト一覧。

- ・ 独立遊撃部隊の運用と増員。
- ・ 新隊員の運用方法と指導内容の模索。
- ・ 対魔忍内部の各家との折衝、交渉、その他諸々。
- ・ ふうま一門の再興。
- ・ アサギからの無茶振り。
- ・ 山本長官からの無茶振り。
- ・ 九郎と九郎隊の面々を過労死させないために、補充人員の検討。
- ・ ブラツクとか言うモンスターペアレント（比喻ではない）とその組織への対処。

・ 淫魔王とか言うクソ面倒な相手を撃滅する対処。
・ 紫を連れてきた何処に居るかも分からない次元侵略者を滅殺する対処。

- ・ 離反してくれた骸佐君への比較的穏当な対処。
- ・ 帰ってきた弾正を確実にぶつ殺すための対処。
- ・ ナディアへの指導と小太郎自身の領民各種族の気質、歴史、得意

分野の勉強 ↑ New!

あー……………もうこれは過労死するしかないかも分からんね。

(ふ、ふふ、もうやるしかねえ……やるしかねえなら、やるだけだあ！)

言葉にもならぬ慟哭の叫びが、小太郎の胸中に響く。

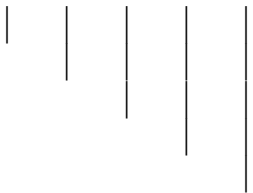
伊達に、実の母親から死んだとしても許しを与えぬ訓練を課せられてきた幼年時代を駆け抜けていない。逃げ出す事はあつても投げ出す事はない、いや出来ない男であつた。弾正とは大違いである。もうこれだけで当主としての格の違いが分かる。

(まあ、それはそれとして、弾正への対処は骸佐に擦り付けるかあゝ。全部を全部やってくれないだろうけど、一緒に棒持って困ってぶん殴るくらいはしてくれる、アイツなら。弾正、死ぬほど嫌いだしな。そうしよそうしよ)

おおっとお、此処で骸佐君に思わぬ飛び火。

骸佐の父が弾正に死ぬまで苦勞させられたように、二車の人間はふうま宗家に苦勞させられる運命にあるのだろうか。

まあ、好きこのんで離反してくれた彼だ。きっと好きこのんで苦勞も背負い込んでくれる事だろう。



「あゝ、やってらんねえ……部外者の分際でデケエ面しやがって」
「わちやわちや抜かすなや、メイジャー。これも任務や、聞き分けえ」
「……………チツ」

ヨミハラの歓楽街に、苛立った様子の女とサイボーグが周囲を睨みつけながら立っていた。弾正にメイジャー、ヘスティアと呼ばれていた特務機関「G」の機械化兵士の二人と彼女達の部下と思しき者達であった。

メイジャーの足元には頭部を砕かれた上、全身が炭化するまで焼け焦げた三人分の遺体が転がっている。綺麗な顔立ちと物珍しい服装と武器に目をつけて声を掛け、彼女自身の手によって殺害された身の程知らずの死体だ。

道を行くヨミハラの住人は、二人から目を逸して立ち去っていくか、遠目に眺めるばかり。その情けない姿が、ただでさえ苛立っているメイジャーを更に苛立たせる。

「そないに嫌なら、蹴ればよかったやろ、こんな任務。別に、長官も強制はしなかったやろ？」

「……………うるせえな、どうでもいいだろお。どうでもよお」

「はあ？ おかしなやつちゃんあ、ホンマ」

二人とその部下は小太郎が読んだように、弾正の行動の補助と監視、そしていざという時の殺害を任務として日本へとやってきた。

元々、「G」の長官は弾正が対魔忍時代、長官が一工員時代からの旧知の仲であり、弾正失脚時は亡命の手引きを行った。

当初は長官と弾正の仲は良好であった。弾正が手土産と称して渡した対魔忍から得られた人体実験のデータによって、「G」の技術レベルは飛躍的に進歩し、長官は現在の地位につく切欠となった。

しかし、弾正は次第に増長を始め、正式に「G」の人員でないにも拘わらず、一派閥を持つほどに成長していた。

こうなつては長官としても好き放題にさせる訳にもいかず、対処に

困っているところ、弾正が日本へ戻る旨を伝えてきた。

目の上のタンコブになってきた弾正に穏当かつ気兼ねなく消えて貰えはするが、最悪の場合は外交問題に発展しかねない提案に長官は苦い思いで協力を認め、保険としてメイジャーとヘスティアを付かせたのである。

メイジャーは元々、弾正が気に入らなかつた。

彼女は生まれも育ちも悪く、生活のために軍へと入り、作戦行動中に負傷して生死の境を彷徨いながらも、“G”によるサイボーグ化技術によって生き延びてきた、所謂社会の底辺層。

弾正のような特権階級——それも、自分と同じ所にまで堕ちていると言うのに、まだ勘違いを続けて見下してくる相手など、心底軽蔑する対象だ。

それでもなお今回の任務を受諾したのには訳がある。

弾正を殺せる機会があるかもしれない——からではない。彼女は強い闘争心を持ってこそいるが、軽蔑する対象を相手にする無駄が好きな性質ではなかつた。

最大の理由は、自身の隣で立っているヘスティアが任務に参加すると知つたからだ。

ヘスティアは敵に情けを掛けるような余分はないが、兵士の仮面を被つてもなお滲み出る人の良さがあり、仲間に対しては非常に面倒見が良い。

メイジャーも任務上で彼女に助けられた事は一度や二度ではなく、またサイボーグ化して戸惑う自分を気にかけてくれたヘスティアには恩義を感じていた。

(あんな夢見がちなクソみてえな親父の我儘に、恩人だけ付き合わせる訳にはいかねーよなあ……)

「……………はあ」

「失礼なやつちやなく。人の顔見て溜め息吐きおうて。お？　なんや、ウチの以前の顔みてぶつたまげるか？　ん？　お前よりも美人やぞ〜。」

「あー、はいはい。その持ちネタも飽きたつーんだよ。そういうの、写真の一つでも見せてから言ってくれや」

「うっさいわ！ 写真もデータも全部燃えたわダボがあ！ でも美人やっさんは本当やからな！ 信じてやあ!!」

「信じてる信じてる………しっかし、あのおっさん、此処で何するつもりだあ？」

メイジャーは弾正がどのような手段を用いるのか、耳にしていな
い。何かを言っていた気はするが、バカバカしくて聞いていなかった。

くると背後を振り返り、見上げたのはヨミハラの中でも一際大きい娼館だ。

弾正は数十分前に娼館の中へと入り、未だに出てきていない。

「ウチとノマドは表向きには敵対関係やからなあ。となると、手を組むにしても別の組織やろ。こつちも出せる戦力は少ない。現地調達は基本やがな」

「裏で何処と繋がってんのか、うちらも知らねーけどな。しかし、魔族と手を組むねえ。あのおっさん、日本を売るつもりかよ」

「まあ、日本が混乱すればするほどウチらが得する——つちゆうんは認めるが、それだけで済めばええけどなあ……」

メイジャーに続き、ヘスティアも背後を振り返って娼館を見上げる。

彼女には、まともな人体だった頃と変わらぬ視界がカメラアイを通じて送られてくる。それに加え、彼女の兵装に合わせていくつかの特殊モードが組み込まれていた。

その内の一つが温度の可視化モード。赤外線サーモグラフィとは異なり、金属の壁を隔てた向こう側ですら読み取れる最新式だ。

（地下に熱源あり。ついさつきまで燃えてたようやなあ。抗争でも

あつたんか。そんな連中と手を組んで大丈夫かいな、弾正のおつちやん。まあ、ウチらは危なくなったら在日米基地に逃げ込むけどなあ
（

二人と部下が見上げていた娼館は、名を「ドリーム」と呼ばれていた。

そう、小太郎が侵入した淫魔の巣窟だ。

淫魔王が待っていたのは、弾正の事であつたようだ。

未だ息を潜める淫魔と失脚したふうまの元当主。この二人が如何なる密約が交わされているかは兎も角として、小太郎にとつても、対魔忍にとつても、喜ばしくない事態である事だけは、間違いない。

若い紫の頭の中にはヤベーもんが埋め込まれている。でも桐生に知らせたらエライ事になる。苦労人ならどうする？　こうする！

「おはよう、小太兄」

「おう、おはようさん」

「寝れては、いるようだな。アレだけ取り乱していたのに大したものだ」

「その話はするんじゃないやねえ。やる事山積み過ぎて頭おかしくなりそうなのを、オレが苦労するという事実だけを切り離して、切り抜ける方法を考えてんだよ。またゲロ吐くぞ」

「……………」

淫魔の経営する娼館にして拠点「ドリーム」への潜入、平行世界・別次元の紫の救出、舞い戻ってきた弾正と一味との遭遇、ナディアとの接触と協力要請。

怒涛の一日から開けて翌日。

陽の光も差し込まない地の底にある廃娼館の内部で小太郎とゆきかぜ、凜子は朝の挨拶を交わした。

彼の表情は健康そのものであったが、目が死んでいる。

無茶苦茶な言動でもある。これから彼がやらねばならない事は山ほど存在しており、他人に投げられない部類も多く存在しているにも拘わらず、苦労するという事実だけを切り離して考えるなど、どういった思考作業なのか。

とは言え、肉体や能力面は兎も角として、精神面や思考面では人間から掛け離れている事は二人も重々承知している。戦闘時のみならず平時においても苦痛、快楽と言った肉体の反応を、精神と思考から完璧に排除できる彼の事、想像は付かないが不思議とは思えなかつ

た。

まるで、一族郎党が死に絶えたが如き重苦しい溜め息を吐く小太郎であったが、その足取りに変化はない。やるべき事はまだまだあるからだ。

三人が向かったのは、ナディアが異能によって快癒させたあちら側の紫の下。

常人ならば疾うの昔に廃人となっているレベルの投薬をされていたと言うのに、もう目を覚ましたらしい。

彼女の忍法は“不死覚醒”。頭部と心臓を同時に破壊されなければ決して死なない肉体と、副次的な効果として魔族にも劣らない驚異的な再生能力と身体能力を得る。

それらを鑑みても凄まじいの一言だ。肉体は兎も角、精神の立て直しを行ったのは、他ならぬ紫自身の力なのだから。

ゆきかぜと凜子があちら側の紫の回復に舌を巻き、此方側の紫も同様の凄まじさがあると知っている小太郎は呆れ返りながらも、彼女の休む部屋の前に辿り着き、扉をノックした。

「……………どうぞぞ」

やや力がないながらも、警戒心の消え去っていない許可の声に、三人は静かに部屋へと入った。

紫は状態のいいまま残っていたバスローブを身に纏い、ベッドの上で上体を起こしている。

声と同様に、視線にもあからさまな警戒の光を宿していたが、助けられたという事実があるためか、或いは自らの置かれた状態故にか、辛うじて敵へと向けるそれではなかったが、決して味方へと向けるそれでもない。

ゆきかぜと凜子は、僅かばかりに居心地が悪そうであった。それもそうだ。二人の知る紫は厳しくも優しい教師だった。そんな視線を向けられた事など一度たりとてなかつただろう。

「まずは、礼でも言った方がいいのか……？」

「いや、特にいらねー。こつちも成り行きと見捨てられない理由があっただけだからな」

「見た所、対魔忍であるようだが……何処の部隊だ。少なくとも、ふうま 小太郎という名に聞き覚えはない」

「まあ、話すなら、その辺りから説明していかなきゃならんか。オレ達は新設された独立遊撃部隊だ」

「独立、遊撃部隊……やはり、聞いた事がないな。本当に、対魔忍なのか？」

専用の装束を持つとしない小太郎は兎も角、ゆきかぜと凜子の装束と装備を見れば対魔忍と一目で分かる。

しかし、彼女の次元には「ふうま」という忍びの家系自体が存在していないのか。不信感は増していく。

尤も、小太郎にとっては僥倖だった。

此方側ではふうま一門は一度は対魔忍と日本政府に対して反旗を翻した裏切り者。あちら側でも似たような行為に出ているも不思議ではない。

明確に裏切り者として認識されるくらいならば、始めから存在しておらずに不信感を持たれる方がまだマシと言うものだ。

「そうだな。後ろの二人の名前なんだが、背の小さい方が水城 ゆきかぜ、刀を持っている方が秋山 凜子という」

「いや、待て……二人は私も知っている。だが、年が……」

「そうか。そつちの二人は幼いのか……ということは、次元だけじゃなく、時間も飛び越えているのかもしれないな。次元移動は時間軸の移動も含まれる」

「次元移動だと……？」

核心を突く一言に、小太郎は顎に手を当てながら考え始め、紫は驚きから目を丸くした。

ゆきかぜと凜子だけを連れてきたのには理由があった。

あちら側の紫がどのような立ち位置であったかは分からなかったが、対魔忍が存在している次元であるのなら、此方側とも共通項がそれなりに多いと判断していた。

そして、八津家は井河傘下の下忍の家系。井河家と同盟関係にある水城、秋山家の娘とも面識があつて当然だろう。事実、此方側の紫は、ゆきかぜと凜子が五車学園に入学する以前から知っている。

災禍と紅を連れてこなかったのは、自身と同じくふうま一門であり、紅に至つては対魔忍の宿敵であるブラックの娘。

あちら側に二人が存在し、なおかつ立ち位置が如何なるものかは分からなかったが、最悪の場合は敵対視されかねないが故の気遣いであつた。尤も、全ては杞憂に終わったが。

自らを取り巻く状況が複雑かつ抜き差しならないものであると気づき始めた紫の表情は険しくなっていく。

それを見抜いた小太郎は滔々と次元侵略者について語り始めた。前置きを用意したのは、次元侵略者の持つ技術、能力が凄まじい故に全くの法螺話として受け取られかねなかったからだ。

「——と言つた所だが……どうだ？ 信じるか？」

「俄に信じ難い……信じ難いが、貴様が語つた次元侵略者の特徴は確かに一致している。信じざるを得ない」

「話が早くて助かるよ。それで、どういう経緯であの淫魔どもに捕まっていたんだ？」

殊の外、あつさり和小太郎の言葉を信じた紫は、苦々しい表情で語り始める。

元々、紫は対魔忍内部の失踪者に関して調べていたらしい。

奇妙だったのは、対魔忍を抜けようとしたにせよ、何らかの組織によつて拉致されたにせよ、証拠や理由というものが存在せず、失踪者も性別、年齢にも統一性というものがなかった事か。

手掛かり一つない状態では紫も調査のしようがない。其処で、失踪

者それぞれが最後に目撃された地点に何かが残されていないかを探るべく、虱潰しに回っていたところ、奴にであった。

始めの内は親切に話し掛けてきたようではあるが、警戒心の強い紫が人型の頭足類といった見た目の次元侵略者を信用する筈もなく、すぐさま戦闘に発展した。

其処で次元侵略者は脳改造でも施したのか、はたまた洗脳でもしたのか、失踪した対魔忍を使って紫を追い詰めようとしたが、結果は惨敗。

元々、紫の戦闘能力は群を抜いている。並の対魔忍が何人集まろうが、剛力無双の前には分が悪い。

焦った次元侵略者が何事か呪文を呟くと、周囲の景色が歪んでいき、気がつけばこのヨミハラへと転移していたようだ。そして、紫が状況を正しく認識するよりも早く、淫魔に囲まれてしまったようだ。

「手掛かりなし、か。残念……まあ、余り期待はしていなかったが」

「……………助けて貰った上で、このような事を聞くのは心苦しいが、私が元居た次元に戻る手立ては…………」

「今の所、オレが思いつくのは三つだな。但し、どれも可能性は低い」「詳しく聞かせてくれ」

「一つは、米連で研究されているらしい魔界への門を開く技術を利用して次元間を移動する事だが、この技術自体まだまだ未完成で安定もしてなけりゃ、これに反対している部門や組織も多い。何より、元々お前の居た次元の座標が分からん以上は現実的じゃない」

「……………もう一つは、私、か」

「そ。空遁の術は空間を操る。極めれば次元移動も可能になるかもしれないが、それは十年二十年先の話だ。それに、これも米連の研究と一緒に次元の次元の座標が分からん以上は期待薄だわな」

「ならば、最後の一つは次元侵略者を捕まえる、か?」

「ま、それが一番安定して帰れる方法だろうよ。次元移動に関しては奴等が抜きん出ているのは事実だ。現実性も安定性もベストだ。但し……………」

「奴等の目的が分からん以上は、捕まえようにも居場所を掴めない、か」

「目的はこつち側の侵略だろうがね。ただ、やり方と何処で始めるかが分からん以上は同じことだ」

冷静かつ冷徹に、自分の知りうる範囲の可能性を提示する。だが、どれもこれも可能性がある、というだけの話であつて現実的とは言い難い。

見る間に紫の表情は蒼褪め、沈痛な面持ちとなつていく。己の愛した者にはもう二度と会えず、生まれ育つた土地へと帰れない。

如何に此方側がよく似た世界であらうとも、決して同じではない。いや、似ている分だけより郷愁の念を刺激される事は間違いない。それは、どれだけの苦痛と懊悩を湧き起こすのか想像もできない。

ゆきかぜも凜子も掛ける言葉が見つからない。自分がその境遇に置かれた時に、どうなつてしまうのか全く想像できなかったのだ。

そんな中、小太郎だけは顔色一つ変えていない。彼だけは、どんな世界に叩き落とされようが、変わらずに生きていくだけの恥知らずさと強かたさを持つていたからだろうか。

「其処で、オレから一つ提案がある。オレ個人の護衛にならないか？見返りとして、こつちで生活していく上で必要なものを全て用意する」

「……………随分とお優しい事だな」

「信用できないか？ まあ、当然だな。とは言え、こつちとしてもこのまま放置は好ましくない。かと言って、タダ飯食わせてやるほど慈善家でもない。ギブアンドテイクなら、オレの妥協点としては上々だ」
「成程、お前のような奴に優しくされても気持ちが悪いからな。その提案、乗らせて貰おう」

彼にしては随分と甘い提案であるが、それも無理はない。

このまま紫を放り出せばどうなる事か。ただ野垂れ死んでくれる

ならばまだいい。元々、別次元の存在だ。死んだ所で痛くも痒くもない。

問題は淫魔がそうしたように、この紫が対魔忍と敵対している組織の手に堕ちた場合。

とんでもなく強く死に難い対魔忍が敵に寝返るだけで悪夢的だと言うのに、その上、それが紫だと言うのが最悪だ。

使い方によっては、此方側の紫に罪を被せる事も可能だろう。何せ、DNAやら個人を示す全てが同一なだから。アサギの側近である紫が動けなくなれば、ただでさえ人手不足でガタガタの組織構造が完全に崩壊しかねない。

その上、紫の肉体は非常に特殊だ。あの桐生が目を付けるほどである。

米連に彼女が回収されようものならばどうなる事か。単なる洗脳、改造程度であればマシな方。もし万が一、不死の秘密が暴かれた上でクローニングで量産されて不死の軍勢が完成、などという事態に発展すれば目も当てられない。世界のパワーバランスが完全に狂う。

ならばいつそ、自身が不利益を被ったとしても監視と保護を兼ねて自分の手許に置いておいた方がまだマシである。

その辺りに関しては紫自身も気づいていたのであろうが、常に負の感情が浮かんでいた紫の顔が、明るく綻んでいた。見知っているようであるで知りもしない世界を孤独に彷徨わずに住む安堵があったのであろう。

彼女の表情の好ましい変化に、ゆきかぜと凜子もほつと息を吐いた。

自分達の知る紫とは別人とは言え、顔と性格が似ているだけでも同情や共感してしまうのが人間という生き物なのだから。

ベッドの横に立つ小太郎も珍しく笑みを浮かべ、手を差し出す。

その意味を察した紫は、呆れたような笑みを刻みながら、その手を取った。

「……………っ?!」

ある意味で、美しい光景であったろう。

何せ、異常な偏執狂と堅物の少女が手を取り合ったのだ。だが、それも其処までであった。

——小太郎が紫の視界の外側から、新たに調達したS&M 500ESで彼女の頭部目掛けて引き金を引いたのだ。

如何に強靱な肉体を持つ紫と言えど、無防備な状態で、500S&Wマグナム弾を放たれば為す術はない。何せ、一般市場で出回っている拳銃弾の中では最強の威力を誇る代物だ。

・44マグナムは勿論の事、454カスール弾や、50AE弾すらも凌ぐ威力を生み出す弾丸は紫の鼻から上を全て吹き飛ばし、脳漿と頭蓋をベッドや壁、小太郎の顔面にぶち撒けさせた。

ゆきかぜと凜子は驚愕と疑問から声も出す事も、指一本も動かす事も出来ずに居た。

当然だ。如何に小太郎とは言え、こんな凶行に及ぶなど想像すらしていなかった。

確かに、死んでくれた方が余計な苦勞を背負わずに済むだろうが、いくらなんでもこれは二人の許容範囲を越えている。

「なっ——何をしているんだお前はっ!!」

「——小太兄、説明して」

気が狂ったとしか思えない小太郎の行動に、硬直から開放された凜子は声を荒げながら、愛刀の石切兼光に手を掛けた。

対し、ゆきかぜは酷く静かな口調で告げていたが、周囲では放電現象による火花が散っている。

どちらも、小太郎の返答次第では殺害も辞さないだろう。

どれだけ愛した相手であろうが、許してはならない行為がある事を知っている。愛しているからこそ、手に掛けねばならない場合もあ

る。

何よりも、小太郎は彼女達と交わした“私達の好きになった小太郎でいる”という約束を一方的に破ったようなものだ。殺されたとしても文句の言える立場ではない。

「待て待て、これは治療だ。摘出手術」

「言うに事欠いて、どんな戯言だ、それは！」

「だから、イブだよ。コイツの頭ん中にはイブが埋め込まれてるの忘れたか？」

二人が本気である、と察した小太郎はM500ESを投げ捨て、血と脳漿で塗れた顔を拭いながら弁明する。

その言葉に、二人はあ、と気の抜けた声を漏らし、その様子に取り敢えず殺される心配はなくなったと小太郎は息を吐いた。

娼館ドリームで発見したイブは個数から使用された痕跡があった。あの場において使用される人間なぞ、紫を置いて他にはいない。

そして、イブの効果は現状不明。何時までも頭の中に埋め込まれていては、紫一人が苦しむならまだいいが、部隊が崩壊するような結果を招けば目も当てられない。

「だ、だがな、いくらなんでもこれは……この街の魔科医を捕らえてくるとか、他に何かあっただろう！」

「魔科医なんぞ信用できるか。桐生ですらアレだぞ。裏切るに決まってるんだろ。どうせ頭を吹っ飛ばしたくらいじゃ死なねーんだ、いいじゃん」

「いいじゃん、って、お前と言う奴はあ……！」

全くというほど悪びれる様子すら見せない小太郎に、凜子は怒りの振り下ろしどころを見失っていた。

小太郎の判断は正しい。

その経緯——不知火にも使われようとしていた事を鑑みれば、イブ

が人の人格に何らかの影響を与える洗脳装置と見るのが妥当だろう。
ヨミハラの魔科医が信用できないというのも頷ける。魔科医など、
人格に問題があるが故に人倫に悖る魔界医療の道を志した者が大半
なのだから。

そして、紫は頭部と心臓を同時に破壊されなければ決して死なな
い。事実、頭部を失った状態であるにも拘わらず、既に再生が始まっ
ている。

確かに、イブの摘出に関して言えば、紫という前提が必要であるが、
最短最速かつ最も楽な手段である事は疑いようはない。

「小太兄、どうせだったら死んでくれてもいいんだけどなあ、って思っ
てたでしょ?」

「さあーて、何の事やら」

「思ってたでしょ?」

「知らんなあ」

「思ってたよね?」

「随分、噛み付いてくるじゃないか、ゆきかぜ。まあ、当然だけど」

「じゃあ、認めるんだ。ふうん」

「アレ? ゆきかぜさん? どうしたの? すげーバチバチ言ってる
よ? 目がすげえ怖いんだけど? ちよちよちよつ!」

「小太兄みたいな外道な事すぐにやっちゃう人にはお仕置き調教が必要だよ
ねえ。反省して」

「あががががががああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああつつつ!!!」

娼館の一室に、凄まじい電撃と悲鳴が連続した。

普段、小太郎を全肯定するゆきかぜであるが、小太郎が越えてはな
らぬ一線を越えた時に最も怒りを露わにするのは彼女だ。

正義感故ではなく、小太郎が後戻りできないところに行ってしまう
のを止めるためだ。随分と重い愛であるが、紫という少女の安堵を

踏み躪り、ゆきかぜ達の愛と約束を軽んじた彼には当然の罰であったろう。

苦勞人に罪悪感とかねーのかよ。ねーみたいだよ
……

「身体の方はどうだ？」

「問題ない。昨日は頭痛も酷かったが、今日は調子が良いくらいだ」
（頭痛ねえ……イブを無理に埋め込まれた後遺症か、それともイブ自体の効果なのか。そっちの方は桐生ちゃんに解析させにや分らんか）

「ところで、あの後すぐに気を失ってしまったようだが……」
「疲れもある中で気が緩んだからだろ。気にするな」

イブ摘出のために紫の頭部を吹っ飛ばした次の日、小太郎と紫は娼館の廊下を進んでいた。

不死覚醒の恐るべき再生能力によって、紫は既に完治している。

数週間に渡る調教と拘束によって体力的に多少は衰えているものの、これならば戦闘にも耐えうるだろう。

顔色も随分と血色が良い。イブが如何なる効果を持つかは未だに不明であるが、呪縛からは解き放たれたと見て間違いない。

だが、頭部を吹き飛ばされた事実に関しては、全く記憶にないようだ。

気が緩んだところを狙った視界の外からの完璧な不意打ち。既に再生したとは言え、脳の大部分を一時は失っているのだ。記憶に混乱が生まれても無理はなく、混乱がなかったとしても部屋を綺麗サッパリ片付けて、凜子とゆきかぜの口に戸板を立ててしまえば、紫には何があったのかなど分かうはずもない。

そして、やらかした張本人はこのすつとぼけっぷりである。これなら目撃者であるゆきかぜや凜子の方がまだ動揺が見られるであろう。

『吐き気を催す邪悪とはっ！ なにも知らぬ無知なる者を利用する事だ……!! 自分の利益だけのために利用する事だ……救助者がなにも知らぬ『要救助者』を!! てめーだけの都合でッ！ ゆるさねえッ！』

と、対魔忍の方々ならば憤慨する事請け合いの所業であるが、正義も誇りもありやしな小太郎には当然の行為なのであった。反省も後悔もあるわきやない。寧ろ、こう返す。

『あなた……『覚悟して来てる人』………ですよね。人を「始末」しようとするって事は逆に「始末」されるかもしれないという危険を常に『覚悟して来ている人』ってわけですよね……』

小太郎には、やると言おうが言うまいがやる『スゴ味』があるッ!! 日本を守るという名目の下、散々人魔問わずに殺し捲っている。誰に頭吹っ飛ばされても文句は言えまい。

普通は敵にやられるのだろうが、味方にやられる事もあるだろう。やった者が違うだけで結果は同じ。死んでもねーし、問題ないね! という屁理屈だ。

『撃っていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ!』の逆を行く『オレは撃たれる覚悟をしているから誰を撃ってもいいんだよね!』という謎理論であった。なお、死ぬほど苦勞する覚悟もしているようであるが、それでも喚き散らすのは嫌なもんは嫌である様子。

何はともあれ、こうして紫は小太郎の個人的な護衛として独立遊撃部隊に組み込まれる流れとなった。

「集まってるな」

今や独立遊撃部隊のミーティングルームと化した待合室には、部隊のメンバーに加え、この廃娼館の主クラクル、魔界の踊り子ナディア

の姿があつた。

紫への仕打ちを知っているゆきかぜと凜子は、何とも言えない表情で二人を迎えた。

凜子は何も知らない気づいていない紫に同情を、小太郎には苦言を呈したいが今それをやっつては紫が暴走するのが目に見えているので出来ない苦惱で歪んでいる。

対し、ゆきかぜは――

（今はまだ小太兄のやった事は明かせない。紫さんが怒り狂うつて言うのもあるけど、小太兄の好感度が二度と上がらなくなる。明かすのは紫さんの好感度が上がりきってから……それまでは、私が小太兄に“お願いする”時のネタにする……！）

着々と小太郎ハーレムへの布石を打っていた。別次元の紫なのだが、加えていいのだろうか。

どうしてこう彼女がハーレムを作りたがると言えば、小太郎を頂点としたふうま一門が再興した際の絶対的で揺るがない戦力とするためであると同時に、小太郎の身を縛り付けるためである。

災禍や天音への小太郎の対応を見れば分かるが、彼は身内と認識した者には非常に甘い。

驚くような狂犬振りと暴走癖を併せ持つ天音ですら、頭を抱えながらも有効に扱って巧く手綱を握り、寵愛すら向けている節すらある。これに身内という認識がなければ、疾うの昔に切っているであろう。

彼自身の女好きという気質に加え、母親からの教育による賜物である。ふうまのみならず、対魔忍と政府に対してすら反旗を翻した骸佐一党ですら、何とか引き戻せないかと画策中だ。

尤も骸佐の場合は、骸佐の持つ面倒見の良さとカリスマからふうま一門再興に当たって欠かせない存在であり、彼の目的を察しているが故、彼を完全に切ってしまうえば再興計画に数年の遅れが発生するからというレアケースなのだ。

要は、利益ではなく互いに情で縛り合う裏切るに裏切れない、逃げ

るに逃げられない一枚岩の群れになる事がゆきかぜの狙いなのだ。

派閥争いや身内のゴタゴタなど経験した事のない彼女であるが、これまでの小太郎の行動や言動から本能的に勢力というものは如何に巨大となっても一枚岩である事が望ましいと本能的に察していた。

ゆきかぜ的には、どうせ苦労するし地獄に堕ちるんだから、道連れは多い方がいいよね。大丈夫、小太兄なら私達を幸せに出来るから♪ という感覚である。重い、愛が重すぎる。愛怖いなあ！

小太郎の所業やらゆきかぜの思惑を何となく察している災禍は微妙な表情だ。だが、これを意外でも何でもなくスルー。この人も何のかんのでゆきかぜ寄りの人種であった。

クールなしつかり者に見えて、実際の所は世間知らずのポンコツ紅は何も知らないし気づいてもおらず、ほぼ飼い猫と化したクラクルと戯れている。君だけが独立遊撃部隊の癒やしだ。

「じゃあ明日の作戦内容をもう一度確認するぞ」

水城 不知火の救出とヨミハラからの撤退は明日決行される。

別次元の紫の救出、弾正の帰国、ナディアとの合流と当初の予定になかったイベント目白押しであったが、元々の予定に狂いはなかった。

救出作戦もこれまでとは異なり、隠密・潜入から強襲・戦闘へと切り替わり、内容も至極単純。

娼館『アンダーエデン』への正面玄関から堂々と仕掛ける。激しい抵抗が予想されるが、戦闘要員である紅、ゆきかぜ、凜子の次世代のEースであれば何の問題もない。

その間に、小太郎は先日確認した不知火が監禁されている部屋へと向かい、これを確保。

最大の懸念点は、淫魔王と治安維持部隊の動き。

奴は未だに、娼館『ドリーム』を襲ったのが対魔忍であるとは断定しきれていない。そんな証拠は残して来なかった。

寧ろ、墮落させて引き入れようとした紫を救出した事によって淫魔

側の目はそちらにばかり向かっており、本来の目的である「イブ」は研究所の爆破も相俟って忘れられているだろう。

だが、アンダーエデンへの強襲に時間を割り裂きすぎれば、イブと不知火へと発想が繋がりがかねない。救援を出される恐れがある。またヨミハラの治安維持部隊も、対魔忍の存在を察知すれば黙ってはいまい。

故に、全員での強襲は行わない。

不知火救出後、凜子の空間跳躍によって一時、クラクルの巣へと撤退。その後、万全を期して地上への空間跳躍を再度行う予定である。

「——が、一っだけ問題点があつてな。撤退のために災禍に陽動を仕込ませといたんだが、達成率は半分ほどだ」

「弾正のせいかな」

「その通り、お陰さんでオレと災禍は全く動けなくなっちゃった」

今、ヨミハラの何処に弾正とその手の者が潜んでいるのか全く分からない。

鉢合わせるだけでもよろしくない事態だと言うのに、相手側には小太郎ですら知らない存在が居る。これで小太郎が災禍が弾正に捕まってしまうば、更なる救出作戦を執行しなければならぬ。

災禍は忌々しげに口元を歪め、舌打ちをした。その表情には彼女の心の中が分かっている小太郎以外の全員がドン引き状態であった。

彼女の心境は兎も角として、小太郎の消極策は正解と言えよう。

まだ彼等には知り得ぬ事であるが、淫魔王と弾正は手を組んでいる。小太郎が災禍、紅のいづれかが弾正の手に落ちれば、そのまま芋蔓式で不知火救出まで露見しかねない。

臆病とさえ言える慎重な姿勢は、間違いなく独立遊撃部隊を助けているのは事実であった。

「なら、私達の出番だよーね！」

「馬鹿言うな。お前等は名前も顔も売れ過ぎてるし、そういうの出来

ねーだろ」

「まあ、確かに……では、陽動はなしか？」

「いや、やる。その方が成功率が跳ね上がるからな」

「では、紫せん——じゃなかった。紫さんが……」

「う、私か……そういうのは正直、苦手なんだが……」

「やらせる訳ねーだろ。コイツもお前等と一緒に前線でゴリラさせるのが最適の人材だぞ」

「だ、誰がゴリラだあつ！」

年頃の近い四人が候補に上がったかに思われたが、案の定の却下。そもそも、小太郎は凜子はサポート役と認めているが、他の三人に対しては純戦闘要員としか見做していない。

紅にせよ、ゆきかぜにせよ、凜子にせよ、名前も顔も闇の住人に知られすぎている。同様の理由で紫も却下。此方側の紫に比べて年若い、他人の空似とは誰も思ってはくれまい。彼女達をヨミハラでの単独行動させるなど、襲つて下さいと言っているようなものだ。

かと言つて、変装をさせ、複数人で行動させては極秘裏に、とは行かなくなる。陽動に用いる仕掛け自体は簡単であり、露見した場合は対処は難しくないために空振りに終わる可能性が高い。

弾正来襲が読めていれば、小太郎と懇意かつ裏工作に長けた対魔忍に声を掛けていたが、神ならぬ身では未来の事など分かるう筈もない。

そもそも小太郎の感覚では、弾正がかつての地位と名誉を取り戻す事など有り得ず、本気でどの面下げて弾正が戻ってきたのか全くもって理解できない。これに備えておくなど無理がある。

「と言うわけで、働いて貰うぞクラクル、ナディア」

「……………え？」

「ぐるる、ゴロゴロ——ニヤ？」

身体を癒やした時には酷い状態だったと言うのにたったの二日で

ピンシヤンしている紫に若干引いていたナディア。

紅の膝に寝そべって喉を撫でて貰い、ゴロゴロと上機嫌で喉を鳴らしていたクラクル。

二人は同時に顔を上げた。正に寝耳に水と言った感じである。

だが、そこはそれ。ナディアはこれから苦勞を掛ける同盟相手からの願いという事で、ドンドンやる気が漲っていく。性格からも分かる通り、善良で真面目な彼女らしい反応だ。

対し、クラクルは死ぬほど嫌そうな顔をしている。彼女の野生に近く本能に寄った価値観であつてすら、小太郎の外道行為はNGらしい。

「分かつたわ、任せてちょうだい！ 頑張るわ！」

(無知と言うのは時として哀れに映るな……)

ぐつと顔の前で両拳を握り、意気込みを示すナディアに、小太郎も思わずニツコリ。人はこれを暗黒微笑と呼びます。

災禍は小太郎に外道行為の片棒を担がさせる事が確定したナディアに憐れみを向ける。側近である災禍ですらこれである。この場に居る者で、誰も小太郎が真つ当な方法を用いるとは思っていないのは確定的に明らかだ。

そもそも陽動は他者の目を引き付け、本来の目的から目を離させる事が目的。出来るだけで派手で残忍である方が、より長い時間本来の目的から目を離させられるだろう。

つまり、純粹無垢なナディアの両手は真つ赤な血で染まるのだ。これは酷い。

が、今後は為政者として望むと望まざるに拘わらず、少なからず血で染めなければならぬ行為に手を出さなければならぬ。

小太郎としてはその練習とでも思えばいい、なあにこの街に善人とかいないし、死んで当然の連中ばかりだから罪悪感とか要らないよ、何なら弾正が巻き込まれて死んでくれてもいい、くらいの感覚だ。ナディアに対しても実の父親に対してもひでえの一言である。

「え〜〜つ、話が違うニヤ。ボクは此処を貸してあげるだけでゴホンが貰える話だったニヤ」

「うーん、そうだねえ。そうだよねえ。でも、もう状況は動いてるんだよねえ」

「ニヤ？ どういうことかニヤ？」

「俺等に手を貸してたって時点で、もう知りません、関係ありませんは効かねえって話だよお」

明日、小太郎達は盛大なパーティーを開く。対魔忍主催の、だ。

そうなれば、事が終わった後にヨミハラではやらかした小太郎達について、被害を被った全ての下衆共によつて調査が行われるのは間違いない。

無論、何処に潜んでいたのかも探るだろうし、ヨミハラに協力者が居たのかも探るだろう。いずれはクラクルの存在と単に目を付け、辿り着く者も出てくる筈だ。

そうなった時、白を切ろうがすつとぼけようが、そんな行為は通用しない。相手はどんな手段を使ってもクラクルを捕らえるだろうし、どんな手段を使っても情報を絞ろうとしてくる。

並の連中ではクラクルをどうこう出来よう筈もないが、それは少数であった場合のみ。

彼女に多額の懸賞金でも掛けられれば、ヨミハラ全体がクラクルを捕らえようと躍起になるであろう。

予測され得る未来を滔々と語る小太郎の表情は、正に契約を迫る悪魔のそれである。

いや、少なくとも物語の上での悪魔は基本的に契約に対して誠実な分だけマシだ。元々、そういう機能しか持たぬ故に、逆に人間にやり込められてしまう場合も多々ある。

そう考えれば、確定した未来ではなく、あくまでも予測され得る未来でクラクルを言いくるめようとしている辺り、某インキュベーターと同じ手法だ。機械的なアレよりも悪意でやってる辺り、質が悪い。

「協力するつて道以外、お前にはないんだよなあ。クラクルくん、クラクルくん！」

「う、うう、どうしてこうなったニヤ……」

「運が悪かったねえ。でもねえ、もう俺達は一蓮托生の身。これからは三食お魚食べられるよお。頑張れば頑張る分だけ報酬を上げちゃうよお」

(…………アレ？　もしかして、小太郎に付いていった方が、色々お得かニヤ?)

が、この飴と鞭である。

先に落とせるだけ落としておいて、後から上げていくスタンス。クラクルのように物事をよく考えない者には効果的であった。

クラクルを連れて帰るといふ彼の判断は、ほぼヤケクソ気味だ。

ナディアという超弩級の厄介事はどうしても連れて帰らねばならず、アサギは兎も角として、他の当主連中や彼の足を引っ張りたくて仕方がない老害どもを口先三寸で丸め込まねばならない仕事がつている。

「魔界の踊り子」などと言うビッグネームに比べれば、強いは強いがほぼ無名のクラクルが加わった所で何の問題もない。

また比較的善良な二人を連れ帰る事は対魔忍の意識改革に繋がるだろう。

今現在、対魔忍内部で蔓延っている魔族Ⅱ悪という凶式を、油断はならないが利用できる存在、に変えていきたい。

人間がそうであるように、魔族にも善良または有用な者も確実に存在している。これを積極的に利用していく必要性は、今後必ず生まれてくる。

元より、対魔忍は日本という小さい国の一組織に過ぎず、自衛軍と手を組んだとしても首が回らなくなる可能性は非常に高い。その時には、魔族だろうが米連だろうが利用できるものは何であれ利用せねばなるまい。

そのテストケース、サンプルケースとして、この二人は非常に優秀と言えよう。

ナディアは必要に迫られなければ他者を害そうなどとは思わないし、クラクルも積極的に他者を殺そうとはしないのだから。性格も素直で善良、扱いやすい事この上ない。

懸念があるとすれば、対魔忍側が二人を一方的に敵視し、手を出そうとする場合。

だが、クラクルの強さは一部の上忍が対抗できるかと言った所。その野生から敵意を持って近づいてくる勝てない相手を取る行動は逃走の選択肢しか取らない。

ナディアに至っては、その噂からどうしようなどという気にもならないだろう。彼女が本気になったら、アサギでも勝てるかどうかと言ったレベルである。

集団で困んでどうにかしようとするのなら、その前段階で必ず小太郎が察知できる。

各家系、各部署の中には口が固い上に現在対魔忍と日本の置かれている現状を正確に把握している者とも個人的な繋がりがあるからだ。

「それで、私達は何をすればいいのかしら？」

「何、難しくはない。二人で手分けして、これを仕掛けてきてくれればいいだけさ」

「これ、何ニヤ……？」

「と言うか、私達も陽動がどのような内容なのか聞いていないのだが」

机の上に置かれた見た事のない物体に、ナディアとクラクルは首を傾げた。

それを目にした凜子は嫌な予感をヒシヒシと感じながらも、そう問わずにはいられなかった。

陽動の内容を知っていたのは小太郎を除けば、直接動いていた災禍だけ。

ヨミハラの環境をある程度予測し、実際にこの地下都市の様子を目

にした小太郎が導き出した陽動の内容は、災禍以外の度肝を抜きながらも納得せざるを得ないものだった。

ただ――

(((((これもうヨミハラ滅びるんじゃない?))))))

(―――と言う顔をしているな)

「何を考えているニャーニャー!!」

「安心しろ。オレは此処のクズどもが二人死のうが二兆人死のうが知ったことじゃない」

「安心する要素が何一つないニャー! それ小太郎の気分の問題でしかないニャー!」

この街に嫌悪感を抱いている彼女達ですら、そう同情してしまうようなものだった。

恐るべし、ふうま 小太郎。彼の前では、クラクルですら常識人の枠組みに押し込まれてしまうのであった。

ヨミハラの住人に人権などない。ならば何人殺しても問題ないよね、とか気軽に言った上に実行しちゃうのが苦勞人

いつもと変わらぬ日常が過ぎていくヨミハラ。

道端や娼館で春を売る娼婦、男娼。露天で魔界製の物品を売り捌く商人。組織の命令で武器や麻薬の取引に勤しむマフィアの構成員。そして、全てを搾り取られて壊れながらもまだ死んでいない者達。

ヨミハラに住まう、或いは拠点とする者は、何一つ変わらぬ彼等自身の日常を——— 過ごしているつもりであった。

最悪とは常に突然にやってくる。

大型の旅客機が毎年何らかの原因によって墜落するように、誰も予測できないまま人々は巻き込まれ、多大な犠牲を生む。

ヨミハラと住人にとって今日がその日。平静であった筈の水面に一石が投じられるが如く——— しかしてその実態は、水面に重油を流し込んで火を付けるが如き、悪意に満ちたものだった。

ヨミハラの住人は最悪の予兆に誰も気づかない。重油を流し込んで火を付けようとしている者のやり方が巧い、というのものもあるが、それ以上に彼等は麻痺している。

常に危険と隣り合わせ。そんな場所で過ごしていれば、危険予知、危機回避能力は鋭敏になりそうなものだが、寧ろ逆に鈍化する。

どんな危険であっても、長く続けば日常になる。日常に対して警戒もクソもない。ただ、過ぎていく日常から与えられるものを享受するだけ。

地上では安全のため常に誰かが危険を探し、問題を提起して潰し込みを掛ける。しかし、此処は背徳の街。頭にあるのは自身の利益と快楽への追求だけ。他者への配慮、社会への貢献を失っているが故に、

人災は必ず起きる。

今日は、ヨミハラにとってそんな日になった。

「隊長、配置についた？」

『ああ、ついたぞ。好きにやれ』

娼館アンダーエデンの向かいに位置する建物の屋上に、三つの人影が立っていた。言わずもがな、紅、ゆきかぜ、凜子の三名である。

隊長——小太郎と口内の小型通信機で連絡を取り合ったゆきかぜは、紅、凜子と視線を交わすと頷きあって屋上から飛び降りた。

五mもの高さから音もなく、誰にも触れる事なく雑踏の中へと降り立ち、街への買い物へと繰り出すような気軽さで人と人との合間を縫って進んでいく。

その気軽さに、擦れ違ったヨミハラの住人達は僅かな違和感を覚えながらも、天敵そのものと言える対魔忍であるとすら気づいていないようであった。

「……………」

アンダーエデンの正面に立っていた用心棒の一人が、雑踏から現れた三人の姿に怪訝な表情を浮かべた。

街の権力者の一人であるリアルに手向かおうなどと言う者が居るなどと考えていなかったのだろう。況してや地の底に築かれたヨミハラは公権力の外に位置する街、対魔忍が仕掛けてくるなどは夢にも思わない。これまで、小太郎と災禍が自らの正体を晒さなかった隠密行動が生きている。

用心棒は元々傭兵。それなりの死線は潜っており、高い給金を受け取っているだけあって行動は早かった。

「た————対魔忍だっ!!」

「飛べよ、雷撃——!」

それでも一手遅れであった事は否めない。

胸元のマイクでアンダーエデン内部の仲間へと対魔忍の襲撃を伝えたが、次の瞬間には用心棒の胸元に拳大の穴が開いていた。

出血は皆無、衣服と傷は焼け焦げており、ゆきかぜによる雷撃弾が直撃したのだと嫌でも分かる。

既に命の炎が消えた用心棒の身体がどうと倒れ、放電音と対魔忍装束姿の少女達に視線が集まり、通りにはヨミハラの住人達の悲鳴が飛び交った。

続き、アサルトライフルや銃を手にした無数の用心棒達がアンダーエデンの扉を蹴破り、雪崩れ込むように姿を現す。

アンダーエデンの何処に潜んでいたのかというほどの人と魔の混成部隊。それでもなお、三人の表情は平静そのものだった。

そもそも、強襲の前に紅の風遁、凜子の視界跳躍の術によってアンダーエデンの戦力は把握している。それに加えて、小太郎が身分を偽って潜り込んだ際には内部構造まで詳らかにされていた。焦りや不安などあろう筈もない。

「——ふッ!!」

混成部隊を前にして、真っ先に踏み込んだのは紅だった。

人の領域を越えた身体能力は元より、彼女の忍法は最前線での殲滅戦において最も効果を発揮する。

銃から弾丸が放たれるよりも早く。携えた剣を抜き放つよりも早く。

紅はその邪眼で捕らえた「風の歪み」を捕らえ、二刀の小太刀で斬り裂いていた。

心願寺流・風陣斬。

真空の刃——いわゆるカマイタチを発生させる忍法と剣技の合わせ技。

小型の竜巻まで生み出す旋風陣に比べ、威力も範囲も小さいが、真

の利点は如何なる些細な「風の歪み」からも可能な手数多きにある。

「ひ——ぎゃああああああっ!!!」

腕を、脚を、首を、胴を、はたまた武器を。

混成部隊の先頭に立っていた者達は真空の刃で斬り刻まれ、ある者は絶命し、ある者は肉体の一部を失った。

紅の目に見えぬ攻撃に恐怖を増大させた混成部隊の動きが一瞬鈍る。

それを見逃す紅とゆきかぜではない。紅は逆手に握った小太刀二刀を振るいながら更に踏み込み、ゆきかぜは飛び膝を手近に居た敵の顔面に叩き込んで雷撃弾を見舞う。

二人と同じく近接戦闘を得意とする凜子は珍しく直接的な戦闘に参加していなかった。

彼女はアンダーエデンの戦闘には背を向け、通りの側を警戒していたからだ。

現状、最も警戒すべきは淫魔側の救援か、イングリッド率いる治安維持部隊による背後からの強襲だ。またアンダーエデンの外側に、伏兵を配置していないとも限らない。

そうなれば自然と挟み撃ちの形となる。たったの三人で包囲され、では如何ともし難い。故に、後詰めである彼女がそれを警戒するのは当然の流れであった。

やっている事自体に大きな変化はないが、三人の成長がよく分かる。

以前ならば、アンダーエデン内部の戦力を探ろうとしなかったであろうし、背後からの強襲も念頭に入れて行動などしなかつただろう。

良くも悪くもかつては自信に満ち溢れていたが、何事も行き過ぎれば破滅を呼び込むものだ。

そして、自信と警戒をバランスよく備えた精神へと成長させた張本

人はと言えば――

「おーやってるやってる。んじゃ、こっちも行きますかね」

――正面玄関の裏手側。不知火の監禁されている部屋に壁一枚隔てたところで待機していた。

ヨミハラに足を踏み入れる前に来ていた幾枚もの防御用プレート
の取り付けられたライダースーツ型の黒い対魔忍装束に、同色のフル
フェイスヘルメットを被っている。

ゆきかぜによって作戦開始の号砲が放たれると、小太郎はアンダー
エデンの壁を叩く。

すると、中から返答をするように同じく壁を叩く音が返ってきた。
それを確認すると、骸佐の反乱時に校長室へと突入した時と同じ指
向性プラスチック爆弾を仕掛け、壁に背を預けて起動させる。

ゆきかぜの雷撃によって爆発音は掻き消され、内部で気づいた者は
不知火以外には皆無であつたろう。

凜子の空間跳躍によって新たに取り寄せたUMP45を構え、監禁
部屋へと突入する。

「待ち侘びたわ。例のものは?」

「そいつは失礼。問題なく手に入れた。後は解析待ち」

「そう。では、後始末と脱出だけね」

「話が早くて助かるよ。お任せしますとも」

既に脱出の手筈を聞いていた不知火は、爆発の影響から逃れるため
に移動していたバスルームの脱衣所から現れる。

見れば、脱衣所に備え付けられた洗面台からは水が流れていた。彼
は身嗜みを整えていた筈もあるまいに、とは考えず、納得したように
頷いた。

『隊長、そちらにリアルが護衛二名を引き連れて向かっている。今、

視界跳躍の術で確認した』

「了解。オレは何もしなくてよさそうだがな」

不知火は近づいてくるリーアルの気配に察知していたのか、部屋の扉が見えるベッドに腰掛けていた。

アンダーエデンを襲撃されれば、リーアルが不知火確保に動くのは目に見えていた。

彼にとって不知火は組織内で更に上へと登るために必要な道具。それもつい先日、長く続いていた調教の成果が現れ始めた直後。逃げににしても、これだけは手元に残しておかねばなるまい。

尤も、不知火の水遁によって契約など強制力のない紙面上のものに過ぎず、彼を守るものは二名の護衛だけ状態だ。鴨以外の何物でもない。

小太郎としても、己の顔を知っているリーアルを生かしておく訳にもいかず、不知火の心情を慮ってみても止める理由はない。

アサギに並び称される対魔忍の凍てついた表情に背筋が寒くなる思いをしながらも、リラックスした様子で壁に背中を預けてその時を待つ。

「クソ忌々しい対魔忍どもがッ!!」

口汚い罵声を唾と共に飛ばしながら、扉の鍵を開けてリーアルが部屋の中に護衛と共に飛び込んでくる。

その場を動いていなかった不知火の姿を確認すると、一瞬安堵の笑みを浮かべて何事かを口にしようとしたが、部屋に穿たれた穴と壁に寄り掛かった正体不明の侵入者に愕然と目を見開いた。

驚愕から硬直したリーアルの指示を待たず、二人の護衛は胸元の拳銃に手を掛け、即座に侵入者を射殺しようとしたものの、引き金は永遠に引かれる事はなかった。

「が——ぼお……!?!」

「いば……いば……ッ」

「ぐっ——げぼぼぼっ……!!」

突如としてリアルと護衛から大量の水が溢れ出し、全員がその場に倒れ伏してのたうち回る。

護衛の手から取り零された拳銃を蹴り飛ばし、苦しみに歪む表情を眺めながら小太郎はわざとらしく十字を切った。

不知火は窄めた口を戻し、最早リアルには一瞥もくれずにベッドから立ち上がる。

水遁・天泣。

雲のない空から降る雨になぞらえてそう呼ばれる水遁使いの初歩とも呼べる忍法。

本来は、不意を突いて無音の水針を敵の急所を狙い撃つ暗殺術であるが、優れた水遁使いである不知火が使えば殺傷能力は段違いであった。

水遁使いはその傾向として、熟達するほどに大量の水を生み出し、或るいは操作が可能となる。

彼女は可能な限り圧縮した水を針状にして肺へと打ち込んだ後に、圧縮を解く。するとどうなるか。突如として肺の内部を水で満たされ、地上で溺れてしまうのだ。

いくら呼吸をしようとしても、肺そのものが水で満たされれば呼吸も何もない。訪れるのは地獄の苦しみだ。

「エゲツないねえ」

「君ほどじゃないわ。独立遊撃部隊の隊長さん？」

無音かつノーモーションでこの殺傷力に、さしもの小太郎もヘルメットの下で苦笑を漏らす。

そんな彼の姿に不知火は嫌味の一つもくれてやるが、自覚しているのか気にも留めていないのか、肩をすくめるばかり。

どちらかと言えば、不知火は水遁を使った幻惑を得意とする対魔忍

であり、こうした直接攻撃に忍法を使用する事は少ない。

そんな彼女がこうした手段に出るのであれば、相当に腹に据えかねていたという事だ。彼女の身に襲いかかった陵辱と調教を思えば、当然だろう。

(な、何が……し、不知火かッ!? 不知火がやったのかッ!? 一体、どうやってッ! 契約もキメラもある抵抗など出来る筈がないっ!)
(だが、現実にこうなって……! 意識が遠のく、死ぬ? 死ぬのか?
この私がッ!? い、嫌だっ! 死にたくない死にたくないッ!
だ、誰か、私を助け……!)

喉を抑えて藻掻くりーアルはなおも不知火に手を伸ばすが、彼女は相変わらず視線を向けないまま部屋を出る。小太郎は倒れ伏した彼等に愛想良く手を振って後続いた。

部屋に残されたのは凄まじい形相のまま硬直した三つの水死体。
見るも無惨な姿ではあるが、欲望のまま快樂のまま他者を食い物にし、犠牲も顧みずに後悔すらなかった外道には、相応しい末路であつたろう。

「それで、陽動の方はどうなっているの?」

「それもそろそろかな?」

「——本当、始まったようね」

後始末を終えた二人は、アンダーエデンの廊下を進む。

客や娼婦、用心棒以外の従業員は我先にと逃げ惑っていたが、二人に出会すと腰を抜かしてへたり込む。

今の今まで囚われ抵抗できないと思いついていた不知火が、今は自由で動いている上に、襲撃を仕掛けてきた相手は対魔忍なのだ。殺されると思いついても仕方あるまい。

しかし、二人は無抵抗の相手まで殺して回る意味もないために、そのまま横を素通りしていく。

そうしている内に、ヨミハラ全体を揺るがす大きな爆発音が連続した。

小太郎が災禍、ナディア、クラクルにヨミハラの各所へと仕掛けさせた物体——何の変哲もない爆弾が起動したのである。

だが、疑問は残る。

小太郎が二人に持たせた爆弾の数は多かったが、手のひらに収まる大きさで、精々が一部の壁やパイプを破壊できる程度の威力しかない。それが今や、ヨミハラ全体を揺るがすほどの威力を發揮しているではないか。

ナディアとクラクルは小太郎の言われるがままそれを仕掛けたが、問題であったのは仕掛けた場所と物であった。

それは地上から誰の許可もなく、違法に引かれた都市ガスの配管。欲望の望むがままに引かれたガス管はヨミハラの天井部から壁を伝い、歓楽街の各建物へと引かれている。

但し、地上のようなガス会社がある訳もなく、無秩序かつ安全基準の一切を満たさずに引かれたものだ。当然、ガスが漏洩した際の警報システムや供給停止システムなどであろう筈もない。

つまり、一度でも火がついてしまえば、後は地上の供給停止システムが異常を感知するまで、ガスは炎を生み出し、爆発を繰り返している。

そもそもこんな地の底に地上と同じインフラを整えるのが土台無理な話。

地上の政府と企業はより安定し安全なガスの供給システムを確立するために、数千億もの金を掛けてきた。ノマドほどの企業であればそれだけの金は捻出できるだろうが、そのための技術者を探して雇うのは不可能だ。

ましてや本来であれば何十年と失敗と改善を繰り返して確立していくものを、見様見真似だけで何とかなる筈もない。無理を通すために犠牲にしたであろう安全性を、小太郎は狙ったのである。

「これで歓楽街の殆どは燃えるわね。爆発の影響で天井の岩盤も崩れ

るでしょうし、大惨事ね」

「地上に出る影響は一部地域のガス供給停止でしかねーからいいでしょ別に。水道電気が止まればヤバいところもあるけど、ガスが止まっても不便なだけだよ」

（私が言いたいのは、そういう事じゃないのだけれど……）

紛うことなき大量虐殺の引き金であったが、小太郎は何処吹く風。安全基準を満たさない場所で生活している方が悪い、くらいの心持ちな上に、今回はたまたま自分がやっただけで、いずれはこうなっていたと断言するだろう。

安全を鑑みない違法建築の繰り返しで、配線関係はそこかしこで漏電をしているであろうし、ガス管も無秩序故に劣化も早く点検も行われない。そんな環境であつては、こうした人災は付き物。彼は最後の引き金を引いただけで、元凶そのものはこの街と住人に他ならない。不知火はなおも何か言いたげだったが、一般人が死ぬ訳ではないのだから、と言葉を飲み込んだ。

「——お母さん！」

「っ……ゆきかぜ」

その時、廊下の角から無傷のゆきかぜが現れた。後に、紅と凜子が続く。

ゆきかぜは母親の姿を見つけるとその胸へと飛び込み、不知火は喜びと謝意に歪んだ顔で受け止める。

それ以上の会話は二人の間には発生しない。ただ、その両腕で相手の体温を確かめる事で、互いの無事を噛み締める。

ゆきかぜの胸には、何も告げずに父の仇を探しに行った怒りが。不知火の胸には、何も告げずに一人で全てを片付けようとした申し訳無さが。

それぞれ渦巻いてはいたものの、最早、それはどうでもいい。互いに無事であり、これからに希望が持てさえすれば、それだけで。

「いやに早いな。もう皆殺しにしたの？」

「そのお、そういう言い方は止めないか……？」

「でも皆殺しにしたんでしょ？」

「いや、一部は逃げていったが……」

「アンダーエデンの用心棒で残ってるのは死体だけで皆殺しなんだな？」

「……………」

「流石はルーキーども、これからも敵を皆殺しにしていこうな！」

そんな母子の感動の再会を尻目に、小太郎は紅と凜子にしつこく皆殺し皆殺し言っていた。

確かに、対魔忍であれば当然の行動なのだろうが、そう連呼されても困る。別に、二人だって楽しくて殺している訳ではないのだから。

此処に天音がいれば、はい！ 皆殺しにして参りました！ と目を輝かせて褒めてオーラを出して言ったであろうが、二人はその領域にはない。

「よし。凜子、空間跳躍で一時撤退。災禍達と合流して、こんなジメジメした地の底からおさらばだ」

「了解した。このまま巧く行けばいいがな」

「さて、それはどうかねえ。いくつか保険は掛けてあるが、こっちの都合の良いように働くとは限らねえからなあ。ま、人事を尽くして天命を待つつて奴さ」

苦勞人にだつて読みきれない心理もある。それが特に弩級の馬鹿だと尚の事。

彼——淫魔の王は不愉快の絶頂に居た。

無理もない。これまで順調に進んでいた筈の計画が大幅に狂い始めていたのだから。

数日前には目的も判然としない襲撃者に自らの拠点に捕らえられた八津 紫らしき人物を奪還された挙句、地下の研究施設を爆破された。

更に、米連への足掛かりとして選んだ弾正は、秘密裏になどという言葉を知らんとばかりに集団で拠点まで押し掛けてきた。

弾正としては自らの戦力を誇示したかったのだろうが、鬱陶しいにも程がある。

そもそも弾正の立場は既に調べが付いている。特務機関「G」の内部で権力を握り始めた弾正を危険視し、上層部が魔界技術獲得の期待と厄介払いを同時に行つたに過ぎない。

つまり、弾正も後がない状況なのだ。だと言うのに、あの男と来たら、さも自分に手を貸して当然だと言わんばかりの態度で接してきている。

ノマドが一枚岩でないにせよ、強大な組織力を有しているのは事実。淫魔の王にとつても厄介な存在である以上、弾正という戦力は壁として使うにはもってこいであるが、不愉快は不愉快である。

そして、今は——

「ひ、ぎゃあああっ!!」

「あ、熱い! ひ、火が、火があああああっ!!!」

燃え盛る街で木霊する人間どもの悲鳴が苛立ちを加速させる。

ただ死ぬのならまだいい。虫虻に等しい連中なぞ、いくら死んでも構いはしない。どうせ人間なぞ放っておいても数の増える家畜も同然だ。

この程度の惨劇など彼の身を害するには至らないが、耳障りな虫の鳴き声まではどうにもならない。

これでヨミハラの半分は間違いなく焼け落ちる。

それも構いはしない。己の部下は安全圏へと避難させているし、ノマド一強のヨミハラのパワーバランスを変えるいい機会とも言える。

だが、押し寄せる人の波は不快そのもの。

爆発と落石から逃れようとする人間どもは、彼にとつては羽虫に集られるようなもの。不快にもなろう。それでもなお混乱を極める街を進んでいたのには訳がある。

この騒動の影には、必ず奴がいる。

自身を虚仮にしたあの襲撃者が関わっている明確な証拠はなかったものの、確信に近いものがあつた。

手段が似通っているという些細な理由だけであつたが、それも仕方がない。あの男は何も証拠を残していかなかったのだから。

何か宛があつた訳でもない。あつたのは、傷つけられた矜持だけ。淫魔の王たるこの身が、唯の人間に虚仮にされるなど在于てはならぬ、と。

(リアルルのアンダーエデンに対魔忍の襲撃があつたのは既に情報が入っている。八津 紫を奪還された直後にこれであれば、奴は対魔忍の勢力であると考えるのが妥当。そして本当の目的が水城 不知火ならば、これは陽動。この混乱に紛れて逃げるつもりか。人が集中している歓楽街方面の出入り口はエレベーター、逃げるには時間が掛かる。住宅街の出入り口から逃げるが可能性が高い。何にせよ、此方に時間はそう残されていない)

「あつぐう……何処見てんのさ、こんな時につ!!」

「……………」

「ひいつ!？」

外界の情報を遮断し、燃える歓楽街を煤一つ被らずに抜け、淫魔の王は住宅地へと足を踏み入れた。

人々の悲鳴も遠いものとなり、ようやく思考が冷静になってきた時、身体に奔った衝撃に意識を現実に戻される。

見れば、長い栗色の髪にウェーブを掛け、赤いドレスを纏った娼婦がへたり込んでいた。

今一度湧き上がった怒りに抑えていた魔力でも滲み出たのか、娼婦は立ち上がる事もままならず、這いずるように逃げていく。

何なら殺してやっても良かったが、今は時間が何よりも惜しい。小さい舌打ちを漏らしながら再び歩み始める。

(爆発の起こった位置から隠しても隠しきれない魔力の残滓が続いている。此処まで存在を隠しきっている以上は対魔忍どもは大人数ではなく少人数で潜入していると見るべき。人手に困って魔族の傭兵とでも手を組んだようだが、仇となったな)

くつくつと歪んだ笑みを漏らしながら、淫魔の王はヨミハラを焼く炎を背に、住宅街を進む。

危機は、すぐ其処にまで迫っていた。

「燃くえろよ燃えろくよく、炎よ燃えろく。火くの粉を巻き上げ、ヨ

ミハラ燃くやせ」

「小太郎、キャンプファイヤーじゃないんだから……」

「似たようなもんだろ。燃えてるだけで特に意味はないって点じゃ」
（人が死んでるんだけどなあ……）

空間跳躍の術でアンダーエデンを離脱した五名は、拠点としていた
廃娼館の前でナディア、クラクルと合流していた。

歓楽街方面は今や灼熱で焼かれていた。

爆発が連続し、轟々と燃え盛る炎が上へ上へと伸びていく。爆発の
影響で天井の一部が崩落し、建物を押し潰す。真っ黒な煙が天井へと
立ち上り、ガス管を伝う爆発から逃れた換気機構は火災によって発生
した有毒ガスを地上へと排出しようとフル稼働していた。

炎による焼死。落石による圧死。有毒ガスに窒息死、或いは中毒
死。いずれにせよ、苦しみの伴う死である事には変わりはなく、ありと
あらゆる死で溢れかえる。

地の底に築かれた闇の住人達の楽園も、こうなっては地獄そのもの
だ。

だが、彼等はいずれ地獄に堕ちる。現世で一足早く地獄を味わった
として、何の不都合があるう事か。

己の狙い通りに引き起こされた大災害を眺めながら、特に感慨もな
さげにキャンプファイヤーに付き物のレクソングを歌う小太郎に、紅
は声を震わせながら苦言を呈するが正に暖簾に腕押し、糠に釘だ。

歓楽街から離れている住宅街の中とは言え、この呑気さである。こ
れならまだ爆笑でもしていた方がマシという無関心振りであった。

対し、合流したナディアとクラクルは蒼褪めた表情でカタカタして
いた。

一応、こうなる事は聞いてはいた。いたにはいたのだが、まさか此
処までの事態に発展するとは思いもしなかったのである。

人界に来たばかりのナディア、自由気儘に生きるだけのクラクル、
小太郎の行為がどれほど悪意に塗れ、どれほどの被害を生み出すの
か、正しく理解できていなかった。

其処にこの光景だ。自分が片棒を担いだ行為の重さに、呆然とするのも無理はなかった。

「しかし、これでは誘拐されてきた民間人も……」

「それはない。確認してあるからな。この街に何の罪もない人間は一人としていない。魔界から来た連中はどうか知らんが、そっちの保護は対魔忍の仕事じゃないのでノーカンで」

「馬鹿な。この規模だぞ？　いくらお前でも把握するのは不可能だろう？」

「そうでもないさ」

凜子は街の光景に一抹の不安を口にしたが、小太郎が奴隷商人として街を歩いた過程で得た情報に基づくと言葉に否定された。

リアルとの会話や生活の擬態のために立ち寄った酒場から聞こえてきた会話内容が元だが、ゾクトのように個人でかつ従業員用のルートを使う奴隷商人は珍しい。

考えてもみて欲しい。ゾクトの通ってきたヨミハラへの道程はほぼ丸一日歩き詰め。更に道中は危険な武装難民や魔界からやってきた奇怪で凶暴な生物で溢れ返っている。そんな道を、何も知らない一般人と共に歩けるだろうか。

結論から言えば、決して不可能ではないが労力もリスクも非常に高いものになる。奴隷が体力を使い過ぎないように気を使いつつ、奴隷の脱走と何者かの襲撃に注意しなければならないのだ。ゾクトのように、リアルという金払いのいい売り先を確保して置かなければ、とてもではないが払う労力と受け取る報酬が釣り合わない。

そのために、ヨミハラでは奴隷のオークションが定期的に開催される。

ノマドが主催しており、客側は参加費を、奴隷商人側は中抜きされるものの落札価格に近い金を手にする。奴隷達は物資搬入用のエレベーターで搬入できるために、商品の持ち込みは難しくない。またオークション形式であるが故に、娼館の経営側に直接売りに行くより

も高値が付く可能性が高く、値切られる恐れも未払いの心配もない。奴隷商人が利用するのは、ほぼ此方だ。より確実に、より安全に利益を得ようとするのなら、当然であろう。

そのオークションの開催日はまだ先だ。商品を持ち込むには早すぎる。

そして、奴隷商人の商品が、完全な『被害者』と呼べるかも疑問が浮かぶ。

商品は借金の返済に滞っていた債務者や、夜の街に繰り出して普通の範疇を越えた遊びに勤しんでいた者が大半だ。

かつては拉致、誘拐など暴力に物を言わせた手段が横行し、何の罪もない一般人が商品として並んでいたのも事実である。

しかし、山本長官率いる調査第三部と警察機関の連携強化、更にはアサギという存在と恐怖が、奴隷商人達に安易な方法での商品入荷を阻んでいるのが現状。

その罪の重さが、炎に焼かれるに足るかは別にして、このヨミハラに何の罪も存在しない人間はいないのだ。

「災禍さんと紫さんは？」

「偵察。そろそろ戻ってくるは——」

「——『眠れ』」

「うっ……あっ……い！」

唐突に、強力な魔力を帯びた言霊が放たれる。

一方的な命令に従うまま、小太郎を除く全員がその場に倒れ込み、寝息を立て始めた。

唯一、一度はその術中に嵌った事のある小太郎だけは、夢へと閉じ込める言葉の魔力に精神力だけで抗い、背後を振り返ってUMP45を構えた。

「先日は世話になったな。やはり、目的は水城 不知火だったか」
「さて、何の事やら」

立っていたのは言わずもがな。学生の姿に擬態した淫魔共の王。両腕を広げながら尊大に、冷静さを保ちながらも喜悦に歪んだ口元を隠しもせず近づいてきていた。

小太郎はヘルメットの下では冷や汗を浮かべながらも、声色には一切の動揺を出さなのまま、とぼけてみせたのは流石としか言いようがない。

しかし、それも其処まで。小太郎に残された手段など、そうして時間を稼ぎ、災禍と紫が戻ってくるまで耐える他はなかった。

淫魔の王は、既に見抜いており、ゆつたりと、されど警戒を緩めずに近づいていく。

一度はしてやられた。二度も三度も同じ手に引つ掛かるほど馬鹿ではない。そもそも出し抜けたのは、入念な準備と予想があったからであり、この不意打ちでは如何ともし難い。

「ぐっ——あ……ッ!？」

容赦も無ければ、油断もなかった。

パチンと指が鳴らされた瞬間に、小太郎の膝から下が切断される。

膨大な魔力を不可視の刃として形成して放つただけの事。魔術でも何でもない、単純な攻撃。人間の上位者として、格の違いを見せつける一撃であった。

どうと背中から地面に倒れると、其処でようやく傷口から大量の血が吹き出る。

何の処置もしなければ、待っているのは失血死。だが、小太郎はそのままの状態でUMP45の引き金を絞った。

「ふふ、ははははははッ、いいだろう。撃たせてやる。無意味と分かっているながら健気に抗う羽虫の努力だ。見ていて面白いぞ。好きなだけ撃つがいい」

「……………ッ!!」

放たれる弾丸は悉くが、目に見えない壁に阻まれるように淫魔の王の身体を逸れていく。

ギリ、と歯噛みしながらも諦めない虫虻の無駄な足掻きは、傷つけられた矜持を癒やしていくようだ。だが、それだけでは物足りない。障壁に阻まれる弾丸を眺めながら、思案する。

嘲笑ってやるだけでは物足りない。どうせなら、屈辱に塗れさせねば気が済まない。そんな事を考えながら、淫魔の王は邪悪極まる笑みを浮かべながら、ポツリと漏らす。

「見れば、貴様以外は女か。不知火はリアルにやらせるつもりだったが、こうなつては仕方あるまい。全員、余が直々に蕩け落としてやるのではないか」

「ああ、そうかい！ そりやどうも！」

焦りを募らせていく姿が心地良い。

他にも仲間が居るようであるが、何の問題もない。助けに入ったとして、障壁が存在している以上は如何なる攻撃をも通用しない。待っているのは、眠りこける女達と同じ結末でしかない。

眠りの世界へと誘えない男にしても、直に死ぬ。何なら、死にゆく男の横で、仲間を犯してやるのも一興だ。

無意味な攻撃を繰り返す無様な姿に深まる愉悦。そして、淫魔の王に相応しい吐き気を催すような淫気が溢れ出し、低い哄笑が闇の街の一角に響き渡ろうとしていた。

「……ふふ……ははは……」

「予定調和ですよー、っと。災禍、紫、御苦勞だったな」

「いえ、この程度は」

「私としては、バレるかどひやひやしたがな」

「流星は馬鹿だ。無駄に考えなしで大変宜しい」

虚ろな目で笑いながら立ち尽くす淫魔の王の顔をしげしげと覗き込みながら、小太郎は労いの言葉を掛けた。

何の事はない。淫魔の王は既に災禍の術中へと堕ちていたのである。その証拠に、邪眼の発動と集中によって一步も動けない彼女を紫が背負っている。

見れば、災禍は普段の対魔忍装束ではなく、胸元が大きく開いてストッキングを止めるガーターベルトが覗けるほど裾の短い赤いドレスを纏っていた。そう、淫魔の王が住宅街へと足を踏み入れた際にぶつかった、あの娼婦と同じ格好だ。

ナディアとクラクルに爆弾を設置させると決めた時点で強大過ぎる魔力を隠しきれないと予見していたし、隠密に慣れぬ二人の行動が誰かの目に止まったとしても不思議ではない。

相応の実力者であれば、誰かは分からないまでも後を追う事くらいは出来る。そして、大混乱の最中に後を追おうとするのは、引き起こされた大災害があくまでも陽動に過ぎないと分かっている者と、そして――

いずれにせよ、淫魔の王は必ず後を追ってくるかと分かっていたのだ。

闇の世界の住人は顔にクソを擦られるのを極端に嫌う。そうなれば他者に舐められるというのものもあるが、それ以上に彼等の一銭にもならないプライドが、そのままにいる事を許さない。

他の魔族に比べて智慧が回るのは認めるが、根本は何も変わらなない。稚拙な矜持を振り翳すためならば、利益も不利益も完全に度外視

して動き出すのだ。

だから、戦力として使える災禍と紫をアンダーエデンの襲撃に参加させなかった。

ナディアとクラクルの後を追ってきた者を迎え撃つ、或いは逸早く小太郎達に連絡を入れるために住宅街と歓楽街の堺の廃墟で偵察を行わせていたのである。

後は語るまでもない。既に淫魔の王が擬態した姿の似顔絵を見ていた災禍はその姿を見咎めると娼婦に扮して近寄り、その邪眼で絡め取ったのだった。

「でも、驚いたわ。貴方達の忍法、淫魔にも通用するのね」

「この手の精神に作用する異能に対抗する策は大きく分けて4つ。始めからガチガチに対策を固める、一度喰らって異能を破る術を見つける、精神の隙を潰して無効化させる、最初はなから使わせない。こんなもんだ。コイツ始めからなーんも対策してねーでやんの」

「だが、仮にも淫魔の王だろう？ 似たような能力を持つのなら耐性でもありそうなものだが……」

「かもなー。でも、自分が敵の術中に嵌まる、なんて考えてない奴じゃあ、いくら耐性があつても、ねえ？ 隙だらけの精神と頭の中に潜り込むなんざ、災禍にや朝飯前。耐性は何処まで言つても耐性であつて無効化とは違う」

淫魔の王を再び手玉に取りながらも喜びも怒りも見せず、呆れたまま人差し指でその額をコンコンと小突く。

彼は王である。

これまで部下を動かしてきたであろうし、自身が直接動く時は自身の圧倒的な優位性を保てる場合のみ。

相手を騙し、籠絡する狸のような存在であっても、狐と狸の騙し合いのような場に出てきた事など一度とてあるまい。彼がそんなものに参加する必要はなく、そもそもそれは部下の仕事だ。

だが、今回に限って彼は部下を使わなかった。傷つけられたプライ

ドは、自らの手で敵を倒す事では癒せない。部下を使つては意味がなく、自らの無能と瑕を晒す度胸など絶対者として君臨する彼には存在しない。

対し、小太郎は自らの無能を認める事に躊躇はない。人の上に立つ者ではあるが、絶対者である必要など何処にもないと知っており、無能であるという自覚を持つが故に、だからこそ油断なく物事を進められる。

無能な人間が頂点に立ちながらも、それが周囲を支えて好循環を引き起こした実例などいくらでもある。頂点に立つ者に必要なのは実務的な有能さではなく、人を繋ぎ止めておける信頼でしかないと割り切っている。

ないものねだりをする暇など彼の人生には存在せず、自分が出来ないのなら出来る奴を連れてくればいいと考えている。開き直りもまた幸福への道であり、苦難を乗り越える手段である。

淫魔の王は、能力的に他者を騙し操る術を持つとうとも、精神的には劣っており、立つべきスタートラインを間違えた。

相手を騙し操るのであれば、徹底して相手の心理を読み切る必要がある。それは種族の生まれ持つ能力如きでは補えない。彼にはそれが欠けていた。これは、それだけの話だ。

「コイツが、お父さんを……っ！」

「——小太郎くん。コイツは此処で始末する。異論はないわね？」

（不知火さん、キレてるキレてるう〜！ これならまだゆきかぜの方が冷静だよ！ ……まあ、気持ちは分からんでもないが、頭が回らないのも事実なんだよなあ）

父の仇を前にして、赫怒をそのまま齒軋りとして露わにするゆきかぜと暗い感情を瞳に浮かばせながらも表情も声もを凍てつかせたままの不知火の顔を見て、小太郎は心の中で嘆息した。

異論ならばあった。此処で始末すると更に面倒な事になりかねな

い。

あの生きたまま爆弾にしてやった淫魔の行動を見るに、淫魔共の忠誠心は最早、崇拜に近い。そんな彼等が忠誠心と崇拜の対象を失ったとなれば——暴走するのは目に見えている。

頭を失い、統率の取れていない状態で出来る事は散発的な襲撃程度であろうが、厄介なのは既に社会の中に淫魔共の手先が潜んでいる事だ。

賢い連中ならば、今は勝てぬと暴走する者達を切り捨てて地下へと潜る。そうなれば、後を追うのも一苦労だ。後顧の憂いが生まれかねない。

また組織内部のパワーバランスが変化し、淫魔の手先である人間が逆に淫魔共と保有技術を取り込むかもしれない。人間社会を裏から支配しようとは策してきた連中だ。元々、権力を有する者達を中心に取り込んできた事は間違いない。単純な戦力、武力での闘争ではなく、権力による闘争を仕掛けてくる可能性があるのだ。そうなれば、日本の一組織に過ぎない対魔忍は身動き一つ取れずに封殺される恐れもある。

(こういう暗躍する連中との戦いはいたちごとこになりかねないから一網打尽にしたいんだが——此処で見逃せつつつてもゆきかぜは兎も角、不知火さんとの関係に決定的な罅が入りかねないし。しゃーねーか。桐生ちゃんの寿命をドブに捨てさせながら「イブ」の解析を進めさせて、混乱してる内に全部調べて根っこまで焼き尽くすか)

^{トランプ} 罫カード『ふうま 小太郎のお願い(脅迫)』を発動! このカー

ドは、桐生 佐馬斗の寿命を墓地送りにする事で、相手の情報を入力し、ドラ○もん染みたスペシャルアイテムを作らせる!

ドロー! 桐生 佐馬斗の寿命! ドロー! 桐生 佐馬斗の寿命!
ドロー! 桐生 佐馬斗の寿命! ドロー! 桐生 佐馬斗の寿命!
ドロー! 桐生 佐馬斗の寿命! ドロー! 桐生 佐馬斗の寿命!

いくら桐生であつても、不死ではあるが不老ではない。寿命が削れ

るほど働かされれば、流石に死ぬ。

が、小太郎はそんな事知ったこっちゃねーのである。何せ、自分が過労死しかねないからだ。おう、オレが地獄を見るんだ、お前も地獄を見るんだよ、あくしろよ、の精神だった。

対魔忍内部には桐生に対する仕打ちがどんなものであっても、もうやめて！ と叫んでくれる人はいないので、いくらでも桐生の寿命を墓地送りに出来る。ヒデエもんである。全てが終わった後に、桐生の干乾びた死体すら残っているか疑問だ。

まあ、何処まで言っても協力者ではなく捕虜なので問題はない。国際法で捕虜の扱いは厳格に取り決められているが、あくまでも適応されるのは人間に対してのみ。桐生は殆ど人間辞めてるので適応はされません。しゃーなし、ノーカン。

「色々と言いたい事はあるが、どうぞご自由に。一発で首刎ねてくれよ？ ナディア、お前はダンスダンスして生命力低下させといて。無防備な状態でそれなら、流石に上位魔族でも死ぬだらろ」

「……や、やっぱり手伝わないとダメかしら。そちらの踊りは、余り……」

「四の五の言わずにやれ。こつちが協力する以上は、そつちも協力するのが筋だ。味方に対して非情になれとは言わないが、敵に対しては非情になって貰わにゃ困る。この程度の決断が下せないと後がしんどいぞ」

「うっ………わ、分かったわ。やる、やります」

乗り気ではないナディアに、小太郎は冷徹に促した。

何も、自ら進んで手を血で染めろ、と言っているのではない。決断しろ、と言っているのだ。

自ら望んでなったのではないにせよ、支配者である以上、自らの民を守るために残酷な二者択一を迫られる場面もある。大抵の場合、そうした際に天秤へと掛けられるのはどちらも罪もない味方だろう。

現実是非情で容赦がない。にも拘わらず、敵と味方を天秤に掛けた

状態ですら決断が下せないようでは話にならない。それは優しさではなく甘さだ。

状況は刻一刻と変化しており、一瞬の迷いが致命的な末路を招き寄せるだろう。決断は支配者にとって最も重要な仕事と言える。結果などどうでもいいのだ。だが、決断出来ないのでは誰も後に着いてこないのだ。

冷徹さに気圧されたナディアであったが、すぐさま意を決したように首を縦に振る。

まだ小太郎の全てを信用していた訳ではないが、その善良さ故に信じてもらうのならば、まずは自分が信じねばと思いついたらしい。

………言っただが、騙されてる感が半端ない。彼としては騙すつもりは一切ない。彼女が支配者として貫かねば、人界が終わりかねないのだから当然だ。だが、悪意塗れの彼と善良な彼女とでは、絵面的にどうしてもそう見えてしまう。

「ナディアも大変だニヤ〜……………んニヤ？」

「そいつは結構。後は二人に任せ——」

まず始めに気付いたのは、優れた野生を持つクラクル。そして、僅かに遅れて小太郎が続く。

クラクルは全身の産毛を逆立たせながらも、その感覚を上手く理解出来ずにいたが、小太郎は慣れ親しんだ感覚を即座に理解した。

即ち、視線と殺気。

これが意図するものが何であるのかに思い至るのか、時間の掛かる男ではなかった。

「狙撃手スナイパーっ！ 前方500m！ 避けろ、紫っ!!」

「——何っ!?!」

感じ取った視線と殺気が己に向けられたものではないと悟るや、狙いである紫に叫んでいた。

正確には、本当の狙いは彼女の背負った災禍であったが、動けない以上は背負っている紫に叫ぶ他あるまい。

狙撃の気配を察知も予期すらしていなかった紫の対応はどうしても鈍くなる。

前方500mに存在する家屋に目を向けるが、余りにも遠く狙撃手の姿は確認できない。だが、次の瞬間には発砲炎とは明らかに異なる銀の光条が煌めいた。

それが何であるのかを理解するよりも早く、紫は決断を下していた。伊達に幾つもの死線を潜り抜けている訳ではない。

彼女は反射的に小太郎目掛けて災禍を投げ渡したのである。自身であれば傷を追っても致命傷には至らないが、無防備な災禍は別。あらゆる痛みを覚悟して、災禍の護衛という役割を全うする。

「う、ぐう——っ！」

「この能力は……！」

小太郎に受け止められた災禍は、紫の陥った現状に呆然と呟いた。

紫の首から下は分厚い氷に覆われていた。

見覚えのある能力だ。だが、彼女の知るそれとは桁が違う。

冷眼と呼ばれる視界の対象の一部を氷漬けにする邪眼に違いはないが、互いに互いの存在を目視し合える程度の距離でなければ効果を発揮しない筈であり、あくまでも手足の一本を凍らせるのが精々であつたはず。少なくとも、彼女の知る邪眼の使い手は。

「舐めるなっ！ぬ、うああああ——！！」

「うっそだろ、お前」

「隊長、現実逃避は後にして！これって、銀零って人の！」

しかし、拘束に特化していた故に殺傷力は低かったのか。

紫は気合の雄叫びと共に無理矢理四肢を動かして分厚い氷をぶち碎き、無傷のまま拘束から逃れてのけた。

不死覚醒恐るべし。

冷眼は対象の一部であるが骨の髄まで氷漬けにするというのこれである。

恐らくは、不死覚醒によって変異した全身の細胞が、自らを死なせまいと活性化した結果として氷漬けにされるのを阻んだのであろうが、無茶苦茶にも程がある。

そう思い込む事で現実逃避していた小太郎に、ゆきかぜの焦りの混じった激が飛ぶ。

既に冷眼の使い手——ふうま 銀零の情報は不知火を除く全員に伝えられている。そんな彼女が独立遊撃部隊を狙っているのなら。答えは非常に簡単だ。

不知火は持ち前の経験から渡されていた薙刀を構え、他の面々も既に臨戦態勢に入っていた。狙撃を警戒して建物の影に入りたかったが、狙撃手を配置したという事は、既に周囲を囲まれていると見るべき。入りたくとも入れない。

「——うっ、く、これは……っ」

「これで貸しが出来たな、淫魔王」

「……………チツ」

災禍の邪眼が解除されたのか、淫魔王は首を振りながら頭に手を添える。

そして、建物の闇から我が物顔で現れた弾正の姿に目線を向けると舌打ちをした。

察するに、この緊急事態に対して部下だけを逃がし、一人だけヨミハラに残った淫魔王に違和感を覚え、姿を消した同盟相手を探していたらしい。

こうした他者の弱味や自らの利益になる臭いを嗅ぎ分ける嗅覚は見事と言う他はない。でもなければ、米連内部である程度の権力を握るなど不可能だ。

そして、現実逃避から帰ってきた小太郎はと言えば——

(はあああああああああああああああああああ何やつてくれるのおおとおお、このおっさんはさあああああああああああああああああああ!!!!!) ああああああああああああああああああああ

——もう、思考が疑問符で滅茶苦茶な事になっていた。

いや、マジで？ はあ？ マジで淫魔なんかと手を組んだの？ 馬鹿じゃねコイツ？

いやいや、どう考えてもオメーが御せる相手でも乗りこなせる相手でもねーだろ？ 暗躍する者として遥かに格上よ？ お前女コマすしか能がねーのよ？ 分かってんの？

いやいやいや、コイツ日本を裏から支配しようとしてんのよ？ 分かってる？ 対魔忍の頂点に返り咲くもクソもねーのよ？

いやいやいやいや、っーか米連の連中は知ってんのかコレ？ あっ、そーか！ はは！ 無能過ぎて後がねーのか！ もしかしては半ば放逐扱いで拠点も補給物資も貰えてねーの？ それにしても相手は選べよ！

いやいやいやいやいや、いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや。

こんな具合だ。

弾正の姿を目にした災禍の表情が凄まじい勢いで歪んでいく事にすら意に介さない。介せない。

もし幻庵が生きていたら、余りの馬鹿さ加減に驚き過ぎて心臓発作を起こしただろう。

もし骸佐の父親が生きていたのなら、余りの馬鹿さ加減に血涙を流しながら各所に弁明に奔っただろう。

もし小太郎の母が生きていたのなら、余りの馬鹿さ加減に腹を抱えて爆笑し始め、一頻り笑い終わったところで急に真顔となり、何考えてんのあのおっさん、本当に同じ人間？ 頭弾正過ぎて引くわー、と眩いたであろう！

大人数に包囲されてる状況に比べりや、どんなに強くても相手が少ない方がまだマシ。

「アレから脱出できるなんて、別次元の存在とは言えど、流石は八津紫、か」

標的から距離にして凡そ500mに位置する建物の屋根で、少女の口から眩きが漏れる。

屋根に座り込み、立てた片膝の上に左肘を置き、右手では大型のスナイパーライフルを握っている。第二次世界大戦頃からスナイパーに使われ始めた座射姿勢であった。

普段は眼帯に覆われている右目は今や開放されており、冷酷な性格を現すように淡く蒼銀に輝いていた。

彼女の名はふうま 銀零。弾正と共に米連に渡った実の娘であり、同時に小太郎とは腹違いの兄妹だ。

特務機関「G」による過酷な能力開発と人体実験を生き延び、今や執事・秘書のような立場にあり、弾正の側近の一人でもある。

彼女の構える狙撃銃は冷眼という視界に収めた対象を氷漬けにする邪眼と連動、強化を行う「G」によるワンオフ品。

氷結能力の向上は勿論の事、実弾の狙撃銃と同程度まで射程向上、更には本来であれば難しい威力の調整まで行える優れものだ。

(メイジャーとヘスティアを使って部隊の大部分で包囲している。相手を警戒して大回りさせて正解でしたね。しかし、この街に対魔忍が潜入しているとは……)

狙撃銃のスコープを右目の邪眼で覗き込みながら、自ら提案した作

戦の成功を確信する。

何も語らずに一人行動する淫魔王を追うように命じたのは弾正であるが、“G”から連れ立った部隊を動かしているのは銀零だった。ともすれば、部隊の主導権すらも奪える立場にあったが、彼女は殊更に“自分”というものが希薄だ。そのように教育を施されたというのもあるが、元より彼女は自分ひとりで生きるのではなく、誰かに従って生きる事に向いた人間だったのだろう。

その点は弾正にとって都合が良かったに違いない。だからこそ、こうして今まで生き延び、更には今の立場に収まった。更には、かつての仲間に躊躇なく引き金を引ける。

(聞いていた別次元の八津 紫と水城 不知火が一緒にいる以上、前者は成り行き、本命は後者、ですね)

今回、淫魔王と弾正は、ある程度利害が一致した故に手を組んだ。弾正は“G”からの支援が満足に得られぬ現状を打破するため、淫魔王を新たなパトロンに選んだ。

淫魔王は米連支配への足掛かり、米連しか掴んでいない情報を弾正から得るために支援を決定したのである。

淫魔王の最も得たかった情報は、本来は存在しない筈の紫が何故ヨミハラに突如として現れたか、だったが、その元凶が何であるのかは既に伝えてある。

小太郎がそうであるように、米連もまた次元侵略者と接触、戦闘行動にまで発展しており、その存在を危険視している。

魔族ならばまだ手を組む余地はある者もいるが、次元侵略者に関しては須らく敵と見做すべきだ。まだ相手側の内情は分かっていないが、次元を渡る技術力と強力な洗脳は驚異でしかなく、いつ何時、組織内部に侵入されるか分かったものではないのだから。

そして、別件で水城不知火を捕らえており、別次元の紫が何者かに奪取された事も既に共有していた。其処からの推察は難しくなく、彼女の考えは概ね的を射ている。ただ――

(その二人に加えて、魔界の踊り子、裏切り者の災禍と紅、新世代のルーキーに、見覚えはないけれど真つ先に此方を察知した獣人——
——でも、あのヘルメットの男は、誰?)

——スコープの向こう側で素顔を隠した小太郎の正体には、辿り着けていなかった。

(誰でもいい。誰であろうと問題もない。魔界の踊り子には踊りも魔力も私が使わせない。災禍と紅は御館様が抑えられる。他の連中も、あの三人には敵わない。私は私の役割を熟すだけ)

余りにも小さな落とし穴——だが、その見逃しがどれほど深いものなのかを、彼女はまだ気付いていない。

既に彼女は一つの失敗を犯していた。

それは、厄介な邪眼を持つ災禍を無力化しようと真つ先に狙った事。

弾正の生まれ持った「傲眼」は、常時発動型ではなく任意発動型。つまり、先手さえ取ってしまえば「傲眼」を発動させずに弾正を無力化できてしまう。

当然と言えば当然の判断であったが、今回に限っては狙うべき相手は他に居た。表情を覆い隠すフルフェイスヘルメットの下で悪辣な笑みを浮かべている男こそ、真つ先に始末するべきだった。そうであれば、少なくとも今後は彼の存在に頭を悩ませる必要だけはなくなっていたのだから。

「久しいな、災禍、紅」

弾正は淫魔王の隣に立ち、馬鹿にしたような、脅迫するような、獲物を前にして舌舐めずりをするような下卑た笑みを浮かべて二人に声を掛けてきた。

小太郎に受け止められた災禍は自らの義足で立つと、嫌悪の一切を隠さぬままに睨みつけ、二刀の小太刀を構えた紅は周囲を警戒しながらも冷酷な視線を向けている。

他の皆も包囲された事を悟ったのだろう。小太郎とナディアを中心に背中合わせに円陣を組んでいた。

通りの両側に存在する家屋の屋上には、カメラアイを光らせるサイボーグの軍勢が命令を待ち詫びるように独立遊撃部隊を見下ろしている。

災禍は今すぐにも弾正の首目掛けて蹴りを放ち、首の骨を粉碎するどころか切断してやりたかったものの、この状況では無謀も無謀。自制せざるを得ない。

「かつての誼だ。どうだ？ 今一度、私に仕えてみないか？ 待遇は淫魔どもに比べればいくらかマシだと思うが」

「うっわ、すっげ。自分と気に入った連中だけ連れて米連に逃げたのにこの態度。オレでも出来ねえ」

「——相も変わらず、手前勝手な事ばかり。呆れてものも言えないとはこの事だ」

「うんうん、そうだね。その通りだね。災禍、良い事言った」
「何を言う。私はふうまの当主だ。手前勝手も何も無い。私のものをどう使おうが、何の問題もない」

「まだ自分の部下と認めてるうー→昔はどうか知らないが、今はもう誰もお前のごと当主と認めてないんだよなあ。ふうまはもう空中

分解してゐるっつーの」

「かつてのふうまは既にならない。貴様の馬鹿さ加減に付き合わされて滅びた。誰も貴様になど従わない」

「残念でもなく当然だね。当事者じゃないけどあの反乱はねーわ。無理、無謀、無駄。余裕の自滅だ、無能っぷりが違いますよ」

「さつきから何なのだ、貴様はあ!!」

「隊長、今は我々が話し合っているのです。少し黙っていましたよね？」

「へ〜〜〜い」

かつての当主とかつての秘書が真面目な会話を繰り広げる中、弾正にも聞こえるよう余計なチャチャを入れまくる謎の隊長、もとい小太郎。

冷静さを取り戻した彼は、完全にやる気を失っていた。

淫魔族と手を組んだ挙句、この十数年全く音沙汰がなかったと言うのに未だにふうまの当主気取りでいる男を前にすれば、こころもなる。

よりにもよって弾正が来るとは考えていなかったが、弾正の襲来によつて自身と災禍が身動きが取れなくなり、隠密に向かないナディアとクラクルを使わざるを得ない状況に叩き落とされた時点で援軍や他の勢力の殴り込みがあるかもしれない、と予測もしていた。

挙句の果てに、初手から謝罪ではなく勧誘と来た。更に、秘書として辣腕を奮っていた災禍のみならず、紅というブラツクの血を引く爆弾にまでも。

これまでの状況を鑑みれば、弾正がどんな立場に立たされているのか分かるうというもの。間違いなく、相当に苦しい立場であると疑いようはない。

戦力的に対魔忍と事を構えるにも心許なく、米連からの支援は期待できない——と言った所か。それで何で戻ってきてんだよ、とツッコみの一つも入れたくないが、それはそれで七面倒な自体に発展しそうであった。

弾正は尊大な態度は崩さないであろうが、形振り構わない行動に出

かねない。元より他者に付け入る事に長けたこの男であれば、闇の勢力に取り入り、売り込み、蝙蝠のように立ち回る可能性がある。

そうなれば、ふうまの元当主がやらかしているという情報が日本中に駆け巡り、小太郎どころか空中分解したふうまの者達にすら批難や悪評が向かいかねない。

(ま、それはそれでいいんだけどね。ゼーんぶ弾正が悪い事にして、オレ達は新しい世代として有能さをアツピルしていけばいいし)

だが、そんな現状すらも利用するつもりのようなのだ。大した強かさだった。

冷静さを取り戻せばこんなものである。弾正に足を引つ張られるなど何するもので。伊達に苦勞を背負っていないのであった。

「お、おほん——それが返答という事で構わんのだな」

「無論。最早、私はかつてのような都合のいい人形ではない。況してや、貴様が反乱を起こす以前から若様の秘書になっていた。貴様の世迷い言に付き合う道理など私にはない」

「チツ……………紅、貴様は」

「いや、元々私はお前の部下ではないから。私が主と認めたのはふうま 小太郎ただ一人……………そもそも、大恩ある御祖父様を米連へ逃げ延びるための捨て駒にされて、付き合うとでも本気で思っているのか……………」

「……………誰も彼も、あの無能な目抜けの何処がいい！ あんなモノ、生まれて来なければ良かったと言うのに！」

(Fooooo→ どう考えても自分が悪いのにオレにヘイト向けた拳句に、自分は悪くないって反省しないクズっぷりい！ 普通に考えて、オレのが幾分マシなんだよなあ。後、憎んでるオレは目の前にいるんですけどね?)

(これ、絶対に仮面の下でどうでもいいって顔してるんだろうなあ……………)

青筋が立ててビキビキしている災禍と呆れ顔で返す紅に、弾正は忌々しげに顔を歪めて歯噛みする。

まるで小太郎が悪い、と言わんばかりの態度であるが、小太郎が生まれていようがいまいが、二人は同じ選択をしただろう。

仮面の下で血縁上の父を小馬鹿にし腐っている気配を感じ取ったのか。何のかんで二人も冷静さを取り戻している。

弾正に対する軽蔑と小太郎に対する忠義は全く別の話。

片や、部下を好き放題に扱った挙句に使い潰すクズ。片や、味方に対して正当な評価と報酬を用意するが敵はもう阿鼻叫喚の渦に叩き落とす外道。

どっちがマシかと問われれば、味方である限り庇護を得られる後者の方が圧倒的にマシだろう。尤も、外道行為に巻き込まれたり、手を汚さねばならない場合もままあるが。

「いいだろう、その選択を後悔させてやる。私自らの手で直々にな」

「——おい」

「案ずるな、淫魔王。不知火とあの別次元の紫は元より貴様の獲物だ。他の連中はくれてやる」

「……そうか。ならば構わん。貴様の手並み、見せてもらおうか」

窮地を救われた手前だったからか、今まで黙りこくっていた淫魔王が口を開く。

しかし、弾正は怒りと愉悦が緋い交ぜになった表情で、それが当然と返してのけた。

淫魔王としては突如として舞い込んできた紫はどうなっても構わないが、最低限の目標——不知火だけは手中に収めたい。

元々、彼女を手に入れるために回りくどい方法を選んだ。計画を進行する上で幻惑の忍法は必要なのか、或いは大幅なショートカットが可能になるのだろう。

であるのならば、弾正側の戦力を測る良い機会でもあり、本来の姿

を晒さずに勞せずして目的を達成できるのならば止める筈もない。

弾正としては小太郎に仕える気しかない災禍と紅を墮とす事で、自らの戦力とした上で苛立ちを抑えられる。

かつての秘書と心願寺当主が弾正を支持したとあれば、復権に対する正当性が生まれると考えているかも知れない。

尤も、対魔忍も元ふうまの者達も、そんな事で弾正を認めるわけもなく、何トチ狂った事やってんの？ とただひたすらに災禍と紅の頭を心配するだけだ。

加えて言えば、それは『弾正が淫魔族と手を組んでいる』という前提が周知されなければの話である。これが周知されれば、元ふうまは大草原不可避の後に弾正ぶち殺そうぜと奮起してアサギの胃が死に、政府はぬかしおる（どっ、からのお前は何を言ってるんだ、というミルコ・クロコップ状態に突入する。流星は自分の置かれた立場と現状認識が甘い事に定評のある弾正だけの事はある。

「あつ、そつちの話終わった？」

「はい、もう（何を言っても無駄だし、こつちの頭も悪くなりそうなので）結構です」

「貴様、何処までも人を虚仮にすれば気が済むのだ！ 名を名乗れ！」

「オレ？ オレは史上最強の戦術家、カルタゴの雷光、ローマ史上最大の敵にしてローマ絶対殺すマン、お前何で真冬のアルプス越えとか思いついた上に実行しちゃうの??? でお馴染みのハンニバルだ」

「紀元前の人間だろうか！」

「じゃあ、俺のような天才策略家でなければ、百戦錬磨の兵どものリーダーは務まらないの特攻野郎でいいや」

「どちらだろうか！ 偽名であることに！ 変わらんだろうがああああ!!!」

「当たり前ーだろ。何で忍が名乗ると思ってるんだ。何なの？ このおっさんボケてんの？ 頭弾正なの？」

「まあ、頭は弾正だけど。こーう、手心と言うか、まともに相手をしてやるべきと言うか……」

(（実の父親なんだから、もう少しこう因縁めいたものを出すべきでは……）)

災禍と弾正の話し合いは終わったが、小太郎はじえーんじえん会話なんてするつもりはないのである。

実の父親との会話であるというのに、時間の無駄でしかねえ、と断じている。断じた故に態度に出ていた。あと、これくらい煽っていないとやってられないのだ。これから彼の背負う苦勞を考えれば当然である。

もう彼のメンタルはボロボロだ。なお、形状記憶伸縮自在ゆるふわ合金という精神力なので碎け散る事だけはない。生き地獄であろうが生き抜いてやるという強い意志を感じざるを得ない。生き地獄が長引くだけともいう。

「これだけの戦力を前にして随分な余裕だな」

「ふっ——だから話し合おう？」

「お前は何を言ってるんだ」

「まあ聞けよ。お得な情報をくれてやるから」

訝しむ淫魔王の視線を受け、アレだけ煽っていたと言うのにこの情けない言動である。弾正でなくとも、同じ事を口にするだろう。

交渉に挑むならば、必要なのは相手を脅迫できるほどの戦力か、或いは相手が欲しがると有益な何かを用意するしかない。

そもそも淫魔王に苦汁を舐めさせ、弾正は怒り狂わせている。交渉を開始するにしても、相手が冷静でなければ話にならない。これまでの行為や言葉は全て悪手以外の何物でもなかった。

しかし、小太郎は相手の話を聞きたくないとばかりに、勝手に語り始める。強引に交渉を開始してしまうのも、手段の一つである。尤も、それで効果があるかは別問題である。

「今、弾正が引き抜こうとした紅だが——これ、ブラックの娘な。」

噂くらい聞いた事があるだろうか？」

「——おい、弾正」

「ま、待て。確かに説明していなかったが、私も奴が此処に居るなど知らなかった！」

淫魔王は初めて耳にした情報に、ギロリと弾正を睨み付ける。

それもそうだろう。彼にしてみれば、いまブラックと事を構えるつもりは一切ない。

纏まりがなく、快樂と目の前の金を優先するだけの組織など無理に敵対する理由もなく、戦力と人員だけは多いので放置が尤も望ましい。

殺意すら混じった視線を受け、弾正は慌てて弁明をした。

言い分は正しい。ヨミハラに対魔忍が潜入しているなど、災禍達の姿を見るまで想像すらしていなかった。紅の勧誘に関しても、元ふうまだからと言うだけで成り行きに過ぎない。

しかし、その何処がお得な情報であるのか。

確かにブラックの娘などという超弩級の爆弾、事を静かに進行させたい淫魔王にとっては邪魔なだけ。弾正にしてみれば、ブラックはこれまで何の音沙汰もなく放置していたのだからこれからもそうだろうという甘い現状認識があったのは事実だ。

だが、この場を切り抜けるには弱すぎる。ブラックが紅を求めているというのなら、彼女を捨て置けばいいだけで、小太郎達まで捨て置く理由には決してならない。

「それでな、こいつは猫が好きでなあ。こっちの猫型の獣人としても仲がいい」

「フシャー—————!!!」

「……………はあ？」

「貴様、何を言っている。意味が分からん」

クラクルは周囲を囲むサイボーグに向けて、獣性を剥き出しにして

威嚇している。

瞳孔が細まり、牙を剥き出しにしたその姿は普段の愛らしさなど何処へ言ったのか。猫科の肉食獣の恐ろしさは誰が語るまでもない。話題に上がった紅ですらちよつと引いていた。

小太郎が何を言いたいのか、その意図が全く分からない弾正は目を丸くするばかり、淫魔王も眉根を寄せて苛立ちを募らせる。

有益な情報など一つもない。出てくるのは紅の嗜好の話だけ。彼女が何を好もうが、二人には何の関係もない話だ。

この時点で嫌な予感をひしひしと覚えていたのは、小太郎と長年の付き合いである災禍と知略に通じる不知火だけであった。

「で、オレはコイツとナディアに爆弾を仕掛けさせたわけだ。まあ、弾正を見つけたから裏方が出来る災禍が動けなくなつたんで当然だな」
「やはり意図が分からんな。その小娘どもが何だと言うのだ。さっさと見え」

「————ほんとおめでたい連中だな、ただの時間稼ぎだよ」

淫魔王の恫喝に小太郎が肩を竦めた瞬間、その場に居た全員に突如として重力が何倍にも増したかのような重圧が襲い掛かる。

それが何であるかを明確に理解できたのは、元より予定通りであった小太郎と「彼」と同位の存在である淫魔王とナディアだけだ。

「……………なっ!?!」

「これは……………」

「来ましたねえ。比喻でも何でもないとモンスターペアレントが。そつちまで来ちゃうかー、まあどつちでもええわ」

「……………あー、隊長、これつてもしかして?」

「もしかなくてもそうだね、ゆきかぜ」

「私達は何も聞いてないぞお!?!」

「そうだね凜子。何も言ってないからね」

「手段としては分かるけれど、無茶が過ぎるのではなくて?」

「それでもないよ、不知火さん。本当だったらもつとスマートになる予定だったんだ。何事も思い通りにはいかないねえ。思ったよりも淫魔王が聡くて、奴が後手に回った上に、弾正が横槍入れてきたから上手くいかなかったが、概ね予定通り。あと何度か死線を潜り抜ければいいだけだ」

部隊と救出対象から上がる緊張と不安、更に若干の批難の声であったが、小太郎は何処吹く風であった。

身内からすらもこれだ。淫魔王と弾正の内心にしてみれば、何をしてくれたんだという怒りと驚愕しかないだろう。

——だが、これまでの小太郎の指示には確かにおかしいと言え
ばおかしい点はあった。

陽動の下準備にナディアとクラクルを使つた点だ。

弾正がヨミハラに現れたから仕方がないと言え仕方がない。自身や災禍が直接動くリスクヘッジを考えれば当然の選択であったかもしれない。

だが、ナディアは兎も角として、わざわざクラクルを使う必要性があったかは疑問だ。

ナディアは人界を知ろうとしてやってきた来訪者。人間の機械技術に関して積極的に学ぼうという気概がある。

対してクラクルは偶発的にヨミハラにやってきただけの獣。人界の技術に興味などなく、今日一日をよりよく過ごせればいいだけで、学ぶつもりは一切ない。

ヨミハラの各所に爆弾を設置する際に、全てを行つたのはナディアでクラクルは付いていって横で眺めているだけで全く役に立っていない。

この他者の理解が早いこの男が、その程度を想定していない筈がなく、クラクルを使うのは全くの無駄と言えよう。ナディアに関して、いくら強大な魔力を隠そうとも、相応の手練であれば興味を引かれて後を追ってくる可能性はあった。

ならばいつその事、両者を陽動の一部、敵を引きつける餌として利

用する事を目論んだ。

ナディアは誰が追ってくるかは予測出来ないが、クラクルは誰が追ってくるのかは予測できる。

紅の匂いがたつぷりと付いた彼女。そして、その紅を探している人物がヨミハラには存在しており、一度は彼自身も遭遇している上に、背後に誰がいるのかも分かっている。

「で、どうする？ オレとしてはアンタ等が事を構えている間にさっさとトンスラする予定だが」

「——チツ、引くぞ弾正」

「おい、奴等を見逃すと言うのか!？」

「余は奴と事を構えるつもりはない。どうしてもやりたいというのなら、お前の手持ちだけでやるがいい」

淫魔王の決断は早かった。

流石に、このあたりの判断は王と呼ばれるに相応しいものである。

戦う以上は何らかの報酬が得られねば、割に合わない。ましてや、相手は「あの男」。相対すれば確実に戦闘へと発展し、その間は辛酸を舐めさせた対魔忍に気を止めている暇はない。

勝つにせよ、負けるにせよ、本来の獲物である不知火には逃げられる時点で何の旨味もない。こんな所で、対魔忍に自身の实力を見せてやる意味もない。「あの男」との戦闘行為自体がデメリットでしかなかった。

弾正の言葉に短く拒絶の意を示し、淫魔王は踵を返す。

その間に、この状況を創り出した男に本物の殺意を向けたが、柳のように受けながされ、今度こそ闇の中へと消えていく。

平静を装う態度が逆に恐ろしい。腹の底ではドス黒い怒りの炎が燃え盛っているはず。それでも敢えて言葉にしなかったのは、何をするにしても無言のまま実行した方が効果的であった事を知っていたからだろう。

「……………貴様、覚えていろよ」

「へ〜い、アンタと違つてトリ頭じゃないんで覚えてま〜す」

「チツ！ 総員撤退！ ヨミハラから脱出するぞ！」

（最後まで、あの三人を出してこなかった。戦力として多少の不安を残しているつてところか？ 何にせよ、大人数を相手にするよりや幾分マシだな）

号令に従い、遠くで燃え盛る炎に照らされていた機械の兵士や闇の中に潜んでいたカメラアイの光が消えてなくなる。

弾正の顔には自身の行動を不意にさせた男に対する憎悪も大きかったが、〃あの男〃に対する恐怖が色濃く蒼褪めていた。

その小心さに、最後に出会った時から何一つ学ばず、何一つ成長していない父に呆れすら通り越して最早、何も浮かんでこない。

元より期待もしていなければ、血縁上の父というだけで親への情など弾正には一切抱いていない。そういった無償の愛情を教えてくれたのは母親だけ故に当然だろう。

あつたのは、最後まで出してこなかった正体不明の三人の少年少女の事だけ。この状況でも切つてこないとなれば、まだ弾正にとつても未知数や不安の残るの部分があるのだ。

ともあれ、その思考も今は邪魔でしかない、と斬り捨てる。全ては、目の前の死線を潜り抜けてからだ。

無論、〃あの男〃が来る以上は、小太郎も独立遊撃部隊の全滅も在りうるが、百人以上からなる部隊に囲まれた状態からの逃走よりも、生き残れる可能性は十分にある。

〃あの男〃は根本的に他人を信用していない。紅の件にせよ、アサギの件にせよ、最終的に動いたのは自分だけ。今回も動くのは精々がもう一人だけ――

「――あはっあ、見いつけたあ♪」

カツン、と石畳の地面を靴で打ち鳴らし、見知った少女が炎を背に

現れる。その背後には、影のように寄り添う男が立っていた。

吐き気を催すほど濃密で邪悪な魔力。魂を押し潰しかねないほどの圧倒的な存在感。ひと目見ただけで分かる人界にとっての最大の驚異。

少女————フェリシアと紅の父親にして、アサギにとっての宿敵。

多くの人間を絶望へと叩き落とし、罪悪感も抱かずに我が物顔で振る舞う不死の王————エドウィン・ブラックが其処に立っていた。

案の定、やらかしてくれるモンスターペアレント。だが苦労人は狼狽えない！

「——エドウィン、ブラック……」

恐れと緊張、嫌悪と怒りが入り混じった誰かの眩きが漏れる。

アサギにとつての宿敵であり、対魔忍にとつての大敵が目の前に居る。我知らず、言葉になってしまっても不思議ではない。

名を呼ばれたブラックに反応は見られない。

虚の如く光のない瞳に気はなく、反面、その総身には尋常ならざる魔力で満ちている。

死線を潜り抜けた対魔忍であつてすら吐き気と目眩を覚え、本能的な恐怖で汗が吹き出し、全身に震えが奔る。

だと言うのに、当のブラックは虚ろな表情、虚ろな視線のまま小太郎達を認識しているかすら判然としない。

「はじめましてだね、おねえさん♪」

「……………」

「なあに、だんまり？ ふえりは随分、おねえさんを探したんだけど……………」

「……それは、御苦勞な事だな」

紅は混乱の渦中に叩き落とされたものの、比較的冷静であつた。

小太郎が敢えてブラックを釣るような真似をするなどと考えてはいなかったが、その娘——フェリシアが自身を探している事は聞いていた。

しかし、あくまでも比較的なのである。怨敵を前にして激情に駆られ

ないだけマシではあるが、平時の精神状態には程遠い。不満げなフェリシアの表情に、何とか皮肉交じりの言葉を返すのがやっとだった。

(紅も辛うじて冷静だな。さて、紅に気を取られている間に……)

(空間跳躍の術だな。任せておけ)

(そいつは重畳……問題は不知火さんだが、こつちも大丈夫そうだな)

ブラックとフェリシアの興味が紅にしか向けられていない事を確認し、小太郎は凜子とアイコンタクトを取っていた。

二人には精々が羽虫程度の邪魔者としか認識されていなかったが、彼に怒りはない。

戦力という点だけで見れば、固有の忍法も使えない小太郎は間違いなくその程度の驚異にかなりえない。

無論、彼自身は切り札を隠し持っているが、ブラックとフェリシアには知り得ようはずもなく、吸血鬼の真祖とその直系に効果があるかも甚だ疑問である以上、戦力として数える方が間違っている。

此処までは彼の想定通り。

淫魔王と弾正だけでなく、ヨミハラの如何なる勢力であれ、ブラックが現れれば蜘蛛の子を散らすように逃げるのは分かっていた。

気になっていたのは、夫の敵を目の前で取り逃がした不知火の精神状態であったが、チャリと盗み見た表情は冷静であった。

内面は様々な感情が渦巻いているであろうが、目の前の驚異に対する警戒を疎かにするようでは、幻影の対魔忍の二つ名は与えられないだろう。

「ふーん……そうやって、こつちの相手をしないつもり？　でも、だ〜

め♡　ふえりも、パパも、この時を待っていたんだもの」

「……………何？」

(……………拙い、か?)

だが、それも此処まで——これより先は、彼の想定から外れて

いく。

いや、より正確に言えば、想定こそしていたが、敢えてその可能性を思考から除外していた、が正しい。

理由は二つ。

まず第一に、ブラックにとって紅は気紛れで生み出した玩具であつて本命ではなかつた事。

心願寺 楓を拐つた当初ならばいざ知らず、今やブラックの興味はアサギに移っている。これまでアサギの身に降り注いだ悲劇と陵辱、そして裏で糸を引いていたブラックの行動から疑う余地はない。小太郎はそれらの情報を統合し、不死の王の狙いと願いをほぼ正答に近い形で見抜いていた。

どちらかと言えばブラックは紅に執着しておらず、フェリシアが一方的に紅を敵視している可能性が高いと考えており、その想定が事実である事はブラックの極端に薄い反応からも明らか。紅を認識しているかすら疑わしい。

故に、挑発してくるのはフェリシアだけであり、一度見た彼女の無邪気な狂気から他人の心理状態を見越した行動をしてくる可能性は低いと判断した。

第二に、紅の言動に対して信頼の姿勢を見せねばならなかつた事。

小太郎は決して他人を信用、信頼しない度し難い自身の性質を自覚している。無論、彼に親しい人物も——だが、それは独立遊撃部隊の隊長、引いてはふうま当主としても決してあつてはならない性質だ。

上下関係や人間関係は結局の所、信頼でしか成り立たない。ビジネスライクな関係性であっても、その人物しか生み出せない利益があるという信頼の上で成立するように。

殊更、小太郎と紅達の関係性は特殊だ。上司と部下、主と従者、男と女、と様々な関係で構成されている。単純な利益や規律だけでは何時か必ず破綻を来たす関係と言えよう。

だからこそ、他人を信頼できない小太郎はそんな自分に信頼を寄せてくる者に、せめて形だけでも応えねばと考えていた。

紅はブラックやフェリシアの話聞いてもなお冷静であった。その姿勢に信頼の姿勢を見せるべく、考えていた可能性を敢えて思考から除外した。

「——ほら、イイモノを見せてあげる♪」

「——あ……………はっ……………はあっ……………」

「な、によ、それ……………」

「悪趣味な……………!」

「あれは……………!」

「見るな、紅!」

フェリシアは満面の笑みを浮かべ、後ろ手に持っていた何かを小太郎達に——いや、紅に差し出す。曖昧な筈のブラックの表情が邪悪に歪んだように見えたのは気の所為であっただろうか。

それを見た瞬間、紅は驚愕の余りに目を見開き、呼吸すらまともに出来なくなってしまう。

ゆきかぜと紫は、それが何であるのかは理解できたが、紅にとってどのような意味を持つかを理解できず、ただただ嫌悪に顫にする。

凜子は空間跳躍の始動に意識を向け、不知火はブラックに全ての警戒心を向けていた故に、それが何であるかを見てすらいなかった。

唯一、それが何であるのかを正しく理解できていたのは小太郎と災禍だけだ。

「——母、様?」

『……………ッ!』

何か——液体の注がれた瓶に詰められた生首に魅入られながら、やつとの事で紅の口から絞り出された言葉に、彼女の顔を知っていた小太郎と災禍以外が息を呑む。

一切の光を宿していない虚ろな目。

美しかったであろうに絶望で塗りつぶされた顔。

怨嗟か、憎悪か、赫怒か。未だに何らかの言葉を漏らそうとばくばくと蠢いている口元。

使えなくなつたのか、必要なくなつたのか。首から下は、もう既に存在しない。

それが現在の心願寺 楓の姿だった。

「ずーずーと会いたかつたんだよね？ 感動のごたいめーん。凄いでしょーコレ、こんなになつても生きてるんだよ？」

「い、生き……う？」

「うん、そうだよ。フルストのおじさんをお願いしてね。無理矢理、生かしておいて貰つたの。だって、この女にはピッタリなもの」

「……ぴ、つたり？」

「聞くな、紅！ これはもう終わった話だ、間に合わなかつたんだ！

幻庵も、お前も、オレも！ 誰のせいでもない！ 落ち着いてくれ！」

「……ブラック、貴方はっ」

「く、紅、どうしたニヤ。こ、怖いニヤ……」

満面の笑みで嬉々として語られる言葉に、紅は震える声で中途半端なオウム返ししか出来なかつた。眼の前の少女が何を言っているのか、全く理解出来なかつたからだ。

こんな無残な現実の何処が感動の対面なのか。

こんな残酷な末路の何処が相応しいと言うのか。

まだ名前の決まっていなドス黒い感情が心の中に広がっていくのを感じた。

隣に居る筈の小太郎やクラクルの声ですら、千里も離れた位置から発せられているかのように余りにも遠い。

「でも、これでようやく——殺せるんだあ♪」

笑みを浮かべたまま、楓の首が収められた瓶を両手で挟み込むように砕いてみせる。

魔界医療によって生み出された液体が零れ落ち、地面へと吸い込まれていく。

瞬間、絶望に覆われていた生首の表情が、苦悶に満ちたものへと変わる。

喋る事は出来ずとも、痛みを感じる事は出来るようだ。どうやら、フェリシアの生きていたという言葉は事実であつたらしい。尤も、人間らしい生とは掛け離れているが。

楓の表情の変化に、くらりと紅の見ていた世界が傾いて、全てが崩れて消えていく。残っているのは、フェリシアと抱えられた生首、そして嗟うブラックだけ。

「ほんと、汚らわしい女。パパに色目なんか使つてえッ！」

「や、やめ……！」

「死ねッ！ 死んじやえッ！ あははははッ！ アンタなんかいらないうッ！ 他の“妹”なんていらぬ！ パパに！ 見てもらえるのは！ ふえりだけでいいんだから！」

フェリシアの無邪気な笑みから一転して、女の情念そのものを形にしたかのような狂気に染まる。

明らかな苦悶を浮かべた楓の首を地面に叩きつけ、止める間もなく何の遠慮もなく、積もりに積もった積年の思いを開放するが如く踏み付けた。

熟れた果実が潰れるように、頭蓋が砕けて脳漿が飛び散る。

それが幻庵が無事を願った娘の最後であり、紅が助けたいと願った母の終わり。

何一つ救いのない死。ブラックに拐かされた時点で分かりきっていた当然の帰結であつた。

「うふ、ひひ、ふひひひひっ♪」

やり遂げたいことをやり遂げた恍惚の表情のまま、フェリシアは何度

も何度も何度も、既に砕けた頭部を笑いながら踏み続ける。砕けた頭蓋を更に千々に、崩れた脳が髪に絡み、もう元が人の頭だったとは思えない汚物とかがしている。

彼女の持つ狂気と異常さに、誰もが言葉を忘れた。唯一の例外は紅と小太郎だけだ。

小太郎は諫めの言葉を与えるべく、紅の肩へと手を掛けたが――
――全ては手遅れだった。

「――殺してやる」

フェリシアの存在を知ったあの日。小太郎に語った言葉が全て嘘だったのではないかと思えるくらい、腹の底から出た本音。

別段、楓に愛して欲しかった訳ではない。

仮に楓を生きて救えたとしても、彼女にしてみれば紅は憎い凌辱者の種から生まれた悍ましい怪物に過ぎない。幻庵が実の孫と認めただ上で育ててくれた事の方が真つ当な人間の心理状態から外れているだろう。

別段、紅は楓を愛していた訳ではない。

顔も写真でしか知らず、声は聞いた事もない。そんな存在を母と慕う事も出来ないだろうと確信似た思いはあった。

仮に救い出せたとしても、深く関わるつもりはなかった。憎い相手との間に生まれた子の顔など見たくもないだろうと考えていたから。

ただ、紅の心にあったのは、幻庵と楓への感謝であった。

決して望んでいた訳ではなかったせよ、愛してはくれないだろうけれど、生んでくれてありがとう。

憎い敵の子であったらうに、憎しみを心の奥底のに封じ込め、確かな愛情で育ててくれてありがとう。

だからこそ、楓を苦しみしかないのであろう現実から救い出し、幻庵の願いを叶えてやりたかった。それこそが、彼女の選んだ道の一つであり、変わることはない願いだった。

己の道が絶たれたのはまだいい。それだけのために生きてきた訳

ではないし、他にも選んだ道はあるのだから。

己の願いが叶わなかった事もこの際、受け入れる。元々、望みは薄かった。願いが叶わない事も決して珍しい事ではない。

——だが、楓の人生を弄び、幻庵の願いまでも嘲笑った事だけは決して許せない。

ただ、己を狙ってくるだけならばまだ冷静でいられたが、自分を嘲笑うためだけに、感謝する二人を踏み躪ったブラックもフェリシアも許してなるものか。

自覚した瞬間、紅の胸中を締めていたドス黒い感情の名は決定した——人はそれを憎悪と言う。

「——ッ!!!」

「ぐっ、があっ……!?!」

「っ、くれ、きゃああああああっ!?!」

「……………ふっ」

「あはあっ♡ やーっと起きたねっ♪ じゃあ、ふえりがパパの代わりに試してあげる——!」

声にならない叫びが響く。

紅の憎悪に呼応するように、彼女の内では必死に抑え込まれていた“魔”が目覚めます。

刹那、膨大な魔力を帯びた風が紅を中心に吹き荒れた。

突然の出来事に小太郎達は対応できず、ただ一人の例外なく後方へと投げ飛ばされてしまう。

或る者は迫り来る地面に片手をついて大勢を立て直し、或る者は空中で姿勢を制御して着地し、或る者は地面を二度三度と転がりながらも即座に立ち上がる。

そうして目にしたのは、変わり果てた紅の姿だった。

見よ、色白だった肌は褐色に染まり、背には瘴気を具現化したかのような巨大な翼を生み出された姿を。

魔力によって再構成されたのか、蒼穹の如き色の装束は今や血に染

まったように紅く変化していた。

吸血鬼と言うよりは、まるで魔神の如き有り様に、誰もが掛ける言葉すら見つからない。

そんな一向をまるで認識していないかのように扱い、フェリシアは虚空に指先をなぞるような仕草を見せる。

すると、先程まで何もなかった空間に奇妙な魔法陣が浮かび上がり、その中央から彼女の身の丈ほどある大鎌が顕現した。

「おおおおおおおおおっつっ!!」

憎悪の余りに理性の蒸発した紅であったが、最後に敵と認識したフェリシアとブラックだけは覚えているのか、咆哮と共に猛然と襲い掛かる。

対し、フェリシアは軽やかに地を蹴った。まるで遊びに出かけるような気軽さで、にも拘らず、その速度は紅に勝るとも劣らない。

二刀の小太刀と大鎌が激突し、激しく火花が散る。

斬り結ばれる無数の斬撃に技は存在していない。あるのは圧倒的な魔力の迸りと吸血鬼の身体能力から繰り出される力と速度だけ。

まるで人型の獣が武器を握って打ち合っているかのようで、一切の技が存在しない——それでもなお、両者の攻防は神話のようだった。

刃が交わる度に魔力が爆ぜ、受け止めた筈の斬撃は余波で周囲の建物を斬り裂いていく。

(どうする。今は拮抗しちゃいるが、分が悪いのは紅の方。ましてやブラックも控えてやがる)

皆が唾然としたまま不死の王の娘達の戦いを見守るしか出来ない中、小太郎は冷静に状況判断すべく思考を巡らせていた。

既に想定から外れた現状を、この状況を招いたのは他ならぬ自分自身の不手際と受け入れる。全く考えなかった訳ではない。紅を立て

て敢えて考えなかつたとは言え、このような状態に陥らないよう努力するのが隊長たるものの努め、己はそれを怠った、と。

紅とフェリシアの戦いは、小太郎の目から見て拮抗していた。他の皆も同じ意見である。

しかし、経験の問題がある。

これまで己を律し、吸血鬼としての力を全く使つてこなかつた紅。

自らの狂気の赴くままに、吸血鬼としての力を思う存分行使してきたフェリシア。

例え、素養は同等であつたとしても、覚醒した力を使い熟せるか否かはこれまでの経験に依存する。であれば、いずれジリジリと遠火で炙られるように戦いの天秤はフェリシアの側へと傾いていくのは目に見えていた。

「折角の面白い見世物だ。貴様達も見ていくがいい」

「何だ……？」

「結界よ！……でも、こんな力、ブラックにあつたの?!」

戦いの趨勢を見守っていたブラックは横目で小太郎達を眺めると、パチンと指を鳴らす。

すると、彼らの居る居住区の一部が、地面から現れた闇そのものにゆっくりと、だが確実に上へ上へと伸びていく。

半径、高さは共に数百メートル。ナディアが結界と称したそれは、最終的に半円状のドームを形作り、内と外を隔てる壁となった。

幸い、結界で覆われているものの、地面の中にまでは至っていないのか電気の供給をラインは絶たれておらず、外灯の照らす明かりで周囲は闇に包まれてはいない。

それでも、状況は芳しくない。

「……ッ！ 拙い、五車からのカメラ映像が途絶えた。これでは、跳べないぞ」

「天音に連絡を入れましたが、此方も繋がりません。五車側に何か

あつたのではなく——」

「この結界が原因か。米連の最新鋭なんだがな……」

最早、当初の想定から大きく外れた事態へと発展してしまつてい
る。

ブラックの張つた結界によりあらゆる通信が途絶してしまつた。

五車から此方の状況を知る術はなく、また此方も状況を伝える方法
もない。

最悪だつたのは、凜子の空間跳躍を安定させる跳躍先の映像が得ら
れない事だ。これでは安定した跳躍は行えず、五車どころかヨミハラ
からの全員での離脱という大前提が崩れ去つたも同然。紅以外に興
味の無いブラックが凜子の能力を知つていたとは思えないが、容赦な
く部隊の嫌がる手を打つてきている。

（つーか、どんな結界だよ。外の様子が伺えないつてなると光まで完
全に遮断されてる。通信機だつて、最近できたばかりのニュートリノ
通信だぞ。腕利きの魔術師でも、此処まで内と外を断絶と遮断は実現
できない筈だが………ブラックの生まれ持つた能力も加わつてん
のか？）

ニュートリノ通信は、電波、音波、光に変わる新たな通信方法であ
り、事実上、地球上の何処でも通信が可能となる。

ニュートリノは極めて透過性の高い素粒子であり、今こうしている
間にも空間の中を何兆もの数が飛び交い、地球そのものすらを透過し
ている。

この素粒子は発見された当初からこれを利用しようとする試みは
行われてきたが、他の物質と反応し難いために検出が難しく、検出率
を上げるために科学者は様々な智慧を絞ってきたが、検出する設備が
大型化してしまうのが現実であつた。

その現実を打ち破つたのが、魔界技術である。これにより、検出装
置は一気に小型化。のみならず、ニュートリノ通信を実現させる飛躍

的な技術革新を生み出した。

そのニュートリノ通信ですら遮断してしまう結界の異常さだ。如何に吸血鬼の膨大な魔力でも構築できるかどうか。

結界術に限らず魔術全般は、本質的に科学技術と相性が悪い。根本が異なる技術だからだろう。

人の認識を曖昧にさせ意識を逸らさせる人払いの結界、人の目に全く別の光景や物体を見せる物隠しの結界などは、人の目を介さないカメラなどで撮影して画像にしまえばあつけないほど簡単に見破れてしまう。

無論、科学も万能な訳ではない。『迷い辻』のような結界の内側にある種の異界を形成するタイプには効果を発揮しなくなる。

そして、結界にいくつか共通する点がある。それは内からの耐性を上げる程、外からの力に弱くなる。或いはその逆も然り。

例えば、人払い、物隠しのようなタイプは外から内へと入るのは難しいが、内から外へと出るのは簡単だ。

逆に『迷い辻』や何らかの封印術のようなタイプは内から外へと出るのは難しいが、外から内へと入るのは容易い。

何故なら、前者は外からの侵入を阻むためのものであり、後者は内からの脱出を阻むためのもの。逆への耐性を上げる意味は薄く、無駄な消耗をする必要はない。

ブラックが下ろした闇の帳を、便宜上ナディアは結界と称したものの、根本的に異なる技術であり、異能と見た方が正しい。

(オレ達の取るべき最善手は、依然として撤退である事に疑う余地はない。問題は、紅だ)

ブラックの張った結界に関しては、何とかする術はある。

凜子の空遁、或いは己か災禍であれば、これを打ち破る事は不可能ではない。

問題は紅だ。

彼等の目的はあくまでも不知火の救出であり、この目標を達してい

る以上は即時撤退すべき。

その最中、相手の策略であつたとは言え、暴走して敵に襲い掛かる者を待つてやる必要性などない。見捨てるべきである。

だが、小太郎にその選択肢は取れない。

心願寺家は幻庵から紅へと代替わりする前も後も、弾正による内乱の前も後も、一貫してふうま宗家に仕えている。況してや、小太郎と紅は幼馴染の関係であるのは周知の事実。

そんな忠臣と言うべき存在を簡単に切り捨てたとあつては、ただでさえ地に落ちているふうまの評判は更に地へとめり込み、小太郎自身の評判も底知らずに下がる。

紅という爆弾がなくなつたと喜ぶ者も居るだろうが、それを内に隠して、独立遊撃部隊の解体やふうまという家の完全な消滅に動こうとするのは目に見えていた。

(まあ、そりゃあ建前で、本音はただの我儘だがな。オレが、紅を切り捨てられる筈もない)

結局の所、オレも弾正も大差はないと自嘲する。

小太郎が紅を切り捨てたくないのは、幻庵から頼みやら、ふうまの進退がどうだのという複雑な理由からではない。単純に、自分の女だから切り捨てない、或いは自分の女が他の連中に弄ばれているのが我慢ならないという欲望に塗れた理由であつた。

自分の女である以上、その肢体も心も全てオレのもの。他人にくれてやるものは一つもない。

何とも愚かで、何とも分かりやすい理屈である。成程、これでは自分の欲望のためにふうまを衰退させた弾正と確かに大差はないだろう。

(問題は、オレ一人残つて何が出来るかつて話。あの戦いに割つて入つて紅を正氣に戻した上、あの二人から逃げる。無理無謀も此処まで来ると笑えるな)

明確な違いがあるとするのなら、小太郎は自らの命を賭ける事に躊躇はない点か。

これが弾正であれば、自分ではなく他人にやらせるだろう。当主の命令に従うのが部下の役割と言わんばかりに。

だが、当主とはあくまでも家の象徴であり、効率よく家を運用するための機構である。役割が違うだけで、当主もまた家を回すための歯車の一つに過ぎない。

その辺りを小太郎は母からの教育でよくよく理解していた。当主としての立場と権利を、己の欲望を満たすために使うのは論外である。

だから、今回もまた己一人で何とかしようと考えている。しかし――

「二」――隊長？「二」

「アツハイ」

――それを見逃すような、彼の女である筈もなく。

ニツコリと微笑みながらも、目が一切笑っていないゆきかぜ、凜子、災禍の三人に気圧され、小太郎はもう何も言えなくなった。

女に対しては欲望塗れの癖に、おかしな所で律儀な彼だからこそ、一生支え続けると決めたのだ。

そして、彼女達は知っている。自分の欲望に正直ではあるが、他者の利益を考えない男ではない事を。

自分の幸せや欲望を真っ先に考え、己で行動するからこそ、周囲の者達の幸せと欲望を満たす事が出来る。人とはそういう生き物なのだ。

であれば、彼の欲望に付き合うのも吝かではない。

「って言うか、紅先輩を見捨てて逃げるとか、対魔忍的にもアウトでしょ」

「そうねえ。私も救助された身としては、忍びないわ」

「私はお前の個人的な護衛だからな、口を出す権利はないが——
見捨てるつもりならばこれまでの関係にさせて貰う」

「紅を助けるのね、頑張るわ!」

「……………クラクル、お前は?」

「……………」

「分かった、もういい」

「な、何ニヤその怖い顔!! 分かったニヤ! 手伝えばいいんニヤ!!」

そして三人の意見は、全員の総意でもあった。

人がいいというべきか。崇高な正義と普遍的な善良さを持つていたというべきか。

クラクルだけはブラツクを前にして涙目でふるふるすると首を振ったが、小太郎の顔が凄まじい勢いで歪んでいく様に、思わず頷いてしまった。

「災禍、お前はこの結界を何とかしてくれ。例のアレを使い」

「御意」

「不知火さんと紫、クラクルはブラツクを抑えてくれ。倒す必要はない。出来るだけ目を引いて、時間を稼いでくれればいい。それから不知火さんにはこれを渡しておく」

「これは…………?」

「ま、奴をおちよくる秘策つてところかねえ」

皆の意思が確認できたのであれば、後は事を成すだけ。

異様な効果と強度を誇るであろう結界を破るべく、小太郎は災禍へと命を下す。

一も二もなく頷いた災禍の姿は自信に満ちている。ある種の切り札が、彼女にはあるのだ。

そして、ブラツクの邪魔を防ぐべく、不知火、紫、クラクルに相手を任せる。

オールラウンダーの不知火、近接戦闘に優れた紫とクラクルにしか
熟せない役割だ。

そして、不知火には元より使うつもりだった何かを渡す。

不知火はそれが何かは分からなかったが、小太郎のすつとぼけた言
動から碌でもないものだという事だけは確信した。

「ナディアは後方で三人の強化。できるな？」

「ええ、任せてちょうだい！ 三人には傷つけさせないわ」

「で、私はナディア殿の護衛と、空遁で三人のサポートをしつつ、離脱
の機会を伺うのだな。任せろ。それから災禍殿、手を」

「何だ、凜子？」

「以前から考えていた使い方ですが、まだ成功はしていません。信じ
て頂けますか？」

「言うまでもない。今は、どんな手を使ってでも生き延びねば」

災禍は差し出された手を取った。それが如何なる意味を持つてい
たのか、理解できていなかったが迷いもなければ疑問も口にしない。
敢えて聞くまでもない信頼が其処にはあった。それほどまでに凜
子は努力を重ね、成果を上げてきたのだ。

「ゆきかぜ、お前はオレと来い。吸血鬼娘の横っ面を引っ叩きに行く
ぞ」

「了解。勝手した紅先輩にはお仕置きしなくちやだからね！」

（お仕置き（意味深）な気がするが、黙っておこうね、うん！）

ゆきかぜは二丁のライトニングシューターをくるりと手の中で回
転させる。

口調の軽さに対して、表情は硬い。当然だ、今から飛び込んでいく
のは正に大嵐。踏み込む場所を、踏み込む瞬間を誤れば、即座に死へ
と繋がる文字通りの死線。如何にルーキーと言えども荷が重い。

対して、小太郎に必要以上の緊張は見られない自然体。

この程度は慣れている。飛び抜けた才能もなく、ただひたすらに鍛錬でのみ強さしかない彼には、一つの修羅場をやり過ぐすにも常に命を掛けねばならない。

何よりも身を以て体験し、知っていた。死から逃れるには、死を前にしても冷静さを保ちながらも、相反する自ら死神の懐に飛び込んでいくような大胆さが不可欠であると。

—そうして、独立遊撃部隊の戦いが始まる。

敵は不死の王とその娘達。如何なる結末を迎えるのかは、まだ誰にも分からない。

闇落ち？ そんな事している暇はないぞ、紅マン！
出撃だ！ と苦労人の弁

「……………」

何処も見えない闇そのものの虚ろな瞳で、自身の前に立ちほだかった存在を見やる。

相変わらず、エドウィン・ブラックは曖昧な状態の中に居た。

その長過ぎる生故に、既に何が現実で何が夢なのか、当の本人もよく分かっていない。あるのは胸に残った妄執と悪意だけ。

発露する言葉や行動も、理性とは掛け離れた妄執の欠片であり、彼の人格とは全く別のところから発せられる反射である。

最早、外界からの刺激に対して反射するだけの存在。それは到底、生きていくとは言い難い。

時折、夢から覚めるように正氣に戻り、生らしい生を謳歌すべく邪悪な策謀を巡らせるが、今はまだ曖昧な状態のままだ。

故に、彼が曖昧な状態で敵に目を向けるとは、それそのものが異常な事態と言える。

それは即ち、彼の人格や精神とは異なる本能が、自身を脅かせる存在が現れた、と認めたようなものだからだ。

「——ふッ！」

ブラックの足止めを任された不知火、紫、クラクルが一斉に踏み込んだ。

彼は確かにそれを眼にしながらも、それが誰であるのかなどと一切認識しないまま、反射のみで迎撃を開始する。

足元の影が爆発的な勢いで膨らみ、爆ぜ、伸びていく。

彼が住宅街の一角に張った闇の帳と似て非なる闇そのもの。上位魔族にとっては標準装備ポピュラーな魔力によって物質への干渉を可能とした不定形の武器が襲い掛かる。

槍の穂先、肉厚の斧、鋭利な刃。あらゆる形を取る闇は、人体を用意に切断する程の硬度を保ちながら柔軟で伸縮自在という矛盾した性質を許容して、三者へと向かっていく。

本能とは残酷で無慈悲だ。殊更、戦闘に根差したものであるのなら尚の事。

ブラックの放った攻撃は、紫とクラクルを一撃の元に戦闘不能にし、アサギと並び称される不知火ですら手傷を追わせるほどのものであった。

にも拘らず、不知火は真つ直ぐに伸びる槍の如き一撃を得物の薙刀で容易に捌き、紫は頭頂に振り下ろされた斧を拳で殴り返し、クラクルは剣士のそれに劣らない一閃を掻い潜る。

明らかに実力以上の実力を発揮する敵に対し、ブラックの戦闘本能に困惑は皆無であった。

彼女達が纏う魔力は、明らかに彼女達のものではないと感じ取っていたからだ。その源は自身に匹敵——いや、超える程の存在から供給されている。

「身体に負担は掛かるでしょうけれど、こうでもしないと」

ブラックの視線が向けたのは三人の遙か後方、如何なる攻撃であっても迎え撃つべく、刀を正眼に構えて微動だにしない凜子の背後で舞うナディアであった。

人界のそれとは全く異なるリズム、全く異なる踊り。冷静と情熱、妖艶と爛漫、相反する要素を多く兼ねた舞は驚くほど美しい。

美しさとは兵器だ。もし、街中で彼女が踊り出せば、自ら仕事や目的を忘れて見惚れてしまう事だろう。そして、美しいと思ったものを攻撃する事は、真つ当な精神を持つ者には難しい。

尤も、今や本能と妄執がなく、元的人格からして美醜の感覚など

常人とは掛け離れたブラックには、単なる排除の対象でしかなかった。

彼女の強大な魔力を伴った踊りは、他者を命を活性化させ、従来では考えられない回復力を齎し、身体能力を強化する。

それを知識も記憶もなく感じ取ったブラックが、排除の優先順位を恐れずに向かつてくる三者からナディアへと切り替えるのは至極当然の流れであった。

「やらせると思っっているのかしら……?」

であれば、知略に通ずる不知火に読めぬ筈もなく、また邪魔をする手段も用意できぬ訳もない。

己の生み出した闇でナディアを両断すべく伸ばし掛けた手が、ピタリと止まる。

無理もない。先程までは存在しなかった筈の軍勢に囲まれば、如何に本能しか機能していない者であっても驚愕から行動は阻害されるよう。

軍勢はざつと三十。無論、小太郎が用意した伏兵などではない。ヨミハラに彼が利用しようとする戦力など存在しない。

それぞれが、不知火の形をしているものもあれば、紫の形をしているものもあれば、クラクルの形をしているものもある。

「こういう使い方は、得手ではないのだけどね——!」

ブラックの猛攻が途切れた瞬間、不知火は二本の指を立てて印を結んでいた。

種を明かせば何の事はない。軍勢の正体は、不知火の水遁によって生み出された精巧な水分身だ。

彼女の言通り、得意とする使い方ではない。

幻影の対魔忍の名が示す通り、水蒸気や水滴を使った視覚を騙す幻

惑こそが本領であり、こうして物理的に存在する偽物を作り出した上で持続させるのは不得手ですらあった。

通常であれば、生み出せて精々が二体から三体。此処まで精巧な外観を作り出すとなれば一体が限度。それも細かい操作な不可能であり、自身から5mも離れると途端に形を成さぬ水へと還ってしまう。

本来の不知火ですら成し得ぬ芸当を可能としているのは言わずもがな、ナディアの踊りであった。

彼女の踊りによって齎される強化は、身体能力ばかりでなく、忍法にまで及んでいるのだ。

その実体を持つ分身が、操り手の意思に従うまま一斉に敵へと飛び掛かる。

いわゆる強者であっても、数に責められては分が悪い。対魔忍でも、この波状攻撃を切り抜けられるのは片手で数える程度しかあるまい。

されど、其処は吸血鬼の始祖。圧倒的な生物的格差で一蹴してしまう。

「う、おおおおお——ッ!!」

「猫パ————ンチッ!!」

水分身は彼の足元から伸びる闇によって切断され、潰され、弾けては次々に単なる水へと戻され、その度に再び形を成して向かっていく。

そんな無限に続く千日手の如き光景の中を、本物の紫とクラクルは分身の迎撃で生じた隙へと踏み込んだ。

「————ぐっ!?!」

「うニャあ——!?!」

ブラックに届こうとした拳と爪は、されども盾のように広がった闇で弾かれた。

二人は其処で無理に攻めようとは考えず、即座に後方へと飛び去り、或いはブラックと擦れ違うように駆け抜ける。

紅を連れ戻しに向かった小太郎からの助言がよく効いていた。

『いいか、そっちの役割は時間稼ぎだ。無理に攻める必要はない。常に一撃離脱で構わない。奴は身体を霧に変えて人の体に乗っ取ると言う報告もある。どっち道、ブラックに対して近接は愚策だが、持ちが近接しか出来ない奴が中心で時間を稼ぐだけならそれでいい。なるべく死ぬなよ』

幸いな事に、ナディアの踊りの加護によって身体を乗っ取られる心配はないが、それでもなお厄介な事に変わりはない。

ブラックの攻撃性能は段違いだ。生み出される殺傷能力も、範囲も文字通りの桁違い。紫もクラクルも怪我こそしていないが、状況的には首の皮一枚で繋がっているようなもの。

まるで細い糸の上を全力疾走するような芸当だ。そんなものが長く続く筈もなく――

「うニャー——————!?!?」

「——拙い!」

――攻撃のために飛び掛かったクラクルの片足を、触手に変形した闇が絡め取る。

空中で逆さ吊りにされたクラクルを一瞥したブラックの足元からボコリと肉が盛り上がるように何かが生み出される。

それは闇と繋がったまま、獣の頭部のような形状を取った。目こそ存在していなかったが、伸びた鼻は明らかにイヌ科の肉食獣に似ていた。但し、クラクルを一噛みで胴体から真つ二つにできるほどの巨大さである。

存在しない筈の魔獣を眼にしたクラクルは涙目になって悲鳴を上げ、必死に抵抗するものの意味を成さない。

不知火も分身はあくまで攪乱を目的としたものであり、助けようにも助け出すだけの力はなく、自身も僅かに離れた位置に居るため間に合わない。

「ぬう、ああああああつ！ 避けるよ、クラクル——！！」

「ちよ、まつ——ニ、ヤあ、ああああああつ！！」

クラクルの窮地を救ったのは、紫であった。

生真面目な彼女が魔族を自らの意思で救うなどあり得ない話であるが、相手がブラックである以上はそうも言ってはもらえない。

その上、その方法は圧倒的な力業であった。

紫は目の前にあつた街灯の一本に両腕を巻き付けると、ただの膂力だけで地面から引っこ抜く。

重量が明らかに数百キロに至ろうかという、長さが5mに至ろうかという巨大な物体を、金属バットをフルスイングするような勢いで振り抜いた。

先程とは別の死を察知したクラクルは今度は大粒の涙を流しながらも、身体を限界以上に振り返らせる猫らしい柔軟さで、鼻先を掠めていく街灯を回避した。

振り抜かれた街灯は魔獣もブラックをも巻き込んで、道の片側にある家屋に激突し、壁面の一部を大きく崩壊させた。

「何するニヤ!! し、し、し、死ぬかと思ったニヤー!!」

「喚くな！ 此方としても手段がなかったんだ！ 生きて仕切り直しできるだけでも十分だろう」

「……………」

「クソツ！ 少しは痛がれ、化け物め！」

逆さ吊り状態から開放されたクラクルは紫と共に距離を取って抗議を向けるが、当の紫は必死も必死、あれ以外に手段はなかったのである。

それでも、ブラックは無傷であった。

街灯が身体に接触する直前、身体を霧に変えて紫渾身の一撃を回避したようだ。

敵を殺すという点においても凶抜けているが、身を護るという点においてもインチキ染みた能力を有している。その上、周囲を封鎖した不可思議な能力まである。このままでは性能差に磨り潰されるのは時間の問題だ。

（好機！）

台風が通り過ぎる中でも綺麗な空模様が覗ける瞬間があるように、戦いにおいても不意に静寂が支配する瞬間は訪れる。

刹那の停滞、両者が呼吸を整える一瞬、無意識の同調——策謀を巡らせるものに、これほどの狙い目はない。

それを見逃さなかった不知火は、戦いが始まる前に小太郎に渡されていたものを使う機会が訪れたと判断した。

何なのかを聞く時間はなかった。ただ、指定されたのは使用するタイミングと使い方。

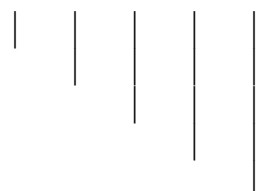
戦いが始まってから5分後、オレの姿を模倣した分身で使ってくれ、というものだった。

数多く創り出した分身にそれを持たせ、分身の手から手へと渡しながらブラックには気づかれないうまま徐々に近づけていった。

時間的にも問題はなく、分身を創るにも操るにも問題ない一瞬に、何の問題もなく小太郎の用意した秘策を起動させる。

『

それは果たして、如何なる威力を秘めているのか。まだ彼女達には知る由もない事である。



不知火が好機を得るより数分前。

小太郎とゆきかぜは、戦いながら住宅地を移動する紅とフェリシアの後を追っていた。

「さて、勇んで来たはいいが——ゆきかぜ、何とかしてくれ」

「むり、しんじやう」

「おれもしんじやう」

戦いの影響によって倒壊した家屋の影から戦いを見守っていた二人は、揃って弱音を吐く。

無理もない。吸血鬼の真祖、その娘の移動した後は戦場と言っても差し支えない惨状であった。

武器と身体に魔力を纏い、ただ振り回して移動する。たったそれだけの行為で、既に十数もの家屋が倒壊して瓦礫と化した。正に人型の竜巻と言えよう。

「が、ああああああああああ——っ！」

「——うふ、ふひひ、ひひひひひひひひっ！」

(こっわ)

片や、獣の如く憎悪の咆哮を叫びながら。

片や、純粹な狂気で沸き起こる笑みを浮かべながら。

全身を叩く荒れ狂う魔力の波を浴びた感想は、何処か気の抜けたものだった。

油断はない。隙もない。緊張もしているし恐怖もあるが、余裕だけは失ってはいない証拠。小太郎は母からの教育、ゆきかぜはその小太郎からの指導によって得たものだ。

余裕があるのは当然の事。二人には己に何が出来るのか、何が出来ないのか自覚がある。

自身の限界という境界線が見えている故に、後は成すべき事を成せばいいだけなのだ。非常に優秀な精神状態だ。緊張しすぎても、或いは緩み過ぎていても成否の天秤は否の側へと傾くものだ。

「どうするの?」

「コレを使います」

「うーん、最早小太兄のお家芸。これからボンバーマンって呼んでもいい?」

「好きにしろよ。ふうまのボンバーマンかー。入力ミスったら自爆するのも間違っちゃねーし。一番良いだろ、実際。あの中に同時に突っ込んでいっても揃ってお互い細切れだぞ。二人の距離を離れさせるにはコレですよ」

「で、離れさせている間に小太兄が紅先輩をどうにかして、私があの子○イ娘を足留めと。うふふ」

「なあに、笑ってんですかねえ。割と洒落にならない事態だぜ?」

瓦礫の影へと顔を引っ込め、そのまま背中を預けて手筈を確認する。

自分とゆきかぜの間に、どんと置いたのは言わずもがな遠隔操作で起動し、即座に爆発する爆弾であった。

それを見たゆきかぜは呆れとも冗談ともつかない言葉を口にし、これからの行動に薄っすらと笑みを浮かべる。

「だって、好きな人と危ない橋を渡るって、ちよっと嬉しいかも」

「頼もしい事で。良かったよ、お前が適度にイカれてて」

「そうかなあ? でもあの娘も気に入らないし、結構モチベーション

も高いかも?。」

「そうかい。どうせ全力でやっても殺せねーだろうし、吹っ飛ばしていいぞ」

「りよーかあい。じゃ、やっちゃおうか」

「へいへい——そらよ、つとおー!」

ゆきかぜの発言に呆れた顔で答えた小太郎であったが、同時に頼もしさを感じていた。

対魔忍は常に死と隣り合わせ。それ以上に酷い結末などいくらでも存在する。心願寺 楓などその最たるものだ。

自分だけではない。闇の住人に食い荒らされた犠牲者を横目に、闇の住人を殺さねばならない事もある。仲間にその覚悟を強いねばならない場面もある。

誰かがやらねばならないとは言え、不快な仕事だ。ある程度のイカれ具合と続けていくためのモチベーションは必要不可欠。その点、ゆきかぜは満点をやつてもいいほどだ。

同時に、ゆきかぜは確かな喜びを静かに噛み締めていた。

発言の是非は兎も角、小太郎の力になれている事実は、彼女にとっては何よりも嬉しい。

これまで小太郎の何も知らず、これからは違おうと誓った身。本懐を遂げているようなもの、これまでのどの任務よりも強い動機で満ちている。

——何よりも、ゆきかぜは一目見た瞬間からフェリシアの事が気に入らなかつた。

ゆきかぜが思うに、フェリシアと己は似た者同士。

愛する者のためならば何をも犠牲に出来るだけの狂気を有している。表に出ているか出ていないか、冷静であるか否か、愛する者以外も思っているかそうでないかの違いでしかない、と彼女は断言する。

其処に決定的な違いがあるとするとするのなら一つだけ。そのたった一つの違いが、同族嫌悪の伴った怒りが心の中に隆起する。

フェリシアはゆきかぜよりも強い。

それが性能差、種族差から導き出される一つの結論だが、強いからと言って勝負に勝てる訳ではない。殊更、あらゆる行為が黙認される殺し合いでは、その傾向は顕著だ。

以前までのゆきかぜならばいざ知らず、現在のゆきかぜであれば、十二分に任せられると判断した小太郎は、用意していた爆弾を放り投げた。

「——っ!?!」

タイミングは完璧だった。

大鎌の一閃を武器で受けた紅が大きく身体を弾かれ、追撃すべくフェリシアが地を蹴ったその瞬間、二人の間に小太郎の投げた爆弾が落下する。

二頭の凶獣が何かを理解するよりも早く、凄まじい炎と風が生み出される。

無論、この程度は魔力で保護された二人にダメージなど与えられる筈もない。それほどまでに、ブラック真祖の直系という強味は凄まじい。

だが、決して無敵ではない。まともなダメージは入らないが、質量が変わる訳でもなければ、身体を霧化させねば爆風までも無効化できはしない。

「——っ!?!」

「ぎゃあんっ!?!」

女性らしい軽い体重は物理法則に従うまま、それぞれが逆方向に身体を吹き飛ばされ、背中から地面へと叩き付けられた。

「あー、もう何なのお!」

「悪いけど、暫く私に付き合っって貰うから」

「チツ……………ふーん、ふえりの邪魔するんだ。薄汚い、ただの人間の分際で」

「そうだけど？ 女としての格の違い、教えてあげる」
「はあ？ ああ、もう、うざいっ！ うざいうざいうざい！ うつざいっ！！」

子供そのものの癩癩を見せるフアリシアに対して、ゆきかぜはライトニングシューターの銃口を向けたまま宣戦布告する。
その意味合いを理解できないフェリシアは癩癩のままに襲い掛かる。こうして、女の戦いの火蓋が切つて落とされた。

「うらあ——！！」

「ぐがあ、ああっ！」

一方、小太郎は倒れ伏した紅に馬乗りになり覆い被さっていた。

二人の間に横たわる戦闘力は凄まじい開きがある。何もさせずに封殺するしか、生き残る術はない。

首と胴が斬り分けられる事を避けるため、小太刀の握られた両手首を地面に押さえ付ける。

「ぐっ、このっ、馬鹿力しやがつてえ……！！」

「——っ！！」

だが、圧倒的に優位な位置を取ったというのに、憎悪に染まった表情のまま紅はただの力で押し返していく。

押さえられた手首と上体は徐々に徐々に持ち上がり、小太郎がどれだけ力を込めようとも、反対に押しやられる。

逆転はあつという間であった。

紅が身体を返すと小太郎との位置が逆転する。紅は上に、小太郎は下にと。

それでも、小太郎は手首だけは離さない。小太刀が振るわれる事態を避けさえすれば、後は思惑通りになる確信があったからだ。

「——はああっ」

(来やがったか……っ！)

彼が如何なる理屈で、いずれは磨り潰されるしかない近接を選んだのか。それは吸血鬼という種族自体の話をせねばなるまい。

多くの者は吸血鬼に対して恐ろしいイメージを持つに違いない。

重機の如き膂力。姿形を自在に変える変身能力。頭を吹き飛ばされようが心臓を抉られようが再生する治癒力。無尽蔵に配下を増やしていく吸血行為。どれを取っても人とは段違いの驚異であるのは疑いようがない。

だが、明確な弱点も存在している。それは、燃費が悪い点だ。

無から有は生まれない。彼等が吸血という行為を必要とするのは、生命力を直接取り込む方式でなければ、自身の代謝に生命力の供給が追い付かない。

理不尽なまでの能力の数々は、他者の命を燃料として消費するという行為がなければ成立しないのである。

そして、吸血鬼にはそれぞれ蓄えておける生命力に限度がある。

他種族から吸血鬼となったものは精々が十人から二十人分。生まれながらの吸血鬼は三十人から五十人分。貴族階級ともなれば有に百を超えるだろう。

無論、例外も存在する。それが、吸血鬼共の始祖ブラック。

ブラックは元より吸血という面倒なプロセスを踏まずとも、触れなのままに生命力を吸い取る真似が出来る。そもそも、不滅を謳う怪物だ。生命力を吸い取る必要性もあるか甚だ疑問である。

その娘であるフェリシアも紅も、同様に吸血という行為は不要かもしれないが、半分は人間である以上、その力が何もしないままに無尽蔵という事だけはない。

少なくとも戦闘を行えば、力を消耗する。況してやそれが同格との戦いであればどうか。その消耗は人体とは比較にならないものであるのは間違いない。

そんな存在が、両腕を塞がればどうするか。

最早、憎しみに目を曇らせた紅は、目の前に居る人物が己にとって
どれだけ大事な存在であるかなど分らない。

憎悪に支配された紅にとって重要なのは、フェリシアとブラックを
殺す事。だと言うのに、現実には未だに殺せておらず、なおかつ自身は
消耗している。

本能が導き出す答えは一つだ。考えるまでもない。哀れな獲物に、
その牙を突き立てるに決まっている。

「——っ」

「……んぐっ、ぐぐっ……んんっ、れる……」

ぞぶり、と音を立てて首筋に犬歯が突き刺さる。

甘く熱く濃厚な生き血の味に憎悪で染まっていた両目すら恍惚に
蕩けさせ、一心不乱に啜り始める。初めての吸血行為に、歓喜で全身
がぶるぶると震えていた。

じわじわと自身の命が失われていく感覚を味わいながらも、ヘル
メットの下で会心の笑みを浮かべる。

食事とは本能に根差した行為。感情よりも遥かに命と深く繋がっ
ている。どれだけ怒りと憎しみに捕らわれたとしても、腹は減るし眠
くなる。

そして、そうして食欲睡眠欲性欲のどれか一つでも満たされれば、
満足感を覚える。満足感とは即ち幸福感と同時であり、満ち足りた気
分、幸福な気分は心に余裕を生むものだ。

だからだろうか、紅は聞こえる筈のない声を聞いた気がした。

『よいのか、紅。お前は、それでよいのか？』

悲しみに沈む嗚がれた声を。

聞き慣れた、老いた声色。何時だって、大きな悲しみを飲み込んで、
己を一番に考えてくれたの老人の声を。

『そのままでは、また大事な者を失ってしまう。お前は、それでよいのだな』

気がつけば、虜になっていた血の味すら忘れ、顔を上げていた。

その先には、もう居るはずのない人が立っていて、悲しげに眉を寄せながらも信頼の笑みを浮かべる。

『さあ、戻るのだ。儂は何時でもお前を信じ、見守っておる。だから儂が信じ、お前が愛した若者の元へ——』

「……う……あ……」

『——戻れ、紅』

「紅！ 紅っ！ 戻ってこい、この馬鹿っ!!」

絞り出そうとしても声が出ない。血よりも熱いものが頬を伝っている。

目にしたそれが何であるのか、紅には判然としなかった。都合の良い妄想であったのか、或いは彼女の窮地に死人が迷い出たのか。

老人の最後の一言は、自分の愛した者の声で掻き消されてしまった。胸に残っているのは悲しみと不甲斐なさと罪悪感。

それでも紅は帰還を選んだ。祖父がそれを望むのなら。愛した者が自分を望むなら、と。

やられたらやりかえす、倍返しだ！　なお、苦労人は特に何もしない模様

「きゃっはははははははははは！　なによなによ、なによそれ！　かつこつけて出てきた癖にだっさくくくくくい！」

「チツ、ろくに訓練なんてしてないでしょうに、これだもの。魔族ってホント嫌い」

術理もなければ技もない。

ただ膨大な魔力を乗せた一撃を振り回し続ける。たったそれだけ。たったそれだけの子供の癩癩のような行動だけでフェリシアはゆきかぜを圧倒していた。

既にライトニングシューターの一丁は粉々に砕け散り、残る一丁で応戦するのがやつとという在り様。

悲しいが、これが現実だ。

どれだけの修練を積もうが、結局は人と吸血鬼ではスタートラインが違う。況してや、相手はブラックの直系だ。どれだけ怠惰に生きようが、どれだけ悦楽に耽ろうが、生きて呼吸をしているだけで強くなる。

人は常に魔族の後塵を拝している。極々一部の例外を除き、その力も、技術も、智慧も等しく劣っている。如何なる対魔忍でも、それは変わらない。上位魔族であるのなら尚の事。彼等の戦いは常にそうだったものなのだ。

故に、ゆきかぜに苛立ちこそあれ、動揺は皆無。

始めから分かりきっていた事柄に心を揺らす必要など何処にもない。

出鱈目に振り回される大鎌の斬撃を後方に下がりながら、回避する。ライトニングシューターの一丁を破壊された以上、それしか武器

を持たない彼女に防御という選択肢はあり得ない。

事此処に至つてもなお、フェリシアは目の前の異常事態に気付いていなかった。

これまで戦いの中で思考などした事は一度たりとてなかった。当然だろう、何も考えずに生まれ持った力を使うだけで、相手はただの犠牲者になったのだから。

故に彼女は気付かない。これだけの性能差がありながらも、未だにゆきかぜを殺せない、という異常事態に。

（―――此処！）

「だから、弱いのにうざいんだよおおおお!!」

狂気に任せて踏み込み、大鎌を振り回すフェリシアに照準を合わせ、ライトニングシューターの引き金を引こうとした。

だが、標的は一度は隙きだらけの大振りで大鎌を振り抜いたにも拘らず、ゆきかぜが引き金を引くよりも早く返す刃で残った一丁を粉々に粉碎する。

尚もゆきかぜは冷静だ。ライトニングシューターを碎かれた瞬間に合わせて、大きく後方に飛び退いた。

「―――ふう」

「チツ、ほんとちよろちよろちよろ、うざったい！」

一時的に硬直した戦況の中、フェリシアは苛立ちと優越の狭間に立っていた。

さつさと紅を殺したいのにそれが出来ない現実。武器を破壊して勝利したも同然の状況。

相反する感情に挟まれ、彼女は生まれて初めてストレスを感じていた。

生まれ持った力に対して幼すぎる精神は不愉快な精神状態から一刻も早く脱出すべく、眼の前の敵を無意識の内に紅以上の排除対象と

して認識している。

その稚拙さに、ゆきかぜは優越感から口の端を歪めて笑っていた。

「何が可笑しいわけえ？　これから死んじゃうって言うのに」

「別にいい？　確かに死ぬかもしれないけど、私の方が勝ってるって分かったから。女として」

「はあ……？」

意味が分からない。鼠のように逃げ果せるばかりだと言うのに、一体この女は何を言っているのか。

単なる負け惜しみだと思うと同時に、心の何処かでそれ以上喋らせてはならないとも感じていた。またしても増えた相反する感情に、精神的な苦痛は更に募り、苛立ちを増していく。

状況だけ見れば、フェリシアとゆきかぜの立場は明白だ。まだ明確な勝敗は決していないが、数秒後にはゆきかぜは惨殺されるだろう。

だが、見る見る変化していくフェリシアの表情に、ゆきかぜの優越は更に高まっていく。

「どうして私を無視して紅先輩のところに行かなかったわけ？」

「はあ？　アンタが邪魔してきたからに決まってるじゃない」

「嘘ね。アンタなら私を無視して行く事も出来た。でもそうしなかった。それは何故？」

ニツコリと微笑みながらの問い掛けに、フェリシアは苛立ちを募らせながらも自身でも説明できない理由でジリと一歩だけ引いた。これまで、前に進む事しか知らない筈の娘が。

ゆきかぜの優越——その根本は理解と確信にあった。

無論、小太郎のように人の行動や仕草から、心の内を透けて見るような真似は彼女には不可能だ。だが、極々限られた状況ではその限りではない。

「結局さ、アンタはあのみつともなくて傍迷惑なパパが好きなんじゃなくて、パパが好きな自分が好きだけなんじゃないの？」

「何言ってるか、ゼーんぜん分らない。だって私はパパのために、私が一番だって証明して見せるんだから！」

「だから尚の事おかしいでしょ、その理屈。だったら、私よりも紅先輩を何よりも優先しなくちゃ、その理屈は通らないじゃない」

其処で初めて、ゆきかぜは優越以外の感情を表に出す。それは明確な嫌悪と侮蔑だった。

「その力以外に何も持ってない。自分にそれ以外何も無いから平気で他人を殺すし、それを見せびらかそうとする。アンタの行動はゼーんぶ自信と自分の無さの裏返し」

「このお……っ！」

「その癖、自分が可愛くてしょうがない。でも一人は嫌だから、パパに縋る。本音を言えば、縋れるならパパ以外でもいいんでしょ？ 自分が可愛いから他人に構って貰いたい。人を見下してるのは自分が化物だからって愛して貰えないのが分かってるから遠ざけたいだけ」

「……——さっ！」

「そんなの恋でも愛でもない、単なる我が身可愛さってヤツ。恋なら打算なしで相手を夢見て、愛なら打算込みで相手の現実を見るもの。私は好きな人がいる。その人に自分を好きになって貰いたいし、その人以外に好きになられたって嬉しくも何ともない。そのためなら何だってするし、その人は絶対に逃さない。お互いの事、ちゃんと考えないとね」

「うる……さいっ！ うるさいうるさいうるさいッ!!」

「アンタも、大好きなパパも、お互いにお互いを見ていなさすぎてお似合いよ、ご愁傷さま」

その言葉を何一つ理解できていないし、認めてもいない。あくまでも、ゆきかぜの視点から見えたものをゆきかぜの言葉で語ったに過ぎ

ないからだ。

それが的を射ているかは別として、フェリシアにとって癪に障った事だけは間違いない。紅と言う優先順位を完全に後回しにしても、不愉快極まるアバズレを殺してやると抑える事の出来ない殺意と魔力と迸らせて、真つ直ぐに踏み込んだ。

一刻も早く、一瞬でも速やかに。ゆきかぜの首を落とし、生意気な顔を腐敗させ、彼女を愛した者ですら目を背ける無惨な姿へと帰るため、馬鹿正直に真正面から。

とてもではないが、ゆきかぜの身体能力では回避できない速度。

されども、己の思惑通りにフェリシアを動かさせた事実には、会心の笑みを浮かべて両手を伸ばす。

「喰らいなさいッ！」

「——いっ！」

ゆきかぜの叫びに共鳴するかの如く、フェリシアの背後からゆきかぜの両手に目掛けて二筋の雷撃が奔る。

背後からの攻撃を一切警戒していなかったフェリシアは、全身に奔った制御の効かない痙攣と痺れに全ての行動が阻害された。

雷撃が放たれたのは、粉々に砕かれた筈のライトニングシューターからであった。

やくさのいなづま　なるいかづち
八色稲妻・鳴雷。

ヨミハラに足を踏み入れる際に見せた黒雷くろいかづちと同様の、新たなバリエーションの一つ。

言わば、設置型の攻撃だ。自身の雷撃を溜めておける金属などに撃ち込み、ゆきかぜの意思に呼応して多方向かつ時間差で敵に攻撃を仕掛ける捌め手。

現状の難点は、あくまで設置した物体からゆきかぜの掌に向けての一直線にしか放てない点であるが、強力な雷撃が視界の外から飛んでくるのは、相対した者にとっては悪夢でしかない。

今回は、優秀な触媒であるライトニングシューターを利用した。

アレはあくまでも制御装置。過剰な電撃を吸収し、ゆきかぜの自傷を防ぐ目的で開発されたものだ。設置しておくのに、これ以上向いたものは他にあるまい。

「このお……くらいでえ……!」

「でしようね、だからもう一発!」

ドン、と空気そのものを鳴動させる雷の威容が顕現した。

目を焼くほどの放電現象。無数の火花が散り、緑の稲妻が奔る。その全てがゆきかぜの前に突き出した両手の間に向かって収束していく。

これこそが単純な火力ならば最強とされる雷遁の極地にして、ゆきかぜの放てる最大火力。

今までならば、身を焼くほどの火力はライトニングシューターという制御装置がなければ壮絶な自爆しか待ち受けていなかったが、八色稲妻を身に着けていく過程でゆきかぜ自身の制御能力は飛躍的に高まった。

最早、ゆきかぜにライトニングシューターという外付けの制御装置など必要ない。雷神と呼んでも遜色のないほどの忍法と力は完全に近い形で彼女の掌に収まっている。

それでもなおライトニングシューターを使い続けるのは、手に馴染むという理由もあったが、それ以上にブラフとして使える面があったからだ。

『いや、折角だから使えば？ ライトニングシューターを使つてれば、それさえ奪えば攻撃手段が無くなると思ひ込むだろ？ これまで売れてきたお前の名前と評判を逆に利用する。能力が知られている、というのそれはそれで牽制やブラフに利用できる。有効活用している』

『はえー……そんな事、考えた事もなかった』

『ゆきかぜさん、考えてこう！ お前ら、思考停止しなきゃ本当に怖い』

んやぞ！ 戦いようによつてはアサギにも勝てるんだからよお！
頼むから思考停止だけは止めてくれ！』

尤も、その発案は小太郎によるものであったが。

自身は何ら忍法を使えぬ目抜けであるが、情報の価値と重要性を理解し、暴かれてしまった情報を逆に利用する術を知っていた。

今や、ゆきかぜは真正面から雷撃を放つだけの小娘ではない。

ブラフをかけ、搦め手まで使う。元々小悪魔めいた性格をしていたが、これでは敵対したものにとつては本当の悪魔にしか見えまい。

「トールハンマー
雷槌の術!!」

ゆきかぜの気迫と共に、雷鳴が迸る。

放たれる緑の極光は術の名の通り、雷神の一撃の如く全てを飲み込み、焼き尽くし、万象の一切を塵へと帰す。

既に食らった電撃によって硬直していたフェリシアに霧になつて逃げる余地も、防ぐ余力も在りはしない。口から出た悲鳴すらもゆきかぜの放つ最大火力に飲み込まれていく。

目を焼く光がブラツクの張った結界の内側に満ち、太陽の届かないヨミハラが真昼になつてしまったかのようだ。

雷鳴が遙か遠方までその音を轟かせるように、空気の鳴動が何処までも長く、何処までも伸びていった。

「ふう、こんな所かな。でも、生きてるか死んでるかキツチリ確認出来ないのは困りものだよね、これ」

後に残ったのは、自らの失敗を悟り、片手で顔を覆うゆきかぜだけ。射線上の家屋と地面は綺麗に蒸発しており、残った残骸からは炎を上げて燃えるばかり。

確かに驚異を退けたし、今の一撃は自らの最大最強の一撃であったと確信しているが、相手はあのブラツクの直系の娘。例え、肉片一つ

からでも再生するであろうし、下手をすれば肉片すらも必要ないかも知れない。

それでも当分は再生は効かない。出来たとしても、時間がかかる。それだけの手応えはあった。少なくとも、ヨミハラを脱出するまでの間は。

「ゆきかぜっ!」

「紅先輩……! 小太兄やっただっ!」

「すまない、私のせいで……それに、小太郎も……!」

「———今はいいです。そういう諸々は後でたっぷり。私だって、あんな事されたら冷静じゃいられないから」

先の一撃でゆきかぜを見つけたのか、褐色の肌と深紅染まった装束をそのままに理性を取り戻した紅が、小太郎に肩を貸しながら現れた。

二人の無事を目にしたゆきかぜはパッと顔を輝かせたが、自らの行いを悔やむ紅に、優しげな表情を浮かべて慰める。

紅の目は赤く腫れており、少し前まで泣いていたのは明らか。それほどもでの後悔を抱いているのなら、ゆきかぜから語る言葉はない。己と同じ男を愛した者として、信じ、受け入れるだけだった。それよりも気になったのは、小太郎だ。

顔は土色、自らの力だけでは歩行も困難なのか、ぐったりとして死人のようだ。最早、喋る気力すら残っているかどうか。

目立った外傷は見られないが、首筋から流れる血に、どんな無茶をしたのか一目瞭然。

「———んっ♡」

ゆきかぜは何も言わないまま、両手で包んで顔を上げさせる。

言葉も出てこない。呼吸すら苦しい。そんな状態であったのであろうが、開いている片目から光だけは消えていない。

冷酷だが、よくやったとでも言いたげな優しい光が宿った瞳が、ゆきかぜは堪らなく好きだった。

その気持ちを言葉にせぬまま伝えるべく、唇を触れ合わせる。

「元気でた？」

「……………む」

「む？」

「ムラムラ、……………します……………」

「あはは！ 流石、小太兄！ 性欲消えてないなら大丈夫だねっ！」

冗談なのか、本気なのか。

ともあれ、自分の女に対しては欲望を隠しもしない上、性豪そのものの彼の発言である。こんな死にかけの状態で性欲が消えていないのなら、確かに安心できよう。

彼をこんな状態にしてしまった紅にしてみれば、笑えばいいのか泣けばいいのか分からない。

だが、ゆきかぜは快活に笑う。本当に、心からの笑みだった。紅の後悔を吹き飛ばし、小太郎に活を入れるような笑みだ。

「それで、この後のプランは……………？」

「ブラックに、一撃、かますぞ……………紅、お前の番、だ……………やれ、るな……………？」

「確かに、あつちの方もそろそろ戦況が動くかもね」

「今なら、いける……………幻庵が、オレに語って聞かせた人魔合一……………不完全だが……………不意を打てれば十分過ぎる……………見せてくれよ、心願寺の秘奥義——幻庵の入れられなかった必殺を」

「——ああっ！」

「……これは」

時は少し遡る。

小太郎から結界の始末を任せられた災禍は、その最端に辿り着いた。

幸いな事に、淫魔王と弾正は速やかに撤退を選択し、フェリシアもブラックもノマドの幹部を伏せている様子もなく、障害らしい障害はなかった。

問題であったのは結界だ。

光すら飲み込む闇の壁は、内と外を隔てるべく聳えている。

如何なる効果があるかも分からないままでは、触れる気にすらならない。

試しに、近くにあった空のゴミ箱を蹴り飛ばすと、災禍の目に飛び込んだのは恐るべき光景であった。

「消えた……いや、潰れた？ それとも、飲み込まれた、か？」

音もなく、一瞬で。

結界へと触れたゴミ箱は、この世から跡形もなく消失してしまう。消失の直前に見えたのは、闇よりも黒い壁に触れた部分から元の形状が分からぬほど圧縮されて潰れていく様だった。

災禍が預かり知らぬ事実であるが、この結界は重力の塊。

これがブラックの能力の一端にして本質。現実にはあり得ない話ではあり、物理現象にあつてはならない事実であるが、この結界はブラックホールと同質のもの。

周囲に全く影響を与えないまま、内と外を事象の地平面を顕現させ

る究極の遮断にして防御。

これを打ち破るには、ブラックと同じ起源を持つ――

「何はともあれ、結界であれば問題ない。これだけ強力であれば、僅かでも穴があれば後は自壊する」

この場にブラックか、或いはブラックの本質を知る者が居れば、何を馬鹿など笑っただろう。

この場に災禍の忍法を知る者が居れば、馬鹿な真似を止めると、制止の声を掛けただろう。

どちらも当然の事柄。

ブラックの能力は完全に近く、災禍の忍法はあくまでも相手の視界と意識を手中に収めるだけ。これから行われる行為は無駄でしかない。

しかし、何事にも特例は存在する。如何なる分野においても、どれほど調和に満たされた世界でも、例外は生まれ落ちるものなのだ。

「……………」

それは対魔殺法――いや、それも厳密には正しくない。

対魔殺法とは、対魔忍によって長い時間を掛けて練り上げられた必殺の業。

ふうま一門が目覚める邪眼、ゆきかぜの雷遁、凜子の空遁などとは異なり、固有の忍法には左右されず、長い時間を掛けて受け継がれて、洗礼された武の極み。

一族の奥義として受け継がれるものもあれば、対魔忍内部で広く知られて体得されているものもある。

故に、これから災禍が放とうとしている業は、対魔殺法とは少し違う。これは、あくまでも個人の特性を解き明かしたものだからだ。

その特性を生まれ持ったのは他ならぬ、小太郎の母親、ふうま潤であった。

今は亡き彼女であるが、彼女が生前——弾正の元へ嫁ぐまでの間に打ち立てた伝説は数多くある。

アサギ以前の最強として名が挙がるのは、間違いなく彼女だ。小太郎が、対魔忍の老人達から危険視される理由の一つでもある。

現役当時、彼女は自らの行いを伝説だと認識した事はなかったし、自らの強さの理由を自覚する必要もなかった。

生まれながらの絶対的な強者、というものは元よりそういうものなのかもしれない。強いことなど当たり前で、生まれた時から持っているものをひけらかす必要も誇示する必要もない。周囲は称賛を送った結果、持ち上げる形になってしまっただけだ。

彼女にとって己の強さなど何の意味もなく理由すら必要ない。ただ強いから強かった。それだけでしかない。弱者にとって、それがどれほど傲慢で、どれほど鮮烈に移ったかは言うまでもない。

ともあれ、そんな彼女でも自らの強さを解明しなければ自体に直面した。

それが小太郎の誕生であり、彼に何の才能もなかった事。忍法も生まれ持たず、自らの運命を自らで切り拓けない我が子の生を思い、慣れぬ事を始めた。

彼女の異名は様々だ。その中でも特に際立ったものが、鬼哭きこくの拳姫けんぎ。

生涯において何かと鬼族と関わり、多くの鬼を屠った事で、彼女が拳を握れば鬼すら哭き出すと謳われるほどに至った故に呼ばれた異名。

そう呼ばれるにまで至った己の強さの理由を、僅かでも我が子へと業として引き継がせるために、自らを解き明かす事にした。

その解答が、「無辺」と名付けた対魔殺法にして、彼女が生まれながらに手にしていた特性。

現役時代は不思議にも思ったことはなかったが、彼女の拳打はあらゆる防御を打ち砕いた。

彼女が人並み外れた膂力を有してはいたものの、それだけでは説明の付かない現象までもを引き起こしていた。

それは魔術的な防御の突破。通常の物理攻撃では通用しない筈にも拘らず、彼女の拳打は容易に打ち砕くのだ。

長い考察と実体験の結果。放つ打撃に対して誤差0.000001秒以内に対魔粒子を激突させる際に空間の歪みが生じると悟った。

これまでこの領域に辿り着いた対魔忍は一人足りとて存在しなかった。それほどまでに対魔粒子を精密かつ迅速に操れる者がいなかったのだ。

彼女は、これを広める真似をせず、我が子である小太郎と、小太郎の秘書である災禍、執事である天音に留めた。理由は単純、余りにも体得の難易度が高かったからだ。

天賦の才を持つと言われた災禍ですら戦闘中に使用は不可能。災禍を超える体術の天才である天音ですら、戦闘時に一度使用できれば良い方。彼女から最も寵愛を受け、長く指導を受けた小太郎でも容易に使えなかったのである。

誰もが時間さえ掛ければ習得できる筈の業を対魔殺法と呼ぶ。これではとてもではないが対魔殺法とは呼べない、と彼女は三人にのみこの必殺を譲って、この世を去った。それで充分とでも言うように。

┌

深く、深く。何処までも深く。

自己の内側に埋没し、ようやく見えてくる全身の外側を多い、内側を流れている対魔粒子の掴む。

この感覚は、掴めぬ者は一生かけても掴めない。

才のない小太郎は、母親の打撃を肌で受け、肉を潰され、骨を砕かれ、内臓を爆ぜさせる生死の堺でようやく感覚を掴み取った。災禍や天音ほどの才があつて、ようやく鍛錬でのみ掴み取れる感覚。

此処に向かう前に居た場所では強大な魔力が生じているが、災禍は気にも止めない。

遙か遠方では、緑の雷撃が目を焼くほどの光で自身を照らすが、災禍は気付かない。

それから一体、どれだけの時間が立ったのか。

無我の境地すら遙かに超える名付ける事すら出来ぬ領域に足を踏み入れ――

「――っ!!」

――敬愛する女性の笑みを脳裏で見た災禍は、鋼鉄の右脚を解き放った。

――
――
――
――
――

『――寂しいよお』

黒いフルフェイスヘルメットに、プレート付きのライダースーツを纏った小太郎の姿を模した水分身が言葉を発する。

無論、その場に彼がない以上、その言葉は全て録音されたものであり、不知火に渡してあったのは単なる音声レコーダーに過ぎなかった。

しかし、その在り来たり言葉――だが、極大の嘲弄を含んだ声色に、ブラツクの動きがピタリと止まる。

それは本能ではなく、既に曖昧な状態になった筈の人格が引き起こした事態だった。

『どう取り繕うと、どれだけ残虐を尽くそうとも、お前の根底にあるのはそれだ。ひとりぼっちは寂しいもんなあ』

静かだが、よく通る声が笑いを含みながらブラツクの耳朵を叩く。それはどんな攻撃よりも劇的な効果を上げていた。

『実にありきたりな話だ。永遠に生きる者は、皆それを求める。誰も一人では生きられない。生きることが出来たとしても、味気がない。人生を彩るのは様々な感情を共有できる他人だからなあ。でも、そんなのはお前以外にはいないよなあ。だからお前は永劫を共に歩む伴侶を求めている』

くつくつと仮面の下で嗤いながら、まるで我が事を語るように、ブラツクの内面を詳らかにしていく。

吸血鬼の始祖。不死の王。永劫を生きる者。そうした強者の仮面の下に隠された、卑小で子供染みた性格と人格を決めつけていくように。

『くくつ。いやはや、滑稽滑稽。これを滑稽と言わずに何と言う。偉そうに踏ん反り返っているノマドの親玉が、その実、孤独に泣き腫らす幼子だとは』

『……………』

『何が一番滑稽だつてさあ！ 今まで取り繕ってきた自分を捨てて、形振り構わにや、一時とは言え共に歩んでくれる奴もいるだろうに、それすら出来ねえ臆病者つてところだよなあ！』

『……………』

『共に歩んでくれる者と死に別れるのも嫌。永劫を共に歩む伴侶に裏切られるのが怖いから、本来の自分である臆病者になるのも嫌。嫌だ嫌だ嫌だ。お前にあるのはそればかりだ。現実を受け入れろ、そして少しは己を知れ。そんな奴に一体誰が惚れるものかよ』

ブラツクの内に芽生えたもの。

もうかれこれ数百年以上、抱いた事のなかった感情が芽吹いてい

く。

ただそれだけ。たったそれだけの事で、今の今まで足留めを担っていた不知火の額に、紫の頬に、クラクルの背中に、恐れ之余りに汗が伝う。

『挙げ句の果てにやっているのは、他人を踏み躪る事ばかり。愛嬌もなけりや、弱味も見せたくない。本当に何だ？ 何なんだ？ どうして目的が其処までハッキリしているのに、他人を意に介さない？ 何故最初の一步を間違える？』

『道を踏み外せる程の力があるからか？ 永遠に生きるからか？ どれもこれも勘違いも甚だしい。そんな程度の事で誰かの特別になれるほど、世界も心も甘く出来ちゃあいねえよ』

『残念だったなあ。精々、都合の良い娘おもちゃで満足している。お似合いだよ。お互いにお互いを何も見ちゃいなからな——紅はお前の玩具にならないし、何よりアサギも手に入らない』

『もし仮に手に入ったとしても一時的だ。アサギはどう変わろうとも、いずれお前の手を離れる——だってよお、自分でも気付いているだろうけどお前、すっげえつまんねえ男だもん！ 見せかけだけ底の知れないような野郎に、何時までも縋る女なんて一人だっていやしねえよ！』

其処でようやく、ブラックの意識は、人格は、性格はハッキリとした形で眼の前の男と現実を認識した。途方もない屈辱と怒りと共に。

「貴様には分かるまい。だが、私は手に入れる。どんな手段を使おうと、力尽くで跪かせてやる」

『ようやく絞り出した言葉がそれかあ？ いやホント、分かりやすくてみっともないなあ、おい！』

余りにも尋常ならざる魔力に、大気どころか空間そのものが鳴動し、悲鳴を上げているかのよう。

その様に、ナディアは本物の悲鳴を上げた。彼女の魔力と踊りを以てしても、ブラツクの立つ領域へと引き上げる事は不可能なのだ。

「うっわあ、最悪のタイミングじゃない、これ？」

「そんな事ねえよ。凶星突かれたつまんねえ男が、必死で恥ずかしい自分を隠そうしてるだけだ」

「成程、そう考えれば怖くないかなあ……かなあ？」

「ぶっちゃけオレは怖いです。しにたくない」

「——っ！」

最悪とも言えるタイミングで、ブラツクの背後に現れたのは小太郎とゆきかぜだった。

距離にして凡そ20m。ブラツクがどんな方法を用いたとしても、一瞬で仕留められる位置。況してや、ゆきかぜは小太郎に肩を貸しており、逃げられよう筈もない。

最早、救いようはなかった。

ブラツクの怒りの根源にあったのは小太郎であり、これを狙わない理由がない。一瞬先に死を二人は受け入れる以外の選択肢は存在しない。

ナディアの言葉に従い、退避を選択していた不知火、紫、クラクルでも同様だ。

「おいおい、誰か忘れちゃいねえか？」

「ほんと、目の前の怒りに囚われて目を曇らせるとか、似たもの親子過ぎ」

——だが、このタイミングを待っていた者は二人居た。

「——行け、紅っ！」

一人は、凜子。

これまで徹底して動かなかった彼女は、何も踊るナディアの護衛だけをしていた訳ではない。

最も応用範囲の広い空遁の術を使えるが故に、小太郎から如何に無茶な要請があっても答えるべく、気を練り、逸りを押さえ、時を待っていた。

だからこそ、小太郎からの通信があつた瞬間に、既に空間跳躍の術を発動させていた。

「——これは、御祖父様からの、心願寺 幻庵からの一撃と知れ！」

もう一人は、紅。

凜子によつて転移させられた彼女は、ブラックの直上に居た。

心願寺に伝わる秘奥義。それは神眼を前提とした剣戟の極地。

神眼はあらゆる「歪み」を捉える。彼女の得意とする旋風刃は、風の「歪み」を捉えて、これを断つ事で真空の刃を生み出す技であつた。だが、神眼にはその先がある。

今までは幻庵や心願寺の歴代当主が至つた領域に、彼女は至れていなかった。自らの内に潜む『魔』を徹底して拒み、『人』としての才能時間も足りなかつたが故に。

だが、今は違う。ブラックとフェリシアの思惑であつたとしても『魔』として目覚め、幻庵から受け継いだ『人』としての心と技を手に行っている。

強大な魔力は神眼を更なる領域へと押し上げ、ブラックという存在そのもの「歪み」を完全に捉えていた。後は人間の技術でそれをなぞるだけ。

人魔合一。

人でもなく魔でもなく、ただ心願寺 紅として半歩だけ辿り着いた境地を以て、最後の奥義を放つ。

怒りに囚われたブラックには対応できない。精々、上方へと視線を向けるだけだった。

自由落下によるすれ違いざまの小太刀の二閃は、ブラックの周囲を覆う結界のような何かを絶ち、変貌を遂げるブラックの身体を袈裟懸けに斬り裂いた。

——真技・冥神封殺剣。

それが心願寺の最奥にして究極。あらゆる防御も不死性も意味をなさない存在そのものを両断する秘剣。

かつて幻庵が為せなかつた一撃は、こうして孫である紅の手によって成さしめられた。

「おお——オオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

一瞬の静寂の後、ブラックの絶叫が迸る。

それだけではない。袈裟に斬り裂かれた傷口からは闇よりも黒い血が吹き出ているではないか。

これぞ、心願寺の最奥の効果。秘剣の名に恥じぬ一撃であり、幻庵がやろうとしても出来なかつた悲願であつたが——

「やったか!?!」

「隊長、それわざとやってるよね?」

「浅かつたっ! お前達、余裕がありすぎだぞっ!」

——様々な意味で、ブラックの存在そのものを断つには、もう半歩が足りなかつた。

自らの一撃が足りなかつた事を悟つた紅は、咄嗟に距離を取つて小太郎とゆきかぜを庇うようにブラックへと立ちはだかる。

胸中にあるのは憎しみではなく、仲間を守ろうとする美しい想いだけ。紅が歩むべきと信じた正しい道に、今間違ひなく立って歩んでいった。

これは自らの失態が招いた事態。かくなる上は己を犠牲にしてで

も——そう考えた紅の覚悟は全てが杞憂で終わった。

「!?!」

「いいタイミングだ。流石は災禍」

次の瞬間、ブラックの張った筈の結界に亀裂が奔る。続き、まるでステンドグラスが砕けるように黒い壁は次々に自壊から崩壊へと移行し、内界と外界を遮断していた境界が消えていく。

小太郎以外の者は何が起こったのかは分からなかったが、“無辺”の存在を知る彼に解答を得るのに苦勞をしない。災禍が“無辺”を以て、全ての邪魔をする結界を打ち砕いたのだ、と。

「よし、五車の映像が届いた。跳ぶぞ!」

「でも、災禍が……!」

「問題ない、印は刻んである。災禍殿の位置は補足済みだ。纏めて跳べるっ!」

ナディアの不安を払拭するように、凜子は力強く答えた。

凜子が災禍と分かれた際に、手を握ったのはそのためだった。

自分がよく知る物体や跳躍先の映像を得る事で、飛躍的に安定性が増す自らの忍法を自覚してから考えていた方法。

それは対魔粒子を対象に印として刻む事で位置を把握すれば、離れていても跳躍に加える事が出来る。或いは、手元に呼ぶのも容易いというもの。それが為せるだけの経験と訓練を既に彼女は積んでいた。

「おい、これで暫くはおさらばだ。最後に一言くらい捨て台詞吐いておけよ、紅」

「オノレ、この程度のコトで、我が力ハ——!」

「力、力か——何事も力尽く、女も例外ではないとは。如何にもモテない男の考えそんな事だっ!」

「いや、全く以てその通り。女を口説くなら、力尽くはありえねえわ」

紅の捨て台詞と小太郎の納得を最後に、独立遊撃部隊とその協力者達の姿は光と共に消え去った。

後に残るのは炎に焼かれるヨミハラの街と住人達の数多の悲鳴――
――そして、怨嗟の絶叫を響かせるブラツクの姿だけだった。

幕間

平和が次の戦争の準備期間であるように、苦労人の休暇は次の苦労への布石

「はあく、部隊一つ動かすと、後処理こんなに面倒なんだ」

「金の処理、危険手当の申請、アサギ校長と政府への報告と後始末の要請、頭が痛くなってくるな」

「ピーピー言うな。オレはどういう訳だか、全く関係ない部隊の後処理までやらされてたんだぞ」

(……………いくら何でも酷いなあ、それ)

水城 不知火救出任務、そしてヨミハラからの撤退から一週間。

小太郎、ゆきかぜ、凜子の三人は、空き部屋に設けられた独立遊撃部隊の仮本部で、諸々の後処理に勤しんでいた。

本来であれば、こうした仕事など小太郎、災禍、天音の手にかかれば三日と掛からずに終わるものであるが、今回に関しては今後を考えてゆきかぜと凜子を任せる形をとったのである。

まず語るべきは、隊員の被害と功績、その後からだろう。

ゆきかぜ、雷槌の術の反動による軽度の火傷。フェリシアの撃退という功績から一気に注目の的となった。今後の課題として、更なる制御性向上が残る。

凜子、無傷。空遁の術の応用範囲の拡張により、戦闘要員としてだけではなく後方支援要員として他の部隊の任務に駆り出され始める。なおまだ拡張の余地があるようだ。

災禍、無傷。帰還後、即座にアサギ、山本長官への報告に奔走。現在は文句も言わずに様々な案件であちこちを駆けずり回っている。肉体的精神的な負担が増しているため、過労と鬱病の再発が心配される。

天音、後方支援だったので当然無傷。帰還時に小太郎の容態と弾正の行動を知り、怒髪天を衝く。が、紅に襲い掛かるような真似はせず、に事情を鑑みて超許した。何のかんの、この狂犬も身内には優しい模様。なお、弾正は既に身内ではないので弾正抹殺計画の急先鋒となっている。小太郎と災禍の精神的負担が増した。

紅、魔の覚醒による反動で三日ほど寝込む。その後、部隊を危険に晒したという名目で現在、自宅にて謹慎中。クラクルは彼女の家で生活する運びとなったので、精神的な癒やしはある模様。なお、同居している心願寺 龍の心労は増した。あやめ？ 忙しすぎて帰ってこれてねーよ！

不知火、ナディアの踊りで強化されまくった為、帰還から二日後に筋肉痛になって歳を実感してシヨックを受ける。アサギという年下、ゆきかぜという娘から独断専行を説教されるという傍目から見ると酷く辛い絵面が展開された。現在は独立遊撃部隊に名前だけ所属して、アサギの副官としてデスマーチ中。

別次元の紫、こちらは不死覚醒のお陰で筋肉痛にはならなかった。現在は、小太郎の自宅にて同居中。アサギと直接対面していないが、写真を見て歳を重ねても美しいとうっとりしていたり、暇過ぎて筋トレ三昧だったり平常運転。

「それで小太兄、身体の方はもう大丈夫なの？」

「あんな事になるとはなあ……」

「正直もつと休んでたかったけど、桐生ちゃんのお墨付き出ちやつたし………紅には絶対言うんじゃねーぞ」

「だよねえ、私でも流石にへこむもん」

「紅だったら立ち直れなさそうだ。その前にも暴走しているしな」

そして小太郎、最も重傷。どうして隊長なのに一番重傷を追っているのか。内容は屍食鬼化。もう一度言う、屍食鬼化。

帰還後、倒れた紅を天音に任せ、不知火、ナディア、クラクルを連れ立ってアサギに報告へ向かうように災禍に命じ、紫を自身の自宅で

匿うように凜子に頼み、それぞれが動き出すのを見届けてから堂々の昏倒。

その後、ゆきかぜは意識を失った小太郎を連れて桐生のところで向かう途中、かゆい、うま状態へと移行。雷遁でビリビリされて、自称天才魔科医の治療を受ける運びとなった。

『ふははははははっ!! ざまあないなあ、ふうまのオス豚あ! 貴様はこのままオレの実験材料にしてやろう!! お似合いの末路だ!!』

『はっ?』

『うん、仲間を実験材料にするのは行けないね。任せるがいい、メス豚あ!』

『あ?』

『誠心誠意、治療させて頂こう! だからビリビリするのは止めろお! 機材が壊れるう!!』

ゆきかぜに威圧されて桐生が涙目になる一幕があつたらしい。あの高慢な桐生がこれだ。やはり愛を知った乙女は無敵らしい。

小太郎の屍食鬼化は伏せられており、知っているのはアサギと紅を除いた独立遊撃部隊の面々のみ。表に出す必要のない情報で、なおかつ紅が自分を責めぬようにという配慮であつた。

屍食鬼化の治療は難しくなかつたようだ。通常の吸血行為による屍食鬼化と代わりはなく、桐生曰く、ふうまのオス豚に吸血鬼になる程の才気がなかつた、との事。

吸血鬼による同族の増殖は不明な点が多い。そもそも吸血鬼自身も屍食鬼になるか同族になるかは分からず、賭けの部分が多いらしい。ブラツクの直系と言えども変わらないのか、或いは目覚めたばかり故に自らの力を十全に扱えていなかったからなのか。

いずれにせよ、桐生にとっては不死の王の貴重なサンプルを入手できない不運であり、小太郎にとっては早期に回復できる幸運であつたのは間違い。

そんなこんなで小太郎は本日から復帰。手始めに、ゆきかぜと凜子

の様子を見に来たのであった。

「えーっと、今までの話をまとめると、紅先輩の件は必要な部分だけ報告して、こつちに都合の悪い部分は全部ダンマリってことで、ブラツクと遭遇して命令違反だけしましたよ、でいいんだよね?」

「そうだな。不知火殿に関しては、過去の事件から淫魔王の存在に気付いたための独自調査を行った、という事で、取り敢えずは独断専行も不問となった。イブはドクター桐生が解析中か」

「矢崎暗殺はアサギ先生以外には知らぬ存ぜぬ。政界がひっくり返る大騒ぎで、暫く政府の人達は修羅場だろうね」

「ああ、どうやら矢崎の悪行に関する情報を民新党以外の何処かがメディアに流して国民感情を操った上に、今は政権交代とポストの奪い合いだ。全く、政治家という奴はよく飽きんものだ」

「そこら辺は折り込み済みだからなあ。オレ寝たきりだったから知らないんだが、部隊の評判はどうだ?」

「上々、と言えるのではないか? 相変わらず、お前の評価は低いままだが、私達や部隊それ自体の評価は天井知らずで上がっているぞ」

「矢崎暗殺、お母さんの救出、ヨミハラへの大打撃、淫魔王の存在の確認、ブラツクの遭遇と撤退……………改めて考えるとんでもない戦果だよな。これで評価が上がらない方がどうかしてるって。だから小太兄の評価が低いままなのが納得いかないんだけど……………」

「そうは言ってもなあ。目抜けのオレが主導でそれだけの戦果を上げるなんて、上も下も、忍法使える奴も使えねえ奴も認めたくねえんだろうさ」

対魔忍は固有の忍法が使えるか使えないか、強力が無力か、によって将来がほぼ決まる。

固有の忍法が強力であればあるほど上へと上り詰めやすく、忍法が使えなければ一生下忍のまま。

小太郎を認める、という事はそれまでの昇格制度や評価内容がガラリと一変しかねない。

上で胡坐をかく者は危機感を煽られるであろうし、今の地位を失いかねない。彼等にとつては目障りこの上ないだろう。

逆に下で燻っている者にとつても希望にはなりえない。これまで忍法が使えないという理由で甘えていた現実も、忍法さえ使えたのならもつと上に行けたという都合の良い妄想すら否定されるからだ。

何にせよ、対魔忍内部において小太郎の活躍はあつてはならないものなのだ。

其処へ更に各家の思惑やら小太郎を敵視する老人達の妨害も絡む。公に認められるのは当分先の話だろう。

「後は——ナディア殿については？」

「ま、案の定、頭目会議で吊し上げを喰らつたよ。一度限りの協力関係なら兎も角、同盟関係を結ぶなんざ新設部隊の隊長には越権行為……つーか本来は政府の仕事だし」

「ですよー。でも、此処で私達が事後処理に勤しんでいるつて事は何とかしたんでしょ？ これくらい、小太兄だったら想定範囲内だろうし」

「おーおー、信頼が厚くて嬉しいねえ」

「絶対に碌でもない事をする、という信頼でもあるがな」

「それも間違つちやいない——だって、山本長官に間に入って貰つたし」

「……うわあ」

小太郎は頭目会議的一幕を思い出しているのか、鼻で笑いながら二人の書いた書類の束を捲つて目を通していく。こうした確認作業も隊長の仕事である。

そして、彼の言葉と行動にゆきかぜと凜子はドン引きしていた。容赦のなく恥も外聞もなくコネと権力を使ったからだろう。

山本長官は政府と対魔忍を繋ぐパイプであり、事務方のトップであると同時に上役でもある。

対魔忍内部でしか通用しない権力しか持たない各当主や老人達と

は違い、政府内部でも強権を振るえる彼では文字通りに役者が違う。彼に加えて、頂点であるアサギまで賛同すれば、頭目衆が認めようが認めまいがどうにもならない。

とは言え、状況が状況であったというのは認めた所であるが、山本長官にとつても頭が痛い問題ではあった。

古来より魔界と繋がる門が発生しやすかった日本では、人界魔界の権力者が会合を持ち、人魔不干渉という不文律を守ってきた。しかし、この会合をノマドが襲撃した事により、以後、繋がりは途絶えてしまっていた。

それを一組織の一部隊長が勝手に再開させたも同然なのだ。本来であれば、政府内部で喧々諤々の会議に次ぐ会議の果てに決定されるべき事案。小太郎がごめんなさいして首が飛んで許される筈もなく、対魔忍という組織がなくなりかねない。

が、それが分かってない脳みそお花畑な男ではない。どころか山本長官も納得せざるを得ない内容を用意してあった。

『ナディアの領地ね。凄い豊かなんですわ。ホビットやノームやらで土地を豊かにする術を知っていて、食料も有り余ってる。ドワーフも鉱山なんか切り拓いて色々な鉱石もザックザック掘れるらしくてねー。そうだよ、ナディアさん？』

『え、ええ、そうよ。まだ具体的に数字では分からないけど、日本より広いし、資源も多い、と思う、わ』

『ふうま、君は……』

『これが日本にとつてどれだけ有利で利益を生むのか分かっていますよね？』

『つまりは何か？ 我々の持つ歴史、国を運営、発展させるノウハウの見返りだけで、膨大な資源を得られる、と？』

『勿論、魔界の門がある程度安定化させる方法を見つけてからの話ですがね。まあ、それもコネがある。アマダハラ of 魔術師連合に知り合いも居るし貸しがありますから。ルートも場所も借りられる』

『日本が自国で賄い切れない資源不足が解消する、か』

『それだけじゃありませんよー。魔界の鉱石が供給されれば、レアメタルの代用にもなるし日本の企業やら研究も飛躍的に発展するでしょう。他国の連中が手を切りたくとも切れなくなるほどに、ね。ついでに自衛軍の兵器や武装も他国を凌駕するものとなります。物量チートの米連を相手にするには足りませんが、抑止力にはなるでしょう』

『——それを餌にして、私に政府を納得させろ、という事か』

『本命は日本が戦争で負けそうになったり、崩壊しそうになった時には、お世話になる政治家の先生方に優先して移住権も渡す事も検討しています、ですがね。そうだよ、ね、ナディアさん？』

『……………（コクコク）』

『其処まで考えていると笑ってしまうな。今の政治家共は我が身が可愛いクズばかり。こんな時代だ、国家崩壊の不安は常にある。一も二もなく領くだろう』

『尤も、ルートがいつ開通するかは分かりませんがねえ。結局は取らぬ狸の皮算用。ま、日本を回すのに必死な先生方に、其処まで説明する必要などないですが』

『仮に開通したとしても極秘裏かつ管理は我々が、だな。その歳で大した悪党ぶりだよ、君は』

『護国に身命を捧げた身でしょ？ いまさら悪党と手を組むのが何だっけ言うんです？ 必要とあらば、悪魔に魂だっけ売り渡すでしょ？』

『違くない。私としては悪魔も騙して手玉に取るつもりだがね』

（凄い、凄いわ！これが交渉と弁舌なのね！）

キラキラと尊敬の眼差しを向けてくるナディアを横目に、小太郎と山本長官とのクツソ汚い裏取引が成立した。

勝手な同盟関係を政府に黙認させるために用意した内容の殆どが空手形。単なる口約束の領域を出ない。

それでも資源に乏しい日本にとっては、殆ど口で資源が供給されるのは魅力的であるのは事実。

また、万が一に備えて退去先を得られるのは魅力的。それもナディアの領地を発展させた立役者という名目付きでだ。日本を捨てて逃げた先でもちやほやされると夢を見させてやる。

無論、小太郎にしても山本長官にしてもそんな空手形を履行するつもりなどさらさらない。先に政治家共を納得させてしまい、後はのらりくらりと躲すか、すつとぼけるつもり満々である。

まともな政治家ならば、こんな話を相手になどしないし、そもそもこれで日本が失うものは一つもない以上、魔界側の勢力の一つと友好関係が築けるだけで充分と考える。ナディアの目的が日本への侵略でさえなければ、今こうしている間にも人界へと流れてきている魔界の者を黙認するのと大差はないのだから。

つまり、小太郎と同じ判断を下していた。問題なのは、それを行ったのが政府ではなく小太郎であったという点だけ。それを槍玉に上げて対魔忍を解体させようだとか、身に余る私益を貪ろうとする保身馬鹿、権力馬鹿、ただの馬鹿さえ黙らせれば問題はなくなるのである。実際にルートの開通は行こう。そうしなければ、ナディアと手を組んだ旨味がない。

だが、それはあくまでも極秘裏に、である。対魔忍という組織をより強固にするため、或いは他の護国の輩に力を貸すに留める。それを知るのは対魔忍と山本長官、そして信頼に足る政治家のみとするつもりであった。

差し当たっては、ドワーフ謹製の武器や防具を中心に送らせ、装備課には新装備開発に有用な鉱石を供給する手筈である。

「この口先三寸で乗り切ろう感。完全に詐欺師だあ……」

「そんな美味しい話、本気であると思うのか、政治家どもは……」

「飛びつくさ。矢崎が死んで政界はしつちやかめつちやかだからな。少しでも自分の利益と立場を確保して、いいポストに付きたいと躍起になってるからなあ。これからあるであろう選挙の前に、耳障りの良い文句を吹いて回りたいだろうしなあ」

「二人でも認めれば、あとは雪崩込むように、だな」

「二人領きや三人領く、三人領きや十二人が領く、さてお次は一体何人領く？ 日本人の氣質を理解していれば、利益で目を曇らせるだけで思考なんざ簡単に操れる」

私益を貪る事しか頭がない政治家にはそれで充分、と小太郎は嗤う。

実際の所、それをやるのは山本長官であるが、可能ただけの能力と人脈を持つているのは知っていた。アサギ曰く、〃もう少し愛想が良ければ総理大臣になれた〃と言われた男だ。何の心配もない。

ナディアとの同盟は完全に予定外であったが、矢崎暗殺で政界は荒れに荒れるのは分かっていた。

ヨミハラでてんやわんやの救出劇と逃亡劇を繰り返している中で、現在の構想は頭にあつたらしい。

矢崎暗殺にせよ、ナディアとの同盟にせよ、越権行為の言い訳を考え、お目溢しを貰えるように立ち回っている辺り、彼にはこの言葉がよく似合う。〃憎まれっ子世に憚る〃。彼は決して大人物ではないが、抜け目の無さと小狡さに関しては何となく一流である。

「それで、ナディアさんは小太兄が面倒を見るために引き取るの？」

「いや、領地経営やら何やらは面倒見るけど、家には入れない。オレも表向きの立場はそんなに強くない状態だ。魔族ってだけで敵視してる連中が暴走して襲撃されかねないからな」

「では、何処に？ 他之家に任せては功績も実績も丸ごと横取りされかねんぞ？」

「ああ、だから家ではなく個人に任せる。名目上、人はナディアを、ナディアは人をつて事だな。それでいて各家に貸しを持っていて、何処の馬鹿でも襲撃や暗殺し辛い個人が望ましい。さて、誰でしょう？」

「となると、年齢層は高そうだな。若年ではそんな借りなど持っていないだろうからなあ……」

「でも、そんな人居たあ？ 対魔忍のお爺ちゃんお婆ちゃん、家のしからみと関係ない人なんて……」

余りにも個人として突き抜けた力を持つ故に、思考停止してしまうのは対魔忍全体の悪癖だ。

そうした現実には小太郎にとって頭の痛い問題である。それさえなければ敵の仕掛けた罠だろうが、任務自体が罠、といった状況であろうが力尽くで切り抜けられるであろう辺り、質が悪い。

だからこうして、独立遊撃部隊の人員には思考を回させる。

答えを提示するのではなく、答えに至る要素を与えて自ら道筋を立てさせる。

全ての事柄に共通する事実であるが、何事も試行回数が全てだ。どんな才能の持ち主も、才を磨かねば宝の持ち腐れ。あらゆる分野の天才と持て囃される人物も、人よりも多くの試行錯誤を繰り返している。

得手不得手はどうしようもなく存在しているが、数さえ熟せばそれなりにはなる。そして、それなりにさえなってしまうえば対魔忍の場合、後は力業でどうとでもなってしまう。

長所をそのままに短所を減らす。勝てる要素を用意するのではなく、負ける理由を失くす。

勝敗の基本は戦う前の準備が全てと言い切り、絶対に勝てる手順を用意し、手持ちの戦力でどうにかこうにか手順を外れる事なく遂行する彼らしいやり方だ。

書類仕事の手を休めず、あーでもないこーでもないと議論するゆきかぜと凜子の姿に小太郎はほくそ笑んだ。

いい傾向である。何が良いと言って、自分の仕事を投げ出していない辺りが素晴らしく良い。仕事と思考、二つの作業を並列して進めている。これならば、戦闘と思考であっても問題なく行えるからだ。

「うーむ……？」

「うーん、うーん……？」

「……………あつ！ 稲毛屋っ！」

「ぴんぽーん、大正解。あの婆さんは各家に顔は効くが、明確な後ろ盾

のない個人。人の目もある。おいそれと手は出せないわけだ」

稲毛屋、とは五車町に存在する唯一の駄菓子屋であり、学生対魔忍の数少ない憩いの場だ。

店主は通称・稲毛婆と呼ばれるしわくちやの老婆である。今でこそ駄菓子屋などを営んでいるものの、かつては凄腕の房術使いであり、人魔問わない男達を虜にして破滅させた稀代の毒婦として恐れられた対魔忍だ。

自らの素性を明かした上で一般人と結婚した後は後進の育成努め、各家の女対魔忍は彼女が磨き抜いた技術を大なり小なり身につける。言わば、房術の中興の祖とも言える存在だ。

夫は早くに亡くなり、子宝にも恵まれなかったためにか、子供達を相手にする駄菓子屋を開いてすっぱりと引退を表明した。五車町が作られるおりに移住し、店の名を稲毛屋に改めて、現在も子供達と対魔忍の成長を見守っている。

そうした理由で各家も彼女に対して大きな借りがあり、誰もが幼い時分には世話になっていいる存在だ。

何が何でも魔族を排斥したい者達でも、これでは手が出し辛い。無理にやろうと思えば出来るが、各方面からどれほどの批難を受けるかを思えばやらない方が無難だろう。

クラクルがもう紅に任せとけばいいや、とばかりに扱いが悪いのは、単純に重要度が低いからだ。

所詮、領地も持たない強いだけ一個人。死んだ所で大局を左右するわけでもなく、襲撃されたとしてもクラクル、紅、龍のトリオが早々に敗れる筈もない。寧ろ、これ幸いとばかりに襲撃者をボコボコにして捕らえた挙げ句、襲撃を命じた者を吐かせて諸共に吊るし上げるつもりだ。単なる撒き餌扱いである。酷いにも程がある。

「さて、と。こっちはお前等に任せる。オレは行く所があるんでな」

「え？ まだ聞きたいこともあるし……」

「災禍殿も天音殿もいないのでは書類が……」

「甘えんな。この程度、出来るようになって貰わにや困るんだよ。分らない所があつたら何時でも電話しろ、すぐに教えてやるから」

「しよーがない。小太兄のために頑張りますかあ！」

「病み上がりにも無理をさせる訳にもいくまい、任されよう」

「悪いな、これでも頼りにしてんだよ」

書類に目を通し終わった小太郎は、手早く承認印を押して椅子から立ち上がる。

慣れない作業だろうに、小太郎のためであれば両者共に苦ではないようで、寧ろ更なるやる気を見せていた。

彼女達の頼もしさを目に、珍しく笑みを溢す。かつての自分と重ねているのか、はたまた純粹に己のために身を粉にして働いてくれる彼女達への感謝であつたのか。いずれにせよ、その胸中を知る者は彼のみであつた事は間違いない。

「じゃーねー！」

「また来てちようだいねー！」

小太郎が向かったのは、言わずもがな稲毛屋である。

ナディアが稲毛屋への下宿を開始するのは今日から。何かあれば、責任を取る立場である以上、視察をしておかねばならない。

一軒家とそう変わらない大きさの稲毛屋は、正に昭和の駄菓子屋と言った趣だ。

瓦屋根の建物に入り口が大きく開放されており、中は様々な駄菓子や並べられているのが見える。入り口の横にはベンチが一つ。反対側にはガシヤポンがいくつか並び、かき氷とアイスの販売を示す暖簾が揺れていた。

店の様子が見え始めると、笑顔を浮かべた子供達が駆けていき擦れ違ふ。

それを横目で眺めた小太郎は、続いて去っていく子供達に手を振り続けている女性に目を向けた。

「あら、小太郎。どうしたの？」

「そっちの様子を見に来ただけさ。言い付け通り、着替えてるな」

女性は言わずもがなナディアである。

但し、踊り子の衣装ではない。あの格好は青少年の健全な育成には悪影響を及ぼしかねず、ナディア自身の身を守るためという考慮であつた。

今は桜色の着物に藍色の袴。首からかけるフリル付きのエプロン、長いピンクブロンドの髪を簪で纏め、ちょこんとカチューシャを乗せていた。大正時代の女給のようだ。

魔界の衣類はどういう理由なのか定かではないが、何かと薄く面積も少ない。こうした格好はした事がないのだろう。

多少の動き難さは感じているのだろうが、にこにこ笑っている。初めて着る服というのは何かと乙女心を刺激するのだろうし、何よりも店番という経験も慣れぬが故に楽しいようだ。

元々、魔界の領主らしからぬ性格の持ち主だ。もしかしなくとも、こうした生活の方がよほど向いている。

「どう？ 似合っているかしら？」

「良いんじゃないか？ ただ、全体のラインが少し崩れてるな。胸がデカいと着物は着熟するのが難しいよ」

「うーん、これでも苦しいくらいに潰しているのだけれど……」

くるりとその場で一回転して自分を見せ付ける。無邪気で善良な性格だろうに、何処か男を誘うような妖艶さを持つのは踊り子の性なのだろうか。少年達が予想だにしない性癖を拗らせないか危ぶまれる。

だが、小太郎はそれら全てを無視して、率直な意見を述べた。

着物は細身の方が似合う。グラマラスな体型であればあるほどシワは多くなり、胸の重さで帯もどんどん下がってしまい、だらしない印象を受けるものだ。

無論、対策も存在しているが、稲毛婆が着付けたのならその程度の対策はやっているだろう。根本的に、ナディアと相性が悪い服装と言える。

「始めたばかりみたいだが、少しは慣れたか？」

「ええ。こういう事は初めてだから、とても楽しいわ！ あ、そうだった！」

「……あ、おい？」

世間話の延長線の話から周囲の反応を探ろうとしたのだが、ナディアは思いついたとばかりに店の中へと駆けていく。

小太郎には何が何やら分からずに困惑するばかりであったが、当初の目的は果たせているから構わないか、と店のベンチに腰掛けた。

「おや、坊やも来たのかい？」

「来たくて来た訳じゃないけどな」

「はあくくく、可愛げのない坊やだよ。昔から買いに来たこともないし、変わらないねえ」

「さして美味くもなけりや、毒にも薬にもならない駄菓子になんぞ興味ねーよ」

その時、ナディアと入れ替わるように店主である稲毛婆が現れる。

会話からも分かる通り、二人は顔見知りだ。小太郎は立場がないながらも様々な事情や家の内情に通じている稲毛婆を情報源として使っており、稲毛婆は親のいない小太郎の身を案じているのであった。

「ナディアは……?」

「良い娘さ。一目で分かるよ」

「オレが聞きたいのはそういうのじゃないんだけど?」

「言うまでもないだろうに。アンタの感じている通りだよ」

期待していた答えとは見当違いの内容に、厭味つたらしくジト目を向ける小太郎であったが、向けられた老婆はわざわざ言葉にするまでもないと呆れながら視線を返す。

確かに言うまでもなかった。

今こうしている間にも、小太郎は勿論の事、稲毛婆も視線を感じている。

魔族に対して過剰な敵意を向ける一派、或いは小太郎の弱味を握ろうとしている者が差し向けた監視者の視線だ。それ以外にもナディアの親しみやすい雰囲気と朗らかな笑みに一目惚れしたらしき男達の嫉妬の視線もある。

「ほらほら、見て小太郎! こんなにソフトクリームを上手に作れるのよ! 私、才能あるかもしれないわ!」

「いや、そういうの勝手に作るのやめよう???」

想定内とはいえ面倒な事態に、小太郎が何事か口を開こうとした瞬間に、店の中へ入っていったナディアが戻ってくる。

目を輝かせながら戻ってきた彼女の手には、稲毛屋のソフトクリームが握られていた。

素材から拘り抜いた無添加ソフトは、濃厚な牛乳の味と自然な甘さで五車町の大人から子供まで、人を選ばない一番人気商品である。

これまでの如何なる表情とも異なるドヤ顔を見せるナディアに、当然の如くツツコんだ。

確かに、彼女の作ったソフトクリームは見事なものだ。綺麗な螺旋を描いていて不格好さがまるでない。才能があるかもしれない、というのあながち間違いではないだろう。だが、誰がそれを処理するというのか。

「え？ 食べないの？」

「すんげー押し売り。こんなん初めてだわ。いらねーし」

「そんな……おいしいのに………あむう」

「喰ってんじやねーよ」

「坊や、金払いな」

「アイエエ！ オレ!? オレナンデツ?!」

「嬢ちゃんの全ての行動に責任を持つのがアンタだからさ。それにイ女に貢ぐのは男の甲斐性つてもんだらう？」

「ぎげんなっ！ コイツの給料から天引きすりやいいだろうが！」

「お生憎様。こっちは嬢ちゃんの食事や住まいやその他諸々を提供する見返りに働かせてるのさ。当然、無給だよ」

「クソババアがッ！ これやらせようとしたのテメエだろ!!」

「いひへえっへえっへえっ！ さあて、何の事やら」

自分の作ったソフトクリームを悲しげな表情でペロペロしているナディアを尻目に、小太郎は悪態を吐きながらも金を払う。計画通り……！ と言った表情で金を受け取る稲毛婆。

お嬢ちゃんは才能があるから坊やが来た時には見せてやりな、とでも言っていたのだろう。何事も売上に繋げるとは、なかなかのやり手婆である。

小太郎は金を腐るほど持っている。ふうま宗家の財産を元手に災禍と天音の名を借りて株やら投資やらで荒稼ぎしているからだ。

だが、それはそれとして、生活それ自体は質素なものだ。己が自由にできる金を稼ぐのは、あくまでも自己防衛や対魔忍では入手できな

いものを買うためであつて、贅沢三昧を送るためではない。

金の管理も自分でやっているし、災禍と天音にも対魔忍としては給料とは別の、秘書・執事としての給料も与えている。自分の小遣いも月単位性、一般的な高校生がアルバイトで稼げる程度と決めていた。手痛い出費ではないものの、喜べるものでもない。何より自分が食べてもいないのに奢らねばならない現実には腹立たしいにも程がある。

「さてさて、稼いでくれたナディアの嬢ちゃんに次の仕事だ。店の品出しをして貰おうかねえ」

「任せてちょうだい！ 古い物は前に、新しい物を後ろにね！」

「いやはや、いい店員が出来たねえ」

「つたくよお、アイツ、自分の目的忘れてんじやねえだろうなあ」

ソフトクリームをペロリと平らげたナディアは稲毛婆の指示に従って店内へと消えていく。消える前に見せたぐつと拳を握った気合のポーズが可愛らしい。これは初な青年達には人気が出るだろう。様々な意味で役得だ、とカラカラ笑う老婆を尻目に、小太郎は首を振って呆れ返った。

現状、ナディアに何から教えるべきなのかを検討中。

彼女の領地に関してもノータツチ。連絡手段はあるにはあるのだが、ナディアが魔力を使って作る魔術道具マジックアイテムであるため、必要な道具が揃って完成するまでには時間がかかる。領民達も連絡が取れるまでナディアの身を案じて胃を痛め続けねばならない。

天真爛漫、天然なのは結構な事だが、為政者、支配者にはとんと向かない性格である事だけは確かであった。

「それで、坊やの方はどうなんだい？ 派手にやらかしちやいるようだが、大変みたいじゃないかい？ 特に、弾正のクソガキも戻ってきてるみたいだしねえ」

「耳が早いことで。色々と動いちやいるが、当面は直接対決を避ける。尤も、他の連中はそれで納得しちやいないが」

「坊やの独立遊撃部隊に削らせるだけ削らせて、美味しい所だけ持つてこうってかい？ 馬鹿馬鹿しいねえ。アサギの嬢ちゃんもトップに立つまで散々内ゲバやらかして、まだ権力欲に塗れてるとはねえ。呆れてものを言えないとはこの事だよ」

「何にせよ、オレのやることあ変わらない。部隊と隊員を育て、仕掛けが成るのを待つだけさ」

「となると——骸佐の坊やを使う気かい？ 弾正はどっちにとつても敵。どちらかがやらかした先代を討って、後継としての正当性と身綺麗さを証明できる。競争相手じゃあるが、協力相手にもなり得るからねえ」

「……………ま、そんなとこさ」

店先のベンチに座ったまま、小太郎は足を組んで空を眺める。稲毛婆もそれに続く。

空は雲一つない綺麗な青空だった。だが、それに反して二人の表情は浮かない。目に見えている敵を、自身の権力を向上させる獲物程度にしか認識していない馬鹿が身内に居るのだ、分からなくもない。

楽観主義、認識の甘さ、過剰な希望的観測。小太郎が感じている対魔忍の甘さは、そのまま稲毛婆が昔から抱えてきた悩みでもあった。それにも拘らず、此処まで来れてしまった対魔忍の強さが質の悪さを加速されている。

空の彼方で鳶が鳴き、二人は同時に溜息を吐くのであった。

苦勞人は一人ではない、一人ではないのだ。故に爆裂記なのです

「成程、お前がこつちに寝返りを打ったのは、そういう理由か」
「ええ、私は母さんに目を覚まして貰いたいだけ。そのためには動きが鈍い対魔忍よりも、貴方に加担した方が速いと判断したまでよ」
（対魔忍には桐生がいるんだが、アレが意識不明程度で腕を振るうとも思えねえ。アサギを中心とした上層部が悪いわけじゃねえが、不信感を持つてるって事か）

満月の月が頭の真上で輝く時間帯。

東京キングダムに存在する安全基準を一切満たさない違法建築塗れのビルの屋上で、一組の男女が向き合いながら会話をし、傍にはそれを見守る二人が控えていた。

このビルは龍門——中華系の犯罪組織にして実質的な中華連合の出先機関である——の支配下にあったが、それもつい先日までの話。

話し合いをしていた男女の一人——二車 骸佐の率いる新生ふうま忍軍によつて壊滅状態に陥り、既に彼等の拠点となっていた。

骸佐を唆したフルストが見返りに求めたのは新開発した魔薬の実験と及び目障りな龍門の壊滅。それを履行した結果であると同時に、新生ふうま忍軍の資金源調達を兼ねていた。

フルストは龍門の持つ資金源には興味を示しておらず、骸佐はそれをそのまま己のものとした。ただ、龍門の拠点を一つ落としただけであり、こうしている間にも忍とマフィアの戦いは続いている。

潜伏して溜まっていた部下達の鬱憤を晴らさせるにはいい相手であり、闇の街に己の名を轟かせるのは良い機会であった。

巨大さではノマドに劣るものの、邪悪さと悍ましさでは並び称される組織だ。東京キングダムにおける龍門の地位を暴落させられれば、

この辺り一帯は否応なく骸佐に従わざるを得ない。娼館やら商売の利権、強化人間などの技術もそっくりそのまま手に入れられる。美味しい仕事だ。

現状、新生ふうま忍軍は圧倒的な優位に立っていた。龍門の質の悪い用心棒や兵では、とてもではないが二車の幹部を押さえきれない。本国から組織幹部が応援に来る間もなく、完全に壊滅するのは時間の問題であった。

「それで？ こつちの目的は理解できたか？」

「勿論——貴方、馬鹿なの？」

「それは目的の方か？ それともそれを話したオレの方か？」

「どちらも、よ。目的の方は言うまでもない。一部の幹部にだけ明かした本当の目的を、私のような部外者に話した貴方も。いずれにせよ、正気とは思えないわ」

「何故？ そつちの目的を聞いたら、こつちの目的を明かすのが道理だ。腹を割って話すに足る理由だと思いがな、オレは。それに、何だ——」

「此処で私が首を縦に振らなければ、そのまま落とすつもり、でしょう？」

「話が早くて助かるぜ。馬鹿な女は怖気が奔るほど嫌いだが、賢さかしい女は嫌いじゃない」

屋上の柵に寄り掛かり、そのまま身体を反らせて天地逆の視界で東京キングダムの街並みを眺める。

毒々しいネオンの輝きと遠くから響く下衆な笑い声に、骸佐はすつと目を細めた。だが、移っているのは東京キングダムの光景ではない、馬鹿な女だった母親であろう。

骸佐に賢しい女と評されたのは七霧 レイナ。

二車家が引き起こした反乱に加担した対魔忍であり、ふうまとは別口でありながら権左に「使える」と評された少女でもある。

「それで、母親の方は……？」

「ハッ……彼女の母親は、既に確保しています。彼女の離反に気づかれる前に確保できて幸いでした」

「それで、いつ魔科医を——母の治療をしてくれるの？」

「まだ駄目だ」

「今回の襲撃で功績も上げたでしょう?! まだ足りないって言うの!？」

「違う、勘違いするんじゃない。お前の働きは認めている。だがな、魔科医なんて連中は信用ならねえ。母親が目覚めても、身体に何かを仕込まれていたらどうする。またこうやって犬みたいに走り回るのか？」

「そ、それは……貴方の下でだって変わらないわ……」

「巫山戯るな。最終的な結果は違うものになる。オレの方は母親と一緒に暮らせるだろうよ。それに、オレがお前のように優秀で扱い易い奴を逃がすと思うか？ だからオレの本当の目的も話したんだよ、間抜け」

「……………ッ」

レイナの母親は、ある任務で重症を負い、一命は取り留めたものの意識不明のまま昏々と眠り続けている。

脳死判定こそ受けていないが目覚めの兆候は見られず、何度となく本部に桐生 佐馬斗による治療を申請していたものの、悉く却下された。

無論、本部やアサギが意味もなく無碍にした訳ではなく、レイナの素行に問題があった訳ではない。問題であったのは、彼女の母親を目覚めさせられるであろう桐生にこそ問題があった。

あの高慢な桐生が、意識不明程度でやる気を出す筈もない。また、彼には前科があった。志賀 あさつきに対して行った医療行為がそれだ。

アサギの遠縁に当たる彼女は身体を大きく損傷する怪我を負ったが、その際に無断でアサギの細胞を培養して肉体の大部分を入れ替え

る暴挙に出た。単純な知的好奇心という理由で。

結果としてあきつきは、「アサギに最も近い身体」を持つだけでなく、精神面までアサギのそれに似通ってきてしまっており、自我との間で懊悩を繰り返している。

結局の所、桐生も魔族と何ら変わりはない。自己の欲望のためであれば何でもする。命を救った駄賃として人体実験など平気でやる男なのだ。アサギとしても、軽々に許可など出せなかった。

故に、レイナは対魔忍を見限って、一縷の希望を胸に骸佐の側についていた。

だが、待っていたのがこれでは、彼女が落胆するのも無理はない。

「安心しろ。必ず治療できる奴を連れてきてやる。魔科医か、米連の最新医療が使える医者かは分からんがな。これは対等な取引だ。取引で嘘を吐くほど、オレはボケちやいねえ」

「その言葉を信じろと言うの？」

「信じられねえだろうよ。オレもお前の立場なら言葉だけじゃ絶対に信用しねえ。だから、オレの本当の目的を教えた。それは言葉だけでなくオレの急所でもある。お前がそれを吹いて回れば、オレは終わりだってのは分かるだろ？ 信頼は軽々には築けないが、互いに急所を握り合っているのなら文句はねえだろう？」

「そう……そうね。良いわ、私は貴方に従うわ。口ばかりで何もしてくれないよりもところより、弱味を見せて腹を割ってくれるほうがまだ信用できる」

「取引成立だな。尚之助、差し当たって龍門の技術者達を捕らえるように伝えろ。但し、此方に取引を持ち掛けるような心をへし折って、従順な犬にしてからな」

「もう既に。龍門の技術力も馬鹿に出来ませんし、何よりも金を生む。カフル殿がするように仰っております」

「流石だな、抜け目がない」

骸佐の命令は、既に実行されているも同然と答えたのは、腰に二刀

の業物を携え、長い銀髪を首の後ろで括った若い男であった。

如何にも優男といった整った顔立ちに、何処か飄々とした雰囲気纏っているが、鍛え上げられた肉体は服の上からでも分かるほど。優男と言うよりも、美丈夫という言葉がピッタリと嵌まる。

彼は二車家幹部の一人、楽がく尚しょう之助のすけ。幼い頃より骸佐の世話役として付いて回り、小太郎とも面識がある。骸佐が権左に次いで信を置く男でもあった。

片膝を着いたまま頭を垂れる尚之助の隣には、同じく幹部がもう一人。

黒いセーラー服の少女であったが、歳は尚之助どころか骸佐よりも若い。何処か自信なげな表情が加虐心と同時に庇護欲を唆るが、可憐な見た目に騙される事なかれ。

彼女は鬼蜘蛛 三郎。本来の名は別にあるが、ふうまの当主が「小太郎」の名を継ぐように、鬼蜘蛛家の当主は「三郎」の名を継ぐ。それが許されるだけの実力を有しているのは確かだ。

(どうやら、上手く行きそうですね……)

(ええ。全く御館様も無茶を為さる……だからこそ、下からの信頼も厚いのでしようが……)

(それで、いいと思います。ああいう御館様だからこそ、私達も……)(そうですね。我々は、地獄の底まで共にするまで。家の決まりではなく、自らの意思で御館様に付いたのですから)

この二人もまた骸佐からその真意を聞き、対魔忍への反乱に付き従った。

生まれた家がこれまで仕えてきたから、という掟に縛られたものではなく、他でもない骸佐に仕えたいという鉄の忠義に従うままに。

だからこそ権左が戦いに赴いた際には骸佐を守るように任されているのであり、それが可能なだけの強さを持っている。

視線だけで会話をしつつ、レイナを上手く取り込めた事実には、安堵の吐息を漏らした。

信頼した者に対する裏表のなさは魅力であると認めてはいるが、同時に肝を冷やす羽目にもなる。

二人に何も言わないまま、骸佐が真の目的をレイナに告げた際は、尚之助は腰の刀に手を伸ばし、三郎は待機させていた獣に命を下しかけた。

骸佐が晒した急所はそれほどのものであり、現状の全てが瓦解するだけの威力があった。レイナが納得するのも領けよう。

「そろそろ八百の婆様も帰ってくる。新たな幹部の紹介をしなくちな」

「幹部って……私は実力も功績も足りていないし、他の幹部や二車の下忍は納得しないんじゃない……」

「だろうな。だからだ。納得しない連中は漏れなくオレの真意を知らん。お前には気をつけて貰いたいからな。それから、実力も功績も無理を上げてもらうから覚悟しろ」

「……………私、もしかしなくても早まったのかしら？」

「言うまでもなくな。世の中、そんなに美味しい話は転がっちゃいなってことだ。諦めろ——ああ？」

これから自身に降り掛かってくるであろう数多の苦難を想像して頭痛でも覚えたのか、レイナはこめかみを指で押さえながら溜息を吐いて言う。

骸佐はその様にくつくつと笑いながら肯定した。騙された者に対する嘲りではなく、これから苦楽を共にするであろう仲間へのみ向ける笑みであった。

その時、彼は奇妙な鳴き声を耳にして頭上を見上げた。他の者も同じく視線を飛ばす。

その特徴的な鳴き声は鳶のものだ。日本中何処にでも居る鳥であるが、この時間帯に鳴くのは珍しい。

常人の目では決して捕らえる事は出来ないが、対魔忍である彼等には月明かり程度でも充分にその姿を見つけられる。彼等は確かに、頭

上をグルグルと旋回する一匹の鳶の姿を捉えていた。

「——あ」

「三郎、お前のか?」

「あわ、あわわ」

鳶を見た瞬間、三郎の顔色が見る見る蒼褪めていく。

骸佐が三郎に訪ねたのは、鬼蜘蛛家が代々獣遁の術を使い、獣使いとして知られる事に起因する。

古くから人の友であった犬は勿論の事、鳶に鷹と言った鳥類を伝書に用い、熊や蛇までも手懐けて忍獣として仕立て上げる。鬼蜘蛛家はそうして二車家に仕えてきたのだ。

しかし、三郎は慌てふためくばかりで要領を得ない。

終いにはスカート裾を握りしめ、めそめそと泣き出してしまふ。こういう所は、実に年相応であった。

「……うう、……うぐう……!」

「何で泣くんだよお!? オレか?! オレのせいのか!」

「落ち着いて骸佐く————じゃなかった御館様」

「三郎さん、落ち着いて下さい。御館様も、貴女を責めているわけではありませんよ。顔はそう見えるかもしれませんが」

「尚之助、強面な自覚はあるが、それは酷いんじゃないかねえの??」

先程までの重苦しい雰囲気は何処へやら。

泣き出した末っ子を心配して慰める兄弟達の図が完成していた。

二車家は笑顔の絶えないアットホームな職場です（ヒヤッハーするしか能がない者は除く）。

実際、骸佐は必要な時以外には当主としての仮面を被らず、余所の当主よりも部下との距離感が遥かに近い。

幼くして当主にならざるを得なかったが故の処世術であり、複雑な環境であったが故に信頼を寄せた者には心の内を隠さずに明かす。

そんな彼だからこそ、権左も尚之助も三郎も鉄の忠義を向けるのだ。

「……………ひぐぐつ、じ、実はあ……………」

ずると鼻を噉り、しゃくり上げながら三郎は、あの鳶が何なのかを語り始める。

今より一年前、彼女は若くして三郎の名を継いだ。

若くはあつたが、その実力は本物。骸佐は勿論の事、二車の幹部達も満場一致の決定であつた。

それから数日後、彼女の家に或る人物から当主就任の祝いが届く。中を見てみれば目を剥くような大金が包まれていた。一体何処で聞きつけたのか、贈り主は二車とその傘下の者と接触を禁止されている小太郎からであつた。

『当主就任おめでとう。その金で家でも直してくれや』

たったそれだけ書かれた手紙に、三郎は唾然とした。

事実として、五車の鬼蜘蛛邸はあばら家とは言わないまでも、古屋であり広くもなかつた。

二車も苦しい立場にあつた。その忠義から先代は弾正の米連逃亡を助けるために最後まで戦い続けたため、逸早く寝返つた紫藤家とは異なり、財産の多くは没収され、政府から対魔忍へ渡される年間予算の振り分けも他家に比べて一段と低かつた。当然の処遇だ。必要以上の金を与えてまた反乱でも企てられれば溜まつたものではないのだから。

家を維持するためには残された財産を喰い潰していく他なく、多くの下忍を抱えながらでは、幹部達の生活も当然苦しくなっていく。

中にはふうま全盛期の頃と変わらぬ報酬を要求する幹部も居たものの、三郎は根が優しく真面目であり、何よりも骸佐を慕っていたが故に質素で慎ましやかな生活にも不満はなかつた。

が、其処に突如として舞い込んできた大金。更には小太郎から贈ら

なれば——」

「何らかの情報を此方に流したいだけ、という事ですか」

「でも、どんな情報を……？」

「曲りなりにもオレ達は反逆者だぜ。それでも流そうとするつてえと、確実に厄ネタだな。こつちにとつても、あつちにとつてもな」

未だに泣いている三郎の頭を撫でて慰めながらも、キリキリと痛む胃と頭に顔を歪め、骸佐は大きく溜息を吐く。

その様にレイナも尚之助も頭を抱えそうになる。此処に至るまでかなりの綱渡りだった、無理もない。

それが如何なる厄ネタであれ、無視するという選択肢はない。あの小太郎が送ってきたものであれば、無視をしても余計に厄介な事態に発展しかねない、と骸佐は判断した。

三郎に目配せすると、彼女はすると鼻を啜りながらも、連続した舌打ちと腕の動きで合図を送る。

現代に残っている放鷹術のどれとも異なる動きであり、やろうと思えば誰にでも簡単に出来るが、やろうと思わなければ決してやらない動作は、鳶に要らぬ混乱や誤謬を与えぬ配慮であると同時に、合図を知る対魔忍のみが扱えるようにした結果であった。

それまで上空を旋回していた鳶は、寸刻も待たずに急降下してくる。

三郎の差し出した右腕に狙いを定めると、羽を大きく広げて速度を落とす、見事に止まったのけた。

猛禽の爪で掴まれているにも拘らず、三郎の皮膚が破れはしなかった。対魔忍の身体能力や頑丈さは常人離れしている。鷹匠のように専用の手袋を使う必要などない。

鳶の脚には、円筒状の物体が括り付けられていた。骸佐がそれを外して捻れば、半ばで分かれて中から一枚の手紙が現れる。

随分と古臭い伝達手段であったが、時間が掛かる事さえ除けば、盗聴の心配もなく露見の可能性も低い優秀な手段ではある。尤も、骸佐

の居場所が分からなかった小太郎には鳶が元々の主人の後を追えるかは賭けではあつた。

「さて、鬼が出るか蛇がで——」

手紙の内容を見た瞬間、骸佐は完全な無表情でビシリと音を立てて石のように固まった。

常に苛立っているか、頭を悩ませているかのように眉間に皺が寄っている彼には珍しい反応に、三郎とレイナは顔を見合わせる。

ただ一人、尚之助だけが骸佐の固まった理由を察していた。

(これはどう考えても、超弩級の厄ネタのようですね。小太郎様、貴方という人は……)

—
—
—
—
—

「これより！ チキチキ二車家の先行き大討論会！ はっじまっつよーっ!!」

「御館様がガンギマツてらっしやっつとはどういうことなの——!」

「わ、私にはさっぱり……」

「三郎は仕方ないにしても、尚之助エー!」

「小太郎様からの厄ネタのようです。それも超弩級の」

「……あんの目抜けエー! 潤といい当代の小太郎といい、どうしてこう此方に迷惑を掛けるのよ?!」

ガシヤーンと手にしていた錫杖を床に叩きつけたのは、巫女の服に似せた装束を纏った美女であった。

彼女は龍門の拠点の一つを潰して帰ってきたばかりの二車家幹部、八百比丘尼。

多く見積もっても20代前半と言った髪と肌艶であるが、初代ふうま小太郎の代より仕えていると言われており、事実であるのなら優に五百歳を越えている事になる。

彼女もまた邪眼使いであり、その右眼に宿った魔は『人魚の碧眼』と呼ばれている。右目に写った者の生命エネルギーを吸い取り、自らの生命エネルギーとして吸収するブラックのエナジードレインに似た性質の邪眼だ。

唯一の違いは、生命力を吸い尽くした対象の残骸。ブラックの場合は跡形もなく塵となるが、彼女の場合は半魚人のような異形に成り果ててしまう。

この邪眼もあって、遥かに若々しい姿を保ち、負傷も立ちどころに完治する。

初代ふうまの頃より仕えているという噂も馬鹿にならず、彼女の実年齢を知る者は皆無でありながら、それが事実として認識されていた。

そして、小太郎の母親であるふうま潤には、親交の深かった骸佐の父親や幻庵と共に散々に振り回されたらしい。

「すうー！ はあー！ すうー！ はあー！ ふううー！

……まあ、いいわ。どの道、御館様の選んだのは茨の道。いまさら厄ネタが一つ二つ増えたところでやることに変わりはないものね」「流石ですね、比丘尼殿。我々とは年季が違います。それから、こちらは新たな幹部の七霧 レイナ殿です」

「ほう、例の。ただでさえ苦勞していると言うのに、好んで苦勞しに来るとは物好きだこと」

「やっぱりそういう認識なのね、私……それはそれとして、もつと反対されるものと思っていたのだけれど」

「矢車の馬鹿は五月蠅いでしようけど、私は御館様の決定であれば特に言うことはないわ。好きになさいな」

激しい深呼吸で我を取り戻した比丘尼は、辟易としながらもチラリと新顔であるレイナに視線を向ける。

尚之助の紹介があったものの、特段の興味を示さない。彼女の境遇など長く生きる比丘尼にとっては珍しいものではなく、実力から覚悟まで目を引くものなど何もない。

骸佐の決定であれば信頼できる者と見做すまでの事。万が一、骸佐の信頼を裏切るのであれば自ら手を下すまで。

軽視もしていなければ、同情もしていない素っ気ない反応は、自身の実力に対する確信とこれまでの経験に裏打ちされたもの。相対した者にとっては能力以上に、その精神力の方が厄介であろう。

「成程、頼もしいなあ比丘尼の婆様は！　じゃあ、小太郎からの送られてきた手紙の内容を発表しちゃうぜっ☆」

「その前に。尚之助、権左とカヲルは？　最低でもあの二人もいなければならぬでしょう？」

「権左殿とカヲル殿は比丘尼殿と同じく龍門を叩きに向かいました。他の幹部も同様です。ただ、権左殿は出ていく前に、最近頭使つてばっかりだったから頭空っぽにして思う存分ヒヤツハーしてくる、と言っていたので当分は帰ってこないかと」

「あの小僧は……カヲルも不運ね……」

比丘尼は完全に壊れてテンションがおかしな事になっている骸佐は一先ず置いておき、幹部の中でも最も重要な位置にいる二人の所在を問いかけた。小太郎がそうであるように、骸佐が壊れるのは珍しくはないらしい。

新生ふうま忍軍において、個としての最高戦力にして骸佐の槍である土橋 権左。

戦闘以外の役割を殆ど熟せない権左に変わって、様々な仕事を代行

する参謀役の鉄華院 カヲル。

権左は類稀な直感力と歯に布着せぬ言動で物事の正解を導き出し、カヲルは策謀を巡らせる智慧で最適の意見を具申する。

何らかの決定や方針の変更を下す際にはその二人が必要不可欠。他の幹部もそれに納得していた。

しかし、生憎とその二人はこの場にはいない。

尚之助の言葉に、ナチュラルに狂った満面の笑みを浮かべて槍を扱く権左とゲンナリとした表情でその後を追うカヲルの姿を想起し、比丘尼は大きく溜め息を吐いた。

仕方がないと言えば仕方がない。

二車の幹部はそれぞれが戦況を覆せるほどの実力の持ち主ではあるが、龍門は巨大な組織だ。

時間を与えれば与えるほどに、立て直す猶予を与え、その後は雑兵の差で押されかねない。手を出したのならば一気呵成に攻め立て、この東京キングダムから完全に手を引かせる必要がある。

幹部も部下も八割近くを総動員しなければならなかった。万が一に備え、一部の部下と三郎、尚之助の幹部を骸佐の守りとして残せたのは幸いですらあった。

「まあいいでしょう。目抜け殿からの書状にはなんと……?」

「なんかなー、弾正が帰ってきたってさー!!」

「「「「???」」」」

「当然の反応だよなあー! それがよお! だって今更帰ってきたってワンチャンもない立ち場だからよおー!!」

こんな情報一人で抱えてられないとばかりに、骸佐は書状の内容をぶちまける。

その言葉を聞いた瞬間、二車幹部に衝撃を奔らなかつた。

弾正の行動は彼等にとって理解しがたいものであったからだ。ハテナマークだらけの顔にもなるう。

対魔忍として返り咲く? 反乱など起こした挙げ句、何の責任も取

らずに逃げた以上は不可能だ。待っているのは断罪のみである。

ふうま一門を再興する？ 目抜けですら最底辺からのスタートで這いがついていると言うのに、米連に逃げた腰抜けに元ふうまの誰が従うというのか。

あるいはアサギへの復讐？ 米連の戦力であれば可能かもしれないが、暗闘程度で動員できる人数では不可能に近い。仮に可能なだけの戦力を用意したとしても、弾正主導でやらせる理由が米連にはない。

何をどう考えたところで弾正にワンチャンすらない。日本へと戻ってきたところで何をするといいのか。米連で屈辱を抱えながらも安穩と暮らした方がまだマシというものだろう。

「えーっと、弾正って、ふうまの先代、よね？ あの、やらかした……」
「そうでえーっす！ 当時の事よく知らん七霧でも名前知ってるのに、何してえのかなあ、あのおっさん!!」

「……あの、あの、偽の情報という可能性は……」
「オレもそっちの方が嬉しいんだけどねえ！ 小太郎からの情報だからなあー！ アイツこっちの目的も気付いてるからなー！ 偽の情報流がして潰すよか、こっちを利用してしようと動くだるルオオ？ このタイミングじゃまだあり得ねえよお!! その上、弾正一緒に殴ろうぜっ！ って共闘の申し込みまでしてきてるんだよお！」

「お、御館様、落ち着いて……」
「落ち着いていられるかよおー！ 大体、何だこの一文！ ..」
あのおっさん何考えてんだろうな。絶対何にも考えてないんだろっけど。草。だ！ 概ね同意するが、こちとら草も枯れ果てるわ!! つーかお前も同じ気持ちだろうがっ!! 腹立つううううううう!!」

レイナと三郎に宥められながらも、キイイイイイ！ と叫びながら書状を破り続けて、紙吹雪を舞わせる骸佐。

無理もない。彼の脳内では不敵な笑みを浮かべながら、その実、自

分にとって都合の良い事しか考えていない弾正と、その隣で半笑いになりながら彼を指さしている小太郎の姿が浮かんでいたのだから。

書状を破った程度で冷静になれる筈もなく、髪の毛を掻き毟る。弾正帰還が引き起こす事態と己に降り掛かる苦労の数々で頭が割れてしまいそうなほど苦しんでいた。

ほぼ完全な部外者であるレイナ。当時は幼く、弾正のやらかしを詳しく知らない三郎は比較的冷静でいられた。

しかし、このまま骸佐を狂乱させておく訳にはいかない、と三郎は隣に立っていた尚之助に助けを求めようと顔を覗き込み、後悔する羽目になった。

「尚之助さん、お、落ち着いて……」

「私は冷静ですよ。ええ、冷静です。これでも二車の幹部、私は冷静です。ええ、そうですとも。私は冷静です。我々の先代が、あの方が命を捨てて戦ったと言うのに、役立たずの一言を吐き捨てて逃げた男が帰ってきたとしても冷静です。三郎さん、私は冷静です」

「ひいひいひいひいひい——！」

全然冷静ではなかった。

涼し気な表情はそのままに数えきれないほどの青筋を立てて、そんな台詞を垂れる。誰の目から見ても明らかに自分に言い聞かせている様子だ。

何よりも恐ろしいのはその瞳。深淵を覗き込んでいるかのような、ドス黒い怒りで塗り潰されて一切の光を失っている。完全に病んだ目をしていた。

そんな目を向けてニツコリと微笑まれ、三郎は悲鳴を上げてレイナに抱き着いた。これは怖い。

「——御館様、尚之助。落ち着きなさい」

「び、比丘尼さん。良かった、貴女は冷静で……！」

「全く、不甲斐ない。あの弾正のクソガキが戻ってきた程度で取り乱すとは」

「お、おう。そうだな。その通りだ」

「す、すみません、三郎さん、七霧殿。御二人に八つ当たりするなど……」

凜とした比丘尼の声が、部屋の中に響く。

ただそれだけで、骸佐と尚之助は冷静さを取り戻した。流石に、長くふうまに仕えてきた訳ではない。

初代ふうま 小太郎の時代に盟友となった二車家を監督し、栄えさせ、支えてきた母のような立場なのだ。如何に骸佐と言えども、その言葉に正当性がある以上は従わざるを得ない。

「それでは——弾正をぶつ殺して参りますので、私はこれにて」

「ヤベエエエエ!!! 全員、比丘尼を取り押さえろおおおおお——
——!!」

そのような立場である以上、ふうまと二車をしつちやかめつちやかにした弾正には恨み骨髓である訳で。

二車の先代、骸佐の兄弟達は勿論の事、あの反乱で失われた幹部達は比丘尼にとっては息子や孫のようなもの。弾正に対する怒りも憎しみも恨みも言葉で語り尽くせるものではない。

何処か冷たい印象を受ける女性であるが、実際には身内に対する情は非常に厚い。

初代ふうまに心酔し、絶対の忠誠を誓ってはいたものの、その情愛深さから常軌を逸した冷徹さについていけなくなり、離れた所で彼を支える事を決めた。その結果が、今の立場なのだ。

ニコリと微笑んだ比丘尼はスタスタと扉へと向かっていくが、必死な表情の骸佐の命令で、全員が必死な表情で取り押さえに掛かる。

その中央で、唯一形を保っていたソファに腰掛けさせられ、比丘尼は放心状態で茫と虚空を眺めている。まるで介護が必要なほどに痴呆が進んでしまった老人のようだ。

骸佐は肩で息をしながら床に胡座をかいて座り、尚之助は髪の毛が乱れたままガツクリと肩を落とし、レイナと三郎はその場にへたり込んでいた。

「比丘尼殿は特にでしようが、他の者も弾正の帰還を知れば似たようなものでしよう。確実に荒れますね」

「だな。其処はオレと権左、お前で無理矢理抑えるしかねえだろうよ。その後は、龍門に八つ当たりさせる」

「……弾正の方に流れる人もいるんじや」

「確実に居るだろうな。反乱に加担したのは、自分の欲望のままに好き勝手したい連中ばかりだ。オレの下でよりも、弾正の下の方がより好き勝手に出来る。そう考える奴は少なくないだろうな」

「それじゃあ、どうすれば……」

「弾正に流れるような奴等なんぞ、いなくなってくれて構わねえ。こっちの目的と合致するだろ？ このまま支配域を拡大して外から捨て駒を取り入れる。足場を固めるのが先決だ。弾正の情報も幹部の中でも信用できる奴だけに留めて、タイミングを見て他の連中に明かすとするか」

落ち着きを取り戻した骸佐は、悩ましい現実にも苦悩しながらも今後の方針を考えながら立ち上がる。

必要であったとは言え骸佐は反乱の際に、建前として政府の犬に成り下がった現体制を討伐しようとしたふうま 弾正の行いを旗印とした。

であれば、弾正が戻ってきた以上は、骸佐よりも弾正に着いていこうとする者がいるのは必然だ。そもそも、反乱に加担した者の殆どは社会のルールも守れもしない欲望塗れの者達なのだ。

今後予測される人員の流出は勢力としての弱体化を意味するのだ

が、骸佐はそれはそれで構わないと言う。少なくとも彼は弾正を正義などと思っていないし、寧ろ今すぐ死んで欲しいとすら考えている。彼の本当の目的も、未だ判然としない。

「弾正は今、日本の内情を探っている最中の筈だ。反乱の情報を掴むのも時間の問題だろうな。それを知ればこつちを取り込むように動く。ふうま正義派なんぞ謳っちまったんだ。それは仕方ねえ」

「そんな恥知らずな……弾正は本気でこつちが従うなんて思っているの？ 勝手に捨てて逃げたつて言うのに、捨てられた側の心情を考えれば従う訳ないじゃない」

「ふうま 弾正という男は、そういう男です。頭が茹だつているとしか思えないような事を平気で言いますし、平気でします。他人を慮る」という機能が生まれながらに欠如しているのですよ。生きていい人間ではない」

静かな怒りを滲ませながら、元ふうま宗家の当主に向けるべきではない言葉で断言する尚之助に、レイナは啞然とした表情で見やる。

弾正に着く人間が居る、というのはあくまでも頭を過つた不安要素に過ぎなかった。流れる者と弾正の思考回路を彼女のような真つ当な人間には到底理解できない。

欲望の為に自分を捨てた相手に従うという思考は、屈辱を感じないのかと思う。恥知らずな弾正には、どの面を下げてまた一緒にやっていこうなどと言えるのかと感ずる。

彼女の考えも神経も至極まともだ。異常なのは彼等の方であり、そんな中に放り込まればまともな方が異常となるものだ。

しかし、骸佐と尚之助の表情に変化はない。間近で弾正の横暴と欲望塗れのふうま一門を見てきたからだろうか、慣れたものなのだろう。

少なくとも基本方針はそのままだ。龍門を追い出し、その支配域をそのまま横取り。そして、更に勢力を拡大していく。使える者と使えない者を選び分けて取り込む。面従腹背など百も承知。彼の目的に

はそれで充分であった。

そして、それはそのまま弾正への対応策となる。

勢力が拡大すればするほど、弾正は骸佐に対して強気に出れなくなるからだ。多少の人員が流れたとしても、痛手は少なくなる。

「小太郎と共闘もする。今は返答を保留しておくがな。後は、葉隠か」
「対魔忍に属さず、独立した元ふうまの勢力。弾正にしてみれば、取り込みやすい相手ですからね」

「ちと早いかもしれんが、先に此方が取り込んでしまおうか——おい、婆様。何時までもボケてねえでしっかりしてくれ、仕事だ！」

「……………え、ええ、承知致しました」

自分を呼ぶ声でようやく戻ってきた比丘尼は、ハツとした表情で返事をする。

骸佐は拠点を離れられない。戻ってくる幹部達への労いと説明、現状の把握、また勝手な行動を抑えられるように目を光らせておかねばならない。組織の頭は軽々に持ち場を離れられないのだ。

葉隠家は元ふうま八将であり、今は何処に肩入れするわけでもなく独立した一族だ。

先代は弾正について戦ったものの敗死。若くして当主となった葉隠 真千子はアサギと和睦を果たして、今は闇の街の一角を支配する立場にある。

真千子はふうま一門の再興になど一切興味はなく、葉隠家の利益と自身の戦いを望む本能に従う女。

どちらに転ぶかは分からないが、弾正が動けば弾正の側に転びかねない。

はつきり言つて、葉隠は勢力として弱小も弱小だ。当主も部下も粒揃いだが、如何せん数が少ない。

家と部下を潰されたくなくば我に従え、と言われれば、部下思いの真千子の事、苦渋の末に従属を選ぶだろう。

別段、骸佐としては真千子や葉隠などとなった所で構わず、懐に招

くとなるとかつての同格としてそれなりに優遇せねばならず面倒臭い事この上ない。

事実、二車の母と言える比丘尼だからこそ名代と成り得、他の幹部を送つては非礼に当たる。が、弾正に戦力を渡すくらいだったら、自身の下へ招いた方がマシだった。

「……………骸佐」

「——ん？」

「私は、お前の考えや目的を理解もしているし尊重もする。けれど、決して納得した訳ではないの」

「婆様、そりゃオレを裏切るって意味か？」

「いいえ、私が裏切るなど……でもね、腹を痛めて産んだ訳ではないけれど、二車の者は皆、私の子供のようなもの。それが死んでいく様を私も好きこのんで見たい訳ではない。そして、貴方もその一人。それを、忘れないで」

「……………分かった。忘れなければいいわけだな。葉隠を取り込め、任せたぞ」

「……………もう、誰に似たのか頑固なこと——了解致しました。御館様の御為に」

久方振りに立場ではなく名前で呼ばれ、骸佐は怪訝な表情で比丘尼を見た。

彼女は今にも泣き出しそうな表情で、心からの本心を明かしていた。自身の育てた者達が散っていく様は、長きに渡る人生で何度となく見てきたというのに、一向に慣れる気配がない。どれだけ自らの本心を覆い隠す術を身に着けたとしても、内心は何時だって彼女は涙を流していた。

破滅の道を進もうとする骸佐に対しても、それは変わらない。

彼の父や兄弟にも同じように懇願した。だが、それが二車の役割だから、と彼等は迷いなく自らの死地に赴いた。

或いは童のように泣き喚いて止めれば結果は変わったかもしれな

い。しかし、それをするには彼女は歳を重ね過ぎ、忍として生き過ぎた。運命とは決められた未来ではなく、自ら重ねてきた過去からやってくるものなのだ。

比丘尼の細やかな願いを耳にしても、骸佐の表情に変化はなかった。

真正面から視線と意思を受け止め、目と目を合わせるが、微塵も揺るがない。彼の意思は鋼。折れず曲がらず錆びつかない。自ら進む道は自らが選んだものしかないと言わんばかりに。

その目に、在りし日の先代達を見た比丘尼は全てを諦め、忍の仮面を被り直す。

数瞬後には、怜悯な美貌を取り戻した彼女は、錫杖をしゃんと鳴らして部屋を後にする。

真千子であれども、彼女が赴けば無碍には出来ない。また弾正帰還の情報虚偽とは考えて樂觀視もしない。骸佐との交渉のテーブルに付くだろう。

「尚之助、お前はあの女傭兵の二人に連絡を取って五車から弾正の情報を得るように切り替えるように伝えろ。報酬も上乘せするともな」「御意に」

「三郎、拠点の防備を固めろ。すぐに来るとは思えんが、あの弾正だからな。馬鹿は何をしでかすか想像できん。周囲に忍獣を放っておけ」「承知しました」

骸佐が命を下すと、二人は目を伏せて受諾して部屋を後にする。

その背中を見送ると、疲れを滲ませながら壊れたソファに腰掛けた。部屋の惨状を見回し、真千子が来るまでに片付けねばと考えながらも、今は何のやる気も起きない。

弾正はどうでもいい。苦労が増すなど、この道を歩むと決めた時点で覚悟していた事だ。そんな事よりも、比丘尼の言葉の方が遥かに効いていた。

比丘尼は実の母以上に愛情を注いで貰った存在である。

骸佐は他の兄弟とは異なり、先代の息子ではない。弾正と母親との密通の果てに生まれた不義の子なのだ。

母にとって自分は道具でしかなかった、と彼は結論している。注ぐ愛情も、向ける喜びも、結局は弾正と自分の息子を通して得られる自分の幸せを愛していただけであり、骸佐自身の事など一度だつて見たことはなかったのだ。

弾正と母の間がどのような経緯でそのような関係に至ったのかは分からない。大方、骸佐が成長すれば目抜けに変わって正式な後継者として選び、正室として迎え入れるとでも言われていたのだろう。

馬鹿馬鹿しいにもほどがある。そんな言葉の何処に信じる要素があったと言うのか。結局、弾正は母を捨てて逃げ出し、本来の夫や息子を失つて彼女は責任を取るでもなく勝手に壊れた。反吐が出るような悲劇のヒロイン気取りだ。

それでも彼は自分が不幸だと思つた事はない。

先代——二車 又佐は全ての事実を把握しながら実の息子として扱い、他の兄弟も同様であつた。

母親から真つ当な愛情こそ得られなかったが、比丘尼は厳しくも優しい愛情を注がれ、父と面識のあつたふうま 潤からは無償の愛と言うものを実感させて貰つた。

部下にしてもそうだ。事実を知らない者はいるが、事実を知つてなおも己を慕い、変わらぬ忠誠を向けてくれる者が殆どだ。

これを幸せと言わずに何と言うのか。少なくとも、骸佐にはそれ以外の言葉が見つからない。

故に、比丘尼の言葉はどんな攻撃よりも重く響いた。

愛してくれた者が、己の行いと選択によつて涙を流したくとも流せない現状に叩き落とした事実が、骸佐の心に思い十字架を括り付ける。

それでも覚悟は揺るがない。最早、スタートは切つた。後はゴールに向けて走り抜けるだけ。途中棄権も退場も許されないし、するつもりもない。

「——酷い人ね。比丘尼さんの言葉、尚之助さんや三郎さんも同じでしょうに」

「だったら何だ？　そもそもお前はどうなんだ。母親が夢枕に現れて、もう私を助けようとしなくてもいいと泣いて懇願すれば止めるのか？」

「まさか。そういう意味じゃ、私は貴方に似てるわ」

「だろう？　だからオレはお前を信頼する」

「……………はあ、思った以上に人誑しね。これじゃあ、裏切るに裏切れない」

「ふうまは女誑しだが、二車は人誑しなんだよ。これも伝統って奴だなあ」

呵々と笑う骸佐に、レイナは心が疼くのを感じていた。

迷いなく己を信頼し、それを言葉にする人柄。カリスマ、とでも言えばいいのか。他の幹部が骸佐に着いていく理由が分かった気がした。

少なくとも、現時点で彼女に裏切るという選択肢はなくなっていた。母のためであればどんな汚名を被ろうとしていた彼女がだ。

「それで、私は何をすれば…………？」

「取り敢えず、此処を片付けるかあ。その後に諸々と教えてやるよ」

紅のアフターケアは必要なかった、これには苦労人もニツコリ。そして股間はモツコリ

（骸佐からの返事は今の所はなし、か。返事をする余裕がねえか、対弾正戦で共闘戦線を張るのは既定路線だが頭ぱーぷりんの部下をどう説得するか考え中つてとところか）

三郎から送られた鳶を向かわせて数日後。

小太郎は学校をサボって五車町の中を一人で歩いていた。

近代化から取り残された町並みは田舎町と言った趣で、道の両脇に連なっている家々はよくあるモダン調ではなく昭和の風情すら漂っている。

まだ幼稚園に通う年ではない子供達が駆け回り、主婦達が井戸端会議を繰り広げる姿がチラホラと見える。

皆、対魔忍や調査第三部そのものではないものの、その関係者であり、完全な一般人とは言い難い。

とは言え、感覚や倫理観そのものは民間人と大差はない。太陽が頂点に達しようかという時間帯に制服姿のままの外を出歩く小太郎の姿に眉を顰めて、ひそひそと何やら話し合う者も見受けられた。

しかし、そんな視線を気にする男ではなく、時折すれ違いざまに挨拶をしてくる子供達に片手で手を振りながら住宅街を抜ける。

其処から田園地帯が短く続き、小さな竹林に囲まれた古民家に辿り着く。

住宅街の民家に比べても一段と古かったが、隅々まで手入れが行き届いており、古臭さが逆に味になっていた。

民家の前に立つと後付されたチャイムに押す。

暫くすると磨りガラスの引き戸の向こうに一つの人影が生まれて

揺らめき、ガラリと音を立てて開いた。

「はいはい——つとお、若じやないか」

「よう、龍。久しぶりだな」

「そうだねえ。ところで学校は？」

「サボリ。出席日数は計算してるんだ、文句はねえだろ？」

「勉強云々に関しても卒業に問題ないレベルでもうとつくにやってるんだらうからね。だがねえ、学校つてのはそういうもんじやないだらうに。ま、あたいが言えた義理じやないがね」

現れたのは、浅黒い肌にウェーブがかった髪を腰まで伸ばした女性であった。自身の平気で学業を放り出していた学生時代でも思いつているのか、サボつてまでやってきた小太郎に苦笑を漏らす。

薄紫のリップ、マスカラにアイラインまでバツチリ引いたメイクに、黄色のキャミソールとデニムのホットパンツ姿は如何にもギャル風の見ただ目であるが、立ち居振る舞いに隙きがなく片手に鞘に収まった刀を握っている。

彼女の名は心願寺 龍。

心願寺家は幻庵、楓、紅が直系に当たるが、傍系も存在しており、彼女はそれに当たる。幻庵の甥に当たる心願寺 帯刀の一人娘で、紅と従者であるあやめに続く心願寺家の生き残りだ。

伝統的に心願寺家は直系が小太刀二刀の剣術を受け継ぎ、傍系は心願寺一刀流を受け継ぐのが慣わしだ。彼女の手にした刀も流派と共に受け継がれてきた大業物である。

彼女は現役の対魔忍であると同時に、当主としての教育が十全に行き届かなかつた紅をあやめと共に公私問わず支えている。

紅の事となると暴走しがちなあやめを抑える立場であり、本人は努めて冷静に意見を述べる縁の下の力持ち。

ただ、同時に剣鬼と呼ぶべき凄絶な本性も隠している。

幻庵や帯刀から紅の助けを任された手前、勝手気儘に生きる真似はしないものの、その縛りさえなければ剣の道を極めんと五車から出奔

していたに違いない。

だが、九郎と共に世界中を飛び回っているあやめに変わり、紅の身の回りや当主としての仕事を肩代わりしている辺り、今の生活に不満がある訳ではないようだ。

「クラクルは……？」

「昼飯喰ったら散歩に行っちゃまったよ。どうやら近所のガキ共と遊んでいるらしいね。小五月蠅く言ってくる連中も居るが、クラクルはこつちから手を出さなきや無害だ。メシさえ喰わしてやつときや放っておいても大丈夫だろうよ」

「他所の家に冤罪でも押し付けられちゃ堪らねえんだがな、こつちは」
「よく言うよ。若の事だ、そんな事になったらこれ幸いとばかりにでつち上げた証拠掴んで逆に追い詰めるんだろう？ あたいの仕事は気難しい紅のお嬢と気侷な猫の世話だけさね」

「お前は気楽でいいよなあ……」

「家になんて興味ないからね。やる事やったら後は剣を振る生活が出るから、あたいは此処に居んのさ。知ってるじゃあないか」

難しい事など何一つ考えていなければ考えるつもりもないとお気楽に笑う龍に、呆れと羨みの混じった視線を向ける。

小太郎にしても、紅の補佐をするあやめにしても、彼女は扱い易い人間だ。

既に心願寺家に力は残っていないが、血統から言って当主となるには充分でありながら権力欲というものが存在していない彼女は軒を貸して母屋を取られる心配がなく、剣を振る時間さえ与えてやれば満足してくれるのであれば信頼するには十二分。

金や権力と言ったリソースのない家にとつて、これほど最適の人材はいない。言い方は悪いが、割れ鍋に綴じ蓋だろう。

龍はクラクルとの関係も良好らしく、嫌っている様子は見られない。

性格も素直で実力も高く、多少の怪我など物ともしない野生は鍛錬

の相手として申し分ない。何よりもまずは剣、という価値観を持つ彼女とは或る意味で相性が良かったのかもしれない。

とうのクラクルも話を聞く限り、五車の生活に馴染んでいるようだ。

小太郎にとっても嬉しい限りであった。このまま多くの若者が魔族との付き合い方を学んでいければ、魔族Ⅱ敵という意識への改革に繋がっていく。

もし万が一、クラクルを力尽くや策謀で排除するような輩が居たとしても、アサギが正式に認めた客人である以上、証拠さえ得られれば逆にそのような輩を排除するだけの大義名分を得られる。

どちらに転んだとしても、小太郎にとっては手を汚す必要こそあれども、腹や頭を痛めずとも利の得られる話なのだ。

「で、本題だが、紅の様子はどうか？」

「若に自宅謹慎を喰らってから毎日精神統一やら私と鍛錬、それから幻庵の爺様の仏壇に手を合わせてるよ」

「それなら問題なさそうだな」

「お嬢も一皮剥けたのかね。剣から迷いが消えて一太刀の鋭さが増してるし、顔付きも精悍になった気がするねえ」

「ま、そんなところだ。上がらせて貰うぜ」

「お好きにどうぞ。お嬢は仏間に居るよ。あたいは庭で洗濯物を干してるから、何かあれば声を掛けとくれ」

剣士らしい視点から捉えた的を射た龍の言葉に小太郎はお茶を濁した。

紅が吸血鬼の力を引き出して心願寺の奥義に手を掛けた事実は、まだ身内にも隠しておきたかった。

龍がその事実を知れば、嬉々として紅に模擬戦を挑むであろう。其処までいいが、それを部外者に見られるのが問題だ。

吸血鬼化、或いは魔性化とでも呼ぶべきあの状態を見られれば、ただでさえ警戒されている紅は、魔族そのものとされて排除に動かれか

ねない。

一介の魔族に過ぎないクラクル、一目で良心的と分かるナディアとは異なり、紅は「エドウィン・ブラックの娘」という本人にも周囲にもどうしようもない前提がある。

例え紅を陥れようとした者を排除したとしても、心証は決して良くならない。そういう噂が立つだけで疑いが募る結果となる。

疑心暗鬼とは山火事のようなもの。一度燃え始めれば爆発的に広がっていく。これを鎮火させるのに必要なのは周囲に流されない自制心と確たる良心のみ。

対魔忍であれども、それを手にしている者は少ない。正義を掲げている事と善人である事は決して等号では結ばれないのだから。

玄関からサンダルのまま裏庭へと向かっていく龍を見送り、小太郎は勝手知ったる人の家に遠慮なく上がり込む。

廊下を進む度に床が軋む。耳障りな音ではないのは、あやめと龍がまめに手入れをしているからだだろう。

外から見てもそうであったように、内装も古さが味になっている。埃一つなく、障子や襖に傷は一切ないように張り替えられ、見栄えの悪い部分は何も無い。

廊下を少し進み、仏間の襖を開ける。

畳張りの部屋には二つの仏壇があり、扉が開かれた仏壇には亡き幻庵の遺影と位牌、花と果物が供えられていた。もう一方の仏壇は帯刀のものだ。

線香が香りを帯びた煙を天井へと静かに伸びていた。仏壇の前には、座布団も敷かず正座したまま静かに手を合わせている部屋着姿の紅の姿があった。

ずっと背筋を伸ばし、瞼を閉じたまま死者を想う祈りの所作は、息を呑むほどに美しい。

それはそのまま紅がどれほど幻庵に対して、深い感謝と親愛の情を抱いているのかを示している。

小太郎は声を掛ける真似はせず、仏間へと足を踏み入れた。

其処でようやく紅も小太郎の存在に気が付いて視線を向けたが、何

も言わず隣に腰を下ろして黙禱を捧げる彼の姿に、再び瞳を閉じる。

「……………ヨミハラで、あの時、御祖父様が来てくれたような、気がした」

「そうか。心配性な爺様だな。死んじまったんだ、ゆつくりしてりやあいいものを」

「不甲斐ない孫だからな、仕方ないさ。それよりも、身体の方は……」
「問題ない。よくない状態でお前に会いに来ちゃ、余計に落ち込むだろ、お前」

「ふふ。何から何まで、本当に済まないな」

「いいさ、好きでやってるんだ」

暫くの間、互いに幻庵へと黙禱を捧げていたが、伝えたい事を伝え終わったのか、紅が沈黙を破った。

僅かに小太郎を傷つけてしまった罪悪感を滲ませながらも、取り繕っている様子はない。

各流派の奥義とは心技体が揃って初めて手が届く。魔性の力で以て無理矢理その領域へと手を掛けた紅であったが、精神的に成長していない訳ではない。

龍の言う通り、紅は確かに一皮剥けた。自らに流れる穢れた血もまた自分の一部であると受け入れたのだ。ある意味、開き直りとも言える境地であったが、開き直りもまた成長だ。

自らを傷つけられた挙げ句、一時は屍食鬼にまでなったと言うのに、気にした様子もなくあつけらかんと告げる。

自分自身に対する頓着の無さは紅も心配になったが、それ以上に気を遣ってくれる優しさが嬉しかった。

小太郎も嘘は吐いていない。自己の屍食鬼化という語っていない事実はあるが、口にした言葉は紛れもない事実である。

紅は真正正銘の爆弾であった。強大な力を抑え込んではあるが、何時、何を切っ掛けに爆発するか分からない危険物。少なくとも周囲の人間は、そう認識していた。

しかし、小太郎の生来の気質故にか、気にした事は一度もない。落ち込みやすいのが玉に瑕だが、根は素直で純粋な幼馴染。それ以上でもそれ以下でもない。

言葉が通じて会話が成立し、手と手を取り合えばそれで充分。人も魔族も大差はない、善人も居れば悪人も居る。彼には、混じり者だからと忌み嫌う理由が理解は出来ても全くと言っていいほど共感できなかつた。

紅にとって、それが堪らなく心地良かったのだろう。

我が身に流れる呪われた血も運命も、周囲から父親が父親だからという理由で忌み嫌われている事実も、小太郎の前では忘れられた。

だから、何時でも命を張る覚悟が出来ている。だからこそ、愛して欲しいと乞い願ったのだ。

「今後だが、その力も使い熟してもらおうからな。臭いものに蓋をするのは止めたんだ、構わないだろう？」

「ああ、それは構わないんだが……少し不安だな。あれ以来、一度も使っていないし……」

「それなら問題ない。その手の力つてのは自転車の乗り方と同じだ。一度でも出来れば、早々忘れられるものじゃない」

不安げな表情を見せる紅に、己の経験則を語る。

尤も、小太郎は忍法に目覚めていない故に、災禍や天音が成長していく過程を目にしていた故の言葉だ。

事実として、二人は我を見失うほど厳しい訓練の末に身に着けた新しい忍法の使い方や技術を出来なくなつた事は一度もない。小太郎として技術技能技巧に限定すれば同様だ。

何かを身に着ける過程とは、己の身体と魂に彫刻刀で文様や文字、絵を刻み付ける行為そのもの。苦痛と共に得た成長は忘れたくとも忘れられるものではない。

これから紅は凄まじい勢いで成長するだろう。

元々あつた雷遁の超火力に、制御能力が加わつた事で応用範囲が爆

発的に広がったゆきかぜ。

希少価値が高い空遁をその身に宿し、小太郎の助言によって発想力を高め、万能とも呼べる領域に手を掛け始めている凜子。

この二人に比べれば、紅は見劣りしていた。身体能力こそ高かったものの、風遁も剣才も幻庵には劣っており、彼の低位互換に過ぎなかった。

しかし、本来の己を受け入れた事により、彼女にしか手の届かない人魔合一の領域へと足を踏み入れた。

成長とは必ずしも緩やかな曲線ではない。確かな土壌と些細な切っ掛けがあれば、人は変わる。紅にとっては今がその時なのだ。

「ま、それはおいおいにして——オレも少しばかり頭に来てる」
「ひやわ……!? こ、小太郎、な、何を……!」

これから何をするのか、これから何をすべきなのかに思いを馳せていた紅は、突然訪れた刺激に可愛らしい悲鳴を上げた。

見れば、隣の小太郎が正座したまま尻に手を伸ばしている。

紅はデニムのホットパンツの上から与えられる快感に抗う術はない。抵抗する、という考えそのものが抜け落ちていた。

ぶるりと身体が震え、胎の奥底から燃え上がる欲情の炎を自覚せざるを得ない。

「全く、お前はオレの女なのに、ブラックや馬鹿娘の玩具に成り下がろうとしやがって」

「……はう……そ、それは……う、ひい……♡」

「別に怪我とかはどうでもいい。オレが許せないのは其処だよ。あんな連中にお前の何もかもをくれてやるつもりは毛頭ない」

「あ、謝る。ちゃんと謝るから、今は——ひうううっ♡」

ギラギラとした雄の欲望とみっともない男の嫉妬。

そんなものですら、紅には歓びだった。小太郎はこういった形でし

か愛情表現をせず、根本的に何処か歪んでいるが、これもまた嘘偽りのない彼の気持ちであり、それを一心に浴びている現実には女と牝を疼かせるには充分過ぎた。

身悶えしながらも、何とか尻を撫で回す小太郎の手を掴み、細やかな抵抗を示す。

流石に、幻庵の仏壇の前で事に及ぶ度胸は紅にはない。それでも頬は紅潮しており、牝の欲望が鎌首をもたげているのは明らかだった。

紅の抵抗に、小太郎は無表情を歪めて、眉根を寄せてムっとした表情を作った。

雄の脂ぎった欲望に対して、まるで玩具を取り上げられた子供のよくな無垢さもある不思議な表情だ。

そんな彼を可愛いと感じながらも、紅は尻から駆け上がった新たな快感に嬌声を上げた。

雄の欲望を受け止めるために成長したとしか思えない脂の乗った尻肉を、跡が残りそうな力で鷲掴みにされたのだ。

「今夜、オレの家に来い。たっぷり躑けて、可愛がってやるからな」

「ひゃ、ひゃい……主様あ……♡」

耳元で囁かれた誘いの——いや、命令の言葉に心臓がドクンと高鳴る。

紅の瞳は潤んでとろんと目尻が下がり、口の端を震わせながら、どうしようもない期待とはしたくない欲望の返事をするのだった。

魔女と鬼と神と対魔忍

まだ行けるは危険信号。でも、そこでアクセルを踏まされてこそその苦労人

「……………」

五車学園は対魔忍育成機関であるが、通常の学校と変わらない施設も当然存在する。

教員の集まる職員室、体調不良や怪我をした生徒を治療する保健室、特定の授業で必要な教室などなど。

今、小太郎が居る場もそうしたものの一つ。昼休みであれば学生達でゴった返す食堂であった。

広さは300人以上もの収容できるほどもあり、天井も高い。壁も床も清潔でシミひとつなく、食堂関係者の手が行き届いているのが伺える。

数十もの長テーブルが狂いなく、窓の傍には丸テーブルがカフェのように並んでいた。

時間帯は放課後であったが、学生の姿もそれなりに見て取れる。

両親のいない学生を慮ったさくらの提案が通った故に、昼だけでなく夜間も利用可能だからだろう。寮や家に帰って一人寂しく栄養の偏った食事をするよりも、遥かに健全な食生活を送れるのだ、利用しない手はない。

それだけではなく、勉強に勤しむ者も入れば、友達と集まって何かを話している者も居る。こうしてみれば、学園としても学生としても何らおかしい所はない。

「ほらよ、アンタ専用の特別メニュー。顔色悪いね、大丈夫かい？」

「……………」

「ダメだこりゃ。さっさと食っちまいな」

食券も持たずカウンターの前に立った小太郎は、食堂のおばちゃんに呆れられながらもメニューには彼専用の特別食を受け取った。

一言も喋らず、小太郎はふらふらと幽鬼の如き足取りで去っていく姿におばちゃんは大きく溜め息を吐き、遠目に彼を見た生徒はひそひそと何かを囁きあっている。彼の姿を見れば無理もなかった。

血走った目、落ち窪んだ眼窩、瘦けた頬、半開きの口唇、口の端から垂れる涎、深淵を覗き込んだかのように淀んだ瞳、明らかに艶を失った肌。何処からどう見ても重病人にしか見えない。

どんぶりいっぱいのお卵おじやもまた病人のそれであるが、脇に添えられたコーラ、うめぼし、バナナと、その実、栄養バランスのいい速効性のエネルギー食であった。

自らの引き起こしたヨミハラの動乱から早二ヶ月。小太郎の肉体的精神的な疲労は頂点に達していた。

その最たる理由は、やはり魔界に存在しているナディアの領地の置かれた危機的状况にあった。

領地自体は平和そのもので民達も魔界の住人としては破格と言える穏やかな性格。

周囲を危険な魔獣の生息する険しい山岳地帯に囲まれ、唯一他の領地へと繋ぐ道は湿地帯を通っており、正に天然の要害とも言える黄金立地。

領地の正面にはドワーフの築いた城壁があり、戦闘可能な魔族達が待機している状況と悪くはない。

だが、他領地からの流民は増加の傾向にある上、周辺の領地は戦争を繰り返している惨状。いつ戦火に巻き込まれたとしてもおかしくない。

ナディアの盟友であるメイア・ブラッドロードと連絡を取った小太郎は、流民の中に他所のスパイが紛れ込んでいないかを警戒させると共に、とにかく戦える者を集めて部隊を編成させた。

人間如きに、と自身を見下しているメイアをナディアと共に説得するだけで一苦勞であったが、それなりに効果は上がっているようだ。

更に、平行してナディアへと人類社会の変遷——要は歴史の授業を行いながら、現状で実行可能な政策を緩やかに提案させている。手始めに、戦鬪部隊を上手く運用するために領民から税の徴収を行う運びとなったのだが、これがまた面倒であった。

多民族で構成されるナディアの領地はそれぞれの得意分野が異なり、ホビットやノームは農耕を、ドワーフならば工芸や製鉄技術を、エルフは魔法技術をといった具合に既に各々の役割が決定している。つまりは、それぞれから取り立てる税の内容も変わってくるわけである。

どう考えてもクツソ面倒くさい仕事である。メイアは取り立てられるものは取り立てちゃえば？ と頭すっからかんなことを言っていたが、そんなことをすれば破綻は目に見えている。

税は同じ価値のものを同じ分だけ皆から一律に吸い上げねばならない。でなければ不平等だと不満が貯まる。不満が貯れば、ロクに法整備もなされていない領地は内部崩壊待ったなし。

現代日本とは異なり領地で通用する価値観を身に着け、それぞれの役割に応じつつも皆が妥協できるラインを探り、それぞれの種族から代表者を選出させて、教育しつつ管理させる。もうこれだけで大仕事だ。

この綱渡りを何とか渡りきった小太郎は、ナディアの口から正式な形で導入させていくことに成功。各種族の代表者達の反応は——

『さすがナディア様だあゝ（尊敬の眼差し）』

『んまあ、ナディアの嬢ちゃん頼みとあっちゃ仕方ねえな、任しときな！（子を見る目）』

『守護らねば（使命感）』

『私、こんなのやるの初めてなんですけど……まあ、ナディア様の決定なら頑張りますが（困惑）』

——と概ねこんなものだ。

一部、慣れない仕事に大いに困惑しているようであるが、決定に不満はないご様子。流石はナディアの人柄と領民の良心だけで持っている領地である。

この反応であれば、緩やかな法の整備と防衛のための急速な軍拡路線も受け入れられるだろう。ようやく一段落が付いたと言える。

さて、続きナディアの教育やらに関してはどうなっているのかと言うと。

『テメエ、これ今日までに全部読んどけって言ったよなあ……!』

『む、無理よ。だって、だってこんな山みたいに……』

『いいからやれ。やるんだよお。無理を通せば道理なんて引つ込むんだよ! オレがやってきたからなあ! つーか現在進行系でやってんだよオレはあ!!』

『ヒエツ』

遅々として進んでいなかった。

昼間は稲毛屋で店員として働き、夜は勉強の毎日でナディアも疲れ果てている。

元々、魔族の長命種は一日の価値というものが人間よりも遥かに安い。密度のない一日を過ごせたとしても、寿命が長い分だけ目的地に辿り着ける公算は高くなるからだ。ナディアもその典型であった。

穏やかな性格も相俟って、最早呑気ですらある態度に小太郎は怒髪天衝。ナディアは彼と顔を合わせる度に顔を蒼褪めさせてカタカタする始末である。

それでも苛烈でありながらも親身になって付き合ってくれる彼の姿に思う所はあるらしく、徐々にであるが改善が見られるところは彼女らしいと言えよう。

「はあ……はあ……はあ……」

最早、歩くのも辛いとはかりの呼吸に擦れ違つた生徒は心配するどころか幽霊でも見たかのような表情をするが、誰も声を掛けたりしない辺り、如何に軽く見られるかが分かうというもの。

結局、ヨミハラの動乱や独立遊撃部隊の上げた戦果は極一部の者を除いて正確に伝えられていないし、正式に記録にも残さない方針となった。無理もない。余りにも戦果が大きすぎた。

不知火の救出に始まり、ヨミハラを半壊させ、淫魔族の暗躍を掴み、友好的な魔族と事実上の同盟関係を結び、ブラックに一太刀浴びせてきた。

言葉にすればこれだけであるが、内容の凄まじさよ。これを正確に伝えてしまえば、他の部隊が自信を喪失しかねず、逆に目抜けに出来たのだから我々もと一部の暴走すら予想され、正式に記録として残してしまえば、以後の部隊はこれを基準に評価されかねない。

噂として既に五車全体へと伝播してしまっているものの、正式に記録に残っていないければ、各家系の当主や教師陣も、そのような事実があったものとして語るに語れない。結果、多くの対魔忍には、まさかあの目抜けにそんな真似が出来る筈もない、と思われながらも、部隊員の練度からしてよもや……、と半信半疑の視線を向けられるのみとなった。

正直な所、それは小太郎にとってはどうでもいい。

独立遊撃部隊の評価は、任務を熟せば熟すほどに上がっていく。その考えは自信ではなく確信だ。

母であるふうま 潤から直接指導を受けてきた災禍と天音。己が強制的に成長させているゆきかぜ、凜子、紅。隊員の人数は兎も角として、練度だけで言えば対魔忍で最高峰。後はそれらの戦力を最適の形で運用すれば、相手が何者であれ易々と遅れを取りはしない。

問題があるとすれば、自分以外の五名が予想以上に周囲から評価されてしまっていることか。お陰で、五人は独立遊撃部隊以外の任務に立て続けで貸し出されてしまっているのだ。

元より対魔忍は万年人手不足の組織である。優秀な人材であれば

あるほどに酷使される。アサギも酷使せざるを得ない。

考えてもみてほしい。強力な幻惑の邪眼を持つ災禍。攻防一体の邪眼に加え、体術のスペシャリストである天音。雷遁の火力に広い応用力を持つゆきかぜ。そのゆきかぜすら超える万能ぶりを見せる凜子。高い戦闘力と殲滅力を有する紅。その上、全員が全員とも後方支援や事後処理まで行えるのだ。

これだけの人材が一つの部隊に運用されれば、他部隊にしてみれば溜まったものではない。それぞれの専門分野はあるものの、均等に戦力を分配されねば不満も溜まろうというもの。

平行世界の紫という、此方側での生活の保証という対価で雇った護衛もそう気軽に使えるものでもない。

今は、此方側の紫の親戚筋、という設定で戸籍を取得中。何らかの疑いの眼差しは各方面から向けられるであろうが、日常生活を送れるようになるだろう。

そんなこんなで、小太郎は自分を見下して言うことを聞かない下忍・中忍を手足にして死物狂いで任務に当たっている。

が、もう限界に近い。命令を無視して好き勝手した挙句、敵にいいように嵌められる頭对魔忍。増える事後処理。余計なちやちやをいれて足を引つ張る老害。独立遊撃部隊の任務に携われずに貯まる五人の不満。手に取るように分かる削れていく寿命。

先日など命令を聞かない連中を敵諸共に爆殺しようとしたほどである。彼の惨状を見るに見かねたさくらが助っ人に来ており、止めていなければどうなっていたことか。

「はあ……………はぐ……………もにゆ……………うっ……………ふぐう……………うつぶ……………じゅぞぞぞ……………じゆる……………ぶっはあ……………げろろ……………ずぞぞ……………」

「ちよつと、何あれ……………」

「キモツ……………行(行)」

やつとの思いで席についた小太郎は、早速食事を取り始めた。

のだが、おじやをよく嚙んで飲み込む度に両頬がリスのように膨らむ。ストレスの余り胃が食事を受け付けず、飲み込んだ物体が食道をせり上がって来ているのだ。それを気合と根性で再び飲み下す。やがてスプーンを動かすことすら億劫になったのか、はたまた上半身を支えることすら出来なくなつたのか、どんぶりに顔を突っ込んだ。

その奇行……というよりも異常事態に周囲は一瞬、目を向ける。親しくない間柄とは言え、倒れ伏した人間に視線を飛ばすくらいのこととするだろう。

内、何人かは助けようと立ち上がりかけたものの、聞こえてくる奇妙な音にビシリと固まった。どうやら、小太郎はそのままの状態でおじやを嚙っているらしい。その上、窒息と嘔吐を繰り返しながら。

任務と事後処理と書類仕事に忙殺されてきた彼には実に三日ぶりの食事である。食わねば死ぬ。飲み込んでも戻してしまおうが、食わねば死んでしまう。最早、見た目や周りの視線すら気にしている余裕すらない。

周囲はそんな彼の置かれた現状など知る由もなく、ただただ気持ち悪いものを見る視線を向けて、助けようとすらせずに離れていく。

「うう、ぶはあつ……ぐええ、つぶ……」

どんぶりの中身がなくなると、ようやく顔を上げる。

蠕動して内容物を吐き出そうとする胃と戦いながら、おじや塗れになった顔をおしぼりで拭い、其処で完全に力尽きた。

何処を見ているのかも分からない視線。生気を失った無表情。脱力しきつて垂れた両腕。

パッと見は死体にしか見えない。微かに聞こえる呼吸音だけが彼の生存を伝えていた。

「ふっくん、アンタがふうま？ なっさけない顔ね」

（コイツ……っか、オレヤバい状態だな。思考はあるけど身体が動

かない、声もでない)

呼吸をするだけで精一杯、生きてはいるが死んでいないだけといった状態の小太郎に、話しかけてくる少女が一人現れる。

小太郎の状態を把握しているのかいないのか。はたまた相手の状態など関係ないのか。見るからに勝ち気な表情に小馬鹿にしたような笑みを刻み込んでいた。

癖のある髪の毛を青いリボンを使って側頭部で結ったツインテール。

凜子よりも胸も尻も大きいにも関わらず、折れてしまいそうなほど細い腰。

身長も手足も長く、女性の理想というよりも男の欲望をそのまま現実に持ってきたような体型。

男であろうと女であろうとも目を引かれること受けないの金髪碧眼の美少女であった。

(見覚えがあるな。確か、例の………名前は、鬼崎 きららだったか)

彼女の名は、鬼崎 きらら。

小太郎やゆきかぜからは一学年上、凜子や紅と同学年に当たる。

その実力もまたゆきかぜ達ルーキーと同等かそれ以上のものとして語られる学生対魔忍。但し、ある悪癖というべきか、彼女自身の抱えた事情から周囲からの評価はやや低いものとなっている。

自身の状態を見てもお構いなしに何らかの———明らかに自身を貶める発言をしているきららに対して、小太郎は何の反応も示さない。

難癖にも等しい行為であるが、普段からあることないこと囁かれている小太郎にしてみれば微風のようにさしたる問題のない事だ。いちいち、腹を立てるほど青臭い性分はしていない。

と言うよりも、今現在きららの言葉なぞ頭に入ってこない。確か

に聴覚は彼女の言葉を捉えているし思考も妙にハッキリしているのだが、疲労が極地に達しているために彼女の言葉を脳が理解してくれないのである。

「つて、いい加減何とか言いなさいよつ！」

(言いたくても言えないんですよ。声が出ねえ。喋れても特に相手はしないだろうけど)

小太郎が何の反応も示さず、きららは無視されているとでも思ったのか、テーブルに両手を叩きつける。

大食堂に響き渡る打擲音に誰もが何事か、驚きと共に視線を向けたものの、音の発生源が小太郎ときららだと分かると呆れたように元の作業や会話に戻っていく。

関係のない他人であっても、二人が出会えばこうなる事はある程度は予測できる事柄のようであった。

明確な怒りを向けてくるきららに、小太郎は相変わらず反応しない。出来ない。

ただ、内心では呆れ返っていた。二人は完全な初対面であるが、小太郎は彼女の経歴や過去、抱えている事情をおおよそ正しい形で把握している。というよりも彼女のみならず、対魔忍であるのなら現役教師学生問わず、経歴を把握している。

その呆れた疑り深さから、災禍や天音と言った忠臣の輩ですら無意識の内に疑いの対象としてしまう彼にしてみれば、対魔忍の誰かなどいつ裏切ってもおかしくない有象無象。故に、相手が誰であれ、その裏の裏まで調べずにはいられない。

アサギという後見人もその疑り深さには怖気すら覚えているものの、彼自身が自らの性分を深く自覚しているからこそその公平性を失っていない、また彼女にとっても有益となる情報を得られるが故に黙認している。

「ちよつとききらちゃん、何をしてるの?」

「凜花ちゃん！ 聞いてよ、コイツ、あたしのこと無視するのよ?!」
「はあ、全く……小太郎も小太郎だけど、きららちゃんもきららちゃんよ。何時ものように男だからという理由だけで突つかかっていったんでしよう?」

「……………うつ」

(今度は凜花か。 久し振りだな。 挨拶もできないけど)

歯を剥き出しにして敵意を叩きつけるきららを止めたのは、呆れた表情を浮かべている負けず劣らずの美少女だった。

真つ白な髪は衰えではなく新雪のような若々しさを携えており、顔立ちは愛らしさよりも凛々しさと美しさが目立つ。

きららが男の欲望を具現化したような肉体とするならば、彼女は女性の理想を体現した肉体の持ち主だ。 何処も彼処も細いにも関わらず、出る所はきっちり出ている。 きららにある不自然なほどのアンバランスさがまるでない。 まるで人の手が加えられておらず、自然の中で生み出されたダイヤモンドの原石を連想させる肢体であった。

言葉は兎も角、凜花はきららの横暴を諫めたというよりも、寧ろ小太郎を庇うような仕草を見せる。

それもその筈。 凜花はふうま八将に名を連ねた紫藤家の跡取り娘であると同時に、紅と同様に小太郎の幼馴染でもある。

尤も、弾正の引き起こした反乱時には逸早く井河家へと寝返りを打っており、他家からの余計な邪推を避けるべくふうま宗家、他の八将とも距離を置いていたために、こうして顔を合わせるのは実に数年振りであった。

かつては紅と共によく遊んだが、今は立場の問題がある。 凜花がどう思っているかは別として、小太郎に不満もなければ不思議もない。

「久し振り、ね……………つて、大丈夫?」

(だいじょうぶじゃないです。 ていうかコイツがここにいてってことはやっかいごとのおいしかしい……………)

ただ、不安はあった。

当主である甚内の指示か、或いは凜花自身の考えによってこれまで一切の接触を避けてきたにも関わらず、こうして接触してきたのなら、其処には何者かの意志が介在していると見るべきだ。

彼女は生来の気質からして真面目で負けず嫌いで頑固者。家のためか、小太郎に迷惑を掛けまいとしたためか、接触を断ってきた。そんな凜花が自分の意志だけで自らに課した縛りを解くとは考え難い。甚内か、はたまたアサギか、或いは小太郎を陥れんとする老人達によるものか。いずれにせよ、歓迎できる事態ではないだろう。

対する凜花は、幼馴染にしてはギクシヤクした様子。

数年振りという事実を差し引いても、些か以上に緊張しているというべきか、恐る恐るというべきか。プライドが高く、自ら認めた者以外には厳しい態度を崩さない彼女にしてみれば珍しいを通り越して異常だ。

普段の彼女であれば、落ちこぼれには容赦もしなければ情けも掛けない。それが身を案じるような言動を見せている。どうやら、小太郎に対して色々と思う所があるらしい。

「ふんっ！ 放っておけばいいのよ、そんな奴っ！ どーせ仮病よ仮病！ これだから男つてのは……！」

「いい加減にしたらどうなの、きららちゃん。小太郎は、次の任務で私達の指揮を取るのよ？ そんなことでどうするつもり？」

「こんな奴の指揮なんて必要ないわ！ 私達だけで十分！」

「貴女ね……！」

（うわあ、このふたりのしきをとるなんてきいてないぞう。というかオレのちかくでけんかするのやめて、しんじやう）

凜花は努めて冷静に諫めようしていたが、行き過ぎたきららの態度に苛立ちを露わにする。きららもきららで引くつもりは一切ないようだ。

正に一触即発。遠目で事の推移を見守っていた者達も慌てて距離

を取ろうとしている。当然だ、次世代のエースが喧嘩を始めるかもしれないのだ。巻き込まれたら溜まったものではない。

小太郎も逃げ出したかったが、身体が一切動かず思考もボンヤリした状態。

死にかけの状態でまかり間違つてどちらかの攻撃をまともに受けたら一発昇天であるとはよくよく理解しているのだが、悲しいかな、抵抗する体力も止めようとする気力も残っていない。

睨み合いすら始めてしまった二人に危機感だけを募られる小太郎を救つたのは、現れて当然の人物達であつた。

「おい、お前達！ 何をしている！」

「ちよつとちよつと、何やってんの、もぐもぐ！」

「む、紫先生に、さくら先生も……」

（た、たすかった……いや、これからしぬかもしれないけど……）

現れたのは教師である紫とさくらだ。

何処からか一触即発の現状を聞いたのか、それとも彼等の接触でこうなること予期していたのか。何はともあれ、教師として生徒同士の激突を止める義務がある。

紫は鋭い怒号を飛ばしながら、さくらは眉を顰めながら、小走りに近寄り睨み合う二人の間に割って入る。

如何に学生とはいえ対魔忍。その身体能力と忍法を使って喧嘩でも始めようものならば、大怪我を負いかねない。

教師として身体を張つてでも止めるべき事態であり、紫にせよさくらにせよ、起こりかねない事態を力尽くで制圧できるだけの実力があつた。

「全く、何事だ！」

「……別に、ふうま君と話していただけです」

「さくらちゃんの度が過ぎたので、こ——ふうま君を庇っただけです」

「ちよつと、凜花ちゃん!？」

「事実でしょ?」

「いい加減にしろ!」

「あーはい! はいはい! もうやめやめ! 喧嘩しちやだめでしょ!」

(ほんとなんなのきみたち)

無然とした顔をするきららは上手く誤魔化そうとしたが、凜花の一言で台無しになる。

普段からこんな調子、というわけではない。寧ろ、二人は特に仲が良い部類だ。

互いに徒手空拳と異能を駆使する戦闘スタイル。圧倒的な身体能力を誇るきららと現役対魔忍と比較しても遜色のない技量を誇る凜花。切磋琢磨しあいながらも相手を貶めることのない健全なライバル関係と友人関係が其処にあった筈なのだが、今は全く機能していない。

それも無理はなかったかもしれない。

これまでのきららの態度や言動からも分かるように、彼女は無類の男嫌い。男など皆ケダモノ、同じ空気を吸うことさえ汚らわしい、と考えている。

凜花はこれまでその行き過ぎた男嫌いを諫めてはいたものの、根本的に男嫌いとなった原因を知っていたために強くは出れなかったのだが、幼馴染である小太郎が関わっているとすれば黙ってはいられなかった。

きららの男嫌いは学生どころか教師の間でも有名であり、紫もさくらも度々頭を痛めていた。

今回は凜花も関わっている故にある程度は安心していただけだが、どうやら小太郎に対する思い入れを見誤ったようだった。

「お前達は………はあ、ふうま、貴様も貴様だ。部隊長であるのなら、この程度の諍い——」

「そうだよ、ふうま君。相性悪い相手がいるのも分かるけど、そこらへんは上手く——」

紫は凜花と、さくらはきららと向かい合い、互いに背を合わせてこれ以上の軋轢を避けようとしていた。

どうやら、この二人もまた三名の参加する任務について知っているらしく、未だに何一つ言葉を発しない小太郎に苦言を呈しようとしたのだが、目が点になる。

それはそうである。

誰の目から見ても生気を失った彼の顔は、もはや死人のそれ。これを放置して睨み合っていた学生二人の浅慮さとこんなになるまで働き続けなければならぬ小太郎の立場と環境に驚いていたのであった。

「ちよ……ふ、ふうま君、大丈夫？ 大丈夫なの!？」

「こ、コイツのことだ、仮病という可能性も……」

「いやでもコレ、オフの日のお姉ちゃんみたいな顔になってるんだけど……!？」

「ああ、家に帰ってきた時の兄上のような顔になってるな……!？」

(だいたいようぶ、いきてるよ)

「あつ！ こつち見た！ 良かった、意識はある……けど、これヤバイ奴だよ！ 絶対ヤバイ奴だよ！ むっちゃん、見てあげて!？」

「ま、まあ、そうだな。ほら、少し眩しいが我慢しろ」

(やさしい……うおつ、まぶしっ!)

全く身体の動かない小太郎は、慌てふためく二人に向けてぎよろりと眼球だけを向ける。首も手も動いていない辺り、若干ホラーテイストである。

その様に、さくらは冷や汗を流しながらを紫に診断を促し、紫はドーン引きしながらペンライトを取り出して瞳を覗き込んだ。

桐生の手綱を握る立場である紫は多少ではあるものの魔界医療の

手解きを受けており、時に保険医、時に衛生兵の真似事も行う。人手不足を補うために、一人の人間が多数の役柄を兼任する様は中小企業の悲哀を見ているかのようだ。

そして、さらつと暴露される休日のアサギと九郎の様子。仕事量的にも至極当然なのだろうが、学生の身分でその二人と同じ状態にまで追い詰められてしまう彼はどれだけ苦勞させられれば、神は満足してくれるのだろうか。

何より笑えるのは、自分は関係ないと思っっているさくらと紫も対魔忍を牽引する立場的に、近い将来、似たような姿を晒す羽目になってしまうところか。何処も彼処も生き地獄である。

暫くの間、紫は無言で診察していたのだが、ある事柄に気が付き、目を見開く。

「ど——」

「ど? 何? ど?」

「瞳孔が半分開いている……」

「ど、瞳孔が半分開いている……??」

(どうこうがはんぶんひらいている)

紫の言葉に、三人が言葉を発し、小太郎は心の中で鸚鵡返しにする。医学の知識がないさくら、きらら、凜花にしてみれば、それがどんな状態であるのかは理解し難い。

だが、死亡確認の際に瞳孔の開きを確認することくらいは聞いたことがある。兎に角、やべー状態であることくらいは分かる。

「ど、ど、ど、どうすんのこれ! ふうま君死んじゃうの!」

「そ、そんな小太郎っ! しっかりして!!」

「う、嘘っ、私? 私のせい? 何も、してない……わよね?」

「お、落ち着け! 揺するな! 兎に角、今は酷い疲労状態だ。任務どころではないぞ、休ませてやらねば。アサギ様には私が連絡を入れる」

(これぐれーふつーふつー、オレはぜんぜんふつうだよ。こえでない

けど)

小太郎の状態に動揺が頂点に達したさくらと凜花は彼の肩を掴んで意識を戻そうと揺するのだが、首の座っていない赤ん坊並に頭がガツクンガツクンと揺れて明らかに逆効果である。

男嫌いの筈のきららですら、青褪めて事の推移を見守ることしかできない。死にかけの男を前にして、自身の言動や行動を顧みれる辺り、根の優しさが垣間見れる。安心していい、彼女は全く関係ない。

紫だけは動揺を押し隠して冷静に行動していたが、アサギに連絡を取るために取り出した通信機を取りこぼしそうになった辺り、隠しきれていない。厳しい言動で生徒から恐れられている彼女であるが、それは愛情の裏返しなのだ。こんな状態の生徒を見れば動揺しないほうがおかしい。

それぞれがそれぞれの反応を示す中、小太郎はボンヤリとした思考で呑気していた。

だが、どう考えても危険信号の赤灯が回っている。 “まだ行ける” は “もうあかん” と同義である。

「——— はい、はい。わ、分かりました。では、失礼します」

「むっちゃん、お姉ちゃん、何だって!?!」

「っ、連れてこい、との事だ。その状態なら、まだ行けるそうだ」

「「っ、これで……!?!」」

(だとおもったよ)

通信を終えた紫の口から発せられたのはアサギからの非情の命令であった。三人も愕然としている。

だが、小太郎だけは予想していたらしく、声にならない心の声でやっぱりねと呟いていた。

アサギも任務だけ優先した非情の決断を下した訳ではない。

自身の実体験に伴う経験則からの決断である。仕事に忙殺に忙殺を繰り返されて、アサギもどつかおかしなことになっているようだ。

なお、九郎でも同じ決断を下したであろう。

そして、小太郎に対する信頼の現れでもある。彼ならば、必ずややってくれるという厚い信頼だ。本人にしてみれば何も嬉しくなく、他人にしてみれば何がどう大丈夫なのか分かったものではない。でも仕方がない、対魔忍は何時だって人手から何かからカツカツの状態だ。こうしないとどうにもならないのだろう。

対魔忍の頭領の決定であれば、下に付いている紫もさくらかも逆らいようがない。無論、きさらも凜花もだ。

「き、気張れ、ふうま！ アサギ様の御命令だ！」

「……………ね」

「あつ！ しゃ、喋れるようになった!? お姉ちゃんの言うことは正しかったんだ——」

「ねむい」

「眠くないっ!! ふうま君、眠くないそれ気の所為!! 寝たら死んじやうやつだから!!」

「つかれた」

「疲れてない!! 気の所為だと思え!! 余計なことを考えると本当に死ぬぞ!! 後で桐生のところから高速吸収できる栄養剤と疲労回復薬を持ってきてやるから!!」

さくらは右腕を、紫は左腕を肩にかけ、小太郎をアサギの待つ校長室へと連れて引き摺っていく。

両脚には全く力が入らないのか、ずるずると爪先が床を擦り、首は揺れる度にあっちへガツクン、こっちへガツクンと傾いていた。完全に脱力状態である。

やつのことで発した言葉は本能と本音のブレンドであったが、それを分かっているなおさくらかも紫も否定して、連れて行こうとしていた。

その光景を見守るしかなかったきさららと凜花は後にこう語る——

『なんか、こう、頭の中でドナドナが流れてたわね……』

『正直、屠殺場に連れて行かれる安楽死予定の家畜を見ていた気分
だったわ……』

なに？ 前途多難？ 苦労人の平常運転ですが何か？

草木も眠る丑三つ時。

月と星のみが煌めく漆黒の夜空に浮かぶ雲の合間を縫うように、誰にも気取られることなく一つの物体が飛行していた。

軍の保有する戦闘機よりも大きく、かといって輸送機よりは小さい飛行物体。

両の翼の中程にはリフトファンが内蔵され、機体の後部には二基のジェットエンジンが搭載されている。

とは言え、その姿を目にするものはいない。日本の持てる最先端技術の全てを用いて生み出されたステルス及び光学迷彩によって地上の人々は勿論のこと、衛星軌道を周回するスパイ衛星ですら同様だ。

この機体は、より安全な人員・貨物輸送を目的として設計・開発された次世代型垂直^v直離^T着^O陸^L機。

当初は自衛軍のヘリコプターの後継となるべく開発が進められていたが、コストがかかりすぎるという理由で開発コードすら与えられずに計画は頓挫。

数少ない試作機は極秘扱いのまま日の目を浴びる事なく破棄が決定していたのだが、山本長官はこれに目をつけた。

対魔忍は少数精鋭の戦闘集団。

一つの任務に当たる部隊員の数は自衛軍のように多くはなく、特殊部隊の運用に近い。

また自前の輸送部隊を持ち合わせておらず、五車から離れた任務地への移動には自衛軍の一部と連携を必要としている。

より緊急性のある任務、より危険性が高く失敗の許されない任務に對魔忍を送り込むには、これほど適した輸送機は他には存在しない。

こうして、試作機のいくつかがパイロット共に対魔忍へと与えられる運びとなった。

その内の一つは元自衛軍出身の対魔忍が大多数を占め、操縦可能な人員を要する九郎隊が独占している。そして、この一機は独立遊撃部隊を立ち上げるに当たり、小太郎がアサギへと求めた必要な物資の一つでもある。ただでさえ甘いというのに、身内に対しては更にダダ甘な上、小太郎に大きく期待しているアサギがこの要求を断る筈もなく。

このような特別待遇は他の者から不興を買いそうなものだが、最強たるアサギに逆らえる者など居る筈もない。一睨みされただけで縮み上がる始末。

お陰で、小太郎は機体の存在を知る者からは無駄なヘイトを買ってまくっているのだが、何処吹く風のオール無視。寧ろ、はー？ ウチの部隊が一番成果上げてますがー？ 何か文句でもー？ と言わんばかりである。

結局の所、自分に向けられる感情の大半はやつかみと嫉妬に過ぎないと分かっているのだ。相手にしているだけ無駄と斬り捨てている。そんなことだから、ヘイト緩和のためにアサギから何でもかんでも仕事をぶん投げられるのであった。

「ひゅー！ いいねえいいねえ、最新鋭機は！ しかも試作段階で開発中止の代物とか！」

「はしゃぐな」

「そうは言うけどさー！ これでテンション上がらないとかなないよ！」

そのコクピットでは、部隊長の小太郎とパイロットの下忍が会話を交わしていた。

大食堂から連れ去られた小太郎は校長室にてアサギより正式に任務を言い渡された後、桐生特製の栄養剤をぶち込まれて、一日経った今は何とか平時の状態へと戻っている。

しかし、その顔は渋面も甚だしい。これから挑む任務が死ぬほど嫌だ、という感情が顔面から漏れ出している。

対象的に、パイロットの下忍は陽気そのもの。年の頃は30前後であらうに、新しいおもちゃを与えられた子供のようなはしゃぎっぷりで20代に見える。

彼もまたふうま一門の出。但し、災禍や天音のような長い付き合いではなく、ふうまを売り払った後に出会っている。

元々、固有の忍法も扱えず、弾正の反乱時には捨て駒として。奇跡的に生き残った後は、対魔忍の下の下として戦闘も生活もギリギリのところまで生き延びてきた。戦闘能力や忍法の強さこそが評価の第一基準である対魔忍において、彼のような存在は何時死んでもおかしくはなく、元ふうまなど死んでも構わないと多くの者から認識されている。

自身は捨て駒にした弾正や軽んじる対魔忍に憎しみを抱いたことではなく、境遇が似ていながらも弾正の息子である小太郎に共感や反感を抱きもしなかった。

特段の忠誠はなかったが、仕事だから、そういう家に生まれたからという理由だけで戦ってきた。忠誠がない故に弾正に不満もなく、裏切るといふ思考が存在しない故に粛々と命令に従うだけ。

いつかは死ぬ日が来るのだろうが、それも仕事の内。その日が来るまでは何時も通りに任務を熟し、その瞬間が来れば喚き散らさずに死を受け入れるだけ、と考えながら生きていた。忍法は使えずとも、忍らしい精神性を生まれ持っていたのだろう。

転機となったのは、とある任務を小太郎と共に当たる機会を得た時。

内容はよくあるもので、魔界から持ち込まれた危険物の奪取ないし破壊を目的とした輸送車の襲撃作戦。

だが、何処からか情報が漏れていたらしく、部隊はあっさり壊滅。指揮官は真っ先に死ぬわ、部隊は混乱の果てに四分五裂となる目も当てられない始末。

しかし、指揮官が死亡したことで自由に行動できるようになった小

太郎と終始冷静だった彼だけは、対魔忍の殲滅を楽しんでいた敵を尻目にこっそりと輸送車を奪取。

尤も、敵も簡単に逃がしてくれる筈もなく、壮絶なカーチェイスが始まった。

『お前さあ、飛び道具とか持ってる？』

『持ってないですよ。持っても使えないし、忍法もからつきし』

『じゃー、いいや。運転してくれ。オレは屋根に登って射的ゲームしてくる。逃げられれば逃げよう。ダメだったら輸送車ごと吹っ飛ばそう』

『それ以外に道はなさそうですしねえ』

『アクセル緩めなくていいからベタ踏みで』

『車の運転とかこの歳になってもしたことねえんだけど、頑張りますよーっと』

当初は二人とも逃げ切れるなどと考えてはおらず、小太郎はやばくなったら荷物だけ壊して一人で逃げようと考え、彼は彼で死んだら死んだでその時だな、と気軽に考えていた。

己の命と日本の命運が掛かっているというのにゆるゆるふわふわながらも覚悟だけがガンギマリした思考でアクセルを思い切り踏み込んだ瞬間、彼の眠っていた才能が一気に開花した。

ハンドルを握っただけで感じ取れる路面の状況とタイヤの食い付き。ペダルから伝わってくるエンジンの息吹。車両と己が一つになっただけのような一体感。

まるで鉄の塊を操っているのではなく、一つの生き物と共に進むかのような奇妙な感覚に、彼は生まれて始めて高揚というものを覚えた。

『お前に生命を吹き込んでやる——！』

『おお！ すげー！ この車でこのカーブをこのスピードで曲がれるの！ あははははは！ 追手が勝手にスピンしてクラッシュしてる

ぞ！ あつ、車の外に放り出された！ あはははは!!』
『ひゃつはー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』
『いいぞお！ もつとだ、もつとやれ！』

結果、部隊は二人を残して死亡。

目的の危険物は無事に五車へと持ち帰られ、映画さながらのカーチェイスを繰り広げたにも関わらず、彼の才能と小太郎の援護によって民間人の死亡者はゼロで幕が引かれる形となった。

その後、忍法は使えずとも類稀な才能を持つ彼に目を付けた小太郎は数少ない正式な家臣として迎え入れ、目につく成果も上げていない下忍が一人というだけあって特に反発もなく、あつさりと認められた。

そして、今や忍法とは異なる運転という技能を開花させた達人として、対魔忍内部で広く知られている。

車両は勿論のこと、船舶、航空機でさえ手足のように自在に操り、彼に運転・操縦できないものは地球上に存在しないとまで言わしめ、忍法では至れぬスーパーマルチドライバー。

九郎など血涙を流しながら部隊にくれと土下座するレベルであり、アサギ・さくら・紫といった三女傑が任務に赴く際には自衛軍ではなく彼が必ず指名されるほどだ。

「しっかし、連絡の取れなくなった部隊の搜索と救助。それも伝説の魔女エウリュアレーが関わってる可能性がある、なんてねえ」

「……………」

「しかも、紫藤家のお嬢様に問題児二人抱えてとは。若さ、どういう星の下に生まれてんの？」

「オレに聞くな、オレに」

当主と臣下の関係だと言うのに、随分と砕けた口調だ。敬語など欠片もない。

小太郎自身が形式張った話し方を嫌っており、他家の前でさえなけ

れば何の問題もないとしている。尤も、災禍や天音は決していい顔をしていないが、小太郎も彼も何処吹く風である。

機体がこれから赴くのは東京キングダム。

骸佐による反乱、二車家総出の離反。そして、五車を去った彼等が新たな拠点とした地。

龍門の襲撃と縄張りをそっくりそのまま奪い取った骸佐達は急速に勢力を拡大させ、混乱が巻き起こる——ことはなかった。

彼等の動きは迅速であり、圧倒的な力による鞭と懐柔による餌によつて、東京キングダムの一角を瞬く間に支配した。それを可能としたのは二車家幹部という戦力よりも、寧ろブレン役を務める鉄華院カヲルの存在が大きい。

恐らくは骸佐が反乱を決意した瞬間から、カヲルは既に動いていたのだらう。

彼女は正義や誇りを重んじはせず、小太郎と同じく合理と利益を良しとする女性である。二車のためであれば、どれほど手を汚そうとも、どれほど外道の誹りを受けようとも意に介さない。

東京キングダムの情報を独自に収集し、二車の戦力で迅速かつ最短でありながらも最大限の結果を手に来る相手を選び、各組織の対立構造を把握することで突然現れた新参者を前にクズどもが手を組めないように立ち回る。彼女がいなければ、不可能であつただらう。

こうして背徳と混沌の街は仮初の安寧と新たな支配者の登場を受け入れたはずであつたが——再び、争乱の気配が顔を覗かせた。

それこそが魔女「エウリュアレー」の出没情報である。

エウリュアレーは古代から魔界を彷徨う神格の魔族。古の神々の呪いによつて両腕を失いながらも、数々の伝説を残す魔界のビッグネーム。

その生きる目的は不明——いや、明確な目的などなく、ただ生を楽しむだけなのか、気まぐれに人界へとやってきては、災厄と混沌を齎すトリックスター。

関西の廃棄都市にして魔界都市であるアミダハラに根を下ろし、隠棲していた筈なのだが、何の前触れもなく、東京キングダムでその姿

が目撃された。

これに色めき立ったのは東京キングダムに住人や犯罪組織だ。

伝説の魔女の力は絶大。協力関係を築いてもよいし、何なら彼女の持つ魔術の秘奥を奪えたとするのなら、パワーバランスは彼女と彼女の力を手にした者へと一気に傾く。

その結果、対魔忍にしてみれば考えたくもない事態を招く危険性がある。東京キングダム内部で小競り合いをしている内ならばまだいいが、本土にまで手を伸ばし始めれば、日本全体が闇に飲まれかねない。ただ現れただけでこれだけの警戒と危機を招くとは、トリックスターの名は伊達ではない。

これを危惧した山本長官とアサギは騒乱の兆候を探るべく調査部隊を送り込んだのであるが、唐突に連絡を絶った。

エウリュアレー本人による襲撃か、些細なミスによって犯罪組織に捕らえられたのか。いずれにせよ、黙ったままにいるわけにはいかないう事態である。

こうして独立遊撃部隊の派遣が決定された。

なお独立遊撃部隊のメンバーは小太郎を除いて全員別の任務についており、実質彼一人きりである。

災禍か天音を、最低でも凜子だけは連れて行かせてくれ、と懇願した小太郎であったが、アサギはにつこり笑顔で日本人らしからぬハツキリとしたNOを口にした。

高度な魔術を行使できるエウリュアレーに対して有効打の与えられるであろう三名の同行を拒否され、絶望のどん底に突き落とされたが、流星に一人ではどうにもならないと分かっているアサギは、独立遊撃部隊以外から三名の対魔忍を付かせたのだが……………

それがまた小太郎を絶望のどん底から更に底まで突き落とされる羽目になった。絶望や不幸に底などないのだ。

「おっと、見えてきたぜ。日本の掃き溜めだ」

「廃墟地区に回せ。お前の腕とこの機体なら何処でも着陸できる。その後は上空を旋回待機。エンジンも最新型で燃費もいい、燃料の心配

はしなくていい。ピックアップポイントはこつちから指示する」

「アイサー、了解。やばくなったら何時でも呼んでよ。コイツごと突っ込んでやるから」

「信じちゃいないが頼りにしてるや」

「ふはっ、らしいねえ」

ヘッドセットなしで会話が可能な静粛性を誇る機体の内部で、まるで日常の会話のような軽口が交差する。

されど、彼の口にした言葉は全て本心だった。相変わらず、特段の忠誠はない。元々、そのような性分には生まれついていないのだから。

だが、自らの役割を見誤る男でもない。やれと言われれば必ず実行し、死ねと言われれば躊躇なく死ぬ。開花した才能や技能は兎も角として精神性は忍そのものであり、かつてと何ら変わりはない。

違いがあるとするのなら、ただ一点。弾正や対魔忍そのものに向けられたことのない好意と感謝がある。思いもよらぬ出会いであったとは言え、開花した才能を伸ばせたのは小太郎の下にいたからこそ。

陰日向に生きる対魔忍は富や名声に縁がなく、求めるものは一つに集約される。孫悟空が三蔵法師を求めるように、自らの才能を有用に扱う者と場。少なくとも、彼にとつて小太郎は命を預け、使わせるに足る人間であった。

気軽な口調に相反する命すら含めた覚悟に、置かれた白目を剥きなくなる現実を前にして、小太郎は珍しく笑みを浮かべた。

口から出てきたのは実に彼らしい言葉であり、男が自らの信念や義侠心のみ準じて生きて死ぬことを許されていた古い時代のしきたりが其処にはあった。

「さて、と。しかしまあ——」

エアラインベルトを外し、コクピットの座席から立ち上がる。

コクピットの後部には分厚い金属の扉があり、それを開けるとその

まま貨物室へと繋がっている。

貨物室は二十人ほどを収容できる広さがあり、両の壁には開閉式の簡易折り畳み椅子が取り付けられていた。

積荷は、アサギの選出した三名の対魔忍。

「——ふんっ」

一人は鬼崎 きらら。

五車の制服とは打って変わって、露出度の高い専用の対魔忍装束を纏った姿はいやに扇情的だ。

足首からふとももまで、手首から肩までを蒼と白を基調とした布地で覆っているが、胴体はほぼ露出していると言っても過言ではない。際どい切れ込みのレオタード型であるが、胸から上はビキニのような有り様。いくら強靱な素材で出来ているとはいえ、作成者の正気を疑う仕様である。

彼女は小太郎の姿を確認するや否や、露骨に嫌悪と不快感で顔を歪めると、視界に収めていることすら気に入らないのか、そっぽを向く。

「小太郎、身体の方は……やっぱり、私達だけで」

「問題ないよ。桐生特性の栄養剤をぶち込まれたからな」
「……………そう」

一人は紫藤 凜花。

彼女の専用装束も露出度が高い。

白と黒を基調とした色合いであったが、鳩尾から下腹部までが大胆に露出した装束は女子プロレスラーのような華やかさがある。

きららとは対照的に、凜花の表情は一心に小太郎の身を案じる心配で染め上げられていたが、小太郎自身の言葉にあっさり提案を引っ返して俯いてしまう。

普段の自信に満ちた彼女とは全く異なる態度に、思い当たる節はあるのか小太郎は頭を掻いたが、解決策がないのか、今は時間がないの

か、互いに口にしたい言葉を飲み込んでいるようだ。

「ねえ、今からでも任務を中止にできない？ 私は忍法は……」
「できるか。アサギ校長直々の命令だ。オレ達に拒否権はないし、放って置いたら何が起こるか分かん。分かっているだろ？」
「……………」

最後の一人は、獅子神 自斎。

灰色の髪に、凜子に劣らぬ女性らしい脂肪のついた豊満な肉体。何よりも、顔半分を覆う仮面が特徴的な少女だ。

彼女もまた肌の色が目立つ露出度であり、凜花と同等と言った所。ただ、背中に背負った剣からも分かるように剣客対魔忍であるらしく、鎧武者を連想させる肩当てと胴当てを装備している。

きらら同様彼女もまた今回の任務に不満を持っているようだ。もう任務は始まろうとしているにも関わらず、今からでも遅くはないと言いたげである。

但し、彼女の場合は不満ではない。根本にあるものも小太郎への嫌悪ではなく、自身に対する不安であった。

(男嫌いで男からの命令違反の常習犯と単独任務しか受けない上に自分の忍法も制御できない問題児二人。唯一の希望は凜花だが、こいつはこいつで……………はあ、大したメンバーだよ全く、嬉しくて涙が出そうだ)

嫌われていることだけが暴走フラグだと思ってるのかい？ その逆でも起こりうるんだよなあ……

東京キングダムは元々廃棄された人工島の上に築かれた魔性の都市。

それでも世界でも有数の歓楽街であることに変わりはなく、人々が思う以上に繁栄を謳歌している。

しかしというべきか、やはりというべきか、それでもなお繁栄から取り残される地区はどうしようもなく存在する。

目も眩むような額の金を生み出し、吸い上げる繁華街から数ブロック離れた廃墟地区と仮に呼ばれる場所は、文字通りに廃墟しかない。違法建築を繰り返された東京キングダムにあって、廃棄される以前に建設されたビル群等が立ち並んでいる光景は繁栄の影に隠れた犠牲を見るようであるが、実態は違う。意図してこのような形で残されたものだ。

無法者ばかりの東京キングダムの住人でも闇の組織が構築したルールには従順だ。そも、それを守れなければ利益と快楽に預かれず、命すらない。

そんな中ですら最小限のルールすら受けられない畜生同然の連中が此処には集まっている。ある種の隔離地区でもあるのだ。

繁栄よりも退廃を。法よりも混沌を。元より秩序とは相容れない社会不適合者は、このような場を好む。故に、それを見越して残したのであった。

『ほんじゃま、御武運を。全員、無事に戻って来てくれよ』

「……………凄く」

その一角、窓ガラスも全て割れて風化し、今にも倒壊しそうなビル

とビルの隙間に存在する猫の額ほどの土地。

其処に何の問題もなく着陸した機体は、小太郎達が降り立ったのを確認すると、凄まじい勢いで上昇していき、光学迷彩を起動させて夜の闇へと姿を消した。

目の前で行われた神業じみた操縦に、航空機について詳しくない自斎は呆然と眩き、凜花やきららですら言葉を失っている。

機体の内部でさえ窓から覗くビルの近さに絶句したというのに、外から見ればまた凄まじさも一塩だ。何せ、ビルと両翼の間にあつた隙間は、僅か数センチ。とても現実の光景とは思えなかつた。これなら、ビルの合間でこの機体を組んでいたと考えた方がまだ現実的だ。

その上、降下はエレベーターを使うようにゆつたりとしたもので不安感はまるでなく、上昇はミサイルを思わせる勢い。

一歩間違えは大惨事だというのに、操縦席から除く彼の顔と通信機を通して伝わってくる声は涼しげで、小太郎は視線すら飛ばしていない当たり、彼ならば出来て当たり前前の芸当のようだ。

「さつきと行こう。あの機体は静粛性はあるが、無音じゃない。音につられた面倒な連中に絡まれる前に移動するぞ」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！　なんでアンタが命令するわけ!？」

黙って空を見上げて動かない三人を尻目に、救出対象の部隊が最後に定期連絡を断った方角へと目を向けていた小太郎は、枯れた羽が特徴的な濡羽色の三角帽子を被る。

目深に被った帽子と口を覆うほどの立て襟コートとズボン、手袋によつて目元しか露わになっていない。まるでその様は狩人のようだ。

また手には銀色の杖を付いていた。握り以外は刃となっており、石突は異常に鋭い。彼にしては珍しいが、近接武器としても使用できるだろう。

彼に少女達とは異なり専用の装束は存在せず、任務の度に装束を変えらる。何らかの特徴的な外観は、正体の看過と個人の特定に繋がってしまうからである。

ヨミハラの一件やこれまで熟してきた任務によって、独立遊撃部隊の噂は闇の世界にも広がり始めているが、隊員の構成は把握されつつあり、隊長の存在は確認されているものの何者かの特定にまでは至っていない。

前線に出ざるを得ない以上、こうして装束を変えることで隊長か隊員かの判断を鈍らせる効果も期待できる。いずれは「噂になっていく隊員以外の男が隊長」と意味がなくなるであろうが、現在のように入隊時の助っ人要因を入れるのならば、随分と先の話であり、今はこれで十分だ。

既に歩き出した彼の背中に、案の定と言うべきか、未だに任務に同行させられたきさららが噛み付いた。

「なんでも何もオレが部隊の隊長だからだよ。オレには指示を出す権利と借り物の戦力を安全無事に学園へ帰す義務がある。お前達はオレに従って任務を遂行する義務があり、その見返りに報酬を受け取る。それだけ」

「はあ!? 私はアンタが隊長だなんて認めてないわよ! それに先輩に対してその口の聞き方はなんなわけ?! そんなことも分からないの?!」

「鬼崎先輩、そんなこと言っても……」

「生憎だが、お前が認めていなくてもアサギ校長が認めている。文句があるなら校長へ。口の聞き方という点に関してなら、そちらの方が問題がある。一介の隊員が隊長に向かっていい口の聞き方じゃない。任務中は学園上の関係よりも、隊としての関係が優先されて然るべきだ。違うか?」

「——っ!」

「ちよ、ちよつと先輩……!」

振り返りもせず、自身の感情を交えない正論だけを返して先を進む。

誰の目からも明らかに相手にすらしていない様に、きさらは怒りか

らカツと顔を朱に染め上げる。自斎も諫めようとしていたが、何の効果もない。

だが、きらら自身も余りに理不尽な物言いであるのには気付いているのか、正論に対して自らも納得できるだけの反論を用意できなかったのか、それ以上の言葉は飛んでこない。

その変わり、行き場のない怒りと不満を表すかのように、小太郎を追い越して一人ですんずんと進んでいく。流星にこの状況で一人にさせる訳にも行かず、自斎は慌てて後を追いかける。

（これが今まで助っ人に来た連中なら迷わずオレをぶん殴りに来てたんだが、手を出してこないだけ大分マシだな。単独行動しかない獅子神にしても、こうして引くに引けない状況になれば他人に気を遣う。問題児は問題児だが、期待を持ってないわけじゃない。アサギが寄越す訳だ）

「こた——隊長、ごめんなさい。きららちゃんは……」

「いい。部隊員の事情の把握もこつちの務めだ。分かっている」

（尤も、分かっているからってこの状況でどうにかできるかは別問題ですけどねえ！）

先を行ったきららを自斎に任せ、小太郎は歩調を変えずに進んでいくと横に凜花が並ぶ。

二人の後ろ姿は、油の乗った尻肉が雄を誘うように揺れており、男なら思わず視線を向けて前屈みになってしまいそうであったが、彼に氣にした様子は見られない。彼が見ていたのは肉体ではなく精神面であったのだから当然だろう。

きららは男に対する嫌悪が滲み出ているが、同時に本来の人の良さが滲み出ている。

心の何処かでは今のままではいけないと感じているのだろうが、男嫌いのキツカケとなった過去を振り払えずにいる。本人も思考と感情の間を揺れて自分自身を制御できていない自覚があるのだ。

単独行動、単独任務しかしないとされている自斎も逃げ出しもし

なければ、独断専行を行わない時点で本心では孤独など望んでいまいと伺える。

真に孤独を望むのであれば、一人で生きていけばいいだけの話。それを決断できる向こう見ずさと勇気がない以上、夢を見ているのだ。いつかは、もしかしたらと。

しかし、それが分かったからと言ってどうこうできるかは話が別だ。

今は時間がない。エウリュアレーの目的解明と連絡を断った部隊の無事を確認して救出するという任務。何よりも初動が重要であり、救出しなければならぬ部隊生存の可能性は一秒ごとに減っていく。あれやこれやと手を出している余裕はない。

故に小太郎はきららと自斎に関してアサギが期待しているアレコレは完全に諦めていた。暴走する恐れはあつたが、二人を生かして任務を遂行できればそれで良し。次の機会か別の誰かに希望を託すつもりである。

凜花はきららの態度を改めさせるのは諦めたのか、彼女の身の上話をすることでフォローを入れようとしていた。

衝突しようとも何のかんのと目をかけている友人が、幼馴染と唾み合うのは見ていられない。尤も、きららの方が一方的に食って掛かっているだけで小太郎は気にしてすらいないが、内心を理解しようがない凜花には険悪な雰囲気映っていた。

返ってきた返事は素っ気ないもので、彼女も思わず鼻白んだ。怒りや苛立ちといった感情を一切発露しない機械地味な反応に、目を逸らす。其処にあつたものは、悲しみか或いは怯えか。

ともあれ、其処で会話は一旦途切れた。

小太郎は凜花が何かを口にしようとする半端に口唇を震わせて黙りこくるを繰り返している様子に気付いていながら、何も言わない。

家の都合で何年もの隔たりがあつたのだ、在りし日の如く気軽に会話など出来る筈もなく、小太郎も凜花へ伝えなければならぬ事柄はなかつた。

「……………奥方様は、残念だったわね」

「また随分と。何年前の話だよ」

「だって、御父様はどうか知らないけれど、私は直接伝えられなかったもの」

凜花がようやくつとの思いで告げたのは、とうの昔にこの世を去った小太郎の母に対する弔慰の言葉であった。

余りにも遅すぎる言葉に、何処かおかしくなって小太郎は思わず笑う。律儀と言えば余りに律儀だ。もう十年近く前に亡くなった個人を悼む言葉を今更聞くことになろうとは。

笑う小太郎とは対照的に、凜花の顔は曇っていく。

ふうま 潤という人間は同じ幼馴染である紅にとつては母親代わりであったが、彼女にとつては憧憬の対象であった。

美しく、優しく、何よりも最強と呼ばれるほどに強い。彼女の打ち立てた伝説の数々は聞く度に胸が熱くなり、背中を追い掛ける身としてこれほど畏敬の念を抱ける相手は他にはいないと幼心に思うほどであった。

出会いは父である甚内が顔合わせということと凜花を連れて小太郎と潤が住まう宗家の離れに向かった時だ。

弾正ではなく潤への顔合わせを優先した父の意図は、この時点では分からなかったものの、今にして思えば、彼の心は既にふうま、ひいては弾正から離れつつあったのだろう。

その時の小太郎に対する印象は正直ないと言っても過言ではない。覚えているのは、当主の妻として相応しい立ち居振る舞いと花のような笑みを浮かべる潤の姿だけ。

自分自身も酷いとは思うものの、憧れの対象を前にしたのだから許して欲しいとも思う。想像通りの……………いや想像以上の憧れに全てを飲まれても無理はなく、当時の会話など殆ど覚えていないほどだ。

それからというもの、凜花は足繁く離れへと通い詰めるようになった。提案したのは潤の方から。小太郎と同年代の子供との触れ合いを望み、厳しい訓練を課した愛息に対する褒美だったのかもしれない

い。

甚内は既に潤の体調が芳しくないこと、凜花にとっては憧れの対象で息子との触れ合いよりも潤との触れ合いを優先して奥方に負担を掛けてしまうという理由で、丁寧なこれを辞めたのだが結局は潤と凜花に押し切られる形になった。

案の定、紅や骸佐が訪れて小太郎と遊ぶ中、凜花は潤と話してばかりいた。その人柄に触れ、我が子と子の友人が遊ぶ姿を見守る慈愛の視線により一層惚れ込んだ。

それが変化したのは何時だったか。

始めの内は潤から最も愛され、何よりも優先される小太郎に嫉妬し、自分の方がもつと凄いと小太郎、紅、骸佐へとお姉さん風をびゅうびゅうに吹いて潤へとアピールしていたのだが、子供など単純なもので何時の頃からか単純に遊びを楽しむようになっていた。

家庭環境や置かれた境遇のせいだろう、紅や骸佐は今では考えられぬほどよく泣く子供であり、人一倍感受性が豊かだった凜花も二人に釣られてよく泣いた。

泣き出した三人を慰めたのは潤からの教育によって精神的に早く成長していた小太郎の務めであった。苦笑いを浮かべながら、頭を撫でられて落ち着くやら悔しいやら。そうやって心惹かれていったのだと凜花は思う。

小太郎は当時から要領がよく、よく笑う子供だったと記憶している。

大人達に対して全員で悪戯を仕掛けたのに、彼一人だけさつきと逃げて自分達が怒られている合間、素知らぬ顔で口笛を吹いているなど日常茶飯事であった。それでも険悪にならなかったのは、紅や骸佐、凜花が当主の息子として気を使っていたのではなく、潤がしっかりと教育を施していたからだ。

何処で聞きつけたのか、小太郎の所業を知った潤は彼をボコボコの顔面歌舞伎揚状態にした挙げ句、縄で縛り上げて離れにあった木に逆さ吊りにしたりしていた。

『ははうえ、このままじゃボクしにます。あたまぱーんってなつてしにます』

『小太郎、友を見捨てて逃げるとは何事ですか。そんなことでは頭弾正になってしまいますよ。そんな頭、ぱーんってなつてしまいなさい』

『お、奥方様、その辺りで若も反省していますし……』

『こ、子供達も見ておりますので……』

『こ、小太郎う……』

『若様あ……』

『駄目です。小太郎、頭弾正になつてもいいのですか？』

『それはいやですう……つぎからは、つぎからはだれにもバレないようにやります……』

『それでこそよ、小太郎！ バレなきやいいのよバレなきや！』

『潤、お前……！ 子供達の前でそういうこというのやめろ……！』

『お前という奴は本当に……後な、自分の夫を貶すな。仮にも当主だ。まあ、否定はせんが』

『奥方様ー！ 素が出ておられますぞー！ 凜花！ は聞こえてないな、よしー！』

『あらいやだ、私ったら。おほほほほ』

そんな一幕があつたように思う。

大人達がオロオロとしたり、蒼褪めたり、普段は冷静な父が焦りを見せるのは彼女の前だけで、何だか面白かった。

何の柵もない、ただ優しく楽しいだけ。楽園で過ごすような毎日。苦痛がなかつた訳ではない。

当時から祖母にして当主である頼母と甚内の仲は最悪であり、母が寢れてしまうほどに家の空気は息苦しかった中で、その日々は間違はなく凜花にとって救いであつた。

頼母は弾正親派で有名で、何かと凜花に口出しをしてきた。当時から容姿端麗であつた孫を、もしかしたら弾正に対する捧げ物のように扱うつもりだつたのかもしれない。

けれど、潤や小太郎と過ごすことで祖母からの口出しは一切なくなつた。これまでとは逆に汚物を見るような視線を向けられたもの、凜花にとつて祖母は妖怪のように映っており嫌われるならそれで構わない。潤や小太郎の笑顔があればそれだけで耐えられた。

——その毎日が始まつたのが突然であれば、終わるのも突然であつた。

『……………凜花、よく聞け。奥方様が亡くなられた』

そこかしこが曖昧になつてしまつた記憶であつても、血を吐くような思いで事実を告げた父の顔はよく覚えている。

其処から先は色々とあり過ぎて、記憶が曖昧だ。何よりも、幼い凜花にとつて憧れの対象がこの世を去つたという事実は重かつたのだろう。

弾正の決起と反乱。小太郎の失踪。小太郎に付いていた災禍と天音の粛清。父の決意。紅の祖父と骸佐の父の戦死。気がつけば、紅や骸佐と共に五車にて保護されていた。

始めの内は、これは夢だと思つていた。

しかし、環境の変化は否応なくそれが現実であると告げており、何やら方々を駆けずり回つて家に帰つてこない父と必死で自身を慰める母の姿に受け入れがたい現実を受け入れざるを得ない。

もうあの日々は戻つてこない。約束もしていないのに、あの日々が当たり前のように訪れると信じ込み、潤の変化に全く気づかなかつた己の愚かしさを責めて、涙を流した。

それでも人は蹲つてばかりはいられない。

自分を心配して一日中傍に居てくれる母の姿、疲れ果てた様子で帰つてきてもなお自分に声を掛ける父の姿を前にして、奮起せずにはいられなかつた。

立ち直り始めた凜花は徐々に余裕も取り戻し始め、最も気掛かりだつたのは小太郎だ。

小太郎にとって、母は世界の全てであつたと言つても過言ではな

い。

嫡男でありながら不遇の日々を送った中での唯一の幸運。彼女がいなければ、彼の人生はもつと悲惨なものとなっていたに違いない。災禍も天音も生きていることは知っていたが、対魔忍としてはやっていけないほどの傷を負ったと聞いている。いま小太郎は一人きり。紅も骸佐も少ないながらも生き残った家臣と身を寄せ合っているらしいが、彼を気にかける余裕はあるまい。どれだけの不安と戦い、どれだけの悲しみにたった一人で暮れているか。

会いたい。会いたい。会いたい。

日々募っていく幼馴染への想い。恋慕と呼ぶには余りに幼く、余りに清廉な想いは殊の外早く結実した。

『あなた、大丈夫なの……？』

『ああ、紫藤家は、だが。実質的にふうま一門は散り散り。井河と甲河の下部として組み込まれる。心配なのは若様だ。アサギ殿が後見人として名乗りでたようだが、長老衆が何をしでかすか』

『何か出来ることは……』

『駄目だ。こちらにも立場は厳しい。それに長老衆直々に接触禁止命令が出た。災禍殿と天音殿が粘ってくれたお陰で此方にも時間が出た。見舞いに行くのが筋だが、それも厳しい』

『確か、お二人は——』

盗み聞いた父と母の会話。

其処で、災禍と天音が治癒に専念している病院の場所を知った。

聞いた瞬間に、気が付けば走り出していた。慣れぬ五車の町並みを、必死になって駆けていく。

何処をどう走ったのか。大人達に声を掛けられた気はしたが、頭の中にあっただのは小太郎のことだけで、どう返事をしたのか、返事そのものをしたのかすら覚えていない。

ようやくの思いで辿り着いた病院のロビー。

独特の臭いと清潔感のある場所で、偶然にも災禍と天音の見舞いを

終え、一人で帰ろうとする小太郎を見つけて——凜花は、妖怪だ
と思っていた祖母以上の化け物に相對した。

まるであらゆる感情を失ったかのような無表情。

乾ききった瞳はガラス玉のように無機質。

幽鬼のように気配を消して誰の目にも映らぬような静かな足取り。

かつての笑みを失って、別人のように成り果てた幼馴染。

瞬間、凜花は腰を抜かしてその場にへたり込んだ。

今まで抱いていた思いなど何処かへと吹き飛び、化け物が何処かへ
行ってくれる事を願うだけ。

周囲の人間は彼女の変化に気づき、慌てて駆け寄ってくるが、その
喧騒の中、化け物は目を合わせようとはせず、視線を向けようとす
らずに去っていく。

結局、彼女は病院から連絡を受けた母親が迎えに来るまで、ただ
だ恐怖から泣き続けた。

以後、親しい幼馴染が化け物に変わり果ててしまった恐怖から、父
に諭されるまでもなく小太郎との接触は考えようとすらしなかった。

かつての後悔を払拭すべく鍛錬に明け暮れ、凜子と出会い切磋琢磨
し、学生の身ながら「鬼腕の対魔忍」と呼ばれるまで恐れられよう
になり、自信を付けた。

気が付けば、長い時間が経っていた。そして、かつて味わった恐怖
は強い後悔に変化している。

子供は自分のことで常に手一杯で、幼かったなどと言いつには出来
ない。

あの時、一番辛かったのは間違いなく小太郎だ。それこそ人格を変
容させ、精神構造そのものを自らの意思で書き換えねばならねば耐え
られぬほどに。

そんな彼の変化に耐えられず、あの優しい笑みを二度と目にするこ
とは叶わないと自覚した瞬間に、心が折れていた。

なんて身勝手に、愚かな行為。

成長するにつれ、自覚は強くなっていく。冷静に自分や他人を俯瞰
できるようになるにつれて日増夜毎に強くなる。

親しかった幼馴染が離れていく現実には小太郎は何を思ったのか。凜花はそれを考える度に胸が締め付けられ、罪悪感から己を責めた。紅は他に頼る相手がいなかったとは言え、変わり果てた彼を受け入れた。親友の凜子や妹分であるゆきかぜは、過去を知らないとは言え人柄を見極めて傍に居る劣等感。接触禁止の命令を良い事に何もしない自分自身への悪罵と嫌悪。

あらゆる感情が混ざりあい、結局のところ、出来たのは遠目から彼を眺めることだけ。

『凜花、貴方に新しい任務を与えます』

そんな折、アサギから受けた指令に歓喜と恐怖が同時に訪れた。アサギの命であれば、実質的な接触禁止は解除されたも同然。父も何も言っていない以上は認めているということ。

積もりに積もった思いを遂げられる。兎に角、謝りたい。あの時、貴方から逃げてしまった、と。

同時に恐怖を覚える。

かつてのような彼の変化に対してではない。何を今更、と彼に罵倒されることが恐ろしくて堪らない。

そう考えただけで。頭の中に情景を思い浮かべただけで。彼の冷たい視線と口調を想像しただけで、二度と立ち直れない自信がある。そうやって、最後の一步を踏み出せないまま、この現状に甘んじていた。

「ねえ、小太郎……覚えてる？ 五車に来たばかりの頃、災禍さんと天音さんが入院していた病院に行ったのよ」

「ああ、あの時か。覚えてるよ。尤も、話も出来なかったが。あの時にや、色々と面倒事が多くてさ。無視して悪かったよ」

「……………」

嗚呼、その言葉はなんて――

恐る恐る口にした言葉に対して、小太郎は間髪入れずに返してきた。

凜花の想像とは全く違う穏やかな口調で。責めるでもなく、懐かしむでもなく、ただ悪かったと謝った。

その言葉を耳にした瞬間、凜花はつんした鼻奥の痛みにも、口唇を噛んで溢れそうになった涙を堪える。

変わったものは確かにある。それだけの年月が経っており、自分ですらも例外ではない。それでも、変わらないものはあったのだ。

「小太郎は……小太郎は私が、守るから」

「……………」

「頼れる先輩に任せておきなさい？」

全ての感情を押し殺し、何時も通りの自信に満ち溢れた笑みを浮かべる。

自分の悔恨を晴らすのはこの任務が終わってからでいい。例え、どんな結果になろうとも、心からの謝罪を伝えよう。

小太郎が何も思っていない以上、その謝罪は徹頭徹尾自分のためではない醜い行為。だから、今は任務を優先する。

そう決めた凜花は、いつもの自分に立ち返る。少なくとも、彼女は巧く出来ていると思っていた。

果たして、それは何時通りと言えるのか。気負うことは決して悪いことではない。しかし、真つ当な精神状態とも言いがたいだろう。

彼女の横顔を眺めていた小太郎だけは変化に気付いており、眉間に皺を寄せた険しい表情だった。

重ねれば重ねるほどフラグは折れやすくなるって？
甘いんだよなあ

廃墟地区は文字通りに延々と廃墟が続く。

打ち捨てられて朽ち果てたビル群や建造物が並び、鉄とコンクリートで出来たジャングルは本当に方向感覚が狂ってしまいそうだ。

廃墟の内部、建物の影では生き物の気配が確かにある。しかし、それが何であるのかは判然としない。人型であるのか、獣であるのか不明な息遣いと視線。

それらの感覚域を掻い潜り、小太郎達は問題なく調査部隊が最後に定期連絡を行った地点へと辿り着いた。

屋内ではなく通りのど真ん中。調べた定期連絡の内容と部隊員の口調からエウリュアレーの情報を掴み、潜伏先に向かっている最中だったようだ。ならば、その進行方向には生死不明の救助対象と油断ならない魔女が待ち構えている。

「此処だな」

「ふん、どうだか。テキトー言ってるんじゃないでしょうね？」

「安心しろ。遊びでやってる訳じゃない。生き物の気配が無さ過ぎる。当たり前だ」

独立遊撃部隊と助っ人が辿り着いたのは、他に比べれば比較的、捨てられた当初の状態を残した倉庫らしき建物だった。無事な窓ガラスも散見され、風雨による錆などの経年劣化も少ない。

後を付いてくるばかりだった三人には、何故この倉庫に当たりをつけたのか理解できていない。その証拠に、半信半疑のきさらは必要以上につかかり、凜花と自斎ですらが訝しげに眉根を寄せている。

小太郎とて無根拠であった訳ではない。

まず第一に、建物から生物の気配が一切なかったこと。

他の廃墟には居住代わりになっている何者かの気配があったと言うのに、この倉庫にだけはネズミ一匹の気配すらない。廃墟地区の住人や野生動物ですら近づきたくとも近づけない主が、確実に存在している証左だ。

そして、最大の理由は巧妙に隠蔽されているものの、魔力の残り香を肌で感じていた。

かつてアサギの命で調査に向かったアミダハラは魔女魔術師どもの巢窟だった。ヨミハラ、東京キングダムにも存在しているものの、比率がまるで異なる。

また魔術の使い手で構成された魔術師連合と呼ばれる集団に秩序が築かれており、他の魔界都市に比べれば比較的マシと言えた。尤も、マシというだけで危険がない訳ではなく、何度となく魔女や魔術師達に襲撃されもすれば、かち合って戦闘に発展した事もあったのだが。

その経験から魔法や魔術の行使に必要なとなった魔力の形跡を探知できるのである。

音や匂い、気配と言った分かりやすいものではない。彼自身も言葉にするのは難しいが、無理に言葉にするのなら対魔忍の持つ対魔粒子のそれに近い。

およそ多くの事柄には常に形跡が残り、行為に対する才能がある程、行為に精通している程に形跡とは少なくなっていく。

彼がこの距離に近づくまで魔力の残り香を感じ取れなかったのは、アミダハラ顔役にして魔女魔術師の頂点に立つ老婆、大魔道士のノイ・イーズレーンくらいのもの。

倉庫に潜むはノイレベルの技量を持っているのは確実であり、それだけの技量を持っていると断言できるのはエウリュアレーくらいのも。魔界から来た新たな凄腕という線も無い事はないが、それならばエウリュアレー同様に噂の一つも立たねばおかしい。よって此処が目的地、と判断した次第であった。

(いつ、行きたくねえ~~~~~)

残り香を感じ取った小太郎の素直な感想はそれだった。

対魔忍の忍法も十分に巫山戯たものばかりであるがそれぞれ系統があり、方向性は基本的に単一だ。ゆきかぜのような応用力を發揮できる場合もあるが、生み出した雷を用いる点で方向性が変わっている訳ではない。凜子のような万能ぶりを發揮する方がまれもまれ。

対して魔術は極めれば極める程に万能ぶりが増していく。単純な五大元素による攻撃から始まり、占星術等を用いた未来予知、空間や認識を歪める結界、契約を行った上位存在^{悪魔}の性質を引き出す荒唐無稽な世界法則の書き換えと挙げていけばきりが無い。

ノイほどの技量を持つと予想されるエウリュアレーが何を出来るのか。ほぼ“何でも出来る”と思っておかなければ戦いにもなるまい。考えただけで頭が痛くなるうというもの。

その上、命令を聞きそうもないきらら、集団行動をほぼ行ったことのない自斎、やたらめつたら気負っている凜花を抱えて相對せねばならないのだ。頭が痛すぎて吐き気まで覚える。

最低でも正規の独立遊撃部隊のメンバーを三人。手堅く行くのであればならば其処に名前だけ所属している不知火に出張って貰い、万全を期すならアサギに出向いて貰いたい。

(対魔女用の装備はいくつか用意してきたが、こんなことなら使い捨ての傭兵でも雇ってエウリュアレーの戦力を測りたかったなあ)

自分一人ならばそういう非常手段も取れただろうが、それも無理だ。

傭兵という稼業は戦闘職だけあって大半が男である。女性の傭兵も居るには居るが、気楽に募集して乗ってくるほどの数はいない。

頭ぱーぷりんな連中ならちよつと金を積めば手軽に集まり、死んだ所で痛くも痒くもないが、此方にはきららという男嫌いがいる。質の

悪い傭兵のこと、扇情的な格好の女を見れば何をするか想像に易く、いつ爆発しても不思議ではない危険物が確実に爆発する方向へと転がる。どう考えても使えない。

己の置かれた現状に思わず溜め息が漏れそうになるが、天を仰ぎ見て必死に抑える。目に入った月は彼を嘲笑うように優しく輝いていた。

溜め息が漏れたが最後、きららに噛みつかれ、凜花が怒り、嗟み合いが開始、自斎は対人関係が希薄故に場を収められる筈もない。任務が本格的に始まる前からそんな事になっては目も当てられない。小太郎が必死になってバランスを取るしかないのであった。

「……ん？」

「小太郎、どうかしたの？」

「いや、アレは……まさか……」

一瞬、月を背にして夜空を舞う見覚えのある影に、小太郎は溜め息ではなく疑問の呟きを漏した。

彼を気にしていた凜花だけが呟きを耳にして問い掛けてきたが、当人は冷や汗を掻くばかりで空返事である。

徐々に動揺と焦りを見せる彼に、きららと自斎は顔を見合わせるが、答えは出ない。出る筈もない。答えに辿り着く道筋を見つける要素すら持ち合わせていないからだ。

影の姿を改めて確認すると連続する舌打ちと共に腕を動かす。

すると影は小太郎に狙いを定めたかの如く急降下を始める。そのまま襲いかかるかに見えたが、直前で両翼を大きく広げて降下速度を落とすと、差し出された腕へと止まってみせる。

「……鳶？」

「ちよつと、どういうことよ？」

(三郎が育てて寄越した鳶だな。と言うことは……)

影の正体は一羽の鳶。

小太郎の命令に従う以上は極めて高度な訓練と調教を経た忍獣であり、主と認めている、と事情を知らないきららと自斎も分かる。だが、頭に浮かぶのは何でこんなところに、という疑問だけ。

その中、凜花だけは訝しげに視線を向けていた。

元ふうま八将に属していた家の出身故に、忍獣と言えば二車傘下の鬼蜘蛛家を連想したのか、はたまた鳶の動きから鬼蜘蛛家の放鷹術を思い浮かべたのか。

言うまでもなく、この鳶は小太郎が骸佐へと弾正帰還と抹殺までの共闘を認めた手紙を送るべく遣わした一羽と同一。

遣わして以降、一向に返事がない故、骸佐がまだ共闘を決めあぐねており、三郎の下に居ると考えていた。今このタイミングでたまたま返答が来たかと期待したのだが、生憎と書状らしきものを身に付けてはいない。ならば――

「参ったな。二車の幹部、三郎辺りが来てるかもしれん」

「……………っ！」

「小太郎、まさか……………」

「勘違いするな。オレが送り込んだのは別の人物だ。その帰りに見知った幹部を見つけたから観察してたんだらうよ」

唐突に告げられた言葉に、きららと自斎の表情が険しくなる。

反乱を引き起こし、五車に混乱を招いた二車の人間が居る。それだけで二人の正義感を刺激するには十分すぎる理由である。

ただ、元ふうま一門の内情に詳しい凜花だけは別の可能性に思い至り、別の意味で表情が強張った。

既に弾正の帰還は対魔忍全体へと知れ渡っており、それぞれの部隊が任務中の横槍を警戒している。

無論、特に警戒が強いのは元ふうま一門である。自分達を見捨てた先代が戻ってきた事実は、彼等の殺意を煽り、色めき立たせるには十分であった。

まだ目にしていない現状は耐える。だが、もし出会ったのなら——
——誰もがそう考えていることだろう。

そんな中、紫藤家の当主は極めて冷静であった。

小太郎と話し合うまでもなく静観を決意。当然だ、紫藤家はどうの昔にふうまと手を切って井河アサギの下に付いている。今更弾正に与する理由もなければ利益もない。任務中に襲撃を受けようものなら応戦は許可しているが、基本は任務を優先し、遂行次第に撤退するよう家の人間に言い聞かせている。

娘である凜花も、それらの情報を聞かされている。

幼馴染である骸佐もまた弾正を嫌っていることを知っており、同じ反逆者同士であったとしても手を組む可能性はないと言い切れる。

ならば、小太郎と骸佐が共闘できる立ち位置にあることは察するに容易い。どちらが弾正を討つかは早い者勝ちになるが、討つまでの間は互いの戦力を減らさぬように立ち回れるのだから。

反逆者との内通と共闘。これを、対魔忍の内部は認めるか。

後見人であるアサギは小太郎に対して甘いのは理解しており、父も知らぬ存ぜぬを通してのもの小太郎と繋がっている可能性もある故に、この二人は有効な手段と認めるだろう。

問題はそれ以外の権力を握った者達。これ幸いとありもしない証拠を並べたて、小太郎を反逆者として処刑することで、ふうまの遺産や彼の抱えている優秀な者を吸収しようとして動くに決まっている。

骸佐との共闘はメリットも大きい、デメリットも大きい。凜花が心配するのも無理はなかった。

しかし、小太郎はそれらしい理由を並べて否定する。凜花がほぼ正答に近い推察をしていることは察しているが、まだ彼女はお客様だ。巻き込めば、紫藤家にまで類が及びかねないからだ。

(流石は骸佐、動きが早い……………本当に参ったな。今すぐ帰りたい。どうしよう)

辛うじて無表情をキープしていた小太郎であったが、内心は滂沱の

涙を流していた。

エウリュアレーの存在は、骸佐にとつても喜ばしくもあれば、真逆でもある。

龍門の一部と利権を奪い、一組織としての足場が固まり始めたばかりだというのに東京キングダムを掻き回されては堪らない。

だが、同時に彼女を組織に取り込めれば、急速な勢いで固まっている足場が、より強固になる。トリックスターを懐に誘うのはハイリスクであるが、それに見合うだけの見返りがある上に、本来の目的にも一致している。

骸佐も馬鹿ではない。相手が相手である以上、目的が勧誘にせよ討伐にせよ、まず間違はなく二車の幹部が出向かねばどうにもならない案件。相応の戦力を送り込んでできていると考えて問題ない。

問題は、既に中へと入っているのか。はたまた先んじて独立遊撃部隊の存在に気付いて潜んでいるのか。前者ならば今回の任務の間であれば、手を組める可能性はある。後者であれば、エウリュアレーを何とかしても連続して二車家幹部との戦闘に発展するかもしれない。何よりも――

（頼む。三郎かカヲルか比丘尼の婆様辺りを引かせてくれ！ 男の幹部はいやだ、男の幹部はいやだ、男の幹部はいやだ！）

「ちよつと、いやらしい目で見ないでくれる？ ほんつと、男つてこれだから……！」

チラリと横目で眺めたきららに見当違いも甚だしい軽蔑の視線を言葉を浴びせられるも、小太郎は全く気にならない。

彼は女好きで、好きと言われれば好きになつてしまうチョロい男であるが、線引きだけはハッキリとしている。あくまでも自身の劣情や欲望をぶつけるのは心から好きだと告げてくれた相手だけ。それ以外は性と愛の対象として全く見ていない。そうでもしなければハニートラップに掛かり放題なのだ。

もし仮に何者かに捕らえられ、常人ならケダモノと化す媚薬を投与

されたとしても平気な顔をしている。それだけ房術を極めており、強靱な理性を持たされている。どうしても我慢できなくなったら、よく分からん女を犯すよりも早く敵を皆殺しにして、全力で走って帰って自分の女を呼ぶであろう。

よつて、どれだけ扇情的な格好をした美少女が目の前にいようとも、性的な目を向けない。向けられない。

きららを見たのは、あくまでも幹部が男だった場合に戦闘へと発展する起爆剤でしかないからだ。

三郎であれば見た目と気弱さから彼女の親切心が顔を出すであろうし、カフルであれば口先三寸で言い包める様が目に浮かぶ、比丘尼であれば年長者としての威厳をフルに発揮する。

が、男であつた場合はどれだけ言葉を重ねようが、どれだけ手を組む利点を説明しようが耳を貸すまい。彼女にとつて男とは敵ではないのだ。おまけに相手は反逆者、戦って倒してもいい理由がある。

二車の幹部も顔を合わせただけで戦おうとは考えないだろう。

目的が勧誘にせよ、一時的に無力化してしまつた方が手っ取り早い。小太郎と手を組んだ方が良いと判断すると見ていいが、流石に戦いを挑まれたら応戦せざるを得ない。任務と関係のない戦闘開始である。

(ああ〜、骸佐くん頼むよお！ エウリユアレーは女だから女の方が説得しやすいって考えてくれるよねえ！ オレと君との仲だから、分かってくれてるよねえ！)

心の中でこの場にいない骸佐に向かって両手を合わせて頼み込む。その時、きらりと流れ星が遠い夜空で流れた。

流れ星に願えば、願いが叶うと言うが、今回はどうか。その結果は、彼はそういう星の下に生まれてしまったと言うほか無いものだった。

早速やらかしてくれる鬼娘！　しかし苦勞人には為すすべがない！

倉庫内部は、廢墟地区にしては比較的まともな外観から予測されるように小綺麗に整理されていた。いや、予測以上ですらあった。

(趣としては輸入業でもやってる倉庫つてところだが、整理されすぎている。既にエウリュアレーの術中と見た方がいいか)

自齋を伴った小太郎は、床に置かれた物品の影を身を低くしつつも周囲の観察を怠らずに進んでいた。

倉庫にはコンテナや木箱が理路整然と並べられ、所番地まで記されている。何者かが利用し、きちんとした管理が為されているようだ。しかし、それでは疑問が残る。誰が利用しているにせよ、廢墟地区の倉庫をわざわざ利用する理由などない。何らかの値打ち物や商売品を保管しておくにせよ、もっと安全な場所はいくらでもある。

倉庫の所有者にしか分からない理由が存在しているにせよ、廢墟地区を利用するならば、住人の窃盜や襲撃を考えて数十人単位の護衛が置いておくべきだ。

それらが全くない。

ならば、護衛が既にエウリュアレーに始末されているか、或いはこの倉庫内部が空間操作の魔術によって全く別の空間に繋がっているのか。

いずれにせよ、自らが虎子を得るために虎穴に入っている自覚はしておかねばならない。尤も、虎穴どころか虎口の中かもしれないが。

「……………ふうま」

「分かつてる。それから今は隊長と呼べ。お前が色々納得してない

のは理解しているが、守るべき規律がある。自分の立場を考えろ」
「……了解。でも、鬼崎先輩は——」
「アレはもう諦めた」

緊張と不安から背後から囁きかけてきた自斎の言葉に、ぐったりとした口調で返す。

咄嗟に名前で呼んでくる以上、自斎もまた小太郎を隊の長として認めてはいないのだろうが、すぐに不承不承ながらも了承の返答をする辺り、独立遊撃部隊に派遣された戦力という自らの立場を弁えているようであった。

二人の脳裏に浮かんでいるのは、自らの立場というものを全く理解していないきららのことか。

正確には理解していないのではなく、理解した上で反発しているのだが、それはそれで余計に性質が悪いとも言える。

きららの抱えている問題は複雑ではなく単純だ。だが、幼少期のトラウマ故に根が深く、彼女自身が「男は敵」と信じ込まねば、生きていけないのだ。

鬼崎 きららは凜子、凜花、ゆきかぜに並ぶ次世代のエースと並び称される逸材。才気の源は、彼女を生んだ両親にこそあった。

父は優秀な対魔忍、母は「霜の鬼神」と称される神話級の鬼族。言わば、ハイブリット対魔忍とも呼ぶべき存在だ。

対魔忍の魔族に対する敵意は非常に強い。ならば、混血である彼女もまた不当な扱いを受けそうなものだが、母が霜の鬼神という一点から逃れられているのだ。

「霜の鬼神」は大昔から存在を知られてこそのいたもの、人間と敵対したことはほぼなく、人類に友好的な存在だった。

人魔不干渉という不文律こそ守ってはいなかったが、人間社会を尊重しており、時折やつてくる思い上がった魔族の人界襲撃にも人の側に立って戦ったほどである。

基本的に彼女は人の寄り付かぬ山奥などで生活を送っていたようであるが、社会や科学技術の発展に伴ってそれも難しくなっていた

た。元々その予定だったのか、とある一件で保護され、政府の決定により対魔忍へと身柄を預けられる運びとなった。

当時は五車とも呼ばれていなかった隠れ里で穏やかな生活を送り、周囲から信頼を勝ち取り、夫となる男と恋に落ち、きららをもうけ――

――最後には、夫の手によって殺害された。

詳しい事情は極一部を除いて明かされていない。

信じた男が悪辣であったのか、止むに止まれぬ事情があったのか。きらら自身も幼い時分の話であり、本人も全てを理解しているかは怪しい。

それでも父が母を殺した事実は、幼年期に負う傷にしては余りにも深く広い。父に対する怒りと憎しみが、男そのものに対する敵愾心に繋がったようだ。

何も複雑ではなく単純な話だ。しかし、根が深い。とてもではないが任務の片手間にどうにかできる訳もない。それ故の諦めだ。

今、共にいない二人は、小太郎達とは別の入口から侵入している。己の傍に居るよりも、凜花の傍に居た方がまだ暴走の可能性を減らせる。更に、エウリユアレーが待ち構えていた場合において、多方向からの奇襲を仕掛けられるからである。

物陰から物陰へ。それぞれが目立つ格好をしていながらも、物音一つ立てはしない。そして――

「――っ！」

「居たぞ、そつちからも見えるか？」

『ええ、こちらからも確認したわ』

倉庫の中央に、それが居た。

幽鬼のように佇む一人の女性。頭巾を被ってその表情は何いしれないが、この時この場に居る時点で只者ではない。

通信機越しに相手の目視を伝えるが、返ってきたのは凜花からのみ。

その声には緊張の固さがあった。得体の知れない魔女を前にして楽観的になれるほど実戦経験が薄いわけではないようだ。

「あの格好、対魔忍……?」

「いや、違う。素材も違うし、調査部隊の中にはあんな格好の奴はいなかった」

既に得ていた調査部隊の情報に、女の纏う対魔忍装束と一致する人員はいなかった。

頭巾から除く鼻梁と口元も完全に一致はしない。何よりも、相当に上質な素材を使っているのだろうが、装備課が対魔忍装束に使用する高耐久の素材とは明らかに異なっている。明らかに、見た目だけ似せたものだ。となれば、アレがエウリュアレーと見た方が無難だろう。

コンテナに背中を貼り付けて覗き込んでいた小太郎は一つの違和感を覚えた。

これもまた彼ならではの独自の感覚であるが、存在そのものが希薄過ぎるような気がしたので。

気配を隠すのならば分かる。それは遮断に近く、一度でも相手を認識してしまえば、如何ようにでも捉えられる。

だが、目の前の存在はどうだ。目視しているにも関わらず、今すぐにも煙になって消えてしまいそうな不安感。

一気呵成に襲い掛かり、何かをされる前に捕らえる方向性も考えていたが、本能も理性も警鐘を鳴らすと共に一つの仮説を打ち上げている。

もう少し探るべき。そう判断した小太郎は懐からスマートフォンを取り出し、対魔忍装束の女にカメラを向ける。

「ちよつと、何してるの? こんな時に写真なんて……」

「こういうのは結構有効なんだよ。パシャつとな………やつぱり

か。さて、どうしたもんか」

カメラを使用した際のシャッター音が出ないように改造されたスマートフォンは、無言のまま佇む女の姿を正確に撮っていた

画面に映し出された画像を目にした彼は、己の仮説が正しいことを確信した。

ただ、それは決して喜ばしい事実ではない。事態がより面倒な方向へと転がった証明でもあり、嘆息せずにはいられない。

と、その時。

「——ちよっ!?!」

「あ? どうし——なにやってんのあいつ???」

女の様子を伺っていた自斎は、驚きの余りに悲鳴を上げた。

あくまでも小声の悲鳴であり、この距離ならば相手にも気取られないと小太郎も目くじらを立てなかつたが、彼女の見ていた光景を見た瞬間、目が丸くなる。

事もあるうに、きららが真正面から女へと向かっていつている姿が其処にあつたからだ。

勝手な行動に怒る暇さえない。理解できない思考回路と行動方針に呆気を取られるばかりである。

「アンタがエウリユアレーね! さっさと仲間を開放しなさい! アンタのせいでこっちは不快な思いをしてるのよ!!」

「我慢するとか堪えるつてのが出来ないのかあいつ。出来ないみたいだわ」

「言ってる場合?! 早く援護を……!」

名乗りこそ上げず、警戒こそしているものの、魔女に対してバカ正直にこれから戦いを挑もうとする姿に頭痛すら何処か遠くへと飛び去っていく。

どうやら、きららは小太郎が写真を撮っている姿を目撃して我慢がならなかったらしい。

敵を前にして何をしているのか。ただでさえ男と任務を共にするだけで耐えかねるといふのに、その男が任務とは関係のない行動を取っているとしても考えたようだ。

気持ちは分からなくもない。度を越した男嫌いというのなら尚の事。彼の行動が如何なる意味を持つのかを考えず、偏見から無駄と切って捨てている。

エウリュアレーに対しても、心の何処かで油断がある。

これまで命令を無視しようとも、何とかなってきた。ただ運が良かっただけに過ぎずとも、自らの実力と勘違いするには十分過ぎる体験であつただろう。

油断と慢心。過ぎた力を持つ者が陥る病のようなもの。其処に男嫌いが加われれば、こうなる事は目に見えていたかも知れない。

今更、どうする事もできない。賽は投げられた。尤も、小太郎が投げたというよりも、きららの行動によつて投げさせられたのだが。

兎も角、後は予想されうる被害を極言するべく行動に出る他ない。

「きゃつ、な、何を……!」

「罨だツ! 全員、鬼崎の所に集まれ! 分断されるぞ! 女は無視しろ、虚像だ!」

「——はあっ?!」

自斎の胸ぐらを掴んで物陰から躍り出た小太郎は、絶叫にも等しい命令を告げる。

その言葉を理解すると、きららが驚きの声を上げ、同時に女の姿が陽炎の如く揺らめき、やがては消えた。

異変はそれだけに留まらない。

今し方まで女の立っていた場所を起点として複雑怪奇な魔法陣が展開され、膨大な魔力が倉庫全体を包んでいく。

既に姿を消したにも拘らず、女の声で陰鬱とした詠唱が囁かれてい

る。一体、何処から響いているのか。

「自分で走れる！」

「そうかい！ そいつは良かった——っ!?」

（魔法陣の中に別の魔法陣！ そんな真似をして魔術が成立するのか！ いや、それ以前に狙いはオレ!?）

胸ぐらを掴まれたまま引き摺られるように移動していた自斎は小太郎の手を振り払い、自らの意思で動き出す。

但し、両の脚を使って走るのではなく、自らの忍法を最小限利用し、まるで宙を滑るかのような空中浮遊であった。

思ったよりも力を使い熟している自斎に意識を向ける余裕すらなく、小太郎も地を蹴り続ける。

それを邪魔するが如く、倉庫全体を覆う魔法陣とは別の魔法陣が自らの足元に出現している事に気がついた。

魔術は魔力を原動力にした技術の総称。発動までの過程は様々であるが、魔法陣と詠唱を利用する様式は基本中の基本となる。

特定の詠唱によって魔法陣に魔力を流し込み、特定の魔術を発動が基本的な流れ。言わば電化製品に近い。魔力は電気、詠唱はスイッチ、魔法陣は電子回路の関係性に似通っている。

故に、小太郎の驚きも当然だ。複雑な電子回路の中に、更に別の電子回路を潜ませて全く別の機能を持たせた上で起動させるなど高等技術の域を越えている。並の魔術師では不可能な芸当だ。

（分断されれば最悪！ 隊員の行動も読めない、人質にされたら目も当てられねえ！ 間に合うか！）

きららにせよ、自斎にせよ、命令を聞くかも不安であり、まともな戦力として期待はしていない。

だが、分断されて各個撃破、更にはエウリュアレーの手に墮ちでもすれば身動きが取れなくなってしまふ。見捨てるという手段もなく

はないが、アサギに任された戦力である以上、最後の最後まで取れない選択である。

結局の所、助っ人などお客様。他の正規隊員とは異なり、真の意味で小太郎の自由にできる存在ではないのだ。

予想外の事態に慌てふためくきららを他所に、小太郎も、自斎も、凜花も一斉に駆け寄っていき——全てが眩い光に飲み込まれる。

(この感覚、空間転移か……！)

凜子の空間跳躍の術に似て非なる感覚に、小太郎は歯を食いしばった。

重力の不在。五体の融解。五感の消失。空白。空白。空白。空白。空白。

肉体の全てが消えてなくなり、鈍り続ける思考だけが残っている不快感。まるで死後、その地に縛られ続ける地縛霊にでもなってしまうたかのような感覚。

その中で、必死に思考と意識を保ち続ける。一瞬とも永遠とも取れる転移の影響であったが、始まりが突然であれば終わりも唐突であった。

「——つとおっ！」

突如として全ての感覚も、消えていた筈の重力も元に戻る。

瞬時に彼が認識したのは自身が天地逆しまに中空に投げ出された事実。重力に引かれる落下の最中、くるりと猫のように反転すると見事に着地を決める。

それだけではない。脚が地面に接すると同時に地を蹴る。何処に跳ばされたか定かではないが、敵の術中に落ちたのは事実。転移場所に一秒でも留まり続ける事が如何に危険かを理解していない訳がない。

「はてさて、此処は何処なのか。分断は——されなかつたみたいだな」

視界の端に映った巨大な瓦礫の影に身を潜めた小太郎は、ようやく周囲を探る。

上下左右を堅牢なコンクリートの壁で囲まれた空間。前後には薄闇が何処までも続いているかのようだ。

足元にある鋼鉄の線路から、一部が崩れているものの地下鉄の一部だと伺える。

途中で人工島そのものが廃棄されたため、ついぞ電車が走る事はなかったが、住民の移動手段の一つとして地下鉄も建設計画に組み込まれていた。恐らくはその一部、或いは其処に似せた擬似空間といった所だろう。

幸いにも電気は通っているらしく、非常灯らしき光源が一定間隔でならんでおり、完全に闇に閉ざされている訳ではない。

周囲の警戒と共に次なる一手、現状における最善手を探っていた小太郎であったが、突如として頭上に出現した魔法陣の二つに、安堵とも悲観とも取れると息を吐き出した。

その魔法陣が空間転移魔術の終点、出口の門あったのか、ずるりと赤子が生まれてくるように、二人の人物が落ちてきた。

「ひきやあ——！」

「あッ、ううっ！」

「ほいッと。無事で何より」

「な、何なのよ、突然……——って、離せえっ!!」

「お望みのままに」

「ふぎゆう——!?!」

「はううう——?!」

落ちてきた人物——きららの左足首を、自斎の右足首を掴み、小太郎は地面に叩きつけられることだけは免れさせた。逆さ吊りの

状態で頭を振る自斎と、状況を全く理解していないきららに露骨な呆れの視線を向ける。

転移の経験がなく、影響をもちに受けているらしいが、逸早く状況を理解したきららは、男に触れられている事実能耐えられずに暴れまわる。このままでは顔面に蹴りを食らうと判断した小太郎は、ぱつと両手を開いて二人を開放した。そうなれば当然、重力に支配されたこの星の事、地面に激突する。

頭から地面へと落ちた二人は揃ってまんぐり返しの格好を披露している。

安産型のいい形の大きい尻だ。本人にその気がなくとも男を誘うセックスアピールそのもの。

自斎はスパッツのような肌に張り付く綺麗な逆三角形から豊かな尻肉がはみ出し、きららなどエグいレオタードのため丸出した。男なら目を奪われそうであるが、小太郎は視線すら見せず、天井に視線を彷徨わせていた。

その時、僅かに遅れてもう一つ魔法陣が形成され、今度は凜花が吐き出される。

先に二人が転移させられた以上、彼女も同様の場所に送られると踏んでいたようで、待ち構えていた小太郎が凜花の身体を両手で受け止める。

膝の裏と背中 hands を回すお姫様抱っこ形。先の二人よりも扱いがいいのは、幼馴染であったからなのか、二人よりも頼れるからなのか定かではない。

「う、うう、くらくらする……」

「大丈夫か？」

「こ、小太郎？ は、はう!! だ、大丈夫、大丈夫だから下ろして!」

自らの状態を理解した凜花は、冷静どころか冷徹ですらある視線を受けてもなお、赤面してぐいぐいと小太郎の胸元を押しして少しでも距離を取ろうとする。

気が強かろうが気負っているようが彼女もまた乙女。憎からず思っている相手に抱き上げられては嬉しさと気恥ずかしさで、混乱してしまうのも無理はない。

（あの魔法陣、オレに狙いを定めていた。他と違って、男だったからかなのか。しかし、男を嫌悪するような伝説も伝承も残っていない。男女も人も魔も神も区別なく巻込んでいくタイプなんだが、な）

可愛らしく腕の中で暴れる凜花に何の感慨も抱かず、そつと立たせてやりながらもエウリュアレーの目的に思考を巡らせる。

魔法陣の中の魔法陣は、間違いなく己を狙ったものだった。

運良く逃れられたが、そちらの魔法陣に捕らわれていたのなら、全く別の場所へと転移させられていた可能性が極めて高い。

しかし、意図が読めない。これほど高度な転移魔術を駆使できる以上、自らを追う調査部隊を消し去りたいだけであれば、もっと情報も証拠も残さぬやり方はいくらでもある筈だ。自らの現状も鑑みれば、誘い込まれたと見るべきだろう。

それでも疑問が残る。

あの瞬間、何故自分だけを別の場所へと転移させようとしたのか答えが出ないのだ。

独立遊撃部隊の隊長として任務に携わっているが、それがふうま小太郎であると知っているのは対魔忍だけ。それ以外の勢力には正体不明のまま通っている。

何らかの魔術を用いて調査部隊に口を割らせた可能性もあるが、伝説の魔女の目を引くほどの情報を引き出せるほど調査員は小太郎を知ってははいない。

あの場で最も危険なのが小太郎である、或いは「まずは隊の頭を潰す」という判断であったのかもしれないが、全てを見られていたと仮定したところでエウリュアレーがそう判断できるだけの情報は与えていない。

ならば何故。

この疑問の答えこそが、エウリュアレーの目的そのものであるような気さえする。断定は危険だが、思考を割り裂く必要を小太郎を感じ始めていた。

「——ぐ、この、アンタねえ!？」

「お、鬼崎先輩、落ち着いて」

「これくらいで済んだだけで御の字だ。それから、こういう目に合ってるのはオレのせいじゃない」

「きららちゃん、貴方ねえ! こうなったのは誰のせいだと思ってるのよ!？」

「だ、だって! コイツが呑気に写真なんか撮ってるからっ! 罨だって分かつてるなら最初から言えばいいでしょっ?!」

女三人寄れば姦しいと言うが、これはそれ以上だった。

雑な扱いが気に入らなかつたのか、頭の痛みを堪えながら立ち上がったきららはいの一番に小太郎へと噛み付いた。まるで全てアンタが悪いと言わんばかりの態度である。

そんな彼女に小太郎は相変わらず視線すら移さず、相手にするのも億劫だと言わんばかり。相手にしないとと言わんばかりの態度が怒りの炎に油を注いでいるのだが、改める気は全くないようだ。彼女も彼女であるが、彼も彼であった。

きららの過去を知って同情すら抱いている凜花であったが、今置かれた現実の責任は誰にあるのかを重々承知しているらしく、庇うように声を張り上げる。

二人の間に割って入ってしまった自斎が哀れですらある。人付き合いが苦手、人と触れ合うべきではないとすら感じているのに、仲裁の役目を背負う羽目になって涙目になっている。

「ほらよ」

「っ、な、何よ——?」

「罨だと気付いたのはそれを見たからだ。見てみるよ」

「何これ……あの女が映ってない……？」

何の宣言もなくスマートフォンを投げて寄越され、きららは面を喰らいながらも持ち前の反射神経で問題なく受け取った。

その画面に映し出されていたのは、先程の倉庫の写真であった。

だが、きららが見た撮影の角度では、あの女の姿が映っていなければおかしいにも拘らず、影も形すらない。

「多分、米連の目を掻い潜るためだろ。肉眼なら捉えられるが、機械を介すと途端に存在しなくなるタイプの幻像だ。米連の特殊部隊はHUDが標準装備、偵察に自律型のドローンを使うからな」

「でも、どうして……？」

「分からん。少なくとも、エウリュアレーの目的は米連にはないみたいだ」

エウリュアレーがその気になれば、機械を介したとしてもハッキリと映る幻像を造ることなど造作もなからう。それどころか、手で触れなくても違和感のない質感を再現するものすらも簡単に違いない。

敢えて幻像の質を落としたのは、米連に絡まれるのは面倒と考えているのかもしれない。米連は魔界技術に強い興味を示しており、回収と新技術への転用に力を入れている。よって、エウリュアレーも十分に興味を唆る研究対象と成り得る。

伝説の魔女が米連にそれほど興味を抱いているとは考えにくいが、一人ひとりの質は兎も角として数で責められては鬱陶しいことこの上ない。今回の件、米連を巻き込んで遊ぶつもりだけはないようだ。

幼稚な責任転換をしていたきららも、これには閉口した。

あの瞬間、あの場であの女が幻像であると予期していたのは小太郎だけだった。それを台無しにしたのは自分自身だと認めざるを得ない。

「……………自斎ちゃん、凜花ちゃん。ごめん、私が軽率だった」

「っ！ いい加減にして！ 小太郎は貴女の――」

勝ち気な彼女にして珍しく、しおらしい態度で謝罪を口にした。それでもその対象の中に小太郎は含まれていない。どうあったところで、男に頭を下げるなど彼女にとっては在ってはならないことらしい。

これに顔を赤くして怒りを露わにしたのは凜花だった。

きららに掴みかからんばかりの勢いで、声を荒げる。彼女の怒りも当然だった。

いくら同情の余地のある過去が持ちえども、許される範疇を越えている。況してや、或る意味において自身よりも重要視している小太郎を無視しての謝罪など許せる筈もない。

小太郎は貴女の父親じゃないのよ。

きらら自身も分かっている当然の事実。だが、口にしたが最後、両者の関係性に致命的な罅が入る台詞を口にしようとした瞬間、小太郎が凜花の肩を掴んだ。

「止める。それ以上は言わなくてもいい」

「でもっ……！」

「いい。隊員の行動の責任は全て隊長に帰属する。御しきれなかったオレが悪い。それが規律だ。分かったな？」

「……………っ」

「分かったな？」

「……………分かったわよ」

異常な冷たい表情と声色に背筋に怖気が走り、凜花は全ての不満を押し殺して口を噤んだ。

きららは男に庇われている事実から口唇を噛んで自身と小太郎に対する怒りを抑えているようであった。これで何か罵倒を口にしないだけで、小太郎にとっては十分だ。

別段、きららを好きで庇った訳ではない。

ただでさえ命令を聞かない隊員に、集団行動をしたことのない隊員に、やたら気負った隊員で唾み合いが始まればどうにもならない。

やっていられるか、とそれぞれが独断行動を始めた場合、小太郎自身の持てる予測と能力の範疇を大きく外れてしまい、どうしていいかわからないのだ。

ならば、命令を無視されようが、まだ目の届く範囲に居て貰った方がマシという判断である。

「行くぞ。警戒を怠るな、此処から先は魔女の釜の底を浚うようなもんだからな」

既に導火線に火が付いていることは小太郎も気付いている。だが、彼の持てる能力では如何ともし難い。

元より他者からの信頼を得られる人格ではなく、本人にもその自覚がある。故に、今は消極的な方法しか選択肢がない。

彼の性格故なのか、はたまた最初から決められたことだったのか――
抱えた爆弾が爆発する時間は、もう目の前にまで迫っていた。

どんだけ頑張っても爆弾の解除はされていないのが
苦勞人クオリティ

転移された先のトンネルは無限に続いているかの如く伸びている。
小太郎を先頭に、すぐ後ろには凜花が、その後いきららと自齋が続く。
足音のみが反響し、目印らしい目印の存在しない道程は方向や時間
の感覚を容赦なく奪う。

右へ左へと緩やかなカーブを描く場面もあるが、それに気付いてい
るのは小太郎くらいのもので、他の皆はゲンナリとした表情。

終わりが見えない事実はただそれだけで氣力を奪う。これも術中
の内ならば老獪と思えたが――

(しかし、手緩いな。こういった迷い込ませて消耗を狙う結界には、使
い魔なんかの攻撃が付き物なんだが……)

此処に来てから、一向に襲撃はやって来ず、終わりは見えないもの
の先にはすなりと勧めてしまっている。

体力氣力の消耗を目的としているのなら、手勢による削りも当然の
ように配置されているべきのだが、それすらない。

まるで遊んでいるような手緩さであると同時に、更に読めなくなる
魔女に薄気味悪さが募っていく。

(いや、違うか。先に進んでいる連中が居る。間違いなく二車の幹部
連中だな)

思考を巡らせながらも、周囲の環境の変化を具に観察していく。
相変わらず代わり映えのしないコンクリートの壁と経年劣化によ

る天井の崩落から生み出された瓦礫が並んでいるが、ようやくと変化が現れ始めた。

壁の傷。地面の陥没。瓦礫の真新しい破断。どれもこれも時間の経過によって生まれる形をしていない。

何者かの手に寄らねば生み出されない結果の数々は、つい先程まで誰かが戦闘を行っていたと示している。

これまで攻撃や襲撃がなかったのは、先を進む者がエウリュアレーが設置していたであろう削りの罫を掃討してしまったからだ。

(三郎ならもつと派手な跡が残る。カヲルなら魔術について調べているだろうから使い魔との無駄な戦闘なんざ極力避ける。比丘尼の婆様だと気持ち悪い死体が一つも残ってねえとかありえねえ。ただまあ、運がいいのか悪いのか……)

二車の女性幹部の戦闘スタイルは既に把握している。

意図して調べたのではなく、弾正が当主として健在だった時代にたまたま目にする機会があったに過ぎないが、現状のどれとも一致しない。

ますます、この先に待ち構えている幹部が喜ばしくない性別であったのは明らかなのだが、希望が持てない訳ではない。

「ちよつと、さつきから何やってるわけ……?」

「ああ、これか。さつき空間転移をしたからな。この手のタイプの魔術は何度も転移する可能性が高い。だからこうして探ってる」

「へえ……そういうものもあるのね」

「ふーん………オタクってのはこれだから」

(いいー！ いいよ、この反応！ この調子なら交渉に持ち込める可能性はあるぞう！)

先に進む小太郎の背中に、再びきららの声が突き刺さった。

彼がやっていたのは進む方角に向けて小石を投げる行為。足元の

小石を拾っては投げ、拾っては投げを繰り返している。

何処までも続く地下鉄に違和感を覚えていた。

これまで進んだ距離を鑑みても、いくら建設途中であつたとはいえ地上へと続く道や通路が一向に現れないのはいくら何でも異常だ。

其処で空間転移で別の場所に跳ばされたのではなく、空間転移によつて既に張つてあつた結界の中に引きずり込まれたのだ、と判断したのだ。

それならば、何処までも続くトンネルにも説明がつく。要は、東京キングダムの地下鉄を模倣して再現しただけの精巧な偽物に過ぎないのだ。

空間などネジ曲がつている上、同じ景色が何処までも続くとは限らない。エウリユアレーならば、高熱と毒ガスで満たされた溶岩地帯も本物と寸分変わらずに再現できる。いきなり別の環境に切り替わり、全員仲良く死亡などという事態は避けねばならない。

そのために別に再現して作られた環境との境界線を探るため、小石を投げ続けているのである。

自斎が彼の知識——もっと正確に言うならば実体験をも伴つた知識なのだが——に感心していたが、きららはまたも小馬鹿にした笑みを浮かべていたものの、小太郎は内心でガッツポーズである。

一見、何も変化していないように思えるが、変化は現れている。先の失敗以前のきららであれば、間違いなくもつと食つて掛かつていただろう。

だが、今はいちいち口を挟みこそすれども、邪魔をしようとしなければ、無理にやめさせようともしない。

苛立ちから見せた独断専行を小太郎に対して謝りこそしなかったが、反省はしているのだ。

今は男嫌いを拗らせて、男であれば無意味に反発を繰り返してこそいるが根は素直で責任感が強い。己自身の間違いであれば、認めることは出来る。

有り体に言つて、今は意気消沈状態である。イライラしているのは寧ろ凜花の方で、きららの精神状態は落ち込んでいる。

この状態ならば彼女も強くは出られない。例え、二車の幹部が男であつたとしても、手を組む方向に持っていける可能性は高かつた。後は、己の口で納得させずとも首を縦に振らせればいいだけの話だ。

「あつ、石が……」

「おつと、読み通りだな。やっぱりあつたか」

一つ、また一つと小石を投げていると、地面に音を立てて落ちる小石が唐突に消失した。

それを目にした凜花は僅かに驚いたような声を上げた。実際に目にするまでは如何に幼馴染の言葉であれども半信半疑だったようだ。

トンネルは何処までも続いているように見える。だが、小石の消失からも分かるように確かな境界線が其処には在る。

足を止める三人を他所に、小太郎は無言で左腕を前に出しながら、前へと踏み出す。

この中で戦力として劣っているのは己であり、また腕を失うことを想定した訓練を行っているのは自分だけ。本来であれば使い捨ての戦力を使う所であるが、他に適任がいけない以上は仕方がない。

任務を開始するに当たつてあらゆる覚悟を決めていた彼は、躊躇なく小石が消失した左腕を突き入れた。

境界線に指先が飲み込まれ、掌、手首、前腕、肘までが飲み込まれ、綺麗さっぱり見えなくなる。

無くなつた腕の肌から伝わってくる情報を吟味してから腕を引き抜き、何度か手を開いて閉じてを繰り返す。

結果は異常なし。少なくとも人類の生存可能領域の範疇にあることは間違いない。

ひとまずの安堵と一つの提案とその道筋を組み立て、背後で待つ三人へと振り返る。

「外でも言ったが、この先で二車の幹部が居る可能性が高い。其処で一つ提案がある」

「何よ、勿体振らずにさっさと言ったら……?」

「奴等と手を組む」

「はあ——!」

「それは……」

「……………」

包み隠さずに、この先の動きを伝える。

おおよそではあるものの、この先にいる二車の幹部は、これまでの道程から拾った情報で検討が付いている。あの二人であれば、問題なく手を組める。

問題は、案の定の反応を見せるきらら、驚いている自斎、予想していたようだが渋い表情を見せる凜花を納得させることだけ。

「手を組むって、相手は反逆者なのよ! 組めるわけないじゃない!」

「有事の際には例え敵と組んでもお咎めはない。組める組まないじゃなくて、組まざるを得ない」

「私達じゃ、無理だっていうの!」

「無理だろう。冷静になってくれ。オレ達はこれまでエウリユアレーの目的が分からないままに術中に嵌っている状態だ。それだけ相手が上を行っているってことだ」

「…………」

今、この状態に陥っているのは半分以上はきららの責任であり、残る半分は最初から制御を諦めてコミュニケーションを怠った小太郎にも非がある。

だが、全ての責任は隊長であるオレにあると敢えて口にした。制御の出来ない隊員に対する呆れと怒りはあれども、自らの能力不足と本心から認めてはいるが、同時にきららの罪悪感と責任感をも意図的に煽っていた。

自分の庇うような言動は、責任感の強い人間にしてみれば自責を募らせるものだ。

況してや、嫌いな男から庇われていると在れば、きららは是が非でも自分の責と考える。相手の人格や性格に合わせて論調や手法を変えるのは、弁舌において行つて当然の事柄である。

一先ず反発は其処までであり、きららは口唇を噛みながら押し黙る。既に自責の念で頭が一杯であり、陥つた状況と彼女の性格を読み切つた小太郎の思う通りに動かされていることにすら気付いていない。

「でも、乗ってくる……?」

「間違いなく乗ってくる。相手側もオレ達と似たようなもんだ。危機感を持つている以上、乗せるのは簡単だ」

「問題なら他にもあるわ。エウリュアレーを倒した後に、後ろから……なんて事にならない保証は? 新しいふうまを名乗る二車の人間なら、正当な後継者である小太郎は殺しておきたいでしょう?」

「ああ。だからエウリュアレーを倒し切るよりも前に目的を把握して、調査部隊を抱えて逃げる。こつちの任務はあくまでそれだ。討伐する必要なんぞ何処にもない」

「それで、骸佐にエウリュアレーを取り込まれたら……?」

「それはまずない。骸佐も幹部も馬鹿じゃない。これだけの力を持つていようが制御できなければ意味がない。引き入れるリターンは計り知れないが、それ以上にリスクが大きすぎる。ようやく足場が出来始めた組織で、奴に首輪をし続けるのは不可能だ」

初めに自斎が、次に凜花がそれぞれの疑問と不安を口にした。

小太郎の口にした提案は全て偽りのないものだ。

エウリュアレーに関しても、骸佐は勿論の事、この先に待ち受けているのが確定している二人であれば、同様の判断を下すと確信している。

意見を否定されれば誰とて良い気はしない。だが、否定せねばならぬ事柄はどうしようもなく存在する。

故に出来るだけ穏当な口調で、そして静かに相手の意見に反論して

いく。気をつけるのは感情を高ぶらせるような発言を控え、この場における最善がそれだとすんなり認めさせる事。

幼い頃から対魔忍内部の下らない権力争いに巻き込まれてきた彼には、まだ年若い乙女達を納得させる事など造作もない。

(……………ドキドキ)

「分かった。私は賛成するわ」

「……………私も」

「獅子神はどうだ？」

「え？ ええつと……………私も、それで、いいわ」

「よし、決まりだな」

(シャツツオラア!! どんなもんじゃいッ!!)

まずいの一番に凜花が、僅かに間をおいてきららが首を縦に振った。

凜花にせよ、きららにせよ、心から納得したわけではないが、最善であるとは認めたようだ。

これまでエウリュアレーが見せた魔術。ひと目では判別できない幻像に、空間転移。どちらも驚異である。才能に溢れ、成功ばかりを繰り返してきた彼女達でも二の足を踏まざるを得ない。

最後まで賛成の言葉を口にしなかった自斎にも小太郎は確認を取る。

三人の意見が出揃い、自分の意見は流されると思っていたのだろう。彼女は僅かばかりに驚いたような素振りを見せる。

無論、この流れは小太郎が作ったものだ。自斎がどんな意見を口にしようが最終的な結論を変えるつもりはないが、それはそれとして尊重の姿勢は見せなければならぬ。

一人だけ意見が通らなければ、通らなかつた人間には不満が貯まる。例え、口にするだけの意見を持っていなかつたとしても。其処に、あくまでもオレはお前の意見も尊重する、という姿勢を見せる事で少しでも不満を解消してやるのである。

完璧でなかったとしても、ほぼ自分の理想通りの位置に着地し、涼しい顔をしながらもドキドキしていた小太郎は心の中で渾身のガッツポーズを決める。

「よし、オレが先行する。交渉が決裂したら戦闘開始だ。相手方の手の内は分かっているから安全に勝てる。全員、生きて帰るぞ」

「了解」

「……………っ、分かったわよ」

（よし！ よおし！ とつてもダンサブル！ そのまま三人ともオレの掌で踊り狂っててくれ!!）

神妙な顔で頷いた凜花と自斎、無然とした表情ながらも頷かざるきらら。

何にせよ、小太郎の思惑に沿う形ではあった————— 少なくとも、この時点までは。

思い返してみたい。ヨミハラでの波乱を。

おおよそ彼の思惑通りに進んだ展開ではあったが、幾度となく想定外に見舞われた。淫魔王の陰謀、魔界の踊り子との偶発的な接触、帰ってきた弾正とのニアミス。

これだけ交通事故地味な想定外に見舞われながら大戦果を上げた事は大したものであるが——— これまでを見れば分かるように彼はそういう運命にあるということ。ならば、この先もそのような展開が待ち受けていないわけがないのである。

爆弾レイプ！ 起爆剤と化した先達！

境界線に脚を踏み入れると、五感に飛び込んでくる情報が切り替わる。

寸毫の違和感すらない。まるで映画やドラマの場面転換が現実起こるような唐突さ。それはそのままエウリユアレーの技量の高さを示している。

地下鉄のトンネルから切り替わった先は、人の手によらない自然に生み出されたと思しき洞窟だった。

相変わらず外からの光はないが、ヒカリゴケの一種が群生しているらしく、人間の視界でも移動に問題はなく、遥かに優れた五感を誇る対魔忍であれば遠くまで見通せた。

じつとりとした肌に張り付くような湿度の高い空気。それに混じって甘い血の香りが鼻腔を攪り、戦いの音色が耳朶を打つ。

小太郎は一度だけ目を配らせると、その意図を察したのか三人は無言で頷き、そのまま進み始める。

一步踏み出す度に怒号と咆哮、響く金属の音が強くなる。さながら誘蛾灯のように、独立遊撃部隊を誘っているようだ。

「ソオラアツ——！」

「——」

銀の二閃が奔る。

屈強な大男が突き出した槍は、炎に巻かれた獣を口腔から肛門までを一切の滞りなく貫く。

一見細身に見える男の繰り出した居合いは、石の如き肌を持つ魔獣を頭頂から股下までを問題なく両断する。

鬼火とガーゴイル。

前者は魔界の瘴気によってアンデット化した動物の魂と言われており、後者は石像に化ける人工生命体と言われている。

知能も知性も低いが食欲は旺盛。一体一体の力は弱くとも、群れとなれば驚異と化す。魔術師共にしてみれば、使い魔として扱うのになれほど適した存在は他にはおらず、エウリユアレーにとつても例外はないようだ。

しかし、そんな思惑も何するものぞ。二人の男は呼吸を乱すことなく、魔女の仕掛けた削りを退けていた。

「おやおや、これは宗家のお坊ちゃん。久方ぶりだと言うのに、実に奇遇ですなあ。こんな所で出会うなぞ」

「全くな。運がいいのか悪いのか、よく分からん」

「それは同感」

部隊の接近に気付いていたのか、視線よりも先に再開の挨拶を寄越す屈強な男——土橋 権左。

狂気的な笑みを浮かべながら鬼火を刺し貫いた槍を片手で振り、まだ残っている死体を地面へと叩き付ける。元々、魔界の瘴気によって変化した鬼火は、その後死体も残さずに消え去った。

立場上、骸佐にとつては邪魔者となる小太郎を前にしても、即座に襲い掛かってくる真似はしない。

どれだけ本性が戦闘に喜びを見出す狂人であろうが、今の彼は骸佐の槍。振り返って見せた狂笑に反して、その瞳には冷徹かつ強靱な理性の光が宿っている。まるで小太郎達を値踏みしているかのようだ。

対する小太郎は、心からの本音を口にする。

二車の男性幹部の中では権左は、まだ話が分かる方だ。紛うことなき戦闘狂であるが、自らの役割と立場を誰よりも重んじている。本性を発露させるのは発露させてもいい瞬間だけで、それ以外の場合は意外なほど簡単に矛を収める。

本音に返ってきたのは、同じく本音と苦笑。自らの運命か、それとも若き当主の歩む道に対してなのかは、本人にすら分かっていない。

「ご無沙汰しております、小太郎様。こうして言葉を交わすのは何年振りか……」

「まだオレを様付けで呼ぶか。そっちは反逆者、オレの首は欲しくて堪らないんじゃないか？」

「否定は致しません……ですが、此方は未だただの反逆者。現在の宗家当主に対して、礼を欠く訳にはいきませんので」

「律儀なもんだな」

後ろの三人には目もくれず、小太郎のみに恭しい一礼を向けた細身の男——楽 尚之助。

まるで敵意のない穏やかな笑みを浮かべたその表情は、久し振りに目にした弟の目を瞠るような成長を喜んでいるようにも見えた。

尚之助は二車幹部の中でも、殊更に小太郎と深い関係にある。

離れて母親と共に暮らしていた小太郎の下に骸佐を送り届ける役割を担っていた。そう年の離れていない年長であった彼は、四人の幼馴染にとっては兄のような存在でもあったのだ。

それだけではない。弾正の引き起こした反乱時、逸早く小太郎の不在に気付いた二車の先代——二車 又佐は、幼い次期当主の思惑全てを看破した上で、尚之助を護衛として差し向けた。恐らくは、その時点で又佐はふうまの敗北を悟っていたのであろう。

五車に向う小太郎に追い付き、アサギと出会うまでの間、尚之助は見事に小太郎を守り抜いた。当主が戦死した上に最後まで抵抗を見せていた二車の家が残ったのは、彼の働きによるものが大きい。

尤も、卓越した能力と揺るぎ無い忠誠心を井河・甲河の長老衆に警戒され、小太郎とは面会禁止。反乱以後は会話すらしていない。

されど、成長の喜びに勝るものもある。

「現在の」と口にしたのは、あくまで己は骸佐の下に付いた、と強調しているも同然。必要とあらば貴方であろうとも……、そんな強い意思を隠していない。

小太郎は彼の複雑な胸中を慮って苦笑を漏らす。

敢えて強調したのは自身に言い聞かせるため。本意と忠誠の間で揺れる苦悩は如何ばかりか。

「前置きはいいか。そっちも困ってるよな？ 手を組まないか？」

「……………権左殿」

「ん？ ああ、尚之助、お前に任せる。こういうのは得意じゃないからな。いちいち確認を取らなくてもいいんだぜ？」

「貴方は二車を取り仕切る執事なので、自覚を持って下さい」「持つていとも。その上で、他の連中に任せた方がいいと判断してらんだよ。適材適所って奴だな」

「全く……………」

とても反逆された者と反逆した者とは思えぬ穏やかな会話の中、何の前置きもなく小太郎は共闘の意思を示してみせる。

出会う前から彼等二人が待ち構えているのは分かっていたからだ。

権左と尚之助は骸佐にとって最強の手札。

経験では比丘尼に、策謀ではカフルに劣るものの、純粋な戦闘能力では間違いなく最強。

倒せるのならばそれでよし。倒せないまでも、この二人であれば確実に生還して情報を持ち帰る。能力が未知数のエウリユアレーに当てるのであれば、この二人以上の適任はいない。小太郎であっても同じ判断を下しただろう。

小太郎は権左に目を向けて語っていたのだが、当の本人は何処吹く風。どうべきなのか判断する気は全く無いようだ。

見かねた尚之助が促すように名を呼んだが、権左はそのまま丸投げしてくる。

戦闘特化の異端の執事は自らの適正を十分に理解しているのであるが、余りにも他人任せの態度には、付き合いの長い尚之助でも呆れを隠しきれなかった。

「手を組む、とおっしゃいましたが——」

「面倒な前置きはなしと言った筈だ。下らない腹の探り合いもな。こつちはエウリュアレーの目的を探ることと囚われていると思われ調査部隊の身柄の確保だ。目的の内容によるが、エウリュアレーはそつちにくれてやってもいい」

「成程、此方の目的と小太郎様の任務内容で衝突することはないですね。ですが、貴方が嘘をついていないとも限らない。易々と首を縦に振る訳にはいきませんかよ？」

露骨な不信と疑いの眼差しを向けてくる尚之助に、小太郎は辟易としながら首を振った。

小太郎の性格についてもよくよく理解している。相手を騙し、誑かし、欺き、殺す手腕に長け、持ち得る戦闘能力以上に油断のならない人物である、と。

ならば警戒は当然。

穏やかな雰囲気崩さずに威圧感が増し、同時に尚之助に全ての判断を任せた権左も同様。

まるで巨大な巖を前にしたかのような。呼吸すら苦しくなる全身へ襲い掛かる重圧に、小太郎は兎も角として後ろの三人の警戒はピークに達しようとしていた。自斎は背の刀を、凜花ときららを拳を握り、臨戦態勢を通り越して今にも襲いかからんばかりだ。

「おい、勘弁してくれ尚之助。腹の探り合いは無駄だ。オレが対等の取引を持ちかけていることも分からんくらいに耄碌してるのか？それともオレが対等の取引で嘘を付くほど耄碌しているように見えるのか？」

背後の爆弾がいつ爆ぜてもおかしくない状態を察した小太郎は、声のトーンを一段落として尚之助へと語り掛ける。

一聴すれば怒りを露わにしているようにも思えるが、事実上の懇願に等しい。自身が信ずるに値しない存在ではあると理解しているが、それ以上に状況を鑑えてくれ、と言外に伝えようとしているのだ。

暫くの間、口元に手を当てて小太郎を見定めていた尚之助であったが、チラリと背後の三人に視線を飛ばし、続いて権左を見る。

(どうやら部下の扱いに難儀されているようですね。権左殿、信じてもいいかと。此処で敵対するメリットも特にありませんし、小太郎様の知識と経験は我々に有益に働きますので)

(さつきも言ったが、お前の判断なら異義は挟まんぜ。つーか、天音や災禍と一緒に任せられるなら兎も角、よう分からん小娘と一緒にクソみたいな難易度の任務を任されるとか、オレ、可哀想になつてきたわ)(ゴイツ等、言葉にしてないけど何考えてるのか顔に出てるんだよなあ……)

若き当主にして、いずれ戦わねばならない敵の置かれた現実の背景は分からずとも、決して望んだ状況ではない事は察したのか、尚之助も権左も憐れみの視線を向けていた。

敵に向けるには破格の人情に溢れた視線であったのだが、それで現実が変わるわけではなし、小太郎のビキビキと青筋を立てていた。

「いいでしょう。その提案、乗らせて頂きます。我々も、魔女の手管には辟易していた所。渡りに船ではありませんので」

「……随分、都合良く乗ってくるのね」

「信じちやいないつてか？ まあ、当然の警戒だな。何なら、オレ達が先導しようか。オレ達がおかしな素振りを見せれば後ろから刺せばいい」

「確か、『霜の鬼神』のご息女ですか。互いに置かれた状況を鑑みれば、共闘はそれこそ当然なのでは？ 魔女の手管は力尽くでどうこう出来るものではありませんよ。これを打ち破るには力や単純な強さよりも寧ろ知識と経験でしょう」

「……こいつに、そんなの」

「ありますよ。でなければ共闘など持ち掛ける筈がありません。既に状況を打破する方法を考え、最適の方法を選んでるまでのこと。そ

ういう方ですよ、彼は。私は貴女の個人的な判断よりも、小太郎様を信ずるまでです。貴女により良い方法があるのであれば、お聞かせ願いたく」

「……………」

とんとん拍子で進んでいく共闘の関係に口を挟んだのは、やはり男に対する不信感で満ちたきららであつた。

権左と尚之助は露骨な疑いを向けられてなお、不快感すら見せずに当然と言わんばかりに受け入れる。

権左はきららについて知っている情報は殆どない。精々、最近伸びてきた新人と言つた程度の認識である。

だが、持ち前の勘の良さで相手を挑発しない言葉を選択しつつ、相手にとつて有利な条件を突き付ける。自らが先導するということとは、背中を見せるということ。非常に危険な行為だ。況してや、それが敵にも味方にも成り得る相手であれば尚のこと。

その全てを理解した上での提案は、自身と尚之助の実力に対する絶大な自信の現れであり、此処までやるのだから不意打ちも裏切りも勘弁ですぜ、ときららに語りかけながら、小太郎に牽制しているのだ。

尚之助は反乱に際して対魔忍内部の目ぼしい実力者には調べていたらしい。

きららの過去や男嫌いについては知っているようで、慎重に言葉を選んでいいるが、それでいて反論の余地を潰している辺り抜け目がない。

これには不信感を抱いているきららのみならず、自斎や凜花も口を閉じざるを得ない。

実際、彼女達の思い付く方策は手早くエウリユアレーを叩き潰す程度のもので、その下に辿り着くだけの道筋も見えておらず、油断のならない相手であれども戦力として数えられるのなら小太郎の方針を否定すら出来ないのだ。

こうして、恙無く小太郎の思惑通りに進み、三つの爆弾も爆発することなく最良の結果を手繰り寄せ——

「では、——
『手緩いなあ』」

——全く別の所で、全く別の爆弾が起爆した。

何処か状況を楽しんでいるような、或いは喜んでいるような、喜びを孕んだ男の声が洞窟内部に響き渡る。

反響しているが故に、声の主の居所は判然とせず、何者であるのか理解できていない自斎は刀を抜き放ち、凜花ときらは鬨気を滾らせた。

しかし、それ以上に困惑していたのは小太郎だ。彼は声の主が何者であるのか既に理解しており、何処かに潜んでいることも察してはいしたが、これは予想外であった。

(お前等、アイツの手綱、なんで握ってないの???)

(いやあ、ははは、年功序列という奴ですなあ……!)

(申し開きもありませんが、これは流石に……!)

信じられないものを見る表情と目で、古馴染みにして後ろの三人よりも頼りにしている二人を見やる小太郎。

だが、返ってくるのは声の主の勝手な行動に青筋を立ててビキビキしながら引き攣った笑みを浮かべている権左と片手で顔を覆い隠した尚之助の憔悴しきった内心のみ。

『御館様のためを思えば、此処で宗家の若造を打ち取るが最善！ 共闘なぞ片腹痛い……!』

「おい、矢車！ これは執事であるオレと幹部である尚之助の決定だぞ！ いくら同じ幹部とは言え、勝手が過ぎる——!」

『黙れ権左！ 戦うしか能のない貴様と若い尚之助の決定なぞ何の意味を持たぬわ……!』

「矢車殿、貴方という方は……!」

(い、いいいいいい、いや落ち着け！ 落ち着けオレエ……!)

例え、骸佐が最も信を置く権左と尚之助であろうとも、納得も出来なければ従うつもりもないと声は高らかに宣言する。

焦ったのは他でもない小太郎、権左、尚之助の三人である。油断はならぬとは言え、手強い敵と感じているエウリユアレーへ共同して当たれる関係を取り付けたというのに、その矢先にこれだ。

権左など少なくとも己と尚之助に敵意はないと示すために、隠れ潜んでいる声の主の名前まで告げている。どれだけ必死さか伺えよう。

矢車という姓を持つ男は幹部において一人しかいない。

矢車 弥右衛門。八百比丘尼には遠く及ばないものの、先代から仕えている古参である。

本来、二車の幹部間に序列はなく対等である。だが、長く仕えている分だけ発言権も強くなり、新参は相手を立てて引かざるを得なくなる。

権左と尚之助にとってはやり難いことこの上ない相手。権限としては執事である権左が上なのだが、年功序列を盾に独自の行動が目立つ。

先代が存命の時代には忠実であったのだが、突然の代変わりによって若い骸佐が当主となるや、徐々に品性に欠いた性格が馬脚を現し始めた。

骸佐の立場が苦しいことを知りながら、二車からの離反を匂わせて先代の頃から変わらぬ報酬を受け取り、骸佐の決定や意思にも口を挟む。その度に、比丘尼に諫められながらも反省の色を見せない。

有り体に言って、骸佐を舐め腐っている。先代ならば兎も角、若造である骸佐ならば儂の考えを尊重して当然とすら考えていることだろう。

骸佐も骸佐でこんな男はさっさと切ってしまえばいいものを、彼自身身の情の厚さ、先代の時代から仕え続けてくれている事実に対する甘さによって、なあなあで済ませてしまっていた。その爆弾が、今でこの場で爆発したのである。

「ふうんっ——！」

「——上よ！」

権左や尚之助の必死の努力全てを無に帰す一撃が放たれる。

少女達の中で最も早く矢車の強襲を察知した凜花が他の仲間に対して警戒を促したが、一手遅かった。

自齋ときららが迎撃の準備を整えるよりも早く、天井から落下してきた矢車が組んだ両手をハンマーさながらに振り下ろす。狙いは四人の中央。

最早、回避しか取れる選択肢のない四人は、それぞれの後方へと飛び退きると同時に、爆撃にも似た一撃が炸裂した。

舞い上がる粉塵と飛び散る砕けた地面の欠片が、一撃の強力無比さを物語っており、四人が四人とも別々の方向へと回避したために、分断される形となっていた。

これが矢車の思惑だろう。

戦いの火蓋が斬って落とされれば、相手も味方も対応せざるを得ない。

例えば、権左と尚之助の思惑から外れた行為であろうとも、邪魔者である小太郎の首を持ち帰れば許されるとでも考えているのか。

既に最初にあつたエウリユアレーの討伐ないし勧誘という骸佐の命令は忘れ去られており、頭にあるのは目障りな宗家のガキを殺して受け取れるであろう報奨のみ。取らぬ狸の皮算用極まりであった。

「まずは、貴様からじゃ！ 手足をもいで儂の愛妾にしてやろう——！」

「ぐっ、このゲス！ 上等よっ！ 男なんて、やっぱり——！！」

(あ—————っ！！)

—————っっっ！！！！

あ

ふうま 小太郎。第一の爆弾、起爆——！

土煙の中から現れた矢車は弾正反乱の頃から歳を重ねていたが、岩

と表現できる巨軀と筋肉を変わずに保っており、変化しているのは腐った性根を隠そうともしない下卑た笑みのみ。

外見が好みであったのか、矢車真つ先にきららへと迫り、見た目通りの豪腕を振るう。小太郎を真つ先に狙わなかったのは、何時でも殺せるという自信があつたからだろう。

豪腕をバックステップと共に紙一重で躲しながら、きららの男嫌いメーターが完全に振り切れた。

先程までは失敗の余韻によつて殊勝な態度は保っていたが、男の欲望そのものを形にしたような視線と笑みを見ては彼女が黙っているわけもない。

母親から引き継いだ、彼女の誇りそのものと言つても過言ではない冷気を操る能力を発動させ、真つ向から迎え打つ。

その様を目にした小太郎は、心の中で絶叫する。

ようやく見えて希望が、粉々に碎かれようとしているのだ。無理もない。

(い、いや！ まだ、まだワンチャンある！ 此処は矢車の暴走を糾弾して、権左と尚之助と一緒に制圧！ やったぜ共闘関係狂い咲きい！

それでいいな、おい！)

(他に選択肢はなさそうですなあ！)

(御館様の本来の目的とも一致しますし、小太郎様の案に乗らせて頂きます！)

事を構える気など更々ない野郎ども三人は、視線だけで会話をする。

まだ希望が完全に潰えたわけではない。矢車が単身で暴走しただけにし、権左と尚之助と共に鎮圧に当たれば、彼等の顔も立つ。

襲われたきららは信じられるかと怒鳴り散らすのは目に見えているが、矢車から庇うように二人が立ち回れば、矛を収めないまでも戦いにまで発展しまい。後は小太郎が上手く言いくるめればいいだけの話だ。

ところで、パンドラの箱という神話をご存知だろうか。

パンドラという女が開けるなど言われた箱を好奇心から開け放ち、箱に収められていたあらゆる災厄が解き放たれてしまい、箱の中に最後に残っていたのは希望だったという。

この箱に希望が納められていた理由は諸説あるが、その中で現状に最も合うであろう解釈は、希望こそがより大きい絶望を引き寄せるための足掻きを誘発し、より大きい破滅を呼び込むから、ではないだろうか。

(きらちゃんなら、矢車にも簡単には負けない。なら、私は――)

「小太郎、下がっていて! 権左と尚之助の相手は私と自斎ちゃんが

「?!?!?!」

「?!?!?!」

(?!?!?! いや、なんで凜花が指示出してんの?? オレは隊長……隊長

だったよね???)

ふうま 小太郎。第二の爆弾、起動――!

凜花にしてみれば当然の行動であった。

彼女には過去の負い目から小太郎を守るという並々ならぬ決意があり、権左と尚之助の内心が分かっていない。

今は傍観に徹している二人が、状況の変化によってこれ幸いとばかりに小太郎の首を狙うとも限らない。

彼女の中で二車家の誰であれ、今すぐにも小太郎には死んで貰いたいと思っ込んでいる。仮想敵などではなく敵そのもの。その驚異を排除せずにはいられない。

小太郎が止めるまもなく、地面を蹴って駆け出していた。

(乱戦になったら私の忍法は危険過ぎる……でも、一対一なら……!)

「ふうまは隠れていて! あの剣士は私が……!」

「えっ? え……………!」

「?!?!?!」

(ぜ、絶望してる場合じゃねえ！ 権左と尚之助なら凜花と獅子神でも殺さずに制圧できる！ なら、先に鬼崎と矢車の方を何とかしねえと！ 矢車は何しでかすか分からん！ そ、その後は、その後は…… 権左と尚之助いない状態でエウリユアレーなんとか済んの？ このメンバーで？ 無理ゲーが過ぎない???)

おら、苦勞人が大怪我すつぞ。パイセン、はよチヨロ
墮ちせいや。

「あつちか——！」

それぞれの戦闘は、各々の思惑から距離が生み出されていく。

矢車は凜花が受け継いだ忍法・煙遁の術の性質を重々承知しており、一対一の戦闘に水を指されては堪らないと考えているのだろう。

並の対魔忍と比較すら馬鹿馬鹿しい膂力と速力で繰り出されるきららの攻撃を躲しながら、徐々に権左と相對する凜花、尚之助と鏢迫合う自齋からも離れていく。

そして、味方である自齋もまた権左と激しく打ち合う凜花から距離を取る。

自身の實力に対する絶大な自信、ではなく、制御の効かない力に対する恐れから、他者を巻き込まぬためにこそ。

それら全てが相俟って、独立遊撃部隊を更なる危機的状況へと陥れているのは皮肉という他ない。

「おい、鬼崎！ そいつは——」

「うるさい！ 男の命令なんて聞くもんですかつ!!」

「ぐはははっ！ 若い若い！ 所詮は小娘、彼我の實力差も分からぬか！ ふうま宗家を名乗っても所詮は小僧っ！ 下の手綱さえ握っておれぬとは——！」

「なんですつてえ……！」

（握ってた手綱をぶった斬られたんだよ、こっちはあ!! テメエのせいだろうがよおおおツ!!）

巨体からは想像もできない俊敏さで、きららの猛攻を躲しながら矢車は若い二人を嘲笑う。

それがまたきららの怒りのボルテージを底上げして頭に、小太郎の内心を大噴火させているのだが、それも奴の狙いの内だろう。

僅かな攻防ながら、矢車は自らの戦力ときららの戦闘能力の比較は終えているはずだ。

それでもなお、味方から距離を離しているのは、独力だけでも勝てる算段が既に付いているということに他ならない。

きららも決して弱いわけではない。

「霜の鬼神」と呼ばれた鬼族は神話級。ノマドの首魁であるブラックや大幹部のイングリッド、カオスアリーナを取り仕切る蛇神・スネークレディ、あらゆる生命の存在を許さぬ溶岩地帯に居を構える灼熱の化身・アスタロトと並び立つ存在であり、その娘が弱いわけではない。

身体能力は発展途上ながらも初老に差し掛かった矢車に及ぶべくもなく、母から受け継いだ冷気を操る異能も強力無比。単純な強さだけで言えば、きららの方が格上だ。一度でも攻撃が直撃すれば、一瞬で勝負は決するだろう戦力差。

才能でも能力でも劣った者に勝ち目は無い。一対一の戦いにおいて、上には上がいるという根本原理も何の意味もなく、純然たる実力差が勝負を決する。

もし、それを覆す要素があるとなれば、智慧と経験だろう。そして、矢車の哄笑は後者を用いている故のもの。

そうこうしている間にも冷気によつて作り出したクローは、煌めきながら矢車の身体へと肉薄していく。

腕が振るわれる事に少しずつ、だが確実に矢車の動きを見極め、修正して、当然の結末へと向けてひた走る。

その瞬間は、小太郎が矢車の狙いを口にするよりも速く訪れた。

「とつたっ！ 喰らえっ!!」

「——っ?!」

それまで見せていたものよりも更に鋭い踏み込み。

肉体に刻み込んだ武錬が考えるよりも速く、敵を倒すために普段よりも半歩分だけ深く、きららの身体を前へと進ませた。

身体能力に劣る矢車は動きを見極めながら回避を重ねていたが、その疾風の如き踏み込みに面を喰らい、目を見開く。

最早、避けようがない。年老いて鈍くなった反射神経ではどうあっても対応できない。勝敗は此処に決した。始めから定められたように氷の爪撃は老忍の腹を貫き――

「かかりおつたな、馬鹿め」

「――え？」

「それは人形だ！ 避けろっ！」

矢車の顔が醜く歪む。苦痛に耐えてのものではなく、品性の欠片もない実に卑しい笑みが浮かび上がる。

何故か血を吐かない。いつものような肉を貫き、骨の碎ける感覚がない。何よりも、氷の爪で貫いた筈の腹が碎けるでも避けるでもなく、泥のように崩れていく。

勝ちを確信していたきからは、見えていた未来とは異なる光景に呆然と眼の前の現象と眺めるばかりだった。

小太郎が駆け寄りながら放った叫びすらも頭に届いていなかった。無論、波に浚われる砂の城の如く崩れていく矢車の背後に地面から現れた本物の矢車の姿など、気付きようがない。勝敗は既に決しているのだ。

「にんっ――かはっ?!」

泥と崩れる人形ごと、矢車は丸太のように太く鍛えられた豪腕を振るう。

術理などない力任せの一振り。だが、だからこそ全力の一撃であ

り、混じりつ気のないの暴力でもある。

何が起こっているのか、矢車が何をしたのか、自分が嵌められたことすら気付いていないきららの脇腹に、本来であれば当たる筈のない一撃が叩き込まれた。

モデル体型の身体が、砲弾のような勢いで宙を滑る。

身体の内側から響いた肉の潰れる音を聞き、続いて背中から聞こえた鈍く重い音に、きららはようやく自分が吹き飛ばされた挙句、壁に叩きつけられたと知る。

「ぐっ……はあっ……がっ……」

呼吸が出来ない。痛みできららの視界がぐちゃぐちゃに歪んでいく。

必死の思いで息をしようとした瞬間に、口の中一杯に苦味が広がって吐き出していった。指先から脚先まで、他人の身体になってしまったかのように動かない。

吐き出された真っ赤な血は、内臓に傷を負っている証左。

この程度で済んでいるだけでも彼女がどれほど強靱な肉体を持っているかが分かる。並の対魔忍であれば、背骨を完全に粉碎されていただろう。

「げひひー！ さあ、これで終いじゃあ——！」

だが、悲しいかな。その強靱な肉体も、今や何の意味もない。

動けないまでも顔を上げたきららに向けて、矢車が握り込んだ右拳を大きく振り上げる。数瞬も立たぬ内に、再び目を背けたくなる暴力が振るわれる。

（やっぱり、男なんて……！）

ほんの僅かな時の中、きららの頭の中を埋め尽くしていたのは相も

精一杯の矜持から悲鳴を上げようとする口を閉ざし、恐怖から力一杯に目を瞑る。

「ごき、ぶちぐち、ぎい、ぐちや、ぼきん——暗闇の中で、肉と骨が壊滅する音を聞いた。」

「……………」

けれど不思議なことに、痛みと衝撃は何時まで立っても訪れず、意識を失いさえしなかった。

始めは受けたダメージで感覚がおかしくなっているのかと思っただが、どうやら違う痛覚は生きており、先の攻撃の痛みがまだ続いている。

なら、なんで？

その疑問を解消しようと瞼を開いた先に広がっていたのは——

「やってくれるじゃないか……………」

「ほっ！ 若様にと——おおっ?!」

「チツ、仕留め損ねた」

——嫌っていた男の背中だった。

矢車の振り下ろした拳ときららの間に身体を滑り込ませた上で、左腕を盾にして防いだのだろう。

身の毛もよだつような音は彼女ではなく、小太郎の身体から響いたものだったのである。

あからさまな嘲りを浮かべた矢車であったが、小太郎の右手に握られたいた杖による刺突が間を置かず喉へと放たれると驚きの声と共に大きく飛び退る。

当然の驚愕だ。何せ、攻撃を受けた左腕は拳を離れた瞬間に力なく垂れ下がり、厚いコートの上からでも分かる程に拉げている。関節とは異なる箇所でも最低でも二ヶ所、あり得ざる方向へとねじ曲がってい

る。肩から先は勿論のこと、左半身にまで破壊は及んでいると見て間違いない。

そんな状態から寸毫の間も置かず、致命傷を与える正確な一撃を放てるなど、全うな想像力では不可能だ。

「ふ、ふうま……」

何で。どうして。今まで、あんなに酷いことを言ってきたのに。

どれだけ抑えても抑えても抑えきれない嫌悪感から本来は関係のない彼に八つ当たりをしてきた自覚はあった。客観視していた自分の行動と言動の全てを鑑みても、決して庇ってくれるなどとは思えない。

良くても見殺し。性格が悪ければ腹を抱えて笑っている所。だから、新たに生まれた疑問は、父が母を殺したことに對する疑問よりも或る意味で遙かに強く。

「——待機命令ツ!!」

「……………っ!」

「そのまま回復に努めろ。お前に死なれちゃ困るんでな」

反射的に起き上がろうとしたきららであったが、洞窟全体を揺るがすような怒号にビクリと肩を震わせることしか出来なかった。

しかし、次に紡いだ言葉に怒りはなく、冷徹な響きがあるばかりで幾許の感情も込められておらず、小太郎は視線を向けすらしない。

どの道、きららは負ったダメージから易々とは動けず、命令に従うしかない。

あつたのは悔しさだ。

どう考えても小太郎では矢車には勝てない。隊長としての功績は聞き及んでいるが、一人の対魔忍としての噂はとんと耳にしない。その上、立てているのが不思議なほどの重傷。

間違いなく殺される。骸佐の立ち上げた新生ふうま忍軍が如何な

る目的を持つているかきららは知らないが、少なくとも凜花から耳にした話が事実であるのなら、小太郎を生かしておく理由が矢車には存在しないからだ。

だから、男に助けられた自分がではなく、助けられたのを見ているしかない自分が悔して情けない。

（左腕は駄目だなこりゃ、まるで動かん。内蔵も折れた肋骨で傷付いた。保って後数時間か。それだけあれば十分だな）

きららに視線を向けずにいた小太郎は至って冷静であつた。痛いと感じているように見えないほどだ。

喉元まで競り上がってきた血液を飲み下し、自らの負った傷を把握する。同時に、無事なままの右半身の調子確かめるように二度三度と杖を握った腕を振るう。

尋常ではない——いや、完全に人に許された範囲を越えた痛みへの耐性と精神力であつた。尤も、彼にとっては不思議でも何でもない。

今以上に酷い傷など、かつて母が存命の頃には当たり前。体の一部が千切れ飛ぶなど日常茶飯事、酷い時など上半身と下半身が泣き別れたことすらある。

課せられた訓練で、それこそ何度となく死んだ。その度に、母の御典医——何処からか連れてきた腕利きの魔科医によって蘇生と同時に治療を受け、出来るようになるまで続く無限地獄。

それだけの傷を負い続ければ、嫌でも痛みへの耐性を獲得もしよう。気が付けば痛みを自覚しても、平時と変わらない動きが出来るようになっていた。

過酷などという言葉では到底言い表せない訓練を続けてなおも正気を保てたのは母の愛情故か、それとも彼の精神性故だったのか定かではない。兎も角、今この状況においては有効に働いているのは事実。

「げひひ、なんと軽率な。一門の長たるものが、木っ端を助けて怪我を負うとは。やはり、目抜けは目抜けですなあ」

「生憎と一門の人間じゃないんでな。借り物の戦力だ。最低限、生かして帰さなくちゃならんのでな」

「くくつ、何とも哀れな。どれだけ取りつくろ——」

「——しかし、まあ」

距離を取った矢車は、聞けばもつともらしい科白を吐いていた。

だが、根底にあるのは嘲りと侮りである。小太郎にせよ、骸佐にせよ、この男はふうまの当主などとは認めてはいない。もつと言え、先代である弾正や又佐もまた同様であった。

それでも平身低頭していたのは、自身では決して敵わない相手だったからこそ。強さは勿論のこと、人脈も、忍法すらも及ばない。

恐れから忠誠は見せたが、決して本心ではなかった。本当にあつたのは歪んだ自尊心と欲望だけ。自分の方が優れているが、立場が、人数が、時が。言い訳を重ねて忠誠を示すことで欲望を満たしてきた。

もし、矢車の本心を聞けば、権左と尚之助は何を思うか。

もし、矢車の本心を聞けば、災禍と天音は何を思うか。

前者は、そんなことは知っていると思え果てただろう。又佐がこの世を去り、骸佐へと代替わりをした瞬間から、若さと経験不足を侮つて地金が露出していただけから。

後者は、怒りも嫌悪も抱かずに相手にしまい。品性とは見せかけの忠誠による報酬では受け取れず、偽りの仮面で隠しきれぬものではない。

無論、小太郎にとつても似たようなもの。骸佐とて同様だ。故に、矢車とまともに言葉を交わすつもりは毛頭なく、彼の言葉を遮って失笑する。

「攻撃が来ないな。相手が死んでもいないのに、気楽なもんだ。歳で耄碌してるのか？」

杖を引きずるようにきららから距離を置いて、矢車と向かい合う。彼女を優先しなかったのは、鬼族のハーフで治癒能力が高いと知っていた故であり、矢車も彼女を人質に使わない確信があったからだ。どう考えても、今この状況で人質などという面倒な真似は取らない。歪な自己愛と見当違いな自信に満ちた者が、縊り殺せると踏んでいる相手を前にすれば、直接自分の手で事を済ませる。そして、矢車にとっても許せぬ、小馬鹿にした視線を向けて挑発してやる。

二車の内部において、矢車は幹部であるが、他の幹部からの扱いはどうであったか。

尚之助はその礼儀正しきから常に尊重してきたであろうが、他の者は違う。

偽りの忠義を見抜く者、腐った性根を垣間見る者、心底小馬鹿にしているにも拘らず二車にしがみつく無様さを笑う者。大抵はそんなものだ。自己の醜さに対する自覚のない矢車にとっては鬱屈した感情が溜まって仕方がない。

「この目抜けがあああ!! 殺す、殺してやるぞ!」

「ああ、そうかい。ならオレは真正面から正々堂々不意を討つてご覧に入れようか」

茹で蛸のように顔を赤く染め、赫怒を露わにする矢車を前にして、小太郎はもはや失笑すら消して杖を片手正眼に構える。

その面白くもなさそうな様子は様子こそ全く異なっているが、きららに見せた矢車の卑しい笑みと質は似ている。まるで、もう既に勝っていると言葉にせず語っているかのようだった。

戦いとはそれまで何を積み重ねてきたかの結果に過ぎない。つまりは、備えに備えてきた苦労人の本領発揮することですよ

(奴の忍法は無形秘擬。しかし、昔に比べて数が少なくなってるじゃないか。年だな)

小太郎は怒りを露わにした矢車の生み出した人形に周囲を囲まれ、絶体絶命の状況を前にして尚も冷静であった。

矢車の操る忍法の名は「無形秘擬」。

周囲に存在する水以外の無機物と一体化し、更には自身と瓜二つの人形を造形して操れる。権左の「捲土往来」によく似ている。

差異は「捲土往来」が土中や地中に特化しているのに対し、「無形秘擬」は人工物であろうとも問題なく潜り込め、素早く移動が出来る利点。更に、前者は土中からの攻撃も自在であるが、後者は一体化している間は移動しか出来ない欠点がある。

共に一長一短。権左は技術と直感で、矢車は経験によって各々の欠点を補っているが、小太郎が抱いたのは明確な失望だった。

かつて見た彼の忍法は人形を20体以上も問題なく生み出せたというのに、今の数は11体。

如何な対魔忍、如何な忍法と言えども、年齢を重ねれば身体能力と同様に劣化は避けられない。生み出せる人形の数が徐々に減っていくのも自明の理。

小太郎が失望したのは劣化ではなく、劣化してもなお馬鹿の一つ覚えのように使い方を変えていない点であった。

(それで十分と考えているのか、本当に他の使い方を思いつかなかつ

たのか。どちらでも構わんか、もう終わっている)

「死ね、若造。死んで儂に詫びるがいい」

「あー？ お前に何かしたっけか？ 他のふうま一門やら被害者には詫びなきやならんかもしれんが、お前に其処まで何かした覚えはないんだけど？」

「減らず口を——！」

既に地面と一体化したらしく、矢車の声は何処から響いているのか判然としない。

鬱屈した気持ちを吐き出すような、全てはお前が悪いと言いたげな怨嗟の声であったが、小太郎はまともに取り合わない。

彼が軽んじられるのも、今この状況を招いたのも全ては矢車自身の責任だ。自らの意思で変わろうともせず、周囲が悪いと自己を正統化し続けた結果である。当主である小太郎であろうとも、変えられない現実である以上、付き合うだけ馬鹿を見る。相手にするつもりは始めからなかった。

年が十以上も離れた小僧に小馬鹿にされ、矢車の殺意は簡単に頂点を越え、11体の同じ顔、同じ背格好の人形が同時に襲い掛かる。

(……っ?! 仕込み杖……蛇腹剣の類か！)

一体化した状態で恨みがましい視線を送っていた矢車は、小太郎が杖で虚空を薙ぐと同時に変形した杖に目を奪われた。

ワイヤーで繋がれながら等間隔に分裂し、鞭のように変化する機構。人界の技術では、分割機構を備えた上で武器自体の強度を維持するのは不可能である以上、魔界の金属か技術を使用していると見るべきだ。

それでも矢車に警戒心を抱かせるまでには至らない。

物珍しい武器を持っていようとも、使い手の技量は変わらない。目抜けという評価と自己に対する絶大な自信が思考の邪魔をしていた。

(それだ、それでいい)

人形からは感じられない矢車自身の視線から心理状況を鋭敏に感じ取りながら、鞭のようにしなる刀身を縦横に振るう。

銀光が煌めき、恐るべき切れ味が迫りくる人形に発揮された。

横一文字の軌道がうねり狂って刺突へと変化し、縦の一閃は鋒が急速に降下した後に上昇して顎下から顔面を真つ二つにしてのける。まるで悶えのたうつ毒蛇のような軌跡。

元より仕込杖は一对多を想定して考案・作成されたものなのか、1体の人形による猛攻すら寄せ付けない。

小太郎がこれを持ち込んだのは、魔女や魔術師の使役する使い魔をより安全に、より確実に、より効率的に始末するためであったのだが、その特性が人形を操る矢車の数を生かした戦いに効果を発揮していた。

矢車の姿形を模した人形の攻撃範囲は、その巨軀を支える手足から剣の間合いに匹敵する。しかし、小太郎の操る仕込み杖の間合いは優にその五倍はあり、安全圏からの攻撃を可能としていた。これでは生半な数では焼け石に水だ。

何よりも、小太郎は無形秘擬の特性を十分過ぎるほどに理解している。

人形の強度はそれほどではなく、矢車の鍛え上げられた鋼のような肉体に比べれば、遥かに劣る。達人とは言い難い技量程度でも、十分に両断できる程度のものに過ぎない。

また一定以上のダメージ——特に頭部や胴体へのダメージは人体と同様に効果が高い——を与えると強制的に元の無機物へと戻ってしまう上、手足を切断されれば動かしようがないために解除してから新たに作り直す他はない。

四方八方から襲い掛かる人形の動きを見極め、胴を両断できれば両断し、不可能と判断すれば手足を斬り落とす。まるで元は味方であった矢車との戦闘を想定していたような動き。

頼りにはしても信じはしない彼にしてみれば当然の事。才能と能

力に劣る己に出来るのは恐れ備えることだけと断じ、例え心底からの忠誠を誓う災禍や天音ですらも裏切ることを想定して戦術を既に組み上げている。

元々、矢車の忠誠心には疑問しか抱いておらず、こうして明確に敵に回った以上はこれまでの備えを吐き出す事に一切の躊躇はない。

(クク——だが、人形ならばいくらでも増やせる。そうしている間に近づけば……！)

斬り裂かれる度に人形は泥のように溶け、再び新たな人形を作り出す。

所詮、人形は人形。どれだけ壊されようが、斬り捨てられようが対魔粒子が続く限りは作り出せる。矢車に焦りはない。

そもそも、人形による攻撃で敵を倒せるなどとは思っていない。人形のそれほどの攻撃性能は有していない。あくまでも敵の目を欺くための布石であり、本命は自身による奇襲。それが彼の必勝パターンだった。

無機物と一体化した彼の存在は文字通りの秘。

敵は人形に嫌でも意識を割り裂かねばならず、高い集中を發揮しているが、矢車自体に対する意識は隙間だらけの伽藍堂。

移動には音も気配も生じない。背後から近づくも、頭上から躍り出るも、地中から襲い掛かるも自由自在。後は、鍛え上げた自慢の豪腕で一撃の下に勝負を決する。

たったそれだけ。それだけの簡単な行為である筈であった。少なくともきさらにはそれが通用した。

「……はあ~~~~~」

(………っ、目がっ)

地面を泳ぐように移動していた矢車であったが、次の瞬間に全身を凍ませるほどの悪寒と羞恥を自覚した。

“無形秘擬”は無機物と一体化しようとも、無機物の外観に一切の変化は生じない。

それは無形秘擬の名の通り、無機物と一体化するというよりも寧ろ、自分自身が無形となつて無機物の隙間に潜り込むような忍法であるからだろう。

——にも拘らず、小太郎と目が合った。

まるでガラス玉のような一切の感情も込められていない瞳。絶え間なく動き、襲い来る人形の数々を捉えていた筈のそれが、確かに地面と一体化した矢車を捕らえていた。

どれだけ音を消そうが気配を消そうが、存在まで消しているわけじゃない。矢車の戦慄に、小太郎ならばあつけらかんとそう答えただろう。

彼の感覚器官は鋭敏だ。それこそ、何らかの忍法を使っているのではないかと疑われるレベルにまで発達している。

身体能力に劣る彼は、自然と戦い方も相手の挙動から動きを予測する後手に回らざるを得ない。故に、それを見極めるための感覚器官は自然と育つ。更には、あらゆる害意と殺意に備える疑り深さが、本来人間に与えられたはずの領域を大きく踏み外させるほどに発達させた。

カメラ越しの視線であろうとも、凜子の視覚跳躍の術であろうとも、彼自身も説明できない理由で必ず察知する。ある種、彼もまた対魔忍とは違う理由で、人類の可能性を示す存在と言えよう。

何より恐ろしいのは、それだけの情報量を得られる感覚器官を有しているながら、同時に尋常ではない痛みに対する耐性も獲得している事か。

それだけ鋭敏であれば、痛みという生存本能の発露もまた尋常ならざるものとなっている。彼は痛みに対して鈍くなっているのではなく、どれほどの痛みにも平然と耐えられるだけの覚悟をしているだけ。人が誰かを守るために命を投げ出す覚悟を、彼は呼吸をするように行っている。

そして、覚悟とは本能すら凌駕する魂の事なれば、呆れ果てたよう

な溜め息も領ける。

研鑽が足りない。智慧が足りない。代わり映えもしない古きに拘り、目を瞠るような新しきがまるでない。成長が感じられず、あるものは劣化だけ。

そんな失望が籠もった吐息に、若造に呆れられた羞恥から矢車の身体に煮え滾る憎悪が溢れ出す。

(ならば、こうするまで——！)

(人形共の動きが変わったな。遠間からの攻撃も織り込んできたか。そーそー、そういうもんだろ、戦いは——どう足掻こうが結果は変わらん訳だがな)

生じた先から真つ先に突撃してくるばかりだった人形の動きが変わる。

小太郎の振るう仕込み杖の一撃を躲し、或いは受け止めるような拳動を見せ始めた。

間合いの広い武器には宿命として、必ず戻しの隙が生じる。近接武器は常に勢いを必要とし、それがなければただの棒きれと大差はない。

槍ならば突いた後に、薙刀であれば薙いだ後に、鞭であれば振り抜いた後に。

その間合いの広さ故に、次の攻撃に移るにはどうしようもなく僅かな隙と時間を要する。振るう側はこの時間を極限するために工夫を凝らし、振るわれる側はその隙きを如何にして突くかに拘泥する。

そして同時に、数の理を活かし始めていた。

人形はどれだけ破壊されようと問題ない。ならば、人形を使って武器を掴んでしまえばいいだけの話。

振るう武器を封じてしまえばただの小僧。どれだけ隠れた場所を探り当てられようが、半身が使い物にならない状態では、好き放題に出来るのだから。

徐々にではあるが、人形と小太郎の距離が縮まっていく。

仕込み杖を掴まれることを警戒し、更には戻しの隙を生じさせぬように動かねばならず、手数は少なくなれば必然であった。

自然、矢車の人形による手数は増える。

人形による突撃だけに留まらず、石塊を砲弾のような勢いで投げさせる投擲までも混ぜ、対象を確実に追い詰めていく。

まるで今にも千切れそうな綱を全力疾走している姿を見ているかのようなのだ。

何を理由に其処までの窮地に追い詰められなければならないのか。唯一、救いがあるとすれば、全力疾走している本人に追い詰められている自覚がない事か。

矢車の考えと行動は何処までも正しい。

ただ、彼の予想外があるとすれば、小太郎も十分に自身の危機を認識した上で立ち回っている事であり――

『super Freeze』――っ!!』

――倒した筈の未熟な小娘の回復が、余りにも早すぎたことか。

今まさに踊りかかった人形の三体が、横合いから突如として襲い掛かった轟音に飲み込まれる。

咄嗟に右手で顔を庇った小太郎が次に目にしたものは、天井にまで届きそうなほど伸びた巨大な氷柱と、その中に飲み込まれて身動きの取れない人形ども。

小太郎だけでなく、矢車も地面と一体化したまま氷柱の伸びてきた先を見る。其処には右脚を大きく踏み出したきららの姿があった。

右足の先からは冷気が溢れ出して地面に霜が下りて、彼女の受け継いだ能力を遺憾なく発揮したと伺える。

(馬鹿な、確かに致命傷だったぞ……!)

(早いな。流石に神話級の鬼族の血を引いているだけはある)

同時に攻撃の正体を目にした二人であったが、抱いた感想は全くの別物。

それも当然か。矢車はきららが何者かを知らず、小太郎はきららの起源ルーツを知っているだけの差でしかない。

神話級と呼ばれる魔族は、生まれながらに驚異的な回復力を有している。不死の王と呼ばれるブラック、屍の王と呼ばれるレイスロードのように不死を謳う怪物は勿論の事、不死性自体に目を向けられない者でもすら同様。

横たわる種族差はそこかしこに現れる。きららも骨折や内臓系への損傷であっても、本人の意志に関係なく僅かな時間で回復するのだから。

二人の視線を浴びたきららは、意を決したように表情を固めて地を蹴った。

ただの一飛びで十数メートルもの距離を無にする跳躍力で小太郎の前に降り立ち、ブルンと大きすぎる双乳を揺らしながら姿の見えない矢車から庇うように立ち塞がる。

「……………ありがと、お陰で動けるようになったから君は休んでて」「ほう、確かに内蔵までぐちゃぐちゃにしてやった筈だが、大したものだな！」

それが、口に出来た精一杯の言葉だったのだろう。

今も、きららの中では複雑な感情が渦巻いている。父との確執、それに端を発する男そのものへの不信感。それを補って余りある小太郎への感謝と信頼。

ある種、感動的な場面だ。

きららの過去とこれまでの男に対する態度を知り、彼女の将来を憂いた者であれば、笑みを浮かべたに違いない。

確かに都合のいい話である。考えを改め始めたとはいえ、これまでの所業が消えてなくなる訳ではない。

それら全てを理解した上で、一人の人間として立ち向かい、受け止

めようとしているのだ。ようやくトラウマを乗り越える切欠に手を掛けた少女に対して、祝福以外の言葉をかけられまい。

「——いや、お前、自分がただけ都合の良いこと言ってるか理解してる???」

「そ、それは……わ、分かってる。分かっているから。兎に角、君は休んでて……!」

「其処は千歩譲ってそれでいいとしても、だ。どうやって矢車を倒すつもりなんだ? お前、そんなに感知に長けてないよな???」

「そ……そーれーは……ま、周り全部を氷漬けにする、とか?」

「オレも巻き込まれるんですけどそれは???」

「う……っ、うう……!」

「はあ~~~~~」

感動的だな、だが無意味だ。と言わんばかりの小太郎の科白であった。

極めて論理的に言葉の槍で、きららの言動と行動を突いていくと途端に涙目になる鬼娘。

実際、殆ど勢い任せの行動だったのだろう。これまでの彼女の行動を鑑みれば、十分に感動的だが、相変わらず考えというものが殆どない。

これには流石の小太郎も目眩を覚える。

勇ましく行動に出たことは評価しよう。自身が罵られることも覚悟したことは評価しよう。それでも、このノープランぶりはどうなのか。

これでは先程、矢車にしてやられた時と結果が同じになってしまう。矢車に失望の溜め息を向けたもの以上のクソデカ溜め息を吐いても仕方がない。

「まあ、いいけどな。もう終わりだ」

「げひひ、終わりだと?! 何を根拠ににににに——!?!」
「え? な、何これ——!?!」

もう溜め息を吐くのも億劫になってきた小太郎の言葉に、再び矢車は哄笑を響かせようとしたが、出来なかった。

何が起こっているのか分からないきらは、目の前の起きている現実に目を白黒とさせるばかり。

突如として、何の前触れもなく、生み出された人形どもが泥とかして溶けていつているのだ。

これまで何度となく作り出していた以上、限界が訪れたとも思えない。事実として、矢車はこのまま一晩中戦いを続けたとしても問題ないと判断し、きららもそう感じていた。

にも拘らず、この始末。一体、何が起こっているのか。この自体を引き起こしている小太郎以外には知りようもない。

「ぶばあっ、からら……が、し、しびび……」

「ようやく効いてきたな」

「わ、わがざま、こ、これは……ど、どきゅ……」

「その通り。まともに相手するとか本気で思ってたのか、御目出度い奴だな。時間稼ぎだよ」

地面との一体化すら保てなくなった矢車は、まるで呼吸をするために慌てて水面へと顔を出すような不様さで二人の前へと現れる。

最早、指先すらも動かなくなってきた身体で、自らを見下ろす若造の顔を見上げる。その瞳はこれから先に対する恐怖で濁っていた。

湧き上がってくる恐怖から逃げ出すように、矢車は必死で考える。身体が動かないにも拘らず、思考だけがまともに働くのは更なる恐怖であったが、今はそれどころではない。

一体、何時の間に。

その疑問だけが、彼の全てだった。

毒を打ち込まれるような要素は存在しなかった。

事実として戦いの最中、小太郎に近寄りもしなかったのだ。機会はあったが仕込み杖を警戒し、小太郎の感覚を掻い潜る方法を探っている最中だった。

そも「無形秘擬」は無機物と一体化さえしてしまえば、攻撃は出来なくなるが同時に攻撃も効かなくなる忍法。毒を打ち込まれるはずなどなく。

ならば――

「しゃ、しゃいしょ、から……」

「そうだよ。無形秘擬は攻撃ではなく攪乱と防御に向けた忍法だ。だから、お前自身が止めを刺さなきゃならず、身体を鍛えてるんだろ？」

「……あつ、かつ」

「髪の毛や蜘蛛の巣ほどの違和感もなかったろ。よく出来てる。蚊の針を参考にしてるんだとき。お陰で盛れる量が少なすぎて、毒を選ばなきゃならんがな」

毒を打ち込んだのは、きららを庇ったあの瞬間。

小太郎は既に知っていた。無形秘擬は驚異的な忍法であるものの、攻撃性能はそれほどではない。

常人ならば問題なく縊り殺せるだろうが、身体能力の高い対魔忍ともなれば、時間稼ぎにしかならず、殺すにしても捌り殺しになる。

勝負を確実に決するには矢車自身が動く必要になり、そのために鋼のような肉体を手に入れた。ならば、狙い撃つのが最も確実だ。

倒れ伏した矢車の胸に手を伸ばし、刺さっていた一本の針を抜く。触れれば折れてしまいそうな針は、彼の言葉通りに蚊の針を参考にして作られた幼児に使う医療用の注射針。

人の身体に200万以上も存在する痛点を掻い潜る細さと機構を備えた蚊の針は、まさに自然と生命の飽くなき進化の生み出し、人類が模倣した智慧の結晶。

管状の針の中に毒を仕込み、胃の中へと納めている。

本来は体内へと侵入してくる魔獣や軟体生物の備えであったのだ

が、自分の意思で心臓すら止められる彼には、胃の内容物を選択して吐き出すなぞ造作もない。況してや、攻撃の衝撃で吐き出した呼気と共に打ち出すことすらも。

「い、イカれて……おる……のか……」

「さあ？　でも死なない為に死ぬほど備えるなんて、誰でもやってることだよなあ？」

「……ば、ばけ……」

ゾツとするような、人形よりも人間離れた無表情で見下され、矢車はその言葉を最後にピクリとも動かなくなった。

小太郎の用いた毒はオーソドックスな麻痺毒だ。量の少なさと矢車の体格故に、効くまでには時間が掛かるが、一度でも回れば二、三日はまともに動けない。

それよりも今は――

「あつ……」

「行くぞ」

「そ、それよりも怪我が……！」

「いい、問題ない」

「も、問題ないって……」

「それよりも凜花と獅子神の方が問題だ」

無感情な視線を向けられたきらは、ビクリと肩を震わせる。

無理もない。助けに入るつもりで割って入ったにも拘らず、何も出来なかったのだ。罪悪感と惨めさばかりが募る。

彼女の心情を全く考慮していない冷たい響きだけが込められた短い言葉と同時に、小太郎は変形していた鋒を地面に叩きつけて鞭形態から通常の形態に戻して歩み出す。

確かに重傷ではあるのだが、動く分には問題ない。

損傷した内臓の出血で体内での圧迫が始まり、失血によって生体機

能そのものが低下し始めているが、目下の問題は凜花と自斎の方だ。

「あの二人でも、権左と尚之助には勝てない」

「で、でも……」

「ほら、戦いの音も聞こえないだろ？ もう負けたんだよ。殺されはしてないだろうが、とっ捕まってると見て間違いない」

「そ、そうじゃなくて……治療を……」

「いいと言っている。お前は治療なんて出来んだろう。オレにはお前の後悔なんて関係ないし、どうでもいい。まだ動ける内に、部隊の隊長として責務を全うする。お前もそうしろ、分かったな？」

「……………わ、分かった。で、でも、二人を助けたら」

「助けられたらな」

罪悪感と後悔も全て飲み込んで、今は隊員としての責を果たせと冷たく告げる。

頑なに治療を拒んで隊員を優先する姿に、きららは何を思ったのか、蒼褪めた表情で首を縦に振った。

どの道、自分では治療など出来ない。

単なる出血程度であれば、傷口だけを凍らせて一時凌ぎ程度はできるかもしれないが、それ以上は不可能だ。

ならば、今は小太郎の言葉を信じて進む他ない。少しでも、自身の失態を注ぐために。

(はあくくくく、始めからこれくらい素直に聞いてくれてたら、結果は違っただろうに。好き勝手に動くのはまだいいが、最低限勝ってくれなきゃ話にならねえんだよなあ)

きららは元より、自己の判断で動いた挙句、権左と尚之助に破れたであろう凜花と自斎を思い、頭痛が加速した。矢車の一撃によって負った怪我よりも遥かに痛い。

洞窟の内部は、足を踏み入れた時と同様に静まり返っている。戦い

など何処でも起こっていない。

結果は言うまでもない。権左と尚之助は、アサギに勝てないまでも命を捨てれば相打ちにまで持ち込める実力を有している。どれだけの才気を持つとうが凜花と自斎が真正面から戦って勝てる相手ではない。

既に殺されてしまっている可能性もあるが、あの二人は戦いを避けたがっていた以上、生きて捕らえられている可能性の方が高い。其処は寧ろありがたくはある。

問題はその後だ。この事態を引き起こしたのは矢車であり、あちらの責任であるのだが、共同して事態に当たるといふ方向性を潰したのは此方の責任である。

人質交換をしようにも、此方は矢車一人しかおらず、簡単な足し算引き算をしても一人足りない。交渉するにしても、どんな不利な要求を突きつけられることか。あの二人と言えども、丸く収まった良かった、はいおしまい、にはならないだろう。

(有耶無耶にするしか選択肢がねえ……でも、エウリユアレーの事もある。頭が痛くて泣きそうだ——だが、大抵の事は智慧と工夫でどうにかなるとも。それを考えるのが、オレの仕事だからな)

狂犬は負け犬となり、槍に至る

「——チツ」

権左は戦いの中にあつて、珍しく苛立ちを抱えていた。

戦いが優位に進められないからではない。彼は戦いに愉悦を見出す性質を持つて生まれしてきた生粋にして真正の戦鬪狂。

挑む戦いが、勝ち負けの決まっているといても、思う存分に楽しめる。

刺し貫くのもいい、刺し貫かれるのもいい。斬り裂くのもいい、斬り裂かれるのもいい。殺すのもいい、殺されるのもいい。

自らの性質と本性を、思う存分に発揮できるのであれば、どちらの立場であるかなど彼には関係のない事柄だ。唯一気にするのは結果だけ。

ならば矢車が勝手な理屈で、小太郎との共闘を勝手に蹴った事かと問われてもまた違う。

矢車の暴走は元より想定済みであつた。

後から就任になつたにも拘らず、骸佐に最大の信を向けられ、周囲からも一目置かれる幹部を前にした矢車の心中はどう考えても穏やかではなく、間違ひなく何かをやらかす、と骸佐は勿論のこと己や尚之助も予期できた。

かつて対魔忍に属していた際であれば、矢車は切りたくとも切れない存在であつた。

例え、性根が腐り果てた輩と分かつていても、全ての者が見抜ける訳でも理解している訳でもない。

長年仕えてきた幹部を正当な理由もなく一方に斬り捨てれば、内部に動揺が奔る。あの矢車が、と誰もがそう考え、切り捨てられた理由を探して回り、やがては次に切られるのは自分では、と疑心暗鬼に陥

る。

その先に待ち構えているのは二車家の崩壊。下の者から順に自ら離反を選択し、やがては家としての体を保てなくなるのは目に見えていた。

だが、今は違う。最早、二車は闇の組織。

既に実力至上主義を掲げており、新たな幹部として七霧レイナを迎え入れた以上、使える者は積極的に登用し、逆に使えない者は切り捨てる姿勢を示している。誰も不満は漏らさないし、漏らせない。それが嫌ならば、最初から反乱に加担する側でなく、反乱を鎮圧する側に回ればよかつたのだから。

骸佐が自らの目的のために、次にどうすべきかを考えている最中に入ったのがエウリユアレーの目撃情報。

正味の所、幸運と不運の半々であつたが、骸佐はこれを好機と見た。エウリユアレーを迎え入れられるのであれば目的に反しておらず、そうでなくとも切り捨てたい者を切り捨てるだけの理由を生み出す舞台装置になり得ると。

そうして選ばれたのが、権左、尚之助、矢車の三名。骸佐より最大の信頼を得ている二人がどのような任を背負っていたのか。人選を見れば分かる。わざわざ語るまでもない。

ただ、想定から外れていたのは、エウリユアレーの操る魔術が文字通りの規格外であつた事か。

情報に従つて辿り着いた廃倉庫に入ったと思えば、全く別の場所へと転移させられた挙句、津波の如き使い魔達に襲い掛かれた。

その瞬間に至つて、権左も尚之助も自らの考え、引いては骸佐の見込みが甘かつたと認めざるを得なかつた。

其処に現れた小太郎の存在は正に渡りに船だった。これで二つある命令の内、最低限どちらか一方は果たせるだろうと心から安堵した。

矢車が暴走し、色々と流れはぶち壊されたものの、それでも権左のやることに変化はない。よつて苛立ちの原因にはなりえない。

ならば、何故――

(ふん——嫌になるくらい似てやがるぜ、オレによお)
「くっ——！」

己目掛けて放たれる雨霰の如き拳打を前にしてもなお、権左は笑みすら浮かべず、眉間に皺を寄せてあからさまな不快感を露わにした。戦いが始まってから僅か数分間に凜花が放った拳の数は優に百を超えている。

槍と拳では間合いが違う。必然的に槍を得物とする権左の方が手数が多くなる筈であったが、現実は違っていた。

必然を覆すのは凜花の生まれ持ち、紫藤家に代々受け継がれてきた煙遁の術。

煙遁の術は使用者の肉体の一部を煙に変換することが出来る。身体を煙に変えてしまえば如何なる攻撃も無効化され、一部分だけでも徒手空拳のまま近接武器よりも広い間合いを手に入れられる。

無論、言うは易し、行うは難し。肉体の別の何かに変換する術や異能は常に元の形へ戻らなくなるリスクを伴い、最悪の場合は自らの力で死に至る場合も儘ある。それを近接戦闘に取り入れるのだ。凜花がどれほどの鍛錬を積んできたを伺えるというもの。

肘から手首までを煙化させ、殴り抜く勢いで文字通りに撃ち放つ。彼女の間合いは三十メートルにまで至り、権左の間合いよりも遙かに広い。最早、射撃の領域である。

前後上下、360度全てから襲い来る拳は外骨格を纏った米連の兵士すら問題なく叩き伏せる。

「ふっ、はあっ！ そらあっ！」

その全てを、権左は事も無げに叩き落していく。

槍の穂先だけではない。時に迫る拳に柄を添えて点の攻撃を自らの身体から逸し、槍そのものを両手で回転させて弾く。

例え、視界の外から放たれる拳であろうとも、忍法で地中に潜る事

もなく、鍛え上げた槍の技量だけで正確に捕らえ阻む。

槍は防御に向いた武器ではない。

西洋の歴史では重装にせよ、軽装にせよ、槍と盾は一セット。東洋の歴史においても槍術は無数に存在するものの、大半は間合いの広さを生かした先の先を取る流派が大半である。

そんな事実があるにも拘らず、槍の権左は揺るがない。まるで、槍その腕れだけが己の全てだと言わんばかりに。

「息が上がっているな。まあ、それだけ打ち込めば当然だろうが」

「……………」

「どうしたどうした。一撃くらい入れてみせろよ」

(強い……………!)

事此処に至って、凜花は自らの甘さを痛感していた。

槍を片手で握っただけの大勢で両腕を大きく広げてる権左に打ち込もうと隙を探るが、隙だらけの見た目にも拘らずまるで隙がない。

決して相手を侮っていた訳ではない。二車の執事である権左は十分に危険過ぎる敵だと認識はしていた。ただ、此処までの実力差があるとは夢にも思わなかった。

プライドの高い凜花にとって、今の状況は屈辱以外の何物でもあるまい。

自らは忍法まで使って全力で攻めているにも拘らず、相手は忍法も使わずに涼しい顔で悠々と守りながらも突き崩せないのだから。それでも凜花に屈辱はなかった。あるのは焦りだけ。

(このままじゃ……………このままじゃ、小太郎が……………!)

殺されてしまう。

焦りもしよう。自分が殺されるだけならまだしも、自身よりも守りたい者を守れない事実は、何よりも辛く苦しい。

権左に今のところ小太郎を殺すつもりもなければ、それだけの余裕

もないのだが、胸中や目的を全く把握してない凜花には自分の思考を優先する他ない。

このままでは何も出来ない。状況を打開する術も見つからない。焦りが更なる焦りを生み、ただ一度の悪手が状況を更に悪化させる悪循環。

——その不様に過ぎる姿が権左を苛立たせる。かつての己と重なるからだ。

土橋 権左は母親の胎から生まれ落ちた時より狂犬だった。

幼い頃より、誰よりも戦いに興味を示し、僅か五才にして訓練相手を死に至らしめさせる。

狂暴極まる性根は両親ですら持て余し、見かねた又佐は二車への奉公という形で手元へと置いた。

だが、生まれ落ちた魂の形がその程度で変わるわけもなく。

任務に置いては独断専行で敵を残忍に殺して回り、訓練と称して仲間ですら槍で貫く始末。

それでもなお対魔忍として不適任と処理されなかったのは、又佐から守られていたと言うよりも、その気性と強さを入った弾正の庇護があつたからであろう。

ふうま宗家の当主から許しを得て、権左の増長はいよいよ頂点に達した。今の彼にしてみれば、思い出したくもない恥ずべき過去だ。

増長を叩き折ってくれたのは、又佐から権左の全てを託された幻庵であつた。

娘を救うために単身魔界へと向かった当時ならばいざ知らず、敵の血を引く孫娘を連れ帰れたものの重傷を負って失脚して全てを失った姿は、枯れ木のように頼りない。少なくとも、当時の権左にはそのように映っていた。

伸びに伸びた天狗の鼻は、枯れ木のような老人によつてももの見事に押し折られた。

遥かに優れた身体能力で襲い掛かろうとも、極まった技の前には無

力だった。相性の良い筈の忍法で挑もうとも、散歩に行くような気軽さで封殺された。全てのプライドを捨てて寝込みを襲おうとも、逆に己が気を失って朝を迎える体たらく。

敗北に次ぐ敗北。死ぬでもなく、殺されるでもなく、敗北を知る毎日。勇猛さと凶暴さと強さだけが取り柄だった権左にとつて、敗北は耐え難いものだと思込んでいたのに——待っていたのは以外にも、解放という名の自由であった。

相変わらず自身の獰猛さは変わらなかつたものの、かつてほど無鉄砲ではなくなつた。

敵を倒す事に執着はせず、部下や仲間への気配りを見せるようになっていた。自身でも驚くべき変化ではあつたが、穏やかながらも強さを見せる幻庵の背中を見てきたからだろうと納得できる。

まるで牙を抜かれたように丸くなつたものだと自嘲したが、不思議と悪い気分ではなかつた。ただ戦う事にばかり拘つて一人孤独にあるよりも、自らの本性を偽つてでも周囲と融和する温かみを学んだからだろう。

お前はただの狂犬だと嫌っていた比丘尼もこの変化を認め、戦うことしか出来ぬバカ狗と見下していたカヲルも一目置くようになった。驚いたのはそれだけではない。

『権左、お前に当家の執事を任せてみようと思ふのだが』

『ハッ！……………はあっ?!』

『幻庵殿はどう思いますかな?』

『……………また思い切つた真似をするものだ。だが、悪くはないように思う。カヲルもいるが、ちと裏表が激しすぎる。アレではいずれ部下もついて行けなくなるであろうしなあ』

『では、決まりだな』

何をトチ狂つたのか、又佐は己を執事として任命してしまった。

無論、戦う事しか出来ない己では不資格と何度となく辞そうとし、他の幹部から反対もあつたが、結局、受け入れられる事はなかつた。

ふうま 潤が病没し、弾正による反乱が始まったからだ。

戦いの当初からふうま一門は劣勢となり、権力欲に狂った井河・甲河の長老衆はこれ幸いと猛攻を開始。

更には紫藤家を筆頭とする裏切りによって一門は弱体化。戦線は完全に崩壊し、戦いは虐殺へと変わっていた。

権左は勿論の事、最古参幹部の比丘尼や新たに幹部となったカヲルも投降を進言したが、又佐はこれを拒否。

幻庵に頼み込んでまで止めようとしたが、三者の思惑に反して、老対魔忍もまた又佐の考えに賛同した。

他のふうま一門のように弾正の耳障りが良いだけで中身の無い都合の良い話に心酔していたのではない。ただ、二車と心願寺の当主として責任を果たそうとしたまでの話。

結局、又佐は二人の息子のみを連れて、幻庵は甥であった帯刀のみを連れて死地に赴いた。

無論、権左もまた同じく共に死地へと赴かんと願い出たが、尤も幼かった骸佐の安全を比丘尼・カヲルと共に託され、それすらも儘ならなかった。

何も出来ぬ不甲斐なさ。戦いすら許されぬ屈辱。状況を覆す智慧を持たぬ己の狂犬ぶりにほとほと嫌気を覚えた中で、それはやってきた。

燃え盛るふうまの隠れ里を山中から眺めながら、僅かな手勢を率いて骸佐、比丘尼、カヲルと共に隠れ潜んでいる最中、又佐と幻庵が討ち取られたという急報が届いた。更には、二人の奮闘を隠れ蓑に、反乱を引き起こした弾正は戦いを投げ出して逃げ延びたという事実までもが。

『だから、言ったのに……』

『あの、クソガキがつ！ 当主として責任を果たす性根すらないの！』
『……………』

その時の記憶は、未だに鮮明に思い出せる。

幹部の中で誰よりも又佐を慕っていたカヲルは、悲しみから涙を流して崩折れた。

長らくふうま一門を見守ってきた比丘尼は、弾正の無能さと責任感の無さに怒りを露わにしていた。

その中で、不思議と冷静さを保っていた権左は、自らの無能さを痛感した。

狂犬は戦うことすらなく負け犬となった。後に残されたのは、自らに分不相応な執事という肩書だけ。主と師を守ることを出来ず、役割と立場から仇を討つ事さえ許されない。何と不様な姿か。

だからこそ、託されたものを重んじる。重んじねばならぬ。そうでなければ、又佐と幻庵が余りにも報われない。己には、二人の判断が間違いではなかったと証明する義務がある。

『……骸佐様には、オレから伝える。比丘尼のお婆は、カヲル、いいな？』

『……………』

『……………ああ、頼むわ、権左』

茫然自失のカヲルを、一先ずは落ち着きを取り戻した比丘尼に断つて、幼くして自らの主となった骸佐の下へと向かう。

骸佐は何も知らぬまま眠っていたが、権左の気配がそれとも父の死を感じ取ったのか、彼が向かうと目を覚ます。

『骸佐様……又左様が討ち死になされました。これより、貴方が我等の主』

『ち、父上が……そ、そんな……』

『泣くな！』

『——っ』

『泣いてはなりません。これよりは忍従の時。泣くには余りに早すぎる』

『……………でも』

『御安心召されよ。これより土橋 権左は貴方に降り掛かるあらゆる危難を払う槍と成りましよう』

こうして狂犬は負け犬と成り、負け犬はただ一振りの槍となった。全ては託されたものを守り、今は亡き男達の意志に応えるために。

故に、ただ自らの考えばかりを優先し、本来は仰ぎ見るべき相手の意見に耳を傾けない凜花の姿はかつての己を彷彿とさせ、苛立ちが募っていた。

それでも今の彼は骸佐の槍。優先すべきは骸佐の命であり、目的。己の思いを殺し、ただ槍として主命を果たすのみ。

———そのために、まずは凜花を制圧する。

「……………来るっ！」

今まで、防戦に徹していた権左の身が深く沈む。まるで獲物を前にした肉食獣のような前傾姿勢。

戦いを楽しむ笑みすらなく、槍の極意を示さんとする姿は、凜花に戦いを決するという決意を知らせるには十分過ぎた。

互いの距離は凡そ十五間。槍の間合いとしては遥かに遠く、凜花の射程圏内。

圧倒的に不利な状況下を前にして、権左は乱れもなく迷いもなく一息に踏み込んだ。

「くっ、このおっ——！」

最速で最短で、真っ直ぐに一直線に。

馬鹿正直な軌跡は、敵の攻撃など何の恐れにも危機にも繋がらぬと語るかのようだ。

残像すら置き去りにする恐るべき獣の疾駆。

それでも凜花は、権左の姿を確かに捉えていた。

実力が遥かに離れている相手であつたとしても、生き残りさえすればやがてその速度に目も身体も慣れていく。

短時間で感覚が鋭く練磨される。閉じていた感覚が叩き起こされ、強者の領域に引き摺られる。ぎりぎりの命の奪い合いが、どれほど人の実力を伸ばすことか。

凜花のタイムミングは完璧だつた。

己へと迫る権左を捉え、肘から先を煙と化して拳を打ち出す。

全力の疾走はそれ以外の行動を全て阻害する。最早、権左に攻撃を阻む手段はなく、武技の込められた拳は一切の容赦なく肉を打ち、骨を砕く。

「馬鹿が」

「……!？」

だが、それは権左にとつても同じ事。凜花も間違いなく全力であつた。故に、それ以外の行動には一手遅れる。彼が放つた短い罵りの意味を、凜花は即座に知る事となつた。

その刹那、権左は己の忍法を発動させた。

全身を地中に潜行させるのではなく、踏み込んだ足先のみを硬い洞窟の地面へと泥のようにめり込ませた。

——瞬間、跳ね上がった脚から土中に潜ませていたもう一振りの槍が蹴り飛ばされる。

権左は武器の質に拘らない。槍として使えればそれでいい。折れたのならば次の一振りを。ただそれだけだ。

エウリユアレーの操る使い魔との戦いを見越して、何本折れても構わぬように無数の槍を持ち込んでいた。土中に仕込んであつたのではなく、先の戦いで置いてあつただけ。

飛ばされた槍は一直線に凜花の顔面へと向かう。

ほぼ反射的に、自らの命を守る生存本能に従つて、凜花は自らの忍法を解いていた。

そして、すんでの所で戻した両手を使って放たれた槍を受け止める。その時点で戦いは決していた。

「……うっ！」

「そら、終いだ。無駄な抵抗は辞めるんだな」

全力の攻撃を全力で中断し、全力で防御に入る。

戦の場において、それは致命的な隙であり、敵にとってはこれ以上ない好機。

放たれた槍に気取られた凜花は、既に間合いへと踏み込んでいた権左の鋒を止める術はなく、喉元へと突き付けられた穂先を前にして、全ての動きを封じられる。

鬼腕の対魔忍と一振りの槍の戦いは、こうして幕を引かれるのであった。

剣士の信念、その極み

「はあ……はあ……はあ……！」

「失礼ですが、未熟。その一言に尽きますね」

楽 尚之助と獅子神 自斎の戦いは余りにも一方的なものだった。肩で息をする自斎と涼やかな表情で相対する敵を酷評する尚之助。一方は抜き放った刀を片手で構え、もう一方は腰に二刀を納めたまま両腕をだらりと下げた自然体。最早、それだけで剣士として余りにも大きい隔たりがあるろうと察するには十分すぎる光景である。

（強い……速さも技量もそうだけど、何よりも技の起こりが……！）

自斎は自己評価が低いものの、客観的に見たその腕前は対魔忍の中で流布している逸刀流の使い手としては上位に位置する。

流石に、最強の名を冠するアサギ、逸刀流の元締めである凜子には及ばないが、それでも剣士として敗北する相手は稀であろう。

だが、尚之助は遥か上から見下ろしている。

果敢に踏み込んで行こうとも、二刀を用いた抜刀術で容易く迎撃してのける。

抜刀どころか納刀すら見せぬ神速の斬撃。その上、人体が動き出す前の起こり——力を生み出すために必要な力みや溜めが自斎には見抜けない。

つまり、一瞬の油断ですら命取りとなる真剣勝負において、相手の先が読めず、攻撃を見てから避けるか迎え撃つしかない圧倒的に不利な状況下。

恐るべきは尚之助の技量である。

あらゆる無駄な力みが排除され、脱力しているかのようにすら見える姿は、まるで伝説に語られる剣豪の如し。

更に言えば、彼は現時点で忍法は一切使用していない。思わず笑ってしまふほどの実力差であった。

「しかし、随分と良い目か耳、或いは両方をお持ちのようですね。どうやら、貴女の五感是我々とは違うようだ。神遁の影響ですか？」

「其処まで知っているのなら、逃げて欲しいのだけれど……」

「御冗談を。主命は主命。忍はそれに肅々と従うものです。況してや、主から信を得ているのであれば尚の事。腹の底を探り合い、裏切り裏切られるのが常の忍びの世界において命をかけるには十分すぎる理由では？」

「馬鹿馬鹿しいわ」

それだけ隔絶した実力差を前にして自斎が健在である理由を、尚之助は的確に見抜いていた。

彼女の視界を中心とした五感是人よりも遥かに鋭く、また違っている。本来であれば見えぬものが見え、聞こえぬものが聞き取れる。

理由は生まれ持った忍法に由来する。獅子神 自斎の持つ忍法は神遁の術——自然界に潜む超常の存在、神と呼ばれるモノの力を借りる忍法。

彼女の両目には生まれながらに神々の力の源である「神気」が宿っており、このお陰で仮面で視界を完全に閉ざした状態でお、探知や索敵を得意とする忍術使い以上に周囲の状況を感じ取れる。

詳しい根拠は自斎自身にも分からないが、力を貸している神の五感と彼女の五感が重なっているからではないか、と言っている者はい

た。ともあれ、自斎は現状においても精神的な余裕を残しているのは確かだ。

まるで同意を求めるかのような尚之助の言を、真っ向から斬って捨て、否定しているのだから。

しかし、妙な会話ではある。

いま戦いの天秤は、誰の目から明らかに尚之助に傾いているにも拘らず、両者の言動は彼が追い詰められているとでも言わんばかり。

「もう一度言う、これが最後。お願いだから、退いて」

「御断りします。この身は既に一振りの刃。戦が終わるまで鞘に戻る事はありません」

「……そう、残念だわ」

飄々とした優男の仮面の下に隠された断固とした意思で、文字通りの最後通告が跳ね除けられる。

自斎は静かな口調ながら、苦しみに喘ぐかのように下唇を噛み締める。これから起きる現実、決して彼女の望むものではない。

それでも躊躇はなかった。これまで見てきた光景、これまで目前で起きた現実から、彼女は一つの回答を得ていたから。

生きてさえいるのなら、次がある。

実に単純で明確な、誰でも似たような事を考える面白味のない結論。

それでも、彼女が生まれ持った忍法は、彼女に力を貸す神は、誰しにも与えられる現実を許さない。

自らに力を貸す神の名など知らない。知るだけの知識もなく、また道筋もない。

だが、名は体を現すという言葉があるように、物であれ、人であれ、存在を確立するためには名が必要となる。

そして、宿った神を彼女はこう呼んだ——忌々しい神。忌神、と。

「〃神気解放〃——もう、私にも止められない」

「……………これは、また」

顔を覆っていた仮面が上がり、薄闇の中で紅に淡く輝く双眸が露と

なる。

対魔粒子とも異なる力の波動が溢れ出し、視線に射抜かれた尚之助の表情が俄に強張った。

彼女の背後では、地面から滲み出るように巨大な異形が現れいでる。

かつてこの世に確かに存在しながら今は滅び、星の覇権を人に譲った人智の及ばぬ超常の存在。

まるで石像のような質感の肌と見目。人のそれとは明らかに異なる胴体とはアンバランスで巨大な両手。まさに神威と呼ぶに相応しい正も邪も超越した位置に存在する威容。

古く、日本に住まう人々は自らの力の及ばぬ存在を神と呼んで畏れ敬った。

人から掛け離れた姿形をしているが、神聖なる天使も邪悪な悪魔も人から掛け離れた描かれている。ならば、この異形もまた神と呼べるだろう。

問題があるとするのなら――

『オオ、オオオオオオオオ――!!』

――この神は、ただひたすらに災厄と破壊を振り撒く荒ぶる神であることか。

神道の使い手は対魔忍の歴史を遡っても殆どいない。

生まれてくる割合は千年に一度と呼ばれるほど希少な忍法であり、これまでの使い手や詳細な情報は長き時によって遺失してしまっている。

どんな忍法なのか。どんな使い方があるのか。どんな活躍をしてきたのかは全く残されておらず、ただ神の力を借りるといふ漠然とした言い伝えのみが残るのみ。

ただ、自斎だけは、何故そんな漠然とした言い伝えのみを残してきたのか理解できていた。

それは恐れ故。どれだけ希少で強力な忍法であろうとも、有用とな

るのは制御できてこそ。制御の効かぬ力を持つ者の末路など、自らどころか周囲全てを巻き込んだ壮絶な自滅でしかない。少なくとも、彼女はそう考える。それ以外に考えられない。

無理もない。自らの目で見た人間が、取り憑いている神によって殺されれば、他の考え方など浮かんできはしまい。

獅子神 自斎が孤独を望む理由。

それは他でもない、生まれ持った忍法によって常に傍らにある神が、誰彼構わず崇り殺すからこそ。

トリガーは自斎が相手を見るという簡単なもの。それによって、彼女は多くの者を喪い、多くのモノを壊してきた。他者との触れ合いに幸福を感じる心優しい少女はその度に傷つき、自らと取り憑いている神を恐れるようになったのである。

自斎の諦観に呼応するように、解き放たれた神威は尚之助に襲い掛かる。

何か、特殊な神通力を用いた訳ではない。ただ単純に接近し、人間の胴よりも遥かに太い石柱のような両腕を振るって暴れ回るだけ。

まるで子供の癩癩を見ているかのような稚拙極まる攻撃であるが、繰り出す存在が人間よりも遥か上位の存在であれば話は別。地面を叩く拳が、鍾乳石に振るわれる腕が、一撃でも決まれば尚之助の身体など弾け潰れてしまう。

「ふう。貴女に見られた者は崇り殺される、とのことですが……………」

正直、安心しました」

「安心ですって？」

「ええ、ただの物理攻撃であれば対処の使用はあります。少なくとも今は、神とやらも確かにこの世に存在しているようですので」

「強がりを……………」

暴れ狂う忌神の攻撃を先読みして躲しながら、尚之助は心から安堵の言葉を口にした。

余裕がある訳ではない。忌神の暴威は解き放たれた瞬間から苛烈

になる一方。今は躲せていても、捕まつて文字通りに潰される未来は遠からず訪れる。

それでも焦りを見せぬのは、弱味を見せれば付け込まれるという実戦経験からなのか。

だが、その態度が自斎を苛立たせていた。

これまで誰もこの神を止める事など叶わなかった。彼女自身は勿論の事、その忍法を生まれ持った娘に歓喜しながら、娘自身を守るべく神の制御にあらゆる手段を講じようと必死になり、最後には投げ出す事しか出来なかつた両親すらも。

尚之助の何とかしてみせようという態度は、彼女がこれまで積み重ねてきた全てに対する侮辱である。誰にもどうにも出来なかつたから、孤独にならざるを得なかつたというのに。

自斎の諦観に覆い隠された理不尽への怒りが顔を出した瞬間、忌神は一際大きく神威の豪腕を振るう。

拳を打ち付けられた洞窟は、まるで生き物の悲鳴を連想させる甲高い轟音と共に罅割れ、大きく揺れた。

既の所で後方へと大きく飛び退り、尚之助は難を逃れていた。

「楽 尚之助。推参る……！」
おしてまい

「……………」

戦闘において時折、訪れる一瞬の静寂。互いが敵を仕留めるために態勢を立て直す仕切り直しの中、ようやく忌神と剣士の視線が絡み合った。

忌神は蚊の如く逃げ回る矮小な存在を今度こそ捕らえるべく、顔らしきものを向けて必殺の意思を示す。

尚之助もまた神の視線を真つ向から受け止め、敬意を示すが如く名乗り上げる。

飄々した態度も、優男らしい柔らかい笑みすらも消し去った顔は、正に剣士そのもの。

冷静と情熱を同時に有し、自らの死を覚悟してもなお、目の前の敵

を生きて斬り捨てんとする意思を捨てていない。

目にした自斎は息を呑み、湧き上がってきた感情は劣等感だった。ずっと昔から自覚はあった。生まれ持った力に振り回され、誰も傷つけたくないからと孤独に過ごす日々の中、自身を騙し続けてきたことを。

結局のところ、一人で過ごそうとも人との繋がりを完全に断てはしない。事実として、今は仮初とは言え部隊の一員として戦いに身を投じている。

もし本当に誰も傷つけないのなら、忍法と神を制御すべく必死になるべきだった。半端に孤独に浸ったところで何の意味もない。それはただの逃避だ。

だが、どうしても一歩が踏み出せなかった。

何とかしなければと奮い立とうとする度に、血塗れになって倒れた両親や友人の姿が重なって、立ち上がる前から膝が折れた。

自分には出来ない。自分のせいで。自分なんて生まれてこなければよかった。自責と諦観から目を背け続けた。

「鬼に逢うては鬼を斬り、神に逢うては神を斬る。剣の理此処に在り。ご照覧あれ——！」

これまで見せてきた自分全てを捨て去って、忌神と自斎に力強く宣言する。

まるで神に奉納する神官の如き姿であり、同時に背中を見守る後輩に先達としての在り方を示すように。

尚之助が初めて見せた構えは奇怪極まるものだった。

得意の二刀流を捨て去り、ただ一刀の鞘と柄にのみ手を掛けている。

片足を後方に大きく伸ばし、額が地面に付きそうなほどに上半身を撓ませている。まるでこれより放つ必殺に全てを賭すと言わんばかりに。

自斎の懊悩を、尚之助は手に取るように分かった。彼と彼女の境遇はよく似ている。ただ、周囲に見捨てられたか、自ら諦めたかの違いに過ぎない。

尚之助は二車の下忍である楽家の出身。

かつては幹部としての地位を確立していたようであるが、それも遙か昔の話。

楽家にとって屈辱の日々であった。一度でも栄光の味を知った者は決してそれを忘れられない。

だからこそ、類を見ない才能を生まれ持った尚之助の生誕を楽家全体が歓喜した。

彼の生まれ持った忍法は隼の術。当時はまだ「最強」と呼ばれていなかったものの、対魔忍は勿論のこと、闇の組織においても噂され始めていたアサギと同じ忍法であったのだ。

これならば落ちぶれた当家の地位もかつて以上の位置にまで返り咲ける。

楽家の誰もがそう信じ、大きな期待を掛けられた。尚之助もまた生真面目な性格に生まれた故に周囲の期待に応えるべく、幼い頃より血の滲むような努力を重ねてきた。

全てが一変したのは、彼の隼の術はあくまでも両腕に特化したものだ、と分かった時。

特化と言えば聞こえはいいが、実際の所は劣化でしかない。本来、隼の術とは僅かな時間だけ速さに特化した五感五体を強化する異能。刀にせよ、拳打にせよ、両腕の力だけで行うものではない。複雑な全身運動である。だと言うのに、両腕から先ばかりを加速させてどうすると言うのか。それでは宝ではなく見た目と名前だけのガラクタだ。

尚之助を褒め称える声は、その日から罵声に変わった。

何故、井河の小娘に出来てお前に出来ない！

どうして、貴方は私の期待に答えてくれないの！

さんざん期待させておいてこれか、楽の恥晒しめ！

又佐に進言を続けており、いずれはお払い箱になるだろうと憂鬱だった。

何よりも——何よりも辛かったのは、護衛として宗家の離れに向かい、骸佐を始めとする子供達が遊び回るのを見守る時間だった。蝮まむしのような黒々とした感情が腹の底に鎌首を擡げている。

何を根拠にそんなものを抱いているのかは、自覚があった。そんな理不尽で醜い自分がますます惨めになっていく毎日。

けれど、称賛が悪罵に変わるのが一瞬であるように、苦痛に満ちていた人生と時間が別の姿に変わるのもまた一瞬。

『尚之助、貴方は此処に来るのが嫌なようですね？』

『え？ い、いえ、奥方様、そのような事は！ 御館様直々に私に与えてくれた任務です。こんな、名誉……』

切欠は丁寧に辞してもなお誘われて、仕方なしに付き合った縁側での一時であつた。

ふうま宗家の奥方——ふうま 潤直々に茶と菓子を出され、恐縮としながらも子供達が遊ぶ姿を共に見守っている中、唐突にそんなことを問い掛けられた。

本心を見抜かれて心臓が跳ね上がり、思ってもいない事を口にする。だが、最後には蚊が鳴くような細かいものとなり、最後まで続けられなかった。

潤の口にした言葉は、他ならぬ尚之助の本心だ。この穏やかで緩やかな時間が嫌で嫌で堪らなかった。こんな時を過ごすのなら、両親や家の期待に応えるべく鍛錬に打ち込みたい。そうでなければ己が余りに惨めだったから。

周囲から目抜けと呼ばれながらも本人は一切気にせず、母から無償の愛を一身に受ける小太郎。

既に一族が受け継いできた忍法を発現させ、十分過ぎる才能を生まれ持った骸佐と凜花。

忌まわしい怨敵の血を引き、ふうま一門から忌み嫌われながら、幻

庵の確かな愛情によって守られている紅。

自分の欲しかったもの、自分には与えられなかったものを手にした幼子達の姿は、尚之助の劣等感をどうしようもなく刺激し、醜い嫉妬を抱かせる。

他者の幸福を素直に祝福できない自分が醜く、そして惨めで——
—気が付けば、何の関係もない筈の潤に全ての心境を吐露していた。彼女の忍法は心法識。他者の感情を色として視る邪眼である聞き及んでおり、取り繕いなど無駄だと諦めたからだだったかもしれない。

全ての吐露し終えた時、潤はなおも朗らかに微笑んでこう言った。

『そう、それは辛かったでしょうね。では、こうしましょう。私は、尚之助の全てを信じます』

『それは、無理です……私などでは、奥方様の期待に応えるなど……』
『あらまあ、期待なんてしてないわよお。まともな大人なら子供に期待なんてしないもの。ただ、信じているだけよ』

『意味が、分かりません……』

『さつきも言った通り、貴方の全てを。貴方なら貴方の人生を必ず踏破できる。貴方の望んだ未来と将来を掴み取れる。そう信じているだけ』

『何を根拠に……!』

始めの内は、彼女が中身の無い慰めを口にしていただけだと思っ

た。
己の気持ちが見えたとしても、理解できないだろう人間の言葉など何の慰めになろうか。いや、下手な慰めなど逆に怒りを煽るものにならない。

今この場にこれまで溜まりに溜まった鬱屈した感情を全て吐き出し、両親の思惑も、これまで己が築いてきた全てを投げ出してやろうとすら思っていた。

『だって、尚之助は逃げもせず、諦めもせず、投げ出しもせず、苦しみに立ち向かっている。一番信じられる人間ってそういうものよ?』

あっけらかんとした気軽な口調。だからこそ、彼女の本心全てであると分かる科白。

『根気は本来誰もが持ち得るものだけど、持ち続けるのは難しいわ。私なんて特にね。私だったらとつくの昔に樂の連中ぶっ飛ばしてるでしょうし。だから、尚之助は私よりも凄いのよ?』

『……………』

『尚之助が自分を信じられないと言うのなら、私が信じるわ。尤も、又佐も幻爺も同じでしょうけど。考えても見なさいと、大事な息子と孫娘を信じられない奴に預けると思う?』

『……………う……………っ』

『尚之助は凄い子よ。今までよく頑張りました。これからも皆の事を頼むわね』

溢れ出す涙は止まらず、優しい言葉と抱擁は尚之助が最も欲しかったものでもある。

『あ、母上が尚之助を泣かせてる。何やってるんですか、母上エ……………』

『い、いくら奥方様でも、尚之助を泣かせるなんて、許さないぞお!』

『ふ、二人共、奥方様にはきつとお考えが……………』

『……………ふえ』

——ああ、無上の歓びとはこういうものなのか。

気の毒そうな目を向ける小太郎は己を頼りにしているからこそであり。

怖じ気と共に怒りを燃え上がらせている骸佐も己を信じているからであり。

オロオロとしている凜花も、釣られて泣き出してしまいそうな紅

も、自らを大切に思ってくれているからこそ。

又佐にせよ、幻庵にせよ同じ事。

子供達を任せたのは、尚之助の人柄と愚直に積み上げた鍛錬を信じ、お前ならば必ずや子供達を守り抜くであろうと無言の信頼を示していた。

両親も一族も決して認めはしなかったが、尚之助の欲しかったものは既に握られていたのだ。

その日を境に、尚之助は生まれ変わった。

後ろ向きで卑屈な性格は徐々に成りを潜め、静かな自信に満ちた青年へと成長していく。

性格が前向きになれば、日々の鍛錬も結果はより大きいものとなる。筋肉が明確なイメージを持って鍛えればより大きく成長するうちに、より理想の自分へと近づいていく。

けれど、両親も一族もそんな彼を一向に認めない。

どれだけ鍛えようが忍法に劣り、明確な上位互換がいる以上、尚之助の価値は彼等にとって無きに等しい。

それでも気にせずに鍛錬を続けた。愚直に、根気強く、逃げも諦めも投げ出しもせずに。

もう、他者にとつて都合の良いだけの期待に応えようなどと思つてはいなかった。

徐々に徐々に、性格も肉体も忍法も変わり始めた。

両腕から先のみしかできなかつた強化と加速は全身に及んでいた。尤も、一秒未満の刹那の時でしかなかったが。

それでも劣等感は既になく、彼にあつたのは信じられた以上は応えたいという純粹な願いと男としての意地と信念だけ。

それはついに、アサギですら辿り着けぬ極みへと尚之助を辿り着かせた。

完成したのは両親も一族も死に絶えた後。弾正とそれに従うふうま一門を見限り、価値のある内に売り払おうと井河の本拠となろうとしていた五車へと向かう小太郎の護衛を務めていた最中。

『鴉野 魍馬——井河の長老衆に仕える手練です』

『あー、確か死霊を操る忍法を使うんだっけ？ 勝てるか？』

『分かりません。それでも一直線に走って下さい。アサギ殿はこの先にいるでしょう。信じて、頂けますか？』

『んー………信じちゃいないが、頼りにはしてる』

『十分です。では、剣の理、ご覧入れましょう——！』

かつて辿り着いた境地に再び足を踏み入れる。

尚之助は剣の腕前においてならばいざ知らず、隼の術という点においてアサギに大きく劣っている。

アサギは実に六秒の間、術を持続し続ける事が出来るのに対し、尚之助は全身を加速出来るのは僅か一秒未満で精一杯。

ならばと思いついたのは、その僅かな刹那に全てを解き放つこと。

これまで培った技術も。これまで重ねた鍛錬も。これまで賜った信頼も。これまで育んできた命も。全て、全て。

その果てに待っていたのは、全てが静止した世界。

世界の色が褪せ、これから動き出そうとしていた忌神も、何かに堪えるような表情をしている自斎も微動だにしない。

この一瞬、この刹那だけは尚之助の加速はアサギすらも上回る。

何故か。それは一太刀に向ける意識の差。戦いに向ける情熱の違い。彼にとつて戦いとは、一生分の力を、一瞬で燃やし尽くす事故に——！

「——『無明零閃』」

やること事態は単純明快。命すらも投げ売って、敵の懐に潜り込んで、刀を振るうだけ。

だが、それが行われるのは光速すら超えた更に越えた速度。放つは一閃すら越えた零の領域。

「——オオ」

「……………え？」

自斎には何も見えなかった。

常人より優れた視覚も聴覚も嗅覚も、何一つ役に立たず、捉えられない。

気が付けば、忌み嫌っている神が縦一文字の真つ二つに両断されている。

ずずん、と重苦しい音を立て、忌神は左右に分かれて地面へと倒れ伏す。後には何も残らない。切断面から神気が漏れ出して、砂糖菓子のように崩れていく。

その光景を呆然と眺めている他なかった。

ある意味において、自斎はこの忌神を信じていたからだ。この怪物を止められる者などいない、と。

けれど、どうだ。今こうして、無力な存在にまで堕ちている。

この現実をどう受け止めればいいのか。これまで培ってきた価値観が、諦観諸共に崩れ落ちてしまい、とてもではないが受け入れられない。

「勝負あり、ですね」

その無防備な喉元に、尚之助は刃を突き付けた。

今し方、死線を潜り抜けたとも、神を断つてのけたとも思えない朗らかな笑みを浮かべながら。

ただ、尚之助も決して無事ではない。

アサギに劣っている筈の隼の術で、アサギすら超える領域に手を出しているのだ。

無数の筋肉断裂と内出血、複数の骨折。全身は悲鳴を上げており、いつ倒れてもおかしくはない。

それでもなお立っているのは、この男の信念故に。とうの昔に信念が肉体を凌駕しているのだ。

剣客対魔忍は勝利と剣の理を声もなく謳い上げる。

—— 剣の一撃極まれば、神すら断ってみせようか。
まるで、自らを信じてこの世を去った者に、未だこの世に在り己を
信じる者に示すかのように。

人質を取られたとしても反逆者の交渉には応じない。
じゃけん、爆発物で有耶無耶にしましようねえくく

「おっと、そっちも終わったようだな」

「権左殿も御無事なようで」

「ま、小娘に負けるほど耄碌しちやいねえさ」

「——くっ」

「……………」

権左は凜花を、尚之助は自斎を打ち破り、元の地点へと戻っていた。
若い対魔忍を拘束するでもなく、武器を手にしたまま背後に立って
先を進ませているだけであったのは誰かを拘束する予定などなかつ
た故であり、また自らに対する自信からでもあった。

事実、権左と尚之助であれば、この状態からならばどのような反抗
を示された所で如何ようにも制圧できるだろう。

それが分かっていいるからこそ若き対魔忍は動けずにいた。

凜花は明確な実力差を示された上、更には小太郎と仲間にとって不
利な状況になってしまった現実に表情を歪めてたが、焦りから有効な
打開策を思案できない。

対し、自斎の仮面から解き放たれた顔に表情はない。これまで信じ
てきたものを打ち砕かれ、茫然自失の状態であった。

その時、権左は尚之助に犀利な視線を送った。

声と顔色から彼が決して万全の状態ではないと悟ったのである。

それでも安否を確認しなかったのは、未だ己の両足で大地を踏み締
めているからであり、状況の打開を探る凜花に余計な情報を与えぬた
めでもあった。

尚之助は尚之助でこの現状を如何に対処すべきかを考えていた。

既に己が完璧な状態ではなく、エウリユアレーと事を構えるのであれば足手纏いにしかならない事実は頭の痛い問題だ。

そうでもなければ忌神を打ち破り、自斎を無力化できなかったとは言え、権左しか戦えぬ状況では如何ともし難い。

互いの現状を確認し合った幹部二人の見解は同じであり、出した答えも同一であった。

「仕方ねえな、つとお！」

「うつ……！」

「見てるんだろう、宗家のお坊ちゃん！ この二人を殺されたくなくけりや、さっさと姿を見せなあ!!」

権左は槍で、尚之助は脚を使つて、捕らえた二人の膝を突き、その場に跪かせた。

同時に洞窟全体へと響き渡るように声を張り上げて、姿を見せないながらも隠れ潜んで様子を探っているであろう小太郎へと呼び掛ける。

矢車に呼び掛けなかったのは、彼の實力以上に小太郎に対して信を置いていたからだ。

彼らは既に小太郎が裏で何をやってきたのかを知っている。矢車程度であれば、と考えるには十分過ぎる事実であった。

「さて、案の定。どうしたもんかねえ」

「どうするも何も助けないと……！」

「意気は良いんだがな、お前は何時もどうやってが抜けてるぞ。真正面からやりあつてもあの二人にや勝てん」

「そ、それはそうかもしれないけど、でも……！」

その様子を天然の石柱の影から小太郎はきららと共に見守っていた。

同年代とは隔絶した實力を持つ鬼娘は形振り構わず討って出よう

とするものの、小太郎の呆れ顔と言葉に止められる。

彼女の實力は精々凜花と同等だ。相手はその凜花を無傷で殺さずに無力化している以上、勝てない相手と考えるべき。

そのような事実はきららとて分かっているが、対魔忍らしい対魔忍である彼女には仲間を見捨てるという選択肢は存在していない。

無論、小太郎も同様である。いつそ見捨ててしまった方が楽ではあるが、自身の自由にできる戦力ではなく、エウリユアレーの討伐も控えている以上、見捨てたくとも見捨てられない。

じつとりと湿度が高く、妙に温かい粘ついた空気の中、小太郎は大きく溜息を吐いた。

共闘や交渉が可能なラインは当に通り過ぎてしまった。

本音を言えば、小太郎にせよ、権左にせよ、尚之助にせよ、共闘はしたい。だが、他の目がある。

矢車、引いては凜花や自齋が暴走せずにいたのならば、まだ現場判断という言い訳も経つただろうが、戦闘後の共闘はいくらなんでも互いの仲が深いものであると語るようなものだ。

元主と元従者。事実として関係は深いが見せるべき姿勢というものがあ

権左側からしてみれば、矢車を失った状態で小太郎と手を組むなど言語道断。元より矢車を切るつもりであった骸佐がそれを許そうとも、骸佐の思惑と目的を知らぬ者達は許しはしない。

小太郎側からしてみれば、味方を人質に取った相手との共闘を対魔忍の内部で知られればどうなる事か。況してや、相手は反乱を起こした者達。邪推に邪推を重ねられては今後が動きにくくなってしま

黙っていれば漏れることはないのだろうが、現状と今後を見据えている三者ならばまだしも、残る凜花、きらら、自齋の三名が理解しているとは思えない。

いずれかがポロリと事実を漏らしてしまえば対魔忍内部で噂は広がる。骸佐とて対魔忍の動向は常に探っているだろう。其処で噂をキャッチされようものなら、どれだけ箝口令を敷こうとも噂は人から人へと渡り、いずれは誰にも知れ渡る。

「仕方ない。お前は此処で待機だ」

「ちよ、ちよっと一人でどうするつもりよ」

「待機していろっただけでただ待てと言っている訳じゃない。やることはある。後は、アイツ等がどれだけオレを信頼しているかだな」

「……ど、どういうこと？」

「分からないなら言う通りにしてろ。余計な真似はしなくていい。いいか、これから——」

切欠は矢車だったとは言え、この状況を招いた要因の一つとして自身も関わっている。解決の糸口が見えない現状に彼女が焦るのも無理はない。

だと言うのに、この男は既に二人を救い出す道筋が既に見えているかのようだ。

とても味方を人質に取られたとは思えない落ち着き払った口調に、きさらは困惑を隠せずにいた。

それでも従う以外に道はなかった。

任務が始まった頃とは打って変わった従順な姿は人が変わったかのようだ。

どれだけ複雑な感情を有していようと根は素直で単純。まだまだ信頼とは言い難い僅かに芽生えた小さな感情に従っているだけであるが、これもまたアサギが小太郎に求め、きさらは望んだ変化である。

(……………気温が下がっていく……………そういう手筈ですか)

(悪いとは言わねえし、巧い使い方とは思いますが、ちと浅はかすぎやしないかねえ?)

鋒を凜花の心臓に。刃を自斎の首筋に。

それぞれが何時でも跪かせた相手の命を奪える状態かつあらゆる反撃に備えた状態の中、鋭敏に環境の変化を察知した。

洞窟の温度と湿度は、太陽光や大気などがないたため、常に洞窟周辺の平均温度になり、年中一定の温度に保たれる。

それが変化する理由と伴って何が生じるのかを察した尚之助と権左は僅かに眉根を寄せた。

暫くすると薄暗闇で満たされた洞窟内部は更に視界が効かなくなる事態に発展していた。

暗い闇とは異なる真白の闇で満ちていく。大気中の水蒸気が小さな粒状の水滴へと変化して視界を遮る現象。即ち、霧である。

「さて、話し合おうか」

「小太郎……っ」

「……………」

「これはこれは、また大仰な登場で。しかし、随分とまあ痛々しい姿ですなあ」

「心遣い痛み入るよ。どうせだったら、間抜け二人を開放して欲しいもんだが」

「そもいかにでしょうよ。こつちとしちや苦勞して手に入れた戦利品みたいなものだ。相応の見返りつてもんがなきやねえ」

「ぐ」尤も」

互いの視界を邪魔する霧の中から滲み出るように小太郎が片手を上げて現れた。

霧によって細部までは確認できないものの、もう一方の手は見るも無惨に拉げており、一目で重傷であると伺い知れる。

その姿に、凜花は顔を青褪めさせ、尚之助もまるで我が身を傷つけられているかのように顔を歪める。唯一、権左だけは冷静さを保ちながら、逆に警戒を強めていた。

只でさえ、手負いの獣は恐ろしい。況してや、それが智慧持つ狩人ならば尚の事。本能的に分かる。強さそのものは大したものではないにせよ、ふうま 小太郎という人間は間違いなく狩る側の人種であると。

霧の出現はきららによるものであった。

水分を多量に含む空気が急激に冷やされ、露点温度に達する事で霧や靄が発生する。

洞窟内部という一定の温度を保ちつつも湿度の高い空気は、きららの冷気によって冷やされることで霧を発生させる条件を満たしていた。

これが実現できたのは彼女の受け継いだ異能があつてこそ。同じように氷や冷気を操る対魔忍は他にもいるが、これだけの広範囲に渡つて冷気を行き渡らせる真似が出来るのは彼女だけ。

尤も、それも長く続くまい。スーパーカーが爆発的な加速を実現するのに多大な燃料を消費するように、強大な力は総じて莫大な消耗を強いられる。

加えて、きららはこのような使い方に慣れていない。瞬間的に冷気を生み出して攻撃に利用するならばまだしも、一定の冷気を持続的に放出し続ける経験はほぼない。消耗は普段の数倍にまで達するであろう。

小太郎の現在の姿に強い悔恨と痛みを抱いている尚之助を庇うように、自然と口を開いていた権左であつたが、内心は不審で満たされている。

わざわざ霧を発生させたというのなら、狙うべきは奇襲。視界が効かぬ利点を生かして、相手に悟られぬ内に一気呵成に攻め立てるべきだ。

にも拘らず、姿を現したのは何故か。この程度の視界不良による奇襲など真つ向から迎え撃ち、いくらでも制圧する自信はあつたが、答えの出ない疑問とは気味が悪くて仕方がない。

「小太郎、私達はいいから……うぐっ！」

「黙つてろ。これがお前が勝手をしたツケだ。考えなしの犬じゃこういうことになる。よく見ておくんだな」

「いのおっ……！」

失態を犯した自分達を見捨てるように口を開こうとした凜花であつたが、権左に髪を掴まれて止められる。

その声は何処までも冷たく、己の失態が自身の身のみならず、仲間にも及ぶと語っていた。

手荒い権左を睨みつけようとするものの髪を掴まれては抵抗の余地はない。

否が応でも姿を現した小太郎の姿を見ることになってしまう。霧に覆われたままでは表情までは伺えないが、失望の色に染まっているのは明らかだろう。

それがより一層、凜花に深い苦しみを与える。想像は時に現実以上に人を追い詰めるものだ。

「とは言え、こっちは払えるものもねえ。こっちから持ち掛けるなら兎も角、テロリスト同然の反逆者からの交渉には応じない」

「ならば、どうなさるおつもりで？」

「こうする以外に何かあるのか？」

「——っ！」

徐々に濃くなっていく霧の中、よく通る声が洞窟に反響する。

人質の扱いに何を言うでもなく、権左の問い掛けのみに応えた小太郎は、驚くべき行動に出た。

懐から何かを取り出して口元に運ぶと何かを啜えて引き抜く仕草を見せ、間髪入れずに四人に向かって放り投げる。

その行動に愕然としたのは、誰よりも小太郎を知っている尚之助であつた。

今の仕草は任務で何度となく目にしてきた姿。米連の軍人は勿論、何処でどう入手したのか闇の街のチンピラですら使ってきた殺傷兵器。

安全ピンを外してから一定時間で爆発に伴う無数の破片で相手を殺傷せしめる範囲攻撃にして投擲武器。即ち、手榴弾。

尚之助は率直に言つて混乱していた。

小太郎様がこのような真似をするなど、と言う驚愕。同時に、小太郎様ならばやりかねない、という納得。相反する思考に板挟みにされ、初動が遅れた。

尚之助の知る小太郎は、身内と認めた人間には極端に甘い。

どのような失敗であれ許容するし、相手の性格を読んだ上で失敗すらも想定して行動している節がある。

全ては身内を許すため。そうでもなければ己の立場上、立ちいかなくなる可能性があるとは言え、明確な背信を抱いていなければ、裏切りですら許すのだから甘過ぎると言ってもいい。

だが、同時に何処までも冷徹になれる男であるとも知っている。

使えぬ者、従わぬ者、敵対した者に容赦はない。使えぬ者は実現可能ギリギリの範囲を見極めて使い潰し、従わぬ者は邪魔だと感情すら交えず切つて捨て、敵対した者は親兄弟であつても如何なる手段を用いても殺してのける。

相反する二面性のどちらが発露しているのか。どちらの面であるのか判断に迷う。

とは言え、混乱が決断に影響を与えるほど尚之助は未熟ではない。

初動こそ遅れたが、其処からの動きは迅速の一言。宙空に放たれた手榴弾の影を正確に捕らえていた。

抜刀術は本来、刀を鞘に納めた状態で襲い掛かれた場合に用いる術。言わば、不意打ちへの対応策。この程度の不意打ちなど真正面から打ち破れて至極当然だ。

これまで何度となく訪れた危機は尚之助に知識を齎した。

手榴弾と言えど爆発には明確な原理が存在し、理屈は単純。

炸薬と信管を鋼鉄の容器で覆った兵器であるならば、信管を断って起爆させなければ意味を為さない。

当然のように迎撃し、稚拙な不意打ちを斬り裂かんとし――

「尚之助、ブラフだっ！」

――嵌められたと悟った。

権左の直感からなる助言も、僅かに遅れている。既に迎撃は形をなし、両者にも止めようがない。

放物線を描く物体を斬り裂いてみれば、手榴弾とは手応えが違う。見れば、ただの石塊だった。

（そもそも不意を打つのであればわざわざ我々の目の前で安全装置を外す必要などない！ 見えない場所で外して放ればいいだけのこと！

やられた！ ならば――）

（霧を出したのはそういうことかよっ！ 姿を現したのは自分の行動で尚之助の混乱を誘って意識をあちこちに分散させるためか！ なら次の手は――）

「おらおら、死ぬ気で避けろよー」

「そんなもん何処に隠し持ってたんですかねえっ!!」

霧の帳の向こう側で、小太郎は片手で何かを構えていた。

僅かな間に立場が逆転した事実、名前は知らないが見覚えのある武器に権左は悲鳴のような声を上げる。

小太郎の手に握られていたのは大型の回転式拳銃のような武器。

名はMGL-140。米連海兵隊ではM32と呼ばれる六連発リボルビンググレネードランチャー。

量産開始から既に50年以上が経過しているにも拘らず、様々な改良が加えられながらも基本構造に変化が見られないのは、実際の運用を想定した基礎設計が如何に優秀であったのかを物語っている。

一時、コンピューター制御によって敵の頭上で爆発するエアバーストグレネードに地位を奪われかけたものの、一発辺りの値段が高く、使用弾薬の統一性がなかったために、未だ採用され続けている古参。

権左にしても、尚之助にしても、想定していなかった武器である。服の下に隠すには大き過ぎ、始めから手にしているか、背負っててもいなければおかしい部類だ。

どのような手段を用いたかは別にして、意表を突くというのなら、

現実的に其処に存在しない筈の武器はこれ以上ないほど相手の意表を突けよう。事実として

ポン、と瓶の栓が抜けるような音と共に、40×46mmグレネード弾が尚之助の顔面に向けて放たれる。

既に刀を握った腕を振り抜き、残りの腕も負傷している尚之助にはどうしようもない攻撃。

「チイツ！ いちいち容赦のない御人ですよ、全くっ！」

「ぐっ——！」

「お前ならそう動くわな——今だっ！ 二人共こっちに走れっ！」

「自斎ちゃん、さあっ！」

「えっ？ あっ——きゃあああっ!!」

まるで予定調和のように、それぞれが動き出す。

人質の確保を完全に諦め、尚之助に向かって飛び掛かり、諸共に土中へと逃れる権左。

依然、焦りはあったものの、呆然としたままの自斎の腕を掴んで前へと走り出す凜花。

未だに忘我の彼方にあつたが腕を引かれ、突如として背後で発生した爆発と衝撃に驚愕の悲鳴を上げる自斎。

走り出した二人を確認しながらも、既に装填されている対人榴弾を一定の間隔で撃ち続ける小太郎。

二人と擦れ違つた辺りで、小太郎はようやく最後の一発を撃ち尽くす。

その時点で彼の思惑は完了しており、霧の中へと紛れるように消えていく。残されたのは濃霧と静寂だけだった。

（流石に巧いねえ。爆発と衝撃で足音を消していた。こっちから話かけて場所を探ろうにも洞窟の中じゃ反響してハッキリとした場所は分からんだろうし。完全に一本取られたな）

「権左殿……」

「何も言うな。宗家のお坊ちゃんが一枚上手だったただけだ。戦うだけならこつちが上だが、戦いの流れを操作するのはあつちが上だな」

土中に潜り込み、対人榴弾の影響を受けなかった権左は消沈した尚之助を脇に抱え、面白げながらも苦笑を漏らしていた。

恐らく、小太郎は始めから尚之助に狙いを定めていた。

姿を確認し、声を耳にした権左と同じ段階で負傷の度合いに気づき、かつて見た奥義を使用したのだと悟っていたのだろう。

その上で自分ならばやりそうでやらない、或いはやらなそうでやるラインの行動を取って見せることで混乱を誘い、霧による視界不良で行動の真意を悟られる時間を遅らせていた。

権左としても、このような場所で矢車ならば兎も角、尚之助を失うわけにはいかない。自身の危機ならば容易に払えるが、他者へと降り掛かる危険を払うのは全身全霊を掛けねばならないと骸佐を守り続けた十年近い歳月で嫌というほど身に沁みている以上、全ての有利を捨てて尚之助を守る選択をする。

更に言えば、身を隠す算段までも完璧に等しい。

権左の「捲土重来」は直接的な戦闘以上に、不意打ちや身を守る際に最大限の効果を発揮し、実際のところ攻めるには不向きだ。

何せ、人が八割頼っている視界が完全に塞がれてしまう。どれだけ地中を自由自在に動けようが、相手を認識できねば意味がなく攻めようがない。

この不利を補うため、権左は視覚よりも聴覚を鍛え、敵の足音や気配を頼りに位置を探る術を自然と身に着けていたが、地上で爆発が起きればその感覚も無駄になる。

見せた一手が次に繋がり、別の意図に繋がっている複雑さであったが、彼自身の行動自体は実に単純。

戦いの雌雄を決する流れを操る力、敵の思考を読み切った上で一定の方向へと誘導する狡猾さ。

いずれにおいても、二車一の知患者にして策士であるカヲルすら上

回っていると権左も素直に認めざるを得ず、更なる笑みを溢した。

(はてさて、どうしたもんか。このまま戦って勝つ自信はあるが……得るものが少なすぎるし、オレも嵌められちゃ敵わん)

相手は重傷の小僧一人と消耗した未熟な小娘三人だけ。縊り殺すも刺し貫くもそう苦ではあるまい。

しかし、尚之助を抱えた状態では無理だ。

“捲土往来”は権左が一度でも地中で手を離してしまえば、相手は生き埋めとなる。そうやって敵を仕留めた経験もある以上、戦うならば尚之助を安全な位置で休ませておかねばならない。

だが、問題は小太郎だ。ある意味において、己以上に忍法の使い方を心得ているであろう小僧が、それを知らぬとも考え至らぬとも思えない。

己の相手は三人に任せ、自身は尚之助を確保するために動くだろう。そうなれば、立場は完全に逆転する。

「権左殿、此処は退くべきかと」

「完全に同意するぜ。大して強くはないが、戦うとなるとああいう輩が一番厄介だからな。やるなら万全じゃなきゃ話にならないからな。最後に、負け惜しみでも言っておくか」

尚之助の提言を、権左は素直に受け入れる。

エウリュアレーの抹殺或いは勧誘は失敗に終わったが、矢車との手切りは完了した以上、最低限の仕事は果たしている。無理をせずとも問題ない。

戦いに対する狂気は胸で燃え上がっていたが、容易く鎮火する。狂気の解放も鎮静も、狂犬から槍となった今では随分と手慣れたものであった。

土中深くに逃げ延びたが、言葉通りに地表へと向かって上昇し、とぷんと顔のみを空気に晒す。

地面が波紋が広がるように揺れたが、濃くなった霧ではそれも見えない。

「いやあ、一本取られました。流石は奥方様の教育の賜物！ 見事に成長したもんですなあ！」

「そいつあ、どうも！ 権左あ、まだやるかつ！」

「いやいや、御冗談を。これ以上は此方のメリットがない。素直に尻尾巻いてトンヅラさせて頂きます！ 決着は、次の機会に！」

「ああ、そうかいそうかいっ！ 安心するな、全くよう！」

もう既に、互いの位置を正確に把握する術がないと分かっているからなのか、洞窟内に反響させるほどの声量で言葉を交わす。

印象的であったのは権左が今の状況を面白がっているのに対し、小太郎は苛立っていた事か。

立場も勝ち負けも小太郎が上回っているのだろうが、これからアジトに戻るだけの権左は気軽そのもの。対して、小太郎は未だ本命に手を掛けてすらいないのだ、苛立ちもしよう。

勝負や賭けに勝っても、貧乏籤を引かされる。それが彼の人生で運命なのだ。

「ああっ?! ちょっと待て、矢車連れてけよっ！ あっちで動けなくなってるからー！」

「嫌ですよ。犬以下のクズなど役に立たない。処分はそちらに一任しますので御勝手に」

「ふぎけんなテメエっ！ どう考えてもオレにぶん投げられる案件だろうがっ！」

「でしような、頑張つて下さい。御多幸のほど、祈っておりますよお、っと」

「テメエ、首根っこ捕まえて五車に引き摺り戻したら、骸佐と一緒にコキ使ってやるから覚悟しとけよう、クソがあっ!!」

「ははは、これは本気を出さねばなりません。では、これにて」

これから己が身に降り掛かる想像してか、涙声の悪態は虚しく洞窟に残響したが、権左は全く取り合わずに再び地中へと潜降した。

いいようにやられたのだ。これくらいに負け惜しみと苦勞の押しつけをしてやってもバチは当たらない。

体よく矢車の処分を押し付けた権左は、尚之助を肩に抱えながら泳ぐように移動する。

無明の闇に閉ざされた地中を慣れた様子で真つ直ぐと。何の目印もない土中はただ真つ直ぐ進むだけでも困難であろうにこれだ。回遊魚や渡り鳥レベルの方向感覚を備えているらしい。

「権左殿……」

「どうした、尚之助」

「久方ぶりに小太郎様に会い、一つ確信致しました。私は――

「……………今の言葉は、聞かなかつたことにしてやる。お前の言つたことは正しいよ。だが、骸佐様への背信に等しいからな」

「……………分かりました。ですが、もう一つだけ恥を忍んでお願いがあります」

「ああ？」

土中では相手の声だけが聞こえ、表情までは見られない。

それでも権左には尚之助がどのような思いで呟いた言葉であつたのか、痛いほど理解できた。

だが、看過できぬ言葉というものはある。況して、二車を背負って立つ幹部が決して口にしていい言葉ではない。

なおも聞き流したのは、尚之助を信頼しているからだ。

背信に等しい思いを抱こうとも決して裏切らない男であると、同じ男として心から信じている。これまで彼が築いてきた信頼とこれまでに己の目にしてきた行動が全てだと言葉にするまでもなく語るように。

そして、再び口を開いた尚之助の願いに、権左は首を傾げるのであった。

最早苦勞人に残されているのは隊長としての責任だけ

「つ、ああ……ようやく、一段落か」

「こ、小太郎……こ、こんな、酷い……」

権左と尚之助を退けた小太郎は洞窟の天地を繋ぐ天然の石柱に背中を預けて座り込み、いま感じている痛みそのものを身体の外へと押し出すように大きく息を吐いた。

その傍らには涙を溢しながら凜花が座り込み、きららと自斎は沈痛な表情で俯いている。

今の小太郎の姿は、三人が行った独断が原因のようなもの。

全ての切欠は矢車にあったとは言え、その後の行動は不味かった。誰もが痛感しているからこそ、己を責めているのだ。

「と、兎に角、撤退を……」

「いや、それはない。オレはこのまま続行する」

「な、なに言ってるのよ、そんなの無理に決まってるでしょ！ 少しでも早く治療を受けなきゃ……！」

「悔るな。オレは弱いんだ。だから、こういう時の備えも当然ある。出来れば使いたくはなかったんだがな」

自斎が撤退を促すものの、小太郎は真っ向から拒絶した。少なくとも、己は此処で退くつもりはないと。

こんな所で、折角上がってきている独立遊撃部隊の名に傷を付けたくはないのだ。この失敗を槍玉に上げ、部隊を解体するように進言し、己の権力を拡大させようとする輩もいるだろう。

一步の後退がそのままふうま再興が遠退く結果に繋がってしまう。

それでは名前だけの当主と言えども、果たすべき責務を果たせなくなる。骨身に刻まれた母親の教育が小太郎に撤退を許さない。

無論、彼とて無理無謀をしたい訳ではない。これまでの状況と得られた僅かな情報から、任務遂行が可能な道筋が見えているのだ。

自身の現状を把握できているとは思えない言動に、きららは猛然と反発した。

これまでのように男の発言だからと否定している訳ではない。口元から血の泡を吹く彼の姿は、自身の間抜けさが招いたようなものと重々承知していた。だからこそ根底にあるのは純粹に小太郎の身だけを案じている。

任務開始時とは、見違えるほどの変化と言える。尤も、それは彼女本来の性格が顔を出しているだけなのかもしれないが。

しかし、小太郎は意に介した様子はなく、懐から銀色の金属筒を取り出した。大きさは掌に収まる程度、一部が硝子で出来ており、中には緑の液体で満たされていた。口で筒を咥えてキャップを外すと細い針が顔を出す。どうやら注射器のようである。

「ふうー……ふうー………ふっ！」

今一度大きく息を吐き出し、腹を括って首筋に注射器を突き刺して打ち込む。

変化は劇的だった。

一体、打ち込んだ薬液は如何なるものなのか。拉げていた左腕から身の毛もよだつ悍ましい音が響き、彼の意味とは関係なく左腕が痙攣し、口からは大量の血が溢れ出す。

三人が息を呑む間にも、滅茶苦茶に破壊されてズレていた骨は元の位置に無理やり戻ろうとして内蔵や筋肉から引き抜かれて体内で新たな出血を齎し、その出血も傷が塞がっていくことで収まっていく。ものの数分。ただそれだけの僅かな時間で見るも無惨に変形していた左腕と複数の内蔵の損傷は、完全に元の形へと戻っていた。

左腕の再生を見届けた小太郎は、口の中に残っていた血をぺっと吐

き出し、調子確かめるように指を握っては開くを繰り返す。

「流石は凄いな。即効性だけは折り紙付きだ」

「そ、そ……」

「あ？ 何だよ？」

「そんな便利なもの持つてるならもつと早く使いなさいよ！ 心配するでしょ!!」

「そう便利なものでもないから出来れば使いたくはなかったんだよ。それくらい察してくれ」

人体の破壊は見るも悍ましいが、摂理に反した再生もまた同様。

吐き気すら催しながら事態を見守っていたきららであったが、自身を奮い立たせるように、或いはこんなものを隠して今の今まで使わなかった事を咎めるようにきららは悲鳴を上げた。

心配し通しだった彼女にしてみれば、肩透かしを喰らったようなものであり、安堵から大声を出してしまうのも無理はない。

だが、小太郎は呆れ顔だ。使わなければどうにもならなかったとは言え、可能な限り使いたくはのは事実。これだけの急速な復元・再生に何の副作用の疑いを持たぬ単純さに呆れ返っている。

今使用した薬品の名は補肉剤ほしくと名付けられた新薬。

こんな道理や摂理に反した事態を引き起こせる薬品を作り出せるのは、自称天才魔科医の桐生 佐馬斗において対魔忍側には存在しない。

しかし、疑問が残る。

これだけの効果を上げる新薬を開発したのであれば、既に対魔忍全体へと配布されていてもおかしくはない。配布されればされるほど、死傷率が激減するのは目に見えているのだから。

自身の研究成果を世界に向けて発信したがる男ではなく、ただ自己の欲求を満たすためだけに魔界医療に傾倒している故、研究成果を秘匿していた可能性もあるが、お目付け役である紫の目もある。到底、隠しきれるとも思えない。

疑問の解消は至極単純。桐生は元より、紫でさえこの新薬を広めたくなかったのだ。

この新薬の元となったのは、他ならぬ紫自身の細胞から生み出されたもの。桐生も紫も拒絶を示そう。

紫にしてみれば、培養された細胞とは言え、自身の細胞が知らぬ所で勝手に薬として使われるなど良い気分ではない。

桐生にしても紫に異常な愛情を抱き、ハニーを好き放題しているのはオレだけだ、と公言している男。細胞一欠片であっても、自分以外に投与されるなど在ってはならないと絶叫する。本当に気持ち悪い男である。

更に言えば、この新薬は效能こそ凄まじいが欠陥品でしかない。

紫の忍法「不死覚醒」は、文字通りに不死を齎す。

常時発動型の忍法で彼女を殺すには頭部と心臓を同時に破壊する他なく、例え身体を切断されようとも、刃が通り抜けている最中に傷が塞がってしまうほどの再生能力を持ち、華奢な身体からは想像もできない膂力を生み出す。

全て対魔粒子による賜物であるが、通常の身体強化系、回復系の忍法は対魔粒子をエネルギー変換することで在り得ざる能力を得ているのに対し、不死覚醒は細胞そのものが対魔粒子によって特異な変化を見せている。

医学上、遺伝子学上は何の変哲もない人の細胞であるが、対魔粒子を流し込まれると途端に活性化し、肉体の損傷を確認すると同時に癌細胞すらも凌駕する勢いで増殖・修復する。

その特性に初めて目を付けたのは他ならぬ桐生だ。

彼の肉体は既に生まれ持ったものではない。かつて紫と敵対した際に首を刎ねられ、魔界医療によって半人半妖化して生き延びただけが、本来の肉体でない以上は時間制限が生まれる。

このままでは肉体が朽ちる結末に陥ると自覚していた桐生は紫の持つ特異な細胞に着目し、彼女の身体に寄生することで事なきを得た。今や彼は紫の細胞に適合して共生関係から分離、奇跡の生還を果たした。

補肉剤はその研究過程で生まれた副産物。

他者の肉体に調整した紫の細胞を投与することで、対象に擬似的な不死覚醒を与える。内蔵の損壊は勿論の事、切断された四肢すら短時間で再生し、あらゆる外傷や病を治す。

だが、その分だけ副作用も凄まじい。

まず第一に、再生には発狂しかねないほどの痛みを伴う。

元より人間の肉体は欠損は癒せず、治る傷ですら膨大な時間を要し、治療には常に痛みが必要となる。

それを僅か数十秒から数分で治すのだ。大の大人が麻酔を使っても絶叫する骨の矯正を、肉体からの異物の引き抜きが僅かな時間で襲い掛かってくる。それだけの痛みを与えられては、待っているのはショック死だ。肉体を再生する筈の行為が死を齎すなど皮肉という他ない。

紫の不死覚醒、ナディアの癒やしの舞を筆頭とした自他を回復する異能の何が優れているのかは、こうした回復痛が皆無な点だろう。

もし仮に、運良く激痛を耐え抜いたとしても、更なる問題が待っている。

紫の細胞は紫自身によって生み出される対魔粒子にしか完全に適合せず、他の対魔粒子では制御が効かない。

既に癒えているにも拘らず増殖を続け、異常を察知した免疫細胞は異常増殖する紫の細胞を攻撃し、拒絶反応を示す。

待っている結末は二通り。過度な拒絶反応によって患部が壊死するか。或いは紫の細胞に肉体を乗っ取られ、元が人だったとは想像もできない肉塊となるか。いずれにせよ、欠陥品の烙印を押されても仕方のない代物である。

ただ、今の小太郎にとっては有用な代物ではあった。

痛みだけで彼は死なない。異常な訓練で得た痛みへの耐性は、人魔合わせても彼に勝る者は存在しない。

残る問題は患部の壊死と肉塊化であったが、目の前にある死を先延ばしに出来れば御の字だ。

拒絶反応、異常増殖共に肉体に形を伴って現れるまで桐生の計算及

び最新鋭のコンピュータシミュレーションによれば五時間以上ある。その間に全てを片付けて桐生による治療を受けなければいけないだけ。

桐生が治療に精を出さず、体よく彼を始末しようとする可能性もあったが、ハニーと一つになっていいのはオレだけだ、と身勝手な独占欲から紫の細胞を是が非でも他者の肉体から排除しようとするのは目に見えている故、心配せずともいい。

「小太郎……良かった……本当に、良かった……」

凜花は今し方まで拉げていた左腕を両手で握り、俯いて涙を流していた。心底から愛した人間の無事を喜んでいた。

対し、小太郎の反応は冷ややかそのものの無反応。表情に僅かな変化すらない。

矢車が暴走した時点で——いや、三人と組まされた時点で無傷ではられないと予期していたのであろう。

それにした所で、自身のために涙を流す人間を前にして、何の感情も浮かべないのは非人間的と言わざるを得ない。何せ、怒りや呆れすらないのだ。

凜花が握る左手を振り払い、鬱陶しい感触から逃れて三人と向き直る。

立て襟と三角帽の間から除く目元は異様に冷たい眼光を放っていた。

「それで、どうする？ さつきも言ったが、オレは一人でも行くが」

「……アンタ一人でどうにか出来る相手じゃないでしょ。私も行くわよ……そりゃ、信じて貰えないかもしれないけど……」

「私も行くわ。これ以上、小太郎を傷つけさせない。誰にも……」
「随分と都合の良い話だ」

自責の念が強いきららと凜花は小太郎の問い掛けに、苦しみの表情を浮かべながらも間髪入れずに応える。

自身が選択肢した行動の結果、招いた現実には彼女達の身を危険に晒し、小太郎の脚を引つ張る形となつてしまった。誰よりも理解しているからこそ、はいそうですかと退くわけにはいかない。

きららはもう二度と信じては貰えないだろうと覚悟した上で、凜花は己すらも含めた上で言葉を口にしていった。

返つてきた反応は相変わらず冷徹だ。

何の感情も浮かんでいない。怒りや嫌悪を発露する気力すら残っていないのだろう。

「お前等、舐めてるよ。オレを舐めてる以前に、全てを舐めてる。自分の勝手で失敗しました、だけど次は頑張ります。そんな理屈が通るわけないだろ。舐めてるとしか言いようがない」

「……………」

「この場でお前等を拒絶したところで現実が変わるわけじゃないから素直に受け入れるがな。だが、オレは頼りにもしないし、オレの命令通りに動くとも思わない。お前等がこつちの命令を無視することを前提に作戦行動を組む」

「……………」

「これはお前等が自分の尻は自分で拭うと言つた結果だ。見上げたもんだよ、恥ずかしげもなくそう言えるのはな。オレから言えるのは一つだ。勘違いはするな。責任を取るつてのは身投げみたいな行為じゃない。もっとずつと地味で全うなものだ。オレから言えるのはそれくらいだよ」

彼の言葉の端々には、いちいち棘がある。

それらは負の感情によるものではなく、隊長としての責を全うしようとする表れであつた。

もしこれが自身の正式な戦力であつたのなら彼は言葉すら掛けず、明確な拒絶と断絶だけが其処にあつた。そして、どう使い潰すかだけを考へていた筈だ。

所詮、凜花にせよ、きららにせよ、アサギから借り受けた戦力であ

り、お客様でしかない。彼女達をどう思おうが、甘く扱うしかないのである。

それでもなお責を全うしようとしたのは、言葉通りに認めていたから。

自身に与えられた任務を全うしようとする姿は、かつて頼りにしている口にした尚之助の姿に似る。彼もまた、もう嫌だと何かを投げ出すような人間ではなかった。

凜花ときららが、そのような人間であろうとするのなら、甘さを見せてやれる。考えなしの無鉄砲ではなく、其処に反省と改善の意思もあるのなら、期待はできずとも猶予を与えられる。

「獅子神、お前は どうする?」

「……………忌神は神気を消耗し過ぎて暫く使えない。もう私は、役に立たない」

「そうか。なら、来た道を戻れ。どうやらこの結界、内に誘い込む事に特化しているようだ。内から外に出る分には迷わされることはないだろうよ。外に出たら物陰に隠れて待ってろ」

己の意思を見せる二人を前にしてもだんまりを続けていた自齋であったが、小太郎に声を掛けられてようやく口を開く。

既に彼女は心を折られている。

尚之助が一時的には言え、忌神を行動不能な状態にまで追いやった。今まで、誰にも止められないと思っていた荒ぶる神が。

自齋自身にも、周囲にもどうしよもなかった驚異が、今や無力に等しい状態に陥っている。その現実、今まで彼女が歩んできた道の否定に他ならない。

もつと方法があつたのでは。それを選んでいけば、傷つけずに済む人もいたのではないか。

もつと手段があつたのでは。それを選んでいけば、孤独に過ごす必要もなかったのではないか。

無駄な孤独。無駄な時間。無駄な犠牲。

今までの全てが無駄であったのではないか。その考えが、頭にこびりついて離れない。

とてもではないが戦えない。心が奮い立たない。戦えるだけの力が生まれえない。足手纏いにしかならず、足を引っ張るだけならいまい方がマシ、と心底からそう思っていた。

自斎の内心など全て分かっていたのだろう。

小太郎は短く彼女の言葉を受け入れると、短く指示を出す。視線すら向けていない。

そして――

「意志薄弱では何も出来やしない。そんな奴は邪魔なだけだ。さっさと帰って一人でいてくれ。一生やってろ」

――何とも強烈な言葉を口にした。

「……………のよっ」

「あ？ 何か言ったか？」

「貴方に、何が分かるのよっ!!」

「逆ギレかよ」

「…………ちよ、ちよつと」

「自斎ちゃん、落ち着いて。アンタも言い過ぎよ……………」

「私は、こんな力欲しくなかったっ！ 生まれた時から訳の分からない神に付き纏われて、関係ない人を傷つけてっ！ そんな経験、貴方にあるわけ!?!」

「――」

「私だって、一人でなんていたくない！ 捨てられるなら捨てたかったわよっ！ でもどうしようもなかったっ！ 貴方なら何とか出来たの!?! 人の気も知らないで、勝手なことを言わないで!!」

彼女の気持ちを全く考慮していない小太郎の言葉に、溜め込んできた不満が吐き出される。

好きで一人で居たわけではない。叶うのなら、人並みの生活をして

いたかった。神の暴威など気にせず、同い年の友人を作って遊びたかった。けれど、決して口にした事はない。

そんな事が不可能なのは分かっていたし、何よりも必死になって神遁の術について調べて周り、己を救わんとした両親の背中を見て育ったから。結局、両親は自分達ではどうにもできないと諦めて投げ出したが、その背中は今も尚、自齋の両目に焼き付いて離れない。

決して不満など口にできる立場ではないと理解している。

それでも尚之助によって折られた心からは、普段ならば露わにしない偽らざる本音が、止めどなく漏れていく。

単なる八つ当たりであるなど、彼女が誰よりも分かっているが、壊れそうな心を守るために吐き出さずにはいられない。

それは獅子神 自齋という少女の絶望の悲鳴だった。これまで与えられた理不尽を、溜めてきた不満を、喉が涸れるほどに叫び続ける。凜花もきららも止めるべきだと分かっているけども止められない。口にした科白がどれだけ身勝手なものであったとしても、叫ぶ自齋の姿は血を吐くようで見えていられない。

「……………はあ……………はあ……………はあ……………」

「好き放題言いやがる。だが、だんまり決め込まれるよりはマシか……………そうだな。オレはお前みたいな奴に絡まれたら、必ずこう言うと決めている。お前のことなんざ知るか、つてな」

「……………」

「お前も舐めてるよ。甘ったれてる。自分のことを語らずに、自分のことを知って貰いたい？ 考慮して欲しい？ ありえねえよ、そんなこと。お前がオレに何をしてくれた。自分は何もしちゃいない癖に、自分は何かして欲しいってか？ 笑わせてくれる。甘えるな。そんな道理、通る訳がねえ」

「……………つ」

「両親に捨てられる事を受け入れたのもお前。一人で居ると決めたのはお前。神様の制御を諦めて何もしなかったのもお前。オレが何故、お前が選択した事柄の責任を取らなきゃならねえ。知ったことかよ。」

自分一人でやると決めただろう？ だったら最後まで一人でやれ」

何処までも正しく、だからこそ何処までも無慈悲な科白だった。吐き出したものを全て吐き出し、冷えた頭と心には刃となつて突き刺さる。

お前が今まで許されたのは、誰もがお前を恐れていたからではなく、お前を慮つてお前の態度や勝手を許容してくれていたからに他ならないと現実を突き付けるように。

「オレに何が出来たかと聞いたな。そうだな。オレが神遁を手にした上で制御が効かないという前提なら、まずは調べた」

「……な、何を」

「色々だ。お前に関する情報は調べた。お前の裸眼で見た者は例外なく神にぐちゃぐちゃにされるようだな。だが、曖昧でよく分からんどの程度の距離で見ても、神様がどの程度の距離まで向かっていくのか。日中と夜中で違いはあるのか？ 裸眼でなければ？ カメラやHUDの類を介したらどうだ？ 神が襲い掛かるのは人だけか？ 智慧のない獣も含むか？ 発動までの時間は？ 何秒見れば崇られる？ 或いは、神の顕現時間はどれくらいだ？」

「……………」

「何故、神の制御が効かない？ 神の名は？ 気になる事なんていくらかもある。神遁の情報は五車の書物にも殆ど残っちゃいない。だったら、手探りで試すしかない。あー、何？ その過程で誰かを傷つけるかもしれないって？ 馬鹿言うな、一人で調べられることなんざいくらでもあるだろうが」

「……………」

「それで打つ手がなけりや、いよいよ封印だ。どうやらお前に宿つた神気とやらは両目に集中しているらしい。だからこそ、神が攻撃するトリガーになる。なら、両目を潰すのも一つの手段だな。オレだって神の更なる暴走を招きかねない真似はリスクー過ぎて馬鹿げていると思うが、試してみる価値はある。オレは孤独をどうとも思わんが、

出来ることが限られてくるのは問題だからな」

「……………」

「焦り、嘆く両親を見てきた。お前自身も追い詰められていた。だから視野狭窄に陥るのは仕方ない。その点はオレも認める。だが、甘い。お前は半端だ。覚悟も行動も何もかもな。全部投げ出して助けを求めるのだから一つの手段だ。それすら出来ない、したくないと諦めるなら自害しろ。助かろうとしない者は誰も助けられない」

「……………」

「繰り返すぞ、甘えるな。助けて欲しけりや、助けて欲しいと叫べ。お前は一般人じゃない、対魔忍だ。だから、対魔忍が何も言わずに守つてやる範疇にはない。一人が嫌なら自分のやれることをやれ。周りに人が寄ってくるのはそういう奴だ。頼りにならねえ奴には誰だつて頼れねえよ」

滔々と語る口調は、苛立ちとは無縁だった。

彼女を慮っていたわけではなく、彼が語る行為を実行に移したとして神を制御できたとは限らない。正しいかどうかは判然としなかったが、尤もだと感じたからこそ何一つ言い返せなかった。

間違つてはいまい。自斎も両親も完璧を求め過ぎていた。

与えられた強大で魅力的な力。神と呼ばれる存在を制御出来るのなら、その方が望ましいのは事実だが、理想に目が眩んでいたであろう事は否定できない。

両親が自斎にどのような未来を求めたのかは分からない。娘を使つて獅子神の名を知らしめたかったのか、ただ娘の安全を願っていたのかは定かではないが、神を完全に制御するなど土台無理な話。

神とは人智の及ばぬ存在。例え言葉を交わせたとして、心を通じ合わせたとしても、人と神の思考回路は根底から異なっており、決して分かりあえぬ理が其処にある。

彼女達は最初の一步を間違えた。

制御できぬものを制御しようと全てを費やすのではなく、まずは周囲に被害の及ばぬ方法や使い方を探るべきだった。であれば、周囲に

助けを求める余裕も生まれただろう。

最初から高い目標を設定し、それを一度で実現できるのが最も望ましい。正に理想的だ。だが、そんなものは幻想に過ぎない。如何なる偉人、如何なる天才、如何なる偉業であつても始めの一步は失敗と試行錯誤、或いは低い目標達成の繰り返し。

完璧であろうとすればするほどにリスクは増していく。難易度は上がり、速度は落ち、必要以上に慎重になって本来の力を全く発揮できなくなる。その度に落ち込んで上手くいかなくなる悪循環に陥ってしまう。

完璧を目指すよりも、まずは一度終わらせることが全ての物事に共通する重要事項。

完璧でなくともいい。どのような形であれ、終わらせれば見えてくるものがある。改善すべき点、妥協すべき点が明らかになり、結果的に自らの理想となる完成形に早く近づくことが出来る。

それは小太郎が何よりも肌で感じていた事実でもあった。

母から与えられる訓練の数々は無理難題の山と言つても過言ではなく、どう考えても当時の自分では終わらせる事は不可能としか思えなかった。

だが、まずはやれ、と力尽くで首根っこを掴まれて放り込まれ、その度に目標には微塵も到達できずにいたが、失敗を繰り返す度に少しずつ少しずつ前に進んだ。

そうでもなければ何度となく死ぬ。死からの蘇生は約束されていたものの、精神が何時まで持つか分からない。同じ失敗で死ぬ余裕など始めから与えられていなかった。

そして、毎回違う失敗を繰り返すことで一つずつ改善すべき点を見つめ直し、実現可能な範囲を見出していくことで、彼は建設的で合理的な思考を身に付けた。

狂気の沙汰そのものの教育・鍛錬であるが、死と蘇生を前提にしていなければ方法としては至極全うである。最も、これをにこにこ微笑みながら課した母も、逃げられないからと小太郎が受け入れてしまった時点で全て台無しである。

「……………私に、できるの？」

「さあな。お前次第だろうよ。どうしようもない今から抜け出したけりや、諦める以前にやるしかない」

「……………なら、まずは」

「この任務を問題なく終わらせることだろうな、それが最短距離だ。任務が失敗すれば、別の誰かを見繕うためにお前の証言も必要になって時間を取られる。遠回りだ。どうだ、お前に何が出来る。まだ手足は付いてるよな？」

「まだ……………まだ、剣を握れる、剣を振れる……………まだ、戦えるわ」

「決まりだな。ぐだぐだ俯いてないで前を向け。焦りは何の役にも立たない。後悔はなおさら役に立たない。前者は過ちを増やし、後者は新たな後悔を生む。まずはやれ、話はそれからだ」

それは、自齋にのみ向けられた言葉ではなく、他の二人にも向けられていた。

失敗を取り返そうと焦っては同じ失敗を繰り返す。後悔を胸に行動しても十全の力を発揮できず、何も無い所で躓いてしまう。

当たり前の事実だが、焦る者も後悔する者も分かりやすい陥穽にすら気付かなくなってしまう。

これ以上足を引っ張られては堪らないという本音が混じった、隊長として果たさねばならない責務を全うするために敢えて口にした言葉だった。

「——行くぞ」

小太郎の言葉がどのように届いたのかは、彼女達にしか分からない。い。

言えたのは、それぞれが踏み出した一步は隊としての纏まりを帯び始めていた事と俯いている者は誰一人としていなかった事だけ。

雨降って地固まる。

小太郎にとっては喜ばしくもない、自身の未熟さが浮き彫りになる結果であつたが——独立遊撃部隊としての任務が、今ようやくやくしまつた。

作戦はなくとも戦いの下準備は入念に。隊員の気構えも準備に含まれます。

「で？ 実際の所、どうなのよ？」

「何が？ 必要な部分を省いて喋るな。誤解の元だぞ」

「言わなくても分かるでしょ？ 私達だけで、エウリユアレーに勝てるかどうか、よ」

独立遊撃部隊の一行は、小太郎を先頭にして再び洞窟の内部を進んでいた。

トンネル内部の時のように、拾った小石を投げて空間の切り替わりを探りながらの道程。

不和による沈黙ではなく深い集中による沈黙の中、心に浮かんでいた不安と疑問を吐露するようにきらは口を開いた。

当初は不意に遭遇した骸佐側と手を組んでエウリユアレーに当たる予定であった。

だが、矢車の暴走と呼応した三人の行動によつて全てご破産になった。予定していた戦力が用意できていない以上は、勝つよりも負ける可能性の方が遥かに高いと考えるべきだろう。きららの不安と疑問も尤もである。

「鬼崎。まず前提として、オレ達の任務はなんだ」

「エウリユアレーを倒すこと」

「……………お前、大概にしとけよ。いくら戦闘特化だからって自分が出たら即戦闘って考え方止めろ。おねがいだからほんとやめて」

「な、何よう、そ、其処まで不安にならなくても……………」

「きららちゃん……………」

「不安にもなるだろ。任務の内容はあくまでも行方不明の部隊員の救出とエウリュアレーの目的を探る事だからな。必ずしも戦う必要なんてねーんだよ」

「うっ……そ、それもそうね。うん、分かったた。分かったたわよ?」

これまで携わってきた任務内容故か、自らの向いている任務がどのようなものかを把握していたからなのか。

任務Ⅱ戦闘、という凝り固まった思考に捕らわれていることを指摘されたきからは、慌てず騒がず取り繕う。頬を朱に染めているのは御愛嬌か。

きららの隣では呆れたような視線を向ける凜花が居たが、小太郎に言わせれば彼女も大概戦闘特化。思考回路は似たりよつたりなのが不安を煽る。

それでも必要以上に欠点を突くのは止めておく。

きららはきつく接すれば接するほどに反発を招く性格だ。批判や指摘はそこそこに、呆れや放棄を見せてやった方がよく自己を省みるからだ。

「実際、戦闘になるかは半々だ。交渉で済むならそれに越したことはないが、どうかな」

「根拠は? こんな大掛かりな魔術を仕掛けているなら相応の目的があるとするべきでしょう? そう簡単に退いてくれるとは思えないけど……」

「尤もな意見だが、オレの経験則として魔術師の性格は大きく三つに分類される。探究型、追求型、中道型の三つだな。エウリュアレーは典型的な追求型。こっちの尺度で目的を推し量るのはそもそも間違ってるタイプだ」

「小太郎、それだけじゃ分からないわ。もっと詳しく説明して」

「ざっくり言うとも術を学問みたいに捕らえているのが探究型。自己の欲望を満たすために手段として用いるのが追求型。その両方の性質を備えているのが中道型ってところか」

聞き慣れぬ単語に三人は首を傾げたが、無理もない。これらは彼の経験に寄るところが大きく、勝手に作った分類である。

魔界にも魔術師界限にもそのようなカテゴリーも単語も存在せず、余人には測りようがない。凜花は更なる説明を要求し、小太郎は当然だなど語り出す。

まず探究型は研究者・学者としての気質が強く出たタイプ。

魔術そのものを自己の研究成果として捕らえており、大抵は真理やら自己の知的欲求を満たす事、或いは崇める何かに仕える以外に興味を示さない。

多くは自身の工房で研究をし続ける引きこもりであるが、目的が一致した場合は手を組んで邪教団などを立ち上げる。

知的欲求を満たすことが最優先であるため、民間人の被害が最も大きくなる。目的にもよるが、最悪の場合は世界が減る自体にまで発展しかねない。

性格は桐生 佐馬斗や姉である桐生 美琴。二人の師であるフルストなどが近く、始めから妥協がないために協力、交渉するのが難しい。だが、目的がハッキリとしているために先を読むのは容易いとも言える。

次に追求型は自己の基準のみを生きる指針としているタイプ。

魔術はあくまでも自己の欲望を満たすための手段であり、世界の真理やら道理など気にしない。

特定の根城を持たずに放蕩と徘徊を繰り返す者、特定の居城を構えて移動しない者、自らを頂点とした非合法組織を立ち上げる者と多くは快楽主義で刹那的、気紛れと最も先が読めず厄介とも言える。ただ、長期的な計画性を持たないために周囲への被害は控えめ。あくまでも探究型と比較した場合であるが。

小太郎の知る追求型は、アマダハラの鋼鉄の魔女か。エウリユアレーの残した伝説、逸話からして間違いなく此処にカテゴリーズされるだろう。

最後の中道型は、探究型と追求型の特性をバランス良く持つタイ

プ。

周辺への被害と自己への評判を天秤に掛けた上で利益を求めて行動に移すリスク管理を常に念頭に入れており、前者二つに比べて最も社会性と社交性が高く、人類や社会に被害をそもそも齎さない場合が大半。

世の道理、社会秩序、組織の掟を優先する傾向にあり、同業と群れて縦横の繋がりが強く、弟子を取って自身の高めた魔術を後に継がせようとする。総じて全うな人間に近い感性を持つ者が多く、掟を破つた者には容赦がない。最も数は少ないが、魔術世界の秩序を支えるのは間違いなく彼ら。手を組むのならば最も理想的かつ有益である。

有名所でこれに分類されるのはアミダハラの大魔道士ノイ・イーズレーン。小太郎も繋がりを持ち、強大な力を持ちながらも好々とした性格をした魔術師である。

「追求型の基準はよく分からん。蟻の巣を見つけたら、意味もなく一匹一匹潰すような奴らだ。何故と聞いても楽しいから、面白いからという答えしか返ってこない。知ろうとするだけ無駄な奴らだよ」

「それで交渉なんて無理なんじゃ……どうやっても戦闘に発展しそうだけど……」

「ただ、どうにも手緩い。そもそも、こつちを潰したいだけなら最初の罾で確実に殺せるようにすりやよかっただろうし、矢車どもと戦っている時に横槍を入れ放題だったのに、それすらなかった」

「こつちを試してるってことかしら……?」

「さー、どうだか。考えるだけ無駄で、からかって遊んでるって印象が強い……が、もしかしたら、オレ達の誰かが目的なのかもな」

「……えっ? ちよ、ちよつと待ちなさいよ! それじゃあ、私達が来るのを分かってたってことじゃない! なら、誰か内通者が……!」

小太郎は己が感じている違和感を包み隠さずに口にする。

おかしい点は多々あった。ただ、殺すだけ、排除するだけならばいくらでも手段も機会もあった筈なのに、決定的な瞬間というものが一

切訪れておらず、エウリュアレーは静観の一手。

そして、先に入っていたとは言え、権左達には使い魔による襲撃を行ったのもまたおかしな話だ。これでは、後からやってきた小太郎達を奥へ奥へと誘うようではないか。独立遊撃部隊のいずれかに興味を持つている可能性は極めて高い。

対魔忍そのものに興味を抱いているのなら、連絡を立った調査部隊だけで十分だろう。

サンプルケースとしてより多くを求めているのなら、独立遊撃部隊を招き入れたのは分からなくもないが、やはりこれまでの静観している意味がない。

ならば、考えられるのはそもそもの目的が独立遊撃部隊の誰かにあること。

調査部隊の拉致は独立遊撃部隊を引きずり出すため。手緩さは独立遊撃部隊の誰かを引きずり込むため。権左達のみを使い魔で襲撃したのは邪魔者の排除のため。全てに説明がついてしまう。

そして、いの一歩に考えつく可能性をさらは慌てて口に出した。口に出さぬだけで他の二人も同じ思いなのは、歪んだ口元から明らかだった。

「それはない。今回の編成はアサギ校長が一人で決めたもんだ。内通者が居たとしても誰を選んだのかまでは分からん」

「じゃあ、どうやって……？」

「腕利きの魔術師だからな。要素が整えば占いで未来予知や出会う運命くらいは読める。何なら使い魔を使って五車の内部を探ってもいい。事細かにも分からんし、確実性もない漠然としたものだろうが、相手はトリックスター。面白いと感じれば、どんなリスクも度外視だ」

「本当に、碌でもないわね」

「魔術師なんて総じてそんなもんだ。他者のための自制を期待する方が間違ってる」

占星術を筆頭とした占いであれば、簡単な未来予知も可能であり、自他の運命すらも読み解けるようになる。

自然に存在する野鳥や小動物を使い魔として、視覚や聴覚を共有する事で情報を集めることも可能だ。

どちらも魔術の基礎ではあるが、魔術師としての腕前が高ければ高いほどに精度も隠匿性も向上する。エウリユアレーほどの魔術師であれば、面倒な交渉や報奨の支払いの必要となる内通者の存在など無用の長物に過ぎない。

そも、エウリユアレーはこれまでアミダハラを拠点にしてきた。

対魔忍内部に内通者を探すにしても目撃されてからの時間が短すぎて不可能に近く、追求型は長期的な計画など練れはしない。内通者の線は考える必要性はないだろう。

「なら、誰が目的なのかしら？　小太郎は兎も角、私達は魔術師なんかと関わりはないわよ」

「オレと凜花の線は薄そうだ。オレは特定の魔術師以外と関わりなんて持ってない。能力的に見ても、エウリユアレーの興味を引くほどじゃない。となると、高位鬼族である『霜の鬼神』を母に持つ鬼崎か、神遁の術を使える獅子神が本命ってところだ」

「……ええ、私達、殆ど無関係じゃないの」

「好きで神様の力を借りてるわけじゃないのよ、こっちは……！」

「力を生まれ持った者の悲哀だな。力そのものに責任はなくても、魅力はある。引かれる奴は相手の意思なんてお構いなしだ。御愁傷様」

小太郎の語る推察に、きららは余りの理不尽さから渋面になり、自齋は怒りを露わにしていた。

自分自身にはどうにもできない現実が、エウリユアレーなどというトリックスターを引き寄せたとあつては二人の反応もむべなるかな。

だが、二人の反応は良い傾向でもある。偽ることなく本心を吐露するという事は、確かな信頼が生まれている証左。特に、自齋などこれまでの人生で感情を押し殺して生きてきた。劇的な変化と言えよう。

しかし、小太郎は何処吹く風であった。

彼は確かに他者よりも秀でてはいるだろうが、特別な能力も才能も持っていない。あくまでも、その気になれば誰でも身に付けられる技能をより多く、より高く修めているだけ。それでも多くの対魔忍よりも優秀な結果を出しているのは、誰でも出来ることを誰よりも速く、誰よりも上手く熟しているからに過ぎない。

魔術師にとっては特に目を引く存在ではなく、面白味もない存在。特別な能力を持つ二人の心境など考慮せずとも当然であった。

「でも、仮に二人が目的だったとしたら……」

「即戦闘だ。調査部隊を人質に取られたとしても交渉には応じられない。救出対象と救出部隊の隊員との人質交換なんぞ、救出対象が変わるだけだからな」

「何よ、結局戦闘を前提に考えてるじゃないの」

「違うからな？　戦闘はあくまで前段階で手段だ。本命は調査部隊の救出。エウリユアレーを倒すまでやりあう必要はない。救出したら即撤退。いらんリスクまで背負わん。分かったか？　分かったって言うって??？」

「わ、分かっているわよお。それくらい当然じゃない」

（絶対、分かっていたわよね……）

会話は回りに回って、最初の位置に戻ってくる。

これまでの推測には全て根拠はない。況して相手が追求型ならば、小太郎の言う通りに推測自体がそもそも無駄。よって交渉になるか、戦闘になるかは五分五分から動かない。

その事実には一度は取り繕ったきさらは損をしたとばかりに、豊満な乳房を揺らしながら胸を張った。

が、改めて小太郎が釘を指すと、先程と同じように取り繕う。その姿に凜花と自斎は不安を煽られているようだ。

小太郎は小太郎で呆れ顔であるが、不安はないようであった。

余計な反発さえなければ、根が素直な分だけ扱い易い部類。少なく

とも自身の失敗を他者のせいにしなだけ随分とマシ。好き勝手に動かなければ思考の短絡さ、無鉄砲さは都度修正してやればいいだけの話だ。

「それで作戦は、どうするの？ 正直、私達はエウリユアレーがどれほどの実力なのか分からないから提案も出来ない。小太郎なら、何か調べてきているでしょう？」

「まあな。立てられる作戦だが——生憎と存在しない」

「はっ、はあ!?! どういうこと?!」

小太郎に全幅の信頼を寄せる凜花は、偽ることなく事実を語る。

相手の実力は、これまでの事態から明らかに自分達よりも上だと肌で分かっている。

まともにやりあえば、どんな搦手を忍ばせてくるか。とても対応しきれるとは思えない。他の二人も同様の所感を抱いているだろう。

落ち着き払った態度を見せている小太郎だけが唯一の光明であったが、返ってきたのは諦めにも似た言葉だった。

「落ち着け。何も諦めた訳じゃない。その場では指示は出す。ただ、オレ達の連携は拙い。今日、初めて組んで任務に当たるわけだからな。それぞれの限界値が何処にあって、何が出来るのかを把握しきれていない以上、予め行動を決めておくと逆に首を絞める結果になるだけだ」

「それはそうでしょうけど……」

「それに、ずっと視線を感じている。結界の奥に進めば進むほど強くな。エウリユアレーはこっちを見てる。もしかしたらこの会話も聞かれているかもしれない。とつくの昔に奴の腹の中にいるんだ、驚きには値しないだろ？」

「何もかも筒抜けってことね……」

「作戦を立ててもバレてちゃ意味がない。なら、先に勝ち筋を潰されない分だけ、行きあたりばったりの出たところ勝負の方がまだ目があ

る」

エウリュアレーの視線は、ずっと感じていた。

遠見の魔術でも使い、魔術触媒としてお決まりの水晶越しに此方を眺めているのか、粘つくような気味の悪い視線が途切れぬ。

更にはこれほど高度な結界であれば、内部への侵入者を探れるような機能を付与されていたとしても不思議ではない。

依然、不利な状況に変わりはなく、作戦を立てたくとも立てられない状況下。

ならば、付け焼き刃な上にバレてしまう作戦を立てるよりも、相手に情報を与えずに個々人の能力を最大限に発揮する方法にシフトした方がまだマシというもの。任務の達成と勝ちの目が消えてなくなった訳ではない。

「今までの事で分かるだろ。相手はこっちを舐めてる。なら、その部分を容赦なく刺す。戦闘における情報のアドバンテージはこっちにある。有名人はこういう時に手の内がバレてて不便だ。オレもいくつか対魔女用の備えを用意してある。勝ち目はゼロじゃあないさ」
（……………そう言えば、さっきあの銃を何処から取り出したのか聞いてなかったわね。視線を感じてたつてことは、私に霧を出させたのはあの二人だけじゃなくて見てるエウリュアレーの視線を塞いで手の内を隠すためってわけ。呆れるくらい先々のこと考えてるわね）

油断、慢心、侮りは差を容易に崩壊させる。

天地ほど離れている実力差であろうとも、見下ろす側の精神的な隙が勝敗の天秤を見下されている側へと傾けさせた例などいくらでも存在している。

ならば、それは小太郎の得意分野だ。

単純な実力という点ならば独立遊撃部隊の中で最も弱いのが、同時に相手の心理を読み切つて隙を突く手管は最も危険で厄介である。

彼の戦い方と手腕を矢車との戦いで目撃し、凜花と自斎の救出の際

の疑問も解消され、きららは呆ればいいのか感心すればいいのか分からなくなっていた。

恐らくは、本来ならばあり得ない武器を何処からともなく取り出したのも、今回の任務に合わせて用意していた備えの一つだろう。

手の内を誰にも明かさない利点を理解できたきららは、無策と言っても過言ではない方法であつても不満を抱くことはない。

「それから獅子神、お前の忍法の件だが……」

「さつきも言ったけど、今は多分使えないわよ。顕現してくれるかさえ分らない。出来ても一瞬でしょうね。まるつきり根拠はなくて直感だけど。その上、誰に向かつていくか分からない文字通りの爆弾よ。使わない方が懸命だわ」

「そうか、十分だ。それに間違いなくエウリユアレーに向かつていく」

其処で初めて、小太郎は足を止めて背後を振り返った。

自身が想像していた以上の纏まりと土気の高さに驚くと同時に、三人の評価を改めねばならないとでも考えたのだろう。

相変わらず頭の中では命令を無視される前提は消えていなかったが、目をかけるだけの価値も見出しつつあった。

「理由を聞かせて貰える……?」

「ああ。これまでお前が忌神と呼ぶ者が暴走する事件の詳細を調べたが、どうにも近い者から手当たり次第って訳でもないらしい」

「そう、だったの? ごめんなさい、よく覚えて、いないわ……」

「それはいい。さつきも言ったがお前の境遇は同情に値する。シヨツクで記憶が曖昧になつても仕方がないからな。結論から言えば、忌神はお前にとつて危険な存在から襲い掛かっているように思える」

小太郎の口から放たれた言葉に、自斎は驚きを見せなかった。

危険な存在と認知しているのなら調べるのは当然であり、彼女自身が危険な能力だと自覚している。非難など出来ようはずもない。た

だ、忌まわしい記憶であることに変わりはなく、表情は青褪めていた。かつて起きてしまった忌神の暴走。

一度目は神を制御しようとした末の失敗。二度目は一度目の失敗で犠牲となった者の遺族による怨恨からの襲撃と両親と自斎自身の危機による顕現。三度目以降も似たようなものだ。

残されていた記録と報告書から小太郎が目をつけたのは位置関係と被害の順番であった。

いずれの暴走においても自斎の傍には両親が存在していたのだが、忌神の暴走による直接の被害ではなく、殴り飛ばされた被害者との接触や破片による傷などの二次被害の域で怪我を負っている。

そして、直接の被害を受けた者を調べていく内に、見えてきた事柄がある。

一度目の暴走は両親の盟友にして名うて対魔忍から被害が始まっており、二度目の暴走は自斎に最も恨みを抱いていたと思しき者から始まっていた。

自斎にとって実力は勿論の事、彼女に対して向ける感情の全てを考慮した上での危険性が高い者から襲われている、と推察できる。

「推測に推測を重ねるしかないが、神遁の術は人と神の間に強制的な共生関係を構築する術なんだろうよ。だから、既に滅びて顕現できない古い神の力を借りる」

「忌神としても私に死なれたら困るのね。そうなれば、自分もまた存在できなくなるから」

「それもあるかもしれないが、今は友好的な存在でもないのは確かだ。言ってみれば、忌神とやらも立場としてはお前と変わらんからな」

「……………どういこと？」

「考えてもみろ。ある日突然蘇ったと思ったら、首輪をつけられた拳句にお前は犬だと言われて引き摺り回される。そんなもん、神様じゃなくても誰だって怒るだろ」

「それ、は——」

当たり前前の道理を、無慈悲に自斎へと叩き付ける。

人であろうと、神であろうと、知性と感情を有するのであれば、己の権利と自由、幸福を求めるのは至極当然の有り様だ。

それが出来ないのであれば、誰であれ怒りを覚えるであろう。本来は与えられるものを得ようと躍起になる。その為ならばどのような犠牲も払い、どのような被害にも目もくれまい。

互いに背けあってきたからこそ、何時まで経っても余計な被害を齎したのかもしれない。

僅かなボタンの掛け違いだけで、取り返しの付かない結果を招き続けたのかもしれない。

己を責め続けてきた自斎にとって、その言葉はどう届いたか。決して、心地いいものではないことだけは確かだろう。

何かが僅かでも違っていたのなら、誰一人として死ぬこともなく、傷つきもしなかったとしたら。目を閉じ、耳を塞ぎ、口を噤んで生きてきた結果が現状を招いたようなものだから。

「重ねて言うが、別に責めてる訳じゃない。境遇を考慮すれば——」

「いいわ。何も言わないで。気を遣ってくれて、ありがとう」

「自斎ちゃん……」

「……………そうか。ならいい。ブチかますタイミングは好きにしろ。安全を取ってもいいし、一か八かに賭けてもいい」

「随分、曖昧ね。それでいいの？」

「構わんさ。神々と因縁のあるエウリユアレーにとってお前は大砲みたいなもんだ。其処にいるだけで意識を裂かなくちゃならない。使えようが使えまいが、どっちだって構わんし。手の内を明かすからこそメリツトになる場合もある」

「成程、嫌らしい手ね」

凜花ときららの心配を他所に、自斎は仮面の下でいつそ清々しくすらある表情で微笑んだ。

今まで自らの進む道は一切が闇に閉ざされていた。ならば、例えそれが自身の愚かしさを想起させるとしても、一筋の光明となり得るならば構わない。

俯いて蹲っているばかりの愚かさは身に沁みて理解した。目を逸らし続けた現実とも向き合った。後は、前に一步を踏み出すだけ。相変わらず不安はあるが、迷いはない。やれる事、やらなければならぬ事は山程あるのにまた一つ増えてしまった。優柔不断も遅疑逡巡もしている暇など何処にもないのだ。

自斎の言葉に小太郎はそれ以上何も言わずに納得し、頷いて指示だけを出す。

忌神が顕現出来ようが出来まいが、関係はない。

出来たとすれば、エウリュアレーを討つだけの一撃となる。忌神の一撃であればあらゆる物理攻撃を無効化する魔術防壁を張ったとして、抜けるだろう。神としての位階と格はそれほどまでに頭抜けている。

出来ないとしても、自斎自身ですらどうなるか分からない以上は、エウリュアレーは来るか来ないかすら分からない一撃を警戒して、延々と気を散らされ続ける。

自斎の言ったように嫌らしい手だ。

敢えて手の内の一部を開示することで、必要以上の警戒と注意を招かせる。

その上で開示した手の内は、聞かれようが聞かれていまいが問題のない部分だけ。既に神経の削りを、エウリュアレーに対して仕掛けている。

「おっ」

「境界線ね」

小太郎が投げ始めた小石が、虚空に飲み込まれて消えた。

二度目ともなれば、驚きの声は上がらない。凜花が口にするまでもなく、其処に境界線があると分かっていた。

トンネルから洞窟地帯へ移動した時と同様に、小太郎が次の環境が如何なるものであるのかを調べるために片腕を境界線に潜らせ、暫く経ってから頷くと一足先に全身を潜らせる。

各々の決意を胸に三人が続く。向かう先はエウリュアレーの下。刻一刻と近づくのは平穏な終わりか、或いは戦いの時間なのか。いずれにせよ、彼等にとっては僅か先の未来の話である。

素直になる鬼娘。なお苦労人は不安を拭いきれない模様

境界線を抜けた先に待ち構えていた光景は、何とも穏やかなものだった。

日本では決して見られない広大な草原。

足首までの高さの草が生え揃い、遠くには霞のような薄雲を纏った霊峰がいくつも連なっている。

日は傾いて、草原も山肌も薄紅に染め上がり、物語のワンシーンを抜き取ったかのようなようだ。

溜息が出るほど美しい光景だが、元々の居た場所は東京キングダムの倉庫内だった。

その内側に展開された結界魔術がこれほどの規模の空間を再現しているならば、美しさ見惚れるよりも緊張感が嫌でも高まる。

頬を撫でる優しい風も、鼻孔を擦る若草の香りも、気を緩めるには至らない。

「また広い場所に出たわね」

「何の道標もない。こっちの体力を削るつもり？」

「それなら使い魔を使った方が手っ取り早い。誘っているのか、試しているのか」

「私を見つけてみせろ、ということ？」

「だろうよ。遊んでやがるな」

夕日の輝きに目を細めていた三人は、周囲を見回すも敵どころか何かの気配すらない。

気配の無さはいつそ薄気味悪さすらあるほどだ。この規模の草原

で、鳥や虫の気配すら感じ取れない。再現を怠ったのか、演出のつもりなのか。潜んでいる魔女の意図の読め無さは正にトリックスターの名に相応しい。

結局、それぞれではどうすべきなのかの判断できなかったのか、最終的には小太郎に揃って視線を向ける。

魔術に関しての知識を持っているのは他に居らず、同時に隊長である彼の意向を聞くつもりであった。

（これは、まさか……成程、本格的に遊んでるな。面倒な魔女だ。まあ、魔女なんて人種に面倒じゃない奴なんていないだろうが）

「小太郎……？」

「取り敢えず、山の方向に向かう。凜花と獅子神は先行してくれ、途中で川を見つけたら教えてくれ。後詰めはオレと鬼崎でやる」

「分かったわ。でも、どうして山に？ それから川も……？」

「進みながら話す」

周囲の光景に眉を顰めるばかりで反応のなかった小太郎に、凜花は怪我が尾を引いているのではないかと心配を向ける。

しかし、彼女の杞憂を取り払うように小太郎は静かに指示を出し、先に進むよう顎を使って促した。

小太郎は怪我の影響から反応しなかったのではなく、瞳に映る光景に思う所があっただけ。

この情景は、エウリュアレーを調べていく過程で目を通した書物の中に拙い文章力で記されていたものと一致している。

それが意図するところに、エウリュアレーの目的が見え隠れしている事実を思考を巡らせていただけであった。

促されるまま自斎と凜花が足を進める。向かう先は遙か前方に聳えている山々であった。

「結界の中にある風景は術者が再現したものだ。記憶を元になっているのか、想像を元になっているのかの違いはあるが、共通するのは脳から

引き出された情報つてとこ。つまり、必ず綻びがある」

「綻び……じゃあ、それが出やすいのが山や川なの？」

「後は海とかだな。山に分け入る、川を渡る、海に出る。それらはある種の異界へと足を踏み入れる行為だ。魔界側でも人界側でも共通の認識でもあり、魔術的に大きな意味を持つ」

「ああ、三途の川とか、カロンの渡守とかよく言うわよね」

「魔界側でも似たような認識があるらしい。だから、狙うなら其処だ」

人界には国は違えども似たような神話、似たような言い伝え、似たような認識が残っている。

ハイヌウエレ型神話、バナナ型神話。全く異なる神話の中にも伊邪那岐の黄泉下りとオルフェウスの冥府下りのような似たようなエピソードもある。

これらは死がもつと身近だった時代、人々がより長く生きるための智慧が神話という形で言い伝えられからだとも、精神の原型が同じだからとも言われている。

無論、魔界にも似たような話は残っている。

川は彼岸と此岸を隔てる役割を担い、山は神々の住まう場所故に妄りに踏み入るべきではなく、海の向こうは悪魔の住まう異界がある。

理論的に考えるのなら、川にせよ、山にせよ、海にせよ、文明が発展していなかった時代には近づくだけでも命を危険に晒される可能性があったからこそその戒めであったのだろうが、文明が発展した今でも根強く共通の認識として人々の中に残っている。

この共通認識は魔術において時に強大な力を生み、時に致命的な綻びを生む。

例えば、人々に呪いの一品とされる物は、人々の思念や願望がこびり付き、魔術を行使する極めて優秀な触媒となる。

例えば、川などは現実と異界を隔てる境界線という認識は、術者本人の頭と心にこびり付いており、綻びとして現れ易くなる。

エウリュアレーほどの魔女であっても完全に綻びは消しきれない。

どれほど高度な仮想現実にもバグが発生してしまうように、完璧な

結界魔術であつたとしても術者の記憶や想像が完璧でない以上、綻びは必ず生じる。

その綻びが現れやすいのが境界線の共通認識である川・山・海。優秀な術者ほど、そういつたものの再現を避けるものだが、エウリュアレーは例外中の例外。多大な慢心とも取れるが、絶大な実力を有していることも確かであつた。

「……本当に身体は大丈夫なの？」

「問題ない。そつちこそどうなんだ」

「普通の対魔忍と一緒にしないで。私はママの血を引いてるのよ。知ってるでしょ？」

「そうかい、そいつは失礼。重畳だ」

小太郎は先行した自斎と凜花の後に続きながら、声を掛けてきたきららに視線を向ける。

二人に聞こえぬように会話をしていたが、警戒を下げてはいない。先を進む二人の進行方向の状況を探る役割も重要だが、後方からの奇襲に備える事もまた重要なものだから。

僅かに疑るような視線を向けるきららに、必要な分だけ事実を伝える。言葉の頭に『今は』を付けなかつただけで、決して嘘は吐いてはいない。

余計な事実を伝えて士気を下げる必要はない。現状であれば、三人のいずれも無意味な暴走は控えるだろう。

だが、正しく事実を伝えてしまえばどうなるか。時間制限が設けられてしまえば、焦りからそれこそ暴発しかねない。黙っていた方が得策、という判断であつた。

「私達のこと調べた、って言ってたわよね……？」

「ああ。だが安心しろ。あくまでも能力や関わった任務や過去に関してだけだ。興味のないプライベートに首を突っ込んでんじやない」

「べ、別にそういうことを言いたいんじやなくて……」

生来の気の強さを取り戻しかけていたきららの問いに、小太郎は冷やかに返した。

多少マシになったとは言え、男嫌いは健在だ。彼女の抱えた問題は単純だが根が深い。一朝一夕で改善されるものではないだろう。

嫌悪を抱く人間に自身を探られるなど、不快感を抱いても何ら不思議ではない。また噛みつかれるのは面倒だ、と取り付く島もない態度をとったが、返ってきたのは意外な反応だった。

これまでの言動やら態度が頭の中で再生でもされているのか、見ていて可哀想になるほどしどろもどろになっている。

無理もない。彼女は彼女なりに反省はしているが、これまで男とまともに会話してきた事すらない。どういう態度で接すればいいのか、示せばいいのかも分からないのだ。

針の筵に座っている気持ちだろうが努力を怠るつもりはないらしく、しおらしいとすら言える様子で口を開く。

「……なら、私の忍法についても知ってるわよね？」

「……………」

「な、何よ、その目……」

「いや、別に」

耳にした言葉に、少なからず驚きの感情を漏らして視線を向ける。

彼女の言葉通り、忍法についても調べは付いていた。

対魔忍の忍法は五車のデータベースに保管されており、特定の者以外にはアクセスが不可能となっているが、独立遊撃部隊を設立するに当たって今まで組んだ事のない対魔忍と組まざるを得ない状況を見越し、アサギからアクセス権限をもぎ取っていた。

無論、全ての対魔忍がありのままの情報を提出しているとは限らないが、情報源の一つとして有用だった。後は、己の手足を使って地道に調べ上げて情報の信頼性と価値を上げればいい。

その結果、見えてきたのは彼女の忍法に対する思い。

きららにとつて冷気を操る能力が母から引き継いだ誇りそのものだとしたら、発現した忍法は父の血から目覚めた忌まわしいものという価値観であった。

忍法は文字通りにピンからキリまでである。五行思想に則った基本的なもの、戦闘においてのみ強力無比な効果を発揮するもの。逆に自身の身を危険に晒すものもあれば、何故と思うほど無意味なもので。

きららの目覚めた忍法は派手さこそないが、あらゆる状況において効果を発揮する。効果は単純、故に厄介。応用も効けば、使い途も多岐に渡る。正に恐らしい忍法と言えよう。

しかし、これまでの任務において忍法を使った記録はなく、人の口にも話題に上がらず、誰も知らない。

意図して忍法を行使せず、誰にも明かさない姿勢は、彼女の父親に対する複雑な感情が透けて見えてくるかのようだ。

そんな忍法を明かすということは、これまでの姿勢を今は翻そうとしているも同然。きららも考え抜いた末の決断であった。

「正直、意外ではあるがな。いいのか、それで？」

「そりや、色々思う所はあるけど……君には迷惑を掛けたし、また都合が良いって言われるかもしれないけど、信じ、られるし……」

「そうか。まあ、都合が良い云々やらない事はあるが置いておくとして……それで有効な使い途を思いつかない、と」

「……うぐうつ……はい、その通りですう……」

見様によつては精神的な成長を果たして新たな一歩を踏み出した姿とも、風見鶏のように簡単に意見を変えたとも思える姿。

それでもなお小太郎は前者として好意的に捉える事にした。

口先ばかりで何もしようとしない人間よりも、どのような結果になるとしても覚悟の上で行動を起こす人間であれば、まだマシ。彼自身が語ったように、失敗を取り戻す、責任を取るための地味で全うなものという考えとも合致している。

問題があるとするのなら、きらら自身が忍法の有効な使い途を全く考えられていなかった事か。

きららは真を突く指摘に、顔を赤らめて肩を落とした。覚悟を決め、決断を下したというのにこれでは情けないやら恥ずかしいやら。仕方ないと言えば仕方ない。異能そのものの忍法とて道具や技能と同じ。使えば使うほどに練度が上がり、新たな着想を得る。これまで使ってこなかった以上、練度は冷気を操るそれに比べて大きく劣るどころかゼロだ。

実戦でいきなり使用するには不安しかなく、巧く使えるとも思えない。結果、きららが下した決断は素直に頼ることだった。

失敗に失敗を重ねた今は、恥も外聞も男嫌いもありはしない。今は生き残って任務を達成する事が最優先。それを実現可能だと思わせるだけの何かの小太郎にはあった。

これまでの行動で自分を信じて貰えるとは思わない。都合の良いことは百も承知。それでも、まずは自分が信じてみなければ始まらない。

至極全うな結論であったが、それこそが信頼関係を築く第一歩であり、失敗を取り戻すための道でもある。彼女は今、その道を歩み始めたのだ。

「先にも言ったが、オレはお前らが思った通りに動かない事を想定して作戦行動を組む。それを理解した上で言ってるんだよな？」

「……分かってる。仕方ないし、当たり前だと思ってるから。でも……」

「ならいい。幸い、お前の忍法が最大限効果を発揮するためのカードは揃ってる。使うべき場面がくれば、お前でも自ずと分かる」

「そ、それだけ？」

「それ以上は言えないんだよ。この会話も聞かれてる可能性があるからな。まあ、お前の忍法はバレても十分に効果を発揮するタイプだ。その辺りを——」

「……………え？ えっ？ 私の忍法、相手にバレちゃったら意味なく

ない???

「——すまん、オレが悪かった。指示は出す。黙って従ってくれ」

「そ、そう……よかったあ……」

(不安しかねえ……)

頭の上にハテナマークを飛ばしまくるきららに、小太郎は思わず片手で顔を覆う。

きららの忍法に関する評価は最上級。

いつそ自分が使えたら良かったのと思うほど、ないものねだりをしない彼にしては珍しい評価を下している。

物理的な破壊力を伴わず、派手さは欠片もない。

戦闘能力のみを評価しがちな対魔忍、特に若者ならば発現した所で何の魅力も感じないに違いない。

だが、彼女の忍法は戦闘は勿論の事、潜入や調査のみならず、ありとあらゆる場面で効果を発揮する。また、相手に手の内がバレたとしても何ら問題はなく、災禍の邪眼のように極端なデメリットもない。恐ろしいほどの汎用性の高さを秘めている。

ただ、考えなしでも使えるが、最大限の効果を発揮するには相手の思考や心理を読み切らねばならない。

生憎ときらは真価に全く気づいていない様子。これでは宝の持ち腐れも甚だしい。

本来、自分の忍法くらい自分で運用して貰いたいところであるが、これまで使ってこなかった以上は不安を煽る姿も当然の結果。

きららと関わり合いになるなど今回限りと涙を飲み、タイミングも使い方も己が決めると割り切った。

「——隊長、川が」

「そうか。当たりだ」

「何、あれ。川の周りが……」

「アレが綻びだ。エウリユアレーが待ち構えてる最奥部まで一気に跳べる」

先行していた自斎が足を止めて指差した先には、確かに小川が存在していた。

しかし、凜花が漏らしたように様子がおかしい。蜃気楼に飲まれて
いるかのように揺らめき、歪んでいる。

これまでの境界線は人の目では何らおかしいところは見当たらなかった。足を踏み込まねば、何処までも奥行きのある空間が続いているかのようであったが、今回は違う。

川の周囲に存在している揺らめきこそが記憶と想像の限界であり、張り巡らされた結界の綻び。

先に待つは目的も分からず、ただただ己の悦と楽を究めんとするトリックスター、エウリユアレー。

結界の内部に再現された時刻は逢魔ヶ刻。

其処にいる彼が誰なのかよく分からず、皆正体を見失う時。彼は
誰時、誰そ彼の狭間。

大きな災禍を被るであろうと信じられてきた時間帯は、魔女と鬼と神と人が交わる異界には相応しく、誰にも予期できない結末を暗示しているかのようだった。

伝説の魔女もやっぱり魔界の住人。口を割らせるにも力尽くが必要な模様

「……………これはっ」

「酷いわね……………」

「……………」

綻びを抜けた先は、穏やかな草原から一転して荒涼とした原野だった。

それだけではない。原野のそこかしこには死体が折り重なり山を成している。まるで戦争でも起こったかのようだ。

凜花と自斎、きららの三名は鼻腔を突く死臭に怖気から顔を顰めていたが、小太郎だけは予期した光景であったのか、眉一つ動かしていない。

陰惨な光景に目を奪われる三人を余所に、何一つ言葉を口にするこ
となく足を進めた。

何らかの悲劇が起きたであろう場の中心に、一人の女が立っている。

「お前が、エウリユアレーだな」

「……………」

倉庫で目にし、陽炎の如く消え去った対魔忍装束の女だ。

三人にも負けず劣らずの豊満さを誇る肉体。頭巾に隠れた顔も口元だけで相当の美貌と判断できる。

しかし、それらは全て見せかけに過ぎない。食虫植物が虫の好む芳香を放つように、人には理解し難い性根を覆い隠して惑わす隠れ蓑。美貌に釣られた者から喰い物にされる。

「目的は何だ。此方の部隊がお前を追っていた筈だが、何処にいる」

油断なく一步を踏み出した小太郎は返答の分かりきつた問いを投げかけた。

しかし、エウリユアレーはぶつぶつと何らかの呪文を吐くばかりで、まともに会話をするつもりすらないようであった。

それでも動きはあった。まともに会話はするつもりはなくとも、相手をするつもりはあると言わんばかりに。

すつ、と彼女の白魚のような指先がある方角を指し示す。その先にあったのは死体の山だ。

『……………っ』

いくつもある死体の山を目にし、エウリユアレーとの対話全てを小太郎に任せていた三人は息を呑む。

数は多く、見るも無惨な最期の姿だが、対魔忍として任務に携わってきた以上、死体など見慣れている。問題は、見知った顔が山に混じっていた事。

首を断たれ、胴の上に頭の置かれた死体。

尻から入った杭が口から突き出た串刺しの死体。

腹を裂かれて、零れ落ちた内臓を抱くように座り込んだまま絶命した死体。

虚空を眺める半開きの目。何かを伝えようと言いかけたまま歪められた口。整った様相の者は誰一人としていない。

それが自然死であれ、戦死であれ、死に顔は変わらない。人も魔も満ち足りることなく永遠の眠りにつく。何かを焦がれ、悔いを残し、不様な最期を迎えるまで安らかな場所に逝けはしない。

何のことはないありふれた最期——それが、救出すべき対象として資料に乗ってすらいなければ、三人は息を呑みすらしなかった筈だ。

「救うべき対象、仲間の死を前にして、妾との対話を望むか？」
「……このっ！」

嘲るような響きを声に乗せて、口の端を吊り上げるエウリュアレーに激昂しかけたきからは一步を踏み出す。

それ以上を踏み止まったのは独断による失敗の影響か、桁外れの魔術と実力を秘めている魔女に対する恐れ故か。

小太郎はきららの行動を予期していたのだろう。片手を横に出して静止を促した。

冷静さを喪いかけていたきららであるが、視線すら飛ばさない彼を前にしても、何とか逸る血気を抑えてのけた。これ以上、自分のせいで事態を悪化させたくはないのだろう。

「下らない演出はうんざりだ。どうせ、オレ達の会話も聞いていただろうし、見てきた筈だ。お前の目的はオレ達の中の誰かだな？」

「——何故、そう思う？」

「これまでの経緯から明らかだろうが。殺せる瞬間がいくらでもあったのに、一度もそんなことはなかった。それに生死不明にしておいた方が相手は次の選択を迷うのに、わざわざ死体を見せつける。逃げの一手を打たれたくないのがバレバレだ。この結界は内へと誘い込む事に特化している。外へ出ようとする分にはまともに機能なんざしない。そうだろうか？」

何から何まで推測、殆ど当てずっぽうに過ぎなかったが、エウリュアレーは何一つ否定していない。

返ってきたのは問い掛けだけ。それは小太郎の言葉が少なからず真実を射抜いている証左であった。

少なくとも、権左と尚之助は何の問題もなく来た道に戻っていた。

二人に余計な手出しをしなかったのは目的とは無関係な邪魔者でしかなく、また張った結界に侵入者の脱出を阻む機能が組み込まれて

いなかっただからと考えたほうが自然だ。

一度張り巡らせた結界に新たな効果を追加するのは危険だ。魔術は現実離れた現象であるが、歴とした学問であり術理。必ず法則と道理が存在しており、本質は常に同じ効果を発揮する機械と変わらない。動かすためのエネルギーが電気や信号の類なのか、魔力なのかの違いだけ。

故に、術式の起動状態で新たな効果を追加するのは術師本人にも反動という予想の出来ない危険が伴う。機械とて完全に停止させた状態でメンテナンスや交換を行わなければ必ず事故が起こるのと同じように。

仲間の死体を見せつける小太郎曰く、「演出」も、中心部まで足を踏み入れた四人の憎悪を己に向けさせ、逃走という手段を選択させないため。

ならばやはり、エウリュアレーの目的も、四人の内の誰かと見て間違いないだろう。

「それに下手くそだ。どの死体も、顔や体型が本物とはまるで違う」

「違う、って……」

「大した観察眼だ。正に炯眼よな」

小太郎の目には、調査部隊の死体はどう映っているのか。

少なくとも神遁の術を生まれ持ち、神の視覚と重なる特別な視覚を持つ自斎ですら、本物のそれと違いが分からない。

だが、エウリュアレーの口調は自らの術を見抜かれたことを楽しむかのようにであり、彼の言葉が事実であることを物語っている。

考えてみれば当然のこと。

結界の風景がエウリュアレーの記憶や想像を元にしたものであるのなら、転がった死体もまた同様に再現されたもの。

事実が一つであったとしても、複数の認識で見ればそれぞれの現実が生まれるように、どうしようもなく差異が現れる。それを如何に小さくするかが魔術師の腕の見せ所であるが、差異は決してなくならな

い。

そして、小太郎はそれを見逃しはしない。僅かな違和感からでも事実を嗅ぎ付け、見つけ出す。災禍の邪眼を用いた幻術破りの訓練は元より、猜疑心からいま目に映る現実ですら疑いの対象である彼からすれば造作もない。

何も特別な能力ではない。観察力など誰もが持っている。

驚嘆に値するというのなら、その精度を人に許された限界以上にまで高めている点だ。

悠久の時を越えてきたエウリユアレーであつてさえ、初めて目にすると言わんばかりであつた。

「素晴らしい。そなたの考えている通り、仲間は生きている。だが、人間よ。どうするつもりだ？ その程度の力で、その程度の烏合で、このエウリユアレーから奪い返せるとでも？」

「ゼロじゃないさ」

「よく言った。ならば妾は因果を結び、斯くの如く魔を成そう。尤も、そなた等は『魔の因果』に囚われやすい。特に、そなたは。妾が何をせずとも……くくく」

「……何？」

元より交渉で何とかかなるとは思つておらず、戦闘も十分に視野に入っていた小太郎に驚きはない。

魔界の不文律は弱肉強食。『望むものがあるのなら力で奪え』が数少ない絶対のルール。この結果も喜ばしくはないが自然な流れだ。

だが、聞き慣れぬ言葉に違和感を覚えたのも確か。

『魔の因果』が何を意味するのか。魔術世界に関してある程度の知識を持つ彼も耳にしたことはない。

対魔忍であるのなら『魔』と関わる機会も必然的に多くなり、『魔』と出会うこと事態が『魔の因果』とやらに囚われやすいという意味ならば十分に意味は通る。尤も、それだけでは説明の出来ない言いようのない不吉な響きが秘められていたのも事実であつた。

「これ以上は無粋か。仲間を取り戻したくば、対話を続けたくば、妾の剣から生き残ってみせることだねえ——！」

一方的に会話を打ち切ると、エウリユアレーの全身から魔性の気が溢れ出た。

魔力のみならず、悪意や闘気まで凝縮したような目視可能なドス黒い霞が噴出する。まるでヨミハラで垣間見たブラックの本性、本来の姿を彷彿とさせるかのようだ。

霞は彼女の姿を覆い隠し、神秘的な雰囲気すらも剥ぎ取って邪悪な魔女そのものへと変化する。

魔界の深淵に潜む規格外の魔獣の革で拵えた臍の露出する漆黒の鎧。曲がりくねった角を連想させる冠に視界を覆い隠す黒い布。先程まではあった筈の両腕はなく、その先には空中に浮遊する翠の炎を纏いながら柄と刃の根本に巨大な眼球が埋められた二振りの大剣。

人の形を保ちながら明らかな異形異類と伝える姿は伝説と寸分違わず、またその名に相応しい。

「案の定ではあったか。来るぞ」

「よしっ！ 思う存分やってやるわ——！」

「でも、相手が魔女なら魔法を使ってくるわよね？ 近寄らせてくれる？ 紫藤先輩や鬼崎先輩なら兎も角、私じゃ……」

「何一つ安心できないが、その心配だけはない。文献や情報じゃ、奴はバリバリの近接型。単に好みや得手不得手の問題だろうが、後ろに下がらず魔力の全部を大剣の操作や身体強化に回して懐に飛び込んでくる」

「普通の魔女や魔術師のイメージとは違うわね……」

「その方が合理的と言えば合理的だからな。一番前には獅子神が立て。無理に攻めなくていい、防御だけを考えろ。鬼崎と凜花は距離を取ってサポートを。隙を見つけたらぶっ放せ」

「小太郎は……？」

「一番後ろに下がって調査部隊の連中を探したいのが本音だが、それで済む相手じゃなさそうだ」

ようやく回ってきた己の本領を發揮できる出番に、さらさらは拳を掌に叩きつけて気合を踵にする。エウリュアレーの変化した姿を前にして大した気迫だ。

対し、自斎は自らの不安を表に出しながらも背負った忍者刀を抜き放ち、怖気づいてだけはいない。自身が勝利する明確なビジョンがなかりうとも、一歩も退くつもりは無いようである。

戦いを前にした精神状態としてはギリギリ及第点を与えられる。

さらさらは気負い過ぎているし、自斎は自信が無さすぎる。前者の気負いは前に出過ぎる危険性を孕み、後者の自信の無さは敵に押し切られる可能性が高い。

だが、互いにフォロワー可能な範囲であると同時に、幸いなことに精神的に足りない部分を互いに補い合う。さらさらの気負いは自斎の自信の無さを埋め、自斎の自信の無さは慎重さを齎してさららの気負いを足止めするだろう。

小太郎は分かっているが故に、余計な忠告を控え、前に出る選択をした。

それぞれの精神面における弱点はこれまでの道中で散々釘を差してきた。これ以上は逆効果になりかねない。

隊長であり、三人が負い目を感じているであろう己が敢えて前に出ること、暴走や後退を抑えようという腹積りなのだろう。

更に、三者に与えた命令はシンプルそのものだ。

命令に複雑さは何もなく、指針だけを示して細部の行動は各自の判断に任せている。

エウリュアレーが言ったように部隊は烏合の衆。一つの群れとは言い難く、集団行動を熟すだけの練度はない。

ならば、即座に指示を出せる位置に立ち、個々の能力を最大限に發揮できるように指揮する他ない。甚だしい準備不足であるが、この任

が下った時点で分かりきっていたことだった。不満もなければ、既に不安も消えていた。

（遊びの割りには随分と本気だな、魔女め。対アサギレベルを想定しなくちやならんか、これは——だが、オレの前じゃあ悪魔だろうが全席指定だ。真正面から正々堂々不意を討ってやろう）

唯一、想定を超えていたのは、近接戦闘の技能がアサギに匹敵しかねないレベルであった事。

まだ刃を交えていない状態ではあるが、構えだけで実力が伝わってくる。自らの弱さと才能の無さを自覚している小太郎が、相手の実力を測り間違える筈もなく。

神々に奪われたという両腕が存在さえしていれば、大剣の操作に魔術を用いる必要はあるまい。

あくまでも物体浮遊の魔術はエウリユアレーにとって両腕の代替に過ぎず、剣技から外れた動きをする事はないだろう。

事実として二振りの大剣は存在さえしていれば片手でそれぞれ握られている位置にある。それは翻って、エウリユアレーが魔術そのものよりも剣技に自信を持つ事実を現している。

ならば逸刀流の達人たる白斎には対処しやすい相手とも言える。

彼女がどれだけ謙遜ですらない卑屈さで自身を貶めようとも、実力は本物だ。実際に戦った尚之助ですら認むるところだろう。

また逸刀流は決まった型はあるものの、あらゆる忍法を自由に組み込める汎用性と拡張性の高さを誇り、あらゆる「魔」に対抗すべく研鑽された対応性の高さが売り。押されはすれども、決して一方的な展開だけにはならない。

勝てるだけの条件は整っている。

ならば、後はエウリユアレーの裏を掻き、思考を読み切り、用意していた対抗策を披露して型に嵌めるのみ。

準備不足は甚だしいが、押さえる部分は抑えている。後は張られた綱の上を奔り切るだけ。彼にとってはお馴染みの展開であると同時に

に得意分野でもある。

——斯くして、魔女との戦いの火蓋は切られた。

おいしいところを持つてくのは○○キャラの特権

始まった魔女との戦いは意外にも拮抗した状態に持ち込めていた。自斎が矢面に立ち、大剣による猛攻を一身に受ける。

真正面から力で受け止めるのではなく、風に揺れる柳や宙を舞う木の葉のように込められた力を受け流し、捌く。

語るは易いが、実行するのにどれほどの技量が必要となるのか。そも刀とは斬るに向いた武器であり、下手な扱い方をすればすぐに刃は毀れ、刀身は曲がり折れる。

例え自斎がどれほど自らを忍法だけの小娘と貶そうとも、根底には確かに逸刀流の理念と技術が根付いている。アサギや凜子に及ばずとも十二分に達人と呼べる領域に足を踏み入れていた。

「ふふ——ふうっ！」

「——!!」

両腕を広げ、まるで優美な舞のように身体を旋回させながらそれぞれの大剣が自斎の首と胴を狙う斬撃。

薄笑いを浮かべながら放たれた二連撃を前にして、自斎は天地ほどの実力差を感じながらも必死に食らいつく。

首に向かって放たれた一撃をほんの一瞬だけ刀身で受け、折られるよりも速く身を屈めて回避し、続く胴へと向かう一撃を渾身の打ち落としで地面にめり込ませた。

だが、代償は大きい。

魔術によって大剣を操るエウリュアレーに対し、対魔粒子によって強化されているとは言え生身の腕で刀を握った自斎。

刀身から伝わる衝撃はどうしようもなく両手から腕全体へと伝播し、痺れと震えを誘発する。

呆れとも驚嘆とも取れる息を吐き出し、無防備となった自斎目掛けてエウリユアレーは更なる攻撃を見舞わんとし――

「させるわけ――！」

「――ないでしょー！」

――両脇から放たれた冷気と拳に、後退を余儀なくされる。

自斎とエウリユアレーの間合いに割り込むように、きららの放った冷気によつて無数の氷柱が地面から突き出ていく。

さしもの魔女も神話級の鬼「霜の鬼神」から受け継がれた能力を喰らえばただでは済まないらしく、回避に専念せざるを得ない。

更には後方に大きく飛び退っている間にも、凜花による無数の拳が襲い掛かってくる。肘から先を煙に変化させて間合いを伸ばした拳は人中、顎、喉仏、鳩尾、肝臓、急所と思しき部位を的確に狙い撃つ。魔族と人間の身体に耐久や性能、機能に大差はあれども、基本構造は変わらない。

脳があり、心臓があり、四肢で立って道具を使う。それ故に、急所もほぼ同一となる。打撃によつて特定の急所を打ち抜かれれば、引き出される結果も変わらない。

故にか、迫る拳と己の間に大剣を滑り込ませ、その全てを防ぎながらエウリユアレーは地面へと降り立った。

「……………」

一瞬の静寂。

エウリユアレーは笑みこそ消していなかったが、戦いの愉悦に浸るばかりでもなく、冷静に戦況を分析していた。

結界の内部に侵入してきた外敵――二車家幹部との戦いは目を覆いたくなるほど酷い有り様であったが、事此処に至つて彼女達は急速に連携を高め始めている。

きららは攻撃は全てが大威力の大技。放つまでの隙、放つた後の隙

がどうしようもなく存在し、一対一の戦いでは決して連発はできなかっただろう。

凜花の攻撃は隙が少なく、格闘の基本に沿ったものであるが、同じく一対一の戦いでは捌かなければならない情報量が多すぎて、此処まで正確に急所を狙う真似は不可能。

全ては矢面に立った自斎の功績だ。彼女でなければ、これほどまでにエウリユアレーに喰らいつくことは出来なかった。

もし二人が矢面に立っていれば、エウリユアレーは攻撃に専念する者から先に潰してしまえばいいだけの話。たったそれだけで拮抗した状況は崩れ去る。しかし、先頭に立つのが自斎であるが故に、それも出来ない。

そう、彼女には神遁という奥の手がある。

彼女に取り憑いた、或いは力を貸す神は、魔女から両腕を奪った神とも毛色が異なる。

ただの神性存在であるのなら、エウリユアレーも此処まで警戒しなかったであろう。一度は神々に全てを奪われた身、対抗策の一つや二つ用意している。

だが、忌神と呼ばれる名すら失った古の神に通用するかどうか。彼女がこれまで見てきた神々とは文字通りに一線を画す神格を宿しているとは断言できる。

本来、神々は名を与えられる事で人々の思いを受け取り、司る事柄が決定し、形と力を為す人格を宿した自然現象。

忌神などという仮称に過ぎない名が無い状態では、本来は形を為すことすら出来ないはずにも拘らず、あの暴威。数多の神々とは異なるいつそう古い起源と発生経緯を持つであろう神を、警戒しない選択肢は存在しない。

獅子神 自斎が神威を解放させるかの如何に拘らず、片時も目を離せずに厭が応にでも縛られずを得ないのだ。

その時、静寂を割り裂くように乾いた破裂音と甲高い金属音が連続する。

「——チッ」

火薬で押し出された焼け付いた六つの銃弾は寸分違わず魔女の肩間に喰らいつかんと直進し、その全てが大剣に邪魔立てされる。

続いた舌打ちは銃弾を防いだエウリユアレーのものであったか。はたまた銃弾を放ちながらも防がれた小太郎のものであったのか。

三人とは僅かに離れた位置で棒立ちの状態で片手に改造Coint SAAを、もう一方に杖型の蛇腹剣を握った彼は、悠々と回転輪胴シンリンダから空薬莖を排出していた。

エウリユアレーの小太郎に抱いた感想は、鬱陶しいの一言に尽きる。

はつきり言つて、大した実力ではない。ともすれば、単純な戦闘能力ならば先に捕らえた調査部隊の面々の方があつたほどだ。

自斎が先頭に立っているが故に、攻撃の大部分は彼女に向けざるを得ないが、それでも他の面々への攻撃がゼロであつたわけではない。

さららは持ち前の身体能力と異能によつて、凜花は鍛え上げた戦闘技術によつて無難かつ余裕を以て防ぐか、回避を選択していたが、小太郎はそうもいかない。

不様に地面を転がり、或いは必死になつて頼りない蛇腹剣で受け流す。常にギリギリの回避と防御。優美さなど欠片もない。暴風雨の只中で、奇跡的に鎮火を免れている蠟燭のような頼りなさ。

彼自身も己が吹けば飛ぶようなか弱い存在だと自認しているのだろう。

無理に攻めようとはせず、無理に守ろうとはしていない。それでいて、要所要所では必ず刃か弾丸を振じ込んでくる。

今のような戦闘の切れ目、呼吸の繋ぎ目、意識の途切れには確実に攻撃を滑り込ませ、味方の戦線が崩れそうなところではフォローに回る。

もう少し彼に直接的な戦闘力や攻撃的な異能や忍法が、とうの昔に刃はエウリユアレーの首に届き、決着はついていただろう。

それでもエウリユアレーは勿論の事、自斎達にすら劣る存在である

のは事実だ。正に羽虫。鬱陶しいばかりで自身を脅かすには至らない。

——それでも、魔女に余裕はあっても油断はなかった。

直接的な戦闘能力がなかりうとも、この状況を作り出したのは間違いない。彼だ。

隊員の得意分野と能力を把握し、限られた情報から格上相手に立ち回れるような戦術を短時間で導き出した思考力は驚嘆に値する。

決して油断はならない。アレは単なる狩られるだけの獣ではない。能力的に劣つていようとも、智慧と経験から獣を追い詰める狩人である——少なくとも、エウリユアレーはどのように分析した。

（厄介。魔術による補助はあるものの戦闘の大部分は奴自身の近接技能によって成り立っている。それにもう二、三は奥の手がある——
—正にアサギタイプなのに思考の瞬発力もある。やりづらいことこの上ない）

同時に、小太郎もまたエウリユアレーの戦力分析を終えていた。

語られる伝説や彼独自の情報網から得られた情報とほぼ一致する。『魔術を補助にした近接主体の戦闘スタイル』に偽りはなかった。

大剣を操る魔術も所詮は失われた両腕の代替品に過ぎない。事実、宙を自在に舞っているように見える大剣も、その軌跡は剣術の理から一切外れていない。

剣の重量に任せ、破綻しないギリギリのレベルで身体ごと旋回させながら振るい、踊り子のような足取りで攻撃と回避・防御すらもが一体となった剣技。彼女の強さの根底にあるのは間違いなくそれだ。

修めた剣術も、生まれた世界すら違うにも拘らず、強さの根底にあるものは、奇しくもアサギと似通っていた。

彼の考えるアサギの強さは隼の術による光の速さでも、覚醒した魔力を操る精神力でもなく、基礎となる鍛え抜いた身体能力と剣技こそ全てと考えている。

単純に強い。身体能力は勿論のこと、アサギも努力は重ねてきたの

だろうが、それ以前に生まれ持った才能そのものが他とは隔絶し過ぎている。もし仮に隼の術を封じられたとしても、最強の座は揺るがないだろう。

類まれな異能や能力も、アサギの強さの添え物に過ぎない。

単純に力が強く、単純に速く、単純に巧い。その単純明快で穴がない強さの理由故に、超えることが酷く難しい。単純な強さだけであらゆる策謀を乗り越えて、力技で斬り捨ててきた最強は伊達ではない。

エウリュアレーもまた同じ。戦闘能力の基盤が単純かつ強固故に、攻略法もまた単純になる。

（チャンスは、ある。遊び気分でやってきたなら、そろそろ焦れて苛立つてきただろう？ ただの玩具だと思つてた連中が此処まで喰らいついてきてるんだからな。ただまあ——）

しかし、それでもなお小太郎には既に打倒の糸口が見えているのか、動揺は皆無だった。

苛立つエウリュアレーと平静な小太郎。どちらがより精神的に勝っているのかは語るまでもない。

唯一、懸念があるとするのは——

（一番前で戦つてゐる奴よりも、オレの方がヤバいがな）

そんな事を考えながら、空になった輪胴に向けて首をカクンと落とす。思考の結果に落胆したかのようにも見えたが、事実は異なつていた。

帽子の中に仕込んでいた銃弾が滑り落ち、まるで吸い込まれるように輪胴の中へと装填される。両手を一切使わない神業染みた再装填。

しかし、悲しいかな。対魔忍の忍術やエウリュアレーの魔術の凄まじさの前には、余りにも拙く頼りない。

「そなたらのような相手は——」

神業を布で覆われたはずの視界のまま横目で眺めたエウリュアレーは眩きと共に一直線に踏み込んだ。

狙いは変わらずに自斎。

まずは彼女を倒さねば、他に意識を割り避けない。当然の行動であった。

（相変わらず、速い……！ でも、対処できない訳じゃない……！）

迫る魔女に対し、自斎は刀の柄を握り直す。

脳裏に浮かぶのは、閃光すらも越えた見聞きすらも出来なかった尚之助の一閃。それに比べれば、魔女の剣技など何するものぞ。

間違いなく、彼女もまた剣の天才である。

自身の知覚を越えていた筈の一撃を、正確に思い描けているのだから。

そして、尚之助がその領域に至るために何を捨て、どれほどの血と汗を流してきたのか手に取るように分かる。

人並み外れた剣才が共鳴するかの如く、眠っていた才気を芽吹かせる。

何十の鍛錬よりも、ただ一度の戦い、ただ一度の勝利、ただ一度の敗北の方がより多くの血肉となるように。彼女も尚之助とエウリュアレーの才に引き摺られ、急速に成長していた。

エウリュアレーの手数が多い。

踊りのような身の熟しは先が読み辛く、次の瞬間には予想だにしない所から重い剣戟が飛んでくる。

——ならば、と対抗するために思い立ったのは呼吸を合わせることであった。

動きや構えから先を読めない。しかし、先を読むのに必要なのは何もそれだけではない。

視線の置き方や呼吸の仕方とて、先読みには重要な情報源。それを読むために全神経を集中させる。

上下する胸元、呼吸を繰り返す唇、流れる呼吸の音と流れ。得られる膨大な情報の中から、いま求めるものだけを取捨選択する。

「ふうっ!!」

踏み込んだ瞬間は違えども、共に剣を振るった瞬間は同一。剣の軌跡もまるで鏡合わせのように同じ袈裟懸け。

「っ——うっ?!」

大剣と刀では刀身そのものの強度が異なる。まともに打ち合えば負けるのは刀の方だ。

対魔忍に配られる刀は特殊な製法によって形造られてはいるが、エウリユアレーの魔力によって創造された大剣に強度で勝る訳もない。

自斎の敗北は必至——けれど、迎えるであろう現実を捻じ曲げたのは、類稀な技巧であった。

剣と剣が打ち合わせられる直前、自斎の剣閃の軌跡が変わった。

柔らかな手首の動きによって変化した軌道は鎬と鎬が触れ合い、甲高い金属音を木霊させる。

とある流派において、変化と呼ばれる巻き落としの一種。柔軟な手首と鎬の使い方に着目した技は力の流れを容易に操り、相手を無力化せしめる。この土壇場で誰に指導されるでもなく思い立ち、況してや実行した上で実現させるなど並の才気では不可能だ。

エウリユアレーの剣閃は捻じ曲げられ、地面へと叩きつけられる。急激に遠心力による勢いを失った体勢は大きく崩れ、生じた隙を見逃さず、地面にめり込んだ鋒目掛けて自斎の踵が叩き込まれる。

刀身は半ばまで地面に埋まり、生中なことでは引き抜けない。この事態はエウリユアレーにとっても想定外であったが、一瞬の硬直が生まれながらも剣を捨てる選択を即座に決断したのは流石という他ない。

「逃さない！」

「……あ、がつ?！」

されど、その隙は隙。

この瞬間を待っていた、とばかりに凜花の飛ばした拳が痛烈なアツパーカットとなつて顎に叩き込まれる。

強固かつ強靱な肉体を持つオーガであっても顎を粉碎されるほどの重い一撃は、確かに魔女の脳を揺さぶった。

剣を操る魔術さえも発動が叶わないのか、よろめきながら数歩後退するのがやつとの有り様。

『super Freeze』——つ!!』

待っていたのは、凜花だけではない。きららとて、今か今かと最大にまで溜めた冷気を解き放つ瞬間を待っていた。

天高く振り上げられた踵が地面へと叩きつけられる。

吹き出した冷気は、進行方向にある全てを凍り付かせながら、エウリュアレーの下で爆発した。大気中の水分が全て凍りつき、魔女の身体は氷の牢獄に囚われる。

勝負は決した。

如何に伝説の魔女と言えども、為す術はない。『霜の鬼神』由来の冷気から逃れる術などある筈もなく——

「これで、終わりよ!」 //凍奔——「はああ?!」

——惜しむらくは、彼女達の実戦経験が欠けていた事か。

単独行動を繰り返していた自斎は勿論のこと、多くの魔族を屠ってきた凜花もきららも、根本的に強者との戦いは経験が不足している。そもそもが、人並み外れた才を生まれ持った少女達。自身を脅かす存在と相對するなど稀も稀。致し方ない面の方が強かろう。

ただの一度でも、神話級と呼ばれる魔族と戦った事があったのなら

ば。

それでなくとも、死を覚悟せねば勝利を掴めないほどの強敵と戦った経験があったのならば。

或いは、いま刃を交えていたエウリュアレーが実体を持っただけの虚像——分身に過ぎないと気付けただろう。

最期の一撃を加えようと両手を組み合わせたきららの驚きの悲鳴と共に虚像が解けていく。

捕らわれていたエウリュアレーは徐々に薄れ、やがては消える。後に残ったのはポツカリと人型の空洞を残した氷柱だけ。

「小太郎——！」

「まずは頭を潰すに限る」

「だろうな」

今まで自分達が戦っていたのが何かを理解した凜花は弾かれたように駆け出し、残りの二人も同じ答えに達したのか後を追う。

その先には、今まさに霧の中から現れるように姿を現したエウリュアレーと行動を予期していた小太郎の姿があった。

先の分身は倉庫で見せた虚像の上位版。

本来は遠方に自身の姿を投写するだけの初歩魔術であろうが、彼女の手によれば実体を伴うまでに昇華される。

そして、姿を消す隠密の魔術もまた初歩の初歩。直接的な戦闘能力に欠ける魔術師が多様する護身用の魔術だが、エウリュアレーが使えば立派な奇襲の一手と化す。

二振りの大剣の鋒で地面を削りながら駆ける姿は、まるで飢えた獣のようだ。

恐ろしい疾さで迫る魔女を前にして、蛇腹剣では対応しきれないと判断した小太郎は、同じ速度で改造Coilt SAAで照準する。

輪胴内の弾丸全てを最も狙いやすい胴体に向けて引き金を絞る。

だが、その尽くが容易く回避される。先程のように大剣による防御すらない。その必要がないのだ。彼女ほどの怪物であれば、銃弾程度

ならば放たれたのを確認してからでも回避できる。

右へ左へ。身体をひらりと翻して躲す様は、さながら舞い散る紅葉の如く。

小太郎も破れかぶれであったわけではない。

一発一発を確実に当てるべく、回避した先を予測して狙い撃つが、それでもなお当たらない。

弱者の自覚がある彼でさえ、思わず笑ってしまう圧倒的な実力差。

「強者には栄光を。弱者には無惨な死を」

最後に残った一発を撃とうしたが、エウリユアレーの姿が消えた。

再び隠密の魔術を行使したのではない。単純に自身の最高速で踏み込んだに過ぎない。小太郎の目では、それを捉えられなかったただだ。

鼻と鼻が触れそうになる距離にまで詰め寄せられた小太郎は、蛇腹剣を構えた上で自身の両脚が二度と使い物にならなくなる覚悟で後方に大きく飛び退いた。

されど、その程度で逃げられるほど、魔女の剣は甘いものではない。

鋭い眼光で軌跡を描きながら、エウリユアレーの身体が旋回する。

一瞬とは言え、敵に背を向ける愚行であるが、彼女の剣はそれでも剣技として成立していた。

振り抜いた瞬間に音もなく風もない。それは無形の音も風すらも断ち切った何よりの証。

「……………ぐっ」

剣を振り抜いた体勢のまま動きを止めたエウリユアレーに対し、着地した瞬間に小太郎は片膝をつく。

次の瞬間、構えた筈の蛇腹剣が音もなく断たれ、右の肩から左の脇腹に掛けて派手に血が吹き出した。

変形武器の宿命として、強度不足が上げられる。

機構や繋ぎ目はどうしても武器の強度を著しく奪い去り、劣化と破損を生み出す。常識外れの魔界の金属を用いて、この問題をクリアした蛇腹剣であったが、エウリユアレーの前では僅かな防御効果すら齎さなかった。

「意外に頑丈よのう。大した意志力。それとも、先に見せた回復の恩恵か？」

「答える義理は——っ」

出血によって蹠跟めく身体を支えるように、地面に片手をついた小太郎は言葉を飲み込んだ。

無理もない。補肉剤の効果は完全には切れていない。負った傷は今こうしている間にも塞がり始めてはいるが、出血と激痛まではどうにもならない。常人ならとうの昔に痛みに耐えかねて肉体が死を選んでいることだろう。

自身を嘲笑いながら見下ろすエウリユアレーを、小太郎は見えていない。

彼は項垂れるように地面を眺めるばかり。まるで、自身の敗北を認めているかのようだ。

「然らば。これにて御然らば。あの娘どももすぐに後を追わせてやろう」

「……………」

「いや、いやあつ！ 駄目っ！」

後方から襲い掛かってくる凜花の拳を見るまでもなく躲しながら、エウリユアレーは剣を振り上げる。

少女達の叫びは何の意味もなさず、距離が有り過ぎて救援も間に合わない。後はただ、頭頂から股下までを縦一文字に斬り裂かれて、肉袋の中身をぶち撒けた死体が残るのみ。

「——く、くくつ」

「そなた、死の恐怖で触れたか？」

「いや別に。ちよつと、意外だったもんだからな」

青白い死人と変わらない顔色ながら、小太郎は笑っていた。それこそ、子供のように無邪気に。

避けようのない死を前にして狂ったのか、と明らかな失望を顕わに問いかける魔女に対して、顔色からも負傷からも想像できない軽快な声色で告げた。

彼が先程、言葉を詰まらせたのは痛みからでもなければ、ましてや恐怖からでもない。単純に、そう単純に驚いたからだ。

「まさか、お前が来るとはね。来るなら尚之助の方だと思ったが」

「……………何だと？」

『いやはや御尤。されど、この身は“槍”なれど性根は“狂犬”故に』
「ああ、そうかい。好きにしな。存分に頼らせて貰うさ」

苦笑と愉悦の混じった声が響く。

小太郎と凜花には聞き慣れた、他の者にも聞き覚えのある何処か軽薄でいながらも、芯の通った低い男の声。

誰もがまさかと思った。だが、その声は偽りが発せるものではなく、生きのままのもの。

声の主の名は——

「邪あつ——!!」

「つぐ……………そ、そなたは」

「あ、あんた、なんで此処に!？」

「先輩、それよりも……………」

「土橋……………権左……………」

まるで水面から飛び出るように、波打つ地面から魔女の顎から頭頂を抜ける軌跡で槍が気合いの雄叫びと共に伸びる。

既すんでのところでで身体を反らして槍の一撃を躲したエウリユアレーは姿を現した男の姿に愕然と呟いた。

戦いの愉悦に狂った笑みを浮かべる男。二車の一番槍にして、骸佐の右腕。戦闘特化の異端の執事にして、己が身を一振りの槍へと転生せしめた狂犬。土橋 権左が槍を手に、小太郎を庇うが如く立ち塞がっているではないか。

「ど、どうして……？」

「勘違いするな。助太刀に来た訳じゃない。このままおめおめ逃げ帰っちゃ狂犬の性根が納得しねえ。ましてや、お前らよりも強い極上の獲物を前にしたら、よだれ垂らしたままお預けなんざ、それこそ性に合わないのさ——！」

驚いたのは何も魔女や小太郎ばかりではない。

既に逃げ帰ったと思っていた権左がこの場に現れるなどとは思っていないかった少女達もまた同様だ。

だが、権左はそれぞれの考えを正すように口を開く。

助けに来たのではなく、主人の命に従ったのでもなく、ただ単純に自らの性根が生み出す欲求に従って此処に来た、と。

小太郎の命を救った訳ではなく、エウリユアレーを仕留めるのに絶好の機会であっただけの話。あくまでも敵同士。共闘ではなく、三つ巴の戦いになったに過ぎぬと言うように。

「骸佐様お許しを！　そして我が槍、我が一突きが伝説を穿ち得るか、地獄の先代と幻庵殿もご覧あれ——！」

「死にたくねえから死ぬほど備えるとか皆やってるとじゃない」とか平気で言うのが苦勞人

「小太郎様を守って頂きたいのです」

してやられてから数分後、権左と尚之助は無事にエウリュアレーの結界から抜け出していた。

小太郎の予想していた通り、外に出る分には何の妨害も邪魔も入っては来なかった。

月明かりのみが差し込む倉庫の中、権左はまず尚之助の状態がどれほどのものを調べるべくコンテナの一つに背中を預けさせて座らせたのだが、当の本人はそんな事を宣った。

忠義に溢れる彼らしからぬ「敵を守って欲しい」という懇願の言葉であつたが、権左に驚きは皆無であつた。

元々、弾正の正室であつた潤と繋がりも強く、幼い頃から接してきた小太郎や紅、凜花には二車の中でも格段の情を抱いていると言つても過言ではない。

また、彼の人格が形成される過程で先代——二車 又佐の影響は極めて強かつた。

又佐は二車の当主である以前に、二車はふうまの最も古い盟友という立場と歴史を重要視しており、自らの家よりもふうま一門の存続を優先していた。

そんな背中を見て育つた尚之助は、二車の幹部と言うよりもふうまを支える者の一人という認識が強い。骸佐が対魔忍を裏切つた現在でも、その認識は揺らいでいない。

分かつていたことだつた。

元より彼の忠義は骸佐にのみ向けられたものではなかつた。

自らの人生を変える切欠となつた潤にも、自らを頼る小太郎にも、

ふうまという梓組みそのものに対しても、骸佐に向けるものと変わらぬ忠誠を向けている。

——ならば、もし仮に、骸佐が信頼した幹部の中から誰かが裏切るとするのなら、最も可能性が高いのはコイツだろう。

そんな確信が権左にはあった。

彼の言葉を耳にした瞬間、悟られぬように槍を握る手に力が籠もり、瞳の奥底で冷徹な炎が灯る。

かつての狂犬ぶりは何処へやら。今は、ただひたすらに骸佐の槍として。二車の屋台骨を脅かしかねない存在を誅するべく、愉悦も狂気もなく殺意だけが燃え上がろうとしていた。

尚之助とは兄弟のように育ってきた。

相手がどう考えているかは知らないし興味もないが、少なくとも権左はそう考えてきたし信じてきた。確かな信頼と情が其処にあり、だがしかし、槍としてその全てを台無しにすることは些かの躊躇もない。

「勘違いしないで頂きたい。これはあくまでも、二車の幹部としての判断です」

「ほう、言ってみろ。返答次第では……」

尚之助も気楽でもなければ呑気でもない。

自らの発言が自らの立場を危ういものとするのは理解しており、権左に灯り始めた殺意にも当然気付いていた。

満身創痍の身ではあるが、遅れを取るつもりは微塵もないと言わんばかりに腰の刀に手を伸ばしており、この場を切り抜けたのなら再び結界の中へと再突入する気概を見せている。

こうなれば、梃子でも動かないことを知っていた権左は脅しと共に、尚之助へと次の言葉を促した。

手負いであるが油断はならぬのは同じ幹部としてよくよく知って

いる。骸佐が信頼を置く幹部は皆一様に猛者揃い。自身の手の内が外部へと漏れれば死に直結しかねない現実を認識しており、骸佐どころか誰にも知らせていない奥の手の一つや二つ隠し持っていたところで不思議ではない。

このまま戦いに発展させるのは容易いが、容易くは討ち取れまい。ならば、会話の中で油断と隙を生じさせた方が得策。少なくとも権左はそう判断し、槍に込めていた殺意を一時的に抑え込んだ。

「権左殿は、御館様の本望をどうお考えですか？」

「是も否もないね。御館様が如何なる願いを抱こうと、オレは槍として在るだけだ。かかる危難を払うだけだ」

「では、他の幹部は如何様にお考えかは？」

「……………」

「少なくとも、私は納得していません。その必要性も意義も十二分に理解していますし、必要とあらば幹部として御館様と共に地獄に落ちましょう。ですが、納得はまた別の所にあります」

骸佐が対魔忍を裏切り、二車を闇の組織として独立した真の狙い。

権左を始めとした幹部達は、その全てを理解して地獄の底まで共にすると誓いあった。

だが、承服しようとも納得していない者もいる。少なくとも、比丘尼や尚之助はそうであるようだ。

比丘尼はまだいい。長き時の間、人の世の無情と残酷を目にしてきた故に全てを諦めている。

骸佐に対してどんなに言葉を重ねても無駄なものは無駄。足掻けば足掻くほど底のない沼に嵌っていく。ならいつその事、全てを自分以外の何かに任せてしまった方がいい、と考えているに違いない。

恐らくは三郎辺りも似たようなものだろう。大半の幹部はその筈だ。忠義は尽くすが全てを納得しているわけではない。かと言って、裏切るような真似もしない。例え、先に待ち受けているのが無明の闇であったとしても構わないのだ。

唯一、権左が警戒していたのは目の前の尚之助と腹の読めないカヲルか。

尚之助もカヲルも、又佐の影響が強い。尚之助はふうまへの忠誠、カヲルはふうまはこうあるべきという確たる思いを抱いており、共に先を見据えている。

ふうまのため二車のためであれば、裏切りすらも辞さない。汚名を、不名誉を、どれほど被っても止まらない。厄介極まる二人だ。

「私の思い描く未来と、御館様の思い描く未来は別です。ですが、結果は変わらないものとなることだけは誓います。もし違いがあるとすれば、私のなら……」

「いい。それ以上は言うな。其処まで言われちゃ、オレも槍を引かざるを得ねえよ。律儀なもんだ、そして強欲だな。御館様の願いを叶えた上で、自分の願いも叶えたいとは」

「最良の結果とはそういうもので、そうでなければ得られません。そのためには強欲にでもならねば」

「違いない。しっかしまあ、オレが若を守るなんざねえ。どうにもやる気がでねえ」

尚之助の覚悟を受け取り、考えを読んだ権左は潔く槍を引く。

少なくとも尚之助の思い描く未来は、権左にとっても悪いものではないらしい。

そして骸佐の真の目的が掲げた通り、ふうま一門を自らが率いて復権するのであれば、同じ選択を取ったであろう。

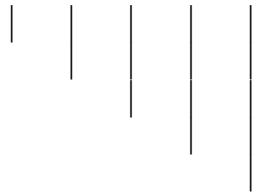
反逆者が支配を確たるものにするには、今現在頂点に立っている者を自ら引き摺り降ろし、力と資格を示す必要がある。

特に規律や秩序よりも自らの欲望を優先しがちなふうま一門であれば尚の事。我こそは、などと馬鹿馬鹿しい勘違いを實現できると誤認しかねない。

つまり、骸佐としては小太郎に自分か配下以外の手によって殺されては困るのだ。ただでさえ分裂しているふうま一門が更に分化して

しまつては再興も復権も夢のまた夢。否が応にでも助けねばなるまい。

権左にしてみれば面白い展開ではないが、彼のボヤきは尚之助と倉庫の冷めた空気を震わせるだけだった。



「――覇あつ!!」

裂帛の気迫と共に、槍が続けざまに振るわれる。

突きを主体に薙ぎ払い、蹴りまで織り交ぜられた連撃。攻撃の全ては疾風のような捷さであり、鋭さは雷鳴の如し。

されど、エウリユアレーは止めを邪魔された不愉快さよりも戦いの愉悦が勝つたのか笑みを深めるばかり。

交錯する剣と槍。

打ち合わされる刃は火花を散らし、戦いの楽曲を奏でていた。

(やはり強えな。流石は伝説。経験値が違いすぎるかあ……?!)

傍目から見れば拮抗した戦いであつたが、当事者にとってはそうではなかつた。

徐々に。だが確実に。遅効性の毒が全身に回っていくような速度で、戦いの天秤はエウリユアレーの側に傾きつつあつた。

権左は攻撃を繰り返す度に明確な実力差を感じ取り、戦闘狂としての面が顔を出そうになつて焦りを募らせる。

身体能力は井河 アサギに並び、技量においても彼の知る最高の戦巧者である心願寺 幻庵に並び立つ。

何よりも戦いの経験値が違う。一度の攻撃に込められた意図は十を越え、間断なく迫られる決断を間違えれば即死に繋がる。

権左の目にしてみれば、構えも斬撃もいくつかの隙が見受けられる。しかし、見せられているに過ぎない。下手に攻め過ぎれば槍を引き込まれ、逆に一刀の下に首を跳ねられるだろう。

エウリュアレーは僅かな時間で権左の戦闘狂としての本質を感じ取ったのか。敢えて、隙を生みながら動いている。血と戦いに飢えた狂った犬が我慢の限界を越えてる瞬間を待ちわびているのだ。

(よもやこれほどまでとはね。魔族にもマシな奴がいるじゃねえか。じゃあ、こういうのはどうだあ……！)

強敵を前にした心底からの歓喜と同時に骸佐の槍でなくなってしまふ恐怖を抱えながらも、権左は偽らざる本心でエウリュアレーに称赞を送る。

返礼は、彼の鍛錬と研鑽から生み出されたオリジナル。

「シャアア——!!」

単調な突きの連撃。それでも、突きの一つ一つに込められた意思は必殺だ。

並の対魔忍、魔族であれば、回避も防御も間に合わずに穴開きにされていたであろう。

それでも相手は伝説そのものの魔女。

狂り狂りと身体を踊らせながら、顔に放たれた一撃を躲し、胴に向かい来る穂先を弾く。

「——っ！」

驚愕は次の瞬間に訪れた。

脚先から伝わった僅かな違和感に、殺意なき必殺を認識したエウリュアレーは身体を仰け反らせながら後方へと宙返りと共に大きく飛び退る。

余りに急速な横から縦への旋回の変化に、さしもの権左も対応できない。

規格外の怪物を前にして、彼の表情には狂喜よりも呆れの方が強い。これほどの強者が今の今まで大人しくアミダハラで惰眠を貪っていたなどと信じられなかった。

彼女は音もなく地に降り立ち、訪れた戦いの間隙に権左へと黒い目隠しで眼球を覆い尽くしたまま視線を向ける。

其処でようやく、彼女は権左という存在を認識したと言っても過言ではない。今までは自身の目的を邪魔する羽虫程度でしかなかったが、それは過ちであったと素直に認めるように。

「——見事だ。人の身でよくぞここまで」

「そいつあ、どうも。掠り傷程度でここまで褒められるたあ思わなかったぜ」

魔女の口から躍り出たのは掛け値なしの称賛だった。

つい先程、顎下から襲いかかってきた一撃は、権左が地面の中へと仕込んでいた槍によるもの。

単純に真正面から打ち破れる相手ではないと悟っていた権左が、独立遊撃部隊の戦いを横目に仕掛けておいた仕込みの一つ。

戦いに集中すればするほど、目の前の相手を討ち果たさんとするほど、使い手の殺意の存在しない一撃は盲点となる。それを見越し、相手の思惑を認識した上で自らの狙い通りに仕込みへと誘い込んだのだが、結果はご覧の通り。

本来であれば顎下から脳天を貫く筈の一撃は、エウリュアレーの顎を僅かに傷つけただけ。

彼女にしてみれば生まれて数十年しか立っていない生き物が数百、

数千という時を越えてきた己に僅かばかりでも傷をつける、たったそれだけの現実であったとしても、疑いようもない大偉業である。

これが人間という種の恐ろしさ。寿命の長い魔族には存在しない僅かな時間に全てを掛けて命を燃やし、脇目も振らず生を駆け抜ける生き物の輝き。一瞬であるが閃光のように。長き生の中で何度となく見てきた、目も眩むほどの輝きだ。

だが、まるで上から見下されるような物言いは、権左にしてみれば皮肉にしか感じない。

「物質の通過……いや、違うか。対魔忍は土遁と呼ぶのだったな。怖い怖い。次からは足元に気をつけねば。土中に引きずり込まれかねんわ」

「よく言う。捕まりやしねえ癖に」

「さて、どうかな？ そのための策や能力の使い道、一つや二つ用意しておるであろう？」

「……チツ、戦り難い婆さんだ。亀の甲より年の功って奴はこれだから」

ほんの僅かな時間で看破された能力と狙い。

権左の脳裏には、自らの策や戦法を容易く見抜いて対応してきた幻庵や比丘尼の後ろ姿が浮かんでいた。

とは言え、こうして戦いに割って入った以上は逃げるわけにも行かず、新たな手段を模索せねばならない。

尤も、悠長を与えてくれる相手ではないのは理解している。普段は眠り、戦いにおいてしか機能しない彼の脳細胞は類を見ない高速で思考を回す。

戦いに訪れた一瞬の均衡と静寂。それを崩したのは、やはりエウリュアレーだった。

「そら、動かぬままでよいのか？ お主が守りに来た小童の命脈が断たれようとしておるぞ」

「何い……?」

「……ぐっ、……!」

「こ、小太郎——!」

如何に動くべきか。そう決め倦ねている権左を前に、エウリュアレーはくつくつと笑いながら顎を使って後方の小太郎を指し示す。

途端、苦悶の声と悲鳴が同時に上がる。

権左は魔女から僅かでも視線を外す訳にもいかなかったが、苦悶の主は小太郎であり、悲鳴は小娘達のもの。守りたくはないが守らねばならない存在に何かが起こっている事だけは察せた。

「コイ、ツはあ……」

「そら、余り時間はないぞ? 動けば内臓がまろびでるほどの深手に加えて我が呪い。さて、何分持つことやら」

小太郎の身に起きた異変は凄まじかった。

既に口から溢れていた血の量は増し、傷口のみならず目や鼻、耳朶からもドス黒い血が流れ出す。

意思に反して震える己の手を見れば、茨を思わせる紋様が手首から指先まで広がっている。そして恐らく、紋様はエウリュアレーに斬り裂かれた肩から脇腹を抜ける傷口から伸びているであろう。

「本来、肉体は魂の入れ物。人は親によって、神は人によって器を形作られる。肉の器がどれだけ傷つこうとも、魂は無傷で済む。だが、もし肉体と魂の結び付きを必要以上に強くすれば、どうなると思う?」
「器が割れれば、魂も割れる、か……補肉剤も効いてねえ……成程ね、これなら、神様も殺せるか、もな……」

「左様。尤も、忌々しい神々どもは人が存在する限り不滅。魂が千々に砕けようともいずれば復活しよう。どれほどの時間がかかるかは知らんがな」

急速に生命力を失っていく己自身の身体。顔面から溢れる血潮を拭う気力すら湧いてこない。

視野は狭窄し、思考は鈍く、呼吸は薄く浅くなり、胸の鼓動は弱まっ
ていく。近づいてくる明確な死の気配に、久しく感じていなかった心
底からの恐怖を覚えた。

この感覚ばかりは何度経験しても慣れはしない。母に課せられた
訓練で何度となく死亡し蘇生を繰り返された彼であっても変わらな
い。いや、寧ろ、何度となく経験したからこそ強くなるのだ。

恐怖にも種類がある。死はいかなる部類の恐怖であるのか。未知
であるが故に恐怖するという者もいるが、小太郎は全く逆だと考え
る。あの、電源が切れたかのように世界も己も一瞬で無に帰す感覚を
味わっていない者に、この恐怖を真の意味で知れる訳もないと。

されど、それを乗り越えるものもある。

恐怖とは理性と本能両方から訪れるもの。それら全てを凌駕する
魂を人は覚悟と呼ぶ。

「こ、こた——」

涙すら流しながら、己の名を呼んで駆ける凜花に視線を向ける。

残された時間はあと僅か。徐々に失われていく瞳の光に何を見た
のか。そこで彼女はようやく脚を止めた。

命そのものを垂れ流しながら、小太郎は確かに言葉もなく語ってい
る。来るな、と。今お前達がするのは、そうじゃない、と。対魔忍な
らば、どうすべきなのか分かっていいるだろう、と。

本音を言えば、今すぐにも駆け寄りたかった。

僅かな時間でも構わないから、失われた時間を取り戻すために語り
合いたかった。

今だに胸に燻り続けている悔恨と本心を伝えたかった。

それでも、彼女は対魔忍。

日の本に住まう無辜の民の安寧と平穏を守り、大悪を誅するのが役割
だが、自身や仲間の命を投げ出すような真似をするな。手足をもがれ

ても生き延びよ。決して諦めるな。とアサギから教えられている。

この場で小太郎に駆け寄るのが最善か。

否。残された僅かな時間を愛する者と過ごす。それ自体は決して間違いいではあるまいが、命を諦めた者の決断に過ぎず、無辜の者に許された最後の幸福。

対魔忍であるならば、どのような敵であれ、どのような運命であれ、立ち向かわねばならない。例え、その果てに待つのが、最後の会話すら叶わない死別であったとしても。可能性がある限りは決して諦めてはならない。

「凜花ちゃん、どうしたのよっ！ 早くしないとっ！」

「……違う。私達が行くのは、エウリユアレーへ、でしよう？」

「凜花先輩、それで本当に……」

「どの道、小太郎の所に言っても、私達じゃ何も出来ない。でも、あの魔女を先に倒せば、目はある……！」

悔いも未練も振り切って、凜花は小太郎ではなく、対峙したまま動かない権左とエウリユアレーへと駆け出した。

両者の関係性を知らないながらも、何となく察してはいるきららと自斎の問いかけにも、それ以上は答えない。

ただ、凜花の噛み締めた唇と爪が掌を破くほど握られた拳から滴る血に覚悟の重さを感じ取り、無言のまま追従を選択した。

エウリユアレーという驚異の前に一つになりかけていた部隊は、真の意味で一つとなった。

為すべきこと、やるべきことが一致し、思考が束ねられた恐るべき群れ。それは烏合からの逸脱であり、小太郎の目指す部隊としての在り方だった。

「ふっ、今度は頭に血が昇らなかつたみたいだな」

「……………」

「五月蠅いわね。無駄口叩いてると氷漬けにするわよ」

「作戦はまだある。此処まで来たら、嫌でも付き合ってもらおうから、覚悟して」

「おー、怖。ちょっと目を離した隙にこれだ。若い連中はこれだから。いよいよオレも歳を感じちまいそうだ」

自らの両脇に立った三人の小娘を横目にした権左は皮肉交じりの言葉を飛ばす。

だが、言葉を向けられた凜花は答える必要性すら感じていないのか、エウリユアレーの打倒のみに意識を向けているのか、返答はない。替わりに答えたのはきららと自斎だ。気負いもある焦りもあるが、まだ軽口を返せるだけの余裕がある。それはそのまま、自らの勝利を疑っていない証明だ。

若者の成長は速い。権左が言葉ではなく、現実として実感できたのは初めてだった。その分だけ、己が年老いた証左のようで苦笑いしか浮かんでこない。

数刻前に刃を交えた時とは見違えるほどだ。まだまだ己も頭打ちになったつもりはないが、この成長度は舌を巻かざるを得ない。

次に合う時は再び敵同士。恐ろしい敵となるだろう。だが、今は敵の敵。背中を預けるに不足もなければ文句もない。

「強大な敵に立ち向かうために手を組む。負け犬供の悪癖よな」
「言ってる、勝ち豚。甘く見すぎだよ、アンタ」

今はかつての遺恨や屈辱、侮蔑と嘲笑を棚上げし、迷いなく共闘を選択した四人を前にして、嘲るようにエウリユアレーは言った。

権左は彼女の言葉を正しいと認めてはいた。

魔女を討ち果たすにはこれしかない。奥の手はまだいくつがあるが、どれかが通用するとは限らない。

己の目的を果たすためには、彼女達と手を組む方が合理的である。それを弱者故の選択と言うならば、否定する要素はない。誰がどう見た所で、この場における強者は間違いなくエウリユアレーの方なのだ

から。

だが、唯一の間違いだけは指摘しておく。

「妾が？……面白い、興に乗った。大言も嘘も許そう、愉快故な。妾の何を甘いと？」

「もう気付いてただろ？俺達の中で一番厄介なのが誰なのか。だから一番初めに潰しにかかった。でも、アンタは仕留め損ねた。駄目だぜ、ああいう手合いは一撃で決めなきゃな。でなきゃ、何を仕掛けてくるか分かったもんじゃねえ」

カヲルが調べ上げた小太郎の暗躍と先刻自らの実体験を伴う恐ろしさを語り上げる。

この場で何に注意し、何を避けるべきなのか。お前は何も分かっていない、と。

「あの死にかけの小童が？何を言うかと思えば世迷い言を、ばかばかり——ぐううっ?!」

「そおら来た。だから言っただろうが」

更なる嘲弄を浮かべるエウリユアレーであったが、次の瞬間にそれは訪れた。

今まで余裕を笑みとして浮かべていた表情が途端に曇り、ぶわりと玉の汗が吹き出し、苦悶の吐息が漏れる。

一体何が起きたのか。

正確に理解している者は一人だけ。権左はその一人ではない。ただ、知っていたただけだ。その一人が、この展開に対して何らかの対抗策を用意していない筈がない、と。

神算鬼謀にして権謀術数——の類ではない。それは才気ある者が辿り着く境地。

誰よりも他人を理解できながらも誰一人として他者に共感せず、ひたすらに誰も信じない男が至った才気が必要としない領域。

相手に通用するか否かなど度外視して、ただひたすらに手段を用意し続ける理性ある狂気。徒労など気にせず千の手段を用意して一つでも通用すればそれで十分と嗤う精神。可能性のあるものは全て残らず用意してなお安堵しない偏執。

恐ろしい故に備えるという人の誰もが持つ機能^{あたりまえ}。なのにどうしてこうなった。

——言うまでもない。例え正常な機能であったとしても、正常な範囲を越えて機能し続ければ、何処までも何処までも突き抜ければ、突き詰めれば、何事も異常と化するのだ。

深謀遠慮を地で行くカヲルですらが敵わないと顔を蒼褪めさせるほどの未知数の異常性、未知数の精神、未知数の手段。

ふうま 小太郎は肉体と共に魂を引き裂かれながら、尚も嗤っていた。

決着ウウ——ツツ!!

(これは、なんだ……! 外傷もないのにこの痛み。妾は何をされた……!)

突如として襲いかつてきた未体験の激痛に、エウリユアレーは呻き声を上げながら玉の汗を浮かべる。

肉体的には何ら変化は見られないにも関わらず、肩から脇にかけて焼けた鉄を押し付けられたような痛みが奔っている。それだけではなく肉体そのものではなく、魂そのものが軋みを上げていているかのよう。

通常の間人や対魔忍では、その感覚は単なる外傷と混同してしまうだろうが、彼女であれば話は別だ。

魔術には魂を操る術は存在する。強制契約を交わした相手を死なない使い魔とする不死者法、死した霊を操作して死体を動かす死霊魔術、数ある遠見の手段の一つである幽体離脱。挙げていけばキリがない。

そも魔術とは、術者の魂より絞り出される内なる力である魔力を外界へと開放し、世界自身が生み出した魔力と呼ばれる無色の力を自身の色に染め上げる事で発動する限定的かつ指向性の現実改変。

故に、魔術師にとって自身の魂自体を把握することは魔術における初歩の初歩。その過程を通さずに魔法魔術を行使できるのは、存在するだけで自らに適した環境へと現実を改変していく異界の悪魔か、理から外れた天才のみである。

(小童風情が……!)

肉体ではなく魂から生じる痛みに朦朧としながらも、神々から受け

た屈辱が蘇る。

かつて神々に奪われた両腕は肉体のみならず、魂ごと奪われた。その結果もあり、本性を表せば現在でも両腕は消えたまま。どれだけ高度な魔界医療や魔術を使っても、魂そのものを修復はできず、あるように見せかけるだけが精一杯なのだ。

常に余裕に満ちて涼しげだった表情は今やなく、思い出したくもない過去を思い出させられた怒りのためか、痛みを堪えるためにか、ギリと音を立てて歯噛みしながら少年を眼帯越しに睨みつける。

自らの五体を武器として、手足を煙に変えて挑みかかってきた少女の能力は煙化。

極低温を放ち、剛腕を振るう鬼の少女の能力は冷気。

類稀な剣技で挑みながらも、未だに真の力を隠している少女の能力は神気。

才能のみならず多くの経験と鍛錬によって熟達した実力を有する男の能力は土中への潜航。

そのどれもが、魂に何らかの干渉を行う類の能力ではない以上、原因は全く別。ならば、あとは一人だけ。

「おら、どうしたよ、顔が蒼いぜ。痛いのは嫌か？　だったら早く泣きながら呪いを解けよ」

（何か変化があるようには見えない……いや、待て。手首のアレは――

釘……？）

立ちはだかる少女と男の後方で、虫の息になっているはずの少年。結界の内に引きずり込んでからの彼等の行動、会話は全て見聞きしてきた。

尤も、対魔粒子とやらを生まれ持っていたようであるが、極めて微弱で他の者のように異能忍法を行使できるほどではない。また、彼に魔力は存在しておらず、魔術行使による対抗も出来ないはずだ。

それでもなお警戒したのは、魔術に対する造詣の深さ。

結界内での発言と行動から鑑みても相当量の知識を有しているの

は明らかであり、困惑の少なさから実際に魔術の深淵を体験してきていると推察できる。

例え異能や魔術が使えずとも、知識さえあれ對抗策とは自ずと生じる。況してや魔術越しの視線ですら察する偏執的な警戒心と感覚器官の持ち主。疑わぬ方がどうかしているだろう。

疑惑が目をつけたのは、死人同然の表情の嗤う少年の右手首。

つい先刻までは無傷であったはずにも関わらず、今は野太い五寸釘が貫通しているではないか。

（確か、この国には独自の呪術があったな。ウシノコクマイリ、だったか。どのような術式にせよ、人間が作った以上、実際の所は思い込み以上の効果はあるまいが、魔界出身の妾が耳にするほど有名な共通の幻想と妄執はまずい……！）

——日本に住んでいれば一度は耳にしたことはあるであろう呪い——
——丑の刻参り。

憎い相手の髪や爪などの一部を埋め込んだ藁人形を、神木に釘で打ち付けることで対象に不幸を齎すとされる。

方法は江戸時代に既に完成されており、嫉妬に苛まれた女が白装束に身を包み、草木も眠る丑三つ時に藁人形を打ち付ける姿は、多くの創作物の中に登場している。また刑事法学においては不能犯の典型と紹介されるほどだ。

この呪詛がこのような形になった理由は定かではないが人形を用いた呪術の起源は古く、古墳時代には既に存在しており、陰陽道においても人形を用いた祈祷が存在する。恐らくは、それらと結びついた結果、現代でも残るほどの共通概念として成立しただろう。

丑の刻参り自体が効力のある呪術なのかは別として、この共通概念は本来は無力な物品に力を与える。

折り重なった人の想念がこびり着いた物品が魔術の触媒となり、共通の認識と概念は魔術の穴や弱点として現れることは小太郎が説明した通り。

もし仮に、彼の手首を貫通している五寸釘が実際に丑の刻参りで使用されたものだとするならば、使用者の怨念と人々の想念がこれ以上ない程にこびり着いているはずだ。伝説級の代物とは行かずとも、優秀な触媒と言えるだろう。

(あの釘から発せられる魔力——ノイ・イーズレーンか! あの大魔導士め、まだ対魔忍と繋がりがあったか! 呪詛返しマジックアイテムの魔導具とは厄介なものを……!)

エウリユアレーの察知した魔力は既知にして知己のもの。

アマダハラを根城とする魔術師の中で、唯一自らと肩を並べると認める大魔道士ノイ・イーズレーンのそれだった。

アマダハラに住まう魔術師の代表にして元締め。アマダハラに一定の秩序を齎した魔術師連合と呼ばれるギルドの頂点にして顔役。

小太郎の評価を借りるなら中道型の魔術師であり、自らの持つ強大な力を自覚しているが故に何らかの事態に積極的に関わらず、表向きには観光客向けの土産物屋を営む老婆。

その温厚さと事なかれ主義は闇の住人達には侮蔑と嘲笑をされるであろうが、彼女の邪魔をしようとする者は誰一人として存在しない。それはそのまま、温厚な仮面の裏に隠された本性と実力が畏怖の対象である事を示している。

少年とノイに接点があるならば、エウリユアレーにしてみれば納得の至り。そして、少年の危険度は青天井に跳ね上がる。

魔術に対する造詣の深さはノイから聞き出したものであると見て間違いない。その上、ノイが魔力と術式を込めた魔導具であれば下手な魔術師を相手にするよりも遥かに危険だ。

何よりも、少年の猜疑心。

如何なる魔術師を相手にしようとも打倒できるだけの手段を、何らかの取引や契約関係を結んでノイから受け取っているに違いない。

あの精神性であれば千や二千では驚きに値しない。そして、魔導の深淵を窮めたノイの腕前と悠久の時を生きた時間を考えれば、使用者

の魔力を使用しない魔導具を揃えることは不可能ではない。

(どうする！　これでは妾の呪詛は相手への足枷にしかならん！　半端な形で解呪すればより大きい呪いとなって此方に跳ね返ってくる！　童め、^{わっば}これを見越して敢えて受けたな……！)

呪術・呪詛とは魔術の一系統。縛りを起動キーとすることで詠唱や儀式を大幅に簡略化した上で強化する我が身を削る魔術。

縛りの条件が当人にとつて難しければ難しいほど、術者本人が削る部分が大きければ大きいほどに相乗的に簡略化と効果が増していく。基本となる設定は全て同一。『縛りを破れば、或いは達成できなければ、呪詛の効果が術士本人により大きくなって跳ね返る』というもの。

エウリュアレーはその基本に加え、『攻撃に使用できる魔術を行使せずに剣で直接攻撃を入れること』と『呪いの発動中は剣を操る魔術以外の封印』、『対象が死亡するまでの持続』を縛りに組み込んだ。後者は兎も角として、前者二つの効果は凄まじい。

彼女は魔女としての腕は魔界においても上位に位置する。それは即ち、ほぼ何でも出来ると言っても過言ではなく、神格の領域にまで至るだろう。人間には及びもつかない現象を引き起こし、事象を操る。

その腕を一時的に敢えて封印する。

成程、これならば確かにこの呪いは神々にさえ通用するであろう。

その上で、あの剣の腕前。この呪いを成立させるために剣の腕を磨いたのか、或いは剣の腕があったからこそ辿り着いた呪いなのか。

だが、今や彼女の行動を阻害する文字通りの縛りにしかならない。ノイが授けたのが呪詛返しの魔導具だとするのなら、このまま呪い続けたとしても意味がなく、痛みに耐えかねて解呪した所でより大きくなって予測の付かない効果を伴って返ってくるだけ。

(強烈！　だが、耐えていれば先に死ぬのは呪いに加えて傷を追って

いる童の方！ 他の連中の攻撃を切り抜ければいいだけ！ 解呪はしない……！)

(あの顔、腹括ったな。並の連中ならビビって冷静に行動なんかできねーんだが、流石は伝説。安全圏から呪いを掛けて悦に浸ってるような奴とは別格。いいぜ、このままじゃどうせ死ぬんだ。じゃんじゃかブチ込んでやる、予定通りにな)

そこで初めて、敵同士であるはずの二人の思惑は一致した。

エウリュアレーは自らの勝利を確実とするために立ち上がり。

小太郎は自らの任務と職務達成を確実とするために、両膝を付いたまま睨み据える。

エウリュアレーにとつて意外であったのは、小太郎がここまで任務に忠実であったことか。

若くして一部隊を任せられるだけの能力はあるとは認めていたが、盗み聞いた言動からしてやる気を感じられず、現状に不満を抱いていることは間違いなかった。だからこそ、任務よりも自らの命を優先するだろうと考えていた。

しかし、現実はどうだ。自身を追っていた優秀な対魔忍などよりも職務に忠実で、命を使い捨てることに戸惑いが無い。

対魔忍としての職務同様、ふうま一門の当主を未だに続けているところを見る限り、生まれ持った彼の気質なのだろう。

どれだけ嫌がろうがふうま一門の当主としても、対魔忍の役割、職務にも同様に、自らに課せられた役割を投げ出そうとはしない。ノブレス・オブリージュ高貴なる者の使命のような高尚な考えがある訳ではない。ただ、報酬として受け取っている利益や特権に対して正当な労働を果たしているだけの仕事人気質。

国と民の日常を守護する役割を担う暴力機関。必要であれば自己であろうが他者であろうがいくらかでも命を賭す。命も肉体もそのための手段。一死を以て職務と使命を果たせばそれで良し。対魔忍という職務に誰よりも忠実だ。

「好機だな、仕掛けるぞ」

「作戦はあるわ！ 合わせて！」

「こっちはそっちの作戦の中身をなんも聞いてないんですけどねえ」

「権左、貴方だったらそれくらいできるでしょう！」

「言ってくれるね。いいぜ、合せてやるとするかあ——！」

様子を観察していた権左はエウリユアレーの苦悶が敵を誘う演技ではなく、本物であると判断した。

やや時間を要したのは判断材料が余りにも少なかったから。それも額に浮かぶ汗や呼吸の乱れ、心拍の変化から決断に至り、これ以上なくこれ以外にもない好機が訪れたことを告げている。

僅かに遅れて、凜花もまた観察から行動へと移る。

権左に声こそ掛けたが、必要以上には語らない。彼女もまた小太郎が何をしたのか、エウリユアレーの身に何が起きているのかは分からない。唯一はつきりとしているのは千載一遇の好機が訪れていることだけ。

小太郎から伝えられた作戦はあった。いや、作戦と呼べるような上等なものではない。敵の目と耳のある中ではまともな作戦を伝えることも、まともな作戦を組み立てる時間さえなかった。単にそれぞれの忍法を最大限発揮するための使い方を伝えられただけだ。

それすらもエウリユアレーの強さの前には、実行にさえ移せなかった。

自斎は遊びの攻撃さえも耐える事に精一杯。凜花もきららもそのフオローに周らなければ一瞬で態勢が総崩れとなる程の実力差。

しかし、今はエウリユアレーの不調と弱体に加えて、権左という新たな戦力がある。

権左には何一つ伝えていないが、人格や関係性は兎も角として実力は本物。何しろ、先刻凜花自身が身を持って体験している。

彼であれば、何が起ころうとも即座に対応して最適の戦い方を選択してのけるだろう。戦闘狂とは、言い換えれば人格に異常をきたしてしまうほど戦闘の才を生まれ持った人間ということでもあるのだ。

「——いくわよ！」

号令と同じに凜花は握り締めた両の拳を天高く振り上げる。

その様に格闘の達人としてのらしさはまるでなく、まるで巨人のような力強さだけがある。

何をするつもりなのか検討も付かず、本気になり始めたエウリユアレーですが呆気にとられる訳の分からなさ。攻撃にするにはは隙だらけで、培ってきた技術全てを捨てているかのよう。

しかし、魔女の呆気も次の行動に全て氷解する。

振り上げた両腕を力の限りに振り下ろして地面を打った瞬間、凄まじい勢いで辺り一帯を数メートル先にすら見通せぬ煙の帳が広がった。

（目眩まし！　しかし、娘の煙化は肉体を交換したもの。これまで見てきた変換効率を考えればこれだけの量の煙を生み出すには肉体の大部分を失うも同然、文字通りの命懸け。これでは戦闘などできない。戦力が一つ減ったようなもの……！）

予想外の行動であったが、エウリユアレーは現状をほぼ正しい形で認識していた。

彼女の考えたように、煙幕の中で凜花は倒れ伏していた。

誰の目にも止まることはないが、両の腕を失い、両の脚を無くなり、顔と胴の左半分までもが消えて煙と化している。それだけではない。今こうしている間にも残った部分を延々と煙に変え続けていた。

この手の肉体を何かに変換する忍法は扱いが難しい。どれだけ変換操作に長けた対魔忍であろうとも、僅かな油断や躊躇、失敗で元の形に戻せなくなってしまいが、それでもまだマシな方だ。最悪の場合、死体すら残らなくなる。

全てを理解した上でなお凜花が断行したのは、自身が戦力として機能しなくなるよりも、エウリユアレーの目を潰した方が得策であると

判断したからであると同時に、小太郎もまた命を賭しているからだ。この場で勝利せねば生はなく、己も愛した人間も死に絶える。ならば躊躇などあろう筈もない。

(だが、手緩い！ この程度の目眩まし、何の事もない！)

「殺アツ——！」

煙幕に紛れ、背後から現れたきららに余裕を以て迎撃する。

対魔忍は腐つても忍。自ら気配を消し、逆に気配を探る術に長けている。一寸先すら見通せぬ煙幕の中であれば、あらゆる攻撃が奇襲と化し、一方的に戦いを進められる。

だが、相手はエウリユアレー。この程度、持ち前の魔術すら使わずに迎え撃てる。

(浅薄に過ぎるわ、鬼のむす………いや、待て、槍——!?)

殺意に満々みちみちて放たれる攻撃を大剣で弾こうとした瞬間、思考にノイズが交じる。

これまで見てきたきららの腕力に任せた拳打でもなければ冷気による攻撃でもなく、確かな鍛錬によって土台の形成された槍による一突き。

何よりも、真剣味に満ちてこそいたが殺意に欠けるあどけなさが残っていた顔には、一目で分かる明確な狂気が刻まれている。

戸惑いは、そのまま緩手となって行動に現れる。

心の臓腑へと目掛けて放たれた突きを弾き、もう一方の大剣で首を跳ねるべきか、生じた戸惑いを解消すべきかに迷う。

「でやあああああ——！」

その僅かな隙へと振り込むように、全く別の方向から野太い声が響く。

出すべき答えを出しきれなかったエウリュアレーは鳴った警鐘の導くままに、理性による思考を廃棄して本能に従って右へと大きく飛び退いた。

刹那、今し方まで自身の立っていた場所に、巨大な氷柱が連なって通過する。

攻撃の向かってきた方向へと目を向ければ、斬り裂かれた煙幕の向こうでは脚を地面へと叩き付けた権左の姿があった。

不可思議であったのは、戦闘の狂気に染まっていたはずの瞳には、どういう訳か騙されやすそうな純朴な光が宿っている。

(これは、まさか……！)

「こんなドでかいもんぶら下げてよく戦えるもんだ！ 邪魔くさくしてしようがねえや！ だが、面白いじゃねえか！ 面白い忍法だ！」

「うっさい！ 変なことしてみなさいよ！ チ○コ凍らせるわよ！」

一つの回答へと辿り着いたエウリュアレーの思考を補強するように、可憐な少女の声が男の口調で響き、低い男の声が女の口調で奏でられる。

少女も男の姿も、既に煙の中へと消え、周囲を動き続けているのか居場所は判然としない。当初の予想通り、煙幕に乗じた一撃離脱の奇襲が攻め手と見て間違いない。

予想から外れていたのはただ一点。

(そうか、鬼の娘は「霜の鬼神」と対魔忍の混血児！ 鬼としての力と対魔忍の忍法を扱えるのか!? 冷気に加えて、他者と己の姿形を入れ替える能力！ 単純、故に厄介！ 特にこの状況では……！)

きららが冷気を操る力に加えて、今の今まで伏せていた忍法カードがあった事。

伏せていたと言うよりも、父親への嫌悪感から当人が使いたがらなかったことと、本人が有効な使い途を思いつかなかっただけなのだ

が、エウリユアレーには知る由もなく、あるのは戦慄だけ。

先の奇襲から見て、あくまでも入れ替えるのは姿形だけで、能力と記憶は範囲外ではあるようだが、戦慄させるには十分過ぎる。

一見一聴しただけでは派手さの欠片もない地味な忍法。

きららが母親から受け継いだ能力に比べれば、おまけ程度にしか認識されないであろう忍法ではあるが———その実、余程凶悪で厄介極まるものだ。

「い、やああ——!!」

「……………ッ!」

激痛と驚愕。戦慄と焦燥。

度重なる想定外に鈍る思考の中、千載一遇の好機を逃すまいと再び煙の中から奇襲が仕掛けられる。

煙を巻いて現れたのは仮面で両目を覆った少女。両手で刀を握り、横薙ぎの一閃を放つ。

これまでの彼女を考えれば、技量など欠片もない余りにも力任せな剣戟。

刃を立てる角度も、抜ける方向も考えておらず、防がれることも躲されることも考慮せずに二の太刀の態勢すら整っていない。まるつきり素人の剣。これならば、鉄パイプを持って殴った方がまだマシだ。

「くうっ——!?!」

案の定、軌道も甘ければ握りも甘い剣閃はエウリユアレーによって容易に返された。

どれだけ強い握力であろうとも、正しい握り方をしていなければ武器など簡単に手を離れていくものだ。

愛刀が手の中から消え去り、宙を舞う。

剣士として有り得ざる恥、起こしてはならぬ現実を前にして、無意

識に自斎は投げ出された愛刀を目で追っていた。

仕方がない。だが、それもまた剣士としてあり得ない振る舞いだ。例え剣を失おうとも、戦いの最中に敵から視線を外すなど。

「——づうつ?!」

「はああああああ——!!」

その窮地を救ったのはエウリユアレーの身に訪れた傷の上から傷を重ね塗られるような、真新しい傷口を無理やり広げられるかのような激痛。

隙だらけの身体を斬り裂けもせず堪らずに膝を折る。またしても小太郎が魔導具を使用したのだろうが、エウリユアレーには対処のしようがない。

更に、タイミングに合わせた訳ではないだろうが、別の影が煙の中から飛び出してくる。

影の姿形はきららのそれであつたが、宙で刀を手にするや否や、落下の勢いをそのまま大上段から真つ向唐竹に振り下ろす姿は紛うことなき逸刀流剣士のそれ。

「ぐつ、ぬうう……!」

「浅い! 確かに、こんなに重いものがあつたら上手く剣が振れないわね……!」

「自斎ちゃんまで!!」

「この、小娘共……!」

咄嗟に頭上で大剣を交差させて頭部への直撃を防いだものの、勢いは止まらずに鋒が肩口を僅かに斬り裂いていた。

胸部で揺れるたわわな果実を邪魔そうに揺らしながら率直な感想を述べるきららに、悲鳴のような声を上げる自斎。

動きといい言動といい、どう見ても両者の姿が入れ替わっている。

軽口を叩くほどの余裕があるのか、はたまた余裕の無さ故の軽口な

のか。ともあれ、エウリュアレーを苛立たせるには十分過ぎた。怒りに任せ、流麗さを失った二振りの大剣が振るわれる。しかし、二人は後方に飛び退り、再び煙の中へと消えていく。

(視覚を封じられた状態での入れ替わり！ 鬼の娘なのか、それ以外なのか。姿を表す度に押し付けられる二択で思考が鈍る！ これは、まずい……!!)

一撃離脱の奇襲はそうこうしている間にも繰り返される。

互いに武器を入れ替え、姿を入れ替えて続く波状攻撃に、エウリュアレーは徐々に傷が増え、体力を削られ、追い詰められていく。

本来、尤も警戒しなければならぬ神を宿した少女にすら警戒を割りさく余裕すらない。

敵が姿を見せる度に槍による攻撃か、冷氣による攻撃か、刀による攻撃かを判断した上に、どれが本命かが分からないという致命。

一瞬の判断ミスが命取りとなる戦いにおいて、視覚的根拠が通用しない状況など戦う者にしてみれば悪夢以外の何ものでもあるまい。

(これでもまだ殺れねえ、化け物が……!)

(このまま続けていたら、ふうまも凜花先輩も……!)

(こつちが先に潰されかねないじゃない!)

だが、焦燥と驚愕に駆られていたのはエウリュアレーだけではない。奇襲を仕掛ける側の三名もまた同様だった。

エウリュアレーでなければ、最初の一撃で決まっていたはずだ。とてもではないが、並の使い手では対応しきれるものではない。

相手が何をしてくるか分からない状況での戦いに慣れきった百戦錬磨の伝説だからこそ、傷を負いながら尚も立ち続けているのだ。

小太郎と凜花には時間的な制約もある。出血による死亡、能力の酷使による死亡。いずれにせよ、長引けば長引くほどに危険は増大していく。

ただ、必要以上には攻め立てない。

権左は持ち前の経験から、自斎ときらは生まれ持った戦闘の才能から、この戦いの本質が我慢比べであることを理解していたからだ。状況を打破しようと無理に攻めた方が、或いは状況に心折られ諦めた方が先に沈む。与えるべき決定打を叩き込むのは、その瞬間でなければ意味がない。

唯一、誤算があったとするのなら――

「よもや、此処まで追い詰められようとは……」

――エウリュアレーの困惑が収まり、命を賭ける覚悟を済ませるのが殊の外早かったことか。

ここに来て、伝説の魔女は自らの見積もりが誤りであったと認めていた。

これまではあくまで退屈凌ぎの一貫、単なる一人遊びの玩具としてしか見ていなかったが、今は違う。自らの身や命を削つてでも打倒するに足る存在だと認識を改めた。

人間なぞ下級種族。本気を出すことなど我らにとって恥以外の何者でもない。

そんな共通認識を持つ魔族達には決してあり得ない決意。上位魔族であれば尚の事。不要なプライドに拘り、追い詰められるだけ追い詰められた挙句、怒りに任せた反撃を試みて倒されるというのが典型的なパターンである。

だが、彼女はその典型に当てはまらない。神々に良いようにされた経験故にか、自らの失敗を認め省みることを恥とは思わない。故に、精神の立て直しも早ければ、次なる一手の決定も早かった。

「ぎい、い……っ、がああっ………!!」

手始めにエウリュアレーが行ったのは、小太郎へと仕掛けた呪いの解呪。

先刻までは剣さえあれば十分と考えていたが、相対した敵は予想を軽々と越えてきた。これの打倒には、己の全てを賭けねば不可能という判断は、容易く最も危険な選択を取らせた。

解呪と同時に己へと返ってくる呪い。

肉体と魂をより深く繋げる筈の呪いが、より強くなつて返つてくれば如何なる効果となつて現れるのか。

覚悟の末の選択は、すぐに未体験の感覚となつて襲いかかる。

それは接続というよりも、融合に近かった。

肉体と魂が同一のものとなる。それはある種の精神生命体の在り方に近い。生まれながらに肉の器を持つ生き物が辿り着くには、あり得ない境地。

生きながらにして、ただの一世代で別の存在に成り果てる。それがどれほどの苦痛であるのか。いや、苦痛ですらないか。

苦痛とも快樂とも付かぬ、ただただ別のモノに成るといふ本能を恐怖させる感覚。今ある自分が音を立てて崩れ、四肢も内臓も魂までもが一緒くた蕩けて混ざり合い、血と汚汁となつて自分ですらない何かが新たに生まれ落ちてくる。

「だが、舐めるなあ——！」

その呪いの強制解呪による反動を、恐るべきことにエウリュアレーはただの矜持と精神力だけで耐え抜いた。

肉体は兎も角として、魂の輪郭を保つのに重要なのは、絶対的な自我。

己は己。我こそはエウリュアレー。思うままに振る舞い、不幸も幸福も同じものと嘯いて嗤う魔女。他者など歯牙にも賭けず、全身全霊を賭けて生を謳歌する好き勝手の類。

ただそれだけ。たったそれだけの理由と矜持で、彼女は未曾有の現象を抑え込み、自我を保つてのけた。

しかし、代償は大きかった。内臓の八割が機能を停止。呼吸もまともできず、心拍など停まりかけ。直ぐにでも治癒魔術を始動させね

ば、ものの数分で息絶える。

「風……っ、まずい！ 凜花先輩、忍法を解除してっ!!」
「——っ?!」

異常事態にいち早く気づいたのは自斎だった。

神気の影響か、人のそれと若干異なる感覚を持つ彼女は、頬を撫でる風が今までとは違うことを肌で感じとった。

言葉で言い表せない何らかの意思。その意図に気づいた瞬間、悲鳴を上げていた。

叫ぶが早いか、凄まじい暴風が吹き荒れる。エウリユアレーは自らの治癒よりも、敵の打倒を最優先としたのだ。

「〴〵積み重なる鳥の屍、溢れ出す鈍色の雲、彼方の塔にて下界を見下ろす超越者。散在・集積・虹色の扇子。我が手を見よ、集い惑う羊の群れども〴〵!!」

（これは、後述詠唱か。無詠唱で魔術を発動させた後に、追加で詠唱することで強化・補強する実戦向き的高等技術。出来るのは不思議じゃないが、此処まで追い詰めてもなお……!）

「〴〵汝の名は暴虐。霊験な頂きと母なる大地を削り、吹き荒れよ〴〵——!!」
「う、くう……きやあああああああ!!」

暴風はエウリユアレーを中心に吹き荒れ、やがては竜巻となる。

風の暴威の前には、煙の帳など何の役にも立たない。綿菓子のように千切れ、裂かれ、初めからなかったかのように霧散していく。

「はあ……はあ……っ、は、ああ……はあ……っ!」
「ぜえ……はっ……ひゅ……ひゅー……ぐっ……!」

暴風が止んだ後に残ったのは、範囲から外れた位置にいた小太郎と

地面に倒れ伏した対魔忍達、息も絶え絶えのエウリユアレーのみ。
最も状態が酷かったのは、凜花だ。

自斎の警告の叫びで既での所で肉体の大部分を煙から元に戻すことに成功したが、右腕は肘から先が、右脚は膝から先がなくなっている。

断面を煙化しているが、この状態が解ければ大出血は必定。対魔粒子も残り少なく、維持が精一杯で戦うことなど出来はしない。

残りの面々も暴風で上空へと巻き上げられて地面へと叩き付けられたのか、風で巻き上げられた何かに打ち据えられたのか、立ち上がろうとしているものの、その域に回復するまでどれだけかかるか。

勝負は決したも同然であったが、エウリユアレーに油断はない。

皆が瀕死の中で一人だけ、限界に限界を重ねて立ち上がる。好機を逃す手はなく、相手が本気を出し、己もまた全力を尽くしたのであれば、半端な決着は互いに対して非礼となる。

勝利の歓びに浸るのではなく、思い掛けない強敵への敬意から、その首を叩き落とそうとし――

「があっ?! ば、馬鹿な……呪いは、既に……!」

「生憎だった、な。コイツは、呪詛返しじゃ、ねえよ」

――訪れた三度目の激痛に地面へと倒れ伏した。

但し、一度目と二度目の魂を引き裂かれる痛みとは僅かに異なっている。

今訪れた痛みは、単純な外傷。肩から脇腹にかけてを剣で引き裂かれた裂傷のそれだ。魂の輪郭を掴むことに長けた魔術師が間違える筈もない。

そう、初めから小太郎の使った釘型の魔導具は呪詛返しを目的としたものではなかったのだ。

ノイ謹製の釘の名は『痛覚共有簡易呪具 “品川心中”』。名の由来は、身勝手な女郎と騙された客を語る落語の演目。使用した瞬間から何処か相手を小馬鹿にする化かし合いの様相を呈することから、小太

郎が名付けた。

元々の作成過程は、魔術を扱えない小太郎が姿を見せない相手が仕掛けてくる呪殺に対抗することを目的とした魔導具であった。

しかし、そう易々とはいく筈もない。如何に大魔道士ノイ・イーズレーンと言えども、どのような呪詛にも対抗しうる魔導具を作成することは不可能だった。

呪詛返しは簡単な術式ではない。手順も対応も千差万別。対象が如何なる呪詛を掛けられたのかを知り、仕掛けた相手が如何なる縛りと代償を支払ったのかをまず調べねばならない。

そうである以上、簡易的で不安定な魔導具で対抗するよりも、殺されるよりも早くノイの下に来て正式な呪詛返しを行った方が安心・確実であるという結論だった。

だが、繋がり深いノイですら疑いの対象である小太郎は考え方を変えた。呪詛返しを行えないのであれば、相手が自発的に解呪すればいい、と。

その末に作成されたのが、これだ。丑の刻参りに使用された釘を起点とし、呪いを掛けられた対象を藁人形に見立てて発動する魔導具。

対象者と使用者は呪いによって繋がった状態にある。

この釘はその呪いを道筋として、対象者の感じている苦痛を、使用者と共有するもの。

呪殺を行う使用者は、呪術に精通した専門家。呪術を行った後に身に覚えのない苦痛に晒されれば、真っ先に疑うのは間違いない呪詛返し。

このままでは自ら仕掛けた呪いが返ってきて確実に死ぬ。ならばいつそのこと今の段階で一か八かの解呪に賭けた方がまだ……そんな心理状態に追い詰めるためのもの。

効果は抜群のようだ。何しろ、エウリュアレーですらも騙された。この世に存在する殆どの魔術師も同じような選択をするだろう。

かくして、両者の間を漂う好機は再び独立遊撃部隊の手へと収まった。

「——っ」

エウリユアレーは膝を付き、首を支える力すら失っていた。目に映るのは暴風で倒れた草ばかり——そのままの状態で、確かに敵と目があった。

「おっと、死んだふりが卑怯だなんて言うなよ。こちとら忍だぜ」
「この距離、なら——」神氣、解放」

水面と同じように、権左と自斎が地面から顔を出す。

権左は皮肉げな笑みを浮かべ、無傷を謳う。竜巻に襲われる直前、自らの忍法で地面の中へと逃れ、止むと同時に倒れ伏して油断を誘った。

後は隙を見て再び地面へと潜り、確実に勝利を齎す存在を敵の間近へと送り届けたのだ。

権左の言葉に応えるように、自斎の仮面が上がる。

頭になったあどけなさの残る顔は、額から流れる血で濡れていた。焦点の合わない銀の双眸は満身創痍を示しているが、秘められた闘志は消え去っておらず、紅い輝きとなって溢れ出す。

『オオオオオオオ——！！』

解き放たれた神氣と共に神威そのものが姿を表す。

生き物に対して本能的な恐怖を与えるフォルムは今や半分。尚之助の手によって真つ二つに断られた姿は完全に回復はしておらず、まだ右半身をこの世に持つてくるだけで精一杯。

それでも、自斎と忌神はこれまでにないほど同調していた。

忌神や自らの忍法に対する嫌悪は既がない。そんな余分を考える暇がないほどに追い詰められている。

自斎は今回の任務を終わらせて新たなる道を歩むために。

忌神は自らの存在を守る本能に従って。

エウリュアレーという強大な敵を打倒する。両者の意識はその一点で完全に一致する。

それが神遁という忍法の真髄であるのか。自斎の度重なる消耗と神体の損壊によって物質界に存在することさえ難しい状態であるにも関わらず、忌神は天を揺るがし、魂を揺さぶる咆哮をあげた。

「何の、これしきい——!!」

相対するエウリュアレーに恐怖はない。忌神に負けじと咆哮をあげる。

この規格外の神を前にして、勝てるかどうかなど既に度外視であった。

それこそが自らを追い詰めた好敵手達に対する返礼。どのような形で決着を迎えるにせよ、余力を残した状態で終わるなど言語道断。

細胞の全て、魂の一片に至るまで。己から引き出せる力を搾り尽くし、一刀に全て込める。

敗北する気など更々ない。目指すものはあくまで勝利。だが、求めているものは勝敗ではない。

それらあくまで結果に過ぎない。彼女が求めているのは、全身全霊を以て相対し、自らの矜持に殉じたという納得のみ——!

「——」

「やらせない、つての……私達は、アンタを倒して、皆で帰るのよ……!」

「——見事」

振り上げた大剣が完全に静止した。

闘気や殺意、始動した術式から魔力まで。ありとあらゆる運動が停止していた。

エウリュアレーに驚愕も疑問はない。あるのは、惜しみのない称賛だけだ。

彼女の右半身が氷で覆い尽くされている。

何が起きたのかは語るまでもない。氷は草原の中を道のように伸び、その先には倒れ伏したまま必死で意識を保つきららの右手と繋がっていた。

「我が全身全霊破れたり！ 見事、見事、御見事！ そなたらの勝ちだ、人の子ら!!」

忌神が勝負を決するべく、鉄槌を振り下ろす。

全てが轟音と粉塵に飲み込まれる直前、伝説の魔女の口から発せられたのは、自らを打ち破った者達への惜しみない賞賛の言葉だった。

かつこよく決められると思った？ 残念、ギャグ退場
でした♪

命の息吹が感じ取れない荒涼とした原野。

その中で、戦いに勝利しながらも満身創痍の面々は一所に集まっていた。

「何とか、なるものね……」

「こ、これくらいどうってこと……あるわね、やっぱり」

最後まで最前衛で戦い抜いた自斎ときらは泥と埃で汚れることも厭わず、その場にへたり込んでいた。

声にも澆漑さが欠けており、見た目も酷いものだ。

頭部からは出血が、全身には比較的軽いものの擦過傷と裂傷のみならず痛々しい青痣が無数に浮き上がっている。

あれだけの規模の竜巻に巻き込まれたのだ。これでも奇跡的な軽傷と言える。五体満足でいられるだけでも幸運であり、同時に二人の肉体が如何に強靱かを物語っている。

「すう……ふう……小太郎は、もう大丈夫？」

「大丈夫じゃないが、死にもしない。五車に戻るまで何とか持つだろうよ……全員、よくやったな。予想以上の戦果だ」

その横では、凜花は地面に体を投げ出し、小太郎が胡坐をかいて座り込んでいる。

凜花は敵からのダメージという点では最も軽かったものの、忍法の酷使による損壊は最も重い。

何せ、右の手足がそれぞれ肘と膝の先からなくなっているのだ。今は手術でも行われたかのように、切断面は丸くなって塞がっている。これでは日常生活もまともに送れない。

ただ、凜花に恐怖はない。煙遁の使い手を多く輩出した紫藤家では、自身の限界を超えた忍法の酷使はこうした事態と対処法も相伝さされている。大半は全身を煙と化して元の肉体に戻れなくなり死亡している事を考えれば御の字ですらあった。

四肢の欠損への対処は、全身を僅かに煙化して失った部分へと継ぎ足していくこと。

ただ、言葉にするほど簡単ではなく、出来ないものは一生かかってもできない才気と繊細さを要求される。

継ぎ足しに使った部分は当然のように目減りするし、下手な部位を使つては生命維持に支障を来す。そのギリギリのラインを見極めながら、食事で体重と体積を増やして再び継ぎ足すの繰り返し。

まるで粘土細工の人形に行うような所業を自身の身体で行うのだ。中には、その異質さに耐えきれず発狂する者もいる。

だが、何の不安もない。今、凜花の中にあるのは愛する者と生き延びた喜びと愛する者に認められた歓びだけを噛み締めている。

対魔忍の使命と誇りよりも、女としての情念を優先してしまう浅ましさを恥じ入りながらも、そうせずにはいられない様子だった。

疲労と未だ軋む魂から湧き上がる痛みに項垂れながらも、小太郎が送ったのは臨時隊員達への称賛だ。

結末は見えていたが、勝ち筋に乗れたのは他ならぬ彼女達の奮戦努力によるもの。正規隊員であればもう少し楽ができたのは否定できない事実であるが、初期の目も当てられない状態からこの戦果であれば十分すぎた。

「いくら何でも気を抜きすぎだぜ、お嬢ちゃんがた」

「——はあ？ 何言ってるんのよ。それとも何？ こんな檻樓雑巾相手にやるつもり？」

「お前等の中でオレがどういう評価になってんのか知らねえが、その

気はねえよ。オレが言ってるのはそつちじゃねえ。脳みそお花畑過ぎて呆れるぜ、なあ宗家のお坊ちゃん？」

呆れかえった表情で頭を掻く権左に、うんざりした表情できららは嫌味を返す。他の二人にも似たような反応だ。

既に彼女達の中で権左は生粋の戦闘狂になっている。弱り切った相手を蹴り殺すよりも、此処で見逃しての再戦を選んだ方が彼の嗜好と一致するはず。

そもそも、エウリユアレーと戦いに来たのは主である骸佐の意向ではあるまい。意向であったのなら、矢車を倒した際に面子も何もかなぐり捨てて尚之助と共に共闘を選択していた、と彼女達は考えていた。

凡そ彼女達の権左の人柄や行動に対する判断と推察は正しい。

ただ、決定的に違っていたのは、戦闘経験の差と変わらずに存在し続ける結界への考察だ。

これほど高度な結界を特定の人物を試すために張ったのであるならば、維持はどの程度まで必要になるのか。

単純に考えて、試し終わるまでが普通だ。それ以上は無駄であり、結果がどのようなものになるかはさておき、試すだけならばそれで十分。

招いた人物を殺すつもりならば、一生閉じ込めておくために己の死後も維持し続ける、という考えも分からなくなかったが、もっと狡猾で効率の良いやり方は腐るほどあり、余りにも非効率的で自信の欠片も感じられない手法だ。

ならば、こうして結界が維持され続けているのは何故なのか。

答えなど一つだろう。

明確な理屈などなく、単にこれまでの経験と直感から導き出した結論と十分に鍛錬を積んでいるであろうに強敵を討った緩みからすっかり「残心」を忘れ果ててしまった経験不足の後進に、権左は助けを求めるように小太郎へと視線を向けた。

だが、視線を向けられた本人は肩を竦めるばかりで何も言わない。

まるで、何の心配もないと言わんばかりだ。

「否定はしないがな。越えなきゃならんラインは越えた。どうしてもなるさ」

「……………どういう——ツ!？」

両者の反応を見て、流石に不審を抱いた自齋が口を開くが、全てを言い終わる前に変化が訪れる。

何の前触れも予兆もなく、突如として目の前の光景が切り替わる。今し方まで死闘を演じていた筈の原野から、アンティーク調の調度品で揃えられた客間へ。

文字通りの急激な場面転換に、三人は付いていけずに啞然とするばかりで立ち上がる気力すらない。

ある程度予見していた権左は即座に槍を中段に構え、小太郎だけはゆつたりと立ち上がる。

その視線の先には、客間の中央に置かれた丸テーブルを前に椅子へと腰掛けた女が一人。

黒い頭巾に目隠しをした女は、微笑みながら自ら招いた者へと拍手を送っていた。

「お見事。とても、とてもとても、素晴らしかった。心よりの称賛を送らせて頂くわ」

「ちよ、ちよつと冗談でしょ……………!？」

「嘘、確かに手応えはあったのに……………!」

その姿に、きららと自齋は弾かれたかのようにその場に立ち上がった。

だが、誰の目から見ても無理をしているのは明らかだった。立つ事さえやつとなのだろう、見ていて哀れになるほど膝が笑っている。

同時に顔は悲痛一色で歪んでいた。無理もない。つい先ほど打倒したとばかり思っていた強敵が無傷のまま再び目の前に現れるなど

悪夢以外の何ものでもないのだから。

歴然とした実力差と戦闘行動に移れないほど傷ついた身体という現実は何ともしがたい。それでも闘志は衰えず、心が折れていないのは、流石に対魔忍を名乗るだけはある。

それは既に戦えないはずの凜花ですら変わらない。残る左腕で無理矢理に上体を起こし、既に拳を握っているではないか。

だが、最も慌てていたのは女——エウリュアレーであった。

もう戦意はない事を示すように、両手を前に突き出して手首を振って見せた。

「ちよつとちよつと、こつちにはもう戦う気はないわよ?」

「今まで好き放題やっておいて、そんな言葉を信じられると思うのかしら?」

「はあ、どうしてこう対魔忍って血気盛んなのかしらね。そちらの坊や達も何か言ってみてちょうだいよ」

「寝言は寝て言えや、年増」

「あら酷い。事実とは言え、女としてちよつとショックね。言葉は選んで欲しいものだわ、槍使いの益荒男さん」

戦意、敵意、殺意、害意。

未だ叩き付けられる敵対の意志を前にしても、エウリュアレーは涼やかな態度を崩さず、応対の気配すらない。

正に暖簾に腕押し、糠に釘といった風情で、経験の薄い三人は毒気が抜けてしまうほどだった。

唯一、権左だけが殺意を漲らせていた。

この辺りは経験の差。そして態度がどうあれ、目の当たりにした実力が、そのまま生殺与奪の権を握っているのは間違いなく相手であると理解しているが故。

権左も戦いを求めてこの場を訪れたわけではない。あくまでも、優先したのは骸佐の利益であり、尚之助の頼みであったから。

この場でむぎむぎ殺されるつもりもなければ、小太郎を殺させるつ

していく。

間髪入れず天井に真つ黒な穴が開いた。物理的なそれとは異なる、空間そのものに穿たれた虚。

咄嗟に穴の淵に槍を引つ掛けようとした権左だったが、槍の長さよりも直径が広がってしまい抵抗虚しく叫び声と共に飲み込まれていった。

その様を少女達はポカンと眺め、小太郎は物珍しそうに覗き込むばかり。驚いて硬直している前者は兎も角、精神的に余裕がありながら一切手助けをしてやらない後者は何なのか。

「さて、彼への埋め合わせはまたの機会という事にして、私達はお茶会にでもしましょうか——と、その前に、煙の子の治療が先ね」

（ちよ、ちよつとふうま！ どうすんのよ！ あの男もいなくなっちゃったし、このままじゃ！）

（いいんだよ、これで。さつきも言ったろ。越えるべきラインは越えたつて。どうしても戦いたきや、一人でやってくれ。オレは権左と同じ末路辿るのヤダよ）

（ちよ………と待って。その口振り、それって、貴方もしかして、初めからアレが偽物だつて気付いてたの?!）

（そうだが?）

（小太郎、どういうことなの?!）

ただでさえ戦力に開きがあると言うのに権左までいなくなつてしまい三人は慌てふためていたが、小太郎だけは驚きが皆無であった。

それもその筈、彼はあの丘で相対した瞬間から、これが試練という名の茶番に過ぎないのは分かつていた。

相対した存在が本人自身も説明できない感覚から単なる虚像に過ぎない事は、その瞬間に悟っていた。

その上で茶番に付き合ったのは、とある書物の情景を垣間見たから。

持ち前の猜疑心から、いずれ必要になるかもしれないという理由だけでただの人間がただの努力だけで習得可能なあらゆる技能スキルに手を伸ばしている彼であるが、どちらかと言えば身体を動かす事も無理なく習得しているが、頭脳労働の方が得手だ。

休日においても、自らの才気の無さを知っているが故に、自らの女と過ごす以外はただひたすらに死んだとしても許しを与えぬ鍛錬に時間を費やしているものの、本音を言えば本の虫になっている方が性に合っている。

故に、その知識量は専門家には及ばない深さのもの、専門用語が飛び交う会話に人界魔界の分野を問わずに飛び込んでいける広さを誇る。

その知識には、エウリユアレー自身が著したとされる『死の丘の魔女』についても含まれる。

恐らくは虚実入り乱れ物語風に書き上げた自伝なのだろうが、戦いの前に彼女が発した科白は、作中での彼女の科白と一字一句違わぬところがあつた。

そも魔女とは理不尽なもの。一方的に試練を課し、笑いながらそれを眺めるなど日常茶飯事だろう。故に、まずは課せられた試練を越えねば何も始まらないという判断だつた。

そして、目の前のエウリユアレーが虚像に過ぎないと三人に伝えなかつたのは、僅かな気の緩みさえも与えたくはなかつたからだ。

偽物であると分かれば、無意識的にであれ、ほんの僅かに気は緩む。どのような人物であれ、真贋を見極める目を持たぬにも関わらず、本物には偽物が劣つているという固定観念があるからだ。

そんな状態で戦いを挑もうものならば、一瞬で戦線は崩壊していた。自他共に緩みの許されぬ命の取り合いという前提を崩す訳にはいかなかつたのである。

「えーっと、アレは何処だつたかしら……あ、ちょ、あららららららあ」

(てゆうか、これがあの人の素なのね……)

(毒気を抜かれるって言うか、なんて言うか……私、苦手かも)

エウリユアレーは小太郎達の密談を聞こえているであろうに、敢えて聞こえぬ振りをしているのか、何やら探し物に専念していた。

しかし、当の本人も探し物を何処に閉まったのか覚えていないらしく、戸棚を開けては中の物を床へとぶちまけ、その度に足で部屋の隅へと蹴り飛ばしている。

その姿は魔女というよりも近所のズボラなお姉さんといった風情で、殺し合いをしていた身としては、きららの言葉通り、何と言つていいのかわからなくなるだろう。

なお、魔術師にしてみれば彼女の行為は余りにも酷い。

彼女が雑に扱っている薬瓶やら魔術本やら魔術触媒と思しき数々の物品は、並みの魔術師であれば生涯をかけても作り出せないものであったり、天才と呼ばれる者でも手に入れない逸品である事か。目の前の現実を看過できる魔術師は、それこそノイ・イーズレーンくらいのものだろうか。

「あー、あつたあつた。そーれっ☆」

ようやく目的のものを発見らしいエウリユアレーであったが、見つけるや否や無造作に暖炉へと投げ入れてしまう。

真っ赤な炎の中へと入った薄汚れた布に包まれた掌サイズの物体は虹色になって燃え上がると同時に、軽い破裂音と共に大量の煙が生み出される。

「きゃっ、な、何っ……っ？」

「さ、削れた手足から煙を伸ばして、ごほっ、この煙に繋げなさい。ゴホごほっ、恐らく、簡単に再構築できるわ。ごほおっ、オえっへエっ!!」

「……………」

明らかに何らかの薬品とは異なる反応に、自斎は小さく悲鳴を上げた。

魔術に対する予備知識もなければ、先程から魔女に圧倒され続けている。無理もない。良くも悪くも素の彼女が顔を出している。

何かは燃えれば燃えるほどに大量の煙を生み出していくが、空気の流れの影響なのか、エウリユアレーに向かって流れており本人は咳き込んでいた。

見様によつては大変面白い上に貴重な光景なのだろうが、手助けされようとしている凜花にしてみれば困惑の極み。

今し方まで命の殺り取りという極限状態だったというのに、今度はこんな面白映像を目の前で見せられれば、彼女でなくともどうしていいのかわからない。

まともな思考の出来なくなった凜花は助けを求めるように小太郎に視線を向けるが、軽く肩を竦め、口にした言葉も気軽なものだった。

「どーぞお好きに。オレから見て奴に害意も悪意もない。最悪、おかしなことになったら斬り落とすしちまえばいいだろ。幸い、獅子神斬るのが得意な奴はいる」

「自分の事じゃないからって簡単に言うわよね……もうちよつと、凜花ちゃんや自斎ちゃんの気持ちを考えてら？」

「は？ 戦いに身を投じてるんだから、手足斬り落とされる覚悟くらい済ましてるに決まってるんだろ。オレからすればそれ済ませないで戦線に出てきてるお前等の方が異常だわ」

「……………」

凜花の欠損が今この場で治ろうが治るまいが興味はないのか。

小太郎の結論は気軽なものだ。少なくとも悪意も敵意もなければ、おかしな魔術の種を仕込まれる心配はない。

己の見込みが間違いだったとしても、斬り落としてしまえば凜花自身は多少の出血と痛みを伴うだけで、命の危険までには至らないからいいだろうという事らしい。

肉体など目的達成の手段、死ななきや安いがモットーの彼らしい結論だ。

付き合わされる方は溜まったものではない、ときららはジト目で睨んだものの、返ってきた正論でもある極論に押し黙る。他ならぬ彼自身、間違いなく最前線に立つて実践しているのを目撃したからこそだ。

その様子を眺めていた凜花は、これ以上の議論は無駄と悟り、素直にエウリュアレーの助けを受け入れる事にした。

手足があれば、これ以上の足手纏いにならないのは事実。そして、伝説の魔女は交渉か対話の席に着こうという意思がある。此処で助力を蹴り、機嫌を損ねるのは避けたいところだ。

「……！　嘘、こんな簡単に……」

意を決した凜花に待っていたのは更なる驚きだった。

本来、煙遁による煙への変化は己の肉体以外に指を伸ばすとなると難易度が跳ねあがる。無論、元々の己の一部出なかった煙を自らの肉体とするのもまた同様。

紫藤家歴代当主、並びに分家の煙遁使い全てを見渡しても、有機無機・自他問わず自在に煙化を可能としたのは僅か数名。天才と呼ばれる者の中でも更に一握りの天才しかいない。

高等技術と呼ばれるようなものではなく、選ばれた者が持ち得る感覚センスによってのみ実現可能となる再現性が無きに等しい神業——の筈であった。

だが、現実はどうだ。

半信半疑のままゆるゆると伸ばした煙が、暖炉から吐き出される煙と結合し、混じり合う。

刹那、背骨に走った電流を何と表現すればいいのか。凜花には言葉に出来なかったものの、彼女の感覚に従うならば『いける』という単純かつ確信めいたものだった。

煙は見る間に欠損した右の手足に集まり、灰色の煙のまま形を成

す。

骨を、筋肉を、神経を、皮膚を、爪を。灰色の腕はやがて肌色へと変わり、本来の形へと寸分変わらず元通り。

二度三度と拳を握っては開きを繰り返し、続いて膝と足首の関節を確かめながら立ち上がる。形だけでなく、機能性も変わりはない。

流星に凜花も眠っていた己の才能が目を覚ました、と思うほどに愚かではない。

しかし、そうでないとするのなら、起きた現実にはエウリュアレーが自身の忍法を——いや、下手をすれば対魔忍がそれぞれ持つ固有の忍法を解き明かしつつある、と示している。

ただでさえ高まっている警戒心は、青天井に上がっていた。類を見ない魔術の才を生まれ持ち、人外の寿命で研鑽を積んできた魔女。近い将来、忍法という魔族への対抗手段そのものが意味を成さなくなりかねないのだ。

「随分簡単に出来たな……何にでもなる煙か、ドツペルゲンガーの身体の一部か何かか？」

『……………え』

「んー、惜しいわね。それで代用が効かない訳じゃないでしょうけど、正解はシェイプシフターの胎児の干し死体よんッ♪」

『……………えッ』

「ドツペルゲンガーの上位種、つーか始祖じゃねえか。その上、胎児か。成程、素材としても魔術的にもそれなら不思議じゃないか。驚いたのはそんなもんを保有してる上に気軽に使っちゃうアンタの神経だが」

「あら、貴重品だからって使うべきタイミングはあるでしょう？ 私、貯め込みはするけど使うべき場面を見誤るほど愚かでもないもの。その点、坊やと似通っていると思うのだけれど？ 最終ダンジョンまでエリクサー使わないタイプだった？」

「アンタがその例えをするのを他の魔術師が聞けば卒倒ものだろうが、概ね同意する」

既に魔界で絶滅したとされる種である姿シエイプシフターを変える者は名の通りに、あらゆる存在に姿を変える。

その点は、子孫であるドツペルゲンガーと変わらない。だが、両者を隔てる壁は広く高い。特に「成り済まし」に関して。

ドツペルゲンガーは触れた者の記憶と姿を完全にコピーし、女しか生まれてこない少数勢力にして種族。

あくまで彼女達の「成り済まし」は知的生命体の男から子種を貰うための種族的な特性であるために、限界が存在する。

それに比べて、シエイプシフターの「成り済まし」に限界はなく、際限もない。

成り替わろうとしたものが生物であろうが鉱物であろうが関係がない。無機有機問わず、質量保存の法則すらも崩壊させて変身する。

魔界では、ある都市の建物に成り代わり、徐々に周囲の建物を侵食してゆき、やがては都市そのものに成り代わり、一晩で十万人規模の住人を喰らい尽くした、などという伝説もある。

シエイプシフターが絶滅した理由は定かではない。

過ぎたる力を持つが故に他種族に滅ぼされたのか。最早、生き物として存在する理由すらなくなったのか。はたまた、余りにも現実離れた変身能力故に自らが何者であるのか分からなくなつて自滅したのか。

ともあれ、そんな存在の死体を燻して生まれた煙、況してやそれが胎児のものであれば魔術的にも大きな意味を持つ。

胎児は無限の可能性を秘めている。生まれた後にどのような存在になるのかは分からず、生まれ落ちていない以上は運命すらも定められていない。形は確かにありながら、無形そのものという矛盾を許されている。

此処にシエイプシフターという要素とエウリュアレーの腕前が噛み合えば、それこそ何にでも成れる。何であれ成し遂げられる。

かつて都市を喰らった者のように都市そのものを作り出すことも。或いは、未だ神々ですら不可能であつた完全にして完璧な死者蘇生

も。

果ては、人界魔界にすら存在していない筈の都合のいい物質すらも。

自斎も、きららも、凜花も、事の重大さに気付いておらず、死体を使っているという嫌悪感にばかり意識が向いていた。

事実は、途方もない宝を出会って間もない少女の治療に使い潰したようなもの。多くの賢者が嘆き悲しみ、それ以上の愚者が身勝手な憤慨と罵倒をエウリュアレーに浴びせる事だろう。

ただ、エウリュアレーにしてみれば、当然の事をしたまで。大事に閉まってはあったが、価値自体はないに等しい物体。

彼女は生粋の享楽主義者。過程も結果も、自らが楽しむためのものに過ぎない。そんな、過程を飛ばして結果だけを得るといふ、折角の楽しみを半減させてしまう物にも魔術にも興味はない。

それを、殺し合いに興じた者から多少でも信頼を買えるのであれば万々歳であった。

小太郎は、そんな内心を見透かしたのだろう。最早、呆れすらない。寧ろ、一貫して享楽主義者としての姿勢を一切崩さない彼女に好意すら抱いているほどだ。

「では、改めて。試練を越えた少年少女を招待しましょう————ようこそ、魔女エウリュアレーのお茶会に。楽しくお話ししましょうねっ」

何処までが、彼女の思惑であり、掌の上だったのか。

兎も角、伝説の魔女の顔に刻まれていた笑みは、邪悪さとは掛け離れた無邪気である嬉々としたものだった。

伝説の魔女と苦労人の相性は最悪————そんなふうに考えていた時期が俺にもありました

「さて、お茶も回った事だし、何から話しましょうか？」

「何から何も、私達の目的は知っているでしょうに。此方の調査部隊は無事なの？」

始まった————と言うよりも、独立遊撃部隊の思惑を無視して勝手に始められてしまった魔女のお茶会。

小さな丸テーブルにエウリユアレー、凜花、小太郎、きらら、自齋と時計回りに椅子へと腰掛けており、それぞれの前には紅茶の注がれたカップが、中央には焼き菓子の盛られたバスケットが置かれていた。但し、紅茶にも菓子にも手を付けているのはエウリユアレーだけだ。

敵地で敵に出されたものを口にするなど言語道断、当然の考慮————なのだが、残念ながら小太郎のファインプレーのお陰だ。

全ての元凶であるエウリユアレーを睨みつける凜花、きらら、自齋の三人、今は澄ました顔をしているが、直前にやらかしている。

極限状態から解放されたと思えば倒した筈の敵が目の前に現れ、再び緊張の糸を張らねばならなくなってしまった。とは言え、そう簡単に意識を切り替えられないのが人間というもの。

軽い混乱状態の中、失ったエネルギーや水分を取り戻そうと疲れ切った三人の身体は無意識の内に出されたものに手を伸ばしていた。無理もない話ではあるが忍としては落第、エウリユアレーに悪意がない事を鑑みても及第点は与えられない。

呆れと共に見咎めた小太郎はカップを取ろうとしたきららの手を叩き、何とか阻止。まるで粗相をしようとした子供を先んじて止める

親といった感じで、目撃した凜花と自斎は伸ばしかけていた手を引つ込めた様はまるで姉妹のようだった。

彼にしてみれば、オレはこいつ等の親じゃないんだが、といった心境だろう。そして、三人のみならず、対魔忍の九割が同じ状況に叩き落されれば、全く同じ行動を取るであろう事実、組織全体に蔓延している慢心という名の職業意識の低さに頭痛を通り越して脳髓が爆発しそうであった。

が、そこはそれ。毒の有無は兎も角として阻止できただけ御の字と割り切っていた。

「それならそこにいる」

「——へ？」

凜花の問い掛けにエウリュアレーが答えるよりも早く、小太郎は自らの背後を親指で指し示す。

三人が弾かれたように指の先へと視線を向けると、部隊員達が眠ったまま椅子に座らされていた。

呼吸に乱れなく、目立った外傷も見受けられない。顔色の血色もよく、肉体的には丁重に扱われていた事が伺える。

つい先程までは寝息も気配も感じられず、存在していなかったにも拘らず、今は確かに其処に居る。

結界を先へと進む中で、エウリュアレーは幻術を用いた隠蔽や眩惑を得意とすることは分かっていたが、改めて目の当たりになれば現実離れ——否、現実を好き放題書き換えてしまうかのような技量に戦慄せざるを得ない。

「いつの間に……」

「始めから其処で寝てた。サプライズが好きなもんだ」

「もう、仕掛け人よりも先にネタ晴らしなんて遊びのない坊やね」

「アンタ相手に遊びなんてあったら何をされるか分かったもんじゃないからな。これが正解だろうよ」

咎めるでもなければ、不機嫌でもない、寧ろ自身の幻術を見抜いてくる若者に楽しみさえ見出しているかのよう口調が弾んでいる。

対する小太郎は平時と変わらない口調でありながら、帽子の下から除く瞳は異常に鋭い。一挙手一投足どころか、呼吸一つ、感じる視線の変化にすら意識を向けている証だ。

血に酔わず、ただただケダモノを狩ることだけを目的とする狩人でも見ているかのようだ。

冗談のような話であるが、この場において最も弱い筈の彼が、最も強い筈の魔女を抑えに回っている。同じ地点、同じ号令でスタートし、同じゴールを目指す単純な性能比トライアルべならばどう足掻いたところで及ぶべくもないが、スタート地点も号令もゴール地点すら自らの意思で決定できる戦いならばそれも現実となる。

エウリュアレーが僅かでも悪意を抱こうものならば、あらゆる魔法、あらゆる行動すら許さずに首を落とすつもりでいた。

肉体的にならばいざ知らず、精神的にこの男は一度たりとて全力疾走を停止させた事はない。その差が、そのまま初動の差となって現れる。正確には、エウリュアレーの初速と小太郎の全速力の勝負となってしまうのだ。

どれほど経験と才気に差があろうとも初動と全速力ならば、まだ勝負になる。自身の才能の無さを目の当たりにし、非凡な天才達に囲まれてきた彼なりの工夫。だが、発想そのものは平凡でも実現するためにはどれほどの狂気が必要であるのか。これでは一切精神に休みを与えない事と同義である。

その在り様にエウリュアレーは笑みを消さず、感嘆すら覚えながらも背筋に奔る戦慄を抑えきれずに冷や汗を流していた。

涼しい表情と態度を崩さずにいる彼女であるが、実態は凜花やきらら、自斎が警戒するほどに万全ではない。

先の戦いは限りなく自らに近づけた虚像を用いた。しかし、本体である彼女が全くの無傷でいられた訳ではなかった。

こうした分身を作り出す魔術は原則として自らに近づけこそすれ

ども、同一存在には決してしない。自身と同一存在を作り上げてしまった場合、反旗を翻される恐れがあるからだ。

そして、そうした分身は種族としてのドツペルゲンガーではなく、人界の概念であるドツペルゲンガーに近い。人界におけるドツペルゲンガーは、自他問わずに同時に同じ時間、別の場所で目撃される現象を指す。

特徴として、周囲の人間と話しをせず、本人の関係のある場所に現れ、忽然と消える。何よりも特筆すべきなのは、本人がドツペルゲンガーを目撃すると死ぬという、死や災難の前兆として概念も内包していること。言わば、避けられぬ運命の象徴のようなものであり、本人と極めて結び付きの強い鏡の向こう側でもある。

そんな鏡像存在が傷を負った場合、本人は無傷でいられるのか。

いられる訳もない。運命や先行きを映し出す鏡が割れば、移っている本人もまた割れてしまうだろう。

エウリュアレーの虚像もまたそのようなものだった。

彼女は遊戯であれども、いや遊戯だからこそ手を抜かない。今回は戦いそのものが目的ではなかった故に若干精度を落としていたが、戦い自体が目的であれば自らの死すらも許容しただろう。

事実として、衣服に隠された身体は無数の凍傷と裂傷、打撲骨折で塗れている。分身が負った傷が、そのまま彼女の身体に現れているのだ。

治癒の魔術で継続的に回復させてはいるが、鬼の異能と神の威による傷は易々と治るものではなく、消費した魔力は伝説とまで呼ばれる魔女にとつても馬鹿にならない量。

語るまでもなく互いの状態を認識し、まだ見せていない相手の数々の手札を考慮した上で、万が一にも戦いになった場合の結果は——
——奇しくも小太郎とエウリュアレーの結論は「五分」というものであった。

両者にとって好ましい結論である。話し合い、交渉をするのであれば戦力が拮抗している方がいい。相手の威圧に屈する必要はなく、また無用に相手を威圧しなければならぬ気苦労も不要ということな

のだから。

「しかし、アンタの目的が見えてこない。俺達の内の誰かが目的そのものだろうと読んじやいたが、このままじゃ遊びに来たようにしか見えなぞ」

「まあ、遊びの要素が全面に出過ぎた事は否定しないわ。私の悪い癖ね、遊び始めると色々楽しみ過ぎちゃうのっ♪」

「楽しむ……あれが遊び……」

「尺度スケールが違うわね。流石は、伝説の魔女ってところかしら……」

「冗つ談じゃないわよっ！ 巻き込まれた方の身にもなりなさいってのっ!!」

「ごめんね、きららちゃんっ♪」

「ふうまっ！ 私、こいつ大っ嫌いっ!! ぶん殴りたいっ!!」

コツンと自分の頭を小突きながら舌を出して謝罪の言葉を口にするエウリュアレー。恐らくはバチコーン☆ とウインクまでしているであろうが、目隠しのお陰で分からない。

全く反省の見られないテヘペロ謝罪にきららの苛立ちは瞬く間に頂点トッポにまで到達するが、これではどんな人間でも同じような反応をするだろう。

「言葉にするだけで実行を我慢できる自制心は素晴らしいと思う。偉いぞ」

「……そ、そう？ ま、まあ、同じ失敗を繰り返したりしないわよ、当然でしょっ♪」

(きらら先輩、それ褒めてるけど褒めてないです)

(きららちゃんエ……)

小太郎は、矢車が現れた当初に見せた暴走とは異なり感情的になりながらも行動に移さないきららを褒めた。

すると、きららは今し方見せた怒りを容易に引っ込め、頬を染めな

がらうんうんと頷いて席に着く。

どうやら今まで男は全て敵として認識していたようだが、始めて味方と認めた男からの称賛が嬉しくて仕方がないらしい。正に感情の乱高下であった。

対し、自斎と凜花は真顔でその様子を見ていた。

それもその筈、小太郎の称賛は日本という国を陰から守る者として——どころか、人として持つていて当然のものに過ぎない。

翻って、彼の称賛は今の今まできららがそれを出来ていなかった、或いは当然の常識を持ち合わせていなかったと語っているも同然。まるで一般常識を教育する親戚の叔父さんと天真爛漫で無邪気で無知な姪のようですらあった。

二人が真顔できららに憐れみを向けるのも無理はない。小太郎にとつてきららは年上であるにも関わらず手間のかかる幼女程度の認識であつて、仲間や同僚ですらないのである。

エウリュアレーなど、笑えば再噴火は目に見えているので、口元を抑えてきららの視界の外で笑っていた。

「——ふうー、話が逸れたわね。私の目的の話だったかしら」

「ああ。素直に話してくれるとは思っちゃいないが、神様に憑りつかれた奴か、鬼とのハーフのどっちかと見てるがね。前者はアンタの経歴的に、後者は魔術の研究材料に出来るからな」

「ぶっぶー♡ どっちもハズレ。正解は、貴方よ」

声もなくひとしきり笑い終わったエウリュアレーはようやく本題に戻ってきた。

しかし、小太郎の問いへの返しは否定であり、顎の下で組んでいた両手を解いて指し示した指先は他ならぬ小太郎を示している。

動揺と困惑を見せたのは指し示られた本人ではなく、小太郎に目的だと予測されたきららと自斎。

二人は喜ばしいことかは別として、少なくとも能力的、出自的には自身が特別であると自任していたからだ。

魔術師という生き物がどのような生態を有しているのかを知らずとも、決して無害な存在であるとは信じていない。前もって小太郎の予測を伝えられていた事もあって、一生涯付け狙われる覚悟もしていたが、これでは肩透かしを食らったようなもの。

同時に、胸中へと沸いたのは疑問。如何に人が持ちうる当たり前の能力を常識外れの領域にまで昇華させているとは言え、何の特別な力を持っていない彼が目的になったその理由は――？

「……………」

「ある程度、覚悟も予測もしちゃいたがな。何処かで下手を打ったか。それともアミダハラの婆さんが口でも滑らせたか」

凜花は、二人が見せた困惑と疑問とは全く別の警戒を抱いていた。彼女にしてみれば、理由などどうでもいい。問題があるとするのなら、エウリュアレーが小太郎の安全を脅かす脅威であった事。

かつての悔恨を引き摺る彼女にしてみれば、即座に排除すべき対象であろう。事実として、魔女を見る視線には殺意すら籠っているほど。もし体調が万全であったのなら、どうなっていたか分からない。

ある意味できらら以上に血気盛んな、それこそ小太郎の事は0.5秒で全肯定、彼の言葉を全てに優先する天音を思わせる狂犬ぶりだ。もう碌に戦えないと分かっているからこそ何も言わなかったが、小太郎も呆れ気味である。

そして、小太郎には動揺も疑問もなかった。エウリュアレーの目的が不明である以上、自分や凜花も目的である可能性は存在していた。手の込んだ遊びに巻き込まれた嘆きもなければ、怒りもない。

あつたのは過去アミダハラを訪れた際に不足でもあつたか、或いは正体を明かすべき相手を間違えたか、という自らの不手際に対する憤りだけだが、それもすぐさま消えてなくなる。

元より非才の身、全てが思い通りになるとも信じておらず、成功よりも多くの失敗を積み重ねてきた。不足や不手際があつたのなら、それを知れる良い機会と切り替えていく。己にすらも向けられる猜疑

心が前向きさと建設的な思考に繋がっているのもまた彼らしい。

「いいえ、それはないわね。貴方の事を知ったのはつい最近よ」

エウリュアレーの言はこういうものだった。

数週間前、アミダハラは各組織や個人が騙し合いと殺し合いを続け、変わらぬ喧噪の中にあった。

ただ、そうした喧噪とは極一部の個人は別の所にある。共通しているのは他と隔絶した超常の力を有する事か、どこにも属さず常に中立を保つ事。幸か不幸か、エウリュアレーはそのどちらにも当てはまっていた。

その立場を利用して、彼女は人界を満喫し捲っていた。ドラマ見てアニメ見てゲームやって食べ歩きしてギャンブルして免許取って勉強やってブログかいてSNSやって動画投稿してスレ監視して対立煽りして煽られて、その在り様と来たら正に人生エンジョイ勢、世界最高のパリピ。世界全ての享樂は私のものと言わんばかりの楽しみぶりであった。

世の魔術師が彼女の行動を知ればどう思うのか。いずれにせよ世界で最も優れた魔術の遣い手の一人が遊び惚けているのだから、頭を抱えて血涙を流すに違いない。

だから、自ら星を詠んだのもほんの気紛れだった。

太陽、月、無数の惑星を含めた天体の動きから自らに有益な情報を読み取る占星術。並みの占星術師では精々不確定な運勢を読み解くのが精一杯であっても、彼女ほどの遣い手ならば自らの運命を読み解くことも、余りにも高過ぎる観測精度から予知や予測の範疇ですらない未来を決定してしまうことすらある。

その末に見えてきたのが、ふうま 小太郎であったと言った。ただ、違いがあるとするのなら――

「……二人よ」

「……二人？」

「そう。私が垣間見たのは坊やときららちゃんだけ。其処には凜花ちゃんも自斎ちゃんも姿もなかった。これがどういう意味か分かるかしら?」

「……………オレとしては、アンタの占いが外れただけと思いたいがな」
「どうかしら、私は占いを外したことはないの。どれほど精度を落とすにしても、細部に変化はあっても大まかな流れに歪みなど生まれたことはなかった。因果は歪み、運命が変わっている。これは流石に、見過ごせないわね」

これまでとは打って変わって、エウリュアレーの表情は硬くなり、言葉は冷たさを帯びる。

伝説の魔女、世界を掻きまわして混沌と同時に何らかの益を齎すトリックスターの性質は鳴りを潜め、世界の全てを見通し、見定めてきた超越者としての側面が顔を出している。

この世界は彼女にとって壮大で貴重な遊び場だ。其処に何らかの異変を感じ取れば、守護に回つても不思議はない。まだ見ぬ未知を、まだ見ぬ楽しみを守るためならば、彼女はあらゆる手段を実行するだろう。

部屋の重力が数十倍にも増大したかのような威圧感。

自斎もきららも、今の今まで殺意に満ちていた凜花ですら呼吸を忘れるほどの重圧。

今度は小太郎が冷や汗を流す番であったが、思考に鈍りもなければ淀みもない。

「何か、心当たりはあるかしら?」

「特には——だが、そうだな。アンタの運命が変わったかもしれないが、詠んだのは自分のものだけ。オレの運命だけが当の昔に変わっていたのだとしたら?」

「運命とは、よく出来た織物よ。そう易々とは変わらないし、変えられない。全てが支配されていると言ってもいい。でも、そうね。一本の糸が変われば全体の図も変わる、か」

「心当たりとも言えない可能性は一つ思いつく。そんなことが出来るのか、とも思うが——あの人だからなあ」

小太郎の脳裏に浮かぶのは、優しい笑みを浮かべる女性の姿があった。

自身に死んだとして許しを与えず、徹底して過酷などという言葉ですらない試練を課した母だというのに、思い浮かぶのはその笑顔ばかりだ。

小太郎が彼女を称するならば、「ドギツイ事をやらせるが優しい母親」で済むが、他の者は全く違う。

ふうま創立時の頃から長く見守り続けた八尾比丘尼に曰く、「人間は時折、因果に全く関係なく理不尽を生み出すわ。理不尽な行為、理不尽な成果、理不尽な天才。あの娘はね、そんな人の生み出す理不尽全てを凝縮して生まれてきたような人の終わりよ」

彼女から頼りにされて振り回されてきた二車 又佐に曰く、「ただ其処に居るだけなのに、存在の重みで世界が歪んで悲鳴を上げるような存在。その気になれば、殴るといふ行為だけで全ての命を皆殺しにして世界すらも終わらせられる怪物ですよ」

幼少期より、彼女を見守り続けてきた心願寺 幻庵に曰く、「人類が殴り合いという暴力に全ての決定権を委ねた上で世界の覇権を握り、絶えず闘争を繰り返してる世界の終焉に、ようやく生まれてくる終着点でしょうな」

何時の時代も存在する『最強』の二文字。

ただ、彼女ほどにその二文字を背負うに相応しい者は存在しなかったと関わった全てが口を揃える。

何せ、こと強さにおいて、人類が歩むべき道程全てを踏破してしまっただけでも過言ではなく、その過程を終わらせてしまったのだ。

「そう。出来れば、出会って見たかったけど」

「やめといった方がいい。アンタと同じでぶっ飛んでる。出会えばまず

は悲鳴を上げて泣きを見るだろうよ」

「何それ。素敵じゃないの！」

「……前言撤回するよ。気が合いそうだ。オレが巻き込まれるだろうから勘弁してくれ」

決して多くは語らなかつたが納得はしたのか、エウリュアレーは朗らかな笑みを浮かべていた。小太郎も同様である。

彼が口にしたのは最早この世を去つた母の面影だけ。それでも、どれほどの愛情が其処にあつたのかを垣間見るには十分過ぎた。

何時の世も、親となつた者は強い。

誰もが子を儲けるだけで、授かっただけで、産んだだけで、親にはなれない。

多くの試練が其処にあり、これを超える事で親になつていく。そうしてようやく手に入れた無償の愛は、何物にも代えがたい価値がある。

決して金で買えず、決して暴力では手に入れられず、決して魔術でも手が届かず——だからこそ運命を変えるほどの重みを有す。

エウリュアレーはそうした事柄も見守ってきた。それ故に、出会えなかつた彼女に最上の敬意として、変わってしまった運命を受け入れたのだ。

「それからこれは色々と迷惑をかけた補填だけど、貴方の右目について」

「右目って……隊長の目は確か……」

「……………」

再び真剣味を帯びたエウリュアレーの視線に、小太郎もまた気を引き締める。

トリックスターは混乱を招く悪役、或いは物語を回す狂言回しのな役割ばかりに目を引かれがちだが、決してそれだけではない。ギリシヤ神話のプロメテウスが火を盗んで人々に与えたように、人類や世

界の文化に何らかの利益を寄与した文化英雄としての側面もある。

既存概念や社会制度に混乱を齎す一方で、文化を大きく発展する利益を同時に齎す存在。つまり、エウリュアレーの発言もまた、彼等にとって価値のある言葉なのだ。

しかし、飛び出てきたのは彼の右目に関して。

助言の類にしても不可思議だ。自斎が困惑するのも無理はない。

ふうまの当主は伝来の忍法すら使えない目抜け。人と関わりを持つとうとしてこなかった彼女ですら耳にしたことのある悪意ある噂話。

使えない目の話などして、一体何になると言うのか。

「不思議に思ったことはない？ 彼が本当に邪眼の類を使えないというのなら、何故生まれて一度も瞼が開かなかったのか」

「それは……確かに、変、かも？ 瞼が開かない病気、とか？ そういうのあるの？」

「眼瞼下垂は瞼が開かなくなる。調べてもらったことはあるが、オレの顔の筋肉も神経も異常無し。桐生ちゃんですら、何で開かないのかわからんと匙を投げたな」

「ちよつと、小太郎……貴方、気付いてたの？」

「そりゃね、自分の身体のことだ。気になれば調べるだろ。ま、最終的には「理由不明」に辿り着く訳だが」

可能性として、考慮はしていた。

そもそも何の異常も見られないのであれば、片目だけ瞼が開かないなどおかしい話。

外的な要因か内的な要因なのか。少なくとも封印という外的な要因では有り得ない。

生まれてすぐに目抜けとされ、母と共に離れて暮らしていた以上、最強の目を掻い潜って封印を施すなど不可能な話。また小太郎すら知らぬ母の思惑という可能性もあったが、彼女はそんなまどろっこしい真似はしない。右目が我が子にとって危険と判断すれば、即座に抉り出すくらいの単純明快な方法を好むし、その方法しか知らない。

だとするならば、内的な要因しか残らない。

小太郎が自らの忍法を無意識の内に理解し、瞼を閉じたままの状態を維持しているとすれば不思議はない。

そうした事例は過去にも存在している。大半が周囲のみならず、自分の命すら脅かす危険な忍法であり、無自覚のまま「安全弁」を設けている場合が殆ど。

「分かったのなら、どうして使おうとしないのよ」

「別に。固有の忍法なんて、ないならそれで何とかなるからな。大体、生まれ持った力なんてガチャみたいなものだろ。そんな運要素を頼りにするくらいなら、確実に身につけて一定の効果を期待できる技能スキルの方が有用で優秀だ」

「小太郎らしいわね」

「それに、そういう安全弁は命の危険に瀕すると勝手に壊れるものなんだが、オレの場合はどーにもなあ。精神崩壊するレベルの高ストレスを与えられても無反応だし、一定の条件を満たすと発動するタイプなのかねえ」

「その上、私とは違ってしっかり調べてるのね。というか、命の危険とか精神崩壊とかさらっと言わないで欲しいのだけど」

「別にいーじゃん、誰に迷惑掛けるでもなし。何にせよ手段の一つとしては持っていて損はなかったから調べただけだ。結果は何をやってもなしのつづて。ま、忍法も技能も武器も人も、オレにとっては優劣こそあっても常に同列の手段という結論は変わんねえよ。どうでもいい」

さらりと聞いただけでも気が遠くなるような科白を吐く。

どれだけ軽く語ろうとも、彼は間違いなくやった。事実、今回の任務において何度となく死にかけたにも拘らず精神的に一切の動揺はなかった。彼にとって死は恐怖に値するが、揺らぐに値せず、また見慣れたものだったのだろう。

肉体的にも精神的にも己を責め抜き、辿り着いたのは如何なる理由

か定かではないが使えない忍法という結論のみ。

其処に嘆きも憤りもない。忍法が使えない故に焦り、追い詰められ、腐っている者とは根本が異なるからだ。

彼が行ったのは己を侮る周囲を見返すための克己心による奮起ではなく、何時かは忍法を手にして対魔忍として大成するという虚栄心を満たすための努力ではなく、単なる確認作業に過ぎない。使えないという事実が分かったただけで十分だった。

「ふむ、成程。戦いの前に、『魔の因果』に囚われやすいといったわね。それは貴方の身に宿っていた力が原因———と思っていたんだけど……」

「この右目のせいだったのか？ ……ハッ！ なら右目をポイすればオレは苦勞から解放される……？」

「小太郎？ 気軽に言う事じゃないわよ？」

「冗談じゃねえや！ 使えねえ右目捨ててこんな苦勞ばかりの人生から抜け出せるなら喜んで捨てるわ！」

「それはどうかと思うわ」

「自分の身体、大事にしなさいよ」

「はーん？ ちよつと君達？ オレにそう思わせる要因の一つなんですけど??？」

「「うっ……」」

「うーん、やっぱり何度視ても違うわ。あと、貴方が苦勞するのは因果とは無関係な定めのようなものだから。うふふふ、諦めて？」

「クソツ！ だと思つたよ！」

黒布で覆われた瞳で何を見たのか。

まるで襲い掛かる苦勞に七転八倒する小太郎を見ていて楽しくて仕方がない、と言わんばかりにエウリユアレーは笑う。

結局、自身の右目についても分からず仕舞い。『魔の因果』とやらはそう簡単に変わるようなものではなく、何某かに原因がある訳ではないようだ。

得たものと言え、エウリュアレーがほぼ物見遊山で東京キングダムを訪れた事実のみ。それでも部隊に与えられた任務内容を考えれば、十分すぎる成果。これ以上は高望みと納得する。

「それでアンタの処遇に関してだが」

「敗者だもの、勝者には諸々と従いましょう。最も、投獄するつもりなら脱獄するわよ?」

「全然、従ってないじゃないのよ!」

「従ってるじゃない、投獄されるまでは。其処から先は関係ないでしょ。敗者が這い上がるうとするのまで否定しないで欲しいわねえ」

「言うと思ったよ。現状、アンタを閉じ込めておける檻がない以上、無駄だから連行も投獄もしないがな」

「やっぱり私、コイツ苦手、嫌い!」

その何処に問題が? と言わんばかりの堂々とした脱獄宣言に、きさらはもう一度声を荒げる。

根が素直で正直者、常に真正面からぶつかりにいく性格の彼女とは、終始ふざけきった態度しか見せないエウリュアレーは確かに相性が悪かろう。

「ところでね、坊や。ちょっと困ったことがあるの」

「嫌だ」

「そう言わず、話だけでも聞いて?」

「断る——あつ、扉開かねえ!!」

「実はね……」

（（勝手に喋りだした……））

小太郎はしおらしい態度と言葉に嫌な予感をヒシヒシと感じた故、断固とした姿勢で拒絶を示し、他の三人を置き去りにして応接間の扉に手を掛けるが当然のように開かない。

エウリュアレーもまた小太郎のことなど無視して勝手気儘に語り出す。この二人、殊の外相性はいいのかもしれない。

ともあれ、語り出したのは交わした契約の話であった。

エウリュアレーはアミダハラに住むに辺り、古馴染みである知己――ノイ・イーズレーンのところへ顔を出した。

当時からノイはアミダハラの顔役であり、新参として挨拶とあわよくば住居を確保できるだろうという気軽さで向かったのだが、移住そのものを拒否されてしまう。

ノイからしてみれば当然の対応だ。ただでさえ危ういパワーバランスで成り立っている秩序が一気に崩壊しかねない存在の上、何処に属して何処に力を貸すも己の楽しみのためだけに決めるなど、秩序側に立つ老婆にしてみれば厄介でしかない。

互いの主張は噛み合わず、また相手の主張を退けることも叶わない。

そんな状況に陥り、一触即発の空気になりかけたが、其処は互いの実力をよくよく理解した超越者達。無用な争いを避けるべく、一つの契約を交わすことで事なきを得た。

契約内容は簡単なものだった。

アミダハラに住むにあたって自らの意思でどの勢力個人にも属さず与さず、また相手から助力を請われた場合には必ずノイに行動を意志と意図を伝える、というもの。

これでは事実上、魔女としては廃業したも同然であり、常に監視されているようなものであったが、元々魔女としての自分などさして興味はなく、放蕩三昧するつもりしかなかったエウリュアレーはこれを快諾した。

こうしてアミダハラの日常は守られたわけであるが、事もあるうに今回の一件、ノイに一言も告げずに来たらしい。流石は人生エンジン勢にして世界最高のパリピ、面白そうだけが生きる指針であってそれ以外は本気でどうでもいいようだ。

「このまま帰ったら、ノイとやり合う羽目になりかねないのよ。流石

「あの……こんな空間を作れるなら、そこで生活すればいいだけじゃ……」

「それよっ!!」

「え? 嫌よ。この空間じゃ、電気も引けないからテレビも見れないインターネットもできないじゃない! あと、このまま維持し続けたら死ぬわね、私。結構、危険な状態なんだから」

(遊んで暮らす事の方が、自分の命より優先されるのね、この人……)

すつと静かに手を挙げて提案を口にする自斎。

彼女としても今回の任務に当たって小太郎に恩を感じているし、あわよくば自らの忍法を制御するヒントを貰えるかもしれないという下心もあった。

が、エウリュアレーに真顔で却下されてしまう。

尤も、案を否定されても腹立たしくはなく、享楽だけが人生よ、と言わんばかりの態度に呆れすら通り越して関心すらしてしまう。現在の独立遊撃部隊の中ではまともで常識人、言っている事は間違っていないのに、自信の無さ故に押しにとことん弱いのが瑕であった。

全てを諦めて継るようにつめてくる自斎。歯を剥き出しにしてエウリュアレーを威嚇し始めた凜花ときらら。何処吹く風で状況を楽しんでいるエウリュアレー。

その全てを小太郎は思考作業に没頭していた。エウリュアレーという爆弾を抱えずに、なおかつノイとの激突を防ぎつつも、最終的には自らの利となるであろう理想の配置。

エウリュアレーが周囲に与える影響力を考慮に入れた上で、切るべき手札を決定した。

「一つ良い物件があるんだけど、どうする?」

「いいわね、聞かせて」

「「ヒエツ」」

しかし、一つの提案をした小太郎と受け入れたエウリュアレーの表

情は極めて凶悪に、そして邪悪に歪んでいるのだった。

地獄へ届ける輸送機だから、そう呼ばれても仕方がないよね……

「ふう、これならば何とか……」

権左が結界内に再突入してから凡そ一時間。

慣れぬ応急処置をようやく終えて、コンテナに預けていた背中を離して立ち上がる。

所作そのものは平時のそれと変わらなかつたが、表情は険しい。鍛え抜いた身体は兎も角として、首から上に関しては無性そのもの。女からどころか男からも麗しいと称されるであろう顔は、酷く歪んでいた。

動く度に頭の芯まで響く激痛が走れば誰でもこうなる。

これで顔色一つ変えないのは元より痛覚が機能していない人間か、常に精神が肉体を凌駕している小太郎くらいのものだろうか。

移動に問題はない。全速力を出し切れないうが、この廃墟地区から離脱するには十分な速度は確保できる。

戦闘はやや厳しいが、それでも不可能ではない。二車は今や東京キングダムのおちこちから恨みとやつかみを買っている。予測される不意打ちにも十分に対処しつつ、本拠まで戻れるだろう。

懸念は自らの頼みを聞き入れて、再び死線を潜りに行った権左か。

直接相対していないとは言え、魔術の技量はこれまで戦ってきた魔術師とは一線を画す——否、そのような舞台ステージを遥かに飛び越えてしまっている。

間違いなく死闘となるだろう。それこそ、権左が無傷で帰ってくるとは信じられぬほどに。

全てを理解しながら二車家幹部として余りにも身勝手な願いを口

にしたのは、権左を信頼していたからに他ならない。忠誠心を優先しながらも、味方の想いを無碍にする男ではないと知っていた。

彼ならば、例えエウリユアレーがどれほど規格外の存在だったとしても必ず生きて帰る、という確信。それほどまでに、実力にも人格にも高い信頼を抱いていた。尚之助が相手の命が危険に晒される願いを口にする相手など、それこそ権左しか存在しない。

「——とは言え、もうそろそろ戻らねばなりませんか」

経験上、死闘が決するには十分な時間。

これ以上待つても戻らないのであれば権左は勿論の事、小太郎達の命は既にないと考えるべき。

信頼した相手を死地へと送り込んだ挙句に無駄死にさせた悔恨も罪悪感も抱いている暇はない。恩人の子を助けられなかった悲嘆を抱く資格すらない。

あくまでも己は骸佐の味方である以上、自陣營の一番槍が折れて果てた事実を主に報告する義務がある。全てをありのまま、己の心情や口にした言葉を一切包み隠さず報告し、沙汰を受けるのみ。

全ては己の未熟と不徳とする所。死を言い渡されたのならば潔く腹を切る。そうでなくとも全てが終わった暁には自ら腹を切る。介錯は不要、苦しみ抜いたのち地獄に堕ちて権左と小太郎に謝罪するのみであった。

「……………これ、は、権左殿の？」

その時、彼の耳は確かに権左の声を捉えていた。但し、姿も見えなければ何処から響いているのかすら判然としない。

新手による幻術の類か、或いはエウリユアレーの策略か。あらゆる敵を想定した上で俄かに警戒を高め、腰の二刀へと手を伸ばす。

しかし、次の瞬間に現れたのは、敵ではなく地面へと開いた穴。何が原因で開いたものなのか。恐らくはエウリユアレーによるも

腹から天井へと激突した拳句、穴が閉じて今度は背中から地面へと叩き付けられる。

呻き声を上げながら身悶える権左の悲惨さに、尚之助は手助けすら忘れて彼の名を呼ぶばかりで固まっている。

ようやく彼等が再起動を果たしたのは、激痛に喘ぐ権左がようやくの想いで身体をひっくり返して地面に俯せになった所だった。

「ご、御無事でしたか」

「ぶ、無事か、だあ？ 無事じゃねえ、全然無事じゃねえ！ あんの魔女っ！ オレはっ!! 三十分近くっ!! 落ち続けてたぞおおおっ!!」
「お劳しや、権左殿……」

両手両膝で何とか身体を支えた権左は凄まじい憤怒と怨嗟の声を上げる。

落下直前の扱いといい、三十分近く落下していたにも関わらず無傷のままの墜落。どう考えたところでおちよくられている。

何より腹立たいしいのは、これだけの扱いを受けても実力差は勿論のこと、相手の居場所も分からなくなる上、立场上勝手に仕返しも儘ならない事実であった。

彼にしてみれば、業腹どころの話ではない。恐らくは、エウリュアレーは全てを分かった上で実行したのだろう。それがまた煮えくり返った腸を更に煮立たせている。

尚之助は此処まで感情を剥き出しにする珍しい権左の姿に、思わず憐憫と同情を向けてしまう。不敬なのは百も承知であったが、向けずにはいられない。

彼がこんな無様を晒している、最たる原因は己の口にした願い。元凶は自分であるのなら憐憫も同情も侮辱でしかないが、相当遊ばれたと見受けられる姿にはどちらも禁じ得ない。

ただ、同時に感謝もしていた。いの一番に出てきた言葉が恨み言である以上、己の願いは確かに叶えられた。もし権左が失敗したのなら

ら、恨み言や怒りを吐き出すよりも先に謝罪を口にしていた。飄々とした態度の裏には常に誠実さが隠されている、そんな男なのだから。

「ああ、痛つてえ。割に合わねえ。もう二度とやらねえぞ！」

「最大級の贅辞ですね。何はともあれ、まずは感謝を」

「帰ったら良い酒があつて綺麗なお姉ちゃんのいる店に連れてけよ！」

金はお前持ちだからな!!」

「酒は兎も角、女性の方はちよつと……その手の遊びは向いておりませんので」

「うるせえ！ なら探せよ！ 何ならオレが探すわ！ いいから、付き合えよ！ 絶対だぞ！ 愚痴しか言わねえからな！ 覚悟しとけ！」

「分かりました。私でよろしければ、存分にお付き合い致しましょう」

尚之助が差し出した手を取りながらも権左の怒りは収まらないのか、立ち上がりつつ早くも愚痴を漏らし始めた。

これは一晩中付き合わされると思いつつも、逃げるつもりは毛頭ない。これが権左なりの鬱憤の晴らし方だと言うのなら、共にするまでの事。

それだけの役割と義理を果たしてくれた。これに報いねば、それこそ今まで自分の築いてきた全てが瓦解すると言つても過言ではない。性格は似ておらず、言動も行動も正反対。

だが、他者に対する義理堅さと誠実さだけは似通っている。平時は勿論の事、任務においても戦闘においても相性は良い。軽口を叩き合いなながらも、背景にあるのは常に相手への信頼という実の兄弟にも似た関係性だ。

「それで、中では……？」

「戦いはどうにかなった。ふぎけた女だが、交渉のテーブルについた以上は口約束でも反故にするほど馬鹿じゃない」

「ならば、後は小太郎様にお任せしても問題ありませんね」

「そこら辺のバランス感覚やら能力は群を抜いてるからな。政府や老害どもをやりこめてきたんだ、心配いらねえよ。これでちったあこの東京キングダムも落ち着きを取り戻すだろうさ」

「ならば矢車殿も切りましたし、戻りますか」

「ああ、最低限の役割は果たした。御館様に報告して今回の一件はこれで仕舞いだ」

結界内の出来事を思い返しているのか、権左は心底不快な表情をしながらも槍を担ぎながら歩き出す。

歩調は早目であったが平時と比べれば遅い方、明らかに怪我を負った尚之助を気にかけている。言葉にしない行動に現れる気遣いが、尚之助は思いの外好きだった。

それ以上の会話はなく、二人は揃って倉庫を後にする。

彼等の目的は達成された。エウリュアレーの討伐ないし威力偵察及び矢車という病巣の摘出。十分すぎる成果だ。

討伐は成せなかったものの、偵察としては十二分。また後の始末は闇の世界のバランスの危うさををよくよく理解している小太郎がいる以上、上手い落としどころを見つける筈だ。

また矢車に関しても同様。間違はなく小太郎がそのまま放置しておく事など有り得ない。五車に存在する監獄へと収監されるだろうが、組織内部の実情は殆ど渡しておらず、当人は自らの身の安全のために探っておくという頭もない。困ることなど何もない。

その筈だ。だが――

(だが、どうにも胸騒ぎが収まらねえ……)

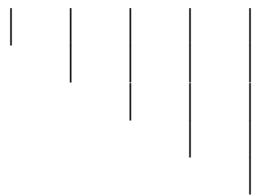
(嫌な予感しか、しませんね……)

――拭い切れぬ不安はなんなのか。

相手が底知れぬ力を有する魔女であったからか、はたまた明確に敵対しているふうま当主の存在故か。

最早この場で出来る事はない。身震いするほどの悪寒を覚えなが

らも、二人にはこの場を去る以外の選択肢が存在していなかった。



「これでようやく、任務完了だな」

「はあ……本当……疲れたわ……」

「何とか、なるものね……」

エウリュアレーとのお茶会を終えると蜃気楼が消えるかのように客間は消え去り、独立遊撃部隊の面々は倉庫の中に立っていた。

結界が解かれた結果なのか、気を失った調査部隊と矢車も残されていた。前者は兎も角として、後者は結界諸共消えて欲しかったが、そうもいかなかったようだ。

そのまま放置しておくわけにもいかず、かと言って疲れ果てた部隊では移動させることも叶わなかったが、小太郎はある手段でこれを解決し、既に新型機を着陸させた藤原 悟の待っていたピックアップポイントへと辿り着いた。

降りた後部扉からキャビン内部へと乗り込んだ凜花と白斎は窶れ果てた表情と言葉で疲労困憊を露わにする。

小太郎は任務開始当初と変わらぬ顔色、さらには持ち前の高い回復力を持ち直していたが、どちらも空元気に近い。前者はまだ任務中故に気を抜いておらず、後者はこれ以上の無様は見せられないという維持だけで外面だけは保っている状態だ。

「おい、出せ」

機体に伝わってきた振動や変化、部隊の気配を察知したらしく、操縦士である悟はキャビンとの通信も行わずに後部扉を閉じて機体を上昇させる。

僅かに胃の浮く感覚を覚えながら、抜群の安定性を誇る機内で小太郎は立ったまま命じる。但し、部隊員へと命じた訳ではない。

命令が出された瞬間に、小太郎の服の下で何かが蠢いた。

もぞりもぞりと奇妙な膨らみは徐々に大きさを増してゆき、やがてシャツの襟元から文字通りの顔を出す。

それは奇妙な生物だった。

目も開いておらず髪の毛も疎らに揃った生まれたばかりの赤子の顔に、芋虫と蛇を掛け合わせたかのような胴体。生理的な愛しさと醜悪さを同時に想起させる悍ましい掛け合わせである。

以前、敵対した魔術師が創造した使い魔の一種なのだが、便利な能力を持っていたが故に生かして持ち帰り、ノイを通じて契約関係と共に主従制約を結んだ。

本来、魔力を持たぬ小太郎には第三者を介した契約はまだしも、主従制約を結ばなければ、そもそも使い魔を維持することもできないが、使い魔の特殊性が例外を生んだ。

この使い魔は何でも食べて魔力へと変換する。

魔術師が自身の少ない魔力を補助しようとしたのか、大魔術でも発動させるための魔力タンクとしようとしたのかは、本人がこの世を去った今では分からない。

ともあれ、食べたものを魔力へと変換できるのならば、契約者本人が魔術師でなくとも維持に心配は要らない。また、その能力を別の方法で利用することが小太郎の本命だった。

「——お、ええ。」

「そんなもの持つてるなら初めから言いなさいよ、全く」

「手の内を明かす利点メリットと欠点デメリットを鑑みて、今回は欠点が勝ると考えただけだよ」

使い魔が嘔吐くと、顎が外れるほど大きく口を開き、中から調査部隊と矢車が現れる。

何でも食べると言っても咀嚼するわけではなく、基本は蛇のような丸呑み。一口で食べられぬと判断した時のみ噛み砕く。

この特性と習性を把握した小太郎は、魔力への変換作業を止めれば、ある種の武器庫や監獄として機能し、また面倒な死体処理も餌として与えてやれると目を付けた。

確認作業を繰り返し、どれだけの大きさの物体を丸呑みにするのかを把握し、魔力への変換作業を止めさせる教育を施して、こうして何処へでも何でも持ち込める便利なポケットへと仕立て上げたのである。

それだけではない。

使い魔は自らの尾を食むとずると身体を飲み込んでいき、やがては胎児のようなサイズにまで縮まった。

それを丸呑みにして胃に収めてしまう。こうして大量の武器や道具を、あらゆるセンサーを掻い潜ってあらゆる場所に持ち込める。

下手な忍法よりも余程便利で有用。こんなものを用意できるだけの人伝と知識があるのなら、確かに忍法なぞ求めない。彼にとって忍法とは便利でこそあるが、何処まで行っても代替の効く類の道具ではないのだ。

きららはまだまだ明かしていないであろう秘密が多くあると感じ取り、不満と呆れを露わにしながらも、開閉式の簡易椅子を下ろす。

その際、肝心な部分以外が隠れていない丸出しの尻肉を見せつけるような無防備な体勢をとったのだが、まるで気付いていない。

成程、これでは彼女が男に対して嫌悪を抱くのも無理はない。本質的に、自身の身体の魅力に全く気付いていないのだ。無防備な姿を晒して男は欲情を刺激し、それを感じ取って更に嫌悪と警戒心を高める結果となる悪循環。

自業自得と言えばそれまでののだが、被害が本人のみならず周囲にも広がっていく辺り、早急に治さねばならない悪癖だ。

(さて、矢車はどうすっかな。どうせ有益な情報なんて何も持ってないだろうし、取り敢えず地下の監獄にぶち込んでもらうとして――)

「いつまでぼーっと突っ立ってるのよ。ほら、座りなさいよ」
「……どうも」

矢車の処遇や先の先の事まで考えていた小太郎であったが、きららが自身の隣の椅子を下ろしたのを見て、好意を素直に受け入れておく。

任務開始前とは180度違う態度に戸惑いはない。男に対する嫌悪さえ取り払ってしまえば、誰にでもこんな態度なのだろう。

肩が触れ合いそうなほどの距離にいるが、居心地悪そうに身動きすらしていない。ただ、頬を染めて落ち着きなく髪を弄っているだけだった。

何かを言いたいのかチラチラと横から飛ばされるきららの視線にも、正面の椅子に陣取ったどうして私の隣に座ってくれないのという悲しげな視線にも、小太郎は無反応。寧ろ、キャビンの空気と二人の変化に気付いた自斎が居心地が悪そうですらあった。

微妙な空気がキャビン内に流れ始め、きららと凜花が同時に何事かを口にしようとした瞬間、キャビンの通信画面が繋がった。

『任務御苦労さん。五車まで快適な空の旅を――どうして矢車さんが居るわけ?』

「オレにもわかんねえ」

『つーか、隊長である若が一番怪我してる臭いんだけど、どうして??』

「うぐっ……」

『どうしてなの??』

「わ、私の口からはちよっと……」

画面に映ったのは悟だった。

キャビンの様子を確認しようとしたのだろうが、数々の想定外を見て目を丸くする。

それもそうだ。任務は無事達成されたのだが、どういう訳か今回の任務に関係のない筈の矢車を捕らえ、隊長である筈の小太郎が最も重傷。独立遊撃部隊でなくとも訳の分からない事態である。

率直な疑問をぶつけてくるも小太郎の目は死んでおり、続いて見た凜花ときらは目を逸らして押し黙り、最後に自斎を見たが引き攣った表情で押し黙るのみ。

様々な推測が彼の頭を駆け巡ったが、結論は一つ。どうせ、いつもみたいに若がババ引いたんだろう、という至極真つ当で同時に余りにも無残なものだった。

『……若さあ、この機体のペットネームって、何だったっけ?』

「ああ? 何だよ、突然。確か、開発段階じゃ影狼だか蜃気楼だかつて偉く格好つけた名前だったが……」

『これデリヘル号に改名しようぜ』

「お前なに言ってるの?」

『^{デリバリーヘル}地獄へお届け”号。略してデリヘル号だよ』

「お前ふざけんよ???」

『いやだってこれ、デリヘル号にし、デルヘル号に……デリヘル号にしたら、デリヘル号にしようぜ! デリヘル号にしようぜ! デリヘル号にしようぜ! かなりデリヘル号だよコレ!』

「うるせええええええええええええええええ!!」

こうしてエウリユアレーを中心とした一連の事件は幕を閉じる。

なお悟命名のデリヘル号であるが、独立遊撃部隊の活躍と毎度毎度大怪我をして帰ってくる小太郎の嘲笑と全く同じくペースで広がっていくのだが、今は全く関係のない話である。

若様と愉快的仲間達

苦勞しないよう努力する。だからこうして苦勞を燃料にする！

「ほら、自齋。甘いミルクティ。勉強がんばろ」

「……ありがとう、ゆきかぜ」

エウリユアレーの東京キングダム襲来騒動からおよそ二週間。

獅子神 自齋の人生は一変していた。

自らを顧みて本当の願いを見出した彼女は孤独に耽るばかりの人生を恥じ、任務後すぐアサギに独立遊撃部隊への配属を願い出た。

人生をやり直すには神遁の術を使い熟す事が必須条件。他力本願は百も承知であったが、未知の部分が多い神遁の術を解明するには、忍法や異能、魔術に対する造詣の深い小太郎を頼る事が最短距離になると判断した。

結果、アサギはこれを快諾し、総隊長権限を以て独立遊撃部隊の一員とした。

但し、いくつかの条件を出した。これまでのように自ら人を遠ざけるような真似をやめる事、任務において単独行動は止むを得ない場合以外は取らない事——そして、普通の女の子として生活する事。

絶大な力故に生きる道が一つしか与えられない苦しみは、周囲の期待と決定によって望まぬ椅子に座り続けるアサギが誰よりも深く理解している。

言わば、最強の対魔忍の感傷によるところが大きい。これで自齋が救われるとは限らない。寧ろ、余計な苦しみを背負わせる結果に終わる可能性もあった。

だが、自齋はこれを受け入れた。誰を傷つけたとしても、地面に頭を擦りつけて決して許されぬ罪を謝り続ける羽目になったとしても、

二度と孤独は選ばない。それが彼女の選んだ人生だった。

無論、アサギも自斎を必要以上に苦しめたいわけではない。

万が一、自斎に憑りついた神が暴走した際、被害を最小限に抑えられる人材と普通の女の子としての生活とはとんと無縁だった彼女の世話係としてゆきかぜを付けた。

性格が対照的な二人の相性は悪いようにも思えたが、ぐいぐいと引っ張って話しかけてくれるゆきかぜは、それほど口数の多くない自斎にしてみれば会話の主導権を渡す代わりに話題を提供してくれるありがたい。

そんな訳で、二人の仲は極めて良好。自斎にとっては初めての、ゆきかぜにとっては同い年では仲の良い友達となっていた。小太郎ハーレム王国推進委員会会長の腹黒い思惑が見え隠れしているような気がするが、気にしてはいけない。

「困ったわ。全っ然、分からない……!」

「そりゃ、仕方ないでしょ。今まで学校通ってなかったんだもん。勉強って、一人だけじゃどうやったって限界があるしねえ」

ただ順風満帆になってきた自斎の前に、大きな壁が立ちはだかつていた。最終学歴中学中退同然というとても大きく大きな壁だ。

彼女の忍法に制御が効かなくなり始めたのは中学も半ば頃。両親が匙を投げたのもその辺りだ。以降、学校には通わず、独学で学び続けた。

どうせ対魔忍以外になる道なんてないんだし、と義務教育の範囲を学び終えて以降、勉強など碌にしていけない。とてもではないが普通高校レベルの授業にはついていけないのである!

古文現文は基本を押さえたいれば何とかなる。英語も義務教育のレベルがあれば何とかついていける。地理日本史世界史公民も単純な記憶力の勝負になるのでギリ何とかいける。だが数学は意味の分からない呪文と化しているし、物理化学は苦手なので悲惨なものだ。

というわけで、学年でも成績トップタイの学校の勉強だけは出来る

ゆきかぜちゃんが見るに見かねて勉強会を開いてくれたのであった。五車学園の広い食堂の一角を陣取り、思い思いの教科書を開いて勉強中。

なお参加者は、数学の教科書を前にして涙目になりながら食堂のおばちゃん特性勉強のお供濃くて甘くいミルクティーを啜る自斎と呆れ顔でコーラをストローでちゅーちゅー吸っているゆきかぜだけではない。

「ふふ、仲良き事は美しき哉。向上心も見上げたものだ。これまで勉強を碌にしてこなかったから教えて欲しいなど、早々言えるものではないぞ」

「なあ、凜子。対魔忍をやっていく上で数学なんて必要ないんじゃない……」

「ねえ、凜子ちゃん。対魔忍をやっていく上で歴史なんて必要ないんじゃない……」

「……はあ、お前達と来たら。少しは獅子神を見習ったらどうだ。後輩の質問に一つも答えられないでは先達として恥ずかしいぞ」

「うぐぐう……!」

ゆきかぜと自斎の対面には、二年組の凜子、紅、きららの三人が座っていた。

凜子は自斎の前向きになった態度に心から喜んで微笑みを浮かべている。

逸刀流の元締めである秋山家の嫡子として元々自斎とは面識があった。ある日を境に道場に顔を出さなくなつて、事の顛末を聞いて胸を痛めていたのだが、事態が良い方向に転がって安堵していた。

しかし、その表情もすぐに雲散霧消して情けなさど呆れの色で満たされる。

自斎の先輩である紅ときららが、苦手科目を前にして机に突っ伏しながら情けなさ過ぎる言葉を紡いでいるのだから彼女の気持ちも分からなくはない。

この三人はゆきかぜからの要請で連れてこられた。

自斎ばかりが教えられては引け目を感じかねない。あくまでも個人のためのレッスンはなく、全員のための勉強会だとアピールするためだ。そういった気遣いを忘れる少女ではなく、忘れるようでは世話役に選ばれまい。

実際、役に立っているのは凜子だけだ。当人もゆきかぜと同じく学校の勉強だけは出来る優等生。更には本人の知らぬ内に設立された凜子様ファンクラブに所属する後輩からは、少しでもお近づきになりたい一心で、授業に関する質問に応じているので手慣れた様子だった。

反面、紅ときらは足を引っ張り通し。二人の成績は中の中という可もなく不可もなく。苦手科目と得意科目がハッキリしているものの、人に教えるのはとことん苦手。それどころか、苦手科目が足を引っ張りすぎて赤点の危機すらある。人にものを教えている余裕すらない在り様だった。

それでも自斎に呆れもなければ苛立ちもない。

非情な現実を前にして他者への気遣いが出来ないのは事実であるが、同じ部隊の仲間と共に過ごすなど初めての経験。喜びと感動の方が遙かに強い。

鬼崎 きららも自斎と時を同じくして独立遊撃部隊の一員となっていた。当人曰く――

『折角知り合った後輩の自斎ちゃんとか、友達凜子ちゃんがあんな危険な任務を任される部隊にいるなんて放っておけない！』

このことだったが、実態は全く違う。こんな科白は体の良い建前である。

実際、アサギに語ったのは、部隊長である小太郎の下で父親から受け継いだ忍法の使い道を学びたいという旨が殆ど。

更なる本心を言ってしまうと、自分の男に対する意識を変えた小太郎の役に立ちたいというもの。気になる相手に嫌われたままでは何

とも切ないという乙女心の発露であった。

極めて分かりやすいきららにアサギはもう心の底からにつきりだった。

それもその筈、彼女にしてみれば正に計画通りっ！ という流れなのだ。

きららの男嫌いは度を越していた。それこそ一人の大人として若者の将来に不安を覚えるばかりでなく、対魔忍の頂点として頭の痛い問題だったのだ。

何せ、同年代は勿論の事、最前線で戦う現役対魔忍と比較しても群を抜いた実力者だ。放っておけば増長して更に男と連携を取れなくなり、やがてはかつての自分のように罠に嵌められて敵の手に堕ちる。

只でさえ組織の何処も彼処も火の車だと言うのに、戦闘面だけでも有能な若手が敵側に寝返るなど涙を流すを通り越してチベスナ顔で虚無る他ない。

其処に降って湧いたようなエウリユアレー襲来事変と調査部隊の行方不明。

彼女一人では伝説の魔女を打ち倒すのも追い返すのも、ましてや調査部隊を救出する事すら不可能だろう。

正に好機であった。この任務に際してきららの意識や価値観を根こそぎ破壊できてしまう男を宛がえば、目に見えている未来を変えられる。そこで白羽の矢が立てられたのが小太郎である。なお、彼への負担は一切考慮していない。

如何せん、アサギは身内に対して極端に甘く、同時に甘える性質だ。姉妹のさくら、長い付き合いになる九郎や紫にも、無茶な任務を振ったり、自身に出来ない事を素直に頼んだりと枚挙暇がない。

男女の仲にある相手であるのなら、それはもう仕事でもプライベートでもメチャクチャに甘えるだろう。どれほどの負担があらうとも、小太郎ならやってくれるわ、という信頼で全てを片付けていた。

画して、全ては思惑通り。この一件において勝ったのは小太郎でも二車家でもエウリユアレーでもなく、実質アサギの一人勝ち。流石は

最強の対魔忍、戦わずして勝つとか兵法極め過ぎであった。

こうしてきさらもまた独立遊撃部隊に編入された。

余りのスピード採決に不審に思ったものの、アサギの思惑など知る由もない彼女は今度こそ力になってみせると張り切っていた。

「で、此処が食堂。基本食券先払い。おっさんおばちゃん連中に気に入られたり、憐れまれたら特性メニュー作って貰える」

「気に入られるは分かるが、憐れまれるだど？　なんだそれは？」

「気の毒に思つて優しくしてくれるんだよ。オレ、吸収効率の良いおじやのメニュー作って貰っちゃった、ふふ」

「……………」

「あつ！　小太兄だ！　こつちこつちい〜！」

「……………」

食堂の入り口に現れた小太郎ともう一人の姿を逸早く見つけたゆきかぜは、片手を振りながら声を掛けた。

自斎ときららに俄かに緊張が奔る。任務以来、一度も顔を合わせていなかった。補肉剤を使った影響で今日まで面会謝絶、絶対安静で治療に専念しなければならなかったからだ。

部隊への配属を聞いているだろうが、小太郎の性格を考えれば嫌味の一つも言ってくるのは間違いない。その上、あの容赦のない言動だ。覚悟してしまえば泣いてしまいかねない。

そして、二人は全く別の驚きを抱く。

ゆきかぜ達と共にいる自斎ときららを見た小太郎は死ぬほど嫌そうな顔——をすることなく、片眉を俄かに上げるだけであった。

珍しい集まりだな、程度の感情しか覚えていない様子で、五人の座るテーブルへと向かっていく。

「元気なようで何よりだ」

「心配したんだぞ……」

「そいつはどうも。お陰様で全快だ。だから問題ない」

散々迷惑をかけられた二人を目にしても、特に嫌悪や怒りを見せる事もなく、また隠してもいないように見えた。

それがまた自身に対する興味関心の無さを物語っているようで自齋ときららを落ち込ませるのだが、今はそれどころではなかった。

小太郎の後ろについてくる一人の少女に対する驚きの余り、自分自身の事柄に思いを馳せる余裕すらないのだ。

「……えっ？ え？ 紫先生？」

「何故学生服を、というか随分お若いような……」

「ああ、そっちは見るの初めてか。此方、紫先生の遠い親戚で、最近同じ忍法を発動させて今日から五車学園に通う事になったんだとさ」

「八津 紫璃ゆかりだ。よろしく頼む」

そう、其処に立っていたのは八津紫と瓜二つの少女。

他人の空似などでは到底済ませられないレベルの相似を前にしては、事情を何も知らない二人の驚きも当然だった。

無論、八津 紫璃などという少女は元より存在しない。ヨミハラで助けざるを得ず、已む無く護衛として雇った別次元の八津紫その人である。

今の今まで一部にのみ明かした秘密を、偽の身分の名前を与えたとは言え、人目に晒すなど、彼を知る人物ならば、彼にしては聊か軽率な行いと映るだろう。

だが、小太郎としては元よりそのつもりだった。紫は隠密行動に長けた人物ではなく、分かり易い戦闘要員。自身の下でギブアンドテイクの関係であれば、嫌でもいずれかにバレてしまう。

ならば、先に自ら明かしてしまえばいいと割り切った。

真実になど次元侵略者という前提がなければ絶対に辿り着けない。そもそも次元侵略者は認知度が極端に低い。

次元間を容易に移動する上に、別次元の生き物を洗脳する事に長けた種族。政府にせよ、闇の組織にせよ、その存在は軽々には明かせな

い。明かした果てに待っているのは對抗する術のない相手に対する疑心暗鬼と不安に秩序の崩壊でしかないからだ。

その上、何とも出来過ぎた偽りの身分を用意してやれば、人はまずそこから手を付ける。延々と存在しない筈の誰かを気が済むまで追いつけ、次元侵略者になど辿り着ける訳もない。

精々思いつくのは違法な魔界技術によって生み出されたクローンか、志賀あさつきのような存在か。

各組織としても無理に捕らえる必要はなく、対魔忍内部はアサギの傘下であり、次期隊長候補の紫の親戚ともなれば軽々に手は出せない。

唯一頭が痛いのは紫関連で確実に頭がパーになる桐生の存在であるが、放置安定、鬱陶しくなったら殺そうと扱いても命も気も軽いものである。

ある程度、不測の事態は想定されうるが、それよりも紫との信頼関係を優先した。

元々インドア派でもなければ、怠惰や堕落を嫌う生真面目さには、人の家で誰の目にも晒されずに生活を行うなど苦痛でしかない。

与えた金でトレーニング用品を通販で買い漁り、ひたすら筋トレと家事を繰り返してストレスを発散する姿に予定を繰り上げた。

何時もは不機嫌そうに眉を寄せている紫も、今回ばかりは檻から解放されて晴れ晴れとした表情だった。

「まあ、獅子神も鬼崎パイセンも仲良くしてやってくださいよ」

「え、ええ。困ったことがあったら言ってね、紫璃ちゃん」

「よ、よろしく」

「ああ、恥ずかしながら頼りにさせて貰おう。勿論、恩を仇で返すつもりもないぞ」

事情を知っている者は素知らぬ顔で。

残る二人は困惑しながらも、偽りの身分をすんなりと受け入れる。と言うよりも、事実を知る術がない故に疑わしくとも受け入れざるを

得ない。

元より他者を疑う行為自体が頭から抜け落ちている上に、説明したのが隊長の小太郎ということも相俟って効果は絶大だった。

二人以外であったとしても、似たような反応しかできない。

仮に小太郎の説明に納得しなかったとしても、事情と顛末、事の納め方を既に知っているアサギから説明されれば偽りの事実であつても信じざるを得ないだろう。

「そ、それからふうま……いえ、隊長。これからも、頼りにさせて貰うから……よろしくお願いします」

「は？ 嫌ですけど？」

「——えっ」

「ちよ、ちよつとアンタ、いくら何でもそれは酷いでしょ」

「何スか、鬼崎。パイセン。勘弁してくださいよ」

自斎なりに引け目と負い目を感じながらも、精一杯の誠意と頭を下げるのだが、小太郎は死ぬほど嫌だと露骨に伝わる顔で拒絶する。

これにはどんな罵倒にも耐える覚悟だった自斎も固まった。熱と共に罵倒されるならば、自らも生まれ変わろうとする熱意で応じる事も出来たが、素っ気無さと興味の無さが極まった態度では肩透かしを喰らおうというもの。

これには同じく引け目も負い目もあるきららも、流石に噛みついてくる。

態度の理由は分かっている。全ては身から出た錆の自業自得。それでも、既に自斎の境遇を知っている身としては勿論のこと、先輩として看過できない。

俄かに怒りを帯び始めるきららに対して、小太郎は露骨に尊敬など欠片も覚えていない形だけの敬語で返してしまい、事態は悪い方向へと転がるばかりだ。

「お前の事情とオレは根本的に関係ない。知ったことかよ。オレはオ

レで忙しいんだ。今まで通り一人で頑張ってくれ。学校に顔出せる時点で成長してんじゃないか。頼るならオレ以外にしろ、心の底からお願ひ申し上げる」

「……………でも」

「な、なに言ってるのよ！ 関係ならあるでしょうが！」

「いや、ないも同然じゃないツスカ。一度同じ任務に出向いただけの仲で、そんな仲間面されても困るんですけど。碌に会話もしたことないんだし。これからもそういう関係でいよう！ なっ！」

「えっ？ とお——」

「そんな関係で居られるわけないでしょ！ これからはアンタが面倒見る事に——」

「いや、言ってる意味分かんないんで——」

「「————」」
「「????」」

あくまでもオレは関係ないと一切踏み込んでいく気のない小太郎と隊長として隊長に助けを求める自斎、更に仲間をフォロウするばかりでなく、こんな態度では彼の評判が悪くなると必死なきらら。

やがて絶妙に噛み合わない会話に、三人が三人とも目を丸くして互いの顔を見合わせる始末。一体、何が起こっていると言うのか。

そんな中、凜子と紅は気の毒そうな顔を小太郎に向け、紫は状況を全く理解していないハテナ顔。

ただ、ゆきかぜがニッコニコの笑顔で、小太郎を見ていた。

「小太兄い？」

「ちよ、つとお……………待って下さいよゆきかぜさん。オレ、猛烈に嫌な予感がしてきたなあ~~~~。心の準備をする時間を——」

「自斎ときらら先輩、もうとつくの昔に独立遊撃部隊に配属されてるから」

「は?」

「もう小太兄の部下の二人です」

「————は?」

顎の下で両手を組んだゆきかぜに告げられた事実には、小太郎の表情はすんと消えた。

黒い左目は更に黒く染まって暗黒と化し、虚無った拳句に究極のチベスナ顔を見せる。どうやら混乱の只中に放り込まれているらしい。

「えっ？　えっ？　えつとお……もしかしてアンタ、何も知らないの？」
「知らないんですけど？　っーか、何を知ってなきやおかしいのオレは？」

「だって……アサギ校長が……」

「病室にお見舞いに来たけど、無事で良かったとかの労いとオレからの報告ばっかで重要な事なにも言ってなかったんですけど？　え？

君ら独立遊撃部隊所属なの？　（手のかかる）仲間が増えるの？」

「やったね小太兄！　さっすが最強の対魔忍！　やることも最強の力押しだあ！」

新たなハーレム要員候補が見つかり、小太郎の周囲を女で固めて逃げるに逃げられない状況を作ろうと必死なゆきかぜはもうウツキウキの笑顔である。

反して、小太郎の表情は更なる下降を見せる。最早、輪郭すら曖昧な線と化しており、見開かれた左目は眼窩から零れ落ちてしまいそうであった。

「はっ！」

「い、いや、お前を頼ってきたのだから、助けてやるのが漢気と言うか、だな……」

そんな表情を向けられて凜子は、彼にかかるとであろう苦労を思つて、意図せず俯いてしまう。

口から出た言葉はアサギの肩を持ち、自斎を助けるようなものであったが、小太郎を考慮してか余りにも苦し気な音色を秘めていた。

彼女自身もあんまりにもあんまりだと思っているに違いない。

「——は？」

「……………わ、私じゃどうにもできなかつたから」

そんな表情を向けられた紅は、唇を噛み締めながら視線を逸らす。余りにも無力な自分への不甲斐なさど小太郎と会えなかつた故に先んじて告げてやる事も出来なかつた負い目で満たされているらしい。

「——は？」

「……………」

そんな表情を向けられて、啞然としたまま押し黙る自斎ときらら。二人にしてみれば、何が何やら。アサギから部隊所属を快諾された以上、当の昔に小太郎を説得したのか、或いは納得していたものと思ひ込んでいた。

だのに、この様である。

バレなきや何をやってもいい、使える手段を感情論で廃するのは馬鹿のすること、と公言して憚らない小太郎であるが、何のかんので組織人としての自覚はある。引くべき所、押すべき所の見極めはきちんとい、守らねばならないルールは守る。

そんな彼の気質を理解した上で、強権発動を押し通すアサギは間違ひなく最強の対魔忍である。余りにも無体な、そして強引過ぎる力業に言葉もなくなるに決まっている。

「——は？」

「アサギ様の決定だ。黙って従え」

そんな表情を向けられても、紫は当然と言わんばかりの表情で小太郎の嘆きなど意に介さない。

先の任務で彼がどんな目にあつたかなど聞いていないが、聞いていたところで同じ言葉を口にしただろう。彼女にとつて、アサギの言葉は全てに優先する。例え、自らの次元のアサギでなかったとしても同じ事。

全ての逃げ場を塞がれ、助けの手も拒まれて、小太郎はただただ立ち尽くすばかり。

頭の中はアサギに言いたいことがあり過ぎてぐちゃぐちゃになっていた、取り敢えずやるべきこととしてポケットから普段使いのスマホを取り出した。

「ふうーふうーふうーつ………ちよつと待て。校長に電話するから」

呼吸と共にあらゆる感情を吐き出し、慣れた手つきで慣れた連絡先へと発信する。

まだだ、まだ慌てるような時間じゃない。これからきちんと抗議して、自身の手腕では二人を扱うなど不可能であり、己が如何に限界が近いかを懇切丁寧かつ論理的に説明しよう。

そんな事を考えながら、冷静さと余裕の表情を保ってスマホを耳元に持ってきた。

五分後――

「ふつぎけんなああああ!! 電話も出やしねえじゃねえかあんのクソババアアアアアアアアアアアツツツ!!!」

上辺だけの冷静さと余裕を、スマホと共に窓へとぶん投げていた。よく持った方だ。

何せ、一切余裕のない精神状態でコール音を五分も延々と聞き続けたのだ。どんな人間でもパニック状態でそれだけの時間を待つてなどいられない。

アサギも酷いものだ。

着信を拒否するでもなく、また留守電設定にもしていない。

長い付き合いになる小太郎が何をするのか予測はついていたに違いない。

今現在は政府のお偉方との会合に出向いている辺り、対魔忍の力を削ぐようと必死な政治家達から受ける謂れのない疑いや無駄な議論を早々に切り上げるため、小太郎の着信を急な任務と偽るために利用したのだろう。

闇の住人に対しては「最強」の称号と力量を背景としたゴリゴリの力押りのメスゴリラにも拘らず、対小太郎にはこうも知恵が回るのは何故なのか。

「ふうま！ クソババアとは何だ！ アサギ様はお年を召しても御美しいぞ！」

「今そういうこと言ってんじゃねえーんだよお！ このアサギ馬鹿！」

「何だそれは！ それではアサギ様が馬鹿のようだろうか！」

「お前しか罵ってねえんだよおっ！」

「ならば構わん。全く紛らわしい言い方をしておって」

「どーいう思考回路してんですかねえ、この女は!!」

全く理解できない方向に怒りを露わにし、自分が罵られた事にすら気が付いていない紫に、小太郎は悲鳴を上げる。

アサギこそが第一であり、いつかはアサギの一番になりたいと夢見る乙女である紫にとって、アサギ馬鹿などという罵声は誉め言葉にしかならないのである。

「そ、そんなに嫌なの、ね……」

「当たり前だろうか！」

「あ、アンタの頭脳と私達の力があれば敵なんていないじゃないのよお……？」

「自分がやったこと思い返して、もう一度オレに同じ事言ってみろ」

「うっ……」

「おい。なあおい。どうした？ 言えよ、おい。簡単だぞ？ 全く同じ事を同じに言えばいいんだからよ？ 思っただけでもいいから言ってみ？ なあ、おい。目え見ろや！ おい！ おい!!」

矢鱈と血走った目を向けられた拳句、間近に詰め寄せられた上で詰問され、自斎ときらは思わず目を逸らす。

己のやった事など己が一番良く分かっているつもりだった——
——が、つもりでしかなかったようだ。

小太郎の拒絶など想定はしていた。していたのだが、口にした願いである独立遊撃部隊への配属をアサギが認めたことで、隊長である彼が認めたものだど勘違いしてしまった。

自らの瑕疵など思い当たる節があり過ぎる。と言うよりも、節しかないと言っても過言ではない。

だが、人は自らの汚点や欠点と向き合うのが殊更苦手。墮落を正当化できるのなら安易な嘘にも飛び付くように、自分にとって都合の良い方向にばかり考えてしまった。

これだけ怒鳴り散らされれば、きららなど自身の瑕疵など関係なく反発しそうなものだが、今回ばかりはその限りではない。寧ろ、自らへの恥で酷く凹んでいる。自斎など泣き出してしまいそうである。

「う、嘘だ。これは、これは夢なんだ。目が覚めれば、家の暖かいベッドで寝てて、災禍が起こしに来て、天音がおいしいごはんを作ってくれている筈……!」

「ところがどっこい……夢じゃありません……! 現実です……! 現実です……!」

「ゆきかぜ、これ以上小太郎を追い詰めるな……!」
「流石に可哀想だ……!」

「いやあああああああああああああああああああああああああああ
ああつつつ!!」

「高周波……!」

「うわっ! 電灯が! 窓ガラスもか?!」

人間の声帯と可聴域の限界を超えた、愛と怒りと悲しみの悲鳴の前に、食堂の電灯と窓ガラスが次々と割れていく。

すわ忍法の暴走か、魔族の襲撃か、米連の新兵器か、と食堂に居た教師も学生も慌てふためく始末。誰も苦労の余りに高周波を発する妖怪に変化した小太郎の仕業などと誰も思わない。

高周波を発し続ける小太郎であったが、やがて喉も涸れ果てるとその場に仰向けになって地面に突っ伏すと、声もなく泣き始める。

まさに滂沱の涙。比喻でなく彼の周囲は涙の海が出来ている。また一つ彼は人間の限界を超えた。どうしてこんなことで限界を超えてしまうのか。母の教育の賜物か、はたまた苦労の果てに新人類となったのか。いずれにせよ、真相は藪の中である。

苦勞人曰く『学校の勉強？ 応用のさせ方なんて腐るほどあるわ』とのこと。なお、本人の方向性は決まっている模様

「あー、よく取り乱した」

「切り替えが早いぞ。早過ぎるだろう……」

「いやー、それが小太郎の良い所だからね」

食堂で超高周波を発生させてから五分後。

勉強会も中断して、何も知らぬ振りで割れた電灯や窓ガラス他の者に任せ、大慌てで食堂を後にした。

移動先は五車の地下にある訓練施設。二車の反乱時、紅と小太郎が使用していた場所だ。

但し、居るのはホログラムや可変式の床であらゆる状況を訓練可能な訓練室ではなく、次の使用者が待ったためのラウンジであった。

訓練室の使用許可と予約する受付。

壁際に並んだテーブルとチェア、中央には四人掛けのソファが向かい合って何列にも渡って置かれており、高級ホテルを連想させる。

そんな中で、小太郎とゆきかぜを除いた全員が疲れ果てた表情でソファにぐったりと腰を下ろしていた。

「そう、よね……嫌、よね……」

「嫌に決まってるんだろ」

「な、何よお。分身とは言え、エウリユアレーを倒したじゃないのよお……」

「その前に何してくれましたっけ??？」

「ぐぬぬ」

小太郎の隣にはいち早く自身の場所を確保したゆきかぜが、逆の位置には学園を案内されていた紫が位置取っていた。

向かいには忌憚らない上に当然の意見を聞かされた自斎ときららがどんよりとした表情で、凜子と紅は悔し気な表情で二人を挟むように座っている。

小太郎の目尻と口角の垂れ下がった顔は、嫌気で満ち満ちている。明確であからさまな嫌気を見せられれば自斎でなくとも落ち込みもしよう。何とかきららだけは件の事変で得られた唯一の成果を精一杯の思いで絞り出したが、即座に潰されてしまう。

小太郎の払った代償と労力と得られた成果の釣り合いが取れていないことなど誰よりも彼女達が分かっている。だからこそ、どんな思いを抱こうとも黙らざるを得ず、全ての決定権を小太郎に委ねる他ない。

「まあいいよ。やるよ、やればいいんだろ。もう決定してるなら覆りようがないだろうし」

「えっ？ い、いいのお?! な、何よお、もう。あくあ、しおらしくし損しちゃった♪」

表情こそ浮かないものだったが、小太郎は存外すんなりとアサギの決定を受け入れていた。

さしものきららも驚きを隠せていなかったが、受け入れるのは早かった。こうした切り替えの早さ——というよりも単純さは彼女の良い所でもあるだろう。

本人は喜びを隠してツンケンしているつもりなのだろうが、表情も感情も駄々洩れである。これにはゆきかぜはニツコリ、きららの変わりように驚きと納得半々だった凜子と紅はがつくり、小太郎はどんよりである。

彼はあくまでもアサギの決定を受け入れただけであって、きららと自斎を受け入れたわけではない。

ただ、知っていた。此処で正当な権利を主張しようが、真つ当な理

論武装で身を固めようが、どう駄々をこねようが、アサギには届かない。そもそも帰ってこない。

アサギは面と向かってマウントを取り合う口プロレスが始まってしまえば敗北は必至と理解している。故に、小太郎が諦めるまで事務仕事を放り出して、前線任務に従事する腹積もり。

そうなれば対魔忍は組織として崩壊待たなしなのだが、彼女には関係がない。小太郎が任されたと言ってくれなければどの道崩壊待たなしだからである。

その後、積みあがった書類の山を前にして絶望を噛み締めようとも関係がない。若手の育成は絶対に小太郎にやらせるという強い意志しか感じない。

君子危うきに近寄らず。悪しき因習に引つ張られ、真つ当な教育も教養も身に付けられなかったというのにこの判断力。今日も今日とて、对小太郎の知略は牙え渡るアサギさんなのであった。

小太郎としては嫌々だ。心底、嫌々だが何とか受け入れている。どう足掻いたところで過程に絶望しか待っていないのなら、せめて結果だけは良くするために努力を惜しむつもりは毛頭ない。

なお、本人も自身の疲労と苦勞は度外視。そうでもなければやっていられないからだ。

彼に戦力を無駄に浪費するつもりは毛頭ないが、可能であれば自分の意志で離れていってもらいたいところ。

というわけで、自齋ときららの地獄行きは決定した。出来なければ良くて死、或いは出来るようになるまで死んだとしても許しを与えられずに延々と終わらない訓練が続くか。

最終的に彼女達へと与えられる選択肢は三つ。訓練で死ぬか、小太郎の望む人材になるか、小太郎から離れる、だ。どうしたところで小太郎には得しかない。他人に足を掴まれて転んでも、ただでは起きぬ男らしい判断だった。

「でも、意外ね。凜花先輩も来ると思ったのだけど……」

「父親—— 甚内の当主判断で謹慎してるんだらうよ。お前等は個

人として強いんだろうが、アイツは家柄も良い。その上、紫藤家は微妙な立場だ。例え、総隊長権限での任務だとしても、かつてやらかした主家と一緒にいるなんて、周りがどう思うか分かるだろう？」

「それはまあ、何となくは……」

紫藤家は弾正の反乱時、逸早く寝返った事で対魔忍内部である程度の地位を築いた。

だが、その基盤は大きい家に比べてまだまだ確たるものには程遠い。現状、他家が圧力を掛けてくれば苦しい立場に逆戻り。

アサギ閥に属しているのだが、常に中立の立場を保ち続けているのもそのため。甚内の絶妙な政治感覚のバランスによって強力な味方を作れない代わりに、厄介な敵も作らずに立ち回っている。

其処に、今回の一件。

甚内も勝手をやられて、さぞや頭を抱えたことだろう———と思いきや、そんなはずもない。

閥が同じである以上、アサギから間違いなく先んじて声を掛けられている。全てを承知した上で凜花に謹慎を言い渡したのは、あくまでもポーズ。

アサギと娘が勝手にやったこと、当家は何の関係もなく此方も困っている、という態度を他家に対して取っておきたいのだ。そうすることで、余所からの疑いややっかみを誰も逆らえないアサギに集約し、紫藤家に利益も不利益も生じない。

実際は、両者にとって利益の方が大きい。

アサギ側は、凜花という期待値の高い若手を成長させられる。不満や批判は集まるが、対魔忍の未来を考えれば安いもの。その末に味方に裏切られたとしても、構いはしない。何せ、彼女には小太郎という最悪の切り札もあれば、無辜の民の生活と安全に身を捧げる覚悟など当に出来ているのだ。

甚内側は表向きにはどうであれ、アサギと小太郎の双方により強い繋がりやデメリットなく確保できる。

ならば、予測している筈だ。現在、謹慎している凜花がどのような

行動を取るのか。そして、それこそが二人の狙いそのものでもある。

「何よそれ、バツカみたい」

「そうツスね。それに比べて鬼崎パイセンは賢いツスよ」

「そ、そんな変な敬語、使わなくていいわよ。ほら、もう隊長なんだし？」

「え〜〜〜、でもお、変な所でも先輩後輩の関係を引つ張り出されても面倒だし〜〜〜?」

「わ、私がいいって言ってるの！ それに凜子ちゃんや紅ちゃんにはタメ口でしよう?!」

家のしがらみとは関係ない所に立ち、本人もほとんど興味のない権力の奪い合いをきららは一笑に付す。

呆れ返るほどの短絡さではあるものの、権力に縛られない様は健全な精神を宿している証左でもある。同時に、権力の恐ろしさや必要性を理解していない危うさもある。

否が応にもふうまの当主として権力争いの巻き添いが確定している小太郎は彼女を羨んでいるのか、相変わらず敬いは一切存在しない敬語を続けていた。

だが、彼女にあつたのは怒りよりも寂しさの方が強い。

敬語とは、尊敬を抱いているかは別として、目上の人間や親しくない間柄の相手に使うのが礼儀であり、通例。つまり、ある種の壁とも言える。

権力という柵に晒されず、社会経験も薄いきららにはその観念がひとときわ強く、歳も近いというのに距離を置かれているように感じてしまう。

その上、凜子や紅には敬語など用いずにいるではないか。気になっている相手との気安い親し気な関係性は、きららは決して認めないだろうが、羨ましくて仕方がなかった。

「まあ其処まで言うなら甘えさせて貰いましょうか」

「そうしなさい！ 私の——わ、私達の隊長なんだからね！」
（ああ、小太兄つたらもうきさら先輩の扱い方を覚えてるんじゃない、
〜）

小太郎は意外なほど素直にきららの提案を飲んだ。

元よりその予定だった。敬意を覚えていない相手への敬語など、彼にしてみれば面倒この上ない。

自身を陥れようとする老害や他家の当主に対してすら、立場だけは対等で同列だから、と最低限の礼節は払うものの、発言の多くは普段通りの口調で歯に布着せぬものばかり。

実際、家の大きさや握る権力によって序列は決まるが、建前上はアサギの下に当主の立場は同列。言わば、会社における各部署と同じ。一つの部署がどれだけ業績を伸ばして発言権を得ようが、組織内の集団である以上、トップも該当部署も周囲も表面上は同列に扱わねば立ち行かなくなるものだ。

その辺りをよくよく分かっているので、敢えて小憎らしい態度を見せて自身にヘイトを集めさせ、感情に流される者、目先の事ばかりに囚われて現状の見えていない者を炙り出しているのである。

もし万が一、謀略や力に訴えようとするのなら儲けもの。期せずして内部不安を取り除いた上で、己を律して現実を直視する優秀な当主のみを残す事が出来る。

そんな人を操る事に長けた彼が、きららの扱い方が分からないわけもない。

彼女は無理に押ししたり抑えつけようとするれば、必要以上の反発を招くタイプ。其処には道理はなく、単に意地と感情だけが存在している。

ならば、相手から此方の望む言葉を吐くように誘導してやればいい。味噌は敢えて一度引くこと。他の者ならばこうも簡単には行かないが、意地つ張りなだけで根が単純で純粹で優しい彼女ならば、それだけで周囲や他者の利になる言葉を引き出せる。後は理詰めと正論で押せば決まり。簡単なものだ。

きららにしても操られてはいるのだが、決して悪い結果を生む訳ではない。

寧ろ、意地ばかりを優先してしまう自身の悪癖は自覚している節がある以上、気持ち良く自身を操縦しつつも、自身の望む方向へと舵を切ってくれるのならば不満はあれども拒絶はしまい。

但し、気付かぬ内に感情は駄々洩れだ。

小太郎との一對多という歪な男女関係にあるゆきかぜ、凜子、紅ばかりでなく、新参に過ぎない自齋ですらきららの好意は気付いている。

余りの分かりやすいチョロインぶりにゆきかぜは心をぴよんぴよんさせ、残りの三人は呆れ気味。気付いていないのは本人と紫だけという有り様である。

「で、獅子神を中心に勉強会ねえ。ゆきかぜや凜子は兎も角、紅と鬼崎は人に教えてる余裕あるんですかねえ？」

「うぐう……そんな余裕、ありません……」

「ふ、ふん、何よお！ 張り出される総合成績でアンタの名前なんて見た事ないんだけどお？」

「あー……きらら、それについてはだな。小太郎は高卒認定試験も大入学資格試験も受かっている」

「えっ？」

決してゆきかぜの発案を否定したわけではないが、小太郎の呆れた表情と声は如実に他人の事よりもまずは自分の事どうにかしたら、という色を帯びていた。

至極真つ当な言葉に、紅ときららは劣等感を刺激され、前者は思わず敬語に。後者は予見された反発を見せる。

だが、きららに待ったをかけたのは本人ではなく事情を知る凜子だった。

小太郎は当の昔に高校を卒業できる程度の学力を有している、と国から認められている。

はつきり言えば、五車学園の授業内容など彼にはレベルが低すぎる。通常の学校で習うような授業は勿論の事、対魔忍としての訓練とて母に課せられたものに比べれば休憩かなと思うレベル。

専門的な知識を得られるわけではなく、その道の専門家も少ない学校になど通う意義がない、とアサギや他の者に示すためにわざわざ高等学校卒業程度認定試験を取ってきた。

しかし、全ては無駄な努力であった。

学園生活という青春を全く歩んでこれなかったアサギは少しでも年相応の生活を送ってもらおうと強硬に小太郎を通わせた。

悪意なく、全き善意で。正に地獄への道行きは善意で舗装されている、を地で行く行為だ。なお、学園生活を送らせても、任務の難易度や数を緩めるつもりは全くない。信頼とは時に悪意よりも悲惨な結果を招く。

そんなこんなで小太郎は五車学園に通う事になったのだがやる気なんてこれっぽっちもない。

出る授業や訓練、テストは卒業できる単位を取るのに必要最低限。そうでもなければやる事が多すぎて死んでしまう。

授業に出席しても寝ているか全く関係のない本を読んでいるかで態度は最悪、内申点など最低。かと言って、学力自体が低いわけではない。結果――

「ついたあだ名が――0点か100点しか取らない男」
「極端過ぎよ!?!」

ゆきかぜの何とも言えない表情で告げたあだ名に、きららは驚きの余り悲鳴を上げる。

驚異的だ。0点か100点しか取らないのならば、言ってしまうば出席さえすれば必ず満点を取るということでもある。

少なくとも、五車で習う程度の知識範囲であれば、完全に身につけている証左。いや、些細なミスやド忘れすらない以上、機械染みている。

それもその筈、小太郎としても出席する以上は時間の浪費は極力避けたい。

よって学生が勘違いしがちな、テストで良い点を取って成績に反映させるなどという意気込みでは挑まない。

これまで学んだ範囲において誤った覚え方はないか、忘れていた点はないか、理解できていない部分はないかの再確認というテストの本質と意義を見据えた上で挑んでいる。

その姿勢は、大半の教師生徒からは馬鹿にされているか嫌われているのだが、極一部の例外——学校は成績の良し悪しを判定する場ではなく、あらゆる事柄の学び方を学ぶ場こそが学校、と捉えている者からは余りの率直さに呆れられているものの受け入れられている。

小太郎も五車学園に通う必要はないと感じているものの、無意味とも無価値とも考えていない。

実際、自身にはない知識や発想を持つ者には生徒教師を問わずに質問に行くし、より深い見識を得るためならば授業も真面目に受ける。

単にその機会が少なく、また生徒教師の多くが成績至上主義、授業態度のみによる性格判断、行き過ぎた学歴信仰ばかりに目を向けて、学校の本質を理解していないために齟齬があるだけなのであった。

「高校での学習範囲に問題ないと証明できてる。オレは単位さえ取って卒業出来りゃいい」

「なら、我々も一緒だなー」

「そうね、紅ちゃんの言う通り！ 赤点さえ回避できればいいのよー」

「そうじゃないぞ、二人とも」

「小太兄は知識だけ見れば履修する必要ないだけですから。私達は必要なんです」

「うぐう……」

紅ときらは同じ魔族の親を持つが故にか、元々仲が良いようだ。

二人揃ってソファから勢いよく立ち上がり、小太郎の言葉を都合よく解釈して自らの苦手分野から逃れようとしていた。

無論、それを許す凜子とゆきかぜではない。

真面目な優等生がそんな逃避を見逃さずにキツチリと釘を刺した。小太郎を見逃しているのは、その気になれば優等生になれる素養と能力があるからだ。性格は兎も角、能力的には自分達以上であるために口が出せないだけであつて、許しているわけではない。

「そもそも、お前等成績のための勉強なんかするなよ。勉強の本質は知識の吸収と応用であつて、成績を良くするためじゃない。そんなだからゆきかぜも凜子も紫璃も勉強しか出来なくて他に生かせないんだ」

「「むっ……」」

「でも、学校の勉強を対魔忍の任務で応用なんて出来るの……？」

「出来るさ」

されど、当の本人は優等生達の瑕疵を容赦なく指摘する。

ゆきかぜも凜子も紫も思わず口を噤んだ。彼女等も自身の頭の良さは、あくまでも良い成績を確保できるだけと自覚はある。

人類の積み重ねにおいては、研究が進められていたものが、全く別の分野や発明で生かされる場面が多々ある。蒸気の熱エネルギーを回転エネルギーに転換する蒸気機関の発明、人類初の抗生物質ペニシリンの応用と実用化などがいい例だ。

学んだ知識を如何に利用し、応用するか。それこそが勉強の価値であり意義。

言うが易し、行ふは難し。この世の人間でそれが出来る者は圧倒的に少数派だ。

大半の人間は、学んだものを学んだままに使う他ない。自斎もまたそうした者の一人という自覚はあるらしく、率直な疑問を口にす。

「例えば国語なんかは、作中の人物の心理描写なんかが現実の人間の心理と重なる部分があるし、発展されれば心理学にも行き着く。単純に文学を読んでるだけでも潜入任務の時には教養を身に付けていると思わせられる」

「な、成程……」

「それに語彙力が高ければ、言葉巧みに誘導もできる。つまり、爆弾やら素材を手に入れるのに役に立つ」

「ううん……?」

一瞬は感心したものの、一気に雲行きが怪しくなる会話に自斎は思わず首を捻る。

「英語も似たようなもんだな。取り敢えず、世界の公用語みたいなもんだし、大半の国で使えるから他の国で任務に当たる時には身に付けておく必要がある」

「だよねえ」

「米連の基地に侵入した時には、これで爆弾の置き場やら素材になりそうなものが何処にあるのか分かるから、喋れなくても聞き取りだけでも覚えておいて損はない」

「う、うーん?」

英語も問題ないゆきかぜはうんうんと頷いていたが、方向性が見えてくる発言に眉根を寄せる。

「歴史も重要だ。人や国の経験は値千金だからな。愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶと言う。これまでの積み重ねを知る事は重要だ」

「うう、分かったわよお。真面目にやればいいんでしょ?」

「ああ、特に爆発物を作ったり発見した歴史とか知ってれば、手元に何もなくても爆弾造れる」

「ちよつと?」

記憶力に問題があるのか、或いは覚え方が悪いのか、歴史に苦手意識のあるきさらもこの有り様。

「数学と理科もいいぞお！ 攻撃の威力計算とかも出来るようになるし、化学薬品の知識があれば薬も毒も扱えるということだ」

「ま、まあそうかもしれない」

「爆弾の効果範囲を計算して最大の効果を発揮するために必須だし、薬品の知識はそのまま爆弾の知識だ」

「そ、そこは重要か……?」

数学も理科も苦手な紅は、そうかもしれない？ そうなのか？ そうか？ 疑問の三段活用に至る始末。

「爆弾の事ばかりではないか、お前は！」

「そうだよお？ 学校の勉強は全て爆弾に繋がっている。爆弾はいいねえ。人類が生み出した文化の極みだよ。何せ、手に入れてさえしまえば素人でも扱える上に、あらゆる問題を文字通りに吹き飛ばしてくれる」

「違う！ 小太郎、それは違うぞ！」

「いいや、違わないね。ノーベル先生の生み出したダイナマイトの稼働で作ったノーベル賞が天才共をどれほど熱くさせ、盛り上げたか。やだこれ、爆弾人類の発展に貢献しすぎじゃね??？」

「このふうまのボンバーマン!!」
「誉め言葉だね」

爆発物に対する厚く熱すぎる信頼感に、ほぼ全員が悲鳴を上げる。

オレが一番爆弾を巧く使えるんだ！ と言わんばかりの小太郎。とんだ危険人物である。

単純に敵を殺すだけでなく、使い方次第で暗殺、潜入、陽動、偽装工作と使用方法は多岐に渡る。扱いに関しても、忍法の習得や発展に掛ける時間を考えれば比較的容易。

異能や忍法もそれぞれ利点はあるが、単一の機能しか持たない事や逆に応用範囲が広すぎて扱い難くなってしまう事を考えれば、遥かに優れた武器とも言える。

何よりも、手に入れさえすれば誰でも扱える有用性がある。強者と弱者の境を吹き飛ばし、人種性別年齢の垣根を越えて扱える。同時に其処が危険性にもなるが。

「冗談はさておき——いや、冗談じゃないな。本気だが」

「其処は冗談にしておかんか。いや、本気でだぞ」

「心に留めておくくらいはする。それよか獅子神、ほらよ」

「あつ、と……何なの、これは？」

「やるよ」

何処まで本気なのか。いや、彼の性格を考えれば全てが本気で本心か。

兎も角、紫に刺された釘すら全く無視して、小太郎は自齋に一つの贈り物を投げ渡した。

突然の投擲に、彼女は驚きつつも封じられつつも神と重なった視界で問題なく受け取った。流石に逸刀流を修めているだけはある。

投げて寄越されたのは手のひらサイズのケース。飾り気のない黒に質素なもので、誰でも一度は目にしたことがあるだろう。

「眼鏡……？」

「ウチの一門は邪眼持ちが多い。ただ、やっぱりお前と同じで自分の力を扱いきれない奴もいてな。んで、歴代の当主やら傘下の奴が苦心して作った封印用の道具だ。同じ視線を媒体にする能力なら効くはずだ」

「で、でも、貴重なものなんでしょう？」

「別にいい。今はオレの下に能力を扱いきれない奴はお前だけだ。それに、そんなバイザー付けて学校通う気かよ。目立ちたがりか？」

ケースの中に入っていたのは、フルリムの黒縁眼鏡だった。

仮面の下は目付きの悪さを印象付けてしまう三白眼は自齋にとつて密かな劣等感であるが、丸みの強い形状は随分と印象を優しくす

るに違いない。

無論、眼鏡型というだけで実際は能力を封印するためのもの。邪眼殺し——いや視線殺しとも言うべき、ふうま一門が研鑽の末に辿り着いた特殊な道具だ。

ふうま一門の多くが発現させる邪眼は視線そのものに魔が宿り、数多くの効果を発揮する忍法。中には、能力を扱いきれずに自他を問わずに傷つける者もいれば、能力を十全に扱える故に悪用する者も居た。

そうした者達を救うため、或いは粛清するため、自然と邪眼に対抗する術の多くが生み出された。この眼鏡もその一つ。

レンズ部分には、とある霊峰でのみ採掘される霊力が宿った水晶が使われており、複数の忍法を用いねば霊力の全てが失われてしまう。

効果は単純。内から外へと向けられる視線のみを完全に遮断するもの。その際に、光は失われず、かけた者の視界は一切損なわれない。

この効果により、全ての邪眼は効果を失う。眼鏡という形状を考えれば粛清ではなく、潜入などに向いた邪眼ながらも暴発の恐れがある者のために作られたのは想像に難くない。

自斎の神通も邪眼と同じくその視界に収めた者に効果を発揮する。

ならば、視線殺しも効くだろうという理屈——いや、現段階では希望的観測に過ぎない。

「あれ？　でもアンタ、アサギ先生から何にも聞いてなかったんじゃ？」

「聞いてなかったけど、お前が前向きになったら、アサギ校長のことだから学園に通えと言うだろうと予測はしてた。オレんところに配属されるとは考えなかったけどな！　考えたくなかったが！」

「じゃ、じゃあ何故？」

「いや、もう関わるつもりなかったから餞別と暴発予防。学校で暴発されたらオレまで巻き込まれるし、そんな目立つもんつけてくんないよ。制服と絶望的に似合わんぞ、それ」

小太郎の内面は複雑怪奇で多くの矛盾に満ちているが、他者に対する評価は一貫している。

ちゃんとしているか、していないか。真面目に生き、前向きに努力をするものこそ高い評価と褒賞を与え、不真面目に生き、何の努力もしなければ改善すら見せない者には評価すらせずに近寄らない。

少なくとも、任務を終えた時点の自斎は小太郎の目からはちゃんとしていた。

関わりたくなどなかったが、アサギを通じて手助けする程度の労であるのなら、払うに値する。だからこそ、こうして家の倉庫で眠っていた逸品を引っ張り出してきた。

「……………ありがとう。大事にするから」

「おお、そうかい。神遁を扱えるようになったらちゃんと返せよ」

「どうしようかしら。もう貰ってしまったし、こうしてプレゼントを受け取るのは初めてだから、返さないかも」

「がめつい奴だ」

（良い！ 実に良い！ 小太兄、女たらしとしてちゃんとしてるね！）

小太郎の行為が何を意味しているのか。

少なくとも畏怖や危険視ではなく、忍法そのものでもなく、自身の存在と在り方を認められたと受け取った自斎は薄っすらと笑みを刻む。

両手で眼鏡ケースをしっかりと握り締める自斎を目にした小太郎は悪くいいながらも、口の端は僅かに持ち上がっていた。

そして、自斎の内心に堪りつつある感情に、小太兄ハーレム推進委員会会長のゆきかぜは満面の笑みを浮かべている。

「とは言え、効果があるかはまだ疑問だ。明日は学校が休みだから、試してみようと思うんだが——」

「私は新参だからまだ任務はないな」

「ごめん、私は別の任務入っちゃってる」

「私もだ。空遁は便利だからな。独立遊撃部隊の任務がなければ引つ張りダコだ」

「私もきくらと一緒にセンザキに向かう。どうも、不穏な動きがあるらしくてな」

「そんなことだろうと思っただぜ。災禍も天音も別任務だし——仕方ねえ、アイツ等に頼るか」

視線殺しが効果を発揮するか定かではない中で、いきなり使わせるつもりはない。

どの程度の効果があるのかを確認しなければならず、万が一神が暴走した際に備えて抑え込めるだけの人物を立ち会わせなければならぬ。

しかし、独立遊撃部隊の面々は生憎と別任務が入ってしまった暇がない。

仲間である自斎のために一肌脱いでやりたいのは山々だが、それでは対魔忍の任務を疎かにも出来ない。

行き詰った小太郎は、仕方なしにポケットからスマホを取り出して、文字を打ち込んでいく。

「でも、誰を……？」

「ふうま宗家の部下。数は災禍と天音を含めても10人くらいしかないが、皆有能だ」

「それって、藤原さん、だったけ？ と同じってこと？」

「そういうこと」

小太郎の言葉を聞き、自斎ときくらが真つ先に思い浮かべたのは、スーパーマルチドライバーの藤原 悟。

小太郎自身が手元に置いておきたいと認める者達こそが数少ない彼の家臣になる。そうでなければ、弾正反乱の時点で全てを売り払っている。

尤も、現時点でふうま一門の出は殆どいない。他家からの警戒を鑑

みてもあるが、弾正の時代では彼の眼鏡に叶う者は殆どいないか、既に一門の別の家に属していたからだ。

様々な事情、思惑を抱えた者達であるが、共通するのはふうまではなく小太郎個人に忠誠を向け、ある一点において他者とは隔絶した技能・能力を持つ者。

災禍、天音、悟のことを考えれば、どれほどの人材が控えているのか分かるというもの。

だが、不思議なことに話題に上がるのは独立遊撃部隊の面々ばかりで、ふうま一門の者が対魔忍の中で話題に上がることは少ない。

それは即ち、小太郎にとって部下の面々は極力伏せて置きたい“切り札”であると示していたのであった。

苦労人の仲間が粒揃い！　なおそれでも苦労は減らない模様

「来たか、早いな」

「時間の前には来るわよ、頼んだ側でもあるし。おはよう、ふうま、それに紫さんも」

「ああ、おはよう獅子神。それで、お前の仲間はまだか？」

「そろそろ来るだろうよ。どっちも真面目な奴だからな」

五車町は表向きには今世紀に入ってから山間部に切り開いて新たに作ったニュータウン、とされているが、周囲には手付かずの原生林が多く残っている。

特に、五車学園の校舎裏には3000ヘクタールもの広大な原生林が広がっており、訓練された忍獣が放たれている。必要とあらば、その原生林で行軍訓練も行われるほどだ。

「小太郎の復帰と勉強会から開けて翌日。」

校舎裏とはまた別の、五車の住宅街から歩いて三十分ほどの原生林の開けた場所で、小太郎、紫、自斎の三人が顔を合わせた。

自斎が偽名ではなく、本来の紫という名で呼んだのは、昨日の時点で小太郎から事実を知らされていたから。

隠したままでも良かったが、これから近しくなる以上は隠し通せる訳もなく、予見し得る弊害——黙っていたことできららが信用ないの、と不機嫌になるのを避ける目的が主——を鑑みて、至極あっさりと明かしてしまった。

彼女等の驚きは相当なものであったが、次元侵略者の存在を語られ、何よりも己の知る紫と似すぎている少女を直接目にしては納得せざるを得なかった。

三者は三者とも、それぞれの対魔忍装束を身に付けている。

自斎と紫は馴染み深い己の一部を、小太郎は変装と潜入を前提とした目立たず、一般人の着るそれと見た目は変わらないコート型。

これから行われる実験と実証は、あくまでも「だろう」の領域であって、確証など何もない。自斎に憑りついた神の強さを考えれば、彼等の格好も、町の中心から離れた場所を選んだのも納得の至りである。

誰よりも神の理不尽さを知る自斎の表情は、バイザーの上からでも分かるほどに不安で満ちている。

そのような表情をしていれば、紫なら叱咤の一つでもしそうなものだが、境遇と危険性を知っているが故に緊張から表情は硬く、口元を引き結んでいた。

唯一呑気だったのは小太郎だけ。欠伸を噛み殺しながら、身体を伸ばしてなどいる。

今回の実験に際して呼び寄せた自らの家臣への絶大な信頼——ではなく、どうしようもなくなったなら全力で逃げるつもりしかないからだ。

神遁の性質上、術者である自斎は無傷で済むのは確定。紫に関しても、不死覚醒のお陰で早々死ぬこともなく、いずれ元の世界へと戻る事を考えれば此処で死んだとして痛手は少ない。呼んだ家臣も、神から逃げるだけの実力と智慧を有している。何の問題もない。

戦うつもりも止めるつもりもなかった。

忌神が暴走状態になった場合の対抗手段を持ってきてもない。下手に手段を用意して無駄に神の気を引きたくはなかったし、予期せぬ暴走の引き金になりかねない。

よって、用意したのは生き残る手段のみ。それだけで十分、と言わんばかりの態度でもある。

「おっ、いたいた。こた————じゃなかった、今は若じやなきや拙いよな」

「別にいいんじゃないか。威厳だの權威だの、気にする人じやなし」

自斎と紫の不安と緊張で気拙さばかりが募る場に、対照的な声が響く。

見れば、木々の合間を縫うように二人の若者が歩いてきていた。両者ともに一見すれば一般人と変わらない出で立ちであるが、纏っている衣服は小太郎と同様の偽装型の対魔忍装束である。

一人はツーブロックの明るい茶髪に、人懐っこい笑みを浮かべた少年。

身長は170の半ば。パーカー型の対魔忍装束のお陰で細身に見えたが、裾から覗く首の太さと分厚い掌の皮から決して華奢ではなく、鍛え上げている事が見て取れる。

もう一人は、墨汁を流し込んだ黒髪を無造作に伸ばし、保たれた無表情と目付きの悪さも相まって、不機嫌そうに見える少年。

身長は先の少年と同程度。ダツフルコートを模したセパレートタイプの対魔忍装束も黒一色で、細身の身体付きが更に細く見えた。

「来たか、雅臣、日影。悪いな、休日呼び出しちゃって」

「全くですよ」

「おいおい井川、もうちよつと言い方あるでしょうが。若に当たりキツくね?」

「この人のやってること諸々考えろ。誰だつてこうなる」

久方振りに出会った友人に向けるような笑みを珍しく浮かべた小太郎であったが、返ってきたのは何処か棘のある言葉。

日影と呼ばれた黒髪の少年は不満を隠そうともせず、露骨に眉根を寄せて睨むように視線を向ける。当主に対する敬いというものが一切感じられない。

思わず茶髪の少年——雅臣は小太郎だけでなく、日影の態度すら庇おうと口を挟むのだが、取り付く島もない。

小太郎は続いて苦笑いを浮かべたが、自斎と紫は素直に驚いていた。

日影の態度はどう考えたところで当主を前にした態度ではない。

常にどんな行為も全肯定する天音、苦言こそ呈しても地獄の底まで共にする覚悟であろう災禍の接し方とは根本的に異なり過ぎていた。

小太郎ならば扱い難い人間は遠ざけておくと思っていた。前者の二人ばかりではなく、そもそも彼の周囲には肯定的な人間しかいない。だからこそ、日影の見せる態度に驚きを隠せずにはいた。

「この埋め合わせはするから勘弁してくれ。それで、こっちが獅子神自斎と別次元の八津 紫だ」

「どうしてこう厄ネタばかり引つ張ってこれんだ、この人は……」

「井川ー！　そういうの本人の目の前で言うのやめてあげて！」

日影の言動と雅臣のフォロー。どちらも当然と言えば当然の反応だ。

神通持ちの獅子神 自斎だけでも相当だというのに、別次元の紫などというどんな災厄を招くかも分からない厄ネタまで拾ってくるなど考えられない。尤も、小太郎とて望んで手を出したわけではないが。

事情も内心も察している雅臣は必死に庇い、少しでも態度を矯正しようとするも、なしの礫。全く効果がない。

「茶髪の方が龍造寺 雅臣。黒髪の方が井川 日影。どっちも五車の三年だ」

「年上か。しかし、井河ということとは……」

「御察しの通り、井河一門の出だ。尤も、扱いは分家じゃなくてお前と同じ下忍だがな。だから苗字も河口の方の河じゃなくて、普通の川の方だ」

「確か、そんな家があったような気がするが……しかし、アサギ様の配下を何故貴様の家臣扱いなんだ」

「事情があるだけだ。アサギさんも認めてる。口を出すなよ」

小太郎は二人の名前と学年だけを簡単に伝える。

しかし、紫には聞き捨てならない名前だった。

主君の苗字に肖り、苗字を変^{あや}える者も少なくはない。古いしきたりや習わしを未だに続ける対魔忍の世界では極々普通の行為。

ただ、紫が反応したのは敬愛するアサギの苗字である井河の名を肖っていたからだ。其処にあるのは同じ家の下忍出としてのシンパシーではなく、井河から肖った苗字を名乗る嫉妬と井河一門から離脱してふうま宗家についた事か。

しかし、それは日影にとつても触れられたくない事柄なのか、ただでさえ不機嫌な表情が益々不快感で曇っていく。

「おいおい、いきなり雰囲気最悪じゃん……」

「えつと……今日はよろしくお願ひします、先輩方」

「んなに、畏まらなくてもいいよ。オレも井川も若に呼ばれただけだし。それに困ってる人がいるなら助けるもんでしょ。もち、八津もな」

「うっ、むう……」

悪くなる一方の空気を小太郎は素知らぬ顔でやり過ごしていたが、自斎は見るに見かねて頭を下げる。

紫にせよ、日影にせよ、雅臣にせよ、今日は彼女のために集まったと言つても過言ではない。場の空気に耐えられなかったのは事実だが、心から感謝しているのもまた事実。彼女としては当然の謝辞だ。

自身の至らなさを改善するためにどんな労も厭わないであろう姿勢は、いがみ合いが勃発しかけた紫と日影を諫めるには十分過ぎた。

其処へ間髪入れずに人の好きを感じ取れる言葉を、雅臣が告げる。

顔に刻まれた笑みは生粋の根明であることを示しており、余りの善人振りに紫は思わず、感情に任せてしまった己を恥じる。

「雅臣は対魔忍として日が浅い。一般上がりって奴だ」

それぞれの性格から今までの展開を読んでいた小太郎は、ようやく

雅臣について僅かに語る。

対魔忍は、小太郎を筆頭に古い家柄を持つ者が殆ど。

生まれながらに生きる道を定められ、当人も対魔忍として生きる事を信じて疑わない。

だが、全体において幾許かは、古くからの家柄と言う訳でなく、ある日を境に対魔忍へと迎え入れられた者も居る。

過去に何処かで対魔忍の血が混ざったのか、或いは遙か昔に交わった魔族の血が長い時をかけて覚醒したのか。数は多くないものの、一般人の中にも忍法を発現させる者はいる。

大抵は何らかの事件に巻き込まれることで肉体的にも精神的にも追い詰められた末に覚醒、元凶の生死に関わらず、駆け付けた対魔忍に保護される。

どちらにとっても苦渋の決断。

一般人側にとっては己を含めた誰も傷つけずに済むよう忍法の扱いを学ばねばならず、また闇の勢力に目をつけられれば、嫌でも闇の世界に足を踏み入れねばなくなる。

ただ一人で独自に研鑽を積む道も存在しているが、そもそもそんな道を選ぶほどの独立性と精神性を持つ者はいずれは闇の世界に足を踏み入れる。そうでない一般人は自己と周囲を守るために対魔忍を頼る他ない。

対魔忍側としても戦力的には喜ばしい部分もあるが、それ以上に過酷な道を歩まざるを得ない者への憐れみと間に合わなかった己への不甲斐なさが募り、何よりも扱いに困る。

元一般人は対魔忍の家系に生まれた者に比べ、戦いそのものに向いていない。軍人として人に向かって銃を撃てるようになるには長い時間が必要となる。悪党だからと理由だけで人や人の形をした者を殺せるなど、生まれながらにそのような教育を施されてきたか、元より歪であるか。

それ故、彼等はどれほど優れた忍法を身に宿そうとも、戦いを拒否し、殺しなど出来よう筈もない。極一部の例外を除いて。

よって大抵はお荷物扱い。

戦いに向かわせられず、かと言って放逐すればどうなるか。

否が応にも出費を募らねばならず、戦力にならぬ者に対して割り裂かねばならない時間が増えていく。

例外足る者も多くは正義や強大な力に酔って、現実どころか自分すらも見えていない。罪悪感を抱きながらも自らの正義感を信じ、他者に対する献身の本当の意味を理解し、罪と罰を背負っている真の守護者など極々一部だ。

雅臣はどちらであるのかなど語るまでもない。

命令以前に、何の関わりのない自斎の境遇を聞いただけで、自らの危険を顧みずにこの場にいる以上、真正の善人だろう。

何よりも、小太郎が自らの部下と口になっている。才能は元より性格の底の底まで見抜いた上で選んでいる。ならば、彼は疑う余地もなく

「ふん、一般上がりか。井川の方も私の世界では名前が残っているだけで、末席を汚しているとすら言えない状態だ。何処まで頼りになるか」

「ちよつと、紫さん」

紫の何処か見下した物言いに、流石の自斎も眉根を寄せる。

危険を承知で見ず知らずの己のために来てくれた者を悪く言われでは咎めましょう。

しかし、それは紫なりの優しさであった。

彼女のいた次元でも、対魔忍の家系ではない一般上がりや親を失った孤児が対魔忍になる例はいくらでもあり、実情も知っている。

ただ、やはり生まれによって十分な覚悟や才気、訓練がないままに任務へと赴いた者の末路は一樣に悲惨。況してや今回は任務ではなく、自斎の個人的な問題になる。

昨日できたばかりとは言え、己の事情を知ってもなお疑うことなく事実を受け入れてくれた友人が傷つく様など見たくはない。小太郎の持ってきた眼鏡の効果を実証するというのなら、別段彼等でなくと

も十分な実力を持つ者が集える日まで待てばいいだけの話。今日でなければならぬ理由はない。

「なら戦ってみるか？」

「何……？」

小太郎も、紫が乗り気ではないのは分かっていた。昨日の時点で日を改めるべきと再三に渡って進言してきていた。

無論、単なる反抗ではなく十分な理由と理屈が其処にあった。それでもなお強硬に事を進めたのは、十分な勝算があったからに他ならぬ。

その計算を支えるのは雅臣と日影。

身内という色眼鏡を使わない小太郎の目で見て、二人の実力は懐刀である災禍と天音に遜色ないものである。

経験の問題で、どんな事態にも、どんな任務も完遂可能とは言えないが、少なくとも忌神の暴走を止めるだけの強さを身に付けている。

ただ、言葉にはしない。

どれだけ語ったところで、実際に目にせねば、体験せねば納得しないのが人間というもの。

論より証拠、百聞は一見に如かず。諺は無数にあり、賢者の見極めた人の性質は概ね正しい。実際、紫は欠片も納得していない。

忌神に対抗できるというのなら、名前くらい聞いた事はある筈。元一般人の雅臣は兎も角、井河の末席に名を連ねている日影ならば世界線が違ったとしても話題に上がるに違いない。

そんな紫の推論もまた概ね正しい。

欠けているものがあるとすれば、小太郎の存在そのもの。自らの手の内を軽々に明かすほど、間の抜けた性格ではない。

「ほう、面白い。いいだろう、その実力、見せて貰う」

「決まりだな」

「……脳筋かよ」

「何か言ったか？」

「いや、別に」

「ええ……これから神様と戦わなきゃなんないしれないのに、ほんとに戦んのお……？」

「ちよつと、ふうまー！」

「いいじゃないか。お前だつてコイツ等の実力に疑問があるんだろ？」

なら、これが一番手っ取り早い。幸い、お前が怪我をしても事は進められるし、紫の方も怪我してもすぐ治る。日影は獅子神の、雅臣は紫の相手をしてやれ」

紫は舐められているとでも思ったのか、小太郎の部下がどれほどのものか見定めるつもりなのか。存外、乗り気であった。

身内との殺し合いは極力避けるべき、とは考えているが、訓練ならばやぶさかではない。権左のような戦闘狂ではないが、筋トレだけで鈍った身体を叩き起こすには実戦形式が最も早い。

何よりも、自らの実力に対する自負は人一倍。それが自惚れにならぬほどの強さもあれば、苛烈なまでの努力も重ねている紫にとって、小太郎の物言いは看過できないものであった。

対して、三人の反応は正反對。

紫とは相性が悪いのか、日影など思わず悪罵を漏らしていた。

雅臣にしても、聞いていた役割とは違う展開に困惑しており、自斎など可哀想なほど狼狽えている。

しかし、小太郎は聞く耳など持たず、紫は自らの獲物を構えている。紫は納得するまで続けるであろうし、小太郎は止めるつもりがない。こうなってしまうえば、止めようがない。三人は三人とも同時に溜め息を吐き出し、それぞれ指定された相手と向かい合う。

「お前等にとってはいい経験になると思うぜ。殺すなよ？」

彼の言葉は誰に対してのものだったのか。

唯一分かるのは、言葉の前半と後半で向けた先が違うこと程度。

紫は自慢の大斧を、自斎は忍者刀を手に握り、構えを取る。残る二人は徒手空拳。構えすら取っておらず、本当に戦う気があるのかという自然体。

互いの戦いに巻き込まないように距離を置き、相手との間合いは五mほど。対魔忍であれば、あつてないような距離。

「本音言えば、女の子を殴りたくなんかないんだけど……」

「気にするな、これは訓練だ。それとも馬鹿にしているのか、舐めているのか？」

「そんなつもりないよ。ちよつと若いだけで、こつちの八津先生と同じなんだから。でもまあ——八津、オレやるからには勝つよ」

「……………」

瞬間、雅臣の空気が変わった。

感情が露わになりやすく、表情がよく変わりながらも人懐っこい笑みが最も似合うはずの少年の顔からあらゆる表現が消失する。

小太郎によく似た無機質な無表情。冷酷さや冷徹さは感じられないが、非情さだけは似通っている。

雅臣に現れた表情と雰囲気の変化は、相手の実力を見定める——
—言えば、上から目線であつた紫の警戒心は頂点にまで引き上げるには十分過ぎた。

静かだが秘めた熱情を解き放つ宣言は、明確な宣戦布告。

ただの一般上がりでは、これだけの精神性メンタリティの変化は見られない。小太郎が目を掛けるだけあつて、彼もまた特別な才能を生まれ持ち、闇との戦いに命をかけるに値する理由を持つ、立派な対魔忍なのだ。

「——！」

「……………」

(速い！ それに、この膂力！ 身体強化系の忍法か?!)

雅臣の踏み込みは、静かでありながら稲妻の如く速かった。

古武術に伝わる技法、膝抜き。必要な筋肉のみに力を漲らせて、残

りの筋肉からは力を抜くことで重心を高速で移動させる事で、予備動作を極限消しながらも体軸がブレず、初速も上がる。

完璧な膝抜きであった。

対魔忍ならば誰とて使える技法だろうが、此処までの完成度は類を見ない。正に、小太郎の言う「誰にでも出来ることを誰よりも巧くやれば、忍法なんて使えなくても十二分」を体現しているかのよう。

間合いを詰めると同時に放たれたのは、右の縦拳。

正拳突きや右ストレートなどの掌を地面に向ける平拳に比べ、体重を乗せることが容易であるために踏み込みから最短距離の軌道で放つのに適し、また手首を捻る必要がないために初速で勝る。

真正面からの強襲と同時の牽制、更に次手への組み立ても考慮に入れた一撃は、雅臣が如何に近接格闘に秀でているかを示していた。

その一撃を真っ向から戦斧の柄で受け止めた紫を待ち受けていたのは、驚愕と戦慄だった。

まるで空気が爆ぜるかのような——否、事実として余りの威力に空気が爆ぜた。

紫の力に耐えられるよう、兎にも角にも頑丈さのみを追求して造られたはずの大斧が軋みを上げる。

このままでは折られる。

一瞬でそう判断した紫は、受けた柄の軸をずらし、そのまま回転させて受け流す。

目覚めた忍法の特性上、真正面からの力押しばかりが目立つ紫であるが、こうした技術がないわけではない。相手に技術や能力を使わせなくてもなお力で押し切るのが最適解だけに過ぎない。

そんな彼女が初手から技術で用いねばならないほどの身体能力と格闘技術。

速力は圧倒的に雅臣が上。更に、自身の売りである筈の膂力が僅かに勝っている程度。不利なのがどちらなのかは、嫌でもでも分かる。

されど、なおも紫は闘志を燃え上がらせた。

これほどならば相手に取って不足なし。相手を舐め腐っていたの己と認識を改める。

この次元における紫との最大の違いは此処にある。若き故に過ちを即座に認め、改める素直さがある。元々の性格と重ねた年月が相俟って生まれてしまった頑固さが彼女にはないのだ。

そんな姿を見て、雅臣はより一層気を引き締める。

初手の強襲は成功したが、まともに喰らえば沈むのは己の方。

況してや、紫の忍法は不死覚醒。首と心臓を同時に破壊しない限り、体力が尽きるまで戦い続けられる。油断すれば形勢は一瞬で逆転だろう。

攻めて攻めて攻めて攻めて攻めて攻めて攻める。

紫にとつては自らの能力を最大限生かす戦法であり、雅臣には勝利のために与えられた唯一の道。

合致した両者の思惑は戦いを加速させる。他者の介在を差し挟む余地のない、文字通りの決闘が始まっていた。

「凄い、紫さんと真正面から……身体強化系の忍法でも使っているの？」

「いや、龍造寺は忍法を使えない。若と同じで、あくまでも対魔粒子が覚醒しただけだ」

「えっ？ そんな、まさか……」

「素の身体能力が桁違いなんだよ、アイツは。若曰く、〃ありや母上に近い生き物だ〃だそうだ」

隣で始まった凄まじい近接戦闘を眺めながら、思わず漏れた自斎の独り言に、日影は律儀に答えていた。

初対面の人間にも分かるほど他者に冷たい態度を取り、距離を置きがちな彼であるが、こうして後輩の疑問に答えている辺り、面倒見自体は良いようだ。

しかし、発言は如何なものか。

小太郎の母——ふうま 潤を知らぬ自斎にはほとんど伝わらぬ言葉であったが、ふうま一門の者であれば鼻で笑うか、激昂するであろう。暴力が形を成して生まれたような、強さだけをひたすら凝縮したよ

うな、人の胎から生まれてきた真正の怪物。

ふうまの出身であるのなら、その強さと恐ろしさは身に染みて分かっている。だからこそ、日影の発言は許されるものではない。

それもその筈、日影の聞いた小太郎の後にはこう続く。

『尤も、天と地ほどの差があるがな。それでも、母上と雅臣以外のオレ達に比べれば圧倒的に近い』

誰よりもその強さを間近で味わってきた小太郎の言であれば、眉唾ではない。

そも何の忍法も使えぬはずなのにも拘らず、異能系忍法にして身体強化系の極致である不死覚醒に迫る勢いの身体能力など常識外れにも程がある。

「それにしたって、どっちも熱くなり過ぎだ。後の事、考えてねえな」
「なら、井川先輩はやめておきますか？ 私としてはその方が嬉しい……というか、安心なんですけど」

「いや、若の命令は絶対だ。やれと言われた以上はやるさ」

「……ふうまの事も、先輩の事も、よく知りませんが、意外です。あんな態度で接しているのに」

「オレはあの人を信用も信頼もしてる。返しきれないほど恩もある。部下として命を賭して命令に当たる覚悟もある。けど、尊敬だけはしちやいない」

「成程、確かに」

自斎の胸に疑問が浮かび上がったが、端的に小太郎への所感と態度の理由を語る日影の言葉が胸にすとんと落ちる。

確かに言う通りであった。エウリュアレーの一件で、小太郎がどれほど信じられるか、どれほど頼りになるかは理解できている。そうでもなければ神遁の件で助など求めない。

それはそれとして、尊び、敬うべき人物か、と問われれば、彼女は

今でこそ井河一門はアサギに平伏しているものの、不穏分子がいな
い訳ではない。

かつて台頭し始めたアサギを目障りに思い毘に陥れ、最終的には多
くが粛清され、生き残りも五車から追い出された長老衆を支持する者
が未だに居る。

そうした者達にとって、日影は格好の神輿と言える。

アサギとさくらの力が弱まった際には、相伝の忍法を受け継ぐもの
として担ぎ上げ、家の力関係から傀儡とするには持ってこい。

そんな美味しい存在を手放した挙句に警戒している小太郎に身柄
を譲るなど考えにくい。例え、アサギの一存であったとしても、是が
非でも抵抗して手元に置こうとするだろう。

「普段は忍獣使いで通っているからな。普通の影遁と違って、コイツ
等は現実の獣や魔界生物と見分けがつかない」

「ああ、さくら先生が使っていた影とは、確かに質感が違う……」

再び浮かんできた疑問に、日影は回答を示す。

日影が影遁を使える事は小太郎を頂点とするふうま一門以外で知
る者は殆どいない。故に、井河一門の不穏分子からの余計な邪魔が入
らない。

また彼の影遁で作り出された二頭の狼は、影ではなく生き物そのも
の。毛並みの一本一本まで再現されているのは勿論の事、その仕草や
息遣いに至るまで、まるで生きているかのよう。

影遁使いの最高峰、井河 さくらの作り出した影の熊や鮫でも此処
まで現実に即していない。どうしても影のようなのっぺりとした質
感が現れてしまう。

それを考えれば、日影が影遁使いとして、どれだけの才能を秘めて
いるのか分かっていうものだ。

「いや、勘違いするな。オレはさくらさんとは方向性が違うだけだ。
あんな影遁なら何でも出来るオールラウンダーと一緒にするな」

「……………」

「……オレの影遁はかげぼうしの術。本来は形を持たない精霊、かつては形がありながら時代の流れと共に失った妖怪や零落した神と契約することで、手影を媒体にして現世に喚び出す忍法だ。性質としちや、魔術師の使い魔や陰陽師の式神に近い」

疑問の回答から一転して勘違いを正す。

質感の違いはそのまま才能の差を示しているのではなく、あくまでも性質の違いだと日影は語る。

井川家にはこんな口伝がある。

戦国の世、祖先の一人はある戦で深手を負って敗走し、生き延びるために山の中へと分け入った。

しかし、其処は自然の驚異がそのまま命の危険となる地。如何に対魔忍と言えども、手負いの状態では野生の獣にすら敵わない。

流れる血と共に失われる失われる体温に死を覚悟した時、奇妙なものが入った。

木々の隙間から己を眺める白と黒の狼の番を。

祖先は今際の際に見る幻覚にでも縋ったか、或いは狼達の意志に誘われたのか。

死が目前に迫った身体で、狼に近づいた。すると狼達はそそくさと離れていく。ただ、それは見た事のない生き物から逃げているようではなく、まるでついてこいと誘っているかのよう。

導かれるまま山を進んでいくと、やがて人里に辿り着いて九死に一生を得るに至った。案内役だった狼は何時の間にか消えていた。

幻覚か現実か判然としなかったものの、祖先は二頭の狼に甚く感謝し、細やかな礼として迷い込んだ山に小さな社を建て、死ぬまでの毎年通い詰めては手を合わせ、獣の肉を供えたと言う。

それから、井川家の子孫は影遁を生まれ持つと、どんなに非才であろうとも狼の影だけは現実のそれと寸分違わぬ形で生み出せるようになったという。

それが、かげぼうしの術の原型。オリジン

通常の影遁とはまた違った性質を得た井河の子孫達は、ゆつくりとした歩みながらもその性質を解き明かし、脈々と伝説を継ぎ、研鑽を積み上げてきた。

「さくらさんとの違いは手動マニュアルじゃなくて、自動オートつてところだ。コイツ等には知性と意思があるから、ある程度複雑な命令も可能。一度喚び出せば、射程も街一つ分くらいになる」

「……ふうまの部下なのに、手の内を明かすんですね」

「手の内を明かしても問題ない忍法、問題のない相手。もしくは敢えて明かしてミスリードを誘う手もある………それ以外に何か気付かないか?」

「どういう……?」

「察しが悪いな、それに鈍い。先が思いやられる。似てるだろ、オレとお前の忍法。自分の忍法なのに、自分以外の何かの力を借りてるってところが」

「……!」

日影の指摘に、自齋ははっとさせられる。

確かに、その通りだ。自齋は神遁、日影のかげほうしの術。どちらも自らの力でありながら、本質は超常存在からの貸与か貸借。

決定的な違いは、自らの才能への理解度。そして理解度の差は、そのまま熟練度の差になる。

少なくとも、本人の意志と関係なく自齋の忌神が暴威を振るうだけに対して、日影は自らの意志で自在に呼び出して上で完全に支配下に置いている。

ならば、小太郎が自齋に日影を充てた理由は――

「見せてやるよ、後輩。こういう忍法の使い方とこういう連中との付き合い方をな――噛み殺すつもりでやっていいぞ、行け」

「……っ!」

日影の命に従い、黒白の狼は文字通りに地を駆ける。

人のそれとは異なる野生の疾走。優れた理論と鍛錬による加速ではなく、この世を作り出した何者かが設計した造形と機能による加速。

普通の人間ならば猫相手でも刃物を持ってやつと対等という言葉が残るほど、獣と人の間には性能と言う面で大きな開きがある。

それでも自斎は対魔忍であり、逸刀流の剣士だ。知恵を持っても術理を持たぬ獣に遅れを取らない。

獣の速度に容易く対応し、二頭の仕掛けへと完璧に合わせて見せる。

自斎には二頭が本当の命と呼べるものを持っているか定かではないが、振るう刃に迷いはない。

迫る一頭の頭部に対して余裕と共に刀を振り下ろす。

余裕を残したのはそれで充分だった事もあると同時に、波状で仕掛けてくるもう一頭への対処するため。

「——うっ!？」

しかし、波状攻撃を仕掛けてくる直前で、二頭の狼は直角に曲がって左右に分かれ、距離を取る。

行動を見れば分かる。狼達は主人に命ぜられるまでもなく刃の危険性を知っている。それぞれが、自ら思考して主人の命を遂行する自立存在。単純に敵わないと察すれば、自然と戦い方を変える。

一息で噛み殺せぬのなら、狩りの方法を変えるまで。

野生の狼の狩りは多くが持久戦。最高速度という点に関してはチーターなどのネコ科の肉食獣にはどうしても劣るが、獲物を何時間と追いかける鼻と持久力を持っている。

バイソンの群れへと集団で襲い掛かり、しつこく追い回して体力のないものに喰らいつく。

自斎への行為も同じものだ。

追い回す事はないが付かず離れずの位置を取り続け、僅かでも気の

緩みを見せれば即座に襲い掛かる。

そうして神経と精神を削って、致命的な隙を突いて喉笛を噛み千切るつもりだろう。

自斎にも狼の腹は読めた。

野生の獣との持久戦は不利、自力に差があるのなら此方から攻める。

彼女の判断はどうしようもなく正しい。相手が狼だけならば。

「そら、そつちばかり見てていいのか」

(こういう術の使い手なのに、本人が近接——?!)

狼に向けた意識の間隙を突くように、何時の間か間合いを詰めた拳句に一振りの棍を握り締めた日影が顔面目掛けて突きを放っていた。

こうした自分以外の何かを使う術は、術者本人が前に出ることは珍しい。

大抵の場合、術に絶大な自信がある故に、後方で命令を下すばかりで前に出ない。また術者の意識が途切れた場合、術が強制的に解除されもするし、暴走を招いて周囲へと被害を齎しかねないからだ。

自斎とて、忌神を喚び出した時には同様。喚び出した存在が強大であればあるほどに、自らも巻き込まれかねない。

だが、日影にそのようなセオリーは通用しない。

自ら召喚した存在への不信感故ではない。寧ろ、自ら相棒とも呼べる存在への信頼とその力を最大限生かすためである。

式神自体が自意識を持つ以上、彼の戦いは常に一对多か、多対多の様相を呈す。また、彼自身が意識を失ったとしても、一度でも式神を召喚しておけば解除はされない。

それぞれに意識を向けさせて、注意を分散させる割り。

異なる存在による、全く異なる方法の波状攻撃。

数の利を生かした集団戦法。

全てに対応できる者などほんの一握り。それに加えて——

「……さくら先生みたいなオールラウンダーでは、なかったんじゃない？」
「ああ、違うな。さくらさんのように何でもは出来ないと言っただけだ。一部も真似できないとは言っていない」

（ミスリード……！　この人、やっぱりふうまの部下ね。まるで容赦がない！）

今まで手ぶらだったにも拘らず、いま手にしている棍は、恐らく影の中に閉まってあったものを取り出したのだろう。

確かに、嘘ではない。

さくらのように何でも出来ないとは言ったが、影を倉庫のように使えないとも、影に潜めないとも言っていない。

何よりも日影自身、さくらのようなポテンシャルを持っているとは思っていないのだ。

事実として、さくらの力量は凄まじい。無形の影に明確な形を即座に与えて攻撃を実行することがどれほど難しいか。

決められた形がある故に発動までの時間を短縮できる己とは違って、その場その瞬間にあった影を攻撃や防御のみならず支援まで行えるように瞬時に組み上げている。尋常な創造力ではなく、発想が柔軟過ぎる。

おちやらけた態度の陰に隠れた明確な才能と血の滲むような努力が、同じ影遁使いとして肌で感じ取れる。だからこそ、彼はさくらと同等とは決して口にしないし、考えすらしない。

自斎にしてみれば、とんでもない勘違いである。

彼女から見て、日影のポテンシャルはさくらと同等かそれ以上。

さくらでさえ、一度に扱える影の量はそれほど多くはない上に、同時に複数の形状を維持し続けるのは難しい。複数の影の刃、影の獣、影の分身を作れたとしても、影の刃と影の獣を同時に展開した場面を見たことはない。

あらゆる形へと瞬時に形を変える自在性はなくとも、同時に異なる手段を用いれるのは、間違いなく唯一性。彼自身が言った通りに方向性が違うだけだ。

何より、小太郎の考えに思い至り、即座に実行する勘の良さと思考力。

明らかに格下である己にも意図してミスリードまで潜ませておく油断の無さ。小太郎の部下に恥じぬ容赦の無さだ。

そして——容赦はないが、どうしようもなく優しい。

雅臣とは性質の違う人の良さ。彼の冷たい態度は他者への優しさの裏返し。甘やかすばかりが優しさではない、時には厳しく接さなければならぬと無言で語っているようだ。

これは訓練ではない。教育だ。

先達である自分とは違って、似たような力を持ちながら苦しんでいる後輩に向けた指導。だからこそ、一切手は抜かない。

「どうぞ、よろしくお願いします！」

「ああ、付いてこれないなら——置いていくからな」

「——はい！」

それはまるで、自らの理想を前にしたかのような敬意と決意、そして高揚。

苦い敗北を喫した尚之助は、ただひたすらに他者のために極致に至った剣士であり、冷静になった自斎にとっては今や剣士としての理想そのもの。

そして、今は目の前に対魔忍としての理想がある。発展途上であろうとも、日影の在り方と忍法の使いこなしようは、彼女の理想に近い。

ならば——

孤独は遠く、依存でもない。

諦めは遙か彼方、今は希望しか目に映らない。ただひたすらに自立と克己で奮い立つ。

今は自らの理想に恥じぬ戦いと研鑽を。

自斎は、それだけを胸に刀を新たな力を込めて握り直すのだった。

苦勞人の部下をやれば色々之恩恵がある。だが、その前に地獄を越えなければならぬ

「んー、やっぱ慣れてる奴と訓練するのはキツいなあ……」
「こんなものだろうな」

顔合わせと互いの実力を確認するための訓練が始まってから二十分後。

決着は意外なほどあっさりとしたものだった。

「はあ……はあ……はあ……」
「うっ……ぐ……くそっ……」

涼し気な表情で立っている雅臣と日影と対照的に、自齋と紫はその場にへたり込んでいる。

外傷はないが、大量の汗を流して髪が額に張り付いているのも気づいていない様子。

実戦形式の訓練は、いずれも男子側の圧勝で幕を下ろした。

紫と雅臣の戦いは性能と技術、何よりも戦いに対する思考力と展開力の差による決着。

防御を前提とせず、攻撃を攻撃で潰し合いながら体力を奪い合う様は正に泥仕合。

当初、拮抗していたかに見えた戦いは、徐々にであるが雅臣の側へと天秤が傾いていった。

共に近接戦に特化したタイプであるが、紫が武器持ちの間合いであるのに比べ、雅臣は格闘一本と更に間合いが狭い。

こればかりはどうしようもない欠点かつ弱点であるが、彼は巧く利

点に変えた。

紫は一撃に全てを込めるような破壊力を追求した攻撃ばかり。これを見切った雅臣は果敢に間合いの内側へと飛び込み、攻撃の破壊力が頂点に達する以前、完全な形になる前に潰す戦法を取った。

とは言え、実現するのは難しい。強化系の忍法を持つていると思われるほどの身体能力を持つている前提がなければ成立しない。並みの対魔忍がそんな真似をすれば、中途半端に形となった攻撃だけでも肉は潰れ、骨が砕けてしまう。

両者ともに自らの強味を最大限生かす戦い方であったのは間違いない。だが、雅臣の方があらゆる意味で一枚上手だった。

不利な状況、能力を逆に生かす位置取りと立ち回り。

常に相手の全力を出させず、自身の得意を押し付ける戦術の組み立て。

そして、他を圧倒する近接格闘技術。

一般上がりでありながら、肉体的にも精神的にもこれほどまで戦えるなど、類を見ない才気だ。対魔忍であろうともこの域に辿り着けるのはほんの一握りと断言できる。

雅臣が五車に迎え入れられてどれほど時間が立ったのか知らないが、自身よりも鍛える時間も覚悟を決めるまでの時間も圧倒的に少なかったはずにも拘わらずこの結果。

結果は他者の言葉や如何なる過程よりも圧倒的に雄弁。だからこそ紫も素直に認めざるを得ない。

「申し訳なかったな——いえ、申し訳ありませんでした、龍造寺先輩。私は愚かなほどに貴方を侮っていた」

「いやあ、普通じゃない？ 生まれた時から対魔忍になるために努力してきたんだから、そういう人からしてみたらさ、オレみたいなのは馬鹿にされてるって思うでしょ」

「その言い分も一理はありますが、落ち度は落ち度です」

「うへえ……こっちの八津先生と同じですっごい真面目だあ」

己の過ちを認め、心からの謝罪を口にする。

それだけではない。これ以上の非礼は晒すまいと立ち上がって深々と頭を下げた。

最大限の謝意と敬意が形になった行為に、雅臣は思わず頭を掻きながら困惑した。

元一般人だからと馬鹿にされるなど慣れたもの。事実、馬鹿にされても仕方ないと思っているし、逆に幼い頃から対魔忍として生きようと決心した者からすれば自分の存在など業腹極まりないと考えている。

彼にしてみれば、紫の行為はする必要のない行い。それでも頑なに押し付けられては受け取らざるを得ない。

何処までも生真面目で、頑固で、自他共に厳しい。その根底にあるものが、優しさ故だとも知っている。

疑っていたわけではないが、雅臣は此処でようやく目の前の紫が、自身の知る紫と何ら大差のない存在だと受け入れるに至り、思わず苦笑いを浮かべるのだった。

「ずるい……ブラフに、忍法……こつちが気軽に忍法を使えないの知っているのに畳みかけてきて……それにあんな手まで……」

「当然だ。不平等な現実だけが平等に与えられている。生まれも育ちも状況も能力も、何もかもな。お前はまだ恵まれてる方だ。だから泣き言なんて口にするな。対魔忍だろ？」

日影は口では厳しい言葉を吐きながらも、へたり込んだ自斎に手を差し伸べる。

小太郎が言葉にしないまま、彼女の教育を承った彼なりの配慮だ。

自斎は先程までの訓練を思い出し、練度の違いを嫌というほど思い返す。

自らの能力でありながら、自分以外の何者かの力を借りるという点において、自斎と日影の忍法は確かによく似ている。

それでも、これほどまでの差が生まれたのは才能ではなく当然の帰

結。自らの力と向かい合って鍛え上げたか、目を背けて逃げ続けてきたかの違いに過ぎない。

余りの実力の違いに、元々後ろ向きな性格である自斎はより一層、自身の不甲斐なさを悔やんでしまう。

例え、人でなくとも、言葉が通じなくとも。

自己が何をすればいいのか、相手が何をして欲しいのかを理解しあっている。

日影と操る式神の信頼関係は本物。然したる指示もないままに繰り出される連携の苛烈さが何よりも雄弁に物語っていた。

複数の式神による波状攻撃を前に成す術もなかった。

手数が違う時点で不利、更には数を相手にする以上、対応は相手が動く度に一手、二手と遅れていく。

その遅れに付け込むように、生まれる意識の解れほつに向けて、容赦なく日影自身の一撃が挟り込まれる。

影の中に貯蔵している武器の数々ばかりでなく、武器を取り出す行為そのものが自斎に猶予を与えると判断すれば素手で格闘を挑む果敢さ。

一対一、集団戦、忍法の練度、武器の扱いから遠中近全てを想定した戦いの組み立て方、忍法を考えれば後方支援や潜入任務、破壊工作でも問題なく熟せるだろう。

何処を切り取っても高い能力で纏まった万能選手オールラウンダー。その上で、他者にはない唯一性を持つ真に求められる特化型。

格が違うとは正にこの事。

元々自覚のあった自斎は、追い詰められると危険を承知で神遁の行使へと踏み込もうとした程だ。

相手が教育と考えている以上、自身の全てをぶつけねば非礼に当たる。かつての彼女であれば決してなかった選択肢であったが——
——今は一人ではない。

エウリュアレー襲来に際して知った油断も隙もない小太郎であれば、危険に対する術の一つも用意してあると信じていた。

自らの理想に極めて近い対魔忍、井川 日影。今日出会ったばかり

であつたとしても、その実力に対する衝撃と感動はある種の信頼を抱かせるには十分過ぎる。

苦渋ではなく決意によつて選択した方針は——結局の所、何の意味もなかつた。

神遁の行使。もつと具体的に言えば、バイザーを上げて、相手を視界に収める。たつたそれだけの行為が、日影の前では成立しない。

次々に喚び出される式神に加えて、式神自らが日影を視界から遮るように動くばかりか、日影自身も視界から外れるように動き続ける。

成す術がない。自斎の置かれた立場はそう表現する他はなく。歴然とした実力差によつてじりじりと追い詰められた挙句、一撃すら入れられずに敗北した。

「勉強になつたら？」

「ああ、嫌というほどな。やはり、私はまだまだ未熟だ」

「本当に、紫さんの言う通り」

被害を被らないよう少し離れた木陰でのんびり観戦していた小太郎は、欠伸を噛み殺しながら二人に告げる。

予期していた結末、分かり切つた結果、確定していた最後。それほどつまらないものは他にない。

日影と雅臣を部下とした小太郎にはこうなることは最初から知つていた。何せ、自斎と紫の得意とする分野、特異性そのものの上位互換に等しいのだから。そして、少女達の反応もまた予測の範疇だった。

苦い敗北を喫しながらも目に曇りはない。寧ろ、強固な意志の輝きが瞬いていた。

得意分野における上位互換との遭遇。人の反応は二つに一つ。全てを諦めて目を逸らすか、それとも克己と共に立ち向かい続けるか。少なくとも、二人の選択は後者だった。

元々克己心も向上心も強い紫は勿論の事、明確な目的を持つ自斎にとつても、分かり易い目標であると同時に越えるべき壁。落ち込んで

いる時間などありはしない。

その表情に、雅臣も日影もまた表情を引き締める。

先を行く者として恥じぬ背中を。そして、そう易々とは追い抜かれはしないという強い自負心。

妬みも嫉みも、恨みも憎しみもない。あるのは相手への尊重と敬意。

相手を陥れようとも、足を引っ張ろうとも思わない。純粹かつ単純に相手の上をいく強い意志。

其処にあつたのは、発展と消費を旨とする現代社会が理想とする健全な競争関係だ。

全て、小太郎の思惑通り。

まるで孫悟空を弄んだような釈迦のような有り様だ。

偏執的なまでの猜疑心から、出会う全ての者の過去を知り、本人すら自覚していない性格や瑕疵、反応を想定した上での行動。これもまた彼らしさだ。

ただ、思惑通りに動かされた人間に不快感はない。相手が何を許すのか、何を許さないのかまで考え抜いているからだろう。

「さて、じゃあ早速実験開始だ」

「いや、待て！ 私はお前に護衛として雇われた身だ。やれというのなら従うが……」

「うへえ……オレは兎も角、井川も獅子神も八津も疲れてると思うけど」

「オレも問題ない。それよりも本気ですか？ こんな状態で、危険すぎるでしょ」

「ええ、井川先輩の言う通り。ただでさえ制御が効かないのに、いま忌神を呼び出したら確実に……」

木陰から出た小太郎は、頂点に達した太陽の光に目を細めながらそう告げた。

瞬間、彼以外の全員が顔を顰めた。どう考えても正気の沙汰とは思

えない。

忌神の危険性は皆が十分に聞き及んでいる。

自斎が裸眼で捕らえたものを、ただの肉塊に成り果てるまで叩き潰す以外には何も分からない超常存在。

実戦形式の訓練で彼女だけではなく、紫も体力を消耗した状態。前者はただでさえ制御の効かない忌神を僅かでも抑えておく事すら儘ならず、後者はまだまともに戦えまい。

雅臣にしろ日影にしろ似たようなものだ。

消耗の度合いは二人に比べれば圧倒的に少ないものの、ゼロではない。

生誕、経緯、思惑、能力の一切が分からない正体不明の神相手であれば、防衛や逃亡に徹するにせよ、万全の状態であることが望ましいのは疑う余地はない。

だが、小太郎は肩を竦めながら四人の考えを否定する。

「馬鹿言え。今が寧ろチャンスだ。獅子神は消耗している。てことは、神遁を発動させられる時間も少なくなる」

「ああ、成程。文字通り、神としての格が違う。似てはいるがオレのは消耗も桁違いだろうな」

「神や自然霊として、それだけこの世の法則から外れてるんだらうよ。顕現できる時間が少なくなれば、こっちや周囲への被害も必然少なくなる。トータルで諸々考えても、逃げ回るだけなら今が一番リスクよりもリターンの方がデカい」

「ほんつとお、よく考えてるよなあ」

「リスクマネイジメントもこっちの仕事だしな」

常に先を考えて、自らにとって最も利のある選択を歩む。

それぞれの訓練は能力の向上や目標の提示だけでなく、今日の本命——即ち、自斎の神遁を視線殺しで抑えておけるか否か——を見据えていた。

抑え込みに成功するのならば良し。

これで自斎は今まで以上に周囲と馴染め、協力する術や生き方を学ぶことはできる。

才気もあれば、努力にも前向き。頭の使い方を知らないだけで、決して悪くはない。自身が時折、言葉をかけてやるだけで急速に成長するだろう。

抑え込みに失敗してもまたよし。

顕現時間が短縮しているのなら、雅臣と日影がいれば十分に抑えておける。最悪、暴れる忌神が顕現できなくなるまで逃げ回ればいいだけの話。

そうなった所で、得られる事実は値千金。忌神に関して僅かばかりでも情報を得られれば次に繋がる。正体を探るヒントを得るにしても、能力として扱うにしても必要不可欠となる。

どちらに転んでも彼にとっても自斎にとっても美味しい話にしかない。

「でも……」

「怖気づいてんのかよ。そういうことなら初めからオレに頼るのやめてえ？」

「御託も葛藤もいいから。オレは命を賭す覚悟はしてるが、捨てるつもりは一切ない」

「ま、安心しろよ。オレは目の前で仲間を死なせるつもりはないから。でも、やりたくないならやらなくてもいいよ」

「任せておけ、獅子神。何が起きても、貴様を傷つけさせはしない。無理強いするつもりはないがな」

自斎にこれから起きる結果は分からなかったが、これまで起きた結果が脳裏に鮮明に蘇る。

典型的なPTSDによるフラッシュバック。それほどまでに目にしてきた現実と両親ですら見捨てた事実は彼女の精神に深い傷を負わせていた。

バイザーから覗く顔色は蒼白。呼吸は浅く過呼吸気味。手足は震

えて、思うように動かない。

そんな彼女を前にして小太郎は何を今更と呆れ気味に、日影は時間の無駄と吐き捨てるように告げる。

小太郎は兎も角として、日影のうんざりとした態度で分かりにくいのが、言葉そのまま受け取るのなら哀れな後輩のために命を賭けると言っていた。

対照的に雅臣と紫は自斎を勇気づける言葉を口にしていった。

背中を押す意図などまるでない。怖いのなら逃げて構わないとも語っている。

自身の能力で苦しむなどとんと経験がない故に、二人には自斎の気持ちは本当の意味で理解など出来ない。だからこそ、逃げ道を用意してやる人間も必要だと考えているのだろう。

自らと向き合う事の重要さを厳しき共に語られ、投げ出してしまうのも一つの手と諭されて、自斎は揺るぎかけた決意を再び固めるには十分すぎた。

小太郎は本心からの言葉であったが、それぞれの異なる優しさの触れた彼女の歩みは決定した。

これまでのただ生きるだけの歩みではなく、恐怖を抱えながらも暗闇の荒野に挑まんとする特別な歩み。人はそれを勇気と呼ぶ。

「やるわ。お願いします……っ！」

自斎の宣誓と共に、雅臣が一步前に入る。

紫が消耗している今、単純な力と技で忌神を抑えておけるのは彼だけ。

今の彼は攻撃を受け止めるための盾であり、あらゆる攻撃を無効化する城壁そのもの。

「余り無理するなよ」

「わーってるよ。どうにもならなくなりそうだったら退避一択。手足をもがれても逃げろ、だろ？」

「ならいい。死んだら殺す」

「はは、そんじや死ぬワケにはいかねーな」

口調も体勢もあらゆる意味で自然体——ながらも凄まじい気迫と集中を見せる雅臣のすぐ後ろで日影もまた両手を開いた状態で構えを取っていた。

式神以上の戦闘能力を誇る雅臣がいる以上、自身の能力を最大限発揮するのは支援サポートと知っている。

一秒でも長く忌神を抑え、一秒でも長く雅臣の命を紡ぐ。場合によつてはこの場に居る全員の撤退を支援する。多芸かつ多彩な影遁を持つ彼にしかできない役割だ。

「貴様は下がっている、役に立たん」

「そうさせて貰う。逃げるのもオレが一番最初だからな？」

「全く、貴様と言う男は、臆病なんだか命知らずなんだか……」

「成程、お前の疑問も尤もだ。だが、その二つは不思議な事に何一つ矛盾しない」

二人の更に後ろで、紫は自らの役割を果たすために斧を構えて一歩前に出る。

別段、小太郎を守つてやりたい訳ではない。確かに恩義を感じているし、感謝もしているが、八割方は自斎のためだ。

何もせず、不平不満ばかりを口にするすくたれ者ならば、馬鹿者としてと正論で捲し立てて終いだだが、それがどれだけ小さな一歩だったとしても、自暴自棄ではなく勇氣と共に踏み出した一歩であるのなら彼女は決して笑わずに貶さない。

紫は規律を優先する優等生と思われがちだが、アサギへの態度を見れば分かる通り、それ以上に情が深い。

僅かな時を共に過ごし、どうしようもない部分を見てきた小太郎に對してすら、親しみや信頼を抱いているほど。

そうした自分が、時に非情に徹さねばならない対魔忍として相応し

くないと思つてゐるからこそ、他人にも自分にも厳しく接しているに過ぎない。そうした仮面が外れば、残るのは現実的でありながらも優しいだけの少女が残る。今は、その部分が顔を出しているのだ。

そんな中で小太郎だけが人の後ろに立って半分逃げの姿勢。

何か事が起これば、紫すら盾にして逃げる気満々であつた。これはこれで彼らしいし、人間らしいと言えるが、コイツも大概クソ野郎である。

「……………」

自斎は瞼を閉じたまま、一人で居る時以外には決して外さなくなつたバイザーを取り外す。

緊張から心臓の鼓動だけが嫌に響き、原生林の其処彼処から聞こえる筈の鳥の囀りや虫の鳴き声、木々のざわめきすら遠い。

今こうしている間にも、忌神が齎した被害が瞼の裏で鮮明に蘇つていく。

潰れた肉塊と化した大人達。悲鳴を上げる幼い日の友人達。諦めと絶望の目で己を見る両親。

肉と骨が潰れる音が聞こえる。圧力に耐えられずまろび出た臓物の匂いが鼻腔を刺激する。口の中に入った血の味を思い出す。

その全てを退けて、受け取つた眼鏡をかける。

指先に震えはなく、動作に淀みはない。恐怖に打ち勝つのに大層な覚悟は必要ない。

それを既に彼女は学んでいた。自分よりも遥かに弱いはずの小太郎が、弛まぬ努力と覚悟を以てエウリユアレーに立ち向かつた。凜花も、きららも、自身よりも遥かに強大な存在へと戦いを挑んだ。

誰の胸にも恐怖はあつたはず。ならば、どうして立ち向かえたのか。

言うまでもない。僅かな克己と勇氣、そして——他者の存在があれば、人は恐怖になど決して負けないのだ。

「……………ああ」

精一杯の勇氣と他者への信賴、全てを台無しにする覺悟を胸に、自齋は瞼を開く。

漏れたのは感嘆の吐息。

自齋の視界は忌神の視界と重なっており、当人にも説明できないが確かに見えている。

ただ、やはり生の光とは本来の視界とは微妙に異なるように見える。とても人間の言葉では表現しきれない。

だから、この感動をどう表現すればいいのか。

何年か振りに己が眼で認識する人の顔。優しい表情も、険しい表情も、何一つ感情の浮かんでいない無表情だったとしても、胸が張り裂けそうなほど、叫び出したくなるほどの衝動があふれ出してしまいうだ。

「こーれーはー……大丈夫な感じ？」

「神氣も感じ取れないし、獅子神の後ろにいる奴の氣配も増していない。成功だろうな」

「あー、そっか。井川はそういうの分かるんだ。なら心配ないな！」「ふう、全く。とんだ肩透かしもあつたものだな」

自齋にも周囲にも、何の変化も現れない。

神が顕現すれば現実歪み、法則も書き換えられていく。それが神氣によるものなのか、神の存在故なのかは分からないが、あらゆるモノに影響は現れる。

それらが一切見受けられない。

生まれ持った忍法上、僅かな神氣や氣配を頼りに探さねば新たな式神を得られない日影の弁であれば、信用に値するだろう。

誰もがほっと胸を撫で下ろし、思い思いの言葉を口にする中、一番後ろに居た筈の小太郎は我が物顔でいの一に自齋へと歩み寄っていた。

「よう、これでようやく初めましてだな。獅子神 自齋」
「ええ、そうね。これからも頼りにさせて貰うから。勿論、それだけじゃない。この恩は必ず返すわ。よろしくね、隊長さん?」

彼女を真つ直ぐと見据える小太郎の表情は、普段からは考えられぬほど優しげで、まるで何かを讃えているかのよう。

自齋は喜びの涙を流しながらも、同じく笑みを浮かべて向かい合う。彼女もようやく、彼の心に触れたような気になった。

目に映るもの全てが疑いの対象、己の意思や能力も例外ではない。そんな猜疑心だけで出来た心を持つ彼が、唯一信じるものがあるとするのならそれは人の――

「若もさ、何のかんので、ああいうの好きだよなあ」

「何がああいうのか、よく分からないが……どうだか。あの人は大概ろくでなしだろ」

「えー、よく言うー。このこのお、そういう若だから付いていつてる癖にー」

「フツ……そういうお前もな」

「ハッ、全く男どもは……素直に良かったと言えないのか。格好つけどもめ」

見守っている協力者の顔にも、笑みが刻まれている。

この日は、世間にとって何の変哲もない何気ない一日であったが、自齋にとって劇的な変化を齎した記念の日となった。

出会いからは短くとも、苦楽を共にせずとも、境遇を肩代わりできなかつたとしても、祝福は確かに此処に在る。

獅子神 自齋の歩まんとする道は果てしなく険しいが、道程は決して遠くはない。何せ、頼りになる仲間が共にいる。此処にはいなくとも挫けない心だけは、繋がっているのだから………神との対峙の時は、すぐ目の前にまで迫っている。

尤も、その前に小太郎プロデュースによる特訓特訓&特訓、死んでも許しを与えない生き地獄が待っているのだが、彼女はまだ知らない。

「えっ」

「頑張れ獅子神！ 頑張れば死ななくて済むからな！（虚ろな目）」

「気をつけろ、其処から先は地獄だぞ（死んだ魚の目）」

「全く、何を軟弱な！ あの男が課す訓練など——」

「頑張れ八津！ お前死なないからって絶対メチャクチャやらされるからな！（確信）」

「「えっ?」」

「気をつけろ、其処から先は地獄だぞ（真顔）」

「地獄の特訓を越えてきたオレの部下だ。面構えが違う（邪笑）」

「「——えっ???」」

やさしいせかい

昼が過ぎ、時は逢魔が時。

視線殺しによる自斎の神遁制御実験は恙なく終了した。

眼鏡、というバイザーに比べれば固定も甘く、戦闘時には使えない代物でこそあったが、わざわざ学校生活において顔の半分を覆う必要のなくなり、精神的、日常的な意味合いでは大きな一歩となった。

——のだが、それくらいで終わらせるほど、小太郎は無駄を許容もしなければ、万に一つを見逃す男でもない。

彼が次に疑ったのは、視線殺しの持続時間。

元々邪眼を封じておくために作成された忍の道具。経過こそ似ているが、神遁は根本が異なる以上、邪眼のように眼鏡を外すまで封じておけるとは限らない。

それ故、自斎、紫、雅臣、日影の四名に日暮れまでの間、経過を観察するように言い渡し、本人は何処かへ消えていった。

偶の休日と言えど、猜疑心も異常であれば、抱えた仕事の量も異常な男の事、家や部隊、雇った部下を放っておいて、自分だけ遊び惚ける事だけはまずない。

その点に関して、付き合いの長い雅臣や日影は勿論の事、付き合いの短い自斎や紫も信頼している。

死んだとしても許しを与えない訓練を己に課しているか、悪態と共に血反吐を吐いているか。

二週間の安静生活で溜まった山の如き書類を片付けようとクソデカ溜め息を吐いているか。

ナディアの教育と国の調整に向かって、余りの仕事量に絶望しているか。

独立遊撃部隊や家の今後についてプランニングして、険し過ぎる道筋に頭を抱えているか。

アサギにあらたな無茶振りをされているか、白目を向いているか。九郎に泣きつかれ、乾いた笑いを浮かべて引き受けているか。

余所の家からイチヤモンをつけられて、ブチ切れながら解決に奔走しているか。

彼等彼女等でもこれだけ思いつく。嫌な信頼もあつたものである。

当人が聞けば、目を背けている現実を突き付けられて、まーた変な妖怪にジョブチェンジするだろう。

それはそれとして、彼はもう一つ言い残したことがあつた。

持続時間を調べるだけならば、やる事は周囲に人がいない状態でただ待ち続けるのみ。任務上の待機や待伏でない以上、それだけでは限りある時間をただただ浪費していつてしまふ。そんな無駄を彼は許さない。

よつて彼が命じたのは基礎訓練。

戦闘訓練では眼鏡が不意に外れる恐れがある以上リスクが高過ぎるが、単純に身体を鍛えるだけの訓練であればリスクが激減するメリットがある。

基礎や地力を高めるだけでも十分な脅威。小太郎としても、下手な搦手や策を弄されるよりも、圧倒的な身体能力フィジカルによるゴリ押しが最も厄介と称している。ある種の信仰にも近い彼なりの結論だ。

事実、今代の最強たる井河 アサギ、先代の最強たるふうま 潤共に、他とは隔絶した身体能力を有している。

アサギは生まれ持った忍法の関係上、高い身体能力は必要不可欠。隼の術を半端な肉体で用いれば、過負荷に耐えられず内側から崩壊して死亡する。

そも、同じ隼の術を使えたとしても、光と称される域に足を踏み入れるにはアサギや尚之助レベルの身体能力がなければ実現できない。

潤に関しては、彼女の強さを支えるのは圧倒的な身体能力フィジカルであり、忍法について語られる事は少なく、そもそも知る者すら稀なほど。

ふうまの古強者である心願寺 幻庵、二車 又佐、八尾比丘尼が口を揃えて、世界全ての命をただ殴るといふ行為で死滅させられる、と称するほど基礎と地力を高めた暴力の化身。

当人も、異能や忍法など生まれついでたの絶対的な強者である己には不要と語り、それらは弱者故に頼らざるを得ない特異性に過ぎず、自分以外の連中は好きに使えばいい、と嘯っていた。

余りにも傲慢——しかし、何よりも酷いのは、彼女の言に何一つ間違いはなく、単に事実を語っているに過ぎない事か。

小太郎自身、それほど強さに興味関心のある性質ではないが、必要性は十分に理解している。

対魔忍内部における、強さや忍法だけが評価の基準となっている現状に呆れて物も言えないが、強いに越したことはないのは事実。

どのような任務であれ、敵に襲われる可能性もあれば、買った恨みを晴らそうとする輩に対応するためには必要不可欠な要素。

問題なのは、強さに物を言わせた猪染みた行動や思考停止して罠に嵌る迂闊さであつて、彼も強さという基準そのものを疎かにも軽視してもいない。

そのための基礎訓練であつたのだが——

「……………ヒュー……………」

「……………ぜひ……………ぜひ……………ぜひ……………ぜひ……………」

「……………傍から見ると惨いもんだな」

その日、自斎と紫は思い出した。訓練の厳しさを。

そして、二人は思い知つた。自身がどれほど甘やかされて育つてきたか。自身が自分自身に対してどれほど甘かったのかを。

自斎は原生林の草原に仰向けで倒れ伏し、朱に染まる空を眺めている。

か細い呼吸はまるで潰れかけの虫のような心許なさ。昼までは綺麗だった対魔忍装束も、今や泥と吐瀉物で汚れてしまつていた。

余りの疲労に泣き出すことも逆に笑つてしまう余裕は一切なく、ただただ光のない瞳を虚空に向けるばかり。

紫は更に悲惨だった。普段の彼女では考えられぬ話だが、草原にへたりこんで項垂れている。

呼吸器の病にでも患ってしまったかのような有り様だ。掠れた呼吸は今にでも止まってしまいそう。

対魔忍装束は破れてこそいかなかったが、泥と吐瀉のみならず血で汚れ切っている。

あんまりにもあんまりな二人の格好と有り様に、日影は見てやるべきではないと目を逸らして、盛大に溜め息をついた。もしかしたら、かつての自分と姿を重ねているのかもしれない。

一体、二人に何があったと言うのか。

何をどうすれば、単なる基礎訓練で此処までの惨状を引き起こせるのか。

やったことは単なる持久走。

何の変哲もなければ、重りを身体につける訳でもない。それこそ一般人にでも簡単にできる訓練そのもの。

それでもなお、二人にかかる苦痛と負担は半端なものではなかった。

何せ、全力疾走を日が暮れるまでだ。もう一度言う、掛け値なしの全力疾走である。

どれだけ身体を鍛えようが、どれだけ身体能力が高かろうが、出力や結果に差が生まれようと全力であればどのような人間であれ、否応なく肉体への負荷が生まれる。

負荷によって生まれた筋肉の損傷は、修復することで強く太くなる。本来の機能を越えた量の酸素を取り込み、二酸化炭素を吐き出すことで心肺は強化され、持久力に繋がる。

まるで陸上競技の短距離走選手が見せる、僅か十秒で全ての体力と培ってきた経験、鍛錬全てを燃やし尽くすが如き疾走。

それを数時間もの間、延々と続けていたのだ。完全に正気の沙汰ではない。そもそも、そんなことを続けられるように人間の身体は出来ていない。

本来は不可能な所業を続けられた要因——それは、日影がこの場に居たことだ。

速度という点で劣っていた紫は半ばで脱落。以後は、原生林を引き摺り回されて、雅臣の忠告虚しく全身紅葉卸しなってしまった。

丈夫な対魔忍装束でなければ今頃素っ裸。持久走が終わった頃には、皮膚と言う皮膚がズル剥けのずた袋といった有り様で、彼女でなければ死んでいる。

横で眺めている事しかできなかった自斎は肉体だけでなく心に大きな傷を負う始末である。

「だから言つたら。其処から先は地獄だつてな」

「……む、無茶苦茶、だ」

「じ、地獄……本当に地獄……！」

(……地獄の……地獄の一丁目どころか、まだ入り口に入ってもないんだが、黙っておこう)

疲労は相当なものであろうに、紫は何とか呼吸を整えて初め、自斎は瞳から失われていた光が戻り始めている。

並みの対魔忍であれば、言葉を話すことすら儘ならないであろうに、大した体力と回復力であった。

かつての同じ目に合わされた己や雅臣も初日を終えた時に此処までの元気はなかった、と日影は思わず感心していた。

感心から緩んだ心のせいで喉元までせり上がってきた言葉を飲み込めたのは奇跡的。そして、二人にとって幸福であったのか、不幸であったのかは分からない。ただ一つ言えるのは、小太郎の部下となつた初日から心を完膚なきまでに押し折られる事だけ。

そして、日影の感心はやや見当外れである。

彼等の初日はもっと悲惨だった。それもその筈、日影の式神が主に對してそのような真似をしようもない。よって、引き摺り回した人物は別に居る。

そう、ふうま宗家が誇る世界最高——否、史上最高のスーパーマルチドライバー、藤原 悟その人だ。

悟の愛車に縄で繋がれ、無理矢理走り回される地獄絵図。

直線での急加速に減速。凄まじいスキル音と共に車体を振り回す超高速四輪ドリフト。

日影も雅臣も全身紅葉卸しにされた。血をぶちまけるどころか、肉が削れすぎて骨が見え、内臓まで零れる有様だった。

なお、小太郎も同様の訓練を熟している。なお、引き摺り回したのは母親であるふうま 潤。こちらは更に悲惨かつ無残なものだった。目的に向かって突き進む潤は全身は威力。打撃技奥方様と表現する他なく、彼女の進行方向にある物体は例外なく崩壊の憂き目にあつた。

小太郎の肉体も同様であつた。衝撃に全身の骨は砕け、内臓は破裂。手足は千切れ飛び、地面に引き摺られて脳漿までぶちまける惨事であつたそうなの。

歴史は繰り返す。

親に虐待された子は、また自らの子にも同じような虐待を行つてしまふ、とはよく言うが、彼等の行動は根本が異なる。

常識外れでメチャクチャな訓練によって得られる常識外れでメチャクチャな結果を自ら体験して、否が応にも効果を認めざるを得なかつたからであつた。

「お、お前達も、こんな訓練を……?」

「ああ、やった。やらされた。効果は十分あつたがな」

「よく、続け、られました、ね……」

「別に、好きでやった訳じゃない。オレと姉貴——オレ達姉弟は、若に人生を買われてるからな」

無茶苦茶な運動によって疲労感よりも、全身が煮え滾るような熱さと筋肉と関節から伝わってくる鈍い痛みで酷く苦しい。

動くために大量の酸素を取り込み、大量の二酸化炭素を吐き出す呼吸を繰り返し、酷使した心肺は数百もの針で刺し貫かれているかのよう。

少しでも疲労と苦痛を紛らわせようとした二人は地面に身体を投

げ出して、まともに回らない思考で日影に問いかけた。

瞬間、同時に二人は自らの失敗を悟った。

日影のただで不機嫌そうな無表情が掻き消え、露骨に渋く歪んでいた。

誰であれ、触れられたくない部分を持つ。

しかも、日影が語ったのは対魔忍らしからぬ人身売買を示唆するような不穏さがあった。

それが事実であるのなら、井河一門からふうま一門へと鞍替えした理由を紫に問われ、不機嫌になった説明にもなる。

「ど、どういうことだっ……アサギ様は知っているのか……？」

「ああ、知ってるよ。言い方が悪かった。正確には、オレ達を助けてくれたんだよ、金でな」

「……………」

聞き捨てのならない科白に、紫は身体を——起こそうとしたのだが出来ず、仰向けからうつ伏せに身体を反転させ、上体を支えることしか出来ない。

普段の彼女であれば声を荒げる場面であるが、体力が回復しきっておらず、声量も控えて掠れていた。

自斎もまた驚きはあったようだが、日影の語る言葉に疑問を浮かべることしか出来ない様子。

井川家に借金があり、それを小太郎が肩代わりした——という話ではない。

単純に何があったのかだけを語れば、日影とその姉は父親に売られたのだった。

彼の父親は影縛りと呼ばれる影遁の基礎の基礎とも言える術を使えるだけのクズだった。対魔忍も大概だが、それにしたところで度を越しており、性質としては闇の住人達に近かった。

唯一違っていたのは自らの本性と弱さを自覚して、偽りの仮面を被って周囲を欺き、迎合していたこと。

影遁使いであることを利用し、数代は影遁使いを輩出していない井川家当主に近づき、病弱な一人娘——日影の母親である——を娶って二子を設けた。

長く続く家系が婿を取り入れることは決して珍しいことではない。当主は落ち目の家系に相応しい妄念と嘗ての栄光に憑りつかれており、新たな影遁使いの誕生を待ち望んでいた以上、当然だったかもしれない。

ただ、唯一見誤ったのが、仮面の下に隠した本性だ。

彼は娶った妻を愛してなどおらず、対魔忍など嫌悪の対象に過ぎなかった。

何が正義か、何が誇りか。そんなものでどうやって暮らす、どうやって飯を食う。そもそも他人がどうなるかと知ったことではない。自分さえ良ければ、それでいいだろう、と。

彼は生まれた二子が自分よりも遥かに優れた影遁使いとしての才能を持って生まれたことを確認すると、当主へと報告。

これに当主は心から喜んだ。これでようやく、長年の苦勞と忍従の時は報われる。いや、それだけではない。井河一門にとって影遁は相伝の忍法。巧く立ち回れば、一門を牽引する立場も夢ではない、と。

それから暫く経ち、病弱だった一人娘が眠るように息を引き取ると長らく考えていた計画を実行した。

周囲には突然に。彼にとっては当然に。

五車から忽然と姿を消した。まだ物心がついたばかりの日影とその姉を連れて。

その事実には井河一門は揺れた。当時はまだまだ長老衆の権限が強く、さくらに次いで生まれた影遁使いの才気はアサギから引き継がれる当主の座に付かせれば、神輿や傀儡として極めて扱い易いと踏んでいたのだ、当然だろう。

即座に抜け忍の肅清部隊が動かされたが、下手人である彼はさつきと我が子売り払って海外へと逃亡していた。現在に至っても、行方は杳として分かっていない。

井川家当主は全く理解していなかった男の本性と現実の前に心を

砕かれて廃人と化し、長老衆は逃走経路も分からない男を躍起になって闇雲に追うばかり。

これに危機感を示したのは、まだ対魔忍の総隊長として就任したばかりのアサギだった。

優秀な影遁使いの卵が闇の住人の手に渡る。ただでさえ国内での立場も危うく、戦力的にも苦しい立場である対魔忍として、何としても避けたい事態である。

だが、本音は子供が悲惨な現実には蹂躪される未来を見たくなかっただけ。己の立場としての判断ではなく、己の個人的な情による判断だ。

其処で白羽の矢が立ったのが、ふうまの内乱でいち早く寝返ってアサギの庇護下に入った小太郎、当時近代戦に特化した部隊として編成が構想され、九郎直々に自衛軍から引き抜いた古馴染みにして戦友である九郎隊の面々であった。

アサギの人は選は正しかった。

災禍と天音は重傷を負って部下のいない小太郎にとって、九郎隊は扱い易い戦力であった。

九郎隊の面々にとつて、幼いながらも闇の世界に精通し、相手の思考をトレースして追跡する小太郎は優秀なブレインとなった。

結果、彼等が辿り着いたのは一人の奴隷商人とオークション会場。

闇にどっぷりと浸かった金持ちやギャングが買い手となり、人と魔族を問わない希少価値の高い容姿や能力が売りに出される下衆と悪趣味の極みのような場所だった。

警備の厳しさから強行突破を断念。九郎隊の幾人かが買い手として潜入し、小太郎が何処からか用意した資金を元手に日影とその姉を競り落とし、無事に五車へと連れ帰ったのである。

「其処で若が払った金が姉貴と合わせて二十億」

「にっ………！」

「そんな金額、何処から……」

「知らないし、どうでもいい。ふうまから持ち出したものを売り払っ

たのか、何処かの誰かから借りたのか。どっちにしたって、オレが払わなきゃならない金である事には変わりはないからな」

その後、アサギの決定によつて二人は小太郎と共に生活することとなる。

彼女としては救出の一件で小太郎が支払った金の補填として、災禍も天音もおらず一人きりであつた小太郎の、そして父も母も失つた日影達を慮つての事であつた。

また影遁に関しては井河一門内部でしか知られておらず、一門の面々も直接確認はしていない。アサギの庇護下にある者には軽々に手出しは出来ず、小太郎も黙つていいようにやられる訳もない。既にアサギから信頼を獲得していた小太郎に任せるのは予期出来た流れだ。

こうして井川 日影と姉は、井河一門からふうま一門へと鞍替えるに至る。

相伝の忍法を扱える、と正確に認識されておらず、アサギの庇護下にあるため長老衆派も暗躍できず、訓練以外では平穩な毎日を送ることが出来た

「初めは、色々とあつたがな。今でもまあ、あの人はろくでなしと思つちやいるが、恩は恩だ。少なくとも払い終えるまでは手を切るつもりはない」

「払い切る当てはあるんですか……？」

「若の下で働いていれば、対魔忍としての給与とは別に金を貰える。災禍さんや天音さん、藤原さん達も同じだ。10年も生き延びられれば目はあるな」

「一々受け取つてから返しているのか。随分と手間を掛けるな」
「そういう金銭の管理能力やら仕事に対する責任やらを持たせたいんだろ。やること成すこと、何某かの目的や理由がある人だ」

日影は小太郎に対して何を思うのか。

好意だけではない、嫌悪や呆れをない交ぜにした複雑な表情をしたまま、寝そべったマカミに背中を預けて座り込む。

もう一匹のホロケウは、寝そべったままの自斎と紫の顔を心配そうに覗き込んでいた。

少なくとも感謝だけではないだろう。

普段の当たりの強さを見れば、天音のように盲目的に従っているわけではない。

思うところは多々あるが、日影自身の義理堅さで付き従っているだけ。感謝はある、忠義もある。だが、言うべきことは言うし、止めるべき場面は命を賭けても止めさせる。

金の話だけではない。小太郎の下で対魔忍として戦うと決めた彼なりの覚悟と信念であった。

そうした己のブレーキとしての役割も、小太郎が日影を手元に置いておく理由である。

多様な手段は言うに及ばず、多様な意見や性格もまた人の強み。自らに黙々と従うだけのワンマン集団では、己がいなくなった時に何も出来なくなる。

それでは今の対魔忍と変わりはない。それでは困る。彼が目指すのは、それぞれの能力や技能を最大限生かして同じ目的に直走る群れ。頭が潰れたとしても、手足は動く一つの軍。それこそが、集団としての一つの理想であると考えていた。

己自身も集団の歯車の一つに過ぎないという実に彼らしい結論だった。

「それじゃあ、お姉さんの方も……」

「バカ姉貴の話はするな」

「……お、おう」

自斎は今の話にはなかった部分に踏み込もうとしたのだが、日影の地雷を踏み抜いた。

姉が日影と同じ影遁使いとして小太郎の下にいるのなら、この場に

来てもいても不思議ではない。忌神を抑えるにはうってつけであったはず。

だが、姿は影も形もない。その疑問を率直に言葉にしたのだが、人には触れて欲しくない話題というものはどうしようもなく存在する。一つ弁明するのなら、自斎はこれまで人付き合いを断ってきた以上、人を慮る事は出来ても、心の機微まで察するなど無理な話。そもそも、自斎が口を開いていなくとも、紫が同じ疑問を口にしていたに違いない。

ただ、唯一救いがあるというのなら、日影が珍しく発露させた感情が前向きな怒りであった事か。

後ろ暗さや陰鬱さは微塵もない。湿度の全くない純然たる嚇怒は姉の生存を物語っており、姉を害した何者かに向けられた向けたものではなく、姉自身に向けたものであるようだ。

まるでとんでもない馬鹿をやらかした身内に向ける怒り。ただ、冷静な日影が青筋を浮かべるほどの余程な馬鹿な事をやったのは間違いない。

「あ、あー……………そ、そう言えば、龍造寺先輩はどういう経緯で対魔忍に？」

「……………余り聞いていて楽しい話じゃないし、オレが言つて良い事でもないが、説明しといてやる。お前等も、アイツの古傷地雷を踏み抜くのは嫌だろうからな」

日影の怒りに圧されていた紫は、唐突かつ露骨な話題転換に出た。怒りを発露されたままではゆっくり休めるものも休めなくなる。加えて、尊敬に値する先達と認めた雅臣がどのような人生を歩み、闇の世界に踏み入れたのか興味があった。

自分の過去を語った時点で二人が雅臣の過去にも興味を持つだろうことは予測していたのか、日影は怒りを一瞬で霧散させた。

その前置きは、雅臣の過去が己の過去よりも遙かに重く陰惨なものであると語っているようなものであったが、彼は止めるつもりはない

のか、二人の覚悟が決まるよりもはやく語り出す。

「……死レヴァ霊騎士は知っているか？」

「レヴァ……？ 何だ、それは？」

「そうか。そつちの世界じゃ、まだ本格的に活動してないのか」

「えつと、確か………エドウィン・ブラックと敵対してる種族の騎士、だとか」

「そうだ。こつちでも確認されたのは此処数年。魔族の多くが人間よりも頑丈で、生命力も桁外れだが、死霊騎士は文字通りに不死身の怪物だ。種族と呼ばれちゃいるが、性質としては意思を持った動く死リベント体に近い」

魔界には屍レイスの王と呼ばれる存在を頂点とするレイスと呼ばれる種族が存在する。

その中でも強大な力を持ち、屍の王に直接謁見し、奉仕する権利を持つ者を死霊騎士と呼ぶ。

その力は吸血鬼を下等種族と呼ぶほどであり、肉体の全てを消し飛ばされたとしても魂を基点として再生する、紫の不死覚醒すらも凌駕する不死性を誇る。

何よりも厄介な性質として、死霊騎士の生み出す瘴気はただの死体を動く死体へと変化させる。死霊騎士が行動を起こせば起こすほど、戦えば戦うほど、被害の数と範囲が鼠算式に広がっていくのである。

「アイツはな、死そ霊騎士いに全部を奪われた」

龍造寺 雅臣は明るいなながらも平凡な少年だった。

学校の成績は体育を除いて全て3。類稀な身体能力と運動神経を持って生まれてこそいたが、スポーツへの興味の無さから打ち込むような真似はしなかった。

家族構成は父母妹祖父母の六人家族。生来の明るさから友人も多く、千人規模の小さな町で生まれ育った。

色々やんちゃをしてはいたが、家族も周囲の大人達も笑って許すようなものばかりで、犯罪や世界の裏で蠢いている闇とは無縁に、そこそこ真面目に生きいた。

稀有な才能を生かそうとしない彼に周囲はやきもきしたりもしたが、真面目さと優しさに自らの意思で決定的な間違いだけは犯さないだろうと微笑んだ。

だが、残酷とは唐突に、そして人を選ばず不平等で理不尽に訪れる。

「家族も友人も知り合いも。アイツの名前を知ってるだけだった奴も、顔を知ってるだけだった奴も、何も知らなかった奴も、例外なく殺された。町一つがこの世から消えてなくなった」

「……………」

ある日、雅臣は友人と共にそこそこ発展している隣街へと遊びへ行った。

カラオケで歌って騒ぎ、ファミレスで食事をして、映画館で見たかった一本を見て、ゲームセンターで景品を漁り、友人の欲しかったものを一緒に買いに行く何の変哲もない日常。

ただ、自分の町へと帰ってきた時に感じた静けさには違和感を覚えていた。

そう大きくはない町で活気に溢れているわけでもない。若者には退屈な町だろうが、やんちゃ好きな雅臣は存外に町を愛していた。

道を歩けば親子が笑いながら手を繋いで歩き、子供や老人が微笑みながら挨拶を交わす。発展して人との関係が希薄になつてきた現代社会では珍しい、昔ながらの人の温かみと穏やかさがあったから。

虫の知らせ、嫌な予感。

呼び方は様々あるが、町へと帰ってきた彼が真つ先に感じ取ったのはそういった類のもの。

気が付けば、友人達を置き去りにして生まれて一度も本気を出した事のなかった彼は全身全霊で生まれた町を駆けていた。

自分を呼ぶ友人の声すら一瞬で遙か後方に置き去りにして、周囲が

溶けて見えるような速度でひたすら前を進む。

家への道を進めば進む度に絶望は募る。道の端には見た事のある誰かが転がっている。最短距離を突っ切ろうと乗り越えた塀のある家の中では親子が仲良く眠っている。馴染みのコンビニの自動ドアにはナニカが挟まっている。どれもこれもが、夕焼け以外の赤に染められて。

恐怖はなかった。あるのは魂を抉り抜く焦燥感と根拠のない希望だけ。

家に帰ればきつと家族が優しく出迎えてくれる。父さんは仕事から帰っている時間だし、婆ちゃんと母さんは夕飯の支度をしている。最近生意気になってきた妹だつて部活から帰つてテレビを見ているだろうし、爺ちゃんはそんな妹を猫かわいがりしてデレデレと笑っているに違いない。

家に帰つて、皆に目で見えてきた事実を伝えて逃げる。きつと出来る。奴等の動きは鈍い。父さんの車があれば、問題なく逃げられる。

『何だ、小僧………ああ、そうか。家族、という奴か。下等種族の共通幻想だな。実に下らん』

そんな淡い希望を抱いて、家へと帰つた雅臣を迎えたのは、見た事もない死人同然の肌をした男だつた。

見た事もない騎士甲冑。見た事もない虫の形をした何か。見た事もない異形の笑み。

ただ、雅臣の頭には何一つ入つてこなかった。

彼にとって重要だつたのは、男が後に知る事となる死霊騎士と呼ばれる化け物ではなく、奴の足元に転がっていた見知つたもの。

今し方、いない筈の自分に向けて救いを求めるように手を伸ばして涙を流しながら事切れていた妹。そして、それを貪り喰らっている家族だつたもの。

『貴様も偉大な屍の王の駒となれ。後ろの連中のようにな』

言われるがまま後ろを振り返れば、玄関のドアから許可もなく上がり込んでくる動く死体。

その顔は、置き去りにしてきた筈の友人と全く同じものだった。全て間違いだった。

友人を置き去りにして家族を優先すべきではなかった。冷静に判断していれば、せめて友人だけは救えただろうに。

休日だからと遊びには行かず、偶には家でゆっくり家族で過ごせばよかった。そうであれば、誰か一人でも守ってやれたかもしれない。町にいるだけでもよかった。いち早く異変に気付いて、何か出来ることはあったかもしれない。

何よりも目の前で起きている現実こそが、最大の間違いだった。

『ぶっ殺してやる』

瞬間、彼の口から出たのは絶望の呻きではなく、腹の底から出た本音。

煮え滾る怒りに反して、何処までも冷徹な響きを有した純然な殺意。

其処から先の事は、雅臣自身よく覚えていない。

ただ必死になって、目の前の何かが動かなくなるまで殴り続けたことしか記憶にない。

踏み躪られた幸福と尊厳は二度とは取り戻せないものだった。

心は完全に砕け散り、人格に変容を来してしまうほどの衝撃であったのは想像に難くない。

だが、なおも雅臣は湧き出る感情に任せて戦う事を選択した。

怒りという原初の本能。絶望に沈む者にとって最大の原動力となる感情。

それだけではない。これ以上は誰も殺させないという愚かなまでに純粋な他者を慮る気持ち。獣では決して手に入れない、知的種族の魂そのもの。

その魂の咆哮が、類稀な才能を持つ少年の奥底で眠っていた、更なる才能を呼び覚ました。

「ふうまも死霊騎士と多少因縁があつてな。色々調べて回つてたんだが、こつちに来てからいきなり動いたよう^{オレ達}で発覚が遅れに遅れた」
「で、でも、どうして死霊騎士はその町を……？」

「特に理由なんてなかったんだろ。そういう連中だ、人の命に価値なんて見出しちゃいないからな。ブラックを討つために手駒を用意したかっただけだろうな」

「なんと……」

「その後で、町からの連絡やらSNSの発信が一切なくなつたと若に連絡が入つてな。即座に動いたがもう手遅れだった。生存者はアイツだけ」

「……どう、やって」

「殺せないなら殺し続ければいい。群がってくる死体の頭を潰して眠らせてやって、俺達が到着するまでの間、元凶の頭を殴り潰し続けていた」

「……………っ」

自斎も紫も息を呑む。

それだけの真似が出来る雅臣の強さへの畏敬もさることながら、そうせざるを得なかつたとは言え、かつて家族や友人、顔見知りだった者の頭を殴り潰した雅臣の気持ちを思えば当然の反応だ。

どれほどの苦しみがあつたのか。どれほどの悲しみがあつたのか。想像すら出来ない。

二人の様子を眺めて、当然だなと嘆息する。かつては自分もそうだったからだ。

個人が背負うには重すぎる現実だ。小太郎よりも先に雅臣を発見しながら、対魔忍として生きると決めていただけの部外者でしかない己ですら声もかけられず、立ち尽くす他なかつた。

自分よりも他者を重んじる二人には、聞いただけでも重くのしか

かってくるに違いない。

気にするな、もう終わったことだと言うのは容易い。だが、それでどうなるか。現実が変わるわけではなく、気持ちが変わるわけでもない。

「おーい！ 買ってきたぞー！」

「タイムング良いんだか、悪いんだか……」

「ほいほいっと、八津と獅子神にはこれな。今日は固形のもの食べるのやめな？ 疲れ過ぎて胃が受け付けねーから。んで、マカミとホロケウにはこれだー！」

五車町の方角から突然やってきた雅臣に、ビクリと三人は肩を震わせた。

今まで何の話をしていたのか知りようもない彼は、いつもの人懐っこい笑みを浮かべて手にした袋からゼリー飲料を取り出す。

自身の実体験を交えた上でのチョイスであったが、自斎と紫はどんな反応を示しているかわからず、黙って受け取るばかりであった。

そんな二人の反応に気付いておらず、雅臣は二頭の狼に見せつけるように犬用の菓子を取り出して見せつける。

マカミもホロケウとも仲が良いのか、はたまた好物であったのか。見るや否や二頭同時に雅臣の前にお座りの体勢で尻尾をぶんぶん振り出した。

「そんなもん、この町の何処に売ってるんだよ。ペットショップなんてないだろ」

「え？ 稲毛屋」

「いや、ただの駄菓子屋にそんなものあるわけ——いや、あの婆さんなら置いてるか。で、オレのは？」

「ほい、ブラックなー。てか、女の子の前だからって格好つけてそういうの飲むのやめな？」

「オレは好きで飲んでるだけだ」

それとつてこーい、と菓子を投げる雅臣と勝手に駆けていく式神達に再び溜め息を吐きながら、自分の頼んでいたものを催促する。

分かっているながら下らない冗談を交えて缶コーヒーを投げ渡す姿は、悲惨などという言葉では言い表せない過去をまるで感じさせない。

気安い冗談も軽口も、仲の良さを表す証。

付き合いは数年であるが、随分と気安い仲になったものだ、と思わず笑みを浮かべた。

「てか、え？ 何？ 何なのこの空気？ 井川、二人イジめた？」

「するか、そんなこと。人間き悪いこと言いやがって」

「じゃあ………あ、あー、もしかしてオレのこと話ちやった？」

「ああ」

「やめろよな。二人がどう反応していいか分からなくて困ってんだろ」

「別にお前が話さなくてもいざずれは知られる。なら、さっさと明かした方がいいと判断したまでだ」

「そうかもしんねーけどさあー」

素知らぬ顔で勝手に過去を語った事実を告げる日影を横目に、雅臣は話を聞いた二人を見た。

自斎にせよ、紫にせよ。まるで辛酸を舐めたかのように顔を歪めている。雅臣の過去に対しての憤りと、それ以上に触れるべきではない過去に覚悟もなく触れてしまった己の愚かしさに憤っていた。

彼の過去を聞いた者は大抵が、引き攣った笑みを浮かべるか押し黙るか。どう反応していいか分からないのだ。

その点、二人の反応は好ましい。固まるでもなく素直に義憤を露わにし、自らの間違いを認める潔さ。

どちらも雅臣にとっては救いであった。どのような感情であれ、己を思っただけにされた感情は、全てを失った者にとって何よりも嬉し

い。まだ己には価値があると認められているようなものだから。

「ありがとな。オレのために怒ってくれて」

「……………」

「でもいいんだ。やった事も、終わった事も変えられないから」

「…………し、しかし！」

「いいんだよ、本当に。復讐なんて気にもならないし、まだ悲しいけどさ。どうにもならない事を抱えていたって、それこそどうにもならなくなっちゃう」

全てが終わわり、小太郎に保護された後に、雅臣は初めて死霊騎士について知った。

その事實は、燃え上がるような怒りすらも宙ぶらりんになってしまう残酷なものだった。

レイスなどという種族は本来存在しない。

彼等は屍の王によつて無理矢理甦らされた奉仕するための死体に過ぎず、魂こそ持つものの生命体でない。その在り方は自ら思考する人形に近い。

被害者のまま加害者になった操り人形。それが雅臣の幸せ全てを奪った存在の正体であった。

どうすればいいのか。

空虚になった心は復讐すら求めていかなかった。ただただ、悲しみだけが募るのに、涙すら流れない。

呼吸の仕方すら思い出せずに苦しみ、虚脱感から指一本動かさせない。そんな絶望の中で、再起を凶れたのは小太郎の言葉のお陰だった。

『龍造寺 雅臣。お前はオレの家に来い。オレの下で戦って、そして死ね』

『……………………』

『このままじゃ、何も知らないお前は他の連中に食い物にされる。そ

の才能を下らない権力争いに使われるのは勿体なさすぎる』

どうでもいい。考えたくない。どうかお願いだから放っておいて欲しい。それが偽らざる雅臣の本音だった。

『……………お前、才能についてどう思う?』

『……………?』

『色々と理不尽なもんだ、才能って奴は。どれだけ努力しても才能のある奴には決して敵わない。その癖、才能のある奴も欲しかった才能じゃなかったりと神も何を考えて才能なんて贈り物をしてくれるやら。意味があるように思えないね、オレには』

『……………』

『だが、与えられた才能をどう使うのかは自分で決められる。お前は どうしたい?』

面白げに、雅臣の境遇すら楽しんでいるかのような口調で小太郎は語る。

彼の瞳に憐れみはまるでなかった。その人物の人となりを其処の其処まで見抜き射貫くかの如き、昆虫染みた機能の権化たる視線。

薄気味悪さを感じるより早く、疑問が浮かんだ。

家族も友人も知り合いも救えなかったにせよ、自分は死霊騎士になどという怪物と戦えたのか。

彼の言葉を借りるのなら、意味なんてないのだろう。強くなりたくないと願ったことなど一度もない。そもそも、強かったところで救えたかどうか。

だった、この才能を自分は使いたいのか。思考すら拒絶していた雅臣の心にじわじわと薬くぐのように彼の言葉は広がっていく——

『なあ、オレが戦えばさ。オレみたいな人、少しでも減るのか?』

『減る——と言ってやりたいところだが、そんな無責任な事は言えないな。オレはお前を尊敬する。何も知らないまま、よく戦う事を選ん

だもんだ。だから、嘘は吐けないし吐かない。ただ、オレとお前の努力次第だと言わせてもらおうよ』

『……そっか』

『だが、一つだけ保証してやる』

『……なに?』

『苦労ばつかで実入りも少ない、やってられないことばつかだが——
——世界もお前の人生もまだ終わりじゃない。オレと連るめよ、楽しんでぜ?』

絶望の淵に立つ者を救うには、相手に共感してはならない。

苦しみを共有したとしても、真実の意味で人同士が分かり合えない以上、其処には必ず何らかの陥穽が潜み、やがて関係性は崩壊してしまう。

ならばどうすればいいのか。

簡単な話だ。変えられぬ過去の絶望に共に涙を流すのではない、努力次第でいくらでも変えられる未来の希望を語るべき。

助けた側が泣いていては、助けられた側も泣き続ける他ない。だが、助けた者が笑っていれば、助けられた者も何時かは笑えるようになるのだ。

「オレはもう泣かない。だから、オレの前では笑っててくれ。きっと明日は、昨日や今日よりもいい日になるって信じられる」

己が戦う事で、己のような人間を少しでも減らせるのなら。

己の心を救い、笑顔にしてくれるもののためならば。

誰かを殴る嫌な感触も、誰かに殴られる痛みにも耐えられる。

希望は其処彼処にあり、目が曇らない限りは希望も決して消えはしない。

「龍造寺先輩……」

「おっ? 尊敬してくれた? ちょっと先輩っぽかった?」

「台無しだよ」

「何をお！ 聞いてくれ、二人とも！ 今は冷静だけど、昔はコイツも酷かったんだぜ？」

「お前、そんな昔からの付き合いでもな——おい、まさかお前、おい！」

「〃悪人は嫌いだ。更地みたいな想像力と感受性で簡単に人を害する。善人も嫌いだ。悪人なんぞ許すなんて建前で、単なる事なかれ主義だろ、吐き気がする。対魔忍なんて大嫌いだ。クズを殺せば何でも解決すると思つて傷ついた誰かに目も向けずに、身内でも争いやがる。皆くたばっちゃまえ」とか言っちゃつて、そろもう触れる者皆傷つけるつて感じてさ——！」

「そ、それはまた……」

「完全に尖つたナイフ……」

「ああ、クソつ。悪かつたな、ガキだつたんだよ。誰がお前にそんな——」

若だな、あのクソ野郎っ！」

「あとお姉さん」

「クソ姉貴っ!!!」

自分でも恥ずかしくなる黒歴史を暴露され、日影は思わず頭を抱える。

菓子を拾つて食べ終わったマカミとホロケウは、そんな主人の様子を心配してベロベロと両サイドから彼の顔を舐め倒す。

そんな彼の姿に三人は思わず笑つた。

笑う門には福来る。雅臣の言つた通り、誰かが心から笑っている姿を見れば、其処に希望を見出せるようになる。きつと明日もいい日になると。

尤も、自斎と紫には地獄の特訓が待ち受けており、すぐに笑みも消えるのだが、いい日はいい日になるだろう。絶対、きつと、恐らく、多分。

「えっ」

(何も言えねえ……)

苦勞人と執事の馴れ初め

自齋達の特訓から分かれて数時間。

陽はとうに暮れ、朧月が夜空にぼんやりと浮かんでいる時間帯。

発展から取り残されたかのような五車町の街並みを小太郎と天音は並んで歩いていった。

街灯の乏しい薄闇の道であつたが、身体能力のみならず五感にも優れた対魔忍には、昼間と変わらない程度にはよく見える。何らかの悪意がなければ、足下の危険を気に掛ける必要すらない。

「悪かつたな、付き合わせて」

「悪かつたなどと仰らないで下さい。私は若の執事です。その時点で、身命は若に捧げました。どのような苦境が訪れようとも支え、地獄の底であろうと必ずお供します」

「そうか、頼りにしてる」

「——はっ」

その後、小太郎は何処で何をやっていたのか。端的に言えば、露骨な嫌がらせに付き合っていた。

五車にアサギが不在なのを良い事に、対魔忍内部で権力を持つ各銘家の長老や当主、先代達に頭目会議の行われる集会場へと呼びつけられたのである。

断っておくが、彼等にそのような権利もなければ権限もない。家の持つ権力、保有する戦力や暴力を背景に、脅して無理に呼びつけたに過ぎない。

この時点で面倒などとは思っていたものの、最近は好き放題にやり過ぎて各方面からの印象は悪くなる一方。

また独立遊撃部隊の活躍もあつて、権力欲に塗れた連中にとって小太郎は目の上のたんこぶになり始めている。

ここ等で一つ、まだまだ尻けつの青いガキアピールをしておく必要があると判断した彼は、即座に天音を呼び出した。

ゆきかぜ達独立遊撃部隊の面々は将来的にふうま一門へ入ることは確定しているものの、現時点ではあくまで部隊の一員であつて表向きには好きに動かせる面子ではない。

だが、ふうま宗家に仕える者ならば別。執事である天音を筆頭に、秘書の災禍、その後の名を連ねる悟、日影、雅臣と他数人ならば対魔忍の任務こそ優先されるものの、それ以外は好きに動かせる。

よつて、小太郎は常にアサギと彼等彼女等の任務への出向を調整しており、最低でも一人は手元に動かせる人材を残しておく。

自らの立っている位置の危うさは重々承知している。元より弾正の行つた反乱で危険視されていたし、骸佐の反乱によつて小太郎のみならず元ふうま一門の立場すら危ぶまれている状況下。完全に一人になるつもりは毛頭ない。

尤も、彼の場合は現状でなくとも一人になりはしないが。後先考えずに暴力に訴えてくるであろう獅子身中の虫もいれば、戦力差を考慮せず五車に攻めて込んでくる外敵もいる、という前提を決して崩さない。

あらゆる脅威を想定し、これらを如何にして無力化するか。異常極まる猜疑心から、そんな思考を絶やさない。天音に対して頼りにしている心底からの言葉を口にしながら、今こうしている瞬間にも天音がどう殺しにかかつてくるか、天音をどう殺すべきかを並列して思考している。

「しかし、無駄な時間を過ごしましたね。あの老害ども、若の貴重で有益な数時間を小言と脅迫で浪費させるとは……よくも……よくもお！ どういう料簡だ奴等ああああ！ 万死に値する！ 万死に値するウ……!!!」

「ちよつと天音さん落ち着いて???」

「分かりました」

(やっぱ怖えわ、こいつ)

小太郎の頼りにしているという発言に無上の喜びを覚え、頬を染めて言葉を噛み締めていた天音であったが、突如として豹変して怒鳴り声を上げる。

その声量と来たら近所の飼い犬が一斉にひゃんひゃんと恐怖の鳴き声を上げるほどであり、悪鬼羅刹も裸足で逃げ出す激しい怒りの形相を作っていた。

しかし、小太郎が諫めた瞬間、スンと無表情に戻る。

いつそ二重人格と言われた方がまだ納得する切り替えの早さであったが、彼女にしてみれば当然の事。

天音にとって小太郎の命は至上。彼の価値は、他のあらゆる価値を駆逐する。どのような命令であれ無条件で肯定し、彼が白と言えれば何色であろうが白となる。

余りの豹変ぶりに、自分を棚上げしてドン引きする小太郎。

彼も切り替えの早さは似たようなもの。発狂して叫び出したかと思えば、次の瞬間には何時もの無表情に戻る。滂沱の涙を流したと思えば、目を離れた一瞬で笑顔になっている。

精神を完全にコントロールできるが故なのだが、余人には情緒不安定の狂人にしか思えまい。

「しかし、あの愚物ども、頭が沸いているとしか思えない発言でしたね」

「毎度の事だ。アサギが近くにいなけりやあんなもんだろ」

集会場で行われたのは、小太郎に対する謂れのない糾弾と正当性のない権利の主張であった。

老害達は普段は目を光らせているアサギがないのを良い事に、最近になって突如として成果を上げだした小太郎に焦りを抱いていたのだろう。

無理もない。ヨミハラへの大打撃、ナディアという魔界の貴族にして上位魔族との新たな協定、エウリュアレーの撃退と調査部隊の救出

などの目立つ戦果に加えて、独立遊撃部隊に所属している面子は個々の能力も戦果も目立ち始めている。

それはそのまま、小太郎の作戦立案能力や部下の育成能力に秀でている事を示している。

対魔忍における評価基準の大部分は強さと忍法ありきであるが、最強であるアサギが強さのみならずそれ以外の部分に秀でた者も積極的に登用し、重要な役割を与え始めており、彼女の右腕である九郎も九郎隊結成と上げた功績を認められている。

端的に言って、評価基準が徐々にであるが変わり始めているのだ。まだまだ強さを基準とした評価は悪癖そのものであるが故に根強いが、それはそれ。諜報能力や指揮能力などもじわじわと地位を獲得しつつある。

それを肌で感じ取っている老害の焦りは半端なものではないだろう。

アサギに続く最強を育成することで家の地位を向上させようとしてきた十数年に渡る努力が無に帰すかもしれないのだ。彼等にしてみれば、何としても塞き止めた流れである。

その標的となったのが小太郎だ。

対魔忍の新たな価値観を生み出そうとするアサギと九郎の後継にして、そうした流れの先頭に立っている。下手をすれば、次期隊長候補と目される八津 紫すら抑えて候補に上り詰めかねない。

彼の足を引っ張れば引っ張るほど、今の流れを止められると本気で信じているようだ。

尤も、そんなものは都合の良い幻想だ。流れは既に出来ている。小太郎が死のうが生きようが、彼の部下も後に続く者も同じ結論に至り、同じように行動するだろう。

だが、頭の茹だった老害どもにはそれが分からない。分かりたくもなければ、分かってとすらしないだろう。

結局、集会場では弾正の反乱を筆頭に、骸佐の反乱といったふうま一門のやかしを追求し、その責を彼に負わせようと躍起になった吊し上げが始まった。

聞くに堪えない稚拙な論理と無駄に熱の籠った悪罵。余りの無駄な時間にそれらを聞き流しながら、小太郎と天音は視線だけで今夜の夕飯の献立を相談しだす始末。

弾正の反乱に関しては一門全体で責任を取ったようなもの。

ふうまの名残りこそ残ってはいるが、一門としての体を保ててなどいない。バラバラになった一門は各家でそれぞれの努力によって家を建て直している最中。

そも弾正が米連へと逃げ延びた時点で責任の所在は有耶無耶になつてしまった。アサギにしても、弾正は責めても、ふうまそのものを責めるつもりは毛頭ない。反乱終結時の時点で下つた者に対しては、財産を没収して力を削ぎ落した上で対魔忍側の家の下に組み込まれる事を条件に許しを与えている。責任はその時点で果たされている。

骸佐の反乱に関しても似たようなものだ。

名ばかりの当主にふうま一門の最大勢力に止められよう筈もない。そのような権利も権限もとうに消え果てている。

止めようとしたところで老害どもが直々に接触を禁止していた。そんな状態で反乱を止める事も加担も出来はしない。

どうせ裏で接触していたのだろう、という声もあったが、明確な証拠もなくしては単なる妄言に過ぎない。事実、小太郎は接触禁止令を律儀に守ってきていた。もし、責任を問われるとするのなら、二車の手綱を握っておけない立場に貶めた彼等の方である。

浴びせられる罵声もなんのその。言い返すような真似もしなければ、かと言つて老害の言葉を肯定もしない。

理路整然とした論拠で言い返さなかつたのは、この場において理屈も正当性も意味がなく、何を言つたところで無駄だったから。

気が狂つているとしか思えない都合の良い言葉の数々を肯定しなかつたのは、下手に肯定して後々になって難癖をつけられるのが酷く面倒だったから。

故にのらりくらりと躲すだけ。

はあ。そうですか。いやでも。どうなんですかね、それは。

やわらかい言葉での否定は、精一杯の強がり映った事だろう。いつそ不様にすら映る若造の姿に気を良くした老人達は更に馬鹿げた権利まで主張し始める。

小太郎の下に残された数少ない部下を分割して当家に引き入れるのだ。

独立遊撃部隊を率いるのはどの家の誰それが相応しいのだ。

最近、入隊したばかりの獅子神 自斎と鬼崎 きららを我が家の部隊に寄越せだの。

この場にいる誰もが、人員を勝手気ままに動かす権利などありはない。その権限を持つのはアサギのみ。

だが、弱腰に見える若造を権力と暴力を背景とした脅しで押して押して押して押せば、妄言がそのまま現実になると思い込んでいた。

『それらについてはアサギ殿に直接ご相談を。オレの意思ではすべきことではないので』

彼等に止めを刺したのは小太郎の一言だった。

その様ときたら虎の威を借る狐そのもの。アサギから信頼を得ているからこそ好き放題にできるのであって、この小僧自身に対魔忍を率いる力はないと安堵させるには十分過ぎた。

全て、全て老害も思い通りの結果であり——小太郎の引いた絵図面の完成した瞬間だ。

勝ったつもりでいるだろうが、実際のところ小太郎は何の権利も手放してはいないし、不利益を被るような発言もしていない。

彼等が自らの立場を脅かす小太郎が大したものではないと思いつまませただけ。これではアサギにどれだけ妄言通りの進言をしようとも、寝言は寝て言えとしか返ってこない。何せ、何の正当性もなければ、彼等が小太郎以上の成果を上げられる筈もないのだから。

「それで、夕餉は何がよろしいですか？ 若の願いであれば、どのような食事であっても用意してみせましょう」

「いや別に。何でもいいよ?」
「作る側からしてみれば、それが最も困るのですが……仕方ありませんね」

食事において、何でもいいは禁句である。

作る側にしても、選ぶ側にしても自身のセンスを問われ、相手の好みを考慮に入れねばならず、酷い難問と化すものだ。

しかし、天音は逆に燃え上がる。

ふうまの執事ではなく、小太郎の執事として身命を捧げた身。必ずや、主の舌を喰らせてみせよう、と。

執事がそんな事までする必要があるのかは別として、天音はやる気もやる気。これは三ツ星レストランに勝るフルコースが提供されかねなかったが、小太郎の次の一言で全ては杞憂に終わる。

「あー……それもそうか。じゃあ、天音と一緒に食える奴で」

「……え?」

「お前、執事だからって一緒に食わねえじゃん。別にいいだろ、そんなの。大した家でもなし」

とても一門の当主と思えない発言に、天音は目を丸くする。

小太郎が天音に求めているのは執事としての仕事であって、執事としての姿勢や在り方などどうでもいい。仕事さえ熟すのであれば天音は天音のまま構わない。

一門にしたところで同じ。彼にとってふうま一門などなくなつたところで困りはしない。アサギのふうま再興という命令も、当主としての責を果たそうとしているだけ。

執事足らんとする者の、ふうまを再興させようとする天音の努力や熱意を無下にするような一言だ。

だが、彼女の裡に溢れたのは、静かな歓びだった。

「……相変わらず、ですな」

「そお？ 成長はしているつもりだが、思い上がりだったか？」
「いえ、立派になられました。ただ、変わらぬものもあるものだ、と……あの時から、ずっと……若がふうまの当主でなくなつたとしても、私が執事でなくなつたとしても、ずっと御傍に。私は、若の、その……家族、ですから……」

はにかむように微笑んで、最後には頬を染めて、今にも消えてしまふような言葉を大きな照れと共に告げる。

彼女の脳裏に思い浮かぶのは、かつての出会い。敬愛する主人にして、愛した男との馴れ初めだった。

ふうま 天音は犬である。

今は小太郎を崇拜する忠犬であるが、かつては戦いのみを求める狂犬であった。

その様は二車の狂犬であった権左と大差はなく、敵味方問わずに恐れられ、悪鬼羅刹と呼ばれたほど。

笑いながら敵を殺し、己を諫めようとする味方にすら牙を剥く。狂気そのものの情熱で戦いに赴く冷徹さのない戦闘マシーン。

その理由は、幼少期にまで遡る。

彼女は生まれながらに卓越した戦いの才能を生まれ持った。その技量は実父である権正が恐れ疎むほど。

いつそ死んでしまえ、とすら考えていたのか、権正は幼い頃から戦場に駆り出し、穏やかさなど微塵もない苛烈な幼少時代を過ごす。

転機は、ふうま 弾正との出会いであった。

その強さに目を付けた弾正は、彼女を重用した。

血に塗れれば塗れるほど、成果を上げれば上げるほど、敵を殺せば殺すほどに、弾正は諸手を挙げて天音を褒めちぎった。

実父に疎まれ、遠ざけられてきた天音は親の愛情に飢えていた。自覚などしたことはなく、そんなものを求めているつもりなど毛頭なかったが、弾正から賜る称賛の声を浴びれば浴びるほど、聞けば聞くほどにのめり込んだのは、父の愛というものを其処に見た気がした。

からだ。

ふうまに伝わる対魔殺法を身に付け、生まれ持った攻防一体の邪眼「動転輪」を用い、誰よりも前に立って戦い、誰よりも殺して殺して殺して殺す。

誰もが彼女を狂犬だ、山犬だと罵ったが、実際は違う。哀れな麻薬中毒者のようなものだ。

弾正に褒められるためだけに。弾正の役に立つためだけに。より性質が悪いのは、肉体から得られる快感に根差したのではなく、精神が満たされることで得られる法悦であった事。弾正が天音の強さを称賛する以上、戦う以外に称賛を得る方法などないのだ。

けれど、そんなものは長く続かない。

麻薬中毒の末路は誰にも相手にされなくなつた拳句の孤独死と相場が決まっている。天音も似たようなものであるのなら、末路も似通うだろう。

誰の言葉にも耳を貸さず、ただひたすら弾正のために戦い続けた天音は、ある戦いで負傷を負つた。才能に物を言わせて無理に無理を重ねた無理もない結果。

負傷の原因は動転輪の暴発であった。動転輪は非常に扱いの難しい邪眼であり、この時点で天音は使えてこそいたが、使い熟せたとも極めとも言えない状態。

彼女の邪眼はあらゆるエネルギーを吸収してゼロにする。

如何なる攻撃であれ、彼女の前では無意味。単純な運動エネルギーだけでなく、熱や光ですら同様。その上、吸収したエネルギーを放つことで攻撃に転ずる事も出来た。

一見、無敵に思える邪眼だが、弱点はどうしようもなく存在する。それは吸収可能な上限が決まっていること。この範囲を越えれば、待っているのは自壊と爆散。

たった一人突出して戦っていた天音は攻撃を吸収しすぎて限られた範囲を超えた。過剰なエネルギーを肉体が爆発四散する寸前に放出して敵の一掃と九死に一生を得たのだが、負傷は免れなかった。

弾正の命を受けた医師の手厚い治療を受け、宗家の一室で療養を許

されたが、天音の心に在ったのは喜びよりも苛立ちであった。

『……くそつ。くそつ！クソがあ！』

苛立ちの原因は天音自身にも分からない。

宗家での療養など、弾正が天音を認めていなければ実現しない、これ以上ない誉。

負傷は不甲斐なくはあるが、全ては御館様の敵を排除するため。復帰の日は決まっておろ、苛立つ必要など何処にもない。

だが、心の中に澱のように溜まっていく不安はなんなのか。何一つ思い当たる理由のない事が、更に苛立ちを加速させる。

『ひええ、もうむりだ。しぬ、またしんでしまう………あれ？』

『——ああ？』

そんな折だ、小太郎と出会ったのは。

今にも死んでしまいそうな顔と足取りで、小太郎は天音に宛がわれた部屋にやってきた。

きつと母親から与えられる訓練から逃げてきたのだろう。潤による常軌を逸した訓練の数々は里でも有名で、すぐに察しはついた。

弾正の側近として、天音も当然小太郎については知っている。

弾正と奥方の間に生まれた一人息子でありながら、右目を開けられず邪眼も持ちえぬ目抜け。ふうまの里の者は大半が蔑み、弾正ですら侮蔑と罵りを与える不肖の息子。

しかし、天音が小太郎に抱いていたのは一種のシンパシーと憐憫、そして申し訳なさだ。

実父から何の愛情も与えられない空虚さは身に染みて分かっていた。

母親からは愛されていたが、天音は母親の顔を知らない。彼女が生まれると同時に死んでいたからだ。だから、母親の愛情が如何なるものなのか想像すらできなかつた。

己が称賛されればされるほどに、本来は小太郎に与えられるはずであつた愛情を横から奪つているようで、居た堪れなくなる。

だからだろうか。引退していたとは言え、紛う事なき最強から匿つてやったのは。

子供と言うものは存外に賢いもので、一度味を占めた小太郎は度々天音の下に逃げ込んできた。

母は天音と小太郎の繋がりを知らずに居たため、逃げるには最適の場所。逃げる度に訓練の内容はより過酷に苛烈になるのだが、子供である彼には関係ないようである。

特段、会話があつた訳ではない。

小太郎は逃げ込んでくれば無言で黙々と本の虫をやっており、天音は天音で何と声を掛けてよいものか分からない。

けれど、接すれば接するほど距離は近づいていく。気紛れで始まつた会話は日を追うごとに一言、二言と増えていった。

やがて匿つて貰つている自覚はあつたのか、小太郎も本を読むだけでなく天音の世話をするようになる。

全身の包帯を変え、病人食を口に運び、動けずに風呂にも入れない身体を手拭いで丁寧に拭く。

子供に怪我人の世話など重労働だろうに、嫌そうな顔一つせず、寧ろ興味深げに行動する少年の姿は、天音にとって奇異に映つた。

それでも、自身でも驚くほど穏やかな心持ちになつたのは確かだ。

——そして、転機の時が訪れた。

その日、兎に角天音は苛立つていた。

理由は覚えていないし、どうでもいい。

これまで穏やかさなど嘘のように、今では考えられない荒れた口調で部屋に入ってきた小太郎の姿を見るなり、苛立ちを思う存分にぶつけてくる。

ただ、小太郎は動じていなかった。苛立つ天音よりも、遙かに恐ろしいモノを知っていたからだ。そんな日もあるだろう、と罵る天音に言いたいだけ言わせ、部屋の片隅で本の頁を捲るだけ。

無関心な様子が更に天音の心をささくれ立たせ、決定的な一言を発

してしまった。

『テメエみたいな奴より、私の方が、御館様に——!』

『ふーん。相応しいって? そうかもね、天音はすぐあのクズをヨイショするし、いいんじゃない? あんなのの何処がいいのか分からないけど』

『——っつ!』

『怒るなよ。だって事実じゃん。天音の見舞いに一回も来ないしさあ。普通がどういいうのか知らないけど、母上はオレのことすぐ死なせるけど、怪我した時も病気の時も死なせた時だつてずっと傍にいてくれるよ。あのクズ、女のところで放蕩三昧してるんだけど、そういう目とか天音の気持ちとか気にしねーのかな? 気にしねーんだろうなあ』

無邪気で悪意がまるでないが故に、心の臓腑を抉り抜くような致命的な一言が返ってくる。

その言葉を聞いた瞬間、天音は自らの心が碎ける音を聞いた。

弾正は確かに天音を愛していた——だが、それは人や娘に向ける類のそれではなく、便利な道具や愛玩動物に向けるそれと同じもの。

優しい言葉をかけてやるだけで、命すらも顧みず戦い続ける犬。指で示しただけで、邪魔な相手を殺してくれる道具。弾正の天音に対する認識はその程度のものに過ぎなかった。

言い表しようのない不安も、根拠のない苛立ちの原因は全てが其処にあった。

天音が求めた愛情と弾正の与える愛情は決定的に違う。始めの内は盲目のまま喜んだ。次第に愛情の味に疑問を覚えた。結局、疑問は不義そのものと心の奥底へと封印して知らぬ顔をし続けた。

それでも疑問は払拭できず、こうして嫌でも認識しなければならぬ
い時がやってくる。

小太郎の言葉は何一つ偽りのない事実だった。

療養生活に入ってから弾正の顔も見えていなければ、声も聴いておらず、気配すらも感じていない。

御館様には御館様の使命があり、仕事がある。そう言い聞かせてきた天音であったが、本から顔を上げて真つ直ぐ己を見つめてくる瞳に灯っていたのが大きな呆れと憐れみであったことで、自分を騙す嘘すら信じられなくなった。

もし仮に、弾正が真実、天音を娘として愛していたのならどれだけ忙しい身であろうとも何一つできなかつたとしても顔くらいは見せに来る。そうでなくとも、誰かに言伝で労いの言葉を頼む事くらいは出来るだろう。そんなものは、療養に入ってから一切ない。

きつと弾正は、天音の事など考えもせずには笑っているだろう。

生まれた時から何でも与えられ、欲しいものは誰かに命じて奪わせる。

そんな人生を歩んできた男に、愛玩動物が怪我をしようが、便利な道具が壊れようが、また別のモノを探せばいいのだから。

自分の愚かしさに涙が流れ、思わず笑ってしまう。

身勝手な勘違いで他人を巻き込み、身勝手な思いで戦い続け、身勝手なまま終わりを迎える。それは不思議のない末路であり帰結。自業自得の因果応報、だのに悲劇のヒロインを気取って泣き喚く自分が愚かしくて面白い。

そんな壊れてしまった彼女を横目に本を読んでいた小太郎であったが、何を思ったのか。

壊れた様を憐れんでいたのか。はたまた天音の身勝手さよりも弾正の身勝手さに腹を立てたのか。それとも、泣き笑う少女の感性が己よりもずっと幼いと気付いたからののか。

横になったままの天音に近寄る、とそつと手を握る。それは病の時、母がしてくれたのと同じ行為だった。

『あんなの放つとけばいいって。オレが、天音の家族になるよ』

『は、はは………はは……』

『それじゃダメ?』

自分よりもずっと幼い少年の小さいな手と今まで感じたことのない熱を感じ、天音はひたすら当惑した。

感情はパレットの上で混ぜられた絵具のようにぐちゃぐちゃで、まともな思考など出来はしなかったが、思わず小さな手を握り返した。分かり切った反応だった。

彼女が飢えていたの父からの愛だけではなかった。逢う事もなく逝った母からの愛情も欲しかった。言わば、家族というものへの憧憬が強かったのだ。

そして、静かな喜びもあった。

なんとまあ、惨めで滑稽でみつともない話なのか、と天音自身もそう思う。

溺れる者は藁をも掴む、と言うが正にその通り。これでは、弾正という依存先が小太郎に変わっただけ。

ただ、悪意も打算もなく、よく考えてすらいない少年の言葉は、心碎かれた少女には間違いない救いだった。

『小太郎、此処ですね？』

『ぴゃー——————！！！！』

『お、奥方、様……』

『あ、あら？ あらあら？ どゆこと？』

その時、余韻も何もかもぶち壊すように、スツと襖が僅かに開く。ぎよろりとした眼球が小太郎を捕らえると、地獄の底から響いてくるような声色で瞳の主が名前を呼んだ。

その時点で小太郎は驚愕の余りにペットボトルロケットさながらに飛び上がり、自分から天井へと激突した。猫でも此処まで激しい反応はしない。

入ってきたのは誰であろう小太郎の母親であるふうま 潤であった。どうせ空き部屋で本でも読んでいると思っていた彼女は、泣き腫らした天音の姿に目を白黒とさせていた。

其処からは、天音にとつては夢のような時間であつた。

翌日から小太郎だけでなく潤も部屋を訪れるようになり、既に小太郎付きとなつていた災禍、小太郎の幼馴染も顔を出すようになる。

余りにも突然の変化に天音は困惑ばかり募つていった。そして、弾正の道具としては決して得られぬものを得た。

潤からは母としての愛を。小太郎からは家族としての時間を。災禍からは姉としての叱責と心配を。子供達からは尊敬と成長を見守る喜びを。

療養生活が終わる頃には、弾正の事など忘れていたと行つても過言ではない。

己を利用し続け、裏では馬鹿さ加減を笑つていただろうが恨み言はまるでない。そもそも、自分が勝手に思い込んで縋つただけ。恨みなど見当違いも甚だしい。だから、単に興味を失つただけの話。

全ては身勝手な妄信から始まつた事、ならば身勝手なまま興味を失つてもいいだろう。弾正として身勝手なのは同じ。それぞれの非は互いの非によつて打ち消される。

そして同時に、快気祝いとして潤から小太郎の執事となるように言い渡された。

とても正気の沙汰とは思えない判断だ。戦う事しかできぬ己を様々な役割を担い、家を円滑に回すための歯車を選ぶなど。

しかし、その時既に権左という狂犬が二車の執事として抜擢されており、前例は存在していた。何よりも、ふうまの執事でなく小太郎の執事であつて、当初の役割としてはそう大したものではなかったが故に、天音は困惑こそあつたが領いた。

其処からの彼女は正に必死。

これまでの己を消し去ろうとする勢いで、戦いばかりでなくあらゆる事柄を積極的に学び始めた。

小太郎の家族として、恥ずべき己であつてはならない。ただ、その一念だけで得手も不得手もなく、手を伸ばす。

これまで興味も関心もなかった礼節や言葉遣いも改め、家を回すための仕事を覚え、そればかりでなく料理や洗濯、裁縫などの家事まで

も。

『そうそう、そういうのでいいのよ。最後には全部無駄になるけど、それは自分にとっては、というだけ話。必死になって積み上げて、後は後進に任せればいい。何の心配もいらぬ、私達はいつでも安心して人生の幕を引けばいい。人間ってそういうものよ』

『奥方様、素がでてるぞ……でてます』

『あらやだ私ったら！ おほほのほー!!』

気が付けば、天音は執事として何ら問題のない能力を身に付けていた。

そればかりではない。小太郎と共に修練に励む最中、潤からのアドバイスや僅かな切欠で動転輪の完全制御までもを可能とした。

こうして、天音は誰に恥じることもない小太郎の執事としての己を獲得したのであった。

その後、弾正と会う機会があつたが会話は殆どなかった。

天音から言うべき事は既がない。かつては勝手気儘に慕つた負い目はあつたものの、己を道具として扱うのならば、尊敬も敬愛も不要だろう、と。

弾正は口を開きたくとも開けない。あつたのは、瞳に宿つたのは歪な執着。それもまた天音に向けられたものではなく、己のものを横から奪っていた小太郎への嫉妬であり、潤への恐怖。

天音が正式に小太郎の執事となつた折の出来事は、彼女自身は全く分からない。ただ、泣き腫らす天音とこれから訓練だ死ぬまた死ぬと白目を剥いたまま状況を説明する小太郎を見た潤が、弾正の側近数名を勢い余つて殺したとだけ聞いている。恐らく、最強らしい力で権利をもぎ取つたのだ、と推察するのは容易かつた。

以後、天音の人生は常に幸福に満ちていた。

潤が亡くなる直前、後は任せるといふ言葉を受け取つた時も。

弾正の反乱の際にも、小太郎を五車の隠れ里へと逃がすべく、三日三晩戦い続けた時も。

戦いに敗れ、拷問のような責め苦を与えられた時も。

救出された後、片腕を失うばかりか、長いリハビリの中にあつた時間でさえ幸福だったと断言する。

心にあつたのは小太郎の言葉であり、潤や災禍といった彼と同じく家族となつた者との生活が、陽の光の如く輝いていたから。

「御言葉に甘えて、御一緒させて頂きます。他の皆がいなのは残念ですが……」

「任務やら訓練やらあるからな。でもまあ、ゆきかぜとかもそうだが、天音のそういう周りと共有しようとするところは助かるよ」

「……………？ 家族なので、当然では？」

「そうか」

今こうしている間も幸福で満ち溢れている。

どうやら、彼女の中では小太郎に近い者は皆家族であるらしい。最初に家族というものになつたのが小太郎だから、小太郎が集めた者は皆家族、という理屈であるようだ。

嫉妬が存在していないわけではない。独占欲というものは当然、彼女の中にも存在する。

だが、共有できる幸福があるのなら共有すべきとも考える。共に涙を流し、共に笑い、共に苦しみ、共に生きる。それが彼女にとっての家族というものだから。

そうして、天音は頬を染めながら、最初に家族というものを感じさせた小太郎の手を生身の手で握る。

もう二十の半ばだというのに、どうにも子供のような所作で小太郎を求めてしまうことに照れを覚えたものの、天音にとっては掛け替えのない一瞬。気にしていられない。

そんな思いを受け取ってか、小太郎は何も言わず天音の手を握り返す。

その顔に刻まれていたのは、かつて見た時となんら変わりのない無邪気な――

「死が皆を分かつまで、つてか？」

「いえ、死んでも一緒です。誰も逃がしません。若も逃がしません、死んでも（真顔）」

「ヒエッ」

チヨロインが多いのは事実だけど、実際一番ちよろいの苦労人

小太郎宅に戻った後、程なくして夕飯がテーブルの上に並んだ。

メインは金目鯛の煮つけ。切り身やまるまる一尾を使うのではなく、干物を使ったものだが、下処理は丁寧に行われ、砂糖の代わりにハチミツを使った甘さは舌に優しい。

副菜は春菊と人参の白和え、汁物は玉ねぎとしめじの味噌汁。若い小太郎の舌に合わせて、いずれも濃い目の味付けがされていた。

かつて隆盛を誇った一族の主と執事の食事にしては、些か以上に佳しい食事。まるで冷蔵庫の在り合わせで作った一般家庭のようなインナツプであるが、料理についても一流の天音が手掛ければ、味に不足などある筈もない。

「御馳走様でした。何か、また一段と腕上がってない？」

「お粗末様です。ふふ、当然です。一流の料亭で身分を偽って短いながらも修行してきましたから」

(どうして忍の技能をそういうことに使っちゃうの???)

味に五月蠅いわけではなく、食事は栄養摂取と割り切っているが、どうせ摂取するなら美味しい方が良くという小太郎。

加えて、災禍や天音に手料理を振舞われており、舌も肥えている。ハチミツによる味付けもしっかりと気づいていた。効率主義でこそがあるが、無駄を無駄という理由だけで切り捨てる男でもなく、違いの分からない男でもない。

率直に天音の腕前が向上した事を指摘すると、返ってきたのは花が咲くような笑みととんでもない事実。

若のためならえんやこら。クソほど忙しかろうが無理やり時間を捻出して腕前を磨くなど、正に執事の鑑である。

ただ、小太郎としてはオレのために其処までと天音の心遣いに感動すべきなのか、オレのために其処までと技術の無駄遣いに呆れるべきなのか分からない。

夕餉は、談笑を交えながらの互いにとって久方ぶりの穏やかな時だった。

美味い方がいいが、食べればそれでいいという小太郎。自分の腕前は若の舌を唸らせるものであつて自分が楽しむものではない天音。それぞれが食事自体に対してさほど思い入れのある方ではないが、唯一共通するのは誰と食べるか、重要視という点。少なくとも、二人にとって顔を付き合わせて同じ食卓を囲むのは掛け替えのない幸福であつた。

「では、片付けますね」

「オレもやるよ」

「いいえ、こればかりは譲れません。ゆつくりとお茶でも飲んでいて下さい」

執事服を脱いでいた天音は急須で小太郎の湯飲み茶を注ぐと、小太郎が止める間もなく立ち上がって食器をテキパキと片付けていく。テーブルのすぐ後ろにあつた流し台に音もなく食器を並べ、デフオルメされた可愛らしい犬の刺繍が施されたエプロンを身に付けると食器を洗い出す。

執事としての仕事を奪われなくなつたのではなく、激務に次ぐ激務、様々な難題を抱えた小太郎を少しでも休ませたいのだろう。当人として様々な任務や執事の業務を熟しているであろうに、呆れるほどの献身だ。

しかし、疲れなど微塵も見せない。

事実、天音は疲れなど感じていない。今の一時は肉体的な疲労を吹き飛ばすほど精神に活力を与えてくれたからだ。

鼻歌交じり食器を洗う後ろ姿に、小太郎は呆れたとも喜んでいても取れる笑みを浮かべる。

普段は優秀だというのに、小太郎自身の事となれば狂犬に豹変する。かと思えば、二人きりでいる間は何処にでもいる女性と変わらぬ姿を見せる。

辟易させられる事は度々あるが、こうした穏やかな彼女と共に在れるのであれば、必要経費と割り切れる。そして、己のようなロクデナシを好きだと慕う女と過ごす時間は何ものにも代え難い。

「……わ、若っ?!」

「何だよ、驚かなくてもいいじゃないか。それとも嫌か」

「い、嫌ではありませんが……」

その後ろ姿に溜まらない愛おしさを感じた小太郎は、思うままに行動する。

天音の願いを全て無視し、気配を殺して近寄ると脇の下に両手を滑り込ませて抱き締める。

突然の出来事に天音は裏返った声で悲鳴のような声を上げる。動揺は本物で、危うく洗っていた食器を落とすところだった。

何をされているのかすぐに理解できたのだろう。頬が紅を差したように朱に染まり、慌てて後ろを振り返った。

意地悪げな笑みを浮かべて更に腕へと力を込める小太郎と目が合うが、天音は肯定することなく、かと言って拒絶もせずにはされるがまま。

「ま、まだ、洗い物の途中ですから……」

「いいじゃないか。別に後でも出来る。でも、こうして触れ合える時間は限られてる。だったら、そっちを優先してもいいだろ」

「そうかも、しれませんが……あつ、んっ♡」

形ばかりの叱責の声には力もなければ、覇気もない。

相手を諫めなければならぬ立場と理由もあるが、当の本人がそれを望んでいないのは明らか。

それに気を良くした小太郎は、天音の華奢ながらも鍛え上げた身体を弄り始める。

胸や股間のような露骨な部分ではなく、胎や脇腹といった直接的でないにせよ、どうしようもない愛撫の動き。

快樂と呼ぶには余りにももどかしい刺激ながらも、小太郎の欲情と愛情を同時に感じ、天音は甘い声を出しながら全身を震わせる。

女を求められる愉悦に、女としての価値を肯定されているかのようで途方もない優越感が湧き上がる。

一方で、深く深く愛し合った記憶が蘇り、何度も何度も教え込まれた小太郎の男を求めて、女の本能が一瞬でマグマのように煮え滾る。

「あつ、あつ……耳、弱いから……♡」

「天音が欲しいな。身も心も、全部。オレにメチャクチャにされるドMなどころも、年甲斐もなく思い切り甘えてくるところも、また欲しくなった」

「わ、若あ……ん、んんっ……♡」

耳を甘く噛まれ、耳朶に舌を差し込まれると、天音はそれだけで立っっていられないほど膝を震わせる。

普段の背筋をピンと伸ばす凛とした立ち姿など微塵もなく、内股に太腿を擦り合わせる姿は、執事には程遠い。

耳元で囁く声と共に、顎を掴まれて後ろを向かされる。

天音の瞳もまた欲情で濡れており、あらゆる準備が整っている事を告げていた。

そして、今度は己から唇を求めた。執事ではなく、一人の女として、一匹の雌として小太郎が欲しいとせがむように。

唇と唇を触れ合わせるだけの、まるで子供同士のするような稚拙なキス。

それだけで、天音は誰が見ても頂きに達したと察するほど腰を大きく

く震わせた。

徐々に、徐々に。弱火でじつくりと煮込むように、互いの思いと欲情を交換し、理性を蕩かせていくが――

「誰か来たな」

「そのようですね」

「何だよ、いい所だったのに」

「少し見て参ります」

家の外に現れた一つの気配に、男と女の本能は瞬く間に強固な理性の仮面で隠れてしまう。

互いにすっかりその気だったと言うのに、驚きに値する切り替えだった。尤も、小太郎は不満たらたらの表情であつたが。

今の今までこれから与えられる快樂と愛を期待して、濡れていた瞳は何処へ行ったのか。伶俐な光を宿した天音の瞳は乾ききっている。

大切な一時を邪魔された怒りすらなく、ベストとジャケットを着込むと玄関へと向かつていく。今、彼女の頭にあるのはふうま宗家の邸宅を訪れた何者かへの応対だけ。

誰かが訪れるにしては遅い時間とは言いが、そこそこの関係では二の足を踏む時間帯。

そして、チャイムを押すでもなく敷地に入るだけ。何かあると思うのが普通だろう。

老害共の手先が小太郎の粗でも探りに来たか、対魔忍以外の勢力が五車に潜り込んだのか。どちらにせよ、小太郎にとつても天音にとつても歓迎すべき事態ではない。

内情を探られようとも別段問題はない。諜報や隠密として家人に気配を悟られる程度の手合いに腹を探られたところで痛い部分にまで手は届かず、それ以上の手合いであつたとしても対策は無数に取つてある。

ただ、放っておく事も好ましくはない。

体面上、舐められたところで問題はないが、実力と人員を舐められ

るのは問題である。

小太郎は大した小僧ではないが、その部下が厄介。そう思われているのが理想的だ。そうであれば小太郎自身が動き易く、優秀な部下が周囲にいると分かっていれば相手方は直接的に手を出し難くなるからだ。

しかし、戦闘が始める気配はない。

本当に客人だったのか、と肩透かしを喰らった気分の小太郎であったが、次に疑念が浮かぶ。

今日、誰かを招く予定などなかった。ならば、予定外の来訪者は何者なのか。思い当たる節はない。

アサギや九郎といったトップの面々であれば、小太郎の邸宅に仕掛けられた罠の存在を知っているが故に、事前に連絡を入れる。

災禍やゆきかぜと言った近しい人間かと言われても、それは違う。彼女達はこの家の合い鍵を持っており、敷地に入って棒立ちになることなどない。

ならば、誰なのか。

訝しみながらも、天音が客人として応対しているのなら、少なくとも悪意ある存在ではないか、と考えつつも懐の拳銃の位置を確認して居間にある四人掛けのソファに腰を下ろす。

いずれにせよ、彼には待つことしか出来ない。ならば、慌てず騒がず、かと言って警戒心も緩めずに待つだけ。

「若、御客人です」

「ああ、分かった」

それから暫くして、天音が戻ってくる。

客人を扉の外へと待たせているのだろう。僅かに視線を廊下へと向けている。その視線は明らかに客人に対する心配を向けていた。

小太郎は返事以外を口にせず、居間から客間へと移動しようとしたが天音に片手で制される。そのままでもいい、ということだ。

天音が小太郎の許可なく客を招き入れるのは珍しい。

執事として、客を上げるか否かの判断は主人に委ねるべき。まずは客人の名前を告げ、主人に指示を仰ぐのが普通だ。

その上、来客用の部屋に通さず、主人のプライベートな空間に招くなど、いつそ異常事態ですらある。

いよいよもって客が何者かを読めなくなった小太郎は珍しく困惑を見せるが、疑問はすぐに氷解した。

「――入れ」

「……………」

天音に促されるまま、居間に入ってきたのは紫藤 凜花だった。

専用の対魔忍装束を着の身着のままであるを見るに、甚内からの謹慎命令が明けた後に何らかの任務へと従事してきた帰りと言ったところか。

人並み以上に身嗜みを気にする彼女にしては珍しく、髪は好き放題に跳ねて乱れており、額に浮かんだ汗に前髪が張り付いている。

何よりも目を引くのは、何かを堪えているかのような表情。見ている方が取り乱してしまいそうなほど落ち沈んでいた。

「では、若。今日はこれで失礼させて頂きます」

「あ、あ……………そうか。御苦労さん、ゆっくり休んでくれ」

(凜花、頑張れよ)

「……………ッ」

天音は客人を上げるだけ上げて、もてなしの用意すらせずに自分だけがろうとしていた。

確かに、仕事を終えるには良い時間帯。

老害からの妨害で共に生活できず、任務以外での接触は週に数度しか許されていない以上、切り上げ時としてはちよいどいいかもしれない。

だが、本来の彼女であれば考えられない行動だ。主人の世話もそこ

そこに、客人の歓迎すらしないなど執事の名折れ。

それはつまり、天音はいま執事としてではなく、個人としてこの場に立っている事を意味していた。

主人よりも先に休みを貰う不敬を、恭しい一礼と共に詫び、天音を踵を返す。

帰る場所はアサギの計らいで小太郎の身に何らかの危険が迫れば即応できる距離に位置し、災禍と共同生活を送っている一軒家。

その場を去る直前、彼女が言葉を送ったのは主人である小太郎ではなく、成長を遠くから見守ってきた凜花だった。

簡潔で何のアドバースにもなっていない背中を押すだけの一言であつたが、俯いていた顔を上げさせるには十分すぎる。その瞳に宿っている光を確認すると、天音は僅かな嫉妬を抱きながらも笑みを浮かべて去っていった。

残された二人に会話は無い。

痛いほどの沈黙が下りたが、それぞれの様子は全く異なっていた。

平然とした表情で口火を切るのを待つ小太郎は観察するような視線を向けるだけ。

対する凜花は、何事かを口にしようとはしているのだが、本人の意思の問題なのか、言葉が出てこずに視線を彷徨わせ、俯くを繰り返していた。

臍の前の両手の指が組まれては解かれて所在なさげに揺れている。不安と焦りが滲み出ているかのようだ。

「……まあ、何だ。突っ立ってるのも何だから、座れば？」

「……ええ」

(…………ええ、オレの隣じゃなくて他の所に座って欲しいんだけど)

このままでは埒が明かないと判断した小太郎は、少しでも凜花をリラックスさせようとソファに座るように促した。

だが、彼女は何を思ったのか、四人掛けのソファ以外にも一人掛け

のソファが二つもあるのに、小太郎の隣に腰を下ろした。

小太郎としては、必要ないと分かっているながらも警戒心を嫌でも高めねばならず、辟易とせざるを得ない。

しかし、凜花は隣に座りこそしたものの、口を開こうとしない。相変わらず、己の裡で渦巻いている何かと戦っているかのよう。

重苦しい空気と沈黙が支配する居間に、なけなしの勇氣と共に声が上がったのは、それから暫く経ってからだった。

「……今日は、」

「ああ、突然どうかしたのか？」

「その……私を、独立遊撃部隊に入れて欲しくて……」

「そりやまた。任務の時も言ったが、随分と都合の良い話だ」

凜花の口から発せられたのは、小太郎の予想通りの言葉だった。

新たに独立遊撃部隊に配属となった自斎にせよ、きららにせよ、それぞれの思惑はあれども根底にあるのは小太郎への好意だ。

エウリュアレーの襲来に際して振るった辣腕は信頼に値し、性格そのものは警戒しなければならぬ闇の住人に近い性質を有しているが、自ら裏切るような真似はしない。

小太郎に対して一際強い思いを抱いている凜花であれば、配属を願っているのは分かり切った事だった。

それでもなお、彼は凜花に対して辛辣な言葉を投げ付ける。

全ては事実。あの任務でもう二度と会わないのなら兎も角、今後も付き合っていくのならなあであれ終わらせる訳にはいかない。

何に問題があったのか。本来は何をしなければならなかったのか。あの場における最善とはなんだったのか。

目を逸らしたくなるような現実であれ、目を背けてはならないものはある。反省と改善とは常に起こしてしまった現実を直視し、もう二度と同じ未来を発生させないという強い意思の下でのみ成しえる事柄だ。

失敗自体は許容する。彼は成功よりも失敗の数の方が多い。故に、

問題視するのは失敗それ自体ではなく、何の反省も改善もせず同じ失敗を繰り返す愚劣さである。

ただ、自斎やきららに比べれば、凜花への態度は多少好意的ではあった。

少なくとも二人よりは筋を通してしている。アサギに進言して独立遊撃部隊に配属して貰う方法は、人員の配置を決める権限がアサギにある以上、決して間違いではない。ただ、筋が通っていない。

もし独立遊撃部隊に入りたいのなら、隊長である小太郎にまずは話を通しておくべき。何よりもまず、先だつての失敗を謝罪してから全てが始まる。それが失敗した者の筋の通し方だ。

年若い二人は、年相応の生き急ぎ方で最短距離を突つ切つた。責任を取るとは、地味で全うなもの。その言葉の真意を、まだまだ理解できていない。

その点、凜花は精一杯の勇気で筋を通そうとしている。

どれほどの罵倒があつても、どれだけの厭悪があつたとしても、彼女は決して折れないだろう。

その覚悟があるのなら、目をかけてやるだけの価値はある。どんな現実も受け入れて、今回の失敗を次の機会に生かすことが出来るから。

——そして、そうした建前の裏に隠された本音にも小太郎は気付いていた。

「都合がいいのは分かつてる。小太郎なら、そういうつて思つてた。だから、私は私に出来ることをやるだけ」

「口だけなら何とでも言えるさ。お前は——おい、泣くなよ」

「…………ごめん、なさい…………ごめんね…………」

「…………別に、謝つて欲しいわけじゃない」

不意に、凜花の瞳から大粒の涙が零れた。

新雪のような長い髪に隠されて表情は窺い知れなかったが、膝の上に置いた手の甲には何粒もの涙が止まることなく落ちては弾けてい

た。

小太郎も、凜花が今回の失敗に対して謝罪しているわけでないのは気付いている。

それでもなお気付かない振りをしていたのは、彼女の謝罪に意味などなく、とうの昔に終わった話を引き摺っているに過ぎなかったからに他ならない。

「ごめん……ごめんね……小太郎の、一番辛かった時に、何もしてあげられなかった……一緒に、居てあげること出来なくて……」
「……………どうしようもなかった。それだけだろ」

彼女が口にしたのは、もうどうしようもなくなった過去への悔恨。

最愛の母を失い、自らの行いによって災禍も天音も二度とまともな日常生活を送れないのではないかというほどの重傷を負って、小太郎は明確に変わった。

開く左目は底の見えない虚のような色を帯び、見えるものも見えないもの何一つ例外なく疑いの対象。その在り方は人のものとは程遠く、怪物と言っても差し支えない。

そんな彼の変化に耐えられず、一度は恐怖から逃げた。時が経つに連れ、恐怖は後悔に代わり、今もこうして彼女の心に暗い影を落としている。

余りにも見当違いで愚かしい謝罪と後悔に、小太郎は呆れも笑いもしなかった。見当違いで愚かしいが、余りにも眩しく穢れのない悔恨だったから。

彼の言う通り、どうしようもなかった。彼に変化がなかったとしても、傍にいたことなど不可能だったろう。

二車家の辿った道を見ればそれは明らか。名ばかりになったとは言え、かつての主君筋とそれなりの戦力を保有した傘下が共に在ることなど、対魔忍の権力者が造反と決起を警戒して許すなど有り得ない。

彼女の父である甚内とて同じ判断を下した筈だ。どれだけ凜花が

共に在る事を望もうとも、周囲はそれを許してはくれなかつただろう。

「そんなもの、言い訳だわ……方法なんて……」

形振り構わなければ、方法はいくらでもあつた。

父の判断すら無視して会いに行けばよかつた。家を守るために勘当を言い渡されるだろうが、そうなれば家の縛りから解き放たれる。長老衆も家ではなく個人の付き合ひであれば警戒する事はなかつたに違いない。

何なら、それこそアサギに頭を地面に擦り付けてでも助けを求めればよかつた。彼女の情に脆い性格を考えれば、どれだけ諫めの言葉を口にしようとも、凜花の純粋な願いを決して無下にはしなかつたと確信している。

けれど、そんなものはもう遅い。

幼いながらも頭の片隅にあつた考えを押し込めて、現代いまにまで至っている。

小太郎の変化に耐えられない恐怖、小太郎に拒絶される恐怖から蹲り、目を閉じ、耳を塞いで何もしてこなかつた。恐怖に立ち向かわず、逃げ出した結果。それが全てであり、後悔の源でもある。

「いいんだよ、別に。どうしようもなかつた、それで済ませれば」

「小太郎は良くても、私が良くない……私が、私を許せないの……」

「……………どうして？」

言わせるべきではない。これ以上を聞いてしまえば、自分は引き返せなくなる。何よりも、凜花まで己の事情に巻き込むことになるのではないか。

それでも小太郎は問わずにはいられない。

この余りにも愚かしく、余りにも純粋な思いを向ける少女の悔恨を消し去るにはその方法しかなく、その悔恨を認め、愛でてやれるのは

己以外には存在しなかったから。

「小太郎のことが、好きだった、から……ずっと、ずっと、大好きだったから……」

「……ああ、くそ」

「ふふ。やつと、言えた。小太郎は、嫌だった？ 小太郎から逃げた女に、こんな事、言われて」

幼い頃、小太郎は遊ぶ時には誰よりも笑い、誰よりも先頭に立って皆を引つ張って振り回した。

その癖、誰かが付いていけずに歩き出すと、何時の間にか隣に立って共に歩む、そんな少年だった。

当時から周囲の目を考えて行動する打算に塗れた性格だったのか、元々はそうした当たり前の優しさを持った少年だったのかは分からない。

そんな事はどうでもいい。

それが本来の彼でなかったとしても、幻滅などしない。

彼を好きになった以上、あくまで彼を信じ抜くまで。人が変わってしまったとしても新たな魅力を発見して、ただ共にあるだけ。それが、凜花の望む女の在り方だった。

泣きながらも微笑む凜花の言葉に小太郎の口から漏れたのは、聞くんじやなかったという悪態だった。

「好きって言われて嫌なのは、極度のイカれか心がねじくれてる奴だけだ。オレは其処までじゃない」

「なら……許して、くれる？」

「元々お前を憎んでもいなけりや怒ってなんかない。でも、お前が言って欲しいなら言うさ——許すよ。オレは凜花の全部を許す」

本当にこうした事には弱く、ちよろい男である。

ゆきかぜにせよ、凜子にせよ、紅にせよ、きららにせよ。他人の事

はちよろいちよろいと言いながら、実際の所、当人が一番ちよろい。自らを好きだと囁る相手の瞳に、何の嘘偽りもなければ。

心の奥底まで見通して、打算はあつたとしても真実の愛情があつたなら。

相手の本気に応えずにはいられなくなり、自らもまた本気になつてしまう。

其処に打算も計算も計画もない。猜疑心や在り方が後天的に魂へと刻まれた癖ならば、これは先天的な魂の形とも言うべき本能だ。

凜花の涙を拭つてやり、手の甲で頬を摩る。

掌で触れなかつたのは、愛しく思つた物だからこそ、壊れ物のように扱いたくなる心理だ。

「……いいの？」

「オレはいいよ。お前の方こそいいのか？ 甚内は許さないだろうに。もう、家には帰れないぞ」

「……嬉しい。家の事は仕方ないわ。紫藤の嫡子として、あるまじき行いだもの。でも、いいの。好きな人と一緒に居られるなら」

「物好きだな。それに、他の女にも手を出してるの、知ってるだろ？」

「ええ、勿論。お互いに勝手よね。でも今はとても幸せだから。今は、これに浸らせて？」

「ああ、分かったよ」

頬に触れる手の甲の感触だけでは物足りなくなった凜花は、掌を合わせて握り締める。

面倒な家の束縛も。惚れた相手が自分以外の女と愛し愛されていることすらも関係ない。歪であろうとも確かにある幸せ、それが今の彼女の全てだった。

流れる涙も既に悲哀と後悔から幸福と歓喜へと意味合いが変わつていた。

鼻が触れ合いそんな距離で互いの瞳を見つめ合い、嘘偽りのない確かな感情を確かめ合う。

吸い込まれるように僅かにあつた距離すらゼロになり、唇が触れ合つた。

「ついさつき、天音とこうしたばかりなんだが。我ながら最低だな」

「ええ、本当。でも、最低なのは私も同じ。お似合いよね」

「そうかあ？ そうかなあ？」

「そうよ」

「なら、遠慮しない。今日、凜花をオレが女にして、オレの女にする。可愛いところも恥ずかしいところも全部見て、頭の天辺から爪先まで全部オレのにする」

「ほ、本当にしちゃうの……？」

「ああ、するよ。凜花が泣いても絶対に止めない、許してって叫んでも止めない。顔も頭の中もぐちゃぐちゃになるまで、男はオレの事しか考えられない女にするからな」

「あ、ああ……んくっ……あ、シャワー、それに電気も……！」

「もう遅い」

「ひ、酷い……んんっ——♡」

任務帰りで汚れた身体や匂いを落としたいという乙女心による僅かな抵抗すら無碍にして、小太郎は身体の上に覆い被さる。

酷いと口にした凜花であったが、その瞳はどうしようもない期待と欲情で濡れており、何度となく生睡を飲み込む始末。

——夜闇の中、邸宅から煌々と漏れる光に交じり、女の幸せを叫ぶ歓喜の声と雌の快樂に咽ぶ啜り泣きが響くのに、そう時間はかからなかった。

苦勞人の部下はまだいるぞ！　なお色物もいる模様！

「旦那様、お迎えに上がりました」

小太郎と凜花が結ばれてから明けて翌日。

太陽が最も高い位置に移動した頃、居間に一人の女性がやってきた。

誰もが彼女に抱くであろう第一印象は、奇妙なちぐはぐさだろう。顔立ちは日本人のそれだが、異様に白い肌は黄色人種にそぐわず、髪色も染めてもないだろうにプラチナブロンドという異質さ。

ボブカットの髪型に違和感は覚ええないが、肉感的な身体を隠すように来ている服は純和製の割烹着。

それぞれのパーツは一致や調和とは程遠いが、不思議なことに全てが一つとなると混沌と整然が両立した美しさが生み出されている。

歳の頃は二十の半ばと言ったところで、奇妙な容姿に反して落ち着いた印象を受ける。

「昨夜はお楽しみだったようですね」

「そりやもう、思う存分な」

「あらまあ、ふふっ」

女性は誰がいるのかなど知らなかったが、小太郎の醸す空気になんかあったのかを悟ったのか。微笑みながら揶揄いの言葉を投げ掛ける。

小太郎は慣れっこなのだろう。気にした様子すらなく、自分で淹れたコーヒーを啜りながら、素直な感想だけを口にした。

彼女も小太郎の事情は知っているのだろうが、男としての不誠実さを隠そうともしない態度に、寧ろ嬉し気に笑みを深めるばかり。

「ですが、タイミングは悪かったようですね。出直しましょうか？」
「いや、永久とわが来たってことは、あっちが完成したんだろ。行くよ」
「宜しいのですか？ お相手は寂しがりますよ？」
「夕方までぐっすり寝てるよ。それまでには帰ってこれるだろ。すぐ出るぞ」

「旦那様の相手をしたのですもの、当然ですね。承知いたしました。それでは参りましょう」

こうした会話は日常茶飯事なのか。

乱れた女性関係を構築している小太郎に諫めの言葉すら掛けず、寧ろ肯定しているかのようだ。それでいて、小太郎ばかりを肯定しているわけではなく、相手をした女性に対する気遣いも忘れていない。

彼女の名は骸むくろ 永久とわ。

元は一門の者ではないが、小太郎の誘いで侍女としてふうま宗家――厳密には小太郎に仕えている。

付き合いは雅臣よりも長く、日影よりも短く、新参とは言えず古参とも言えない。参入した時期も数少ない小太郎の部下の中でもちようど中間程度になる。

ただ、小太郎への心酔ぶりは天音や災禍に負けずとも劣らないだろう。一挙手一投足全てが小太郎のため、と言わんばかりの態度であった。

小太郎が一息でコーヒーを飲み干してソファから立ち上がると、永久は居間の扉を開けて待つ。

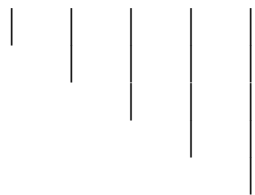
彼にしてみれば、侍女として手の届く範囲にしているものの、人目のないところで此処までまでやる必要はないと思っただけだが、彼女のやりたいようにさせておく。

当主としてあるまじき考え方だが、あらゆる切り替えの早い彼のこと、そのような考えを持っていても、人前で襪履を出しはしないだろう。

永久を引き連れて、家の廊下を歩いていく。

向かう先は五車学園の地下。建設された独立遊撃部隊の本部がようやく完成したのだ。

永久が小太郎の傍にいなかったのは、その手伝いをしていたから。待っているのは頼りになる自らの部下達であった。



「で、なーんでお前がいるんですかねえ……?」

「別にいいでしょ、どうせ私も使う事になるんだから」

「ま、いいですけどね」

「ふんふん、ふふーん♪」

五車学園にある校舎の直下。

地下50mに位置する鋼鉄製の廊下を、三人の男女が歩いていた。

一人は言うまでもなく部隊長である小太郎、そしてその後ろで決して小太郎の影を踏まぬように歩いている永久。

この光景は小太郎宅から変化していない。変化したのは小太郎の隣。ふわふわとした金髪をツインテールにした少女——鬼崎きららが豊かすぎる胸をゆっさゆっさと揺らしながら歩いていた。

紅とセンザキ市での調査任務から戻った彼女は、学園で彼とばったり出会った。

自斎の方はどうだった、まさかと思うけどイジめてないでしょうね、と出会うなり色々な詰問を繰り返す彼女であったが、顔はもうニッコニコであった。

慣れない任務を終えて帰れば、気になる彼が待っていた。成程、乙

女としては違和感もなければ無理もない心境である。ただ、分かり易過ぎる。今など鼻歌を歌いながら、スキップでも始めそうな勢いで、本人にそのつもりがなくても私は上機嫌ですと宣伝して回っているかのようだ。

隣の小太郎など、いや、小太郎でなくともこの格好で激しく動いてもなお大きすぎる乳房が零れないのが不思議でならないだろう。

流星は実戦に耐えうる高性能工口衣装と一部でまことしやかに囁かれている対魔忍装束。作成者である内源 賀平のスケべ心ねいが籠り過ぎている。

（―――で、この人誰？）

だが、突如として真顔に戻ると、小太郎に耳打ちしながらきららは初対面の永久について問い詰めてきた。

小太郎の周りには彼女の目からしても魅力的な女性が多い。

幼馴染のゆきかぜ、凜子、紅、凜花。彼を支える秘書の災禍と執事の天音。何かと目をかけている自斎。後見人としても対魔忍の頭領としても絶大な信頼を得ているアサギ。ぱっと思いつくだけでもこれだけいる。

ただでさえエウリユアレーの一件で好感度がだだ下がりと感じている彼女としては、これ以上魅力的な女性が増えても困ってしまう。

そして、彼女は決して認めないだろうが、僅かな会話から距離感が縮まったり、彼の事情を知ることを期待しているのだ。

何とも言えないじらしさだった。

小太郎の周りの女性に対して無駄な対抗心を燃やさず、コツコツとした地道な努力で関係を深めようとしている。

実際、きららとしても仲のいい友人や知り合いと険悪な仲になどなりたくはない。気になる男の子を取られるのは嫌だが、それとこれとは話は別だった。

立派なハーレム要員ぶりに、思わず小太郎ハーレム推進委員会のゆきかぜ会長もにつきり。名誉顧問であるアサギはサムズアップを決

めているであろう。

小太郎の女性関係を知れば、きららなど怒髪天を突くか、卒倒してしまいそうなものだが、二人揃って大丈夫だ、問題ないと真顔で答えるに違いない。

「ウチの侍女」

「骸 永久よ、よろしくね？」

「は、はい。鬼崎 きららです。よろしく」

「ふふつ、可愛らしい」

(この人、ちよつと苦手かも……)

小太郎は内心で心底めんどくさいと想いながらも表情には出さずに偽る必要性も隠す必要性もない故、簡潔に答えた。

耳打ちの内容が元より聞こえていたのか。それとも小太郎の言葉に反応しただけなのか。

今の今まで一言も喋らなかつた永久から唐突な自己紹介を受けて、きららはどもりながらも何とか返事をした。

まるで自らの内心を見透かすような鈴を連想させる笑い声に、きららは苦手意識を持ってしまう。

何となくであるが、こうした何事も面白がっているような飄々とした人物は、どうにも苦手だった。

正に暖簾に腕押し、糠に釘。どれだけ強気に出てもするりと躲されるか受け流される。自分の何もかもが通用しないような錯覚に陥ってしまう。

何より、こうした人物への苦手意識が加速したのは、エウリユアレーの本性を知ってからだ。

世界の全ては己の遊び場。殺そうと襲い掛かってくる強敵は楽しい遊び相手。如何なる艱難辛苦も楽しみと共に乗り越える。本気でそんなことを信じているし、事実として笑いながら実行していた。

その底の知れなさはきららには到底理解のできないものであり、どれだけ強くなろうとも決して底は見通せない。

それは自らの信じてきた「強さ」の価値観が崩れている証左であつた。

生まれ持った才能と単純な強さを追い求めた努力。それさえあれば、人とは生きる時間の異なる魔族ですら敵ではないと信じていた。だが、エウリユアレーは違った。元々、自力に大きな差があつたのは事実だが、例え差がなかつたとしても単独では決して倒せなかつたはずだ。

僅かに触れた魔術の深淵は、彼女の才能も努力も無に帰すほどの厄介、見識の深さと知識の総量は戦いを有利に進めるための道標となる。

難しい言葉ではなく、分かり易く肌と魂で理解した。このままでは、まだ見ぬ難敵と当たつた時に負けるのは自分の方だ、と。

しかし、きららはそれを前向きに捉えた。

このままでは負けるのなら、これから変わればいい。そのチャンスを得られたのは幸運だつた、と。

そのための指針として小太郎を選んだ。単純に好意だけで独立遊撃部隊に配属を願つたわけではないのだ。

あの状況下において、強さを数値化した場合、小太郎が最も低い位置にいたのは疑う余地はない。

それでもなおエウリユアレーを追い詰めたのは他ならぬ彼だつた。

きららの信じる強さとは全く異なる異質な強さ。作戦を立案する発想力、指揮のための思考力、底などありはしない猜疑心から構築される慎重さと準備の良さ。

今の自分に欠けている部分を学ぶには、小太郎自身を見て学ぶのがいい、という判断だつた。

きらきらとした子供でありながらも確かな覚悟の光を宿したきららの視線を向けられ、おおよそ正しく彼女の内心を把握していた小太郎は表に出かけた呆れを何とか飲み込む。

彼にしてみれば全てが当然。どれだけ強かろうが警戒と準備は常に必要。あのアサギでさえ、強さでは圧倒的に優位な立場にありながら、追い詰められる場面は多々あるのだ。そもそも、きららや多くの

対魔忍が信じている強さなど、その都度ブレる。

その日の気分や体調だけで身体能力も忍法も異能も魔術も威力や効果は上下する。状況によっては意味がなくなるものもあれば、相性によっては不利にもなる。その上、知識や科学技術で無効化されてしまう。

そんなものに頼りきるなど、彼にしてみれば狂気の沙汰。

恐竜が一つの環境にしか適応できなかった故に滅んだように、それではいずれ間違ひなく死ぬ。生き残りたいのならば、可能な限りの手段を何一つ満足する事無く集め続けべきという結論に達している。

きららは一つサンプルケースとして、そして好意の対象として小太郎を求めていた。

逆に小太郎はきららを伸びしろのある戦力として捉えており、放っておくと敵の手に堕ちかねない保護対象であるが改善するつもりがあるだけ見込みはあるとして見ている。

つまり、利害は一致している。片や嬉し気に、片やうんざりとしながらであつたが、心境が違ふだけで相手の傍にいなければいけない点に関してズレがないのは事実であつた。

「うわあ、校舎の下にこんなところあつたんだ」

「あつたんじやなくて作った、ね。独立遊撃部隊を設立するにあつて校長に頼んでおいたのよ」

「へえ、やるじゃない、アンタ……………?? 何か変な匂いしない?」

「気のせいだろ、新築は匂いが違うしな」

「うーん、なんか違う気がするけど……………ま、いいか」

鋼鉄製の廊下を抜けた先に待っていたのは、広い格納庫だった。

白く塗られた金属の壁は真新しく、天井は三階建てのビルくらいならばすっぽりと収まってしまっただろう。

入口から近場には、きららも乗った事がある人員輸送のための軍用車両が一台。他に一般車両が数台が並べられておいてある。

いずれも装甲、ガラス、エンジン部や足回りも小太郎の回収した米

連や魔界技術によって強化、改造されており、歩兵の持つ携行火器は勿論の事、日本における暗闘に投入されつつある多脚戦車の砲撃にも直撃であっても一発までなら耐えられる。

更にその隣にはエウリュアレーの一件で乗り、悟からデリヘル号などという不名誉なあだ名をつけられた最新鋭機「影狼」の姿もあつた。これだけの広さがあれば、悟でなくとも自動操縦によって外へ出る事は容易い筈だ。

それ以上にきららが気になつたのは微かに漂う異臭だ。

鼻腔を掠めるほんの僅かな不快な匂い。違和感を覚えるほどではないものの、人として絶対的に気に止めておかなければならないような本能を刺激してくる香り。

ただ、小太郎に簡単な説明をされてすぐに納得する。信じられないほど素直になつたものだった。

「て、あれロボット？ あんなもの五車にあつたっけ？」

「建築やら機械の整備用だ。対魔忍のじゃない、ふうま宗家の私物だ。正確にはオレの部下が作つた私物、だがな」

「へえ〜、何から何まで最新鋭、か。アンタ、どんだけコネ持つてんのよ」

「可能な限り全てを。コネにせよ金にせよ、それも力だ。持つていて損はない」

「成程ね——んん？」

きららが次に目を付けたのは、車両や機体の周りをぎこちない動きで整備を行っているロボットであった。

近年、人口知能とロボット工学の発達によって、何らかの形で人類社会に貢献する自動機械が開発され始めている。

専ら米連が開発中の戦闘ドローンが主であり、今後は徐々に防衛や警備へと移行し、建築や医療の分野など一般に出回るのは当分先の話だ。

ただ一点珍しかったのは、形状が多脚型ではなく人型であつた点

か。

ロボットは人型よりも多脚型である方がよほど合理的だ。

物を跨ぐ、床の異変を予測して回避、咄嗟の重心移動。人が感覚で行っている行為をプログラムで組むのは膨大な時間が必要となり、そもそもが歩行するための機構を作り出すだけでも膨大なトライ&エラーが必要となる。

であれば、重心バランスの確保を容易にし、床の異変をもともしない多脚型に移行するのは当然の結論。用途が変わらず、開発時間の短縮に繋がり、開発費を低減できるのならそちらの方が合理である。

工学系に対する知識がまるでないさらには、格納庫で動き回る人型がどれほど異常な物体であるのかを、そして本当にロボットなのかという疑問にすら至っていなかった。

そもそも、機体の陰からのつそりと現れた更に異常なものへと目を奪われている。

「何あれ？ 熊？ なんて忍獣がこんなところに……？」

現れたのは、一頭の熊だった。

別段、対魔忍においてはそう珍しいものではない。

古来、忍は犬や鳥を使って諜報や連絡を行ってきた。現代の忍である対魔忍も対魔粒子を宿す熊や蛇を戦闘要員として育成を行っている。でなければ、日影が獣使いの忍としての皮を被れなくなってしまう。

さらにも任務上で忍獣と組んだ事はあるし、五車の原生林で暮らしているのを目撃した事もある。ただ、やはり獣だけあって人の生活圏では生き辛いのか、命令以外で原生林から出てくることは珍しい。

こんな建物の中にまで入ってくる個体は稀どころか一頭もない。その上、四足歩行が基本の獣が苦も無く二足歩行でのっしのっしと歩いているではないか。

「あ、コタローだクマー」

「キエエエエエアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「ヴオオオオオワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「うるせえ……」

「まあ、そうなりますよね」

一人と二頭の絶叫が格納庫に響き渡る。

驚きの余りきららは小太郎の片腕にしがみつきて両胸を押し付けるどころか胸の谷間に挟み込んでいた。

対する熊も、背後にキュウリを落とされた猫のようにピョンと跳ね上がって全身で驚きを表現しているではないか。

「な、なに？ なになになになに？ どうゆうこと!? 熊が喋ってる?!」

「な、なんだクマー！ やっぱり変態のコタローが連れてくる女は皆変態だクマー！ 頭おかしくなりそうだクマー!!」

「なんですつてえ?!」

「頭おかしくなりそうなのはこっちの方だよ」

「おいおいおい！ どーした球磨ア！ そんなデケエー声上げてよおー！」

「啓治も来たようですね。この騒ぎなら当然かしら」

喧々囂々とは正にこの事。

各々が好き放題に喋り、好き放題に叫び出す。

あらゆる感情が噴出して、坩堝となって全てを飲み込む混沌だった。

無理もない。

誰だつて突然熊が喋り出せば驚くし、突然目の前に痴女が現れれば怯えるし、周囲が混乱していれば頭も痛くなるし、仲間が驚けば心配にもなるだろう。

「ほら、落ち着けよ球磨。別に見慣れたもんだろお？」

「それはそうだけど、人間の趣味は分からんクマー！」

「お前も落ち着けよ、鬼崎。あんな程度の反応、慣れたもんだろ？」

「反応は兎も角、反応してる相手が問題でしょうが！」

それから暫く経って、それなりに落ち着きを取り戻した一人と一匹は互いに相手を牽制しながら相対していた。

但し、球磨はあらわれたツナギ姿の男性の、きららは小太郎の後ろに隠れながらである。人であろうが獣であろうが理解の及ばない存在は恐怖の対象であることに変わりはないらしい。

「で若、後ろの娘は独立遊撃部隊の新人かい？」

「ああ、コイツは鬼崎 きらら。何でかウチに配属になった」

「くはは、なーんか厄介者の巣窟みたいになってんな。ま、何にせよ色んな奴がいるつてのはいいことだ。人⇨力って図式は変わらねえ」

「人じゃねえのもいるけどな」

「そいつぁいい！ その分だけ出来る事が増えるつてことじゃねえか！ 大いに結構！」

「相変わらずだな。鬼崎、コイツは白野 啓治。ウチお抱えの科学屋兼技術者だ」

「技術者あ？ 周防さんみたいな感じ？」

「どっちかってえと桐生ちゃんと装備課のエロ爺に近いかね。戦闘要員じゃないし」

「おいおい若あ。勘弁してくれよ、オレは変人だが変態じゃねえぞ？」

「それもそうだな。悪かった、アイツらと一緒にするのは流石にお前に対して失礼だわ」

肩まである白い髪をオールバックに撫で付け、僅かに伸びた髭も綺麗に整えられており、不潔な印象を受けない壮年の男の名は白野 啓治と言った。

だが、清潔とも言い難い。顔やツナギはオイルで汚れており、今し方まで何らかの作業をしていたのは明白であった。

科学者というよりも文字通りの技術者、技師、職人を連想させる。机に向かつて難しい理論や計算をするよりも、機械をイジリ回している方が印象に則している。

きららが名を上げたのは周防 みことという対魔忍である。

元々次世代対魔スーツ開発プロジェクトにて開発された強化外骨格のテストパイロットと整備士を務めていたが、別プロジェクトで研究が進められていたカメラが暴走した際に右目と左腕を失いながらも食い止めた剛の者だ。

その功績が認められ、対魔忍の新兵器開発及び実験部隊の隊長として召し上げられた経緯を持っている。知識だけでなく、実践も可能なバリバリの技術者。対魔忍において、技術者として名が上がるのは間違いなく彼女である。

「ふうん？ ようは外から来た雇われでしょ？ 信用できるわけ？」

「言ってくれるねえ。ま、仕方ねーかー！ くははっ！」

「お前よりも頼りになる。それだけは断言できる」

「ぐ、むむっ……！」

「こつちやあ色々恩がある。裏切るわけにはいかねーよ、息子も助けて貰ったことだしな」

「息子……？」

まだまだ完全には改善できていない男嫌いの悪癖を表に出してしまふきららであったが、啓治は気にした様子もなく快活に笑う。

その姿は、まるで年頃の娘に嫌われながらも成長と健康を信じている父親像そのもので、思わずきららもたじろいでしまうほど悪意や後ろ暗さとは無縁の姿だ。

しかし、きららが気になったのは恩と息子というワードだった。

男という生き物であっても、その子供に罪はなく、恩を聞けばどのような事情があるのか知りたくなるのは人のサガ。

珍しく小太郎以外の男に興味を示したきららの疑問に答えるように、啓治が指し示したのは背後の最新鋭機「影狼」であった。

「コイツを作ったのはオレだ。その時に何やかんや色々あつてな、それ以来、オレはふうま一門の一員ってわけよ」

「息子って、乗り物じゃないのよ」

「技術屋にとつてはテメエで造つたもんは全部ガキみたいなものさ。ま、本物のガキもいるけどな！ 血は繋がってねえけど！」

「最近、どうなの？ あの子、ロケットを作るとか息巻いてたけど」

「人の給料つぎ込んで実験機材を買いまくりの実験しまくり、調べまくりさ！ 流石はオレの背中を見て育つたオレの息子だ！」

「だなあ。血の繋がりなんざ関係ねえよ。ありや間違ひなくお前の息子だわ」

白野 啓治は「影狼」の開発プロジェクトの全てを任されていた技術者であった。

幼い頃からあらゆる疑問に回答を求め、先人の知恵を調べ漁り、その知恵が正しいものかを確認するために実験を繰り返してきた生粋の科学屋にして技術者。

始めは一般企業の技術者として辣腕を振るっていたが、より新しいものを、より便利なものを、より人類に貢献できるものを作り続けるうちに、その道において彼の名は知れ渡っていった。

そんな彼が、軍の最新鋭機開発プロジェクトを任されるのは当然の流れであったかもしれない。

そんな才能の持ち主も、運の前には膝を折らざるを得なかった。

要求される以上のスペックを追い求め、より安全な搭乗員の命を保護するための数々の機能は無駄と切って捨てられてしまい、開発資金を絞られ、プロジェクトは中止が宣言されてしまった。

だが、彼は常に前向きだった。失敗は成功の母。トライ&エラーは進歩に必要な歩みそのもの。

この失敗も、己と人類の進歩に必要なものと受け入れた。人類を進歩させた天才達と同様、決して諦めぬ不屈の闘志と共に、

気になったのは自ら開発しながらも、特許を申請していなかった技

術の数々が盗み出されたことだ。

自身の持ち込んだPCからデータを抜かれた形跡があった。ただ、それほど気にはしなかった。

そうした他人が心血を注いで得た成果を、横から掠め取っていく輩がいることは多いと知っていた。

だが、彼は何処までも人類の発展に貢献するだけの技術者で、自分の成果にならずとも人類の成果になればいいと何処までも純粋に信じ抜いた。

それが致命的な間違いであったと知るのは後日。

データを盗んだ輩は米連と繋がりがあり、データの内容を目にした米連は彼の技術力を確保しようと乱暴な手段に出た。

軍の保護が外れ、フリーの身となつて、さて次はどうすべきか、と次の道を検討していた折、米連の特殊部隊に強襲を受けた。

一介の技術者、造り出す者であつて戦う者ではない彼に抵抗する術などなく、まだ赤子だった亡くなった親友の息子と共に拉致されてしまう。

米連の判断は正しい。

技術の発展は膨大なトライ&エラー、そして多大な犠牲を支払つて齎される。戦争中に発見、開発された新事実や技術が、戦後別の分野で生かされることがあるように、その逆もまた然り。

彼の頭の中には人類の発展させるとしてもそれ以上の犠牲を払いかねない、出力しないまま理論のみで終わらせていたものもあつただ。

「んで、其処でオレを助けてくれたのが若つてわけよ」

「ただ、厄介だったのはその後でなあ。米連ばかりじゃなくて、日本の政府やら軍からも目を付けられちまつてた」

「なんでよ？ 政府や軍なら保護してくれるでしょう？」

「保護はするだろうさ。だが、その見返りとして技術提供を求める。米連が喉から手が出るほど欲しがった数々の技術をな」

「何よそれ！ それじゃあ米連と一緒にじゃないのよ！」

「そーだよ。だからオレはコイツの死を偽装して、オレが個人的に保護する事にしたんだよ」

「その点だけはマジで幸運だったな！あのままじゃどっちについても殺されてただろうし、嫌なことは嫌で済ませられる上に、好きなもんを好きなように造れる職場に来れたしなあ！」

「そういう契約だし、それで充分なんだよ、この天才は。払うリスクに對して得られるリターンは果てしなくデカイ。やりたくないことをやらせなくても、こつちが望む以上の成果を生み出しやがる」

「ただま、納得できないところは色々あるけどな……ま、そういうのも含めて合理的過ぎるぜ、若は」

何処までも純粹で、人類の発展に貢献する事だけを考えた技術者は、こうしてふうま宗家に収まった。

今は自身の技術を洗練させつつも、小太郎の命令に従って必要なものを作り出す、或いは改造する日々。

手が空けば、有用な数々の技術の特許も申請せずに、匿名でネットにアップして間接的に発展に貢献している。

小太郎が支払った代償は、啓治から信用と信頼を得られるには十分すぎるものだったのだ。

しかし、全てを肯定しているわけではないようだ。

許容はしているが、露骨な不快感を露わにせざるを得ない部分もある。彼が視線を向けたのは、ぎこちない動きで整備をしている人型ロボットだった。

「で、こつちは球磨。熊だ。因みにメスだぞ、仲良くしろ」

「熊の球磨だクマー。よろしくクマー」

「……いえ、アンタ、説明それだけで終わらせるつもり？」

「それ以上に説明のしようがねーんだよ、マジで……それよか本部は？」

喋る熊と球磨の説明は一言で終わってしまう。

疑り深い小太郎でさえそれ以上の説明も出来ないということは、それ以外に何も分からない事を意味している。

彼と彼女の出会い、日影、雅臣、啓治のように何らかの背景があるわけではない。

ある朝、目を覚ました小太郎が、自分の家に迷い込んできた子熊を見つけた。それが喋れるだけだった。それだけである。

小太郎もただ受け入れただけではない。

自身の及ぶ範囲で調べたものの、結果は対魔粒子を持っているだけのただの寵という結果。

忍獣の世話を担っているさくらでも驚きの余りに白目を向き、アサギは新手の生物兵器かと刀を抜きかけ、九郎と紫は鬼蜘蛛家のような忍獣使いの家へに聞いて回る始末。それでも、球磨の正体は依然として不明のままだった。

生物兵器によくある遺伝子操作や改造の類は見受けられず、魔界の生物との混血かとも思われたが遺伝子は寵のそれそのもの。

紫に捕らえられた桐生が対魔忍に参入した後、球磨の研究を行ったのだが結果は同じ。

対魔粒子が脳に何らかの作用を引き起こし、知性と理性、そして人語を介し操る力を獲得した、という仮説しか立てられなかったほどの正体不明ぶりである。

そんな訳の分からない謎寵を小太郎が引き取ったのは、行き場のない彼女に同情したのではなく、単に対魔忍などよりも余程素直で頼りになり、ちゃんとしていたからだ。

戦闘になれば、紫や雅臣に並ぶほどのパワーで敵を蹴散らし、戦車ですらも体当たりで引っ繰り返す。分厚い毛皮は大抵の忍法も魔術も近代兵器も無効化する優秀なタンク兼アタッカー。

喋る寵というインパクトの強いキャラだが我が強い訳ではなく、行き場のなかった自分を引き取ってくれたという恩だけで、命令にも頼みにも見返りも求めずに素直に従う。出来ることは少ないが、少しずつでも出来ることを増やそうと努力を怠らない。

忍法と強さだけが自慢、己の正しさを証明するためだけに命令を無

視し、我を貫き通そうとする対魔忍に比べれば、よほど優秀である。小太郎がこれを逃がすわけがなかった。

とてもではないが納得できていないきららを余所に、小太郎はさつさと完成した本部を見ようと進みだした。

だがその時、音を立てて整備を行っていた人型ロボットの一つが音を立てて崩れ落ちた。耐久年数を超えたのか、何らかのパーツが破損したのか、痙攣にも似た奇怪な動きを見せていた

「あ、壊れたクマー」

「しようがねえな。どんなもんでも限界はある。球磨、片付けといってくれ。しつかり燃やしとけ」

「え？ このおじさん、エンジニアなんですよ？ ちよちよいのちよいで直せるんじゃない……」

「あー……なんだ、ちよいと専門外だな。つか、使ってるのも納得しちやいねえが、合理的は合理的だから受け入れてるだけだ。ゆっくり眠らせてやってくれ。頼むぜ、球磨」

「……………??？」

「コタローもケイジも熊使いが荒いクマ！ 球磨だって嫌なもんは嫌だクマー!!」

文句は言いつつも、球磨はのっしのっしと巨体を揺らして倒れたロボットへと向かっていく。

きららは首を捻っていた。

啓治がエンジニアだというのなら言った通りに直して使えばいい。廃棄してしまうよりも、時間は掛かるかもしれないが金銭面では浮く面がある筈だ。

なのに、エンジニアである筈の彼が専門外と口にし、眠らせてやってくれ、という発言もある。自身の作ったものを息子と称する彼ならば納得できるが、何となく違和感を拭えない。

きららの論理的ではない勘に寄った所感でこそあったが、概ね正しい。

あの人型は啓治の手によって作成されたものではなく、また事実として彼の専門外である。アレを生み出したのは他でもない――

「全く！　なんで球磨がワイ――」

「――球磨？」

「ひえっ。と、永久、悪かったクマー。だから、そんな怖い顔で睨まな
いで欲しいクマ……」

「私の名前は永久。旦那様に頂いた大事な名前なの。二度と間違えな
いで」

「誰だって名前を間違えられるのは不愉快になるクマ。ごめんク
マー」

男と女って何事に対しても結構温度差あるよね

「此処が、今日からお前達の本部だぜえ！」

啓治が先頭に立ち、案内した先は格納庫の端にあつた小部屋だつた。

空圧式の自動ドアが両側を開き、内部が見渡せる。

まず目を引いたのは部屋の中央にあるドーナツ状の円卓。開いた穴の中にはミラーボールのようなスフィアが台座に固定されていた。それ以外に何か目を引くものがあるわけではない。残るは金属の壁と天井、埋め込み式の照明だけ。本部と呼ぶには何から何まで足りていない。

必要な機材が運び込まれていないだけなのか、もしくは未完状態なのか。ともあれ、寂しさすら覚える有様であつた。

「これが本部ねえ。他のところの方がマシじゃない。やっぱり大したことないわね」

「ところがぎつちよん！」

大見得を切つて通された本部の様子に、きららはこれまで任務前に使用したミーティングルームを思い出して、小馬鹿にした笑みを浮かべる。

尤も、あれそれが足りない、何某かが欲しいという前提はない。この部屋を作つた啓治が、見ず知らずの男であるが故に、悪癖が顔を出して頭から否定して掛かっているだけだった。

しかし、そんな反応など見越していたのか、啓治はにんまりと笑いながらパチンと指を鳴らした。

「な、何これえ……?!」

「ヘッドディスプレイも使わずにこれか、呆れてものも言えないなこりゃ」

次の瞬間、本部の虚空に無数のウィンドウが出現した。

ウィンドウには日本の標準時が表示されているものもあれば、トレーニングルームの使用状態、車両の使用率、公開されている部隊の任務内容などが詳細に記されているものもあり、数十の情報と同時に閲覧できた。

空中投影ディスプレイと呼ばれる技術。

米連は勿論の事、五車学園でも一部の施設で採用されている技術であり、一般に普及されていないものの最先端技術として様々な組織で利用されている。

ただ、凄まじかったのはその数だ。

技術の最先端を行く米連ですら、ヘッドディスプレイを使用せずここまででの投影は不可能。

根本的に空中投影ディスプレイの正体は光。これだけの数を互いが干渉せずにハッキリと目に出来る技術力は何処の国も研究機関も実現出来ていない。

「これだけじゃないぜ。操作は投影型のキーボードと音声入力のひとつでも可能だ。素人でも直感的に扱える。ま、若ならどっちも並行して使うだろうけどな」

「嬉しいね、作業効率が倍になる。通信は？」

「最近、流行りのニュートリノだ。重力波の検出が出来たりや重力波通信なんてのも手を出してみたかったがな」

「過剰だ馬鹿。十分すぎるわ。回線と暗号化の方式は？」

「どっちもオレのオリジナル。現状、これを解読できる設備も人間も存在しないだろうよ。米連の解読班が全力を出しても一年は余裕も持つと見るね」

「なら、どんなに少なく見積もっても一カ月は使い続けられるな。そ

の間にお前が新しい暗号化の方式を作ればいい。盗聴の危険性は限りなくゼロになる。こつちの解析に関しては何？」

「気軽に言ってくれるねえ。コンタクト型のカメラやら近場の監視カメラを通して常時この部屋に送られてくる情報を自動で解析^{オート}すんぜ。あとは現場の連中が欲しい情報を聞けば勝手に送ってくれる」

「馬鹿では使いこなせないにせよ、馬鹿でも使えるのは有難い。各種ツールは？」

「全部用意してあんぜ。ドローン各種、ふつつーのから暗視カメラ、オレ開発のサポートアイテムがわんさかな」

「そりやまた、高い金払って碌でもないもん掴まされる心配がなくていい事だ。データベースは？」

「五車のメインフレームに直結だ。どんなデータでも引き出し放題。但し、一部情報に関しちやアサギさんとオレの承認が必要にしてある」

「アサギは兎も角、お前の？」

「応よ。若は誰かが手綱握ってねーとやつちやいけねーことまで平気でやつからな。ま、セーフティだと思つときな」

「まあ、その辺りは任せるか。現状、対魔忍の中でこれ以上の設備は得られないな。完璧だ、啓治」

「あ、ー、そういうのも嬉しいが、給料とボーナスと開発費用を弾んでくれる方がもつと嬉しいねえ」

「当たり前だ。これなら全部倍にしても惜しかねえよ」

本部の機能や用意されている装備の数々の説明を受けた小太郎は会心の笑みを浮かべる。

独立遊撃部隊を設立するに辺り、天音を使って装備課から最新鋭の装備や設備を優先的に配布するよう交渉を行っていたのは正解だった。

如何に天才「白野 啓治」と言えども、ゼロからのスタートでは此処までのものは作れなかつたはずだ。

小太郎の笑みに、自らも納得の仕事ぶりだったのだろう。啓治はこ

れ以上ないほどのドヤ顔を見せていた。

最新鋭の装備も設備も彼なりの工夫と改良が施されており、飛躍的に性能が上がっている。その顔は謙遜もなく不遜でもない。事実として、彼でなければこの施設は作り出せなかった。

「……………??」

「なんて顔してんだか」

「だ、だってえ……」

「詳しくなけりや分からねえよな、こういうの」

「ぐぬぬ」

二人の話聞いていたきららであつたが、無数のハテナマークを浮かべている。

その姿を見た小太郎は呆れ返り、啓治はドヤ顔を消して苦笑いを刻む。

実際の性能を目にしたわけではないが、啓治の語った機能が全て現実だとするのなら、対魔忍の中でも膨大な戦果を出している九郎隊が白目を向くほど驚くどころか、世界中の特殊部隊が泣いて欲しがらるであろう。

情報の展開や解析の迅速さ、盗聴の危険性のない通信回線の重要性というものを全く理解できていない証左である。

これまで、きららはそんなものに頼った事がない故に、実感がまるで伴わないのだ。

それはそれで凄まじい話である。つまり、彼女はこれまでの任務を前情報がないまま、或いはあつたとしても気にもせず、敵に関して全く解析せずに、盗聴されていようが関係なく完遂してきたことになる。

男からの言葉に耳を貸さず、命令違反を繰り返していたというのにこの成果。アサギも目をかけていたと同時に頭を抱えたはずである。

これまでの人生と任務をただ才能と努力と運のみで生き抜いてきた天才。きららもまたアサギに近い生き物ということになり、辿る道

筋もアサギに近いものになってしまう。

ただ、これまでがそうだったからと言って、あらゆる意味でこれからもそうなるとは限らない。

彼女のみならず、対魔忍全体の運命は既に変わりつつある。ふうま小太郎という特異点を中心に生み出される変遷期にして過渡期。彼女もまた、その渦中に立つ者の一人なのだ。

「簡単に言ってしまうえば、小さいけれど世界でも最高峰の作戦本部、つてことよ」

「……！ う、うんうん、分かってた！ それくらい分かってたわよ！ やるじゃないのー！」

「だろお〜？ ま、そんなこと……あるんだけどなあ！ くははっ！」

「ほんとお？ほんとに分かってるう？」

「本っ当に分かってるから！ 大丈夫だから！」

そんな彼女に助け船を出したのは、同じく渦中に立つ永久であった。

彼女自身、啓治の持つ技術力全てを理解できているわけではないが、これまで目にしてきた成果の数々は常に驚嘆に値した。小太郎へ向けるものとは異なるものの、仲間として向ける信頼に至るには十分すぎる。

そして、仲間内の不和は何れ大きな禍根を生む。ほんの僅かでもその可能性を減らせるのであれば、出会ったばかりの少女を助けることに躊躇はない。それが永久の侍女としての在り方であった。

とは言え、彼女が出した助け船は概要だけであって詳しく踏み込んでいくものではない。

にも拘らず、さらさらは思わず全てを理解している風に返事をしていくものの、誰の目から見ても明らかかなほどなーんにも理解していなかった。

啓治は気にした風もなく冗談を口にし、小太郎は揶揄いながら問いかける。

二人が自身の内心に気付いているなど思っていないらしく、きらは両手を前に突き出して振りながら必死で弁明していた。

「なら、ちよつと使ってみようぜ。何事も試すのが、実践が一番だ」「うえつ!? いや、でもほら、私は戦闘要員だから……」

「ウチの部隊に来た以上、そんな甘えは許さんぞ。こつちは常に人手不足だ、一人ひとりが何でも出来るようにならにや回らねえ。ほら、こつち来い。分かんなきや教えてやるから」

「……うう、分かったわよう。機械とか苦手なのよねえ。叩くとすぐ壊れるし」

「昭和のテレビじゃねえんだよ? 叩いてどうにかなるもんじゃねえよ」

きららの気質や考えなどお見通し。

苦手分野を人に任せ、得意分野で活躍する腹積もりなど、小太郎には通用しない。

例え、誰が欠けたとしても国を守るために任務を完遂する。例え、己がいなくなったとしても乱れなく整然として目的に当たる。

彼の目指す強固な一群とはそれ。そのためには、自身の仲間には誰の穴埋めも出来るようになって貰わねばならない。

米連や自衛軍のような人員を抱える組織であれば、それぞれの適正にあつた役割に分担する術もあるが、生憎と彼は世界でみれば弱小組織である対魔忍の中にある没落家系と部隊の長に過ぎない。そんな贅沢な人の使い方はどう足掻いた所で出来ない。

誰であれ、苦手であろうとも最低限のラインは確保しておかねばならない。同じ戦闘に特化した雅臣ですら、頭から湯気を上げながらも必死で努力している。きららがどれだけ同じ分野が苦手であつたとしても、同じだけ努力させなければ目標以前に部下に対して示しが付かない。

それでも面倒見は良い方だろう。

標的や足を引っ張る味方には一切の情け容赦を持たない男だが、努

力しようとする者には甘さも優しさも見せる男だ。どれだけ労力が掛かるうとも、努力する気を見せれば手ずから教えることに躊躇はなかった。

「はー……どっこいしょ」

「お疲れ様。私にはよく分からないけど、徹夜続きで辛かったでしょ」
「流石にこの年齢で一カ月ぶっ続けはな。おっと、アンタには歳じゃ敵わねえか」

「あら、女に年齢の話をするのは非礼じゃない？」

「おう、怖え怖え。が、言ってる事は尤もだ。悪りい悪りい！ くははっ！」

円卓の椅子へと疲労を露わに腰を下ろす啓治の隣に立ち、永久は掛け値のない労いの言葉を掛けた。

けれど返ってきたのは、冗談ながらも聞き捨てならない言葉。年齢自体への言及は、別段腹立たしくもない。事實は事實、それを否定したところで何も始まらず、いらぬ不和を生むだけだ。

ただ、忌まわしい過去を想起させるような物言いだけは、彼女にとって受け入れがたいものだった。

怒気どころか殺気すらも放ちながら、ギロリと睨みつけてくる永久を前に、啓治はさっぱりとした態度を何一つ変えずに詫びの言葉を口にした。

付き合いは決して長くないが、冗談や本心を澱みなく口にできるのは信頼関係が構築されていることを物語っている。それぞれが違う分野に秀でているものの、互いに貶すこともなく、認め合っている証拠だ。

「……嬉しそうね」

「あー、自分の造ったもんを褒められて嬉しくねえ技術者はいねえよ。それ以上に、若い連中が成長する姿ってのは眩しくてな。溶接の光を直視してるみてえ」

「ぶつ、何それ。貴方らしいと言えらしいけど」

啓治の態度に、怒気も殺意も消した永久は彼の表情に口を出した。彼は小太郎ときららが並んで投射ディスプレイを見上げ、あーでもないこーでもないの説明と操作を繰り返している後ろ姿に、すつと目を細め、口の端を緩やかに持ち上げていた。

その表情は、技術者としての誇りよりも、一人の大人としての喜びに満ちている。

分野は違えども、自身の後に続く者が恐れなく前へと進む。その手助けする先達として、これ以上の喜びと安堵は存在しない。

正直な所、啓治は対魔忍という組織の必要性は認めているものの、肯定していない。

誰かの死など極力避けるべきだとこれまでは信じてきた。これからもそれは変わらない。正義の名の下に殺人すらも許容し、執行する組織など、人^は力、という図式を信ずる彼にとっては受け入れがたいものだ。

だが、それでも小太郎の下を離れなかったのは、既に触れてしまったから。

一人の大人として、多くの子供達が人魔外道に立ち向かっている現実を見捨てるわけにはいかない。自らの信念のためにそれを見捨てては、それこそ彼の信念は嘘となってしまう。

これから自らの研究と技術によって多くの血が流れる。直接的でないにせよ、間接的には自らの手も血に塗れる。

それでもなお構わないと受け入れたのは、せめて味方をした子供達の未来だけは明るいものとしたから。だからこそ、成長の兆しを感じさせる姿は何よりも眩しく、何よりも嬉しかった。

「どんな姿になっても、どんな罪を背負っても、倒れるなら前のめりに。バトンを託して次に繋ぐ。それが技術者として変わらねえ、オレの信念だ。今のアンタなら分かんたら」

「ええ、よくね。私も、この世を去るなら、そうするもの」

「だろ？ オレもアンタも若もそうだ。だから安心して、後を任せられる。オレはもうダメだ」

「ちよつと??？」

「も、むり……………ガ、ガキのこと、たのまあ…………」

「これだものねえ。はいはい、ゆつくり休みなさい」

「すやあ…………」

まるでスイッチが切れたかのように、啓治は眠りに落ちる。

この一月、彼はほぼほぼ不眠不休で働き詰めだった。

球磨が力仕事を代行し、永久の人形によって人手は足りていたものの、細かな調整や機材の改造は彼自身の手に寄らなければ不可能な部分も多い。

それだけではない。仕事の目途が立てば家に帰って子供の世話。シングルファーザーの辛い所だ。

如何に働き三十半ばと言えども、二十代の頃に比べれば体力は落ち込んでいるし、身体が勝手に睡眠を求めてしまう。

精神力だけで疲労感を見捨て無視して働き通していたのだが、ようやく限界を迎えたようだ。上が上なら下も下。やることをきっちりやっってから意識を失う辺り、似た者主従であった。

永久は自分よりも遥かに短い時しか生きていないにも拘わらず、自分よりも遥かに立派な大人として立つ啓治に敬意と共に薄っすらと笑みを浮かべ、眠る前の頼みを承る。

ふうまの侍女として、その部下の家族の面倒を見るのも仕事の一つ。何より、彼女は子供が嫌いではない。己とは異なり、無限の未来と可能性を持つ存在。それが成長する姿を見守る事に無上の喜びを覚える。

尤も、啓治の血の繋がらない息子はとても五歳児とは思えない貫禄を持っていて、子供らしいとは言い難い。だが、自身の夢を語る熱さと無邪気さは年相応。そこがまた愛おしく感じるのも事実だった。

「むー、やっぱりくせークマあ…………クマ？ 啓治はダウンクマ？」

「ええ、家に送ってきてくれるかしら？」

「全く、男はいくつになってもガキで仕方ねークマ。皆のねーちゃんやるのも楽じゃないクマ」

「頼もしいわね、お姉さん。じゃあ、啓治とあの子の護衛をお願いね。私も後で行くから」

「任せるクマ。ほらケイジ、帰るクマー」

「うーん……むにゃ……こ、これが魔界の金属とドワーフの加工技術……うえへ、へへへ、これならオレのアレをなんやかんやすりやあ……んごぐぐ……」

「寝ても研究してなんか造ってるクマ。休める時にきっちり休めクマー」

タイミングよく、二足歩行でのっしのっしと球磨が本部へと入ってきた。

自分の身体の匂いを嗅いで清潔感を気にしている辺り、精神面では乙女なようだ。尤も、着飾るのではなく、あくまで身綺麗さにのみ拘っている辺り野生らしい。

椅子に座ったまま眠りに落ちた啓治に、熊の顔で呆れを露わにした。

喋るだけでなく、人と違って表情筋が発達していないにも関わらず人に感情を伝えられる謎生物ぶりであった。

永久も球磨も小太郎で慣れっこなのか、啓治を背負い背負わせる。

そのまま球磨はのっしのっしと歩いて本部を後にしようとする。啓治とその息子の護衛。それが此処最近の彼女の仕事だ。

まだまだ対魔忍内部において啓治の重要性や腕前を知る者は少なく、外部に彼の死が偽装であったとバレてはいない。

しかし、内部に関しては徐々に知られ始めており、外部への偽装工作は完璧ではあったが、何時までも持つと信じるほど小太郎は自身の腕や方法を信じてはいない。

いずれ必ず、啓治を手に入れようとする輩は現れる。そのいずれが何時なのか人の身では分からず、現段階で替えの効かない人材である

苦勞人が苦勞すると必然と部下も部隊も苦勞する羽目になる

「――由々しき事態だ」

数日前に完成したばかりの独立遊撃部隊の本部にて、小太郎は重苦しい表情と共にずんと腹に重く響く声色を発する。

天井では照明が煌々と輝いているにも拘わらず、部屋の照度が下がった気さえする。まるで、彼の心境を表しているかのようだ。

その声を聴いた者はごくりと唾を飲み込み、或いは一体何があったのだ、と困惑をしめしている。

付き合いが長い短いに関わらず、小太郎が此処まで重苦しい雰囲気を持ち、本気で事に当たらねばならないという気になっているのを見た者は誰一人として存在しない。固唾を呑んでしまうのも無理はない。

その上、集った者にも問題があった。

その場に居たのは独立遊撃部隊とふうま宗家の面々。その上、独立遊撃部隊に名を貸しているだけの不知火の姿すらあった。

独立遊撃部隊は新設したばかりでメンバーはまだまだ彼の納得する領域に手を掛けていないが自由に采配可能な人員であり、ふうま宗家の臣下は彼にとつては文字通りの切り札であり血を分けた手足。

それぞれが有能であるが故に別件の任務や仕事によって顔を突き合わせて会話が出来る機会すら稀にも拘わらず、それを一堂に会するように小太郎が無理やり手配したのであった。

もうこれの面子を揃えている時点で、彼の身に降りかかってきた特に理由のない苦勞の重さが分かるとういうものだ。

「で、これだけ人を集めて何するつもりよ、アンタ」

小太郎の発する雰囲気気圧されまいと口を開いたのはきららだ。ただ、いつもの反射的な反発ではなく、真剣さを汲み取ったが故に、事態の開示を求めているだけであった。

残る独立遊撃部隊の面子——ゆきかぜ、凜子、紅、凜花、紫、自斎も同じく神妙な面持ちで頷いている。

これから待ち受けるのが如何なる苦難であったとしても、愛や恩、期待を小太郎に向ける身、逃げるつもりは欠片もないと言葉もなく語っていた。

「その前に、まずはこれを見てくれ」

小太郎は自らの後ろに立ったまま控えていた天音と永久に片手を上げて指示を出す。

二人は同時に頷くと手にしていた何らかの資料を円卓に座った全員へと配っていく。

手渡された瞬間に資料を開いて目を通す者。

手渡された資料に視線を落として怪訝そうな表情をする者。

資料の内容も確かめず、表情を歪める者。

全く興味を持たず、部屋の隅で丸くなって欠伸をかいている熊。

反応は各々違っていたが、共通して理解できたのは、資料が様々な対魔忍の個人情報プロフィールを記したものであるということだけだ。

「これが、アサギから送られてきた……」

「どういうことだ……?」

「何でこれをふうまに?」

「……………あー……………」

「……………成程」

「え? 何? 白野さんと井川は何か分かったの? これで?」

重力すら感じられそうな重い声色で告げる小太郎の科白に、地獄の

特訓（序の口）ですつかり仲良くなった紫と自斎は同時に疑問の言葉を口にした。

アサギから送られてきた、ということは何らかの指令であることに間違いはない。

だが、どんな指令であるのかまでは結論を出せない。察しが悪いのではなく、与えられた情報が少な過ぎて多くの可能性の中から正答を導き出せないのだ。

対魔忍の個人情報を送られてきたのならば、真っ先に思いつくのは個人か、部隊か、家か、或いは派閥の内部調査だろう。

しかし、資料の数は多く、家柄や同じ部隊という共通点すら疎らで何らかの調査をするには情報に一貫性というものが無きすぎる。

そんな中、啓治は気の毒そうに頬を掻き、日影は静かに呟く。

間に挟まれていた雅臣は驚きの声と共に首を左右に振って二人の顔を何度となく見比べるばかり。既に何が起こっているのかを知っている災禍、天音、永久以外は似たような反応をしめすばかり。

ふうま宗家の中でも啓治は群を抜いた知性と知識の持ち主。数少ない情報と小太郎の態度からでも凡その予測を立てるのは難しくはあるまい。

日影は元井河一門でありながら現在はふうま一門に鞍替えした身という難しい立場故に、周囲の目や変化に敏感であり、独自に集めている対魔忍内部の情報と察しの良さから由々しい事態とやりに当たりをつけていた。

「これはな、独立遊撃部隊に配属を希望している対魔忍の情報だ」

「ふうん、自分から小太兄のところに来たい、なんて物好きだよね――

――なんて言えないんじゃない？ ヨミハラとお母さんの件も噂になつてるし、その上伝説の魔女まで撃退したから当然でしょ」

「ゆきかぜの言う通りでしょうね。これだけの大戦果だもの、小太郎君をどう思っているかは別として、部隊に興味を持たない方がどうかしてるわ」

「確かに。だが、由々しい事態とは言えないのではないか？ 他の家

が内情を探ろうと差し向けた者や益だけを貪ろうとする輩も混ざっているだろうが、有用な者だけを選んで引き入れればいいだけの話だ。そういうのはお前の得意分野だろう。そもそも独立遊撃部隊はそう言った者を選別するための撒餌としての側面もあった。我々も手伝えないわけではない、何か問題があるとは思えないが……」

由々しき事態と小太郎は言ったものの、蓋を開けてみれば何のことはない当然の結果である。

ゆきかぜと不知火が口にした通り、何らおかしい事は何も無い。小太郎が様々な意味で侮られていようが、危険視されていようが、今まで上げてきた功績を考えれば、今まで配属を希望する者が現れなかった方が不思議ですらある。

不思議であったのは小太郎の態度の方だ。

アサギと小太郎の思惑は、独立遊撃部隊で結果を出しながら仲間を集い、成長させた暁には一門の一員として抱え、或いは他家の協力者として手を取り合うことでふうま一門を再興しつつも対魔忍全体の結束を強固なものとしていく流れ。

意図して足を引っ張る者、苦汁を舐めずに甘い汁だけを啜ろうとする者はいらるだろうが、いずれは通る道ならば最終的な目的地へと辿り着くのが早くなったと割り切れればいいだけの話。凜子が疑問視するのも無理はなかった。

ただ、問題があるとするのなら——

「凜子の言う通りではあるわ。でも、ね……」

「問題は、その数だ」

「数……って、待て。凜花！ 私とお前の資料、同じものかつ!？」

「きゅ、急にどうしたの紅ちゃん？ そんなの同じに……同じに……同じじゃない!？」

災禍と天音の溜め息と共に告げられた科白に、紅は一つの懸念に思い至り、隣に座っていた幼馴染の凜花に向かって身体を思い切り寄せ

て手元の資料を覗き込む。

幼馴染の急な行動に驚きつつも、言われるがままに二つの資料を見比べてみて、更なる驚愕に襲われる。

二人の手元にあった紙束に記された個人情報情報は全く一致しておらず、同一人物のものは一つもない。

その行動は事情を知る災禍、天音、永久、事情を察しつつある啓治と日影以外、全く興味を持っていない球磨を除いた全員波及して行く。

結果、分かったのは紅と凜花の資料がたまたま別物であったのではなく、各人に配られた資料全てが別物であった事実だけ。もう此処までくれば、凡その事情は見えてきたようなものだ。

その事実に対して真つ先に口を開いたのは、口調も軽ければ態度も軽いながらも、忍として生きる覚悟はガンギマリしている悟であった。

「あー、これで全部じゃないんだ。ぶっちゃけさ、全部でどれぐらいいるわけ?」

「お前は気軽に言うよなあ……」

「別にいいでしょ。忍の仕事なんて出来る出来ないじゃなくて、やらなくちゃならないか、嫌でもやらなくちゃならないのか、なんだからさあ。若んところにいると忘れがちになるけど、お役目には逆らえないしね」

「まあ、悟の言う通りではあるのでしょうか………まだ正確な数字を出していないけど、凡そ対魔忍の半数近く、と言ったところよ」
「……は、半数?!」

悟に何一つ間違いはなかったものの、それを気軽に言葉で表現されるには小太郎を第一に考える永久としては洩面を作り出してしまふ。

そして、彼女の語った事実は独立遊撃部隊の面々を蒼褪めさせ、ふうま宗家の面子に大きな溜め息を吐き出させるには十分過ぎた。

特に反応が大きかったのは不知火だ。

ゆきかぜ達は優秀と言えども年若く、対魔忍内部における役割は単純な戦闘要員に過ぎないが、彼女はアサギが対魔忍の頭領となつて以後、性急な近代化を進めていく改革期を共に乗り越えてきた間柄。与えられる役割も当然重く、替えの効かない立ち位置。戦闘は言うに及ばず、諜報や情報収集でも活躍し、更には組織運営にも最も深く関わっている。

そんな彼女が全体の総数を把握していないわけもない。彼女の知る数から半分ともなれば、その数字は4桁に至る。

他の面々は正確な数字を把握してこそいなかつたが、これまで五車に関わつてきた対魔忍達を思い出し、生半可な数字ではないだけは理解できていた。

これだけの人数を全員独立遊撃部隊に所属させるなど不可能な話。アサギが認めたとしても他の部隊は絶対に納得しない。例え、部隊を掛け持ちし、人材配置の優先権だけを渡す手段を取ろうとも、小太郎への負担が余りにも勝ち過ぎている。そもそも、一部隊にそれだけの人材を回してしまえば、対魔忍全体の任務が滞りかねない。

それに加えて、選別の話もある。これだけの人数の中から有能な人間だけを選出するのは、それだけで相当な労力が必要となる。小太郎はやることが多過ぎてとてもではないが時間が取れない。無理に行すれば過労死待つたなしである。

「いくら戦果を挙げてるからつて多過ぎるでしょ。何がどうなってるんですか」

「ふふっ。それはね、その二人とアサギと馬鹿どものせいだ」

「ふえっ?! わ、私い!」

「ちよ、ちよつとどういうこと?!」

余りにも異常な数字に、事態そのものに当たりをつけていた日影であつたが、そうなつた過程が分からずに疑問を口にする。

すると、小太郎が顎で指したのはきららと自斎であつた。当然、何の心当たりもない二人は自分を指さして慌て始めた。

それもその筈、二人は独立遊撃部隊に配属された事実を誰かに打ち明けてなどいない。

きららは友人が多かったが、あくまで配属を願い出たのは自分を変えるためであり、小太郎が気になったから。名を挙げ始めた部隊に属して勝ち馬に乗ろうとする意識は全くなく、ひけらかすような真似などしよう筈もない。寧ろ、理由が理由だけに気恥ずかしさすらあつて、自分から他人に明かす気になれていなかった。

対する自斎はもつと悲惨である。凡そきららと似たような心境であつたが、これまで人間関係を断つてきた弊害で根本的に自慢できる相手が周囲にいない。友人にゆきかぜはいるが、今はまだそれだけ。クラスメイトは噂を恐れてまだまだ遠巻きに眺めるだけ。両親も親族も近寄つてすら来ないスーパーボッチである。

そもそも、二人が配属されたからと言つて、こうも希望者が続出する意味が分からない。一体、何があつたと言うのか。

そのきっかけはアサギであり、強烈に後押ししたのは自らの地位を危ぶむ老害どもである。

事の始まりは、小太郎復帰の日まで遡る。

有能ではあるが明るい未来がまるで見ない自斎ときららを小太郎に任せ——押し付けたとも言う。いや、押し付けたとしか言えない、だが——アサギはなーんの決定通知もしないまま政府のお偉方からの査問に出席。

その途中で、怒り狂つた小太郎からの鬼電を『急な任務が！』と偽つて査問をお開きにさせ、任務に向かつたと見せかけるために闇の町へと繰り出し、ストレス発散を兼ねて目についた闇の組織をてきとーに皆殺しにして五車へと帰還した。

小太郎に自分には出来ない事を押し付ける！ 政府の面倒な追求を交わす！ その上日本の平和を守つた拳句に自身のストレスも発散させる！ という一石四鳥の作戦であつた。流星は最強の対魔忍、恐るべき頭脳プレーだ。力業ともいう。

帰還したアサギを待っていたのは、不在の間に溜まった書類の山、山、山。

不知火を筆頭に、紫、さくらが可能な限り減らしてくれてはいるのだが、どうしてもアサギの最終承認が必要なものもある。ただ、それらは覚悟の上でやったもの、気は重くなるが頭を抱えるほどではない。

これから迎える自身に向いていないがやらねばならない仕事に向かう地獄の時間に若干震えながらも、ストレスを発散してリフレッシュした心持ちで立ち向かおうとしたのだが、ふと見慣れぬ山に目を奪われた。

中を確認してみれば、目を覆いたくなるほどの妄言が書き散らした嘆願書であった。

ざっくりと内容を説明すると、ふうま宗家と独立遊撃部隊の解体と、解体後の人員の配置先を書き連ねたもの。

明らかに、アサギ不在の間に何の承認もなく小太郎への査問を開き、いいように言いくるめられた老人たちからのもの。

何があつたのかをまるで知らぬアサギであつたが、これまでの老人たちの振舞いや言い分から何があつたのかを察するには容易く、無言無表情で嘆願書をシュレッダーにかけた。彼等の妄想に付き合っていたら、対魔忍は崩壊する故に当然の対応だつた。

が、其処で話は終わらない。身勝手な人間の行動力は恐ろしいを通り越して狂気の沙汰だ。

嘆願書に全く反応を示さないアサギに対し、一部の老人が怒り狂い、アサギの執務室兼校長室にまで突撃する暴挙に出る。

アサギはこれに対して華麗にスルー。頭の中では老人をボコボコにした挙句に惨殺する妄想でスッキリしながら冷静さを保ち、彼等の言い分が如何に身勝手に道理が通っていないのかを訥々と説明し、追い返すことに成功する。

『後悔することになるぞ、アサギい!!』

『ぐっ……ぶっぶおっ!』

『え? い、今、笑ったか? な、何故?』

『——いえ、笑ってなどいないわよ? ただ、困った事になるわ

ね、と思つて咳き込んだだけ。最悪の場合、私自身が対処する他ないよね』

『……………ぐっ！』

最後に捨て台詞を吐いた老人であるが、アサギは思わず嘖き出して笑いそうになる。

老人達の閥は大きい。アサギの閥は最大であるのは疑う余地はないが、老人達が手を組めば数の有利は引つ繰り返る。にも拘らず、この余裕。

実際、彼等が反旗を翻そうが、ほぼ一人で皆殺しにして鎮圧など朝飯前。尤も、そんな真似をすれば対魔忍組織はいよいよ崩壊するのであるが。

反乱？ したければお好きにどうぞ。やるなら私が手ずから殺すわよ、と強気に出られる背景にあるのは無論、小太郎の存在がある。母親から当主としての教育を徹底されてきた彼は、家のみならず組織運営の知識は豊富にあり、当人の努力によつて実践可能な域にある。

その上、政治にも明るく、立てる作戦は必ず成功させ、対魔忍内部のみならず外部にも独自の情報網とコネを持つ、環境改変人権お助けキャラSSR。

こんな存在がガチャを引くまでもなく自分の下に転がり込んできたのだからアサギとしては爆笑ものだろう。

出会った当初は胡散臭さと危うさの付き纏う少年であったが、何気なしに横から挟まれる口振りや助言には舌を巻くものがあり、彼と言う通りに計画を変更すれば大戦果を挙げられ、警戒を素直に受け入れれば待ち構えていた罠を回避して、敵の目論見は丸潰れ。

思いつくのは外の道ばかりなのは玉に瑕だが、信頼を置くには十分であり、彼が自ら裏切るような人物でない事が更に拍車を掛けている。

そして、彼女は学んだ。何も自分が何もかもをしなくとも、何もかもを背負わずとも、頼りになる者には素直に頼れればいい、と。

両親が早死した事実には政府に不信感を抱き、自らを当主として担ぎ出した長老衆への警戒から対魔忍となった当初は誰かを頼るなどという思考を持ち合わせていなかった。もし、かつてのままであれば、アサギの心も態度ももっと張り詰めたものになっていた筈だ。

最強が最強のまま、最強とは何ら関係のない仕事や責任までを背負わなければならなかった頃とは違い、今は最強が最強のままであればいい。

『心が軽い……こんな気持ちで敵を塵殺するなんて初めて……もう何も恐くない——！』

思わず盛大な死亡フラグを立ててしまうほど、晴れやかで軽やかな気持ちになつていた。なお、肉体の疲労度は考えないものとする。

最強の対魔忍はメンタルも最強——否、最早無敵である。

何せ、こんな死亡フラグをぶち立てても、ガンギレしながら死亡フラグに鬱フラグ、裏切りフラグに凌辱フラグに悪堕ちフラグを勝手にブチ折りながらも、何故か自分の苦勞フラグだけは折れない最悪のフラグブレイカーが隣に居るのだから。

ただ、力量さいつよ、メンタル無敵と化し、最強の対魔忍（笑）から最強の対魔忍（ガチ）にジョブチェンジしたアサギにも読み切れないものもあつた。

『ど、どういふことなの……』

老人達を追い返した翌日、続々と自分の下へと舞い込んでくる嘆願書の山、山、山。

今度の内容は老人達からのものではなく、家柄も出身も年齢も関係なく、無差別な対魔忍からの独立遊撃部隊に配属を願い出るものだ。

これには流石のアサギも困惑した。

いずれはこうなるとは予測していたし、小太郎も概ね同意していた。だが、今はまだその時期ではなかった。

まずは小太郎の周りを信頼のおける若者と部下で固め、十分な下地と実績を作った上でなければ、多くの内患を抱えた上での部隊運用となり、如何に小太郎と言えども瓦解は見えていた。

そもそも、どうしてこのような事態になったのか。

多くの対魔忍はまだまだ独立遊撃部隊の価値と評価を決めあぐねており、静観を決め込んでいる筈だったにも拘わらず、こうも一気に事態が動き出したのか。

それは老人達のせいであった。

悪意を以て対魔忍達を扇動し、アサギと小太郎を追い落とすことで甘い汁を啜ろうとしていた——訳では全くない。単に癩癩と八つ当たりの末にこうなった。

アサギに追い返された老人の一人が何故己の言い分を認めぬのか、何故あんな小娘と小僧が大きい顔をするのか、と周囲に怒鳴り散らしたのが全ての切欠であった。

その癩癩の一つには、有用な人材を優先して小太郎へと配置する不満も含まれており、まだ誰にも知られていなかったある事実をポロリと漏らしてしまったのである。

そう、獅子神 自斎と鬼崎 きららの独立遊撃部隊への配属である。

ただ、それだけならばまだ良かったが、最悪であったのはゆきかぜ達はアサギが直接選んだ上での配属だったのに対し、二人の場合は自ら願い出た上での配属だった事。

これまでのプロセスは小太郎かアサギが部隊員を選出、その後アサギが承認という流れであり、個人の事情や嘆願など考慮されていない状態だったが、二人が現れたことで前例が生まれてしまったのだ。

『おい、大丈夫か？ 今日先代の機嫌が特別悪いな』

『いつもの癩癩だ。それよりも、聞いたぞ……！』

不満というものは、どのような状況であっても溜まる。

良い生活を送っていたとしても、恵まれた人間関係を構築しようと

それは悲鳴も上げようというもの。何せ、小太郎は何一つ悪くないのである。その上、立場も逃げ道もない。ただでさえパンク寸前なのにこれ。パンクは確定していた。

更には噂には尾ひれが付き捲り、独立遊撃部隊に所属すれば強くなるのだの、賢くなれるのだの、何をしてでも文句は言われないうのだの、拳句の果てには忍法に目覚めていない者でも目覚めさせてくれると言うものまで出る始末。冷静に考えれば、ありえないと考えそうなものだが、人は自身にとって都合の良い事にばかり目が行きがちになるものだ。

「……………なあ、小太郎」

「何だよ、紅」

「弾正といい、老人達といい、どうしてあの世代は考えなしの行動でお前を苦しめられるんだ……………」

「オレに聞くんじゃねえよ……………！ ふんぎぐぐぐう……………！！」
「ヒエツ」

常々感じていた疑問を思わず口にしてしまった紅は、この日一番の怒気を向けられて小さく息を呑んで涙目になる。

小太郎の表情たるや我が子を喰らうサトウルヌスと言った有り様で、自己の破滅に対する恐怖と狂気で今にも齧りついてきそうで恐怖しか感じない。赤子の代わりに資料に齧りついている。これと睨みあうくらいなら単身ブラツクに挑んだ方がまだマシだった。

本部の空気は最悪の一言だった。

不用意に弾正の名前を出してしまったことで、並々ならぬヘイトを弾正へと向けている災禍と天音の表情までもがズジスワフ・ベクシンスキーの絵画のようになっていく。とても直視できない。

そして、永久は弾正と直接の関わりがないために平静かと思われたが、そんなことはない。愛する旦那様を害されて、立島夕子の作品のような顔になってしまっている。夜中に出会えば絶叫失禁失神間違いなしだ。

小太郎とふうま三羽鳥がこの有り様であつては正に地獄。

慣れていないゆきかぜを筆頭とした独立遊撃部隊は冷や汗を流しながら必死で目を逸らし、慣れている筈のふうま宗家の面々ですら顔を引き攣らせていた。

その中でも自斎など酷いものだ。自身の行動が引き金となつて引き起こされた事態に、顔を蒼褪めさせて涙目となつた上にカタカタと震えている。自罰的な性格にこれはキツイ。

誰かが、誰かが空気を変えなければならぬ！ と必死になつて空気を交えるべく思考を回すが、四人の怒りと表情の前では恐怖の余りにそんな言葉を導き出せる筈もない。

だが、それでもなお口を開いたのはきららだ。

思い浮かんだ考えはあつたし、何よりも発端が自分と自斎ならば解決すべきは自分、後輩に無理はさせられないと決死の覚悟で口を開く。彼女ですら決死の覚悟を必要とする空気、地獄そのものの空気が地上に顕現してしまつているらしい。

「そ、そんなことなら簡単じゃない！ 全部突っぱねちやえばいいのよ！ どーせ噂で募集もしてないんだ——ひい……そ、そんな目で見ないで……」

「……」

「いやあ、それは出来ねーなあ、この状況じゃ」

「啓治さんの言う通りだ。少しは考えてから物を言え」

ふふん、と大きい胸を主張するように身体を反らせながらきららであつたが、四人のコイツ何も分かつてねえ、という恐怖画像そのもの顔と虚無の視線に貫かれ、徐々に縮こまる。

無言の四人に代わつて口を開いたのは啓治だった。

歯に布着せぬ物言い、後押しするように日影が続く。

現在の状況をよくよく理解した二人にとって、きららの言い分は理解出来たし間違つてもいないが、どうしても出来ない理由がある悪手に過ぎなかつた。

「な、なんですってえ!! 人がどれだけ考えたと思ってるのよ! それに初対面のアンタになんでそんなこと言われなきゃならないのよ!!」

「き、きらら、落ち着け。ほら、四人の顔が……顔が怖い!!」

「そうだよ。井川ももうちよつと気を遣って言いなつて……本当に怖いな! 夢に出てきちゃう!!」

日影の物言いに、きららは恐怖を忘れて気色ばんだ。

男嫌いのきららと優しきの分かり難い日影。どう考えても相性の良くない二人は案の定激突する。

と言つても、きららが一方的に噛みついていてだけで、日影は大きく溜め息を吐いて顔を片手で覆うばかりだ。

声を荒げた彼女に対して、四人の視線が突き刺さる。余りにも暗くなり過ぎた表情では目も口も虚のような穴が開いているようにしか見えない。

もう見ただけでS A N値直葬されそうな邪神染みた顔になっている当主と秘書と執事と侍女から気を逸らしてやろうとした日影の優しさは全く伝わっていなかった。

お陰で二人のフォローに回った紅と雅臣が悲鳴を上げる始末であつた。

「実際、それが一番良いんだろうがなあ。アサギさんと若の目論見的にそれは出来ねーんだよ、鬼崎のお嬢ちゃん」

「ど、どういうことよ?」

「いいか? 二人の小目標は独立遊撃部隊で実績を積む事だが、大目標はふうま一門の再興だ。その最中に対魔忍の意識改革やら組織の見直しやって、冷遇されている元ふうま連中を助けたり、最終的には家柄に縛られない一枚岩の集団にしたい訳だ。それは聞いているか?」

「き、聞いているけど、それは関係ないでしょう?」

「関係なくもねーんだよ、これが。今回の希望者全員突っぱねちまう

と、自信はないけど有能な奴等が二度と入隊を希望なんざしねえし、大抵の連中は良い印象を覚えるわけがねえ。マジに人手が足りなくなつた時、人を集めたくなくなつた時にこつちから入隊希望者を募つても集まらなくなるし、突つ撥ねちまつた後で下手にできれば、相手も気が大きくなって強気に出てくる。野球選手が年俸でゴネるアレと一緒だ」「成程……えーつと、つまり?」

「嫌でもこの人数の中から何人かは受け入れなきゃならないんだよ。それも最低限、邪魔にもならず、家にも縛られない協力的な奴をな」「そ、それくらいは分かつてるし! おじさんが説明してるのに、アンタが口を挟んでこないでくれる?!」

「まーまー、お二人さんっ! 苛ついたつて現実が変わる訳でもないから冷静に行こうぜ? 若も、皆もなつ! くははっ!」

最後の締め括りを横から奪い去つた日影に、きららは更に悪癖を面に出てきてしまう。

日影は感情的に叫ぶばかりで論理的な言葉を紡がない女が大嫌いであつた。彼女の過去を知つていようとも嫌悪を隠す理由にはならず、ギロリと睨み付ける。

第一次独立遊撃部隊&ふうま宗家内乱勃発の危機直前であつたが、社会の酸いも甘いを経験し、プロジェクトのリーダーとして人の上に立つてきた啓治が割つて入る。

隣に座つた日影の首に手を回し、まるできかん坊の息子を諫めるように笑いかける。

これには、日影だけでなくきららも怒りを引つ込めざるを得なかつた。この二人、相性は悪いが境遇は似通つている。共に父親に裏切られた経験がある故に、自身が抱く父親像を悉く裏切つてくる啓治には何処か苦手意識と同時に尊敬があり、借りてきた猫のようになってしまふ。

その上、二人だけでなくふうま宗家の面々にまでも気を回し、彼が何々と笑うとブラクラの画像になれば百人が百人とも絶叫する顔になつていた四人もようやく冷静さを取り戻して本部の空気は一変し

た。

合理性と人間的な優しさが同居する啓治の他者に対する気遣いは人を宥めるには十分すぎた。

技術力だけでなく、集団内で必ず発生する衝突、その緩衝材としての役割も含め、小太郎は彼を手元に置いているのだ。

「話が脇道に逸れちゃったが本題に入るぞ——それでは！ 第一回独立遊撃部隊面接大会を開催しまああすっ!!」

「どんどん！」

「ぱふー！」

「ぶおおおー！ー！ー！！ ぶおおおー！ー！ー！！」

「コタローも災禍も天音も永久も壊れちゃったクマ………いや、四人は大抵こんな感じかクマ」

小太郎の宣言に、災禍は部屋の隅の和太鼓を叩き、天音は何処からか取り出したプレイウツドチェアホーンを鳴らし、永久は法螺貝を吹く。

珍妙な光景に、ノリのいい——というよりも悪ノリ大好きな啓治はいよーっ！ 待ってましたー！ などと囃し立てているが、他の面々はもうドン引き状態である。

小太郎は兎も角。小太郎は兎も角！ 小太郎は兎も角！ 普段、冷静沈着な三人ですらこれ。目も当てられない。

球磨の言うように決して壊れてしまったのではない。こうやって無理にでもテンションを上げていかないと身も心も持たないからだ。

「面接ね、それはいいけど小太兄にそんな時間あるの？」

「は？ オレがやるの？ え？ オレ死んじやうよ？」

『な、なんて綺麗な瞳をしてるんだ……！』

「オレ死んじやうよ？」

「大事なことだから二回言ったあ……」

「もう限界みたいだクマ。小太郎がこの顔をする時はヤベー時だク

マ」

人の悪意を煮詰めたかのような昏い瞳は何処へやら、見た事もない澄み渡った瞳で本部の全員を見回す小太郎。

それが逆に皆の不安を煽る。普段、暗い人間のテンションが異常に上がっていれば誰だって心配するのと同じ理屈だった。

球磨の言うように、本当に限界が近い。

アサギではどうにならない事柄を丸投げされてどうにかなるように奔走し、老害の追求を躲しつつも自らの手の裡や人材を充実させ、反乱を引き起こした骸佐を連れ戻すべく先を見据えて行動せねばならず、帰ってきた弾正を確実に殺すために情報収集と包囲網を構築しようとし、ブラツクや淫魔王という能力も判然としない上位魔族への対抗手段を模索し、ナディアの政務を手伝いながら教育を施し、ナディアの領民にアドバイスを与えつつ領地の文化や歴史を学ぶ。

その全てを並行して熟しつつ、最終的にはふうま一門をして対魔忍を一枚岩の強固な組織へと変貌させなければならぬ。もう肉体は悲鳴を上げている。

『死ぬ……死んでしまおうぞ小太郎！ 対魔忍を辞めろ！ 対魔忍を辞めると言え！』

と連日連夜肉体は叫び続けているのに、肉体を凌駕する精神力だけで持たせている状態なのだ。肉体も尤もである。

だが悲しいかな。例えば対魔忍を辞めて闇の組織に所属しようが米連に鞍替えしようが彼はどの道苦勞する運命。

アサギとゆきかぜによつてロツクオンさされているし、不知火や九郎とて過勞死回避のために死ぬ気で引き摺り戻すに決まっている。

そうでなかったとしても、対魔忍内部でこれだけの立ち回れるのならば、余所でも同じように面倒事を投げられた挙句、一度やり出した手を抜けない性質が思う存分に発揮され、何時の間にも重要な役割にINしたお！ になつてしまつたらう。

「やれっていうならやるけどさ。白野さんとか不知火さんみたいな大人組は兎も角、オレ達学生組は面接なんてやったことないよ？　ないよな？」

「あー、オレは大人組だけどやったことないな。手足になつてせこせこ働く方が向いてるから。災禍さんや天音さんみたいにノウハウもないから管理職の仕事とか期待されても困るよ」

「その辺りは織り込み済み。私、天音、永久、不知火、啓治、後は日影もいけると判断しているわ。この六人に一人か二人が付く形を取りましょう」

「全員、忌憚のない意見を言ってくれて構わない。一人の視点では見抜けない本性や思惑も、多角的な視点からであれば見抜けるだろう」
「ふむ……それならば、経験のない私達も力になれるし、補佐にも回れるな。問題は数だが……」

「初めは書類選考、その後直接面接で構いませんね、旦那様？」

「ああ、悪いがその方向で頼む。で、面接を通った奴の資料に乗っている以外の情報を集めて、最終的な判断はオレがやる」

「うーん、私に上手く出来るといいけれど……大丈夫かしら？」

「安心しろ、凜花。迷ったならこう考えろ。コイツなら背中を任せられるかどうか、つてな。お前等は未熟だが感性や考え方はまともだ。それが連れてきたなら、最低限、使い物にはなるさ」

「成程、それなら何とか」

「私達でも出来そう……ていうか、私は日影が主導するの納得できないんだけど？」

「は……、ウザ……」

「あー、それよか若！　オレの方も助手欲しいんだけど、そういうのを選ぶのはアリか？」

「全然アリだ。お前の仕事が回れば回るほど、現場の負担が減る」

「今回、球磨は御休みクマ。ケイジんとこの子供と遊んでるクマー♪」

「あら、何を言ってるの球磨？　私の邪眼を使えば貴女でも面接に参加できるのよ？」

「うえっ、藪蛇だったクマー……」

(チャンス！ チャンス！ 今、ハーレム拡大チャンス！ お母さんも自斎もきさら先輩も予備軍だけど、もっともっと拡大して小太兄を雁字搦めにして逃がさないようにしないとね♪)

(娘が見たことない顔で笑っていて怖い!!)

小動物の悲劇、或いは苦労人の喜劇、もしくは真面目
夢魔の慟哭！

ついに出会ってしまった苦労人と小動物

「うへえ……しんどー……」

「肉体的にも精神的にも思ったよりもきついですね」

「書類見て面接して書類見て面接して。でも一向に書類も面接する人数も減らないこの現実。堪えるわ」

第一次独立遊撃部隊大面接大会が開催されてから早三日。

今日も今日とて、プロフィール個人情報に記されて携わってきた任務や生まれ持った忍法に目を通し、当人と顔を合わせて質疑応答を繰り返してきた。

放課後から学生組も加わって猛スピードで進められていたのだが、書類選考を行う者も面接官も少な過ぎて思う通りには進まない。

今はとつぷりと日も暮れ、一般家庭なら食卓で夕飯になっている時間帯。

まだ面接を控えている対魔忍が居たものの、とある理由で小休止となり、学生達は食堂に集まってサンドイッチなどの軽食を摘まんでいた。

今日の面子は雅臣、凜子、紅、凜花、自斎、そしてこの場にはいない日影ときらら、更にメインとして啓治と不知火が参加している。他の隊員と部下は、それぞれの任務や仕事を熟しているか、昼の時間帯に面接をして今日は上がっていた。

それぞれの顔には疲労の色が濃い。己が主導でないとは言え、慣れぬ事柄は緊張と不安を生み、必要以上に体力と心を削るものだ。

緊張感から解放された雅臣はだらしなく机に上体を預けたまま一口でサンドイッチを頬張って飲み込んでを繰り返していた。

凜子と紅と凜花は眉間を揉み解すか肩を回すかしていて、食欲もすっかり減退してしまっているらしく、皿に乗せられたサンドイッチには手を付けずアイスミルクティーだけを口に運んでいる。

背筋をピンと伸ばした自斎は両手でしつかりとサンドイッチを持ち、もぐもぐと食していたが一口が小さいので小動物感が増している。何故か、視線は食堂の入り口へと向けていた。

「それより鬼崎先輩と井河先輩、大丈夫でしょうか……？」

「相手が白野さんと不知火さんだから二人とも素直に言う事聞くでしょ。心配いらぬいらぬ。今日の面接、予定通りに終わらすにはまだ二、三時間は掛かるから休憩に専念した方がいいって。特に獅子神は明日、任務だろ？」

「気にしなくてもいい。あの二人が悪いからな」

「こればかりは、ねえ……」

自斎の口にしたのは、姿のない日影ときららを心配してのもの。

同じ学生組ながらも何故二人だけがないのか。そして、大人組の二人の姿も見えないのは何故なのか。

理由は実に単純。日影は啓治から、きららは不知火からお説教されているからである。

事もあろうにこの二人、全く別の部屋で別々に面接を行っていたにも関わらず、全く同じタイミングで同時に噴火した。

理由は面接を受けに来た対魔忍の態度。

横柄、傲慢、不遜。受け答え以前に立ち居振舞いからも雰囲気が出ている。まるで面接を受けに来てやっていると云わんばかりであり、謙虚さなど欠片も感じられない。

面接を受けに来た者は8割がこれに該当し、1割9分9厘は冷や飯喰らいをしている元ふうま、残りの1厘がまともな者達であった。余りにも酷い割合である。

初めの内は常識の無さに対する信じられなさが勝っていた二人であったが、数を熟せば落ち着きを取り戻し、ふざけた態度に沸々と怒

りが湧き上がる。

男嫌いで感情を表に出しやすいきらら、人の好き嫌いがハッキリしていて嫌いな人間には容赦のなくなる日影。合間合間に悲惨な元ふうま一門の現状を目の当たりにし、まともな者に癒されながらであったとは言え、二人にしてはよく持った。

面接の終了を宣言した後も居座り、合格なんだろう、貴方達では話にならない目抜けを出して、と言う者が二人の前に同時に現れた。

どう考えたところでそんな態度を取れば、実力以前の問題で不合格待ったなしなのだが、力業で押し通せると思っ込んでいる辺りが実に対魔忍である。

対魔忍内部でそれほど重要視されていない啓治や雅臣、日影は兎も角として、アサギの右腕である幻影の対魔忍を前にしてすらこの態度。

元々過剰な自信を持っていたのだろう。それに加えて、ヨミハラ的一件もある。

任務に失敗したわけではないが、噂というのは恐ろしい。不知火だからこそ何の負傷も後遺症もなく無事に戻ってこれたのだが、救出という言葉にばかり目を引かれ、不当に低く評価され始めていた。

彼女はそれを気にしてはいなかった。人の噂など七十五日。優秀と認める対魔忍が一度の失敗や判断ミスで不遇を被る光景は何度も目にしてきたことであり、実力さえ本物ならば其処からの再起はそう難しくもなかったからだ。

だが、確かな実力に裏打ちされた余裕——評価を改善しようと躍起にならなかつたのは、今回に限り裏目に出たのであった。

『更地みたいな想像力と都合の良い思考しかねえのか、テメエは……』
『いい加減にしなさいよアンタア!!』

ただでさえイラついていた二人に堪えるなどという選択肢など既にある筈もなく。

日影は啓治と雅臣、自斎がいなければ面接に使っていた空き教室を

影の式神で覆い尽くしていただろうし、きららは不知火と凜子、紅、凜花がいなければ相手を氷漬けにしていたに違いない。

幸い、迫力に怖気づいた相手は啓治と不知火が必死に諫めている間に逃げ帰り、事なきを得たのだが、二人に対して流石にお咎めなしとはいかず、今に至る。

自斎の同情と心配も納得である。

確かに感情を抑えきれなかった日影にもきららにも問題はあがあるが、それ以上に面接を受けに来る側の態度に問題がありすぎた。

頭の痛い問題に、その場に居た全員は今一度、揃って大きな溜め息を吐くのであった。

「ところで、ふうまは？ 彼なら面接の状態を隠しカメラでも仕掛けて見てそうですけど……」

「獅子神も、若について理解してきちやったなあ……」

「まあ、何となくは……」

雅臣の複雑ながらも感慨深げな表情と言葉に、自斎も複雑な表情で応じる。

小太郎の人となりを理解する。たったそれだけの事なのだが、良い事なのか悪い事なのか判然としない。

理解を深めるとは、近づいていくという事、染められていくという事でもある。付き合いの短い自斎ですら、小太郎が自身の想像を超えた人の道を外れた行為に手を染めているのは薄々察している。そんな彼に近づく、信頼は本物であるが、素直に喜べないのもまた事実。二人揃って微妙な表情になるのも無理はなかった。

なお小太郎によって尤も染められているのはアサギとゆきかぜである。

アサギは染められた結果、精神的に無敵となって最強の対魔忍（ガチ）にジョブチェンジ、ゆきかぜは狙った獲物を逃がさないハイパーグラビティハーレム拡大エンジンヨイガールという母親ですら理解不能の生物と化している。

いずれは自分もあんな風になっちゃうのかなあ、と悲しめばいいのか、恐怖を覚えればいいのか分からない雅臣と自斎を横目に、自分から染められに行った物好き達は口を開く。

「今日はセンザキへ知り合いに会いに行く、とか言っていたな。任務ではないようだったが……」

「ならアイツのところだな。私もきららと任務でセンザキに行った時、帰りに顔を出してきた。相変わらず元気だったぞ」

「ああ、銃兵衛の……あの子、まだギャングスターだのなんだの言ってるの?」

「え? 対魔忍、なんですよ? ギャングなんて、どうして……?」
「骸佐が反乱を起こす前くらいにね、突然ギャングスターになるって言い出した挙句、対魔忍を抜けたのよ」

「抜け忍じゃないですか……!」

「そうだ。性質の悪いことにまた強くてな。一家揃って肅清部隊を躲して、センザキに居を構えて闇の勢力の仲間入り。まあ、悪い奴ではないからな。アサギ校長も抑止力に成り得ると後回しにして貰っているんだ」

「何だか、よく分からない人、ですネ……?」

「私達もよく分からない」

小太郎の会いに行った銃兵衛という抜け忍は、自斎にとってエキセントリックな性格にしか思えず、思わず宇宙を垣間見た猫のような顔をする。

紅と凜花も同じ様な顔をして、同じ様な感想を抱いたのだろう。遠い目をして、後輩の顔を眺めていた。

金崎 銃兵衛。

彼もまた小太郎の幼馴染の一人であり、元ふうま一門に当たる。

二車の傘下であった金崎家に生まれ、幼くして金崎家伝来の邪眼にも目覚めていたために骸佐や凜花と同じく将来を嘱望されていた。その繋がりもあって、小太郎と引き合わされたのである。

弾正反乱後、骸佐と共にアサギに下り、五車で生活を送っていたが、家や自らの立場の危うさなど何のその。接触禁止令の出ていた小太郎は勿論の事、疎んじられていた紅、対魔忍内部の立ち位置に苦慮していた紫藤家の一人娘である凜花にも気軽に声を掛ける始末。

よくも悪くも自由気儘な風来坊、気風のいい男で頭も回る。周囲をまるで考えない行動の数々も、骸佐が大人しくしていれば、下についている自分が好きにやっても老人達は何もしてこないという確信があったからこそであった。

だが、骸佐が反乱を起こす半年ほど前に、何の前触れもなく突如として五車を金崎家総出で出奔してしまう。

ご丁寧に頭領であるアサギ、宗家の小太郎、主家である骸佐の元に、『金崎 銃兵衛及び金崎家はギャングスターになりたいので対魔忍を辞めます』というふざけた書状と有名漫画の五部を送った上で。

これにアサギは小太郎の幼馴染と目を掛けていた故に頭を抱え、小太郎はアイツならやりかねえと溜め息を吐き、骸佐は真っ白になった。

特に酷かったのは骸佐だ。

時期的に反乱へ向けて着々と準備を進めていた頃。その最中、信頼していた部下が何だかよく分からない理由で離反したのだ。そりや真っ白にもなる。

銃兵衛からの書状をビリビリに破り捨て、半泣きになりながら現実逃避で一緒に送られてきた五部を読みながら面白いじゃねえかこれ、と呟き、頭の中でアサギと老人に言い訳を必死で考えた。

無論、そんな事をすれば抜け忍を粛清するため、追い忍が差し向けられる。

この粛清部隊は頭領のアサギですら行動を制限できず、独立性が非情に強い。対魔忍内部でも部隊の人員を知る者は極僅かであり、五車で普段何気なく話している相手が粛清部隊の一員などということも十分に在り得る。

これほど強い独立性を有するのは、数多の内部情報を抱えた者が外部へと逃げれば如何なる悲劇を招くのかを予見できるからこそであ

り、また方が一、対魔忍内部で権力を持つ者が足抜けした場合でも問題なく肅清を行えるように、という処置であった。

しかし、銃兵衛はこれをあつさり撃退し、逃亡。今や、センザキを支配する顔役としてのし上がっていた。

肅清部隊は追撃を行おうとしたものの――

『これ以上の追撃は無謀よ。あちらも闇の住人を飲み込んで戦力を整えている。肅清部隊もまた対魔忍の戦力。ただ一人の抜け忍に拘って無駄に戦力を消耗する行為は頭領として認められないわ』

『しかし――』

『貴方達の仕事の重要度は理解できているつもりよ、よくやってくれている。でも、今の所、彼はこちらの情報を漏らしている様子はない。此処は様子を見ましよう。センザキの治安が安定するのならそれはそれで此方の利となるわ』

――小太郎に助言入れ知恵されたアサギの言葉によって静観が決定した。

肅清部隊の必要性と重要性を認めることで自尊心を満たしつつ、銃兵衛の生む利益を説き、不利益を被った際には即応できるように約束する。

これには肅清部隊も不詳不詳ながら領かざるを得なかった。アサギの言い分間違いはなく、彼等とて仲間を無駄に消費したい訳ではない。ただ利を説いただけではこうもすんなりと納得はしなかっただろうが、自尊心を擽ることで納得を引き出していた。

最強の対魔忍でも小太郎の助言さえあれば、昨日、小太郎ゼミでやったところだ！ と腹芸まで出来ちゃうのであった。

「アイツは闇の世界の事情通だ。対魔忍では手に入れられない情報も入手している事があるし、そこいらの情報屋よりも余程信頼できる」「ああ、だから心願寺先輩もふうまもわざわざ出向いてるんですね」「それに、時期が時期だから、理由は弾正についてでしょうね。互いに得ている情報の照らし合わせと包囲網を完成させるための協力の要

請、そうでなくても弾正からの要請は全て拒否するように釘を刺しに行った、つてところかしら？」

「何だ、凜花。随分と小太郎の部隊員らしくなったじゃないか」

「当然よ——と言いたいけれど、お父様と小太郎の影響でしょうね」

漠然ながらも小太郎の向かった先から目的を推察する凜花に、凜子は揶揄うような言葉を口にしたが、返ってきた反応は寧ろ喜ばし気ですらあった。

元々、彼女達とて地頭は決して悪くはない。全体の教育方針や周囲の環境、押し寄せてくる魔族や米連への対応に追われる余りに若手への教育が短時間で生存率を上げるために強さを引き上げるものへと固定化されてしまい、思考までも固定化してしまっているだけ。

相応しい頭の下で手足となれば、徐々にではあるが相応しい手足へと成長していく。その中でも凜花は父が立场上、政治的、家の生存戦略的に苦慮していたが故に、そうした思考や行為への適応は群を抜いて早かった。

これは小太郎にとっても嬉しい誤算であった。

政治的な思考を持ち合わせているのは己と災禍、天音の三名で、補佐には日影がいる程度。家にせよ部隊にせよ大目標の方針決定は思考が固定されてしまっているのは、危うい面があるのも確か。

凜花という新しい風が、新たな思考を運ぶ。それはそのまま新たな混乱を生みかねないものではあるが、同時にこれまで見えてこなかった新たな視点を得られるメリットもあるのだ。

「あー……獅子神、金崎の話は井河の前でしない方がいいぞ」

「え？ どうしてですか？ 仲が悪い、とか……？ 確かに井川先輩が嫌いそうな人ですね」

「いやー、そういうのもあるんだけどさ……なあ、心願寺？」

「まあ、分からなくも無いと言うか、仕方ないと言うか……」

「私も知っているけど、アレはねえ……どちらも直接悪い訳じゃない

のが、ね」
「……………」

日影の知り合い、そして銃兵衛の幼馴染にとっては共通認識があるらしく、雅臣と紅と凜花は顔を見合わせて言うべきか言わざるべきか、判断に迷っているようだった。

確かに、自斎が話を聞く限りでは日影の好む人柄ではないように思える。彼が好み、認めるのは善人だ。完全無欠でなくとも、時に弱さから人としての矜持を忘れた行動を取ろうとも、日々を真面目に生き、細やかな良心と精一杯の勇気と共に歩む者こそ、彼は最優先で救い上げるべきと考えている。それを考えれば、どれほど悪人でなくとも自らの責任すら放棄して勝手気儘で奔放に生きる銃兵衛とは相性が悪かろう。

ただ、相性は悪くとも日影の許容範囲には入るとも考える。何せ、小太郎という人の道を自ら外れる者ですら善人への対応と日本と国民の安全を守る有用性の観点から許容しているのだ。精々、露骨な毛嫌いを示す態度程度で済ませるだろう。

ならば、何故なのか。

理由が判然せず、助けを求めるように凜子を見たが、彼女も事情を知らないらしく首を傾げていた。

「金崎がどうしたって？」

『うつわあつ!?!』

「い、井川、お説教終わったのうつ!?!」

「ああ、ついさっきな。悪かったよ、オレもまだまだガキのままだ」

「ううー…………凜子ちゃん、紅ちゃん、凜花ちゃん、ごめんね…………どーして私ったら…………もー…………」

銃兵衛と日影の関係に思いを巡らせていた全員は、戻ってきた日影ときららの存在に気付いておらず、声を掛けられて悲鳴を上げた。

ただ、二人の声に何時もの覇気がない。特定の条件下とは言え、き

ららと同レベルで感情のコントロールが出来ていなかった事実には日影は酷く落ち込んでおり、きらはきららで不知火から肅々と諭されたらしく、自らの行為を間違いだつたと受け入れて恥じていた。

手には盆に乗った軽食と飲み物がある辺り、しっかりと休憩を取るように啓治と不知火から諭されたのだろう。大人の気遣いとフォローを感じ取れた。

落ち込んだ様子であつたが、素直に聞き入れている以上、反省としては十分。

皆は特に責めるでもなく、テーブルに付けるようそれぞれが席を詰め、隙間を開けた。

「暫くしたら白野さんも不知火さんも来るとき。休憩終えたら、面接再開だ」

「うへえ……面倒だけど、頑張んなきゃなあ」

「これも仕事だからな。次は巧くやる。それから、オレの前ではクソ姉貴の話はするな……!」

(今は金崎くんの話をしてたわよね、どうして井川先輩のお姉さんの話が……?)

今まで話していたのは銃兵衛の話であつたにも拘わらず、どうして日影の姉が関わってくるのか。

思わず疑問を口にしようになった自斎であつたが、日影の見えないところで雅臣はぶんぶんと思いつき切り首を左右に振り、紅と凜花は彼の行為を肯定するように思い切り首を上下に振る。絶対にこれ以上話すな、ということらしい。

結局、銃兵衛と日影の関係性は、自斎に明かされることなく有耶無耶のまま終わってしまう。

後日、自斎は全てを知る事になるが、日影の怒りも尤もだと納得するには十分すぎる理由であつた。

「で、お前の目から見て、どうだった？」

「拠点も綺麗に片付けられておりましたし、慌てて逃げた様子もない。小太郎様と同じ結論かと」

一方その頃、小太郎はセンザキ——ではなく、五車からバスと電車を乗り継いで三時間に位置するまえさきに居た。

政府の地方振興政策によって指定都市となり、税の優遇によって国内外から大企業が進出。

それに伴い様々な店や娯楽施設が建設されるに至り、俄かに賑わいを取り戻しつつある地方都市だ。

ただ、人が集まれば夜も煌々と明かりが灯り、街を覆う闇もまた大きくなる。

マフィア、ギャング、ヤクザ、売人、娼婦、人ならざる魑魅魍魎。ありとあらゆる闇の住人が金と欲望の匂いを嗅ぎつけて、火に吸い寄せられる蛾のように集ってくるものだ。

小太郎が今いるのは、そうした住人によって形成されたまえさきの繁華街。

東京キングダム、地下都市ヨミハラ、廃棄都市アミダハラに比べれば細やかなもので秩序だったものではあるが、平穏な街の一角は確かに闇に侵食されている。

そんな街の人込みを、普段使いのスマートフォンを耳に押し当て、何者かと会話しながら小太郎は進んでいく。

本来の予定では凜花の予想通りにセンザキへと辿り着き、銃兵衛と顔を突き合わせている頃合であったが、乗り継ぎで立ち寄ったまえさ

きで一つの懸念を解消するため、この時間まで街を調べて回っていた。

それはまえさきを拠点としていた元家臣——葉隠家と当主である真千子の動向であった。

葉隠家は反乱の最中に、前代当主にして真千子の父親が敗死。若くして一人娘であった真千子が当主の座に収まり、反乱が終息するとアサギと和睦を果たして独立した。

その後はまえさきの闇に身を潜め、葉隠家を維持するために闇の勢力として街の一角を支配していた。

独立が認められたのはアサギも弾正の反乱によって疲弊した状態で事を構えなくなかったからであり、正直なところそれほど警戒に値しない人物であったからだ。

真千子は上昇志向の強い人物であるが、集団を成長させる事に尽力するよりも、個人としての実力を伸ばす方向に傾倒しており、政治的な思惑や目的にもとんと興味を示さない。

個人としての実力は兎も角として、家や集団を成長させることは叶わず、能力的にも維持が精一杯。分かり易いアサギタイプ——つまり、最前線で戦う方が向いている戦闘要員であり、当主に向いていない。よって急激な成長も拡大も心配する必要はなく、対魔忍全体の驚異とは成りない故に独立を認めたのであった。

真千子も頭は固いが、柔軟な対応が出来ない人物でもないことがその判断に拍車を掛けた。敵対しなければならなかったとしても、明確な戦力差を示せば戦わずしての降伏と終結を期待できたからである。

この判断は小太郎も認めるところ。アサギ以上に真千子の人柄を知る彼からしても、一概に悪手とは呼べないものであった。

しかし、今は状況が違う。米連に逃げ延びた弾正が、何を考えているのかわざわざ日本に恥を晒しに戻ってきたからである。

弾正の思惑が何にせよ、いま喉から手が出るほど欲しいのは、ワンチャンあるかもしれないと博打紛いの思惑で米連からの預けられた戦力でも、淫魔と手を結んで得られた借り物の戦力でもなく、自分の命令に何でも従う都合の良い、そして自由に出来る戦力だろう。

弾正に裏切られている真千子と葉隠家がそれに該当する筈などないのだが、自身にとつて都合の良い事しか考えていない弾正の事、彼女達を裏切った事実など頭の中にないに違いない。今こそはふうまの忠臣として、と恥知らずな忠誠を求め、首を縦に振らねば借り物の戦力で押し潰すのは目に見えている。

別段、小太郎もかつての家臣を心配になつたなどという人情に突如として目覚めた訳ではない。警戒したのは真千子が戦力差から首を縦に振って従臣してしまうこと。弾正の戦力が増えれば増えるほどに潰すのに手間が掛かる。

これが銃兵衛であれば、弾正からの要請にこやかに首を縦に振つたふりをして、今ある基盤を全て使い物にならなくなるように即時処分した後、一家はそれぞれバラバラに離散して遁走。意気揚々とやってきた相手を肩透かしを喰らわせて唾然とさせた上、全く別の場所第一家揃つて集結し、おちよくり倒した上で再起を図るという有能有能&有能クソガキムーブを見せるが故に心配いらぬが、根が真面目な真千子はいかぬ。

真面目に真正面から受け立とうとするか、真面目に面従腹背して耐え忍ぶかの二択だろう。闇の住人として、些か以上に真面目過ぎるのである。

「葉隠は二車についたか。流石は骸佐、ちゃんとしてる。動きが早くて結構な事だ」

「笑い事ではありません。これで二車の勢力はまた拡大します。此方が粒揃いである事は認めますが、戦力差が余りにも大き過ぎる」

「何、組織がデカくなればなるほど動きは緩慢になる。それにオレと全面戦争するなら、投入するのはアイツが信頼する奴等だけだ、じやなきや意味がねえ。其処まで大規模な戦闘にはならないよ。見た目や数字ほど奴の本当の意味での味方はいないし、暫くは足元を固めるのに必死にならざるを得ない」

「弾正相手には、その張り子の虎で十分、ですか」

「今の所はな。あの考えなしのおっさんでも二の足を踏むレベルの大

きさだ。そうこうしている間に着々と信頼できる仲間を集める。いいねえ、ちゃんとしてる。実にちゃんとしてる。ぜってえー連れ戻す。それで死ぬほど扱き使ってやる」

(骸佐殿も哀れな……)

弾正を警戒しつつも、己の目的のために先を見据えた行動に出たであろう骸佐に対して、小太郎は素直に称賛の声を送った。

ただ、その顔に刻まれた笑みは凶悪そのものであり、逃がさん！

貴様だけは！ という執念で塗れている。骸佐くんを捕らえた暁には生き地獄道中を引き摺り回すつもりであった。

電話越しに会話している人物は、思わず骸佐に同情してしまう。

小太郎の把握していたまえさきにある真千子の拠点は蛻の殻。

家財や書類は綺麗に処分されており、金と金に換えられるものは何もなかった。

その上、追跡可能な証拠や髪の毛などの彼女達が存在していた証さえも綺麗さっぱりなくなっている状態。

此処まで自らの痕跡を丁寧に消せたのは、時間に余裕があったからであり、これまで築いてきた基盤を捨て去る方向で動いていたからに他ならない。

真千子が転がり込む先など骸佐のところ以外には在り得ない。

銃兵衛のところも元ふうまという繋がりで在り得なくはないが、彼女が転がり込む先としては些か家格が軽く、自ら葉隠家の弱体化を宣言しているようなもの。

どうせならば、現在急成長中の骸佐の所に元ふうま八将の繋がりとして向かい、従属ではなく同盟として迎え入れられた方が家としても旨味が大きいからだ。

「このままセンザキへ向かう。引き続き頼むわ、無形」

「御意に」

最後に電話越しの相手の名を呼んだ小太郎は、そのままスマート

フォンをポケットにしまう。

奇妙な相手であった。

その声は男であるのか女であるのか判然とせず、年老いた老人のようであり無垢な子供のようでもある。加えて言えば、機械音声のような不気味の谷すら存在している。

本当に人の声帯器官から発せられた声なのか、機械によって形作られた音声なのかすらも分からない。

彼或いは彼女もまた小太郎個人を支える部下の一人。

無形と呼ばれた人物は小太郎にとって唯一人の御庭番。その立ち位置は、ふうま宗家においても対魔忍内部においても殊更に特殊である。もし無形の存在を知れば、周囲の家は戦慄するに違いない。アサギを敵に回すよりも遥かに厄介で危険度が高いからだ。

だが、それを知る者は数少ない。五車のデータベースにも個人情報や忍法を登録されている歴とした実在人物でありながら。それは無形の生まれ持った忍法と性格に由来するものであった。

「さて、センザキに着くのは深夜。五車に戻るのは明日の朝か」

小太郎は、一仕事終えて次なる仕事に向かうべく、駅へと向かう。歓楽街だけあってドギついネオンの輝きに満ち、行き交う人種も決して善良とは言い難い。

それでも小太郎の年を考えれば、街の雰囲気にはそぐわない。彼の同年代など存在するはずもなく、まだ街は法の範疇にある。

疎らな人波に揉まれようとも誰かが彼の存在に気付くようなものであるが、誰一人として気にも留めずに擦れ違っただけは消えていく。

余計なトラブルを避け、無駄に目立ちたくはない小太郎が意図してそうしているのだ。

単純に気配を殺すだけでは手練れには突如として浮かび上がった一人分の空白に気取られかねない。故に、気配を殺さずに存在を殺す。

多人数で店に入ったのに、何故か常にサービスの水が入ったコップ

が配られない人物が居るように、気配を殺さずとも存在を認識されない術はある。

ちよつとした立ち居振る舞いや息遣い、表情や体臭の変化で、人は警戒や認識に値しない路傍の石ころになれる。姿を消せずとも、目に映らない存在にはなれるのだ。

運が良かったのか、はたまた修練の賜物か。

小太郎は何のトラブルにも巻き込まれることはなく、路地裏に身体を滑り込ませ――

「お、おやびくくくくん！ 助けてくださいよおくくくくく!!」

「やっちまっってくださいよお！ 親分くくくくくくくくく!!」

「……………は？」

――全てが台無しにされてしまった。

路地裏へと足を踏み入れた瞬間、両腕にしがみついてくる二人の少女。

片や蝙蝠のような翼を背中に生やし、下着姿のような大事な部分しか隠れていない格好の少女。もう一方は鴉のような翼を背中に生やし、着崩した和装のような格好の少女。

無論、小太郎は会った事もなければ、顔すら知らない少女達である。全く予期していなかった出会い、そして見当外れで心当たりが全くない助けを求める声に小太郎は固まった。

この瞬間から悲劇は始まった。
小太郎にとっては何の益もなければ労力ばかりが掛かる苦労しかない一晩に。

二人の少女にとっては、利用してやろうと助けを求めた相手が最も関わってならない男であり、ひたすら恐怖に慄く一晩に。

そして、未だこの場に現れぬ真面目な少女と聡明な女性にとつては、小太郎の手腕と容赦の無さに戦慄する一晩に。

この時は渦中の人物すら、出会いと同様に予期しないものだった。

苦勞人曰く、小動物？　は？　そんな可愛いもんかよ、ただの害獣の間違いだろ？　との事

「うぎ。おら、散れ散れ、邪魔だ。みすばらしいガキども。もしくは死ぬね」

「な、何をう——！　じゃなかったっ！　親分っ、やっちまいましたよよ！」

「そ、そうですよお、親分。可愛い子分のためにここは一肌脱いでやって下さい！」

見ず知らずの少女二人に絡まれた小太郎であったが、落ち着きを取り戻すのにそう時間は掛からなかった。

必死に自身に縋る可愛げのある少女達に何の感情も籠っていない瞳を向けるだけで、まともに取り合おうとすらしていない。

それもその筈、背中に生えた翼といい、頭から伸びる角といい、露出度の高い格好といい、どう見たところで人間ではない。

有翼種の魔族であるのに間違いはなく、彼が守ってやる範疇にある相手でもなければ、好きこのんで関わり合いになりたいタイプでもなかった。

大方、人界へとやってきた弱小魔族だ。

力も弱ければ格も低く、頭の回転も遅い虐げられるだけ弱者が、自分達よりも能力の低い種族の世界にやってきて一発逆転を狙う典型は後を絶たない。

そうした者は大抵、同族の格上に食い物にされるか、格下である人間にすら良いように利用された上で捨てられるのがオチ。どちらにせよ、進んで関わることで自体が馬鹿になる手合いに違いはない。

それでも小太郎の対応は、内容は兎も角として言葉で窘める比較的

優しいものだった。

普段の彼であれば見ず知らずの誰かが己に触れに来た時点で問答無用で首の骨を押し折る、苦無で喉を搔つ捌く、銃弾を眉間に叩き込むくらいのは平気かつ反射でやるのだが、骸佐の対弾正を見越したちゃんとした対応で機嫌が良かった故に寸でのところで肉体の反応を抑え込んでいた。

これが小太郎にとっての不運の始まりであり、少女達の最後の幸運になるなど、まだ誰にも分かっていたいなかった。

「親分だあ……い！ おい兄ちゃん！ テメエがこのガキどもの元締めかあつ?!」

「ッやつちまう」だあ？ 面白エ、何をしてくれるってんだおいつ！」
(面倒臭い)

その時、小太郎の背後から二人の男が現れる。

片や銃で武装した屈強なオークに、片やフード付きのコートを纏い、剣を片手に握った魔族の男。

いずれも闇の町の用心棒か、金の匂いを雇われ傭兵といった風貌で、此方も関わり合いになりたい人種ではない。

この時点で小太郎は自らの対応が失敗であったと悟っていた。

少女達が見ず知らずの自身を親分などと称して助けを求めてきたのは、罪を押し付けるため。

相手が親分と子分の間柄と勘違いすれば、まず狙われるのは親の方。親を捕らえて搾り上げれば、自然と子分の居所も知れる以上は当然の判断だ。

況してや、相手は小太郎と少女達の真の関係性を知らない。その場の状況と言葉だけで判断する他ない。そして押し付けられる相手は何が何やら分からない混乱から弁明もままならない。成程、巧い手と言えよう——押し付ける相手が冷静さを失わない小太郎でさえなければ、だったが。

小太郎は面倒な事になったと思いつつも、おもむろに少女達の腕に

振り解き、懐から一つのマスクを取り出した。

顎先から鼻を覆う面頬と使い物にならない右目を覆い隠すような眼帯が一体化したマスクだ。より異様であったのは面頬の部分が歯茎を剥き出しにしたかのようなデザインであった事か。

「げえっへっへ！ 親分、後は頼みましたでやんすうー！ー！ー！！」
「きやはははっ！ あっしらに気にせず思う存分やっちゃまってくだせえ！ これにて失礼させて頂くでやんすうー！ー！ー！！」

「おい待てエ、失礼すんじゃねえ」
「ぎにゃああああああああああああああ！！！！」

自分達の思惑通りに進んだ、と下衆笑いを見せて脱兎の如く逃げ出す二匹の小動物。

が、世の中そんなに甘くはない。そして小太郎はもっと甘くない。逃げ出そうする二人の長い髪を問答無用で掴んで離さなかった。

脱兎の如き勢いに合わせ、少女の髪が毛根から抜けても構わないつもりで握り締められたが故に、二人の首はガクンと後ろに引つ張られて痛めるだけに収まらず、ストッキング相撲をでもしているかのように顔の面まで引つ張られて悲鳴を上げる。

「ううう、髪が、首があ……！ ぐぎゅうっ！」

「あがつ、い、今、首から変な音が……ひぎいっ！」

「お、お前っ、突然何してやがんだっ!？」

「いや、オレはコイツ等とは無関係だし。仮にコイツ等の言うように元締めだったとして、こうすることに問題なんてないだろ？ 子の不始末を拭うのは親の役割だしな。そして、二人はあんた等に引き渡す」

「な、何だと……!？」

折り重なるように引き摺り倒された二人の上に腰を下ろし、小太郎は追手らしき二人に話し掛ける。

別段、小太郎としてはこの場を穩便に収められればそれでいい。自身の下で呻いている二人は己を陥れようとした。報復する権利はあっても助けてやる意味がなく、また二人がどうなった所で知った事ではない。

あくまでも少女と無関係と主張しつつも、それを追手二人が信じなかったとしても何の問題もない。

仮に少女が主張するように小太郎が親分だったとして、自身の知らないところで馬鹿をやらかした部下をケジメのために引き渡すだけ。誰の目から見ても筋が通っている。

「嘘！ 嘘でーす！ 親分にやれって言われたからやりましたー！」

「そうだそうだー！ 子分を売ろうなんて最低だぞー！」

「最低なのはお前等だ。反省が見られんな。ところで知ってるか？」

日本のヤクザは何かやらかした時に謝罪や反省の意を込めて自ら小指を切り落とす。これはエンコ詰めと呼ばれる風習、習慣だ。折角だ、お前等もやれよ、な？ もしかしたら許してもらえるかもしれないぞ。それとも反省してないのか？ ん？」

「し、してるしてる！ 反省してるっっ!!」

「ぎゃーーーーーーー！！ やめてやめてやめてーーーーーー！！！」

往生際悪く喚き立てる二匹の反応など分かり切ったものだったのだろう。

小太郎は眉一つ動かさず犀利な光の宿る視線を藻掻く二匹に落とし、懐からゆつくりとグルカナイフを取り出す。

傭兵として有名なグルカ族が日常的に使う汎用大型刃物。日常生活でも扱え、内反りに折れ曲がり、汎用の性質が示す通りに戦闘にも使用できる。

小太郎の手にしていたのは幅広で肉厚の刀身を持っており、低地のグルカ族が農作業に用いるタイプではなく、高地のグルカ族が硬い木の枝や幹を打ち払うに斧や鉞のように使用でき、投擲も可能なタイプ。これなら少女達の小指どころか手首までスコンと落とせるだろう。

う。

彼が本気であると気付いたらしく、少女達は顔を蒼褪めさせると拳を握って小指を掴ませまいと必死であった。

「お、おい……！」

「ああ、アンタ等もコイツ等の小指なんて受け取っても困るか。何にせよ、雇い主に連れてくるよう頼まれたのは元締めの方じゃなくて主犯だろ？　これが何をやったか知らんが、オレは本当に関わりはない。仮に関わっていたとしても、オレまで連れていく必要はない。報酬も追加されないだろうし、無駄骨折らずに目的だけ果たしなよ」

恫喝に恐怖せず、泣き喚く二匹に同情せず、あくまでも冷静に諭す言葉に、傭兵二人は言葉を詰まらせる。それは小太郎の言葉が正しかったからだ。

二人が何をやったのか、正直なところ傭兵達は依頼主である地元ヤクザから何も聞いていない。

ただ、大した力もないガキを捕らえるだけで、目を剥くような大金が手に入ると聞いて飛び付いただけ。

依頼主は血眼になって対象を探していたが、元締めや黒幕の存在は認識しておらず、またそんなものが存在しているかも興味がないように、報酬の追加については一切口にしていなかった。

とどのつまり、依頼主の目的は顔に泥を塗られた故の報復ではなく、本当に二人の捕縛だけが目的。少なくとも、傭兵がそう判断できるだけの要素は揃っていた。

何も、小太郎は全てを把握していたわけではない。

単に、自分の下で藻掻いている二匹が団体行動や集団行動が出来ない性格であることから事実を推察したに過ぎない。

何らかの組織に属しているとは考え難い。強者に諂い弱者に威張る、短い時間からでも伝わってくるそんな性格の二人が後ろ盾があるのなら、其処に逃げ込まない筈はないからだ。

ならば、二匹のやらかしは誰かに唆されてのものではなく二人だけ

で実行されたものと考えていい。その上、短絡的で計画性はないが、傭兵を動かせるほど裏の世界に精通して、資金力を有する個人か集団、或いは組織が動かざるを得ない事態を引き起こしたらしい。

状況と二匹の性格を鑑みるに、やらかしの内容は相手を選ばず悪戯でもして顔に泥を塗ったか、金儲けをしようとして粗悪品でも売りつけたか、のどちらかが最有力候補。

だとするのなら、仮に自身が元締めだったとしても二匹を引き渡してしまえば、彼女達は自身のやらかしを償い、傭兵二人は約束の報酬を得て万事丸く収まる。二匹がどのような目に逢おうが小太郎には関係なく、あるかもわからない追加報酬を期待して傭兵が無駄に頑張る必要もない。

「……いや、こんな幼気なガキを売り渡そうなんぞ、男の風上にも置かねえ奴だ！」

「そうだな、兄弟！ コイツはメチャ許せんよなあ~~~~~」

「なんでそーなるのっ」

「い、いいぞいいぞー！ やっちやえやっちやえー！」

「そうだそうだ！ こんな極悪非道な親分なんかやつつけちやえー！！」

突如として意味不明な正義感に目覚めた傭兵。余りの馬鹿さ加減に頭痛を覚える小太郎。自分を捕らえに来た筈の傭兵を応援し出す小動物二匹。

正に混沌カオス。これならば、ヨミハラの無法振りの方がまだ秩序だってさえいる。

闇の世界の住人など、九割九分九厘がその場の感情と自身の稚拙な正しさだけを信じて生きている、脳の代わりにスポンジが詰まっているとしか思えない連中である。

小太郎もある程度予想はしていたが、此処まで馬鹿だと頭痛の一つも覚えよう。

この傭兵達であるが、呆れ果てたことに心の底から本気で言っているのである。

今し方まで自分達はその幼気なガキを痛めつけて売り払おうとしていたことすら棚上げしている。いや、棚上げしている自覚すらあるまい。

その場の状況と感情だけで条件反射的に生き、一貫性などなくただ欲望と感情にのみ正直。これが頭魔族の実態である。頭対魔忍とどちらがマシなのか。

「あーはいはい。好きにしてくれ、付き合っちゃいられんわ」

「ひきやあつ!? ど、何処に手入れてるんだよお！ エツチ変態スケベ!!」

「テメエ！ 逃げるのか?!」

「逃げるに決まってるだろアホらしい。選ばせてやるけどな。今の気分でオレを追うか、それとも金のために二人を追うか。どっちがいいかね？」

余りにも馬鹿馬鹿しい。

論理もなく冷静でもなく、矛盾しかない傭兵も。自業自得でこんな状況に陥っているにも拘わらず、未だに自分の何が悪かったのか一切気付いていない小動物二匹も。成り行きとは言え、付き合ってしまった自分自身も。皆等しく馬鹿馬鹿しく愚かしい。

ただでさえ馬鹿な状況で馬鹿な自分を再認識したというのに、これ以上付き合っていたらただでさえ馬鹿なのに更に馬鹿になってしまいうそだ。もう小太郎には、一刻も早くこの場から離れたいという思いしかなかった。

彼は重なっていた小動物の身体の下に手を突っ込んでから立ち上がり、今度は二匹の身体を片足で抑えつけた。

見せつけるような行為に二人の傭兵は固まった。今、彼等に押し付けられた選択肢は二つ。この後、逃げる小太郎を追うか、それとも逃げる二匹の小動物を追うか。

ただ欲望と感情にのみ正直で理論もなければ刹那的。とてもではないが正確に次の行動など予想は出来ない。精度を高めることは出来ても完璧には程遠い。

ならば、選択肢を押し付けて狭めればいいだけの事。欲望と感情に天秤に乗せて、どちらを取るのか選ばせる。これで確立は二分の一。二手に分かれて一挙両得を狙おうとも、小動物は兎も角、自分は問題なく対処できる。

そして、欲望と感情の鬩ぎ合いでエラーを起こした傭兵を尻目に、すつと小動物を抑えつけていた片足を離す。

最適を選ぶ時間すら与えない。選択を決定する時間が短ければ短いほど、間違いを選ぶ確率は上がるのだ。

「な、舐めやがって、俺達を誰だと思っていやがるっ！」

「泣く子も黙る傭兵義兄弟！ ドグ&ハッシュとはオレらのことだぞ！」

「やった！ 今だ、逃げるよミナサキ！」

「がってん、リリム！ ——って、カチャンって何？」

「ま、どっち選んでも同じなんですけどね」

傭兵達は結局、両手をポケットに突っ込んだまま背中を向け、家に帰るのと何ら変わらぬ足取りで去っていく小太郎を追うことを選んだ。

依頼を達成した金で豪遊するよりも、自分達を舐めた相手を叩きのめす方が重要であつたらしい。

分からなくもない。傭兵など実力以上に噂や名が重要な職業。ヤクザやギャングのように顔にクソを擦り付けられるのを何よりも嫌う。

最早、自分達に目もくれず、地を蹴ろうとしていた傭兵の姿に小動物二匹は揃って立ち上がり、一目散に逃げ出そうとした。

だが、彼がそれを読んでいない筈はなく、保険は既に掛けてる。

片割れの少女、ミナサキは聴き慣れない音に首を傾げて音源に視線

を向けたが、目にしたものに対して更に首を傾げるのであった。

「あれれ〜?? 何かなあ、これは〜〜〜??」

「うわあ、ボク見た事あるぞお〜〜〜? 丸くて、ゴツゴツしてる奴う〜」

「……………手榴弾だあああああ!!」

「な、何だとお?!」

立ち上がる直前、ミナサキの下に手をつっ込んだのはこれを仕込むため。

既に安全ピンは外れており、ミナサキの身体によって抑え込まれていたレバーも外れて信管は作動済みだった。

使ったのはM26手榴弾。

開発されてから既に100年近くが経っていながら未だに現役のベストセラー。というよりも、シンプルな兵器故にわざわざ新たな構造や機構を開発する必要性がなかったのだろう。ただ、性能は常に^{アップグレード}向上している。

生成破片をばら撒く効率は開発当初の比ではなく、魔族の高い生命力や硬い皮膚に対抗するため、高性能化した爆薬を使用して確実に急所まで届く。その上、味方を巻き込まないように破片の重さが計算し尽くされており、殺傷範囲を据え置きだ。

どうでもいい四人の狼狽など何処吹く風。

小太郎は普段通りの足取りで路地裏から更に細い路地へと身体を滑り込ませて、壁に背中を預けた。

周囲に民間人がいないことは確認済。そもそも、この時間帯に娼婦やヤクザの多い区域に民間人は足など踏み入れない。脛に瑕があるか、闇に片足をつっ込んでいるかの二択。いずれにせよ対魔忍の守る範疇にはなく、小太郎にとってはどうでもいい誰かである。

「や、や、やばい〜〜〜!!」

「うわわわ、逃げろ〜〜〜!!」

「お、俺達も——えっ？」

背中の羽を限界まで羽ばたかせ、小太郎が消えていった方向に向けて脱兎の如く二匹の小動物。

その時、宙へと舞うために地を蹴ると、彼女の足先が手榴弾に触れて転がり出す。当然、手榴弾が転がって向かう先は彼女達の進行方向とは逆——即ち、傭兵達の方向である。

——刹那、手榴弾は我慢の限界を迎えたように爆ぜた。

派手な爆炎もなど起こらない。あくまでも生成した破片による殺傷を目的としている以上は当然だろう。

傭兵達が逃げる暇もなく、耳を劈く音と共に無数の破片が撒き散らかされる。如何に人間を越えた生命力を持つ魔族であったとしても、1m未満の距離で手榴弾が爆発すれば一溜まりもない。

僅かに上がった煙が晴れた後に残ったのは、機能に定められた通りに撒き散らされた破片によってズタズタに引き裂かれた死体だけ。末期の言葉も断末魔の叫びすらありはしない。

損傷は酷いものだ。原型は保っていたが、服は数えきれないほどの破片によって襤褸布同然。露わになっていた頭部と顔面は個人を認識できないほどに崩れていた。

俄かに繁華街が騒めいた。

当然だ。此処は戦争状態にある国でなく、無法そのものの東京キングダムやヨミハラではない。手榴弾の爆発音は明らかに非日常となる比較的平和で法の内側にあるまえさきなのだから。

驚きと好奇心で路地裏を覗き込み、無残な死体に腰を抜かす者。悲鳴を上げながらも携帯電話を取り出して惨事を撮影、録画しようとする者。見て見ぬ振りをして足早に立ち去る者。

いずれにせよ、国民として為すべき義務を果たそうとする者はいないのが、街が闇に吞まれかけている証左——いや、人など何処でもこんなものか。自身さえ巻き込まれていなければ、どれほどの危険であろうとも須らく対岸の火事に過ぎない。社会に守られている故、自身の安全が脅かされることなどないと思いついでいる。

この街の娼婦にせよ、ヤクザにせよ、爆発が伴うほどの荒事は日常から遠い。そうでなくともまともな誰かが警察に通報し、現着までほんの数分から十数分といったところ。

小太郎が対魔忍である以上、警察にも顔は効く。個人として繋がりを持つている警察官もいるが、時間ばかりがかかる手続きや一芝居打たねばならない。

これ以上の面倒はゴメンだとその場を去ろうとしたのだが――

「待てえくくくく！ このイカレポンチ！」

「何てことすんだよ、このクズ!!」

「……ほう」

しかし、それを止める者が現れた。

手榴弾の爆発から逃れた小動物二匹。爆発の影響で髪はボサボサ、服は泥だらけだが無傷。威勢も損なわれておらず、自分の行為を棚に上げて元気に慰謝料をせしめようとしている。この二匹も傭兵に負けず劣らず頭魔族である。

少なからず小太郎にあつたのは驚きだ。

殺意はあつたが必殺の意思はなかった。面倒なので雑に殺そう程度の手順であつたのだが、生き残るとは思っていなかった。

彼女達は手榴弾から生き残るいくつかの手段の内、実行可能な最適解を知識ではなく本能で選択していた。

まず手榴弾から即座に離れた点。爆発地点から離れば離れるほどに生成された破片は威力を失い、広範囲に散らばるため破片の間隔は離れるほど広がっていく。

次に、背中を向けて爆発に合わせて地面に伏せた点。形として手榴弾の側に向けたのが足の裏。万が一、破片が当たるとしても下半身側となるため、即死はしない。

世界には時折こういった厄介者が生まれてくる。

頭も悪ければ知恵もない。生き残るだけの正当な能力も理由もな

い。なのに何故か生き残る者が。

天に愛されているのか、天の思惑からすらも外れているのか。何にせよ、他者にとっては傍迷惑以外の何ものでもない。そうした者ほど、厄介事を運んでくるからだ。

小太郎の二人に対する総評は、それを認識した瞬間に決定した。

(馬鹿で小賢しい。一番面倒臭い奴だ)

「ほら、金だぜ！ 髪も服も泥だらけだし、ちよつとのいしや——
もがぐぐつ!？」

「ちよおつ!？」

「オレはお前等と関わりたくない。追ってくるな。二度と顔を見せるな。分かったな?」

喚き立てるリリムと呼ばれた少女が一際大きく口を開いた瞬間、小太郎は黒くて硬い棒状の物体を捻じ込んだ。

無論、卑猥な物体などではなく、掛け値なしに危険な物体。コルト S A A 小太郎スペシャルである。

彼が僅かでも指に力を籠めれば、それだけで少女の頭蓋は砕け、脳漿をぶち撒ける事になる。

二人は驚きと恐ろしさで目を見開くばかり。先程の状況から生き残るだけの運の良さも、自分の行為を棚上げして小太郎を責める記憶力の無さと自分の都合で巻き込んだのが関わるべきでない相手と気付かなかった危機感の無さという頭の足りなさの前では形無しだった。

無言でホールドアップのまま、小太郎の頼みではない命令に、コクコクと頷くばかり。

小太郎は頷きだけ確認すると意外なほど簡単に愛銃を懐に仕舞い込む。

『殺す』という形ですら関わりたくないのだ。これも苦勞ばかりを背負い込む羽目になる彼の本能の為せる業か、はたまた極まった洞察眼故の推察だったのか。

凡そ、小太郎の応対は正しい。この手の能力は低い生き残ることに長けた存在には、自分ではどうにもならない相手であると感じさせて自らの意思で距離を置かせるのが正しい方法である。惜しむらくは――

(ミナサキ、あれあれ！)

(チャ~~~~ンストゥ！)

二人が三秒前の死の恐怖ですら忘れる鳥頭の持ち主であった事。納得した小太郎が背を向けて歩き出すと胸を撫で下ろした二人であったが、後ろ姿にあるものを発見して目を輝かせた。

それはズボンの後ろポケットから飛び出した長財布。特段厚いわけではなかったが、知識のない二人でも一目でブランド物の高級品と分かる代物。当然、それだけの外見であれば中身が空である筈もない、と思い立つのが性というもの。

武器や道具は使い捨て、特段の思い入れを抱かない彼ではあるが、長く使う身の回りの小物には金を掛ける。安かろう悪かろう、という金は持っているが庶民の金銭感覚を捨てない彼らしい発想だ。

加えて言えば、自分の女に恥ずかしい思いをさせないためのチョイスでもある。人の目など気にする性質ではないが、彼女の女がそうであるとは限らない。デートで立ち寄った店で安物の財布を出して相手は何を思うのか。小物にまで気遣いを忍ばせるのが、長く愛され、モテる男の秘訣と言えよう。

如何にもな高級品の財布を目にした二人が何をするのか考えるまでもない。

欲望を堪えるという機能が欠落しているが故に、ヤクザや傭兵に追われるような目にあっている。そして、どんな目にあつてもめげず落ち込まず顧みない。そんな輩の行動など一つだろう。

すすす、と去つていこうとする後ろ姿にミナサキは音もなく近寄つていく。

彼女達の思惑はこうだ。手の届く位置にある財布をスリ、気付かれ

る前に逃げる。気付かれたとしても逃げる。たったそれだけ、考えなしにも程があった。

二人の発想は決して間違いではない。犯罪行為そのものは誰もが思いつくような発想が大半であり、付け入る隙を与えるからこそ実行に移される。間違いがあるとすれば――

「成程、よく分かった」

「ひっ……！」

相手が一般人ではなく、狂気そのものの猜疑心によって隙という概念そのものを己の中から消し去った小太郎を鴨に選んでしまったことだ。

財布に迫ったミナサキの手であったが、永遠に届くことはなかった。

触れる直前に小太郎がその歩みを止め、首だけで振り返って二人を視線で貫いたからだ。

彼の黒瞳は深淵のような闇よりも深い色と昏さ。事此処に至って、ようやく二人は関わってはならない者に関わってしまったと気付く。だが、全てが余りにも遅すぎた。

そして、小太郎もまた再び認識を改める。

この二匹は馬鹿で小賢しい小動物などではない。馬鹿で小賢しい害獣である、と。

彼女等の姿と来たら、僅かな綻びから我が物顔でテリトリーに侵入し、腹を満たすための食料を齧って台無しにするばかりでなく、歴史的にも知識的にも価値のある書物を無残な姿に変え、電気配線というライフラインすら使い物にならなくし、挙句に病すら運んでくる鼠そのもの。小太郎は鼠が大嫌いだ。

それが星の生み出した自然の法則ではなく、あくまでも人と自分の都合に沿ったものに過ぎないものだとは分かっている。多くの害獣は人の無知から彼等のテリトリーを踏み荒らしたからこそ起こる事態であり、或いは人が自然から外れて自らの望むままに繁栄を謳歌し

ているからに他ならない。

しかし、例え種全体の不義と不知から引き起こされた事態であったとしても、人は自らの領域と周囲を守るために断固とした姿勢で恥知らずに胸を張らねばならない。絶滅させずとも、姿が見えなくなるまで駆除せねばなるまい。

「どうした？ 逃げていいぞ？ そろそろ警察が来るからな。此処で事を起こすのは後々手間だ。だから、オレは逃げるお前達を追いかける。ちようどいい機会でもあるしな」

「ひっ、ひええくくくく！ お、お助けえくくくくくくくくくく!!」
「二つに一つだ。害獣らしく駆除されて死ぬか、何も詰まっていなくてではなく身体と魂で本当の恐怖を学んで生き延びるか。さて、どうに転ぶかな」

小太郎がマスクの下で浮かべた笑みに、露わになっている左目を見ただけで言い知れぬ不安を畏怖を覚えたりリムとミナサキはそれこそ鼠のように逃げ出した。

今度は小太郎が逃げていく害獣二匹の背中を見送る番だった。判断の早さに呆気に取られたのではなく、準備のためだ。

彼の考える真の恐怖を与えるために。そして、この無駄で無意味な時間を少しでも価値のある時間とするための下準備。

ゆるりとした歩調で、小太郎は路地裏の闇の中へと消えていく。

こうして、小動物二匹改め害獣二匹が心底からの後悔と魂の奥底から震え上がる恐怖に満ちた夜が始まったのである。

ホラー映画の演出をリアルで体験したらどうなると思う？

「さて、御覧じろ。FRTS起動。我が家の天才技術者エンジニアの実力、どんなもんか」

小動物が逃げてから三分後。

小太郎は風俗店の詰め込まれた三階建ての雑居ビルの屋上に居た。ネオンの輝きに満ちた街並みを眺めながら、小太郎は独り言を呟きながらマスクに仕込まれたデバイスを音声認識で起動させる。すると、独立遊撃部隊の本部のように空中投影ディスプレイが現れた。

其処に映し出されていたのは、先ほど死んだばかりの傭兵二人とリム、ミナサキの顔写真だった。何時の間に撮影したのかと問われれば、マスクを被った瞬間からだ。

マスクの眼帯部分には極薄、極小のカメラが搭載されており、これによって自動で出会った対象の顔を撮影、また小太郎の視点をリアルタイムで本部に送っている。

小太郎はディスプレイの害獣認定した二人の写真を指先で選択する。

其処から僅か数十秒で繁華街周辺の地図と二つの光点が表示された。この結果には流石の小太郎も舌を巻く。

小太郎が起動させたのは、本部を作る際に啓治に要望しておいた機能システムの一つ。

Facial Recognition Tracking System。それぞれの頭文字を取ってFRTS——日本語に直訳すれば顔認識追跡機能だ。

20世紀初頭から始まった情報化社会と監視システムの発展は凄まじく、あらゆる個人は如何なる時でも他者の目を気にせねばならなくなつた。

SNSを初めとする気軽な個人による情報の発信。定点、監視カメラによる犯罪の未然予防と自衛対策。Nシステムによる交通違反監視。挙げていけばキリがない。

誰もがプライバシーの権利を持つてこそいるが、人の「誰かの何かを知りたい」という欲望に歯止めなどなく、また国も国を管理する観点から言つてある程度の監視は常に必要となる。

このシステムは、留まることを知らない発展と人の欲望を利用して作られたもの。

元々は対魔忍が活動するに当たつて懸念されていた一個人による撮影や動画投稿によつて存在が認知されてしまう事態を未然に防ぐため、国が作ったネット監視システムが元になっている。

登録されている対魔忍の特徴と一致する情報が民間人の目に触れるネット環境に流出する直前、画像や動画を投稿前に削除してしまうシステムだ。これのお陰と政府の発したカバーストーリによつて、対魔忍の存在は精々が噂レベルに留まっている。

啓治はこの顔認証のプログラムを応用。

FRTSの端末を持つ者の周辺から発信されたSNS情報、最近ではデフォルトでオンラインストレージサービスでネットに繋がっている監視カメラやドレイブレコーダー、定点カメラをハッキングし、多角的に情報を得る事で特定個人を何処までも追跡可能とした。

唯一の弱点は人間の構築した監視網やネット環境の無い場所への逃亡であるが、現代日本ではそんな場所を探す方が難しく、対魔忍の活動は大半が闇の跋扈する街の中。システムとしては十分過ぎる上に、何も知らない追跡対象にとつては脅威以外の何物でもない。

更には、対象の動きを自動解析することで、凡その逃走ルートも先行して入手可能と至れり尽くせりの機能であつた。

ただでさえ恐ろしい監視、追跡システムにも関わらず、対象を選択してから僅か数十秒で発見。

これほどの速度は、啓治が持つ独自の技術と卓越したプログラミング技能が無ければ成し得ぬ成果だ。

またこれだけの速さで対象を発見出来るのなら、逆に追跡者の位置を把握して自らの逃亡にも利用可能になるだろう。

「流石は啓治。お前を味方に引き込めて幸運だったよ」

小太郎は満足げに自らの手足となつて働く技術者に最大級の賛辞を送った。

害獣二匹を追いかけると決めた際に、ちょうどいい機会だ、と呟いたのはこのシステムを試運転するには最適であつたからに他ならない。

相手は頭は悪いが本能で窮地を乗り切り、天運に守られているかと思えない、逃げ回り生き延びることに長けた小賢しい害獣。何が最高だと言えば、反撃に転ずるだけの力が乏しいという点が最高だつた。

窮鼠猫を噛む、とは言うが、殺すとは諺でも謳っていない。何らかの手段で反撃に打って出てこられたとしても、自分だけでも制圧可能であるし、他の札も伏せてある。何が起こつたとしても命に危険はなく、致命傷どころか掠り傷すら追わない状況下。成程、これ以上の機会はあるまい。

転んだとしてもただでは起き上がらない彼らしい考えと行いだ。

そうして小太郎は地を蹴ると、眠らぬ夜を過ごす街へと屋上から身を躍らせた。

「ひいっ、ひいっ！」

「はーっ、はあーっ！　ど、どうしてボク等がこんな目に……！」

繁華街のとある路地裏で、自業自得の結果として害獣認定されたりリムとミナサキは壁に寄り掛かりながら肩で息をしていた。

顔は紅潮し、大粒の汗を幾重にも流している。見るからに疲労の色が濃い。

それもその筈、決して敵に回してはならない存在を敵に回してしまった上に、その事実が気付くのが遅れに遅れたと悟った二人の本能が全力の逃走を選択させたからだ。

ただ闇雲に繁華街を走り回るだけではない。時に自らの足跡を追えぬように人込みを押し分け、時に人気のない道を選び、時に自らを追うヤクザの手先からも逃げ、時に店に押し入って何も手をつけずに裏口から飛び出して。何とか追手を撒いた二人は誰もいない路地へと辿り着いた。

「は、はひいっ……はっ、ふ、ふふっ……ふふうくん、どんなもんだい！　馬鹿人間め、ざまあみろお！」

「捕まえられるもんなら捕まえてみろってもんだよ！」

そう慣れた街ではない故に、もう既に自分が何処にいるのかも分からない二人であったが、胸中に存在していたのは安堵でも不安でもなく優越感であった。

面倒な追手を押し付け、自分達は悠々と逃げ延びる。少々予定とは違ったが、結局は自分達の二人勝ち。押し付けた男もヤクザが放った傭兵も、探し回ってはいとも見つけられない上に自分達は無傷。これを勝利と呼ばずに何と呼ぶのか。

勝ち名乗りを上げるように、リムとミナサキは思い切り存在しない胸を張る。

酷い勘違いもあつたものだ。

確かに二人は逃げられたが、逃げきつてはいない。彼女達の勝利条件は行方を完全に眩ませた上での街からの脱出。あくまで一時逃げ延びただけで、首の皮一枚で繋がった状態であるに過ぎない。

だが、そんなものは関係ない。過去を振り返つて反省することも、未来を思つて考え抜く真似もしない。二人には今だけあれば十分であり、今を思う頭しかないからだ。

甘いという他ない。

ヤクザの追手は兎も角、自らの厄介事を押し付けようとした男は別なのだ。

相手は底のない猜疑心から事が始まれば何処までも執念深くなれる。その執念深さは、一族郎党を皆殺しにされた復讐者にも比肩する。

何処までも何処までも追い掛け、追い詰め、例え世界の裏側の便所に隠れようとも探し出して鉄槌を下す、そんな男——ではあるが、二人はそんな事は全く知らない。

その無知と誤認が、何処までも彼女達自身を追い詰める事になるなど知る由もなかったが——後悔と恐怖という感情を初めて自覚する瞬間は、すぐそこまで迫っていた

「あー、でもどうしよう。放っておいたらヤバいと思つて責任取らなきゃ戻つて戻つてきたけど、これじゃあ元も子もないよね」

「だよねえ……そのまま逃げちゃおうか。私達がこーんな酷い目にあつてるのに誰も助けてくれない街なんて、どうなつてもよくない？」

どうやら、彼女達には彼女達なりの道理と都合があつたらしい。

言葉だけでは何についてであり、何をするつもりなのかまでは分からないが、少なくとも自分達の行いに対して責任を取る殊勝な心はあつたようだ。

しかし、それもまた自分達の都合によって押し流されてしまう。か

つて小太郎が凜花達に語って聞かせた責任の取り方——身投げのような行為ではなく地味で全うなものという道とは全く別であり、自分の都合だけしか考えていない辺りとても殊勝とは言い難い。

「もういいや、面倒臭いし。私、しーらな——ひっ!?!」

全てを投げ出して、街を去る選択を選んだリリムであったが、次の瞬間に短い悲鳴を上げる。

街を去るべく路地裏の先へと視線を向け、其処で恐るべきものを見たからだ。

ビルとビルの間隙にある路地裏には、エアコンの室外機やゴミ箱、何らかの店の勝手口か裏口と思しき扉が並んでいる。

扉のすぐ上には照明があり、夜間にも従業員が出入り可能なように照明が設置されていた。余程の安物なのか、点いては消えて、消えては点いてを繰り返している。

——その明滅する照明の下に、唇を取り払って剥き出しの歯茎を模したかのような仮面を被った男が立っていた。

まるで影から滲み出てきたかのような黒装束。闇に溶け込む姿とは対照的に、俯き加減の顔から覗く異常な眼光を湛えた瞳。

威嚇する訳ではない。怒りや憎しみを抱いている訳ではない。ただ、その場で立っているだけ。正体も分かっている、種族として遥かに劣った人間だ——なのに、どうしようもなく不安を煽るその姿は何なのか。

「何やってんの?」

「み、みみみみ、ミナサキ! あ、アレアレ!!」

「アレって? 何もいないじゃん?」

「ふえっ?!」

リリムはまるで怪物に出会ってしまったかのようにその場で尻餅をつくと、ミナサキと顔を見合わせて指で今見たものを指し示した。

しかし、ミナサキが指の先を見ても、其処には何もいなかった。不規則な明滅していた筈の灯かりは故障や経年劣化など思わせないほど、しつかりと路地の一部を照らしている。

リリムは一瞬、疲れから幻覚でもみたかと考えたものの、即座に首を振った。

彼女の種族は夢魔。淫魔の一種であり、知的生命体の夢に潜り込み、対象を魅了して精気を啜る。

言わば夢という幻を思うがままに操る人外。尤も、彼女はその中で落ち零れも落ち零れ。もし仲間に種族としての能力で嵌められようものならば現実か夢かなのか区別がつかないほどだ。だが、身体の奥底から湧き上がる不安と警戒は、例え夢や幻覚であったとしても行動を起こさせるには十分過ぎた。

「み、ミナサキ！ あれ！ あれやって！」

「いいけど、誰の？」

「アイツ！ 爆弾仕掛けてきた奴！ いいから早く！」

「もー、うるさいなー。分かったよ、やればいいんでしょやれば。むむむむ」

涙目でにじり寄ってくるリリムに、明らかな不満を口にしながらもミナサキは言われた通り、生まれ持った自らの能力を発動した。

彼女の異能は、一度でも目にした物の位置を感知できるというもの。対象が生物非生物であるに問わず、視覚としてではなく感覚として位置を掴める。対象と位置が離れすぎているとざっくりとした方向くらいしか分からないが、近づけば近づくほどに精度は増す。

地味ではあるが、実に汎用性が高い良い能力だ。きららの変り身の術と同様に直接的な攻撃、戦闘能力に直結している訳ではないが、使い方によっては何処までも凶悪になり、同時に対処のしようがない。

尤も、彼女の使い方は強い独占欲から気に入ったものを手に入れるためであったり、こうして逃げるために相手の位置を探るばかりと生

まれ持った才能をそのまま使うだけであった。

瞼と閉じると両手の人差し指をピンと立て、眉間を挟み込むように押し当てる。

対象を位置を探る感覚はミナサキ自身にも説明しようがなく、感覚としてただ其処に“在る”ということが分かるだけ。対象が何をしているのか、どんな状態にあるかまでは分からないが、逃げるだけならそれで充分。

だからいつものように集中して、いつものように探ろうとしている。

リリムの焦りや不安を何一つ理解していないミナサキであったが、探る対象——顔だけしか知らない巻き込もうとした男の位置を感知した瞬間、全身から血の気が引き、心臓が早鐘を打つ。

「ど、どどどどうなの?! 何処にいるの?!」

「……………う、後ろ」

「——ふえ?」

「すぐ、後ろに、いる……?」

ミナサキは位置を感知した瞬間に。

リリムはミナサキの言葉を聞いた瞬間に。

同時に凍り付いた。

二人が二人とも、自分が何を言っているのか、相手が何を言っているのか、まるで理解できていなかった。

何せ、予兆はあれども気配どころか影も形もなく、置き去りにしてきたはずの相手だ。それが、自身のすぐ後ろに居るのだと言う。まともでなくとも思考回路を持つ脈絡がなさすぎて理解も納得もできない。

弛緩していた心にあったのは漠然とした不安から転じた明確な恐怖だけ。

余りの恐怖に身動き一つできず、指一本動かせない。呼吸の仕方すら思い出せない。流れる大量の汗にも、激しくなる動悸にも止めよう

がない。

瞬間、ミナサキだけでなくリリムも感じた。

顔の真横。頬に触れるほどの距離で、自分達を念入りに観察する怪物の息遣いを。

「ひいわわああああああああああ——！！」

何故、これほどまで距離に近づかれて気付かなかったのか。

何故、これほどまでの距離に近づいて、何もしてこなかったのか。

何故、自分達がこんな目にあっているのか。

駆け出した二人の頭には、身勝手な思考すらない。あるのはこの場を離れなければならぬという生存本能だけ。

相手はただの人間でしかない、そんな考えは既に吹き飛んでいる。二人には、最早男が怪物にしか映っていないかった。

「な、ななななな、なんでー!? なんでボク達の居場所がー?!」

「わ、分かるわけじゃないでしょそんなの?! そ、それよりも、これからはずっとアイツの居場所探っててよ! ヤバイ、絶対ヤバイよアイツ!!」

極度の恐怖と混乱の中、半泣きになりながら路地を駆ける。

一秒でも早くこの場から離れるために。一秒でも早く怪物から逃れるために。

路地を抜ける直前、二人は背後を振り返る。

薄暗い安物の照明だけで照らす路地の中、闇を背負い、影を纏った怪物はただその場に佇んでいた。

動き出す気配はない。しかし、微塵も安堵など訪れはしない。その異様に鋭い眼光だけが、二人の姿を追っていたからだ。

二人はまだ知らない。

多くの者が怪物と呼ぶものの定義を知らない。これには大きく三つの定義がある。

一つ、怪物は喋ってはならない。言葉が通じるといふ事は、和解の可能性や心の存在を想起させて安心感を生み、恐怖を薄れてしまうからだ。

一つ、怪物は正体不明でなければならぬ。未知、それは知的生命体にとって何よりの脅威。分からないという事実は対処のしようがない事を物語り、正体の明かされた怪物ほど陳腐なものなどないからだ。

この定義に添うのなら、男は怪物にはなりえない。

二人と会話すらしており、正体とてただの人と知られてしまっている。これを怪物と呼ぶのなら、其処らの愛玩動物ですら怪物と成りえるだろう。

だが、最後の一つだけは、これ以上ないほど男と合致している。

一つ、怪物は特に理由もなく、特に意味もなく、何処まで対象を追い掛け、何処までも対象を追い詰め、最後には必ず犠牲の葬列に対象を加える。

逃げきれてしまう怪物にも、殺せてしまえる怪物にも意味はない。理解が及ばず、決して殺せない、ただひたすらに犠牲のみを強いるもの。それを怪物と呼ぶのだ。

じわじわと真綿で首を絞めるが如く、致死量ぎりぎりの毒を投与されるが如く。

徐々に、徐々に。二人の身体と魂には恐怖が刻まれ始めるのであった。

「分かつちやいたが……いいね、ちゃんとしてる。実にちゃんとしてるじゃないか、啓治」

とは言え、小太郎が怪物である筈もない。

生物学的にも、遺伝学的にもきちんとした人間である。尤も、出来ることは人間の範疇と呼んでいいのかは疑問が残るが。

兎も角、怪物でない以上、其処に理由もあれば意味もある。

開発されたばかりの追跡装置の試運転。そして害獣の殺害、もしくは二度と害獣が目の前に現れないようにする事だ。

今こうしている間にも、空間投影画面に示される害獣の位置を横目にビルからビルへと飛び移り、追跡を続けている。

重さなど感じさせない軽やかな跳躍は、まるで重力から解放されたかのように、白鳥が湖から飛び立つかの如き優雅さすら感じられる。

しかし、扱う身体操作術は自他の流血によって磨き抜かれた血生臭い殺しの業。機能のみを追求したが故の美しさが、其処にはあつた。

「………妙だな」

その最中、画面に現れた異変にビルの屋上にあつた給水塔の上で足を止める。

小太郎が気に留めた異変は、害獣の動きの変化だ。これまでは無作為かつ無軌道な逃走経路であつたが、今は変わっており、明らかに何らかの意図が見え隠れしていた。

その意図を確かめるために、小太郎は移動速度を上げた。追跡ではなく、待ち構える方向へと切り替えたのである。

音もないままに風へと変化するように。時に壁を足場に駆け抜け、時に落下防止の柵を足掛かりに夜の街を行く。

誰も彼の存在には気付かない。ネオンが照らす街では月も星も見上げて眺めるほどの輝きは届かない。夜において頭上はどうしようもない死角となる。時折、彼の姿を目にする者も居たのだが、余りの

速度に目の錯覚としか思わなかった。

「ふむ……成程、本当に試運転にはこれ以上ないくらい最適の相手だったわけだ」

対象があるビルの中に押し入って中を通過している最中、出てくるであろう位置の向かいに面したビルの屋上で様子を眺めていた小太郎であったが、思わず一人呟いた。

ビルから出てくる直前、害獣二匹は突如として進行方向を変えた。まるで、小太郎が待ち構えている事を察しているかのように。

たったそれだけの変化。そして路地裏での二匹の会話から小太郎は正答を導き出す。

（種族的に淫魔の方じゃなくて、有翼種の方の能力か。凜子の視覚跳躍の術、千里眼系統……じゃねえな。此方の姿を俯瞰して捉えているのなら先んじて動ける筈だが、対応が後手に回り過ぎている。察するに聴覚か嗅覚か、それに準ずる感覚で位置を把握。対応にラグがあるのは常時発動型ではなく任意発動型だから、ってところか）

断片的な情報を統合する事で全体像を推察する。

彼の得意とする分野ではあるが、的中率は恐ろしいほど高い。僅かな情報と短い時間で正答を導き出せねば、これまで生き延びてこれなかった。嫌でも精度は上がっていくだろう。

だが、これでは千日手の形となる。

小太郎は啓治謹製の追跡システム、害獣は自らの能力で互いの位置を把握し合っている以上、どちらがどう動いたところで互いの動きに合わせて、また動きが変わり、延々と同じ事を繰り返す羽目になるだろう。

弱点こそ存在するが、良い能力と小太郎も認めざるを得ない。生まれ持った才能が、己が認めている天才の智慧と努力に比肩し得るほどの効果を上げているのだ、当然だろう。

しかし、優位に立っているのは依然として小太郎である。

相手の位置、相手との距離を正確な数字で、なおかつ一方的に置かれた状況を正確に把握している。

加えて言えば体力の差もある。如何に魔族とは言えども子供は子供。碌に鍛えていない害獣とただの人間でありながらひたすら鍛えられ続けた小太郎とでは、文字通りに桁が違う。夜明けまで続けられ、先に体力が尽きるのは彼方側。

とは言え、彼にそんな根比べをするつもりは一切ない。些か以上に効率が悪く、無駄な時間を割り裂くほどの相手でもないからだ。

「いずれにせよ、宝の持ち腐れだな——ん？」

才能を生かすだけの発想もなければ知恵もない。

所詮、特異な能力以外には他人に迷惑をかけるしか能のない相手に正に害獣だ。

鼠にせよ、熊にせよ、狼にせよ、蝙蝠にせよ、害獣と呼ばれる類の獣は人にはない能力を持っている。しかし、総じて駆除される側の獣に過ぎない。駆除する側の人間は習性と能力を見越して追い詰めればいいだけのこと。

柵に上った小太郎はどう追い詰めれば効率がいいのか思案し始めたが、この街で聞こえていい筈のない音を耳にして首を傾げた。

耳障りでありながらも、機械からは決して発せられない自然の音。それが羽虫が羽搏く音であると気付く者は何人もいまい。余りにも音が大きすぎたのだ。

その大ききさときたら冗談のよう。体長10cmにも満たない羽虫が近くで飛び回っていけば気を引かれるというのに、姿形の見えない状態であるにも拘わらず耳鳴りが聞こえてきそうなほど。

徐に頭上を見上げた小太郎の目が捉えたのは、鈍色の蜂であった。体色からして既に通常の蜂とは異なっていたが、より目を引くのは大型犬ほどはあろうかという体長だ。少なくとも、この世にそれだけ巨大になる蜂など存在しない。昆虫嫌いの人間が見れば間違いない

悲鳴を上げ、嫌いでなくとも絶句するであろう。

正体不明の蜂は屋上の柵の上に立った小太郎を獲物と見たか外敵と見たのか、急降下して襲い掛かってくる。

対する小太郎は視線を向けるだけで不動。まるで己が対処するまでもないと言わんばかりだ。

その蜂が、小型だった時の性能をそのままに巨大化したとするならば脅威である。

地球上の全て生物のサイズを均一化した場合、最も強いのはどの種なのか。言うまでもない、それは昆虫だ。

蟻は自重の50倍以上もの重量の物体を持ち上げるほどの筋力を持ち、飛蝗は体長の20倍もの距離を脚力のみで飛び、ゴキブリは時速300kmの速度で移動する瞬発力を持つ。

それらが人間のサイズになったのなら、或いは逆に彼等のサイズに他の生物が縮小したのならば。地球の王者は昆虫になる筈だ。

とは言え、現実はそのほど甘くはなく、意味のない過程に過ぎない。昆虫のような外骨格を持つ生物は人間と同等のサイズにまで巨大化した場合、外骨格も厚みを増し、内部の筋肉量が減って自重を支えられなくなる。ある一定以上の体長を持つ生物の殆どが内骨格であるのは、身体を支えるための筋肉を骨の外側にいくらでも付けられるからに他ならない。

その意味のない筈の過程が、現実のものとして襲い掛かってくる。獲物の肉を噛み千切り幼虫の餌とするための大顎も、獲物を刺し殺すための毒針も、何なら獲物を抑えておくだけの六本の脚でさえ凶器と化す。

如何に小太郎であっても、徒手空拳のまま対応しきれぬ相手ではない。次の瞬間には外骨格とは異なる柔らかな皮膚と筋肉を引き裂かれるだろう。

「ふむ」

だが、全ては杞憂に終わる。

小太郎が蜂から視線を切ると同時に二条の銀光が奔った。

外骨格を持つ生物が動くための稼働部位・節を狙った二度の斬撃は、綺麗に頭部と胸部、胸部と腹部を泣き別れにしていた。

手練れの対魔忍、元より人を超えた動体視力を持つ魔族、米連のセンサー類であれば、或いは何が起こったのかを察知することが出来たであろうが、生憎と小太郎以外の人間は存在せず、他者が居たとしても彼が手の内を語ることはない。真相は闇の中だ。

ボトリと屋上に墮ちる様は、大ききこそ違えども昆虫と何ら変わらない。

柵から降りた小太郎は、脚を縮めて小さな痙攣を繰り返す蜂の死体の前に股を開いてしゃがみ込む。

「魔界ワスプね。何処の馬鹿が持ち込んだんだか」

死体の脚を持ち上げ、触角を掴んで頭部を顔の間近でしげしげと眺め、ナイフで腹部を引き裂いて人間の血液とは全く違う色の血を流させ、臓器を確認して巨大な蜂の正体を探る。

結果は既に分かっていた。魔界ワスプと呼ばれる蜂型魔獣。性質も人界の蜂と似通っており、特定の場所に巣を作ってその中で女王を頂点とした階級と役割を分担した真社会性を持つ魔獣だ。

一説には人界の蜂が魔界の瘴気によって変異、進化した姿とも言われているが、実際のところは誰にも分からない。特定の生き物がいつ、何処で発生したのかという事実も推論を立てられても、記録は残らない。知的生命体の発生よりも、原始的な生き物の歴史の方が遥かに長いからだ。

正体が分かっているながらも簡単な検死解剖をしていたのは、人界にやってきたことでその生態や性質に厄介な変化が訪れていないかを探るため。

見たところ、人界にやってきたばかりではない。敵を仕留める毒針が発達しているが、そのすぐ下にある産道は殆ど機能を失って縮小している。これは、この個体が働きバチであることを示している。

つまり女王個体が巣を作って繁殖するだけの時間はあったようだが、幸いな事に人界の環境に合わせた変異は起こしていないようだ。こうした魔獣が人界を訪れる例は後を絶たない。但し、魔獣自身の意思によってやってきた訳ではない。

エウリユアレーも使っていたように、魔術師は下級の魔獣を使い魔として扱う。そして何も、魔界側の都合のみで持ち込まれるわけではない。

魔界に掃いて捨てるほどいる魔獣だとしても、人界では珍獣となり、調教次第では優秀な猟犬や番犬に近い運用も可能。絶滅危惧種の動物を保護の観点からではなく、下衆な欲望から手元に置いておきたがるのと同じ理屈だ。

また魔獣の体液、毒は人界で生成された薬品では考えられない結果を引き起こす。生化学の観点からすれば、この効果は奇跡的ですからあり、闇と繋がりのある製薬会社は挙って手に入れたがる。

尤も、半端な規模の企業が手を出そうものなら、大規模な生物災害を引き起こしかねない。こうした危機の監視も対魔忍の仕事の一部である。

試運転を邪魔された苛立ちを舌打ちで表現しながら、スマートフォンを取り出して連絡用のメールアプリを立ち上げる。

メールの内容は回線も暗号化も特殊なものを使用しており、内容を盗み見られる心配はなかったが、そこは猜疑心の強い小太郎の事、隠語を使ってアサギへと魔界ワスパ発見の報を入れた。

自身が直接対処するつもりは毛頭なかったが、看過する訳にはいかない。

魔界ワスパの女王個体は成長するにつれて食性が変化する。成虫になった段階では花の蜜などを食べるが、成長しきると肉食となる。その際に犠牲になるのは何の対処もできない民間人となる。

『心配いらないわ。もう既に動かしているから』

「随分と早いな。ま、対処が早いのなら無理に関わる必要はないか」

暫くして帰ってきた返信は実に簡素なものだった。

対処役の補助に回れ、という追撃メールが飛んでこない事も確認すると、小太郎はほっと息をついた。これでシステムの試運転と害獣の駆除に専念できる。

仮に対処役が失敗したとしても、働きバチの成長を見るに、女王個体の食性が変化するまでは少なく見積もっても1週間は猶予がある。それまでの間に別の対処役を動かすか、最悪独立遊撃部隊にお鉢が回ってくる。いずれにせよ、今夜何が何でも対処しなければならぬ訳ではない。

一週間は民間人への被害は所有物や物件に対する被害だけに留まり、身体的な危害にまでは至らないだろう。それならば、積極的に関わらずともいい。

それよりも、今は害獣への対処を優先する。

小太郎にとっては魔界ワズプよりも性質の悪い生物だ。

性格は勿論の事、対象の居場所を探知できる能力は厄介過ぎる。最善は殺してしまうこと、次善は危害を加えるどころか近寄ろうとすら考えられないほど恐怖を植え付ける必要がある。

「さて、このままただ追っても千日手。ずるずるずるずる体力と時間を無駄にするばかり——となると、オレが取るべきはこれだろうな。振り出しに戻してやる」

そう呟いた小太郎は繁華街の通りへと視線を向ける。

その先に居たのは、行き交う群衆というその他大勢ではなく、逃げ回るリリムとミナサキを捕まえるように依頼された傭兵と思しき連中だった。

運命の出会い！ 苦労人は苦労人に惹かれ合う！

繁華街を逃げ回る害獣。追いかける傭兵達。じわじわと日常を侵食する魔界ワスプの脅威。降って湧いた爆弾騒ぎと人死に。

闇に侵されながらも表向きの平和を保っていた筈のまえさきは、それすらも瓦解し始めており俄かな騒めきが収まらずにいた。

「おい、行かねえのか、お前は！」

「お前等に任せる。ちと疲れた、後から追うさ」

「へっ、後から来ても分け前はねえぜ！」

騒めきを生み出す元凶の一つである傭兵達は、絶え間なく繁華街を右往左往する。

西で噂を聞きつければ現場に向かい、東で連れてくるように依頼された魔族の子供を見つければ追い回す。

徐々に徐々に傭兵の人数は増えていき、今や繁華街のそれなりに大きい通りに出れば一人は目に入ってくるほどだった。

そんな中、オークと魔族の傭兵は街の一角で別れる。

オークはそのまま繁華街の人込みへと消えていき、魔族は路地を背にして通りに立ったまま懐から取り出した煙草に火を付けた。

「馬鹿どもが。逃げ回る獲物は疲れさせて捕まえるもんだらうがよ」

残った魔族の傭兵に仲間意識というものは皆無であった。

消えていったオークを筆頭に街を駆けずり回る同僚を露骨に蔑んでいる。

それも当然。現代の日本の闇で蠢いている傭兵など碌な者はいない。

傭兵の大半は自分達よりも遙かに弱い人間を食い物にしようとやってきた、欲望ばかりが一人前で実力の伴わない魔界では弱者に分類される者か。自国で追い回され、逃げ延びてきた不法入国者や不法移民か。自らの過ちで闇に足を踏み入れてしまった半端者か。いずれにせよ、碌な性格でもなければ実力もない。

傭兵を管理する組織やギルドが存在しない故に、傭兵を名乗りさえすれば誰でも傭兵になれてしまう事実が、この事実を引き起こしている。

中には賢しさや運の良さから生き残れる者もいるが、殆どは闇の中で誰にも看取られる事なく、使い捨てとして命を失い、元から存在しなかったように消えていく。

だが、魔族の傭兵はそれなりに賢しく、それなりに長い月日を傭兵として生きてきた。だから今回も賢しく立ち回る。

殺すにせよ、生かして捕らえるにせよ、対象が疲れていればいるほどに成功する可能性は上がる。

無論、他の誰かに先を越される可能性はあるが、それならばそれで仕方ないと割り切っていた。無駄な労力を使つて無駄骨を折るくらいならば、無駄な労力を使わずに無駄な時間だけを過ごせばいい。思惑通りに行けば、美味しい所だけを頂ける、とほくそ笑む。

そもそも、依頼を寄越したヤクザが組の面子を気にして身内を使うのではなく、ガキ二人すら捕まえらせません、とレットルを張られ、組の面子が潰れてしまうことすら覚悟の上で外部へと捕縛を依頼した時点で、ヤクザが相当に切羽詰まっているのは明白。

その上、対象はヤクザを手古摺らせて逃げ回っている。賢いのか、生まれか育ちか、或いは才能か、少なくとも只者ではない。馬鹿正直に追い回すのでは馬鹿を見るのは己の方。

巧く立ち回れば労せず大金が手に入る。交渉次第では、ヤクザから依頼を受けた当初に聞いていた値段以上の報酬すらも引き出せるだろう。

傭兵は紫煙を燻らせながら、くつくつと忍び笑いを漏した。

しかし、彼は気付いていただろうか。

確かに彼は賢しかった——が、それはまえさきを駆けずり回っている傭兵達と比較して、というだけの話。

考えの大半は取らぬ狸の皮算用。あくまでも計画の類とは呼べず、自ら考える最良の結果を思っているに過ぎない。肝心要を捕獲対象をどう捕らえるのかに具体案はない。それでは、他の傭兵と大差はないも同然だ。

何よりも、自らの立場を何一つとして理解しておらず、また何一つ気付いていなかった。

彼が生き延びてこれたのはあくまでも他の者より幸運であつたというだけ。

傭兵であるが故に、いつ誰に殺されたとしても文句は言えず、いつ誰に殺されたとしても誰も気にも留めない存在に過ぎない事を。

今、一人であるが故に、誰の目にも留まらず、誰かどころか法にすら守って貰えない立場である事も。

目先の欲ばかりに囚われて、殺される理由があつても殺されない理由がない事実を忘れ、気を緩めてしまった事も。

そして、路地の暗がりから気配もなく伸びる二本の腕が迫っている事にすら、気付いていなかった。

「さて、他の連中にも追わせ——っ?!」

腕は傭兵の啞えていた煙草の上から口を抑え込む。

驚きの声すら上げられず路地の暗がりへと引きずり込まれた傭兵に往来の人々は気付く事はなく、彼の痕跡を示していたのは中空を舞う煙草の火の粉だけだった。

こうして、使い捨ての傭兵は、また一人闇の中へと消えていった。結局の所、彼は彼の馬鹿にしている者の次くらいに馬鹿だった。だから誰にも気づかれる事もなく、誰にも看取られる事もなく死んだ。これはそれだけの話だった。

「……………」

暗がりの中、化け物の仮面を被った少年の顔だけが浮かび上がる。無言のまま佇んでいるのではない、今し方殺した傭兵の懐から抜き取ったスマートフォンを操作しているのだ。

画面にはメールアプリの連絡先がズラリと並んでいる。

名前は様々だが、恐らくは馬鹿にしていた同僚達の連絡先だろう。傭兵に縦の繋がりはないが、横の繋がりが多い。元締めがいないうが故に、彼等が依頼にありつく手段は情報屋から齎されるか、他の傭兵に誘われるか、闇の街で声を掛けられるかに限られる。

それなりの時間を傭兵として過ごしたのなら、たまたま知り合い、たまたま共に生き延びただけでも連絡先を交換するのが習わしであり、彼らなりの生きていくための手段であった。

『繁華街の東側でガキどもを見かけたぞ！』

それを利用する。

内容は簡潔に。自らの追跡システムから示される対象の位置情報を、スマートフォンに登録されている連絡先全てに一斉送信する。

全く関係のない者であれば首を傾げる内容だが、同じ依頼を受けたのならそれだけで十分。

これを受け取った側は、どう動くのか。考えるまでもない。報酬を与えられるのが一人だけならば、駒にされている自覚すらなく意のままに操られ、我先にと追いかけるだろう。

もし傭兵の性格に違和感を覚えた者が居たとしても、内容通りの場所に捕縛対象が居るのならば、早い者勝ちの依頼の性質上、従わざるを得ない。

こうして少年は、ほんの僅かな労力と機転で大量の操り人形を手に入れるのだった。

「うぐう……ひいー……ぐすうっ……!」
「なんで……なんでこんな……なんでー!!」

繁華街を舞台にした逃亡劇が始まって、どれほどの時間が経っただろう。

リリムとミナサキの表情に今や小憎らしさは微塵もなく、惨めに涙と鼻水、涎で塗れていた。

意図不明の怪物の下から離れたまではよかったが、問題はその後であつた。

叫び声を上げながら逃げる魔族の子供など目立つことこの上ない。彼女達を捕まえようと繁華街に散らばつた三流の傭兵達でさえ、見逃す筈もない。

追われては撒き、逃げては撒きの繰り返し。なのに、その度に傭兵達は待ち構えるように立ち塞がってきた。今は何とか自由の身であつたが、疲労の度合いはもう限界点に近い。そう遠くない未来、二人はお縄に付くだろう。

これから待つ未来への恐怖と極度の疲労で考える余裕すらない二人の頭に疑問はなかつた。

何故、自分達の行く先々で傭兵達が待ち構えているのか。まるで自分達の動きを把握しているかのような行動の数々は何なのか。

分かつたところで如何にか出来た訳ではないが、少なくとも今以上の恐怖を感じるだけはなかつた筈だ。

「ミナサキ！ ミナサキー！ アイツ、アイツどこー！」

「うううううう、頭ぐちやぐちやする、傭兵とかアイツとか色んな奴の

居場所探ってるから——あ、い——だ————!!!」

ふらふらと最早真つ直ぐ走れなくなった状態であったが、ミナサキは能力によつて、リリムは釣られた先を見て、同時に体力の有無など関係なく魂からの絶叫を上げた。

この逃亡劇の幕を切った怪物——ただの人間に過ぎないはずの男は、街灯の上から二人を見下ろしていた。

ずっとそうだった。二人が逃げ始めてからずっと一定の距離を保ち、まるで昆虫でも観察するような感情のない瞳で眺めるだけ。

それだけの話。それだけの話なのだが、それだけの話だからこそ恐怖をこの上なく煽る。

捕まえないなら何時でもチャンスはあつた筈。自分達の罪を押し付けた報復をしたいのなら、とうの昔に出来た筈。殺すにしても機会などいくらでもあつた。

なのに、見ているばかりで何もしてこない。

ビルの屋上から。壁に捕まりながら。扉の隙間から。窓の反対側から。通風孔の向こうから。人込みの合間から。

ありとあらゆる場所から。虚うつろのような瞳で眺めるばかり。

身を隠しても意味がない。

廃ビルに身を隠しても、外壁を登って眺めていた。

トイレに身を隠しても、隣の個室から覗き込んでいた。

厨房の戸棚に身を隠しても、僅かな隙間からガラス玉のような瞳で見つめられた。

不思議な事に、これだけ姿を現しているのに怪物は二人の目にしか映っていないかのよう。

アレだけ目立つ仮面をしているにも拘わらず、道行く人々も追い回してくる傭兵は目もくれない。まるで怪物が其処に存在しておらず、超常の存在であると示すかのよう。

だが、それ以上の恐怖はあつた。恐怖とは大半が当人にとっての未知と不理解から訪れるものではあるが、精神を持つ者がより恐れるも

わなければ、或いはより金払いの良い者が現れば短絡的に裏切る。正に魔族という存在を分かり易く体現した種と言えよう。

なお全くの余談であるが、鬼族の「すぐに裏切りはするが、金さえ払えば扱いやすく勇猛で強い」という株は、一時期底辺を突き抜けて大暴落した事がある。

ふうま一門に生まれた突然変異が引き金となつて巻き起こった大騒動、通称「ふうまの鬼退治」。

彼女の噂を聞きつけた神話級の鬼が面白半分に一族に声を掛け、日本海側にあつたある島を占拠。島民に凄惨な凌辱と殺戮を繰り返した挙句、日本政府に「ふうまの女を連れてこい」と要求を突き付けた。

政府は自衛軍を使って島民救出作戦を練つたものの、実行前に断念。天然の要害である島への潜入は難易度が高く、潜水艦を使って部隊を送り込んでも種族の差で縊り殺される。そもそも人質の数が多過ぎて島から脱出させるには潜水艦では定員をオーバーする以上、輸送の船が必要であるが島に近づけば発見される。空爆も人質を巻き込みかねないため、完全に手詰まりであつた。

其処で、政府は素直に要求を呑まざるを得なかつた。一縷の望みはふうま一門の尽力。超常の忍法を操る彼等が義憤に駆られ、島民の命を最優先して戦つてくれるのみであつた。そんな中、名指しで指名された女性は、鬼族の要求と行いに激怒した。

『は？ 人質取らなきゃ私が逃げるとでも思つてんの？ 売られた喧嘩くらい言い値で買ってやるわよ（ビキビキイ）』

が、当の本人は義憤なんてこれっぽちも覚えずに、全ての制止を振り切つて島の真正面から小舟で乗り込んでしまう。

ふうま一門の総意は政府への返答を考えている段階であり、部隊編成や作戦も立案できていない状態。ブチ切れた桃太郎さんに付いていったのは、御腰に付けた吉備団子を貰えずとも彼女の性格をよくよく理解し、無駄だと分かつて止めようと必死になつていた心願寺 幻庵、二車 又佐、八尾比丘尼の三人だけ。

桃太郎子さんは最初から人質など一切意に介さず、策も必要とせず真正面から暴力のみで突貫。その日は晴天、絶好の虐殺日和の中、人質救出&敵撲殺RTA開始。お供の三人が無言で頭を抱えるか、天を仰いで涙を流したか、胃の穴が開いて喀血かしたのは言うまでもない。

結果、一方的なワンサイドゲームのままRTAは34分56秒で終了。戦果は歴史上ではなく公式記録上初の神話級三体——ウラ、スクナ、オオタケマル——の素手による殴殺。他に参加していた神話級、上級、中級、下級鬼族は泣きながら海を泳いで逃走したため株価大暴落。人質は桃太郎子の余りの強さと無茶苦茶さとお供三人の尽力によつて開始時点から減ることはなかった。お供三人は終了後に心労で倒れ、それ以後桃太郎子は「鬼哭の拳姫」と呼ばれるようになった。

これまでの歲月によつて何とか株価は戻っているが、桃太郎子が鬼族に植え付けたPTSDは根強い。

当時の事件に関わらなかつた鬼族はとんだ巻き込み事故を喰らつて傭兵家業が立ち行かなくなつて困窮し、恨み骨髓。関わつて生き残れた幸運な者は彼女が亡くなつて以降も究極の暴力を目の当たりにした結果、未だに悪夢に魘されているという。つまり、今のリリムとミナサキと同様ということである。

「も、もう無理……もう、もうヤダあ……!」

「……はっ、はひっ、ひい、こ、こうなつたら……!」

どう考えても、敵う相手ではない。

赤鬼だけならばまだ逃げられる可能性はあつたが、従えた猟犬は中型の肉食獣ほどの大きさ。疲れ切つた状態では背中を見せた瞬間に噛みつかれて全てが終わる。

もうどうにもならない。

怪物どころか傭兵からも逃げられない、と悟つた二人は顔を見合せて最後の手段に打つて出た。

「こ、降参！ こうさーん！ 何でも言うこと聞きますー！」

「寧ろ喜んで捕まるから助けてー！」

「たすけ……？ きよきよきよ！ 何を言っているのかわからないでしゅが、いい心掛けでしゅよおー！ きよーつきよつきよつきよつ！」

このままでは怪物に何をされるか分かったものではない。

殺されるのならまだ幸運。魔界には死ぬよりも悲惨な目に合わせる手段など腐るほどある。

怪物が其処までする余裕も時間もなく無駄なことはしないのだが、想像力とは厄介なもので何も知らない二人の中では怪物が其処までするのは確定事項と化している。

ならばいつそのこと傭兵に捕まった方がマシ、と何処からか盗んできた白い布を鉄パイプに括り付け、文字通りに白旗を上げた。

傭兵達が追い掛け回してくる理由は二人も把握している。少なくとも、相手の要求を素直に受け入れていれば即座に殺されることだけはない。逃げ出せる芽はまだあった。

二人の内心など露知らず、赤鬼は愉悦の歓声を上げた。

傭兵仲間から聞いていた情報では小賢しく逃げ足が速い二人がことうも早く諦めた。実力差は分かり切っていたが幸運は幸運。いや、これが自分の実力なのだ、と喜ばない方がどうかしている。

本当にどうかしている。これは実力などではない。神の視座から見れば二人に良いように使われているだけに過ぎない。そして、本当にどうかしていたのは自身の不始末と不幸を他人に押し付ける事に長けた害獣に関わってしまった不運。それが、彼の浮かべた最後に上げた笑い声だった。

「念のため、拘束だけはさせてもらいましゅよおー。逃げられては

や———？」

「———」

引きと立ちんぼの娼婦は悲鳴を上げながら、店の中や路地へと逃げていく。半端に力を持っていない無力であるが故の正しい選択であったが、残された害獣はそれすらも出来なかった。

既に二人の心は折れている。

だから、すたすたと路地の影から何の予兆も前兆もなく気軽に怪物が現れたと思えば、今まで手にしていなかった長剣で猟犬の首を跳ね、そのまま赤鬼の鼻から上を斬り飛ばすのを呆然と眺めているしかなかったのだ。

希望が絶望に転じた衝撃は凄まじい。救いの象徴が奪われた瞬間に、全ての者はどん底へと叩き落される。今の二人が、正にその状況だ。

へたり、とその場に腰を落とすと、リリムもミナサキも言葉もなく股間どころかアスファルトの地面を汚す。最早、精神を恐怖によって崩壊させられ、肉体から我慢が消失し、自らの意思とは関係なく失禁していた。

「ぶくぶくぶくぶく」

「ひっ、ひっ……」

二人の選択はそれぞれ違う。

ミナサキは恐怖の余り泡を吹いて失神。汗と涙、涎と小水で汚れ切ったままその場で倒れ込む。恐怖で崩壊した精神を少しでも保つため、脳が失神を選択したのである。惨めで不様な姿だった。

リリムはもつと酷い。生命への希求で失神することすら構わず、ミナサキすら見捨てて失禁しながら四つん這いで逃げようとしている。これで何処に逃げれるというのか、恥ずかしい液体で逃げた先もバレてしまうだろう。惨めで不様な姿で不快で不愉快な姿だった。

(ここ)までだな。試運転のデータはそこそこ取れたし、今後は千里眼系の能力を持った相手の動きを更に先読みするプログラムを組ませてみるか)

怪物——小太郎は冷めた目で尊厳破壊してやった二人を見下ろした。

その瞳には僅かな殺意すら浮かんでいない。蟲を踏み潰すような心持ちで、殺すという意識さえない。

試運転のサンプルとしても使えなくなった二人の殺害は彼にとつては確定事項。わざわざ意識する必要性すらないのだろう。

しかし、最後まで不快で小賢しい相手だった。

あの瞬間、害獣のつた傭兵への降伏は最適解であった。

彼女達が何処へ連れていかれるにせよ、最後にどうなるにせよ、依頼を出した相手に差し出された時点で手を出すのは面倒なことになる。これ以上の手間をかけるつもりは更々ない。

連れて行かれる途中で更なる恐怖を与える選択肢もあったが、周囲を傭兵で守られては与える恐怖も薄れてより手間が掛かる。

いずれにせよ、二匹の害獣が何一つ理解しておらず、狙ってやっているわけでもないままに、生き延びることに長け、周囲にトラブルを振りまく弾正と同レベルの生命体であることに疑う余地はなかった。

そんな相手とも、これにておさらば。

とても命を奪う者とは思えない、何の機微も浮かべていない心のまま小太郎は二匹の害獣へと近づいていき——

「てやあ~~~~~!!」

「きやあああつ!!」

——突如として後方から発せられた一か八かの敵意に、全てを断念せざるを得なかった。

小太郎は即座に身体を左に傾けると、今し方まで頭のあつた場所に三股の銛が通過した。

余り見慣れず、そして実用性のない武器に仮面の下で怪訝な表情をしたものの、追撃を警戒して長剣を下から跳ね上げて銛の軌跡を無理

やり変えることで相手の体勢を崩させた。

それ以上の追撃はしない。

今の一撃で相手が戦闘に特化していない事は十分に察せられたが、何者か分からない以上は当然の警戒であった。

これがゆきかぜや凜子であれば何らかの異能を発動させる余地も与えず、一方的に叩き伏せられたであろうが、自らの弱さを認めている小太郎は後手に回った時点で出遅れたと判断して無理には攻めない。

後手に回ったのは敵意が余りにも衝動的で唐突であったから。

まるで、いじめられっ子を発見した学級委員長が正義感から何一つ考えずにいじめっ子の前に立ち塞がったかのようだ。

これまで何の存在も感じ取れなかった以上、自身を狙っているわけではないのは十分に察せられ、害獣の仲間かお節介焼きの仕業だろう。静観は悪手になり得ない。

上空に向いた銚に振り回されるように、相手は小太郎とすれ違いなから数歩よろめきながらも何とか体勢を立て直し、銚を構え直して向き合った。

「な、何があったかは分かりませんが、これ以上、リリムには手出しさせませんよ！」

「ミ、ーディア、~~~~~!!!」

「ちよ、ちよつとりリム、足に抱き着かないで！ これじゃ動けないから！」

（淫魔の方の仲間か。戦いは素人だが、これはこれで厄介な。淫魔としては害獣の数段上、気を抜けば夢の中に引き摺り込まれるな。性格も素直で真面目——しかしまあ、苦労してそうだなあ）

荒事など、まともにしたことはないのだろう。構えた銚の切っ先は哀れなほど震えている。

リリムにミーティアと呼ばれた少女もまた肩と小振りな胸の谷間を露出させた扇情的な格好をしていた。誰もが振り向くような美少

女であり、子供のあどけなさで大人の艶を両立させた顔と身体は雄の欲望をこの上なく刺激する。

どれだけ真面目であろうとも、夢魔は夢魔。淫魔の一種である以上、所作も雰囲気も淫靡で蠱惑的——である筈なのだが、覚悟を決めて引き締めた表情は凜々しきすらあつて縁遠く見える。

それも文字通りに足を引つ張る害獣のせいで全て台無しであった。長い付き合いなのか、リリムは顔と股間を汚したままでミーティアの片足に縋りついて泣きじやくっている。これでは戦えまい。

これにはさしもの小太郎も攻撃を躊躇った。ミーティアに同じ苦労人の匂いを嗅ぎ取ったからだ。

自分とは違つて真面目な分だけ背負う苦労も倍になる。素直で害獣同然の相手すら見捨てられないほどの仲間想いのお陰で倍率ドンで更に倍。

相手を理解するのが早い小太郎は仮面の下で涙を流した。共感したのではない、苦労する自分を彼女に見ただけであった。

(どうしたもんか。これだけ素直で真面目なら実力を問わずに種族の中でも重用されてるだろうし、害獣は兎も角コイツを殺すと夢魔全体が犯人捜しに躍起になる可能性も否定できん。正体がバレてない以上はオレが捕まりはしないが、人間と中立にある種族や一派が完全に敵対状態になつて敵を増やすのはなあ)

「こ、この銛で刺されたら、痛いですよ！ えいつ、えいつ！ 血も一杯出ちやいます！ 多分、リリムの方が悪いとは思いますが此処は引いて下さい！ お願いします！」

(必死過ぎて願望まで駄々洩れ……いや、半分は演技か、腹黒だな。油断を誘っているわけだ。自分の置かれた状況を把握して限られた手を模索している。オレにこの手が通用しないのを理解しているが、牽制と時間稼ぎなら十分。その間に次の手を、か。優秀だな………腹黒だが素直で真面目で優秀。ふむ、とするならば……)

腰の入っていない状態で銛を突き出しては引いてを繰り返す。こ

れでは戦闘をしたことはありませんと宣言しているようなもの。

だが、必死な表情に反して瞳には蛇のような冷たい光が見え隠れしている。成程、相手が傭兵ならばこれで十分だ。彼女が優秀な夢魔ならば油断しきった精神を夢の世界に引き摺り込むのは容易い。

そして、小太郎にはそのような手段が通用せず、傭兵とは比較にならない強敵であることを理解している。警戒心の強さを相対したただけで察し、単純に夢の世界に引きずり込んでも一瞬で看過されて逆にやられる。

本当に優秀な夢魔だ。何故、害獣と付き合いがあるのか不思議なほどである。

同じ属性にあるものは惹かれ合うもの。

上司から無茶振りされて仲間からは迷惑を掛けられる対魔忍の苦勞人小太郎と上司からの頼み事を仲間からは足を引っ張られる夢魔の苦勞人ミーティアとの出会いは、或いは必然であったかもしれない。

そして、一方的に理解した瞬間、小太郎の方針は決定したのであった。

苦労人が増えるよ！ やったねたえちゃん！

害獣と真面目夢魔と苦労人の邂逅。

それが一体何を齎したのか。そしてこれから何を齎すのか。

何はともあれ、夢魔側の発した一触即発の空気がある。戦いは避けられない――

「すみませんでした」

――ものと思われたが、そんなことはなかった。

今、四人は繁華街にあった廃ビルの一フロアへと移動している。

天井からは取り外されなかった電灯や電線が老朽化によつて顔を出しており、差し込むのはネオンの光だけ。

小太郎はミーティアとの無駄な戦闘を避け、事情を説明することを選択した。

戦つて勝てない訳ではなかったが、現在と今後に割りさかれてしまう労力を考慮して、少なくとも今は戦闘に移行するべきではない、という判断。

その判断は間違いではなかった。

ミーティアという夢魔は、決して馬鹿ではない。彼女もまた本心を告げれば戦闘などしたくはない。

種族として戦闘向きではないのは事実。しかし、そこいらにいる馬鹿な傭兵程度であれば己の領域^{夢の中}へと簡単に引きずり込む自信はあったが、リリムを救うためとは言え仕掛けてしまった相手はそれが通用しない。

一目見ただけで分かる精神の隙のなさ。根本的に知的生命体の精神も脳も隙間だらけで連続性はないに等しい。発達した身体と脳が、一つの事柄に対しての関心をどうしても薄れさせる。

会話をしているも流れる汗の感触や匂いに不快感を覚えるように。何か打ち込んでいても耳元を飛び回る蚊の煩わしさを我慢できないように。発達しすぎた肉体から得られる情報を脳が処理しきれずに、精神を弛緩させる。

目の前の男には、それが全くない。

肉体と脳を完璧な形で手中に収めているのか、そもそも精神の形状かたちが異なっているのか。僅かな緩みすらない。

夢魔とって、彼は正に天敵。得意分野に引きずり込めず、苦手分野を押し付けられる最悪の敵。穩便に済むならばそれに越したことはない。その点、ミーティアは話し合いを持ちかけられた時点で、心底安堵した。

ミーティアに与えられた仕事は、彼女が属する夢魔の一派をまとめ、補佐する立場にある友人からの依頼。人界で遊び惚けている夢魔リリムを魔界の拠点へと連れ帰ること。

本来、彼女の一派は魔界側人界側を問わず、受けた依頼に従って対象の精気を啜って衰退させたり、衰弱死させることを生業としている。だが、リリムと来たら対象に言い包められて痛い目を見るなど日常茶飯事。時には自分から依頼を放り出て遊びだす始末。正に、夢魔の恥晒しの名に恥じぬ有り様であった。

一体、何人の仲間が彼女の尻拭いに東奔西走させられたか分かったものではない。なお、最大の被害者はミーティアである模様。

怒り狂う依頼人を諫めるだけの話術、対象を生かすも殺すも好きに出来る能力と彼女自身の研鑽、生来の素直で真面目な性格、その仮面の下に隠された自らと一派の利潤を追求する計算高さや腹黒さ。これで信頼しない方がどうかしている。尤も、仲間に信頼されているからこそ損な役回りばかり押し付けられているのだが。

だが、安堵も束の間。男の話を聞けば聞くほどに、ミーティアは顔を蒼褪めさせた。

それもその筈、男には何ら非はなく、どう考えたところでリリムが悪い。彼女の口八丁でも言い包められないレベルである。

彼女もまた闇の世界の住人だ。名に傷を付けられる、顔に泥を塗ら

れるのは或る意味において命を奪われる以上の不利益を生み、如何なる勢力、職業でも嫌われ、何をおいても報復に出なければ示しが付かない行為であるのを知っている。男が何者かは分からないが、例外ではないだろう。

リリムの馬鹿さ加減など骨身に沁みて分かつていたが、それを上回る馬鹿な行為の数々をたつたの一晚で積み上げていたのであった。

相手に泥を塗るのはまだいい。それくらいならリリムは日常的にやる。だが、相手を選ばなかったのは馬鹿にもほどがある。これまでは相手を怒らせようが何をしようが逃げ延びてきたのに、よりにもよってこんな夢魔にとつて悪夢染みた人物に罪を擦り付けようとしたのか。

其処でミーティアは想定していたプラン全てを捨てる決断を下す。誘惑や交渉、逃走も何もかも投げ捨てて、初手から全力の土下座外交に踏み切った。半端な真似をして機嫌を損ねるよりかは、差し出せるものは全て差し出して許しを乞うた方がまだリリムを生きて連れ帰る可能性があるかと判断したのである。

日本人でも此処まで綺麗な土下座は誰も出来まい。小太郎ですら、思わず感心してしまう綺麗なフォームであった。

「事情は分かりました。あの子に代わって夢魔の代表として謝罪します。ですけど、どうか、どうかあの子の命だけは……!」

「いや、別にいいよそういうの。謝って欲しいわけじゃないからさ。事情を説明したのはお前に邪魔して欲しくなかっただけだし――

―じゃあ殺すね?」

「ひい――!!」

「待って下さい! リリムは本当はいい――子なんかじゃないくて本当にどうしようもない駄目な子ですけど! 私の! 私の大事な友人なんです! それだけは! それだけは勘弁して下さい!」

しかし、小太郎はこれを蹴る。

謝罪を受け入れても得られるものが何一つない以上、受け入れる意味もない。

ミーティアには気の毒そうな表情を向けたものの、懐からは殺した傭兵から奪った拳銃——ベレッタF92を取り出した。

慣れた手付きで僅かにスライドを引いて、薬室内に9mm×19mmパララム弾が装填されていることを確認する。それだけの動作で部屋の隅で股間を濡らしたままの害獣は互いに抱き合いながら悲鳴を上げ、ミーティアは土下座を解除して片足にしがみつく。

殺意というものがまるで感じられないことに、ミーティアの戦慄は更に加速する。

恐らく、この男にとって蚊を叩き潰すのも、自身に不都合な相手を殺すのも同列なのだ。

多くの魔族が戦いそのものに悦びを見出し、或いは気持ちのいい勝利を得るために敵を蹂躪する。とどのつまり、常に敵へと一定の感情を抱いているのだが、この男にはそれが無い。

殺すと決めれば呼吸と同じように実行し、その癖、生き延びることに特化したリリムを追い詰めるほどの執念を發揮する。相反する要素を矛盾と共に抱えながらも破綻が一切存在していない。余りにも人からも魔族からも逸脱した精神性は、彼女にやべー奴だという印象しか与えない。

ミーティアとしては何か差し出せるものがあればよかったが、稼いであった路銀はリリムを探す過程で使い切っている。

かと言って、手元のないものや不利益を補填する行為を口約束であつても提示するのは怖すぎる。

男が何を要求してくる分かったものではないし、最悪のパターンは運よくこの場を収められたとしても、その後口約束を実現できなかった時。一体何をされるか分かったものではない。だが、他に手はなかった。

「わ、分かりました！ あの子に代わって私が何でも！ 何でもしませすから！ どうか命だけは御勘弁をっ!!」

「ん？ いま何でもするって言ったよね？」

(仕方ないとは言え、やつちやつたー！ー！ー！！)

この場を収めるにはこれしかなかった。

相手が何を考えているか、何を欲しているか分からない以上、例え無理難題であった従いますという絶対的な恭順の意思を示し、ワンチャンに賭ける他ないのだ。

最悪の一手に違いない。だが、溺れた者は藁をも掴む。最悪の地獄に叩き落される可能性が見えていたとしても、自らを助けるために、友を救うためには一縷の希望に望みを託してしまうものだ。

内心はどうあれ、ピクリと小太郎は片眉を上げて手と足を止めて、縋りついてくるミーティアを見た。

その瞳のドス黒さよ。彼女が自らの破滅を予感するには十分すぎるほどだった。

この時点でも、ミーティアの内心にリリムへの罵倒が存在していない辺り、本当に仲間想いというか人が良いと言うか。

灰色の脳細胞は高速回転しており、理想としては自分を含めた三人の生還、最低でもリリムと自分だけでも生かして連れ帰る方策を探っていた。

「有難いつちや有難いんだが、オレさ、そういうこと簡単に言うのよくないと思うよ。大丈夫？」

(優しい……！)

その必死な様子に小太郎は縋りついてくるミーティアの両腕を優しく解くと、肩に手を置いて諫めるように言った。

因みに、これは掛け値なし裏表なしの本心である。ミーティアがどれだけ苦勞してきたか、泣きながら仕事を熟してきたのか、透けて見えているのだ。

この期に及んでリリムの行為に怒りを抱かず、見捨てずに生き残る方法を探る仲間想いと諦めの悪さ。本人にそのつもりがなくても苦

今まで必死に考えないようにしていた嫌気と不満が爆発していた。せめて同じ苦労を背負ってくれる相手がいれば違っていただろうが、そんな相手は一人としていなかった。典型的なブラック企業の社畜である。

「其処に境遇も立場も違えども、理解を示してくれる相手が現れれば、こうもなるだろう。」

「じゃ、じゃあ、見逃して頂けませんがぁ？」

「あ、それとこれとは話が別だから」

（——チッ！）

（しっかりしてるなあ。いいぞお、これえ！）

ちやつかり相手の心配を利用して話を有耶無耶にしようとするのも忘れていない。

メンタルがしっちやかめっちゃかになっていようが、やるべきことはやる、という鋼の意思である。

内心舌打ちをしているであろうミーティアに小太郎は思わずニッコリ。でなければ、話し合いに持ち込んだ意味がない。

「ストレスつてのは発散しないと溜まるもんだからな。だからどうだろう。偶には言葉にしてみるの？」

「こ、言葉に、ですか……？」

「そうだよ。自分に迷惑ばかりかける友人なんて友人ではないのでは？ 対等でない友人なんていらんじゃ？」

「な、なんて事を言うんですか……！」

「でも自分の心の声に耳を傾けてごらん？ 聞こえてくるだろう？」

「リリムなんていらん！」って

「そ、そんな事……」

「ないって？ 本当に？ 口にするだけでも今までの鬱憤が晴れていくんだよ。ほら、言っただらん？ リリムなんかいらん！」
「リリートアフターミー」

喝によって上下関係を築き、自己否定を埋めて自己肯定感を与えてやる。小太郎がやっていたのは、正にそれだ。

しかし、自らの命の危険を嗅ぎ取った害獣の叫びによって邪魔をされた。本当に、自らが生き延びるための最善をよく考えもせず選べる生き物である。

リリムの叫びによって自分は何をやっていたのか、と正気に戻ってしまう。

小太郎の舌打ちも無理はない。ミーティアの心に溜まった澱の量からすれば、存在自体が邪魔な害獣を自らの手を汚さずに始末するところまで持っていったのだから。

(きいて、どうすつかな)

(ど、ど、どうしよう！ どうすれば!?! な、な、な、何とか! 何とかリリムだけでも……!)

しくしく、と恐怖に打ちひしがれた害獣の不快感鳴き声だけが響く一フロアの中、まだまだ用意した選択肢も豊富な小太郎は余裕で次の一手を模索し、ミーティアは最低限の許容範囲ラインを確保しようとしていた。

互いが互いの利益を手にくすべく、何を要求すべきか、妥協点が何処にあるのか。僅かな時間での腹の探り合い。

最中、小太郎は信じられない行動を取った。彼について殆ど知らないミーティアにとっても、これまで受けた印象を完全に裏切るものがあった。

何を考えたのか、相手から視線を切ったのである。如何に無抵抗を示しているとは言え敵は敵。それを前にして、小太郎が敵を視界から外すリスクを侵すなど有り得ない。

されど、致し方ない。

彼の研ぎ澄まされた五感、埃臭さの中に混じった花の香りと足早ながらも気配を殺して近寄ってくる何者かを捉えていたからだ。

「ちよつと待った!!!」

小太郎が捉えていた気配。廃ビルのフロアに入ってきたのは、ネオンの光を跳ね返す金髪の美女。

豊満、などという言葉では表現しきれないほど豊かな肢体を隠すことのできない薔薇色の対魔忍装束で飾っている。

彼女は通称“花の静流”、本名は高坂 静流という。危険な単独での潜入任務を主とする手練れ。六ヶ国語を操り、二つの博士号のみならず数十に渡る専門知識を有し、あらゆる経歴の人物となって潜入可能と対魔忍きつての才女である。

小太郎にまず浮かんだのは疑問。そして不安。

彼女ほどの手練れであれば、比較的平和なままえさきで遊んでいる暇などない。アサギにしても任せたい任務は腐るほどある筈だ。ならば――

彼女のがこの場に居る時点で、自身の巻き込まれた一件が想像していた以上に厄介である可能性が非常に高い。不安の一つも覚えよう。

ミーティアにまず浮かんだのは驚愕。そして絶望。

魔族にしてみれば対魔忍は恐怖に値する敵であり、中でも戦闘能力を持たない夢魔にとっては真正面から敵対するには余りにも危険すぎる相手。

対魔忍が声を掛けてきた、ということとは、目の前にいる男もまた対魔忍かその関係者と見て間違いない。ただでさえ厄介事を抱え込んでいたと思ったら、最大級の厄ネタだったなど絶望しようというものだ。

「貴方、ふ――」

「ちよつと、人が何のために顔隠してると思ってますかアンタ」

「そ、そうね。ごめんなさい、悪かったわ。此処の所、休みがなくて」
(コイツもオレや九郎と一緒に過労死勢筆頭だしなあ~~~~)

静流は任務以外では五車にて英語を担当する教師であり、小太郎の

風体を見知っている。

尤も、彼が授業に出席するのは単位を取るための必要最低限であり、静流にしてもなまじテストの成績も良ければ、授業に出てもどんな質問にも淀みなく答えてくる一番性質の悪い生徒。印象は決してよろしくない。

額から汗を流し、連日の任務に今宵重なった疲労から鈍った思考回路は思わず彼の名を呼ぼうとしてしまったが、鋭い視線に寸でのところで何とか言葉を飲み込んだ。

彼女とて身分を隠す重要さと難しさは重々承知している。立場上は目下の彼であっても目くじらを立てることなく即座に謝意を示した。

小太郎にしてみれば冷や汗ものである。

ただでさえこのまま処分出来るか分からない害獣に、友好的関係を築けるとは限らない夢魔に自分の名前を知られるなど冗談ではない。

その上、此処で静流が介入してきた以上、自分の思い描いたプランの大半はお蔵入りになる。内心では舌打ちしまくりであった。

「悪いけれど、此処からは私が仕切らせてもらうわ。双方とも、それで構わないわね？」

「まあ、しゃあなしっすね。こっちは任務じゃない。優先順位はそっちでしょうよ」

「ぜ、ぜぜぜ、ぜひそれでお願ひしますー！」

(ふ、ふうまくんは兎も角、夢魔の娘の方がもの凄い勢いで同意してくれたわね。どういうこと?)

街は傭兵達が駆けずり回るパリーイナイトであったが、この廃ビルのフロアもなかなかのパリーイ状態である。

疲れた溜め息を吐く美人対魔忍とすつとボケて詳細を語るつもりは一切ない最悪の対魔忍。

身内の余りのやらかしに半泣きになりながらバシバシとリリムの頭に平手打ちを喰らわせる真面目魔魔。刻まれた恐怖からギャン泣きする害獣達。

ただでさえ混沌とした状況下だと言うのに、害獣の不用意な一言で小太郎はビキビキしだし、ミーティアは額を地面に擦り付けて土下座、静流は更に深い溜息を吐くのだった。

「と・に・か・く！ 此方の任務を手伝ってもらおうわ。君も、そちらの娘達も構わないわね？」

「も、もももも勿論ですう！ キッチンと尻拭いをします！ いえ、させて下さい！」

(ちよつと必死すぎないかしら???)

「いや、ミーティアの方はまだ役に立ちそうだけど、この害獣二匹はいらんでしょ。コイツ等の情報なんて信用できんし、精査もできない。魔界ワズプを欲しがる企業なんて限られてくる。何なら働きバチを捕まえて昔ながらの方法で巣を探してもいいし。そっちの方が確実でしょ、殺処分しましょ殺処分」

(この子が原因ね、どう考えても……)

「駄目よ。此処まで追い詰められてるのだから嘘なんて吐けないでしょう？ それに戦力は多いに越したことはないわ。まだ民間にまで被害は出ていないけれど、いつ被害が出てもおかしくない。それに、他の企業に捕獲されて馳ごっこ、なんて面倒は御免よ」

「まあ、そうっすね。足手纏いにしかならんと思うけど——チツ！」

(不満も舌打ちも隠そうともしないわね……)

(さ、殺意が、殺意が高すぎる……！)

「あ、ところでこの害獣が逃げようもんなら殺してもいいっすよね？」
「あつ、えっ？ その、先生、そういうのはよくないと思うの……ほら、ノマドみたいに邪悪じゃないって言うか、単なる悪戯っ子なわけだし……」

「いや、これだけやらかしてんのにそれで済むわけないでしょ、ケジメつけさせないと。逃げたら殺していいっすよね？」

「……………そうね」

(静流さんもう少し頑張っつて！)

小太郎は何かして害獣駆除を実現させたかったものの、静流に却下されては是も非もない。

学園の教師生徒の関係以前に、何の任務も抱えていない状態では臨時招集されたも同然。彼女の任務である以上、作戦の決定権も指揮権も全て静流にあり、小太郎の扱いは一兵卒に過ぎない故に出来るのは意見具申まで。

しかし、諦めてはいない。今こうしている間も任務中の事故ということで不愉快な害獣を抹殺できないかと考えており、取り敢えず方法の一つとして害獣が逃げたことにしてどさまぎで殺す気満々であった。

余りにも高すぎる殺意に、静流はすつと目を逸らして思わずフロアを入れる。

彼女には害獣に振り回された疲れはあるものの、恨みなど欠片もない。少女そのものの見た目から思わず庇う。

が、返ってきたのはぐうの音も出ない正論であり、流石の静流もそれ以上庇うのは不可能であった。

こうしていよいよ持って逃げ場を失った害獣であったが、ミーティアは首の皮一枚繋がり、大きく安堵の吐息を漏らした。

現時点でリリムが殺されることはなくなった。見た所、男は任務や対魔忍の仕事に忠実であり、取った言質以外で殺そうとはしないだろう。

対魔忍二人に対する所感としては、少なくともこの二人は魔族と手

を組む事に躊躇や嫌悪はまるでない。必要な手段を必要な分だけ必要な時に使う、そういう手合いだと判断できる。

これからが彼女にとってには正に正念場。リリムが馬鹿をやらかさなないように監視しつつ、見逃して貰えるように彼等の任務に協力する。上手く立ち回り、任務に多大な貢献をすれば、何らかの報酬やそれに準ずる利益も見込める。

が、それよりもまずお願いしなければならぬことがあった。

「あのお、静流さん……お願いできる立場でないことは十分理解していますし、お門違いも甚だしいと思いますけどお……二人に、新しい下着を……」

「……………分かったわ」

「あ、下着よかオムツの方がいいと思うよ？ 多分、オネシヨも再発してるしな、ハハ」

ミーティアのお願いに、静流は可哀想なものを見る目と共に頷き、小太郎は悪びれもせずに半笑いするのだった。

ぶつちやけ契約するなら利益しか見てない馬鹿よりも騙そうとしてくる天才の方が遥かに有益

まえさきは大きく分けていくつかの区画に分かれる。

闇の住人達が根城とし、違法ではなく脱法行為が横行し、いかがわしい店の立ち並ぶ歓楽地帯。

住民達が一戸建てを購入、アパート、マンションの一室を借りて住まう住宅地帯。

昔ながらの商店街、遠方からの観光客も受け入れ、若者の集う複合商業施設が共存する商業地帯。

そして、誘致された企業が広大な敷地で街の住人を雇い、昼夜問わず稼働し続ける工業地帯。

静流が四人の前に現れてから一時間後。傭兵達が乱痴気騒ぎに明け暮れる歓楽地帯から脱出していた。

どれだけ傭兵達が駆けずり回る地域だろうが、所詮は烏合の衆。誰かが指揮をするわけではなく、各々が好き勝手に動いていれば包囲網には程遠。

戦闘能力は勿論の事、夢魔の能力ですら脆弱な力に過ぎないと断じ、繊細で慎重な立ち回り方こそ生き残り、勝利し、利を得る術だと考えているミーティア。

単独潜入に秀で、そのためのスキルを身に付け、人の心の機微を把握し、操ることが出来る対魔忍「花の静流」。

母親からの教育でスキルは持ってあれば持っているほど役に立つことを学び、自ら過酷な修練を積み、器用貧乏ならぬ器用万能と化した小太郎。

この三人が手を組めば、勢いばかりで包囲の何たるかを理解していない傭兵の集まりを抜けるなど容易い。

事実として、泣き腫らす害獣二匹という足手纏いがいながら、歡樂地帯を脱出するまでの間、誰一人としてその姿を目撃されることはなかった。

そして今は工業地帯の奥にあるトンネルを進んでいる。

車だけではなく徒歩や自転車による通勤を想定しているのだろう、トンネルは短い感覚で並ぶ埋め込み式の照明によって夜間であるにも拘らず真昼のように明るかった。

「この先はクロワダミ製薬の工場か。お前等、本当にそんなところに売りつけられたのか？ 出鱈目言ってるんじゃないだろうなあ……？」

「ちっ、違うよ！ 人間き悪いこと言うなあ……！」

「ボ、ボク 능력は確かだよ！ いる！ 絶対いるから！」

「デーン、リリム、ミナサキ、タイキツクー。お前等の能力は知っているがその態度が気に食わねえ」

「二な、なんで——ぎにやああああああああああ!!!」

「リリム——————!!!」

「本当にこの子は……容赦ないわね……」

そして、五人はリリムとミナサキが先頭をその後小太郎が続き、更に後方ではミーティアと静流が並んでいる。

害獣二匹は平時ほどではないものの、それなりに意気を取り戻していた。

二人にとって恐怖の象徴である小太郎のマスクは今や別のもので覆われている。いつぞや事故に見せかけて殺した政治家の自宅に侵入した際に購入した馬のマスクを被っていた。馬鹿馬鹿しくてやっていられないという気持ちの表れである。

その間抜けさや場違い感でようやく恐怖が薄れてきたのだが、小太郎に容赦はない。二人の首に犬用の首輪を巻き付け、リードで繋いでいた。完全に人間かそれに類する人型魔族への扱いですらない。害獣だと断言しただけの事はあった。

この扱いには仲間想いのミーティアやまともな倫理観を持っている静流は反発しそうなものだが、そういったものは一切ない。

ミーティアはリリムの馬鹿さ加減を把握しており、下手に逃げようとして殺されるよりはまだマシと割り切っており、静流は静流で二人の厄介さを既に感じ取っていたからだ。

「でも、クロワダミ、ですか。私もCMで見た事があります。そんなところが危険を冒すなんて……」

「大企業は大企業だけど、最近は売上も株価も落ちてきているからね。魔界技術に手を染めている企業に追いつかれてきているから、焦って、と言ったところでしようね」

「だとしてもアホでしょ。新しいテクノロジーを得るためとは言え、こんなアホ二匹から買うか普通。いくら使い捨ての実験動物で他にパイプないからって、粗悪品掴ませる可能性高すぎるだろ。オレなら絶対買わねえ、関わらねえ、そうでなくてももつとよく調べる。アホしかいねえのか、この界限は」

「……………」

害獣の扱いにこれ以上憐憫を覚えないように、話題を変えたミーティアと静流であつたが、ぐうの音も出ない正論に押し黙らざるを得なかった。

確かに彼の言うようにアホしかいない事件である。

魔界の生物が高値で取引されると何処からか聞きつけた害獣は、たまさか捕らえた魔界ワспをクロワダミに売りつけようとした。

但し、それだけでは売り物にならない。魔獣と言えども野生動物と大差はなく、何らかの手段で調教、或いは操^{コントロール}作できなければ生物災害を引き起こしかねないからだ。

其処で、害獣はフリーマーケットで買った炊飯器をコントロール装置に改造して売りつけたそうさ。もう一度言う。フリーマーケットで買った炊飯器をコントロール装置に改造したそうさ。

識者が聞いても顔面ハテナマークだらけになる。恐らく一般人で

も同じだろう。これで笑うのは、ふうま宗家の天才技術者である啓治くらいのものである。彼なら再現しかねない。

どこをどうすれば炊飯器を改造してコントロール装置など出来るのか全くもって意味不明だ、当人達も分かってしまい。野生生物のコントロールは難しい。精々が音や匂い、光で遠ざける程度で、その本能を妨げて意のままに行動させるなど不可能に近いのだ。

どう考えてもそれはコントロール装置として機能したのではなく、たまたま機嫌が良かったか外敵に殺されないために大人くしていた魔界ワスプを見て、巧くいったと勘違いしただけだろう。

害獣二匹は間違いのない馬鹿であるが、これをコントロール装置ごと買ったクロワダミの連中も同レベルの馬鹿である。

まともな企業なら得体の知れない相手から危険な魔界生物を買おうなどと思わないし、コントロール装置に関しても徹底して調べ、効果が本物であるのか確認する筈である。

尤も、そこは頭魔族なんぞに関わるアホ企業である。目先の欲望にばかり囚われて、頭が茹だつているとしか思えない行動にも出るなど日常茶飯事。

実際、そうして倒産した企業は少なくはない。どんな手段を用いても成長しようとする企業よりも、真面目に誠実に客にも同業他社にも接し、安易な気持ちで魔界技術などに飛び付かず、昔ながらの方法と自ら築いたノウハウに誇りを持って取り組む企業が業界で長く息をするもの。

小太郎が法の内側で知恵を絞り、真面目に生きている者こそ真に賢き者、というのはそういう理屈だ。

敢えて————と言うよりも、無理にクロワダミの肩を持つのなら、業績低下に伴って焦る経営陣にせっつかれた中管理職や現場がやらかしてしまったと考えられなくもない。

が、いずれにせよ、同情の余地はあるものの関わった者全てがアホしかない事態である。小太郎が容赦なくマジレス真拳をかますのも、静流の目が馬鹿馬鹿し過ぎて死んでいくのも、ミーティアが望むと望まざるとに関わらずアホな事態に飛び込んでいかざるを得ない

二人に同情するのも無理はなかった。

「おら、はよ歩け。こんな馬鹿みたいな事件、こつちはこれ以上時間か
けたくねーし、関わりたくもねーんだよ」

「うおごご、お尻が、お尻が……!」

「んぎぎ……! い、痛い、痛くて歩けない……!」

「ほう、よく言った。これなら?」

「びびいいいいいいいいいいいいいい!!! ……あつ、
へえ」

「これ以上人前で尊厳ぶつ壊されたくないや早くいけ。オレも小便臭
いお前等と関わりたくない。さつさと責任を取るために動くか、今す
ぐに死んでくれ頼むから」

「はあああ~~~~~~~~。もう、其処ま
でにしなさい。ほら、君も」

「……………ふふっ」

尻に向けてのタイキツクをモロに喰らった二人は顔面から地面に
倒れ込んだリムとミナサキは恨みがましく小太郎を見上げる。

しかし、小太郎は全く気にせずウマのマスクを取って、その下に隠
された怪物のマスクを見せてしまう。

瞬間、トンネルに響き渡る悲鳴、続く二人の涙に濡れた間抜け面。
恐怖にとつて尿道という蛇口が破壊された二匹の害獣はトイレを使
用して用を足すという尊厳すら奪われていた。

静流はクソデカ溜め息をついて、二人のフォローに回る。泣きじや
くる二人を立たせると、小太郎に馬のマスクを被り直すように指示を
出す。

その隣ではミーティアが口元を震えさせていた。リムとミナサ
キへの同情が胸中の八割を占めていたが、残り二割は散々自分に迷惑
をかけた二人の情けない姿に昏い愉悦を覚えてしまっている。

とても仲間想いと言えない有り様であるが、これまでリムから背
負わされてきた苦勞と迷惑を考えれば無理もなかった。

「ほら、二人とも立ちなさい。大丈夫よ、この任務が終わるまで私が守るから。協力してちょうだいね」

「うえ、怖いよお……お股気持ち悪いよお……!」

「もうやだよあ……誰か助けてえ……ブヒイツ……!」

ウマのマスクを渋々被り直した小太郎をしつと手で払い、静流は優しく微笑んで、二人の手を掴むと立ち上がらせる。

そして、肩を抱いて慰める姿は正に教師——いや、泣きじゃくる二匹が腰に抱き着いているのを見ると保母さんと言ったところか。

但し、小太郎が離れたリードはしっかりと握り、ひっそりと任務が終わったら無関係だからと宣言しておく抜け目の無さであった。

まるつきり飴と鞭、もしくは良い警官と悪い警官と言った趣である。

小太郎が責めて責めて責め抜いた分だけ、静流が優しく接する。そうすればそうするほど害獣の心理的なハードルは下がっていく。

事実として、小太郎が何を言っても泣き喚くだけであろうが、静流がフオローするように優しく諭せば一も二もなく領いて馬車馬の如く働いているではないか。

打ち合せなしでこの手管。流石に単独潜入する上で必要な知識として心理学にも手を出している才女と人類の誰もが身に付けられるあらゆる技能を高い水準で身に付けた外道。会話も必要とせず互いの役割と任務遂行に当たって必要な手順を決めたらしい。

後ろで見ているミーティアは二人の仕掛ける誘導に気付てはいるものの、口を挟まない。挟めない。

自分達の命脈がギリギリのところまで保っているのは自覚している。此処で二人の機嫌を損ね、約束から何から反故にするつもりで全てを闇に葬る方向へと舵を切られたら成す術はない。

相手からの不当な要求は絶対に応じる! だが完全な服従しない! 僅かな隙を探って虎視眈々の構え。リリムとは文字通りに格が違った。決してリリムの様子にもつと愉悦を味わいたい訳ではない。ミーティアは裏表のない素敵な夢魔なのだから。

「はあ、めんどくせ。お前も大変だな、あんなのの世話押し付けられて」

(私の境遇分かってくれてる……！)

「だからどうかな。もう一回言ってごらん？　　ッリリムなんていらない」

「あの、露骨に洗脳しようとするの、止めて頂けませんか……？」

「だあめかあ。いや、洗脳の方はおまけなだけだな。実際、洗脳されちまった方が色々楽だと思っけどな。このままじゃ壊れちゃうよ。普通にお前のこと心配ではある」

(これ本気で言ってくれてる……優しい……！)

ウマのマスク越しに向けられる憂慮と気遣いの視線に、ミーティアはぶわわと内心でだけ涙を流した。

洗脳という手段は兎も角として、小太郎がミーティアを心配しているのは本心である。彼にしてみれば、彼女ほどの有用な人材が、扱い易いからという理由で使い潰されてしまうのは余りにも勿体ない。

ミーティアが現れたことで、小太郎の害獣共を殺す予定に変更はなかったが、優先順位は既に変わっているのだ。

優先順位の第一は魔界ワスプの殲滅。これは静流が現れたことで差し込まれた急な予定であるが、現時点で対魔忍として最優先すべき事態であることに疑う余地はない。

優先順位の第二はミーティアの自陣営への引き込み。これが彼にとって最大の目的に変化している。彼女を引き込むことで得られるリターンは果てしなく大きい。何としても心変わりを誘発させるか、そうでなくても己の専属として契約関係を結んでおきたい。だからこそ対話という手段を選択した。

害獣に関しては最下位だ。ミーティアの出現によって、二匹の生死はどうでもよくなった。今後を考えて殺してもいいし、ミーティアとの関係を良好にするために見逃してもいい。どちらにせよ、自身に被害が及ばないような手筈は整っているのだ。

「ふーっ、しかし熱いな、脱いじやお。あ、ところで挨拶がまだだったな。オレ、ふうま 小太郎。よろしくね?」

(あつ、私の好みかも。性格もアレだけど、私は優しくしてくれるし、結構いいなあ……………つ!!?)

「ん、どうかしたのかなあ? お話するからオレの目を見ましようねえ」

「み、見てません。聞いてません。私は何も見ませんでした。何も聞こえませんでした。だから許してください、命だけは、命だけは勘弁して下さいイ……」

ズボリと音を立てて、二つのマスクが脱ぎ捨てられる。

それを何となく横目で見ていたミーティアは、決して美男とは呼べないものの、切れ長の目とそれなりに整った顔立ちを目にした。

正直に言えば、小太郎以上の美男など掃いて捨てるほどいるし、見慣れてもいる。夢魔は他種族の異性を魅了する生命体。生存戦略として容姿が優れていくのは必然であり、夢魔全体が美男美女の集まりである。

だが、好みというものは個々で存在するのは人と変わらない。顔面崩壊レベル醜女、醜男が好きな者もいれば、豚のようにぶくぶくと肥え太ったのが好きな者もいる。

最近流行りの線の細い優男イケメンではなく、光るものがある訳でもなかったが、確かな男らしさの現れた造形と深い知性と強靱な意思を感じさせる瞳はミーティアとしては非常に高ポイントである。

ただでさえグラついていいる心が更に傾きかけたが、それも其処まで。彼女は当然の如く戦慄した。

今の今まで正体を隠していた男が、顔も名前も明かす行為が何を意味するのか分からないミーティアではない。

危険意識が水城夫妻、親子を二重の意味で嵌めようとした阿呆な政治家や阿呆な奴隷商人とは段違いである。

もうダメだあ、おしまいだあ、となりながらもせめて希望を繋ごう

と顔を見ないように首を横に向け、名前も聞かなかったことにして、貴方の素性は誰にも明かしませんと言外に語る。

「いいね、ちゃんとしてる。ますます気に入った。本気で安心してくれ。顔も名前も明かしたのは殺すつもりだからじゃないよ。嘘じゃない」

「じゃ、じゃあ、私とリリムの命を保証してくれるん、ですね……？」
「お前の方は何もしなくても確約する。だが、害獣の方は保証しかねるな。宣言通り、逃げたら殺す。割と本気で邪魔だと思ってるからな」

「で、では、先程、提案させて貰ったように私が何かをする、或いは何かを差し出せば、リリムの命も確約して頂けます、か……？」

「ああ、構わない。オレが今一番欲しいのは情報だ。そいつを教えてください。確約しよう」

「……情報、ですか。私の持っている情報で足りるのならいいですけど……話だけでも聞かせて貰っても……？」

情報はあらゆる事柄に共通する重要な要素であるが、明かしたところで痛手にならず、失うことはなくあくまで共有に留まる。

実質、元手がゼロで命を買い取るのなら安いもの。それどころか、情報を小出しにしていけば命だけでなく見返りまで視野に入れられる。

その上、相手が何の情報も求めているかを知れば、今後の目的も察することが可能。以後は、関わり合いにならず平穩に稼業に勤しめる。

半ば本気の怯えの演技を見せながら、ミーティアは計算高く立ち回る。

少なくとも、小太郎が自身を高く評価してくれているのは確定的。でなければ圧倒的な優位にありながら交渉染みた真似はしない。恫喝すればそれで終わるにも関わらず、対等の立場としてテーブルについてきた。

これは今後の関係性を見据えているからに他ならない。チャンス

はやってきた。己とリリムの命を確保しつつも、今回の件がプラスで終わらせられるほどの利益を獲得する絶好の機会。

そのためには、自分を最大の高値で売る必要がある。

情報源としての有用さ。情報そのものの新鮮さ。雇われ人としての確実さ。

何であれ構わない。相手が何を求めているのかを見抜き、虚実入り混ぜてでも自らの価値を最大限まで高める腹積もりだ。

「オレが欲しいのは一つ——淫魔王についてだ」
「……………」

だが、小太郎はその全てを台無しにする爆弾をぶち込んだ。

彼にしても最大の好機なのだ。夢魔と淫魔、呼び名こそ違いますが種族としてはさして違いはない。

どちらも他者の心や精を食料として生きる生命体。生物学上の違いは存在せず、隔てるの属する派閥と思想の違いだけ。

夢魔と名乗る者は、夢を介して精を絞る事に拘る。夢を操る能力こそ、我々と他を画す存在である証明なのだ、と。

故に、見せる夢に方向性はない。淫らな夢ばかりではない、誰もが思い描いた理想の自分を見せることもある、幸福だった幼き日々を再現することもある。現実を超越した夢の世界を操る我々こそが超越者に相応しいと言わんばかりに。

淫魔と名乗る者は、夢も現実も関係なく快樂で精を絞る事に拘る。あらゆる快樂を操り手中に収める能力こそ、我々と他を画す存在の証明なのだ、と。

故に夢だけに拘らず、現実でも快樂を餌とする。ただひたすら淫靡に、猥褻に。精と樂を追求し、老若男女問わずに絡め搾り取る。あらゆる生命体が逃れられぬ甘美な快樂で隷属させる我々こそが超越者に相応しいと言わんばかりに。

駆使する手段と最終的な目的はそれぞれ異なるだろうが、近い存在であるのは事実。何らかの情報を持っていてもおかしくはない。

水城夫妻と娘であるゆきかぜすらも狙い、既に自陣営に取り込んだ並行世界の紫に手を出している挙句、日本という国を裏から支配しようとする思惑が見え隠れしている上、弾正とまで手を組んでいる淫魔王。

個人としても、対魔忍としても、ふうま宗家当主としても、どの小太郎からしても問答無用の絶殺対象。未だせせこましく正体と拠点隠して立ち回る目障りなゴミに近づく好機を逃す筈もない。

——その名を聞いた瞬間、ミーティアの顔からあらゆる感情が消える。

ピタリと足まで止めたのは、動揺そのもの故ではなく、生じた動揺を必死で収めようとしているからだろう。

感情こそ表情に現れていないが、即座に浮かび上がった大量の汗が彼女の内心と淫魔王の危険性を物語っている。

死ぬ。喋れない。どうしてその名を。仲間に迷惑をかけられない。殺される。

ようやく見えた希望の入り口を閉ざされ、ミーティアの頭の中は感情と思考が混ざり合って方針すら決定できない始末。

それでも彼女は優秀だった。両手で銚を握り締め、震える吐息を吐き出すと、今まで見ようとしなかった小太郎の真正面から見据えて向き直る。

その時点で汗も引いており、あらゆる覚悟を決めていた。

「その情報は渡せません」

「ほう、自分の言っていることが分かっているのか？」

自ら顔を見たのは死すらも覚悟しているからだ。

小太郎が目を細めて、懐から取り出したベレッタの撃鉄を上げても微塵も揺るがない。

「理解しています。私とリリムの命が拒否の代償だと言うのなら支払うまでです」

「成程、よく分かった。歩きながら話そうか」

自分だけならばまだしも、あれだけ必死になって守ろうとしたリリムの命を当人に断わりなく差し出してしまおう。

これまでとはまるで異なる態度の裏にあるのは、情報を渡してしまいうことで受ける被害が自分やリリムだけではなく一派の仲間にもまで及びかねない事実。

仲間を危険に晒すくらいならば、いつそ二人で死んだ方がマシだと考えている。彼女の根幹にあるものは何一つ揺らいでいない。

小太郎は拒絶されながらも、逆に気を良くしてベレッツタを懐に収めた。

拒絶の中にも情報を小出しにしている。それはつまり、彼女はまだ交渉のテーブルを立っていないことを意味している。

ミーティアとしても自分の意思決定だけで渡れる危険な橋を渡っている最中。ここで御破算としてしまうには、彼女の決意を無駄にする。余りにも非礼であり、同時に効率も悪い。

彼女が言外に語っていたのは、自らが淫魔王の陣営ではないこと。そして、少なくとも淫魔王とミーティアの属する陣営のトップが対立、ないしは不仲を示している。

もし仮に淫魔王の陣営であれば情報を与えぬため即座に自害するか、殺しにかかるか、王の周囲を探る者がいる情報を持ち帰るために逃げていた。彼女はその全てから外れた行動を取っている。

自害の決意と殺害の受け入れは死体が生まれる結果は同じだが、過程が違う。死ぬつもりならば下手に会話を長引かせる必要はない。僅かな会話からでも情報が渡ってしまう可能性があるのならば、即座に自害した方が幾分かマシである。

それでもなおミーティアが拒絶と共に死へと至る選択をしたのは、淫魔王の情報を伝えること自体が自身ではなく一派にまで及んでしまおうと語っているも同然であると同時に、まだ交渉の余地はあるとも語っている。

「じゃあ、何か妥協点が代案はあるか？」

「そう、ですね……………今、私の持っている情報を渡す事は出来ません。でも、ふうまさんが正式に依頼して下されば、その限りではありません」

「くくつ、いいね。実にちゃんとしてる」

淫魔王を殺るのであれば、事は秘密裏に進めねばならない。

単純な武力、勢力としては淫魔である以上、淫魔王は兎も角として部下は脆弱。それはヨミハラで確認済み。

陣営が崩壊する可能性があれば、迷わず逃げて再起を図る。自棄に玉碎する理由もなければ、これまで誰にも悟られることなく政界にまで魔の手を伸ばして日本を支配しようとしているやり口はその性質を物語っている。

一気呵成に攻め立てて、根の根まで叩き、生存と再起の芽を摘まねばならない相手。途中で裏切るような阿呆、怯えて逃げだす臆病者も自陣営に引き入れた時点で淫魔王の生き残りは確定したも同然。

敢えて自らの考えを口にせず、ミーティアへと促したのは、そのための品定め。

その点、彼女が一言目から発した代案は小太郎の考えていた中でも、最高のものであった。

ミーティアの拒絶の根幹にあったのは自身以上に仲間への被害を考えて。

此処で命惜しさに持っている情報を渡した場合、淫魔王側が敵対行為と受け取ってしまうえば言い訳のしようもない。淫魔王とミーティアの一派はそのまま抗争状態に突入する。

だが、今持っている情報を渡すのではなく、正式な依頼として改めて調べた分を調べた分だけ渡すのであれば、話は別。何らかの理由で淫魔王にバレたとしても、一派のトップは末端の暴走としてミーティアの首を差し出せば話は其処で終わるのだ。

その上、依頼である以上は報酬も見込める。慎重で大胆。全体の安全を追求しながらも、個人の利益と評判も見越した一手。

「そつちが裏切らないという保証は？」

「ありません。でも、裏切りを未然に予防する手段をふうまさんには持っているんじゃないやありませんか？ 一定時間で作用する毒を取らせて解毒剤は自分が握るとか、任意で作動できる爆弾を取り外せないようにして持たせるとか私でも思いつきますし」

「ふむ。じゃあ逆に用済みになったらオレが裏切る、とは思わないのか？」

「思いません。出会ったばかりの私にこんな話を持ち掛けてきている以上、私を評価してくれているか、相当に切羽詰まっているのかどちらかです。用済みになったら殺す、なんて短絡的なすぎるかと。外部に力を借りようとしている以上は対魔忍の戦力、特に諜報関係に関しては不足気味と見るべき。なら、私に依頼をして私の一派とパイプを作って情報収集役として使った方がいい。夢魔相手なら武力で制圧できると考えるでしょうし。後ろから刺すならそれからでも遅くはない。何なら利用するだけ利用して、別の勢力に丸ごと潰させる自分の手を汚さない方法も取れます。ふうまさんならそれくらい平気でやりますよね？」

「いいねいいねえ、最っ高だねえ！」

（これ、評価してくれてはいるんだろうけど、私の口にした内容以外で皆殺しにする方法考えてるんだろうなあ。私も色々と手を切る方法を考えておかなくちゃ）

腹を括ったミーティアは、本気と自暴自棄が入り交ざった状態で、自らの想定している小太郎の思考をつらつらと語る。

その表情に最早怯えはなく、寧ろ微笑みすら湛えていた。その態度に、小太郎は機嫌を悪くするどころか笑みを深めるばかりだ。

取引の勝ち筋ディール。それは相手以上の利益を得ることではない。相手にしてやったりと思わせ、偽りの花道を作ってやること。与しやすい相手だと誤認させさえすれば、最終的に多くの利益をもぎ取れる。

今回に関してはそのどちらでもない。小太郎も、ミーティアも腹の

底では虎視眈々。裏切るつもりは毛頭ないが出し抜く方策を考えている。

神経を削りながら腹を探る必要のある、そして腹を探ってくる相手。それはつまり、一々言葉にせずとも他者の心中や思惑を看過して行動できる者でもある。これほど心強いものはないだろう。

「それで、合格点か及第点は頂けますか？」

「合格も及第もあるかよ。もうお前の命は確約しているんだから。オレが知リたかったのは、何処まで任せられるか、だ。これなら全て任せてもいい」

「成程。報酬に関しては？」

「その辺りは正式な依頼を出す段階で決めたい。こつちとしても重要な仕事だ。今この場で揉めて御破算にしたくはないしな。互いに納得のいく形に落とし込みたい。今後もあるかもしれないしなあ」

「ふっ、ふふ。そうですか、それはそれは。ご利用ありがとうございます♡ でもよかった。実を言うと彼の情報に関しては、何も持つてなくて」

「あれまっ。やるねえ」

ミーティアはにつこりと微笑むと、これまでの仕返しとばかりに事実を暴露する。

呆れたことに、彼女は全くの空手形で小太郎との交渉に挑み、正式な依頼とその報酬をもぎ取ったようだ。

聞いた瞬間に抱いた淫魔王への恐怖は本物だった。

奴は夢魔だからと言って、慈悲を与えるような輩ではない。僅かでも裏切りに類する行為を見せれば、あらゆる手段で報復に出る。一派のトップからも極力関わりを持たぬように言い含められていた。

同時に別の恐怖も抱いた。それは現時点で小太郎にとって有益な情報など何一つも持っていないなかつた事。彼も危ない橋を渡っている。渡せる情報があれば、何もかもを闇に葬り、全てをなかつた事にかねない。

そこで、状況を利用することにした。

淫魔王への恐怖で、空手形である恐怖を覆い隠したのである。

如何に相手の理解が速く、反応から思考を読める小太郎であっても全てを見通せるわけではない。嗅ぎ取った恐怖の臭いが、どういった思考の下に発せられたかまでは推察する他ない。

僅かな会話や反応から小太郎の性質を読み取ったミーティアが、更に僅かな時間で最善策を講じてのけたのだ。

一瞬、目を丸くした小太郎であったが、どうせ手を組むのなら頭の回転が速いに越したことはない、暴力ではどうにもならない局面を覆せる策謀と智慧の持ち主であるのならなおよい、とブラフだけで難局を乗り切ったミーティアをますますもって気に入ったのか、笑みを更に深める。

「だが、此方からも一つ」

「……やっぱり、お気付きですよね？」

「勿論、目先のことにばかり気を取られるわけないさ。お前は現時点で情報をくれた訳じゃない。よって、害獣の命の保証はしない」

「まあ、当然ですね。別に、私がリリムを助けるように構わないですよね？」

「ああ、精々頑張れ。じゃあ、よろしく頼むよミーティア」

「今後とも、末長いお付き合いをよろしくお願いしまあす♡」

ミーティアは小太郎の警戒を潜り抜けて契約を結び、小太郎はミーティアにやり込められることはなかった。

両者のやり取りは一勝一敗と言ったところか。いずれにせよ、互いに裏切るよりも契約を継続し続けるべき存在と認知するには十分すぎる心理戦だった。

ミーティアは腹黒さを隠すことをせず、小太郎もまた悪意を隠そうともせずに笑みを浮かべて固く握手を交わす。

ただ、一点。

彼女の笑みには僅かな引き攣りがあり、これに小太郎は自身か淫魔

王に対する恐怖と判断したのだが、実際には違う。

まだ言えていない自身の苦手があったからだ。ミーティアにとって、最大の受難はすぐ其処にまで近づいていた。

“花の静流”も戦慄する猜疑心。でも苦労からは逃げられない……………!

トンネルを抜けた先にはすぐクロワダミの工場があった。

道路と敷地を区切るように建てられた塀の高さは5メートルはあった。壁の向こう側には夜でも分かる純白の建物が遠目に顔を覗かせており、実験棟か製造ラインと思われる。だが、今回は関係のない施設である。

ミナサキが自身の能力によって街の東側にある山の麓にあった森林地帯を切り開いて作られた広大な敷地の一部には、かつての森林地帯がそのまま残っている。

謳い文句は自然保護と職員の精神保護のため。であったが、魔界ワスプを手に入れた理由を考えれば、実験林として使用する前提で残っていたと見て間違いない。

「しかし、コントロール装置があるからと言って、それ以外に何の対策もないとは。正気の沙汰じゃねえや」

「魔界ワスプが街から食料を得ていた時点で分かっていたことでしょう？ まあ、馬鹿馬鹿しいというのは否定しないけど」

「ああ……………やる気がどうんどうん削がれていく……………」

（気持ちには分からなくもないけど、そういうの止めて欲しいわ。私もモチベーション維持するの必死なんだから…………）

忍び込んだ実験林の様子を目にした小太郎と静流は意図せずに溜め息を吐いてしまう。

実験林は工場の敷地内でまたしても分厚いで区切られ、その中に植

物園のような温室ドームらしきもので覆われている。

ドームは防弾ガラスを使用して作られているようであるが、魔獣に対しては粗末という他ない。単純な強度を追求するよりも、それぞれの魔獣にあつた対策が必要となる。

事実として、天面の一部には防弾ガラスが溶けたように穴が開いている部分がある。恐らくは、魔界ワスプの体内で生成された何らかの化学物質によつて溶けたものと思われる。

仕方がないと言えば仕方がないのか。この実験林も魔界ワスプに合わせて作られたものではあるまい。

この規模の施設を建造するには半年以上は掛かる。害獣がクロワダミに魔界ワスプを売りつけたのはもつと最近だ。

恐らくは、魔獣は魔獣でもブラックドッグのような獣型を仕入れるつもりだったのだろう。それならば単純な衝撃に強い防弾ガラスを使用したのも頷ける。

実験林の周囲には、クロワダミに雇われた警備兵、警備ドローンが居た。

ある程度の大きさを有する企業は独自の戦力を保有している。社会情勢の悪化、海外、魔界を問わない企業や組織の台頭によって、企業は自らの技術と社員は自らの手で守らねばならない必要性が生じてしまったのだ。

政府はこれを黙認。お陰で企業自体の違法行為を容易に摘発できなくなつてしまったものの、海外企業や闇の組織による乗っ取りをある程度抑止できたからだ。

こうした警備兵は大抵が安定を求めた元傭兵、日本の自衛軍や米連からドロップアウトした兵士で構成されており、質が良いとは決して言えない。

クロワダミも例に漏れなかったものの、警備兵を纏め上げる隊長に抜擢した人物が当たりだったのだろう。元傭兵、若くして除隊を宣告された元兵士、いずれも協調性など皆無であろうに統率も取れており、士気も高い。

とは言え、それも他に比べてというだけ。

元々危険な単独潜入を得意とする静流、相手を選ばず依頼を受けていながら未だ闇の世界を渡り歩くミーティアであれば、忍法と能力で無力化するのには難しくはない。

二人にとつて相性が悪い警備ドローンなどの機械関連に関しても、システムの殆どが集まっている警備室に小太郎が侵入してあっさりとは無効化。これによって大手を振って実験用の森林へと侵入するに至った。

「それで、これからどうします?..」

「そうね。このままストリートに女王蜂^{クイーン}を確保できればいいけれど、そう簡単にいかないでしょうね」

「本能しかない分だけ人や魔族と違って余分もない。文字通りに必死で抵抗してくるのは目に見えてるからなあ」

「其処で提案なんだけど、作戦も指揮も君に任せて、私はサポートに回るわ」

「はあ~~~~~? これそっちの任務でしょーが、オレはただの手伝いなんスけど? 流石にいかんでしょ、任務の指揮権ぶん投げるのは。キャリアの進退に関わりますよ?..」

「あら、心配してくれるのかしら? でも対魔忍のキャリアなんてあつてないようなものでしょ? それにこっちの専門は単独潜入。複数人の指揮を取るのに向いていない。君の活躍も耳にしてるし、アサギさんなら納得してくれるでしょう。何の問題ないわ」

「どーだか。アンタにとつては、つてだけじゃねー?..」

にこやかな笑顔と共に言い放ったのは、在り得ない提案だった。

静流は事もあろうに任務の指揮権をそのまま小太郎に引き渡すのだと言う。但し、任務の責任に関しては一切に口にしておらず投げたていない辺り、失敗した場合の責任は自分が受け持つつもりらしい。それだけでなく、成功した場合は功績の一部が小太郎のものとなってしまう。

在り得ないだろう。これでは美味しい所だけを与えるようなもの。

この事実が対魔忍内部で知れ渡れば、静流がこれまで築いてきた立場と名声に瑕がつく。

任務に失敗こそしていないが、任務の指揮権を本来は存在しない味方に投げるなど言語道断。これでは任務に失敗したも同然、とあらぬ誤解と誹謗中傷を招きかねない。

無論、全て覚悟の上での提案であり、彼女なりの生存戦略である。静流の生まれた高坂家はそれなりの歴史はあるが、それに見合った権力を持たない家系であり、臣下も持たない極々小さな家だ。

余所の家から嘲笑の的にすらならないレベルであり、名を聴けば、ああ、そんな家もあつたな、と思われる程度のものでしかない。其処に才女として生まれた彼女は、相応の苦勞してきた。

家の後ろ盾がなく目立つ真似をすれば、目障りだと圧力で潰されかねず、逆にコイツは使えると目を付けられれば、無理やりにも他の家へと組み込まれない。

とかく彼女の両親はひたすら真面目に戦い続けた故に、そういった権力とは無縁に育ち、静流の才覚を見届けると早々に跡目を譲ると隠居。以後、家の事は静流に、と任せきりである。

余所の家の惨状を見れば、余計な干渉をしてこない良い両親なのだろうが、少し放任が過ぎると思わない事もない。

そんなこんなで静流は対魔忍内での立ち回りに苦慮してきた。

幸い、彼女が活動し始めたのがアサギが台頭してきた時期と重なっており、家同士の下らない権力争いが表向きには鈍化してきていた。

それでもアサギの目が届かない裏ではまだまだ安堵が出来ない状況が続いている。

静流は対魔忍内部の状況を冷静に把握し、巧く立ち回っている。

常に一定以上の戦果を挙げ、時に謙遜し、時に褒めたくもない相手を褒め称え、時に任務の功績を渡してやり過ごす。

多くの家には確かな実力を有しているながらも与し易く無理に潰す必要のないながらも、下手に手を出せば痛い目を見る相手と認識されているだろう。

今回もそうした立ち回りの一つだ。

前々から小太郎の事は教師としてだけでなく、対魔忍としても気に掛けていた。

実力を目にした事はなかったものの、組織内の立ち位置としては似たようなもの。一方的な共感を抱くのも無理はない。

其処に彼が率いる独立遊撃部隊によって為されたヨミハラやエウリユアレーの一件。

多くの者は部隊の人間が優秀だったが故の戦果と結論しているが、静流は全く別の結論に達した極一部側の人間であった。

まだ全てを調べられた訳ではなく、詳細が明らかにされない方針の任務であるのは理解していたが、ヨミハラに関しては不知火や災禍と言ったベテランの助け、エウリユアレーは新人の奮闘だけでは説明のつかない部分が多過ぎる。

そうなれば、部隊長である小太郎に目を向けるのは必然だ。

余程、作戦立案や指揮能力に秀でているのか、自身以上に実力を隠すことに慣れているのか、或いはそれ以外の何かがあるのか。いずれにせよ、只者ではない。

静流にしてみれば見極めておく必要がある相手だ。

現状、彼女はアサギを筆頭に、多くの当主や上忍から目を掛けられてこそいるが、何処かの閥に属しているわけではない。

あくまで対魔忍の任務が最優先。権力争いには何処にも肩入れしない代わりに、何処からも助けて貰えない立場だからこそ、自由と家を守れている。

もし仮に小太郎の実力が本物であれば、独立遊撃部隊は勿論の事、ふうま一門も伸びるは必然。況してや、アサギが寵愛を向け、九郎ですら一目置いている節すらある。下手をすれば、紫すらも超えてアサギの跡を継ぎかねない。

常に一定の距離を保って不干渉を貫くか。恩の売買を繰り返すに相応しいか。いつその事、将来性に賭けて早い内に臣従を選んでふうま一門内部での地位を獲得するか。逆に他家へと情報を売って潰してしまうか。

どの選択をすべきか値踏み出来る立場ではないが、それは彼も同じ

であり文句も言えまい。

見極めると同時に貸し借りも作っておけるいい機会。これを見逃す静流ではない。

小太郎も微笑みの下に隠された思惑など見通しているのが、提案に露骨に嫌な顔をしながらも従うつもりらしい。

命令系統が狂ってしまうものの、指揮権を受け渡す経緯に筋は通っている。

静流が活躍してきたのは多人数による大規模な作戦ではなく、作戦が始まる前に必要な情報を単独で入手する段階。

今回もあくまで情報を入力するまでが任務であったのだろうが、考えていた以上に事態が悪化していたために首を突っ込まざるを得なくなった。

其処へ作戦立案と指揮に長けた対魔忍がたまたま居合わせたのなら、指揮権を譲っても無理はない。自分には向いていなかったから向いた人間に任せただけなのだから。

小太郎としても、どう思っているかが相手は立場も役職も上。拒否する権利など最初から存在しない。

彼はウマのマスクを被ったまま考え込むという見てくれだけなら間抜け過ぎる絵面を見せたが、暫くすると頷いた。どうやら作戦の内容は決まったらしい。

「方針は決まった?」

「お手本通りいきましようや。敵の数は多い。ならまずは陽動で数を減らす」

「常套手段ね。でもどうやって? 私の木遁の出番かしら?」

「いや、巣との距離が近すぎる。教諭の忍法で辺り一面花畑にして働き蜂を釣っても戻ってくるまでの時間も短くなる」

「今は静流で構わないわ。なら、囿でも?」

「ああ。但し、お前じゃない。静流は最大戦力、離れられたら不足の事態に対応できん。囿になるのは一番使えない奴等だ」

マスクの下で微笑んでいるであろう小太郎に、静流と害獣二匹は顔を引き攣らせた。

確かに彼の言い分は正しく、正に教科書通りの戦い方だ。敵が一所に集中しているのなら、分散させて数を減らすのは常道。

魔界ワスプの習性は人界の蜂と大差はなく、女王蜂もまた巣を離れず、構築した社会を維持、または新たな女王を育てることに集中しているのであれば、悪い手ではない。

問題はどうかやって囷で釣るか、だ。

静流はチラリと黙りこくっているリリムとミナサキを見る。二人は蒼い顔のまま首をぶんぶんと左右に振っていた。

流石の二人も囷になる者が最も危険なのは分かっているらしく、進んでやりたい役回りではないだろう。

こんな状態で、どうかやって囷役をやらせると言うのか。とてもではないが任せられない。

囷である以上、本命である自分達は巻き込まれないように離れた場所以待機せねばならず、監視がなくなった二人がどのような行動を取るか。

対魔忍のように民間人への被害を極限すべく行動する理念のない魔族であれば、何もしないまま逃げてしまうのが関の山。その時点で作戦は破綻するではないか。

流石にそれは、と口を挟もうとした静流であったが、小太郎は予想していたのか片手で制する。

そして、もう一方の手で懐からあるものを取り出した。透明の袋に入れられたそれは、見た事もない極彩色の粘液が漏れる何かの内臓だった。

「昆虫は言葉もないのにどうやってコミュニケーションを取っているか、知っているか害獣共」

「こ、こみゆ……？」

「ど、どうやって……？」

「それはフェロモンという奴だ。特に働き蜂は大きく分けて集合、警

報、マークフェロモンの三つを使う。いずれも揮発性が高く、奴等はすぐにこれを捉える」

「ぶべえっ!!」

「ばぶひい?!」

「説明は以上だ。さあ、逃げていいぞ。精々頑張れ」

「あああ~~~~~」

小太郎は袋を裏返し、粘液滴る内臓器官を害獣の顔面に叩き付け、その様に静流は頭を抱えた。

特定のフェロモンが社会性昆虫の社会構造を維持する役割を果たしているのは有名な話。無論、静流も知っている。

フェロモンは多くの昆虫が使っているが、社会性昆虫にとっては特に重い役割を担う。

新たな女王誕生の抑制と切欠、雄蜂の集合、外敵の存在を知らせる警報、餌場を知らせるマーキング、同じ巢の仲間の識別、幼虫を認識させるなど多岐に渡り、人間にとっての声や言葉に相当する。

昆虫はフェロモンには逆らえない。行動は本能に根差したものであり、外界から与えられた極限られた刺激を極限られた反応を返すように組み立てられており、その中でもフェロモンの果たす役割は甚だ大きいからだ。

ならば、魔界ワスプの働き蜂の大半は、このフェロモンを放つリリムとミナサキを真つ先に狙って行動するのは間違いない。

更に言えば、静流が頭を抱えたのは小太郎の殺意の高さである。

彼は「逃げていいぞ」と言った。それはつまり、クロワダミに忍び込む前に取り付けた約束通り、逃げたから殺すね? するつもり満々だ。自分で逃げるように仕向けておいてこれである。

と言うよりも、何処でどう手に入れたのかフェロモン分泌器官を持っていたところを見るに、約束を取り付けた時点でこうすることを決めていたとしか思えない。

「う、う、うわあ~~~~~んん!!!」

「や、やだあ！ こ、殺される！ 殺されるう〜!!!」

害獣が、いつそのこと道連れにしてやる、という思考が生まれる間もなく、森の奥から耳鳴りのような羽音が響いてくる。

魔界ワスプの危険性は売りつけた二匹が最もよく分かっている。小太郎の弁を信じるのであれば、外敵として毒針で刺し貫かれ、顎と爪で引き裂かれるのは必定。最早、生き延びるためには逃げる以外に手がなかった。

助けを求めるようにこれまで庇ってくれた二人を見るが、静流はすつと目を逸らし、ミーティアは俯いたまま黙して語らない。

いくら彼女でもフェロモン塗れの二人を救う術などないのだ。最後の救い主に見放された二人に成す術などなく、泣きながら逃げていく害獣を小太郎はウマのマスクを取り外し、手を振りながら見送った。

怪物のマスクで覆われた顔に張り付いていたのは春風の如き微笑み。正に暗黒微笑。そして、お前等これが終わったら殺すから覚悟しとけよの笑みである。言葉にしない辺り殺意ポイントの高さが伺えようと言うもの。

「それで、私達は？」

「このまま働き蜂が追いかけていくのを見送って、来た方向に行けば巣がある。基本、女王蜂は巣を動かない。植物も多いこの場所なら静流の木遁を最大限活用できる。後は煮るなり焼くなりすりゃいいでしょ」

「万が一、働き蜂が此方に向かって来たら？」

「無いと思うけどなあ。不安なら動かずに、薔薇の花でも咲かせりゃいい。それで安泰だ」

「薔薇……………ああ、そう言えば、そんな研究結果が出てたわね。一部のハチは薔薇の香りに含まれるフェネチルアルコールを嫌うとか。でも、奴等がミツバチの変異体だとしたら……………」

「それもない。ミツバチのフェロモン分泌するナサノフ腺は腹部の背

面、スズメバチのフアンデルフェヒト腺は腹面にある。魔界ワスプを解体した時、腹面にあった。つまり奴等はスズメバチに近い生き物でことですよ。十分効くよ」

「……………呆れた。そこまで勉強熱心なら、私の授業にもきちんと出席して欲しいものだわ」

『出る価値があるなら出るよ？　ただ、価値も必要もないから出ないだけ』

「全く！　嫌な子ね！」

思わず嫌味が出てしまった静流に対して、小太郎は更に厭味つたらしく英語で返す。

文法も発音も完璧で、英語の授業を受け持つ静流ですら、これなら確かに出る必要はない、と思ってしまうほど。同時に、アサギさんが期待をかけるのも頷ける、という納得もあった。

魔界ワスプに挑む前提であれば語った知識量に不思議はない。ただ、彼は今回巻き込まれただけの部外者に過ぎない。

にも拘らず、これだけの知識を抱えていた事には驚きを隠せない。自身ですら魔界ワスプを挑むに当たって蜂の生態を改めて調べ直したというのに。

知識欲の権化、というわけではない。ただ、知識そのものを活かすだけの知性があれば、それが忍法や異能に劣らない武器となることを知っているのだろう。

生き物の生態を学ぶことは無駄にならない。魔獣でも人界の生物と重なる生態を持つ種は多く、その知識は必ず何処かで役に立つ。或いは他者にとっての厄となる。

それでも静流は戦慄を禁じ得なかった。

考えても見て欲しい。何時か必ず役に立つとは言え、その何時が訪れるかは誰にも分からない。下手をすれば一生無駄になりかねない知識を、疑念も疑問もなく積み上げ続けることの出来る人間が何処に居ると言うのか。

知識を溜め込むには限度がある。俗に天才しかないとされる

弁護士や裁判官でも膨大な量になる六法全書を全て丸暗記しているわけではない。自身の専門、得意に合わせて必要な部分だけを覚えていくに過ぎない。それを、何時か役に立つからかもしれないからと全て覚えるのは異常という他ない。

そもそも、魔界ワスプのフェロモン分泌器官を入手していたことだけ取っても驚きだ。

其処にあった感情も、役に立つかもしれないから、以上のものはないだろう。そんなものを延々と賽の河原のように積み続けるなど静流は出来ないし、理解も出来ない。

静流は内心を押し隠しつつ、自らの忍法である木遁を発動させた。木遁は本来は生まれぬ植物を生えさせることもできれば、成長を促進させることもでき、また植物を媒体として何らかの効果を生じさせることができる忍法。

種も苗も手元になくとも、一面に薔薇を咲き誇らせるなど造作もない。周囲の地面から芽を出し、棘のある茎が伸び、蕾を作り、花開く。瞬間、むつとする濃厚な薔薇の香りが鼻孔に広がる。

リリムとミナサキを追うように現れた無数の働き蜂は一直線に進んでいたが、突如としてその編隊の進路を、薔薇畑を避けるよう僅かに変えた。

スズメバチは薔薇などに含まれるフェネチルアルコールを嫌う。この化学物質を浴びせられると攻撃性が消失することが確認されており、集合フェロモンですらも無効化される。どうやら、小太郎が予測していた通り、魔界ワスプにも有効であったらしい。

その結果に、静流は別の安堵を抱いた。今夜、この子を試せて幸運だった、と。

彼女が評価したのは知識量それ自体ではなく、その在り方。人よりも遙かに警戒心が強いと自任する自分でも到底理解できない警戒心の塊にして猜疑心の怪物。

敵が全知全能に匹敵する能力を有していたとしても、彼ならば既に対抗策を手中に収めていて当たり前前に制圧してしまっても不思議ではない。そう思わせるほどの理屈や理解を越えた問答無用の説得力。

組織内部で明確に敵対関係になるのは愚策。かと言って、不干渉を貫くには勿体ない。今まで保ってきた中立を崩して肩入れしてもお釣りが来る相手と知れたのは幸運と言う他なかった。

「ま、最後は力押しだけどね」

「討伐目的の任務なら当然よ。さあ、行きましようか」

「……………は、はひ」

「……………?」

万事恙なく、小太郎の思惑通りに事が進む。静流としても流れに疑問はなく、止める意味もない。

唯一気掛かりだったのは、ミーティアの不審な様子。

これまでの彼女の行動を見れば小太郎の策を止められないまでも、リリムを庇うような言動を見せたか、悲鳴を上げていただろう。

なのに、今に限っては一言も言葉を発していない。ようやく絞り出した声もこれ以上ないほどに震えており、必要以上に怯えている。

これを静流は小太郎がやり過ぎたからと判断して見咎めたのだが、当の本人も困惑しているようだ。

少なくとも静流の目だけではなく、小太郎の目から見ても、ミーティアが怯えている理由は分からない。

これが仲間を良いように使われた怒りでならばまだ分かるが、小太郎が静流に聞かれずに行った会話からもこの程度で怯え竦むようなタイプではない。

「ほ、ほほほほら、行きますよ、二人とも！ 私、頑張りますので！ すっごく頑張りますので！」

「……………ちよつと、どういことっ？」

「いや、オレにも何がなんだか。こつちを嵌めようって感じでもない。まあ、あの子なら足を引っ張りやしないでしょ。戦闘向きじゃないのは自覚してるし、積極的に前に出る理由もないし。上手くすれば、夢の世界に引き摺り込んで無力化できる可能性もある」

「まあ、それもそうね。時間も限られているし、フオローはするから手綱はちゃんと握っていてよ?」

「へーへー」

怯えた様子をそのままに、ミーティアは二人の不審を伴った視線にハツとすると、今度は勇み足でずんずんと森の奥へと向かっていく。明らかにハイになった様子に、危ない薬でもやっているのかと不安になる小太郎と静流であったが、どちらもそんな薬をやった瞬間を目撃していないし、そもそも二人のミーティアの評価は高く、そんな彼女が麻薬に手を出すような愚かさを持っているとも思えず、首を傾げることしか出来ない。

結論は出ず、疑問は重なっていくものの、先に進む以外の選択肢はない。

リリムとミナサキの逃げ足は一級品だが、追い掛けっこは既にしており、フェロモンに惹きつけられた働き蜂から何時まで逃げ続けられるかは分からず、今の内に女王蜂を倒さなければ全てが無駄になる。心中に生じた一抹の不安と疑念を感じながらも、小太郎と静流は後を追う。

——もう少し様子を見るべきだった。二人がそう後悔するのはもう少し後の話である。

苦手なものは苦手だからね、しようがないね（激甘判定）とのこと

「あつたわね」

「おー、ありや地中の方に大部分が埋まつてるな。縮尺考えたら比較的小型かな」

「……………」

働き蜂の来た方向へと進んだ小太郎、静流、ミーティアの三名は森の奥で魔界ワスプの巣を発見した。

あつたのは木の根元。スズメバチは地中にも巣を作るため、何ら珍しいものではない。

見た目も人界のそれと変わらないが、魔界ワスプが大きい分だけ巣も大きい。

地中から顔を出している部分だけでも一軒家程度の大きさがあるが、働きバチですら大型犬レベルの大きさであることを鑑みれば、地中部分は更に4、5倍ほどはあるだろう。

巣の外面には働き蜂が群がっており、巣の補強を繰り返している。樹木の繊維をペースト状になるまで噛み砕き、唾液と共に固める。触覚によって一定間隔になるようハニカム構造の巣盤と厚みが均一な外皮を形成していく。その手際は左官職人と称されるほどに無駄がない。

「ん？ 女王か。分蜂以外で女王が巣から出て来るのは魔界ワスプの特徴だな」

「働き蜂の取ってきた餌を女王が一番に食べ、残りを幼虫に、だったわね。何にせよ、好機ね」

「……………っっ」

人界の女王蜂が巣から出ることとは特定の場合を除いてほぼない。

働き蜂が与えられた役割を熟すように、女王蜂も産卵という役割を熟して種の保存に努める。

名前から勘違いされがちだが、女王蜂に群れを統率するような能力はなく、崇められているわけではない。生物学的には生殖虫と呼ばれるように効率よく繁殖していくためのシステムの一部に過ぎず、人類社会の“女王”とは意味合いがまるで異なる。

但し、魔界ワスプの女王は別だ。魔界で如何なる進化を遂げたのか、女王は実際に働き蜂を統率し、人間の女王のように振舞うのだ。

その分、弱点も存在する。女王を討つてさえしまえば統率役のいなくなった働き蜂は活動を停止し、次の女王が生まれるまで無害化するのである。

「巢に残ってる兵隊の数も少ない。首尾は上々、行きますか」

「ええ、そうしましょう」

巣から離れた位置にある木の陰から様子見を終わりにし、一直線に巣へと向かっていく。

ようやく外敵の存在に気付いた魔界ワスプは、巣から飛び上がり、羽音を最大限にまで高めると大顎を鳴らしていた。

外敵の周囲を飛び回ることなく、女王を中心に巣上へと浮遊したまま動かない。これは警戒行動でも威嚇行動でもない。次の瞬間には仕掛けるための攻撃態勢。

この手の群体において危険なのは数。

まともな運用されずとも、まともな戦術などなくとも、竜巻の如く押し寄せる物量は如何ともし難い。

敵よりも多い戦力を用意するのは戦の常道にして正道とされる。強者であるのなら奇を衒った策など最初から必要なく、寡兵にて敵を押し返した者が名将と呼ばれるのは真つ当な理屈を覆したからに他

ならない。

だが、本来は竜巻に匹敵する群勢も、今や暴風にまで抑えられている。これならば、三人でも対処は可能だ。

静流にとつて植物や樹木の多い場合は、自身の木遁を最大限発揮できる。もうこれだけでお釣りが来る状況だが、其処に小太郎とミーティアがサポートに回れば盤石となる。その上——

「ミーティア、あの蟲どもに夢を見せられるな？ やつてくれ」
「……………」

昆虫は夢を見るのか。

その疑問に、正確な回答を得ることは叶わない。人と昆虫は明確な意思疎通が出来ない以上は仕方のないことだ。

そも夢を見るために必要な睡眠ですら定義によっては、する生き物としない生き物は変わってくる。これでは睡眠後に見る夢すらも定義によっては変化するのは必然。

だが、そんな道理を越えてこそその夢魔。

彼女の種族が見せる夢は、通常の過程プロセスとは異なる。全く夢を見ない脳構造を持つ、或いは精神性を持つ種族でも関係ない。

夢魔の夢はある種の世界を創造する行為に近い。尤も現実の人界や魔界のそれとは異なり、精神の内に潜む原風景や内面世界のそれに近く、壮大さとは無縁である。

強度は夢の世界に誘い込まれた対象の気付きによって崩壊してしまうほど脆く、非常に曖昧であやふや。対象の精神力によって逆に夢の世界の形成を邪魔されて支配権が奪われてしまうほどだ。

しかし、その気付きを極限させ、どのような精神力の持ち主であれ、支配権を握ったまま誘って甘美な地獄へと叩き落すことこそ夢魔の手腕。

ミーティアほどの手練れであれば、精神だけを夢の世界に引き摺り込み、対象が起きた状態のまま身体を自由を奪う真似すら可能だろう。

ならば、複雑な精神を持たず本能のみで生きる生物の方が相性が良いのは道理。対象の本能が望むままの夢を見せてやれば、気付きなどあろう筈もなく、支配権を奪われる恐れもない。

不思議だったのは、ミーティアの態度だ。

夢魔にしてみれば鴨も鴨の相手。複雑怪奇な精神を持つ生き物が生み出す精神エネルギーそのものである。『精気』を多く得られる相手ではないが、行動を縛る程度なら造作もないにも関わらず、顔を蒼褪めさせていた。

既に戦闘態勢に入った静流と小太郎は、彼女の反応に対する不審を完全に思考の外に押し出していたが、事此処に至ってようやく彼女の顔を見た。そして、二人の視線を浴びたミーティアは意を決して震える口唇を開く。

「あの、お二人にどうしても言えなかったことがありまして……」

「ちよつと、ミーティアちゃん？ 今この状況で……」

「後にしてくれ、どうでもいいだろ」

「——実は私、虫が苦手なんですう……」

「……………なんて??」

唐突なカミングアウトに、静流と小太郎は目が点になりながら、さーっと顔から血の気が引いていく。

よもや、よもやだ。

小太郎の目から見ても、静流の目から見ても、ミーティアは優秀だった。

どんな状況でも諦めず最善を模索して行動に移る。慎重でありながらも大胆。相手の警戒心を理解しながらも、恐れを飲み込んで懐に飛び込んでいく勇氣もある。

そんな彼女が、ただの苦手なものの前で木偶になるなど想定などしていなかった。いや、余りにも馬鹿馬鹿しい任務すぎて、さっさと終わらせたかったからこそ想定から外したと言った方が正しいだろう。

「見てください。凄いでしょう鳥肌。ふふふふ」

「いや、それなら後ろに下がっていて……！」

「無理です。こんなに膝が笑ってます。完全に腰が抜けてます」

「どうして其処まで頑張っちゃったんだ……！」

「す、すみません……折角、雇って頂けそうなので頑張らないと、と……頑張ればイケるか……でもダメでしたあ……！」

此処に来て、まさかの足手纏い化である。

これがリリムやミナサキであればむべなるかな。二人に驚きもなかっただろう。

だが、それ以上責める真似も出来ない。様子のおかしさに懸念を抱いていながら、気に掛けてやらなかった側にも責任がある。

ミーティアとしても、可能な限り早い段階で打ち明けてしまおうべきであった。

苦手なものは苦手。それを責めるような相手ではない、と頭では分かっていた。しかし、彼女の置かれた状況が状況だった。

己とリリムの命が掛かった分水嶺。そんな場面で生殺与奪を握る相手の不興を買えばどうなるか。首がストーンと落ちかねない。

無論、小太郎にとっては最早、そのような相手ではない。

彼の講じている大戦略にとつては要と成り得る重要な外部戦力。あくまで“淫魔王の抹殺”を目的として雇う予定であつて、自らの任務ではない“魔界ワспの討伐”で如何なる不手際があろうとも予定に変更などありはしない。

それでもこんな喜劇が引き起こされてしまったのは、やはり信頼の問題だろう。

小太郎がどれだけミーティアを高く評価しようとも、心の奥底から信頼しているのではない。そも、他人を信頼できるような精神構造をしていない。

そんな彼にミーティアもまた気付いていたのだろう。だからこそ、信頼を得られずとも評価を得ようと、無理に無理を重ねてもアピールしておきたかった。でなければ、安心できなかったのだ。

「仕方ないか、ミーティアちゃんは捨ておきましょう！ 早く片を付ければ、それだけ助かる可能性も増すわ！」

「お断りします！ オレが背負って戦ったらあ!!」

「ちよつと、何を言ってるか分かってるの?!」

（うるせああああ！ そっちはそれで良くてもこっちは良くないんじゃないー！）

（優しい……！）

静流は小太郎の事情や今後の戦略を知らず、ミーティアは予定外の有能な協力者であっても失ったところで痛手はない。あっさりと思捨てる方向へと舵を切った。

此処まで来たのはミーティア自身の決めた事柄であり、責任の所在は彼女にこそある。その責任を肩代わりして魔界ワスプを取り逃し、民間人への被害が拡大するなどあってはならない事態だ。冷酷ではない対魔忍として当然の選択である。

しかし、小太郎はこんなところで失う訳にはいかない故、正気を疑われるような真似に出る。

動けなくなってしまうたミーティアを背負い、警備兵から奪っておいたショットガン——ベネリM4を構えた。

これにはさしもの静流も悲鳴を上げる。

文字通りのお荷物を背負いながら凶悪な魔獣を相手取ろうなど正気の沙汰ではない。手練れの対魔忍でも戦闘能力の低下は免れず、学生に過ぎない身な上に小太郎が戦闘面で優秀であると噂ですら伝わっていない。無謀も良い所である。

けれど、最早止めようがなかった。魔界ワスプは臨戦態勢、今この瞬間に襲い掛かってこないことすら不思議ですらある。そのような状況下で説得に回るほど静流も敵も呑気ではない。

ミーティアを見捨てた静流であっても、対魔忍として、五車の教師として学生を見捨てるつもりは全くない。

日本の平和と無辜の民を守ること、教師として学生を導くことはあ

近い。

だが、魔界ワСПがそのような事情など考慮する筈もない。

フェロモンに釣られるまま、対象が動かなくなるまで追い掛け、殺すか餌の肉団子にするまで止まらない。

ただ、奇妙な点があった。

害獣を追い掛ける群れの中から、一匹、また一匹と離脱するものが現れ始めていた。

巢と女王の危機を察知した訳では断じてない。何故ならば離脱した方向は巢へでなく、地面へと向けてだったからだ。

地面へ離脱した働き蜂は、首と胴と腹がそれぞれに泣き別れしており、僅かな出血もなく絶命している。何らかの鋭利な刃によって切断された事だけは間違いない。

第三者が居れば或いは何か分かったかもしれないが、生憎とこの場に居るのは害獣と魔界ワСПの群れのみ。

害獣は生き残ることだけに必死であり、魔界ワСПは本能に刻まれた反射に支配されてまるで気付いていない。

まるで逃げる害獣を助けるかのような奇妙な現象は一体何なのか。

その問いに答えられる者はこの場に居らず、また疑問に思う者すら居なかった。

やっぱりこうなる苦勞人

「はあああつ——！」

鋭い氣迫と共に、静流が辣腕を振るう。

真つ向からの戦闘は単独潜入を旨とする彼女にとつては避けるべき行為であるものの、決して戦えない訳でもなく弱くもない。時と場合には戦闘とて手段の一つになる以上、達人と呼べるレベルの技量を身に付けている。

手に握られていたのは、薔薇の茎に柔婉しなやかさを加えた鞭。よく伸び、よく縮み、植物の生命力を宿したボディはオーガの腕力すら封じ、所々に生えた棘はナイフよりもよく切れる愛用の得物。

呻る先端から空気が破裂する音が連続して響くや否や、角度によっては弾丸すら弾く硬い外骨格を持つ魔界ワスプが初めからそうであつたように次々と両断されていく。

破裂音は鞭の先端が音速を越えた証。鞭は人力で唯一、音の速度を超えることの出来る武器。一般人ですら慣れれば出来る芸当を対魔忍が行えばどうなるか。考えただけで総身に震えが奔るだろう。

鞭の軌跡は線にも関わらず、その様は正に結界。

静流から半径五メートルの制空圏に入った者は問答無用で屍を晒す。これならばスナイパーライフルによる狙撃であろうが、マシンガンの掃射であろうが弾丸は彼女を掠りもしまい。

それでもなお、魔界ワスプは攻撃を止めることはない。

時に角度を変えて、時に四方から、時に同時に、時に機をズラして。外敵への猛攻を緩めることはない。

単なる野生生物であれば、死を恐れ、生への渴望から一時は引いたかもしれない。

だが、社会性を持つ昆虫に死の恐怖は絶無だ。奴等にとっては女王

「そらよ、しこたま喰らえ」

しかし、散弾銃の利点は其処にはない。

気合いも気負いもなく、構えたベネリM4を襲い掛かる魔界ワスプの群れに向けて引き金を引く。

耳を劈く発砲音が連続し、12Gのバックショット0000Bが火を噴いた。トリプルオーバーバック

散弾の名の通り、ショットガンの弾薬は一度に複数の弾丸を発射する。

000Bは直径9.1mm、重さ4.5mgの弾を6粒内蔵しており、鹿や猪といった中型動物の狩猟や軍の戦闘で用いられる。

人体に至近距離で放てば当たった部位が千切れ飛び、胴に当たっては死を免れない。強靱な肉体を持つ魔族であっても行動不能から緩やかに死へ至るストッピングパワー。魔界ワスプの持つ外骨格であれ、例外ではない。

連続する散弾は外骨格を次から次へと打ち砕き、内臓器官を引き裂いてへ地獄へ落とす。

一発で最低でも二匹。多ければ四匹を仕留めるその手際。並みの銃使いでは此処まで反動を制御できず、また精密な速射もできまい。

散弾銃の利点は即応、そしてもう一つ。

性質上、最大の効果を発揮するのは閉ざされた室内戦であろうが、森のような木や枝、蔦や葉で見通しが悪く、遮蔽物の多いフィールドでも十分すぎるほど効果的。

例え、側面や背後から襲い掛かれようとも、銃口から散るように放たれる弾丸は十分に狙いを定めずとも対象に突き刺さる。狩猟で散弾銃が広く使用される理由だ。

「ひっ、ひええええっ!!」

「チツ——なら、コイツはどうだ?」

次々とワспを撃ち落としていく最中、000Bを外骨格で弾く個体が現れた。

恐らくは、人界の蜂には存在しない階級。巣を拡張し、餌を持ち帰り、幼虫を育てる働き蜂ではなく、外敵の抹殺のみを目的として生み出された兵隊蜂とでも呼ぶべき存在。

他の個体よりも体長は一回り大きく、黒と黄色の毒々しい警戒色の色合い。羽音は一段と大きく、外殻の分厚さと刺々しさも一目で分かる。

ミーティアは余りの悍まじさと理由のない生理的な嫌悪感に鳥肌を立たせ、一際強く小太郎の身体に四肢を絡ませた。

首を絞められる息苦しさか、はたまた厄介な個体が登場したからか、小太郎は舌打ちを一つしたものの対処は冷静そのもの。

腰に付けた縦に二発、横にズラリと並べられたショットシエルホルダーから左手で四発のシエルを筆記取るや否や、僅か一秒未満で再装填を終える。

実包を一列に並べる管状弾倉を持つショットガンならではのクアッドロードと呼ばれる装填技術。本来は手の中でショットガンを反転させてローディングポートを上に向けるか、ストックを肩に掛けて行うが、彼は右手で射撃姿勢を保持したまま行っており、更に時間が短縮されている。

対魔忍の腕力と握力、更には何千万回、何億回にも及ぶ文字通りに骨身を削るほどの鍛錬によってのみ実現可能な芸当。彼にとっては呼吸に等しく行える当たり前の行為。

外骨格で弾いたとは言え、飛行する生物である以上支えはなく、空中で乱された姿勢を立て直せなかった兵隊蜂はまだ攻撃へと移れない。

再装填してから続けざまの射撃。

一発目は薬室に装填されていた000Bは距離が近づいても先程と同じ結果を招く。しかし、二発目に発射された弾は問題なく兵隊蜂どもの頭部を吹き飛ばした。

再装填したのは今まで使っていた000Bではなく、ブリネツキ型

のスラッグ弾。散弾とは異なり、使用するペレットが一粒しか入っていない、熊などの大型獣や屋内突入時にドアの蝶番を破壊するため使用される。

特に、ブリネツキ型は弾丸後部に燃焼ガスを受け止めるワツズが取り付けられ、ガスシールとしての役割を果たし高い推進性と威力を誇る。

小太郎がショットガンを選択したもう一つの理由にして利点。

それは弾丸の種類を状況に応じて即座に変えられる対応力。

ショットガンの実包に限らず、魔界技術と魔族の出現によって、弾丸の種類は飛躍的に増している。

ただ、再装填の手間はかかる。自動拳銃にせよ、突撃銃にせよ、機関銃にせよ、狙撃銃にせよ、使用する弾を切り替える際には弾倉を一々切り替えなければならない。

撃ち切ってしまうのも一つの手だが、それで効果を上げられねば、効果的な弾丸を撃つ前に死は目前。その点、銃そのものに管状弾倉を備えたショットガンはその気になれば一発毎にでも弾丸を変えられる。

ボルトアクションのライフルならば同様であるが狙撃を目的とした武器であり、小太郎の置かれた状況にそぐわない。彼がショットガンを選択するのは当然であった。

断末魔の悲鳴すらなく、ボトリと音を立てて兵隊蜂は地面に落ちる。こうなってしまうえば、如何な体躯を誇る魔獣と言えども嫌悪と共に捨てられる虫の死骸と大差はない。

(強い———と言うよりも巧い。銃の腕前は扱いに慣れた傭兵や正規の軍人よりも遙かに上。バカスカ撃ちまくるだけの輩とは訳が違う。その上、戦い易い。戦場を、物事そのものを俯瞰的に把握している。確かに指揮官向きね)

発砲音を背に受けながら、静流は舌を巻いた。

戦いが始まる前は不安しかなかったが、それが誤りであったと認め

ざるを得ない。

この数を前にすれば、どうしようもなく意識の回らない死角は生まれる。

だが、その間隙を把握しているかのように、入り込んできた敵を小太郎が撃ち落とす。

決して強者と呼べる力量はない。

だが、兎に角戦い方が巧い。敵の数手先を常に読み、味方の隙を零にする立ち回り。

その上、味方の動きから意図と思考を読み取って動き、それらを考慮した彼の立ち回りそのものが言葉を介さない指示となっている。

正に戦闘、或いは戦争巧者とも呼ぶべきか。長年対魔忍として戦ってきた静流から見ても、隊長としても、指揮官としても、当主としても不安もなければ不満もない。

「ミーティア、ポーチのピン抜いて落とせ！」

「ポ、ポポポ、ポーチい!? ど、どれどれどれ?!」

「後ろだ後ろお！」

「一杯ありますう! 5個くらいあるうう——!!」

「左ケツ! 左ケツ! 左ケツの奴う!!」

(もうちよつと、こう……うるさいわねえ……)

静流の納得と安心を余所に、小太郎とミーティアには一切余裕がない。

小太郎が背中に預かるのは失う訳にいかない貴重な情報収集役。淫魔王に対する切り札になり得る存在。こんなところで失う訳にはいかず、心境として余裕などあろう筈もない。

ミーティアはミーティアで、視界に居れることすら不快な死ぬほど苦手な昆虫に囲まれている状況で冷静になれる筈もなかった。

思わず嘆息しそうになった静流であったが、心の中で留めておく。余裕がなくとも行動は的確だったからだ。

ミーティアは小太郎の言葉に従って、目をぐるぐると回したまま円

筒型の何かを取り出すとピンを外してその場に落とすと、悲鳴を上げながら背中に顔を埋める。

それを確認した小太郎は、神業染みた再装填と射撃を繰り返しながらも、片足で巣の方向に向かって蹴り飛ばした。

(これで巣と幼虫の殲滅は確定した。後は女王と残党を殲滅するだけ

――！)

月明かりのみが差し込む森林を、一つの影が跳ね奔る。

木の枝から枝へ、雷の如き速度で目的地へと向かっていた。

それは文字通りの影だ。

まるで実体そのものが存在しないようであり、遠くで聞こえる戦闘音に意に介さず眠る鳥も、繁殖のために美しい音色を奏でる虫も、森林を囲むドームによって凧いだ空気ですら影の存在に気付いていない。

気配を殺して身を隠し、誰にも気づかれぬ事無く対象に近づき、目的地に到達する技術。対魔忍はこれを隠形術と呼ぶ。

斥候、情報収集、暗殺、戦闘。任務が多岐に渡る対魔忍ならば誰もが大なり小なり身に付けている基本。中には、生まれ持った異能系忍法そのものが隠形術を助ける、或いはそのものという場合もある。

だが、影のそれは異能系忍法アビリティによるものではなく、純然たる技術スキルによるもの。

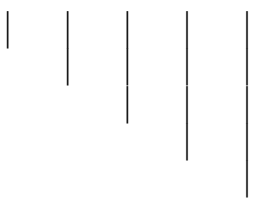
確かに存在している筈の個人が、誰からも認識されることもなければ

ば、空間や世界からすらも忘れらされてしまったかのような有り様が只の技術など。

恐ろしい話だ。才能は必要、血の滲むような鍛錬も必要。しかし、特異さだけは不要。詰まる所、人ならば誰であれこの領域に辿り着けると語って歩いているようなものなのだから。

それでも影は誰にも気づかれずに、俄かに明るさを帯びた方向へと進む。

目的はただ一つ。己の定めた唯一の主人の下へと馳せ参じることのみであった。



「終わったわね。でも、これはやり過ぎじゃない？」

「問題ない。ボヤ騒ぎじゃ、介入する理由には弱いがクロワダミにしても拒否し辛くなる。後はごり押しでもいい、介入さえすれば痛い腹を探り放題さ」

「成程、何から何まで想定済。流石ね」

轟々と燃え上がっていく炎に囲まれながら、静流は若干の呆れを見せながら呟いた。

炎の原因は小太郎がミーティアにピンを外させ、巢へと蹴り飛ばした簡易焼夷手榴弾だった。

派手な爆発はしないが、アルミウムと金属酸化物の間で酸化還元反応が発生し、膨大な熱と炎を生み出す。

樹木などの繊維で構成された蜂の巣など一瞬で燃え広がる。また

身体中にある気門から酸素を取り込む昆虫は人間ほど呼吸器官が発達しているとは言い難く、咳をして有害な気体を取り込まないようにする反射を行えず、煙を取り込めば一瞬で気絶する。

働き蜂に、兵隊蜂は言わずもがな。女王蜂も今や地面に落ちてピクリとも動かない。

小太郎はミーティアを背中から降ろしてその場に座らせると炎に抱かれても動かない有象無象には目もくれず、女王へと近づいていく。

薬室に一発のみ残ったベネリM4をその頭部に押し付け、何の感慨もなく引き金を絞った。

腹の底に響く発砲音と共に、女王の頭部は爆ぜ割れた。

これでこの一件は片付いたも同然。後は撤退して動かなくなった魔界ワスプが森ごと燃えるまで待てばいい。

警備兵も既にこの場へと向かっているであろうが、炎の燃え広がる速度は速い。消火器程度では消化しきれず、そもそも火の手が上がる可能性が低い場所。まともな消化装備や設備があらう筈もない。これで任務は終わりだ。

静流もミーティアも安堵する中、小太郎は女王の死体に背を受けて二人へと向かっていく。

「……………」

その最中、小太郎は逃げている害獣がどうなったか確認しようと考え、懐から端末を取り出した。

繁華街で二匹の追跡に使っていたFRTSは監視カメラの少ないこの場では使えない。故に、取り付けた首輪には発信機とある物を仕込んでおいた。

ミーティアからの信頼と信用を得るために、この場においては逃げられても構わない。ただ、生死の確認だけはしておきたい。

端末を見れば、二匹を示す光点が異常なく映し出されていたが、小太郎は直ぐに眉根を寄せた。

装置にも端末にも不具合があつたわけではない。ならば何故、疲れ果てて動くのもやつとな筈の二匹を示す光点が、今もなお絶え間なく動き続けているのか。

女王は殺した。

生死の確認を怠る彼ではなく、また頭部を砕かれて生きれる類の魔獣でもない。

ならば、導き出される答えは――

「何……?!」

「ひい――!」

――炎に包まれた巣が突如として爆散する。

在り得ない事態に静流は目を剥き、炎の中から現れた存在にへたり込んだミーティアは小さな悲鳴を上げる。

巣は何らかの化学物質や残った火薬で爆散したのではない。内側から突き破られていた。

燃え盛る炎を掻き分けて呐喊してきたのは、兵隊蜂よりも大きく、女王蜂よりも小さい個体。

（新しい女王蜂！ 天敵がないから女王が育つ周期が早まったのか！）

本来、新たな女王蜂が誕生するのは、旧女王の産卵能力が落ちてからが常。

しかし、魔界から人界へと世界を跨いで持ち込まれ、環境が一変したことで魔界ワスプに天敵はいなくなった。

更に一説には魔獣が人界の獣や昆虫に比べて遥かに大きい身体を持つのは、魔界の瘴気によって成長を促されているからだとも言われている。

魔界ワスプどもは瘴気の影響を受けなくなり、今後は徐々に弱く小さくなっていく自らの将来を本能で予期したのだろう。

故に、群れの数を増やすことで少しでも絶滅の憂き目を避けようと生態そのものを変化させた。新たな女王が生まれる周期が早まったのもその一環。

煙を巻かれた働き蜂も兵隊蜂も動かなくなつたのは女王が死んだからではなく単純な生理反応。ならば、この場を離れている働き蜂が今だに害獣を追い回しているのにも納得がいく。

その事実を知っているのは小太郎のみであり、新たな女王が生まれていたら即座に正答に辿り着けるのも推察するだけの材料を得ていた彼だけ。

ミーティアはもう二度と相對しなくてもいいと思っていた天敵の出現に再び役立たずと化し、静流は調査してあつた生態とは異なる現狀に硬直している。それ故、即応できたのも小太郎だけ。

「ギ、ギギ——！」

「なんつだ、そりゃあ——！」

小太郎は巢の方向へと振り向き様、排莖口から薬室に直接弾丸を送り込むショットガンならではの緊急装填を完了させたが、目にした光景は小太郎でも予想を超えるものだった。

あろうことか、新たな女王個体は腹の先端から生えた毒針をミーティアに向けて発射し、更に顔を出した毒針を今度は静流に向かって撃つ。

蜂の毒針は卵管が変化したもの。ならば毒針を複数持つ奇形や個体があつたとしても不思議ではない。

体内でガスを生成して天敵に吹きかけるマイマイカブリやミイデラゴミムシなどの昆虫がいるのなら、生成したガス圧で身体から切り離し可能な毒針を射出する理屈は思いつく。

しかし、これだけの変化をただの一世代で成し遂げるなど、蜂を研究する生物学者ですら思い至らない。

人間に捕らえられたことで銃の危険性を認識したのか。はたまた距離を取って獲物を行動不能に至らしめる新たな攻撃手段なのか。

いずれにせよ、信じがたい変化。

これだけの変化は数十年ですら短い方。本来ならば、数百年、数千年にも及ぶ世代交代と環境適応への答えとなる進化の類が、ただの一世代の交代のみで引き起こされる奇跡。

生きようとする意志は何よりも強いと言う。人間よりも原始的で生存本能に忠実な野生生物の方が劇的な変化を見せるのは、或いは必然だったかもしれない。

加えて、新たな女王蜂は凶らずも小太郎に択を迫る。

背を向けていた小太郎は後回しに、ミーティアと静流を狙った。ショットガンに装填されているのはただ一発。

ミーティアを救うか、静流を救うか、それとも女王個体を狙うかの三択。追い詰められ、時間を失うほど人は冷静さを失い、自身にとっても組織にとっても世界にとっても正しい択を選べなくなる。

小太郎も予期していなかった変化といい。何もかもが有利な状況といい。全てが女王に味方している。

唯一反応できた小太郎は全ては自らの失敗と認めることで冷静さを取り戻す。見積りが甘かった。

例えそれが世界中の人間が誰一人として気付かない可能性であったとしても、部隊を預かる者として考慮しておかなければならない可能性であった、と。

瞬間、彼の選択は決まった。

かくして一発の銃声と、毒針が肉を貫く気味の悪い音が鳴り響いた。

「ふうまさん——!？」

「ふうまくん——!？」

ミーティアと静流の悲鳴が響く。

小太郎の選択はこの状況を自らの失敗と受け入れた上で、自らを削るもの。

彼にとって優先度の高いミーティアに迫る毒針をスラグ弾で弾き

飛ばし、次に組織にとって失う訳にはいかない静流を守るために彼女の顔面に向かうの射線上に右の掌を滑り込ませて毒針を受け止めた。

魔界ワスプがスズメバチに近い生き物であるのなら毒は脅威。

スズメバチの毒は「毒のカクテル」と呼ばれるほど様々な生理活性物質の複合物であり、人体に投与されれば様々な効果を引き起こす。

炎症作用を引き起こすヒスタミン、呼吸不全や心肺停止の原因となる神経毒セロトニン、アセチルコリン、細胞膜を分解するホスホリパーゼ、タンパク質を分解するプロテアーゼ、アナフィラキシーショックの原因となるホーネットキニン、マストパラン、マンダラトキシン、ベスパキニン。その他、人界では発見されていない効果も未知数の化学物質。

いずれの物質の多くは動物の免疫系や神経系に関係した情報伝達物質でもあり、毒液は動物組織の構成物質を分解する酵素によって消化。破壊された組織を通じて速やかに皮下組織に拡散。さらに血管系を通じ全身を巡り、免疫系や神経系を攪乱。それにより激しい痛みや急性アレルギー反応などを引き起こす。

しかし、ある物質をある状態の動物に与えた場合、半数が死亡するとされる半数致死量はそれほどなく4.1mg/kg。

有名な河豚毒であるテトロドトキシンが0.01mg/kgであることを考えると自然界で生み出される毒としては弱い方である。

射出する以上、毒針の内部に溜めておける量はそれほど多くはない。少なくとも即死はしない。ならば後は、握った手札を斬るだけだ。

「やれ、無形——！」

小太郎の下した号令に従うように、黒い影が後方からぬるりと音もなく現れる。

それはミーティアと静流の間を抜けるように駆けると、小太郎の毒針を受け止めた右手を容易く手首から両断し、続け様に様子を伺って

いた女王に何の反応もさせずに首を断つ。

ミーティアには何が起きたのか分からなかった。

空気の揺らぎすらなく、自分のすぐ隣を何かが駆け抜けたことにすら気付いていない。突然、小太郎の右手が切断され、女王の首が落ちたとしか認識できていない。

手練れの対魔忍である静流でさえ、視界の端に何か映っただけ。彼女の産毛がそよぐことすらなく、辛うじて捉えた影が小太郎を乱暴な手段で救い、女王を討ち取ったように見えただけ。

「今のは……！」

静流が呟く頃には、影は姿を消している。

そこでようやく、ゾワリと全身が泡立つのを感じた。

恐らくは味方であろうが、これほどの隠形術の使い手を静流は知らない。

速度だけで言えば、隼の術を使わないアサギと同等。ただ、質が違う。『最強』であるが故に、その速さにはある種の暴力性がある。弾丸が風切り音と進むように。稲妻が轟音と共に奔るように。反応できずともその存在を認識せずにはいられない。

対し、影の速度はまるで逆。音も意も存在すらも消したまま、速度は同じに駆け抜けていく。目で見えず、音に聞こえず、肌にも触れ得ない。透明静寂、瞬殺無音。人の認識から外れた化外の暗殺者。

「静流さん！ 早く小太郎さんの手当てを……！」

「……っ！ 兎に角、止血を！」

「別に慌てなくてもいいよ。もうやってる」

余りにも埒外の技量を誇る隠形術に呆然としていた静流であったが、何も分からなかった故に余計な思考を巡らせずに動いたミーティアの声に、ようやく現実に戻ってくる。

呆然としている猶予はない。

致命傷ではないが適切な処置をしなければ出血が続き、死に至る。しかし、小太郎は痛み顔に顔を顰めることすらなく平静そのものの態度で右脇に左手を差し込んで挟み、大きい血管を押さた上で、傷口を心臓よりも高い位置に移動させて出血を押さえていた。

「ミィティアちゃん、彼の靴紐を外して手首を縛ってあげて」

「は、はい……」

「かなり痛むわよ」

「別にどうってことないけどね。それは？」

「ヨモギにイダドリ、チドメグサよ。タンニンの収斂作用、君なら知っているでしょ。気休めにしかならないけど、何もしないよりもマシよ」

自らのハンカチを取り出し、木遁によって生み出した植物の葉を揉み潰して傷口に押し当ててみる。

自生している薬草は寄生虫や細菌で汚れているから洗浄が必要であるが、木遁で急激に成長させたのならその限りではない。

如何に対魔忍であろうとも、傷口に直接何か当たれば激痛が奔る。しかし、小太郎は相変わらず痛みを感じていないかのようで、悲鳴すらない。

小さい切り傷だったのなら収斂作用による細胞と血管の収縮によって止血効果はあったろうが、これでは効くかどうか。

回収部隊を呼んで一刻も早く五車に戻るべきか、それとも近場の病院に駆け込んで応急処置を頼むべきか、静流は決めかねていた。

そして、それ以上に気になっていたことを言わねばならないことがあった。

「あんな伏兵がいるのなら、言っておいて欲しかったわ」

「ありやウチの一門で、今日はオレの護衛だったんだ。それに分かるでしょ。知られていないことがどれだけ有利な状況を生むか。まあ、知りたいなら教えるよ。奴は閻堂あんどう無形。照れ屋の恥ずかしがり屋

だ」

「今更、遅いわよ……でもまあいいわ、助けられたのは事実だし。ありがとう、助かったわ」

「どういたしまして」

存在している筈の味方について、碌に説明していなかったことを咎めるように睨む静流であったが、小太郎は気にした様子さえない。

しかし、微笑みを浮かべながら礼を告げると応急処置を再開する。

このまま咎め続けるようでは教師として生徒に守られる失態を演じた苛立ちをぶつけているようなもの。事実、心の中には不甲斐なさで満たされている。

だが、告げた礼は形ばかりではなく、心に浮ぶ感謝は本物。今まで身を挺して誰かを守ったことはあっても、庇われたことなどついぞなかった。

不甲斐なさと安堵、喜びが入り混じった心持ちは、静流にとっても初体験で不思議な気分ではあったが、悪い気だけはしないのは確かだった。

そして、情けなさは募るばかりであるが重なった予想外で、小太郎が動かなければ反応できていたかさえ怪しい。迎撃など不可能だったろう。これで礼の一つも口にしないなど、それこそ人格を疑う行為だ。

静流が周囲を探ってみても、相変わらず気配はない。

広がっていく炎の中に隠れているのか。生み出された影の中にいるのか。影——闇堂 無形は相変わらず気配すらない。

無形は現在、小太郎の下に集った者の中でも異質。

災禍と天音が万能とするのならば、無形はただ一つの役割——暗殺にのみ特化した至高の暗殺者である。

苦労人と見えざる刃

「こ、小太郎さあん、無理しないで……」

「無理してる訳じゃない。出血しちゃいるが死にやあしないさ。早目に此処から出るぞ。それよか、もう大丈夫か？ 魔界ワズプは動かなくなつたが、そこらにチラホラいるし」

「ブヒイ……！」

「ど、どうした、お前」

（優しい……！ それにまだ見捨てられてない！ これから頑張れば、報酬もいざという時の助けにもなる……！）

女王と討ち、巢を破壊した後、一向は炎が広がっていく実験林の中を進んでいた。

方向は警備兵を昏倒させた出入口のちょうど対角線上。強化ガラスの壁を破って脱出する腹積もりだ。

侵入に使用した出入口は、警備隊の隊長がどんなに鈍い人物であれ、昏倒した部下を見れば侵入者の存在に気付いて既に固めている。聡い人物であれば燃え広がる炎から全て手遅れと判断し、クロワダミの上層部に魔獣を使った実験の証拠隠滅を進言し、手の切り時と考えて次の就職先を考えているところだろう。

突破するのは不可能ではないが、幸いなことに強化ガラス用の装備もあれば、静流もいる。草花ですらアスファルトを破る生命力を見せる、木遁使いであれば樹木を成長させて強化ガラスどころか特殊合金の扉ですら打ち破れる。余計な手間をかける必要はなかった。

小太郎に肩を貸しながら、半泣きのミーティアは手首から先がなくなり止血してもなお出血が続く右腕に視線を落とす。

「どうやら、この傷は自分の責任と思っっているらしい。確かに責任の一端は彼女にあると言えなくもない。」

尤も、小太郎は戦闘面でミーティアに期待などしていないし、誰に

も期待などしない。

事実と能力、性格に則して出来る仕事を振るのみ。予定外の出来事はあったが、それこそミーティアを測り損ねた自身の責任であり、当然の報いを受けただけの事。

苦手や無理を申告しなかったことは責められるべきだが、状況が状況だ。口を開き易い環境を提供してやれなかった事実がある以上、やはりこれも己の責任とし、責める様子は一切ない。

その気遣いにミーティアは思わず涙と鼻水を吹き出し、豚のような呻きを上げる。

無理もない。彼女はこれまでの間、仲間からも気を遣われたことなど殆どない。好き放題に厄介事を投げてくるのに感謝の言葉もなく、自分の頼みなのだからやって当然といった態度の頭魔族の仲間達。

それに反して、契約上の関係とは言え、失敗を責めないどころか逆に気まで遣ってくれる小太郎。もう既に気持ちは夢魔の仲間よりも、小太郎の側に傾きつつある。今後は仲間の頼みよりも小太郎の頼みを優先しそうな勢いである。しかし、きつちり打算も忘れていない辺り、流石であった。

「それで、闇堂さん？　くん？　ちゃん？　どれでもいいけど、必要に迫られたとは言え、主人の右手を切り落としておいて相変わらず姿を見せないで、謝罪もなしなのね。それに闇堂家って言えば、確かふうま一門の……」

「放っておいていいよ。近くで護衛してくれてる。アイツは絶対に人前に姿を見せない。見せたとしても変装して誰かも分からんし、姿を隠しても直接会話をしないで全部電話越しだ」

「呆れるくらい徹底してるわね。それを許すなんて、随分と信頼してるのかしら？」

「いや、信頼以前だ。闇堂の連中に裏切りはない。だからこそ頼りになるし、同時に厄介だけだ」

未だ姿を見せない化外の暗殺者に興味を唆られている、と言うより

も静流は周囲を警戒しながらも小太郎の意識を保つために会話を続ける。

自身への不甲斐なさや憤りを、姿を見せない暗殺者へとぶつけかけていたが、言葉の上では兎も角として感情として発露をしていない辺り、流石であった。

ただ、異常なまでの警戒心であったのは事実。いくら姿を見せないとは言え、味方は味方。ミーティアには、静流の警戒は奇異にさえ映っている。

小太郎は静流に気付かれぬよう、ちらりと背後で燃え広がり続ける炎に照らされる樹上の枝へと視線を向けた。

炎によって生み出された影の中には更に影があり、此方を見下ろしている。影は驚くように、怯えるようにビクリと身体を震わせると首を垂れて再び影に溶けていく。

アレこそは闇堂 無形。

小太郎を頂点とするふうま一門どころか、対魔忍においても、彼の隠形術を破れたのはカメラ越し、異能越しの視線にすら気付き、警戒心がそのまま索敵に繋がっている小太郎のみ。

その事実は、この世に存在するありとあらゆる者への暗殺可能であると示している。姿を見せず、声の届く距離での会話を拒絶する不躰を許されている唯一の部下。

静流の警戒も無理はない。

それだけの能力を備えていることに加え、あの闇堂家の出身だからだ。

闇堂家は、ふうま一門の異端にして始末屋。

敵対組織の長を暗殺するのは勿論の事、一門の裏切り者を速やかに粛清してきた生粋の暗殺者。

勇名を馳せることは決してなく、誰にも気付かれることなく首だけを落として持ち帰るその手管は、対魔忍内部ですら蛇蝎の如く嫌われ、同時に恐れられた。

特に井河家・甲河家にとって厄介であったのは、闇堂家の忠誠心だ。忍は旗色や潮目が変われば、すぐに裏切る。元より公権力からは遠い

存在であり、自らや一族の利益を追求する他ないからだ。

しかし、闇堂家はふうま宗家に仕えてから、ただの一度も裏切り者を輩出していない。

仕える以前から暗殺を生業としてきた故に、絶対の忠誠と服従を誓うことで主君や仲間には要らぬ警戒を抱かせず、本来は得るのも難しい立場でありながら絶大な信頼を勝ち得たのである。

腹を切れと言われれば、即座に腹を捌いた上に自ら首を切り落とし、自らの赤子を殺して喰らえと命ぜられれば、何の懊悩も見せずに実行する。その忠誠は最早、心より生ずるものではなく、在り方そのもの。血に刻まれた宿業と言っても過言ではない。

それは、弾正の反乱時にも遺憾なく発揮された。

肅清部隊がふうまの隠れ里にやってくれば森の闇に紛れて指揮官クラスを闇討ちし、一人が二人にでも囲まれれば即座に自爆して数を減らす。

弾正が癩癩を起しても、何一つ不満を示さず受け入れ、米連に逃げ延びると決めれば、死を厭わずに足止めに終始する。

反乱が鎮圧された後、捕らえられた闇堂家の者は絶無であった。一部は弾正と共に米連へと逃げ延びたが、その殆どは弾正の情報を与えまいと捕まる前に縊てが自害したのである。

井河にしても、甲河にしても、彼等の忠誠も行動も異常であった。

どう鼻肩目に見ても、弾正など彼等が仕えるに値しない当主であったからだ。仕えた所で見返りなどなく、劳いの言葉すらないだろうにも拘らずこの始末。

弾正などよりも遥かに厄介で警戒すべき存在。少なくとも、アサギと共に日本を守ると誓った対魔忍にとっては共通の認識であり、事実を目にしていけない若い世代には風化しつつある存在である。

「でも、無形……殿は、どうして君に？　闇堂家は全て弾正についてと

聞いているけれど」

「その辺り、認識に齟齬があるな。まあ、殆ど死んじまつてるから無理もない。闇堂の連中はふうま宗家に仕えているわけじゃない。仕え

る主君を自ら選び、生涯を共にする。だから、無形は弾正よりも先にオレを自分で選んだだけだよ」

「ちよつと待って、それって……!」

「当然、弾正に仕えていない奴等は野に下ってるよ。尤も、全員の居場所も主人も把握してるし、アサギの方に和睦が入って受け入れられてる。幸い、主人の連中は真つ当でまともだ。悪さはしないさ」

無形の年齢も性別も分からない静流は僅かに悩み、非礼のないように敬称を選択して疑問を口にした。

小太郎があつさりと答えたのは予想していなかったものであり、目を丸くする。

それが闇堂の者にとっては、唯一の尊厳であり誇りだったのだろう。

暗殺を生業とする以上、名声は遠く、仲間内からも信頼など得られる筈もない。金も贅沢も生を彩る装飾に過ぎず、生きる指針を与えてくれるわけではない。

だからこそ、自ら選んだ主君に己の全てを捧げる。鍛え抜いた技も、授かった命も、歩むべき人生そのものも。主人の幸福こそ我が幸福、主人の死こそ我が終わり、と。

あらゆる人間性を捨てている筈の忠誠が、唯一残った人間性など皮肉もいい所だ。

弾正を選ばなかった者は、今も日本の何処かで生を謳歌している。無形のように徹底して姿を隠している者ばかりではない。正体を隠し、普通の人間のように主の隣に立つて支える者もいれば、社員として主人の社長に奉仕している者もいれば、先輩後輩の関係の者もいる。

闇堂の者が選ぶ主君に基準はない。善人であろうが悪人であろうが、一般人であろうとそうでなかりとうと関係ない。ただ、自身の心がこれと決めた相手に仕えるのみ、だ。

だからこそ、小太郎はアサギに対して寝ている虎を起こす真似をしないように言い含めており、アサギもこれに同意した。

表向き闇堂家は無形を除いて、全て弾正と共に米連へと逃げ延びたことになっているのはそのためだ。

現在、日本に残った闇堂家の人間が安穩と生活しているのであれば、不安はあれども不満はない。あくまで厄介なのは敵に回った場合のみであり、

「でも、私は無形殿について、聞いた覚えがないのだけど？ あれだけの隠形術なら噂になってもいいと思うけど……」

「そりゃ奴の忍法のせいだな。五車に帰ったら調べてみるといい。ちゃんとデータベースにも登録されてる。一応、オレが命じたからデータは全部本当のことだと思うよ。オレも奴の本当の素顔は知らんけど」

「……ええ、小太郎さんの、それはありなんですか？」

「アリもアリ。そういう奴が居ても面白いしな。オレが使う上で必要な事実は把握してる。名前や人相、生年月日に性別なんてどうでもいいさ。重要なのは裏切らないかどうかだ。それに裏切られた時の対策は立ててある」

無形は小太郎の前にさえ只の一度も顔を出したことはなく、他のふうま一門でさえ同様である。

静流もミーティアも、余りの徹底と偏執、小太郎の無頓着ぶりに呆れとも驚きともとれる反応を見せていた。

ただ、本当に驚くべきは、無形に勝る警戒と偏執を持つ小太郎がそんな相手を許容して傍に置いていることの方。

小太郎も警戒は抱いているが、それ以上に頼りにしている。情報がない自身にとって不利以上に、無形が優秀かつ有能である利があった。同時に、裏切りに対する策を用意して安全を買っている辺りは彼らしい。

「それに案外可愛い奴だよ。ほら」

『若様、私は裏切りなんかしません』

『ねえ、見てますか?』

『若様? 若様??』

『既読スルーやめてくれませんか?』

『若様ぁー……ぁー……!』

「何だか、イメージと違いますね……」

「これは、ネットとかメールだと元気になるタイプね……」

取り出したスマホに表示されるLINE通知が並び、次から次へとメッセージが飛んでくる。

勢い足るや津波の如し。自分の身体や表情、会話を使った表現は苦手でも、電子機器などを介した言葉による表現はその限りではないらしい。

その様子に、静流とミーティアは微妙な表情になった。

考えていた人格とは余りにも掛け離れたないようだ。手練れの暗殺者であれば、感情などないように振舞うものだと思っていたのにこの有り様。

年の頃さえ分からない相手であるが、文面を見る限りは思いの外、若いのもかもしれない。

その時、三人のすぐ隣に立つ樹木の幹に、スコンと音を立てて何かが突き刺さる

「ひえっ……何っ?」

「これは……返信くらいしてあげたら……?」

「こういうところは面倒なんだよなあ——おい、無形。オレはお前が裏切るなんて思っちゃいない。あくまで念のため、オレ自身にも変えられない性質なのは知ってるだろ。お前だけについてわけじゃないんだ。勘弁してくれ」

木に刺さったクナイは一枚の紙が縫い留められていた。

静流がクナイを回収すると同時に紙を小太郎に手渡す。其処にはおどろおどろしい血文字で『絶対に裏切りなんてしません』と書かれ

ている。

明らかに無形によつて書かれたものである。どうやら、無形にとつては——というよりも、闇堂家の人間には裏切りという単語でさえ琴線に触れてしまうらしい。

小太郎は残つた左手で頭を掻き掻き頭上を見上げ、姿の見えない暗殺者に語り掛ける。

すると、徐々にLINE通知が減つてゆき、ようやく怒涛のメッセージが止まつた。不承不承ではあるが、何とか納得して貰えたようだ。

その様子を小太郎以外に気付かれることなく樹上から見下ろしていた無形は、影で覆われながらも明らかな不機嫌さを露わにしていた。尤も、その姿もまた小太郎以外には知られることはないのだが。

無形が正式に小太郎の部下となつたのは反乱時、弾正の魔の手から逃げ延び、アサギの下へ転がり込んでからだ。

しかし、出会い自体はもつと前。尤も、それは出会いと呼べるようなものではなかつた。

無形は闇堂家の中でも更に異端にして異形。

生まれ持つた忍法故に親兄弟からも放任され、常に孤独であつた。

だが、無形にとつてそれは僥倖。小太郎は照れ屋の恥ずかしがり屋と称したが、無形は臆病者の腰抜けと自認する。

始まりにあつたのは訳もない恐怖。

特に理由があつたわけではないにも拘わらず、無形にとってはこの世の全てが恐怖の対象であつた。

幼い頃に手を噛まれたから、歳を重ねても犬が怖い。何かの拍子にちよつかいを掛けて手を引つ掛かれたから猫が怖い。というように、大抵の恐怖には理由がある。

理由がなくとも無知から来る恐怖もある。けれども、無形のそれには特に理由が見当たらない。恐らくは、生まれ持つた性質そのものに問題があつたのだろう。

自身を照らす電灯の光が怖い。使わねばならない箸が怖い。尖つた鉛筆が怖い。聳え立つ木々や山が怖い。蒼く澄み渡り、煌々と光る

太陽が怖い。何を考えているか分からない人間が怖い。優しく抱き締めてくれている親兄弟ですら怖い。

理由がないことはとかく厄介である。それはつまり、当人ですらどうしようもなく、改善のしようがないことを示しているからだ。

いつそ恐怖で壊れてしまうほど弱い方が幸福だったかもしれないが、生憎と無形はそこまで脆弱な精神の持ち主ではなかった。生きていく以上は生き抜かねばならない。如何なる状況下であろうとも、死に逃避は出来なかった。

そうして何時の頃からかふうまの隠れ里の森の中で一人で生活するようになっていた。人や文明から離れば、必然的に恐怖するものは森の中に存在する者に限られる。恐怖が消えることはないが、減らすことはできる。それが無形の処世術であり、生き方だった。

気配を殺し、息を殺し、森の獣や虫にさえ気取られぬ隠形術はそうして形成されていき、何とか一人の生活に慣れ、親兄弟からすらも存在を忘れ去られた頃――

『？』
『……！』

――その全てを台無しにする存在に出会ってしまった。

それは紅や骸佐、凜花と共に森の中で遊んでいた小太郎だった。

馬鹿な在り得ぬ在ってはならない。そう考えながらも無形と小太郎の視線は絡み合い、自身にとつての最大の天敵と認知しながら、無形は森の奥へと逃げた。

その日の夜は最悪だった。

夜闇や焚火の炎、獣の息遣い、鳥や虫の鳴き声に怯えるばかりか、名も知らぬ天敵の存在にも怯えねばならなかったからだ。

どうする。どうする。どうする。どうする。

この恐怖から逃れるためには、自身はどうすればいい。

恐怖の余り、隠れ潜む大木の虚で一週間も動けなかった無形が痩せ細りながらも出した結論は、恐怖の根源を断つこと。即ち、小太郎の

暗殺である。

そうと決まれば、行動は早かった。

まずは失った体力と身体を取り戻し、対象の情報を調べ上げる。

その過程で小太郎が弾正の正式な息子であることを知り、その傍らには常に「最強」か、彼女が認めた秘書と執事が控えていることを知り、無形でさえ呆れるほどの訓練を繰り返していることを知った。

周囲には何の問題もない。

ふうま宗家に見れば闇堂家の者の手による後継者暗殺など裏切り以外の何ものでもないが、それは弾正を主君とした者に限られる。

まだ主君を選んでいない無形はその限りではなく、血に刻まれた家訓には反しておらず、闇堂家の者は何一つ咎めも責めはしない。そもそも、無形に関しては忘れ去ってしまったている。

また正式な息子であるものの、小太郎は弾正から冷遇されている。例え殺したとしても、表向きの犯人捜しはするだろうが、実態は別。下手をしなくとも、弾正は小太郎が死んだことを喜ぶだけだ。

傍に控える「最強」も、端女と呼ばれる秘書も山犬と呼ばれる執事も問題ない。

「最強」は感情を色として見る邪眼を持っている故に厄介であったが、感情の抑制や鎮静、無とすることなど隠形術の基本中の基本。掻い潜りようななどいくらでもある。

直感も優れているが、気付かれようともそれよりも早く殺してしまえばいいだけのこと。「最強」とは戦闘が始まってこそ初めて威を發揮する。ならば、戦闘にまで移行しなければいい。

最大の問題は、暗殺の対象であった。

年端もいかぬ幼子だと言うのに、過酷な訓練によって養われた第六感までも含めた感覚を潜り抜けられなかったのである。

小太郎に見れば、視線を感じる、ような気がする、程度の違和感であったが、無形にとっては足を留めて次の機会に持ち越すには十分な気付きであった。

そうして手を拱いている内に、無形の心境に変化が訪れる。

恐怖は相変わらずであつたが、それ以上の驚きと一方的な共感、そして敬意を抱き始めたのだ。

小太郎の生活を仔細に調べていく内に、その為人も見えてくる。ひととなり無形が感じ取つたのは、小太郎もまた自身と似た存在であることだ。

異常極まる偏執的な猜疑心。この世の全てが疑いの対象であり、自身すらも対象から外れない。そんな在り様では、自身と同じくこの世の全てが己を責め苛む拷問器具にも等しい。

にも拘らず、小太郎は尚も笑いながら生きていた。

時折、「最強」から与えられる試練に悲鳴と絶叫を上げながらも、逃げ出すことはあつても、投げ出すことだけはない。

それを「最強」が許さなかつたという理由もあるが、小太郎自身が与えられる試練に立ち向かう気概を持っていたからに他ならない。

その上、彼の猜疑は己の恐怖よりも範囲が広い。

思い返せば、己の恐怖は目に見える物に向けられてばかり。

人そのものに恐怖は抱いても、その人物が何を考えているかに恐怖を覚えたことはない。

目に見えぬ空気に恐怖を抱いたことなどなく、空気の中に何か毒でも混じつていないか恐怖したなどしていかない。

目に見えぬものにまで向けられる猜疑は凄まじく、またある意味において或る意味で己よりも辛い生き方だろう。

そんな自分を恥じることもなく、悔いることもなく受け入れ、折り合いをつけて生きている小太郎は無形にとつて尊敬に値し、これと決める主君として敬愛するには申し分なかつた。

しかし、長かつたのは其処からだ。

今は訓練で忙しいから。

今は母君を失つて辛い時期だから。

今は五車に移り込んで、面倒な時期だから。

今は。今は。今は。

そうこうしている内に、球磨まで迎え入れられて遅れを取る形となる。

相変わらず、無形の胸中にあったのは恐怖だ。

但し、これまでのものとは異なり、理由ありき恐怖。

無形は生まれて初めて、人に拒絶される事に恐怖した。理由なき恐怖とはまた異なる赴きは、成長を促すには十分過ぎた。

理由なき恐怖はただ耐える他ないかもしれないが、理由ありき恐怖には立ち向かい、克服することが出来る。

これまで逃げるばかりだった無形にとっては転機であり、小太郎が何も知らないまま見守るだけでは余りにも寂し過ぎる。

勝手に決めた主君とは言え、親以上の敬愛を向けている相手。拒絶されても構わない、せめて生を受けて初めて産まれたこの思いを伝えねばならない。そう思い、己には存在しないと考えていた勇気をふり絞り、一本の電話を入れた。

『もしもし』

『——あつ……あつ……』

『……？ お前、もしかして闇堂 無形か？』

『……っ!』

『当たり前みたいだな。上手く喋れないのか知らないから、勝手に喋らせて貰う。以前からずっと気になってたんだ。前々から視線を感じるのに何もしてこない奴がいるってな。名前も素性も勝手に調べさせて貰った』

『……………』

『監視している様子もないし、オレの情報を外に流してるわけでもない。その後で、今回の電話だ。てことは、オレと連む気になったのか？』

無形の勇氣に返されたのは、思いも寄らぬ無上の歓喜であった。

視線に気づいていた小太郎は、何の手掛かりもない状態から正答に辿り着いていた。

何も目くら打ちの当てずっぽうだっわけではない。視線のみしか感じ取れないほどの隠形術の使い手など、ふうま一門の中でも限られ

てくる。

暗殺者である闇堂家も容疑者の一人として挙がってくるのは必然。その中で、無形は情報があるだけで存在だけが抜け落ちて、死さえ確認されていない。

まるでびつしりと文字で埋められた書物の中に、何一つ文字の書かれていない白紙のページを見つけたかのような違和感。確証はないが、確信に至るには十分過ぎる。そして、これまでの行動から何を考えているのか、察していた。

自分が何も言わずとも、理解し、認めてくれる相手がいる。仕える者として、これほどの歓びはあるまい。

こうして、至高の暗殺者は小太郎の部下となった。小太郎は変わらず疑いを抱き、対策も立ててはいるが、無形について知れば知るほどに頼りになる技能と忍法を持つ者だと認めているほどだ。

しかし、不可思議な点が一つある。

これだけの腕前を持つ者が、小太郎の下に付けばどうなるか。

アサギは兎も角として、他の長老や当主は決して認めまい。没落した反逆者の当主に、あらゆる手段を行使することに躊躇いがなく裏切りもしない暗殺者など、権力を握る者にとっては不要なまでの懸念を抱くには十分な組み合わせなのだから。

「随分と簡単に教えてくれるのね」

「別に黙っていたわけじゃない。聞かれた以上は答えるさ。アサギにだってちゃんと説明してるわけだしな」

(どうせすぐに忘れるだろうからな)

暗殺者は例え味方であろうとも存在を認知されていない方が何かと都合が良い。

味方が捕まったとしても、知らなければ無形に関する情報が敵側に漏れる恐れがなく、見えざる刃としての威力を保ち続けられるからだ。

にも拘わらず、小太郎があっさり味方の情報を明かしたことに静流

は違和感を覚えていた。

思いの外、秘密主義じゃないのかしら、と首を捻った。或いは、それほど信頼しているのか、とも考えたが事実は全くの別。

それは無形の忍法にあった。名を念外ねんはずしの術と呼ぶ。

この念とは、仏教で語られる五根の内の一つであり、悟り、解脱に至るための五種の能力と言われている。

その中で念とは、特定の物事を心に留めておくことであり、かつて経験を明らかに記憶して忘却しない能力を指す。

とどのつまり、念外しの術とは他者の記憶から外れて、忘れ去られる忍法ということだ。

この忍法は自斎の神通と同じく殆ど記録が残っていない。但し、前者が術の暴走から情報が散逸したか、危険性から封じられたのに対し、後者はそもそも記録を残そうとしたかすら怪しい。

無形の場合は常時発動状態にある。どれだけ親しい間柄であれども、一晩寝てしまえば無形に関する情報を完全に忘れ去ってしまう。

これを破る方法は二つ。一つは新たに無形の情報を得ること。

忘却のメカニズムはまだ明らかになっていない点が多いが、厳密に人の脳には忘却という機能はなく、単に必要な情報を引き出せなくなるだけと言われている。

それと同じ。無形に関して忘れてしまったとしても、名前一つでも構わず、無形に繋がる情報を僅かにでも得られれば全てを思い出す。

これを見るに、小太郎は念外しの術は脳から情報を消し去る術と言うよりも、脳のシナプスに何らかのロックを掛けて、情報の引き出しを阻害する術と認識していた。

そしてもう一つは、実現不可能な手段であるが無形を常に意識し続けることだ。

念外しのロックは実に脆く拙い。無形を常に意識し続けることでそもそもロックを阻害できる、と小太郎自身が証明している。

尤も、実の兄弟や母親——家族の情ですら無形の忍法の前には無力だった。それこそ一族郎党を皆殺しにされた怨敵に対するものと同レベルで意識し続けなければならない。

どんな人間でも睡眠からは逃れられない。どうしようもなく脳を休ませねばならないからだ。だが、例え眠ったとしても、意識を失ったとしても、脳の記憶に関する部位を常に稼働させ続けられるとするならば或いは可能かもしれない。

最早、彼の意識と肉体を操る技能は或る意味で忍法を超越している小太郎か、極限以上の感情を無形に向ける者にしか不可能な芸当・荒業でしかない。

無形以外が持ったとして、様々な悪さが出来ただろう。直接的な害を与えられる訳ではなく、拙く脆い能力であるが同時に凶悪ですらある。自身の起こしたあらゆる出来事を都合よく忘れて貰えるなど、他の人間からすれば悪夢でしかない。

しかし、無形ほどに使い熟せはしないのも事実。その威力、その凶悪さを最大限に発揮できるのは、無形の存在すら認知されない隠形術、証拠を残さない暗殺術とのシナジーがあつてこそ見えざる刃として在り続けられるのだ。

実力を知らない害獣では女王を倒せるのかなど分からず、何時まで逃げ続けなければいいのか分からない。

そもそも、いま生き延びられたとして、あの恐怖そのものの男が自分達を見逃してなどくれるのか。走り出す直前に逃げていいとは言ったが、逃げれば殺すとも言っていた。既に言質は取られてしまっている。

こんな苦しみが続くくらいならばいつそのこそ——

一瞬で死ぬるとは限らない。生きてまま身体を食い千切られるなど考えたくもない。

しかし、終わりの見えず、速度も一切落とせない地獄の持久走は、害獣達の自尊心ばかりが肥大した精神を根元からポツキリと折るには十分過ぎた。

どちらからともなく、徐々に速度を落としていく。

二匹の顔に表情は一切ない。余りにも深い絶望が感情を逆に奪ってしまっていた。

ゆっくり。ゆっくりと、速度を落とすごとに死に近づいている。

だが、もう手足を動かすのはうんざりだった。呼吸でさえ煩わしい

——そうして、二人はその場にへたり込んだ。

肉体面は勿論の事、精神面における限界を迎えたのであった。

「……………ひゅー……………ひゅー……………?…」

しかし、何時まで経つても受け入れた筈の死は訪れない。

互いに不可思議さを隠せていない表情で顔を見合わせ、恐る恐る振り返った。其処で見たものは——

「は……………はは……………(っ)ほっ……………げふっ……………」

「や……………げひゅー……………やった、よお……………」

——今までの凶暴さが嘘のように、羽を畳んで地面に居りて動かない魔界ワスプ達の群れ。

もう小太郎の前に立つただけで膝が震えて勝手に涙が流れ出し、例の仮面を被れば失禁不可避にも拘わらずこの態度。まるで成長していない。

小太郎は当然だなと半笑い。静流は在り得ないでしょと驚愕。ミーティアは何も言わずに頭を抱えたに違いない。

「でも、どうするつもり？ またやられちゃうよ……」

「ふふふ。私にいい考えがある！」

だが、無策で挑もうとするほど愚かでもないようだ。

不安げなミナサキを前にして、リリムは薄い胸を張る。その視線の先にあつたのは――

もし、この小賢しい二人をピタリと表す言葉があるとするのなら、
“憎まれっ子、世に憚る” 以外にはないだろう。

「そろそろ辿り着きそうね。ふうまくん、出血は？」

「それなりに。でも、止血は効いてる。眩暈もない」

「良かった。傷の応急処置なんて久し振りだから安心したわ。ミーティアちゃんは？」

「はい、大丈夫です。小太郎さんのことはお任せ下さい！」

巢のあつた実験林の中心辺りからドームの強化ガラス製の壁に近づきつつあつた静流は歩みを止めず、二人の返事に首だけを向けて微

笑んだ。

小太郎は僅かに血が滴る右手首を持ち上げて見せる。声色も顔色にも変化はなく、無理をしている様子はなく、毒による影響は皆無。小康状態と言ったところ。

ミーティアは額に汗を滲ませながら小太郎に肩を貸してる。体格差もあって、小太郎はまだしも彼女は歩き難いだろうに健気なもの。尤も、健気なだけでなく八割は打算であるにも拘わらず、表に一切出さない辺りが実に優秀であった。

三人の背中を照らすように、遠くでは炎が高々と燃え上がっている。

火の手の勢いは留まらず、消化の初動が遅れている以上、実験林は全て燃え尽きるだろう。つまり、女王を失って動かなくなった魔界ワープは全て燃え尽きる。

後はクロワダミの処遇であるが、政府による介入調査は持ち帰った情報から確定事項。その後、クロワダミが企業として解体されるか、闇に手を染めた部分だけを斬り落として健全化されるだろう。どちらに転ぶかは政府の心持ちと企業が何処まで闇に足を踏み入れているかによる。

クロワダミ側の悪足掻きとして、政府議員の買収や元々の繋がりによって介入調査に待ったがかかる可能性もあったが、其処を予期しない能天気さは静流には存在しない。アサギには政治方面で強権を揮える山本長官に動いて貰うようプッシュするつもりだった。

自らの任務は問題なく達成。

以前から気になっていた生徒の実力と智慧を知れた。守る筈の立場でありながら守られてしまう失態は演じたが、任務の功績を渡して手打ち。それで足りずとも生徒の態度を見れば、今後の繋がりも考え、貸しにしておいて貰うのもいいかもしれない。

ミーティアとは顔見知りになり、闇の世界で単独潜入をしていく上で必要なツテも手に入れられた。対魔忍では知り得ない情報であっても、彼女であれば容易に手に入ることもあろう。

任務続きで疲労が溜まり、至らない点は色々あったと認めざるを

ミーティアにとっては久方振りの——いや、人生初のマジギレに、怒りのバロメーターは瞬時にレッドゾーンを振り切った。

しかし、今までずっと何のかんのと全ての失敗と悪戯を許されてきたせいだろうか、リリムはまともに取り合おうとせず、安全圏と信じた場所で仲間でミーティアを煽る煽る。隣でミナサキも囁し立てる。こうした時の害獣の輝きようと来たらない。

最早、ミーティアは怒りの余りに言葉すら出て来ないらしく、顔を真っ赤にして歯噛みするばかり。

今すぐにもリリムのところに飛んで行って、あの馬鹿面に拳を一発叩き込みたいところであったが、生憎と小太郎に肩を貸しているところ。自分の感情が降り切れていても役割を投げ出さないのは流石であるが、傷害、暴行、仲間殺しの汚名ですらリリム相手ならば笑っても許してもらえる程度には頑張っている。何処までも真面目な夢魔だ。

「へっ！ ミーティアの役立たずう！ 私を助けてくれないし、そんな奴に肩入れするし！ 夢魔の恥晒しはそっちの方なんじゃないの？！ じゃあねー！ 一生そうやって馬鹿を見てればいいんだー!!!」

——瞬間、ミーティアの脳内に溢れ出した存在しない記憶。

『全く、リリムと来たらしようがないわね』

『貴方が付いていながら、なんて様なの!?!』

『そうだ、全く！ この夢魔の恥晒しめ!!』

『リリムは別の者が連れ帰るとして、ミーティアにも仕置きが必要かと！ アンブローズ様、御決断を!』

『いや、それは必要ないでしょう……とは言え、他の者に示しが付かないのも事実。残念だけど、暫くは（部下の頭に血が上って何されるかわからないから）謹慎なさい、分かったわね?』

下からの突き上げから守り切ってくれない夢魔の頭領。

親友の筈にも拘わらず、労いも心配すらなく罵倒ばかりを浴びせるその腹心。

大した実力もなければ功績もなく、仕事振りも木っ端も木っ端の癖に、面倒事ばかり押し付けて、人が失敗すればこれでもかと言わんばかりに責め立ててくる仲間達。

人が弱っている時には、ここぞとばかり煽りを入れてくる落ちこぼれ。

無論、ミーティアはこんな事態に陥ったことはない。

今までは巧くやってきていた。これからも巧くやっていく自信は十分にある。

今回の件にしたところで、リリムへのフォローを入れつつ自身の価値を貶めないよう、仲間を納得させられるだけの手腕は持っていた。

だが、微笑みの仮面の下に巧妙に隠され、頭領でさえ察せなかった多くの感情が存在しない記憶と共に溢れ出す……！

(ぎ、切れた……！ 私の身体の中で何かが切れた……決定的な何かが……！)

それを理解して瞬間、ミーティアの身体からは力が抜け、これまで決して投げ出さなかった役割を手放し、その場に背中から受け身も取らずに地面へと倒れる。

感情とは溜め込むべきではない。吐き出すものだ。

溜め込んだところで処理など出来ず、溜まり続ける一方。個々人で許容できる総量は異なるが、ミーティアの場合は人よりも遥かに許容量が多かったのが災いした。

他の夢魔であれば、好き放題にやって感情を吐き出していただろうが、真面目な彼女は人にそんな事を聞かせて良い気分になるわけもないと理解しており、一人の時にすら仲間への裏切りとして決して吐き出さなかった。それが今、どうしようもない限界を、迎えたのであつ

「……………私も今、魂で理解した。あの二人は確かに害獣。駆除で」
「了解。はー、これで清々するな。誰かを殺してもすつきりはしない
が、物理的にはさっぱりするのは良い事だ」

「へっへっへっへん！ おらー！ どうした馬鹿鬼畜男くっく！
悔しかつたら此処まで追いでー！ お前なんかあのマスクがなければ
怖くないんだよー！」

「あつー 翼ないんだったよねー！ 残念でしたあー！ そのまま其
処で指加えてボク達が逃げる様を眺めてろくっく！」

静流はこれまで見せていた躊躇いや慈悲を何一つ見せず駆除のG
Oサインを出し、小太郎はノータイムどころかやや食い気味に頷い
た。

それもその筈、今のまま二人を見逃せば静流の苦労は水の泡。今夜
の出来事は全て無意味なものとなる。小太郎は元々の予定としてそ
の方針だった。

害獣は対魔忍二人が何の会話をしているかなど聞こえよう筈もな
いが、思惑は流石に分かっているのだろう。

空の上という安全圏では手を出せないと思いついでいるのか。余
裕綽々の態度で、ミーティアのみならず二人すらも煽り倒す。こうい
う時の害獣の輝きようと云ったらない。尤も、害獣の思い描く安全な
ど幼稚で些末。現実は何ら則していない単なる妄想に過ぎないのだ
が。

うんざりとした表情で、小太郎は片手で銃を構える。その姿に恐怖
を覚えることなく、当てられる筈がないとでも言いたげに笑い出す。

「おら、ポンつとな」

「そんなの当たる訳ないじゃん!!」

「見てから回避余裕だもくっく！」

小太郎が撃った銃は低速擲弾を放つグレネードランチャー。

確かに、害獣の言う通りではあった。

めた瞬間に爆発した。

高笑いは悲鳴に代わり、それも爆発音の中に消えていく。

派手な爆発ではなかったが、音はドーム内に響き渡った。異変を察知して、すぐに警備兵達が動き出すであろう。

「ふぐうう……うえええ……おえ……！」

「汚い花火————というほどでもなかったわね。でも、死体の確認が出来ないわよ」

「魔界ワспの方を狙った。そつちは死んだから十分でしょ。仮に生きてても警備兵に見つかるか、炎に巻かれて焼け死ぬ」

「それもそうね。でも、不安だわ。あの二人なら、生きて逃げ延びそうな気もするのよね……」

「ああ、それも問題ない。仕込みは十分、こつちの迷惑にはならんようにしてある」

「もしかして、無形殿に……？」

「まさか。無形を動かすような相手じゃないし、相手させるのが可哀想だ。別の奴に任せるよ」

「……………？」

ミーティアの鳴き声をBGMに、静流と小太郎は僅かな稚気すら見せずに淡々と現状を確認し合う。

争いとは同じレベルの者同士でしか発生しない。二人にしてみれば、本当に害獣の駆除でしかなかったのだ。

それよりも、今はこの場を離れる方が重要だ。

どんなに動きの鈍い警備兵も今の爆発で侵入者がまだ残っていることに気付いたはず。炎の勢いが衰えない実験林の中に立ち入ろうとせずとも、ドームの周囲を固めようとする。その前に離脱した方が賢明だった。

「それよりもこの子、どうしましょう……？」

「このまま放置しとくわけにはいかんでしょ。こつちの都合もある。

責任はこつちで持つし、校長にもオレから説明するよ」

「だから他には黙ってる、ね。分かったわ。でも、自分が怪我人であることを考えなさい。責任は折半、説明も私がするわ。少しは教師として胸を張らせなさい」

「そ。じゃあ、お言葉に甘えて。ほらミーティア、立てるか？ 泣いてもいいからもう少しだけ頑張ろうな」

「ぶええ……ひぐっ……ひぐうっ……ヴおえ……ぶひい……！」

(優しい……！)

(ホント、この子には甘いわねえ……)

こうして、小太郎はミーティアを五車に連れ帰る事になった。

ナディアやクラクルという前例はあったものの、その時でさえアサギは魔族を五車に迎え入れなければならない現状を下の者にどう説明すべきか頭を悩ませた。

今回は流石に小言の一つでも飛んできそうなものだが、そのような事は一切なかった。

静流の説明が巧かったわけではなく、小太郎が説得したわけでもなく、涙と鼻水でべちよべちよになったミーティアの姿に何の文句も言えず、憐れみを抱いたからであったとき。

“花の静流”と“真面目夢魔”のその後

「報告は以上になります」

「御苦労だったわね。クロワダミに関しては既に山本長官へ連絡を入れてある。あの人のことだからもう動いているでしょうね」

「……………最近、こうした企業の暗躍も目立ってきましたね」

「仕方ないわ。リスクを考えなければ魔界の技術や生物は新発見の宝庫。米連ですら欲しがっているもの。業績が悪化している企業にしてみれば、どうあっても手に入れたいでしょうしね」

「少しは周りの迷惑を考えて欲しいんだけど」

「それは全く同感」

クロワダミの一件から開けて翌日。五車学園の校長室で報告を終えた静流と報告を受けたアサギは顔を突き合わせて同時に溜め息を付いた。

今、二人は馴染みの対魔忍装束ではなく、それ以上に馴染んだ教師としてのスーツ姿であった。

溜息も吐こうというものだ。

魔界技術に手を出す企業、ヤクザといった大手を振って日の下を歩けない輩は年々増加の一途を辿っている。

長年、不干渉を保ってきた人界と魔界であるが、それ以前から互いの技術や資源を巡って跋扈している勢力は存在していたものの、ギリギリのところでは均衡は保っていた。

それがブラックが率いるノマドによる二つの世界の首脳会談襲撃によつて、不干渉という均衡は脆くも崩れ去った。後は坂を転がり落ちるが如く、時代は混沌と凋落の一途を辿っている。

その最前線で戦う静流とアサギ、様々な欲望と弱さを目の当たりにしてきた。

魔族の反吐が出るような欲望も、人の弱さから生じる矜持を忘れた

愚行も。

悲劇と惨劇を飽きることなく繰り返す世界と命に守る価値はあるのか、と自問自答したのは一度や二度ではない。常に自身の問いかけてしまっていると言っても過言ではない。

だが、その度に出す答えは同じ。賢愚と正邪には何の関係もない。世界も人々も自ら堕ちていこうとも、己が如何なる末路を辿ろうとも、世界を善くするべく戦わねばならない、とちっぽけな矜持で胸を張る。

アサギの口にする対魔忍の誇りは、他者よりも優れた智慧や能力に対するものではなく、在り方そのものに対するものであり、静流はそれを正しく認識している理解者の一人。

だからこそ、こうして気軽に愚痴を零せる間柄でもあった。

静流は明確にアサギ閥に属している訳ではないが、心情も信条も共有する同士。目上であろうが目下であろうが気兼ねなく忌憚のない意見を口にしよう。

静流はアサギの苦悩や立場の重さを重々承知し、アサギもまた静流の立ち回りや処世術に理解を示している。

「それで、どうだったかしら？」

「……どう、と言うと？」

「ふうま 小太郎と任務を共にして」

唐突で心当たりのない質問に静流は思わず聞き返したが、喜色満面のアサギにああと納得した。

少なくとも静流の目には、これまでアサギが見せてきたふうま 小太郎に対する評価や恩情、寵愛はいくら後見人とは言え、校長や頭領の立場でもあることを考えれば度が過ぎていた。

小太郎へ向けるそれは完全に身内——さくらや紫、九郎へと向けるものと何ら大差はなく、大した実績もない学生に向けてしまえば余計な軋轢を生みかねないと危惧していたほどだ。

しかし、昨夜の一件で考えを改めた。

戦闘能力、という点においては確かに周囲に劣っているのは確かであるが、それ以上の能力を持っているのは事実。それだけの寵愛や期待を向けても何ら可笑しくない。

アサギや九郎は勿論の事、静流も待ち望んでいた人材。

指揮は言うに及ばない。家の当主や組織の長としての力量は目にしていないが、組織や他者、周囲へ配慮した立ち回りからは十分な可能性を感じ取れた。

「指揮能力は十分。知識を吸収するだけでなく実践・応用できる機転も思考に瞬発力もある。政治や社会の流れや動きも把握していますし、アレなら魑魅魍魎の跋扈する政府や御当主集団に遅れを取らないでしようね。正直、アサギさんよりも色々向いているんじゃないかしら？」

「そうでしょう？」

「ただ、秘密主義が過ぎるのはマイナス。何時か、いざこざや軋轢を生みそうではありますね」

(……………そういえば、あの子が秘密主義だなんて感じたのは何故？ マスクで顔を隠して、夢魔の子達の前で名前を明かそうとしなかったから？ 何か忘れているような……………?)

「否定は出来ないわね。尤も、その辺りは当人も自覚しているのでしようし、だからこそ色々な子で周りを固めているのでしようね」

率直に今回の任務協力で覚えた所感を素直に口にする。

その過程で所感に至った出来事を思い出そうとしたのが、記憶が抜けている。昨日の今日の出来事を忘れるなど有り得ない話。静流は違和感こそ覚えたものの、自身にとって都合の良い形で解釈した。

アサギは非礼ですらある発言をした静流を咎めず、寧ろニッコニコの笑顔である。

組んだ手の上に顎を乗せ、うんうんと頷いている。誰が見てもご機嫌であると分かる。どうやら自身が貶されるよりも、小太郎が評価される方が嬉しいらしい。

(これは、そういうことよね……こういう腹芸、出来ない人だと思っただけだ)

その様子に、静流は逆に困ってしまった。

この寵愛振りには次期隊長候補と目されている紫以上。これでは言葉にせずとも察せてしまう。周囲の評価は兎も角、アサギ自身は小太郎を次の隊長として考えている、と。

確かに考えは分からなくもない。

紫の統率力は目を見張るものがある。彼女が一喝すれば、どのような対魔忍であれ、ピシヤリと背筋を伸ばして指示に従う。

反面、作戦立案や腹芸は苦手の一言。生来の生真面目さのせいだろう。何事にも真っ直ぐなのは良い事ではあるが、その分だけ柔軟さに欠けているのは否めない。

正に典型的な対魔忍だ。そのような様では、政治面や搦手で遅れを取る可能性が極めて高い。

その点、小太郎ならば対魔忍に欠けている部分を埋められる。

隊長でなくとも、参謀や腹心として取り立てるだけでも、相対しなければ問題を解決できるだろう。

ただ、反発も凄まじいに違いはない。反乱を起こした男の息子など、善からぬ想像を掻き立てるには十分な肩書。権力にしがみ付きたい老人達だけでなく、弾正の反乱を知る者も当然、納得しまし。

恐らくは、独立遊撃部隊を組織したのは、そうした反発を予期してのもの。

確かな実績と貢献を積み重ねることで、文句すら出せないようにするつもりなのだろう。奇を衒った策ではないものの、堅実な正道ではある。

そして、アサギは言葉にこそしていないが、言外に貴女はどうする、と問い掛けても来てもいた。

敢えて己の内心や事情を察せる材料を揃えて並べることで、相手に問うのは腹芸の常套手段。

腹芸など出来る人物ではなかったのだが、小太郎と共にあったから、アサギも成長しているようだった。

「——まあ、いいわ。これからは組ませる事も多くなるでしょうから、色々と考えて置いてちょうだい」

「……………了解しました。失礼します」

返答に窮していた静流を見ると一層笑みを深め、アサギは退室を促す。

静流はそれ以上何も言う事は出来ず、促されるままに校長室を後にした。

「はあ~~~~~」

（……………面倒な事になったわねえ）

部屋を出て、扉を閉めて一呼吸置いた瞬間、静流はクソデカ溜め息を吐いた。

どう考えても面倒な事になっている。

アサギの問い掛けは、静流への質問と言うよりも恫喝に等しいものだ。

あれだけ目を掛けている相手についての問い。暗に、小太郎の下に付け、或いは彼の肩を持って、と言っているようなもの。

アサギの狙いとしては、代替わりまでに小太郎へと人と力を集約するつもりだろう。もし、彼女の引退までに集約が不十分であれば間に紫を挟む手段もある。とどのつまり、集約までは決定事項。

これまで下らない権力闘争をのらりくらりと躲してきていた静流であつたが、そうもいかなかった。

何せ、頭領直々の恫喝だ。返答を何時までも先延ばししていれば、日和見主義、蝙蝠扱いされかねない。

尤も、アサギは其処で排除のような短絡的な手段には出ないだろう。五車の外での任務を徐々に増やしていき、権力闘争とは無縁のと

ころに配置と比較的穏やかなところに落ち着かせるに違いない。

(それはそれで悪くないのだけど、そうになると色々な後ろ盾がねえ。任務に際して受けられる支援が少なくなつて、非常事態には対応が遅くなる。私みたいな単独潜入には死活問題)

想定していなかった問題に頭を痛めながらも、静流は職員室へと戻っていく。

廊下を進めば女子生徒や女性教師が尊敬や羨望の眼差しを向け、男子生徒や男性教師は胸や尻に欲望の眼差しを向けてくる。しかし、静流の頭の中にあるのはアサギの問い掛けだけ。

普段であれば、女にはにこやかに微笑み返し、男には挑発するような眼差しで逆に牽制するのだが、そのような余裕は一切ない。

何せ、己の進退がかかる選択を迫られている。

ただ、アサギとしては優しさではあるのも事実。選択を与えられるいる上に、望む選択ではなかったとしても遠ざけるだけで消そうとも見捨てようともしない。次世代の土台作りをしている最中に、この行いは恩情以外の何ものでもない。

(ふうま君、か………悪くないかもしれないわね。年は若いけど、色々弁えてるし、自分にしかない武器も理解してる)

(災禍さんに、天音さんが脇を固め、ゆきかぜちゃん達を筆頭に次世代の面子も揃ってきている。自分に反抗的というか、意見できる井川君や紫璃ちゃんのような子達も側に置くのに躊躇もない)

(龍造寺君みたいな一般出の子どころか、魔界の踊り子も連れてきちゃうし、人材に関しては粒揃いの上に出身や種族も問わない。外の事なんて気にしてないような顔しておいて、対外的に自分の下に入り易くて働き易い職場アピールしてるのよね)

(その上、ミーティアちゃんみたいな外部戦力にも有能であるか自分にとって有用であれば、あの対応………正直、魅力的だわ)

職員室の自身の机に戻ってきた静流は椅子に座ったものの、仕事に手が付かない。

やることは山ほどある。次の任務の情報収集だけでなく、自分が受け持つ授業の進捗状況から内容を決めなければならず、生徒一人ひとりの評価を下して、更には対魔忍としての訓練も施していかなければならない。

しかし、仕事など手につく筈もない。

選択を迫られている以上、決断は早い方が良い。兵は神速を貴ぶと言うが、何事にも共通する事柄でもある。

情報収集は重要であるが、不透明なところがあるからと二の足を踏んでいれば機を逃す。かと言って、闇雲に進んでも痛い目を見るのは明らか。この辺りの危機管理を見極めて動くのが一流である。

そして、静流の直感では今が動くか動かないかの分水嶺。

余りに遅きに失すれば、ふうま内部で重要なポジションに付けなくなってしまう。

一生涯を単独潜入要員として戦うのは構わない。個人で動くのは性に合っているし、そもそも権力闘争などという下らない柵が嫌で、何処の隅にも属していないのだから。

問題なのはその後。現段階で後進を育てていくポジションに付かなければ、ふうま一門どころか対魔忍という組織自体が積みかねないのだ。

ただ、付こうとしているのは、あのふうま。

小太郎個人は能力的にも情情的にも下に付くには申し分ない相手であると認めている。もし仮に、弱い部分があるのなら自分が補えばいいだけの話。

女性関係どころか男性関係すら持っている噂のある人物ではあるが、ミーティアに見せた人心掌握術もある。痴情の纏れであつさり殺されるような不様は晒すまい。

だが、弾正のやらかしが大きすぎるのである。小太郎個人に非はなくとも、彼の血を引いているというだけで評価は地に落ちるところか地獄の底からスタートになるのだ。

思いも寄らぬ進退問題に直面し、うんうんと唸る彼女に職員室の教師達は奇異の視線を向けていたが、当人は全く気付いていない。

その時、静流はふと視線を落とした机の上に、見知らぬ封筒があった。

問題を一時棚上げし、携わっている任務の重要情報かと封筒を開けて中を確認した瞬間、静流はぶちんと何かがキレる音が自分の中で響き渡ったのを自覚し、選択は決まった。

（うん、決めた、もう決めたわ、決めちゃった。考えてみれば彼の所以上で優良物件なんて他にない訳だし。こういうこともなくなるでしょうしねえ。纏めて後悔させてやるわよ）

最後の一押しとなったのは、封筒の中に入っていた見合い写真であつた。

静流もそれなりにいい年。まだ二十も前半だが、世間一般では結婚するには適齢期。死ぬ可能性が高い対魔忍では遅い方ですらある。

彼女の能力を高く評価する家は世話を焼く振りをして、家の後継者と結婚させることで静流を引き入れようとしているのだ。

そうした見合い話が来る度、丁重にお断りしているのだが、年を重ねるごとに一方的な縁談は増すばかり。酷い時には行かず後家などと揶揄して怒りを煽り、引き摺り込もうとする輩もいる。断つたら断つたらで、何なら儂の妾にならんかと世迷言を口にする狒々爺もいる始末。

もう、面倒だ。本音は『余計なお世話よ！ アンタの所の低能男なんて興味関心御座いません！ それにアンタみたいな耄碌したエロ爺の妾になるわけないでしょう!? さっさと死になさいよバーカ!!』とビンタと共に言つてやりたい。

それが出来ればどれだけ気分爽快か。だが悲しいかな、家の力関係で平身低頭するしかないのである。

しかし、ふうまの下に入ればその限りではない。

無論、ビンタと暴言は論外であるものの、静流自身が馬鹿な相手を

尊重した丁重なお断りをする必要はなくなる。

家臣が結婚するには、当主への報告と承認を得るのは当たり前。余所の家から縁談話が来ても、当人に直接ではなく、まずは当主を通すのが筋。こうした気苦労と腹立たしさは二度と味合わなくて済む。

静流にしてみれば、それだけで十分すぎるほど魅力的な職場。

加えて、情報収集の重要性や単独潜入の難しさをよくよく理解した小太郎である。

家や部隊と全く関係のない任務に当たったとしても手厚いサポートを受けられるであろうし、万が一失敗した場合でも救出に動いてくれる可能性も高い。単独潜入の保険としては破格な上に、心理的な負担も軽くなる。選ばない理由などないのだ。

ぐしやりと豚面の次期当主候補が映った見合い写真を握り潰して黒い笑みで低く笑う静流の姿に、授業の質問に来ていた生徒は即座に踵を返して退室し、教師陣も諫めることすら忘れて距離を置いた。

後日、静流は正式にふうまの傘下に参入することになるが、それはまた別の話。

そして、迫り来る苦労と思いも寄らぬ幸福に、悲哀と歓喜の絶叫を上げることにもなるが、更に別の話である。

一方その頃。小太郎宅では――

「あー……その、落ち着いた？」

「は、はい……大変お見苦しいところ見せて、申し訳ないですう……」

畳張りの客間で机を間に挟み、小太郎とミーティアが向かい合っていた。

昨夜の出来事、小動物の愚行と横暴、そして煽りによって完全に心を壊されてしまったミーティアは一晩経つてようやく本来の己を取り戻せた様子。

涙や鼻水、涎で汚れた服は今は洗濯中。天音の用意した灰色のスウェットを着ている。裾から覗く白い生足や、手首が隠れる萌え袖、少しだけ除く胸元。流石はふうま宗家執事、シンプルながらも完璧な部屋着コーデである。

泣き喚くミーティアを災禍と天音、永久に任せ、その間に小太郎は桐生の所へ向かって治療を受けた。

自身の弱さを自覚している小太郎は四肢の欠損すらも当たり前のもものと見越しており、いくつかのスペアを作成、保管させてある。

幸いなことに、無形によって切断された手首の断面は鮮やかな一言であり、スペアと繋ぐに何ら問題はなかった。但し、麻酔無しでの接合手術の選択は桐生をドン引きさせるには十分であった。

狂気の沙汰をスマホ片手に鼻歌交じりで耐え抜き、家に帰ってきたのは30分ほど前。本来であれば、此処から一、二週間は桐生直々の経過観察とりハビリのために入院するのだが、場合が場合であったためにトンボ返りだ。

現在は机の下で繋がった右手の指を親指から小指までを順番に動かしていた。

繋がればかりで既に動かせる桐生の技術力に驚くべきか。動かすたびに奔る激痛や再び傷口が開く恐れを僅かにも表さない小太郎に驚くべきか。

「別に構わないよ、そういう時もあるから——で、早速、今後の話なんだが」

「は、はい！ 淫魔王についての情報に関する依頼ですね！」

「と思ったんだが……悪いんだが、あの話、見直しを掛けさせて貰いた

くてな」

「え……………あ、あの、それはもしかして……………私も殺処、分に……………」

小太郎の切り出した言葉にミーティアは居住まいを正した。

日本の文化も調べているのか、和風の部屋に合わせて慣れない正座まで見せている。

しかし、小太郎が次に紡いだ言葉は、見直しというミーティアにとって予想外の一言。そして、絶望のどん底に叩き落すには十分すぎる威力を秘めていた。

考えてみれば当然。昨夜、アレだけの醜態を晒したのだ。考えを改めるには十分だろう。

明らかに格下のリリムとミナサキに翻弄された挙句、溜め込んでいた感情を爆発させて泣き喚く。

小太郎でなくとも今後の付き合いに不安を覚えるだろうし、ミーティアであつても同じ光景を目の当たりにすれば同じ選択をする。

ミーティアの顔から血の気がサーツと引いていく。

此処は対魔忍の本拠地。そして目の前にいるのは優秀な夢魔であるミーティアも認める夢魔という種そのものの天敵。

よしんば天敵から逃れられたとしても、並み居る対魔忍をどう切り抜けるというのか。どう考えても逃げられない。詰みである。

「いや、そうじゃなくてな……………まあ、弱つてるところにこんな提案持ち掛けるなんざ邪推されても仕方ないんだが、ウチ来ない?」

「え……………えっ? それは、どういう……………」

「オレ、家の当主だから。外部協力者じゃなくて、正式にオレの部下にならないかつて話。それが嫌なら、預かつてる部隊の一員でもいいんだが……………」

「……………えっ、え……………っ?!?!?!」

予想だにしていなかったまさかまさかの逆転サヨナラ満塁ホームランに、ミーティアは驚きの声を上げる。

あれだけの醜態を見せたにも拘わらずに、この提案。驚きようも無理はない。

現場レベルで魔族と協力することはあっても、基本的に対魔忍は魔族とは敵対関係。

ふうまがどれほどの家系であるかは分からないが、かなり危険な橋を渡ろうとしていることだけは分かる。

敵対勢力を自らの家に迎え入れるなど、内患と内紛の火種を自ら抱えるようなもの。どう考えても火傷は負う、下手を打てば焼死は免れない。

しかし、小太郎にしてみれば当然の選択であった。

能力は申し分なし、人格など諸手を上げて称賛できる。これを逃す手はない。

だから本心を晒して提案している。リスクに見合う——否、超えるだけのリターンを期待できると伝え、本気の提案であると示していた。

正式な部下とするのなら要らぬ邪推は今後の関係性に歪みを生み兼ねない。だからこそ、打算こそあれども虚偽もなく、拒絶されても仕方がないで済ませるつもりであった。

「……お、おお」

「対魔忍を信用できないならオレの部下を護衛に付ける。オレを信用できないなら外部協力者のままでも構わないよ。そういう魔族は五車にもいるし、何ならそいつらと一緒に生活できるように口添えしようか」

「だ————うっ!!!」

「そっかあ、そこまでかあ……そこまでだったかあ。ほんと、頑張ったんだな。よく頑張ったよ、お前」

「ぜ、ぜぜ、ぜび、お願、い、しま、ずっ！——生、づい、でい、ぎま、ずうっ!!!」

再び、落ち着いたはずのミーティアの涙腺が崩壊する。

醜態を晒せるだけ晒しているというのに恩情のみならず、この破格の好待遇。

今までの職場で涼しい顔で働いていたものの、内心はぶっ壊れる寸前まで追い詰められていたミーティアにとっては一も二もなく飛び付くには十分過ぎた。

何よりも小太郎が示す理解が、決断の要因としては最も大きい。

この人は私のこと分かってくれてる！ という思いだけで、これまでの倍、いや三倍は働けそうですらあった。

弱り切ったところに甘い誘惑。完全にヤクザの手口なのだが、今回ばかりは小太郎も狙ってやっているわけではなく、ミーティアとしてもあんな職場に帰りたくもない。

仮にこれから顔を合わせることになる仲間がこれまでの仲間と同質だったとしても、頂点である小太郎が理解を示しているだけで72時間ぶっ通しで働けてしまうだろう。

人であれ、妖魔であれ、職というものは報酬ややりがいではなく、共に働く仲間との関係性が重要ということだろう。

「あ、契約と仕事内容、それから報酬の話ですけどお」

「うーん、切り替えが速い。速いなあ……いいよお、凄くいいよお、そういうのお」

「凄く大事な話ですから♡」

今の今まで号泣していたというのに、スンと涙も鼻水も引つ込めたミーティアは真面目な話を切り出した。

その変わりように小太郎は思わずにつこり。一生付いていきますと口にしながら恩は恩、仕事は仕事と割り切る姿に評価は鰻登りで高まっていく。

それはそれ、これはこれ。そうした精神を持っていなければ、やっていけない業界だ。

恩や情でミスし、足を引っ張られては堪ったものではない。その点、ミーティアは恩や情に理解を示しつつも、自陣営の利益や仕事を

完遂してくる確信できる精神性だ。同僚や部下としてこれほど頼もしく、好ましい者はいまい。

「で、報酬はこんなもんでどうでしょう？」

「ヒエツ……こ、こんなにな？」

「ウチの中じゃ安い方だけどな。正直、能力的に替えが利かない連中はもつと高い。その分、危険手当はキツチリ付けるし、成果を毎月査定して昇給する。基本減給はねえかなあ、ミスなんて当たり前だし。ウチで言うやらかしは即追放レベルの事くらいだ」

「は、はわわ」

「後は住む場所かー。暫くはオレん家で面倒見るけど、それでいい？」

あ、福利厚生も出来るだけやるから安心してね？ 金の管理は自分でやるにしても人界のシステムにはちよつと疎いか。災禍か天音に教えるように言つとくから勉強してくれ」

「はわ……」

目くるめく夢の職場に、ミーティアは軽く逝きかけていた。

夢魔の職場など基本総てが自己責任。報酬のいくらかを上納する形態であり、ミーティアほどの優秀な夢魔でも自由にできる金は少ない。

小太郎が口を開く度に、これまでとの違いに眩暈すら覚えるほどである。

しかし、そこは腹黒を自認するミーティア。まだ、安心はしていない。

（お、落ち着いて、落ち着くのミーティア……！ まだ、まだ安心は出来ない。小太郎さんの事だから、いざという時には何処までも冷酷に対処する……！ 私は夢魔だから切り捨てられる可能性を捨てちゃダメ……！）

自分でもかなり無理をして思い込もうとするほど小太郎へと気持

ちは傾いているのだが、安堵はできない。

いま得られる安心感に胡座をかいて何もしないのは馬鹿のすること、と教訓を得ているミーティアは更なる安全を買うために、一つの決心をしていた。

(でも私に差し出せるものは少ない。いざという時のために此処は………そ、そういう関係になっちゃうのが一番、だよね！)

小太郎はミーティアを切り捨てるつもりは更々ない。

本当の手足を切り捨てるのに躊躇のない男ではあるが、どれだけ人を疑おうとも己の血肉や手足に等しい身内を切り捨てるのは常に最後の手段。ギリギリのところまで情けは示す。

もし、小太郎が身内を切り捨てるのであれば、最低限のライン——無辜の民を意図して巻き込むような真似をした時だけだろう。

しかし、今の所、小太郎はそのような姿を見せていないし、ミーティアには知りようもない事実。

彼女が更なる安全を買うために、何らかの手段を講じようとするのは自然な流れだ。

そして、元手の存在しないミーティアが講じられる手段など限られており、身体を使って何とかするしかない以上、そういう関係——

——即ち、男女関係を結ぶのが、最も手早い手段であった。

思考に夢魔として、女としての欲望が漏れ出している感は否めないが、その実、对小太郎への対応としては実に正しいのは彼女が有能だったからなのか。はたまた——

(も、問題は……夢なら兎も角、私が現実じゃ初めてってこと………いい、いけるいける！ 夢魔の誇りにかけて！ 小太郎さんをメロメロにしちゃうんだから………！ あっ、いやでも、メロメロになっちゃうのもお………♡)

ミーティアの思考は、盛大なフラグであったのか。それを知ること

になるのは、彼女以外には存在していない。

何はともあれ、真面目夢魔ミーティア、ふうま一門への加入、決定——！

新たな仲間！　そして新たな苦労の気配……！

魔界にある小さな領地。

その端には小高い丘があり、豪華な屋敷がある。屋敷の主はアンブローズという夢魔であり、自ら夢魔の手勢を率いる首領である。

「……………」

魔界には貴族と呼ばれる支配階級が多く存在する。

彼等は領地と統治し、魔界の根底にある弱肉強食の理に従って民から搾取を繰り返す。

無論、民も黙って絞られるばかりではない。領主の寝首を搔こうと反乱の準備を進める者も少なくはない。

反乱と毎年のように勃発し、その度に鎮圧される。極稀に反乱に成功する場合もあるが、学のない輩が力だけでたまさか成し遂げただけ。大抵は周囲の貴族によって言葉巧みに領地ごと取り込まれてしまい、悪戯に命が消費されるばかりで支配の脱却からは酷く遠い。

この領地も、そうした間隙を狙ってアンブローズが力と知恵によって手に入れたものだ。

彼は生まれながらの貴族ではない。夢魔の中で特別な血筋というわけではなく、平凡な生まれ。それでもなお持ち前の前向きさと面倒見の良さ、数多の研鑽によって今の立場を手に入れた。

成り上がりと揶揄する者もいるが、大半は嫉妬によるものであり、残りは生まれた時点で貴族であった者達からのやつかみ。決して正当な評価ではなく、弱肉強食の理屈に添うのであれば、彼がそれに見合うだけの力を持っていただけの事。

一大勢力などとはとても言えないものの、夢魔独自の勢力を纏め上げ、独立独歩を保っている時点で相応の器量があったのだろう。

何よりも下からの人気は高く、領民には反乱の気配が一切ない。

常に民の反乱へと気を配らねばならない魔界にしてみれば、ちよつとした異常地帯ですらあつた。

自らの小さな領地を見渡せるテラスに、ワインの注がれたグラスを片手に立ったアンブローズは一つ溜め息を吐いた。

常に己を磨き、強く、美しくなることに余念がなく、虎視眈々と領地の拡大を狙う切れ者には似つかわしくない。恐らく、彼の部下が見れば、何があつたのですかと腰を抜かすに違いない。

無論、彼にとて悩みはある。表に出さず、部下に情けない姿を見せていないだけに過ぎない。

目下、彼のもつとも重い悩みは――

(ミーティアが定期連絡会に現れなかった。しかも、何の断りもない無断欠席。こんなことは、一度もなかった……)

――連絡のない部下についてであつた。

彼の腹心であるミレイユが、落ちこぼれのリリムを連れ戻すようにミーティアに頼み、人界へと渡つたとは聞いているが、その後は連絡がないとのこと。

アンブローズの領地には他を圧倒する特産物もなく、名産品もない。故に、人魔を問わずに依頼で夢を見せることで得た金銭や物品を元手に領地経営や交易を行っている。雇われ傭兵ならぬ雇われ夢魔が主な収入源。

こうした事態は珍しくない。

正直なところ、魔界において夢魔は弱小種族。夢に引き摺り込めねば勝機は無きに等しく、未熟者が帰還できぬまま闇に消えるなどよくある話だ。

しかし、今回ばかりは話が違う。

アンブローズはミーティアに目をかけていた。或る意味で、腹心であるミレイユ以上に、だ。

生来の生真面目さはアンブローズには理解し難いものであつたが、直向きな努力家という点においては共感する部分があり、また努力を

他人に見せようとしないう姿勢は若い頃の己の姿と重なった。

夢魔——と言うよりも魔族全体の傾向として、油断慢心が過ぎる。その点、ミーティアは己の実力を正しく認識しており、それだけでも目にかけるに値する存在であった。

ゆくゆくは、ミレイユと同じ地位にまで取り立てて、一派を牽引する存在になって貰おうと考えていた。ただ、そんな考えは一切伝えていなかったのも事実。

（参ったわねえ、下手するともうこれ帰って来ないわね。ウチには我の強い困ったちゃんが多いから、素直で優秀なミーティアを色々と便利に使わせて貰っていたけど、限界だったようね………私も大概愚かね）

優秀な部下にかつての己を重ねていたアンブローズにとって、まだ確定していないもののミーティアの離反は予定外の事柄。

ただ、それも無理はない。

アンブローズは自身でも認識しているが真面目ではない。義に厚く、通すべき筋を認識してこそいるものの、全てを背負い込むような真似はせず、苛立ちや理不尽に出会った時には全てを放り出して適度にガス抜きする癖が身についている。

対し、ミーティアは真面目過ぎる性格故に、そのような真似は一切出来ていなかった。やらなければならぬことに忙殺され、仲間への不満を漏らすことすら裏切りとして戒めていたのだ。

心の何処かで、似た者同士だから心配ないでしょう、と思い込みがあった。そうした齟齬の果てが、この結果。

何もアンブローズだけに非があるわけではない。ミーティアにも非はある。

大きすぎる期待から目を曇らせてしまうのは悪しき習性であるが、辛いものを辛いと言えないこともまた悪しき習性である。

環境如何に関わらず、『嫌だ』の一言を言わなかったばかりに辿り着くところまで辿り着いてしまう事例は少なくない。

期待にせよ、いじめにせよ同じ事。例え無意味だと思つたとしても言い続けなければならぬことはある。でなければ、永遠に相手に気持ちは伝わらないのだ。

しかし、アンブローズは思考の中でさえミーティアを責めることはせず、全ては己の不徳と行動と言葉の全てを顧みる。

(最悪は離反、そうでなくとも捕縛されている前提で考えるにしても、ミレイユにさえ任せられないわねえ。仕方ないけれど、私が直接動くしかないようね)

アンブローズはふうと溜息を漏らす。

まだミーティアがどのような状況に置かれているか定かではなかったが、いずれにせよ部下には任せられない案件である。

離反にせよ、捕縛にせよ、仲間内からミーティアへの叱責は避けられない。前者も後者も、過ぎた期待から発生した事態だろうに、それではマズい。ただでさえ離れている心が更に離れるからだ。

どちらの場合でも、必要なのは彼女を慮つた優しさとアンブローズの謝罪しかない。それさえ手遅れかもしれないのに夢魔の誇りを説こうが、恥の心を刺激しようとも意味がないのだ。

ただ、アンブローズはそうした心遣いが部下には出来ないと断じていた。

プライドばかりが無駄に高く、ミレイユもプライドに見合う実力はあるものの何処か間が抜けている。とてもではないが懐柔の仕事など任せれないし、誰も承諾しないだろう。

(ミレイユは此方側に置いていくとして、名目上は人界側の拠点と他勢力の視察。淫魔王の動きも気になるしね。とは言え、私もそういうのが得意なわけではないし目立つちゃうし、外部の情報屋を使ってこつこつやるしかないわね。ミーティア、どういう状況にせよ、無事でないさい。せめて、お話ぐらいはさせてちょうだい)

こうして、一派の首魁にして夢魔の傾奇者は人界へと向かう。
姿を消したミーティア、そして対魔忍勢力との邂逅は、もう少し先
の話

その日、五車学園の地下にある独立遊撃部隊の作戦本部には、部隊
の面々及びふうま宗家のメンバーが揃っていた。

前回、この面々が一堂に会したのは鬼崎 きらら、獅子神 自斎の
入隊希望とアサギによる受理に端を発する面接大会開催決定通知の
時。

今回も難題に晒され、さぞや重苦しい空気に包まれている——
かに思われたが、そのようなことはなかった。寧ろ、和やかな雰囲気
ですらある。

幾人かの表情は険しかったものの、殆どの面々は和気藹々。
執事として立つ時は冷ややかな鉄面皮を崩さない天音も、今は頬を
緩めていた。

どういう訳か、作戦本部の円卓の上には、災禍、天音、永久が腕に
よりをかけた料理の数々が並んでいるではないか。

「えー、独立遊撃部隊一次面接終了慰労会と新人歓迎会を始める前に、
何か意見のある奴は言いたいこと言っていぞ」

「はいー、はいはーい——！」

それぞれが好き放題に口を開いている中、小太郎は手を叩いて注目

を集め、今日の趣旨を口にした。

彼の言葉通りであるのなら、確かに目出度い。

まだ半ばではあるが、千人規模の入隊希望者の一次振るい落としが終わったのだ。皆の雰囲気も納得である。

その上、新人の歓迎会と来たものだ。慰労会と歓迎会を一緒にしてしまい、新人には少々申し訳ないであろうが二重に目出度いのは事実。

そんな中、元気良く手を挙げたのはきららだった。

ふんすつ、と気合の入った彼女であったが、周囲の反応は止めておけと言わんばかりに首を振っている。

「予想しちゃいるが良いぞ。言ってみろ」

「アンタね、魔族を引き入れるなんて何考えてんのよ！」

「鏡見てこいよ」

「……きららあ、私やお前は半分魔族だぞお」

「は、半分だけでしょ！ それに半分は対魔忍だから！ ノーカン！

セーフ！ はい論破ー！」

「論破できてねーよ。今更魔族だ何だと気にしてどうすんだ」

「うぐぐつ、うぐううつ」

気合十分に意見したきららであったが、小太郎の一言と紅の援護によって敢えなく撃沈——したかに思われたが、最後の抵抗を見せる。

子供のような理屈と共に両手を水平に開くが、小太郎は魔も半魔も大差はないと切つて捨てられ、大艦巨砲主義（何処をとは言わないが）の下に設計された超巨大（何がとは言わないが）戦艦きらら轟沈す。

何もきららとて子供じみた嫌がらせをしたかった訳ではない。

今や、彼女が小太郎に向ける信頼は本物であり、向ける心配も掛値のないものだ。寧ろ、好意からの発言だった。

対魔忍内部において、魔族に対する反応はまちまちの人それぞれ。露骨に嫌悪感を示す者もいれば、特段の感情を持たない者もいる。

だが根本的に敵対しているだけあって、本拠に引き入れること自体を快く思わない者の方が圧倒的に多い。

(そうなたら立場の弱いふうまは困っちゃうわよね、他の人は何も言つてないみたいだし……………此処は私がしつかりしないと！)

(ああ~~~~、きらら先輩が自分から小太兄の女の子になりについてるう~~~~)

(ゆきかぜ、その顔は…………)

(ゆきかぜちゃん、今日もガン決まつてるわね…………)

と、そんな姉さん女房やら内助の功的な心持ちで嫌われ役を買って出たのであった。なお、自分や紅が半分魔族であることは脳内から吹っ飛んでいた模様。

そんな甲斐甲斐しくも愛らしい姿にゆきかぜは自らの満願成就が近づいているのを確信して涎を垂らしそうな表情で恍惚とし、二凜コンビは可愛い妹分が次元違いの生物になりかけている様にドン引きしていた。

他の皆が何も言わなかったのは、考え付かなかった訳でも言えなかった訳でもない。単に、小太郎がやることだからなあ、と結論していただけだ。

やること成すこと計算尽く。敵も味方も掌の上で転がし回す。不測の事態が起きようと、お出しされてる言葉は “こんなこともあるのかと！” か、“この状況、逆に利用できるな！” である。心配のしようがない。

絶大な信頼と言えば聞こえはいいが、半ば諦めにも似た感情が混じっているのはさもありなん。味方だからいいものの、やりすぎていて苦言を呈したいのだ。

加えて言えば、此処に来てナディアとクラクルを五車に招いた効果が発揮され始めているのも大きい。

二人とも初めの内は危険と認識されていたものの、近頃になって認識が緩和されてきている。

人界の政治を学び、応用する知識を身に着ける傍ら稲毛屋で働くナディアは御近所のアイドルとして。

心願寺邸を寢床に五車で勝手気ままに生活するクラクルは子供達の人気者として。

それぞれの位地を獲得してきているからだ。

若い未婚の男はナディアに熱を上げて稲毛屋に通い詰め、子供の相手をしてくれるとクラクルは主婦層から支持を得ていた。

そうなつてくると周りも対象に興味を持ち、魔族らしからぬ性格に驚き、これまでの認識を改めると好循環を繰り返していく。

ナディアは生まれや立場は魔界の支配階級であるが、性格は純朴で愛嬌がある性格。

クラクルは野生動物そのものの気質であるが、人の心の機微やルールが分からない訳でもない。

正直な所この二人、そこいらの対魔忍などよりもまともな人格をしている。ナディアなど、其処に倫理まで追加される。これで多くの人々が認めない筈がないだろう。

この好循環のお陰で、魔族を迎え入れるハードルは下がってきていると言える。後は、ミーティア自身の努力次第である。

「魔族を味方に引き入れるのは構いませんがね。それこそ今更だ」

「……………」

きららに続いて口を開いたのは、小太郎に当たりの強い日影であった。

しかし、彼の視線は一瞬、小太郎ではなく何故か永久へと向けられていた。その視線に雅臣は珍しく顔を顰め、咎めるように日影を片肘で突く。

一体、二人の行動にどんな意味が込められていたのかは定かではないが、永久は眩暈を覚えてしまいそうな優しさと甘さに、寂寞とした苦笑を刻む。

「問題なのは裏切らない保証がないって事でしょ」

「そうそれ！ 私が言いたかったのそれ！」

「うるせえな……」

「かはは！ 嬢ちゃんや日影の言いたいことは分かるが————いやー、色んな意見が出る、出せるってのはいいもんだ！」

日影も魔族を引き入れることへ嫌悪があるわけではない。ただ、言わなければならぬ事を口にしてはいるだけだ。

事実、彼の表情や口調に嫌悪の色も響きもなく、種族云々以前に、ミーティア個人への疑いのみが浮かんでいる。

井河一門からふうま一門へと鞍替えし、権力闘争に巻き込まれ、自身を騙そうとする輩に絡まれてきた日影もまた、小太郎ほどでないにせよ嫌でも他人を疑ってしまう気質。また自らの属する家の一員として、家を守らねばならない使命感もあった。

其処にきらは喜び勇んで飛び乗ってきた。相性が悪い二人であるが、息が合わない訳ではないらしい。

そんな二人の様子に、啓治は笑みを浮かべて職場の良い雰囲気を感じていた。

彼の魔族に対する態度は常にフラット。人も魔もそれぞれに利点と欠点があるのを認めた上で、補い合うことも高め合うことも出来ると思っているからだろう。不満も文句もない、と言葉にしないまま周囲に伝えている。

「問題ない」

「何を根拠にそんな……」

「問題ない」

「日影、もういいでしょ。若が問題ないって言って問題になったことなかったし。それにほら、ウチには裏切りを許さないのがあるだろう？」

小太郎が敢えて口にした保証に納得できない日影はなおも追求し

ようとしていたのだが、悟の言葉に遮られてしまう。

こうした時、小太郎に崇拜に近い感情を持つ災禍も天音も永久も庇おうとはしない。

小太郎の決定は絶対という前提はあるものの、そもそも自分が何かを口にするまでもなく説き伏せることも納得させることも可能と信じているからだ。寧ろ、小太郎に意見する側の肩を持つとするのが大半。

口が達者であらゆる可能性を想定している小太郎を補佐するよりも、周囲の有用な意見を補佐した方がより良い結果を生むと割り切っているのだ。

「裏切りって……誰です？」

「無形」

『……………あつー！』

思い当たる節のなかった日影であったが、悟の名前だけ告げる言葉に彼だけでなく周囲も全てを思い出す。

悟も小太郎のようにそもそも無形の術中に嵌らないように絶え間なく意識し続けている——わけではなく、今回の招集にたまさか無形からメールが入っていたから覚えていただけであった。

また忘れてしまった、とそれぞれが無用な罪悪感から顔を歪めていたが、確かに無形がいるだけで問題はなくなる。

無形の気質として、主人たる小太郎を裏切るなど絶対に許しはしない。周囲が裏切られた際には反応はまず小太郎を守るのに動くのに対し、無形は即座に裏切り者の排除に動くだろう。

そもそも、否が応にも忘れられてしまう暗殺者がいるならば、暫くの間は監視に付け、逐一行動を報告させるだけで裏切りの芽すら潰せる。

小太郎は小太郎で策も考えもある。十重二十重に予防線は張っている。確かに問題はないだろう。

あらゆる経験に勝る二人はミーティアの精神状態を正しく把握しており、裏切りを心配する必要がないことを悟ると同時に同情を抱いてしまう。

他の面々もミーティアに何があったのかは悟ってこそいないものの、苦労に苦労を重ねてきたことだけは理解できたようだった。

小太郎としては、当然の結果。

そもそも自分の周囲にいるのは他人の為に戦うことを選択した者達しかいない。

それが誰か個人であれ、名前のないその他大勢のためであれ、根底にあるのは他者を慮る心。傷ついた者を見れば、気を遣わずにはいられなくなるのは自然な流れ。

こうなると分かっていたからこそ、特に説明せずに連れてきた上に歓迎会など企画したのである。

「それで、面接の首尾は？」

「時間はかかったけど、上々じゃないかしら？ 能力的なところは兎も角、基本は精神面で優秀な子達を選んだつもりよ。今回は事情が事情だけに人数は最低限でね。リストは送ってあるから後で確認してちょうだい」

「部隊だけじゃなくて、オレの助手も何人か見繕ってるぜ。つつても、こっちは完全に無名の連中だ。家の柵も関係ないとは思うが、念には念を入れて調べんだろ？」

「ああ、全員な。オレはオレで調べるが——ミーティアにもリハビリがてら手伝って貰うか。夢の中だからこそ見えてくる本性もあるしな」

「ああ、夢魔だからね。でも、いいの隊長？ 味方にそんなことをして……」

「相変わらずエゲツねえことするクマ」

「自斎、安心しろ。アサギに許可は取ってる。そもそも対魔忍は一般人と違って多少精気を吸われても支障はない。暫く療養させるつもりだったが出来るか？」

「はい！ 頑張ります!!!」

「そんなに頑張らなくてもいいんだよ??？」

（小太郎さんの手伝いをして評価が上がる！ その上、精気も吸えて私の能力も上がる！ お給料も上がる！ 一粒で三度美味しい！ 頑張らないわけがない！）

（ああ、くくくくくく、此処にも女の子が一人くくくくくく！

しかもこれももう喰われちゃってるね！）

（娘が！ 娘がシャブ決めてるみたいな顔してる！）

面接の主体となった不知火と啓治の意見に、小太郎は首を何度も縦に振って頷いた。

対人経験豊富な大人と若い感性を持つ若手の様々な視点によって選定された人材だ。不安はない。

其処から小太郎が自身の手足を使って調べ上げ、止めはミーティアによる都合の良い夢の世界へ御案内。この網を抜けられる鼠はいないだろう。

彼の味方にやっていい行為ではないものの、アサギには許可を取つてある。

大前提として命を奪うレベルの吸精は勿論の事、任務や日常生活に支障を来すレベルも禁止。

ただ、対魔忍は精力が漲り、血の気が多い。適度に吸精する程度であれば頭に血が上がることもなくなり、逆に良好な結果を生む可能性すらあった。

故にアサギは秘密裏に許可を下した。対象の反応からミーティアの実力の程を知る事が出来る上、場合によっては夢の中で得た情報から、内部を掻き乱さんとする企みを先んじて潰せる可能性もある。小太郎の唆しもあったが、内部に不穏な炎が燻っている状態では許可をしないわけがなかった。

そして、ミーティアはかつてないほどやる気に満ち溢れていた。瞳の中、背後には真っ赤な炎が宿っており、そのまま燃え上がってしまったらしい勢い。

何年も地獄（の職場）を見てきた者だ、面構えが違う。地獄の底から理想の職場にやってきた故に、ミーティアのやる気は留まるところを知らない。

敵と言わずとも恐怖の対象であったであろう対魔忍の下で、どうしてそんなにやる気を？ と彼女を疑っていた日影や紫、きららは困惑し、小太郎ですらドン引きしていた。不知火もまた娘のとんでもない変化にドン引き状態であった。

「んじや色々と一区切りついたので、面倒な祝辞や挨拶を抜きにして、乾杯の音頭を取らせて頂きます！」

「いよっ！ 待ってましたー！」

「啓治、貴方ね……」

「まあいいじゃない、災禍。こうした催しだもの」

「では——見合って見合ってえ！」

『えっ!?!』

「はっけよーい！」

『の、のこつたー!!』

ガシャーン！ 手にしたコップを叩き割る勢いで乾杯する一同。

この時、小太郎もミーティアも誰も彼もが知らなかった。夢魔一派の首魁が、優秀な部下を連れ戻すべく既に動き出しているなどと……

！

幕間

にしやにんぐんのゆううつ

魔都・東京。

世界でも有数の大都市にして、今や魔の領域に吞まれかけた日本の首都。

今日も法の目が届かぬ闇の中で、人々を食い物にせんと魔と外道が蠢いている。

それでも表向きには平和が保たれているのは対魔忍を筆頭とした混沌へと立ち向かわんとする者達による努力によるものか、その方が闇の住人にとって都合が良かったのか。

ただ、そんな都合や思惑から掛け離れた場も存在する。

それこそが東京キングダム。東京湾に浮かぶ人工島であり、無法者にとつては楽園そのもの。この島に法も秩序もあれども律儀に守る必要など何処にもないのだから。

「……………どうしてこうなった」

東京キングダムの歓楽街。その一角にある小さな酒場のテーブルの一つで権左はごちた。

欲望と背徳の街には似つかわしくない老人が営む酒場は、平時であれば東京キングダム内の派閥や勢力に関係なく人が集う隠れた穴場。

店に集う者の性質上、穏やかな時などなく喧騒が常。アルコールの臭いが漂い、怒号と喧嘩の絶えない店であるが、店主はそうした喧噪も好みなのか、常にニコニコと微笑んで見守っている。

だからだろうか、何処の勢力にも属さない店など早々に潰されるか取り込まれるかするものであるが、珍しいことに常連客が店を守り、完全な中立地帯を保っていた。

しかし、耳が痛くなるほどの喧噪は今はなく、人も疎らである。

「どうして……、でしようね……」
「……………」

それもその筈、東京キングダムに颯爽と現れ、ノマドと双壁を為していた龍門を下した超新星——二車忍軍の幹部が三人も集まっているのだから。

どんな阿呆でも、何の会合なのかと警戒し、いらぬ地雷を踏まぬように立ち去って行った。

執事である権左は身なりにすら気を遣わねばならぬ立場となっており、今は対魔忍装束ではなく着崩したスーツ姿。仕立ても小物も一流のそれであり、権左自身は窮屈そうではあった。

同じテーブルに座っているのは尚之助と三郎。ぐい、と安物のブランデーを煽る権左に対して、未成年の三郎とアルコールが剣の冴えに影響しかねない尚之助はちびちびと牛乳を舐めるように飲んでいた。

三人の表情は果てしなく昏い。というよりも疲れ切っている。

「どうもこうもなあ……あの連中の手綱握っておけるのは権左と尚之助の兄さん、三郎の姐さんしかいねえから」

三人と同じテーブルに座っていた最後の一人は同情と憐憫の視線を向けていた。

権左に勝るとも劣らない筋骨隆々の身体に、鋭い眼光と口元に除く犬歯は何処となく狼を連想させる男だ。

彼は二車由来の忍ではなく、東京キングダムにやってきてから取り立てられた新参。それでも幹部三人の集まりに短時間で参加できている以上相応の実力を有し、二車幹部から高い評価を得ている証である。

髪を撫で付けたオールバックに、黄金の瞳を揺らす男の名は灰狼一郎太。龍門の傘下にあった地元の零細ヤクザ『獣王会』の出である

が、今や二車の幹部候補。

ヤクザは面子と体面を何よりも気を遣う生き物。上の龍門を潰された以上は二車忍軍に報復に出なければならぬのだが、いくつかの事情があった。

まず第一に、獸王会の組長であった「オヤジ」は勿論の事、下の面々も龍門を嫌っていたこと。

獸王会は昔ながらのヤクザであり、決して清廉潔白とは言い難いが、それでも自ら堅気を巻き込むほどに悪辣でもない。理由がある者からは絞り尽くすが、事情を鑑みて義理と人情を優先する気質であった。

ノマドに対抗するために龍門傘下に入ったものの、人を人と思わぬやり方とは反りが合わず、上納金だけ収めて裏では独自の方針と路線を保っていた昔気質。暴力で周囲を併呑してはいるが、義理にも人情にも理解を示す二車忍軍の方が心情としては肩を持ちたくなつたのは語るまでもない。

第二に、二車忍軍が闇の組織としての経営ノウハウに欠けている自覚があったこと。

首領の骸佐、参謀のカヲルともに馬鹿ではない。いずれはノウハウを身に付けていたであろうが、それまでの間に取り込んだ組織との軋轢を生みかねず、手間取って資金難など目も当てられない。

其処で取り込んだ組織の中から信頼に値する者を徴用し、幹部候補とする方針を取った。単純な強さのみならず何らかのスキルがあれば、そうでなくとも信頼と信用に値する者ならば、成り上がりも夢ではない、と下に甘い夢を見させると同時に、有望な者を選別して組織拡大を安定化させる一手。

骸佐とカヲルの放った白羽の矢が突き立てられたのは、他ならぬ獸王会であった。

無論、獸王会としてもはいそうですかと首を縦に振る訳もない。

龍門は気に入らなかったとしても親は親。親を下した相手に易々と尻尾を振れぬ立場。此処で領いてしまえば、親を殺した相手に媚びる臆病の誹りは免れない。信条としてはよくやったと言いたいところ

ろだが、表向きにはおのれ二車と示しておかねばならないのであった。

しかし、其処は骸佐とカヲル。相手側の心情を読み切った上で龍門の行っていた非道の数々を証拠と共に暴露した。

違法な人体実験、新薬投与のための民間人の拉致、誘拐、人身売買。そして、中華連合へと様々な魔界技術や物品を無償で流していた証拠を。

闇の街ではよくある話に過ぎないが、中華連合への無償提供は所詮、龍門など中華連合政府の出先機関でしかなく、効率よく魔界技術を集め、実験データを本国へ提供するのが本命の組織であり、義理も人情もなければ、忠誠を誓う意味がなく復讐すら必要すらない傀儡である、と示すには十分であった。

龍門の正体に薄々気付いていた獣王会は、理由も出来たと義は二車にあるとして大手を振って傘下に入ることとなった。

但し、「オヤジ」は元より長く組長は続けるつもりはなかったのだろう。経営ノウハウを骸佐とカヲルに授け、一郎太に跡目を譲った。今は東京都の一角で盆栽をイジる悠々自適の隠居暮らしをしている。

一郎太はまだまだ自分達には「オヤジ」が必要、と隠居に難色を示していたものの、弟分妹分の後押し、二車家幹部の煽^{おだて}てではない評価と説得によつてこれを承諾し、今に至る。

まだまだ骸佐を筆頭に二車に心を開いているわけではなく、本性を見極めている最中。それでも、骸佐へ忠義を尽くす二車の面々は、「オヤジ」を慕う己と重なる部分も多く、命を捨てずとも命を賭けるに値する連中と認識しているらしい。幹部達の愚痴に付き合うのが良い証拠だ。

そして、一郎太は権左の背後——愚痴の原因へと視線を向ける。

「あははははははっ！ お爺ちゃん、もつとお酒持ってきて！ じゃんじゃん飲むわよお!!」

「きゃははははははっ！ エウエウやるう~~~~！」

「あははははははっ！ 飲め飲めくくくくくくくく！」

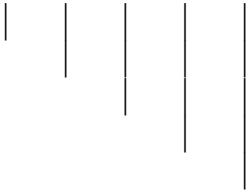
権左達から離れたテーブルで騒ぎ立てている三人の女子供。それぞれが赤ら顔で子供すらも飲んでいるようだ。

背中に蝙蝠の翼を生やした夢魔。鴉の翼を生やした自称ヤタガラスの化身。どちらもどういう訳だかオムツを着用している。

そして妖艶な妙齡の女性。身体のアインが浮き出る、地肌に張り付くような衣装は対魔忍装束に似ており、豊満な身体付きもあって扇情的だったが、馬鹿笑いのお陰で妖艶さも台無しである。

彼女の名はエウリュアレー。小太郎率いる部隊と権左によって敗北を喫した伝説の魔女である。

どうしてこの場に彼女がいるのか————全ての原因は小太郎にあった。



『……………以上が、事の次第と顛末になります』

『そうか。御苦労だったな、権左。尚之助のところには後で直接顔を出す……………しかし、小太郎も絡んできやがるとは』

『ふふふ、随分と井河 アサギから信頼されているようね。それに大した戦い振り、流石は若様』

『カヲルさん……………』

『……………少しは宗家の当主殿への好意を隠しなさいな』

エウリュアレーを討ち果たした夜の内に、権左は一人で骸佐と他の

幹部達に状況を報告していた。

尚之助は戦闘時の自傷により、三郎に付き添われて治療のため共に欠席。残るは骸佐、レイナ、カヲル、比丘尼の四名。他の幹部と幹部候補は支配域の警備と不穏分子の監視を行っており不在であった。

報告を耳にした骸佐は一も二もなく権左を労い、参謀であるカヲルはうっとり頬を染め、今回の一件で小太郎が如何なる動きを見せたのかを夢想していた。

その表情に浮かんでいるのは最早、崇拜に近く、レイナと比丘尼は苦言を呈した。無理もない、今の主君に向けるならば兎も角、敵対している相手へとそのような感情を向けるなど、骸佐からも下の者からすらも不信感を持たれかねないのだ。

『あら、これは失礼を。ですが御安心を、私がお家を裏切るなど有り得ないことですわ』

『別段、気にする必要も謝る必要もねえ。お前と小太郎に何があったのか知っているし、裏切るとも思っちゃいねえよ』

『それは安心——で、矢車を体よく排除できたことですし、次なる手は』

『予定通り、組織の拡大を目指す。兎にも角にも、まずは大量の金を安定して得られるようにならにや、下もついてこねえからな』

『弾正のクソガキに関しては?』

『比丘尼の婆様が説得してくれたお陰で葉隠はこつちに付いた。気掛かりなのは銃兵衛の馬鹿だが、アレが弾正に付くわけもねえ。のらりくらりと躲して最悪、全部捨てて逃げるくらいは平気でやるから情報だけ流して放っておけ。小太郎の情報じゃ、弾正も立場は厳しいようだし、早々に戦力を整えられるわけもねえ。デカくなりやなるほどこつちに手を出し難くなる』

『拡大に関して問題ないでしょうね。獣王会の組長さんが色々面倒を見てくれたし、一郎太さんを筆頭に獣人達も残ってくれた。暫くは落ち着けるといいけど』

二人の指摘にすぐさま気持ちと思考を切り替えてのける。

その切り替えの早さと己は己、御役目は御役目という割り切りがあるからこそ、骸佐はカヲルを参謀として重用し、また裏切りなどするわけもない信頼していた。

そうして骸佐と幹部達各々が、自身と組織の置かれた状況を整理していく。

矢車を排除できたのは予定通りではあったが、同時に僥倖であった。

骸佐が弾正との共闘や恭順を考えていない以上、対立は避けられない。その中で、裏切る可能性のある幹部が居る時点で望ましい状態とは言い難いからだ。

比丘尼の説得によって、真千子率いる葉隠家の手練れ達を同格の客将として迎え入れられたのもまた幸い。

同格扱いと言う点は、真千子の行動を縛れず、扱い辛い立場においてしまう欠点はあったが、戦力差から弾正へと恭順されて戦力を向上させるほうが余程厄介と飲み込んだ。

寝首を搔かれる可能性は無きにしてもあらずだが、葉隠と二車の戦力差は明白。新参達も心情としては二車よりであり、真千子が余程のトチ狂い方をしない限り在り得ない。

獣王会を引き入れられたのは、二車達にとって最大の幸運であった。

彼等が闇の世界で培ったノウハウと戦力があるお陰で、組織も資金稼ぎも安定して広げていける。その上、幹部候補として取り立てた獣王会の面子を立てるために昔気質のやり方を通す理由が生まれ、極端に非道な方向へと進めなくなったのもまた骸佐の心を多いに軽くしていた。

順風満帆、とは闇の世界を渡り歩く以上は似つかわしくないものの、凡そその通り。

しかし……しかしである。そうは問屋が卸さない。

何故か？ それは骸佐が小太郎と同じレベルの苦勞人だからである。これ以上に説得力のある理屈も言葉も他にあるまい。

——そうして、骸佐を襲う苦勞がやってきた。

頭領と幹部の集う本拠の一室に、闇よりも深い黒の孔が穿たれた。この世ならざる尋常ではない力によって生じた孔は周囲の壁や天井、調度品の一切を破壊せず、されども空間を歪める圧迫感で存在を否応なしに認識させる。

『レイナエ……』

『レイナの嬢ちゃん……』

『レイナ……』

『貴女ねえ……』

『『『『そうやってフラグ立てるからあ』『『『』』』』』

『わ、私のせいじゃないでしょう!?! そんなことよりほら、戦闘態勢!』

一同は一斉にレイナを見咎める。まるで、彼女は余計な事を言ったからこんな事になったと言わんばかりである。

見た事もない現象を前にして余裕があるのか諦めているのか分からない面々の態度に、レイナは慌てふためきながらも尻を叩く。新参でありながらこの馴染みよう。二車のまた働き易いアットホームな職場だからか、はたまたレイナ自身の人徳の為せる技だったのか。

ともあれ、レイナに言われるまでもなく、権左は槍を、比丘尼は錫杖を、カヲルは忍法によって生み出した鎖を握り、骸佐を守るように臨戦態勢を取った。

切り替えの早さは勿論の事、万が一の飛び道具に備えて孔と骸佐を結ぶ線を遮る徹底ぶり。この場に立つ誰もが骸佐の為に命を投げ出す覚悟を有していた。

『よっと、ドンピシャね♪ はあ〜い、槍使いの益荒男さん♪ 埋め合わせに来たわよお♡』

『その日の内についてのは、いくら何でも早過ぎやしねえかい魔女さんよお……』

孔からひよつこりと顔を出したのは、今夜打倒したばかりのエウリュアレー。

相変わらず黒い眼帯によって瞳は窺い知れなかったが、口元に刻まれた笑みはまるでチエシヤ猫のように弧を描いていた。

権左も獰猛な笑みを浮かべて答えるが、額を伝う汗を隠しきれていない。

幸運にも無傷で生還した権左であったが、生還できた理由の大半が小太郎の知識によるものと自覚している以上、驕りなど持てる筈もなかった。

骸佐を守りながらエウリュアレーを打倒できるか。その考えが思考を掠めた瞬間、彼は槍として全ての覚悟を決めた。

現状、この場において骸佐が失っても構わないのは己のみ。

痛手は痛手であるが、執事でありながら単なる戦力ではない己に比べ、組織の頭領である権左は勿論の事、参謀たるカヲル、経験不足を補える御意見番の比丘尼は失っても一気に瓦解しかねない。

レイナも候補に挙がるが、まだ母親の件について解決していない以上、命を賭けるわけもなく。

単純な戦力でしかない己であれば、組織が拡大する過程で必ず替えは現れる。その間は尚之助に全てを任せる他ないが、それに足る男であると確信している。

槍は道具にして武器。使えば劣化は避けられず、いずれ必ず折れるもの。憂いもなければ後悔もない。自らの役割をただ只管に全うするのみ。

覚悟を決めた権左は正に鬼神。

長年付き合ってきた骸佐やカヲル、比丘尼ですら静止の声すら上げられず、レイナに至っては重力が増したかのような錯覚に陥るほど。

『ちよつと、勘違いしないで欲しいわ。私は自ら定めた縛りを履行しに来ただけよ』

『——あ、？』

『益荒男さん、貴方は私の試練を打ち破った者の一人。相応の報酬はあるべきでしょう？ 試練を与えるだけ与えて、はいさようならじゃ、魔女の名折れだもの♪』

『誰に聞いて此処に来たのか知らないが、そりやつまり何か？ こっちの傘下に入るってことか？』

『誰、なんて分かり切ったことじゃないかしら？ でも、若いけど其方も覚悟の決まったい顔ね、坊や。土橋 権左が望むならばそうしましょう』

『もし拒否すればどうするつもりだ？』

『どうもこうもないわね。彼が報酬を望むまで居座らせて貰うわ。それ以外には何も』

エウリュアレーは権左との会話に不躰にも割って入ってきた骸佐に眉を顰めもしない。

寧ろ、主従ともにあらゆる不測の事態に動揺を見せず対応する覚悟を手放しに称賛していた。

魔女の言葉に嘘はない。本気で試練とやらを越えた者に対する褒美だけで出向いたように見える。

骸佐は言うに及ばず、他の幹部の面々も同じ結論であった。しかし、相手は稀代のトリックスター、軽々に言葉を鵜呑みにもできない。かと言って、帰れと言われて帰る類の輩かと言えば、そんな筈もない。

自ら定めた理ことわりのみを優先するタイプではあるのだが、同時に気紛れ。少しでも心持ちが変われば、己で口にした言葉を翻すなど日常茶飯事。最も扱い難い人種である。

全てを考慮した上で、最悪なのは気が変わって何処かへ行ってしまうこと。

そのまま闇に消えてくれるのならばいざ知らず、どこその組織に肩入れでもし始めれば二車にとって最悪の敵となる。

そんな存在が、どうして骸佐の居場所を知ったのか。エウリュアレー自身の魔術という線もなくはないが、三郎が小太郎に返礼として

送った鳶が帰っていったばかり。状況的に見て、仕組んだのは間違はなく小太郎だ。

(こ・た・ろ・う~~~~~!!!)

懐に入れては怖い、懐に入れなければ更に怖い存在を放り込まれた骸佐は涼しい表情をしながらも、内心はガンギレしていた。

面に出さないのは流石であったが、彼の脳内では小太郎が後は任せた！と爽やかな笑みを浮かべて笑っており、怒りのバロメーターは倍率ドンで更に倍。骸佐の心労と怒りは留まるところを知らない。

その怒りと来たら小太郎と同じく何らかの妖怪と化していたであろうが、エウリユアレーの前でそのような醜態を晒したくとも晒せない。

幹部達にしてみれば針の筵。

前はどれだけ警戒しても足りない怪物に、後ろは小太郎への怒りを滾らせる骸佐。正に前門の虎、後門の狼。

そうして、全てのヘイトが小太郎へと向かう。脳裏に浮かぶのはへらへらと笑う元凶の顔。若干一名、恍惚とした表情をしていたカラルが居たが、あらゆる意味で例外である。

それでも直接的な行動に出ようとしないのは流石である。

どれだけ感情のメーターが振り切れていようが、頭目として軽々な真似は出来ず、部下も主の命なく動かない。

深く長い溜息が骸佐の口から吐き出される。

頭に上った血はそれだけで下がっていき芯まで凍てつき、ぐちゃぐちゃだった精神は平静を取り戻す。

全ての要素を天秤に掛け、被る利益と不利益を考慮した上で出した

結論は――

『いいだろう。権左に報酬を支払うまで客人として迎えよう。但し、その分きつちり働いてもらう。権左、御守は任せたぞ』

彼等はエウリユアレーの目的など何も知らず、試練と称して力を示す者を待つていたなど予想できる筈もない。

そもそも東京キングダムに来たのも、気紛れで垣間見た自らの運命とその纏れが発端であり、胸中など察しようがなく、間借りしていたアミダハラの手掛にすら帰れないなど想定している方がどうかしている。

寧ろ、エウリユアレーほどの強者に、権左の槍が認められた事実こそを誇るべき——であるのだが、彼女の放蕩振りは度を越していた。

龍門の残党狩りに御目付役の権左と共に出向いても、推しアイドルの旅番組をリアタイと録画両方みたいからと一人置き去りにして帰るわ。

与えた部屋で某動画投稿サイトにある自分が開設したチャンネルの動画を取るわ。

昼夜問わずゲーム三昧では飽き足らず、FPSゲームでY | k a z e Xなるプレイヤーとの対戦で騒ぎ立てるわ。

勝手気儘に東京へと繰り出して、後を追いつけてきた権左を体よく荷物持ち扱いするわ。

正に放蕩三昧のやりたい放題。

御目付役を任せられ、万が一の場合には刺し違えてでもエウリユアレーを討たねばならない権左からすれば堪ったものではない。

いい加減ブチ切れてしまいたいのであるが、その放蕩振りを補って有り余るほどの働きをしているからこそ性質が悪い。

腐っても最高位の魔女。彼女一人いる限り、東京キングダムにおける魔術的なアドバンテージは二車忍軍のものとなっている。

並みの魔術師が命懸けで仕掛けてきた呪いを鼻歌交じりに解呪など朝飯前だわ。

組織の下っ端が勝手に結んだ他組織との魔術契約も、上書きしてしまふことで有利なものに書き換えるわ。

敵対組織が凄腕の魔術師を雇っても、彼女が出向くだけで相手は逃げ出していく始末。

これでは追い出したくとも追い出せない。

何よりも、二車が独立するに当たって一時的に手を結んだ相手——
——フルストに対する牽制にもなる。

フルストの魔科医であるが、その技術の大部分は魔術に根差した
もの。エウリュアレーが居ると居ないとでは、相手にかけるプ
レツシャーが異なる。

奴の思惑が何処にあるかは別にしても、何らかの目的を以て骸佐に
近づいたのは明らか。主人をフルストの傀儡などにさせられない
以上、エウリュアレーの存在は不可欠なのだ。

「権左さんなんて、まだいいですよお……………エウリュアレーさんは
性格はアレだけど、能力はあるんですから……………私なんてアレですよ」
「……………ぶわわっ」

「心中お察しします、三郎さん……………」

「三郎の姐さんは……………まあ、何だ。強く生きてくれとしか……………」

より追い込まれていたのは三郎だ。彼以上に目が死んでいる。

これまで同情されていた権左であったが、自分よりも遙か酷い状況
に置かれている三郎の境遇を思つて涙ぐむ。尚之助と一郎太など慰
める事しか出来ない。

そう、どういうわけだか二車の本拠にやってきたリリムとミナサキ
の世話を任されてしまったのである——！

事の発端は二週間前、檻褸雑巾の状態で泣きじやくる二人が本拠の
前に現れた。

泣き腫らす二人の説明は要領を得ず、どんな目にあつたのか、何故
此処に来たのかは断片的にしか分からなかった。

曰く、まえさきで酷い男に酷い目にあつた、だとか。

曰く、つけられた首輪に此処への地図と仲間からの手紙が挟まって
いた、だとか。

この時点でかなりキナ臭かつたものの、応対したのは真面目な末
端。そのまま真面目な三郎に話が渡り、真面目な骸佐に話を持って

行ってしまった。これがカヲルや比丘尼ならば嫌な予感で追い返していたのだろうが、そうならぬのに世界の悪意を感じざるを得ない。

『……まえさきは五車に近いから誰も送り込んでねえぞ。それこそ葉隠を取り込む時に比丘尼の婆様を送っただけだが……』

『部下の誰かが残って遊んでいる、とか?』

『いや、婆様につけたのは扱い易い連中だった、そんな勝手するとは思えねえが……ちよつと手紙見せてみる』

『はい、此方で……』

『……………………ほくくくくくん、成程お、なるほどなるほどお』

『困った事があつたら、此処に行つてね♡ ミーティア』

『この字、小太郎のじゃねえかああああああ!!! ミーティアつて

誰だよ! あとハートつけんじゃねえ、腹立

つううううううううううう———!!!』

骸佐は手紙を見た瞬間、長年会話もなかつたにも拘わらず、一瞬で筆跡から書いた張本人とその思惑までを看過して絶叫した。

そう全ては小太郎の思惑である。

殺すことも出来たが、そんな労力を割り裂くことすら不快で不経済。なら別の誰かに押し付ければいいじゃない、というぶん投げ。

自分に出来ないこと、やりたくないことは誰かに投げる! 相手の被る苦勞も上げる悲鳴も考慮しないものとする! なお、アサギは正式に部下へ渡しているだけでまだ正当性が確保できているが、小太郎は骸佐はもう部下でも何でもないので百倍酷い模様。何よりも酷いのは、もうクーリングオフできない点。

(ど、どうする! 一度招き入れた奴を追い返すのを、この拡大期にやるのはマズい! 中にも余所にも門戸を開いていない印象を与えかねええ! 集まる人手が減るう!!)

目下、急成長中の二車忍軍。

東京キングダムに住人からも迎えられる方向に傾きつつある。

経営方針が獣王会由来のため、これまで支配してきた龍門やノマドに比べて人を使い捨てにするような方針は少なく、支配域から吸い上げられる金も失われる人でも遥かにマシ。これで人気が出ないわけがない。

しかし、人も魔族もたった一度の思いつきのような善行で持て囃されるように、たった一度の軽率な悪行で評価は一変する。

二人を門前払いするのはいいが、それが誰かに見られていたのならば、二車は誰にでも門戸を開いているようで実の所は身内最良の組織であり、幹部になるなど夢のまた夢、と考えられる、或いは他組織に広められれば堪ったものではない。

矢車のように切つてしまうことは出来たのだが、それは何らかの過失を起こしてから。理由がなければ切ることはできない。つまり、詰み。どう頑張つても一度は迎え入れなければならぬ。

己やカラルの組織運用能力を考慮した上で拡大期に入っている事を逆算した小太郎が仕掛けきた罠にまんまと嵌った形である。

なお、不真面目な者がリリムとミナサキを応対していた場合であるが、害獣と称される二人が生き延びられる筈もない。トチ狂ったことを言つて殺されるのがオチであったが、そこは他人に迷惑をかける星の下に生物、なまもの運だけはいい。

これは骸佐を高く評価している証であると同時に、お前だけは絶対に逃がさん、死んでいても連れ戻して蘇生させて生き地獄を共にさせる！ という強い意志の下の策略であるが、これほど嬉しくないものはない。

『——三郎！ その二人の世話はお前に任せる！』

『ハッ——は？』

『任せたぞ！』

『は????』

『任せたぞ！』

『は、はひい……』

これ以上心労を増やしたくない骸佐の圧に屈した三郎は、力なく頷く他なかった。

敬愛する御館様が血走った目で顔を2cmまで近づけての圧と言う名の懇願である。こんな誰だつて屈する。

ただでさえ憂鬱な三郎であったが、初日から今日まで後悔しかない毎日であった。

この二人と来たら、初日から同じ新参だけに飽き足らず、幹部達にも悪戯を仕掛けていた。酷い目にあつてきただろうに、何の反省もしていない。

骸佐は三郎に任せてるから、大丈夫だからと震え声で目を逸らし、カフルと比丘尼はキツイ仕置きに乗り出し、レイナ、権左、尚之助に慰められる日々。

他にも余所の下っ端にちよつかいをかけて新たな抗争の火種を作るわ。

傘下の娼館やら酒場でシヨバ代と称して遊ぶ金を巻き上げるわ、ツケで飲み食いするわ。

それだけならまだいい。他の下っ端も似たような事をやっている。違いがあるとすれば、この害獣にはバレたらヤバいという思考そのもの、或いは隠し通すだけの知能がない。故に、毎回毎回三郎が出向いていって場を収めなければいけなくなる。

その中でも最悪だったのは、東京キングダムから撤退した龍門の遺物に手を出したことだ。

米連に対抗するため魔界技術に手を染めようとする中華連合の尖兵。研究を行っていた遺物は正に悍ましさと危険性の塊。

己の叶えたい願いのために反乱という手段に取った骸佐ですら、危険性と敵対組織との関係性を考慮し、破棄するしかないと決定した代物を、事もあるうに使ってないなら私達のお金にしちやおう、と売ろうとしたのである。

しかも、売ろうとしたのが危険物中の超危険物。あのエドウィン・ブラックと井河アサギの細胞を掛け合わせて作り上げたという怪

物『馬超』。

案の定、適正な扱い方など知らない二人は雑に機械から取り外し、破棄方法が明確となるまでカプセルで永遠に眠っているはずの怪物は目を覚まし暴走。

二車幹部どころか、新参の獣王会の獣人達、エウリユアレーすらも動員してようやく殺害に成功。幸い、負傷者も死亡者もおらず、暴走の情報も外部に漏れることはなかった。

こんなことになれば流石に三郎も庇い切れず——寧ろ、ようやくこの苦行から解放されると庇いすらせずニッコニコで処刑を希望した。

『面白いわね！ いいじゃない、この二人！』

『……………え？』

(勘弁してくれませんかねえ!!!)

しかし、これに待ったを掛けたのがエウリユアレーである。

所詮は客将。組織内の人事に口だけする権限などあろう筈もないが、魔術に関しては有能も有能。

そして、気紛れなこの魔女を長い間組織に縛り付けておきたい骸佐としては同格として迎えた真千子以上に強く出にくい相手。

言葉を重ねに重ねたものの、のらりくらりと詭弁を弄して躲し続けたエウリユアレーに折れ、最終的にリリムとミナサキは首の皮一枚で繋がった。

その後、三郎と共にエウリユアレーも二匹の御目付役として自主的に加わっており、エウリユアレーの御目付役である権左も強制参加。

どうにもこの三人、場を掻き回すという点においては気が合うようで、御覧の通り肩を組んで酒を飲むほどに仲良くなっていた。

但し、トリックスターとしての格が違う。リリムとミナサキは場を掻き乱すだけ掻き乱すことしかできないのに反し、エウリユアレーは場を掻き乱した分だけ被害を超える利益を生む真のトリックスター。

他者へかける迷惑と己の生み出す利益を考え、必ず後者が勝るよう

に立ち回る術が心身ともに刻まれている。故に、エウリユアレーが二人のストッパーに回るといふ異常事態が発生していた。

尤も、エウリユアレーがやっていたのは二人を甘やかすこと。そして、本気で越えてはならないラインでは止めること。

説教や折檻は任せきりであつたが、それでもエウリユアレーのお陰で三郎の負担はかなりの割合で減っていたのは事実であつた。

「皆さ〜〜ん、どうしらんれふかあ〜〜〜、そんなシケた顔しれえ」

「……………飲み過ぎですよ、御二人とも」

「飲んれないよ、アッッ」

「どう見ても飲んでんだろぅが…………」

現状を振り返り、一同が溜め息を吐こうとした時、話題の二人が割って入ってくる。

リリムは尚之助の肩に手を掛け、ミナサキは三郎の背中に抱き着くようにしていた。

どちらも当然赤ら顔、尚之助と一郎太はシケた顔をしているのはお前等のせいだと言いたかつたものの、ぐつと堪えて大人の対応を見せる。

毅然とした態度、理性と敬意からなる振舞いを周囲の大人が示すことで、子供はその背中を見て成長していく。意識的にせよ、無意識的にせよ、彼等としてはそのつもりであるが、彼女等には何も届いていない。

当然である。見た目は子供だが、この二人は真実、害獣。年を重ねているかどうか、見た目が子供かどうかなどに関わらず、人から学ぶとも自身は完成していると信じるエドウィン・ブラックに並ぶ頭魔族なのだから。

権左は更なる心労を避けるべく、二人を完全に無視してグラスの酒を煽っており、三郎は真似をしようとしたが、そももいかない。

三郎は尚之助に懸想している。

切欠が何であったのかなど当人すら覚えていない。ただ、尚之助の好青年ぶりとは面倒見の良さに加えて美形加減を考えれば何の不思議もない。年端もいかない少女にしてみれば、王子様と呼んでも差し支えない存在だ。

事実、五車でも尚之助の人気はかなりのもので、ふうま一門という前提がありながらファンクラブが立ち上げられるほど。色恋沙汰に興味関心のない当人は告白も黄色い悲鳴も涼やかに受け流していたものの、それが三郎をどれだけやきもきさせたか。

そんな相手にべつたりとボディタッチされれば、乙女として面白くない。

ただでさえ悪かった虫の居所が更に危険なラインに踏み込んでいつているのだが、害獣が気付く訳もない。揶揄う機会を得たと更にアクセル全開で踏み込んでいく。

「ふ〜くん♪ あっ、そうだあ！ 気分がいいから、尚之助にエッチな夢でも見せてあげよつかあ〜〜〜」

「ぶっふお!! 見て見て益荒男さん、あの二人やっぱり馬鹿よ! とびきりの馬鹿が馬鹿な事やって馬鹿な目に逢うの面白過ぎない!」

「……酒くらいゆっくり静かに飲ませてくれえ」

「結構ですよ。煩惱劣情など斬って捨てるのが剣士ですので」

「いいじゃんいいじゃん、何なら三郎の姿で——」

大部分は揶揄いだが、夢魔の力を使って尚之助の精気を吸うも目的もあるのだろうか。とんでもないことを言うリリム。

何時の間にやら近づいてきていたエウリュアレーは権左の首に手を回し、胸を顔に押し当てていたが、当てられている本人は何一つ歡びを感じていない虚無の表情である。

尚之助は尚之助は呆れ顔でリリムの提案を蹴る。流石の尚之助であつても、優しさを向ける相手ではないらしい。

暗に夢に入つて来ようものならば、問答無用で斬り捨てると語っているのだがリリムはそんな事に全く気付いていない。

そして、もう一つの迫りくる危機にも気付かずに——思い切り吹っ飛んだ。

一体、何が起こったというのか。余りの早さに尚之助は言葉もなく、かろうじて確認できたのは、折れて宙に舞うリリムの前歯だけであつた。

「げらげらげらげらげらげらげら!!!」

「え? ……え?」

「ふんっ——!」

「お、がが——ツ!!!」

エウリュアレーの爆笑が響き渡り、状況を一切理解できないミナサキは目を白黒とさせざるばかり。

リリムはすきつ歯になつた間抜け面で鼻血を出して昏倒しており、三郎の手には一郎太が注文し、テーブルの上に置かれていた日本酒の一升瓶が握られていた。

三郎の一撃によつてリリムがやられたと理解するよりも早く、ミナサキの脳天にも一升瓶による全力の振り下ろしが見舞われて地に沈む。

正に一撃必殺。

見た目が少女と侮るなかれ。三郎も立派な対魔忍、数多くの凶暴な獣を手懐けていた忍獣使い。単身であつたところで戦えないわけでもなければ、弱くもないのだ。

「ふんっ! ふんっ! ふんっ! ふんっ!」

「こっわ。やつぱり三郎ちゃん恐いわ」

「女は怖い。怖いなあ……」

「くうくうくうくうくうん」

「さ、三郎さん、その辺りで……!」

ブチ切れた乙女は尚も止まらない。

どちらにせよ、三郎の心は決まった。

この二匹は二度と人間扱いはしない。自らの獣達と同様に調教する。性に根ざしたものではなく、本能に刻み込む調教だ。

人に行うよりも遙かに過酷で苛烈、鬼蜘蛛家に代々受け継がれてきた調教術を以てして、害獣を忍獣とする。

もし無理であつたのなら？

どのような獣でも人に懐かぬ個性を持った個体は存在する。言う事を聞かない飼われた獣の末路など一つしかないだろう。

今後、二匹は打てば肉が裂け、骨が折れるマジモンブルウィツプの牛用鞭で調教される羽目になるのだが、気を失っている以上は分かりようもない。

そして、二匹を調教する苛烈な姿を見られた三郎は、二車の獣の女王と呼ばれることになるのだが誰一人として予想だにしていなかった。

「ふふふ、今日も皆、元気がいいねえ」

此処は東京キングダム。

微笑みながら手にしたグラスを磨き上げる老人であろうとも、今の惨状を見ての感想からも分かるように、まともである筈もない。

爪弾き者の吹き溜まり。欲望と狂気の街。正気を保つ者こそが狂人であり、狂気を以て頂点に立つ者こそが正義にして勝者。

———そんな街へと殴り込みをかけた二車の明日はどっちだ。

苦労人の下には好きこのんで苦勞しにくる奴がいる

「~~~~~♪」

「ご機嫌ですね、旦那様」

「そりゃねえ。優秀な情報収集役も入ってきたし、面倒な面接もお前等がやってくれたし、言う事ないんだよなあ」

「うんうん。若が嬉しくて、天音も嬉しゅうございます!」

「天音の場合は家族が増えて嬉しいだけでしよう?」

「何を言う災禍。若が喜ばれるのが第一だ!」

「はいはい」

時間は放課後、赤い西日の差し込む五車学園の空き教室で、ふうま宗家の当主、秘書、執事、侍女が集まっていた。

目的は一次面接で落された者の再確認。特に今回はコネによる入隊は一切行わず、能力と性格で合否を決定する方針上、ふうま一門の者は問答無用で落とさざるを得なかった。

そのため、落選させたふうま一門の中にまともな者がいないか、再度チェックしている最中。

珍しく上機嫌で鼻歌混じりに面接者のプロフィールを捲る小太郎に、従者三人は朗らかな笑みを浮かべていた。

大抵、小太郎は無表情で思考を回しているか、苦勞で発狂しているかの二択。年相応と言わずとも穏やかな表情をしているだけで、常に小太郎を心配している面々にしてみれば安堵できると同時に微笑ましい。

現在、優秀な情報収集役——ミーティアは一時的に災禍と天音、永久が共に暮らす一軒家に居候しつつ療養中。

三人の目から見ても、ミーティアは優秀の一言。『魔界の踊り子』が対魔忍と手を組んでいる事実には腰を抜かしていたり、仕事仕事とワーカーホリック気味なのは偶に瑕であったがそれ以外にいう事はない。

人当たりも良く、人界の生活に適應しつつあり、そう遠くない未来

に独りで生活できるようになるだろう。尤も、仲間との穏やかな生活というものをミーティアも気に入っているようで、彼女自身が望むかどうかはまた別の問題だ。

上機嫌な小太郎であったが、全てが順風満帆とは言い難い。

最近の問題は面接を落とされた者達からのやつかみと嫉妬である。何故己を落とした、と嘯みついてくる者どころか、問答無用で殴りかかってくる輩さえいる始末。

が、そういう輩に限って自尊心ばかりが肥大化していて能力が伴っていない。

不意打ちで小太郎自身に顎へとワンパン叩き込まれて昏倒するか、面倒になって逃げ回る小太郎を捕まえられずに疲れ果てるか。

中には忍法を使う者さえ居たが、使ったとしても結果は変わらな。元々忍法を使えない小太郎——実態は名うての対魔忍を相手取るよりも遥かに厄介なのだ——の評価も相俟って、彼等彼女等の評価はただ下がり。周囲もこれなら落とされても無理はないと納得顔のしたり顔と、自身の評価の低さも逆手に取るやり口であった。

そうでなくとも、護衛として雇っている紫はしっかりと仕事を熟しており、自身の生活と学業を疎かにしない範囲で愚かな輩を制圧していた。

何にせよ、小太郎としては鬱陶しく、どういった思考回路をしているのか理解できない対魔忍を相手にしなくてはならず気が滅入るが、これまでの苦勞に比べれば遥かに気分は楽ではあった。

その時、空き教室が焦った様子で乱暴にノックされる。

「失礼！ 独立遊撃部隊の面接があると聞いたのですが！」

「……はあ？ どういうことだ？ 漏れでもあったのか？」

「いえ、若様。そのようなことは。面接終了は伝えております」

「先んじて提出されていた書類には全て目を通しました。不知火殿、啓治ともに確認を」

「我々も確認致しましたし、可能性は低いかと……」

ノックと同様に焦った男の声色に、小太郎どころか残る従者も困惑させた。

勝手に始まった隊員募集も面接の終了も既に五車全体に伝えられている。にも拘らず、面接の希望者が現れるとはどういうことなのか。

考えられるのは二つ。

一つは単純なヒューマンエラー。

しかし、災禍、天音、永久、不知火、啓治の五名がかりで当たった仕事に漏れがあったとは考え難い。可能性は存在しているが、否定してもよいだろう。

もう一つは男の側が何らかの理由によって面接終了を知らずに居るのか。

可能性としては此方が遥かに高い。対魔忍の本拠と言えども、任務内容によっては長期間帰ってこれないパターンは珍しくない。

いずれにせよ、運がない。

本人に非がなくとも、時流に乗れていないのは事実。小太郎としてはマイナスポイントであった。

「つーかこの声………まあいいさ。いまさら一人増えたところで変わらんだろ」

「若様が直接なさるのですか?」

「いやお前等に任せただけだから、最後まで任せるよ。オレはロッカーの中で隠れてよう。オレのことを悪く言ったり、お前等を唆そうとしたら出て行って驚かせてやる」

「旦那様、遊ぶ気満々ね」

「どの道、もう面接は終わっている。他に示しも付かんし、採用はないんだ。構わんだらう」

上機嫌だからだろうか、小太郎は悪戯小僧そのものの表情を浮かべてそそくさと掃除用具の入ったロッカーへと入っていく。

一同は呆れ顔であったが、仰ぎ見る主人が年相応の姿を見せるのは

稀。毎度毎度これであれば、三人の内いずれかが心を鬼にして厳しく躰け、残り二人が甘やかす構図となっていたであろうが、普段の彼に一切の遊びはない。

よつと見せているのは数少ない可愛げだ。表情は兎も角、内心はホツコリとしている。普段、冷静沈着な少年の見せるふとした無邪気さは御姉様方には非常にポイントが高い。

しかし、ホツコリしていたのは其処まで。

私情は私情、仕事は仕事。これをキツチリと分けられなければ小太郎の部下足る資格無し。

それを弁えた三名はテキパキと机の上を片付け、面接者用の椅子を用意して、居住まいを正す。

「どうぞ」

「失礼致しますー！」

「お前は……」

災禍の許可を与えると勢いよく扉が開き、声の主が入室する。

その姿に、天音は目を見開いた。

いや、天音でなくとも動揺の反応を示したに違いない。何せ、男はキツチリとしたビジネススーツを全身義体だった。もう一度言う、ビジネススーツを着た全身義体だ。

全身義体ならば服など必要ないのだが、面接だったと気合を入れているらしい。そうその絵面だけで面白過ぎる上に呆気に取られる。

事実、永久など半笑いになって口は半開き、目を真ん丸に見開いている。

但し、男の正体を知っている災禍と天音は俄かに警戒心を高めた。それは遊び半分でロッカーに隠れた小太郎も同様であった。

(妙な機械音声だと思ったがやっぱり佐郷じゃねーか。どういうわけだ?)

ロッカーの隙間から教室の様子を除いていた小太郎は、見覚えのある後頭部と全く見覚えのないスーツ姿に少なからず困惑した。

全身義体の名は佐郷さこう 文庫ぶんこ。

彼は弾正の元側近であり、弾正が反乱以前に特務機関「G」と手を結ぶに当たって捧げた検体の一人であり、自ら志願して全身義体化した真正の狂信者にして、五車唯一の全身義体サイボーグ忍者。

とは言え、彼が弾正のシンパ、狂信者であったのは遠い過去の話。

弾正のために全身義体化までしたが、ある切欠を境に盲目の羊であれなくなった。

それは小太郎が生まれた折に、ふうま 弾正が出産を終えたばかりの妻に対して目抜けを生んだと酷い罵声を浴びせ、弾正に乗った太鼓持ち幹部諸共、ふうま 潤がノータイムで殴りに行った。弾正及びふうま八将撲殺未遂、並びに弾正の側近撲殺したたよテヘペロ事件”にある。

文庫も無論その場に居り、軽く切れた潤に応戦。僅か0.5秒で弾正の盾としての役割をむりやり放棄させられる。

アッパーカットを喰らった文吾は屋敷の天井をぶち破り、天高く舞って高さ72mを記録。なお、弾正と当時のふうま八将は天井ではなく壁をぶち破って100m以上離れた地点で虫の息になった模様。

潤が手加減した事に加え、弾正達はゴキブリ並みの生命力、文庫はサイボーグ化によって得た頑強さでギリギリ死の淵から帰還。他二名の側近は頭部がただの拳打で頭部が完全にこの世から消失して未帰還の結果となった。

(ああ、私は何をしているのだ……)

全てがスローモーションになって天を舞う中、間近に迫った憎らしいほどの青空を眺めながら、文庫は一人そう思った。

弾正の言葉に疑問を抱いたことは一度もなかった。狂信者とはそういうもので、崇める存在と吐く言葉に心がなかつたとしても、妄信する無知蒙昧の輩。

ただ、心残りはあつたのだ。

それは家の仕来りに従つて娶つた妻と全身義体化のため渡米する直前で生まれた一人娘の存在。

弾正に仕えている間は気にも留めなかつた。忘れてさえた。弾正への狂信は心地よく、またあの男が並べる飾りでしかない言葉でもまた同様。

しかし、常に心には引つ掛かりがあつた。まるで喉に刺さつた小骨のように。もう一人の冷静なままの自分が問い掛けているかのようで。それでも一心不乱に弾正に仕えた。つかえの正体を掴めぬまま、弾正のために尽くし、戦い続けた。

だから、弾正が潤を口汚く罵る姿に目が覚め、自らの心残りを自覚した。

生まれた我が子が目抜けであつたからどうだと言うのか。我が子であることに変わりはあるまいに。

出産は女にとつては命懸けで行われる難事。潤が最強であつたとしても、苦痛に耐え、母として乗り越えなければならぬ山場を越えたのは事実。それに労いの言葉一つかけぬのは夫としてあるまじき行いではないのか。

堕ちた偶像は、容易く嫌悪の対象となる。それでも弾正の盾となつたのはケジメ故。

何せ、弾正の行いはそのまま文庫に返ってくるものであつた。

子を産んだ妻に労いの言葉一つかけずに渡米したのは誰だつたか。

生まれた我が子を一度も抱かぬまま、その温かさを感じ取れぬ身体になると選択したのは誰だつたか。

文庫に弾正を責める資格はなく、つもりもない。

全ては己の身から出た錆。心残りの余りの身勝手さと恥知らずさ、顧みず捨て去つたものの重さをようやく自覚し、涙すら流せぬ身体になつて後悔を噛み締める。

(もう側近は続けられない。辞表を出そう。そして、家に帰ろう。後の事は、それからだ)

そう考えながら地面に叩きつけられ、意識を取り戻すと同時に生死の境を彷徨う弾正に代わり当主代行をしていた幻庵と二車 又佐に謝意、そして側近を辞する意を伝え、家に帰った。

『今更、何のつもりなのですか……』

しかし、暖かな出迎えなどある筈もなく。

帰宅して待ち受けていたのは、何処までも冷え切った妻の瞳と己を他人と見て泣きじやくる幼い我が子だけ。

至極まともで、当然の反応。

彼女は家の取り決めた結婚であったとは言え、使命感ではなく一人の人間として文庫を愛そうと努力し、また妻として何処までも尽くし、支えてきた。

けれど文庫は弾正の空言にばかり熱を上げ、家庭を顧みようとしな
い。子を授かり、生まれると分かった時でさえ彼は其処に居らず、米
連から戻ってきたても顔すら出さず、名を聞こうともしない。

見返りを求めたのではない。単に夫にとっては妻も子も家も必要
なく、弾正以上に価値はないのだと悟っただけ。

どうしようもない断絶を生み出したのは文庫自身であり、彼女が子
を一人であったとしても立派に育てようと決意するには十分な理由
だった。

自業自得の因果応報。

彼女は慈悲深く、文庫に当たり散らすような真似もしなければ、家
から追い出しもしなかった。ただ、必要最低限の会話すらなく、文庫
を存在しない者として扱った。

嫌がらせの類ですらない。一人で育てると決意した以上文庫に頼
ることなど何一つなく、弾正の側近として生きると決めた文庫にさつ
さと己の居場所に戻りなさいと諭そうとしていただけ。

文庫にとっては針の筵。

彼女の冷たい視線を向けられる度に罪悪感で心臓を鷲掴みにされ

たように動けなくなり、名前も分からない我が子が泣く度にあやすことさえ許されない己の愚かしさを呪う日々。

いっそ全てを諦めて、投げ出してしまえば楽であつたらうに、佐郷文庫という男は何処までも不器用で、何処までも真っ直ぐだった。彼が決めたのはやり直しの道ではなく、恩を返す道であつた。

今まで支えられてきた恩を少しでも返す。

夫としてなどではない。夫などと恥知らずすぎて口が裂けても名乗れない。単に人としての当然と思う道を選択したまで。

あわよくば、などという考えすら邪念と斬り捨て、恥を雪ぐつもりすらなく、自ら作り上げた断絶に身を投げ出した。

子育てに勤しむ彼女を少しでも楽にさせようと、家事を手伝おうとして拒絶され。

夜泣きする我が子をあやそうとして、誘拐犯と同列の扱いを受け。

一人で育てようと対魔忍として復帰し、子を預けて任務に挑まんとする彼女を止めるよりも早く裏から手を回して自らが赴く。

初めの一カ月はただ不審者に向けるのと同じ視線を向けられた。

二ヶ月目に入つて、態度ではなく言葉で弾正の下に戻るよう諭された。

三ヶ月目に入る頃には彼女も諦めたのか、再び会話はなくなつた。

半年も経つと、会話らしきものが生まれ初め、家事を拒否されることもなくなつた。

一年目でようやく子を抱いてあやすことを許され、其処で初めて子の名前が鶴であると聞き、あやし方を学んだ。

晴れの日も。雨の日も。風の日も。雪の日も。

ただひたすら愚直に繰り返す。彼女の態度が軟化していることは気付いていたが、期待はしていなかつた。頭にあつたのは恩を返す、その一点だけ。

弾正は再三に渡つて文庫に戻つてくるように伝えたが、これは全てを無視。そんなことよりも、恩返しの方が遥かに重要であつた。

任務に際しては旧知であつた紫藤 甚内、報告に赴いた時には二車又佐、心願寺 幻庵、たまさか顔を合わせたふうま 潤に呆れられ、

笑われ、同時に称賛されたが、何が何やら。それほどまでに、文庫は愚直であつた。

そうして、家に帰ってからちようど二年目。

鶴が三歳になろうとした日、彼女に呼び出された。

客間で彼女と向かい合つた文庫は、未だに面と向かうと罪悪感と不甲斐なさで委縮してしまつていたが、同時に困惑していた。

何か至らぬところがあつたのか、と思ひ返してみても心当たりがまるでない。にも拘らず、常に毅然とした彼女の表情も、この時ばかりは僅かな緊張が見られた。

さてはいよいよもつて追い出されるか。ならば、家の敷居を跨がずとも出来る支援をすればよい、と覚悟を決めた文庫を待ち受けていたのは――

『貴方が、家に戻つて今日でちようど二年目。もう、結構です』

『そう、か。では、荷物をまとめて……』

『全く、言うと思ひました……私の口癖を覚えておいてですか？』

『は？ あ、いや、〃仇は倍返し、恩は百倍返し〃、と……』

『貴方が私と鶴を捨て置いた期間は凡そ一年。仇はしっかりとお返しさせて頂きました』

『あつ、そういう……いや、しかし、私としてはまだ全く足りていなくて、だな……』

『……ですの！ その、今まで辛く当たつておいて、このような事を口にするのは恥知らずと百も承知ですが……ええと、あの、もう一度、私と夫婦として、やり直して頂けますか？』

『……………』

その時の衝撃と歓喜を、十年近くたった今でも文庫は言葉に出来ずにいる。

ただ、述懐するのならば、歓びの涙も流せぬ身体になつてしまった後悔と妻に涙を見せずに済んだ安堵があつた、とだけ。

こうして、佐郷 文庫は本当の意味で家に帰つたのだ。

以後の彼も驕ることなく良き夫、良き父親として在り続け、また彼女も良き妻、良き母親として互いに支え合い、恩を返し合い続けた。ふうま一のオシドリ夫婦と知られるようになるのに時間はかからず、甚内達は祝福を向ける。弾正は勿論、かつての彼を知る者からは啞然とされていたが些細な事柄だろう。

弾正の反乱にも妻と子を第一に考え、一切の賛同も参加もせず、甚内と共に井河に下ることを選ぶ。

その後も弾正の元側近として名を知られていた故に、警戒から残ったふうま一門に組み込まれることなく、火遁の名門である百田家に監視も兼ねて下忍として組み込まれ、様々な冷遇を受けることになったが最愛の家族があれば気にもならなかった。

しかし、悪い事は重なるもの。

五車に移り住んでから妻は体調を崩しがちになり、やがては病に伏せるようになる。

娘と共に甲斐甲斐しく妻の介護に勤しむ傍ら、与えられる任務を熟し、方々を駆けずり回ったものの、妻は闘病生活も虚しく数年前に亡くなった。

最後に受け取ったのは、文庫への礼と鶴を頼むという旨。彼はそれを胸に刻み、自らの道を進み続けている。それが佐郷 文庫という男の半生だ。

「むっ、面接官はお前達か、災禍、天音……………いや、失礼を。申し訳御座いません、災禍殿、天音殿」

「いや、それは構わないが……………」

「……………兎に角、椅子へ」

「失礼します！」

見知った顔に名を呼んだ文庫であったが、首を振って敬称を付け直す。

かつての弾正の側近という誼もあり、災禍、天音ともに顔見知り。二人の若き日を知るからこそ年長者としての顔が出てしまったが、今

や仕える家の違う者同士。相応しくない態度を改めて、謝罪と共に頭を下げる。

災禍と天音は困惑と同時に俄かに警戒を強めた。

かつての彼を知り、今の彼の知っているからこそ、今の今まで関わらなかった。

少なくとも二人にとって、文庫の行いは裏切りではなく当然の結果。仕えるに値しない弾正に蒙昧ぶりを発揮していた頃よりも、夫として父として誠実であろうとする現在の方がよほど素晴らしいと認めていた。

だからこそ周囲から警戒されぬように互いの立場を考慮して不干涉を貫いてきたにも拘わらず、今このタイミングで接触を凶ってきたのは如何なる理由か。

百田家の思惑か、文庫個人の思惑かは別として、何かある、と勘繰るには十分過ぎた。

文庫について何も知らず、人工皮膚さえ被せていない金属パーツ剥き出しの全身義体がビジネススーツを着て面接を受けに来ているシニールな光景に呆気を取られていた永久さえも二人の警戒を悟って静かに気を引き締める。この中では新参ではあるが、小太郎の下に集った以上、互いの意図を察するなど造作もなかった。

「ではまず、これまで携わってきた任務に関して——」

「はいっ！ それに関しては——」

まずは天音が当たり障りのない質問から攻めていく。

面接を受けに来た者には同じ質問をし、返ってきた内容に嘘偽りがないのかを全員で探る。

内容自体は拙くとも構わず、返答に詰まっても気にしない。あくまでもその人物の為^{ひととなり}人を探る目的故に、語る内容に明らかな矛盾がなければ質問を繰り返していくのみ。

ただ、今回はそれに加えて、文庫の警戒を緩めさせる意図があった。質問をすればするほど、思考のいくらかは返答に割かれていく。そ

うして思考を奪ったところで、裏に隠された思惑を探る腹。

(おかしいな。マジで真面目に部隊で働くつもりなだけだぞこいつ。しかし、なんかこう、妙に気合い入ってんな???)

文庫の返答に一切の淀みはなく、また何らかの思惑があるように見えない。面接官の三人にも言うに及ばず、人の本質を見抜く小太郎でさえ同様の感想であった。

気になったのは文庫が並々ならぬ情熱を漲らせていることか。背景から無機質なカメラアイまで燃えに燃えている。この迸るパッションは何なのか。

何らかの思惑から独立遊撃部隊やふうま宗家の内情を探ろうとしているのなら、余りにも拙すぎる。ただでさえ警戒される自覚はあるだろうに、何らかの感情を表に出してしまつては余計にな警戒を招きかねないのだ。

小太郎はロッカーの中で首を傾げ、三人は文庫の思惑がまるで見えずに更に困惑していた。

「では、部隊に其方を採用するに当たって、此方に何かメリットは？」

「ありませんね」

「お話になりませんね」

「ただ、私はせよと下された命を為すのみです」

「そうか……………お前は百田の下に入つて長かつたな。では何か、我々にとつて益となる情報を言つてみる」

「申せません」

「何だと……………お前は自分の立場が分かっているのか？」

「無論、全て承知の上。しかし、これは面接。正式に採用されたわけではなく、現状は命に従う義理も御座いません。正式に採用され、命が下れば改めて調べた分を調べた分だけお伝えするのみ。それ以上は私には申し上げかねます」

更なる揺さぶりをかけるべく、三人は声色を変えて圧も増やしていく。

いよいよもって圧迫面接の様相を呈してきたが、文庫は圧に屈しはせず、滔々と己の領分を弁えた返答をするのみであった。

そして、思惑が何処にあるかは兎も角として、文庫の返答は面接する側にとつて完璧。10点満点中10点満点の評価を与えられる回答。

災禍も天音も永久も、百田家の内情など知りたかつたわけではなく、期待したわけでもない。単に試していたに過ぎない。此処で百田の情報を語り出そうものならば逆に落としていた。

口の堅さはそのまま信用に値し、論理的な回答に矛盾はなく頭の回転が速いことを証明し、義理と道理を通す性格を仕事へ姿勢を示している。

これならば、才能や能力がなくとも十分。プロとしての自覚と矜持を持ち、越えてはならぬ一線を弁えた一流だ。三人が想定している小太郎が求めるラインも余裕で越えている。対魔忍としての実力も、かつてを知る災禍と天音共に文句はない。

されども、生憎と採用はできない。

当初の予定通り、面接は既に終了している。これで採用しようものならば落とした者に示しが付かず、不満が溜まる。

況してや、文庫は弾正の元側近。小太郎の預かる家と部隊として急激に成長している上に、弾正が日本へと出戻ってきたタイミングで懐に入れようものならば、好機と見て余所の家が首を突っ込んできかねない。

これで啓治、悟、無形級に替えの効かない能力でもあれば話は別であるが、文庫は優秀でこそあるがいくらでも替えが効いてしまう。採用する利益と不利益の釣り合いが明らかに取れていない。

「結果は追って伝える。百田の者を通すか？ 問題があるようならば直接伝えるが……」

「あ……ああ、いや、その……」

天音の口調は無機質な感情の起伏のないものであったが、それは明らかな気遣いを含んでいた。

独立遊撃部隊が功績を積み積むほどにふうま一門の再興は早まり、また家も巨大になっていく。今は不可能であっても、これより以降は分からない。

そうなった際には、まともな元ふうまを受け入れることになる。無論、文庫もまともに分類される人材。此処で必要以上の悪印象を与えるよりも、気遣いを見せることで後の反応を良いものにしようという目論見であった。

しかし、文庫は天音の気遣いに気付いているのかいないのか。

面接の受け答えは完璧、言い淀みもしなければ迷いもなかったにも拘わらず、視線を泳がせ妙に歯切れが悪い。誰の目から見ても明らかに狼狽を示し始めた。

その狼狽振りは面接官役の三人ですらが顔を見合わせるほど。ロッカーの中の小太郎も同様である。

天音の気遣いは本物であり、文庫に何らかの思惑があったとしても狼狽するような発言ではなかったのだから。

暫くの間、言葉にならない声を漏らしたまま俯き、口を開こうとしても言葉が出て来ないと言った様子を繰り返していた文庫であったが、やがて意を決したらしく顔を上げる。

「実は、今現在百田家に厄介になっておらず、放逐されたも同然の身でして、五車の外れにある廃寺で娘と生活しております。結果は其方に持ってきて頂けると……」

「……はっ……」

思い切った文庫の言葉に、三人の頓狂な声をハモらせる。

至極真つ当な反応である。百田側の思惑としては性格的にも能力的にも家の強化には申し分ない人材であったために受け皿となったかもしれないが、アサギや他の当主達として弾正の元側近を監視して

おくため。

長年、反乱や謀反の気配を見せなかつたからだとしても、百田家が勝手に放逐して良い訳もなく、アサギからの承認が必要となる。その場合、確実に何らかの情報がふうま一門へと齎される筈。

そもそも、放逐されるほどの何かを仕出かしていたとするのなら、その情報が耳に入つてこないのは余りにもおかしい。

一体、百田家と文庫の間に何があつたと言うのか。

三人はどう聞くべきかを迷い、大いに困惑していたのだが、それ以上到我慢のならない人間が居る。

「おい、待て。その話、詳しく聞かせろ」

「はっ！………え？　は、？　わ、若様———
!?!?!」

ガチャとロッカーの扉を開いて現れた小太郎であつた。

「成程ね、そういう経緯いきざしね」

「は、はあ、お恥ずかしい限りで」

面接に集中し過ぎていたのか、小太郎の隠形が卓越していたのか。この場にいるとは思考を掠めてすらおらずに狼狽しきる文庫を落ち着かせ、ポツリポツリと語られる佐郷おやこ父娘の現況を聞き出ししていく。

「鶴を嫁に寄越せと……」

「は、はい。手前味噌ですが、妻の影響か、鶴は器量良しの娘でして百田の中でも引く手数多。いずれはこうなると思っていたのですが……」

「まあ、アレならなあ。因みに、相手は誰？」

「……………分家の直人殿です」

「ああ、あの自分の行いで当主になり損ねたクソダサイ奴」

「よりにもよって、ね……」

どうやら、百田家内部で文庫の一人娘である鶴に結婚話が持ち上がったらしい。

小太郎も鶴については知っている。母が存命の頃には、佐郷夫婦と共に挨拶へやってきた事もあった。

特別親しいわけではなかったが、幼いながらも大人顔負けの礼儀作法を身に付けた少女は記憶に残っている。

今現在は接触などなく、五車学園で擦れ違っても会釈をする程度、噂を耳にする程度。

それでも鶴の見目麗しく、立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花を地を行く少女であるとは知っている。

性格も、常に相手を立てることを忘れず謙虚。やや冷たい印象を受けることもあるが、柔らかな微笑みは男受けも女受けもいい。

確かにそのような少女であれば誰かに見染められるのは時間の問題。

ただそれだけであれば文庫も百田家との仲に決定的な溝を生むような断り方をしなかった。鶴が望みさえすれば、喜んで嫁にも出しただろう。

小太郎と災禍の見せた反応の通り、問題だったのは話を持ち掛けてきた相手。

百田 直人。

分家の出でありながら、一時は次期当主候補として名の挙がっていた人物だ。

優秀な火遁使いと排出し、抱えている百田家の中であって、一際優れた火遁使いとして知られる若き上忍。

しかし、当代の当主が死亡すると、一時的に当主代行として復帰した先代・百田 幽玄が指名したのは孫娘である百田 里奈子。

自らの血筋を当主に据えるのは当然であると同時に幽玄曰く、孫の才能はアサギすら超えている、とのこと。その言を信じるのならば、何ら不思議ではない。

直人が当主に選ばれなかった理由はそれだけではない。

現在、対魔忍内部で優秀、有力視されるのは大半が女性であるにも拘らず、男を立てられない女は死ねばいい、と公言して憚らない露骨な男尊女卑主義。身内すら嘲り笑う性格の悪さ。家の外でさえ粗相をした女中を平気で殴る始末。

幽玄の育った時代、活躍した時代もそうした風潮は当然視されていたであろうが、今はアサギが頂点。男と女のパワーバランスが変化していることは重々理解している。

その最中で、直人を当主に据えれば他家との関係性が崩壊しかねない。仮に里奈子に才能がなかったとしても、政治的な理由もあって直人だけは選ばなかった筈だ。

よって百田家内部は相当不穏な雰囲気漂っているだろう。

文庫は語らなかつたが、直人が見下している女の里奈子に頭を下げる筈もない。里奈子と直人のどちらを擁立するかで派閥が発生してしまっているに違いない。

その中で、直人が鶴を嫁に迎える理由など知れている。

監視対象と言えども、反乱以後は一貫して対魔忍として、百田の一員として尽くしてきた優秀で分際を弁えた文庫を自らの派閥に取り込む腹積もり。加えて、相手を立てるを知る鶴ならば、直人が気に入るそう。

これまで平身低頭して文句も言わずに仕えてきた文庫であったが、妻に託され、目に入れても痛くはない一人娘を寄越せと言われれば黙っていられない。

「……で、どうにかこうにか躲してたが、どうにもならなくなって逃げた」と

「いえ、初手からふざけるなどぶん殴ってやりました」

「頭回るのにどうしてそんな衝動的な真似すんの??？」

「よくやったぞ、佐郷！ それでこそ家族！ 貴様こそ真の父親……！」

「分かってくれるか、天音……殿お！」

「フアミキチ同士で共感すんのやめてくれる??？」

文庫と天音。両名ともに経緯は違えども家族という共同体に明確な理想を持ち、何よりも優先する気質。気が合うのも無理はない。

何やら不穏な共感を見せる両者に小太郎はげんなりとし、災禍と永久は呆れ気味だ。

「でもどうして廃寺で生活なんかを？ 娘もいるでしょうに」

「如何に弾^{クズ}正の元側近とは言え、給与は出ていたでしょう？ 貯蓄もないわけではないでしょう……」

今現在、直人との縁談を力任せに蹴った文庫と鶴が百田家直人閥に恥をかかせたにも拘らず、放逐という比較的穏当な対応をされているのは、恐らくは幽玄の取り計らいであろう。

あの老人は政治感覚に優れているわけではないが、道理を弁えている。力任せに娘を奪われそうになった文庫の気持ちも理解している上に、これ以上直人の力を増やすような真似も、内部に敵を作りたくもあるまい。

少なくとも、幽玄の目の届く範囲においては佐郷父娘に手出しは出来ないように動いている。でなければ、鶴を手籠めにしようとする輩が現れ、廃寺で生活など出来はしない。

しかし、永久と災禍の疑問も尤も。

廃寺などで生活せずとも五車には安い賃貸はいくらでもある。娘を第一に考える文庫が、子のための貯蓄を怠るとは考え難く、有事と

して其処を切り崩せば人並みの生活などいくらでも出来るはず。それがどうしてまた浮浪者同然の生活を送っているのか。

「そ、それが籍はまだ百田家になっているらしく給料も受け取れず、口座も凍結され……」

「嫌がらせだな。あの金髪イキリクソ野郎、他にやることないのか？」
「どうしますか若。処しますか？ 処しましょう！」

「天音くん、判断が速いの良い事だけど君はもうちよつと自分の行動にブレーキをかけよう！ なっ！」

問題の要はやはり直人閥にあり、同時に対魔忍の給与の支払い形態にあつた。

対魔忍の給与は基本的に公務員と同じく国の予算から支払われる。

大まかな流れとしては、会計課からアサギに必要な予算が提出され、アサギの承認後に山本長官に伝えられ、政府とのやりとりで最終的な年間予算が決まる。その後、定められた予算の中から給与を含んだ金が各家へと割り振られる。

かつては会計課が個人個人に査定や危険手当を含めた個人に向けて支払いを行っていたのだが、曲がりなりにも相応の人数を抱える組織であつたが会計の出来る対魔忍など早々存在しなかつた。

お陰で会計課はオーバーワークが極まり、当時は給与の計算ミス、未払いが多発。その弱り目を狙って危険手当の虚偽申請や横領も多発。その上、アサギがトップでなかつたのを良い事に、井河長老衆が金を握る悲惨な有り様だつた。

そんな状態でトップに立ったアサギは無論、頭を抱えた。

アサギ自身、ただの技量と性格で見染められた故に金の計算など出来るわけではなく、そもそもアサギ一人でどうにかなる仕事量ではない。

其処で右腕である九郎、アサギが後見人となつた小太郎が案じた一計が、大量の人員を抱える各家に給与の計算を任せてしまう方法。会計課から個人ではなく、会計課から各家、各部隊の大きさに応じた予

算を割り振り、其処から更に個人へと支払う形態に切り替えたのだ。これにより会計課の仕事は大幅に軽減。給与の計算は小さい家や家を持たない個人に限られ、各部隊や全体の金の流れに目を向けられるようになり、人為的なミスはなくなった。

その分、各家が金を自由に出来る機会ができたため横領は増え、当主の気分次第で末端の給与が悲惨なことになったのだが、余裕の生まれた会計課はスキルをメキメキと身に付け、厳しくそして容赦なく金の流れを監視している。

多少チヨロまかす程度であれば多目に見るが、大き過ぎる使途不明金、酷過ぎる給料未払いが分かれば即座に家に立ち入り調査が実行された上に、事実として確認された場合はガツツリと予算が削られてしまい、各家も完全に好き放題に出来るわけではないのだ。

「会計課に掛け合ったか？」

「それは勿論。しかし、百田から話は伝わっておらず、現在は調べている最中らしく……」

「クソ野郎が話し止めてやがんな。お前、甚内とは同年代で仲も悪くなかったろ、そっちは？」

「それも考えましたが、二車家が反乱を起こした今、私が紫藤家に顔に出すのは、甚内殿へかける御迷惑を考えると……」

「他のツテやアサギへは……」

「蜂矢は知り合いがおりますが、あの家は……他の者も耐え難きを耐えている最中、頼ろうにも頼るわけにはいかず……アサギ様に直談判も流石に……」

「あーあーあー、あーもーあー！」

文庫の悲惨な状況に同情したわけではなかったが、やれることはやれる範囲でやり尽くしたことを悟った小太郎は頭を掻き巻る。

彼と似たような立場、似たような状況に置かれた者の辿る末路はそう多くはない。運良く問題が解決するか、野垂れ死にする前に何処ぞの家へと奴隷同然の待遇で入るか、全てがどうでも良くなって抜け忍

となるか。いずれにせよ、明るい未来は待っていない。

こうしたことがあるから抜け忍が減らない、と小太郎は怒りと嘆きで頭が爆発しそうな思いだ。

実際、詰まらない意地の張り合いで足抜けする者は少なくない。大抵は家同士の権力争いに敗れて野に下るパターンだが、文庫のように家の思惑に翻弄された挙句、本人に全く非のない形で五車を去らざるを得ない場合もある。

お陰様で対魔忍の屋台骨はボロボロになっていく。自己の欲望に従って去ったのならは何処で野垂れ死のうが構いはしないが、組織にとって有用な人材が下らない理由で失われるのは余りにも痛過ぎる。

「そして、どうにもならなくなって、というわけか。しかし、貴様が任務でいない間、鶴はどうしている。大丈夫なのか？」

「直人殿がどのような手段に訴えるか分からない以上、対応はしてあります。私がない間は、友人の家に御厄介に。私も御両親方に頭を下げて回りました。快く……」

「確か、鶴も面接に来ていたわ。しかし、若様率いる独立遊撃部隊に入ろうとは、本当に後がないのね」

「此処最近の若様の御活躍は耳にしておりました。御迷惑とは分かっていますでしたが、他に手もなく……」

「まさかとは思うけど、そのスーツ……」

「鶴が用意してくれたのです……！ 友人の父御が処分するから使ってくれと下さったものを手直しして……！」

「おい、顔面から悲しさと切なさど喜びが漏れ出してんぞ」

「これは失礼を、感情が高ぶるとオイルが漏れ出すのです」

「いや、スーツが汚れちゃってる」

「ああおおおおお、鶴の用意してくれたスーツがあ——！！」

鶴が余りにも優しく成長した歓びと父親としての情けなさが極まってガタガタと震え、身体の彼方此方からぷしゅーぷしゅー排熱し、目からオイルが漏れ出す有り様。

もう全身義体化してから10年以上は立つのだ。特務機関「G」の技術で造られた身体は、如何に日本の最新技術が集まる対魔忍であつても最低限のメンテナンスが限界。

耐久年数が限界に近いのか。或いは父親として情が極まり過ぎて機械にまで影響を及ぼしているのか。どちらにせよ、大変面白い絵面であつた。

しかし、何とまあ間が悪いことか。

これが骸佐の反乱前であれば、文庫も此処まで思いつめなかつた。ふうま一門と反乱の二文字が皆の頭の中で結び付けられてしまつている現状では、自身の存在がどれほどの不穩を齎し、重荷となるか分かつてはいる。分かつてはいたが、他に手がないのである。

正に苦渋の決断だ。

そもそもふうまが厳しい状況に立たされているのは弾正のやらかしが発端。

更に責任は過去の文庫にあり、弾正から遠ざけられて不遇の少年時代を送つてきた小太郎にその責任を押し付けるような形となるのは彼としても避けたいところ。

だが、この選択をせねば自分は兎も角として、鶴の生活が脅かされてしまう。苦悩と懊悩の果て、文庫は個人としての恥を投げ捨て、父親の尊厳を選択した。

実に尊い決断だ。

自分が恥知らずと罵られることも覚悟の上で、娘に憂いなく生活させることを選んだのだから。だが――

「佐郷……」

「は、はい」

「残念なお知らせだが、今回、独立遊撃部隊で元ふうまを採用するつもりはない」

「……………え？」

小太郎に名を呼ばれて居住まいを正した文庫であつたが、明かされ

る衝撃の事実には掛け値なしにフリーズした。

ようやくとの思いで絞り出した呻き声は余りにも痛々しく、思わずふうま三女傑であっても目を逸らしてしまうほど。

どうやら、文庫も鶴にしても独立遊撃部隊が人員を募集した経緯を調べる暇がなかったらしい。

金もなく、その日の食事にも困る有り様なのだ。全身義体化した文庫は食事など必要ないが、鶴はそうもいかない。困窮極まれば、生活的にも精神的にも余裕はなくなっていく。

悲しいかな、自分達の状況にしか頭がなく、小太郎の思惑にまで頭が回っていないかった。

「は……は、……ふふ……ど、どうします、かな……い、いつそのこと、鶴を連れて抜け忍となるべく失礼するか……」

「おい待てエ。(優秀なお前等親子が勝手に五車から)失礼すんじゃねえ」

「し、しかし……!」

気の毒なほど身体も声も震わせる文庫は余りにも悲惨過ぎて声すら掛けられない。

追い詰められた彼は聞かれてしまったら追い忍を差し向けられるだろうに思わず最悪の選択肢を口にしまっていた。

しかし、小太郎はこれに待ったをかける。

文庫はまともで真面目なふうまだ。最悪、どうなったところで構わないが、抜け忍になられてしまうのだけは拙い。

ただでさえ厳しい立場の元ふうまが、家族の為に文句も言わずに仕え続けた文庫の足抜けを知ればどうなるか。あの佐郷でさえ、と諦めが増し、まず間違いなく抜け忍は激増するだろう。

抜け忍となった者はそのまま生活できるわけもなく、忍の技で飯を喰っていく他ない。傭兵となるか、闇の組織の用心棒となるか、はたまた弾正のところ流れるかのいずれかであろうが、どれであろうが対魔忍内部でまたしてもふうまの悪評が広まってしまう。

これ以上、弾正のやらかしによつて尾を引く苦勞が増し、やらねばならない仕事の難易度が上がるのは小太郎としては御免被りたいところであつた。

「言つた通り、部隊には採用はしない。だが、助けてはやる。永久、お前ちよつと災禍と天音から離れて一人暮らししろ」

「はあ——ああ、成程、そういうことですか。では、すぐに用意致します」

「ど、どういふ……？」

（後は幽玄の爺さんと密に話を通して、佐郷親子の放逐を円満なものにした。家の中が二つに割れてちや孫の立場も脅かされるし、直人閥を潰せるかもと匂わせれば御家の安泰と監視対象の離脱の天秤、首を縦に振らざるを得ねえ。無形を使って書状でやりとりしよつよおつと）

考えが読めなかつた文庫は困惑したものの、逸早く小太郎の思考をトレースした永久は恭しく頭を下げると教室を後にしていく。

現当主である小太郎、かつてから仕えてきた災禍や天音が弾正の元側近である文庫を助けるのは、あらぬ疑いを掛けられ、元ふうま一門は何故佐郷ばかりを、とやつかみを抱いて佐郷父娘の立場を悪化させかねない。

しかし、現在ふうま宗家に仕える者の中で比較的新参かつ文庫と面識のない永久が助けるならばどうか。

真つ当な思考ならば、見ず知らずの他人を助けているのだから、単なる同情と憐憫故の行動と取るだろう。

更に現在、共に生活する災禍や天音から離れることで、ふうまの総意ではなくあくまでも個人での意思、行動とも判断される。

これならば元ふうまのやつかみや妬み嫉みを抱かせず、なおかつ百田 直人への牽制にもなる。

もし借りに、元ふうま一門や直人閥の人間が、小太郎の下へやつてこようものなら——

『おい、ふうま！ 文庫の親子を匿うなど貴様、何のつもりだ！』

『は？ 何のことかさっぱり分からんのだが??（すつとぼけ）』

『とぼけるな！ お前のところの永久という小娘が親子と共に生活していると聞いている……！』

『えく？ ちよつと事実確認取りますねえくくくく。あー、永久くん、君んところ佐郷親子いんの？ あーはいはい、成程、そういうことね。ほいほーい（満面の笑み）』

『どうだ！ 何か申し開きがあるなら言ってみろ！ また二車と同じく反乱など企てているのだろう！』

『申し開きはなーんもござんせん、ウチの新参が勝手にやりました。ごめんねごめんねえくくく。ところで佐郷親子なんか変なことになつてんだけど、アサギに報告しときますねえくく。アサギくくくくくくく（全力疾走）』

『アツ、ちよま』

『私が来た（最強無敵おば、お姉さん来襲）』

『あつあつ、あつ』

『百田家招集。話を聞かせてくれるわよねえ幽玄？（につこり）』

『申し訳御座いません！ ウチの者達が勝手をしていたようで！（裏取引による予定調和）』

『私を通さずに勝手に許せないわよねえ。身内を苦しめる輩が集まっているような閥は解体で。百田家の権力は里奈子が正式に家を継ぐまで幽玄に一元化を命じます。はい、閉廷！ 解散！ 貴方達もう帰っていいわよ！』

——と、こうなる。

佐郷親子を助けつつも、直人閥を解体してしまうことで比較的まともな幽玄に百田家を安定させる恩を売り、同時に不穏分子を排除する一石三鳥の仕掛け。

無論、こうもストレートに事が進むとは限らない。直人がそれを見

越している可能性もあるが、永久が善意で行っている行為故に介入する大義名分がなく、どのような形であれ介入すれば小太郎に事が知られて自動的にアサギにまで話が持つて行かれてしまう。

そもその目的である佐郷親子への手出しを止められるだけでも十分。

隠居していた影響で家を掌握しきれていない幽玄も、閥争いへ向けて方が一の備えを得られる以上、協力は惜しむまい。上手く立ち回り、直人閥を排除できれば百田家そのものを親ふうま派に転ばせることすら可能だろう。

思いも寄らぬ面倒事が転がり込んできたが、ただでは起きぬ辺り小太郎らしい。自分の意図していなかった状況すらも利用するのも、彼のやり口の一つだ。

「それから佐郷。独立遊撃部隊に採用するのは無理だが、別の部隊になら口利きしてやれる。オレが関わっているとかわれたくないから、部隊の方が声を掛けてきた形になるが、どうする?」

「ぜ、ぜぜぜ是非!!」

それだけでは終わらない。

直人閥が手を出してこないならば、佐郷親子の抱えた問題は永遠に終わらない。

会計課の内部に直人の息がかかったものがある可能性も否定できない以上、延々と金銭を得られない生活が続ける羽目になりかねない。そうなれば延々と永久と小太郎に世話にならねばならず、親子の負い目は増していく。

其処で別部隊からのスカウトという形を取ることで、百田家に籍を置いたままでも部隊で働き、給与も得られるようになる。

問題は百田が部隊の引き抜きを納得するのだが、幽玄へと先に話を通しておけばいい。幽玄は幽玄で今までよくやってくれた、其方の部隊でも頑張ってくれと言えばよく、直人閥から突き上げを喰らっても、お前達は何故其処まで奴に拘る、と事情など何も知らぬ顔ですつ

とほければいいだけである。

問題があるとするならば――

「そっかあ。じゃあ、そういうやる気に満ち溢れた奴は生き地獄で頑張って貰おうねえ」

「え？」

小太郎が文庫のような優秀な輩を渡す部隊など、ただ一つしかなかったことであろう。

――
――
――
――
――

「今回の任務は敵に捕らえられた味方の救出だ」

「またかよ……」

「この間は榎田って子だったっけ……」

「え？」

後日、文庫は声の掛かった部隊の移動車両に揺られ、東京郊外へと向かっていた。

陸上自衛軍より払い下げられた73式大型トラックの中には、対魔忍らしからぬ格好の男女が複数人。対魔忍そのものの格好をした文庫の顔見知りの姿もあった。

部隊を設立した隊長は現在は海外で任務中故に不在。

替わって指揮を取るのには隊長とレンジャー部隊において同期であった副隊長の長谷部。淡々と今回の任務内容を説明していく。

部隊員は内容を聞くと頭を抱えるか、うんざりとした表情で乾いた笑みを浮かべていた。

それでも手にした自動小銃の手入れも扱いも完璧であり、相当な死線を潜り抜けてきたことを物語っている。

対魔忍内部で銃を戦闘の主体にした部隊は只一つ——アサギの右腕である九郎が自衛軍の元同僚を引き抜いて設立した九郎隊だ。

「新入りの佐郷は囨役だ。施設正面の門を爆破したら、出来るだけ長く敵の目を引き付けてくれ。オレ達は近接も出来んことはないが流石に対魔忍ほどじゃないからな。正直、助かる」

「え？」

「……………鈴木と佐藤は佐郷の援護を。オレと宮田、早瀬は裏手のAポイントから壁を爆破して侵入。救助対象を見つけ次第、脱出する」
「救助対象が見つからない場合は？」

「可能ならば敵を殲滅。その後で施設を調べる。不可能ならば敵を一名だけ生け捕りにして吐かせる。後に情報を精査して再アタックだな」

「はいはい、いつも通りの任務なわけね」

「気は引き締めておけよ。心配はしちやいがいな誰かがトチれば全員死ぬ。最悪、生け捕りにされてミイラ取りがミイラだ。榎島と天園あまぞのは何時も通り狙撃手スナイパーと観測手兼護衛スポッターだ。地図のCポイントから援護を」
「了解しました」

（ねえ、あやめ。あの人大丈夫なの？）

（大丈夫よ、腕は立つから。多分。きつと。恐らく。メイビー）

（初任務からこれとか、かわいいそ…………）

（だったら替わってあげなさいよ）

（それはむうりい。私は私のことで手一杯よ）

全員が手にしていたタブレットに記された地図と見ながら、長谷部の作戦内容を確認していく。

そんな中、文庫だけは自分の置かれている状況が理解できていない

のか、部隊に入ってからずっと同じ言葉を呟き続けていた。

長谷場はその呟きを黙殺する。

軍人である以上、近接格闘も身に付けてはいるものの本来は銃撃戦が主体。

しかし、狭く遮蔽物の多い日本では交戦距離はどうしても短くなりがちであり、頑強な肉体を持つ魔族は破れかぶれに無理やり距離を詰めてくることは少なくない。

酷い時には近くにあった車や鋼鉄製の扉を盾にして近づいてくることもあった。そうなれば嫌でも不利な近接格闘に持ち込まれ、分けの分からない異能や魔術に晒されかねない。

つまり、魔族との戦闘経験豊富かつ忍法も体術も達人級の文庫は喉から手が出るほど欲しかった人員であり、逃がす訳にはいかない。黙殺も仕方がない。

部隊員の殆どはいきなり最も危険な役所を任された文庫へと気の毒そうな視線を向けていたが、誰も助けようとはしない。

彼の替わりなどとても務まらず、任務任務で忙殺され続け、高い給料も使う暇さえない状態。余計な苦労は誰とて背負いたくはないだろう。

同じ元ふうま一門にして心願寺家に属する榎島 あやめは、任務でよくバディを組む天園に小声で語りかけられる。

天園はあやめと同じく女性であり、奇しくも同い年。女だてらに軍人をやっていたただけあって気は強いが、不思議とあやめとは気が合った。

忍法の関係上、観測手を必要としない狙撃手であるあやめも天園の腕を信頼しており、観測手としても護衛としても助けられたことは少なくない。

二人の結論も他の隊員と同様。同情こそすれ、手を出せなかった。そうこうしている間に降車ポイント付き、それぞれが徒歩で指定のポイントに向かって十分後――

『此方^{アルファ}α班。ポイントについて』

「了解。β班ベータも配置についたが、やはり監視カメラがある。Cチャーリー、頼む」

『了解。これでどう?』

「御見事。監視カメラの無効化を確認。正門に近付く」

「え?」

「ほら、行くぞ——!」

東京郊外にある、近隣に街も住宅地もない山中。周囲を森と高い塀に囲まれた施設が其処にはあった。

山を切り開いて作ったのか、正門の反対側は切り立った崖となつているノマド傘下にある組織の麻薬や金を隠しておく倉庫であり、組織の人間以外に存在を知られておらず、そのためか周囲を見回る警備らしき者もない。

囹役であるβ班からの報告に、崖の上に陣取つたC班のあやめは消音機によつて発砲音が極限までなくなった狙撃により、無駄弾なく監視カメラを全て無効化。

それを確認し、正門近くに身を隠していた鈴木、佐藤、佐郷の三名は身を低くしつつ周囲を警戒して進む。

同じ眩ししか漏らしていない佐郷であったが、気配の探りようといひ消し方といい手練れの軍人であり、九郎隊として苦労を重ねてきた二人ですらが舌を巻くほど。思考とは関係なく、機械の身体にまで染みついた癖のお陰だ。

「設置完了。何時でもいけます」

「え?」

『了解。予定通り、此方は其方に合わせて周辺アクティブミュートチャージヤー消音機を稼働させて突入する!』

『此方、C班。正門前に五名。内一名はオーガ、お願いね』

「え?」

「ついでに門の近くの連中を——おい、門を開けてくれ!」

「ああ? 今日搬入の予定なんざないぞ……つたく、どうなつてや

がんだ」

『3、2、1——』

「え？」

ブリーチング
突 入用の爆弾を正門に取り付けた鈴木は続いて鉄扉を叩いて、門の向こうにいる敵に声をかけて惹きつける。

あわよくば爆破に巻き込めればよし、そうでなくとも敵が近づいていればいるほどに文庫が得意な間合いで戦えるという思惑であった。

あたかも文庫の新たな戦いを告げるかの如く、耳を劈く爆音が鉄扉を吹き飛ばした。

刹那、ようやく現実を正しく認識した佐郷は、施設の内側に向かって不快な金属音と共に倒れていく鉄扉に向かって駆け出していた。

頭に浮かぶのは、独立遊撃部隊ではなかったものの誉れ高い九郎隊にスカウトされたことを喜ぶ娘の笑顔、そして最後まで己と娘の身を案じていながらも安らかに息を引き取った妻の死に顔。

佐郷 文庫は施設内へと粉塵を突き破って進みながらも、新たに決意する。

一人の対魔忍として外道を討つだけではない。娘の笑顔と生活を守るため、妻の最後の願いを叶えるために、全力でお父さんを遂行すると——！

「どけえ！ 私はお父さんだぞ!!」

『今回の救出対象、貴方の娘さんじゃないわよ!』

「ウオオオオオオオオオオオオ——!!」

「うおっ、うお……っ、つえー、お父さんつえー」

「だーっはっはっはっはっはっ——!!」

こうして、小太郎くろろうにんの下に好きこのんで苦勞しにきた男の新たな戦いが始まった。

お父さんと化した文庫は正に鬼神。あやめ達や九郎隊の面々の援護射撃もあって、無双状態のまま救出どころか施設の制圧までいっ

た。

それによつて九郎隊に更に頼られ、逃げられない状態になつてしま
うが、当人には関係なかつた。九郎隊の余りの多忙さに五車に帰れ
ず、娘の顔を見れないと嘆くのはもう少し後の話だつた。

頑張れ、佐郷 文庫！ 頑張れ、全身義体お父さん！

君が苦勞すればする分だけ、娘に明るい未来が待っているはずだ！

鶴の恩返し編

蛙の子は蛙。鳶が鷹を生む。正しいのはどっちなんだらうね？

佐郷親子を保護してから二週間。

文庫が五車の外で九郎隊と共に迫りくる任務の数々によって悲鳴珍道中を送っている頃、生き地獄へと叩き落した張本人は寔れ果てた表情で歩いていった。

時間は放課後。陽光が傾く中、覚束無い足取りで帰路についていた。

既に無形を使つて幽玄と極秘裏に書状でやり取りを行っており、直人閥が佐郷親子に対して力業に訴えれば即座に解体まで持つていけるように蜘蛛の巣の如く策を張り巡らせてある。

しかし、直人も其処まで馬鹿ではないのか、或いは様子見に徹しているのか、今のところ動きはない。小太郎としてはこのまま有耶無耶になってくれても構わなかったが、そうもいかないだろう。

人は一度手に入れたと思つたものを失うことを、尤も惜しく感じる。これは心理実験で証明された歴然とした事実である。直人にとっては当主の座と鶴がそれに当たる。簡単に諦めはしないのは目に見えていた。

ただ、小太郎が寔れている理由は其処ではない。

それはこの二週間で立て続けに入った独立遊撃部隊の任務が原因であつた。

任務内容自体はそう難しいものではなかった。ノマドの末端組織の壊滅が五件。囚われた仲間の救出が三件。海外に流出すると情報が入った魔界技術の奪取ないし破壊。

ヨミハラでの大立ち回り、エウリユアレーとの死闘、腐れ害獣どもの尻拭いに比べれば、可愛いものであつた。問題があるとするのなら、熟さなければならぬ数が多い上に、いつものメンバー以外の

助っ人が強制参加してきたことだ。

小太郎が望んでもいないのに急遽助っ人参戦する流れとなったのは、やはり面接の影響が大きい。

小太郎自身や面接官を務めたメンバーのところに文句を言いに行ってくる、殴り込みに来る程度であれば逃げるなり、部下に任せればよかったが、賢しい者はよりにもよってアサギのところへと直談判に行く者が現れるばかりではなく、各家から圧力をかけてくる始末。

一人動けば三人動く、三人動けば十人が動く、十人動けば——と、集団心理と民意とは恐ろしいもので、こうなってしまうえばアサギも対処のしようがない。

結局、騒ぎ立てる不埒者を納得させるために開かれたのが体験入隊。

独立遊撃部隊の比較的簡単な任務に同行させ、レベルの差を理解させて落選を納得させる。或いは何らかの条件を設け、これを満たせた者を入隊、再接触させるつもりであった。

助っ人達には小太郎の命令は絶対と条件をつけた上でミーティングにも参加させ、あくまで作戦の主体は独立遊撃部隊の面々と説明した上で、いざ実戦——

『いやあー、あつはつは！ 参ったねこれは！』

『ちよ、ちよつと、誰もアンタの作戦も命令も聞いてないじゃないのよお!!』

『小太郎、笑いごとじゃないわよ……!』

『こ、これは流石に……!』

『ははは。いやあ、もうこれ笑うしかねえわ。見ろ、これがエウリユアレーン時のお前等の姿だ！ 爆笑もんだろ??!』

『………い、今は違うから。心入れ替えたから』』

『あつはつはつは！ ……はー、おい、獅子神、ちよつと忌神解放しろよ』

『そ、それは流石に……だ、駄目だと。そもそも、何で私が……』

『え？ 何となく。駄目？ ほら、いいじゃん。はよ。はよー!』

『か、顔が怖——あ、ちよつと待つて！ た、たいちよ、ふうま！
だめえ！ バイザーが外れちゃうう！ 本気じゃないのっ!!』
『小太兄、自齋に新しいトラウマ出来ちゃうから止めて』

エウリユアレー襲来の際、矢車という爆弾さえ爆発しなければ、き
らら、凜花、自齋の手綱を多少は握れていたにも関わらず、助っ人の
面々は作戦も命令も条件もなーんも守っちゃいないのである。

作戦開始と同時に助っ人達は突撃。

小太郎はだろうね、と腹の底から笑い、隊員達は啞然とするばかり。
そればかりか説明されていた作戦を無視して自分が勝手に立てた
作戦を進め始めた上に、逆に包囲されて危機に陥るまで至った。

予想はしていたとは言え、余りにも予想通りの悲しい展開に虚無を
見た小太郎は、自齋に憑りついた制御できない神様を解放させるべ
く、力任せにバイザーを外そうとする。

もう自齋の神遁を使おうとしたところに命令無視した助っ人が
割って入ってきた、という方向で不快な連中を皆殺しにした上で我々
は悪くありませんと言う気満々だった。

これなら、入隊前の独立遊撃部隊の面々の方がまだマシである。

ゆきかぜ達は根本的に突撃志向、力で訴えられたのなら力でやり返
せばいいという強者の思考を持っているだけで、相応の説明をすれば
話も聞かし、命令にも命懸けで従った。

暴発したきらら達にしたところで、説き伏せた状態までならば命令
を無視しなかった。あくまでもタイミングと相手が悪かったただけだ。
それに対してこの惨状よ。

小太郎も良い所を見せようとする気持ちは理解できた。より良い
作戦があるのなら其方を実行したくなる気持ちも理解できる。

隊長である己を舐め腐っているからこそ、結果さえ出せばどうとで
もなる、という体験入隊の意図を全く意図していない破綻した理屈の
下に行動しているのも理解できた。

だが、踏むべき手順、熟さなければならぬ過程をすつ飛ばすのは
どういう理屈なのか。

過程と結果はワンセット。小太郎は過程がお粗末であれば、どれだけ結果が良くとも酷評する。逆に過程が良ければ、どんな結果であっても一定の評価はする。

しかし、過程も結果も暗澹たるものならば、どうすればいいのか分からない。きらら達のように言葉で論す真似すら出来なかった。

まあ、それでも耐えた。不満の殺到具合はアサギでも処理しきれない状態であったのは分かっていたし、アサギの立場が悪くなれば小太郎も引き摺られて酷い目に逢うのが分かっていたから。

一件目から既に面倒になっていたが、二件目三件目も同じ結果になってもまだ耐えた。四件目五件目でもビキビキしながらもまだ耐えた。

期待していたわけではない。諦めていたからだ。対魔忍は脳筋などではない。もつと悍ましい何かだ、と。しかし、迎えた七件目の任務で爆発。

ついに作戦の内容すら聞かなくなっていた助っ人どもの不意をついて忍法を使わせる暇もなくボコボコに殴り倒したのである。

これには任務に同行していた凜子と紅も頭を抱えたものの、助っ人達の余りの酷さと小太郎が半泣きになっていたので止めることさえ出来なかった。任務は三人だけできっちり始末をつけた。

その件以後、助っ人参戦はなくなった。

小太郎がアサギに泣きついたのではなく、次に同じ事が起これば今度は助っ人達を皆殺しにしかねなかったからだ。

そんなこんなで今にまで至るのだが、アサギから完全NGが出されたにも拘わらず、ワンチャンすらない奴等がしつこく付き纏ってくるわ、独立遊撃部隊の内情を知りたい老害どもはチクチクと突いてくるわ。

小太郎のメンタル的な疲労と苛立ち、殺意は全く衰えることを知らない。

加えて言えば、今回振られた任務は妙な点多かった。

小太郎は作戦の内容を事前に外へと漏らさない。元々持ち前の猜疑心から作戦内容が外に漏られた際の危険性を考慮し、アサギにさえ

人員は兎も角として作戦の内容は明かさない。アサギもまた水城夫妻、親子を狙った淫魔王の策謀と魔の手は政府内部にまで伸びているのを考慮及び小太郎への全幅の信頼しているから納得していた。

しかし、どうにも今回の任務、作戦へと参加する人員が漏れていた節がある。

それは襲撃する敵が、独立遊撃部隊の隊員に対する対抗策をそれぞれ用意していたからだ。

無論、とても万全とは言い難い。

凜子の空遁、紅の人魔合一は米連の科学力や魔界技術でも対抗することすら困難である。

しかし、比較的対抗し易いゆきかぜの雷遁への対電及び対電磁波装備、自斎の神通が視界が発動のキーを知っているかのような光学迷彩装備、きららの冷氣に対応する強化外骨格と凍結予防処置、凜花の煙遁の弱点である氷結を可能とする場所と兵器、紫の不死身の肉体を無力化する毒物。

無論、小太郎が情け容赦なく鍛え、魔改造を繰り返している面々だ。その場凌ぎのような対抗措置^{メタ張り}では揺るがない。真正面からだろうが搦手からだろうが、如何様にでも対処できるまでに成長している。

ただ、いずれもが作戦投入人員を知っていなければ、此処まで多様な対抗措置を用意しておける筈がないのも事実。

作戦投入される人員を知った政府関係者か、或いは対魔忍内部に情報を漏らしている輩が居ると見て間違いない。

或る意味において助っ人などよりも遥かに不愉快な連中が蠢いている、その事実——

「許さねえ、絶対に許さねえ……殺してやる……殺してやるぞ、桐生

佐馬人……!」

『オレっ!?!』

ヘイトを溜めているのは政府関係者や対魔忍の一部の筈なのに、殺意を向けられているのは全く関係のない桐生ちゃん。空の彼方で驚

いている彼が見えるかのようだ。

対魔忍は仮にも仲間。命令違反程度で粛清する訳にもいかない。と言うよりも命令違反で粛清していたらあつと言う間に組織としての体を保てなくなる。

その点、桐生は捕虜という扱いなのでその限りではない。技術面で有用かつ持ち前の不死性で殺すのが手間だから放置されているに過ぎない。小太郎が勢い余って殺してもテヘペロで許されるラインなので選ばれた。

殺せなかつたとしても、如何せん不死である。ストレス解消をする相手には丁度いいとも言える。最悪、代わりとして姉の方を引き摺ってくる手もある。桐生の命は何処までも軽く、サンドバッグよりも扱いが悪かつた。

これは小太郎の高度なヘイト管理。

手を出したくても出せない相手に向けるのではなく、手を出しても構わない相手に存在しない記憶を作り出して、頭の中で経緯を捏造した拳句にヘイトの向ける方向を操作する。別名を八つ当たりとも言う。

「ねえ、君がふうまくん？」

「……………」

その時、桐生へと並々ならぬ殺意を向けて道を行く小太郎の前に、一人の学生が現れた。

紅いネクタイに、紺のスカートと黒いタイツ。御洒落のつもりだろうか、シャツの右胸には肉球のアップリケが縫い付けられている。間違はなく、五車学園に通う生徒の一人だろう。

ショートボブの金髪に透き通るような碧眼。すつと伸びる鼻梁に柳眉。百人が見れば百人とも美人と答えるであろう上級生。

しかし、小太郎の表情は険しい。

美人など見慣れている。タイプも性格も選り取り見取りなほど周囲に揃っている。美人に話し掛けられたからと上機嫌になることも

赤面することもない。

寧ろ、警戒心が高まっていくタイプ。眉間に何重にも皺が寄るのも仕方あるまい。

「僕は穂稀　なお。僕は君を殺したいと思っっているんだ」

「ああそうかよ勝手にしろ馬鹿がツ!!!」

「えっ」

初対面の人間から向けられるにしては余りにも剣呑な科白であったが、小太郎は一步も止まることなくなおの隣を通り過ぎていく。

普通の人間であれば殺したいと言われれば、動揺するだろう。

荒事に慣れ切った対魔忍であれば眉を顰めて理由を問うか、やってみると逆に挑発するだろう。

だが小太郎は違った。

元々機嫌が悪かったことに加え、彼にしてみれば言動から何から相手にするどころか会話をするのも馬鹿馬鹿しい。

何を理由に殺したいのかは全く分からないが、心当たりは無数にある。

弾正や骸佐の反乱の責を現当主である小太郎に求めているかもしれない。或いは何らかの任務で恥でも搔かせたか。それとも人には明かせないあれやこれやで被害を及ぼしたのやもしれぬ。

命を狙われる理由があり過ぎて、相手側を調査するか説明されなければ逆に特定が出来ないほど。

だが、小太郎にはどうでもいいことだ。何時、何処で、誰に、どんな理由で殺されようが何の文句もなく、全ての覚悟を済ませている。寧ろ、その程度の覚悟なく手を汚すのも、誰か殺すのも、小太郎にしてみれば狂気の沙汰である。

だからなおの殺したい対象の目の前で殺意を宣誓するような馬鹿な真似は不愉快極まる行為であった。

殺したいのなら、すぐにでも殺せばいいだけ。殺す根拠と許される理由があるのなら、迷わず実行した方が効率的。なのはどうして、

対象の警戒心を上げるのか。

舐めやがって。やりたきややりやあいだろうが。そもそも本気で殺す気あんのか。馬鹿かよ。死ねよ。

そんな事を考えながら、あらゆる許容範囲を超えていた小太郎はそれ以上相手にすることなく足早に去っていかうとする。

その様になおは唾然とした表情をしていたが、去っていく背中に慌てて追い掛ける。

「ちよ、ちよつと待ちなよ。ねえ、普通は其処で何かを察するとか、そうでなくても聞き返すだるうに、君はなに——あつ、ちよ、逃げた！ 足早っ！ ちよ、待てー！ー！！」

想定していなかった自体に狼狽するなおであったが、小太郎は全く取り合わない。

初手から「君を殺したい」などと言う者とはまともな会話になりもしない。何らかの別の目的があつたとしても、脅迫紛い、力に物を言わせぬやり方しか知らない輩など相手にするだけ時間の無駄。

そう割り切った小太郎は宣言した通りに好きにしろと駆け出した。なおも食い下がる先輩を完全に無視し、完全無欠の全力疾走に移行する。

逃げると決めた小太郎の逃げ足は対魔忍において最速。

足に自信があるわけでもなく、アサギのような加速できる異能を持つていないなおに追いつける筈もないのであった。

厄介者以外の何者でもない先輩にウザ絡みされた翌日。二度と顔を合わせたくもない小太郎は帰宅の時間をズラすことにした。

放課後、教室で時間を潰しては穂稀と名乗った先輩が殴り込みをかけてきかねない。かと言って、独立遊撃部隊の本部にいてもあの勢いだ、同じ結果にしかない。

よって久方ぶりに図書館で本を読んでいた。五車学園に蔵書されているものは全て読破済み。読書というよりも頭の中の記憶と本の上に書かれた事実の整合性を取る作業に近かった。

それでも単なる時間潰しにならず、有意義な時間に出来たのは、やり始めたら手を抜きたくても手を抜けない性分のお陰だろう。

遠く山の間が消えていく太陽は地平線付近を赤く染め上げ、空の頂点には暗い青の中で星が瞬いて薄暗い。

ボンヤリと廊下を歩いていた小太郎はやがて下駄箱へと辿り着き、上履きを脱ぐよりも早く足を止めた。

玄関口から差し込む西日で表情までは分からなかったが、誰かが立っていたからだ。

影のシルエットは直立不動のスカート姿。余りの不動振りに一般人なら何らかの怪異か幽霊と思ったかもしれない。

しかし、影は小太郎の姿を確認すると動き出して人であることを示し、小太郎もまた影の正体を察して動き出す。

「ご無沙汰しております、若様」

「オレをまだ若と呼ぶかね」

絵になるほどの御辞儀をして見せたのは夕陽に染められる長い銀髪を手の込んだシニヨンにして纏めた制服姿の少女。

最早、若様などと呼ぶほどの縁など何処にもなく、敬意など払う必

要性がないにも関わらず礼儀を忘れない彼女に、小太郎は靴を履き替えながら苦笑した。

彼女の名は佐郷 鶴。佐郷 文庫の愛娘だ。

これまで顔を合わせたのは片手で数えられる程度でしかなく、それもふうま弾正の起こした反乱以前の話。

それがわざわざ顔を出すなど、理由は一つしかない。

先日、九郎隊にドナドナ、もとい出荷、ではなく文庫を推薦した件と父娘を永久に保護させた件についてだ。

その場に居なかつた鶴ではあるが、父である文庫から事のあらまは聞いていたのだろう。

流石の文庫も経緯を口にしないまま、今日から見ず知らずの女性の家に住むからと言って娘の納得を得られよう筈もない。全てを包み隠さず、とはいかずとも最低限の説明は必要だ。

とは言え、鶴はそれ以上の言葉を口にはせず、頭を深々と下げたまま微動だにしない。

鶴も自らの立場を弁えており、噂や文庫による親の鼻屑目を差し引いても聡明であつた。

これまで不干渉であつたのは互いの身を守るため。今回の件に関しても「九郎隊への推薦」を、「九郎隊からの指名」という形にわざわざ変えたのも、周囲からの視線を考慮して、と察するのは難しくあるまい。

故に、礼の言葉は口にせず、挨拶だけに留めていた。

どれだけ感謝や恩を感じていようとも、何処に目があり耳があるのか分からない状態では小太郎の回した気遣いが全て台無しになりかねない。

だからせめて、久方振りに顔を合わせたかつての主君筋への挨拶に感謝の思いを込めて頭を下げるだけしか出来ない。

5分10分も過ぎた頃、鶴はようやく頭を上げる。

顔に刻まれたやや寂しげな笑みは母の遺した信念であり、今や佐郷家の家訓となつた「仇は倍返し、恩は百倍返し」を実行できぬ不甲斐なさ故だろう。

「独立遊撃部隊や若様御自身の噂は兼ねがね。御健勝なようでも何よりです」

「そりやどうも。そつちの方も元気そうだ」

「ええ、二週間前まではその日の食事にも困る有様でしたが、父が入隊してからは何の問題もなく」

「ふーん、良かったじゃん。で、それだけ？」

「いえ、少しお話を。申し訳ありませんが、お時間を頂いてもよろしいでしょうか？」

「まあ、別にいいけど……」

「ありがとうございますー！」

小太郎の考えていた通り、鶴が伝えてきた近況は分かり易かったが重要な部分を口にしてはいない。

傍目から見れば久し振りにあった親戚の挨拶。鶴や小太郎の動向を探ろうとする者も、不審は覚えても確証までは得られまい。

一人の人間としては言うに及ばず、対魔忍としても両親の教育が行き届いている様に小太郎は満足気に頷いた。

学生対魔忍は教育と経験の浅さ故に婉曲に物を伝え、察する術を知らない。敵に此方の意図を隠しながら味方に意思を伝える、或いは察することがまるで出来ていない。お陰で馬鹿正直に意見を伝えて手の内をバラす結果に繋がり、露骨な耳打ちで不審を買って危機に陥るなど日常茶飯事である。

その点、鶴との会話に不安はない。自身と味方の立場や状況を俯瞰的に把握した上で、共有する情報からでのみ辿り着ける範囲に言葉を絞っている。これならば、戦闘任務ばかりではなく潜入でも問題なくやっつけていけるだろう。

しかし、小太郎の顔は不意に歪む。急激に会話の雲行きが怪しくなってきたからだ。

事実はどうあれ、表向きには永久が佐郷親子の境遇を哀れんで小太郎の与り知らぬところで勝手に助けた体を取っている。

挨拶程度であれば周囲も珍しいと考えるか、疑惑を抱える程度で済むものの、距離が近くなればなるほどに小太郎の関与を疑う確率は高くなる。

他家から余計な詮索をされては面倒である以上、現状互いの距離は離れていた方が良いのは疑う余地はない。

にも拘らず、鶴の方から積極的に近づくような真似をしている。

小太郎としてはバレたところで問題がないわけではないが、それほど痛手ではない。万が一に備え、身を守る術も周囲を納得させるだけの言い訳も既に用意してある。

寧ろ、困るのは佐郷親子の方だ。たった二人しかいない佐郷家では身を守るのも精一杯。元ふうまから何故お前達だけと嫉妬を向けられれば、今以上に余計な孤立が生まれかねない。

目まぐるしい変化を見せた生活の中では何の備えも出来ていないだろうに、リスクを侵してまで近付いてくる理由は何なのか。

自身を陥れようとする悪意は感じない。在るのは敬意と感謝だけ。

このまま蹴つてもよかったが、これ以上付き纏われても面倒と考えた小太郎は嫌々ながらも鶴の願いを聞き届けることにした。

やや不安げだった鶴は了承の返事を聞くと、明るい笑みを浮かべた。

礼を述べると昇降口の扉を開き、小太郎が先に出るように促す。目の上の人間に対する行いのつもりなのか、男に対する行いのつもりなのか。

両親の教育が非常に厳格であったのが伺えると同時に、教育の内容そのものが現代からやや逆行しているのは否めなかった。

小太郎は気を良くするでも悪くするでもなく呆れ気味。

秘書の災禍、執事の天音、侍女の永久もよくやる行為ではあるが、基本的に自分の事は自分でやるべきと感じている小太郎にとっては日常で行うには過剰にしか映らない。

それでも当人がやりたいのならお好きなように、と何も言わずに校舎から一歩外に出た瞬間――

(視線が四つ……いや、五つか。しかし何だ、この妙な気配……)

肌に突き刺さる幾つかの視線を感じ取った。

五つの内二つは肌を焼くようなジリジリとしたもの。内一つは粘ついた情念を感じさせるもの。最後の二つは——
いずれに關しても歓迎すべきものではない。

視線を感じる理由は無数にあり、特定は出来ない。即座に危険に繋がるような殺意はどの視線にも込められてはいないが、見られている事実自体が小太郎にとっては不利益に繋がり、不快極まりない。

とは言え、視線の大部分は小太郎自身に何か目的があるのではなく、鶴へだろう。百田家直人閣からも目を付けられ、当人の見目も器量も良い以上は付き纏う輩が一人や二人いてもおかしくはない。

鶴は視線には気付いていない様子。

一先ずは完全に無視しておく。視線の主を探るなら、鶴の話聞いた後。油断しきつたところを捕まえるなり逆に後を追うなりすればいい。

「失礼致します」

「それで、話つて？」

「実は、わたくし私の友人の話なのですが……」

男の隣を歩くことすら非礼と考えているのか、鶴は一言断つてから隣に並ぶ。

校門へと続く道をゆるゆるとした速度で歩きながら、切り出したのは友人の話。

大抵、相談として振られる友人の話は実は当人の話、というパターンが多いが、どうやら鶴のそれは本当に友人の話であった。

小太郎が真実友人の話だと断定できたのは、鶴は何処か特定の部隊に属していないのを知っていたからだ。

鶴の友人は五車風紀隊の隊長であるようだ。

五車風紀隊は風紀の名が示す通り、主要な任務は五車の治安を維持すること。軍隊では憲兵に当たり、五車内での犯罪者に対して逮捕権を有している。

五車風紀隊はいくつかの部隊に分かれており、それぞれが独自に事件を調査しており、鶴の友人はそうした小部隊の隊長らしい。

「それで？」

「友人には父が五車にいない間、厄介になっておりまして。今回はその御恩返しを、と」

「ほーん」

「その折、友人が何やら悩んでいる様子。聞いてみれば、五車で起こった事件解決に行き詰っているようで……」

「ふ、ふーん」

「私も話を聞いてみましたが、生憎と力にはなれそうになく、そこで……」

「オレも力になれそうにないから帰るね——！」

「ああつ、若様お待ちになってください——！」

この話の流れ。どう考えても己も巻き込まれる、と判断した小太郎は即座に逃走へと舵を切る。

冗談ではなかった。

小太郎と独立遊撃部隊は名を上げ、注目されてはいるが新参も新参。他部隊にしてみれば目障りな後追いに過ぎない。そんな中で他部隊の仕事に首を突っ込めばどうなるか。

ただでさえ対魔忍は無駄にプライドが高く、部隊長や隊員となれば実績も重ねて更にプライドは高く積まれる。そんな人物達の領分に我が物顔で足を踏み入れれば、どう考えても無駄な小言とやつかみが待っているではないか。

堪らずに地を蹴った小太郎に対し、鶴もある程度を予想していたのか、すぐさま後を追い掛けてくる。

一度逃走を選択した小太郎に迷いはない。

後で、どうして娘から逃げたのですか？ 若様、聞いておられますか？ 若様？ と面倒な親御さんに絡まれるのは目に見えていたが、それでも精々二、三時間我慢をすればいいだけ。

此処で頼みを聞き入れてしまった場合、風紀隊が解決できない事件を解決するため、確実に数日は時間を取られる。

ただでさえ、仕事が多過ぎて面接で選んだ独立遊撃部隊の新人達と顔合わせすら済んでいないと言うのに、どちらを選んでもこれ以上の時間を取られるならば、前者の方が比較的ダメージは少なくて済む。

コタローは激怒した。

必ず、かの千辛万苦の苦勞から逃げねばならぬと決意した。

コタローには「苦勞は買ってでもしろ」などという言葉は分からぬ。コタローは対魔忍の苦勞人である。無辜の民を喰い物とする屑を陥れ、無関心に殺してきた。故に自身に襲い掛かる苦勞には、人一倍に敏感であった。

「———やあ、また会ったね、ふうまくん」

しかし、その逃避行を邪魔する者が校門の影から現れた。

現れたのは昨日、小太郎を殺したいとウザ絡みしてきた拳句、歯牙にもかけられることなく逃げられた穂稀 なおともう一人。

誰の目も引く美人であるなおとは対照的に、もう一人は右目を髪で隠した何処か影の薄い美少女であった。

よくよく見ればハツとするような美少女ではあるのだが、不思議と目を引かない。存在感がそもそも視界に入らないのだろう。一緒にファミレスへ入っても、何故か彼女にだけ水を配膳されないタイプと言えれば分かり易いか。

もう一人の少女は兎も角として、青筋を立てたなおを前にすれば流石に小太郎も足を止めざるを得ない。

先日、余りにも無体な袖のされ方をされれば、誰とて怒り狂おう。例えそれが、自身の発言によって招いた事態だとしても。何せなおもまた対魔忍。感情に任せて逃げて見せた背中から撃たれかねない。

前門のなおと謎の影薄美少女、後門の鶴に挟まれ、ようやく小太郎は自身が狩られる獲物だと悟る。

神通力染みた人物評価、先読みが出来る小太郎とて、何も思考が透けて見えているわけでも読んでいる訳ではない。それらはあくまでも所作や言動からその人物の生活や好み、人生を想定まで想定し尽くす人間観察という技能から齎されるものであり、決して読心術の類ではない以上、読み切れない思考というものがある。

(つ、つまり……！)

追い詰められた小太郎は、にこにことした笑顔で背後に立つ鶴へと鋭い視線を飛ばす。

鶴の狙いはこうだろう。

現状のまま家訓である恩返しを小太郎に決行してしまえば周囲に対する説明が付かず、不審不興を買ってしまい、折角の気遣いと恩情を無下にしかねない。

ならば、全くの別件——それこそ鶴自身の身から出た錆でなく、あくまでも仲介しただけの問題を解決して貰うのはどうか。

佐郷家と関係ない第三者の問題を持ち込む程度であれば、周囲も不審に思われども、不興には至らない。

最近名を上げてきた小太郎に、かつての縁がある故に頼っても不思議ではない、と思われただけだ。

これが文庫であれば反乱だ何だと余計な介入を招いたかもしれないが、小太郎も鶴も一代下つた世代。また親子揃って骸佐の反乱に一切加担していないと証明されている以上、文句は出ようとも無視しても構わないレベルに留まるだろう。

後は小太郎に問題を解決して貰うだけ。

そうなれば、恩を返すという大義名分が出来上がる。その時に、今回の件と親子共々救って貰った件をまとめて恩を返せばいい。

なおは難事件を解決できる。鶴は恩返しが出来る。小太郎は恩を百倍で返されてウハウハ。正に一石三鳥、win-win-winの

関係となるだろう。

(なるほど完璧な作戦っスねーっ！ オレが苦勞するという点に目をつぶればよぉ!! (涙目))

そう、鶴の作戦はその過程で小太郎が背負わなければならない苦勞を何一つ考慮していないのである！

御父様に聞き、鶴も見た若様の聡明さ、知的さならばこの程度の事件、苦勞には成り得ません！ と思っているのか。

苦勞をさせてしまうかもしれないのは百も承知。しかし……しかし！ 鶴が必ずや百倍返し、いえ、御父様の件も含めて二百倍に！

いえいえ、百×百で万倍返ししてみせましょう！ と意気込んでいるのか。

いずれにせよ鶴は頭は良いのだろうが、彼女もまた立派な対魔忍だ。

根拠のない自信に満ち溢れている。ただ、恩を返すという覚悟がガシッ決まっているだけまだマシか。土壇場になっても泣き言など漏らさないであろうし、裏切る心配だけはない。

そしてこの絶対御恩奉公モンスター振りよ。また幼年期を文庫の背中を見て育った事を鑑みても、天音・文庫に並ぶファミキチであろう。

ただでさえ、絶対に対魔忍の頭領させるからなと張り切っている最強無敵対小太郎でだけ知略が冴え渡るアサギだの、ハーレムを広げようとする会長を嬉々としてやってるエンジョイ勢のゆきかぜだの、弾正の名前を聞いただけで弾正絶対殺すウーマンと化す災禍だの、自分を罵られても平気な顔してる癖に家族認定した者を罵ろうものならば狂犬と化すファミキチ天音だの、存在そのものがヤベー奴すぎる永久だの、キャラが余りにも濃すぎる集団に囲まれている。勘弁して貰いたい。

(だが甘い。甘いぞ鶴！ 我に秘策在り。そちらの穂稀という変態を

今回は鶴となおの人柄を利用した。

鶴が恩人の身を害するような真似を示唆する言葉でさえ許す筈はなく、なおもなおで鶴の恩人に向かって殺したいなどと宣ったなどわざわざ言う筈もない。

何も知らなかった鶴がキレ散らかし、鶴の性質を友人としてよく知っているなおは顔を引き攣らせながら諫めようと必死であった。

リアルファイト一歩手前。

恐らくは、もう数十秒も立てば、鶴がなおを一方的に蹂躪する悲惨な展開となるが、知ったこつちやねー小太郎はほくそ笑みながらなおの脇をそそくさと抜けていく。

「(逃げちやだめ)」

「なん……だと……!?!」

しかし、友人同士のリアルファイトに発展しかねない状況を前にして、なおと共に現れた美少女は冷静だった。

鶴となおと共に現れたということは、この美少女もまた二人にとって共通の友人だろう。此処まで冷静であれば、よく暴走する二人のブレーキ役と言った所か。

やたらとか細い、蚊が鳴くような声で言うと、小太郎の服の裾を掴んで離さない。流石は対魔忍、どう見ても女の細腕でしかないのに万力のような握力で掴んできていた。まるで運命が小太郎を逃さぬように――

ほーお、それで次回からは誰がふうま 小太郎の代わりを務めるというのかね？ まさか、穂稀 なおのわけではあるまいな？ 彼では不可能だ！ さあ、もつと苦労を！ もつと悲鳴を！ もつと絶叫を！ 目も眩むような人間賛歌を見せてくれ！

――とでも言っているかのようだった。

最早、逃げ道はない。

全てを悟った小太郎はガツクリと項垂れ、滂沱の涙を流す。

鼻水も涎も出し放題の流し放題。まるつきり小学生低学年の泣き

方に、思わず服の裾を掴んでいた美少女も心配するほどであった。

「(そ、そんなに、嫌、だった、の?)」

「鶴の恩返し編、始まりまああああああああすつつつつつ
!!!!!!!」
「(ビクツ)」

ふうま 小太郎の嘆き、そして一連の事件開始を告げる咆哮が、夕暮れの五車へと響き渡る。

風紀隊と鶴、小太郎が挑むは五車内部で起きる連続殺人事件。

闇に紛れ、身勝手な理屈を並べ立て、身勝手な欲望に浸る殺人鬼を中心に数多の思惑が交錯する綾模様果てに、何が待ち受けるのか。

ただ一つ、確実に言えることは、ふうま 小太郎は苦勞する。それだけであった。

着々と積み重なるフラグの山！ でも苦労人は狼狽
えない！

「はあ~~~~~」

場所は校門前から移動して、五車町の駄菓子屋、稲毛屋前。

どうにかこうにか鶴を諫めたなおは、店の前に出されたベンチに腰掛、ぐったりと両肩を落としている。

鶴の怒りは凄まじく、生半可な言い訳では納得しなかった。普段、全く怒らない人物ほど怒らせると怖いものだ。

結局、泣きじやくる小太郎に頭を下げ、謝って事なきを得たが、疲労感は拭いきれない。

どうにかこうにか涙と涎、鼻水を堰き止めた小太郎はなおの前で立ったまま両腕を組んで項垂れていた。

右目を隠した美少女がその右肩を叩き、鶴は背中を摩って慰めている。二人には殺したいなどと言われた人間の気持ちを慮り、涙を流す者を気に掛ける良識があった。

しかし、苦労をしたくないだけの小太郎にそれがどれほどの慰めになるだろうか。気が重くなる一方だ。

「じゃあ、改めてだけどボクは穂稀 なお。鶴ちゃんは知っているだろうからいいとして、もう一人は……」

「いい、知ってる。死々村 孤路だろ」

「(……びっくり。私、有名人?)」

「知らない。何処か特定の部隊に所属してる人間を把握しているだけ。独立遊撃部隊ちに引き入れる時に、余計な面倒事を増やしたくないから」

「(…………！ 逸材!)」

「ふふ、流石は孤路ちゃんは分かっていますね」
「はあ？」

孤路の反応は小太郎にとって怪訝でしかなかった。

大抵、縁もゆかりもない相手の素性や名前を把握していれば気味悪がられるものだが、孤路は目を輝かせている。まるで好きなドラマの主人公役の俳優でも目にしたかのようだ。

年相応の反応ではあるのだろうが、それが俳優でも何でもない自分へと向けられるのか。

孤路が何を思ったのか理解しているのか、鶴は誇らしげにうんうんと頷いているが、小太郎には全く見当もつかない。

「（ふうまくんはトラブルメーカーとして有名。名探偵には必要な資質——め、目が怖い！）」

「若様、落ち着いて」

にっこりと微笑んでそんな事を言う孤路を、小太郎は振り返って視線だけで射竦めた。

その視線の恐ろしさよ。さながら親兄弟全てを奪われた男の目である。ありつたけの憤怒と憎悪が煮詰まり、極大の怨嗟が渦巻いているではないか。

好きでトラブルメーカーやってんじゃねえんだよ。何でか知らんけどトラブルが舞い込んでくんだよ。アサギがぶち込んでくんだよ。ゆきかぜが持ち込んでくんだよ。何でか息してるだけで苦労すんだよ。

と、八つ当たりにも等しい心持ちで孤路を睨み付ける。冷静沈着な鶴ですらが冷や汗を掻いて諫めるほどだ。小太郎の精神状態は常に良くない方向へと転がっていく。

「ふうまくん、何だいその態度は。鶴ちゃんにもそうみたいだけど、先輩に向かってしていい態度じゃないね。少しは敬いというものを学

ぶべきだよ、君は」

「だったら敬いたくなるようなところを見せて欲しいもんだよなあ」

「どういう意味かな？」

「はー、ウザ」

「このっ……！」

「なおくん。なおくんの言い分には理がありますけど、若様の言い分も尤も。一年早く生まれた者として相応しい振舞い、見せるべき背中があるでしょう？」

「うっ……分かったよ。鶴ちゃんの言う事も尤もだ」

正に売り言葉に買い言葉。初対面から互いの第一印象が最悪である以上、当然の結果。

自身の言葉を押揄いと共に返された怒りに半ばまでベンチから立ち上がりかけたなおであったが、鶴の一言に固まった。

なおとて先輩ならば誰にでも敬意を払うわけではない。寧ろ、先輩であろうとも尊敬すべき点の見受けられない輩には毅然とした態度で向かっていく。

今のところ小太郎の目には尊敬すべき点を映っていないだろう。なお自身ですら良い所など何一つないのは自覚している。鶴の正論には、矛を収める他はない。

親しい間柄ではない相手と会話をしていると無意識に優位に立ちたくなってしまう自分の欠点は自覚しており、親友の鶴や孤路から常々指摘されていた。

小太郎の後ろでは孤路がうんうんと頷いている以上、素直に間違いを認めるしかないだろう。

「はい、流石はなおくんです。それから若様も。非礼があつたのは事実ですが、だからと言って喧嘩腰では話が進みません。既に謝罪はありました。それ以上の挑発は若様の品位を貶める行為。ご理解いただけますね？」

「はいはい」

「はいは一回！」

「はい。承知しました、鶴先輩」

「うんうん、それでこそふうまくんです」

続き、鶴は小太郎の瑕疵を口にしていった。

間違いに気付きを与えてやらなければ、いずれ恩人が恥を搔くハメになる。例え恩人であろうとも、言うべきは言う。それが鶴の在り方であつた。

全く反省していない小太郎であつたが、鶴の全き正論には反論の余地もない。冗談めかした言い方ではあるものの諫言を受け入れると言葉で示す。

内心に差異はあれども自身の言葉が受け入れられたのを聞き届けると、鶴は手を合わせて首を傾げながら微笑んだ。

その隣では、孤路がにこにここと笑いながら鶴を褒め称えるように拍手をしている。物静か過ぎる態度と声であるが、内面も振舞いも思いの外お茶目であつた。

「ふうまくん、君には期待していないけど、鶴ちゃんの推薦だからね。君の力を貸して貰いたい」

（ほんとコイツ、常に一言余計で上から目線だな。何一つ学んでいない。オレもう何だか面白くなってきちゃったぞ！）

「（なおちゃん、もう……ふうまくん、ゴメンね？）」

「（もう慣れたんで別にいいッスよ。いちいち反応すんのもめんどくせえし。それよりも鶴、怒ってる。怒ってない？）」

「（どちやくそ怒ってるけど、まだ笑ってるから大丈夫）」

「（さいですか）」

「……………」

なおの言動に背後で鶴の威圧感が増したのだが、当の本人はまるで気付いていない様子。

友人に代わり、背後から耳打ちで謝罪してくる孤路に、小太郎は声量を落とせるだけ落として気にしていないと伝える。

孤路の言葉からは三人が相当に長い付き合いで、親友と呼んで差し支えない間柄であることだけは伺える。

そうこうしている間にも、鶴の機嫌は加速度的に悪くなっていく。アレだけ冷静に諭す言葉を重ねたと言うのに、反省していても行動に反映されていなければ、誰とて怒りを覚えよう。

鶴の場合は親しい間柄だからこそ怒っているのだ。親友が恥ずべき人間になって欲しくないが故の優しさから生まれる怒り。これが赤の他人であれば、冷たい笑みを浮かべて好きにさせるだけだった筈だ。

「知っているかい？ まだ出回っていないけど、いま五車では殺人事件が起こってる。それも連続殺人だ。尤も、ボクの部隊以外は気付いてもいないけどね」

「……………そりゃ浅井の話ツスカ？」

「……………」

鶴の怒りに何も気づいていないなおは、自らの優秀さをひけらかすように調査中の事件についてを口にする。

確かに、まだ出回っていない件に事件性を見出し、過去の事件との関連性を見つけているとするのなら、確かにひけらかすだけの優秀さはあると言える。

しかし、なおに待ち受けていたのは、連続殺人を五車風紀隊が把握する切欠となった事件を事も無げに口にする小太郎。

今まで小太郎と目すら合わせず、小馬鹿にした態度を崩さなかったなおであった、これには流石に面を喰らったようだ。

切欠となったのは、骸佐の反乱時に起きた一家殺害事件。

井河一門の上忍、浅井家。その一人娘である浅井 美織は反乱中に姿を確認されなくなり、反乱の死亡者、被害者数を把握する辺り、調査中の者が浅井家を訪れたことで事件が発覚。

浅井家には死体こそ残っていなかったが、美織と両親を含めた人数分の致死量に相当する血痕が残されており、当初は二車家によって殺害されたものとして処理されていた。

「何処で、それを……」

「何処でも何も、浅井の件を再調査願ったのはオレだからですよ。二車が勝手をやらかしたんだ、ふうま宗家はふうま宗家で無関係を証明せにやならん。その過程、骸佐や二車の行動を把握してる最中に、浅井の件を知ったんでね。で、二車の行動範囲から浅井家は外れてるのにこれはおかしい、と思って。あることないこと押し付けられたら堪ったもんじゃない」

しかし、これに待ったをかけたのは自身の身と家を守るため、独自に調査を行っていた小太郎だった。

被害者達への慰問と謝罪をする傍ら、被害者達の証言をまとめ、反乱時の行動範囲や物的証拠を集め、二車の反乱と浅井一家殺害が無関係であることを証明してみせた。

当初はなおの上司——五車風紀隊の総隊長は、ふうまの目抜けが我が身可愛さにと話半分程度にしか聞いていなかったものの、再調査を開始して蒼褪めた。

物的な証拠は何一つ残ってはいなかったものの、小太郎の調査のみならず、風紀隊が再調査した際にも状況証拠は二車家の白を保証する形となってしまったからだ。

そもそもからして、二車の手の者が殺したとするのならば、死体を隠すなどおかしな話。アレだけ大っぴらに反乱を起こしておいて、浅井家の死体だけを隠す意味がないではないか。

「そ、それだけじゃないよ。犯人はどうかやら別件で失踪や死亡扱いになっていた人たちも手に掛けていたらしい。過去十年に渡って、実に20人以上は——」

「それも知ってる、何年も前からね。オレの見立てじゃ23人は同一

犯に殺られてる」

「君、は……君はそれを分かっているながら何も言わなかったのか!？」
「なおくん!」

なおはベンチから跳ね上がるように立ち上がり、今すぐにも殴りかねない勢いで小太郎の胸倉を掴みかかる。

先程までなおに怒りを向けていた鶴であったが、それらを一時的に収めて止めに入った。

優悦や優秀さの根拠を潰されてなおに沸いたのは、純然たる怒りであつた。

但し、自身の調べ抜いた情報をより早い段階で入手していた拳句、馬鹿にしたように先手先手で明かしていったことに対してではない。

それだけの凶悪犯の存在を把握しておきながら、何一つ行動を起こしていないことに対する正義感と義憤による怒りだ。

なおの態度も言動も自己陶酔的であるのは否めない。しかし、だからと言って他者を軽く見ているわけではない。

寧ろ、他者に重きを置いてさえいる。でなければ五車の治安維持を目的として部隊になど入りはしないだろう。

その情報をもっと早く風紀隊に告げていたのなら、今日までの間にこれほど犠牲者は増えなかったかもしれない。

情報を基に行動していれば、今日に至らずとも犯人を捕まえて犠牲者の数を減らせたかもしれない。

なおがいま抱いている怒りは、犠牲者のためのものであり、被害者家族の無念を思つてのものだった。

「言いがかりは勘弁して貰いたいツスね。風紀隊には再三に渡つて言つてますよ」

「(え? ……でも、私達は何も聞いてない)」

「オタクらのところの総隊長、弾正の反乱で両親を失つてるんですよ。オレの話なんざまともに取り合わないし、調べようもしない。自分にとって都合の悪い内容だ、そら話題に出さんでも不思議じゃないで

しよ」

「そ、それでも、君が個人的に動くことは出来た、だろう……」

小太郎は胸倉を掴む腕を鬱陶しそうに払いのけ、そもその非は己ではなく風紀隊の総隊長にあると語る。

その場凌ぎの詰まらない嘘でないことは、余りにも淡々とした語り口調と嘘を付いている反応のなさからなおにも孤路にも伝わっていた。

五車で起きた事件を調査する風紀隊の一員である以上、証言集めや犯人捜しに嘘を見破る目は必要になってくる。少なくとも、二人の目に小太郎が嘘を付いているようには見えなかった。

小太郎の語ったのは全て事実だ。

五車に潜む殺人鬼の存在には、かねてから気付いていた。

被害者の特徴や失踪時の不可解な点、死亡認定された状況から僅かながらの共通点を見つけ、その都度風紀隊には伝えていた。ただ、誰も小太郎の言葉に耳を傾けることをしてこなかっただけ。

なおはまだ言葉を紡ぐが、余りにも苦しい言い分であるのは自覚しているらしく、尻すぼみになっていく。

「冗談じゃない。五車の治安維持は風紀隊の仕事だ。オレには首を突っ込む権限がそもそもない。ああ、アサギ校長からも風紀隊に言っただけでしたよ。でもオレから発したものだとは分かって動かなかつたのはそつちの総隊長。馬鹿馬鹿しい、本来動かねばならない奴が動かうとしないのに、どうしてオレが動かにやならないんだ」

「対魔忍の、仲間が殺されているんだぞ……」

「だから？ 殺しているんだ、殺されもするでしょうよ。大体、アンタら年に何人のクズども殺してるんだ。それに比べりや可愛いもんでもしょ。殺人鬼は年に高々二人か三人だ。別に殺人鬼を肯定するつもりはないが、理由をつけて散々殺してきた連中が、自分や身内が殺される段になって嫌だと言うのも憤るのも、みつともないにもほどがある」

「ボク達と殺人鬼が一緒だとしても言いたいのか、君は」

「一緒じゃないですよ。オレ達は国から許可得てやってんだ。好きな相手を選んで殺してるようなクズとは違う。ただ、誰かを殺した罪の重さや買う恨みはどんな理由があろうと誰であろうと変わらず、応報がどんな形で降り掛かってきてもおかしくないって言ってるだけツスよ。ま、オレなら身内が殺されれば泣き寝入りせずにキツチリ報復しますがね。舐められるし」

小太郎の態度は余りにも自然体。

今こうしている間にも自分が誰かに殺されても不思議ではない、と本気で思考している。殺し殺される覚悟など、とうの昔に決めていた。

殺人鬼の行いを肯定するつもりなど毛頭ない。彼は快樂目的や生まれ持った衝動によって誰かを殺したことはないからだ。あくまでも殺すのは必要性がある場合、或いは選んだ過程の結果として誰かが死ぬだけに過ぎない。

殺している以上は殺されたところで文句は言えない。例え、それが己の任務とは全く関係のない殺人鬼の欲望に任せた所業であったとしても。

寧ろ、彼は殺された対魔忍を叱責するだろう。

国を、人を守らねばならない対魔忍が、殺人鬼如きに遅れを取るなど何事か。どうせ死ぬなら下衆の欲望を満たすためではなく、無辜の民や仲間を守るために死ぬべきだった、と。

不意打ち騙し討ちなど考慮に値しない。五車に殺人鬼が居るなど知らなかったとしても見苦しい言い訳に過ぎないと断じていた。

正論と言うよりも寧ろ極論であったが、なおは押し黙らずを得なかつた。

小太郎は確かに己の許される範囲で可能な限り動いていた。それ以上の介入や行動は他の対魔忍や隊との軋轢を生みだしており、犠牲者と何の関わりもなければメリットなどある筈もなく、ただただ立場を悪くするだけ。

そうまでする理由が彼にはなく、また求めるのは傲慢以前の子供の駄々。況してや、事件発覚が遅れに遅れたそもその原因が使命でも役割でもなく私情を優先してしまった自らの上司にあるのなら猶の事。

余りにも人間的な温かみの欠如した小太郎の言動と態度であったが、それもまた個人の思想。親しい間柄でない以上、口を挟む権利などあろう筈もない。

「……そうか、分かった。もういい」

「(……いいの?)」

「彼は誰よりも早くやれることはやっていた。その声に耳を傾けず、その行動に目を向けずに何もしてこなかったのは風紀隊ホク達の方だ。風紀隊の責任をふうまくんに取らせるわけには行かないだろう?」

「でも、なおくん……」

「……いいんだ鶴ちゃん。それから悪かったね、ふうまくん。風紀隊は君の好意——かは分からないが、少なからず努力を無碍にした。君の気は晴れないだろうが、総隊長に代わって僕が謝罪する。済まなかった」

そう言うと、なおは頭を深く下げる。

あくまでも小太郎からの提言を握り潰していたのは総隊長。客観的に見て、なおに非はない。それでも、風紀隊の一翼を担う者として謝罪しないわけにはいかなかった。

なおはプライドが人並み以上の対魔忍らしい対魔忍ではあるが、自らの役割を軽視しているわけでも道理を弁えていないわけではない。

これまで多くの犯罪を未然に防ぎ、或いは犯罪者を取り締まってきたからこそ積まれたプライドであり、プライド以上に自らの役割の重要性を理解しているからこそ潔く頭を下げたのだ。

その態度に孤路と鶴は顔を見合わせて微笑むと、なおに続いて頭を下げた。

なおの謝罪は決して卑屈でもなければ情けない姿でもない。自ら

の責任を認めない他人に代わっての謝罪など業腹以外の何ものでも
あるまいに、己の間違いと思慮不足もあつたと心から認めた誇りある
姿であつた。その身体を支えてやらねば友など名乗れず、何が友か。

当初の態度とは180度異なる態度のなおや親友と呼ぶに相応し
い孤路と鶴の姿にも、小太郎は眉一つ動かさず三人の後頭部を眺める
だけであつた。

暫くの間、世界が静止してしまつたかのように沈黙が下りる。なお
も他の二人も頭を上げはしない。あくまで小太郎が納得するまで、頭
を上げないつもりだろう。

その姿にいよいよもつて折れたのか、小太郎は首を振りながら盛大
な溜め息をつくつと、ポケットからスマートフォンを取り出して耳元に
持つて行きながら何処かに通話を開始する。

「あー、もしもし……例の事件の話、オレが言つてた風紀隊のバカが動
かなかつた案件……そうそれ。あれ、オレが動く。悪いがそつちで穂
稀 なおつて小隊長と組ませたつてことにして欲しい……話を聴き
つけた紫先生やらさくら先生がそうしたつて流れで……うん、はい、
あんがと、じゃ」

「ふ、ふうまくん……？」

「これで一番上からの許可は得た。権限も生まれた。これでいいツス
か？」

「い、いや、でも……いいのかい？」

「いいも何もないでしょ。馬鹿みたいな殺人鬼に馬鹿みたいな時間を
掛けるのはそれこそ馬鹿みたいな時間の無駄だ。まあ、オレに全く非
がないわけでもない。付き合いますよ、手早く片を付ける」

不承不承ながらも事件解決に協力すると口にした小太郎には、なお
は驚きに目を見開いた。これまでの態度と言動もあつて、梃子でも動
かないと思つていたのである。

孤路と鶴は驚きよりも歡びが強かつた。前者はなおが認められた
と思つているらしく、後者はそれでこそと言わんばかりに目を輝かせ

ている。

正味なところ、小太郎は己に非があるなど全く思っていない。

彼の語った言葉は紛れもない本心であり、対魔忍である以上内部に潜んだ殺人鬼に遅れを取るなどあつてはならない事態だと考えている。

少なからず彼の身内は誰一人として殺人鬼如きに遅れを取る者は一人として存在しないだろうし、相手の持つ能力如何に関わらず、どのような策謀を仕掛けてこようが常に生き延びられるだけの智慧と実力を身に付けさせていた。独立遊撃部隊の面々にはやや不安が残るが、それも配置や任務に逐一目を通して、常に二人以上の状態を維持すればどうとでもなる。

それでも動く気になつたのは、浅井家の一件がこれまでとは余りにも違い過ぎていたからだ。

これまで息を嚔めていた輩が、こうも派手に動き出した。下衆な欲望を満たす以外の意図や目的があるのは明らか。

だが、それもまだいい。どのような意図があつたところで、身内以外の誰が犠牲になつたところで、小太郎にとっては痛くも痒くもない。風紀隊の面々が殺されるとしても、それは仕事の内。微塵も心は動かない。

しかし、鶴が関わるならば話は別だ。

何かの手違いで鶴が殺されるのだけは避けたかった。但し、鶴自体が大事であつたわけではない。数度顔を合わせた程度の相手に特別な感情を抱くほど、彼は人情に溢れた人物ではなかつた。あつたのは文庫との関係性を考慮して。

小太郎にとって文庫は優秀である以前に、敬意を払うに値する人物。

互いの立場を考慮して接触は控えていたが、弾正の下を離れ、家族との関係を修復しようとする姿に思うところはあつた。

例え、それが自らの選択による失敗や間違いであつたとしても、多くの諦めや後悔を胸に抱きながらも、文庫は最後まで責任を取る道を歩み続けた。地味に、地道に、愚直に、真つ当に。

それは小太郎の考える責任の取り方そのものであり、また対魔忍ではない守るべき無辜の民の誰もが今こうしている間にも歩んでいる道でもある。その成果そのものが鶴。これが下衆な欲望に踏み躪られることなどあつてはならないことだった。

そして、なおの謝罪も決め手の一つ。

責任感の強く、また責任の所在に關しても理解しているのだろう。直接己と關係がなかったとしても上の不手際は下の不手際でもあると素直に認めていた。

他の対魔忍であればこうもいくまい。総隊長に悪態を吐くまでいにしても、やり場のない怒りを關係のない第三者にぶつけようとする。

プライドの高さと高慢さは偶に瑕だが、それでも失われるのは惜しい人材、と認めるには十分であつた。

「おー、おつたおつた」

話が纏まりかけたその時、一人の男が何の前触れもなく唐突に、会話の流れも全てを無視して声を掛けてきた。

それは校舎を出た段階から鶴に向けられていた五つの視線——
—なおと孤路を除いた内の一つの主。

「や、鶴ちゃん。久し振りやね」

「……………直人、様」

声をかけてきた人物に鶴は驚きを隠せず、彼女と父親が百田家を放逐された事情とそもその原因を知るなおと孤路は一気に表情が引き締まる。

仕立ての良い着物と袴を身に着けた和装にも拘わらず、元は黒いであろう地毛を金に染め上げ、髪から覗く耳には無数のピアスを付けた男。

顔立ちはいいのだろうが刻まれた軽薄な笑みが全てを台無しにし

ている。服装と髪色の不釣り合い加減も相俟って、一部の奇特な女性からはモテるかもしれないが、基本的に幼子から老人まで不快な印象を受けるだろう。

しかし、その軽薄さは確たる実力と自信に裏打ちされている分だけ、逆に性質が悪いと言えた。

彼の名は百田 直人。

火遁の名門、百田家の中にあつて一際優れた火遁使いの上忍。

同じ火遁使いである神村 舞華には単純火力、眞田 焰には突破力でそれぞれ劣るものの、操作性と応用力に関しては遙かに凌駕しており、火遁使いとして五指の指に喰い込んでくる屈指の実力者。

分家の出でありながら、異例の出世スピードで瞬く間に火遁衆の一部隊を任されるようになり、一時は百田家の次期当主候補と噂された男。そして、佐郷親子が困窮するきっかけとなった男でもある。

(何考えてんだコイツ)

直人の姿を見た小太郎の感想は、その一言に尽きた。

現時点で直人や率いる閥が動いた場合の対応策は既に完成している。脅威にはなり得ないが、呆れよりも警戒心の方が高かった。

確かに百田 直人という男は自己中心的で自身にも劣らぬ度し難い人間の屑だとは知っていた。されど、ここまで無鉄砲な男でもなかった。

小太郎が百田家内部を無形に探らせているように、直人もまた佐郷親子の近況を探っているだろう。

ならば、裏で小太郎が関わっていることなど見通せぬまでも察する程度は出来たはず。百田家の次期当主候補にまで上り詰め、正統後継者が百田 里奈子に指名された現在もなお虎視眈々と当主の座を狙っている男が、その程度の事柄に頭が回らない訳がない。

そんな小太郎の心持ちどころか、鶴の友人であるなおや孤路の存在すらも無視して直人は鶴の前に立った。

「ちよつと、いきなり来て何様のつもり——」

「邪魔すんなや」

「——うぐっ!？」

大切な友人を守るために直人の肩を掴もうとしたなおの頬目掛け、裏拳が放たれる。

寸でのところで小太郎がなおの首根っこを掴んで後ろに引いたため、鼻先を掠めるだけで済んだが、小太郎が何もしなければ歯が折れかねないほどの勢いであった。

突然、咽喉を締め付けられて咳き込むなおは目を白黒させていてこそいたが、小太郎を睨み付けることさえしない。助けられたことに氣付いたのだろう。

寧ろ、直人の行為に気色ばんだのは、孤路と鶴であった。特に孤路など、自らの得物であろう背負った刀に手を掛けてさえいる。直人の女性蔑視は、それほどまでに有名なのだ。

「関係ない女は黙つとれや」

「ボ、ボクは……!」

「いやこの人男だけど」

「はあ?　なんで男が女の格好しとんねん。キツシヨ!」

「その点に関しては完全に同意。変態としての思慮が足りてない。まあ女装癖に加えて露出癖も入ってるだけだろ。確かに人様に迷惑を掛けない範囲にしておかないのはキツシヨい。TPOを弁える。そんなだから特殊性癖の肩身が狭くなるんだ……!」

「いや性癖そのものがキツシヨい言うてんねんで、こっちは」

「君はどっちの味方なのかなあ、ふうまくん?　それにボクは可愛いものが好きなだけだよ!」

そう、穂稀　なおは男である。

女性のような顔立ちをして、女性と同じ格好をしているが、歴とした男だ。ついているものはないものについて、ついていないものはないものについて

ない。

なおは生来、可愛いものが好きだった。男らしくない趣味であったが、両親はそれもまた子の在り方として受け入れた。結果、可愛いもの好きが高じて格好まで可愛いものを纏いだし、結果として女物の服の方が可愛いと女装に至った。

男を無条件で上位と考える直人には全く理解できない性癖に、心底からの侮蔑を向ける。まるつきり汚物を見る目であった。

対する小太郎も心底迷惑そうな目でなおを見ていた。但し、これは性癖そのものではなく、なおの在り方に向けたもの。

女装癖程度の性癖ならば小太郎も持っているし理解もあるし体験済み。180cm近い鍛えに鍛え上げた筋肉の持ち主が、全く似合わない女物の服どころか下着まで身に付けたことさえある。想像しただけで吐き気を催すような地獄の絵面だ。

『ほう——ン成程お！　こういう感じか。確かにこれは中々、興奮するな……！』

但し、小太郎の場合は自分を客観視できるので人前ではやらない。

小太郎はありとあらゆる性癖を肯定し、また自らも有する超弩級の変態である。しかしだからと言って、変態性癖を抑えきれないわけではない。

何よりも周囲の迷惑を慮っている。そういった性癖を理解できない人間にとって、特殊性癖を持つ者など気色の悪い生き物にしか映らないだろうし、また自身の行いによって同好の士が肩身の狭い思いをしかねないのを理解していた。

故に、小太郎が楽しむのは然るべき場所で、同意を得た然るべき相手に、然るべき手順を踏んだ場合のみ。彼こそが変態と言う名の紳士である。

「しかしまあ、居ったんか、ふうまの坊^{ぼん}。目抜けらしく縮こまってて
気い付かへんかったわ」

「ははは、そんなに気を緩めてるから当主の座取られちゃったんじゃないか、成り損ない」

小太郎も直人も直接的に面識はない。にも拘らず、この売り言葉に買い言葉。

どちらも笑っており、雰囲気も平時とまるで変わらないが、言葉だけは相手の尊厳を踏み躪るかのようだ。

事実として、両者は互いに互いの存在を認めてもいなければ好ましくも思っていない。単に相手の怒りを誘い、檻樓を出すのを待っているだけであった。

「……………はあ、あほくさ。そんなんより、今はこつちやね。で、鶴ちゃん、あの話は考えといてくれたん？」

「あの話、とは……………」

「何トボけてんねん。ボクとの結婚の話や」

自分から言葉による戦いを仕掛けた直人であったが、明後日の方向に視線を向けると手前勝手に切り上げて、再び鶴に向き直る。

視線を向けられた鶴は、珍しくたじろいだ。

はつきり言って、直人の行動は予想だにしなかったもの。彼女にとっては既に終わったものと考えていた。

少なくとも直人にとって、現時点で鶴の前に現れるだけの利益も意味もない。小太郎がアサギに動いて貰えば、今まで築いてきた閥を解体され、百田家内部での地位を奪れることで未来は閉ざされる。

権力欲に目の眩み、上昇志向の強い直人には落ちぶれていくなど耐えられまいにこの行動。意図の分からぬ鶴が不安になるのも無理はない。

しかし、それも一瞬。

小太郎には敢えて視線を向けなかったが、友人であるなおと孤路へは視線を向けた。

助けを求めたのではなく勇気を貰うため。自身に何があったとし

ても、頼りになる友人がいる。その事実を確認しただけ。覚悟を決めた鶴は、気丈に振舞うことを選択した。

「そのお話は破談となったはずですが」

「ええやん、ウチのアホが君のお父さんにアホ言っただけ。ボクはそんな思つてへんし、鶴ちゃんも気に入るとし、お父さんも評価してんねんで？」

「それは身に余る御言葉を頂き、恐縮です。ですが、家にとって女兒はあらゆる意味で利用価値のあるもの。私が勝手に決めるわけには……」

「それなら問題ないやろ。こつちにくれば佐郷の家も安泰。そもそも鶴ちゃんが選んでくれれば、お父さんも納得するやろ？」

「そうですね。如何に対魔忍と言えども女兒を政略結婚の道具とする風潮は聊か古い。女性の自立が認められる時代ですし——
直人様がどうしても、と仰るのであれば私も考えないことはありませんが」

「——あ、？」

鶴の冷笑以前の嘲笑と共に放たれた言葉に、直人の態度が一変する。噴出したのは明確な憤怒。

「どれだけ相手を褒め称える言葉を紡ごうと、彼の心にあるのは自尊心と周囲への蔑視。」

あくまでも縁談の話も「自分が選んでやった」という前提があり、鶴の方には拒否権も選択権もありはしないと考えている。

それが逆に「自分が選ばれる」立場に堕ちている、とも取れる言葉を返されれば、女を何処までも見下している直人には耐えられまい。チリ、と空気が熱くなる。それは火遁の行使が開始される直前に発生する気温変化。

余りにも短絡的な忍法の行使。直人に言わせれば、男と女の上下関係はハッキリとさせるための躰け。

いずれにせよ——

「其処まで。全員、武器を収めろ。怖い婆さんが見てるぞ」

——小太郎が介入するには十分な理由であった。

臨戦態勢に入っていたのは直人だけではない。

孤路は刀を抜き放ち、なおは何処から取り出したのか明らかに火薬式とは異なるライフル型の銃器を取り出していた。無論、鶴も鞆の中に潜ませている獲物に手を伸ばしている。

しかし、小太郎は異常なほど高まった場の緊張感を気にせず、片手で顔を覆い、もう一方の手で稲毛屋の奥を指さしていた。

その先には戸棚の陰から半分だけ顔を出し、闇よりも深い黒の瞳で四人の動向を眺めている稲毛婆の姿があった。

何の感情もない無表情。しかし、発せられる雰囲気だけは異様。胆力のない者が目にすれば、腰を抜かしそうである。

無理もない。稲毛屋は稲毛婆にとって命よりも大事な店なのだ。

彼女の半生や店が出来た経緯を知らぬ者であっても、稲毛婆がどれほど店を愛しているかは伝わっている。

そして、今なお衰えていない房術の極みもまた誰もが知っている。彼女が本気になれば、どんな男も、それどころか女ですらも、皺くちやの老婆の虜となってしまう、と。

「おー、怖。やめややめ。アホくさあてやってられへんわ」

「そりや重畳。ほら、お前等も行こうぜ。人ん家前で物騒なことすんなすんな。帰ろうぜ」

「(い、ご尤も過ぎる……)」

直人は意外なほどあっさりと矛を収めた。

その姿に小太郎は納得して頷くと、それ以上の会話は不要と全員に帰るように促した。

直人の実力は本物。小太郎でさえ、性格さえ良ければ引き入れたいと考える実力者。

事実、なお、孤路、鶴の三人がかりであつたとしても簡単には勝ちを拾えず、敗北も視野に入れていかなければならない。

それでも引いたのは、稲毛婆の存在だろう。彼女の房術は閨でしか通用しないものではない。戦闘中ですら行使が可能であり、極めて有効。もし学生側に肩入れされれば、その時点で負けは確定する。

こうした計算高さや冷静さは小太郎にとつては厄介であると同時に評価の対象でもある。だが、だからこそ鶴の前に現れるという直人の行動は奇異でしかない。

(こりゃイキリ野郎の身边を無形に探らせた方が良いな。此処で顔を出すという事は閨を解体されても構わないとでも考えてるも同然。てことは、他の家に渡りでもつけたか？ 妥当なところだと他家に婿入りして当主就任、鶴は妾につてところだが、どうにもしつくりこない。自分の閨を解体されるなんて醜聞、余所に行つても付いて回るしな………いずれにせよ予断に過ぎんか、情報が少な過ぎる。現時点で潰すだけの理由もないし、様子見に徹するしかねえ)

不可解な行動にある程度の予測を立てるものの、小太郎は得心にまで至らない。

余りにも直人周りの情報が少な過ぎた。幽玄から何の情報もないところを鑑みれば、またしても当主に秘して何らかの行動を起こしていると見るべき。

相手がどんな細工を施しているか分からない以上、軽々に動く訳にもいかない。あくまで無関係を装いたい小太郎は、直人が力業で訴えるか、佐郷親子の処遇に口を挟まなければ動けない。面倒な相手であつた。

「鶴ちゃん、また迎えに行つたるさかい、待つとつてやあ」

「何なんだ、あの人は……!」

「(私、あの人嫌い)」

「ごめんなさい、二人とも。それに、若様も……」

「鶴ちゃんは悪くない……!」

「(そうそう、あの人が悪い)」

「別に。全部分かった上でやったことだし。取り敢えず、今日は帰ろう。穂稀先輩は鶴と死々村先輩を送ってくれ。話の続きは明日学校で」

矛を収めたものの、鶴自体を諦めるつもりはないのか、手を振りながら声を掛けきた。しかし、誰一人として振り返らない。

小太郎や鶴などよりも遥かに憤っていたのは、友人である二人。

なおは真つ直ぐに怒りを示して歩き方が荒々しくなっている。孤路は行動にまで現れていなかったが歪んだ表情から幽憤が漏れていた。

そんな二人に、鶴は申し訳無さから心苦しそうに俯いていた。

最後の挑発は敢えてのもの。直人を刺激することで目的の一端で見えてくれば、と考えてだったが、結果がこうではそうもなろう。

しかし、二人は気にした様子はなく小太郎もまた同様。鶴の置かれている状況は知っている上に、元凶が目の前に現れた。言動としても問題はあったわけではない。寧ろ、一触即発の空気を醸し出したのは他ならぬ直人であり、非は彼方にあつた。

離れていく背中を上辺だけの微笑みで見送った直人は、舌打ちをすると四人とは逆方向に歩き出す。

相変わらず、稲毛婆が店の奥から睨み付けてきていたが全てを無視し、懐から携帯を取り出して通話を開始する。

「ああ、ボクや。アンタの話、乗ったるわ。ええ加減、アホくさあなつてたところやしな。じゃ、例の場所で」

「チツ、忌々しい」

稲毛屋から離れた路地の影から、一部始終を見守っていた何者かは舌打ちをしながら服のポケットに携帯電話を仕舞う。

その何者かこそ五車の陰に潜み、非戦闘員すらも脅かす殺人鬼。そして、鶴へと視線を送っていた者の一人。

殺人鬼は、そのまま夕暮れから夜に移り変わることで生まれた闇の中へと消えていく。

「——ああ、待っていてくれ。私は必ず君を手に入れる。私がより高みへと至るために」

悍ましいまでの利己心から生まれる恍惚とした声色。いつそ清々しいまでの自己顕示欲と殺人欲求、性欲までも内包した感情の発露。

殺人鬼は自己の犯行に気付いて動き始めた風紀隊の面々や小太郎を警戒して監視していたのではない。殺人鬼の基準において、少年少女は警戒に値しない存在だった。あくまでも目的のために眺めていただけ。

細工は流々、仕掛けは上々、後は仕上げを御覧じろ。

まるで全てを己の掌の上で転がしているかのような、これまでの結果から生み出される全能感に浸りながら殺人鬼は多くの彼女達が待つ我が家へと帰る。

しかし、殺人鬼はまだ気づいていない。

奴の思い描くシナリオには既に亀裂が奔っている。悔りと言う名の亀裂が。

殺人鬼よりも個々人の命に価値を見出さず、殺人鬼などよりも遙かに強い警戒心を持ち、殺人鬼などよりも悍ましい悪意に満ちた猛毒の

刃が捻じ込まれつつあることを、奴はまだ知らない。

——それに気付くことになるのは、恐らくはもつと致命的な段階になってからだろう。

殺人鬼が捕まらなかった理由？ 殺人鬼が頭が良かったわけではない。捕まえられる奴がその気になつていなかっただけ

「本当に来てくれたね」

「そりややると言った以上は来ますよ」

「（ありがとう、助かる……でも……）」

「あら、龍造寺先輩」

「あれ、佐郷じゃん。お前、風紀隊、じゃなかったよな？」

五車で起きる連続殺人鬼を風紀隊のなお率いる一隊と独立遊撃部隊の合同捜査が決まった翌日。

全ての授業が終わった放課後。予定通りに一同は校門の前へと集まっていた。

しかし、昨日は居なかった面子がいた。

なおはムっとした表情で、孤路は首を傾げながら小太郎の連れてきた少年を目にし、鶴と少年はお互いに笑みを浮かべて言葉を交わしている。

「あ？ お前等、知り合いだったか？」

「何だ、ふう、じゃなかった、若の事だから知ってるかと思った。ほらオレ、去年美化委員だったじゃん。佐郷はそんな時の委員会とか清掃活動で一緒になつてさ」

「その節は、大変にお世話になりました」

「お世話かあ。オレはどつちかかって言うときれてた方だと思うけど。ほら、細かいところに気が回らないし」

「いえいえ、龍造寺先輩の気配りは大変素晴らしいかと。清掃活動も皆がやる気のない中積極的に参加し、声を掛けておられましたし」

「どうしよう若、この子オレのこと褒めることしかない！」
「大体誰にでもこんなもんだよ、コイツは。それにお前も基本褒める
ところしかない」

小太郎が連れてきたのは、龍造寺 雅臣だった。

捜査、という点に関しては、無数の精霊や妖怪の力を借りられる日影がベストであったが、生憎と別任務で五車を離れており不在。他の女性陣はとある理由で今回の捜査に呼ぶ訳にはいかなかった故に不参加。最後に残ったのは雅臣と球磨であったが、球磨は目立ち過ぎるが故に雅臣に白羽の矢が立った次第である。

雅臣と鶴が顔見知りであるとは小太郎も知らなかったらしく、親し気な様子に目を丸くしていた。

二人が知り合ったのは去年、クラスの美化委員を引き受けた折。互いにふうまの関係者だとは知らずに居たようだ。

温和で人当たりの良い鶴と生粋の根明で善人の雅臣のこと、相性が悪い筈もない。と言うよりも雅臣と鶴自身の性格が良過ぎて、相性の悪い人間の方が少なからう。

五車学園の学生は、基本的に通常の学生と変わらない生活を送る。無論、委員会活動に関しても同様。生徒会委員もいれば、クラス委員長に風紀委員もいる、他にも保健委員や図書委員もいる。

そして、委員会への取り組み方も全く同じ。やる気のある者はやる気があるが、ない者には全くない。委員になっているだけで、活動に参加しない者もいるところまで同じ。そういった所は対魔忍も変わらない。

二人は性格上、自ら進んで委員になるであろうし、活動にも積極的に参加する。委員会が同じであれば、先輩後輩として良好な関係を築いていたとしても何ら不思議はなかった。

「ちよつとふうまくん、ボクは何も聞いてないんだけど？」

「そりやまあ。昼休みも顔合わせてないし、資料も手渡しされただけ。言いたくても言えないでしょ」

「むぐつ。そ、それはそうかもしれないけど、君ねえ」

何も聞いていなかったなおは何処までも不満気だ。

協力を要請したのは事実ではあるが、認めていない人間が増えるのを好ましく思うタイプでもない。寧ろ、邪魔だと思いうタイプだ。

積み上げてきたプライド故に高飛車で居丈高。其処にさえ目を瞑れば間違いない優秀かつ善良な部類に入るのだろうか、大抵の人間は嫌な性格にしか見えないだろう。

「コイツを呼んだのはオレの護衛ですよ。万が一の護衛」

「それはボク達だけじゃ万が一、殺人鬼に襲われたら勝てないという意味かい？ 大体、彼は一般上がりだろう？ 役に立つとは思えないね」

あくまでも小太郎は、風紀隊の実力に不安があるのではなく、自分の力量不足で危険に晒されるのを避けるため。

ふうまの当主として家と関係のないところで勝手に死ぬ訳にはいかないと伝えていたが、それが更になおの不満を加速させた。

小太郎は本気で風紀隊を頼りないとは思っていない。殺人鬼の使う能力は未だ不明であるが、自分と風紀隊で勝てない可能性は捨てきれずとも、最低限逃げ切れるだけの余裕はあると踏んでいる。

そもそも正体が判明しそうになって焦った殺人鬼が襲ってきたとしても、正体が掴めた時点で自陣営一人でも逃げきれば勝ち確定。正体が知れ渡れば五車から逃げねばならず、それ以上の犠牲は増えなくなる。後は追い忍部隊なりに追わせればいいだけ。

雅臣を呼んだのは、要らぬ犠牲を増やさぬために過ぎない。小太郎の見立てでは、殺人鬼に上位魔族クラスの實力はない。それだけの實力があれば、もっと派手にやらかしているだろう。

自身の實力を客観視しながら影に潜む手法は厄介ではあるが、それも自らの欲求との折り合いが付かなくなってきたからこそその浅井の一件。その程度の輩であれば、雅臣が居れば殺人鬼が如何なる能

力を行使しようとも、誰の犠牲も無しに収めることも視野に入れられるだけだ。

しかし、人間関係は錯誤と誤解に満ちている。

聞いていない人員の投入を、なおは侮られていると受け取っていた。

どうやら声を掛ける以前に小太郎や独立遊撃部隊、ふうま宗家に関しては一通り調べがついているらしい。

鶴からの提案を受け入れこそしたが納得をしていなかった以上、人柄や実績、能力については調べるのは寧ろ当然。

その過程で小太郎の近い人物の能力に関しても目を通し、雅臣が忍法を使えぬ身であり、対魔忍の家系ではない一般上がりだと知ったのだろう。

これがルーキーとして名高いゆきかぜや凜花、凜子、様々な意味で有名人の紅を連れてきたのならまだマシであったろうが、よりにもよって無名かつ無能力の人間を連れてきてはなおとしても面白くない。

殺人鬼の起こした事件を軽く見ているとも取れるし、同時に無能力の人間を頼りにするなどなお達風紀隊を馬鹿にしているようにも受け取れてしまう。

こればかりはなおの性格や考え方にだけ問題があるわけではない。雅臣に実力を隠すように指示したのは他ならぬ小太郎自身であり、昨日の犠牲者側にも問題があると極論を展開したことが悪い方向に働いていた。

面倒臭さに嘆息しそうな小太郎であった、より事態が面倒な方向に転がり出すのを避けるために何とか堪え、どう説明したものか、と思案し始めたが、先に口を開いたのは孤路と鶴であった。

「(なおちゃん、先輩とふうまくんに凄く失礼)」

「そうですね。若様も龍造寺先輩も好意で来てくださっているというのに。それに昨日、先輩への口の利き方を説いたのにその態度は何ですか。舌の根も乾かぬ内に自分がそれでは敬われるはずありません」

「うぐぐつ。ふうまくんはきちんとボクの言う事を聞いてるじゃないか！」

「まー、使いたくて使ってる訳じゃないし、正直そこまで敬ってない。これ以上絡まれるのが面倒なだけなんで」

「ふうまくん、君って奴はー！」

なおの上から目線の言動と態度に、孤路と鶴は白い目を向けて小太郎と雅臣の肩を持つ。

親友二人の言葉は全き正論。小太郎にせよ、雅臣にせよ、本来は事件に関係のない部外者。そもそも捜査に参加する責任は何処にもない。正式にアサギから合同捜査をするように命は下ったものの、それさえも小太郎が互いの立場を守るために御膳立てしたに過ぎない。

口撃と正論の集中砲火を浴びせられるなおは苦し紛れに、表向きは従順な態度を取っていた小太郎を引き合いに出すものの、後ろから思い切り刺されていた。

「(そういうところは直した方がいい)」

「そうですねよ、なおくん」

「うぶぶ、頬を突かないですよ！ 可愛くなくなっちゃうじゃないか！」
「ハハ、仲良いなあ。ま、捜査に関しちやマジで素人以前だからさ。邪魔しないように気を付けるよ」

「あんだけ言われてそう返せる辺り、マジで善人だよ、お前」

「いや事実だし。これくらい普通じゃない？」

左頬を孤路が、右頬を鶴が。

それぞれ人差し指で突かれたなおは必死の抵抗を見せるものの、払い除ける度に二人の指が伸びて何の意味も為していない。

突かれて頬の潰れたなおの顔は「ぶちやいく」と言った感じで、最近流行りのブサ可愛いと言って愛らしい。まるつきり揶揄われる女子学生にしか見えない。だが男だ。

「と、兎に角、邪魔だけはし……ないで下さいよね！」

「分かっている分かっている。オレがしゃしゃるよりもそつちと若に任した方が絶対いいし。それに……」

「(それに?)」

「……殺人鬼に殺されたのはオレが顔も知らない人だけどさ。オレにとつては同じ重さの死なんだ。やっつてることの趣味が悪過ぎんだよ」

ピリ、と尋常ではない怒気が雅臣から漏れ出し、風紀隊と鶴は息を呑んだ。

彼が対魔忍となったのは、己の全てを奪われた後。

死霊騎士が屍の王に捧げるためだけに彼の生まれ育った街一つ、数にして千人以上もの命を奪ったことも、殺人鬼が身勝手な理由で殺人を犯すのも同じこと。

残された者の痛み、被害者の苦しみと悲しみを知るからこそその言葉と怒り。尤も、彼はそれを知らなかったとしても、同じ言葉を口にしたかもしれないが。

(この人は誰かのために本気で怒れるのか)

「故人を悼むのは縁のある奴だけの特権だ。オレ達が立ち入るのは御門違いも甚だしい。余計な気負いは邪魔なだけだ」

「あたつ。若のそういうとこ、オレどうかと思うよお?」

「そういう形に生まれ落ちたんだから仕方がない。そういうのは外付けのお前等に適度に任せると決めてんだよ。そら、行くぞ」

自分以外の他人を思い、正しい怒りを抱く姿は尊さすらある。

全ては雅臣の優しさから生まれるもの。なおと孤路は素直に驚きと感心で迎え入れ、少なからず彼を知る鶴は称賛するように微笑んでいた。

その中で小太郎だけは怒りを解放するのも滲ませることすらまだ早い、と雅臣の後頭部を叩く。それだけで雅臣は平時の態度を取り戻していた。

小太郎が望んで引き入れただけあって、両者の関係も相性も良好であった。小太郎の目も覆いたくなるような冷酷さ、雅臣の抑えきれぬ激情のブレーキ役として、互いに機能し合っている。

元々の女好きも相俟って、彼の周囲は女性ばかり。数が少ない男性同士だからか、日影と啓治も含めた男衆は極めて仲がいい。互いに足りぬ部分を補い合うだけでなく、女性の前では出せないような話題も、出来ないような馬鹿な真似もしてきたからだろう。

「では、予定通り浅井家に？」

「そうだ。浅井以前の事件は一番新しいものでも半年前。記憶から何から完全に風化しちまつてるだろうしな」

「現場検証の資料は渡しただろう？ 風紀隊ボク達も信用がないね。まあ、話を聞いて貰えなかった君からしてみれば当然か」

「勘違いしないで下さいよ。オレは誰も信用しちやいない。それに資料に目を通したけど、科学捜査がされてない。精々やっついて指紋の採取ぐらいじゃないですか」

「捜査に向いてる忍法を使える人が揃ってるからね。科学捜査の必要がないよ。コロちゃんだってその一人さ」

「(私の忍法は魂遁。死体とか強い残留思念を読み取れる。他にも色々いるよ?)」

今日の予定は浅井家で起きた殺人事件の再検証。

それ以前の事件は時間が経過していて、新しい証言も証拠も得られない。

加えて言えば、小太郎が目に通した資料は風紀隊に所属する捜査に適した忍法持ちが得た情報を基に作成されており、科学捜査の類が為されていなかった。

確かに、忍法は現実起こり得ない事態、知り得ない情報を得られる。

孤路の生まれ持った魂遁などが最たるものだろう。応用範囲が広く、死体から靈魂、死した後もその場に留まる強い残留思念を読み取

る事が可能。彼女一人が居れば、大抵の事件は時間をかけずに解決できてしまう。

だが、決して万能でもなければ、穴がないわけではなく、一概に科学捜査が劣るとも言い難い。

「へー、そりや凄い。だが忍法から得た情報なんて所詮は主観に添って再構築された情報であって事実じゃない。ようは科学捜査と違って毎回毎回精度に差が生まれて予断や誤認に繋がる」

「疑い過ぎじゃないのかな？　いくらなんでも風紀隊を馬鹿にし過ぎだよ。これまでだってそれで犯人を捕らえてきた」

「これまでそうだったと、これからどうなるか、は全く別の話ツスよ」
「うーん……………私の魂遁も、死んだ人が勘違いしていたら、そのまま私も勘違いするしかないかも」

「確かにそうですね……………」

「うっ……………そう言われると弱いな」

忍法は本来は受け取れない情報、或いは読み取れない情報を得られる利点がある。しかし、一度術者の頭を通す故に出力の仕方が術者頼りとなり、また解釈も術者に委ねられてしまう欠点がある。

この辺りは、災禍の持つ邪眼の欠点に似る。

災禍の邪眼は対象の脳と視界をジャックし、あくまでも災禍自身の見せたい光景を見せるのみ。それは災禍のしている世界や光景しか見せられないのと同義。

視覚に何らかの障害を抱えた人間の世界の見え方など同じ障害を抱えた人間にしか分からず、精神異常や麻薬で壊れた人間が同じような世界を見ているとは限らない。邪眼が通用しない可能性は非常に高い。

今まで何の疑問も抱かずに頼ってきた忍法であるが、小太郎が与えた些細な切欠で孤路もなおも同じ結論に至ったらしく、忍法による捜査の脆弱さに気付いたようだ。

流石に優秀ではあった。これが他の対魔忍であれば、自身の才能を

過信しすぎて聞く耳など持たないだろう。

「科学捜査も忍法も利点と欠点が違う。それぞれ補い合えるなら両方使った方が良い。事象は多角的な視点で初めて正確な形を捉えられる。今後、科学捜査方面を強化することをお勧めしますよ。誤認逮捕しました、ごめんなさいじゃ許されんでしょ」

「そ、そうは言ってもだよ？ ボクも孤路ちゃんだってそういうのは疎いわけだし……」

「手間だがそつちの総隊長か校長に相談した方がいい。政府と繋がりがあるんだ、知識に関しては警察の定年退職者やら現役に時間を作って貰えばいい。道具に関しちや装備課に掛け合えばいいだけツスよ。そもそもどいつもこいつも忍法が便利だからって頼り過ぎだ」

「忍法の使えない君らしい発想だね」

（ねえ、この子さあ、全方位に喧嘩売ってんの???)

（驚いたことにそんなつもりは毛頭ないみたいね。でも言葉の選び方が悪過ぎてもうお笑い種だろ?)

（うへえ……流石のオレでもどうかと思うわ……佐郷の顔も怖くなってるしさあ……）

（もうオレは昨日からコイツの言動が面白過ぎて内心ずっと爆笑してるわ）

小太郎の言葉が尤もだと認めつつ、締め言葉がそれでは馬鹿にしているのも同義だった。

ただ一言、分かった、或いは検討するよ、とでも言っておけばいいものの、無意識に軋轢を生むような発言を呼吸をするようにする。

受け取りようによっては、忍法を使えない小太郎や雅臣を馬鹿にするばかりではなく、科学捜査まで軽視しているようにさえ聞こえる。頭への入力は正しく行われているのに、口から出力される言葉が本人も気づかぬ内に可笑しな変換が為されていた。

その様に孤路は呆れ顔、鶴などなおの見えないところで般若の形相である。

雅臣も小太郎も気にしてはいない。忍法を使えないと馬鹿にされることなど慣れっこ。その一点に劣っているのは事実。事実。

されども、それを無意識にやっているなど他者に気を遣う雅臣にしてみれば信じられず、相手が相手なら言葉を選ぶ小太郎にしてみれば呆れを通り越して面白くなっていた。

「なおくん？ お説教です……」

「え？ なんで!？」

「(鶴ちゃん、やつちやって)」

「孤路ちゃんも?! どうして?!」

「若さあ……こんな大事件の捜査の割に、やたらと人数少ないのってさあ……」

「まず間違いなく穂稀パイセンのせいでしょうねえ。こんなのに付いてける奴、この二人以外にいの?」

「鬼崎とかみたいプライド高いのも、井川みたいに敢えてキツいと言ってるのもいいけどさあ、これはちよつと、純粋に穂稀の将来が心配……」

「ぶへへへへへへへへへへ!」

「なに笑ってるのさふうまくん! 助けてよっ!」

学園から浅井家までも決して短くない道中。

なおはひたすら鶴から説教を受け、それを横目で見ていた孤路と雅臣はずっと呆れ顔。

小太郎は小太郎でなおの無様な姿に爆笑し続けた。もう、このやらねばならない厄介事をヤケクソ気味に楽しむと決めた様子であった。

しかし――

(視線の数は相変わらずだが、イキリ金髪野郎の視線が減って、別の誰かの視線が増えたな。百田の監視か、さて……)

――その異常な猜疑心に些かの陰りもなかった。

五車の町外れ。五車学園から歩いて三十分ほどの位置。住宅がひしめき合う地区に目的の浅井家はあった。

辿り着いた浅井家は、井河の上忍に位置するだけあって立派な家構え。

家の周囲を囲む白い塀に、正面の門は見上げるほどに大きい。門を超えるると石畳が家の玄関まで続いており、塀と家屋の間には庭が広がっている。

誰もが考える裕福な旧家を絵に描いたようであったが、生活する家族がいなくなった以上、ハリボテと何ら大差はない。

「此処が事件現場だよ」

「見た感じ。広いけど普通な感じだなあ……いや、静か過ぎ……っ」

「兎に角、中に入って調べ——」

「(待って)」

「なおくん、構えて」

「どうしたん……これはっ!」

小太郎を先頭に切妻屋根の棟門を抜ける。

その瞬間に小太郎と雅臣は足を止め、孤路が静止の声を上げた。いずれの行動も同じ理由。

小太郎は既に感づいていながら無視している気配の主が悪意を以て行動を開始したのを感じ取り、雅臣は敵が現れたのを察知してい

た。鍛え抜いた鋭敏な五感によるものだ。

対し、孤路も己の忍法で敵の存在を感知した。死者の魂であろうと生者の魂であろうと痕跡は残る。彼女が捉えたのはそれだった。

僅かに遅れて鶴が気付き、なおが気付いたのは変化が訪れてからだった。

（泥遁、か。今まで静観、今も監視はしているが、このタイミングで、か。なら増えた視線が殺人鬼——と判断するのは早計だな。それにこの忍法じゃ、色々と説明がつかない）

（分身を作る感じ、だよな？ 数は多いけど、動きが鈍い。なら……）

処理限界を超えた雨水が道路に溢れ出すように、目の前に広がる芝や石畳の下から泥が溢れ出す。

物理法則に従って周囲に広がらず、あらゆる法則から外れて周囲ではなく上へと伸びていく。

やがて泥は人間のような形を取っていた。

目もなければ耳もなく、鼻もなければ口もない。短い手足に突き出た下腹。あまりにも出来ない人の似姿。その数およそ三十数体。

なおを筆頭とした三名はその数を前にして恐れはない。このタイミングで仕掛けてくるなど殺人鬼を置いて他にはいまい。己と仲間
の危機ではあるが、同時に殺人鬼の正体に迫る好機。否応なしに戦意は上がっていく。

小太郎と雅臣は既に戦力と戦況を分析していた。

戦いを仕掛けようとしている相手が泥の分身体を複数操る忍法を
持っていることは間違いない。其処で重要となってくるのは射程距離。

分身相手にいくら戦った所で意味がない。相手が忍法を行使できなくなるまで粘る方法もあるが効率が悪い。最も単純な攻略法は分身を操っている術者を叩く事。雅臣は日影との戦闘訓練によって、それを学んでいた。

泥分身の動きはぎこちなく精彩さに欠けてる。其処からの推測で

はあるが、日影の式神のように各自の思考を持つているようなタイプではなく、術者が操り人形のように操作し続ける完全手動型。

術者は確実に近場の何処かに隠れ潜んでいる。分身から術者に向けて何らかの形で情報を送る、或いは感覚を共有する忍法もあるにはあるが、それにしても動きがぎこちなさ過ぎた。

ならば——小太郎は知識から、雅臣は経験から似たような思考を経て、出した結論は同じ。

「分身はオレが戦^{コイツら}る。本体は頼む」

「オレ達で本体を捕らえる。何か異論は？」

「(龍造寺先輩は大丈夫?)」

「この程度なら問題ない。雅臣、本気でやらなくていい。術者らしい気配は近くにある。流すつもりで時間を稼げ」

「応っ！」

「はあ!? どう考えても、忍法を使えない先輩だけじゃ無理だよ！」

「——ふっ！」

「((は、速い……っ!))」

然したる意思疎通を見せず雅臣は自らの役割を理解し、小太郎もまた他に指示を出す。

今回は風紀隊が主体の任務。しかし、雅臣は小太郎の護衛として来ている以上、小太郎以外の命令を聞く必要はなく、小太郎は主体でこそなかったが五車外での任務が多い独立遊撃部隊の方が戦闘経験、指揮経験は勝ると判断して臨時で指揮権を握るだけの理由はあると判断。

そんな中、なおだけが反発を見せた。

ただなおも意味もなく反発しているわけではなく、純粋に雅臣の身を案じたが故。

高貴なる者の使命とでも言うべきか。穂稀家の家訓か、両親の教育か、個人的に至った思想なのかは別として、なおの心に根付いているのは、強者は弱者を守るべきという傲慢でこそあるが、だからと言っ

て責められるでもない理屈。

残る二人も身を案じていないわけではない。反発こそしないものの、不安げである。忍法を使えないというハンデは、使える者からしてみれば埋めようのない差。三者の反応は至極当然のものであった。

しかし、小太郎も雅臣もそれ以上言葉を重ねない。説得力とは言葉から生じるものではなく、確たる事実と行動によって生み出されるものと知っていたからだ。

雅臣は途轍もなく力強くありながら、同時に余りにも静謐な踏み込みで分身の群がる庭の中央へと飛び込んだ。

目で追えぬほどの速さと空気に揺らぎすら生まない卓越した歩法。それは同じく小太郎の家臣である無形から言葉によって、任務を共にした際、視界の隅に捉えた影を真似てのもの。

雅臣自身からしても無形と比すれば子供騙し、猿真似と大差のない児戯。されど、彼の生まれ持った天性の肉体と格闘センスによって繰り出されれば、縮地にも似た結果を生む。

一瞬、姿を見失った三人が次の瞬間に見たのは、雅臣が踏み込みの速度と体重を乗せた右ストレートを分身の顔面目掛けて直^{クリティカルヒット}撃させている光景。

成す術なく右の孤拳を喰らった分身の頭部が、何の比喻もなくこの世から消滅していた。

一撃の余りの重さと速度に泥は後方へと吹き飛ばされ、返り血ならぬ返り泥すら雅臣の身体どころか拳一つ汚せない。

だが、所詮は分身。術者が無事な限り、どれだけ倒しても意味がない。

(やっば再生するよな。なら、狙いは顔じゃなくて胴体^{ボディ}。一撃でなるべく大きくの部分を吹っ飛ばして再生時間をちつとでも伸ばす——！)

目の前で再生を始めている一体と四方八方から殺到する残りの人形を前にして、雅臣は己の役割を熟す上で必要な行動を見据えている。

た。

分身を完全に破壊する必要はない。どの道、どれだけ破壊しようとも次々に新しい分身が生み出されるだけ。ならば、破壊しないギリギリのラインに留めておいた方が足止めの効果は大きい。

新たな分身を作り出されてしまったては小太郎達に狙いを返る恐れがある。再生に留めさせることで的を己に絞らせた方がいい。

雅臣はお世辞にも成績が良いとは言い難いが、馬鹿でも間抜けでもない。知識そのものを詰め込むのが苦手なだけで頭の回転は速く、戦闘用の思考は小太郎を筆頭としたふうま宗家の面々に叩き込まれている。敵の足止め、囮役としての最適解を選択していた。

雅臣の身体能力と格闘能力に唾然とする三人を余所に、小太郎は浅井家を取り囲む塀の上に飛び乗り、泥遁使いと思しき気配へと塀伝いに向かう。

呆気にとられていながら逸早く己を取り戻した孤路が僅かに遅れて、そして鶴、なおの順で後に続いていた。

「ちよつと、一番弱い君が先行しないでよ！」

「(本当にこつち?)」

「直に分かるでしょ。それよか気配が逃げ始めた」

「来ました、確定です」

後に続いてはいるものの、孤路もなおも半信半疑。

小太郎の言葉を本気で信じているのは鶴だけであったが、彼女にもまた信じるだけの論拠がない。ただ、小太郎に対する感謝から成る盲目の信頼があるだけであった。

しかし、塀の上に新たな泥分身が二体現れたことで、全ての疑問に対する回答が示された。

此処で泥分身を立ち塞がらせるのは他でもない、逃走の時間を稼ぐため。少なくとも小太郎の察知した気配が泥遁使いのものであると確定したも同然だ。

足止めの分身などと戦って時間を無駄にするつもりのない小太郎

は後ろを走っていた孤路の襟首を掴み、そのまま堀から浅井家脇の道へと飛び降りた。

「(きやつ)」

「大丈夫？」

「(ド、ドキドキ)」

「ドキドキすんのは勝手だけどさ、さっさと自分の足で走ってくんねえかなあ」

「(むうつ)」

小太郎の突然の行動に対応しきれずにバランスを崩した孤路は、小さい悲鳴を上げて堀から落下する。

ある程度は予測していた小太郎は空中で孤路を抱きかかえると、音もなくアスファルトの地面へ着地し、そのまま走り出す。

孤路の抱え方は右手で背中を、左手を膝に手を回したお姫様抱っこ。当初から小太郎に好意的に接していた孤路は、付き合いは短くとも恥じらいと照れから赤面してしまっていた。

それほど親しくない女性にするのは勿論の事、返した言葉も不躰そのもの。ロマンスもなければ面白みのない小太郎に頬を膨らませた。

余裕のある態度であるが、それを見逃すほど分身は甘くない。

術師本体に近付けば近付くほどに分身を操る精度も上がるのか、堀の上で立ち塞がった二体の分身は、小太郎と孤路の後を追うように即座に跳躍していた。

「バルドル、行つけえ！」

「——機遁・最期巖」

だが、その好機を逃すなおと鶴ではなく、小太郎と孤路は襲い来る分身に視線を向けてさえない。

なおは制服の下に纏っていた赤と白を基調とし、猫を思わせる耳のヘッドセットと尻尾の付いた対魔忍装束を露わにしており、片手には

大型の銃器を構えていた。

彼の忍法は光遁。端的にその忍法を説明するのならば、光を集束させて放つ忍法である。手にしたバトルライフル「バルドル」は夜間や光の届かない場でも問題なく忍法を使用するため光を貯めておく専用装備。

対する鶴は制服姿のままであったが、鞆の中から何らかの金属の塊を取り出していた。

彼女の忍法は機遁。無機物から何らかの機巧を生成して使用する忍法。金属は硬度など忘れたかのように彼女の腕に巻き付いて肘まで覆い、銃へと変化する。内部に生成されたのはなおの「バルドル」を模した集光と射出を成す機構。

両者が引き金を引くと同時に、眩い二条の光が分身を貫く。

射程5 m圏内であれば、鋼鉄ですら容易く溶かす光線レーザーは、文字通りに分身を一片残らず蒸発させてのける。

「ふうまくん、見ていたかい？　これがボクの実力だよ」

「みてたみてた」

「若様、ご覧頂けましたか？」

「すごいすごい。で、どう？」

「うん、確かに浅井の御屋敷で感じたのと一緒に。すぐ其処の家を左に曲がったらいる」

なおの向けてくるドヤ顔も鶴の向けてくる期待の眼差しも軽く受け流し、小太郎は走りながら地面に下ろした孤路に問う。

指示されるまでもなく孤路は自らの魂遁を使い、魂そのものが移動した痕跡を辿っていた。返ってきたのは想定していた通りの言葉。

誰も住んでいない家に立ち入る者など居る筈もなく、攻撃が開始された場所で確認された魂の気配と同一ならば、逃げる気配の正体が泥遁の使い手であると確定したも同然。孤路の言葉でようやく納得したのか、なおはドヤ顔を消して表情を引き締めた。

見えてきた家の角を曲がる直前、小太郎は五車学園に通う生徒に教

えられていたハンドサインで指示を出す。

刀を背負った孤路が先陣を切り、小太郎がそれに続く。

二人の援護をなおが担当し、分身による強襲に備えて鶴が三人の背中を守る布陣。

なおは勝手に指示を出すな、とでも言いたげな顔であったが、親友二人は黙って領き、自身も小太郎以上の指示を出せなかった故に不承不承ながらも領いた。

孤路が指示に従い、背中の刀に手を掛けたまま身を低く、泥遁の使い手が待ち構えているか逃げている最中であろう道へと曲がり――

「あ、あれ？」

「逃げられた？　いくらなんでも早過ぎるよ！」

――その先には、人の影一つない。

道の先には家と家が数百m先まで連なっており、全てが塀で囲われている。塀と塀の隙間には人が入り込む余地はなく、精々通れるのは猫くらいだろう。

そのまま走って逃げたにしては驚異的な速度、塀を飛び越えて逃げてたにしては家の中から声は上がっていない。まるで煙のように忽然と消えてしまった。

戦いを予感していた孤路は肩透かしを喰らい、なおはまんまと逃げられたと悲鳴にも似た声を上げる。

念の為まだ後方を警戒していた鶴を余所に小太郎は周囲を見回して、ある一点に目を引かれた。

「いや、走って逃げた訳じゃないみたいだ」

「側溝の蓋が、それに泥も………まさか、自らの身を泥に変えて？」

「泥遁の『泥太夫』だな。泥の人形を操って、自分の身体を泥に出来る忍法は他にない。射程は精々30mくらいかな。なら、雅臣の方も人形は崩れてるか。うーん、なかなか良い忍法を持つてるじゃない

か」

小太郎が見咎めたのは塀の直ぐ下にあつた側溝。

側溝の前にしゃがみ込んだ彼の視線の先には、一カ所だけ蓋が取り外されており、その周辺は泥で汚れている。

泥遁「泥太夫」は泥を操るのみならず、煙遁のように自らの一部、或いは全身を泥へと変化させて攻撃を無効化する無敵の忍法。

しかし、煙遁と比べて肉体の泥化の難易度が低い。その理由は心臓だけは泥化できず、核として残るからだ。明確な核を必要としないままの肉体の転化は元に戻れなくなる危険性がどうしようもなく付いて回るものなのだ。

「舐めてくれるじゃないか……!」

「(どうかしたの、ふうまくん? もしかして、名探偵としての直感で何か……?)」

「どうしてオレを名探偵にさせたがるかなあ。探偵物、好きなの?」

「(大好き。凄く面白い)」

「孤路ちゃん、面白がっている場合じゃないんですよ?」

「(大丈夫。それはそれ、これはこれ。殺人鬼のやっつてることは許せない)」

なおの憤りを余所に側溝の前にしゃがみ込んだまま動かない小太郎へ、孤路は子供が憧れに向けるようなキラキラとした視線を送っていたが、当人はうんざりとした表情のまま。

名探偵になど興味関心もなければ、面倒事に巻き込まれるような職業や役割になりたくもない小太郎にしてみれば当然であった。

完全に危険は退けたと判断した鶴は右手の銃を元の金属塊に戻すと、はしゃいでいるようにしか見えない孤路に呆れ気味に諷めていた。

だが、孤路ははしゃいでこそいるものの、瞳に灯る義憤の炎は失われていない。彼女とて、自ら望んで風紀隊に属している。正義感も使

命感もなおに劣るものではなかった。

（今の泥遁使い、殺人鬼じゃねえな。てことは協力者の方か。今まであった視線も全部消えちまったし、見るべきものは見たってことか）

なおは勿論の事、孤路や鶴でさえも、今の襲撃してきた泥遁使いが殺人鬼と断定しているようであったが、小太郎の見解は違っていた。

そもそも小太郎は殺人鬼が単独犯とは思っていない。

その理由はこれまで23人、浅井家の一件を含めれば26人もの対魔忍が殺されながら、何の証拠も証言も見つかっていない事。

いくら何でも、五車という狭い地域でこれだけ人を殺しておいて、風紀隊による調査が杜撰だったからと言って、何一つ不審な証言や証拠が見つからないのは殺人鬼にとつて余りにも都合が良過ぎる話。

殺人鬼がどれほど優れた能力と頭脳、忍法を持っていたとしても、風紀隊が無能の集まりだと仮定しても、まず在り得ない。何らかの行動を起こせば何某かの証拠は必ず残り、完全に人目を避けるのは不可能。

となれば、複数の殺人鬼が協力して殺人を犯しているでないにせよ、殺人に協力している何者かが居ると考えた方が自然だ。

何よりも、風紀隊と鶴と合流した時から感じていた三つの視線は泥遁使いが逃走したと同時に消失した点は大きい。

そもそも泥遁使いが殺人鬼であるならば、攻撃を仕掛けてきたのは何故か。新たな証拠を発見されなくなかったからか、ならば中途半端に逃げるのは何故か。不利な状況に陥ったからにしても、戦力的に不利だったにしても必死さが足りなすぎる。殺人鬼は正体が露見した時点で負けが確定する。ならば一度攻撃を仕掛けた以上は皆殺しにするまで戦うべき。状況的に逃走した泥遁使いが殺人鬼である可能性は低い。

そして、三つあった視線の一つが泥遁使いの視線とするのなら、残る二つが同時に消えた理由は何か。どう考えても、事件を追っていた風紀隊以外の面々の戦力を測っていたからだ。

泥遁使いの逃げの姿勢は不本意な戦闘を殺人鬼に迫られたか脅されたか故。当て馬にされていると理解しているに違いない。

視線が消えたのは戦力の測定が終わったからだろう。ならば、本命は二つの視線の方。

(馬鹿だな。やること成すこと半端過ぎる。正体を隠して巧くやつてるつもりなんだろうが、お蔭さんでこっちは正体を絞る情報がわんさか手に入る。楽ができていいね。その調子でどんどん墓穴掘りまくってくれ)

まだハッキリとした姿形を捉えられていない小太郎ではあったが、殺人鬼自身の行いによつて正体は輪郭を帯び始めている。そして、殺人鬼の性格も。

声もなく誰にも見られる事もなく笑みを浮かべた小太郎は名探偵と言うよりも、寧ろ――

「鴨だな」

「(何か言った?)」

「いや別に。仕掛けてきた相手が逃げてくれたなら、さっさと調べに戻ろう。雅臣も待つてるし。邪魔しにきたつもりにしろ、挑発しにきたつもりにしろ、動きがあつた以上は浅井家に何かあるのは確かだ」
「そう、ですね。よくよく考えれば、今の相手も殺人鬼とは限らないわけですし」

「事件の関係者に留めておくべきだろうな」

「それよりもふうまくん。君ね、勝手に指示するのは辞めて貰えないかな。ボクはまだ君を認めただけじゃないんだ」

「な・お・く・ん?」

「(なおちゃんは意地っ張り)」

「い、いひやい、いひやいらないかあ~~~~~」

小太郎の眩きは、先程の笑みと同じく誰に届くこともなく消え去つ

た。

相変わらず自身に突つかかってくるなおには呆れ気味であったが、見るに見かねて鶴と孤路が両サイドから頬を引っ張っていた。

なおも二人の制裁に抵抗をしない辺り、小太郎の働きを認めてはいるのだろう。しかし、一度意固地な態度を取ってしまった故に引っ込みが付かなくなっているようだ。

小太郎は思わず破顔していた。

頬を引っ張られて端正な顔立ちが面白可笑しいことになっているからなのか。はたまた幼馴染トリオの仲の良さ故だったのか。それは彼にしか分からないことだった。

どうんどうん追い詰められる殺人鬼。なお殺人鬼はその事実気付いていない模様

「驚きましたよ。忍法を使えもしないのに、ちゃんと強かったんですね」

「まあ、それなりに。つか穂稀、そういう言い方やめなあ？」

「えっ？ 何がです？」

「(なおちゃん、ダメダメ)」

「これは指導が必要ですね」

「えっ!? なんでえっ!? いたっ！ 痛いよ、二人とも！」

事件関係者と思しき泥遁使いを退けて数分後、一同は浅井家の敷地内に戻ってきていた。

雅臣は小太郎や風紀隊よりも遥かに多い数の泥人形を相手取りながら、全くの無傷。それどころか身体や衣服を一切汚していなかった。

彼がどれほど過酷な鍛錬を積み重ねているかを知り、鍛錬を課した張本人である小太郎は驚いてなどいかなかったが、残る面々にはある種の尊敬の眼差しを向けている。

あのなおですら雅臣を認めていたのだが、相変わらず言葉の選び方が拙く、見下しているようにしか聞こえない。

流石の雅臣もこれには見兼ねて苦言を呈す。腹を立てていたのではなく、純粹になおのこれからを案じているから苦言であったのだが、当の本人は自覚などまるでないようで尤も質の悪い態度だった。

いい加減、自身の欠点を自覚して貰いたい親友達は、なおの頭に何度も平手打ちを喰らわせたのだが、折角の苦言も思いやりも指導も全く届いていない様子だった。

小太郎は四人の微笑ましいやり取りを無視して、皮手袋を嵌めると

玄関に手を掛ける。

「ありや若、流石に用意いいなあ。刑事ドラマとかで見た。現場の保存とか言うんだっけ？」

「別にお前は気にしなくていいぞ。事件当時の写真は取ってあるし、指紋の採取はとづくに終わってるからな。中も殆ど片付けられちゃってるだろ」

玄関の磨り硝子の嵌め込まれた格子戸を開き、そのまま取り外す。小太郎の肩越しにその様子を眺めていた雅臣は、興味津々と言った感じに覗き込んでいる。

基本、小太郎が雅臣に割り振る任務はバリバリの戦闘、護衛任務や一般人に対する聞き込みが主。前者は類稀な戦闘能力を活かすためであり、後者は他者の警戒心を引き下げるコミュニケーション能力を考慮して。

よって、こうした調査系の任務は携わったことはない。雅臣には何もかも新鮮に映るのだろう。

そして、孤路も同様に興味深げにしげしげと眺めていた。探偵物が大好きと口にしてたことといい、小太郎を名探偵にしたがるところといい、今回の共同任務を何処か面白がっている節はあったが、表情は真剣そのもの。

小太郎から指摘された通り、自らの生まれ持った魂遁の忍法にも限界や陥穽が潜んでいたことを正しく受け止め、忍法以外の捜査の手法や方法を学ぶつもりらしい。

風紀隊の仕事は遊び半分ではできず、また被害者に向けての憐憫や殺人鬼に向ける義憤は本物。五車の治安維持、そのためならば後輩に頭を下げることも学ぶことも恥とは思わない。その一点に關して、彼女は貪欲でさえあった。

「(何してるの?)」

「錠を解体してる。通常の鍵以外で開けると、どうしても錠の中に普

通じや出来ない傷が出来る」

「へえ。でもどうしてそんな調べんの？」

「事件当初、浅井家の鍵は玄関以外は閉まったままだった。つまり、犯人は堂々と玄関から入って出てったか、はたまた空遁系列の忍法が使えるわけだ」

「状況証拠としてはそうなるね。でもそれが何か関係あるのかい？」

「大有りだろ。骸佐が反乱を起こした最中だ。いくら脆弱でも鍵くらいは掛けてただろうさ。それを鍵を使わずに開けて入ったのか、忍法を使って入ったのか、それとも中から開けさせたのかで犯人を大分絞れる」

小太郎は取り外した格子戸の錠を分解しながら、雅臣達の質問に答え、自身の狙いが何処にあるのかを語る。

もし無理に抉じ開けていたのなら、忍法は直接攻撃にしか使えないような攻撃系か、何らかの条件を満たさねば発動しないタイプであろう。そして、鍵を入手できる立場にない、浅井家とは無関係の者の犯行と予測できる。

逆にそうでなかったのならば、忍法は鍵のかかった錠を無効化できるタイプ。もしくは鍵を手に入れられるか、声を掛ければ中に入れてしまうほど親しい間柄の犯行と予測される。

まだまだ絞り切るには足りないが、現時点で容疑者が五車に住まう人間全てである以上、広大な範囲を僅かにでも狭められることを考えれば、値千金の情報と言えよう。

淡々とした小太郎の語り口調を聞いた各々は、自分では思いつかなかった切り口に感心した吐息を漏らしていた。

「それよか、こっちはオレがやるから中の方を調べてこいよ。この手のタイプの犯人は犯行現場に戻ってくるって言う。何か新しい証拠があるかもしれない。どうせだったら、当時を思い出して現場で自慰オナニするくらい馬鹿で変態な奴だと良いんだがな。後でも見つけりゃ一発で捕まえられる」

「き、気持ち悪いこと言わないでよ」

「うへえ……そういう発想に至るのは、ちよつと理解できねーわ」

「(でも手分けした方がいいのは事実。行こう)」

「では私は此処で若様の護衛を」

「今日の所はもう一度襲撃なんてないと思うけどな」

「いえ、万が一が御座いますれば」

「……じゃあ若は佐郷に任せたまよ。オレ等は中を調べようぜ。なあ穂稀、こういう時って靴脱いだ方がいいの？」

「普通に入つて貰つて構いませんよ。周りをべたべた触られるのは困りますけど」

「オツケー。んじゃ、行つてみようか」

格子戸から完全に取り外し、円筒形のルーペ——時計見で錠の中を確認し始めた小太郎に、此処で手伝えることはないと判断するとなおと孤路、後に続いて雅臣は鶴を残して家の中へと上がっていく。

残された小太郎は鶴を気にも留めず、鶴は鶴で護衛の役割を果たすべく周囲を警戒していた。

錠の外にも中にも特殊な工具による真新しい傷はなく、あるのは鍵を差し込む際に生まれる摩耗だけ。

ついでに言えば、泥の後や詰まりもない。これで少なくとも襲撃してきた泥遁使いは、浅井一家殺害事件への直接的な関与している線は極めて薄くなった。

泥遁は小太郎の言うように応用も効き、手数も揃えられる単純だが強力な忍法だ。しかし、どうしようもなく痕跡は残る。事実、庭のあちこちには崩れた泥人形の後が残っており、逃走に使用した際にも痕跡が残っていた。

殺害されたと言えども浅井家は上忍一族。相当な手練れであった。

あの程度の使い手であれば、殺害の際に泥遁を使わざるを得なかったであろうが、その痕跡全てを綺麗に隠滅できるほどの時間的な余裕あつたとは考え難い。

「若様、申し訳ありません」

「はん？ 何があ？ もしかして穂稀センパイに関してか？ アレはお前が謝ることじゃないし、別に悪意があるわけでもないだろ」

「なおくんの失礼な態度もそうなのですが、私自身が……」

「……？ 何もしてないだろ？」

「それが問題なのです」

確認したかったところを調べ終わった小太郎は、今度は逆に錠を組み立てていく。

この家を取り潰されて更地になるか、事故物件として売りに出されるかは知らなかったが、放置してなおに嫌味を言われるのも面倒であつたからだ。

鶴は庭と門の方向を警戒して背中を向けたまま意気消沈して話し掛けてきた。

彼女の予定では、この事件解決に対してもっと力になる予定であつたのかもしれない。捜査においても、戦闘においても。

しかし、現実はどうだ。足を引つ張つてこそいないものの、何の助けにもなっていない。己に自信があつたからこそ不甲斐なさに齒噛みしていた。

だが、小太郎は言葉など掛けず、鶴を見ようとすらしなかった。

鶴に対して不満は特にない。彼女の人柄や境遇を考えれば、この事件そのものに関わるなどとは思っていないが、何らかのアクションを掛けてくるのは予想していた。

ただ、彼女のメンタルなど知つたことではない。この関わることさえ面倒な事件を起こした殺人鬼を追い詰めて殺し、さっさと己の仕事に戻るだけだ。

「さてと、事件当時の写真は、と……」

「此方に」

「……ちゃんと役に立つじゃん」

「まあー」

玄関の引き戸を元に戻した小太郎は、次にすべき行動のため資料を取り出そうとしたが、何時の間にか隣に立っていた鶴がより早く己の靴の中から浅井一家殺害事件の捜査資料を差し出していた。

僅かばかりに目を丸くした小太郎は、やや控えめな誉め言葉を口にする。

彼がこうして他者を褒めるのは珍しい。家臣や独立遊撃部隊の隊員以外には特に。

小太郎は過大にも過少にも他人を評価はしない。褒めるべき部分がない相手にはひたすら辛辣。であれば、少なくとも鶴が捜査の相方か、従者として不足はないと感じているのは確かであつたらう。

鶴がその性質を理解できていたとは思えないが、小太郎の言葉を聞くと、パアツと表情が明るくなる。どのような形であれ、恩のある相手に褒められて悪い気はしないのだろう。

先程の落ち込みようは何処へやら。小太郎のタイミングが良かったのか、鶴が恩のある相手にはひたすら単純であつたのかは定かではない。

「それでこれから何を……？」

「殺人鬼の情報はまだ少ない。だから奴の足取りを追うのは無理筋。まずは被害者の動きを追う。それが見えれば殺人鬼の動きも自ずと見えてくる」

「成程……」

事件当時、まだ殺人鬼の存在が認知されていない状況であっても、事件現場の写真くらいは残してある。

まず小太郎が取り出したのは、玄関の写真。

玄関にはサンダルが一足。婦人用の靴が一足だけが綺麗に揃えて並べられていた。それ以外の靴はない。

浅井 美織の母親は、既に一線を退いた対魔忍であつた。少なくとも骸佐の反乱当初、不用意に家の外に出ていなかったことが伺える。

そして、美織と父親がそれぞれ最後に目撃された時間と位置から、美織が母親の安否を確認するため先に家へと戻り、その後父親が戻ったであろうことは予測できた。二人の靴がなかったのは、脱がずにそのまま家の中へと上がったからだろう。

いま得ている情報と被害者の人格を考慮した上で、小太郎は二人の影を追うように家へと上がり、その後ろを鶴が追う。

母親が戦えたかどうかは別として、反乱時に家から出なかったのは玄関の様子からほぼ確定している。

夫と娘が帰る家でもあるのだ。現役を退いた状態で無理に戦って危険に晒されるよりも、家で無事を祈りながら家族の帰りを待った方が良い、とでも考えたのだろう。

ならば、母親は何処かに隠れていたと見るべき。それも家族しか知らない隠し部屋か何か。そして娘と父親は逸早く母親の安否を確認すべく靴も脱がず其処へと向かった。

「此処だな」

「此処とは？ 血痕が発見されたのはその部屋ではありませんが」

「いや、隠し部屋が此処にある。廊下の長さど部屋の広さが一致してねえ」

小太郎達が辿り着いたのは玄関から廊下を一直線に進んだ先にあった和室。

障子張りの襖を開いた先には、畳で埋められた部屋の中央に大きめの和机がポツンと置かれているだけ。造りと趣からして客間である。

人が住まなくなつて手入れがされなくなつた部屋は襖を開いた拍子に埃が舞つたが、小太郎は気にせず中に入って掛け軸の掛かった壁を叩く。

音を聞いた瞬間、二人は目を見合わせた。不自然な空洞音を耳にしたからだ。

音から隠し部屋の構造、そして仕掛けの種類を把握した小太郎は壁

の四隅を叩く。すると壁自体が中に隠された軸を中心にくりりと反転する。

「どんでん返し……ということとは、浅井家の奥様は此処に身を潜めていたということですか」

「十中八九な。それに見ろ」

「髪の毛、ですね。色と長さからして、これは浅井 美織のもの……なら、先に奥様と美織さんが再開して、再び此処へ」

「その後に父親が帰ってきて一網打尽、そんな流れか。浅井の親父はそれなりに腕利きだった。だが室内に争った形跡がなかったところを見るに不意打ちだったろうな」

「……………となると、先ほどの泥使いは」

「殺人鬼じゃなくて協力者で確定だな。泥遁はさつきみたいに敵を待ち構えておくのに向いてる。オレ達に追われて動揺して逃げたのを鑑みるに使い手の実力も大したことはない。その程度の奴の実力じゃ、浅井の親父に不意打ちしかけるなんざ自殺行為だし」

曲がりなりにも対魔忍は忍。

万が一に備え、こうした仕掛けを自身の屋敷に施しておくのは珍しくない。

よって小太郎は勿論の事、鶴にも驚きはない。ただ、鶴が瞠目していたのは小太郎のその場で起こった過去をまるで見てきたかのような手腕。

彼女にはそれが事実であると知る術はない。それでも、話の辻褄はあっている以上、信じざるを得まい。

「殺人鬼は、浅井一家を不意打ちで同時に昏倒させるだけの实力がある、ないし忍法を持っている、ということですか」

「だな。不意打ちでパツと思いつくのは姿を消す忍法か、存在そのものを隠す忍法辺りかねえ」

「空遁系はどうでしょう？」

「いや、それはないな。アレ、空間を飛び越えようとする空間歪曲場で周囲に派手な痕跡が残る。これだけ部屋が綺麗なら除外してもいいだろうよ」

「それでも、これで相当範囲を絞れますね。そうでなくとも、殺人鬼が仕掛けてきても対応できます。それで、殺人鬼はその後……」

「家族揃って引き摺って、血痕が発見された部屋で殺したってどこか。問題があるとするのなら——」

「どうやって、白昼堂々三人もの人間の死体を運んだか」

「それだな。それも殺人鬼の忍法に秘密があるんだろうが、アレだけ派手に血が流れてる以上、姿を消すだけ、存在そのものを隠すだけじゃ、痕跡までは消せない。となると、いくつか可能な忍法はある、かな」

「では、それで風紀隊のデータベースを当たってみましょうか。アレには個々人の忍法も登録されているそうですし」

「いや、意味がない。データベースに登録されている忍法はあくまでも自己申告だ。偽装する手段はいくらでもあるし、最悪忍法を使えないと登録しちまえばいい……此処で分かるのはこれくらいだな。次は血痕の発見現場に行こう」

徐々に輪郭を帯び始めた殺人鬼に鶴は嫌悪と義憤を募らせ、小太郎は真綿で首を絞めるかの如く追い詰めていく。

彼の頭の中には、これまで対魔忍が確認してきた忍法は全て叩き込まれている。

それは五車に所蔵されている書物だけではなく、ふうま一門が蒐集してきた膨大な量の書にも全て目を通してある。

その中で、殺人鬼の犯行が可能になる忍法はいくつかある。これだけでも値千金の情報であった。

仮に馬鹿正直に忍法をそのまま申告していなかったとしても、本来の忍法で見た者を騙せるような忍法として登録している。

万が一、己の忍法を人目に晒さなければならなくなった際に、これまでの立場が一気に瓦解しかねず、どうして嘘をと周囲に良からぬ疑

いを持たれかねないからだ。

そして、忍法を使えないと申告してはいない。これは小太郎自身に確証はなかったが、確信に近い感覚である。

忍法を持つていること。それは対魔忍の間では一種のステータス。小太郎や雅臣がそうであるように、与えられなかった者への嘲笑と風当たりは厳しい。

殺人鬼の犯行や行動のそこから感じ取れる詰まらない矜持と絶大な自信。それに反する承認欲求と自身を客観視する冷静さ、ではなく臆病さ。

肥大化した欲望と正常を保とうとする理性。欲求と知性、正と負の感情の合間で揺れる殺人鬼が、自らを「無能です」と宣伝して回るこゝろなどが在り得ない。ただでさえ矜持が悲鳴を上げている者が、自ら嘲笑に晒される真似など出来よう筈もない。

(こりや後、二、三日でケリがつくな。しよーもな)

(若様、もしや鶴が何か……)

その呆れは、愚かな殺人鬼に向けられたものだったのか、そんな殺人鬼ですら捕まえられない風紀隊に向けてのものだったのか、或いはその両方か。

いずれにせよ、ただでさえ呆れで満ちていた胸中は、更に呆れで満ちていく。溜め息は止まらず、面倒臭さは増える一方であった。

そんな小太郎の後に続き、鶴は不安げな顔をする。

巻き込んだ彼女にしてみれば、小太郎が一喜一憂するだけで己の行動を顧みる理由になる。

『仇は倍返し、恩は百倍返し』。母の遺した言葉は確かに人として正しかろうが、余計な苦しみを抱かせる呪いであると同時に人をより良く成長させる祝福でもあるようだ。

両者それぞれの想いを抱えながら惨劇の場——浅井家の居間へと向かう。

其処には先に家へと入っていった三人の姿があった。だが、表情は

硬かった。

「来たね。そつちの方はどうだったかな？」

「まー、それなりに。殺人鬼が誰なのか、相当絞れると思いますよ。そつちは何か？」

「あつたよ。挑発、のつもりだろうね。馬鹿にしてくれるよ」

「ミサンガ、ね。これまた悪趣味な」

「……………っ！」

「……………」

なおは新たに発見された証拠品と思しきものを手渡し、小太郎は失笑気味に顔を顰めながら受け取った。

後ろから肩越しにそれを覗き込んだ鶴は小太郎が悪趣味と称した意味を即座に理解して息を呑み、それを見守っていた雅臣は硬い無表情のまま。

一見、小太郎が言うようにただのミサンガに過ぎない。

子供のよくやる願掛けの一種。ミサンガが切れた時に、掛けていた願いが叶うという、誰でも一度はやったことはあるかもしれない、そうでなくとも聞いたくらいはあるだろうお呪い。

それがただの糸で編まれていたのならば、或いは美織の持ち物だとしても思っただろうが、それは在り得ない。何せ、ミサンガは人毛で作られていたからだ。

髪質感だけからでも凡そ年齢は見当が付く。

ミサンガは色の違いなどから最低でも三人の髪で編まれており、それぞれ中年が二人分と若年が一人分。髪の色や特徴は浅井家の家族と一致しており、被害者の髪を切り取って作られたものと見てほぼ間違いない。

死体の弄びは、一種の禁忌だ。

食人文化というものもあるが、それらは欲望に準じた行為ではなく、死者に対する愛と弔い、役割の引継ぎを意味する歴とした文化。弄びとは決定的に異なる。

だが、このミサングは悪意と欲望によってのみ作られている。これを弄びと呼ばず何と呼ぶのか。

（挑発、か。自身を捕らえられない風紀隊や対魔忍を嘲笑っている、とパイセン方は思っているようだが、違う。違うな。煽り、という点においては同じだが、意図と目的が違う。だが、今はそれよりも――
――）

殺人鬼の性格を掴みつつある小太郎は、怒りを燃やすおや孤路とは異なる見解に至っていた。

常人には理解できない矜持と欲望のバランスの崩れた殺人鬼が行う行為として、捕まえようとする側を挑発するのは決して珍しいものではない。

有名所ではロンドンを恐怖に陥れたジャック・ザ・リッパー然り、日本でもそうした事件は残っている。

だが、今回のこれは全くの別もの。

単に風紀隊を嘲笑いたいわけではない。これまで必死に正体を隠してきた殺人鬼が持つ天秤が今になって理性の側から欲望の側に傾いたのか。其処には何か明確な理由が必ずあるはずなのだ。

小太郎は凡その検討はつけていたが、語らない。

確証があったわけではなく、悪戯に周囲の不安を煽る必要性がなかったからだ。

それよりも問題であったのは、雅臣の様子だ。

何一つ口を開かず、硬い無表情のまま立っているだけ。表面上は風いだのように感情を露わにしないが、その心中はドス黒い怒りが渦巻いている。

当然だろう。死霊騎士によって家族を、友人を、顔見知りや、故郷の人々を、自らに関係する全ての人々を物言わぬ生きた死体に変えられた挙句、自らの手で動かなくなるまで、原型が分からぬまで殴り続けた雅臣にとって、死体の弄びは最大級の地雷。

穏やかでいられるほど人間性は欠落していない。落ち着いていら

れるほど怒りと悲しみを忘れていない。いま笑っていられるのが不思議なほど境遇なのだ。

小太郎は見兼ねて薄く笑いながら雅臣の肩を叩く。

余りにも暗い視線と視線が交差する。一切の光が宿っていない瞳を互いに見ると、雅臣は溜め息を吐きながらも力のない笑みを浮かべて元の快活な光を瞳に宿らせた。

雅臣は小太郎が何をやっているのか知っているし、小太郎もまた雅臣の身に危険が及ばない範囲で明かせるものは明かしている。

永久の存在についても。労働力として確保した人型が何であるかも。特定の事実だけを明かし、特定の事実を伏せておき嘘を吐かないままに誤認を齎すような真似すらしていない。

それでもなお雅臣が小太郎に付いてくるのは、初めて会話した時から常に敬意を感じていたからに他ならない。

そもそもからして、雅臣に語ってきかせた事実はただ騙すだけ、ただ部下として使いたいだけならば語る必要など何処にもない。小太郎であれば、如何様にでも操ることは出来た筈。

明かされた事実に嫌悪と義憤、疑問と困惑でぐちゃぐちゃになった頭で小太郎に何故明かしたのか、と問うたことがある。

『あ？ だってお前に嘘は吐かないって言ったでしょーが。オレ、ほんとマジにお前のご尊敬してんだよ。色々と打算はあるし、自分の間抜けさでミスって仲違いしても、お前に殺されんなら文句はねーかなあー』

『……………お前、誰に殺されたって構わない人間だろ？』

『あー、それもそうだな。言い方が悪かった。文句だの不満だのじゃなくて、安心、が一番近いかなあ。勿論、抵抗はするけどね？』

『抵抗は兎も角、安心……………？』

『そ。お前、普通に生まれて普通に育ってきたじゃん。望んでいない才能があつて中身も多少イカれちゃいるが、考え方は至ってまとも。そんな奴が戦うこと選んで、オレを殺しに来る。そりゃきつと人として正しいんだらうよ。そう考えるとなんつーうかなあ、もう頑張らな

くていいかーとか、オレ達はもう必要ねーんだとか思うわけよ。オレみたいな奴には、過ぎたな終わり方だと思わねえ?」

『……………はあああゝゝゝゝゝゝ。それ言われちゃ、こつちもその気が失せるわ。いいよ、地獄の底まで付き合うよ。いや、地獄の底まで付き合っつて貰うかな。このたらし』

『そりやまた面倒な。ま、とつくの昔に覚悟は出来てる。元々、人間関係なんてそんなもんだろ?』

屑でも下衆でもないが、どうしようもなく救いようのない外道。

凡そ多くの悪党どもよりも、ともすれば己から全てを奪った死霊騎士よりも遥かに悍ましい人間性。

それでもなお、何時でも己で定めた役割と立場を投げ出せるだろうにも拘わらず、己で定めたからこそ投げ出さずに抱えて生き、最後にはクソツタレと呟きながら笑って死ぬであろう男。

あつけらかんと子供のように笑う小太郎に盛大な溜め息を吐き、負けを認める他なかった。

小太郎が理想とする先、思い描く未来は漠然とした形でしかなかったが、確かに本心であると伝わってきた。胸に生まれたのは小太郎が己に向けているのと同じもの。

狙っていたかは定かではなく、そんなことはどうでもいい。重要なのはそれを自覚した時点で、雅臣は小太郎を殺せなくなったこと。人は尊敬や好意を抱いた相手を殺せないからだ。

「雅臣、ちょっと廊下の写真を撮ってきてくれ」

「なんで廊下? それにオレの携帯でいいの?」

「ああ、構わない。もしかしたら犯人の足跡が見つかるかもしれない。時間が経つてから警察なんかの方法じゃ無理だが、ウチの技術顧問の超技術に期待だな」

「(……………! そんなこと出来るの?)」

「あー、確かに啓治さんなら出来るかも。撮り方に指定ある?」

「出来るだけ細かく。枚数は多く。隅から隅まで」

「でしたら私も手伝いますよ、龍造寺先輩。幸い、携帯は私も持っておりますし、人手は多い方がいいでしょう」

「おっ、あんがと。佐郷がいるなら安心安心。オレ、大雑把だからさー。あっ、あとそれからこの面子でLINEのグループ作らない？ その方が連絡が楽になるしよ。考えといてよ」

そう言うのと雅臣と鶴は居間を後にする。

相変わらず接しやすくコミユ力高めの雅臣であったが、元々目敏いことに加えて付き合いのあつた鶴はその僅かな変化に気付いていた。彼女は小太郎に目配らせて自らの意図を伝え、小太郎は黙って頷き任せるままにした。

鶴もまた小太郎同様に雅臣を尊敬しているのだろう。それがどのような種類であるかは定かではないが、尊敬する相手の顔が曇っているのは忍びない。僅かばかりでも気が晴れば、と考えるのが人情だ。

「凄いな、君のところは。確かに足跡が採取できれば殺人鬼にぐつと近づける。他の事件でも同じだ」

「まあ、普通の技術じゃないですけどね。一般には出回ってないし。なかなか馬鹿に出来ないでしょ」

「ああ、嫌というほど思い知ったよ。客観性の高い事実なら誰でも納得させられる。問題は……」

「(私達にノウハウと技術がないこと。正直、何処から手を付けていいか分からない)」

「何ならウチの技術そっちに渡しましょうか？ 科学の良い所は再現性だ。知識とノウハウの少なさは技術でカバーしてゆつくり積み重ねればいいし」

「えっ!? そ、それは助かるけど、いいのかい？」

「渡したものを無駄にしないならオレは特に。ウチのも技術を独占したいタイプじゃなくて、広めたいタイプなんで二つ返事でOK貰えると思いますよ」

「……正直ありがたいよ。でも参ったな、君には借りを作ってばかりだ」

「別にどうでも。特に期待してないんで」

「君ねえ、龍造寺先輩じゃないけど、そういうところどうかと思うなあ？」

「(なおちゃんも人のこと言えない)」

「何だか今日は鶴ちゃんもコロちゃんもボクに辛辣じゃないかな!？」

「(他人の振り見て我が振り直せって言葉知ってる???)」

「知ってるよお!!」

また始まった親友漫才に、小太郎は呆れながらも口は挟まない。必要以上に絡まれるのは面倒だし、仲の良さが発露しているだけに過ぎないからだ。

なおにしても、孤路にしても、やる気と使命感は認めるところ。

無駄な誇りで頑なにならず、時に誇りを引っ込めてでも必要な事柄に手を伸ばそうとする姿勢は助けの手を差し伸べるに値する。

技術面で独立遊撃部隊とふうまを支える啓治にしても、大いに喜ぶだろう。

小太郎が言うように、技術は極々少数のためだけに利用するのではなく、あくまでも技術は世界をより善く発展させるためのものと信じている男。

対魔忍の忍法頼りの手法ややり方に、辿ってきた歴史や積み重ねてきた考え方から理解を示しながらも、欠点や弱点があることを常々危惧していた。前向きに門戸を叩き、己の技術を有効活用するのならば多に歓迎する事態であり、是非もない。

小太郎としても同様だ。

五車は対魔忍の本拠。その治安を維持する風紀隊が伸びるのならば、大いに結構。

独立遊撃部隊はアサギの無茶振り案件すぐやる課と化しているが、基本的に五車の外での任務を想定してる。面倒な案件に関わる確率が少しでも減るのならば、独占技術を広めるのに不満はなかった。

「で、ミサंगाからは読み取りは？」

「(ミサंगाの中には、被害者以外の髪の毛も数本混じっていた)」

「ほう、鑑定に回そう。それで他には？」

「(浮かんできたのは、山畔って文字)」

「山畔……山畔、ね」

「何か心当たりでも？」

「まあ、あると言えば。でもなあ……」

「どういうことかな？」

「いや、確証がないんで。今は明かせないかな。捜査に余計な混乱を生みたくない。明日までに調べときますよ」

「(……！ 今の！ 今の名探偵っぽい！ ホームズみたいな感じ！)」

「この人探偵絡みになると面倒臭せーな」

「孤路ちゃあん……」

突如として興奮しだした孤路に小太郎は顔を引き攣らせ、なおは頭痛を感じたかのように額に手を当てて肩を落とした。

殺人鬼の所業に本気で怒り、本気で追うつもりなのだが、これでは色々台無しである。受け取りようによっては面白がっているようにしか思えない。

目を輝かせる孤路を一時無視して、小太郎は自身の記憶を当たっていた。

記憶にヒットはあった。其処から殺人鬼が何をしたかも想定できる。それでも記憶を口にしなかったのは、相変わらざる猜疑心から。記憶に自信がないのではなく、自らの記憶すら疑いの対象であったからに他ならない。

「まあ、それはいいでしょ。それよりもずっと気になってることがある。今日、浅井邸に行くと家族へは？」

「伝えるわけないだろう。警察と同じで風紀隊には守秘義務がある。」

身内にだつて明かさないよ」

「ふうまくんには明かしちゃったけど、なおちゃんが勝手に。私も家族に言つてない」

「ボク一人を悪者にするのは止めてよ！　コロちゃんも納得してたじゃないか!!」

「(記憶に御座いません。秘書が勝手にやりました)」

「ちよつとお!？」

「まー、守秘義務云々に關しては突っ込みどころしかねーけど、それは置いてくとして……となると、まあ良い事か」

初対面からいきなり小太郎にぶちかまして逃げられ、次の日に捜査中の事件について口にしたなおから守秘義務などという言葉が飛び出してくるのはお笑い種。

ついでに言えば、今更自分がやべーことをしてしまっていると思ひ出してなお一人に責任を押し付けようとする孤路の様子は失笑ものである。

風紀隊の守秘義務など知ったことではない小太郎は、慌てふためく二人の様子を黙殺し、思考作業に没頭する。

二人の言葉が事実であつたとして、雅臣と鶴、己自身の境遇を考慮した上で導き出された結論、至極当然のものだつた。

「殺人鬼か、その協力者はほぼ間違ひなく風紀隊か、学園関係者だ」

「バツ!?　君は何を……!？」

「(なおちゃん)」

小太郎の口にした結論に、なおは顔を真っ赤にするほどの驚愕と憤怒を露わにした。

その結論が事実とするならば、あつてはならないこと。五車の治安維持を担う風紀隊の中に、将来的に対魔忍そのものを担い、育成する機関の中に殺人鬼などあつてはならないからだ。

衝動的な感情に身を任せ、即座に否定の言葉と共に小太郎を罵倒し

そうになったなおであつたが、孤路に手を掴まれて止められる。

仲間や友人を疑われる怒りはそのままであつたが、幾分か冷静さを取り戻したなおは、一度深く呼吸をすると、再び小太郎に向き直つた。

「根拠を、聞かせて貰えるかな?。」

「何、初歩的なことですよ」

「(ほ、ホームズの名言! ふうまくんは五車のホームズだった?!)」

「コロちゃん、落ち着いて。ふうまくんも狙つてやつてるよね? 真面目にやつてくれないかな???」

「別に真面目にやろうがどうでもいいでしょ。結果も結論も変わらないんだから」

時と場合を選ばずふざけている小太郎と喰い付き始めた孤路を、今度はなおが真顔で諫める番だつた。

二人とて赴くがままにやっているわけではない。冷静さを失い掛けたなおを更に冷静にさせるべく、狙つてやっているのだつた。

やり方だけ見れば不謹慎極まりないのだが、狙いは功を奏したらしくなおは冷ややかでさえある視線を送っている。

「さつきの泥遁使い、タイミングが良過ぎるでしょ。ミサンガは何日前に置いておくにしても、待ち構えておくならこつちの動きを逐一監視しておかなきゃならねえ」

「確かに、ね。でもそれだけじゃ根拠が薄くないかい? 確かに風紀隊ならボク達の行動を把握している。報告は逐一してるからね。学園関係者なら監視していても周囲に不審に思われないし、ボク達の話聞いていても不思議じゃない。だけど、それ以外の人達が出来ないわけじゃない」

「でしようね。ニート紛いの連中は五車にだって居るし、対魔忍なら誰だって五車学園に出入りできる。だが、常に監視できるのは二つだけだ」

「常、に……………そうか! 五車の外での任務における拒否権! 風

紀隊なら治安維持を理由に、学園関係者なら授業や成績を理由に！

それぞれ任務の割り振りを変えて貰える」

「基本、それ以外には余程特殊な事情が絡まなければ拒否権はない。殺人鬼は慎重だ。自分を探ろうとする輩を見逃したくはないだろうし、特殊な事情で注目も集めたくはない。詰まらない嘘はすぐ檻樓が出る。自然、五車に居られる時間が長くなって、不自然にならない立場に収ろうとする。その上、必要と在れば証拠隠滅に即応できる立場。理想的かつ其処しかない」

「確証はない。状況証拠ばかり、だけど、これは……！」

「ふうまくんの言う事は筋が通っている。通ってしまっている……）」

語られる推察を否定するなおと、淀みなく反証を提示する小太郎。

ただ、単純に相性の悪さから意見をぶつけ合っているわけではない。なおにせよ、小太郎にせよ、思考作業の一環であり、其処に諍いは存在しない。

あくまでも意見を交わす、小太郎の推察の穴がないのかを確かめ、より推察を補強するため。あくまでも共同作業だ。

其処から導き出されたのは、目も背けたくなる筋の通った理屈。

「舐めやがって……！」

「(でも、どうする？ 風紀隊や学園関係者で、監視しているとするなら常に私達の先を行ける。証拠を先に消されたら捕まえようがない)」

「これがあるからいいでしょ。殺人鬼はオレ達を挑発している。なら、それを逆に利用して誘き出す。そうでなかったとしても山畔を調べて誘いに乗るのも有りだ」

「ああ。ああ、ふうまくんの言う通りだ。下衆な殺人鬼は記念品を残す『習性』があるからね。捕まえた後でも、殺した後でも、自宅か拠点を調べればわんさか証拠は出てくるさ」

なおは珍しく悪罵を吐き、凄絶ですらある笑みを浮かべていた。

風紀隊の職務、その意義に誰よりも誇りを持つ彼だからこそ、万が一にも風紀隊内部に殺人鬼が潜んでいるかもしれない事実は許容を越えている。

自己が嘲笑うならばまだいい。自分を間抜けと認めるのは癪だが、上を行かれた以上は仕方がない。何よりも許せないのは、被害者の苦痛、残された者の悲哀を考えず、日常を謳歌している殺人鬼の所業だ。まだその時ではないのは理解している。だが、時が来れば必ず、死を以て償わせることを誓っていた。

(今日の所はこの辺りだな。日が暮れば殺人鬼の時間だ、無理をする必要はない。さて、罨を張ったと信じ込んでる阿呆をどう誘き出して罨へかけるか。一番簡単なのは、これだろうな)

なおが浮かべる凄絶な笑みよりも。

殺人鬼が浮かべているであろう他者を見下し、嘲弄する邪な笑みよりも。

小太郎は表面上、無表情を装いながらも胎の底では圧倒的に邪悪で悍ましい笑みを浮かべていた。

その視線が注がれていたのは、他ならぬ死々村 孤路でだった。